

(財)大阪府文化財センター調査報告書 第187集

寝屋川市

# 讃良郡条里遺跡 VIII

一般国道1号バイパス(大阪北道路)・第二京阪道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

本文編

2009年1月

財団法人 大阪府文化財センター

讃良郡条里遺跡  
VIII

本文  
編

二〇〇九年一月

財団法人  
大阪府文化財センター

(財)大阪府文化財センター調査報告書 第187集

寝屋川市

# 讃良郡条里遺跡 VIII

一般国道1号バイパス(大阪北道路)・第二京阪道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

本文編

財団法人 大阪府文化財センター



# 序 文

讃良郡条里遺跡は、寝屋川市と四條畷市にまたがる広大な遺跡です。その広さゆえに遺跡範囲内には、生駒山西麓の扇状地から沖積低地までが含まれ、多様な地理環境を示しています。国道1号バイパス(大阪北道路)・第二京阪道路の建設に伴って、遺跡南半部を斜めに横切るように行われた、大規模な発掘調査でも、多様な時代性や性格を持つ遺構や遺物が発見され、周辺地域の歴史を知る上で貴重な情報を提供してくれます。

本書で報告する讃良郡条里遺跡 03-4 は、扇状地扇端部にほど近い沖積低地に位置しています。東の生駒山地と西の寝屋川に挟まれた調査地周辺は、後背湿地として縄文時代以降に度重なる河川氾濫にみまわれたようで、厚い砂礫に覆われた水田やムラの跡が見つかりました。平成15年度から17年度にかけて行われた発掘調査では、10面以上にわたる遺構面を記録しながら掘り下げていき、この地域が持つ豊かな歴史環境を明らかにすることができました。

遺跡周辺では、現在でも正方位に合わせた直線的な道路や河川、水田畦畔などが見られますが、発掘調査の結果、このような土地区画が奈良時代頃を起源としていることがわかりました。当時のムラは正方位に合わせて住居を建てており、耕作地とは直線的な溝で区画されていました。耕作地は条里制という規格的な土地区画制度によって分割されており、その後の開発においても受け継がれ続け、現代まで遺存していたのでした。1000年以上の長きにわたって河川の氾濫から田畑を守り続けてきた先人たちの苦勞が偲ばれます。

また、今回の調査で注目されるのは、近畿地方で最も古い様相を持つ弥生土器の発見です。この発見により、瀬戸内海を東進する弥生土器の初期伝播が当時の河内湖(潟)最奥の当地にまで達していたことが明らかになり、弥生文化の伝播・成立を考える上で重要な資料となります。さらに、これらの土器がムラの跡と考えられる遺構に伴って出土したことで、近畿地方で弥生土器が作られ始める頃のムラの様子までをも窺うことができます。

こうした考古学的な調査を進める一方で、土の中に含まれる花粉や珪藻化石の分析や出土した木製品の樹種鑑定など自然科学的な分析・調査を合わせて実施したことによって、自然環境面からも歴史の変遷を理解することができました。また、出土遺物に関する詳細な科学的分析からは、人間の眼だけでは明らかにすることのできない貴重な成果も得られています。

最後になりましたが、本発掘調査の実施にあたり多大なご協力を賜りました、国土交通省近畿地方整備局浪速国道事務所、西日本高速道路株式会社(旧日本道路公団)関西支社枚方工事事務所、大阪府、寝屋川市、四條畷市、大阪府教育委員会、寝屋川市教育委員会、四條畷市教育委員会、新家自治会、砂自治会、砂水利組合、そして地元住民の皆様深く感謝すると共に、今後とも文化財の保護に一層のご協力とご理解を賜りますよう、お願いいたします。

平成21年1月

財団法人 大阪府文化財センター  
理事長 水野正好



# 例 言

1. 本書は、大阪府寝屋川市新家（しんけ）2丁目地先他に所在する讃良郡条里（さらぐんじょうり）遺跡 03-4 調査の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、国土交通省近畿地方整備局浪速国道事務所の委託を受け大阪府教育委員会の指導の下、財団法人大阪府文化財センターが実施した。
3. 現地調査および報告書作成にかかわる受託事業の契約名称と契約期間、工事請負の契約名称と工期、航空測量の事業委託名称、期間は以下のとおりである。なお、『遺跡調査基本マニュアル【暫定版】』（2003. 8）に則って付せられた調査名は、「讃良郡条里遺跡 03-4」であり、全ての受託事業、工事請負、分析委託事業において統一して使用される。

## 委託名称および期間

第二京阪道路（大阪北道路） 讃良郡条里遺跡発掘調査（その5）

平成 15 年 4 月 1 日～平成 16 年 3 月 31 日

第二京阪道路（大阪北道路） 讃良郡条里遺跡発掘調査（その5の2）

平成 16 年 4 月 1 日～平成 17 年 3 月 31 日

第二京阪道路（大阪北道路） 讃良郡条里遺跡発掘調査（その5の3）

平成 16 年 6 月 15 日～平成 17 年 3 月 31 日

第二京阪道路（大阪北道路） 讃良郡条里遺跡発掘調査（その5の4）

平成 17 年 4 月 1 日～平成 18 年 3 月 31 日

## 工事名称および工期

讃良郡条里遺跡（その7）発掘調査に伴う工事

平成 15 年 4 月 24 日～平成 17 年 12 月 28 日

讃良郡条里遺跡（その7-2）発掘調査に伴う工事

平成 16 年 6 月 29 日～平成 17 年 3 月 25 日

## 整理事業名称および期間

第二京阪道路（大阪北道路） 讃良郡条里遺跡他遺物整理

讃良郡条里遺跡（5）遺物整理

平成 18 年 4 月 1 日～平成 19 年 3 月 31 日

第二京阪道路（大阪北道路） 讃良郡条里遺跡他遺物整理（その2）

讃良郡条里遺跡（5）遺物整理

平成 19 年 4 月 1 日～平成 20 年 3 月 31 日

第二京阪道路（大阪北道路） 讃良郡条里遺跡他遺物整理（その3）

讃良郡条里遺跡（5）遺物整理

平成 20 年 4 月 1 日～平成 21 年 3 月 31 日

4. 本事業の実施体制は以下のとおりである。

年度	本部		調査担当（平成15年度は京阪支所調査第二係、平成16～17年度は京阪調査事務所調査第二係、平成18年度は同調査第一係、平成19年度は同調査第四係、平成20年度は同調査第二係）					
	調査部長	調整課長	所長	係長	写真担当	調査・報告書作成担当		
平成15年度	玉井 功	赤木克視	渡邊昌宏	寺川史郎	主査 上野貞子	技師 東 洋一	技師 中尾智行	専門調査員 島田裕弘
平成16年度	玉井 功	赤木克視	渡邊昌宏	寺川史郎	主査 上野貞子	技師 加納敬二（7月～）	技師 中尾智行	専門調査員 島田裕弘
平成17年度	赤木克視	田中和弘	山本 彰	金光正裕	主査 上野貞子	技師 内田好昭	技師 中尾智行	専門調査員 山根 航
平成18年度	赤木克視	田中和弘	山本 彰	藤永正明	主査 上野貞子	技師 内田好昭	技師 中尾智行	専門調査員 山根 航
平成19年度	赤木克視	田中和弘	山本 彰	藤永正明	主査 上野貞子		技師 中尾智行	専門調査員 山根 航
平成20年度	赤木克視	田中和弘	山本 彰	秋山浩三	主査 片山彰一		技師 中尾智行	

5. 遺物写真については、上野貞子および片山彰一が担当した。木製品の保存処理と樹種同定の一部に関しては、山口誠治が担当した。他に、次に記す当センター職員の協力を仰いだ。（順不同）  
 遺跡の環境変遷の検討：井上智博、縄文土器の検討：大野薫、浮線文土器の実測・検討：三好孝一、石器類の整理・検討：船築紀子、木器の整理・検討：黒須亜希子、古墳時代土師器の検討：市村慎太郎、古墳時代須恵器の検討：森本徹、古墳時代滑石製品の検討：廣瀬時習・島崎久恵
6. 調査にあたっては、作業委託・委託分析として、以下に挙げる業務を実施した。

平成 15 年度

獣骨取り上げ作業

株式会社京都科学

平成 16 年度

珪藻・花粉・珪酸体分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

放射性炭素年代測定（AMS 法）

パリノ・サーヴェイ株式会社

土壌軟 X 線写真撮影

パリノ・サーヴェイ株式会社

平成 17 年度

放射性炭素年代測定（AMS 法）

株式会社パレオ・ラボ

顕微赤外分光分析

株式会社パレオ・ラボ

大型植物遺体同定分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

珪藻・花粉・珪酸体分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

獣骨保存処理

株式会社京都科学

平成 18 年度

塗膜分析・E P M A 分析

株式会社パレオ・ラボ

樹種同定分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

平成 19 年度

胎土分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

サヌカイト産地同定

有限会社遺物材料研究所

7. 以上のほか、浮線文土器の保存処理については、伊藤幸司・鳥居信子両氏（財団法人大阪市文化財協会）のご指導・ご協力をいただいた。また、縄文時代晩期から弥生時代前期の遺物の一部を対象とした放射性炭素年代測定については、国立歴史民俗博物館の炭素 14 年代測定グループに測定を実施していただき、第 7 章に寄稿していただいている。
8. さらに、現地調査・遺物整理にあたっては、測量・図面作成・遺物整理などあらゆる面でご助力いただいた非常勤職員諸氏のほか、以下の諸機関・諸氏よりご協力・ご指導・ご教示をいただいた。

記して謝意を表したい（50音順・敬称略）。

大阪府、大阪府教育委員会、国土交通省近畿地方整備局浪速国道事務所、四條畷市、四條畷市教育委員会、新家自治会、砂自治会、西日本高速道路株式会社（旧日本道路公団）関西支社、枚方工事事務所、寝屋川市、寝屋川市教育委員会

泉拓良・上垣幸徳・宇垣匡雅・石井扶美子・井上智勝・大岡由記子・大下明・大庭孝夫・岡田憲一・小倉徹也・及川良彦・川崎志乃・川部浩司・木田真・権五栄・小林謙一・小林正史・寒川旭・設楽博己・庄田慎矢・白木英敏・菅榮太郎・菅波正人・鈴木一久・高橋進一・田井中洋介・田崎博之・田中清美・田中裕美・田畑直彦・趙哲済・千羨幸・出原恵三・寺前直人・中川治美・中沢道彦・中塚良・長友朋子・中村大介・中村豊・野口哲也・野島稔・信里芳紀・濱田延充・林日佐子・春成秀爾・久田正弘・平井典子・深澤芳樹・藤尾慎一郎・藤巻晴行・藤原学・別所秀高・松井章・松田順一郎・松本直子・豆谷和之・丸山真史・宮井善朗・宮内信雄・宮崎泰史・宮野淳一・森岡秀人・森下英治・安田滋・山岡邦章・山崎純男・山中章・横田洋三・吉川周作・吉田晶・吉田東明・四柳嘉章・若林邦彦・渡辺正気・渡邊正巳

9. 本書の編集は中尾、山根が担当した。調査成果にかかる本文の執筆は中尾、山根が分担し、中尾が総括した。なお、遺物の検討・自然科学分析などに関する部分（第6～7章）の執筆者は目次に示すとおりである。各執筆者による用語の不統一については、基本的に修正していない。

10. 本書収録の写真・遺物などの記録類は、財団法人大阪府文化財センターにおいて保管している。広く利用されることを希望する。

11. 本書は、当センターが刊行した、讃良郡条里遺跡単独の報告書の第8冊目にあたり、書名を『讃良郡条里遺跡Ⅷ』とした。ローマ数字を用いたこの呼称方法は、平成18年度以降刊行のものについて用いている。既に刊行された讃良郡条里遺跡単独の報告書を以下に示した。

(財)大阪府文化財センター調査報告書第98集『讃良郡条里遺跡(その2)』平成15年6月刊行

(財)大阪府文化財センター調査報告書第109集『讃良郡条里遺跡(その1)』平成16年2月刊行

(財)大阪府文化財センター調査報告書第114集『讃良郡条里遺跡(その3)』平成16年3月刊行

(財)大阪府文化財センター調査報告書第138集『讃良郡条里遺跡Ⅳ』平成18年2月刊行

(財)大阪府文化財センター調査報告書第160集『讃良郡条里遺跡Ⅴ』平成19年3月刊行

(財)大阪府文化財センター調査報告書第173集『讃良郡条里遺跡Ⅵ』平成20年3月刊行

(財)大阪府文化財センター調査報告書第182集『讃良郡条里遺跡Ⅶ』平成20年9月刊行

## 凡 例

1. 発掘調査及び整理作業は、当センターの『遺跡調査基本マニュアル【暫定版】』（2003.8）に従って行った。
2. 発掘調査で行った測量は、世界測地系（測地成果2000）に準拠する平面図直角座標系第Ⅵ系を基準とし、数値はm単位で表示している。また、本書で記す北は座標北を示す。
3. 発掘調査で使用した標高は、東京湾平均海水面（T.P.）を基準とする。
4. 遺物の取り上げに関しては、マニュアルの規定に従って、第Ⅰ～Ⅳ区画を用いて行った。ちなみに、今回の調査地の第Ⅰ区画はⅠ6、第Ⅱ区画は15～16である。
5. 遺構は、6つに分かれた調査区（1区から6区）ごとに、アラビア数字を用いた通し番号で名称を



付けた。調査区番号と通し番号は「- (ハイフン)」でくくるものとし、これらの番号の後ろに遺構種類を表す文字を付している。例) 5-991 溝、6-124 土坑

なお建物跡など、複数の遺構の集合体に関しては、遺構名称とは異なり、遺構種類を表す文字の後ろに、アラビア数字の通し番号を付して表している。例) 建物 1

6. 掲載遺物については、基本的には遺物実測図のまとまりごとに通し番号を付けており、本文・遺物写真には図番号-遺物の通し番号の形で示した。例) 図 205-5
7. 断面図・平面図・遺構図は、対象により適宜縮尺を変えて掲載しており、図ごとにスケールバーと縮尺を表示している。
8. 遺物実測図の縮尺は、原則として土器 1/4、打製石器・銭貨 2/3 であるが、木製品や一部の土器、石製品などについては、必要に応じて異なる縮尺を用い、スケールバーと縮尺で表示している。
9. 土器の実測図に関しては、小片の場合でも復元的に図化したものを掲載しているが、文様などについては残存部位のみの図化に留めている。ただし直線文など、文様の延長が予測できる場合には復元して図化を行っている。また、石器において黒で着色した部分は新欠箇所を示す。  
拓本を用いた破片の実測図は、左から内面の拓本、断面図、外面の拓本の順に配列している。また、内面に文様などが無い場合は内面の拓本を省略し、左から断面図、外面の拓本の順としている。
10. 木製品の木口・断面に示した年輪については、木取りを復原するために完全に模式化することなく、年輪の傾きなどを観察して図化した。年輪数については表現上の限界もあり正確ではない。
11. 地層および遺物の色調は、小山正忠・竹原秀雄編『新版 標準土色帖』2002 年版および 2004 年版（農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修）に準拠した。また、地層の粒度の記載に関しては、地質学で標準的に用いられる Wentworth の区分を使用した。
12. 土器の容量測定について、十日町市教育委員会の宮内信雄氏から、筑波大学藤巻晴行氏作成の「Simple Digitizer3.1.1」によって取得する計測座標値を考古資料の容積計算に応用するための方法と計算式をご教示いただいた。記して感謝したい。本文中の土器容量については、この容積計算法によって算出した数値である。

遺物の観察・記述にあたっては、下記の文献を主に参照した。

土器の分類・編年等については、これらに準拠している。

他の参考文献については、第 1～6 章分について、本文末にまとめて示した。ただし、第 7 章については各節の末尾に付している。また、本文中における引用については、個人の論考の場合は名字と出版年、組織・団体の場合は組織名と出版年を基本としている。なお、当センター発刊の報告書については組織名として「大文セ」の略称を用いている。

中世土器研究会編 1995『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社

寺沢薫・森岡秀人編著 1989『弥生土器の様式と編年 近畿編 I』木耳社

(財)大阪府文化財センター編 2006『古式土師器の年代学』

田辺昭三 1981『須恵器大成』角川書店

大川清・鈴木公雄・工楽善通編 1996『日本土器事典』雄山閣

奈良国立文化財研究所編 1993『木器集成図録 近畿原始篇』

平井勝 1991『弥生時代の石器』ニュー・サイエンス社

# 目 次

序文

例言

凡例

目次

第1章 調査に至る経緯と経過	(中尾智行) 1
第2章 調査の方法	(中尾智行) 4
第3章 位置と環境	(中尾智行) 6
第1節 地理的環境	6
第2節 歴史的環境	6
第4章 基本層序と遺構面	(中尾智行) 11
第1節 断面記録の方法	11
第2節 層序の把握	11
第3節 層呼称と遺構面の認識	12
第4節 各層の概要	14
第5章 調査の成果	(第7節は山根航、その他は中尾智行) 43
第1節 第1面の遺構と遺物	43
第2節 第2面の遺構と遺物	56
第3節 第3面の遺構と遺物	67
第4節 第5面の遺構と遺物	75
第5節 第6b面の遺構と遺物	83
第6節 第7a面の遺構と遺物	94
第7節 第7b面の遺構と遺物	103
第8節 第8a面の遺構と遺物	242
第9節 第8b面の遺構と遺物	254
第10節 第8b-2層以下の遺構と遺物	377
第6章 特筆すべき遺物の検討	381
第1節 飛鳥時代の井戸枳転用船材における復元的検討	(中尾智行) 381
第2節 滑石原材料における穿孔からみた製作技術の復原	(船築紀子) 387
第3節 弥生時代前期前半の焼成失敗品	(中尾智行) 390
第4節 弥生時代前期前半の接合部剥離資料	(中尾智行) 397
第5節 第8b面出土石器の検討	(船築紀子・中尾智行) 409
第7章 その他の科学的分析と検討	415
第1節 讚良郡条里遺跡の古環境復原	(辻本裕也・辻康男) 415
第2節 第2a層上面で検出された小穴遺構の形成過程の検討	(辻康男) 444
第3節 弥生時代前期前半の遺構から出土したサヌカイトの産地	(中尾智行, 分析: 藁科哲男) 449
第4節 縄文晩期～弥生前期土器および周辺資料群の胎土分析および薄片観察	(矢作健二・石岡智武・中尾智行) 454
第5節 浮線文土器浅鉢の赤色塗膜および黒色層の材質分析	(藤根久) 474
第6節 讚良郡条里遺跡出土炭化物の <sup>14</sup> C年代測定	(小林謙一) 480
第7節 3-286土坑ほか出土試料の放射性炭素年代測定	(藤根久) 486
第8節 2-133、2-134土坑出土試料の放射性炭素年代測定	(辻本裕也・田中義文) 488
第8章 総括	(中尾智行) 490

## 挿図目次

図 1	調査地位置図	1	図 49	島島および畦畔断面図 (X=-138,700 ライン)	72
図 2	調査地配置図	2	図 50	3区第3面および第4面 平面図	72
図 3	地区割図	4	図 51	溝状くぼみ 平面図および断面図	73
図 4	河内平野標高分布図	6	図 52	第3a～6a層 出土遺物実測図	74
図 5	遺跡分布図	8	図 53	ピット列2 平面図および断面図	75
図 6	遺存条里図	9	図 54	屈曲畦畔 平面図および断面図	76
図 7	断割り断面 位置図	11	図 55	第5面 平面図	77,78
図 8	路線中央断割り断面 柱状図	15	図 56	第5面 足跡からのイメージ画	79
図 9	路線中央断割り断面図1	19,20	図 57	第4b層 出土遺物実測図	80
図 10	路線中央断割り断面図2	21,22	図 58	第5a～7a層 出土遺物実測図1	81
図 11	路線中央断割り断面図3	23,24	図 59	第5a～7a層 出土遺物実測図2	82
図 12	路線中央断割り断面図4	25,26	図 60	2区第6b面坪境交点 平面図	83
図 13	X=-138,650 ライン 東西断割り断面図	27	図 61	坪境溝 出土遺物実測図	84
図 14	X=-138,690 ライン 東西断割り断面図	28	図 62	三十一・三十二ノ坪境断面図 (路線中央断割り)	84
図 15	X=-138,700 ライン 東西断割り断面図	29,30	図 63	第6b面 平面図	85,86
図 16	X=-138,740 ライン 東西断割り断面図	31,32	図 64	三十・三十一ノ坪境 平面図	87
図 17	Y=-33,790 ライン 南北断割り断面図	33,34	図 65	3区小溝群 平面図	88
図 18	Y=-33,830 ライン 南北断割り断面図	35,36	図 66	1区第6b面 遺物出土位置図	90
図 19	Y=-33,870 ライン 南北断割り断面図	37,38	図 67	1区出土瓦器椀 実測図	90
図 20	Y=-33,910 ライン 南北断割り断面図	39,40	図 68	第6b面遺構 出土遺物実測図	92
図 21	Y=-33,950 ライン 南北断割り断面図	41,42	図 69	第6a層 出土遺物実測図	93
図 22	6区 第2面上の第1b層浸食	43	図 70	第6b層 出土遺物実測図	93
図 23	坪境交点出土返花座 実測図	44	図 71	2-49 坪境畦畔 出土遺物実測図	94
図 24	1区第1a-1面 平面図	44	図 72	第7a面 平面図	95,96
図 25	第1面 平面図	45,46	図 73	2-49 坪境畦畔 断面図 (C地点)	97
図 26	長池 出土遺物実測図	48	図 74	2-53 畦畔 出土磚実測図	98
図 27	5-6 溜め井 平面図および断面図	50	図 75	調査地南西側水田 等高線図	98
図 28	井戸・土坑 出土遺物実測	51	図 76	第7a-1層下面溝群 出土遺物実測図	99
図 29	土坑群2 断面図 (Y=-33,800 ライン)	52	図 77	第7a-1層下面溝群平面図および断面図	100
図 30	土坑群2 出土遺物実測図	53	図 78	第6・7面土地利用状況	101
図 31	第1a～2a層 出土遺物実測図1	54	図 79	第7a層 出土遺物実測図 (古代)	102
図 32	第1a～2a層 出土遺物実測図2	55	図 80	古代遺物 出土位置図	102
図 33	第1b層 出土遺物実測図	55	図 81	第7b面 標高図および砂層範囲	104
図 34	三十一・三十二ノ坪境 断面図 (A地点)	56	図 82	建物1～17の偏差角度および位置図	104
図 35	第2面 平面図	57,58	図 83	第7b面 (弥生後期後半～奈良) 平面図	105,106
図 36	第2面 等高線図	59	図 84	2-95、5-503 溝 断面図	108
図 37	X=-138,700 ライン 断面図	60	図 85	第7b面 (奈良時代) 平面図	109,110
図 38	X=-138,740 ライン 断面図	60	図 86	5-503 溝 (Cライン) 断面図	111
図 39	6区 畠地範囲 平面図	61	図 87	坪境溝 出土遺物実測図 (奈良時代)	111
図 40	溝群 断面図 (Y=-33,790 ライン)	62	図 88	建物1・2・3・4 平面図および断面図	112
図 41	足跡列 平面図	63	図 89	建物5・6 平面図および断面図	113
図 42	小穴群 平面図	64	図 90	5-536 井戸 平面図および断面図	115
図 43	第2a・2b層 出土遺物実測図1	65	図 91	5-536 井戸 出土遺物実測図	116
図 44	第2a・2b層 出土遺物実測図2	66	図 92	3-163 土坑 平面図および断面図	117
図 45	2-24 坪境畦畔水口 平面図	67	図 93	土坑 出土遺物実測図 (奈良時代)	117
図 46	第3面 等高線図	68	図 94	第7a・7b層 出土遺物実測図 (奈良時代)	118
図 47	第3面 平面図	69,70	図 95	建物7・8 平面図および断面図	120
図 48	導水径路 復原図	71	図 96	第7b面 (飛鳥時代) 平面図	121,122
			図 97	5-491 井戸 平面図および断面図	123
			図 98	5-491 井戸 立面図および敷板平面図	124

図 99	5-491 井戸 出土遺物実測図 1	125	図 149	土坑群 平面図 (古墳時代前期)	183
図 100	5-491 井戸 出土遺物実測図 2	126	図 150	3-165、3-169 土坑 平面図および断面図	184
図 101	5-491 井戸 出土遺物実測図 3	127	図 151	3-165、3-169、3-177 土坑 出土遺物実測図	184
図 102	5-491 井戸 出土遺物実測図 4	128	図 152	3-179、3-296 土坑 平面図および断面図	185
図 103	遺構 出土遺物実測図 (飛鳥時代)	130	図 153	3-179、3-188 土坑 出土遺物実測図	186
図 104	第 7a 層 出土遺物実測図 (飛鳥時代)	132	図 154	3-193、3-203 土坑 平面図および断面図	187
図 105	建物 9・10 平面図および断面図	134	図 155	3-193 土坑ほか出土遺物実測図	188
図 106	第 7b 面 (古墳時代中期～後期) 平面図	135,136	図 156	3 区土器集中部 出土遺物実測図	189
図 107	建物 11・12 平面図および断面図	137	図 157	ピット 平面図 (古墳時代前期～中期)	190
図 108	建物 13・14 平面図および断面図	138	図 158	4-87、5-958 ピット 平面図および断面図	190
図 109	建物 15・16 平面図および断面図	139	図 159	ピット 出土遺物実測図 (古墳時代前期～中期)	191
図 110	建物 15・16 出土遺物実測図	139	図 160	第 7a・7b 層出土遺物実測図 (古墳前期～中期)	192
図 111	建物 17 平面図および断面図	140	図 161	3-164、5-330、5-342、5-521 溝 断面図	194
図 112	建物 17 出土遺物実測図	141	図 162	第 7b 面 (弥生後期後半～古墳初頭) 平面図	195,196
図 113	3-187、5-351 井戸 平面図および断面図	142	図 163	溝出土遺物実測図 (弥生後期後半～古墳初頭) 1	198
図 114	3-187、5-351 井戸 出土遺物実測図	143	図 164	溝出土遺物実測図 (弥生後期後半～古墳初頭) 2	199
図 115	5-416 井戸 平面図および断面図	144	図 165	溝出土遺物実測図 (弥生後期後半～古墳初頭) 3	200
図 116	5-416 井戸 出土遺物実測図	145	図 166	溝出土遺物実測図 (弥生後期後半～古墳初頭) 4	201
図 117	5-474 水溜め 平面図および断面図	146	図 167	溝周辺土器出土状況図および遺物実測図	202
図 118	5-474 水溜め 出土遺物実測図	146	図 168	溝周辺出土遺物実測図 (弥生後期～古墳初頭) 1	203
図 119	5-475 井戸 平面図および断面図	147	図 169	溝周辺出土遺物実測図 (弥生後期～古墳初頭) 2	204
図 120	溝 平面図 (古墳時代中期～後期)	148	図 170	溝周辺出土遺物実測図 (弥生後期～古墳初頭) 3	205
図 121	1-57、2-83、2-90、5-625 溝 断面図	148	図 171	溝周辺出土遺物実測図 (弥生後期～古墳初頭) 4	206
図 122	溝 出土遺物実測図 (古墳時代中期～後期)	149	図 172	溝周辺出土遺物実測図 (弥生後期～古墳初頭) 5	207
図 123	5-510、5-734 ピット 平面図および断面図	150	図 173	溝周辺出土遺物実測図 (弥生後期～古墳初頭) 6	208
図 124	土坑・ピット出土遺物実測図 (古墳中期～後期) 1	151	図 174	1・2・4 区 土器出土位置図	209
図 125	土坑・ピット出土遺物実測図 (古墳中期～後期) 2	152	図 175	1・2・4 区 出土遺物実測図	210
図 126	出土遺物量分布図 (古墳時代中期～後期)	154	図 176	出土遺物量分布図 (弥生後期後半～古墳初頭)	211
図 127	第 7a 層出土遺物実測図 (古墳中期～後期) 1	155	図 177	5-884 土坑 平面図および断面図	212
図 128	第 7a 層出土遺物実測図 (古墳中期～後期) 2	156	図 178	土坑ほか出土遺物実測図 (弥生後期～古墳初頭)	213
図 129	第 7a 層出土遺物実測図 (古墳中期～後期) 3	157	図 179	第 7a 層遺物実測図 (弥生後期～古墳初頭) 1	215
図 130	第 7a 層出土遺物実測図 (古墳中期～後期) 4	158	図 180	第 7a 層遺物実測図 (弥生後期～古墳初頭) 2	216
図 131	第 7a 層出土遺物実測図 (古墳中期～後期) 5	159	図 181	第 7a 層遺物実測図 (弥生後期～古墳初頭) 3	217
図 132	第 7a 層出土遺物実測図 (古墳中期～後期) 6	160	図 182	第 7b 層遺物実測図 (弥生後期～古墳初頭) 1	218
図 133	第 7b 層出土遺物実測図 (古墳中期～後期)	161	図 183	第 7b 層遺物実測図 (弥生後期～古墳初頭) 2	219
図 134	1-59・60 溝 平面図	163	図 184	第 7b 層遺物実測図 (弥生後期～古墳初頭) 3	220
図 135	1-59・60 溝 断面図	164	図 185	ピット列 3～9・ピット 平面図	221
図 136	1-59・60 溝 杭列平面図および断面図	165	図 186	ピット列・ピット 出土遺物実測図	222
図 137	1-59・60 溝 杭樹種状況図	167	図 187	方形土坑群 平面図	223
図 138	1-59 溝 獣骨出土状況図および断面投影図	171	図 188	4-54 土坑 平面図および断面図	224
図 139	1-59 溝 獣骨部位状況図	172	図 189	第 7a 層 出土遺物実測図 (その他)	225
図 140	1-59 溝 遺物出土状況図	173	図 190	第 7b 層 出土遺物実測図 (その他)	226
図 141	1-59・60 溝 出土遺物実測図 1	174	図 191	縄文土器実測図	227
図 142	1-59・60 溝 出土遺物実測図 2	175	図 192	滑石製品 出土位置図	228
図 143	1-59・60 溝 出土遺物実測図 3	176	図 193	滑石製品実測図 1	229
図 144	1-59・60 溝 出土遺物実測図 4	177	図 194	滑石製品実測図 2	230
図 145	1-59・60 溝 出土遺物実測図 5	178	図 195	滑石製品実測図 3	231
図 146	1-62 溝 平面図および断面図	180	図 196	滑石製白玉の分類	232
図 147	1-62 溝 出土遺物実測図 1	181	図 197	遺構出土石器実測図	233
図 148	1-62 溝 出土遺物実測図 2	182	図 198	第 7a 層 出土石器実測図 1	234

図 199	第 7a 層 出土石器実測図 2	235	図 249	建物 23 周辺遺構 断面図	290
図 200	第 7a 層 出土石器実測図 3	236	図 250	建物 23 周辺遺構 出土遺物実測図	291
図 201	第 7b 層 出土石器実測図 1	237	図 251	建物 24 平面図	293
図 202	第 7b 層 出土石器実測図 2	238	図 252	建物 25 平面図	293
図 203	第 8a 面 等高線図	242	図 253	建物 26 平面図	294
図 204	第 8a 面 平面図	243,244	図 254	建物 26 周辺遺構 出土遺物実測図	294
図 205	第 7b-5 層 出土遺物実測図	245	図 255	3-267・268 溝 断面図	296
図 206	1-295 畦畔および 1-300 畦畔 平面図	246	図 256	3-267・268 溝土器・土器群 出土位置図	297,298
図 207	1-295 畦畔 出土遺物実測図	247	図 257	3-268 溝土器群 1 平面図および断面図	300
図 208	東側水田導水径路	249,250	図 258	3-268 溝土器群 1 出土遺物実測図	301
図 209	ヤナギ株・5-868 土坑 平面図および断面図	251	図 259	3-268 溝土器群 2 (上部) 平面図	303
図 210	東側水田 (ブロックⅣ・Ⅵ) 断面図	252	図 260	3-268 溝土器群 2 (下部) 平面図	304
図 211	第 8b 面遺構検出層序 模式図断面図	254	図 261	3-268 溝土器群 2 平面図および断面図	305,306
図 212	時期別遺構分布	254	図 262	3-268 溝土器群 2 出土状況	307
図 213	第 8b 面 (弥生時代前期 (一部中期)) 平面図	255,256	図 263	3-268 溝土器群 2 (上部) 出土遺物実測図 1	308
図 214	第 8b 面 等高線図	257	図 264	3-268 溝土器群 2 (上部) 出土遺物実測図 2	309
図 215	調査地西半 第 8a 層出土遺物量分布	258	図 265	3-268 溝土器群 2 (上部) 出土遺物実測図 3	310
図 216	西側遺構群 平面図	259	図 266	3-268 溝土器群 2 (下部) 出土遺物実測図	311
図 217	建物 18 平面図および断面図	261	図 267	3-267・268 溝土器群 3 平面図および断面図	312
図 218	建物 19 平面図および断面図	262	図 268	3-267・268 溝土器群 3・4 出土遺物実測図	313
図 219	1-84 落ち込み 出土遺物実測図	263	図 269	3-267・268 溝土器群 5 出土遺物実測図 1	314
図 220	微高地 1 上部遺構集中部 平面図	264	図 270	3-267・268 溝土器群 5 出土遺物実測図 2	315
図 221	ピット列 1 断面図	264	図 271	3-267・268 溝土器群 6 出土遺物実測図	315
図 222	1-85、1-86 溝 断面図	265	図 272	3-267・268 溝土器群 8 出土遺物実測図	316
図 223	1-232 土坑 平面図および断面図	265	図 273	3-267・268 溝 出土遺物実測図 1	317
図 224	1-247 土坑 断面図	266	図 274	3-267・268 溝 出土遺物実測図 2	318
図 225	1-250 土坑 平面図および断面図	266	図 275	3-267・268 溝 出土遺物実測図 3	319
図 226	微高地 1 上部遺構 出土遺物実測図 1	267	図 276	3-267・268 溝 出土遺物実測図 4	320
図 227	微高地 1 上部遺構 出土遺物実測図 2	268	図 277	3-267・268 溝 出土遺物実測図 5	321
図 228	建物 20・21 平面図	269	図 278	刻目形状の比率分布	323
図 229	4-128 溝 断面図	270	図 279	3-267・268 溝出土土器片 時代別数量分布	323
図 230	微高地 1 東裾部 平面図	270	図 280	3-286 土坑 平面図および断面図	324
図 231	1 区第 8a 層出土遺物分布	271	図 281	3-286 土坑 出土遺物実測図	325
図 232	1 区第 8a 層 出土遺物実測図 1	272	図 282	3-286 土坑 出土木製品実測図	325
図 233	1 区第 8a 層 出土遺物実測図 2	273	図 283	3-279 井戸 平面図および断面図	327
図 234	1 区第 8a 層 出土遺物実測図 3	274	図 284	5-991 溝 出土遺物実測図	328
図 235	1 区第 8a 層 出土遺物実測図 4	275	図 285	6-123 溝 遺物集中部	329
図 236	2 区第 8a 層 出土遺物実測図	276	図 286	6-123 溝 出土遺物実測図 1	330
図 237	4 区第 8a 層 出土遺物実測図	277	図 287	6-123 溝 出土遺物実測図 2	331
図 238	第 8b-1 層 (微高地 1 形成層) 出土遺物実測図	278	図 288	6-143 土坑 平面図および断面図	332
図 239	第 8a-2 層 (微高地 1 直下) 出土遺物実測図	279	図 289	6-152 土坑 平面図および断面図	334
図 240	調査地東半 第 8a 層出土遺物量分布	280	図 290	6-157 土坑 平面図および断面図	335
図 241	東側遺構群 平面図	281,282	図 291	6-143、6-152、6-157 土坑 出土石器実測図	336
図 242	建物 22 平面図	285	図 292	6-143、6-152 土坑 出土石器実測図	337
図 243	建物 22 周辺遺構 断面図	286	図 293	6-122 土坑 平面図および断面図	338
図 244	建物 22 周辺遺構 出土遺物実測図	286	図 294	6-122 土坑 出土深鉢実測図	338
図 245	6-124 土坑 平面図および断面図	287	図 295	3 区第 8b 面遺構 出土遺物実測図	339
図 246	6-124 土坑 出土遺物実測図 1	288	図 296	5 区第 8b 面遺構 出土遺物実測図	339
図 247	6-124 土坑 出土遺物実測図 2	289	図 297	6 区第 8b 面遺構 出土遺物実測図	340
図 248	建物 23 平面図	290	図 298	3 区第 8a 層 出土遺物実測図 1	342



表 12	石器組成表	409
表 13	石器石材表	409
表 14	サヌカイト製石器組成表	409
表 15	第 8b 面出土 実測石器一覧表	411
表 16	サヌカイト剥片計測表	412
表 17	背面構成表	413
表 18	打面形状表	413
表 19	各種遺構出土の大型植物化石	429,430
表 20	対象試料の元素比分析結果	452
表 21	対象試料の検定結果	453
表 22	試料一覧および胎土分類結果	455
表 23	生漆の赤外吸収位置とその強度	475
表 24	塗膜の元素分析結果	476
表 25	讚良郡条里遺跡測定試料一覧	480
表 26	測定試料の炭素量・炭素含有量	480
表 27	測定結果と暦年較正年代	481
表 28	測定試料および処理	486
表 29	放射性炭素年代測定および暦年較正結果	487
表 30	放射性炭素年代測定および暦年較正結果	488

## 写真図版目次

### カラー図版 1

1. 調査地遠景（南西から）
2. 調査地遠景（北西から）
3. 第 3a 面 2 区（北から）
4. 第 7a 面 2 区（北西から）
5. 第 7a 面 5 区（西から）
6. 第 7a 層下面 6 区（西から）

### カラー図版 2

1. 第 7b 面 5 区（西から）
2. 第 7b 面 3-179 土坑（南西から）

### カラー図版 3

1. 第 7b 面 1-59・60 溝（南半）（南から）
2. 第 7b 面 1-59・60 溝（北半）（南西から）
3. 第 7b 面 1-59 溝獣骨出土状況（南から）

### カラー図版 4

1. 第 8a 面 4 区（南東から）
2. 第 8b 面 建物 18・19（南東から）

### カラー図版 5

1. 第 8b 面 建物 22（南東から）
2. 第 8a 層出土 浮線文土器

### カラー図版 6

- 1・2. 第 8b 面 6-143 土坑（北東から）：  
6-143、6-152 土坑出土炭化米
3. 6-143 土坑 灰層出土イネ属珪酸体
- 4・5. 6-143 土坑最下部 灰・炭化物層
- 6・7. 6-122 土坑深鉢内 漆塗膜

### カラー図版 7

1. 第 7b 面 5-491 井戸出土遺物
2. 第 7b 面 1-59、1-60 溝出土遺物

3. 第 7b 面 溝（弥生時代後期後半～古墳時代初頭）  
周辺出土遺物

### カラー図版 8

1. 第 7b 面 滑石製品
2. 第 8b 面 東側遺構群 6-124 土坑ほか出土弥生土器
3. 第 8b 面 東側遺構群 3-267・268 溝出土  
突帯文土器および弥生土器

### 図版 1 第 1 面～第 2 面遠景

### 図版 2 第 2 面～第 3a 面遠景

### 図版 3 第 3a 面～第 5a 面遠景

### 図版 4 第 6b 面～第 7a 面遠景

### 図版 5 第 7b 面遠景

### 図版 6 第 7b 面～第 8a 面遠景

### 図版 7 第 8a 面遠景

### 図版 8 第 8b 面遠景

### 図版 9 第 8b 面～第 8b-2 面遠景

### 図版 10 第 7b 面および第 8b 面 航空写真

### 図版 11～15 第 1 面近景

### 図版 15～17 第 2 面近景

### 図版 17～19 第 3 面近景

### 図版 19～20 第 5 面近景

### 図版 20～22 第 6b 面近景

### 図版 22～23 第 7a 面近景

### 図版 24～42 第 7b 面近景

### 図版 43～45 第 8a 面近景

### 図版 45～59 第 8b 面近景

### 図版 59～61 第 8b-2 面以下近景

### 図版 62～63 第 1 面～第 5 面関連出土遺物

### 図版 64 第 1 面～第 3 面関連出土土器

### 図版 65 第 3 面～第 5 面関連出土鉄器

### 図版 66 第 2 面～第 6b 面関連出土遺物

### 図版 67～68 第 6b 面関連出土土器

### 図版 68～70 第 7a 面関連出土土器

### 図版 70～104 第 7b 面関連出土土器

### 図版 105～106 第 7b 面～第 8a 面関連出土遺物

### 図版 107～133 第 8b 面関連出土土器

### 図版 134 第 8b 面～第 8b-2 層以下関連出土土器

### 図版 135～138 焼成失敗品

### 図版 139～140 接合部剥離資料

### 図版 141～146 第 7b 面関連出土土器

### 図版 147～150 滑石製品

### 図版 151～155 第 8b 面関連出土土器

### 図版 156～161 第 7b 面関連出土土器

### 図版 162 第 7b 面～第 8b 面関連出土土器

### 図版 163 第 8b 面関連出土土器

### 図版 164 第 7b 面 1-59 溝出土獣骨

# 第1章 調査に至る経緯と経過

河内平野の北部では生駒山や枚方丘陵の西麓には周知の埋蔵文化財包蔵地が点在している。本書で報告する讃良郡条里遺跡は、枚方丘陵の南西麓から沖積低地に位置する遺跡であるが、その遺跡範囲の南半を斜めに横切るように、第二京阪道路（大阪北道路）が建設されることとなった。

当遺跡における既往の調査では縄文時代から中近世に至る多様な遺構・遺物が発見されていることから、今回の道路建設に伴って大規模な調査の必要が生じることが想定されたため、平成13（2001）年度～平成15（2003）年度には建設予定地を対象とした確認調査が順次行われた。その結果、縄文時代以降の各時期にわたる遺構・遺物の存在が明らかになり、平成14（2002）年度から讃良郡条里遺跡（その1）～（その3）として、本格的な調査が開始された。遺跡東端の流路から人面墨書土器などとともに2枚の絵馬が出土したのはこのときである。翌年の平成15（2003）年度からは、本書で報告する（その7）を含む、讃良郡条里遺跡（その4）～（その8）の調査が開始された。

これらの調査の成果については、既出の報告書にて報告済みである。なお、平成15年度からは『遺跡調査基本マニュアル【暫定版】』（大阪府文化財センター 2003）に従って、事業者との契約名称や工事発注名称とは別に、受託契約年度と工事発注単位を組み合わせた番号の「調査名」を付けることとなり、東方から順に番号を振っていった。その際、讃良郡条里遺跡（その4）は「讃良郡条里遺跡 03-1」となり、本書で報告する讃良郡条里遺跡（その7）は「讃良郡条里遺跡 03-4」となる。本書では各調査地を表すのにこの調査名を用いている。その後も、部分的な未調査地の小規模調査が継続して行われ、讃良郡条里遺跡 08-1 調査をもって現地調査は終了した。

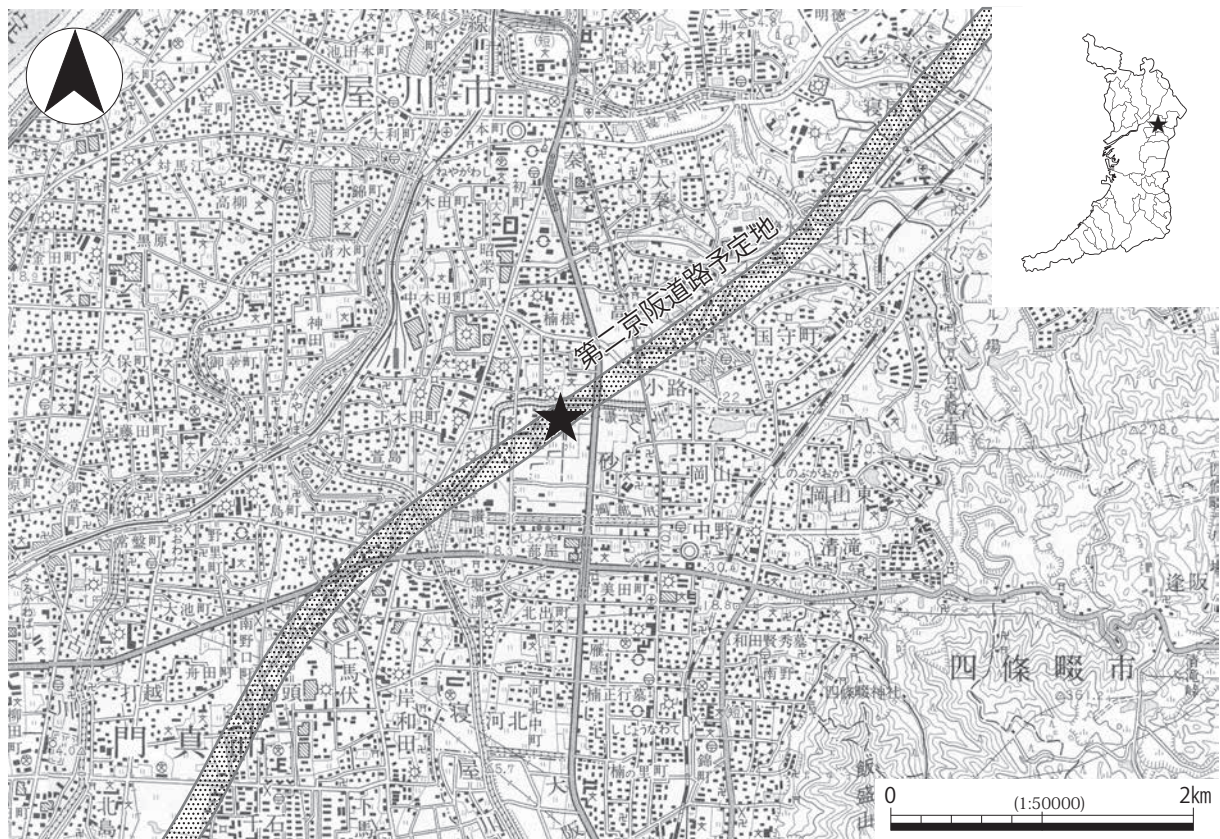


図1 調査地位置図



讃良郡条里遺跡 03-4 調査地は、中ほどに寝屋川市と四條畷市の市境が通っており、大きく見て調査地西側が寝屋川市、東側が四條畷市となる（図2）。調査着手前の現況は、造成によるものと見られる盛土層が約2mの厚さで調査地全面にわたって認められ、さらに調査地東側には残土と見られる盛土の山が約10mの高さで存在していた。調査の対象となる近世以前の堆積層はこれらの盛土層下部に存在しており、人力による掘削開始前に重機による盛土層の除去を行ったが、膨大な量の掘削土を仮置きもしくは搬出する必要に迫られた。そこで、調査地を6つの調査区に区分し、未調査部分やすでに調査の終わった調査区に掘削土を仮置きしていくことで調査を進めることとした（図3）。分割した調査区は1～6区と呼称し、原則として同時に2つの調査区を対象として調査を進めていった。調査は基本的に1区から調査区番号順に行っていたが、最終的な掘削土の仮置きの必要性から、5区の調査を最後に行っている。

平成18（2006）年度からは、現地を引き上げ整理作業を行っている。作業は現地で作成した図面類や台帳類、撮影された写真などの調査記録の整理を進めるとともに、出土遺物については、特に重要な約3000点を抽出して復元作業を行い、実測図と写真記録の作成を行った。整理された図面類や新しく作成された実測図などは一部を除いてデジタル化し、報告書用の図版とした。また遺物類は専用のコンテナに収納、台帳を作成し管理した。木製品や動物遺存体など、脆弱な遺物については保存処理を行ったものもある。作成した図版と本文原稿を編集し、本書を作成して、平成21（2009）年1月に全ての調査を終了した。

また、現地調査および整理作業期間中において、調査成果の一部公開を行っている。

平成17（2005）年10月15日には、讃良郡条里遺跡 03-4～03-6 調査地において一般市民を対象とした現地公開を行い、古墳時代を中心とした遺構・遺物を公開した。また、同年11月19日から23

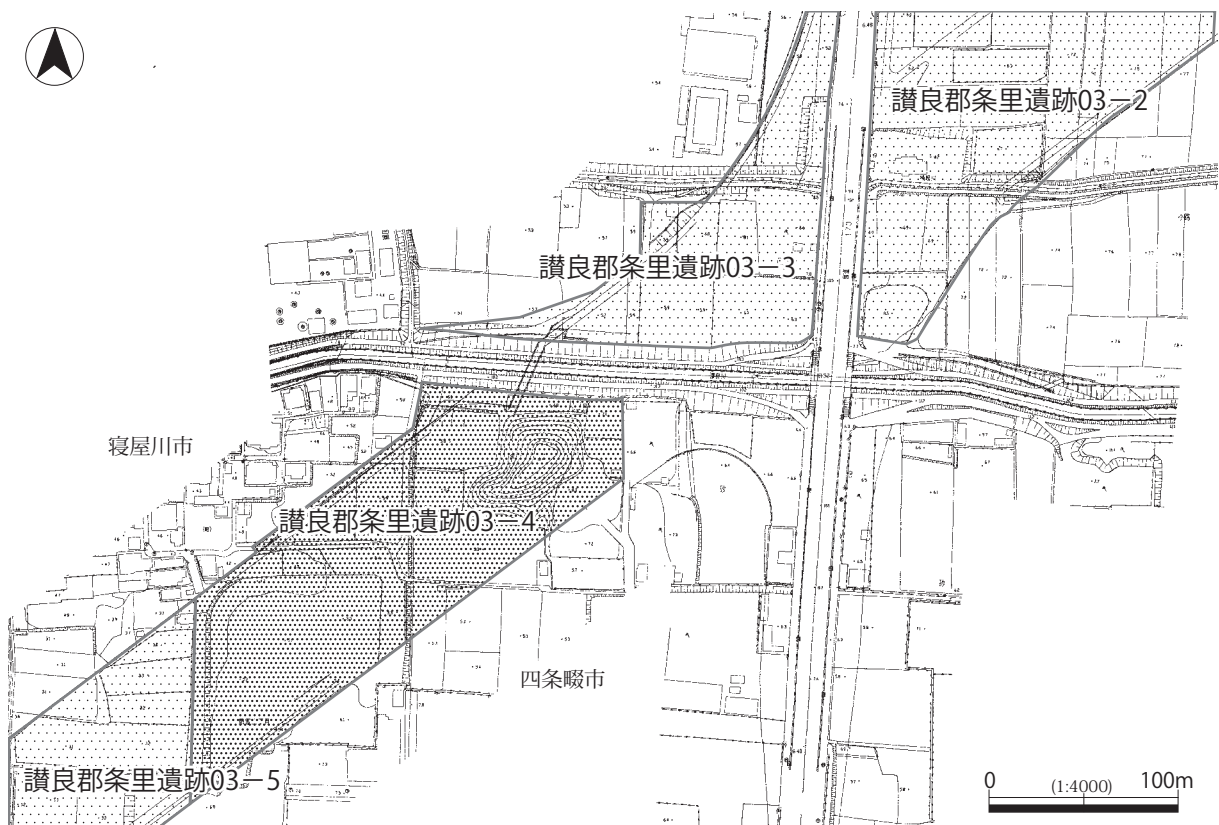
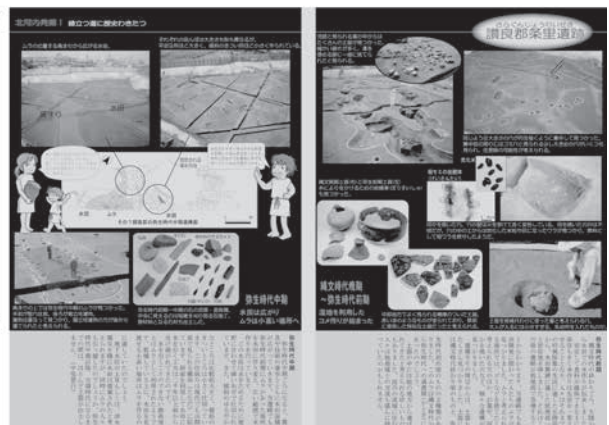
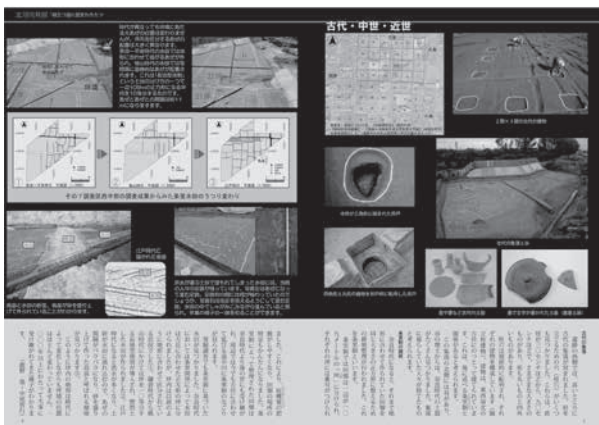
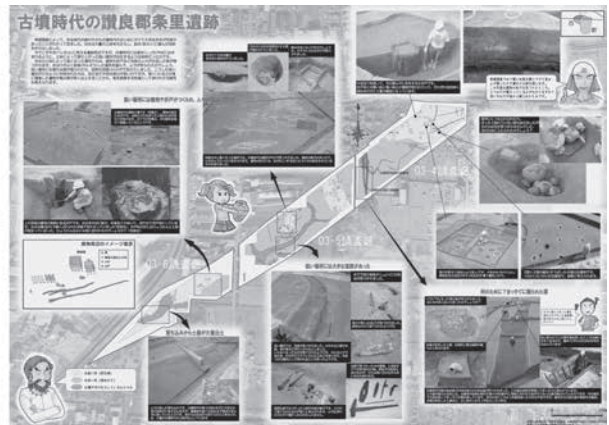


図2 調査地配置図

日にかけては、寝屋川市立市民会館において、遺物展示会と講演会を行い、讃良郡条里遺跡だけではなく、第二京阪関連調査の出土遺物などを一括して展示した。さらに、平成 19（2007）年 1 月 17 日には、第 8b 面で検出された集落出土の弥生土器が近畿で稀に見る古相を持つことについて、報道提供を行い、翌日以降、メディアを通じて大きく報道された。また、他に小・中・高等学校の見学、職場体験の受け入れやメディアの取材、博物館への出品などを行った。



大阪府立大手前高校による現場見学・体験（写真左）、寝屋川市立堀溝小学校による整理作業見学・体験（写真右）



現地説明会資料（上段）、遺物展示会図録抜粋（下段）

## 第2章 調査の方法

発掘調査は、『遺跡調査基本マニュアル【暫定版】』（大阪府文化財センター 2003）（以下、マニュアル）にもとづいて実施した。

**調査区割** 讃良郡条里遺跡 03-4 調査においては、地物の撤去や掘削土の仮置き、撮影用足場を設置することの必要性から、前述したように調査地を1～6区の6つの調査区に分割し、調査を実施した（図3）。調査区の中は、世界測地系（測地成果 2000）の国土座標（第VI座標系）の基準線に則って細分され、遺物の取り上げや遺構図作成の基準となっている。座標系を使用した地区割については、マニュアルに第I～VI区画までの細分法があり、必要に応じて使用することとなっている。03-4 調査においては、遺物の取り上げなど第IV区画を単位として行っており、第V・VI区画までの細分区画は使用していない。そのため、ラベルや登録台帳には第III・IV区画のみを記載している。また、本書に収録した図面類で10 m単位のメッシュを示しているものは第IV区画を指す。

それぞれの区画については、以下の通り。

第I区画は、大阪府の南西端  $X = -192,000 \text{ m}$ ・ $Y = -88,000 \text{ m}$ を基準とし、縦6 km、横8 kmで区画する。縦軸をA～O、横軸を0～8とし、縦・横の順で表示する。

第II区画は第I区画内を縦1.5 m、横2.0 kmで区画し、縦横それぞれ4分割して、計16区画を設定する。この区画に関しては、南西端を1として東へ4まで、あとは西端を5、9、13、北東端を16と

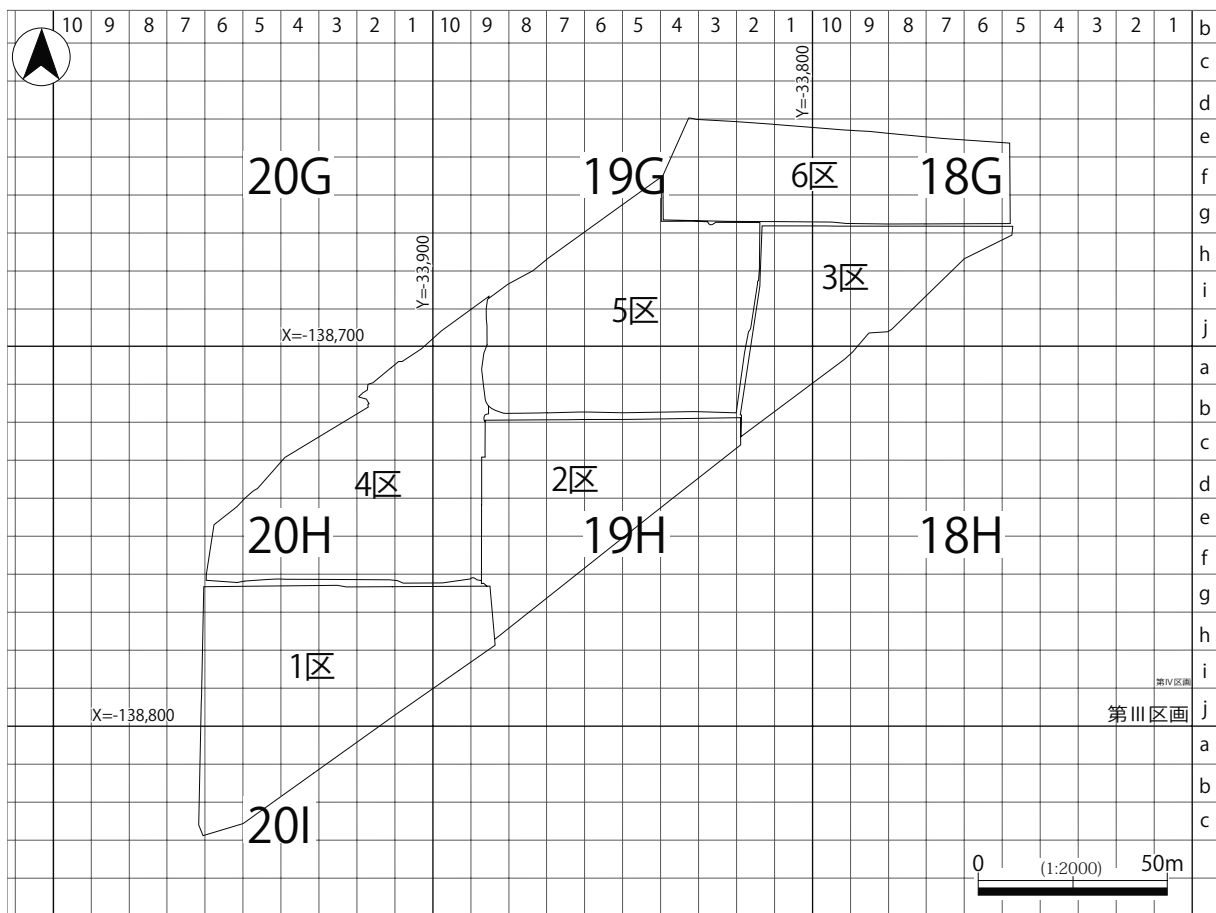


図3 地区割図

する平行式で表示する。

第Ⅲ区画は第Ⅱ区画内を 100 m 単位で区画し、縦を 15 分割、横を 20 分割する。北東端を基点に縦 A～O、横 1～20 とし、横・縦の順で表示する。

第Ⅳ区画は第Ⅲ区画内を 10 m 単位で区画し、縦、横ともに 10 分割する。北東端を基点にして縦 a～j、横 1～10 とし、横・縦の順で表示する。

03-4 調査地は、第Ⅰ区画が I 6、第Ⅱ区画が 15～16 にあたる。第Ⅲ・Ⅳ区画に関しては、図 3 の通り。

**遺構名・遺構番号** 遺構番号は種類や調査区、遺構面にかかわらず通し番号を付しており、「279 井戸」のように「番号－遺構種類」という形で記載した。また、建物跡など、複数の遺構が集合したものに關しては、「遺構種類－番号」という形で表現した。例えば「建物 5」は、5-786～5-795 ピットを包括する遺構名称である。

**掘削** 現代盛土・現代作土（旧表土）をバックホウによって除去し、その下層の遺物を含む地層（包含層）の掘削と遺構の検出作業・掘削作業は人力によって行った。また本格的な人力掘削開始前には、下層の堆積状況、遺構・遺物の分布・性格などを確認するための断割りを適宜設定し、先行して掘削した上で作業を進めた。03-4 調査地は、縄文時代以降の度重なる河川氾濫によって各時代の遺構面が良好な遺存を見せており、遺跡内では最も多く遺構面が確認された。遺存状態や遺構の状況から調査対象とした遺構面数は、調査区によって異なるものの 10 面を超え、讃良郡条里遺跡内での調査で最も多い。遺跡の成立から現代に至る土地利用の変遷を理解するための貴重な成果が得られた。また、最終遺構面である縄文時代晩期の遺構面までは、盛土のなされた現地表からの掘削深度が数 m に及ぶため、作業員の安全を考慮して調査区の端には幅約 1 m のテラスを階段状に設けながら、掘削を進めた。

**測量と図面記録** 遺構が良好に遺存する第 3a 面や第 8a 面、遺構が多数検出される第 7b 面や第 8b 面に関しては、一部の調査区を除いて、ヘリコプターを用いた航空測量を実施し、1/50 スケールの平面図を作成した。また、その他の遺構面に関しては、平板を用いて 1/100 スケールで測量をおこなった。さらに、必要に応じて遺構平面図・断面図・遺物出土状況図などを作成した。断面観察用の断割り断面図に関しては、計画路線の中央部を通る「路線中央断割り」と、各調査区での堆積状況、遺構・遺物の状況を見るため原則として 40 m ごとに設定した「X もしくは Y ライン断割り」を 1/20 スケールで実測した。

**自然科学分析** 発掘調査・整理作業の過程で、遺構・遺物の検討と並行して自然科学分析を実施した。実施したのは、花粉分析、珪酸体分析、珪藻分析、大型植物遺体同定分析、樹種同定分析、放射性炭素年代測定（AMS 法）、軟 X 線写真撮影・解析、蛍光 X 線分析、土器胎土などの土壌薄片作製・解析である。これらは例言に示した機関などに依頼して実施した。分析結果については、第 7 章にまとめて掲載するとともに、本文中でも適宜ふれている。

上記の自然科学分析を実施するにあたっては、分析担当者に該当する遺構・遺物の理解と、分析目的の把握を目的とした打合せを十分に行い、目的にかなった分析方法や作業内容を検討の上で行っている。結果として得られた成果は、肉眼では確認できない遺構・遺物の特殊性や特長、自然環境の変遷など多岐にわたり、非常に重要なものとなっている。発掘調査・整理作業においては、これらの分析成果と遺構・遺物の情報を総合的に検討し、遺跡の評価に積極的に活かしている。

## 第3章 位置と環境

### 第1節 地理的環境

讚良郡条里遺跡は、河内平野の北東端、生駒山から北に伸びる枚方丘陵西麓の扇状地から沖積低地にかけて立地している(図4)。東西約1.65km、南北約2.65kmにわたる広大な範囲が周知の文化財包蔵地とされており、現在の行政区分では寝屋川市と四条畷市に属する。本書で報告する讚良郡条里遺跡03-4調査地は、両市を南北に縦貫する国道170号線の西側に位置しており、両市の市境が含まれる。そのため、調査地西半は寝屋川市、東半は四条畷市に位置することになる。

遺跡内の地形は大きく見て東から西方向に傾斜しており、数本の河川が丘陵側から流下している。その中の一つ、讚良川は03-4調査地の北端に接して西流しており、方位に合わせた直線的な形状を示すことから、条里型地割に合わせて人工的な河道の固定が行われた可能性が高い。近世にかけて進んだ讚良川の天井川化により、現在では鋼矢板での堤防保定が行われているが、過去には頻繁に河川氾濫を起こしたようで、調査地内では各時代の堆積層に挟在する氾濫堆積物が多く確認される。特に中世末以降には大規模な氾濫が多かったようで、1m近くに及ぶ氾濫堆積物が確認できる場所もある。扇状地扇端に至近な03-4調査地は、縄文時代以降に度重なる氾濫被害を受けており、各時代における開発は氾濫による地形改変と密接な関係性を持って進展している。

また、遺跡西方を蛇行しながら南流する淀川や寝屋川は縄文時代に自然堤防帯を発達(大文セ2008a)させており、調査地周辺は東方の扇状地と北西方の自然堤防に挟まれた後背湿地的な様相を示していたと考えられる。特に03-4調査地から西側の03-5・03-6調査地にかけては、極めて低湿な地形環境にあったようで、先述の丘陵から流下する河川からの堆積物供給のほか、寝屋川の分流路などからの供給や、地下水位の上昇による広域にわたっての滞水など、多様な堆積環境が考えられる。

### 第2節 歴史的環境

遺跡周辺は、宅地化されている場所も多いものの、今なお水田が多く営まれており、田畑や水路には条里型地割が良好な遺存を見せる。周辺の遺跡は、生駒山や北方に派生する枚方丘陵の西麓に集中しており、旧石器時代から近世まで幅広い時代の遺跡群を形成している(図5)。西方の沖積低地部では遺跡の分布が希薄で様相も不明であったが、第二京阪道路の設置に伴う大規模調査によってその実態が明



図4 河内平野標高分布図

らかになりつつある。讃良郡条里遺跡においても遺跡内を高位から低位まで横断するような調査が実施されたことによって、地形環境と密接に関係する遺構分布や時代ごとの利用状況など、多くの新しい知見が得られ、縄文時代まで遡る複合遺跡として、地域の歴史環境を反映する重要な遺跡と評価される。以下では周辺の遺跡と、当遺跡における既往の調査で得られた成果を時代ごとに述べる。

**旧石器時代** 当遺跡東方に位置する太秦遺跡・高宮遺跡・讃良川遺跡・讃良川河床遺跡で国府型のナイフ形石器が出土している。また、当遺跡南東の忍ヶ丘駅前遺跡・南山下遺跡・岡山南遺跡でもナイフ形石器のほか、有舌尖頭器や木葉状尖頭器が出土している。これらの遺跡は河内湾に面した丘陵部やそこから流下する河川中流域に立地しており、当地域の歴史性の深さを示す。

**縄文時代** 高宮遺跡からは、北白川下層式や大歳山式土器のほか、遺構が検出されており、河内湾を望む海拔 28 m 前後の丘陵上に前期末頃の生活領域があったことを物語る。讃良郡条里遺跡東側の丘陵部の調査においても同時期の土器や石器製作址が検出されており、当遺跡周辺での活発な人間活動が想定できる。当調査地東方の讃良郡条里遺跡 03-1 調査地などでは、草創期以降の流路の形成・埋没・移動などの過程が確認されており、上流での活発な河川活動が当調査地での地形形成に大きな影響を与えていることがわかる。

中期では讃良川遺跡で多量の土器のほか、貯蔵穴などが検出されている。土器の中には東海地方からの搬入品と考えられるものもあり、広域にわたる交流を物語る。03-1 調査地でも船元式など同時期の土器の出土のほか、流路肩の人工的な加工が認められており、讃良川遺跡の集落に住む人々が関与した可能性が考えられている。また、讃良郡条里遺跡の範囲内に位置する砂遺跡では中期末から後期にかけての土器が出土している。

晩期になると、低地部での調査例が出てくる。当遺跡内に位置する高宮八丁遺跡、長保寺遺跡では土器が出土しており、長保寺遺跡の滋賀里Ⅲ式（篠原式）土器には靱圧痕が認められる。当調査地においても、積極的な人間活動が見られるのはこの時期以降のことであり、滞水と離水を繰り返す低湿地に活動の場が移ってきた状況が看取できる。

**弥生時代** 高宮八丁遺跡などで前期前半の土器が出土している。扇状地扇端に近い低湿地において水田が散在する状況が想定できる。当調査地でも、相対的高位の調査地東側で近畿地方で最も古い様相を持つ弥生土器が出土しており、河内瀉縁辺の低湿地において早い時期から弥生文化が伝播・成立していった状況がわかる。

中期になると、丘陵上に立地する遺跡が増加する。当遺跡北東の太秦遺跡では竪穴住居からなる集落や墓域が検出され、平野部を見渡すことのできる高地性集落として注目される。当調査地では前期末の河川氾濫によって形成された微高地上に中期前半の集落が成立しており、周囲の低位部で広範囲にわたる水田耕作を行っている状況が検出された。遺構は少ないものの中期末の土器の出土も見られ、扇状地扇端に至近で低湿な緩斜面において、継続的な水田経営が行われていたことを示唆する。

後期から古墳時代初頭にかけては、河川氾濫が頻発する不安定な環境にあったようで、標高 1～2 m に立地する当調査地では、厚い氾濫堆積物や小流路が多く見られ、堆積物の中から土器が出土する。一方、標高 7～8 m に立地する 03-1 調査地では同時期の竪穴住居が検出されており、不安定な環境変化に伴って集落が高位部に移動したことが考えられよう。

**古墳時代** 当遺跡に東接する小路遺跡では、前期初頭のものと思われる前方後方形周溝墓が検出されている。周囲には方形周溝墓が数基検出され、陸橋部を持つものもあった。



図5 遺跡分布図

中期になると、当遺跡南方の部屋北遺跡において大規模な集落が成立している。渡来系遺物に合わせ、馬具や良好な状態で出土したウマの全身骨格などから、周辺が牧として利用されていたことが想定される。当遺跡内においても、古墳時代初頭にかけて頻発した河川氾濫によって供給された砂礫で形成された、島状の微高地上に集落の形成が見られる。中でも、当調査地においては前期段階から水路の掘削などの人間活動が確認されており、比較的早くから開発の手が入っていたことがわかる。1-59・60 溝から出土したウマの頭骨および歯列は、国内でも最古級のものであり、当地へのウマの伝来直後の様子を物語る資料といえよう。

当調査地の集落は後期まで断続的に営まれており、飛鳥時代には真北を指向するように建物軸を合わせた掘立柱建物などが検出された。この集落に伴って検出された井戸には枳材として船材が転用されている。先述の長保寺遺跡や部屋北遺跡、03-6 調査地など、周辺では多くの船材が出土しており、河内

湖に近い当地の地理的環境を示すだけでなく、当時の船体構造を知る上で貴重な成果を提供する。  
 奈良時代 太秦廃寺・高宮廃寺・讚良寺跡・正法寺跡など、丘陵部西側では飛鳥時代以降に古代寺院が  
 成立する。高宮遺跡では倉庫と考えられる大型掘立柱建物が検出され、高宮寺もしくは郡衙との関連性  
 が考えられている。小路遺跡では、直線的な流路から多量の墨書土器や絵馬が出土した。讚良郡条里遺  
 跡内の調査では、方位に合わせた主軸を持つ建物が多く検出されており、この頃に条里制に基づく土地  
 区画が成立していた可能性が考えられる。当調査地でも奈良時代の集落とそれに伴う区画溝のほか、坪

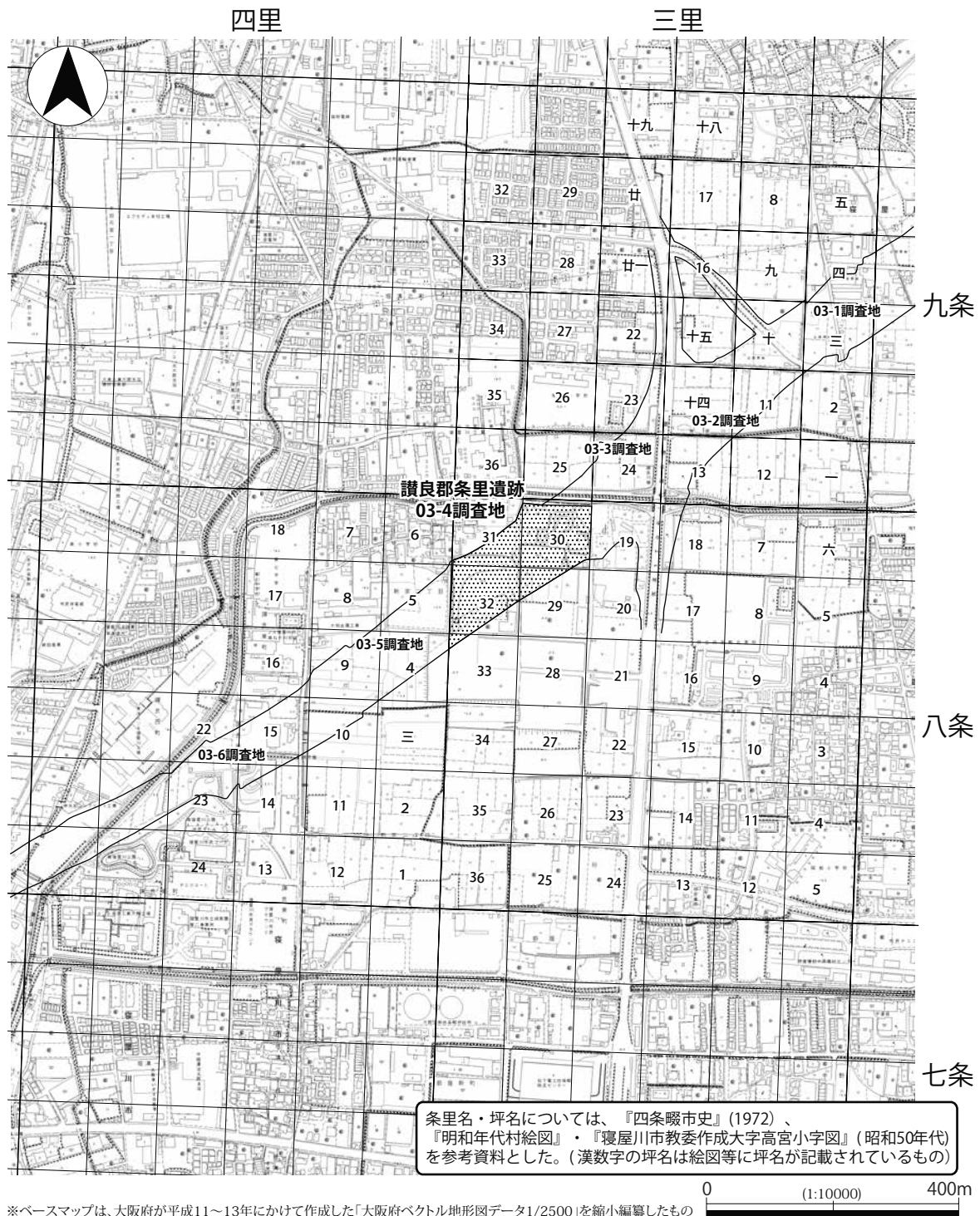


図6 遺存条里図



境付近からの遺物の出土があり、奈良時代後半を条里地割の初現期として考えることができる。

当遺跡の名称ともなっている条里型地割は、現地表においても東方の扇状地から西方の沖積低地まで広範囲にわたる遺存を見せる。図6は現地表における地割と、当調査地で検出された坪境などの調査成果を合わせて、条里型地割の復原を行ったものである。一町方格の辺長については木全敬三の検討(木全1987)により、109.3 mを基準長として復原してみたところ、検出遺構と現地表に遺存する地割それぞれの関係性においてわずかなズレが認められたため、辺長を109.5 mにして復原を行っている。また、地割の角度については検出された坪境や条里畦畔から得られた所見をもとに、N - 2° - Eの偏差を想定し復原した。

**平安時代** 讃良郡条里遺跡西方の高柳遺跡では前期の集落が確認され、貿易陶磁や緑釉・灰釉陶器のほか、巡方や馬具など一般的な集落では珍しい遺物が多く出土している。神田東後遺跡でも西方の高柳遺跡と同様な遺物が出土し、両者の関連が指摘されるほか、焼土層から大量の黒色土器の出土があり、土器焼成を行っていた可能性も指摘される。また、高宮遺跡では保延六(1140)年の墨書を持つ曲物のほか、灯明皿などの土師皿が多く出土している。奈良時代から平安時代にかけては、比較的安定した環境にあったと考えられ、当調査地内では目立った氾濫堆積物は認められない。集落などの生活領域は認められず、調査地東側の高位部は畠地、低位部は水田として利用している状況が確認された。

**鎌倉時代** 長保寺遺跡で集落とそれに伴う井戸が多く検出されている。堀の可能性のある大型溝からは、貿易陶磁や瓦、火舎など優品が多く出土しており、寺院の可能性も考えられる。また、高宮遺跡では墓域が確認され、烏帽子や鉄刀、青磁合子などの副葬品が出土した。周辺に居住する有力者の墓地と考えられよう。讃良郡条里遺跡南西の巢本遺跡では集落や区画溝のほか、大規模な堤状遺構など治水工事の痕跡が確認された。中世における灌漑・治水技術について、重要な知見を加えるものといえよう。

讃良郡条里遺跡内では、集落などの検出はなく、広く耕作地として利用されていたようである。当調査地でも平安時代と同様に東半を畠地、西半を水田として利用していた状況が想定される。また、本文内で詳しく述べるが、この時期に坪内地割として長地型地割が導入された可能性がある。

**室町～江戸時代** 当調査地内では、全域が水田化し、前代よりの条里型地割が踏襲される。付近の河川の天井川化が進み、局所的な氾濫堆積物の供給が多く見られる。これらの砂礫などを部分的に盛り上げた島畠はこの時期に出現する。江戸時代には讃良川が大規模な氾濫を起こしたようで、03-5 調査地まで広がる厚い砂礫の供給が見られる。このとき、砂礫上から掘り込み、下層の耕作土を掘り上げる災害復旧土坑が多く見られる。また、井戸や水溜めが急増しており、氾濫堆積物による自然堤防の形成や天井川化により、用水が不足していた可能性が考えられる。

## 第4章 基本層序と遺構面

### 第1節 断面記録の方法

讚良郡条里遺跡 03-4 調査地では、全域に盛土がなされており、その厚さは約 2 m におよぶ。発掘調査においては、この盛土と、その直下に存在する近現代の耕作土を重機によって除去したが、近世以前の遺物を含む包含層については人力での掘削を行った。その平均深度は約 1.8 m であり、この人力掘削分について、写真および図面の作成による断面記録を行った。

多様な埋没微地形と複雑な堆積構造を持つ沖積低地の調査では、任意の間隔に設定した調査断面による層序の把握が不可欠である。図7に示すように、当調査地では方位軸に合わせて基本的に 40 m ごとに設定した「X・Yライン断割り」と、

調査原因となった計画道路の中軸線に設定した「路線中央断割り」によって、層序把握を行いながら調査を進めた。また、地層の堆積状況、遺構の分布に応じて、逐次必要な箇所断面観察のための断割りを設定し記録している。これらの断面記録は図対象とした範囲だけでも 1 km 以上に及ぶ膨大なものとなり、本書において全ての断面記録を掲載することはできないが、原図や写真等については全て整理事務所での保管対象となっている。なお、掲載図面については紙幅を勘案して縦横の比率を変えている。

具体的な記録作業については、現地で作成した 1/20 の断面実測図（断面実測図の作成に際して、土層構造やラミナの方向、粒度など、スケッチや記号化によって詳細な記録を取っている場合があるが、本書では小縮尺による図面表現の限界により、それらの図示を省略している）と、写真撮影によって行った。写真撮影については 35mm のモノクロおよびリバーサルフィルムを用いているが、断面全てを対象としたものではなく、部分的な撮影に留まる。なお、恒久的な記録とは言い難いが、発掘調査・整理作業時の一次記録として、ネガカラーフィルムによる断面連続撮影を行っている。1区では行っておらず、2～6区の断割りを対象としたものであるが、図面では表現できない地層の色調や微細な堆積構造について、視覚的に観察することができる。

### 第2節 層序の把握

当調査地では以上のような方法によって、埋没微地形の理解と堆積層序の把握に努めた結果、各時代の地形環境変遷の一端を把握できた。現代の地形区分では扇状地末端部に近い沖積低地に立地する当調

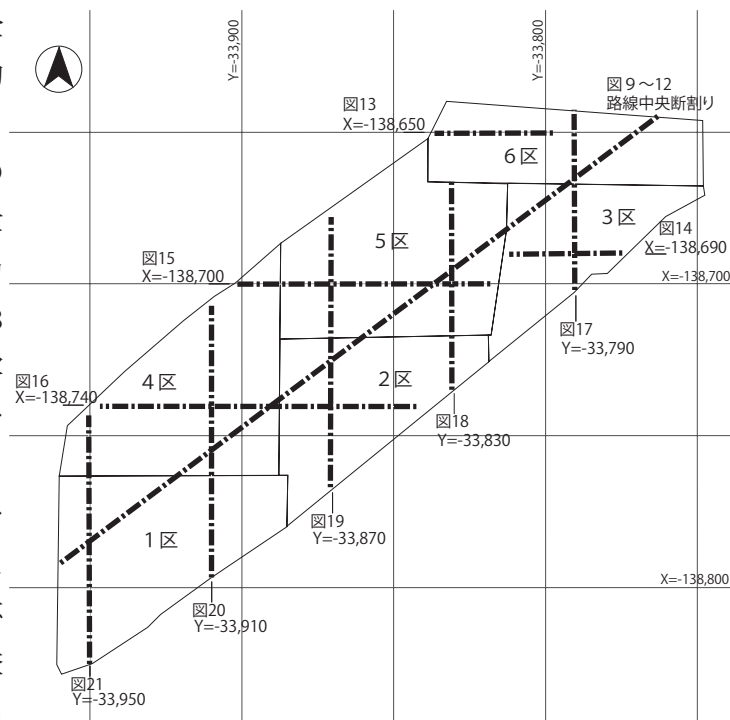


図7 断割り断面 位置図

査地だが、調査で確認した縄文時代中期以降の堆積状況は、三角州帯、扇状地、氾濫原における自然堤防と後背湿地といった地形環境の変遷を示すことが想定され、各時代の自然環境や人間活動に大きな影響を与えている。

全体的な地形としては、調査地東方から西方に向かって傾斜する斜面地形が確認された。この斜面地形は東方の生駒山の裾に広がる扇状地から連続するものだが、扇状地末端部近くに位置する当調査地で確認される傾斜は周囲の調査地と比べても東西に大きな比高差を持つ。弥生時代中期の水田が検出された第 8a 面では、調査地東端と西端の延長距離にして 250 m の間に 2.4 m もの比高差が認められる。こうした傾斜地形と河川に近接した扇状地末端という立地によって、当調査地周辺では河川氾濫による砂礫の供給と、後背湿地状の環境下での泥質な堆積を繰り返す状況が続いたと見られ、相対的高位にある調査地東側と低位にある西側で残存状況が大きく異なるものの、縄文時代晩期から近世にわたる 10 面以上の遺構面が確認された。特に近畿最古相を示す弥生土器を出土した弥生時代前期の集落、弥生時代中期の大規模な水田と集落、奈良時代後半頃の成立から現代までの条里開発の変遷過程を確認できたことは、北河内の低地部における開発の歴史を考える上で大きな成果であるといえよう。頻発する河川災害によって供給される砂礫が発生当時の地表面を被覆し、後世の攪拌から守った結果として得られた貴重な資料といえる。

とはいえ、局地的に供給される氾濫堆積物は、供給源からの距離や供給営力の差によって層相の側方変化（同時異相）を見せる。堆積物の層相の変化は、その堆積物を主な母材とする上層土壌層の層相と直接的に関係する。讃良川に隣接する当調査地では局地的な氾濫堆積物が多く認められ、発達した極微地形による非常に複雑な堆積状況と、耕地開発による堆積物を母材とした古土壌の形成が見られた。また、里道や水路の付け替え、調査廃土の仮置ヤードの必要性や調査体制から、調査地を 6 つの工区に分割する必要があったため、断面観察も分割して行わざるを得なかった。そのため調査時点では全体的な層序把握に混乱をきたし、誤認の含まれる場所も少なからずある。これについては、報告書を作成するにあたり、調査記録を損ねない範囲での修正を行っている。

### 第 3 節 層呼称と遺構面の認識

氾濫堆積物をはじめとする水成堆積物が頻繁に堆積される環境下では、水成堆積物と人為などによる攪拌が行われた「土壌化」した層が交互に見られることがある。高橋学は、洪水や火山噴火などで自然堆積した「岩屑」が動植物や人為による攪拌によって、堆積構造が乱され有機物が混入して、団粒と称される独特の堆積構造を持つようになる作用を「土壌化作用」と定義し、土壌化作用を受けた地層（古土壌）を a 層、そうでない岩屑層を b 層と呼んだ（高橋学 2003 『平野の環境考古学』古今書院）。また、岩屑に土壌化作用が少し及んでいる地層を a' 層と呼んだが、こうした呼称方式に準拠して調査を行っている大阪府池島・福万寺遺跡の調査などでは、これを b' 層と呼ぶことが多い。

高橋はさらに、岩屑でありながら b 層とは層相が異なるものについて、順に c 層、d 層、e 層の呼称を当てていくとするが、これは地理・堆積学的に層相の異なる自然堆積物（岩屑）を区別する必要性から提起されたものと考えられ、人の成せる営為を第一義的な調査対象とする考古学においては、大きな必要性が認められない上に呼称の煩雑化を招きかねない。また、判断基準である層相の違いについても堆積学や地質学の知識に乏しい考古学的視座によって、岩屑を区別し呼称化することには問題が大きいと考えるため、本書においては土壌化の有無によって地層を a と b に二分する呼称分類のみを採用して

記述を行っている。また、a'層については、弱い土壌化作用を受けた層を呼称するほかに、土壌化作用自体は強く及んでいるものの、人為の及んだ形跡が認めがたい地層を呼称するのにも使用している。

以上によって、本書では、耕作土やいわゆる包含層が含まれる「古土壌」にはa層、氾濫堆積物や滯水性の泥質な堆積など堆積構造が乱されていない「自然堆積物」にb層の呼称を付し、これに層準をあらわす1～9までの数字を、形成時期の新しいものから順に割り当てることによって、上層から第1a層、第1b層、第2a層、第2b層という呼称を付すこととした。また、地形変化による堆積状況の変化が激しい当調査地では、低位部の沼沢環境の中で堆積したと見られるb層が、高位部に向かうにつれて離水して土壌化し、a層、もしくはa'層として確認されることがあり複雑な様相を呈すが、これも土層の側方変化として理解される。

さらに、調査の進捗につれて土層間に形成時期や過程の異なる間層の挟在が確認されたりすると、層序把握にさらなる細分が必要となる場合がある。この場合、当初に付した層呼称に枝番を付して表現することがある（例：8a-2層）。

遺構面の呼称はこれらの層呼称に対応しており、原則として古土壌の上面がa面、自然堆積層の上面がb面となる。例えば第6b層に被覆された第7a層の上面で検出される畦畔は〈第7a面〉の遺構であり、第7a層を除去して第7b層上面で検出される溝やピットなどの遺構は〈第7b面〉の遺構である。しかしながら、複雑な極微地形の形成が認められる当遺跡においては、a層とb層が必ずしも交互に堆積しているわけではない。また、安定した環境下で連続した耕地開発が行われた場合、耕作層（a層）は明確な自然堆積層（b層）を挟むことなく連続する。

つまり、同一時期に帰属すると考えられる遺構でも、全てが同一層の上面で検出し得ないのである。例えば、低位部で氾濫堆積物の被覆により良好な遺存を見せる水田面が確認された場合、そこで検出される畦畔はa面の遺構である。この水田面が高位部に至って上層の耕作により削平されているとすると、a面で畦畔を検出することはできない。しかしながら、当該時期の開発に伴う遺構をa層下面で検出することができる場合がある。このような場合、ある一定の時期の開発に伴うと考えられる遺構（もちろん厳密な同時期性については確認できず、遺構の帰属時期に幅を持たせた理解（開発期間）が必要となる）の検出面が異なるということになる。実際の調査では各工区において、層序とその遺存状況を確認しながら遺構検出面を設定しているため、工区ごとの違いも大きい。

本書ではこれら〈検出面が異なるが同様の開発段階に帰属する遺構群〉を一括して示すことが多く、その場合、遺構面呼称について、〈第○面〉のようにa・bを付さずに記述することとしている（例：第1a層下面で検出される災害復旧のための土取り土坑と、第1a層上面で検出される島畠・水田畦畔を〈第1面〉の遺構として取り扱っている。この場合、罹災後の復旧作業の痕跡と考えられる土取り土坑と、復旧後に営まれた耕作地の最終形状を示す島畠・畦畔の遺構間には、一定の時期差が存在する）。また遺構群の持つ時期幅については、a面検出遺構と、a層下面もしくはb面検出遺構では大きく異なる。氾濫堆積物に覆われたa面の遺構は、氾濫堆積物供給直前の地表面の状況を直接的に示すものといえ、同一面上で検出される遺構群の同時期性は極めて高く、時期幅を持たない（ただし、これは開発の最終形状であって、当該開発の開始時期を推定することは難しい）。一方、a層下面もしくはb面検出遺構は、該当a層の形成開始から廃絶（埋没）までの期間が長ければ長いほど、大きな時期幅を持つことになる。以上のことは、当然のことのようだが、沖積低地において検出される遺構の開発時期などを推定する上では、大変重要な認識と理解である。

## 第4節 各層の概要

ここでは断面観察によって確認された基本層序について、調査地全体を縦貫する路線中央断割りを中心にして述べる。地形変化の激しい当調査地では局地的な堆積が多く見られ、土層の同時異相が多く見られる。そこでここでは各土層を特徴付ける層相についての概要を述べている。各地点でどのように層相が変化しているかについては、土色註記を参照していただきたい。

基本層序の把握と微地形の変遷については、時系列に沿って述べた方が理解しやすいため、調査で確認された層序のうち、最下層に位置し、形成時期の最も古い第9a'層から順に解説することとする。内容については、主に路線中央断割り断面（図9～12）を対象としているが、粒度・色調については、場所によって異なるため幅をもたせて記述した。

### （1）第9a'層（縄文時代中期）

第9a'層は、2区を除いて平面調査終了後の下層確認掘削によって確認した。細砂混じりシルト～粗砂（5Y5/1 灰色～7.5Y7/3 浅黄色）が主体で、植物遺体などの有機物を多く含む。確認した範囲で1.5 m以上の層厚があり、層下端は確認できていない。顕著なラミナは見られないが、上方に向かって細粒化する傾向がある。層中にはヨシの地下茎が多く見られ、直径1～2 cmの管状の生痕が散見される。4区で行った珪藻分析からは汽水種が一定数見出されており、汽水域に近い塩性湿地などの環境を想定することができる。動植物によって攪拌されているものの、部分的にラミナの残る場所もあるため、a'層として扱った。

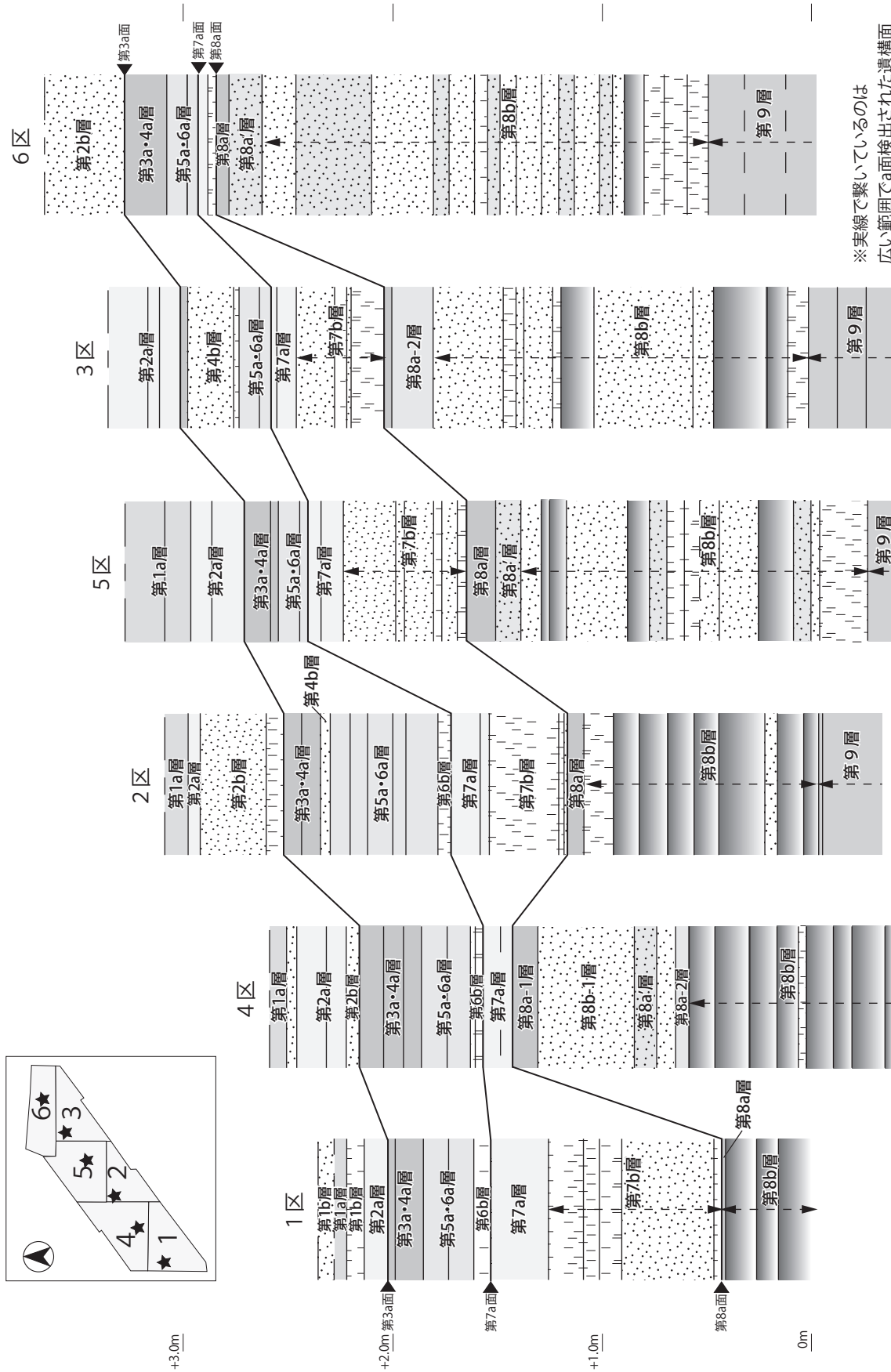
層上面には直径3 cmほどで開口する生痕が確認される場所が多く、甲殻類などの巣穴である可能性が考えられる。生痕は直上の第8b層によって埋没している。こうした状況は一時期地表面化し、動植物が活動していた第9a'層上面が、第8b層が沈積するような水域に没した状況を想起させる。層上面はT.P.-0.4 m～0.0 mに位置しており、西方に向かって下るわずかな傾斜が見られるものの、ほぼ平坦である。4区の層番359においては、層中から出土した中でも現地性が高いと思われる草本の炭素年代測定を実施しており、4085 ± 30BPという結果が出ている（第7章 第7節）。

### （2）第8b-2～8b-10層（縄文時代後期～晩期）

漸移的に上方暗色化するシルト～粘土（5BG4/1 暗青灰色～10GY7/1 明緑灰色）が特徴的な層序である。基本的には沼沢地のような湿地における泥土の沈積により形成される堆積物と考えられ、花粉分析ではヨシ属が卓越する。珪藻分析では第9a'層で見られたような汽水種はほとんど見られず、淡水種ばかりであることから、水域もしくは湿地域の環境下にあるとはいえ、淡水環境に変化していることが想定される。同層に特徴的な上方暗色化については、堆積速度に密接に関連する有機物の含有量に起因すると考えられる。すなわち、堆積速度が速い場合は層中に取り込まれる有機物の量は少ないが、堆積速度が遅くなるにつれ有機物の含有量が増え、暗色を呈してくるものと理解される。

このような堆積速度の遅速については、泥土の沈積という堆積物の性格上、おそらくは湿地における表層水位の変動が要因の一つと考えられ、河内瀉周辺の三角州帯という立地から、海水位の影響を受けた可能性を考えることもできるが不明である。

ともあれ、漸移的に上方暗色化しながら累重する土層は明瞭な古土壌を挟在していなくても、堆積単位として明確な分層が可能であり、各単位で第8b-2層から第8b-10層までの細分を行った。各層は、



色調のほかにも層厚も類似しており、一定期間の乾湿を繰り返しながら緩やかな堆積サイクルが進行していたことが窺われ、比較的安定した沼沢地としての環境を想定できるが、上流の氾濫によるものか、しばしば粗粒の堆積物が供給されている。礫混じりの極粗砂～細砂を中心とした砂礫層は、各層の堆積過程で供給されたと考えられ、漸移的に上方暗色化する一堆积単位中に砂礫が挟在される場所や層位が看取できる。そのため、部分的にはあるが砂礫層の供給に伴って第 8b-4-1～第 8b-4-7 層など、枝番を付すことで細分を行った層も存在する。

砂礫の供給が小規模であった場合は湿地の中に部分的な起伏が形成されるに留まるが、砂礫の供給が大規模であった場合は、全体的な地形を形成することがある。当調査地内で最初に見られる大規模な砂礫の供給があるのは第 8b-7 層段階である。調査地東方の広い範囲に偽礫や礫などを含む粗い砂礫層が厚く供給され、平坦地形の第 9a' 層の堆積段階では見られなかった東から西へ下る斜面地形を形成する。さらに次の段階では斜面地形の先端に第 8b-4 層が供給され、斜面地形が西方に伸張する。その後も小規模ではあるが、第 8b-3 層、第 8b-2 層、第 8b-1 層段階の砂礫が徐々に西方に移動しながら供給されていくことになる。生駒山寄りの調査地東方から西方へと進む地形変化は、当該期における生駒山西麓の扇状地の形成過程を端的に示すものといえよう。砂礫の供給により相対的に高燥化した場所では、動植物による土壌化が進む傾向が見られ、調査地東側の 3・6 区では顕著な古土壌が認められる。これらの古土壌と低位部で見られる泥質の堆積層との境界は比較的明瞭（路線中央断割り 297・306 の境界など）であることから、この層界がある時期の水域と陸域の境界線を示す可能性が考えられる。2 区においては、この境界付近で縄文時代晩期の突帯文土器（図 325-4）が出土しており、同層の堆積年代を考える上で重要である。

以上のような砂礫の供給により形成された西に下る斜面地形と微高地は、弥生時代以降発達する集落や水田の分布に密接に関連することとなる。

### （3）第 8a-2 層（弥生時代前期）

縄文時代中期から断続的に続く泥土と砂礫の供給・堆積は、縄文時代晩期頃に一旦終息する（第 8b-2 層以下）。大規模な砂礫（第 8b 層）の供給によって、形成された斜面地形のうち、比較的乾燥した高位部には弥生時代前期前半になって集落が立地する。集落に伴って形成されたと考えられる第 8a-2 層は、極粗砂～粗砂混じりシルト（10BG3/1 暗青灰色～10GY4/1 暗緑灰色）の古土壌であり、弥生時代前期の遺物包含層ともなっているが、西方の低位部ほど遺物の含有量が低く粘質が増し淘汰が悪くなる。ただし、後述の第 8b-1 層が供給される低位部（1・2・4 区）以外では、第 8a-2 層を被覆するような大規模な堆積が弥生時代後期以降までなかったようで、第 8a-2 層の大部分は後世の攪拌によって損なわれている。

また、低位部における第 8a-2 層は、細粒で粘質が強く未分解の有機物を含んでおり、集落の立地する高位部に比べ、西側の低位部は低湿な環境下にあったことがわかる。調査地西端の 1 区では、第 8b-1 層の下層で 1-300 畦畔が検出されている。この畦畔は大型の大畦畔であり、他に小区画水田を構成する畦畔が確認されていないことから、これをもって水田の存在を確実視するわけにはいかないが、低湿な低位部が、東側の集落に居住する人々にとっての生産域、水田として利用された可能性は高く、今後の周辺調査によって、弥生時代前期に遡る水田遺構が確認される可能性は高いといえよう。

### （4）第 8b-1 層（弥生時代前期末）

第 8b-1 層については、出土遺物から弥生時代前期末の氾濫堆積物と考えられ、極粗砂～細砂（2.5Y8/1

～5Y8/2 灰白色) が主体である。調査地西側の1・2・4区にて部分的に厚い供給が見られ、南東から北西方向まで幅を狭めながら伸びる微高地を形成する。微高地の一部は、第7b層の堆積でも埋没しきらず、古墳時代前期までは残存したと考えられる。微高地の形状と地形傾斜からは、第8b-1層の供給源が調査地外の南東方向にあることが想定できる。

第8b-1層は、弥生時代前期に形成された第8a-2層と、中期に形成された第8a-1層を区分するための鍵層として重要であるが、顕著な供給は1・2・4区で部分的に確認されるのみで、それ以外の場所では第8a-1・2両層は連続した土壌層として確認され、分層が困難となっている場所が多い。

#### (5) 第8a-1層 (弥生時代中期～後期)

粗砂混じり粘土(7.5GY5/1 緑灰色～10G3/1 暗緑灰色)の古土壌である。大部分が耕作により形成されたものと考えられ、淘汰が悪いが、遺物は微高地付近などを除いてほとんど出土しない。広い範囲で層上面が第7b層に被覆されており、西に下る斜面地形を利用して営まれた水田の畦畔が検出された。層上面の標高は、T.P.0.4～2.9mと2.5m以上の比高差を見せ、乾湿など自然環境面でも大きな差異が存在する可能性がある。実際に同層は西方で確認されるものほど有機物を多く含み、攪拌が弱い(232)。検出された水田は豊富な地下水を利用して営まれていると考えられ、排水不良になりがちな低位部は水田ではなく、湿地のような状況を呈することが多かった可能性も考えられる。土壌分析の視点からは、珪酸体や花粉化石の残存状況から乾湿を繰り返すような環境変化が見られるとしており、水田耕作土としての調査所見に合致する成果といえよう。

#### (6) 第7b層 (弥生時代後期～古墳時代初頭)

砂礫と粘土が互層を成す氾濫堆積物である。微高地1の東西で供給状態が大きく異なり、層序・層相も大きく異なる。中でも砂礫の供給は局所的で、調査地内に部分的な起伏を形成する。相対的高位となって乾燥した砂礫上には、古墳時代以降の集落や畠地などが立地する。

#### (7) 第7a層 (古墳時代～平安時代)

第7b層の堆積後に形成された古土壌。調査地西方の低位部では、粗砂を含むものの粘質が強く、グライ化が進んで青灰色もしくは緑灰色を呈する。一方、調査地東方の高位部では砂質が強く、黄灰～灰色で遺物を多く含む。これは同層を形成した古墳時代～平安時代頃の土地利用状況の相違をよく反映したものとといえよう。同層の堆積過程の中では大きな堆積物の供給がなく、長期にわたって形成されてゆえに、比較的層厚があり部分的に分層できるものの、各層の正確な形成年代を知ることは難しい。第6b層に被覆される調査地西方では、第7a層上面で水田畦畔が検出された。出土遺物から、平安時代後半を下限年代とする水田と考えられるが、調査地西方における第7a層の耕作利用は古墳時代以降継続してきた可能性が高く、検出された水田の開発開始時期はより遡ると考えられる。

#### (8) 第6b層 (平安時代)

炭化物や黒色化した植物遺体を層状に含む粘土層で、グライ化が進み青灰色を呈する。調査地西方の低位部に厚い堆積が見られるが、これは三十一ノ坪の南半と三十二ノ坪にあたる範囲であり、第7a面の水田域に対応する。相対的低位となる水田に厚く堆積した第6b層は残存したが、相対的高位にある調査地東側の畠地では後世の耕作によって攪拌しつくされ残存していないといった状況が考えられよう。顕著なラミナは認められないが、広い範囲で有機物を層状に含むことから、第7a面の耕作地が廃絶した後、周辺の低湿化が進み広域で滞水した際に沈積した泥土のような性格を考えることができる。

#### (9) 第6a～5a層 (鎌倉時代～室町時代)



青灰色を呈するシルト～粘土主体の層で、第 6b 層に近似するが淘汰が悪く、植物遺体などの有機物を含まない。部分的に炭酸鉄の結核が目立つ場所があり、低温な環境が想定される。第 5a 層と第 6a 層は分層できるものの区別は難しく、多くの場所で第 5a・6a 層として一括して扱った。両層中や両層を除去して検出される遺構面(第 6b 面)では、12 世紀後半頃のものと考えられる瓦器碗の出土が目立ち、形成開始年代は平安時代まで遡ると考えられる。

#### (10) 第 4b 層 (室町時代?)

三十ノ坪、三十一ノ坪に局所的に供給された氾濫堆積物で、調査地内に部分的な起伏を形成する。部分的に 2 層以上に分層でき、下層の第 5a 面直上には粘土～シルトの細粒の堆積物が見られる。細粒の堆積物には層序の逆転(リバーズグレーディング)が確認され、氾濫当初の溢流堆積と考えられよう。その直上に砂礫が乗るが、これは破堤堆積と理解できる。氾濫後の耕地面の復旧の際には寄せ集められた同層上面が島畠として利用され、第 3a 面の開発まで踏襲される。

#### (11) 第 4a～3a 層 (室町時代～近世)

下層の第 6a～5a 層と層相は近似するものの、第 4b 層を挟在することによって明確な区分が可能である。また第 4b 層が確認できない場所でも、第 4b 層が母材として含まれているため下層に比べ粗粒傾向にある。ただし、第 3b 層の供給は調査地内でほとんど見られないため、継続的な耕作による攪拌やグライ化を受けて第 3a 層と第 4a 層の区別は難しく、多くの場所では第 3a・4a 層として一括して把握することとなった。

#### (12) 第 2b 層 (近世)

第 3a 層上面を被覆する粘土～シルト層と、その上の砂礫層から成る氾濫堆積物。広い範囲に供給されているが、1 区の南西側だけは確認されず、第 1a 層と第 2a 層が連続した古土壌として確認される。6 区の北東端付近では第 2b 層による浸食が見られ、3・6 区で特に厚い堆積が見られることから、調査地北東側付近で讃良川が破堤したことを物語る。

#### (13) 第 2a 層 (近世)

第 2b 層堆積後の耕作土層である。第 2b 層の供給が多く、数次にわたって堆積している調査地東側では粗粒の第 2a 層が複数単位見られる。第 2a 層上面では水田畦畔、島畠などの耕作痕跡が確認されるが、これを被覆する第 1b 層の供給が局所的な分布を見せるため、一部を除いて遺存状況は悪い。

#### (14) 第 1b 層 (近代)

調査地の東端と西端で厚い砂礫の堆積が見られる。特に調査地東側の 6 区においては、第 2a 面上において、第 1b 層による著しい浸食痕跡が確認された(図 39)。この浸食はその中心地の東側では検出されず、第 1b 層の供給が中心地の南西側に向けて広がっていることから、讃良川が 6 区北側地点で破堤した可能性が高いことを物語る。

#### (15) 第 1a 層 (近代)

第 1b 層供給以後の耕作土層である。第 2a 層と同じく複数単位の堆積が見られる。開発当初(第 1a-4 層)は第 2 面で見られるような島畠が多数存在したが、最上層(第 1a-1 層)の段階では島畠の削平と平坦化が進んでいる。第 1b 層の供給以降は、付近の耕作地への導水が困難になったらしく、第 1a 層の開発段階では、井戸や水溜めなどが多数設置されている。

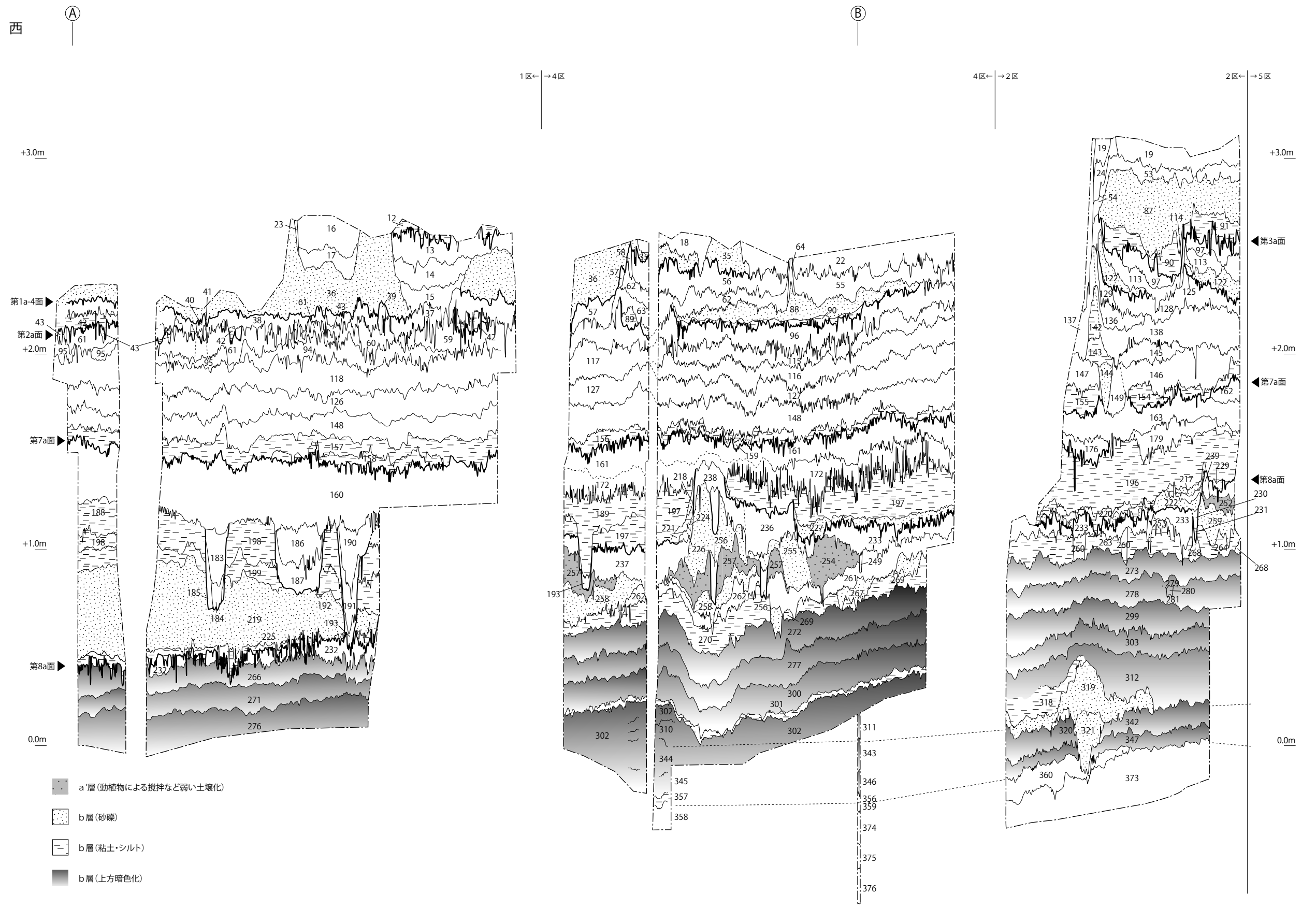


図9 路線中央断割り断面図1  
— 19・20 —

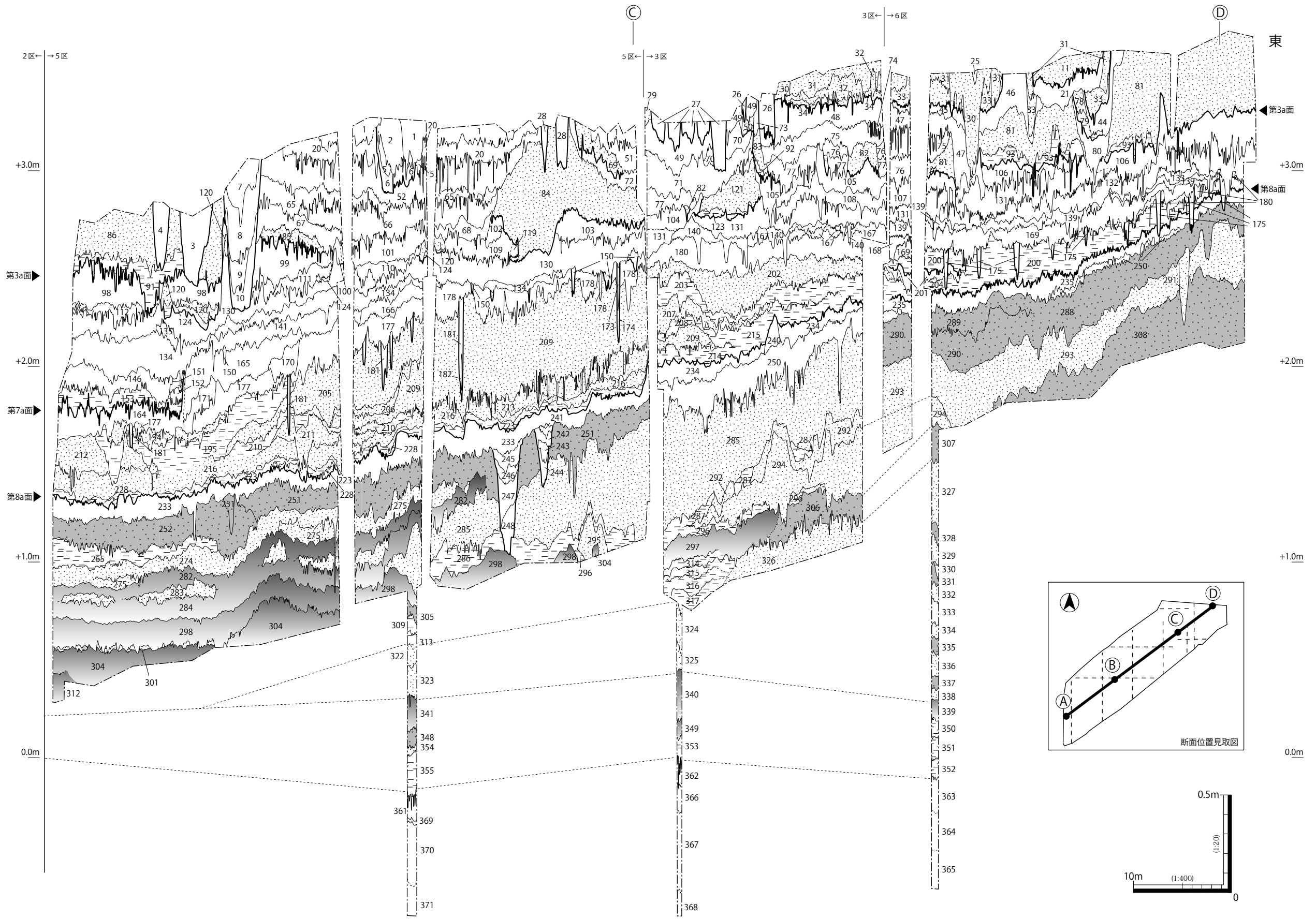


図 10 路線中央断割り断面図 2  
— 21・22 —

1.	第1a層	5Y 8/4 淡黄色	細砂～粗砂(ブロック土混じる)
2.	遺構埋土	5Y 8/1 灰白色	粗砂(第1面5-2溝埋土)
3.	遺構埋土	5BG 5/1 青灰色	粗砂と5Y 8/2 灰白 礫～粗砂の互層(第1面遺構埋土。ラミナ顕著)
4.	遺構埋土	5BG 5/1 青灰色	粗砂と5Y 8/2 灰白 礫～粗砂の互層(第1面遺構埋土。ラミナ顕著)
5.	遺構埋土	5Y 8/4 淡黄色	微砂～細砂と5BG 5/1 青灰色 シルト～微砂の互層(第1面5-2溝埋土)
6.	遺構埋土	5BG 4/1 暗青灰色	粗砂混じり粘土(第1面5-2溝埋土)
7.	遺構埋土	5Y 8/4 淡黄色	微砂～細砂と5BG 5/1 青灰色 シルト～微砂の互層(第1面5-1溝埋土)
8.	遺構埋土	5BG 5/1 青灰色	シルト混じり粗砂に5Y 8/3 淡黄 粗砂が混じる(第1面5-1溝埋土。埋め戻し土か)
9.	遺構埋土	10BG 5/1 青灰色	粘土～シルト(第1面5-1溝埋土。ラミナあり。溝底面の泥質堆積か)
10.	遺構埋土	5BG 5/1 青灰色	シルト混じり粗砂(第1面5-1溝埋土。部分的にラミナあり。崩落土か)
11.	第1b層	10GY 6/1 緑灰色～7/1 明緑灰色	細砂～シルト(ラミナあり)
12.	第1b層	10BG 5/1 青灰色	粘土(泥質堆積)
13.	第1a-1層	10BG 5/1 青灰色	粗砂混じり粘土
14.	第1a-2層	5Y 5/2 灰オリーブ色	細砂～粗砂
15.	第1a-3層	5BG 5/1 青灰色	細砂～粗砂(黄色砂ブロック混じる。攪拌弱い)
16.	第1a-1層	2.5Y 5/1 黄灰色	細砂～粗砂
17.	第1a-2層	5Y 5/1 灰色	細砂～粗砂(締まり悪い。黄白色砂ブロック混じる)
18.	第1a層	7.5GY 6/1 緑灰色	シルト～粗砂(下層に部分的に第1b層残存)
19.	第1a層	2.5Y 5/1 黄灰色	細砂～粗砂
20.	第1a層	5Y 6/1 灰色	細砂～粗砂(径5mm程度の小礫多く混じる。下層にシルト帯が部分的に入る)
21.	第1a層	7.5Y 4/1 灰色	礫混じり粗砂
22.	第1a層	18に近似するが、より緻密でシルト質強い	
23.	第1a層	5Y 5/1 灰色	細砂～粗砂(第1面島島盛土。ブロック土多い)
24.	第1a層	5Y 7/1 灰白色	シルト～粗砂(部分的にラミナあり。畦畔芯もしくは盛土)
25.	遺構埋土	7.5GY 4/1 暗緑灰色	粗砂～細砂(第1a層下面耕作痕跡内埋土)
26.	遺構埋土	5Y 8/1 灰白色	粗砂～礫(第1面土坑群2。ブロック土含む。径3cmまでの礫を含む)
27.	遺構埋土	5Y 5/1 灰色	極粗砂～粗砂(第1面土坑群2。ブロック土多い)
28.	遺構埋土	5Y 5/1 灰色	粗砂～細砂(第1面土坑群2)
29.	第1b層	5Y 8/3 淡黄色	微砂～粗砂(ラミナあり)
30.	第1b層	5Y 7/1 灰白色	粗砂～礫(径3cmまでの礫を含む。ラミナあり)
31.	第1b層	10Y 8/1 灰白色	細砂～粗砂(ラミナあり)
32.	第1b層	10G 6/1 緑灰色	シルト～微砂(東方では粗砂層を挟む)
33.	第1b層	10GY 6/1 緑灰色	シルト～細砂(溢流堆積)
34.	第1b層	10G 5/1 緑灰色	シルト～微砂
35.	第1b層	7.5Y 8/1 灰白色	シルト～細砂(ラミナあり。下層に部分的に溢流堆積が見られる)
36.	第1b層	2.5Y 8/1 灰白色	粗砂(ラミナあり。底部に5BG 6/1 青灰色 シルト。溢流堆積か)
37.	第2a層	5B 5/1 青灰色	粗砂混じり粘土(東方から第2面1-34畦畔までに供給された洪水砂を攪拌している。部分的には攪拌が非常に弱い所もある)
38.	第2a層	10G 5/1 緑灰色	粘土～シルト(若干攪拌されている部分あり。36の供給前の泥質な堆積か)
39.	第2a層	5BG 5/1 青灰色	粘土～粗砂(第2面1-34畦畔盛土。ブロック土含む)
40.	第2a層	5BG 6/1 青灰色	粘土～シルト(第2面1-38畦畔盛土。ブロック土含む)
41.	第2a層	5BG 5/1 青灰色	粘土(第2面1-38畦畔盛土。ブロック土含む)
42.	第2a層	5BG 5/1 青灰色	シルト(部分的に攪拌を受ける)
43.	第2a層	5BG 5/1 青灰色	粘土(第2面の耕作痕跡内埋土。底部に明青灰色粘土がレンズ状に堆積)
44.	第2a層	10GY 5/1 緑灰色	礫混じり粗砂
45.	第2a層	7.5GY 5/1 緑灰色	シルト混じり粗砂～細砂
46.	第2a層	10GY 5/1 緑灰色	シルト混じり粗砂
47.	第2a層	10GY 5/1 緑灰色	シルト混じり粗砂
48.	第2a層	7.5GY 6/1 緑灰色	微砂～粗砂
49.	第2a層	10G 6/1 緑灰色	粗砂～微砂(ブロック土多く。攪拌弱い)
50.	第2a層	10G 6/1 緑灰色	微砂～粗砂(部分的にラミナあり)
51.	第2a層	10Y 5/1 灰色	粗砂～細砂(ブロック土多い)
52.	第2a層	5Y 6/2 灰オリーブ色	細砂～粗砂
53.	第2a層	10Y 6/1 灰色	シルト～粗砂
54.	第2a層	7.5Y 7/1 灰白色	シルト～粗砂(部分的にラミナあり)
55.	第2a層	10Y 6/2 オリーブ灰色	細砂～粗砂
56.	第2a層	10BG 5/1 青灰色	粘土～粗砂
57.	第2a層	10BG 6/1 青灰色	シルト～微砂(わずかに粗砂含む。ブロック土多い。第1a-5層の可能性あり)
58.	第2a層	10BG 6/1 緑灰色	粘土～粗砂(第2面1-31・4-13畦畔交点盛土。ブロック土多く混じる)
59.	第2a層	10BG 6/1 青灰色	シルト～細砂(わずかに粗砂混じる。ブロック土多い)
60.	第2a層	10BG 5/1 青灰色	粗砂混じり粘土(部分的な落ち込みか)
61.	第2a層	10BG 5/1 青灰色	粘土～シルト
62.	第2a層	55に近似するが、砂質強い	
63.	第2a層	10BG 6/1 青灰色	粗砂混じりシルト(畦畔直下に部分的に残存する層)
64.	第2a層	5BG 6/1 青灰色	細砂～粗砂(第2面4-7畦畔盛土。ブロック土多い)
65.	第2a層	5Y 5/1 灰色	シルト～粗砂(締まり良い。下面に踏み込みと見られる痕跡があり、細～粗砂が入る)
66.	第2a層	5Y 6/2 灰オリーブ色	シルト～粗砂
67.	第2a層	5BG 6/1 青灰色	シルト～微砂(溢流堆積)
68.	第2a層	2.5Y 6/1 黄灰色	粗砂～細砂(ブロック土多い)
69.	第2b層	5Y 8/1 灰白色	粗砂と10GY 5/1 緑灰色 細砂～シルトの互層
70.	第2a層	10G 5/1 緑灰色	細砂～粗砂
71.	第2a層	5BG 5/1 青灰色	粗砂～細砂(70より粗粒)
72.	第2a層	7.5GY 5/1 緑灰色	粗砂～細砂
73.	第2a層	10BG 6/1 青灰色	微砂～細砂に5Y 8/2 灰白色 粗砂が混じる(第2面3-35畦畔盛土)
74.	第2a層	5Y 8/1 灰白色	粗砂(足跡(牛))
75.	第2a層	10GY 6/1 緑灰色	微砂～粗砂(48より粗粒)
76.	第2a層	7.5GY 5/1 緑灰色	粗砂～細砂(ブロック土多い。下方に粗砂ブロック多い)
77.	第2a層	10CY 6/1 緑灰色	粗砂～粗砂に5Y 8/2 灰白色 粗砂が混じる(ブロック土多く、攪拌弱い)
78.	第2b層	5Y 8/1 灰白色	粗砂～細砂
79.	第2b層	10GY 7/1 明緑灰色	細砂～シルト(溢流堆積)
80.	第2a層	7.5GY 5/1 緑灰色	礫混じり粗砂

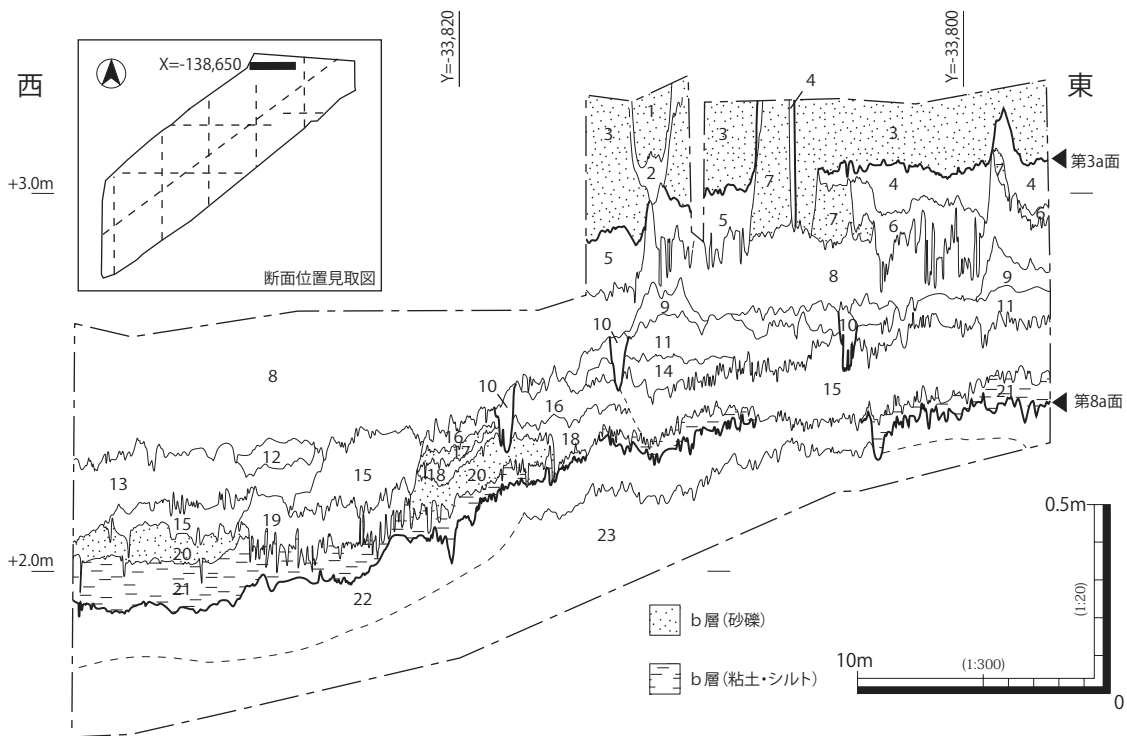
81.	第2b層	5Y 8/1 灰白色	粗砂～細砂(ラミナ顕著)
82.	第2b層	10GY 8/1 明緑灰色	微砂～粗砂(ラミナあり。下方に溢流堆積あり)
83.	第2b層	5Y 8/2 灰白色	粗砂～細砂(第2面3-35畦畔の芯。ラミナあり。上方粗粒化)
84.	第2b層	5Y 8/1 灰白色～8/3 淡黄色	礫～細砂(径4cm程度の礫含む。ラミナ顕著。破堤堆積)
85.	第2b層	5Y 8/1 灰白色～8/3 淡黄色	粗砂～細砂(部分的にラミナあり。下面に部分的に溢流堆積と見られる層が残存する。破堤堆積)
86.	第2b層	5Y 8/1 灰白色～8/3 淡黄色	礫～細砂(ラミナ顕著。破堤堆積)
87.	第2b層	10Y 8/1灰白色	細砂～粗砂と10GY 6/1緑灰色 粘土～シルトの互層(ラミナあり。破堤堆積)
88.	第2b層	5Y 8/2 灰白色	粗砂～細砂(ラミナあり。破堤堆積)
89.	第2b層	10GY 7/1 明緑灰色	シルト(わずかに微砂混じる。破堤堆積)
90.	第2b層	10GY 7/1 明緑灰色	シルト(ラミナあり。溢流堆積)
91.	第2b層	5BG 6/1 青灰色～7/1 明青灰色	シルト～細砂(上方粗粒化。溢流堆積)
92.	第2b層	5BG 6/1 青灰色	シルト～微砂(ラミナあり。上方細粒化。溢流堆積)
93.	第2b層	10GY 5/1 緑灰色	シルト～細砂(溢流堆積)
94.	第3a層	5BG 6/1 青灰色	シルト～微砂(わずかに粘土含む)
95.	第3a層	10BG 5/1 青灰色	粘土～シルト(第2a層に近似するが、より細粒)
96.	第3a層	10GY 7/1 明緑灰色	シルト～微砂(ブロック土多い。部分的にラミナあり。西方ほど細粒化し、粘土が混じる)
97.	第3a層	10GY 6/1 緑灰色	粗砂混じり粘土(粘質強い。畦畔際などで90に浸食され無くなる)
98.	第3a・4a層	5BG 5/1 青灰色	粗砂混じりシルト～粘土
99.	第3a層	5BG 5/1 青灰色	粗砂～粘土(締まり良い)
100.	第3a・4a層	7.5GY 4/1 暗緑灰色	粗砂～細砂
101.	第3a層	10GY 5/1 緑灰色	粗砂～粘土(締まり良い)
102.	第3a層	10GY 5/1 緑灰色	細砂～粗砂(ブロック土多い)
103.	第3a・4a層	5Y 4/1 灰色～7/2 灰白色	粗砂(ブロック土多い)
104.	第3a・4a層	5BG 6/1 青灰色	粘土～粗砂
105.	第3a・4a層	10G 5/1 緑灰色	粗砂～微砂(攪拌強く、締まりが良い)
106.	第3a・4a層	10GY 5/1 緑灰色	粗砂混じりシルト
107.	第3a・4a層	10GY 5/1 緑灰色	シルト～粗砂
108.	第4a層	5BG 6/1 青灰色	粗砂～粗砂に5Y 8/2 灰白色 粗砂が混じる(ブロック土多い。下層を巻き上げるが、攪拌弱い)
109.	第3a・4a層	5Y 4/1 灰色	粘土混じり粗砂～細砂(下層の第5a層がブロック状に入る)
110.	第4a層	5BG 5/1 青灰色	粗砂混じりシルト(締まり良い)
111.	第4a層	5BG 5/1 青灰色	粗砂～粘土に5Y 8/1 灰白色 粗砂が混じる(ブロック土多い)
112.	第4a層	5BG 5/1 青灰色	粗砂に5Y 8/4 淡黄色 極粗砂～粗砂が混じる
113.	第4a層	5BG 5/1 青灰色	粘土～粗砂(122のブロック土多く含む)
114.	第3a層	7.5GY 6/1 緑灰色	粗砂混じり粘土(第3面5-28畦畔盛土)
115.	第3a層	5BG 6/1 青灰色	シルト～微砂(わずかに粘土含む)
116.	第4a層	5BG 5/1 青灰色	粗砂混じり粘土
117.	第3a・4a層	5BG 6/1 青灰色	粘土～微砂
118.	第4a層	10BG 5/1 青灰色	粘土～シルト(炭化した植物系根多く入る)
119.	第4a層	10Y 4/1 灰色	粗砂～細砂
120.	第4b層	5BG 7/1 明青灰色	細砂～シルトと5Y 8/1 灰白色 粗砂の互層
121.	第4b層	5Y 8/1 灰白色	粗砂～細砂(ラミナあり)
122.	第4b層	2.5Y 8/1 灰白色	細砂～粗砂(ラミナあり)
123.	第4b層	10BG 6/1 青灰色	粘土～微砂(溢流堆積、121と同時供給)
124.	第4b層	5BG 6/1 青灰色	粘土～シルト(溢流堆積)
125.	第4b層	5BG 6/1 青灰色	粘土(溢流堆積。122と同時供給)
126.	第5a層	5B 5/1 青灰色	シルト混じり粘土(炭酸鉄の結核を多く含む)
127.	第5a層	5BG 5/1 青灰色	粗砂混じり粘土～シルト
128.	第5a層	5BG 6/1 青灰色	粗砂混じり粘土
129.	第5a層	5BG 6/1 青灰色	細砂～粗砂(ブロック状の粗砂が下部に多く見られる)
130.	第5a層	10BG 5/1～6/1 青灰色	粗砂混じりシルト(西方ほど粘質強い)
131.	第5a層	5BG 6/1 青灰色～10BG 6/1 青灰色	粗砂～粘土(下方ほど粗粒でグライ化が強く、ブロック土多い)
132.	第5a層	10BG 5/1 青灰色	粗砂混じり粘土
133.	第5a層	5BG 5/1 青灰色	粗砂混じり粘土
134.	第6a層	2.5Y 6/1 黄灰色	粗砂混じりシルト
135.	第5a・6a層	5Y 5/1 灰色	粗砂混じりシルト～細砂
136.	第5a層	5BG 6/1 青灰色	粗砂混じり粘土(128よりも粗砂少ない)
137.	第5・6面坪境	5BG 6/1 青灰色	粘土～粗砂(第5面坪境畦畔盛土。ブロック土多い)
138.	第5a層	10BG 6/1 青灰色	粗砂混じり粘土
139.	第5a・6a層	10BG 6/1 青灰色	粘土混じり粗砂(締まり良い。部分的に緑変している)
140.	第6a層	10BG 6/1 青灰色	粗砂～微砂(ブロック土多い)
141.	第6a層	2.5Y 6/2 灰黄色	粗砂～粘土(第6b層を攪拌した第6a層か)
142.	第5・6面坪境	5BG 6/1 青灰色	粗砂混じり粘土(第5面坪境畦畔盛土)
143.	第5・6面坪境	10BG 6/1 青灰色	粘土(第5面坪境畦畔盛土。わずかに粗砂含む)
144.	第5・6面坪境	10BG 6/1 青灰色	細砂～粗砂(第6b面4-29溝(坪境)埋土。灰白色の細砂～粗砂ブロックが多く混じる)
145.	第5a層	10BG 6/1 青灰色	粗砂混じり粘土(143に近似。第6b面4-29溝(坪境)に伴う堤盛土か)
146.	第6a層	10BG 5/1 青灰色	粗砂混じり粘土(層上方の緑変著しい)
147.	第6a層	5GY 5/1 オリーブ灰色	粘土～粗砂(ブロック土多く含む)
148.	第6a層	10BG 5/1 青灰色	粘土(わずかに粗砂混じる)
149.	第6a層	10BG 6/1 青灰色	粗砂混じり粘土(146より緑変強く、粘質強い)
150.	遺構埋土	5Y 8/2 灰白色	細砂(第6b面小溝埋土。ラミナあり)
151.	第6b層	10BG 5/1 青灰色	細砂混じり粘土(黒色化した植物遺体が層状に入る)
152.	第6a層	5Y 5/2 灰オリーブ色	粘土混じり粗砂(ブロック土多い)
153.	第6b層	10BG 5/1 青灰色	微砂混じり粘土
154.	第6b層	10BG 4/1 暗青灰色～5/1 青灰色	粘土(層下方に黒変した植物遺体含む)
155.	第6a層	154に近似するが、わずかに粗砂が混じる	
156.	第6b層	10BG 4/1 暗青灰色	粘土(黒色化した植物遺体が層状に含まれる)
157.	第6b層	5B 6/1 青灰色	粘土(下層を巻き上げるが攪拌弱い)
158.	第6b層	10BG 4/1 暗青灰色	粘土(炭化物多く含む)
159.	第6b層	7.5GY 8/1 明緑灰色	粘土
160.	第7a-1層	5Y 5/1 灰色	粗砂混じり粘土

161.	第7a-1層	5BG 5/1 青灰色	粗砂混じり粘土
162.	第7a-1層	10G 5/1 緑灰色	粘土～粗砂
163.	第7a-1層	10GY 4/1 暗緑灰色	粘土～粗砂(162より粘質強い。東方に粗粒化)
164.	第7a-1層	5Y 5/1 灰色	粗砂～粘土(古代条里水田耕作土)
165.	第7a-1層	2.5Y 5/1 黄灰色	シルト混じり粗砂(ブロック土・遺物多い)
166.	第7a-1層	5Y 4/1 灰色	シルト混じり粗砂(上方緑色化)
167.	第7a-1層	5BG 5/1 青灰色	粘土～粗砂(遺物を多く含む)
168.	第7a-1層	7.5GY 6/1 緑灰色	粗砂～粘土
169.	第7a-1層	5BG 6/1 青灰色	粗砂混じり粘土(緑変著しい)
170.	第7a-1層	5Y 4/1 灰色	粘土混じり粗砂(部分的に粘土帯が通る場所があり、段差際の堆積層(b層)の可能性がある)
171.	第7a-1層	5Y 4/1 灰色	粘土混じり粗砂(ブロック土・遺物多い。坪境畦畔盛土か)
172.	第7a-1層	161に近似するが粗砂少ない(下方の第7b層(197)が火焰状に食い込む。古墳時代の地震によるものか)	
173.	遺構埋土	2.5Y 4/1 黄灰色	細砂(上面にブロック土あり。炭化物多く含む。ビット埋土)
174.	遺構埋土	5Y 5/1 灰色	細砂～粗砂(ブロック土多く含む。ビット埋土)
175.	第7a-1層	5BG 6/1 青灰色	粗砂混じり粘土(第7b面の耕作痕跡埋土。200がブロック状に混じる)
176.	第7b面坪境	5BG 4/1 暗青灰色	粘土～粗砂(粘土ブロック多く含む。2・94坪境埋土)
177.	第7a-2層	10Y 3/1 オリーブ黒色～4/1 灰色	シルト混じり粗砂(ブロック土・遺物多い)
178.	第7a-2層	7.5Y 4/1 灰色	シルト混じり粗砂(ブロック土・土器多く含む)
179.	第7a-2層	10BG 4/1 暗青灰色	粗砂混じり粘土
180.	第7a-2層	10GY 5/1 緑灰色	粘土混じり粗砂～微砂(上方ほど粗粒で緑変著しい)
181.	遺構埋土	7.5Y 5/1 灰色	粗砂～細砂
182.	遺構埋土	5Y 7/2 灰白色	粗砂混じり細砂(第7b面5-712ビット内の柱痕跡)
183.	遺構埋土	10Y 5/1 灰色	粗砂混じり粘土(第7b面1-59溝埋土。ブロック土多く混じる。径10～50mmの白色粘土塊を球状に含む。埋戻し土)
184.	遺構埋土	7.5GY 5/1 緑灰色～4/1 暗緑灰色	粗砂混じり粘土(第7b面1-59溝埋土。上方ほど暗色化。機能時の堆積層)
185.	遺構埋土	5GY 4/1 暗オリーブ灰色	粘土(第7b面1-59溝埋土。径3～15mmの白色粘土を球状に含む。溝肩の崩落土か)
186.	遺構埋土	7.5CY 4/1 暗緑灰色	粗砂混じり粘土(第7b面1-60溝埋土。径10mm以下の白色粘土を球状に含む。埋戻し土)
187.	遺構埋土	186に近似するが、砂質が強く、白色粘土塊 目立たない(第7b面1-60溝埋土)	
188.	第7b-1層	10BG 6/1 青灰色	粘土(ブロック土やや含む。耕作前の踏み込み等による攪拌か)
189.	第7b-1層	10BG 5/1 青灰色	粘土(黒色化した植物遺体を含む。古墳前期(第7b面1-62溝)以降の堆積)
190.	遺構埋土	5GY 4/1 暗オリーブ灰色	粗砂混じり粘土(第7b面1-62溝埋土。第7b-2層がブロック状に入る。埋め戻し土)
191.	遺構埋土	10GY 5/1 緑灰色	シルト～粘土(第7b面1-62溝埋土。植物遺体含む。溝廃棄後の堆積層か)
192.	遺構埋土	7.5GY 5/1 緑灰色	シルト～粘土(第7b面1-62溝埋土。植物遺体を層状に含む。崩落土か)
193.	遺構埋土	5CY 4/1 暗オリーブ灰色	極粗砂混じり粘土(第7b面1-62溝埋土。層中、層上面に遺物・炭化物を含む。溝機能時の堆積層か)
194.	第7b層	2.5Y 8/4 淡黄色	粗砂
195.	第7b層	10BG 6/1～5/1 青灰色	シルト～粘土(黒色化した植物遺体が層状に入る。上方細粒化。弥生末～古墳初頭の砂礫(202～207)供給以降に調査区ほぼ全域に堆積した細粒の堆積物)
196.	第7b層	5G 4/1 暗緑灰色	粘土(黒色化した植物遺体多く含む。弥生末～古墳初頭の砂礫供給以降に調査区ほぼ全域に堆積した細粒の堆積物)
197.	第7b層	10GY 6/1 緑灰色	粘土(黒色化した植物遺体を層状に含む。弥生末～古墳初頭の砂礫供給以降に調査区ほぼ全域に堆積した細粒の堆積物。上方は火焰状の巻き上がりが顕著で、地震動による変形ゾーンを構成する)
198.	第7b-2層	10G 7/1 明緑灰色	粘土(上方やや暗色化。弥生末～古墳初頭の砂礫供給以降に調査区ほぼ全域に堆積した細粒の堆積物)
199.	第7b-3層	5CY 5/1 オリーブ灰色	粘土(下層を巻き上げる。有機物多く含む。弥生末～古墳初頭の砂礫供給以降に調査区ほぼ全域に堆積した細粒の堆積物)
200.	第7b層	7.5Y 6/2 灰オリーブ色	粘土～微砂(緑変著しく、本来の色は不明)
201.	第7a層	5BG 4/1 暗青灰色	粘土混じり粗砂(西方ほど粗粒)
202.	第7b層	10GY 7/1 明緑灰色	微砂～細砂と5Y 8/1 灰白色 粗砂の互層
203.	第7b層	10GY 5/1 緑灰色	粗砂混じり微砂～粘土
204.	第7b層	10BG 4/1 暗青灰色	粘土(203に対応か)
205.	第7b層	10BG 6/1～5/1 青灰色	粗砂～シルト(径2cm程度の礫を含む)
206.	第7b層	10GY 6/1 緑灰色	粗砂混じり細砂(上方と下方に粘土帯あり)
207.	第7b層	5Y 8/1 灰白色	粗砂～細砂(部分的にラミナあり)
208.	第7b層	5BG 5/1 青灰色	粗砂混じり粘土(下方ほど粗粒)
209.	第7b層	5Y 8/1 灰白色	極粗砂～粗砂(ラミナあり。径1cm程度の礫を含む。古墳初頭の遺物を含む)
210.	第7b層	10Y 4/1 灰色	粘土～シルト(黒色化した植物遺体が層状に入る)
211.	第7b層	2.5Y 7/3 浅黄色	極粗砂～細砂

235.	第8a-1層	10GY 4/1 暗緑灰色～5/1 緑灰色 粗砂～シルト(弥生中期水田耕作土)
236.	第8a層	10GY 3/1 暗緑灰色 シルト～粗砂(粘土ブロック含む。弥生中期居住域に伴う包含層)
237.	第8a層	10G 4/1 暗緑灰色 粘土～粗砂(弥生中期居住域に伴う包含層)
238.	第8a層	10GY 3/1 暗緑灰色 細砂～粗砂(石英が目立ち、締まり良い。高まり上の古土壌)
239.	第8a-1層	10GY 4/1 暗緑灰色 粘土～粗砂(ブロック土多い。第8a面畦畔盛土)
240.	第8a-1層	10G 3/1 暗緑灰色 粘土～粗砂(ブロック土多い。第8a面畦畔盛土)
241.	遺構埋土	2.5Y 6/2 灰黄色 粗砂(第8b面5-991溝埋土)
242.	遺構埋土	10GY 4/1 暗緑灰色 粗砂混じりシルト(第8b面5-991溝埋土)
243.	遺構埋土	5Y 8/2 灰白色 粗砂～極粗砂(第8b面5-991溝埋土)
244.	遺構埋土	10GY 4/1 暗緑灰色 粗砂～シルト(第8b面5-991溝埋土)
245.	遺構埋土	10G 3/1 暗緑灰色 粗砂～粘土(第8b面3-267・268溝埋土)
246.	遺構埋土	10GY 3/1 暗緑灰 粗砂～粘土(第8b面3-267・268溝埋土)
247.	遺構埋土	10GY 4/1 暗緑灰色 粘土～粗砂(第8b面3-267・268溝埋土)
248.	遺構埋土	5Y 6/2 灰オリーブ色 粗砂～極粗砂(第8b面3-267・268溝埋土)
249.	遺構埋土	10GY 4/1 暗緑灰色 粘土～シルト(第8b面4-128溝埋土)
250.	第8a-2層	10GY 4/1 暗緑灰色 粘土混じり極粗砂(遺物を含む。弥生前期包含層)
251.	第8a層(8a-2)	10BG 3/1 暗青灰色 粗砂～シルト(締まり良い。弥生前期包含層)
252.	第8a層(8a-2)	10Y 3/1 オリーブ黒色 シルト混じり粗砂～細砂
253.	第8a-2層	10GY 3/1 暗緑灰色 微砂～粗砂(粘土ブロック含む)
254.	第8a層	5Y 5/1 灰色 粗砂～微砂(古土壌。上方細粒化。直上層の水田耕作土の影響で255が土壌化したものか)
255.	第8b-1層	5Y 8/4 淡黄色～7/2 灰白色 粗砂～細砂(上方粗粒化。ラミナあり)
256.	遺構埋土	5Y 8/3 淡黄色～7/1 灰白色 粗砂～細砂(ラミナあり。下方で砂層を巻き上げる)
257.	第8a層	5Y 6/1 灰色 粗砂～細砂(古土壌。254より締まり良く、土壌化している)
258.	第8b-1層	5Y 8/2 灰白色 粗砂～細砂(ラミナあり)
259.	第8b層	5GY 7/1 明オリーブ灰色～10GY 6/1 緑灰色 細砂～粗砂(わずかに粘土ブロック含む)
260.	第8b-1層	5BG 5/1 青灰色 粗砂混じり粘土(下方ほど砂質強い)
261.	第8a-2層	10GY 4/1 暗緑灰色～5/1 緑灰色 シルト～粗砂(上方細粒化。粘質強い)
262.	第8a-2層	10GY 4/1 暗緑灰色 粘土混じり粗砂 (267の堆積の薄い場所ので270を巻き込んで土壌化したものか)
263.	第8b-2層	5BG 5/1 青灰色 粘土～微砂(わずかに粗砂混じる)
264.	第8b-2層	5BG 5/1 青灰色 粘土～微砂(わずかに粗砂混じる)
265.	第8b-2層	10GY 6/1 緑灰色 粘土～シルト
266.	第8b-2層	7.5GY 4/1 暗緑灰色～10G 7/1 明緑灰色 粘土 (上方暗色化。堆積速度が落ち、有機物の含有量が増えたためか)
267.	第8b-2-2層	5Y 5/2 灰オリーブ色 粗砂～細砂(ラミナ見えないが、部分的に供給された粗粒の氾濫堆積物。261の母材)
268.	第8b-2-2層	5Y 8/1 灰白色 細砂～粗砂(わずかに粘土ブロック含む)
269.	第8b-2-3層	7.5GY 7/1 明緑灰色 シルト～粘土
270.	第8b-2-3層	7.5GY 7/1 明緑灰色～10GY 5/1 緑灰色 粘土～シルト (267の供給が少ない場所ので上方が土壌化の影響を受けているもの。上方暗色化)
271.	第8b-3層	5G 4/1 暗緑灰色～7/1 明緑灰色 粘土(上方暗色化)
272.	第8b-3層	10GY 8/1 明緑灰色～5/1 緑灰色 シルト～粘土(上方暗色化・細粒化)
273.	第8b-3層	5BG 5/1 青灰色～3/1 暗青灰色 粘土(上方暗色化)
274.	第8b-3層	10GY 3/1 暗緑灰色 シルト混じり粗砂～細砂
275.	第8b-3層	5Y 6/1 灰色 粗砂～極粗砂
276.	第8b-4層	10G 4/1 暗緑灰色～7/1 明緑灰色 粘土(上方暗色化)
277.	第8b-4層	10GY 7/1 明緑灰色～4/1 暗緑灰色 粘土～シルト(上方暗色化。少量の炭化物含む)
278.	第8b-4層	10BG 5/1 青灰色～3/1 暗青灰色 粘土(上方暗色化)
279.	第8b-4-1層	10GY 4/1 暗緑灰色～5/1 緑灰色 粘土
280.	第8b-4-2層	10GY 7/1 明緑灰色 粗砂～極粗砂(ラミナは見えない)
281.	第8b-4-3層	10GY 7/1 明緑灰色～6/1 緑灰色 粘土
282.	第8b-4-1層	10GY 7/1 明緑灰色～4/1 暗緑灰色 粘土～シルト(上方暗色化)
283.	第8b-4-2層	5Y 7/1 灰白色 粗砂
284.	第8b-4-3層	10GY 7/1 明緑灰色 粘土
285.	第8b-4-4層	7.5Y 8/1～8/2 灰白色 極粗砂～細砂(部分的にシルト～微砂帯あり)
286.	第8b-4-5層	10GY 4/1 暗緑灰色 粗砂混じりシルト
287.	第8b-4-5層	10GY 6/1 緑灰色 粗砂混じりシルト
288.	第8a'(8b-4-4)層	5BG 5/1 青灰色～10Y 5/2 オリーブ灰色 粘土～極粗砂 (上方緑変著しい。複数の古土壌が含まれる。285～286が土壌化したもの)
289.	第8a'(8b-4-4)層	10GY 5/1 緑灰色 粗砂混じり粘土(西方ほど粗粒。285～286が土壌化したもの)
290.	第8a'(8b-4-4)層	5BG 5/1 青灰色～7.5GY 5/1 緑灰色 粗砂混じり粘土(上方細粒化。緑変著しい。285～286が土壌化したもの)
291.	第8b層	10BG 5/1 青灰色～5Y 7/2 灰白色 極粗砂～粗砂(縄文晩期自然流路。上方細粒化。ラミナあり)
292.	第8b-4-6層	10GY 6/1 緑灰色 細砂～粗砂(294上面が土壌化したもの)
293.	第8b-4-6層	5BG 5/1～6/1 青灰色 粗砂～細砂(上面やや土壌化。最下方にシルト帯あり)
294.	第8b-4-6層	5Y 8/1 灰白色～6/1 灰色 極粗砂～粗砂(ラミナ顕著。層厚の薄い所では細砂～微砂も見られる)
295.	第8b-4-6層	5Y 7/1 灰白色 粗砂
296.	第8b-4-7層	10GY 7/1 明緑灰色 粘土～シルト(黒色化した植物遺体を層状に含む)
297.	第8b-5層	10GY 3/1～4/1 暗緑灰色 粘土～シルト(上方暗色化。わずかに粗砂混じる。東方ほど粗砂多い)
298.	第8b-5層	5BG 5/1 青灰色～3/1 暗青灰色 粘土(上方暗色化)
299.	第8b-5層	10BG 6/1 青灰色～4/1 暗青灰色 粘土～シルト(上方暗色化)
300.	第8b-5層	10GY 7/1 明緑灰色～4/1 暗緑灰色 粘土～シルト(上方暗色化。少量の炭化物含む)
301.	第8b-5層	7.5GY 8/1 明緑灰色 シルト(300下方に広範囲で見られる堆積層(下層シルト))
302.	第8b-6層	10GY 7/1 明緑灰色～4/1 暗緑灰色 粘土(上方暗色化。少量の炭化物含む)
303.	第8b-6層	10GY 7/1 明緑灰色～5/1 緑灰色 粘土(上方ほど暗色化)
304.	第8b-6層	5BG 6/1 青灰色～4/1 暗青灰色 粘土(上方暗色化)
305.	第8a'(8b-6)層	10BG 3/1 暗青灰色～5/1 青灰色 粗砂混じり粘土(上方暗色化。古土壌)
306.	第8a'(8b-6)層	5BG 3/1 暗青灰色 粘土～粗砂(東方ほど粗粒)
307.	第8a'(8b-6)層	5BG 3/1 暗青灰色 極粗砂～細砂(古土壌)
308.	第8a'(8b-6)層	10BG 3/1 暗緑灰色 小礫混じり粗砂(径1 cm程度の礫を含む)
309.	第8b-6層	10GY 6/1 緑灰色 シルト～粘土
310.	第8b-7層	5BG 6/1 青灰色～4/1 暗青灰色 粘土(上方暗色化。少量の炭化物含む)
311.	第8b-7層	10BG 4/1 暗青灰色～6/1 青灰色 シルト混じり粘土(上方暗色化。黒色化した植物遺体含む)

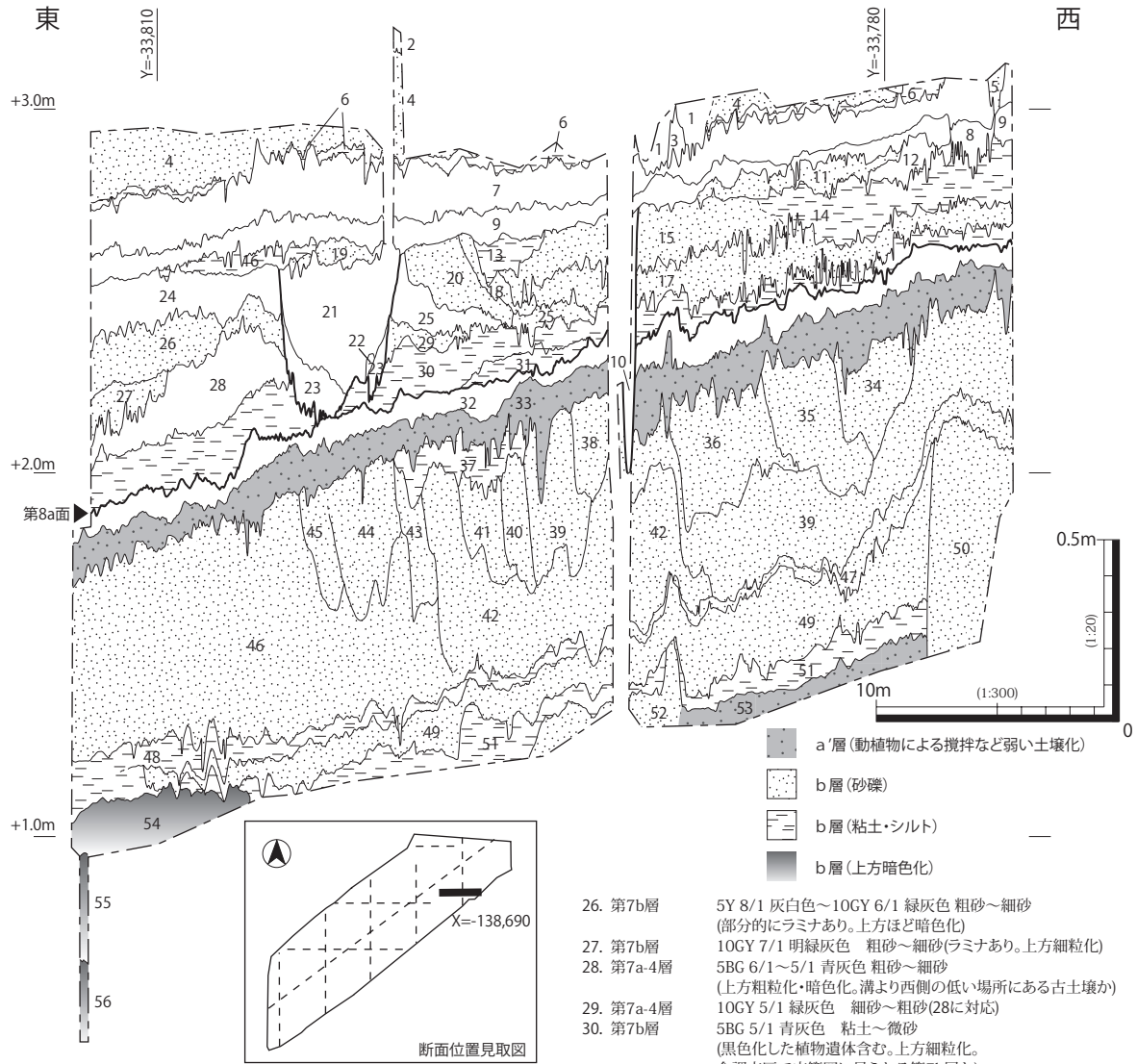
312.	第8b-7-1層	10GY 6/1～5/1 緑灰色 シルト～粘土(上方暗色化。細粒化)
313.	第8b-7層	10BG 4/1 暗青灰色 シルト～粘土
314.	第8b-7層	10GY 4/1 暗緑灰色 粘土～シルト
315.	第8b-7層	10GY 6/1 緑灰色 粗砂混じり粘土
316.	第8b-7層	10GY 7/1 明緑灰色 粘土～シルト
317.	第8b-7層	10GY 4/1 暗緑灰色 粘土～シルト(わずかに粗砂混じる)
318.	第8b-7-1層	10GY 6/1 緑灰色 シルト～粘土(上方細粒化。縄文後～晩期の流路の堆積物)
319.	第8b-7-2層	5Y 8/1 灰白色 細砂～極粗砂(ラミナあり。下方にシルト帯あり。上方粗粒化。縄文後～晩期の流路の堆積物)
320.	第8b-7-2層	5GY 8/1 灰白色 細砂に10GY 5/1 緑灰色 シルトが混じる(縄文後～晩期の流路の堆積物)
321.	第8b-7-2層	5Y 8/1 灰白色 細砂～極粗砂(ラミナあり。縄文後～晩期の流路の堆積物)
322.	第8b-7層	10GY 4/1 暗緑灰色 細砂～粘土(上方細粒化)
323.	第8b-7層	5Y 8/1 灰白色 粗砂～細砂(ラミナあり)
324.	第8b-7層	5Y 7/2 灰白色 極粗砂～細砂(上方細粒化。ラミナあり)
325.	第8b-7層	5Y 7/1 灰白色 粗砂と5/1 灰色 シルトの互層
326.	第8b-7層	5GY 6/1～5/1 オリーブ灰色 細砂～粗砂(ラミナは見えない。324・325に対応か)
327.	第8b-7層	10GY 8/1 暗緑灰色 粗砂～細砂
328.	第8a'(8b-7)層	10BG 5/1 青灰色 粗砂～シルト(古土壌)
329.	第8b-7層	7.5GY 8/1 明緑灰色 粗砂
330.	第8b-7層	10GY 6/1 緑灰色 粘土
331.	第8a'(8b-7)層	10GY 4/1 暗緑灰色 粗砂混じり粘土(古土壌)
332.	第8b-7層	10GY 5/1 緑灰色 粗砂～微砂
333.	第8b-7層	10GY 5/1 緑灰色 粗砂～シルト(上方細粒化)
334.	第8b-7層	10Y 8/1 灰白色 粗砂
335.	第8a'(8b-7)層	10G 3/1 暗緑灰色 微砂～粗砂(古土壌。上方細粒化)
336.	第8b-7層	7.5GY 8/1 明緑灰色 粗砂
337.	第8a'(8b-7)層	5G 3/1 暗緑灰色 微砂混じり粗砂(古土壌)
338.	第8b-7層	10GY 7/1 明緑灰色 粗砂
339.	第8b-8層	5BG 6/1 青灰色～5G 7/1 明緑灰色 粘土(上方暗色化)
340.	第8b-8層	5BG 4/1 暗青灰色～6/1 青灰色 粘土(上方暗色化)
341.	第8b-8層	10GY 6/1 緑灰色～4/1 暗緑灰色 粘土～シルト(上方暗色化。さらに分層の可能性あり)
342.	第8b-8層	7.5GY 6/1～5/1 緑灰色 粘土(上方暗色化)
343.	第8b-8層	5BG 4/1 暗青灰色～6/1 青灰色 シルト混じり粘土(上方暗色化。黒色化した植物遺体含む)
344.	第8b-8層	10GY 7/1 明緑灰色～5/1 緑灰色 粘土 (上方暗色化。層の中間にも暗色帯があり、数回にわたって堆積速度が変化している可能性あり)
345.	第8b-9層	10GY 7/1 明緑灰色～5/1 緑灰色 粘土 (上方暗色化。層の中間にも暗色帯があり、数回にわたって堆積速度が変化している可能性あり)
346.	第8b-9層	5BG 4/1 暗青灰色～6/1 青灰色 シルト混じり粘土 (上方暗色化。黒色化した植物遺体含む。層を細分できる可能性あり)
347.	第8b-9層	7.5GY 6/1 緑灰色～4/1 暗緑灰色 粘土～シルト(上方暗色化。下方の360との層界に植物遺体多く含む)
348.	第8b-9層	10GY 4/1 暗緑灰色 粗砂混じり細砂～シルト(古土壌)
349.	第8b-9層	5BG 4/1 暗青灰色～6/1 青灰色 粘土(上方暗色化)
350.	第8b-9層	10BG 3/1 暗青灰色～5G 7/1 明緑灰色 粘土(上方暗色化)
351.	第8b-9層	10BG 4/1 暗青灰色 細砂混じり粘土(黒色化した植物遺体が層状に入る。下層との境界に (7.5Y 8/1 灰白色 シルト～微砂)層を挟む)
352.	第8b-10層	10Y 6/1 灰色 細砂混じり粘土(上層の青灰色粘土がブロック状に入るが、生物擾乱による)
353.	第8b-10層	10GY 4/1 暗緑灰色～5/1 緑灰色 シルト混じり粘土(底面に巣穴と見られる小穴が多数あり。ブロック土含む)
354.	第8b-9層	5Y 8/1 灰白色～10GY 5/1 緑灰色 粗砂～シルト
355.	第8b-10層	10GY 5/1 緑灰色 シルト～粘土(灰白色粘土のブロック土が下方に多く入る)
356.	第8b-10層	5BG 4/1 暗青灰色 粘土(黒色化した植物遺体含む)
357.	第8b-10層	10GY 4/1 暗緑灰色 粘土(植物遺体含む)
358.	第9a層	7.5Y 7/3 浅黄色 シルト～粘土(植物遺体多く含む)
359.	第9a層	5Y 5/3 灰オリーブ色 微砂～シルト (植物遺体(ヨシの地下茎)を多量に含む。層中の植物遺体(草本)のAMS分析では約4000年前との結果が出た)
360.	第9a層	5Y 7/3 浅黄色 粘土～極粗砂(植物遺体(ヨシの地下茎)を多量に含む)
361.	第9a層	5Y 6/2 灰オリーブ色 シルト～粘土(植物遺体多く含む)
362.	第9a層	5Y 7/2 灰白色 シルト混じり粘土(直上層からの生痕多く見られる)
363.	第9a層	5GY 6/1 オリーブ灰色 粘土～微砂
364.	第9a層	10GY 6/1 緑灰色 粘土～シルト (有機物含む。管状の生痕あり。粘土埋土はヨシの地下茎、細砂埋土は動物の巣穴などか(動物)の2種類がある)
365.	第9a層	7.5Y 6/1 灰色 細砂～微砂(有機物を含む。管状に生痕が見られ、生痕内に粗砂)
366.	第9a層	5Y 6/1 灰色 シルト～細砂(植物の根が多く残る)
367.	第9a層	5Y 5/1 灰色 シルト混じり粗砂(植物の根が多く残る)
368.	第9a層	5Y 5/1 灰色 粗砂混じり細砂(植物の根が多く残るが、上層より少ない)
369.	第9a層	5Y 8/1 灰白色 シルト～微砂
370.	第9a層	10GY 5/1 緑灰色 粘土に8/1 明緑灰色 微砂～細砂が混じる(上方細粒化。有機物を多く含む)
371.	第9a層	7.5GY 5/1 緑灰色 粗砂混じり細砂～シルト(上方細粒化)
372.	第9a層	10GY 5/1 緑灰色 シルト混じり細砂～粗砂
373.	第9a層	5Y 7/1 灰白色～6/1 灰色 シルト～細砂(植物遺体多く含む。ヨシの根等)
374.	第9a層	5Y 5/2 灰オリーブ色 粘土混じりシルト(上方粗粒化。植物遺体を層状に含む(上方ほど密))
375.	第9a層	5Y 5/1 灰色 粘土～シルト(植物遺体を含む)
376.	第9a層	5Y 5/1 灰色 細砂～粘土(上方細粒化。植物遺体含む(根が垂直に入る))

図 12 路線中央断割り断面図 4



1. 第1b層 2.5Y 8/1~8/2 灰白色 極粗砂~粗砂(層最下部に5Y 5/1 灰色~7/1 灰白色 粘土~微砂のRGの堆積あり。溢流堆積か)
2. 第2a層 5Y 5/1 灰色 粗砂~極粗砂に灰白のシルトブロック多く含む
3. 第2b層 5Y 8/1 灰白色 極粗砂~粗砂(層最下部に5Y 5/1 灰色~7/1 灰白色 粘土~微砂のRGの堆積あり。溢流堆積か)
4. 第3a層 10G 5/1 緑灰色 シルト~粗砂(径2cmまでの礫を含む。部分的にラミナがあるが、顕著ではない)
5. 第3a層 5Y 7/2~8/2 灰白色 粗砂と10GY 5/1 緑灰色 シルト~細砂のブロック混土
6. 第4a層 5Y 8/3 淡黄色 極粗砂~細砂に10GY 5/1 緑灰色 シルト~細砂ブロックが混じる(径1cm程度の小礫を含む)
7. 第4b層 5Y 8/1 灰白色 極粗砂~細砂(径1cm程度の礫を含む。層最下部に5Y 5/1 灰色~7/1 灰白色 粘土~微砂のRGの堆積あり。溢流堆積か)
8. 第5a・6a層 5BG 5/1 青灰色 粘土~粗砂
9. 第6a層 7.5Y 6/1 灰色 粗砂混じりシルト~粘土
10. 遺構埋土 5Y 6/2 灰オリーブ色 シルト~粗砂(第5a~6a層下面耕作痕跡内埋土。底部に灰白色 細砂の堆積。部分的にラミナあり)
11. 第7a-1層 5Y 5/3 灰オリーブ色 粗砂混じりシルト~粘土
12. 第7a-1層 7.5GY 6/1 緑灰色 粗砂混じりシルト(窪みに溜まった泥土か)
13. 第7a-1層 5Y 6/1 灰色 粗砂~シルト
14. 第7a-1層 5Y 7/3 浅黄色 粗砂混じりシルト
15. 第7a-2層 5Y 6/3 オリーブ黄色 粗砂混じりシルト
16. 第7a-2・3層 5Y 6/2 灰オリーブ色 粗砂混じりシルト
17. 第7a層 5Y 6/1 灰色 粘土混じり粗砂
18. 第7a-3層 5Y 6/3 オリーブ黄色 細砂~粘土
19. 第7a層 16と17の混土
20. 第7b層 5Y 5/1 灰色 極粗砂~粗砂
21. 第7b層 5BG 4/1 暗青灰色 シルト混じり粘土(調査区全域で見られる第7b層(第7b-2層か))
22. 第8a-1層 10GY 4/1 暗緑灰色 粗砂~粘土
23. 第8a-2層 10GY 4/1 暗緑灰色 粘土混じり極粗砂(路線中央断割り250に対応。遺物を含む。弥生前期包含層か)

図 13 X=-138,650 ライン 東西断割り断面図



- |             |   |                 |  |
|-------------|---|-----------------|--|
| 1. 第1bor2b層 | 5Y 8/1 灰白色 礫～粗砂(径4 cm程度の礫を含む浸食砂)                                    | 31. 第7b?層       | 5BG 4/1 暗青灰色 細砂混じり粘土                             |
| 2. 第2a層     | 10GY 5/1 緑灰色 細砂～粗砂  | 32. 第8a-1層      | 10GY 4/1 暗緑灰色 粗砂～シルト(攪拌強い。長石目立つ)                 |
| 3. 第3a・4a層  | 7.5GY 5/1 緑灰色 粗砂～細砂(第3a面島間の田面耕作土)                                   | 33. 第8a'(8b-4)層 | 10GY 3/1 暗緑灰色 粗砂～シルト(下方細粒化。古土壌)                  |
| 4. 第4b層     | 5Y 8/1～8/2 灰白色 細砂～極粗砂(径1.5cm程度の礫を含む)                                | 34. 第8b-4層      | 10GY 7/1 明緑灰色 シルト～細砂                             |
| 5. 第4b層     | 5Y 8/1 灰白色 極粗砂～粗砂(径2 cm程度の礫を含む)                                     | 35. 第8b-4層      | 5Y 7/1 灰白色 極粗砂～粗砂(上方細粒化)                         |
| 6. 第4b層     | 5BG 6/1～5/1 青灰色 粘土とシルトの互層   | 36. 第8b-4層      | 5Y 8/2 灰白色 極粗砂～細砂(上方細粒化)                         |
| 7. 第5a・6a層  | 10GY 6/1～5/1 緑灰色 粘土～粗砂(下方ほど粗粒化・暗色化)                                 | 37. 第8b-4層      | 10GY 5/1～6/1 緑灰色 粗砂混じりシルト(上方暗色化)                 |
| 8. 第7a層     | 10GY 6/1 緑灰色 粗砂～シルト(下層のブロック土を多く含む)                                  | 38. 第8b-4層      | 5Y 7/2 灰白色～7/3 浅黄色 極粗砂～粗砂                        |
| 9. 第7a層     | 10GY 5/1 緑灰色 粗砂～粘土(締まりが良い。径1 cm程度の礫を含む。遺物多く含む。古墳時代の古土壌か)            | 39. 第8b-4層      | 10GY 7/1 明緑灰色 シルト～細砂                             |
| 10. 遺構埋土    | 15, 17, 30, 32の混土。32のブロック土ほど下方に位置する(第7b面3-163ピット埋土)                 | 40. 第8b-4層      | 5Y 7/2 灰白色～7/3 浅黄色 極粗砂～粗砂                        |
| 11. 第7a層    | 7.5Y 5/3 灰オリブ色 粗砂混じり粘土(上方ほど緑色化強い)                                   | 41. 第8b-4層      | 10GY 7/1 明緑灰色 シルト～細砂                             |
| 12. 第7a-2層  | 10GY 4/1 暗緑灰色 粘土混じり極粗砂(径1 cm程度の礫を含む)                                | 42. 第8b-4層      | 5Y 8/2 灰白色 極粗砂～細砂                                |
| 13. 第7b層    | 5GY 5/1 オリブ灰色 シルト～粗砂(上方細粒化・緑色化)                                     | 43. 第8b-4層      | 7.5GY 7/1～8/1 明緑灰色 細砂～粗砂(上方粗粒化)                  |
| 14. 第7b層    | 7.5GY 6/1 緑灰色 シルト～細砂(東方細粒化)   | 44. 第8b-4層      | 7.5GY 7/1 明緑灰色 細砂～粗砂(上方粗粒化)                      |
| 15. 第7b層    | 5Y 8/2 灰白色 粗砂～細砂(ラミナは見えない。16に対応か)                                   | 45. 第8b-4層      | 7.5GY 7/1 明緑灰色 粗砂～細砂(上方粗粒化)                      |
| 16. 第7b層    | 10BG 6/1 青灰色 微砂～シルトと5Y 8/1 灰白色 細砂の互層                                | 46. 第8b-4層      | 5Y 8/1 灰白色～8/3 淡黄色 極粗砂～細砂(ラミナ顕著)                 |
| 17. 第7a層    | 10GY 6/1 緑灰色 粗砂混じりシルト(東方細粒化)  | 47. 第8b-4層      | 10GY 6/1 緑灰色 粘土混じり粗砂(上方に暗色シルト帯被覆する部分あり)          |
| 18. 第7a層    | 10GY 5/1 緑灰色 粘土～粗砂(20の上方が土壌化?19に対応か)                                | 48. 第8b-4層      | 10GY 6/1 緑灰色 粗砂混じり粘土                             |
| 19. 第7a層    | 10GY 4/1 暗緑灰色 粗砂～極粗砂(締まり悪い。21の上方が土壌化したもの。18に対応か)                    | 49. 第8b-4層      | 7.5GY 8/1 明緑灰色 粗砂～微砂(上方細粒化)                      |
| 20. 第7b層    | 10GY 7/1 明緑灰色～5/1 緑灰色 極粗砂～細砂(上方ほど粗粒化・暗色化。21に対応する溝から供給された砂層か)        | 50. 第8b-4層      | 5Y 8/1 灰白色～8/3 淡黄色 極粗砂～細砂(ラミナ顕著。径1 cm程度の礫を上方に含む) |
| 21. 遺構埋土    | 5Y 8/1～8/2 灰白色 極粗砂～細砂(第7b面3-164溝埋土。ラミナ顕著。径2 cm程度の礫を東方に多く含む。20に対応か)  | 51. 第8b-4層      | 10GY 7/1 明緑灰色 粘土～シルト(黒色化した植物遺体を層状に含む)            |
| 22. 遺構埋土    | 5Y 8/1 灰白色 細砂～粗砂(第7b面3-164溝埋土。ラミナあり)                                | 52. 第8b-5層      | 5Y 7/1～8/1 灰白色 極粗砂～粗砂                            |
| 23. 遺構埋土    | 10GY 6/1 緑灰色 粗砂～細砂(第7b面3-164溝埋土。溝掘削時に崩落した26, 28を踏み込んだものか)           | 53. 第8b-5層      | 10GY 3/1 暗緑灰色 粘土混じり粗砂(古土壌)                       |
| 24. 第7a-3層  | 10BG 6/1 青灰色～10G 4/1 暗緑灰色 細砂～粗砂(上方粗粒化・暗色化。この上面で第7b面3-164溝開口か。25に対応) | 54. 第8b-5層      | 10GY 4/1 暗緑灰色～6/1 緑灰色 粘土(わずかに粗砂混じる。上方暗色化)        |
| 25. 第7a-3層  | 10GY 5/1 緑灰色 粗砂～細砂(24に対応)   | 55. 第8b-6層      | 10GY 5/1～6/1 緑灰色 粘土～シルト(わずかに粗砂混じる。上方暗色化)         |
|             |   | 56. 第8b-7層      | 10GY 4/1 暗緑灰色～6/1 緑灰色 粘土(わずかに粗砂混じる。上方暗色化)        |

図 14 X=-138,690 ライン 東西断割り断面図

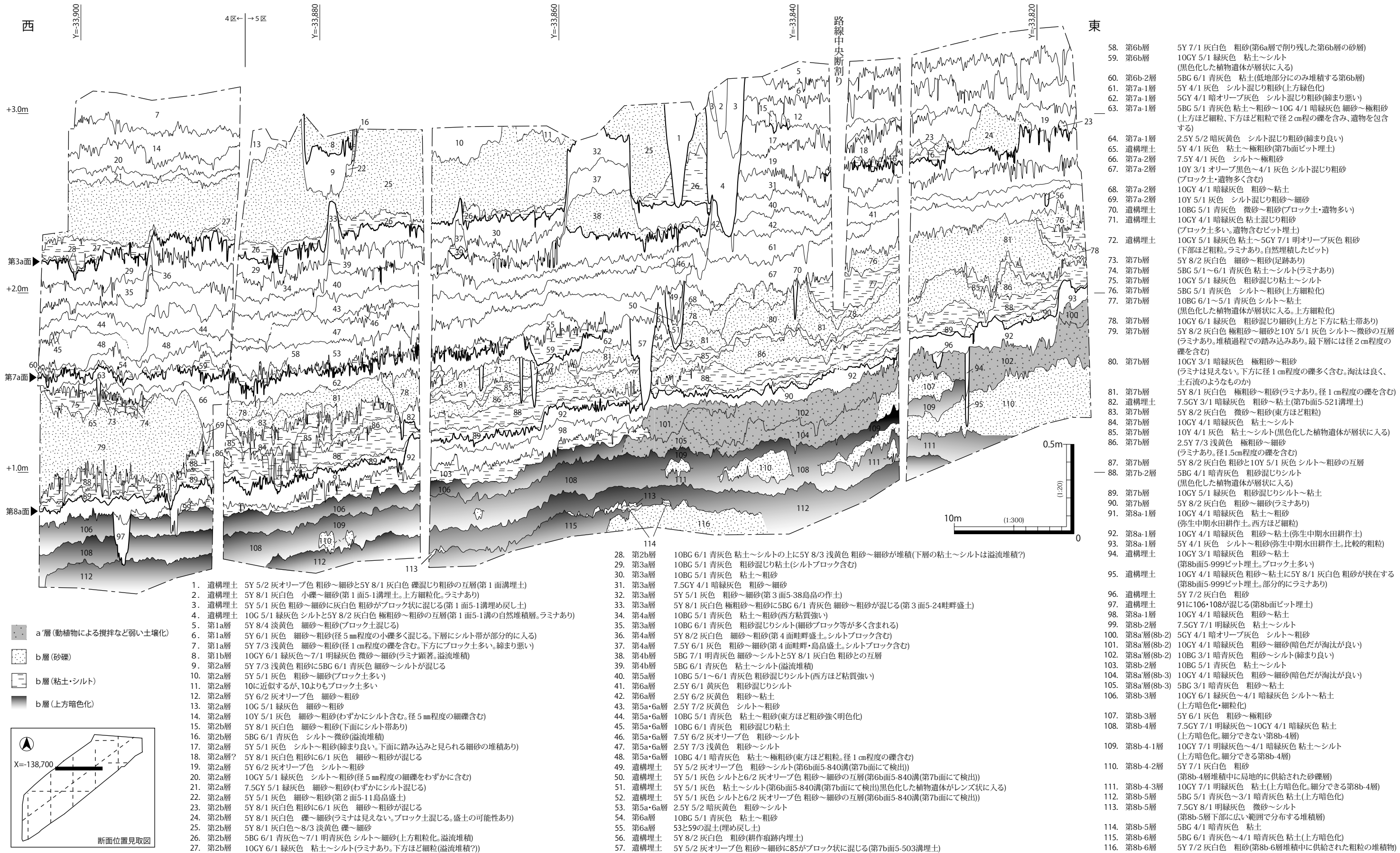


図15 X=138,700ライン 東西断割り断面図



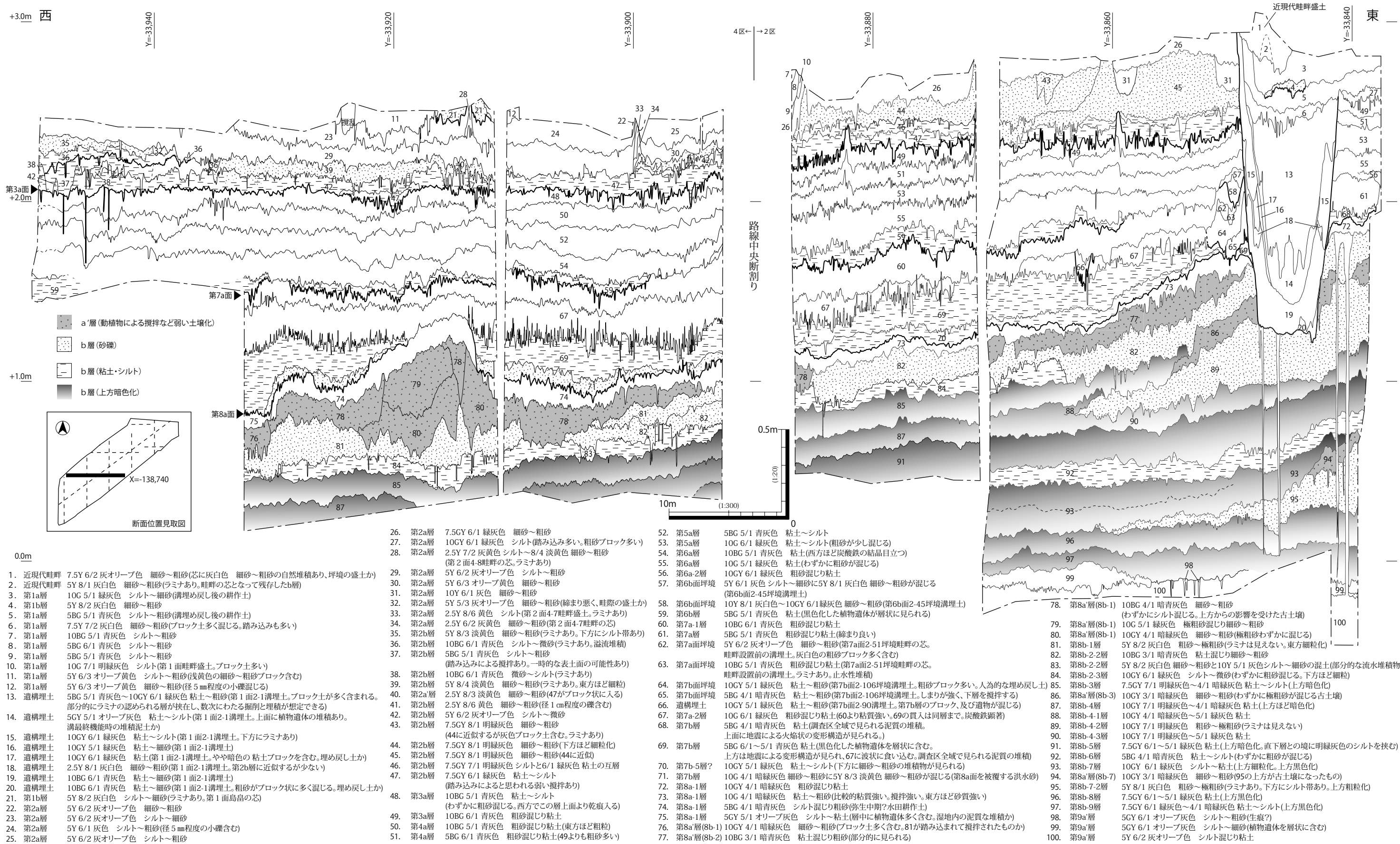
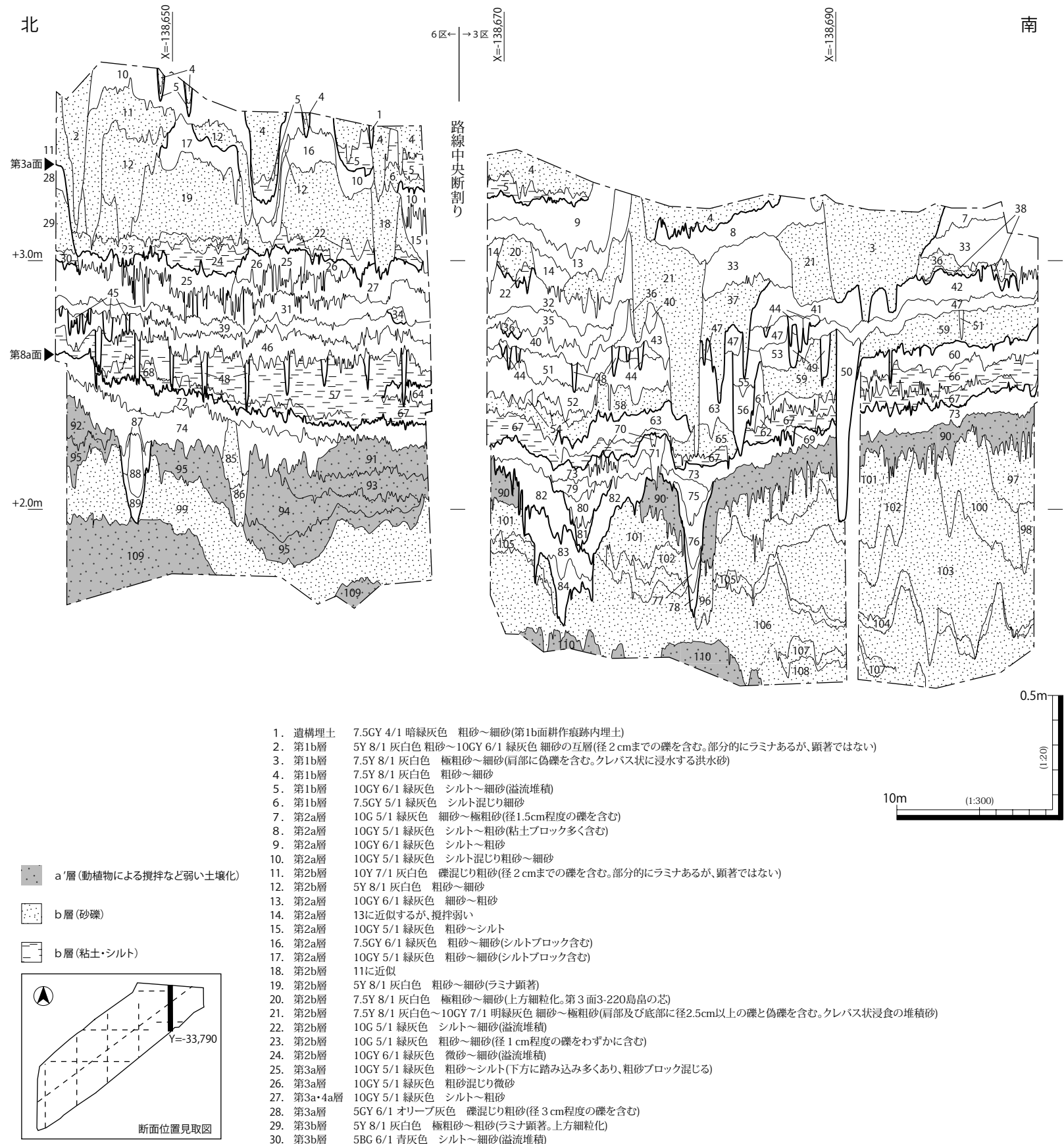


図16 X=138,740ライン 東西断割り断面図



- |                 |  |
|-----------------|--|
| 31. 第4a層        | 5BG 5/1 青灰色 粗砂混じり粘土～シルト  |
| 32. 第3a層        | 10G 5/1 緑灰色 シルト～粗砂   |
| 33. 第3a層        | 10G 5/1 緑灰色 細砂～粗砂(攪拌良い)  |
| 34. 第4a層        | 10BG 5/1 青灰色 粘土混じり粗砂   |
| 35. 第4a層        | 5Y 8/2 灰白色 粗砂(粘土ブロック多く含む)  |
| 36. 第4b層        | 2.5GY 8/1 灰白色 粗砂～粗砂  |
| 37. 第4b層        | 7.5Y 8/1 灰白色 粗砂～極粗砂(クレバス状浸食の堆積砂)                                     |
| 38. 第4b層        | 10G 6/1 緑灰色 シルト～微砂(36の溢流堆積)  |
| 39. 第5a・6a層     | 10BG 6/1 青灰色 粘土混じり粗砂(締めり良い。部分的に緑変している)                               |
| 40. 第5a・6a層     | 10GY 6/1 緑灰色 粗砂～粗砂(淡黄色の粗砂が混じる)                                       |
| 41. 第5a層        | 10G 5/1 緑灰色 シルト～粗砂(締めり良い)  |
| 42. 第5a・6a層     | 10GY 5/1 緑灰色 粘土～粗砂(比較的粘質で締めり良い)                                      |
| 43. 第5a・6a層     | 10GY 6/1 緑灰色 粗砂～粗砂(坪境盛土?)  |
| 44. 遺構埋土        | 5BG 5/1 青灰色 粗砂(第7b面耕作痕跡内埋土(第6面帰属)。ブロック土多い。下方に灰白色の粗砂がラミナを成して堆積する所がある) |
| 45. 遺構埋土        | 5BG 6/1 青灰色 粗砂～細砂(第6b面耕作痕跡内埋土(第6面帰属)。46がブロック状に混じる。下方にラミナの見られるものあり)   |
| 46. 第7a-1層      | 5BG 6/1 青灰色 粗砂混じり粘土(緑変著しい)   |
| 47. 第7a-1層      | 10GY 4/1 暗緑灰色 粘土混じり粗砂～細砂(遺物を多く含む。締めり良い。部分的に緑色化著しい)                   |
| 48. 遺構埋土        | 5BG 6/1 青灰色 粗砂混じり粘土(第7b面耕作痕跡(第7面帰属)内埋土。57がブロック状に混じる)                 |
| 49. 遺構埋土        | 10GY 4/1 暗緑灰色 粗砂混じり粗砂～極粗砂(第7b面耕作痕跡(第7面帰属)内埋土)                        |
| 50. 遺構埋土        | 10GY 4/1 暗緑灰色 粘土混じり粗砂(第7b面3-163ピット。上方は緑色化。ブロック土多い。遺物含む)              |
| 51. 第7a-2層      | 10GY 5/1 緑灰色 粗砂混じりシルト(遺物を多く含む。締めり良い。上方緑色化)                           |
| 52. 第7a-2層      | 10GY 5/1 緑灰色 粗砂～細砂(遺物を多く含む。58を母材とする所では締めりが悪い)                        |
| 53. 第7a-2層      | 10GY 5/1 暗緑灰色 粗砂～細砂(59上方が腐植の影響を受けたもの可能性がある)                          |
| 54. 第7a層        | 10GY 5/1 緑灰色 粗砂～シルト(58の作り出した起伏の低い場所に堆積した湿地堆積層か)                      |
| 55. 遺構埋土        | 10GY 5/1 緑灰色 極粗砂～細砂(第7b面3-164溝埋土。径2cm程度の礫を多く含む)                      |
| 56. 遺構埋土        | 10GY 7/1 明緑灰色 粗砂～粗砂(第7b面3-164溝埋土。径1cm程度の礫を部分的に含む)                    |
| 57. 第7b層        | 7.5Y 6/2 灰オリーブ色 粘土～微砂(緑変著しく、本来の色は不明)                                 |
| 58. 第7b層        | 5Y 8/3 淡黄色 粗砂～細砂(59に対応か。底部に細砂帯あり)                                    |
| 59. 第7b層        | 5Y 8/2 灰白色 粗砂～細砂(ラミナは見えない。X=138,690ライン断割り15、16に対応か)                  |
| 60. 第7a-3層      | 10GY 6/1 緑灰色 粗砂混じりシルト  |
| 61. 第7a-3層      | 5BG 5/1 青灰色 粗砂混じりシルト(60に対応か。北方ほど粗粒化)                                 |
| 62. 第7a-3層      | 10GY 4/1 暗緑灰色 粗砂混じりシルト   |
| 63. 第7a-3層      | 5BG 5/1 青灰色 粗砂～細砂  |
| 64. 第7a-3層      | 5BG 4/1 暗青灰色 粗砂混じり粘土(北方ほど粗砂なくなる)                                     |
| 65. 第7b層        | 5Y 8/2 灰白色 粗砂～細砂(第7a-3層の直下にある洪水堆積層か)                                 |
| 66. 第7b層        | 10GY 5/1 緑灰色 粗砂混じり粘土(北方ほど粘質)   |
| 67. 第7b層        | 5BG 5/1 青灰色 粘土～微砂(黒色化した植物遺体含む。上方粗粒化。全調査区で広範囲に見られる第7b層か)              |
| 68. 第7b層        | 10GY 5/1 暗緑灰色 粗砂混じりシルト～微砂(67に下層の72が巻き上がった土層)                         |
| 69. 第7b層        | 10GY 4/1 暗緑灰色 粗砂混じりシルト   |
| 70. 第7a層        | 10Y 7/1 灰白色 粗砂(踏み込みか)  |
| 71. 第7a層        | 10GY 4/1 暗緑灰色 粗砂～シルトに5Y 8/3 淡黄色 粗砂が混じる(踏み込みか。粗砂は溝底部の踏み込み内に入っている)     |
| 72. 第8a-1層      | 10GY 4/1 暗緑灰色～5/1 緑灰色 粗砂～シルト(弥生中期水田耕作土)                              |
| 73. 第8a-1層      | 10GY 4/1 暗緑灰色 粗砂～シルト(攪拌強い。弥生中期水田耕作土)                                 |
| 74. 第8a-2層      | 10GY 4/1 暗緑灰色 シルト混じり粗砂(土器を含む。弥生前期包含層)                                |
| 75. 遺構埋土        | 10GY 6/1 緑灰色 粗砂混じりシルト(第8b面3-267溝埋土)                                  |
| 76. 遺構埋土        | 10GY 4/1 暗緑灰色 シルト混じり粗砂(第8b面3-267溝埋土)                                 |
| 77. 遺構埋土        | 10GY 5/1 緑灰色 シルト～粘土(第8b面3-267溝埋土)                                    |
| 78. 遺構埋土        | 10GY 4/1 暗緑灰色 粘土混じり粗砂(第8b面3-267溝埋土)                                  |
| 79. 遺構埋土        | 10GY 6/1 緑灰色 粗砂混じりシルト(第8b面3-268溝埋土)                                  |
| 80. 遺構埋土        | 10G 4/1 暗緑灰色 シルト混じり粗砂(第8b面3-268溝埋土。長石目立つ。遺物多く含む)                     |
| 81. 遺構埋土        | 10GY 5/1 緑灰色 シルト～粘土(第8b面3-268溝埋土。粗砂をわずかに含む。黒色化した植物遺体を含む)             |
| 82. 遺構埋土        | 5BG 3/1 暗青灰色 粗砂～粘土(第8b面3-268溝埋土。長石目立つ。遺物多く含む)                        |
| 83. 遺構埋土        | 10GY 4/1 暗緑灰色 粗砂～粘土(第8b面3-268溝埋土)                                    |
| 84. 遺構埋土        | 10GY 5/1 緑灰色 粗砂混じり粘土(第8b面3-268溝埋土。ラミナあり)                             |
| 85. 第8b層        | 5Y 6/2 灰オリーブ色～7/2 灰白色 極粗砂～粗砂(縄文晩期自然流路。88に近似。ラミナ見えない)                 |
| 86. 第8b層        | 10BG 5/1 青灰色 粗砂と5/2 灰オリーブ色 極粗砂との互層(縄文晩期自然流路。89に近似)                   |
| 87. 遺構埋土        | 10GY 4/1 暗緑灰色 粗砂～細砂(第8b面6-123溝埋土。溝内に崩落した土層か)                         |
| 88. 遺構埋土        | 5Y 5/1 灰色～8/2 灰白 極粗砂～粗砂(第8b面6-123溝埋土。ラミナは見えない。上方粗粒化)                 |
| 89. 遺構埋土        | 10BG 5/1 青灰色 微砂と5Y 7/2 灰白色 粗砂の互層(第8b面6-123溝埋土)                       |
| 90. 第8a層(8b-4)  | 10GY 4/1 暗緑灰色 粗砂混じりシルト   |
| 91. 第8a層(8b-4)  | 10GY 6/1 緑灰色 粗砂混じり粘土   |
| 92. 第8a層(8b-4)  | 5Y 6/3 オリーブ黄色 粗砂～細砂(締めりが良い。古土壌の可能性あり)                                |
| 93. 第8a層(8b-4)  | 10BG 4/1 暗青灰色 粘土混じり粗砂(古土壌)   |
| 94. 第8a層(8b-4)  | 10BG 5/1 青灰色 微砂～粗砂(一部上方粗粒化。南方粗粒化)                                    |
| 95. 第8a層(8b-4)  | 10G 4/1 暗緑灰色～5/1 緑灰色 粘土混じり粗砂(古土壌)                                    |
| 96. 第8a層(8b-4)  | 10GY 5/1 緑灰色 粗砂～粘土(上方粗粒化。部分的にラミナあり。縄文晩期自然流路)                         |
| 97. 第8b-4層      | 7.5GY 7/1 明緑灰色 シルト～粗砂(上方粗粒化。縄文晩期自然流路)                                |
| 98. 第8b-4層      | 5Y 7/1 灰白色 極粗砂～細砂(縄文晩期自然流路)  |
| 99. 第8b-4層      | 5BG 5/1～6/1 青灰色 粗砂～細砂(上方暗色化。最下方にシルト帯あり)                              |
| 100. 第8b-4層     | 5Y 7/1～8/1 灰白色 粗砂  |
| 101. 第8b-4層     | 5Y 7/2 灰白色 極粗砂～粗砂  |
| 102. 第8b-4層     | 10GY 7/1 明緑灰色 シルト～微砂(部分的に粗砂混じる)                                      |
| 103. 第8b-4層     | 5Y 8/1 灰白色～8/3 淡黄色 極粗砂～細砂  |
| 104. 第8b-4層     | 10Y 6/1 灰色 シルト～粗砂(上部を黒色帯が被覆する)                                       |
| 105. 第8b-4層     | 10GY 6/1 緑灰色 シルト混じり粗砂  |
| 106. 第8b-5-27層  | 7.5GY 7/1～8/1 明緑灰色 極粗砂～細砂  |
| 107. 第8b-5-37層  | 10Y 6/1 灰色 シルト   |
| 108. 第8b-5-47層  | 5Y 7/2 灰白色 粗砂  |
| 109. 第8a層(8b-6) | 10G 3/1 暗緑灰色 小礫混じり粗砂(径1cm程度の礫を含む。第8b-6層か。古土壌)                        |
| 110. 第8a層(8b-6) | 10GY 3/1 暗緑灰色 粗砂～粘土(古土壌)   |

図 17 Y=-33,790 ライン 南北断割り断面図

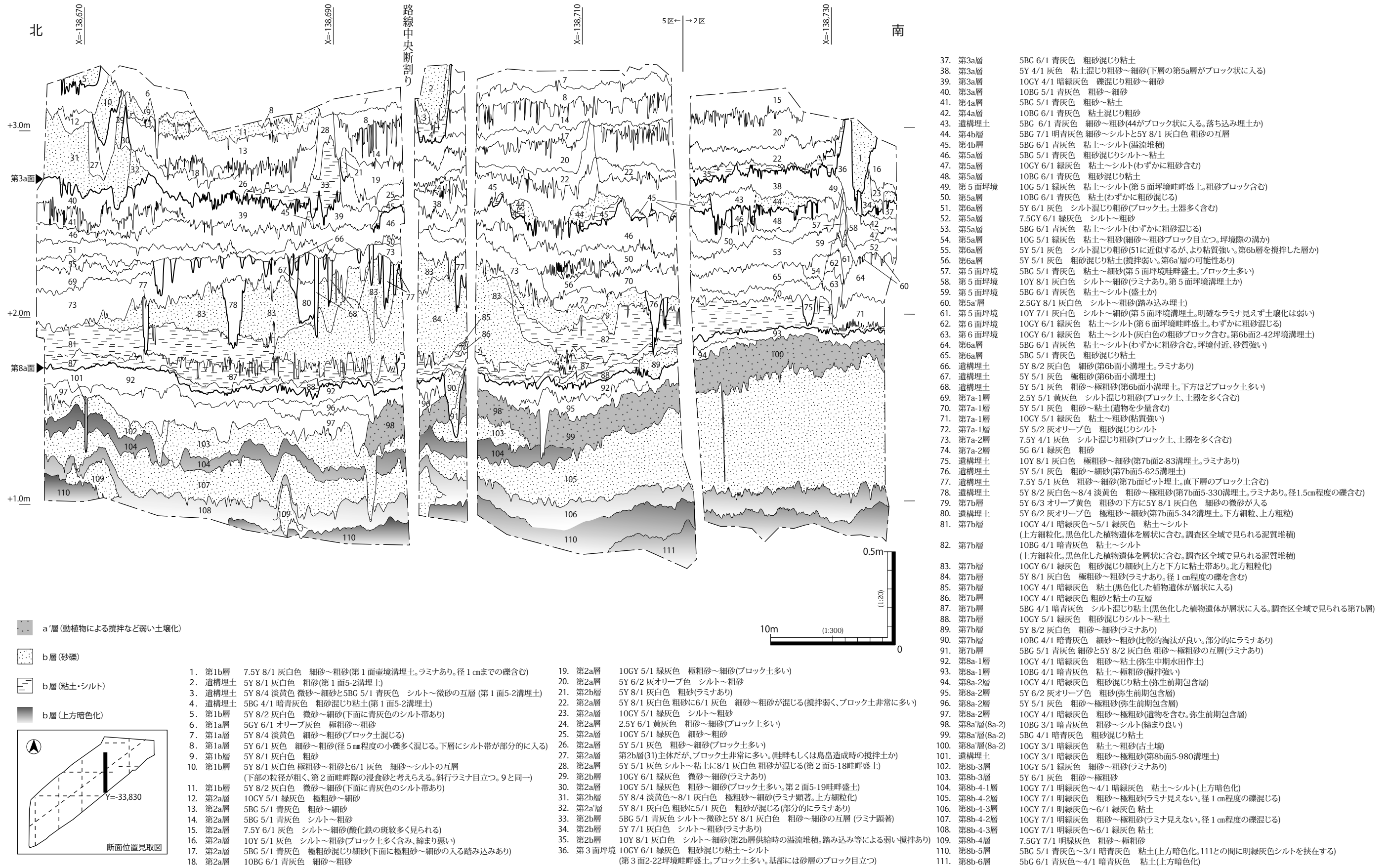
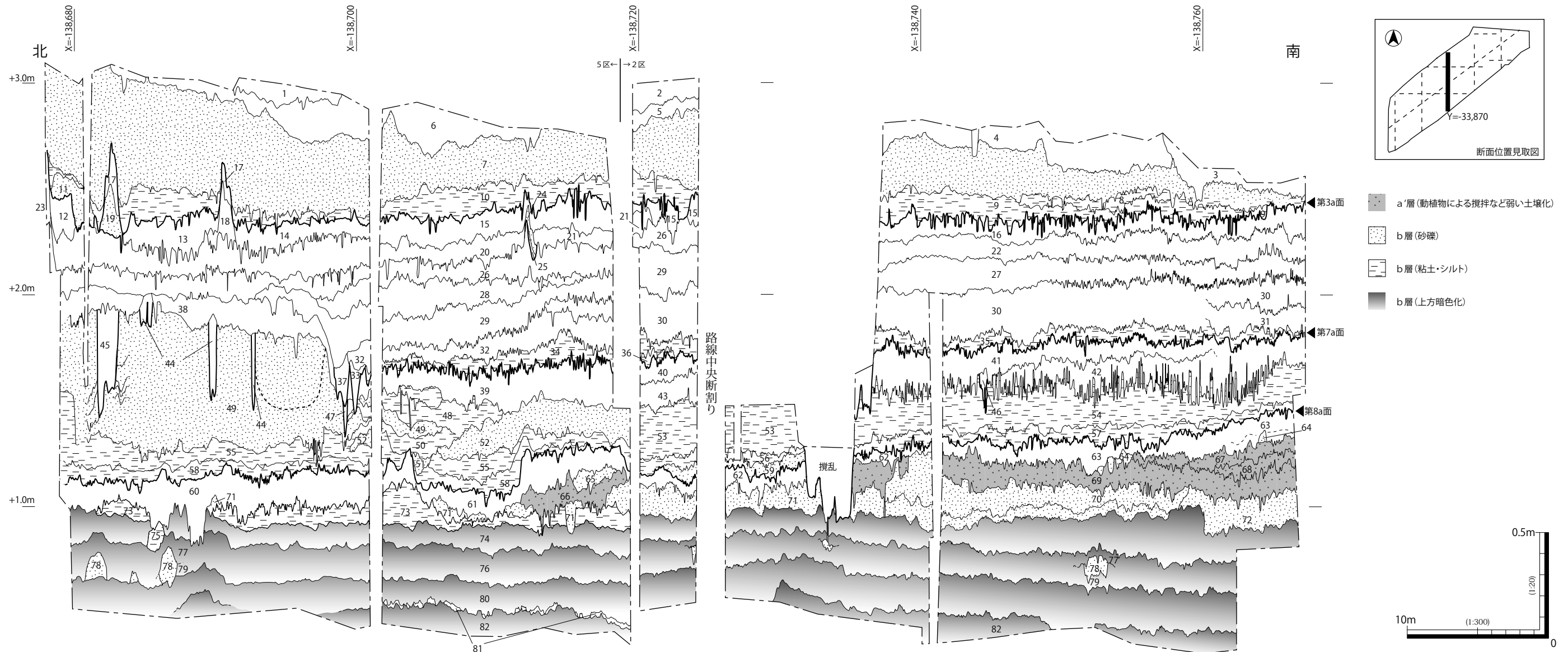
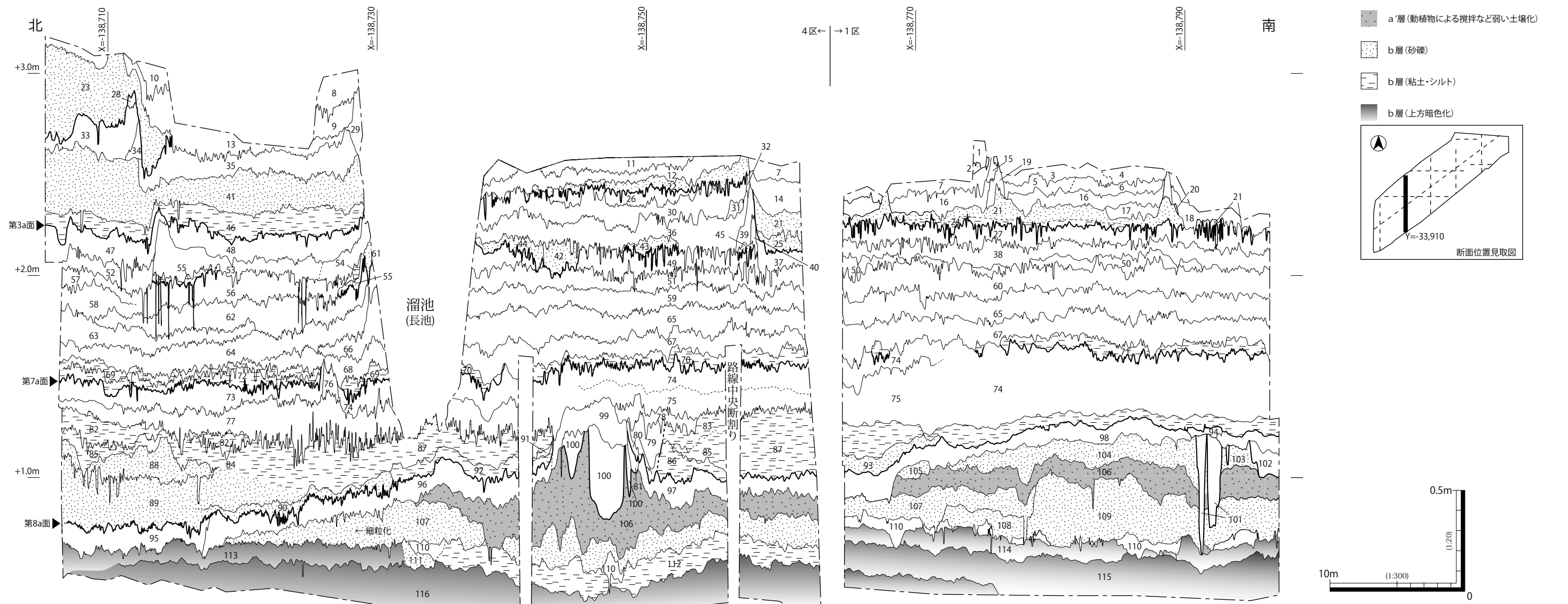


図 18 Y=-33,830 ライン 南北断割り断面図



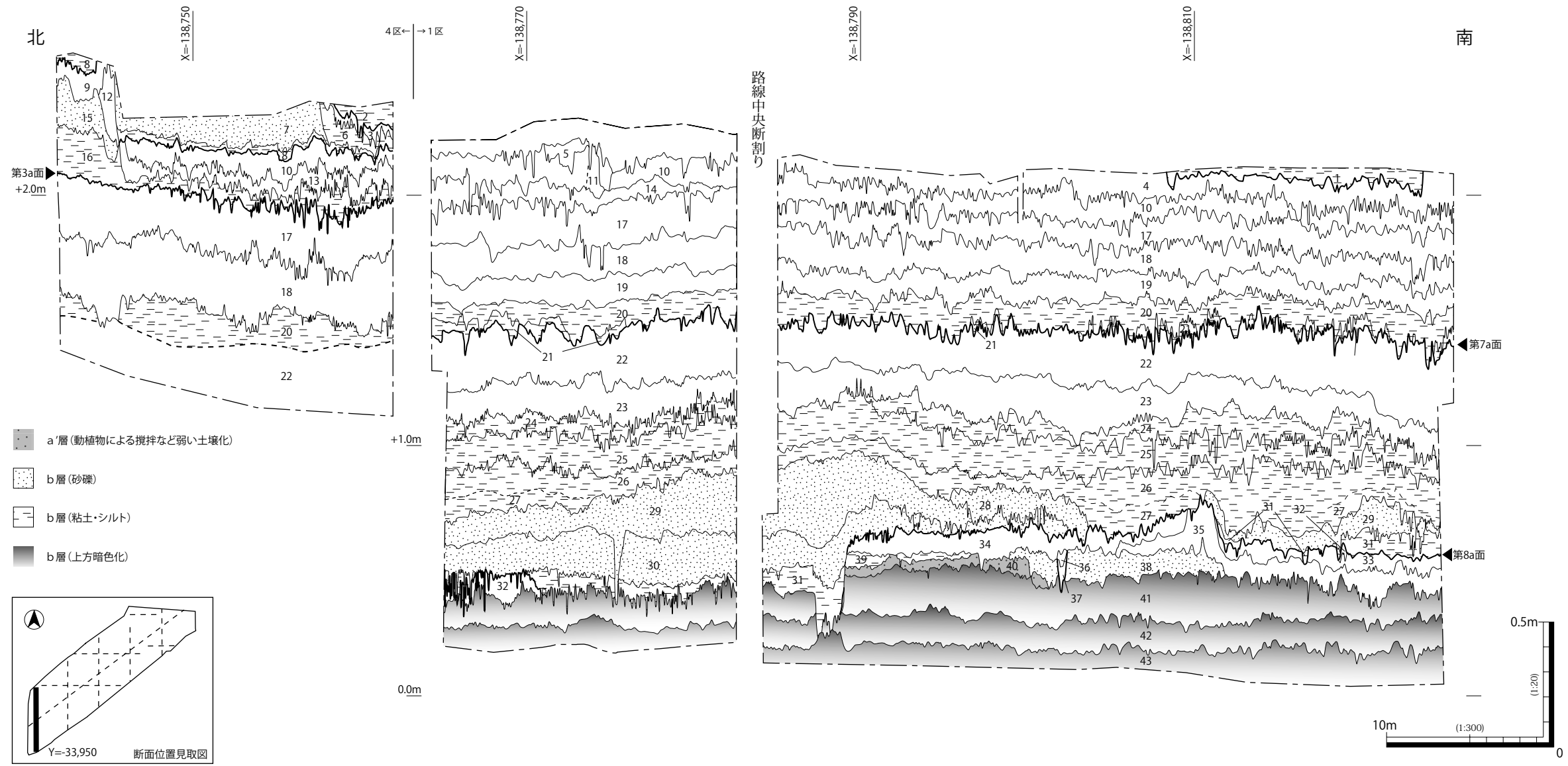
- |             |   |             |  |                |  |
|-------------|---|-------------|--|----------------|--|
| 1. 第1a層     | 5BG 5/1 青灰色 粗砂混じりシルト～細砂   | 29. 第5a・6a層 | 2.5Y 7/3 浅黄色 粗砂～シルト  | 57. 第7b層       | 10GY 5/1 緑灰色 粘土～シルト(粘土～シルトに5Y 8/2 灰白色 細砂～粗砂が層状に混じる)    |
| 2. 第2a層     | 10GY 6/1 緑灰色 シルト～細砂   | 30. 第6a層    | 10BG 5/1 青灰色 粗砂混じり粘土(層上方に緑変した鉄分か(還元→酸化か)比較的多く含む)               | 58. 第7b層       | 10GY 5/1 緑灰色 粗砂混じりシルト～粘土                               |
| 3. 第2a層     | 10GY 5/1 緑灰色 シルト～細砂   | 31. 第6a層    | 10G 6/1 緑灰色 粘土(30に比べて粗砂少ない)                                    | 59. 第7b層       | 5Y 8/2 灰白色 細砂～粗砂(わずかに下層(第8a層)のブロック土含む)                 |
| 4. 第2a層     | 7.5GY 6/1 緑灰色 細砂～粗砂   | 32. 第6a層    | 2.5Y 5/2 暗灰黄色 粗砂～シルト   | 60. 第8a-1層     | 10GY 4/1 暗緑灰色 粗砂～粘土(弥生中期水田耕作土。64～72の砂層が直下にないため粘質が強い)   |
| 5. 第2a層     | 7.5GY 6/1 緑灰色 シルト～粗砂  | 33. 遺構埋土    |  | 61. 第8a-1層     | 7.5GY 4/1 暗緑灰色 粗砂～粗砂(弥生中期水田耕作土。直下に64～72の砂層があるため、砂質が強い) |
| 6. 第2a層     | 10G 5/1 緑灰色 シルト混じり粗砂～細砂(ブロック土多い。第2面の鳥島の肩部から田面の耕作土層)             | 34. 第6b層    | 10BG 5/1 青灰色 粘土に5Y 5/1 灰色 粗砂～細砂がブロック状に混じる(第6b面耕地段差Bの直下に検出される溝) | 62. 第8a-1層     | 5BG 4/1 暗青灰色 シルト～粗砂                                    |
| 7. 第2b層     | 10GY 8/1 明緑灰色 極粗砂～細砂と5/1 緑灰色 シルト～細砂の互層(ラミナ顕著)                   | 35. 第6b層    | 10BG 5/1 青灰色 粘土(下方に黒色化した植物遺体を含む)                               | 63. 第8a-1層     | 10G 4/1 暗緑灰色 粘土～粗砂(比較的粘質強い。南方ほど粗粒化)                    |
| 8. 第2b層     | 7.5GY 7/1 明緑灰色 シルトと6/1 緑灰色 粘土との互層                               | 36. 第6b層    | 5BG 6/1 青灰色 粘土(34に近似するが、植物遺体含まない。低地部で部分的に見られる)                 | 64. 第8b層       | 2.5GY 8/1 灰白色 粗砂と5BG 5/1 青灰色 細砂～粗砂の互層                  |
| 9. 第2a層     | 7.5GY 6/1 緑灰色 粘土～シルト(8を攪拌したもの。踏み込みか)                            | 37. 遺構埋土    | 5Y 5/1 灰色 粗砂～細砂に10BG 5/1 青灰色 粘土がブロック状に混じる(第7a面4-38溝(区画溝))      | 65. 第8b層       | 5Y 6/2 灰オリーブ色 粗砂                                       |
| 10. 第2b層    | 10GY 5/1～6/1 緑灰色 粘土～微砂(7の供給前の溢流堆積)                              | 38. 第7a-1層  | 10GY 5/1 緑灰色 粗砂～シルト(ブロック土多い。遺物を含む)                             | 66. 第8a層(8a-2) | 10GY 3/1 暗緑灰色 粗砂～粘土(古土壤。67～69と対応)                      |
| 11. 第2b層    | 5Y 8/3 淡黄色 極粗砂～粗砂(部分的な洪水砂)                                      | 39. 第7a-1層  | 5GY 4/1 暗オリーブ灰色 シルト混じり粗砂(締めが悪い)                                | 67. 第8a層(8a-2) | 10G 5/1 緑灰色 粗砂混じり粘土(古土壤)                               |
| 12. 第3a層    | 5BG 5/1 青灰色 シルト混じり粗砂(下方に攪拌しきらなかった第3b層が残る)                       | 40. 第7a-1層  | 10G 5/1 緑灰色 粘土～粗砂  | 68. 第8a層(8a-2) | 10GY 5/1 緑灰色 粘土～粗砂(古土壤)                                |
| 13. 第3a層    | 7に比べ、より粗い   | 41. 第7a-1層  | 10G 5/1 緑灰色 粗砂混じり粘土  | 69. 第8a層(8a-2) | 10G 4/1 暗緑灰色 粘土～粗砂(粘土ブロック含み、粘質強い。古土壤)                  |
| 14. 第3a層    | 5Y 8/4 淡黄色 粗砂に直下層(20)がブロック状に混じる                                 | 42. 第7a-1層  | 10BG 5/1 青灰色 粗砂混じり粘土(第7b層がブロック状に入る)                            | 70. 第8b-2層     | 7.5Y 8/2 灰白色 細砂～粗砂(ラミナは見られない。下層がブロック状にわずかに混じる)         |
| 15. 第3a層    | 10BG 5/1 青灰色 粗砂混じりシルト   | 43. 第7a-1層  | 10GY 4/1 暗緑灰色 粘土～粗砂(40より粘質強い)                                  | 71. 第8b-2層     | 10GY 6/1 緑灰色 シルト～微砂(わずかに粗砂混じる。下方ほど細粒)                  |
| 16. 第3a層    | 10BG 6/1 青灰色 粗砂混じり粘土  | 44. 遺構埋土    | 5Y 5/1 灰色 粗砂～微砂(第7b面ビット埋土。ブロック土多い)                             | 72. 第8b-2層     | 10GY 7/1 明緑灰色 シルト～粗砂(南方ほど粗粒。ラミナはみえない。部分的に存在する層)        |
| 17. 第3a層    | 10G 4/1 暗緑灰色 シルト混じり粗砂(第3面5-29鳥島・5-47畦畔盛土)                       | 45. 遺構埋土    | 5Y 8/2 灰白色 極粗砂～粗砂(第7b面5-342溝埋土。ラミナあり。径3cm程度の礫を含む)              | 73. 第8b-2層     | 10BG 5/1 青灰色 粘土～シルト                                    |
| 18. 第3a層    | 10G 5/1 緑灰色 シルト～細砂と5Y 8/2 灰白色 粗砂の互層(第3面5-47畦畔盛土か)               | 46. 遺構埋土    | 10GY 5/1 緑灰色 粘土～粗砂(第7b-2面2.90溝埋土。第7b層のブロック及び遺物が混じる)            | 74. 第8b-3層     | 10GY 6/1 緑灰色～4/1 暗緑灰色 シルト～粘土(上方暗色化・細粒化)                |
| 19. 第3b層    | 5Y 8/1 灰白色 極粗砂～細砂(第3面5-29鳥島の芯になって残存)                            | 47. 遺構埋土    | 5BG 4/1 暗青灰色 シルト～粘土(第7b面5-503溝(区画溝)機能時の堆積土か)                   | 75. 第8b-3層     | 5G 7/1 明緑灰色 粘土   |
| 20. 第4a層    | 5BG 5/1～6/1 青灰色 粗砂混じり粘土   | 48. 第7b層    | 10BG 6/1～5/1 青灰色 シルト～粘土(黒色化した植物遺体が層状に入る)                       | 76. 第8b-4層     | 7.5GY 7/1 明緑灰色～10GY 4/1 暗緑灰色 粘土                        |
| 21. 第4a層    | 10BG 6/1 青灰色 シルト混じり粗砂～細砂に5Y 8/3 淡黄色 粗砂が混じる                      | 49. 第7b層    | 5Y 8/1 灰白色 極粗砂～粗砂(ラミナあり。径1cm程度の礫・古墳初頭土器を含む。シルト帯を複数挟む)          |                | (上方暗色化。78の砂層を挟む。この砂層は調査区東方では数10cm以上の厚い氾濫堆積物として見られる)    |
| 22. 第4a層    | 5BG 6/1 青灰色 粗砂混じり粘土(16よりも粗砂多い)                                  | 50. 第7b層    | 10Y 4/1 灰色 粘土～シルト(黒色化した植物遺体が層状に堆積。調査区全域で見られる第7b-2層に対応か)        |                |  |
| 23. 第3a・4a層 | 10G 5/1 緑灰色 シルト～細砂と5Y 8/2 灰白色 粗砂の互層(第3面5-46畦畔盛土。下層に第4b層(25)が入る) | 51. 第7b層    | 7.5GY 4/1 暗緑灰色 粗砂～細砂   |                |  |
| 24. 第4b層    | 5Y 8/4 淡黄色 粗砂(第3面5-26畦畔の芯となって残存)                                | 52. 第7b層    | 2.5Y 7/3 浅黄色 極粗砂～細砂(ラミナあり。径1.5cm程度の礫を含む)                       |                |  |
| 25. 第4b層    | 10BG 6/1 青灰色 粘土～シルト(第3面5-26畦畔の芯となって残存。ラミナ顕著)                    | 53. 第7b層    | 10BG 4/1 暗青灰色 粘土   |                |  |
| 26. 第5a層    | 10BG 5/1～6/1 青灰色 粗砂混じり粘土  | 54. 第7b層    | 10BG 6/1 青灰色 粘土(黒色化した植物遺体が層状に入る。調査区全域で確認される第7b-2層か)            |                |  |
| 27. 第5a層    | 10G 6/1 緑灰色 粘土～シルト(粗砂が少し混じる)                                    | 55. 第7b-2層  | 10GY 4/1 暗緑灰色 粘土(黒色化した植物遺体が層状に堆積。調査区全域で見られる第7b-2層に対応か)         |                |  |
| 28. 第5a・6a層 | 2.5Y 7/2 灰黄色 シルト～粗砂   | 56. 第7b層    | 10GY 5/1 緑灰色 粘土(わずかに粗砂混じる)                                     |                |  |

図 19 Y=33,870 ライン 南北断割り断面図



- |                |   |             |  |             |  |                 |  |
|----------------|---|-------------|--|-------------|--|-----------------|--|
| 1. 第1a-1層      | 10GY 5/1 緑灰色 粘土混じり細砂～粗砂(径0.5cm程度の礫含む)               | 31. 第2a層    | 10BG 6/1 青灰色 細砂～粗砂(シルトブロック含む)                | 61. 第4b層    | 2.5Y 8/2 灰白色～8/6 黄色 細砂～粗砂                                  | 91. 第7b層        | 10GY 4/1 暗緑灰色 粘土と3/1 暗緑灰色 粗砂の互層(高まり際の崩落土か)         |
| 2. 第1b層        | 2.5Y 6/2 灰黄色 細砂～粗砂(径0.5cm程度の礫含む。締まり悪い)              | 32. 第2a層    | 5BG 6/1 青灰色 粘土～シルト(第2面4-13畦畔の芯、部分的にラミナあり)    | 62. 第5a層    | 10BG 5/1 青灰色 粘土～粗砂   | 92. 第7b層        | 10G 4/1 暗緑灰色 細砂～粗砂に5Y 8/3 淡黄色 細砂～粗砂が混じる(第8a層を被覆)   |
| 3. 第1a-1層      | 10GY 5/1 緑灰色 粘土混じり細砂～粗砂                             | 33. 第2a層    | 10GY 5/1 緑灰色 シルト～粗砂                          | 63. 第5a層    | 10BG 4/1 暗青灰色 粘土～粗砂(北方ほど粗粒)                                | 93. 第7b-3層      | 2.5GY 8/1 灰白色 粗砂～7.5GY 6/1 緑灰色 粘土(下方ほど砂質強い)        |
| 4. 第1a-1層      | 10BG 4/1 暗青灰色 粘土混じり細砂(径0.5cm程度の礫含む)                 | 34. 第2a層    | 33に近似するが、より細粒                                | 64. 第5a・6a層 | 10BG 6/1 青灰色 粗砂混じり粘土                                       | 94. 第8a-1層      | 99に近似するが、灰白砂ブロック多く含む                               |
| 5. 第1a-2層      | 7.5GY 5/1 緑灰色 細砂～粗砂                                 | 35. 第2a層    | 10GY 5/1 緑灰色 粘土～粗砂                           | 65. 第5a層    | 5BG 5/1～6/1 青灰色 粘土～シルト(北方ほどシルト質強い)                         | 95. 第8a-1層      | 10GY 5/1 緑灰色 粗砂混じり粘土(97と対応するが、粘質強い)                |
| 6. 第1a-2層      | 5BG 5/1 青灰色 細砂～粗砂(シルトブロック含む。攪拌受ける)                  | 36. 第2a層    | 30に近似するが、より粘質が強く、締まりが良い                      | 66. 第5a層    | 5BG 6/1 青灰色 細砂混じり粘土(坪境畦畔盛土の一部か)                            | 96. 第8a-1層      | 5BG 4/1 暗青灰色 粘土～粗砂(弥生中期耕作土層か)                      |
| 7. 第1a-2層      | 10BG 5/1 青灰色 粘土混じり細砂～粗砂                             | 37. 第2a層    | 10BG 6/1 青灰色 粗砂混じり粘土(径1cmまでの細礫を含む)           | 67. 第6a層    | 5BG 5/1 青灰色 粘土(北方へ行くとき粗砂が混じる)                              | 97. 第8a-1層      | 10G 4/1 暗緑灰色 粘土～粗砂(弥生中期包含層)                        |
| 8. 第1a層        | 10G 4/1 暗緑灰色 粘土～粗砂(径1cm程度の細礫含む)                     | 38. 第2a層    | 5B 5/1 青灰色 粘土                                | 68. 第6a層    | 5BG 5/1 青灰色 細砂混じり粘土  | 98. 第8a-1層      | 10GY 3/1 暗緑灰色 細砂～粗砂(粘質比較強、土壌化も強い。弥生中期包含層)          |
| 9. 第1a層?       | 10GY 5/1 緑灰色 粗砂混じり粘土                                | 39. 第2a層    | 10BG 6/1 青灰色 シルト～粗砂(第2面4-13畦畔盛土。ブロック土多く含む)   | 69. 第6b-1層  | 10BG 6/1 青灰色 粘土～シルト(黒色化した植物遺体含む)                           | 99. 第8a-1層      | 10GY 3/1 暗緑灰色 細砂～粗砂(石英が目立つ。締まり良い。高まり上の古土壌)         |
| 10. 第1a層       | 10Y 4/1 灰色 シルト～粗砂                                   | 40. 第2a層    | 10BG 6/1 青灰色 粘土～粗砂(第2面4-13畦畔盛土)              | 70. 第6b-1層  | 10BG 4/1 暗青灰色 粘土(黒色化した植物遺体が層状に含まれる)                        | 100. 遺構埋土       | 10GY 4/1 暗緑灰色～5GY 6/1 オリーブ灰色 細砂～極粗砂(第8b面遺構埋土)      |
| 11. 第1a層       | 5Y 6/3 オリーブ黄色 細砂～粗砂(粘土ブロック混じる)                      | 41. 第2b層    | 7.5GY 8/1 明緑灰色 細砂～粗砂と10GY 6/1 緑灰色 粘土～シルトの互層  | 71. 第6b層    | 10BG 6/1 青灰色 粘土(炭化物がブロック状に入る)                              | 101. 遺構埋土       | 10GY 5/1 緑灰色 シルト～粗砂(第8b面土坑埋土。ブロック土多く混じる)           |
| 12. 第1a層       | 5Y 7/3 浅黄色 細砂～粗砂に10BG 6/1 青灰色 粘土～シルトが混じる            | 42. 第2a層    | 5BG 6/1 青灰色 粘土～シルト(粗砂ブロック多く含む)               | 72. 第6b-2層  | 5BG 6/1 青灰色 粘土(低地部分にのみ堆積する第6b層)                            | 102. 遺構埋土       | 10GY 4/1 暗緑灰色 細砂～粗砂(第8b面1-84落ち込み埋土。粘土ブロック混じる)      |
| 13. 第1a層?      | 7.5GY 5/1 緑灰色 細砂～粗砂                                 | 43. 第2b層    | 10BG 5/1 青灰色 細砂～粗砂(下層の粘土ブロック混じる)             | 73. 第7a-1層  | 5BG 5/1 青灰色 粘土～粗砂(北方ほど粗粒で遺物を含む)                            | 103. 遺構埋土       | 10GY 4/1 暗緑灰色 細砂～粗砂(第8b面土坑埋土)                      |
| 14. 第1a層       | 10BG 5/1 青灰色 細砂～粗砂に5Y 8/2 灰白色 細砂～粗砂がブロック状に混じる       | 44. 第2b層    | 5Y 8/4 淡黄色 細砂～粗砂                             | 74. 第7a-1層  | 5BG 5/1 青灰色 粗砂混じり粘土  | 104. 第8b-1層     | 10GY 6/1 緑灰色 細砂～粗砂(砂質強く、粘質弱い)                      |
| 15. 第1a-2層     | 2.5Y 6/2 灰黄色 細砂～粗砂(第1面1-23畦畔盛土。径0.5cm程度の礫含む)        | 45. 第2b層    | 10BG 6/1 青灰色 粘土～シルト(ラミナあり。第2b層の溢流堆積)         | 75. 第7a-1層  | 74に近似するが、粗砂少ない(下方の第7b層が波状に巻き上がる。地震による変形構造か)                | 105. 第8b-1層     | 10GY 4/1～3/1 暗緑灰色 細砂～粗砂(104が暗色化)                   |
| 16. 第1a-3～4層   | 5BG 5/1 青灰色 細砂～粗砂(シルトブロック含む。径0.5～1cmの礫含む)           | 46. 第2b層    | 10GY 7/1 明緑灰色 シルト～10GY 6/1 緑灰色 粘土(下層にシルトが堆積) | 76. 第7a-1層  | 10GY 6/1 緑灰色～10BG 5/1 青灰色 粘土～粗砂(第7a面2-49坪境畦畔盛土。上方緑変)       | 106. 第8a層(8b-1) | 10G 5/1 緑灰色 粘土～粗砂(締まり良い。古土壌か)                      |
| 17. 第1a-4層     | 2.5Y 6/3 にぶい黄色 粘土混じり粗砂(上層からの踏み込み)                   | 47. 第3a層    | 10GY 6/1 緑灰色 粘土～粗砂(ブロック土多い)                  | 77. 第7a-1層  | 5BG 4/1 暗青灰色 粘土～粗砂(北方ほど粗粒で遺物を含む)                           | 107. 第8b-1層     | 10GY 6/1 緑灰色～5Y 8/1 灰白色 シルト～粗砂(下方に部分的にラミナあり。側方細粒化) |
| 18. 第1a-1層     | 10BG 4/1 暗青灰色 粘土混じり細砂(径0.5cm程度の礫含む)                 | 48. 第3a層    | 5BG 5/1 青灰色 粘土～粗砂                            | 78. 第7a層    | 10GY 4/1 暗緑灰色 粘土混じり細砂～極粗砂(南方ほど細粒化。高まり際の崩落土?)               | 108. 第8b-1層     | 10GY 5/1 緑灰色 シルト～粗砂(下方に灰白砂ブロック多く含む。比較的締まり良い)       |
| 19. 第1a-4層     | 5BG 4/1 暗青灰色 細砂～粗砂(第1面1-23畦畔盛土。ブロック土含む。)            | 49. 第3a層    | 10BG 5/1 青灰色 粘土～シルト(部分的にラミナあり。踏み込み多い)        | 79. 遺構埋土    | 10BG 6/1 青灰色 粘土(炭化物がブロック状に入る)                              | 109. 第8b層       | 7.5Y 8/1 灰白色～5/1 灰色 細砂～粗砂(部分的にラミナあり。下層を巻き上げる)      |
| 20. 第1a-4層     | 2.5Y 6/3 にぶい黄色 粘土混じり粗砂(上層からの踏み込み)                   | 50. 第3a層    | 10BG 5/1 青灰色 粘土～粗砂(緑灰色シルトブロック土混じる)           | 80. 遺構埋土    | 5Y 7/3 浅黄色 粗砂～極粗砂(第7b面1-62溝埋土)                             | 110. 第8a-2層     | 5G 3/1 暗緑灰色 粗砂混じり粘土(弥生前期包含層対応層)                    |
| 21. 第1b層       | 5Y 8/1 灰白色 細砂～粗砂(水平方向のラミナあり。下層ほど粗粒)                 | 51. 第3a・4a層 | 5B 6/1 青灰色 粘土～シルト(北方ほど粗砂混じる)                 | 81. 第7b層    | 10GY 4/1 暗緑灰色 粘土と3/1 暗緑灰色 粗砂の互層(高まり際の崩落土?)                 | 111. 第8b-2層     | 5Y 8/2 灰白色 細砂～粗砂と10Y 5/1 灰色 シルト～細砂の混土(部分的な流路堆積物か)  |
| 22. 第1b層       | 5Y 8/3 淡黄色 シルト～細砂(径1cm程度の細礫混じる)                     | 52. 第3a層    | 10BG 6/1 青灰色 シルト～粗砂                          | 82. 第7b層    | 10G 5/1 緑灰色 粘土(炭化物少量混じる)                                   | 112. 第8b-2-3層   | 5BG 6/1 青灰色 粘土～シルト                                 |
| 23. 第1b層       | 7.5GY 8/1 明緑灰色 細砂～粗砂(ラミナあり。粘土帯が水平方向に入る)             | 53. 第3a層    | 5BG 6/1 青灰色 細砂～粗砂(粘土ブロック多く含む。畦畔盛土)           | 83. 第7b層    | 10BG 6/1 青灰色 粘土  | 113. 第8b-2層     | 5BG 4/1 暗青灰色～5/1 青灰色 粘土(わずかに粗砂混じる。上方暗色化)           |
| 24. 第1b-4層     | 10BG 5/1 青灰色 シルト～微砂(ラミナ顕著。溢流堆積)                     | 54. 第3a層    | 5BG 5/1 青灰色 細砂～粗砂(少量の粘土ブロック含む)               | 84. 第7b層    | 7.5Y 7/1 灰白色～4/1 灰色 粘土(下方ほど炭化物を層状に含み暗色化)                   | 114. 第8b層       | 10BG 6/1～5/1 青灰色 粘土(上方暗色化。低湿地的な堆積)                 |
| 25. 第1a層(1a-5) | 5BG 6/1 青灰色 粘土～シルト(部分的にラミナが見られるもの、多くが転倒している)        | 55. 第3b層    | 5BG 6/1 青灰色 粘土(ラミナあり。53が落ち込む乾痕はこの上面から入る)     | 85. 第7b層    | 7.5GY 7/1 明緑灰色 粘土  | 115. 第8b層       | 5BG 6/1 青灰色～4/1 暗青灰色 粘土(上方暗色化。低湿地的な堆積)             |
| 26. 第1a層(1a-5) | 10BG 6/1 青灰色 シルト～粗砂(部分的にラミナが見られる。耕作土の可能性あり)         | 56. 第4a層    | 10BG 6/1 青灰色 粗砂混じり粘土(南方の坪境近くでは粗砂が主体)         | 86. 第7b層    | 10G 4/1 暗緑灰色～6/1 緑灰色 粗砂混じり粘土(下方暗色化)                        | 116. 第8b-3層     | 10GY 6/1 緑灰色～4/1 暗緑灰色 粘土(上方暗色化)                    |
| 27. 第1a-5層     | 10BG 5/1 青灰色 粘土～シルト                                 | 57. 第4a層    | 5BG 5/1 青灰色 粗砂混じり粘土                          | 87. 第7b層    | 10GY 6/1 緑灰色 粘土(黒色化した植物遺体を層状に含む)                           |                 |  |
| 28. 第2a層       | 10GY 5/1 緑灰色 細砂～粗砂(第2面4-4畦畔盛土。粘土ブロック多く含む)           | 58. 第4a層    | 5Y 6/1 青灰色 粗砂                                | 88. 第7b層    | 5Y 8/1 灰白色 粗砂～極粗砂(下方に踏み込みあり。4区北東側にのみ供給される破堤堆積層)            |                 |  |
| 29. 第2a層       | 5Y 8/1 灰白色 細砂～粗砂と5BG 5/1 青灰色 粘土～シルトの互層(第2面2-11坪境畦畔) | 59. 第4a層    | 5Y 7/1 明緑灰色 粗砂                               | 89. 第7b層    | 7.5Y 4/1～5/1 灰色 粘土～シルト(炭化物及び、植物遺体が含まれる)                    |                 |  |
| 30. 第2a層       | 10BG 5/1 青灰色 シルト～粗砂(粗砂ブロック混じる)                      | 60. 第4a層    | 10BG 5/1 青灰色 粘土                              | 90. 第7b層    | 10GY 5/1 緑灰色 細砂～粗砂に7.5Y 8/2 灰白色 細砂～粗砂が混じる(第8a層の耕作土を覆った洪水砂) |                 |  |

図20 Y=33,910ライン 南北断割り断面図



- 1. 第1b層 5BG 6/1 青灰色 シルト(ラミナあり。溢流堆積)
- 2. 第1b層 5Y 8/2 灰白色 細砂～粗砂(水平方向のラミナあり)
- 3. 第1a-4層 10GY 7/1 明緑灰色 粗砂混じり粘土～シルト
- 4. 第1a-4層 5BG 5/1 青灰色 粘土(部分的にラミナあり)
- 5. 第1a-4層 5BG 5/1 青灰色 粘土(耕作痕跡? ブロック土多く含む)
- 6. 第1b層 10GY 6/1 緑灰色 粘土とシルトの互層(水平方向のラミナあり)
- 7. 第1b層 7.5Y 8/1 灰白色 細砂～粗砂(水平方向のラミナあり。下層にシルト帯あり。8と一連の溢流堆積か)
- 8. 第1b層 10GY 5/1 緑灰色 粘土とシルトの互層(水平方向のラミナあり)
- 9. 第2a層 7.5GY 5/1 緑灰色 粘土混じりの細砂～粗砂
- 10. 第2a層 10BG 5/1 青灰色 粘土～シルト(北方ではわずかに粗砂が混じる)
- 11. 第2a層 10BG 5/1 青灰色 粗砂混じり粘土(第2面1-37畦畔盛土。ブロック土多く含む)
- 12. 第2a層 10BG 5/1 青灰色 粘土～粗砂(第2面4-12畦畔盛土。ブロック土多い)
- 13. 第2a層 10Iに近似するが、やや粘質弱い
- 14. 第2a層 10BG 5/1 青灰色 粘土～シルト
- 15. 第2b層 10GY 8/1 明緑灰色 細砂～粗砂(水平方向のラミナあり)
- 16. 第2b層 10GY 7/1 明緑灰色 粘土～シルト(水平方向のラミナあり。下層ほど粗粒。12を芯とする畦畔の南側は最下層のシルトのみ残存する)
- 17. 第3a・4a層 10GY 6/1 緑灰色 粘土(わずかに粗砂混じる)
- 18. 第5a層 5BG 5/1 青灰色 シルト混じり粘土(炭酸鉄多く含む。北方では粗砂混じる)
- 19. 第6a層 5BG 5/1 青灰色 粘土(炭酸鉄多く含む)
- 20. 第6b層 5B 6/1 青灰色 粘土(下層を巻き上げるが攪拌弱い)
- 21. 第6b層 10BG 4/1 暗青灰色 粘土(黒色化した植物遺体を層状に含む)
- 22. 第7a-1層 5Y 5/1 灰色 粗砂混じり粘土

- 23. 第7a-1層 10BG 5/1 青灰色 粗砂混じり粘土(炭酸鉄多く含む)
- 24. 第7b-1層 10BG 6/1 青灰色 粘土(ブロック土やや含む。耕作前の踏み込み等による攪拌か)
- 25. 第7b-2層 10G 7/1 明緑灰色 粘土(上方やや暗色化)
- 26. 第7b-3層 5GY 5/1 オリーブ灰色 粘土(下層を巻き上げる。有機物多く含む)
- 27. 第7b-3層 26に近似するが、やや暗色
- 28. 第7b-3層 7.5Y 4/1 灰色 細砂～極粗砂(灰白色砂ブロック含む。比較的土壌化が進行)
- 29. 第7b-4層 5Y 8/2 灰白色 細砂～粗砂(水平方向のラミナ顕著。下方ほど粗粒で木片等植物遺体含む)
- 30. 第7b-4層 5Y 8/1 灰白色 細砂～粗砂(水平方向のラミナ顕著。上層とほぼ同時堆積の氾濫堆積物)
- 31. 第7b-5層 7.5Y 5/2 灰オリーブ色 粘土～シルト(有機物多く含む。湿地状の堆積物か)
- 32. 第8a-1層 7.5Y 5/1 灰色 粗砂混じり粘土(湿地状の堆積物か。ヒシ等の種子含む)
- 33. 第8a-1層 5G 5/1 緑灰色 粘土混じり粗砂(弥生中期水田耕作土)
- 34. 第8a-1層 5G 4/1 暗緑灰色 粘土混じり粗砂(弥生中期水田耕作土)
- 35. 第8a-2層 33よりやや暗色(弥生前期。土器片出土)
- 36. 遺構埋土 10GY 4/1 暗緑灰色 粘土(第8b面溝埋土)
- 37. 遺構埋土 10G 4/1 暗緑灰色 細砂～粗砂(第8b面溝埋土。粘土ブロック多く混じる)
- 38. 第8b-2層 7.5Y 8/2 灰白色 細砂～粗砂(上方やや土壌化)
- 39. 第8b-2層 10G 4/1 暗緑灰色 粘土(湿地の堆積か)
- 40. 第8a層(8b-2) 5BG 4/1 暗青灰色 粗砂混じり粘土(部分的な古土壌)
- 41. 第8b-3層 7.5GY 4/1 暗緑灰色～10G 7/1 明緑灰色 粘土(上方に漸移的に暗色化。堆積速度が落ち、有機物の含有量が増えたためか)
- 42. 第8b-4層 5G 4/1 暗緑灰色～7/1 明緑灰色 粘土(上方に漸移的に暗色化。堆積速度が落ち、有機物の含有量が増えたためか)
- 43. 第8b-5層 10G 4/1 暗緑灰色～7/1 明緑灰色 粘土(上方に漸移的に暗色化。堆積速度が落ち、有機物の含有量が増えたためか)

図 21 Y=-33,950 ライン 南北断割り断面図

# 第5章 調査の成果

## 第1節 第1面の遺構と遺物

第1面は近世末から近現代にかけて形成されたと考えられる耕作面である。奈良時代から現代まで継続される条里開発の変遷過程を調査することで地域の歴史形成過程を理解するためには、現地表面直下に埋没した第1面の調査を欠くことはできない。ただし、遺構の形成時期が新しくなることが予想されたため、当面の遺構については、機械掘削終了後に残存するものに限って調査を行った。そのため、ほとんどの遺構は第2面上に掘り込まれた溝・土坑や井戸などの遺構となったが、頻発する氾濫によって供給された氾濫堆積物によって被覆されて、残存状況のよかった1区と三十・三十一ノ坪境の一部については、畦畔や島畠など、廃絶時の耕作地の状況を直接的に示す遺構を検出できた。

調査地南西端の1区においては、第1面の開発過程の中で供給されたと考えられる氾濫堆積物によって被覆された、数時期にわたる耕作面（第1a-1面～第1a-5面）が検出されたため、最も残存状態のよかった第1a-4面において調査し、第2面の坪内地割を踏襲する畦畔と、第1b層を盛土とする島畠を確認した（図25左下）。第1面の基盤となる氾濫堆積物（第1b層）は、1区付近から西接する「讚良郡条里遺跡03-5調査地（以下、03-5調査地）」にかけて厚く分布する。一方、当調査地内で最も北東に位置する6区では、第1b層による著しい浸食が確認されており（図22）、6区北方で讚良川堤防が破堤したことを示唆する。破堤流は調査地北側を讚良川に沿って西流し、現在集落が立地する4区北方辺りで南西流し、相対的低位に位置する1区と、西接する03-5調査地に流入したと考えられる。

### 1. 坪境

坪境については、比較的残存状況のよかった5-17坪境畦畔を除き、溝や溝状の溜め池として検出された。2区で検出されるはずの坪境交点についても、明確な構造物を確認することはできなかったが、付近には拳大の礫などが多く見られ、その中には宝篋印塔の基部などに見られる返花座が含まれていた（図23）。全体の3分の1ほどの残存であり他の部位が出土しなかったことから、破損した返花座を何

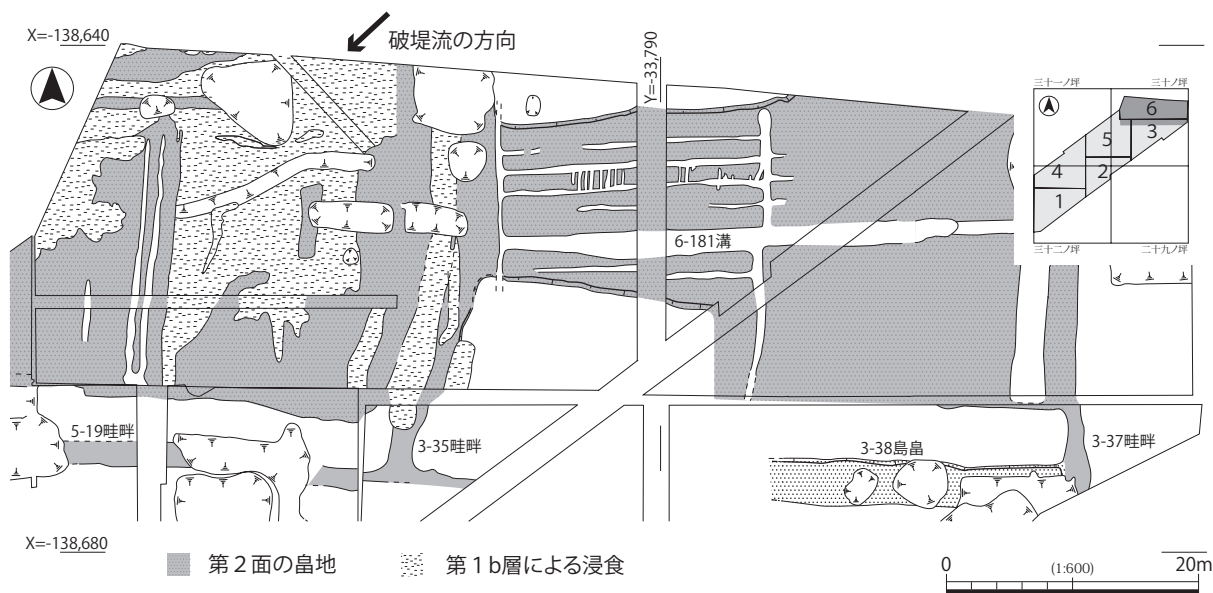


図22 6区 第2面上の第1b層浸食

らかの目的で持ち込んだものと見られる。

5-17 坪境畦畔の北側では、東から西に導水するための水口が設けられていることが確認された（図版 11-3）。開口部には拳大から人頭大の川原石が積み上げられており、護岸のためのものと考えられる。また土留めのための杭列の設置も認められ、常設的な施設として機能したことが窺われる。下層の第3面では、この水口の直下位置に畦畔で仕切られた東から西への導水径路が設けられており、灌漑システムを含めた耕作地の踏襲が窺われる。

二十九・三十ノ坪境および、三十一・三十二ノ坪境については、検出されなかった。しかしながら、三十一・三十二ノ坪境については、長池北側の堤が坪境として機能していた可能性が考えられる。4-17 暗渠などの存在がその傍証となろう。二十九・三十ノ坪境に関しては手がかりがないが、坪境交点付近で5-1 溝と2-1 溜め池が接続しており、耕地区画として意識されていたことが窺える。

## 2. 畦畔と島畠

1区で見られる氾濫堆積物は部分的に厚さ80cmにも達しており、氾濫後には第2a面の水田が広い範囲で砂礫下に埋没していたことが想定される。そこで、当時の農民はこれらの砂礫を巨大な畦状になるように掻き集め、氾濫前の耕作面を露出させて水田を復旧した。一方で潰れ地となった畦状の高まりについては、上部への通水が困難であるため畠地として利用されることがある。これは「島（嶋）畠」・「掻揚田」・「半田」などと呼称され、近世においては天保四（1833）年に著わされた大蔵永常の『綿圃要務』において、河内木綿の原料となる綿花栽培などに利用されたことが知られている（農山漁村文化協会1977）。当遺構面で見られる畦状高まりについては、上部が削平されているため、畠地としての利用の有無は不明であるものの、池島・福万寺遺跡や長原遺跡など、河内平野の遺跡で確認される島畠の規模・形状に近似するため、ここでは島畠として扱った。下面で検出されるものも同様に扱う。

前述のように、島畠は供給された氾濫堆積物（砂礫）を芯として造成されるため、砂礫の供給量によって規模が異なる。1区において検出された島畠を見ると、1-22、1-41 島畠のように西側のものほど高く幅も広い（図版 12-1）。1-22 島畠は、その下部に第2a面の畦畔（1-38 畦畔）を埋没させてしまっ



図 23 坪境交点出土返花座 実測図

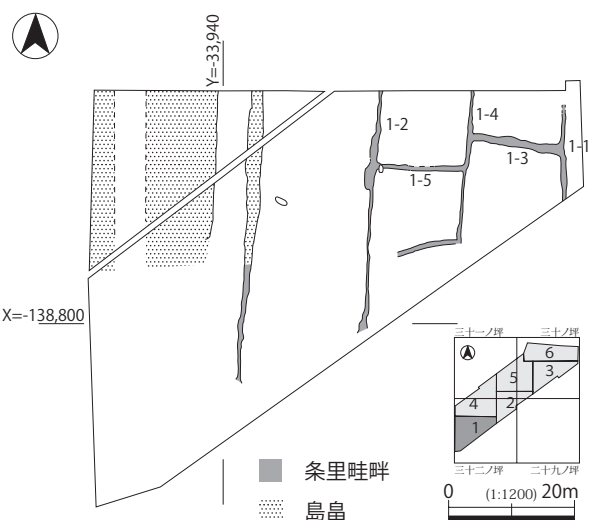


図 24 1区第1a-1面 平面図



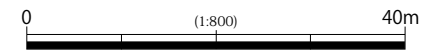
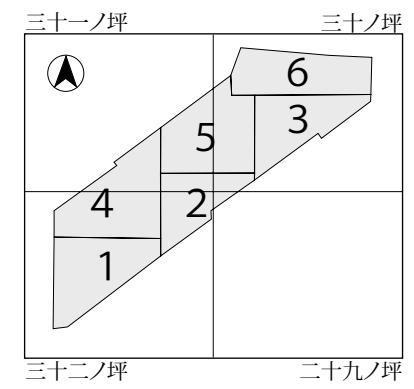
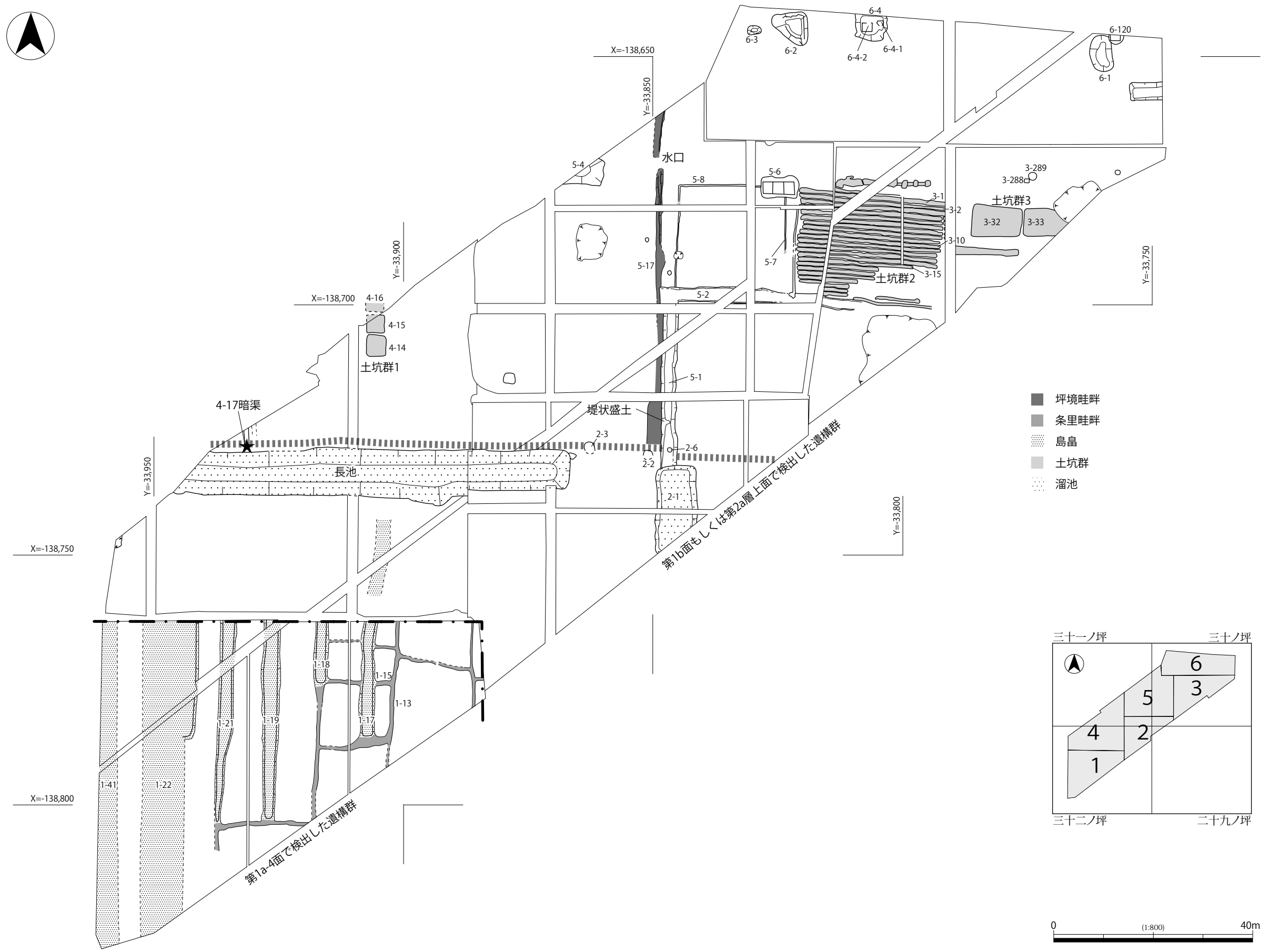


図25 第1面 平面図  
— 45・46 —

ており、1-21 島畠以東の畦畔や島畠が、基本的に第 2a 面の南北畦畔を踏襲（1-17、1-19 島畠は畦畔で挟まれた田地中央付近に造成される）していることと異なる様相を持つ。これは多量に供給された氾濫堆積物により、下層地割の踏襲が不可能となったことを示すと理解される。

氾濫罹災後の砂礫処理を目的の一つとして造成される、いわば災害復旧作業の副産物としての島畠は、時代が下るとともに削平されて姿を消す。第 1a-1 面（図 24：図版 11-1）では、1-17、1-19 島畠が失われ、1-18、1-21 島畠は規模を小さくして畦と同化してしまっている。規模の大きな 1-22、1-41 島畠は残存しているものの、その耕作面の様相は第 1 面で島畠が造成される前の第 2 面の状況に近似する。継続する耕地利用過程での島畠の削平は、耕作主体者の水田拡大志向を示すものといえよう。

### 3. 溜め池

溜め池に関しては 2ヶ所で確認された。三十二ノ坪の北端には規模の大きな溝状の溜め池が存在する。近年になって大部分が埋め戻されたようだが、現地表でも未だ溝状の落ち込みとして残存している。地元住民は、落ち込みを「長池」と呼称しており、本書でもこの呼称を使用する。

**長池（図版 1-3）** 西端は調査地外に伸びるが、幅 9 m、検出長 80 mを測る大規模な溝の形状を呈する。掘削深度は 2 m（底部標高 +1.1 m）におよび、弥生時代中期の水田耕作土層（第 8a 層）まで達している。掘削にあたっては、埋土上部について近現代における埋め戻しおよび攪拌層と理解し、バックホウによる機械掘削の対象とした。溜め池の最下部には機能時の堆積層と考えられる泥土が確認され、この泥土のみ人力で掘削した。また、長池には北方から接続する暗渠が検出されている。4-17 暗渠は掘削深度 1 mを測る V 字状の掘り込みの底部に竹管を据えたものである。いくつか分層できる第 1a 層の中でも最上層から掘削されているため、比較的新しい施設と考えられる。

溜め池最下部の泥土から出土した遺物については、図 26 に示す。寛永通宝（1）、瓦質火鉢（2）、陶器（3～5）、磁器（6～13）が出土した。18 世紀後半以降、19 世紀代のものが主体を占める。2 の口縁部には、全周に打撃による浅い破損痕跡が認められた。度重なる加撃によって器表が剥離したものと考えられる。

また、自然遺物では、ヒメビシの実の出土が見られた（第 7 章第 1 節）。ヒメビシは、現在湖沼などで普通に見られるヒシと同じヒシ科ヒシ属の水草だが、水質悪化などの環境変化に弱く、環境省が平成 12 年 7 月に刊行したレッドデータブックでは「絶滅危惧種Ⅱ類（VU）」に指定され、大阪府ではすでに姿を消した「絶滅種」に指定されている。本種の出土は、第 7b 面の 4-98 土坑からもあったが、近代以降の開発が植生環境に与えた影響を考える上で示唆的である（交野市有池遺跡でも中世と考えられる流路内埋土からヒメビシの出土を見ている。今では姿を消しつつある本種も近世までは普通に見られる水草だったのだろう（新山 2007））。このほか、第 7 章第 1 節では、土層中に含まれた花粉・珪藻・珪酸体や種子などの自然遺物から、周辺植生を始めとした環境復原を行っている。種子や昆虫遺体などの有機物を良好に遺存する低湿地遺跡では、自然科学的分析を活用することで、開発による環境変遷の状況を多面的に知ることができる。

**2-1 溜め池（図版 11-4）** 二十九・三十二坪境付近に位置しており、南端は調査地外に延びるが、幅 8 m、検出長 18 mの溝状を呈する。深さは 1.7 m（底部標高 +1.2 m）におよび、縄文時代晩期の自然堆積層（第 8b-4 層）に達する。底部には機能時に堆積した泥土が見られ、直上はブロック土を多く含む埋め戻し土となっている。また、内部には第 1b 層が堆積した状況が認められなかったため、この溜め池の掘削は第 2 面段階には遡らず、第 1 面の開発段階で行われた可能性が高い。

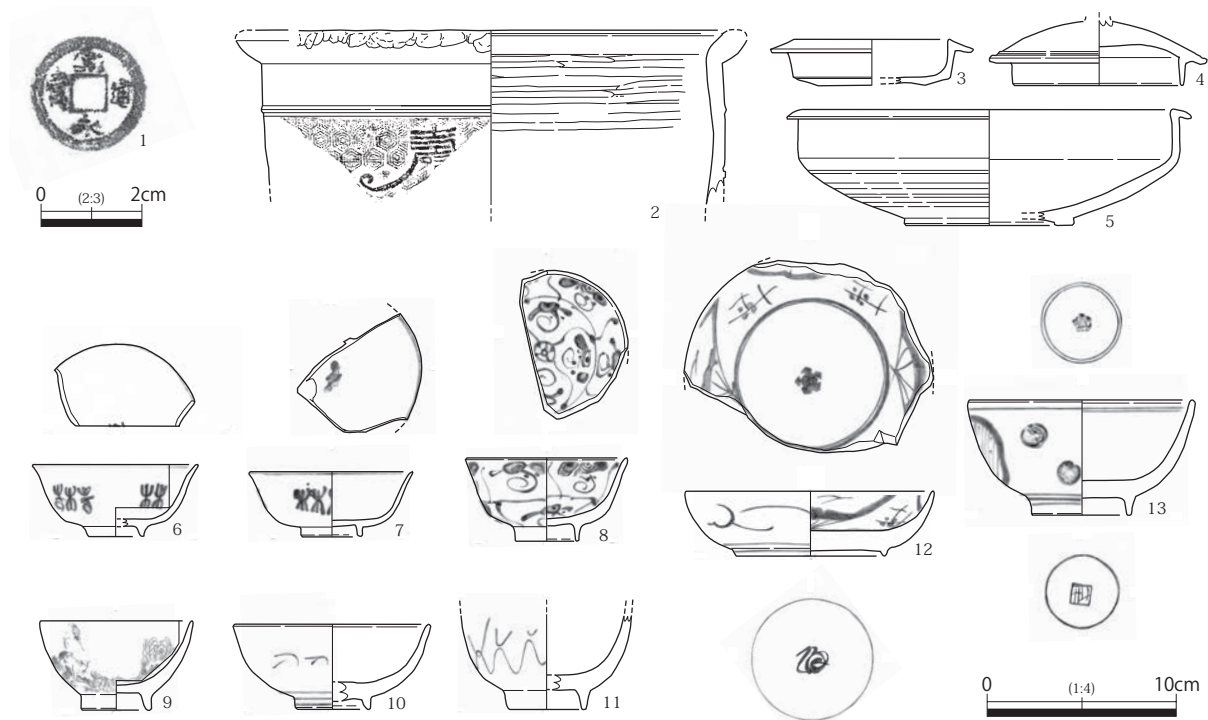


図 26 長池 出土遺物実測図

2-1 溜め池には、北方から 5-1 溝（図版 11-5）が接続する。5-1 溝は、幅 3.0 m を測る南北溝で、掘削深さは 0.8 ～ 0.9 m で南方に深くなる。2-1 溜め池との接続点から約 4 m 北方には、溝内に堤状の盛土が確認された（図 25）。溝と溜め池の水量を調節するための堰として機能した可能性がある。

5-1 溝に東方から接続するのが 5-2 溝である。幅 2.5 ～ 3.0 m、掘削深さ 0.1 ～ 0.2 m を測り、東方の 3 区から三十・三十一坪境に向かって西に伸び、坪境にあたる場所で 5-1 溝と直角に接続する。興味深いのは 5-1 溝から 2-1 溜め池まで、70 ～ 80 cm を単位として段階的に深くなっている様子が窺われることである。各溝接続部は大きな段差を見せ、溝の規模・容量は下流ほど増していく。5-1 溝内部に確認された堰は溝内の水位調整に用いられたものであろうか。

調査前の現地表面においても、この溝と同位置に幅 1 m の U 字型擁壁を持つ水路が設置されていた。この水路は、周辺において基幹的な役割を担っており、第 1 面での設置以来、この位置における水路が重要視されてきたことがわかる。また、5-2 溝北岸には 2 条の杭列が認められる（図版 11-6）。土坑群 2 の分布や耕地の高低差からも、5-2 溝の南北で耕地利用状況の差異があることが想定される。溝北岸の杭列から坪境までが約 33 m と、ちょうど三段分にあたる距離となっていることから、同溝と杭列が耕地境界として実体的に機能していた可能性が示唆される。

#### 4. 井戸・溜め井・水溜め

井戸・溜め井・水溜めについては、調査地の北側で多く見つかった。特に 6 区で多く確認され、調査地内で相対的高位に位置する北東部の農業用水に用いるために設置されたものと考えられる。これらの遺構を認識するにあたっては、第 8b 層など深部の湧水層まで掘り込む掘削深度の深いものを井戸もしくは溜め井とし、それ以外の浅いものや小規模なものを土坑（水溜め）としている。しかし、浅いものであっても天井川である讃良川の堤防に沿って掘削されている以上、渇水期以外には一定の湧水があったと見られ、明確な分類は難しい。

2-3 土坑（図版 12-8） 円形の土坑で径 2.0 m を測る。ただし、南側は後世の杭列（坪境に伴う）によっ

て壊されていた。深さは0.3 mほどしかなく、杵や側も設置されていない。水溜めもしくは肥溜めと考えられる。同様の土坑が坪境交点付近にも認められる(2-2 土坑)。遺物は出土しなかった。

**2-6 土坑(図版 13-1)** 径1 m、深さ0.3 mほどの桶を設置した土坑である。5-1 溝が埋没した後に掘削されており、第1a-1面(図24)などに伴う新しい時期の遺構と考えられる。遺物は出土しなかった。上述の2-2、2-3 土坑を含め、坪境付近で深さ0.3 mほどの土坑が検出されることから、耕地の端にあたる坪境付近に水溜めや肥溜めなどの施設が設置されていた様子が窺える。

**3-288、3-289 井戸(図版 13-2・3)** 当面に伴う井戸と考えられるが、両者ともに上面を著しく攪乱された上、杵や側が確認されなかったため、第8b面の調査時になって井戸であることが確認されたものである。両者ともに深さは1.7 mを超え、第8b層の厚い砂礫層を取水源としている。3-288 井戸の底部からは、井戸杵の柱材と考えられる杭や、井戸中央部に竹管が確認されたが、3-289 井戸からは何も出土しなかった。両者とも廃棄の際に井戸杵材などを抜き取られ、そのために上部が著しく乱されていた可能性が高い。

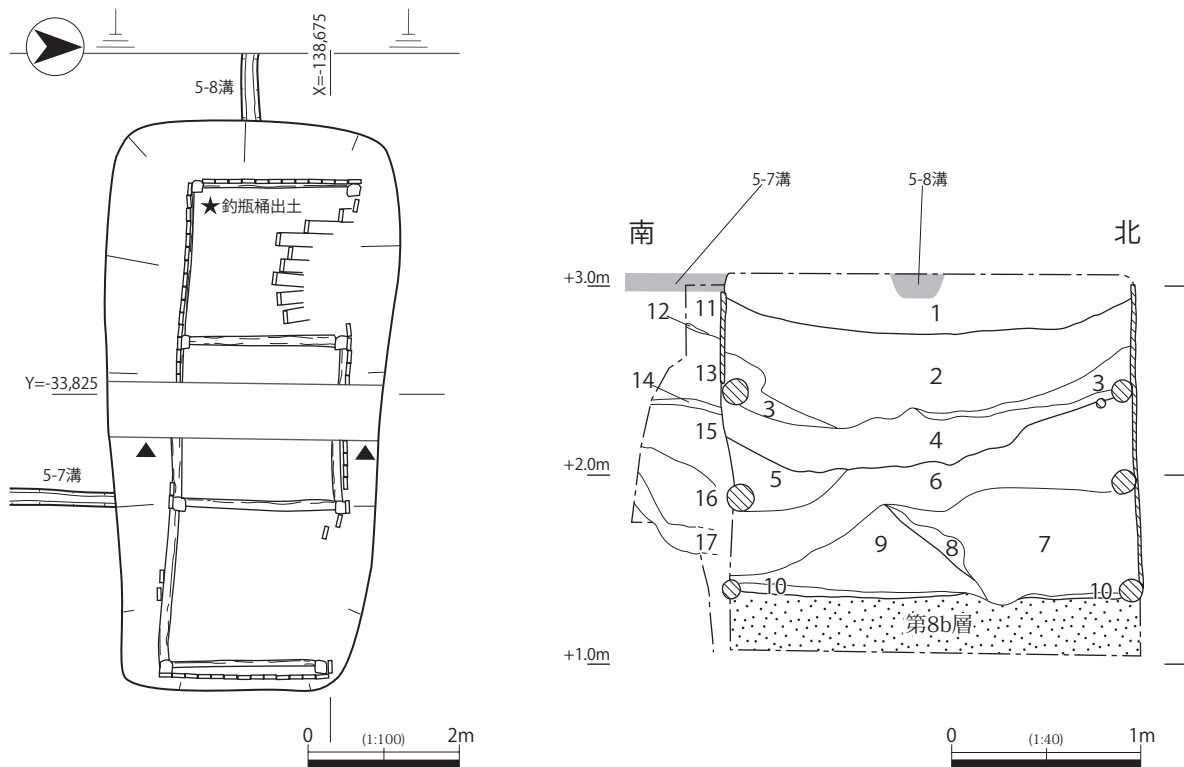
**5-4 土坑** 7.5 × 5.5 mの長方形の土坑で西端は調査地外に延びる。深さは0.8 mを測り、内部には泥質のシルト堆積が認められた。水溜めとしての性格が考えられる。出土遺物は図28に示す。陶器・磁器・杓文字(29)が出土した。18世紀から19世紀のものと考えられる。

**5-6 溜め井(図版 13-4 ~ 14-3)** 南北に2.2 m、東西に6.6 mの方形木組が設置されたもので、掘削深度は1.7 m(T.P.+1.4 m)におよび、第8b層を取水層としている(図27)。方形木組の側板には墨書の認められるものが数点あったが、判読はできなかった。木組の柱に当たる材の先端に整形された「ほぞ」部分にも漢数字らしい墨書が認められるものもあり、木組の設計と作成に関する目印である可能性がある。

内部の埋土からは段階的な埋め戻しと自然埋没が想定できる。このうち最下層から方形の木製釣瓶桶が出土しており(図版13-7)、釣瓶を使用した揚水作業を行っていた可能性があるが、井戸周辺ではピットなどの痕跡は確認されなかった。井戸の西方と南方には、井戸に接続するような2条の溝(5-7、5-8 溝)が検出されている。これらの溝は、幅20cm、深さ5cmの小規模なものであるが、5-6 溜め井の掘方付近から(掘方埋土の上部から掘り込まれていると考えられるが、平面での切り合いは不明瞭であった。断面での層位的関係については、図27右側に示している)直線的に数10 m延びる状況が確認された。内部からは何も出土しなかったが、同様の事例から竹管などの導水管を持っていた可能性も考えられよう(湯本2007)。5-7 溝は南方に伸び、削平されて確認できなくなるが、5-8 溝は西方に伸びたあと、南北坪境の手前3 mの地点で南方に屈折して先述の5-2 溝と接続する。

**6-1 土坑(図版 14-4)** 6.5 × 3.4 mのやや歪な長円形の土坑で、深さは約1 mを測る。規模の大きな土坑であるが、杵や側などは確認されず、底面も湾曲し規格的な形状とは言い難い。底部には泥質なシルトの堆積が見られ、水溜めもしくは小規模な溜め池のような性格が考えられよう。出土遺物は比較的多く、図28に示す。18世紀以降のものと考えられる陶磁器類のほか、キセルの雁首(27)が出土した。27は、細くくびれた首と胴との境が明瞭で、上部には製造時の接合線が残る。表面には部分的に鍍金部が残存しており、火皿から胴まで全面を鍍金した雁首であったことがわかる。

**6-2 土坑(図版 14-5)** 一辺8 mほどの隅丸三角形の平面形を呈し、内部には土溜めのための木杵を組んでいる。深さは1.2 mを測り、土坑底部に泥質の堆積が見られることから水溜めとしての機能が考えられるが、天井川となった讃良川河床に隣接しているため、溜め井としての性格を持つ可能性もある。



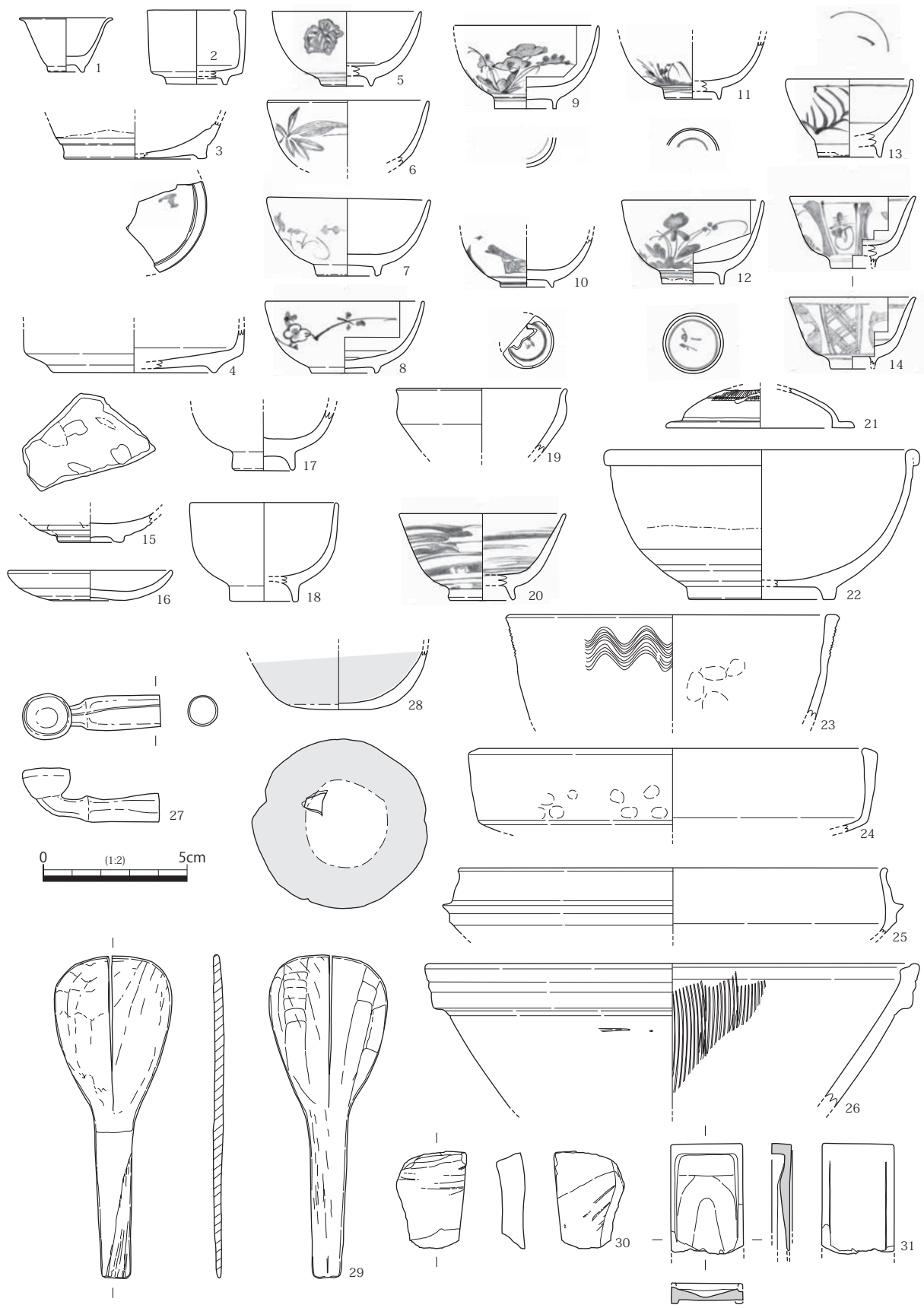
- |           |   |
|-----------|---|
| 溜め井<br>埋土 | <ul style="list-style-type: none"> <li>1. 5Y 8/2 灰白色 極粗砂～粗砂(ラミナ顕著。上方粗粒化。偽礫含む。氾濫堆積物)</li> <li>2. 5Y 5/1 灰色 粗砂から8/4 淡黄色 粗砂～細砂(第2a～6a層と思われるブロック土多く含む。埋戻土)</li> <li>3. 5BG 4/1 暗青灰色 シルト～微砂と5Y 8/3 淡黄色 粗砂(ラミナ顕著。偽礫含む。氾濫堆積物)</li> <li>4. 5BG 5/1 青灰色～3/1 暗青灰色 微砂～シルト(ラミナ顕著。淡黄色 粗砂を挟在する。3と同一の氾濫による溢流堆積物)</li> <li>5. 10BG 5/1 青灰色 粘土に5BG 4/1 暗青灰色 粗砂が混じる</li> <li>6. 5BG 5/1 青灰色 細砂～粗砂から5Y 8/3 淡黄色 粗砂(第2a～6a層と思われるブロック土多く含む。埋戻土)</li> <li>7. 5BG 5/1 青灰色 細砂～粗砂から5Y 8/3 淡黄色 粗砂(第8a層と思われるブロック土多く含む。埋戻土)</li> <li>8. 10GY 4/1 暗緑灰色 粘土(ラミナ顕著。炭化物含む。滞水による止水性堆積物)</li> <li>9. 5Y 8/3 淡黄色 粗砂に10GY 4/1 暗緑灰色 粗砂混じり粘土が混じる(崩落土か)</li> <li>10. 10GY 4/1 暗緑灰色～5/1 緑灰色 粘土～微砂(上方粗粒化。滞水による止水性堆積物)</li> </ul> |
| 溜め井<br>掘方 | <ul style="list-style-type: none"> <li>11. 第2a～8b層のブロック土</li> <li>12. 7.5GY 8/1 明緑灰色 細砂～シルト(上方粗粒化。流入砂か)</li> <li>13. 2.5Y 7/2 灰黄色 粗砂混じり細砂(下方ほどブロック土多い)</li> <li>14. 7.5GY 8/1 明緑灰色 細砂～シルト(上方粗粒化。流入砂か)</li> <li>15. 10BG 6/1 青灰色 粘土～シルト</li> <li>16. 10BG 4/1 暗青灰色 粗砂～細砂</li> <li>17. 5BG 5/1 青灰色 粘土～シルト</li> </ul>  |

図 27 5-6 溜め井 平面図および断面図

出土遺物は図 28 に示す。陶器、磁器、瓦質土器、土師質土器、漆器椀、硯など、比較的多くの遺物が出土した。24 の焙烙、25 の土釜、26 の摺鉢など調理用具が多いのも特徴である。近接する集落からの廃棄物であろう。時期の中心は 18 世紀と考えられる。28 の漆器椀は内外面に朱漆を塗布するが、畳付部分のみ円形に露胎する。木胎部に顕著な痕跡は見えないものの、意図的に漆を削ったものであろうか。また石製品も出土しており、30 は灰黒色の仕上げ砥。表裏 2 面に使用痕が認められる。31 の硯は黒色の石材を使用している。よく使い込まれており、陸の中央部は磨り減って著しく窪む。

**6-3 土坑 (図版 14-6)** 2.8 × 1.8 m の楕円形の土坑で、深さは 0.45 m を測る。内部には枠と考えられる板材が据えられており、水溜めとしての機能が考えられる。土坑底部には機能時のものと考えられる泥質の堆積があるが、上部はラミナの認められる砂礫層となっており、河川氾濫により埋没したものと考えられる。先述の 6-1、6-2 土坑も同様の堆積状況を見せるため、埋没時期を同じくする可能性がある。遺物は出土しなかった。

**6-4 井戸 (図版 14-7・8)** 方形の掘方の内部に 2 基の井戸枠を持つように見えるもので、おそらくは時期を違えて 2 基の井戸が近接設置されたものと考えられる (6-4-1、6-4-2 井戸)。6-4-2 井戸の井



5-4 土坑 (21·29)、6-1 土坑 (1·2·5·8·9·12·16 ~ 18·20·27)  
 6-2 土坑 (6·7·11·15·22 ~ 26·28·30·31)、6-4 井戸 (3·4·10·19)、6-4-1 井戸 (13·14)

图 28 井戸・土坑 出土遺物実測図

戸枠には、5-6 溜め井と近似する墨書が認められる側板がある(図版 14-8)。出土遺物は図 28 に示した。

**6-120 井戸 (図版 15-1・2)** 6 区の北端で検出されたため、北側が調査地外に延びる。東西の木組の幅は 2.1 m、検出面からの深さは 1.9 m を測り、下端は第 8b 層に及ぶ。規模・構造から 5-6 溜め井に近似した施設と考えられる。井戸枠内は砂礫で埋没しており、遺物は出土しなかった。

## 5. 災害復旧土坑

3・4・5 区で見られる土坑群 1～3 は(図 25)、同規模・同形状の土坑が隣接して規則的に掘削されているもので、土坑埋土には第 1b 層由来の砂礫が多く含まれ、底面には掘削工具の痕跡が明瞭に残る。遺物はほとんど出土しない。同じ河内平野の低湿地に位置する池島・福万寺遺跡でも同様の土坑群が確認されており、氾濫によって供給された砂礫の上から土坑を掘削し、下層の土壌層や粘土層を採掘することによって復旧水田の耕作土を形成するための混和材としたり、もしくは破れた堤防や畦畔の盛土への利用といった、氾濫被害後の耕地復旧に関連する性格が想定されている(江浦ほか 1995)。さらに、同様の事例は河内平野の遺跡で広く確認されており(長原 1995)、当面で確認される土坑群についても、その特徴から、これらの調査事例に類する土採り土坑としての性格を持つことが考えられる。

**土坑群 1 (図版 12-6・7)** 4 区北側で検出された。第 2a 層除去面で検出したため、残存状況は悪い。4×4 m を測る平面方形の 4-14 土坑を南端に同規模・同形状の土坑が 3 基並んで検出された(4-16 土坑は断面での確認)。土坑の底面には掘削工具(踏み鋤か?)の痕跡が明瞭に観察される。工具痕の一単位は幅 15cm であり、同幅の刃部を持つ鋤などの使用が考えられよう。

**土坑群 2 (図 29: 図版 12-2～5)** 第 1a 層の除去面において検出された。溝状の土坑が平行して掘削されているもので、各土坑は幅 0.8 m、長さ 28 m 程度の規模を測る。深さは 15～30cm 程度だが、下層の第 2a 層を掘り込んでいる。埋土には第 1b 層の砂礫がブロック状に多く認められ、第 2a 層は相対的に少ないことから、第 1b 層の供給後に掘り込まれ、第 2a 層の採掘を終えた後に第 1b 層によって埋め戻された土坑であると考えられる。土坑底部には工具痕が明瞭に残るものがあり、掘削後間もない埋め戻しを示す。採掘した下層土壌の利用先については不明であるが、第 2a 層は粗砂を多く含む粘性の低い土壌であるため堤体などの修復には不向きであり、氾濫堆積物に覆われた耕作面の耕作土復旧のために利用された可能性が高い。内部から出土する遺物は少ない(図 30)。染付碗(1・2)や陶器の大皿(3)は、18 世紀以降のものと考えられ、後述する第 1a～1b 層からの出土遺物(図 31～33)の年代観と合致する。

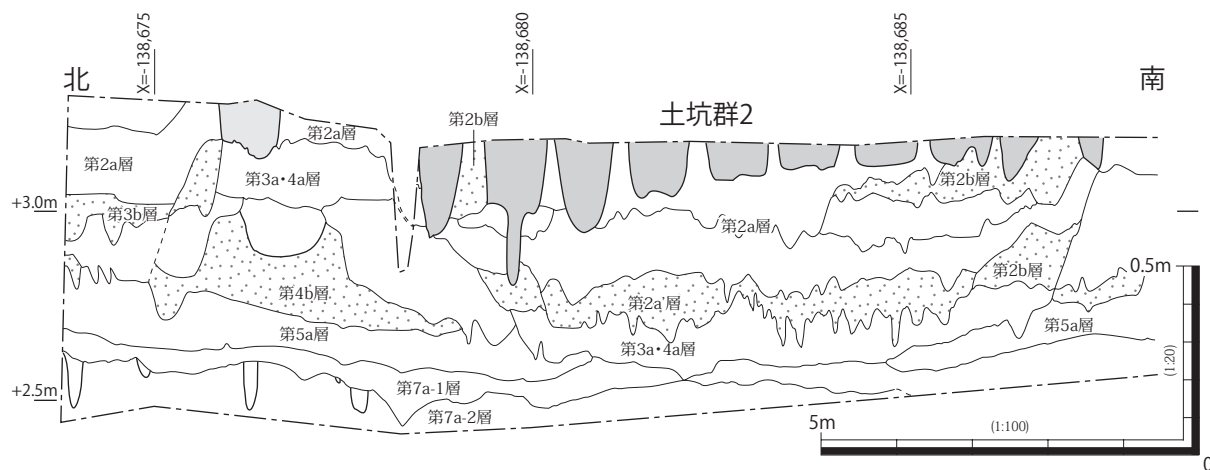


図 29 土坑群 2 断面図 (Y=-33,800 ライン)

**土坑群3** 土坑群2の東方で確認された。10×6mの長方形を呈する3-32土坑に東接して、同規模と考えられる3-33土坑が掘削される。深さは0.1～0.2mと一定しない。埋土は砂礫(第1b層)を主体として、ブロック土を多く含む埋め戻し土である。遺物は出土しなかった。

## 6. 包含層出土遺物

第1a層を主体とする包含層から出土した遺物について、図31・32に示した。第1a層を含む

新しい時期の包含層については、バックホウによる機械掘削で除去しているため、ここで示す出土遺物には第2a層(もしくは第2b層)に帰属するものも含んでいる。

出土遺物には、縄文土器から近代の陶磁器類までを含み、17世紀から19世紀を中心としている。1～17までは磁器で染付碗が多いが、皿(16・17)もある。14はいわゆる「広東碗」である。18～26は陶器で、19・21の底部には胎土目が残存する。22の皿には、底部からの立ち上がりに段がある。見込みの3方に目痕が確認される。25は信楽焼の摺鉢で、内面には摺り目が密に入れられる。27は瓦質土釜、28は土師質の焙烙である。29～31は瓦片で、29は16葉の菊花文丸瓦である。瓦当面の2ヶ所に範傷が確認できる。32は緩く湾曲する板状の鉄製品で、鋤先と考えられる。33は五銭白銅貨で、劣化が激しいが大正12(1923)年の銭銘が見える。34・35はともにキセルの雁首で、境目が不明瞭な首と胴の側面には、製造時の接合線が認められる。36～38は砥石。いずれも仕上げ砥で使用面は光沢を持つ。36は黄白色で方柱状の砥石で、欠損面を除いた3面とも使用している。38は、暗緑灰色の板状の砥石で、表裏2面を使用している。39は埴輪片で、円形透かしの下部が確認できる。40～47は縄文土器片である。細片のため時期の不明なものが多いが、船元式から北白川上層式を含むと考えられ、縄文時代中期から後期の資料群と考えられる。

また、調査地北東側の5・6区においては、第1b層による著しい浸食が見られ、6区北側に讃良川の破堤箇所があることを示している。付近では第1b層の厚い堆積が見られ、同層から出土した遺物については、図33に示した。1・2は染付碗である。3は瓦質土器であるが、器種は不明。釜の口縁部であろうか。4は輸入磁器である。白磁壺の口縁と考えられる。5は土師器杯。6は埴輪片。7～12は縄文土器である。8は船元I式、12は北白川上層式と考えられ、第1a層に含まれるものと同じく、縄文時代中期から後期のものを含むようである。このことは、第1a層に含まれる縄文土器が、第1b層を供給した氾濫流内に含まれた二次堆積遺物であり、耕作による攪拌で第1a層に取り込まれたものであることを示す。18世紀以降のものと考えられる1や2の染付碗は、第1b層出土遺物の中で最も新しい時期の遺物であり、先の第1a～2a層出土遺物の年代観からも、第1b層の供給時期を示すものである可能性が高い。4～12については、平安時代から縄文時代までとかなり遡った時期を示す遺物であり、混入遺物と理解されよう。

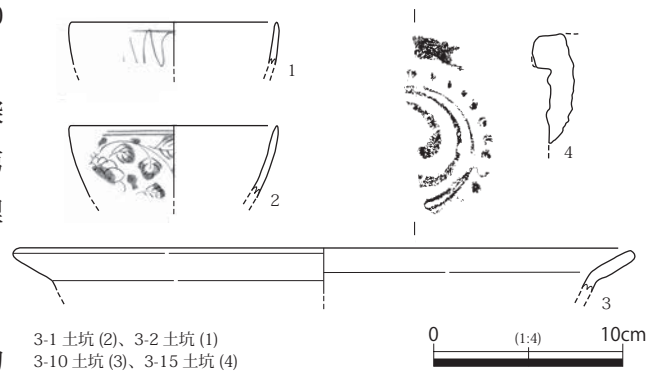


図30 土坑群2 出土遺物実測図



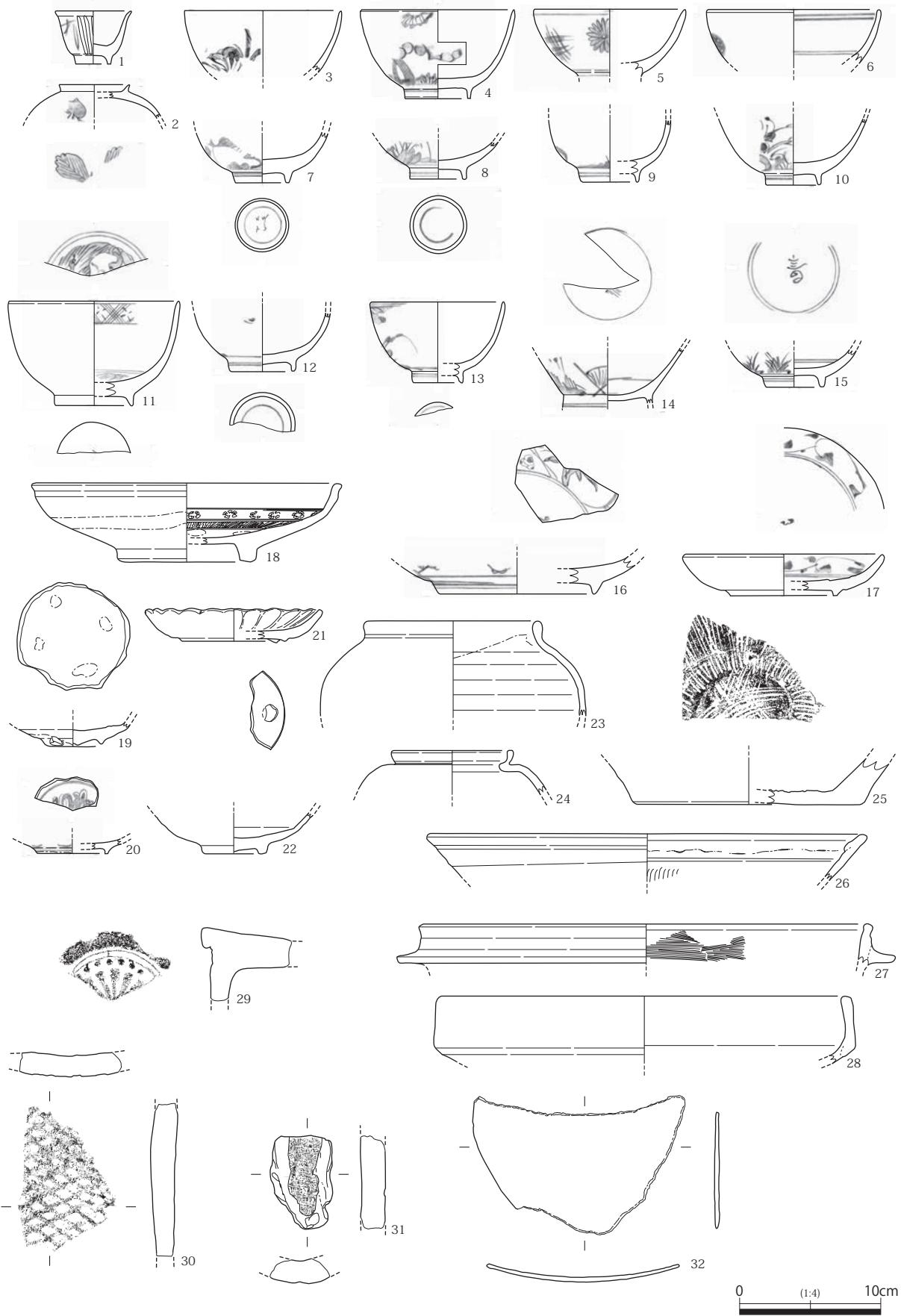


图31 第1a~2a層 出土遺物実測図1

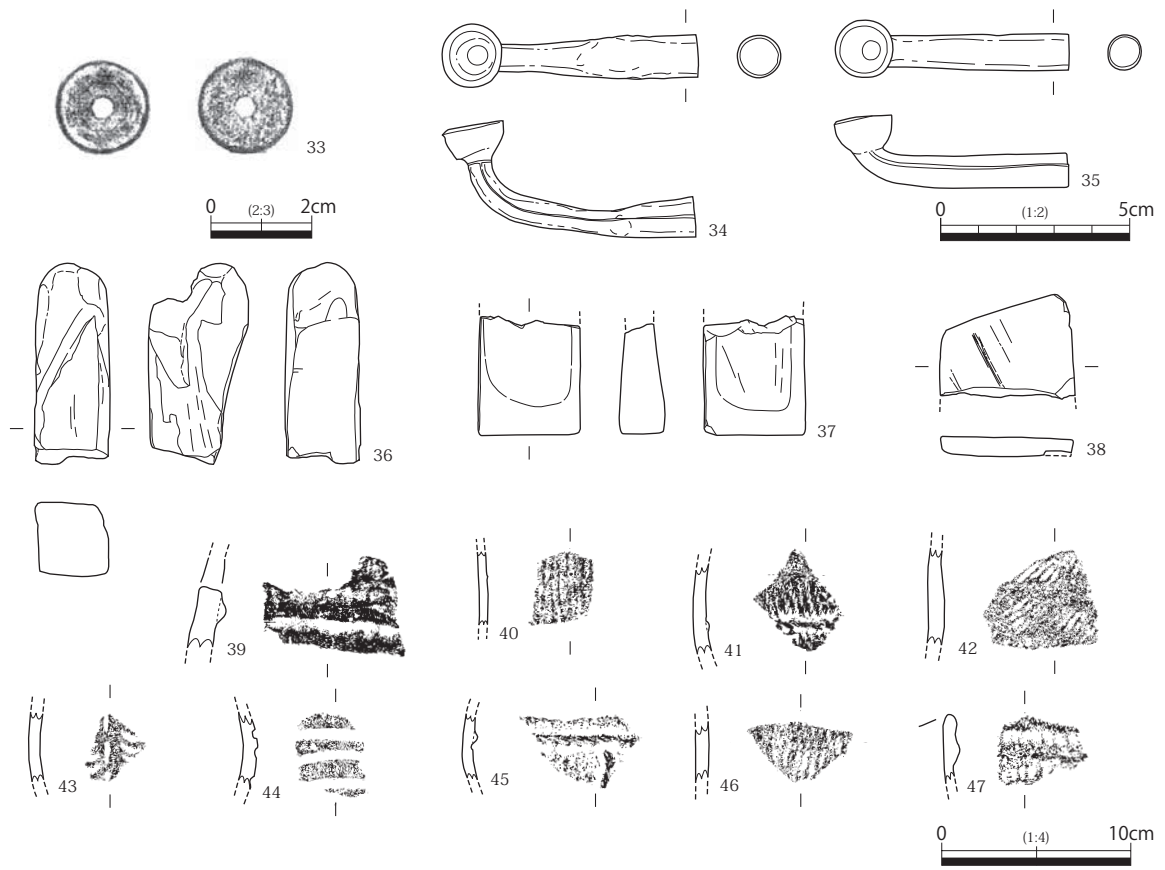


图 32 第 1a ~ 2a 層 出土遺物実測図 2

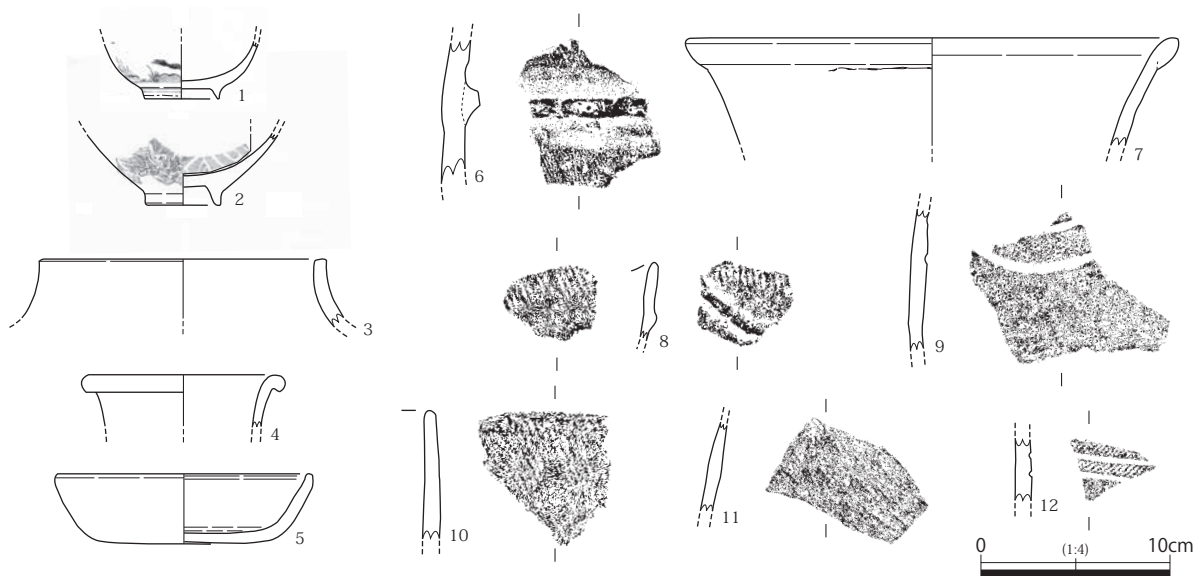


图 33 第 1b 層 出土遺物実測図

## 第2節 第2面の遺構と遺物

第2面は近世にかけて形成されたと考えられる耕作面である。耕作面の上面は第1b層によって被覆され比較的残りが良いが、調査地北東の5・6区では破堤流によるものと考えられる浸食が確認される。第2面は、第3a層を広い範囲で被覆する第2b層の供給以降に行われた耕地開発を示す遺構面であるが、開発過程においても小規模な氾濫堆積物の供給が幾度かあったようで、第2面として捉えることのできる遺構面が複数確認される場所もある。調査では、第1b層の供給により廃絶した最上部の耕作面を第2面として捉えることを原則としているが、第1a層の攪拌などによって第2a面（場合によっては第2a層自体）が残存していない場所では、必ずしも同時期の状況を確認できていない場合もある。

### 1. 坪境

2区に位置する坪境交点から3方に延びる坪境畦畔が確認されたが、二十九・三十二ノ坪境は第1面段階の溜池（2-1溜池）掘削により、残存していなかった。三十一・三十二ノ坪境にあたる2-11坪境畦畔は長池の北側上端で確認されたが、畦畔南側の下端は明瞭でない。この2-11坪境畦畔と、二十九・三十ノ坪境にあたる2-10坪境畦畔（図版15-4）との間には約2mのズレが生じている。図35のA地点における断面観察では、2-11坪境畦畔が第3面以下の坪境に比べて北に寄っている状況が看取できるため（図34）、このズレについては、長池の堤防を兼ねた2-11坪境畦畔によって生じているものといえる（図版15-3）。長池については、崩落や自然埋没に伴って行われた浚渫によって規模が拡大していったと考えられ、最終的な平面形状は第1面段階のものとなっている。したがって、当面ではその存在を攪乱としてしか確認できず、長池の掘削がいつまで遡るものかは不明であるものの、2-13畦畔と2-11坪境畦畔の接合点付近からは2-5樋管が検出されている。付近では第1a～2a層が連続しているため、2-5樋管の帰属面は不確かではあるが、検出標高に加え、2-5樋管の設置箇所、2-11坪境畦畔が規模をやや縮小することが確認されたため、当面に伴う可能性が高いものと判断した。

2-5樋管は、方形木枠を樋管とするものである（図版15-5）。取水口には平瓦が組み合わされており、平瓦と樋管の接合部には上部に横木が渡されている。北側の水田から坪境畦畔の地下を通して、長池に導水するための施設と考えられるが、長池側は破損が著しく先端部が残存しない。第1面段階の浚渫な

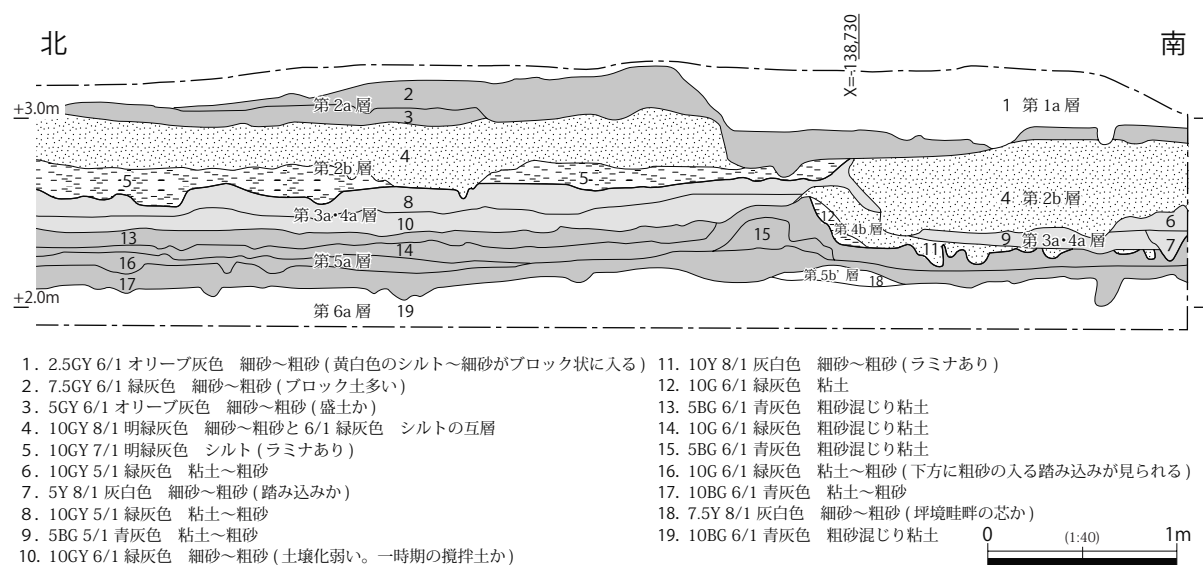


図34 三十一・三十二ノ坪境 断面図 (A地点)



図35 第2面 平面図

どによって削られたのだろうか。この2-5樋管の存在と、2-11坪境畦畔の北方向へのズレは、当面における長池の存在を示すものと考えられる。

当面の段階における長池の規模を想定してみると、東端については、2-16畦畔より東方に2-14、2-15島島が存在することから（両島島は2面の開発当初に設置されたと見られるが、その廃絶時には削平されて平坦化していたことが想定される）、2-16畦畔を越えて東に広がることは考えにくい。2-5樋管の存在から、この位置までは開口していることがわかる。南端については、南側から延びる条里畦畔が接続するはずの長池堤防が確認されていないことから、第1面段階のものよりも、幅を狭くすることが想定できよう。また深さについても、第1面段階に比べてかなり浅いものであった可能性が高い。第1面の成果で述べたように、長池の南側にあたる1区には大規模な島島群が確認されている。仮に第2面の長池が大規模なものであれば、島島の芯となる第1b層の供給によって埋没した可能性を考えなくてはならないし、第1面での島島群の形成にも大きな影響を与えたはずである。それらが見えないということは、本来小規模な溝状の溜池であったものが、第1b層の供給以後に形成された高燥な耕作地への用水の確保という必要性から浚渫・再掘削され、大規模化と理解したい。

2-12坪境畦畔については、5区北側において部分的に第1b層の著しい浸食を受けている。この浸食の南北で坪境畦畔にわずかなズレが認められ、この地点に第1面でも述べた〈第3面から踏襲される水口〉が存在していた可能性が高いが、確認は不可能であった（逆に言えば、水口があったからこそ氾濫流によって付近が浸食されたと考えることもできる）。

## 2. 水田

各坪において畦畔が確認された。調査面積の狭小な二十九ノ坪においては南北方向の畦畔が1条検出されたが、それ以上の状況は不明である。

三十ノ坪においては、局所的に第1b層に被覆された場所もあるものの、大部分は第1a層の攪拌により遺構面の残存状況が悪い。5-18、5-19畦畔についても上部が削平され遺存状態が悪いが、通常の畦畔に比べやや幅が広く、東西方向の主軸畦畔ではないかと考えられる。畦畔間隔は約17mを測り、長地型などの典型的な地割が導入されているとは考えにくい。5-18畦畔と三十・三十一ノ坪境の接点では5-22暗渠が検出された（図版15-6）。瓦質の土管を4本連結して導水管としたもので、北→南への導水に用いられたものと考えられる。北側の取水口には直径15～40cm程度の礫が3点置かれていた。閉塞石であろうか。瓦質管内部は第1b層と考えられる砂礫によって埋没していた。三十一ノ坪に関しては東西を主軸とした畦畔が確認されており、その間隔は約16mとなるようであるが、検出範囲

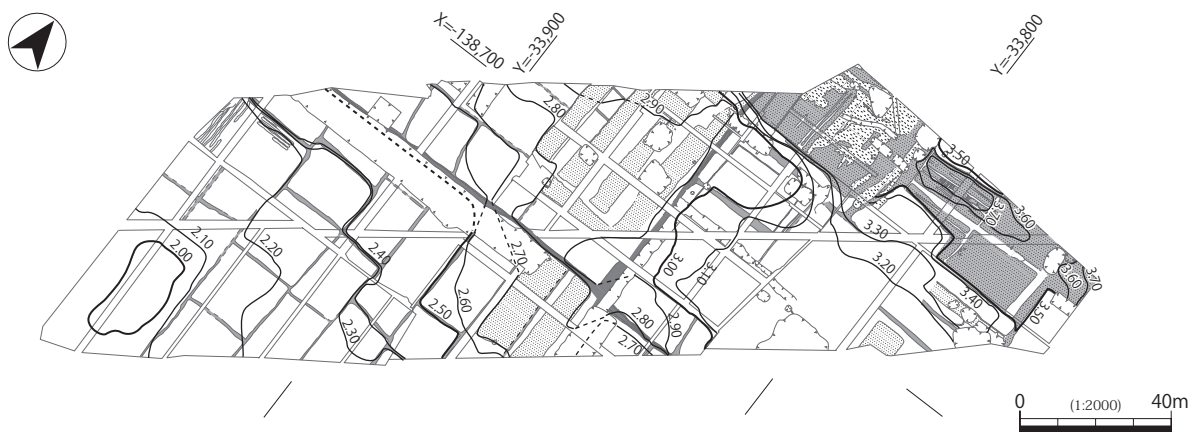


図36 第2面 等高線図

が狭く詳細は不明である。三十二ノ坪では南北方向を主軸とする直線的な条畦畔が見られるが、その間隔は第3面で確認された長地型地割とは異なり、約11mの等間隔をとらない。ただ、約19～20mを測る1-31、1-34畦畔間と、2-16畦畔から二十九・三十二ノ坪境間を除けば、他の南北畦畔の間隔は約14mを単位として揃えられているようである。

また、図36において、T.P.2.3～2.4mの等高線が重複するように平行する状況が見られるが、これより北側には第2a面の水田面の下に、基盤層である第2b層が比較的厚く確認される。第2b層の供給状況が直上の耕作面の地形形成に直接的に反映されていることがわかる（図版15-7）。

### 3. 島畠

南北の坪境に沿って三十一・三十二ノ坪に島畠が集中する。島畠上部は第1面の耕作により削平されていたが、第1a層の除去面において、島畠の芯となっている氾濫堆積物（第2b層）が擬似畦畔状に確認できた。5-13島畠を除いた島畠は南北に長軸を持っている。三十一ノ坪では島畠の芯となる氾濫堆積物（第2b層）が50cm以上の厚さで供給されており（図37）、三十二ノ坪でも25～45cmの厚さで確認できる（図38）。このことから第2b層が北方の讚良川を供給源として、坪境沿いに厚く堆積した状況が想定できる。5-13島畠のみ東西方向に長辺を持つのは、2-11坪境畦畔（三十一・三十二ノ坪境）の影響であろうか。最も西方に位置する5-10島畠は、第1b層に被覆された島畠の肩部が確認されるが、島畠東側に沿って5-23溝が掘削されている状況が確認された（図版15-8）。5-23溝は、第1b層で埋没していたことから耕作面廃絶時には開口していたことが分かる。5-10、5-11島畠間の水田に設けられた東西畦畔は5-23溝に切られており、少なくともこの水田に対する導水施設ではないようである。排水のための溝とも考えられるが、水田耕作土の下層には透水性のいい第2b層が厚く存在し

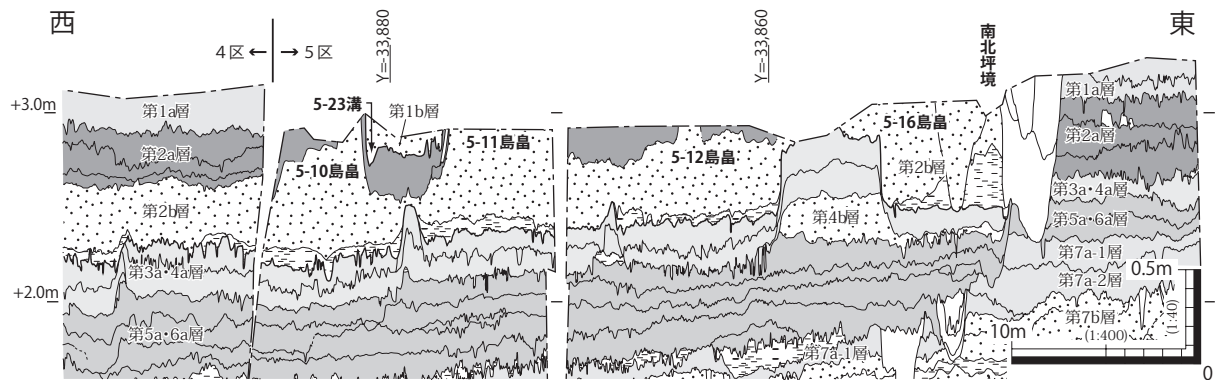


図37 X=-138,700ライン 断面図

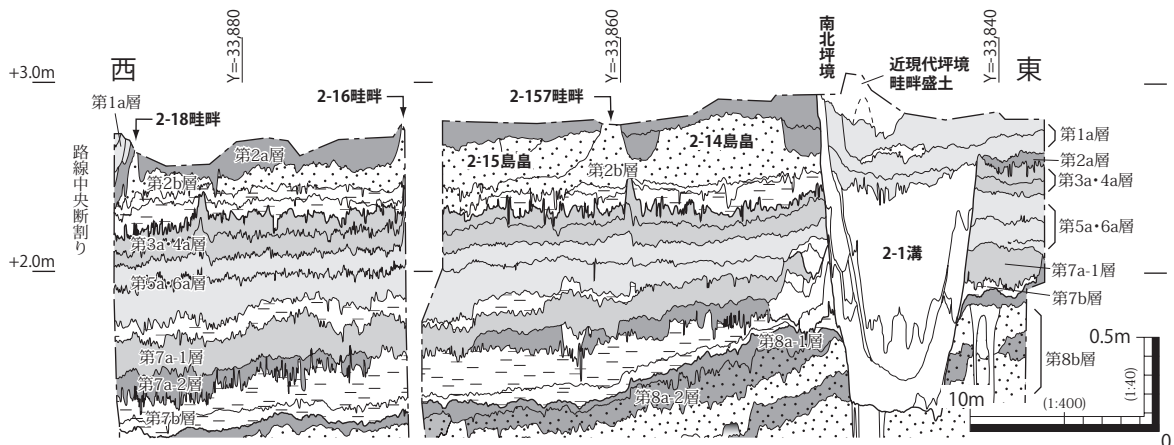


図38 X=-138,740ライン 断面図

ており、溝を掘削してまで排水する必要性は考えにくい。島畠からの落水を制御するための溝であろうか。三十二ノ坪の島畠（2-14、2-15 島畠）はあまり高くなく、第2b層供給後すぐに造成されたものの、第2面の廃絶時には削平されて水田化している（図38）。このことから、耕作主体者の水田志向が看取でき、氾濫堆積物を芯として盛り上げた島畠が、氾濫罹災後の水田面復旧を目的として副次的に造成されたものであったことが窺える。

#### 4. 畠地

三十ノ坪の北部では、ひときわ高い耕地が確認された。層上面は第1a層の攪拌により削られているものの、標高3.5～3.7mを測り、調査地南西端の水田域との比高差は1.5m以上となる（図36）。耕地内には大小の溝が規則的に掘削され、畠地としての利用が考えられる。6区の東端付近から南西方向には、基盤層である第2b層が厚く堆積していることが確認された（図版2-2）。おそらくは6区北東付近での讃良川の破堤と供給された砂礫により、讃良川堤防に沿うように南北約40m幅ほどの微高地が形成されたのであろう。導水の難しい微高地上が畠地として利用された状況が考えられる。

一方で、畠地の西半は第1b層を供給した氾濫流によって著しく浸食されている（図版16-1）。北方ほど深く浸食されている上に、Y=-33,800ライン以东には浸食が見られないことから、この付近で堤防が決壊し、氾濫流が畦畔や島畠などに沿いながら南西流したのであろう。天井川化した讃良川は、調査地周辺への氾濫被害を頻繁にもたらしており、堤防の決壊箇所はその都度変化している（図39）。低地部における治水は困難を極め、開発者は堤防の修理や耕作面の復旧に追われたことであろう。

畠地上に認められる溝群は、いずれも第1b層で埋没していることから耕作面廃絶時に開口していたことがわかる（図版16-3・4）。溝は畠地上を大小に区画するかのよう配されており、明瞭な規則性が認められる（図39）。溝群中央部を東西に延びる6-181溝は、数次にわたる埋没と再掘削が行われた後、最終的に第1b層によって埋没している。幅約2m、深さ0.3mと、ひときわ規模が大きく、畠地の中央部を東西に横断するこの溝には、南北方向の溝が直角に接続し、畠地は大きく4つ（a～d）の〈大区画〉に分割される（以下、この区画を構成する溝を大区画溝と呼称する）。この大区画は、畠地の形状自体が不定形であるため南北方向については不統一だが、東西方向は約20m幅に統一されている。大区画の中はさらに東西方向の溝によって南北1.5mほどの小区画に分割されている（小区画溝）。

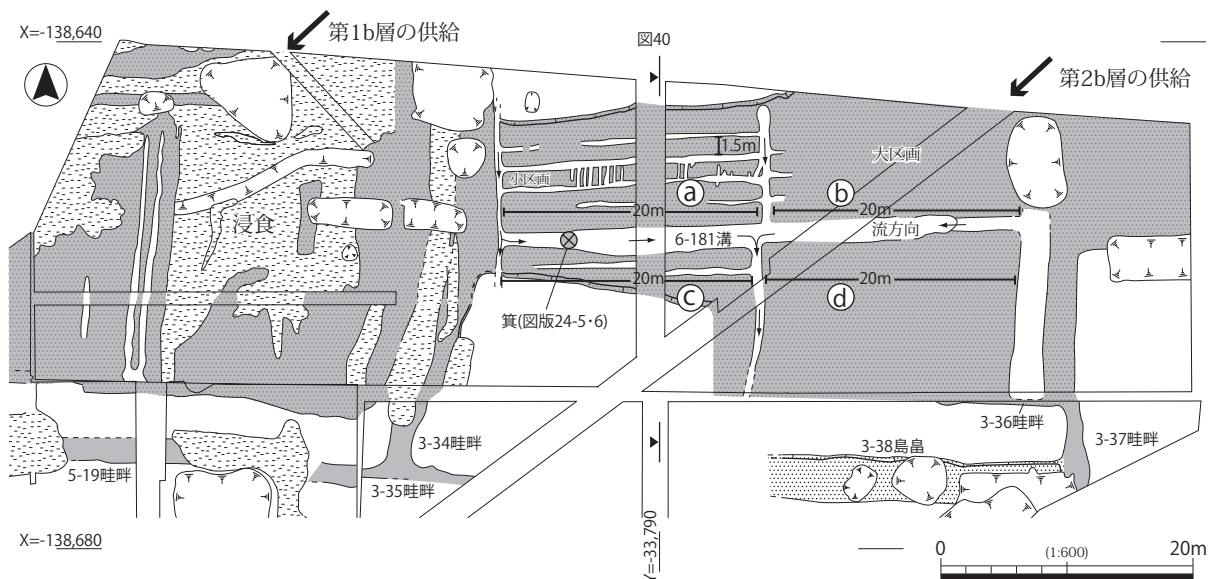


図39 6区 畠地範囲 平面図

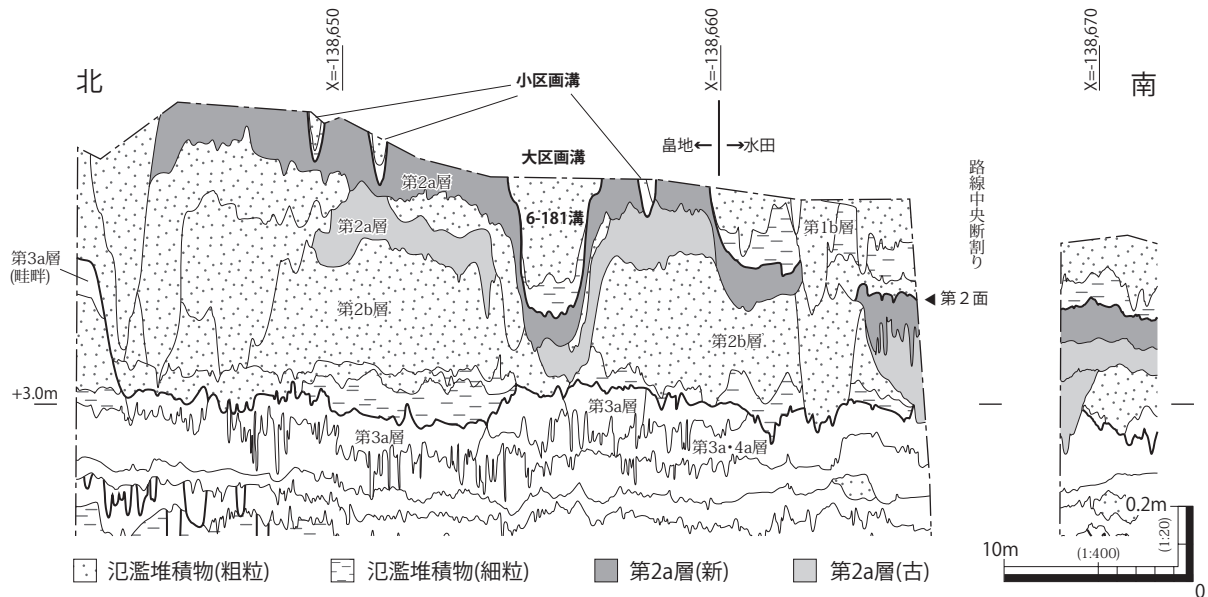


図40 溝群 断面図 (Y=-33,790 ライン)

小区画溝は、畠地上を第1b層が被覆するa区画で特に顕著に検出されているが、c区画でもわずかに見られる。さらに、小区画内には部分的に南北方向の溝群が確認された。これらは深さ3～4cmと浅く、掘方も明確でないことから畝間溝と考えられる。

畠地上に見られる溝群について、遺構の形状や配置、相関関係から、大区画溝・小区画溝・畝間溝の3種に分類した。これらの溝は当然ながら畠地上で連携して機能するが、その機能については灌漑用の配水路と、畠地の高燥化のための排水路の2つの可能性が考えられよう。そこで各溝の底面標高を比較してみると、畝間溝→小区画溝→大区画溝の順に標高が低くなっていることが分かる(図40)。各溝間の接続点は段差を持っており(図版16-2)、比高は、畝間溝—小区画溝で5～10cm、小区画溝—大区画溝で10～25cmである。この畠地において、実際に作付けが行われるのは小区画内の畝間溝に挟まれた畝であることは疑いないが、各溝底面の比高差は溝による作付け位置への導水が不可能であることを示しており、これらの溝の機能については、畠地の高燥化を促進するための排水路と考えられる。同時に各溝によって集水した水を水田面に導水する役割も想定できよう(図39)。これらの溝群からの遺物の出土はほとんどなかったが、6-181溝からは竹で編んだ箕が出土している(図版16-5・6)。

## 5. 足跡列

三十ノ坪の中央部から東部にかけては、部分的に第1b層に被覆された水田面が良好な遺存状況を見せており、3-37畦畔の東側(B地点)では、水田面に残された足跡列が確認されている(図41:図版16-7・8)。足跡列は7条が確認されているが、その大きさ、歩幅などは近似しており、おそらくは同一人物のものと考えられる。歩幅40cm程度と狭いものが多く、方形の水田形状に沿って規則的に足跡列が延びる様子は、何らかの農作業によって残されたものであることを推測させる。各足跡列の間隔は南北で約0.5～0.8mとなっており、耕作物の作付け間隔などを考える上で重要な資料である。

東大阪市池島・福万寺遺跡では、15世紀末と考えられる水田面(第3-2-1面)で田植えの際のものと考えられる足跡列を検出している。これらの足跡列は0.5mほどに開いた両足が短い間隔で連続するもので、足跡列間の間隔は1.0～1.2mとなっている。(大文セ2001b)。池島・福万寺遺跡では、大規模な発掘調査によって多くの足跡が検出されており、農耕具痕とともに詳細な分析も行われている(江





図41 足跡列 平面図

浦 1992)。また、静岡県上反方遺跡でも、当遺跡の検出例に近似するような「くの字」に屈曲して延びる足跡列が報告されている（静岡県埋蔵文化財調査研究所 1995）。担当者は民俗例にある「コの字形廻り植え」を推測させるものとして、田植え作業との関連を示唆している（ただし、この足跡列と同一面では稲株痕が検出されており、根株の張った様子からは、これらの稲が十分に育っていたことがわかる。そうすると、田植えから稲が育ち氾濫被害に遭うまでの長期間にわたって、足跡が水田面に遺存した状況を考えなければならず、田植え作業の際についた足跡とするには疑問が残る）。

## 6. 小穴群

第1b層に被覆された3-34畦畔の東側（C地点）では、径5～10cmの小穴が多数検出された（図42：図版17-1～4）。小穴は4～8基が一単位となって直線状に並ぶかのように見られ、その規模と水田面での検出、規則的な並列性から稲株痕ではないかと考えられた。しかしながら、密集しすぎていること、3-34畦畔の肩部にまで分布が認められること、小穴底部（稲株下部）から放射状に伸びる根（およびその痕跡）が確認されないこと、小穴内に水田面を被覆する第1b層が層理を乱すことなく充填されていることなど、稲株痕とするにはやや不自然な点が認められた。そこで、小穴内部と耕作土（第2a層）の堆積構造を確認するため、軟X線撮影による断面分析を実施した（第7章第2節）。ここで、結果のみを述べると、検出された小穴群は堆積層の変形状況から第1b層供給以降に起こった地震によって形成された変形構造によるものと考えられ、稲株痕である可能性は低いことがわかった。

水田調査における稲株痕の検出は、移植・直播の栽培方法を検討する上で注目されているが、発掘調査で確認された確実な例は意外と少ない（先述の、静岡県上反方遺跡で検出された稲株痕の下部からは、根が放射状に伸びている状況が認められる。珪酸体分析も行われており確認された遺構が稲株痕であることは疑いない）。今回当遺跡で確認された小穴群とその分析結果は、水田面に刻まれる地震痕跡の多様性を明らかにするとともに、発掘調査における稲株痕の検出と認知には、慎重な検討が必要であることを示すものといえよう。

## 7. 包含層出土遺物

第2a～2b層の出土遺物について図43・44に示した。1は漆器椀である。高い高台を持つが、高



図42 小穴群 平面図

台内の挟りは浅い。2は水注の蓋。3～9は陶器の碗・皿である。いずれも肥前系と考えられる。4は見込みの3方に胎土目が見られる。また、底部外面中央には方形の記号が墨書される。10・11はいずれも高台無釉の天目碗であるが、高台に沿って体部を打ち欠き円盤状に加工している。類例は近世遺跡で散見するが、用途や性格は不明。当遺跡のほかに池島・福万寺遺跡など、耕作遺跡で見つかることから、鳥獣などを狙ったつぶてとして使用された可能性もあろうか。12～15は輸入磁器。12・13は染付で、見込みを蛇の目釉剥ぎする。無釉の高台内には墨書があり、13には、「上」という文字が書かれているように見えるが、欠損のため不明（熊・豊田1996）。14・15は白磁である。16は黒色土器の皿。内面黒色で、貼り付け高台は丁寧な作りである。17～19は瓦器椀。20～25は土師器。26～29は陶器、30～38は瓦質土器、39・40は須恵器である。41・42はそれぞれ篆書と真書の天聖元寶。北宋銭で篆書と真書の2書体が用いられるものは同銭貨を始めとしている。初鑄は1023年。43は皇宋通寶で、初鑄は1038年。44はキセルの吸口で、内部には羅字（竹管）が残存していた。表面には製造時の接合線が見える。45は木製の糸巻きである。欠失部が多いが、中央の十字に組み合わせる板材が残っているため、全体形状がよく分かる。46～48は瓦。49は埴輪である。50～69は縄文土器。細片ばかりで確実ではないが、第1a層や第1b層に含まれるものと同じく、船元式から北白川上層式と考えられるものが混在し、縄文時代中期～後期にかけての資料と考えられる。第2b層の供給に伴って混入した遺物と捉えることができよう。当調査地の北東に位置する03-1調査地では同時期の縄文土器が多く出土している（大文セ2008a）ほか、讃良川の上流1kmには縄文時代中期の遺物を多く出土した讃良川遺跡が位置しており、当調査地で出土する縄文土器は、これらの遺跡から河川氾濫によって流入したものである可能性が高い。

以上のように、縄文土器や埴輪など大幅に時代の遡る混入遺物や、2や9など、逆に時代の下るものも一部に含まれるが、主体は16～17世紀にかけての遺物であると考えられる。なお、第2b層からの出土遺物は少なく、3や42の他は縄文土器片ばかりである。3は瀬戸美濃系の皿と思われるが、小片であり時期は不明。ただし、中世末を遡ることはないと思われるため、第2b層供給以降、第2面の開発期間について、中世末から近世までを中心とした時期を考えたい。

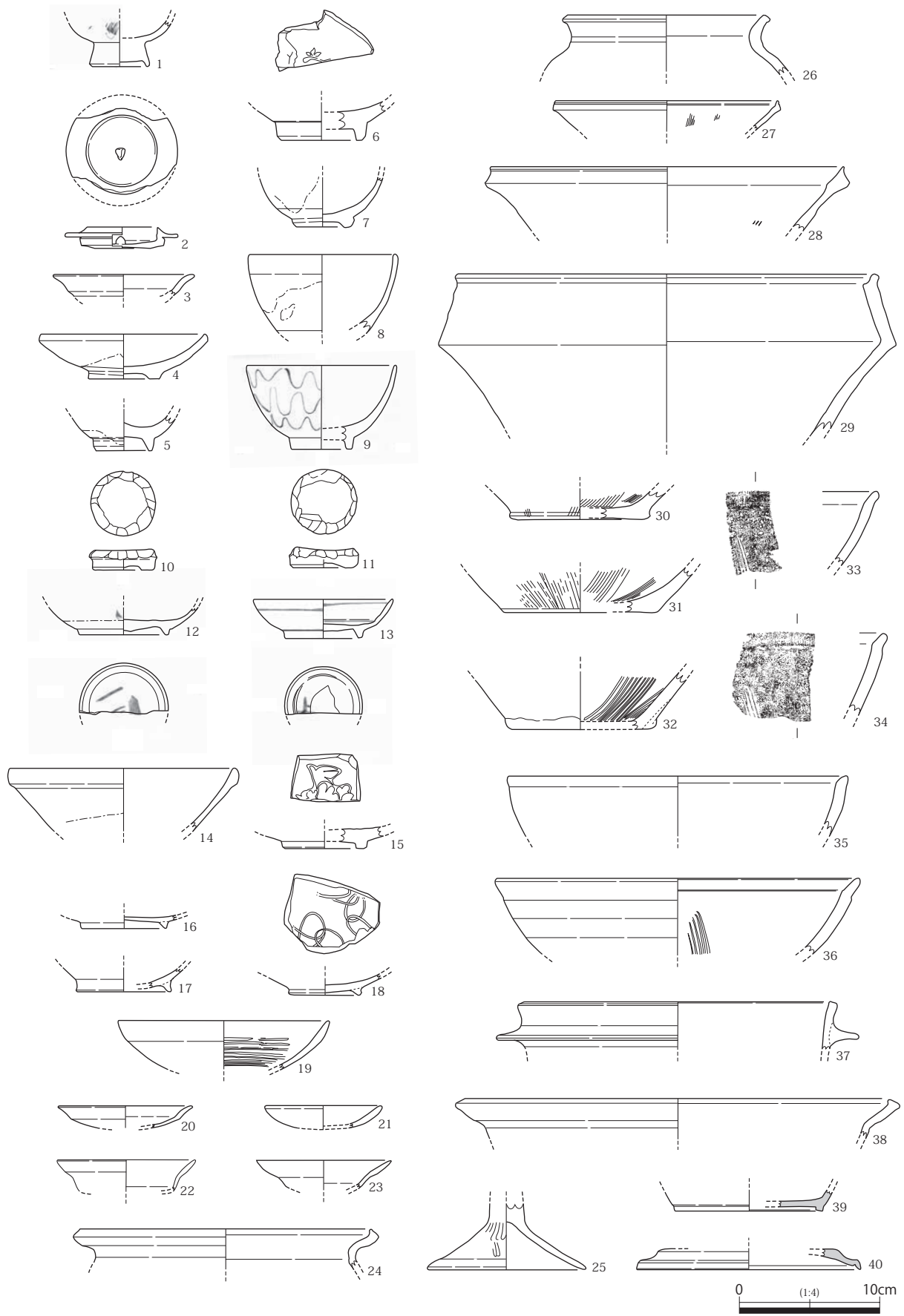


图43 第2a·2b層 出土遺物実測図1

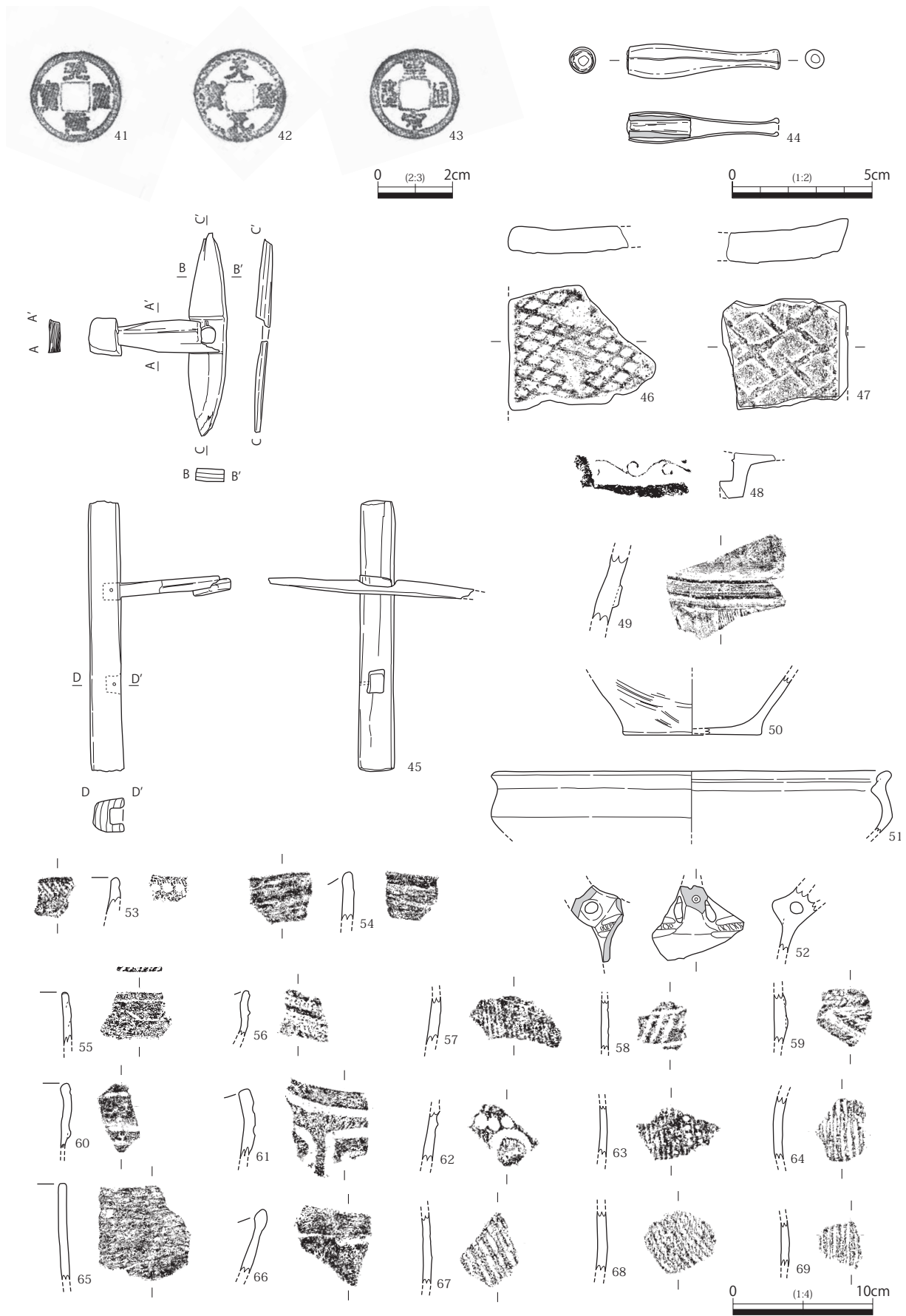


图 44 第 2a·2b 层 出土遗物实测图 2

### 第3節 第3面の遺構と遺物

耕作層である第3a層は、調査地南西端の1区と4区西側を除いて、氾濫堆積物である第2b層に被覆されて良好な遺存を見せる（図版18-4～6）。そのため、調査地のほぼ全域で第3a層上面での畦畔・島島などの遺構を検出することが可能であった。特に5区では島島が完全に埋没するほど厚く第2b層が堆積し、当時の耕作地の状況を良好に遺存している。

反面、基盤層となる第3b層の供給は極めて局地的で、3区においてわずかに見られるのみであり、それ以外の場所では、第3a層と第4a層が連続した土壌層として観察され（特に堆積物の少ない調査地西方では、第3a層～第6a層までが連続した土壌層として確認される）、肉眼での判別は困難であった。第3b層の供給が小規模であることは、第4面の開発以降、第3面が廃絶するまで、水利系統や地形状況に大きな変化がなかったことを示す。つまり第3面の開発は、第3b層の局所的な供給があった3区を除いて、第4面の耕地状況をほぼ完全に踏襲して行われたことが想定される。そのため第4面の詳細な調査については、3区以外では実施しなかった。

#### 1. 坪境

畦畔として検出された。著しい浸食を受けた畦畔が多く確認され、第2b層を供給した氾濫被害の凄まじさを物語る（図版17-7・8、18-1）。2-23坪境畦畔と2-25坪境畦畔に関しては、第1面の溜池掘削によって大半が失われている。三十・三十一ノ坪境にあたる2-24坪境畦畔の南半部についても、第1面で検出された5-2溝の掘削時に削られてしまっているが、北半部は良好な状態で検出された。

2-24坪境畦畔には、東西の導水径路が設けられている（図45：図版18-2）。5-46畦畔と5-47畦畔間の隘路を通じて、三十ノ坪から三十一ノ坪への導水を行うもので、三十一ノ坪内では南西方向に屈曲

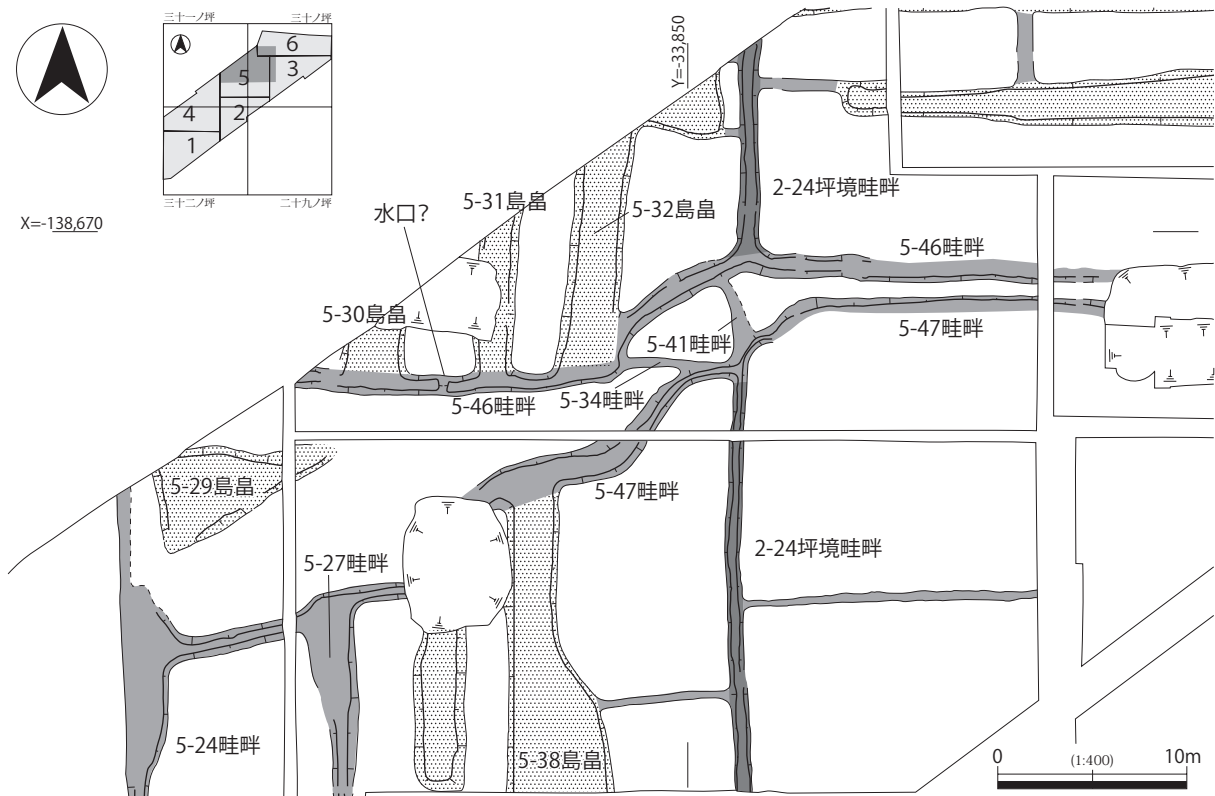


図45 2-24坪境畦畔水口 平面図

しつつ、徐々に開いていく。両畦畔間は溝状に掘り込まれることなく平坦であり、両畦畔を繋ぐ畦畔(5-34、5-41 畦畔)も検出されている(図版 18-3)。このことから、少なくとも第 3a 面の廃絶時には、両畦畔間は導水径路でありながら、狭隘な水田としても利用されていた状況がわかる。

条里地割に則って方位に合わせた直線的な畦畔や島島の中で、この導水径路の屈曲した形状は異質であるが、導水径路の設置は、第 5 面の廃絶後の耕地復旧作業ですすでに行われた可能性が高い。導水径路の南北には島島が確認される。これらの島島は、いずれも第 4b 層を芯としているが、その主軸の通りは導水径路の南北で食い違っている。仮に島島が導水径路に先行した場合には、導水径路の南北の島島の主軸の通りは共通したものになる可能性が高い。

第 4b 層の厚い供給を南北に分断した径路設定からは、計画性と灌漑水利上の重要性が想起される。先述したように、第 1 面においても坪境の同じ位置に水口が設けられており、おそらくは中世末頃と考えられる第 4 面の開発によって水口が設置されて以降、近代、さらには現代に至るまでこの位置が重要な東西の導水径路として機能していたことが窺われる。

## 2. 水田

第 3a 層上面で畦畔が明瞭に検出された。特に 5 区を中心とする三十一ノ坪では、第 2b 層によって埋没した水田が良好に検出された。断面図では、坪境の東西で第 2b 層の堆積状況が大きく異なる状況が看取できる(図 49)。ただし第 2 面の成果において述べたように、第 2b 層の厚い供給は 1 区東端から 4 区南西端付近を結ぶ線の北東側にあり、その線の南西側にあたる 1 区と 4 区の三十二ノ坪側では、第 2a 層による攪拌で畦畔の遺存状態が極めて悪い。そのため、1 区の調査では第 2b 層に被覆される東端において、わずかに 1-39 畦畔が確認されたのみで、4 区も三十二ノ坪では、4-28 畦畔など南北方向の畦畔が 2 条検出されたのみであった。第 2b 層で被覆された調査地北東側では遺構面の残存がよく、2 区の三十二ノ坪では南北方向の条里畦畔(2-28 ~ 2-30 畦畔)が検出された(図版 17-5)。2-25 坪境畦畔と、1 区から 4 区にかけて検出された 1-39 畦畔を合わせた 5 条の畦畔間は約 11 m の等間隔となっており、当坪における長地型地割の採用を示す。これらの水田は西方に下る地形上に営まれてはいるが、各水田面の比高差は 2 ~ 5 cm と非常に小さい。三十二ノ坪内で島島が検出されていないことから、同坪内では北方の讃良川からの氾濫堆積物の影響がかなり少ないと考えられ、平坦化の進んだ地形状況を前提として規格性の高い長地型地割が導入された状況が窺われる。

一方、他の坪では同様の状況は見られず、畦畔間隔が一定しない。三十・三十一ノ坪では島島が多く存在しており、地形的な制約から規格的な坪内地割の採用が難しかったのであろう。ただし、三十ノ坪

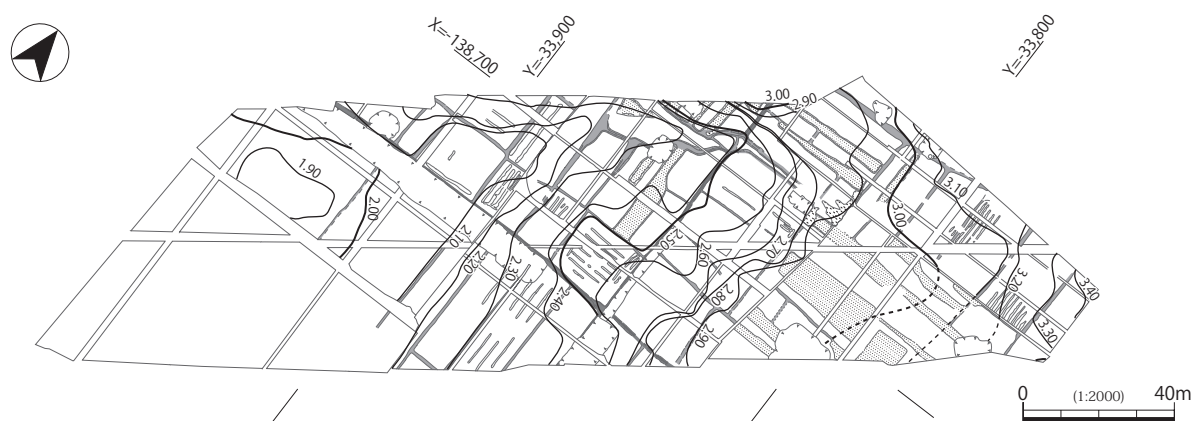


図 46 第 3 面 等高線図



- 坪境畦畔
- 条里畦畔
- ▨ 島畠
- ▨ 洪水による浸食

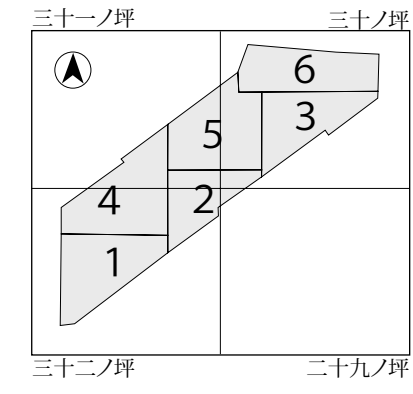


図47 第3面 平面図

の北東部（6区）では、6-182～6-184 畦畔が 15 m 間隔で東西に並ぶ状況が確認され、一定の規格性は見出される。ちなみに 15 m 前後の畦畔間隔は各坪で散見され、二十九ノ坪で唯一検出された、2-20 畦畔と 2-25 坪境畦畔間も 14～15 m と考えられる。また先述の第 2 面の調査成果においては、三十二ノ坪の条里畦畔の多くが約 14 m 間隔で設置されていた。

また、水田面には足跡も確認された（図版 19-4）。大小の足跡からは子供が農作業に参加する様子も想定される。

### 3. 島畠

調査地北側の三十・三十一ノ坪で検出され（図版 17-6）、三十二ノ坪には全く見られない。これは第 4b 層の供給範囲を反映するものであり、それは第 3a 面の標高分布にも表れている（図 46）。三十ノ坪では一部を除いて東西方向、三十一ノ坪では南北方向に造成されているが、これは第 4b 層の供給が異なる 2 つの方向から行われた可能性を示す。すなわち、6 区の西側、5 区の北西側で確認される島畠は、北方の讃良川を供給源とする氾濫堆積物（第 4b 層）を盛り上げたものと想定できるが、3 区において検出された東西方向の島畠群の供給源は、これとは異なる可能性が考えられる。仮に讃良川から 3 区に向かって砂礫を供給する氾濫があったとすれば、6 区東側に島畠の存在が想定されるところであるが、この位置には島畠が検出されず、砂礫など粗粒の堆積物自体も少ない。3-224、3-225 島畠など平面規模の大きい島畠が 3 区の南側に検出されている状況からは、各面の多様な農地開発においても水利系統そのものは大きく変更されることがなかった可能性を示し、第 4b 層の供給段階においても、3 区の耕地に導水する東方からの水利系統があったことが考えられる。それを前提として、2-24 坪境畦畔に設けられた導水径路を再確認すると、6 区の島畠群と 3 区の島畠群の間の位置に、導水径路の入口が設定されていることに気付く（図 48）。この位置こそ西方への導水と南方への導水を分ける分岐点といえ、それは供給源の異なる第 4b 層の堆積により形成された、極微地形の変化点と理解することができよう。

5-38 島畠（図版 18-8、19-1） 第 2b 層によって完全に埋没しており、後世の攪拌により失われることが多い島畠上の古土壌までが残存していた（図 49）。島畠の構造や周囲の水田を含めた土壌形成過程を考える上で重要な成果といえる。幅は広いところで 5.2 m、高さは 0.4～0.5 m を測る。芯には第

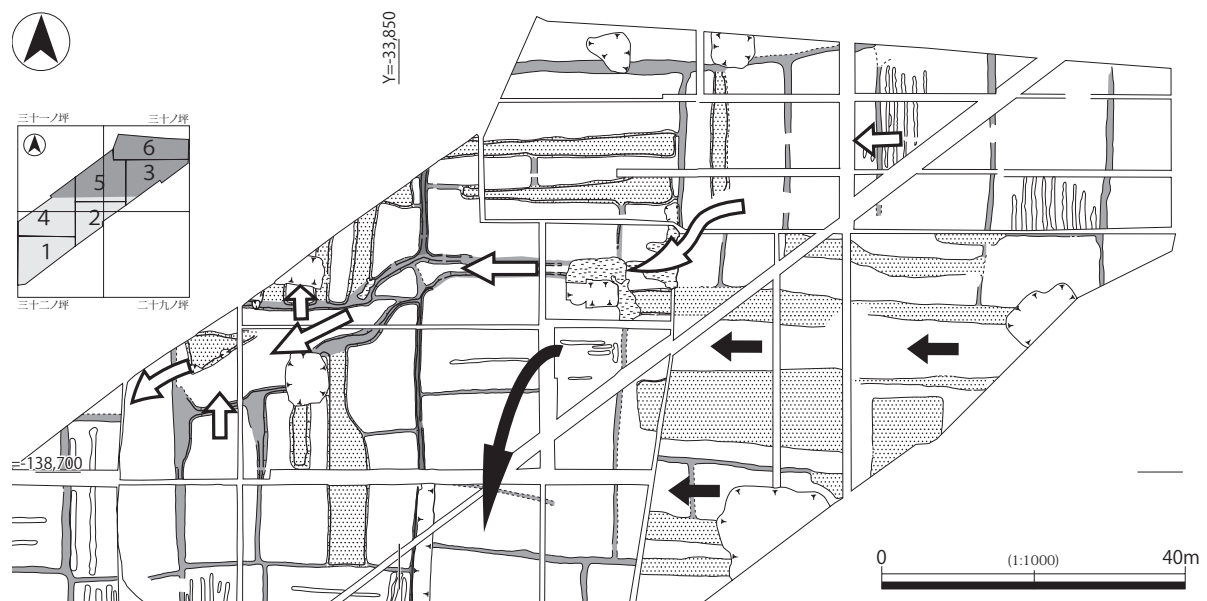


図 48 導水径路 復原図



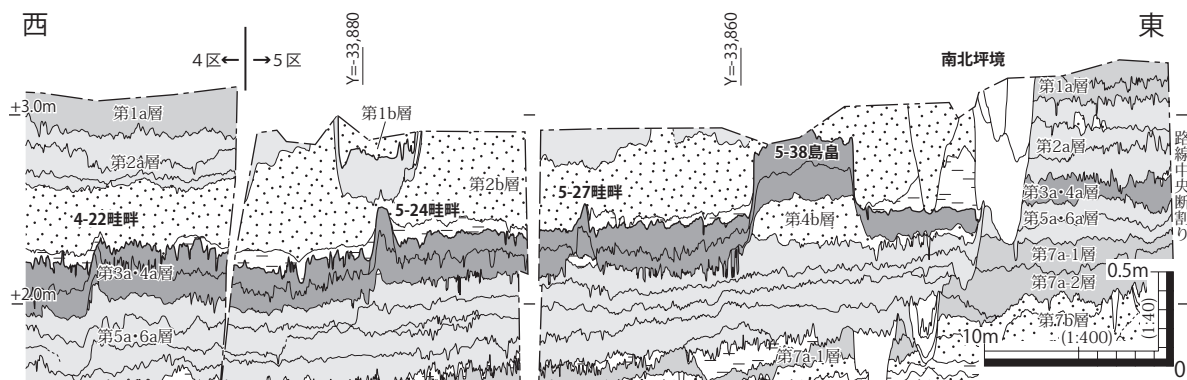


図49 島畠および畦畔 断面図 (X=-138,700 ライン)

4b層が良好に遺存し、その上部に盛土層と耕作土と考えられる古土壌が確認される。上面には南北方向に細い溝状のくぼみが数条確認され、耕作痕跡と考えられる。

3-219、3-220 島畠 第3面の開発過程において新しく造成される島畠である。第3面の開発が基本的に第4面の耕地状況をほぼ踏襲していることは先述した。これは第4b層の供給以降、第2b層の供給まで目立った氾濫堆積物の供給がなかったためであるが、当島畠は局地的に供給された第3b層を芯として造成されている。そのため、第4面の開発時点では存在しなかった島畠が第3面で出現することになる。図50に見るように、3-221 島畠（第4面では3-237 島畠）より南側の耕地では、新しい島畠の出現や畦畔の肥厚などがないため、調査地東方からの小規模な氾濫流が、第4面の3-237 島畠に遮られ、その北側に砂礫を堆積させた状況が理解できる。

なお当調査地において、島畠は下層の第5面以下では確認されず、第4面で初現することになる。

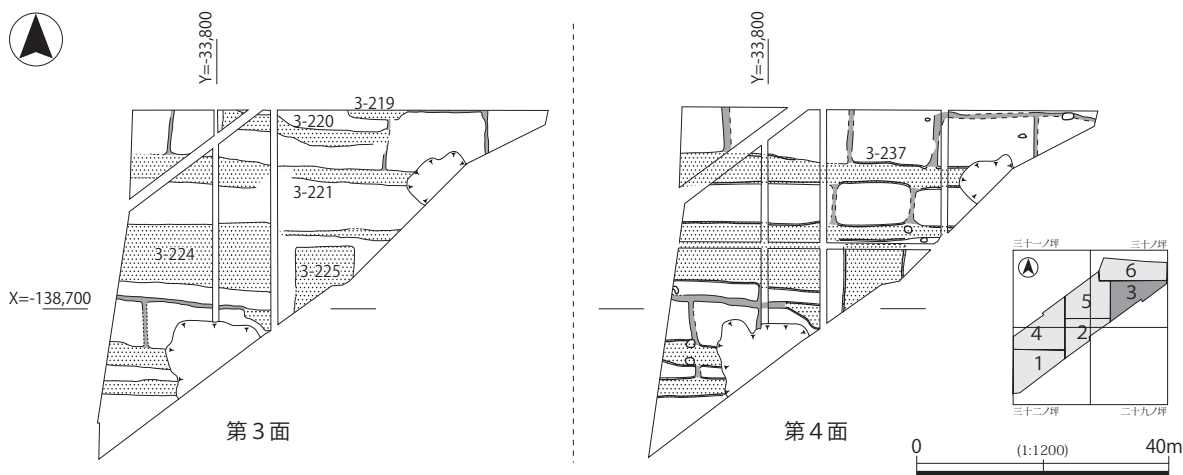


図50 3区第3面および第4面 平面図

#### 4. 溝状くぼみ

1区と3区を除いて、第2b層に被覆されて良好な遺存状況を見せる水田面では、その地表面に溝状のくぼみが多く確認された。これらのくぼみは基本的に等間隔に並び、基本的に水田の主軸（長軸）に平行する。第2b層によって埋没しており、同層の供給時にくぼみが開口していたことが分かる（図版19-3）。ただし、遺構の肩は不明瞭で深さはほとんどない。図51には6区で検出されたものを示した。幅40～50cm程度の溝が東西に1.3～1.5m程度の間隔で並ぶ。深さは0.1m。北側に向かって徐々に浅くなり、X=-138,660付近で確認できなくなる。耕起痕などの可能性があるが、畝の畝間のようにも見えることから、一部の水田で二毛作などが実施された可能性も考えられ、耕作地が氾濫被害にあっ

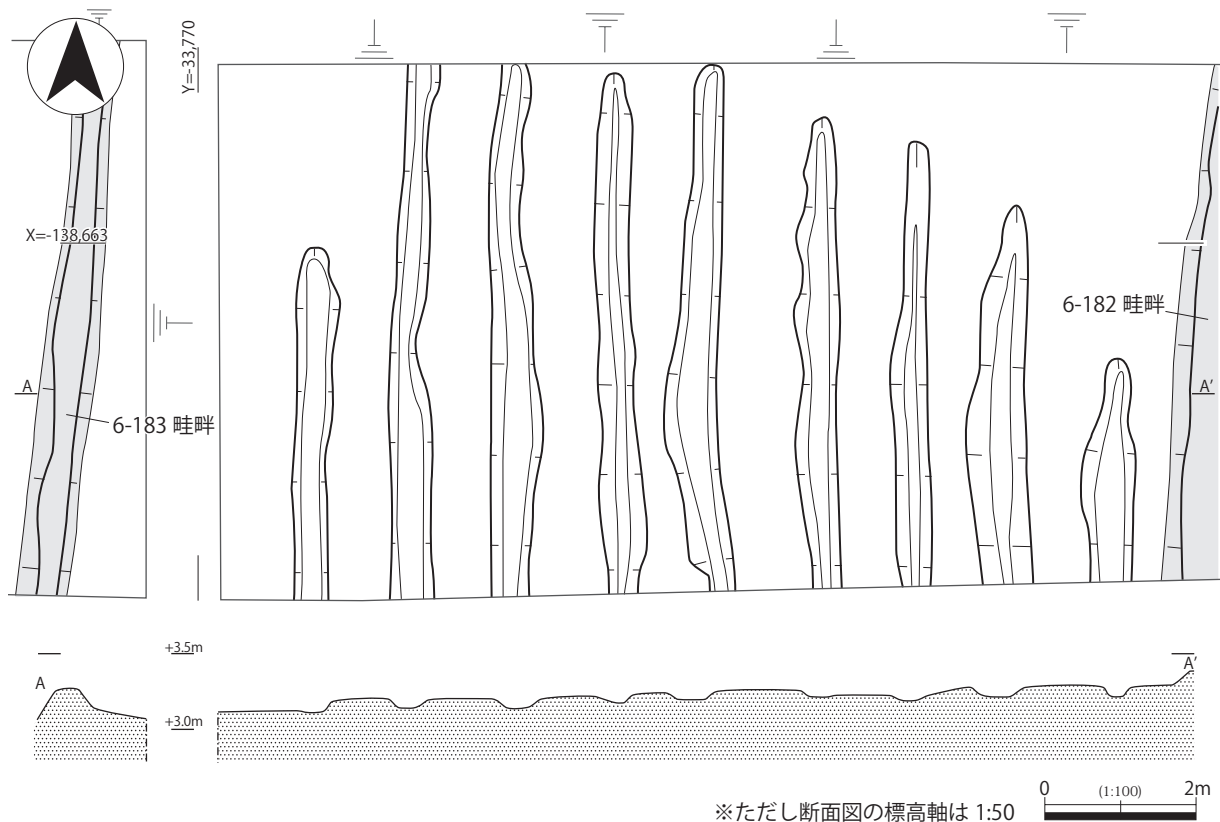


図 51 溝状くぼみ 平面図および断面図

た季節を考える上で注意される。

なお、同様の遺構は東大阪市の池島・福万寺遺跡の第 4 面でも確認されている（大文セ 2001b）。

## 5. 包含層出土遺物

第 3b 層および第 4b 層が認められる場所を除き、連続した土壌層である第 3a 層から第 6a 層までは人力掘削により同時に除去している。そのため図 52 に示したものには、第 3a～6a 層までの幅広い時期の遺物を含んでいる。さらに耕作攪拌などにより、より下層からの混入もあるため、須恵器や縄文土器などかなり遡る時代の遺物も含まれる。

1 は肥前系磁器の鉢底部である。ヘラケズリによって釉剥ぎされた高台畳付には窯詰めの際の砂が付着している。上部が残存しないため確実でないが、17 世紀以降のものと考えられ、当層から出土しているものでは最も新しい。2 は瓦質の摺鉢で、口縁部外面を強くヨコナデする。内面には 7 条のクシ目が入られるが、右側のクシメほど深く深い。3～7 は瓦器椀。12～13 世紀頃の大和型瓦器椀が主体である。8 は黒色土器の底部。内外面ともに黒色化する。9・10 は輸入磁器で、9 は白磁碗、10 は龍泉窯系のものと考えられる青磁碗である。11・12 は瓦質土釜、13 は火鉢である。14・15 は棒状の鉄製品で、上端がかぎ状に曲がる。農耕具の部品と考えられるが、不明である。16～18 は鋤先である。18 は側縁の折り曲げが緩く、鋭角に作る 16・17 とは異なる。19～24 は須恵器、25・26 は土師器、27～30 は縄文土器である。縄文土器は縄文時代中期～後期のものと考えられ、上層（第 1b・2b 層）と同じく、第 3b 層もしくは第 4b 層を供給した河川氾濫による流入が考えられる。

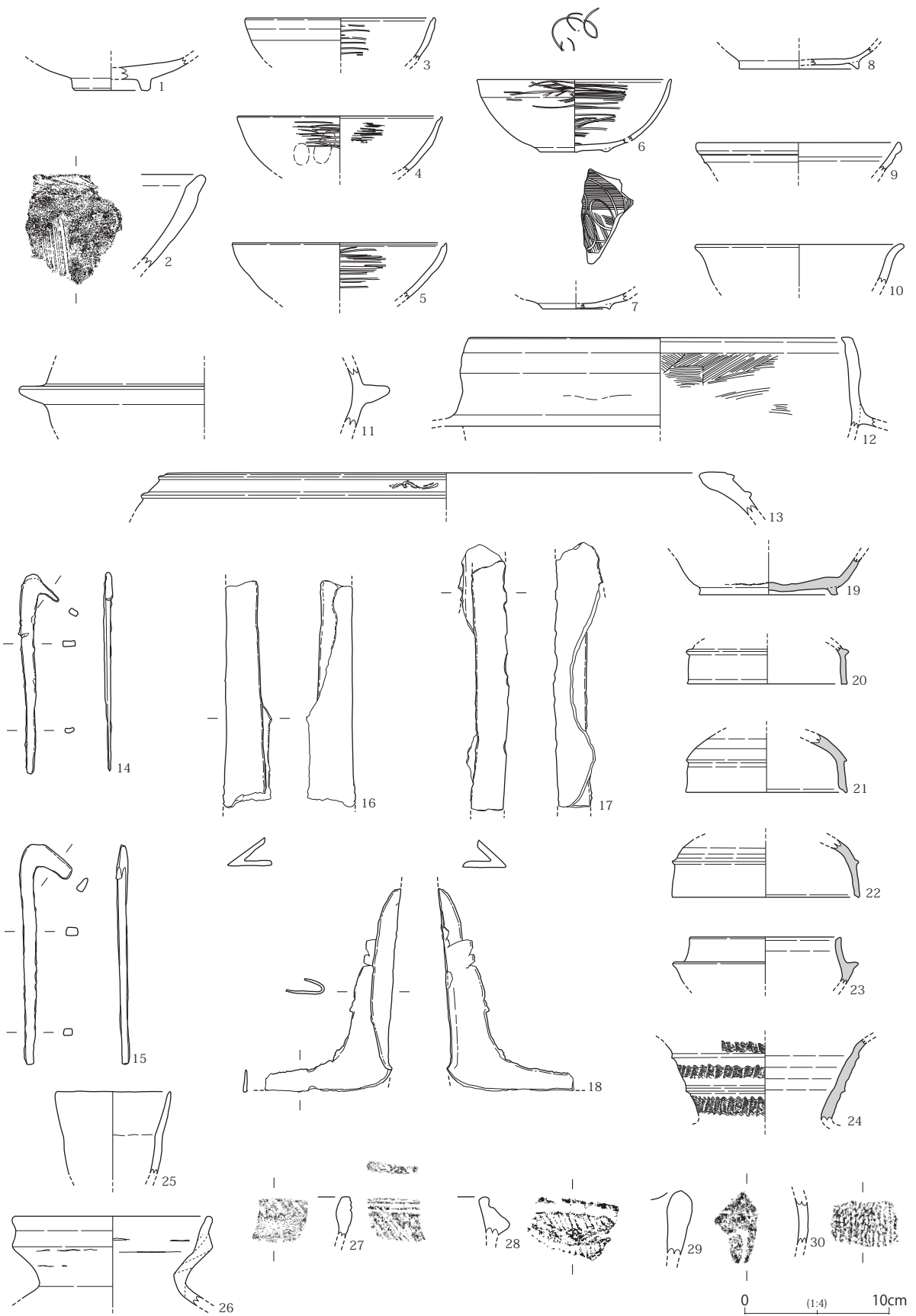


图 52 第 3a ~ 6a 层 出土遗物实测图

## 第4節 第5面の遺構と遺物

第5a層を被覆する第4b層は、調査地北側および東側（3・5・6区）でしか確認されない。そのため、調査地西側の1・4区では遺構面の残存状況が著しく悪く、第5面の詳細な調査は行っていない。また、第4b層の供給範囲においても直上の耕作面（第4面）の利用形態によって、遺構面の残存状況が大きく異なる。第4面において造成された島島の直下では、島島の芯となっている第4b層に被覆されて畦畔の残存は非常にいい（図版19-8、20-1）。しかし一方で、島島ではなく水田面にあたる場所では第4a層による耕作攪拌を受け、第5a層自体が残存していない場所もある。当面の遺構の残存範囲は、第4面での島島分布が直接的に反映されたものといえよう。

### 1. 坪境

5-66坪境畦畔（三十・三十一ノ坪境）を除いて、明確な遺構を確認することはできなかった。また、5-66坪境畦畔についても、高位の三十ノ坪側では上層の攪拌により確認が難しく、低位の三十一ノ坪側において、第4b層に被覆された裾部が確認された状況であり、耕地段差として検出し得たものである。ただし、確認の難しかった三十ノ坪側でも、足跡が坪境に沿うように検出されることで、坪境の平面規模を推定することができた（図版19-5）。

ピット列2（図53：図版19-6）三十一・三十二ノ坪境にあたる場所では、ピットが列状に並ぶ状況が確認された。直径20～40cm、深さ10cm程度のピットが約22mにわたって東西に並ぶ。ただし、周辺は第3a・4a層による攪拌のため、第5a層自体が残存しておらず、本来の掘り込み面は10～20cm程度上位となる可能性がある。中央断割りを挟んで西側に位置するピット（図53左側）には切り合い関係が確認され、補修されながら一定期間設置されていた柵列のような施設を想定することができる。ピット内部からの遺物の出土はなかった。

### 2. 水田

三十一・三十二ノ坪では、直線的な条里畦畔が確認されている。ただし、2区で検出された畦畔（2-32～2-35畦畔）は全て擬似畦畔であり、耕作土層（第5a層）下面で確認されたものである。二十九・三十二ノ坪境の想定位置と2-32畦畔間の距離は約11mであり、南北方向の2-32～2-34畦畔間もそれぞれ11mとなっていることから、三十二ノ坪においては長地型地割が導入されている可能性が高い。これらの畦畔は、枝畦畔である2-35畦畔までも第3a面で検出された畦畔とほぼ同位置に存在しており、第3b層や第4b層などの氾濫堆積物の供給が及ばなかった三十二ノ坪においては、前代の耕地状況を踏襲した開発が継続的に行われていることを物語る（第6面での長地型地割導入の可能性と、それ以降の地割踏襲については第5節参照）。

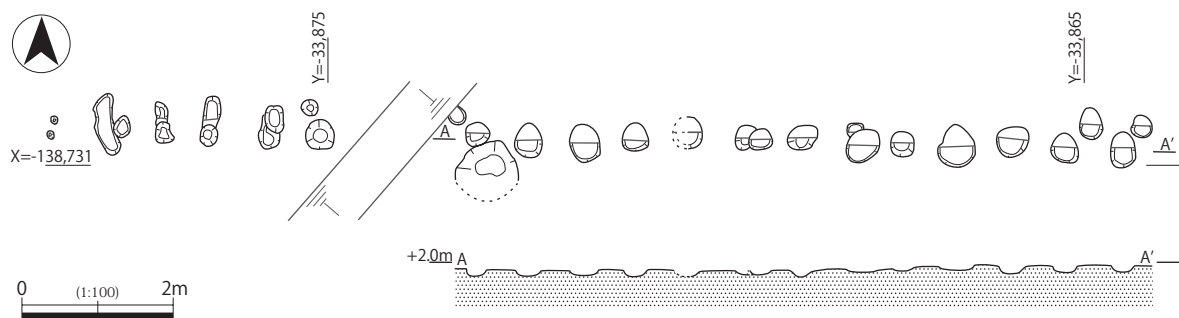
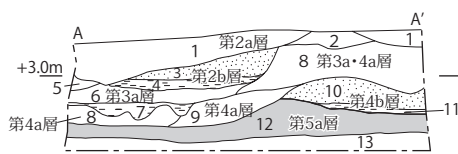
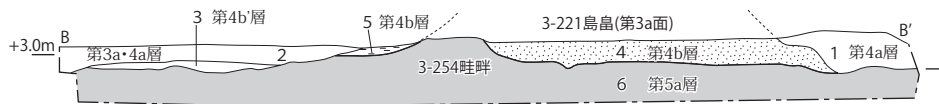


図53 ピット列2 平面図および断面図



1. 10Y 5/1 灰色 粗砂混じり細砂～微砂(径0.3cmまでの礫含む。攪拌弱い)
2. 10Y 5/1 灰色 粗砂混じり細砂～微砂と7.5Y 8/1 灰白色 粗砂～微砂(ブロック土多い。3-35畦畔盛土)
3. 5Y 8/2 灰白色 粗砂～細砂(ラミナあり。上方細粒化)
4. 5GY 7/1 明オリーブ灰色 微砂～シルト(部分的にラミナあり。植物遺体含む)
5. 5Y 8/2 灰白色 粗砂～細砂(ラミナあり。上方細粒化。ブロック土多い)
6. 10Y 5/1 灰色 粗砂混じり細砂～シルト
7. 10Y 8/1 灰白色 粗砂～微砂(部分的にRGあり)
8. 10G 5/1 緑灰色 粗砂～微砂(攪拌強く、締まりが良い。3-221島島)
9. 5Y 7/2～5/1 灰白色～灰色 極粗砂～シルト(締まり悪い。ブロック土顕著。3-221島島造成時の盛土)
10. 7.5Y 8/1～5/1 灰白色～オリーブ灰色 極粗砂～シルト
11. 5GY 7/1 明オリーブ灰色 シルト～粘土(ラミナあり)
12. 7.5GY 5/1 緑灰色 粗砂～シルト(攪拌強い。粘質強い)
13. 10BG 6/1 青灰色 粗砂～微砂(ブロック土多い)



1. 5Y 4/1 灰色 粗砂混じりシルト(径1cmまでの礫含む。砂質強い)
2. 5Y 4/1 灰色 粗砂混じりシルト(径1cmまでの礫含む。1よりも礫少ない)
3. 5Y 7/2 灰白色 粗砂～細砂と10Y 6/1 灰色 粗砂混じりシルト～粘土(ブロック土多い)
4. 5Y 7/1 灰白色 極粗砂～微砂(上方粗粒化。ラミナあり。径1cmまでの礫含む。最下部にシルト帯(7.5GY 6/1 緑灰色 微砂～シルト)あり)
5. 7.5GY 6/1 緑灰色 微砂～シルト(ラミナあり)
6. 10Y 6/1 灰色 粗砂混じりシルト～粘土(攪拌強い)



図 54 屈曲畦畔 平面図および断面図

### ・屈曲畦畔

一方、三十ノ坪は上層の耕地開発の影響により第5面の残存はよくなかったが、第3・4面での島島直下では、第4b層に被覆されて畦畔が良好に残存していた。畦畔には、第4b層による浸食が見られるものがあり、氾濫被害の大きさを物語る(図版 19-7)。特に深い浸食は畦畔の南側もしくは西側に多く見られ、氾濫流が畦畔を乗り越えながら、大きく北東から南西方向へと進んだ状況を示唆する。

当坪の畦畔も基本的には直線的な形状を持っているが、部分的に大きく屈曲する状況が確認された。屈曲は東西方向と南北方向の畦畔接合点付近で見られる(図 54: 図版 19-8、20-2～4)。特に6区北端で検出された畦畔は大きく曲がり、比較的高さもある。先述の三十一・三十二ノ坪では同様の屈曲畦畔が検出されなかったことから、当坪だけで確認される特徴的な形状と考えられるが、その目的とするところは不明である。屈曲畦畔を挟んだ水田間の比高差は10cm未満であり、地形に合わせた設置とも考え難い。多方向への導水など、灌漑水利上の意図が存在するかも知れないが、6区で検出された畦

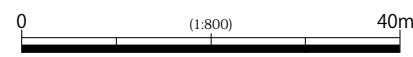
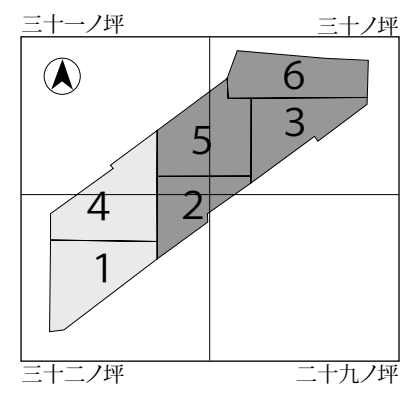
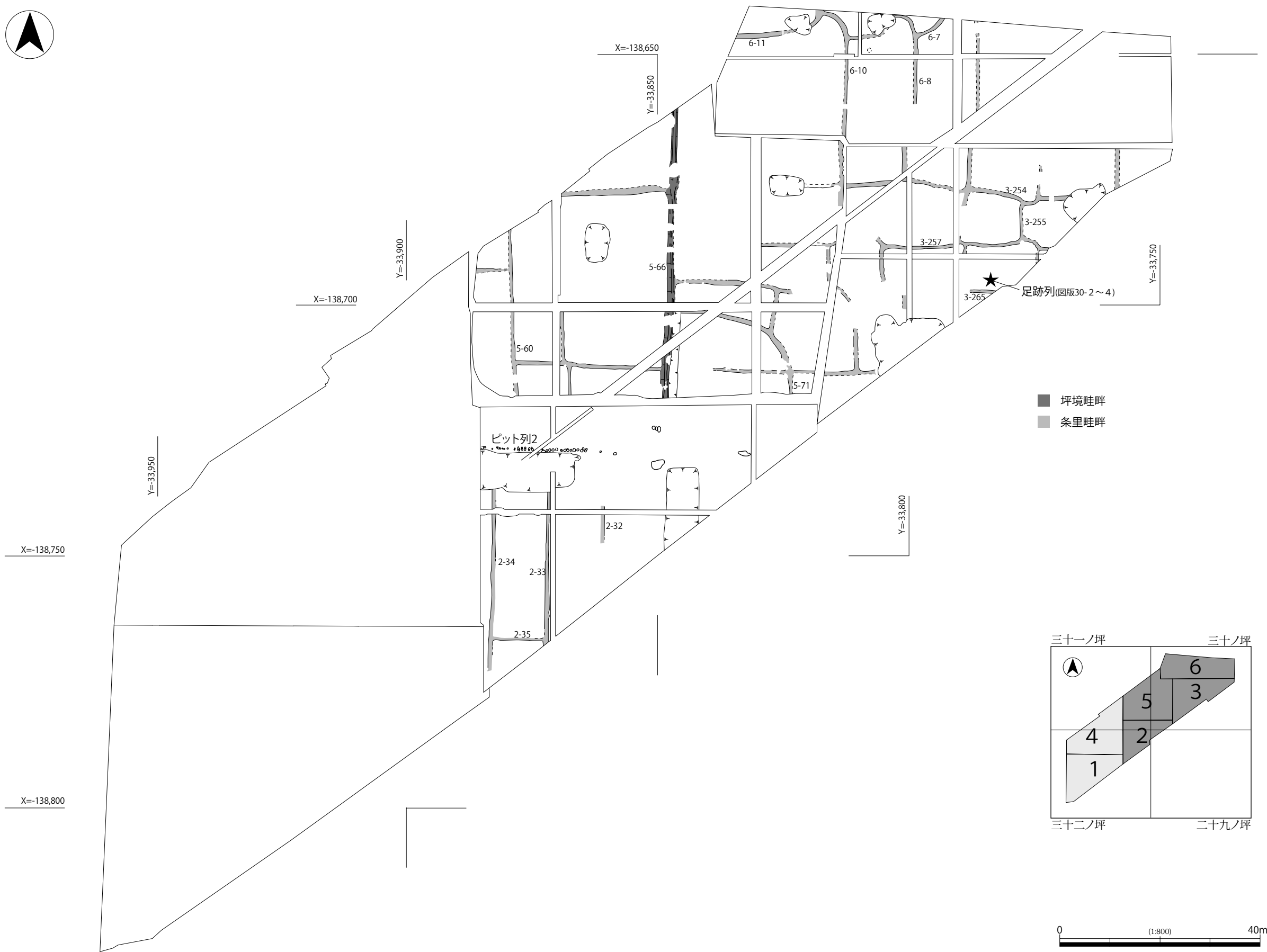


図55 第5面 平面図  
— 77・78 —

畔の屈曲部はかなり高く作られており、少なくとも屈曲部での田越し灌漑は不可能である。いずれにしても、当面・当坪で行われていた開発行為を特徴的に示す遺構である可能性が高く、類例の増加を待つて再検討を行う必要がある。

### 3. 足跡

第4b層に被覆される水田面では、足跡が検出されている。ウシの足跡は水田面上を短い間隔で往復しており（図版20-5）、畜力による耕起などの作業を示すものと考えられる。また、3-265 畦畔の北側では、東から西へ向かう人の足跡が検出された（図55）。足跡は左右の足が揃っており、通常の歩行を示すものではない（図版20-6）。

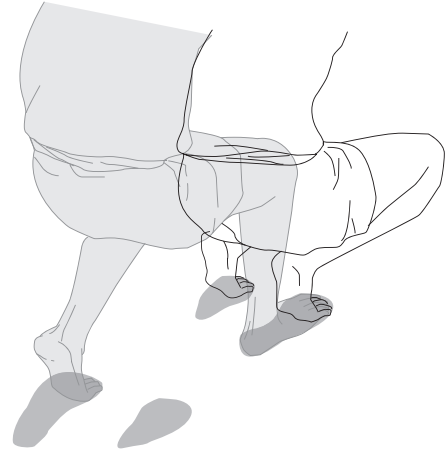


図56 第5面 足跡からのイメージ画

ここで注意されるのは、左右の足跡が同様ではなく、片足がやや小さくなることである。特に良好な検出状態を見せる2対の足跡（図版20-6 左側の2対）のうち、東側のものは右足が、西側のものは左足が小さい。そこで、足跡内に充填した砂礫を慎重に取り除くと、東側の足跡については、左足がかかとまでしっかりと踏み込まれているのに対し、右足は指の付け根だけが深く、かかと部分については足跡として残っていない状況が確認された（図版20-7）。また、西側の足跡については、左足が浅く右足が深い。このことから、この足跡はしゃがんで作業をしながら西行する人の動きを示していると考えられる（図56）。踏み出した足は深く踏み込まれて、かかとまで足跡を残し、引き寄せた足はかかとが上がっているため、その部分の足跡が残らなかったのであろう。

水田地内をしゃがみながら進む動作がどのような作業を示すものか、確実にはわからない。ただし、2対の足跡の間隔は約50cmであり、作業が終わると前方に比較的大きく踏み出している様子が想像される。また、しゃがんだ後、両足に荷重していないことから、作業は時間をかけずに終わるものであったかもしれない。草取りや間引きなどが想定できようか。以上のように想像の域を出ないものの、足跡からは遺物や遺構からだけでは迫ることのできない、当時の耕作者の存在を復原することができる。

### 4. 第4b層出土遺物

第4b層の供給時期は、第5面の廃絶時期と同時か非常に近接した時期と考えられる。しかしながら第4b層からの出土遺物には木製品が3点あるのみで、時期を推定できる土器や陶磁器類は出土していない（図57）。

1・2は漆器椀で、内面には朱漆、外面には黒漆が施されており、朱漆による草木のような絵柄が見える（図版66）。特徴を同じくすることから、両者は同一個体となる可能性が高い。3は笹塔婆であろうか。欠損が激しいものの両面に墨書が認められるため、赤外線スキャナを図化に用いた。左半分を失っているが表面には、「(南) 无阿弥陀佛」、その裏面には「□〔出力〕 家同一釋子」「□〔名力〕 西善□〔禅力〕 門[ ]」と二段に分けて墨書されている（釈文に関しては、井上智勝氏のご教示を得た。記して感謝する）。

### 5. 包含層出土遺物

調査地内では第5b層を明瞭に確認できる場所はなく、第5a層と第6a層は連続した土壌層として確認されるため、判別は難しく調査では両層を同時に除去している。また、第6b層は調査地南西側の低

位部にしか残存しておらず、北東側の高位部では第5a～7a層までが連続した土壌層となっているため、北東側の調査においては第5a～7a層を一括して除去している場所もある。図58・59では、それら複数の包含層に含まれる遺物を一括して図示しているため、幅広い時期の遺物が含まれる。特に図59に示すように、下層の第7b面で検出された古墳時代から奈良時代の集落に関連するものと見られる遺物も多い。

1～13は瓦器碗である。4～6のように、12世紀頃に遡る可能性を持つものもあるが、7～10のように、矮小化や粗雑化の進んだ最終段階の瓦器碗までも含んでいる。下面の第6b面の遺構に含まれるものは、4～6と同様の時期を示す瓦器碗であり、第6b層の堆積以降、比較的安定した環境下で行われた長期間の耕地開発を示唆するものといえよう。14～21は土師質土器である。中でも17・18は時期が下ると思われる。18は精良な胎土を持つ皿だが、口縁部内外の強いヨコナデにより、胴部外面に段が生じている。22は内黒の黒色土器、23は平底の山茶碗であるが、底部と胴部の境と底面に沈線を入れ、高台を表現している。山茶碗が平底化する過渡期の様相と理解され、13世紀後半から14世紀の時期が考えられよう。24～29は輸入磁器である。24は青磁の合子蓋、25・26は龍泉窯系の青磁碗である。30・31は瓦であるが、30は平瓦を打ち欠いて円形に加工したものである。破面は磨かれて滑らかになっている。玩具のようなものであろうか。32・33は瓦質土釜、34～36は摺鉢。34は瓦質、35・36は備前焼か。37～50は古代から中世にかけての須恵器である。比較的多く含まれる8世紀後半頃の遺物は、当遺跡の最古段階の坪境畦畔盛土からも出土している。

51～68は古墳時代の須恵器。5世紀から7世紀までの幅広い時期のものが含まれる。下層(第7b面)で検出された当該時期の集落に係るものが耕作により混入したのであろう。51～54は特徴的なタタキ目が確認される須恵器甕の破片である。51・52には縄蓆文タタキが、53・54には格子タタキが確認される。把手には須恵器のもの(68)と土師器のもの(69)がある。

70は紹聖元寶で初鑄は1094年。71は治平元寶で初鑄は1064年。72は図52-14・15と同様に先端がかぎ状に曲がる鉄製品である。73・74は馬鍬の歯、75～77は鍬先であるが、75は背面が湾曲する。78・79は砥石。78は乳白色の緻密な石材で仕上げ砥、79は灰色のやや粗粒の石材で中砥と思われる。

以上の遺物を概観すると、35など時期の下るものも一部に含まれるが、第4b層の供給の少ない場所では連続した土壌層として観察される第3a～6a層の層序理解の中で、混入遺物である可能性を否定できず、第5面の開発時期としては13世紀から15世紀頃の幅の中で考えたい。



図57 第4b層 出土遺物実測図



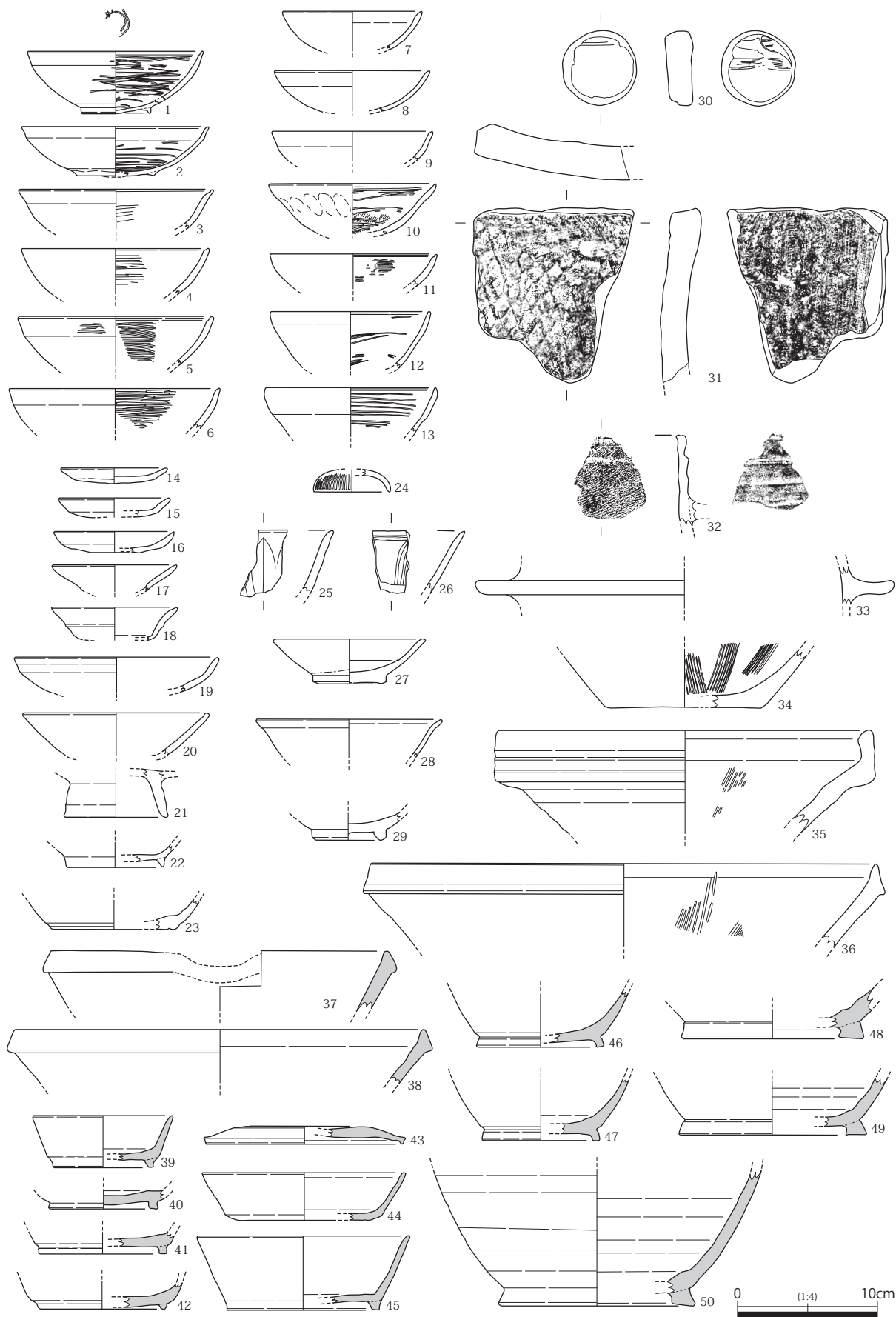


图 58 第 5a ~ 7a 层 出土遗物实测图 1

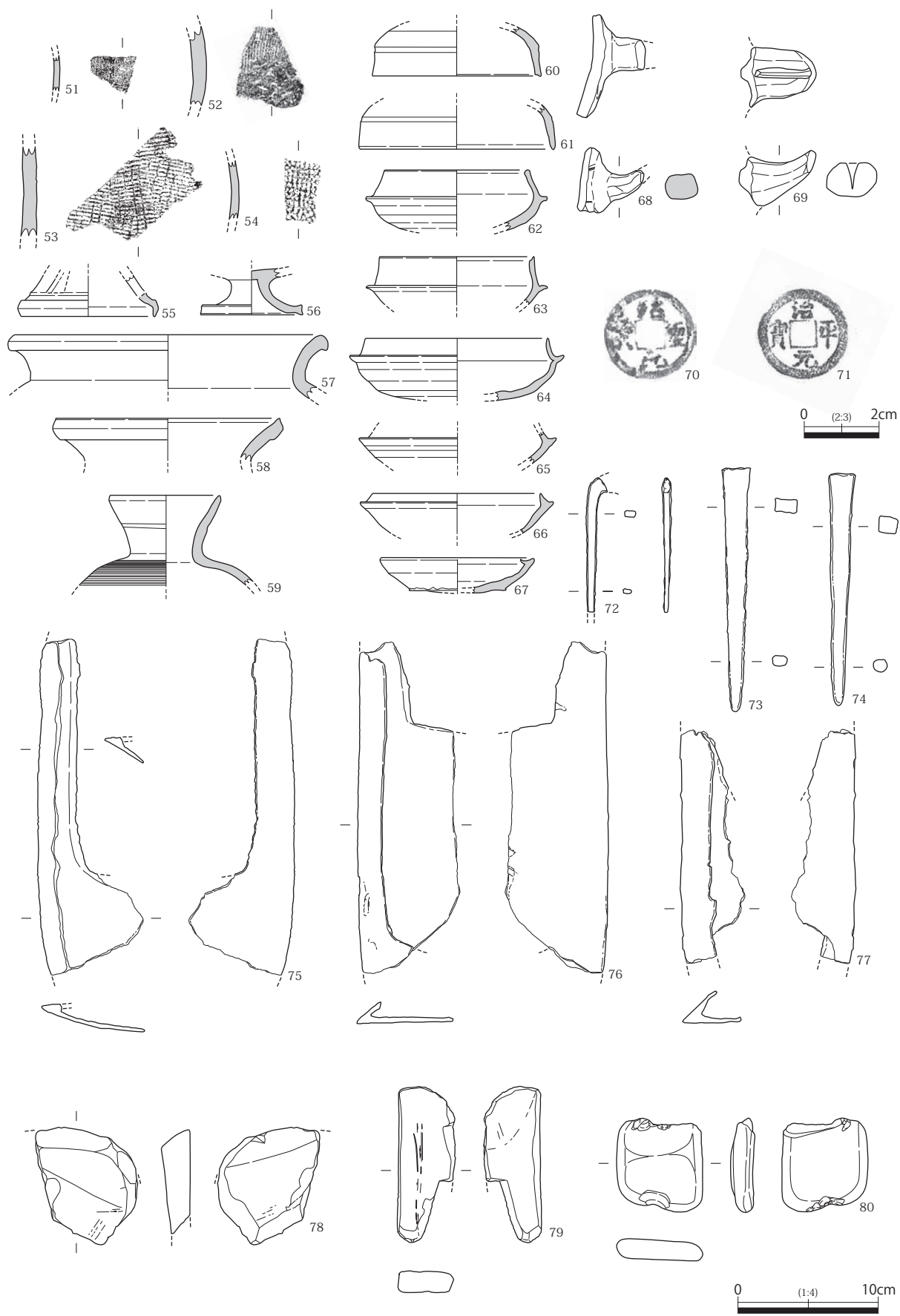


图 59 第 5a ~ 7a 层 出土遗物实测图 2

## 第5節 第6b面の遺構と遺物

第6a層（一部で第5a層）の下面で検出した遺構面である。調査地南西側に確認される第6b層の堆積以後は、大きな氾濫堆積物の供給はなかったようで、第5a層と第6a層は連続した土壌層として形成される。そのため、第6a面は残存しておらず、畦畔などの検出はできなかった。耕作層下面で検出された遺構は坪境溝や、耕作痕跡と考えられる溝群などで、第5～6面の開発を通じて残されたものと考えられる。また、5区においては耕地段差A・Bが確認され、坪境と、第7a面以降踏襲される耕地区画を示すものと考えられる（図63）。

### 1. 坪境

2区と4区においては、深さ0.1～0.2mの溝として確認された。ただし、検出された坪境交点は第3面の坪境交点から北西に約1.5mズレている。第5面で検出された5-66坪境畦畔（図55）は、第3面以降の南北坪境と同位置にあるため、第5面段階もしくは、第6面の開発過程の中で坪境位置が移動した可能性がある。

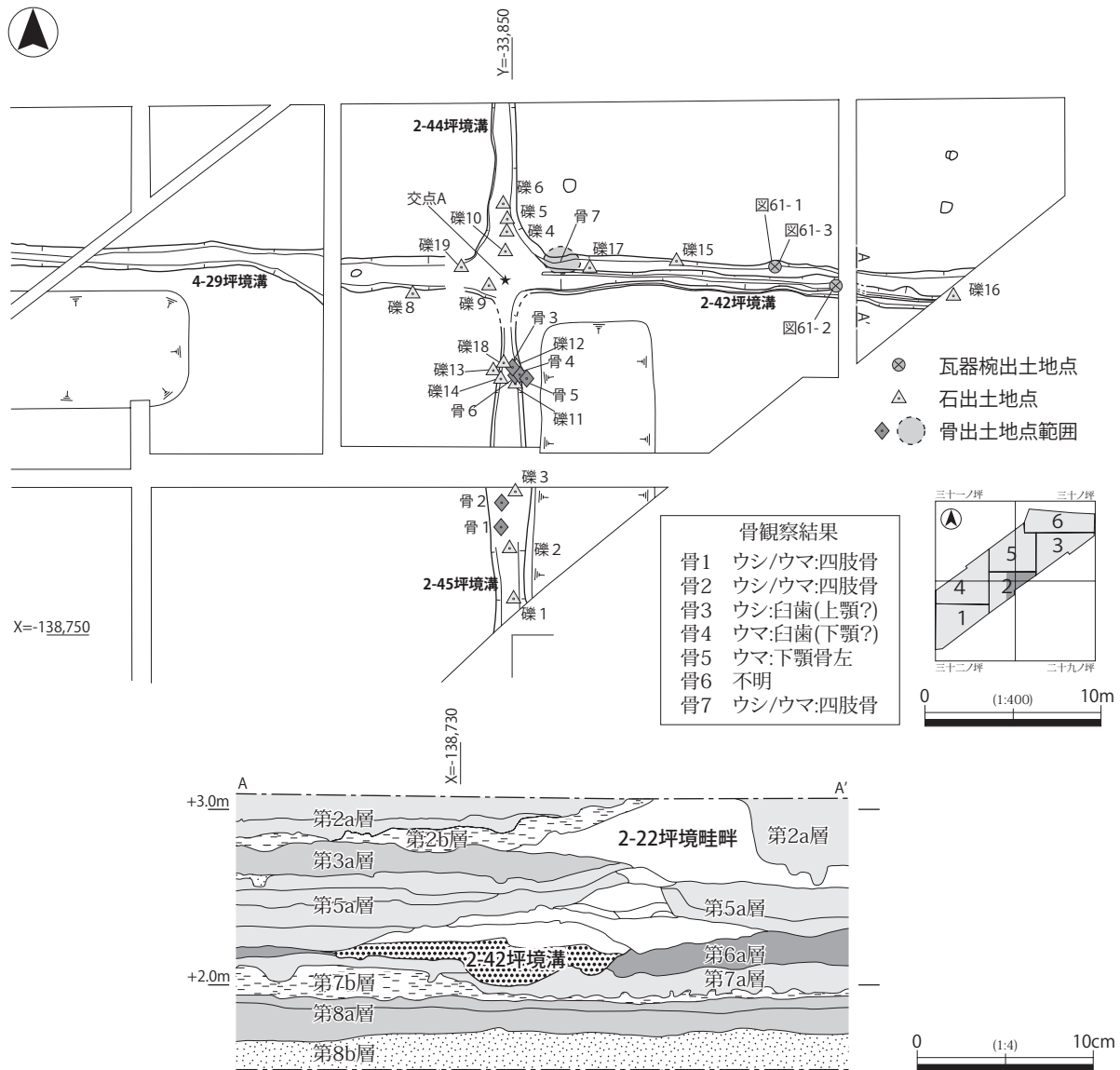
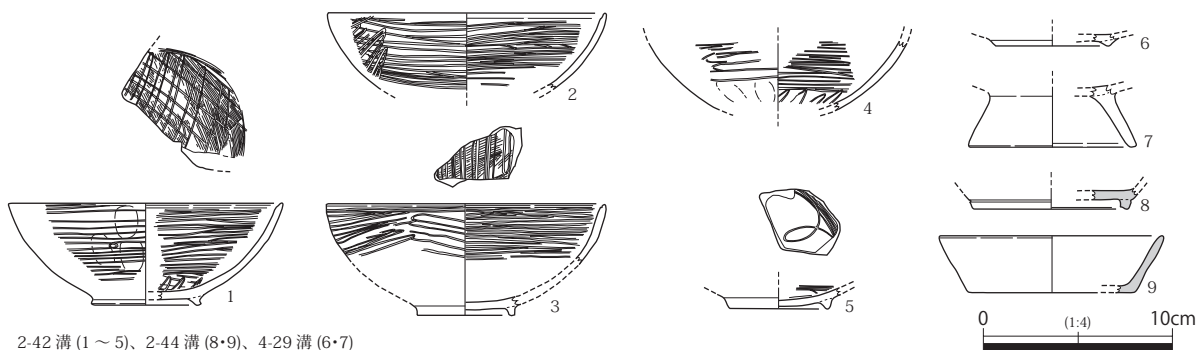


図60 2区第6b面坪境交点 平面図

このズレは、第7a面でも見られるため、条里地割の初現から第6面の開発を通して、以降の開発とは異なった地割基準が用いられていた可能性がある。坪境溝内は粘土～シルトで埋没しており、流水などの痕跡はない。2-42 坪境溝内には段差があり、複数次にわたって掘削が行われたと考えられる。埋土からは、切り合い関係が把握できなかったが、両者から同型式と見られる瓦器椀が出土しているため、掘削に大きな時間差は想定しにくい。

溝からは土器のほかに、モモの種子が1点、獣骨と拳大～人頭大の礫が多く出土した(図60)。獣骨については、2-42 坪境溝と2-45 坪境溝から出土した。ウシもしくはウマのものと考えられるが、判別不可能なものも多い。顎骨や臼歯のほか、四肢骨も含まれるが、その出土には偏在性が見られ、解体した馬を溝内の各所に意図的に埋納した可能性がある(図版21-1・2)。獣骨の出土は、第7b面で検出された坪境溝でも見られ、古代から中世にかけて、同様の埋納行為が継続的に行われた可能性を考察することができる。礫については、凝灰岩の角礫を主体としている。その大きさから人為的に持ち込まれたものと考えられるが、その性格については坪境溝以外の出土例も合わせて、後述したい。

出土した土器については図61に示した。瓦器椀はいずれも2-42 坪境溝から出土したものである。これらの瓦器椀は、口縁部内面に浅い沈線を巡らせ、体部内面には圈線ミガキを密に施すが、外面のミガキはやや省略傾向にある。見込みの暗文はジグザグ状のものが主体だが(5は連結輪状)、1は圈線ミガキの前、4・5は圈線ミガキの後に施されている。また、高台は断面三角形まではなっていないものの、矮小化している。これらの特徴からは、12世紀前半から中頃の帰属年代が考えられる。また、4-29 坪境溝からは、黒色土器片(6)と土師器皿の高台部(7)が出土しており、さらに2-44 坪境溝からは、



2-42 溝 (1~5)、2-44 溝 (8・9)、4-29 溝 (6・7)

図61 坪境溝 出土遺物実測図

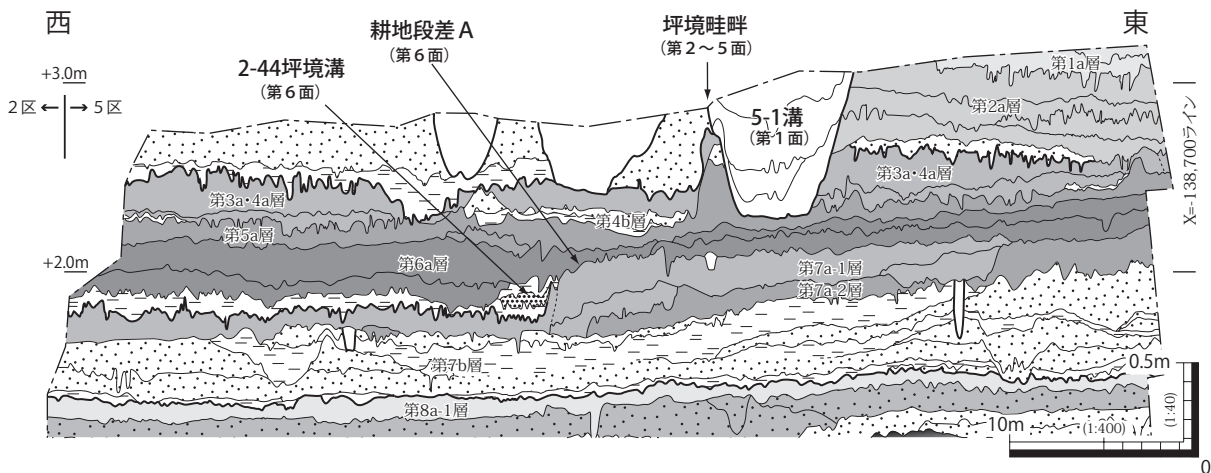


図62 三十一・三十二ノ坪境 断面図(路線中央断割り断面)

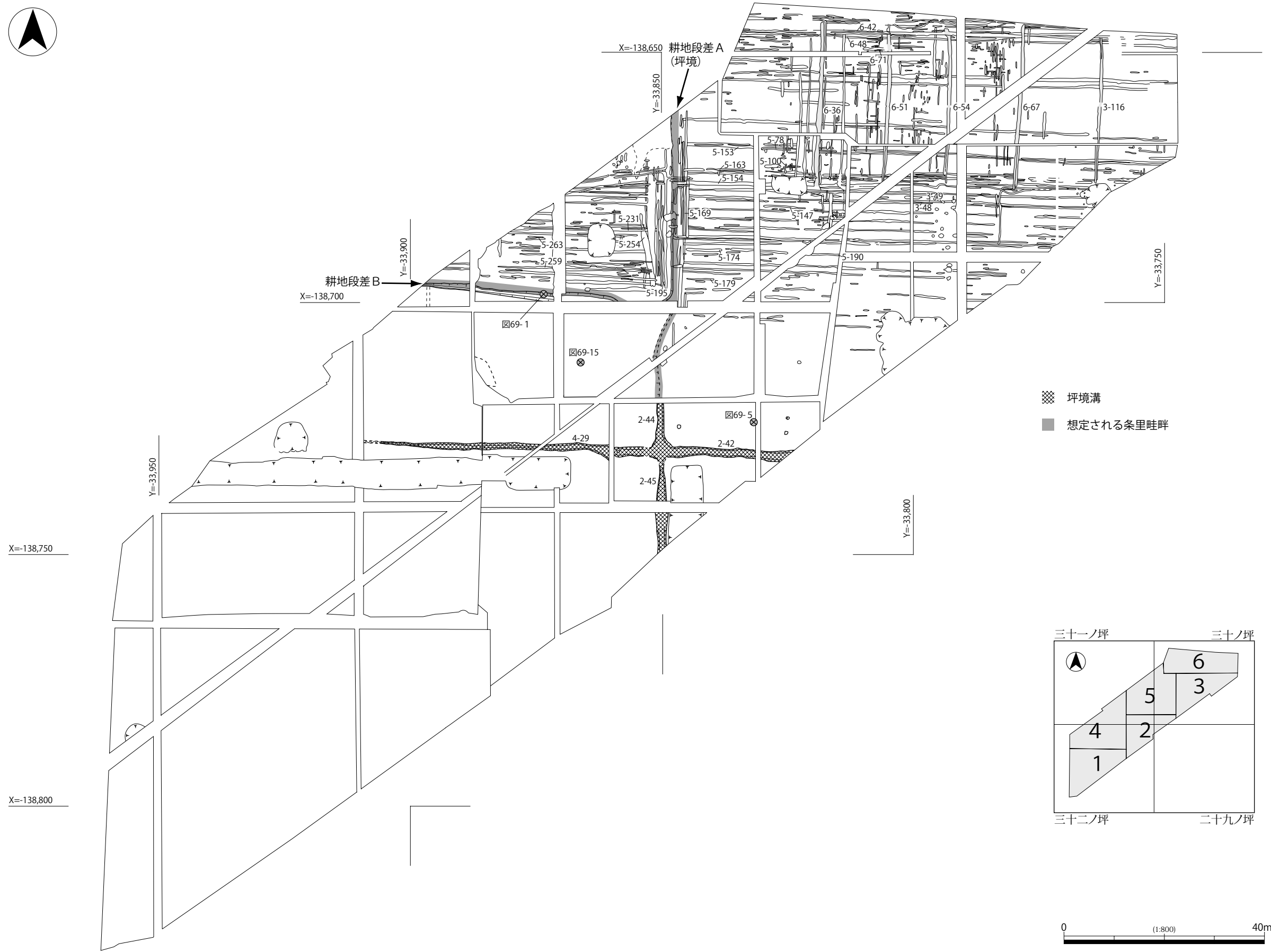


図 63 第 6b 面 平面図

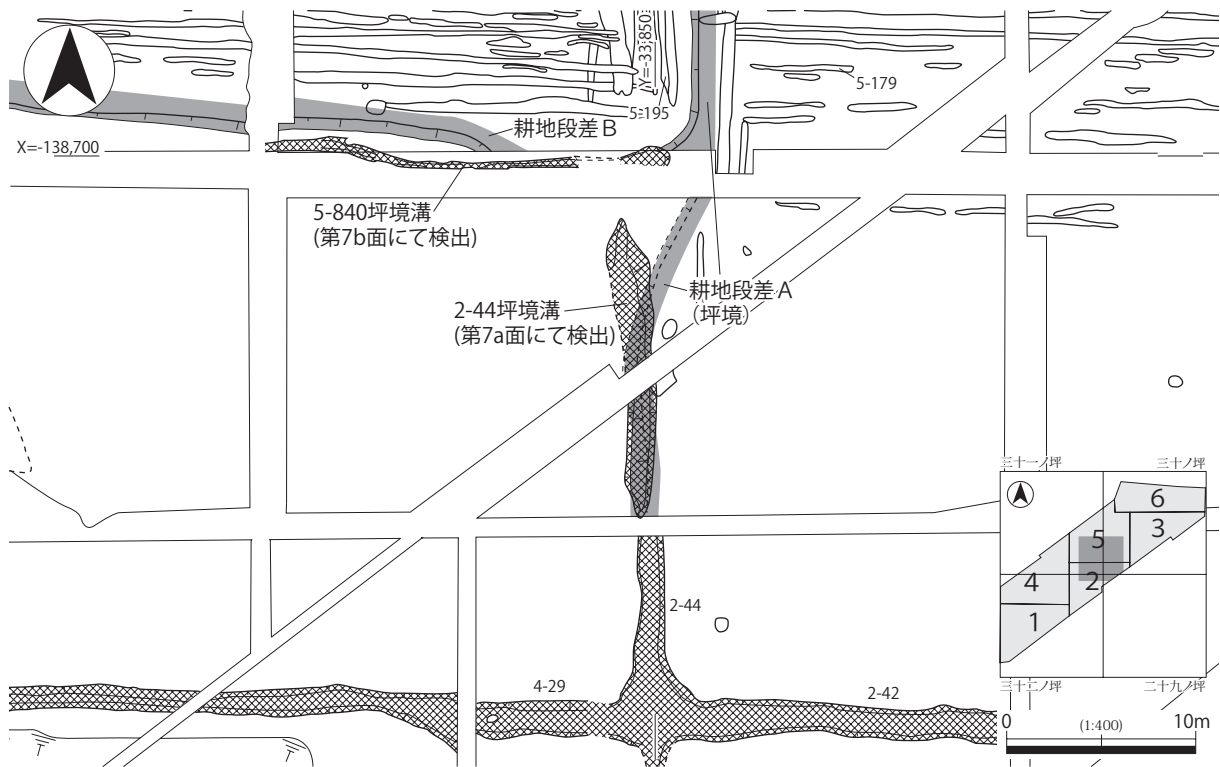


図 64 三十・三十一ノ坪境 平面図

須恵器の杯身が2点(8・9)出土している。下層からの混入遺物と考えられるが、8世紀後半に遡るこれらの杯身の出土は、坪境の開発時期が当該期まで遡る可能性を示唆する。実際、下層の第7a面では、坪境位置に畦畔が検出され、同時期の遺物が出土している(次節にて詳述)。

一方、5区においては耕地段差Aとして南北坪境が確認された(図版20-8、21-4)。東から西に降る段差であり比高差は南側ほど大きく、耕地段差Bとの結合する付近(X=-138.700ライン断割りのため、結合点は確認できず)では30cmを測る。また、5・6区を中心に検出される溝群は、東西方向のものがほとんどだが、段差の周囲においては、段差に平行して南北方向に掘削されている。坪境としては、その位置が約3.0m東にズレているが、第7a面において同じ位置に耕地段差が検出されていることから(図72:耕地段差C)、第7a面の三十・三十一ノ坪境を踏襲しているものと考えられる(上面の第5面ではこのズレは解消される)。5区の南側では、耕地段差の直下に2-44溝の延長が確認された(図62・64)。このことから、第6面の開発過程の中で坪境施設が溝から耕地段差(畦畔)に変更された可能性を考えることができる。

## 2. 耕地区画

先述の耕地段差Bは、5区から4区の西端にかけて検出された。北から南に降る段差であり、比高差は約20cmを測る。下層の第7a面において、同じ位置に5-38溝と、北側に高い耕地段差が確認されており、耕地段差Bも第7a層の溝や段差を踏襲したものであることがわかる。また、第7b面では耕地段差Bに平行して5-840溝が検出された。断面観察から当面に帰属する溝と考えられ(図86)、段差に伴って、その下部に掘削された溝と思われるが、時間差のある可能性も否定できない。

第7a面では、耕地段差の南側に水田畦畔、北側にわずかであるが素掘小溝が確認され、段差を挟んで耕地利用状況が異なることが想定される。当面においても、耕地段差Bの北側では小溝が多数確認されるものの、段差南側では全く検出されず、同様の耕地利用状況の相違が想定される。第7a面以来の

耕地区画として捉えることができよう（第7b面においても、5-503溝によって奈良時代の居住域と耕作域が同地点で区画されている可能性がある（図85））。しかしながら、南北坪境（耕地段差A）のズレと同様、第5面においては、この耕地区画は確認されない。残存状況が悪く、十分に調査できなかった第5面ではあるが、特殊な形状を持つ屈曲畦畔の設置のみならず、南北坪境の再設定や段差の解消を伴う耕地整理など、比較的大規模な耕作面の更新が行われた重要な遺構面として再認識される。

### 3. 溝群

調査地北東部において、素掘りの溝群が検出されている（図版21-5～8）。小溝は、条里地割に沿って規則的に掘削されており、ほぼ方位に合ったプランを持つ。切り合いがあり掘削時期の異なるものが一括して検出されている状況である。東西方向のものが主体だが、南北方向のものも少なからず存在する。底部にラミナこそ認められないものの、土壌化していない砂礫がわずかに堆積している溝が部分的に認められることから、掘削後すぐに埋め戻されたものではなく、一定の開口期間があったことが想定される。溝底に砂礫が充填される牛の足跡（図版22-1）が確認されることもその傍証となろう。

南北方向の溝は東西方向の溝の上から掘削されており、深度が浅い傾向がある。3区から6区にかけて検出された南北溝（6-36、6-51、6-54、6-67、3-116溝）は、幅0.6～1.0mと他の溝に比べやや広めで、長さが約33mと共通するため関係性の深いものと考えられる。各溝の間隔は12～16mであり、東方ほど広い。これらの溝を完掘してみると、底面に平行する起伏が認められ、隣接する数条の溝が検出面で一体化して見えたものであることがわかった（図版22-2）。そのため、検出面がやや下がる3区においては、検出時から2条の溝として確認される。また、溝底面には引きずったような工具痕

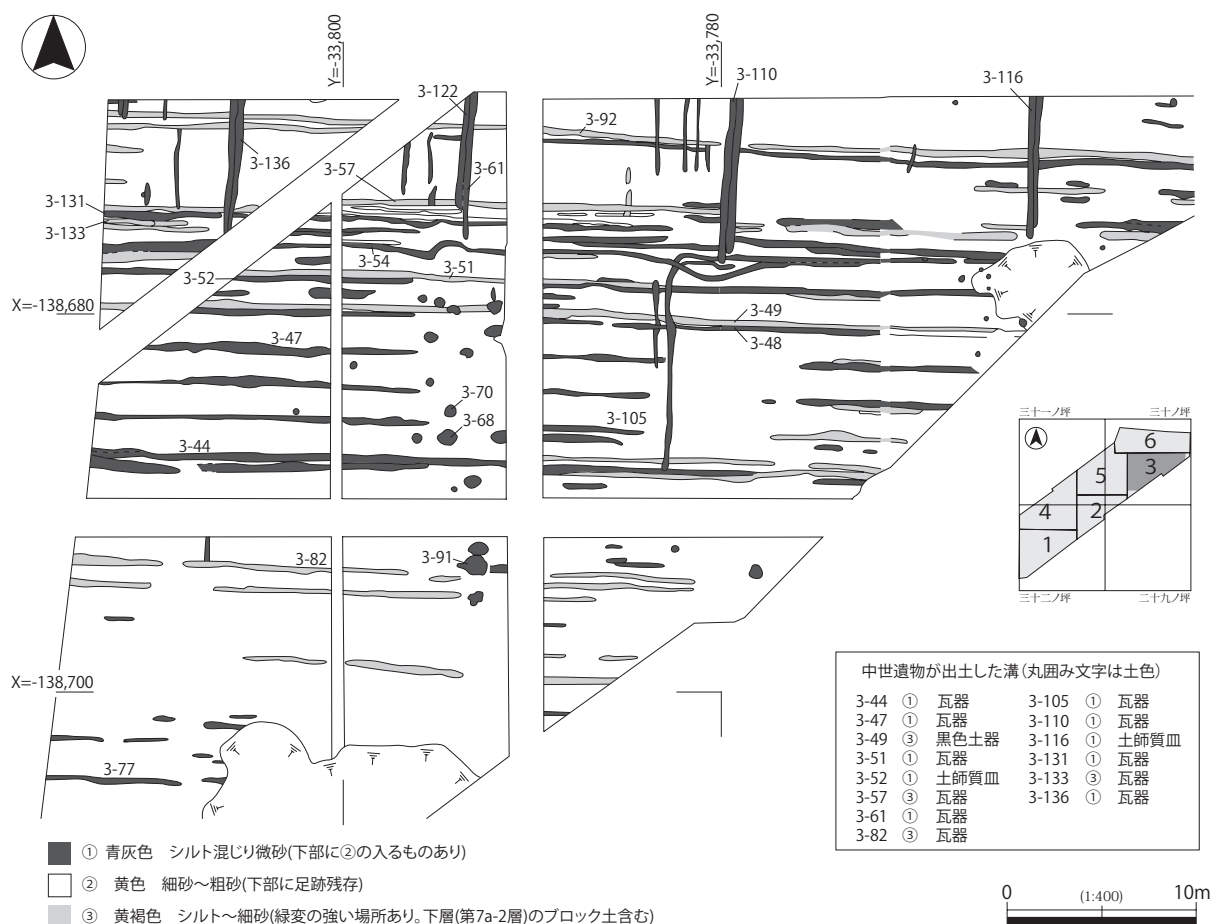


図65 3区小溝群 平面図

と連続する牛の足跡が認められる。これにより、鍬や鋤ではなく、犁を用いての掘削を想定しておきたい。3-116 溝を除いて瓦器碗片を出土しており、鎌倉時代頃を上限とする年代が考えられる。なお、これらの溝の延長距離は約 33 m とほぼ等しいが、その距離が長地型地割での 3 段分の耕地幅にあたることには注意しておきたい。

3 区から 5 区にかけては東西方向の溝が 1.8 ～ 2.0 m でほぼ等間隔に並ぶ状況が確認された。埋土は大きく見て 3 種に分けられるが、そのいずれからも瓦器碗片が出土している (図 65)。瓦器碗片はいずれも細片であり図化できないが、器壁の厚さ、ミガキ・暗文の様相から鎌倉時代頃のものと考えられ、溝群の掘削時期として鎌倉時代を上限とする年代が考えられる。3 区中ほどではこの溝が途切れる場所が確認されており、その地点では土坑群が検出されている (図版 4-1)。土坑群の性格は不明であるが、小溝の掘削との関係性に注意される。

地割に沿って掘削され、浅く不明瞭なものが多いことから、これらの溝が耕作の痕跡であることは疑いないが、その詳細な性格 (掘削の目的) については不明である。溝の分布が調査地北東部の高位部に偏っており、南西側の低位部には全く見られないことに合わせ、延長距離が長く南北・東西両方向の溝があることから、畦畔の設置されている水田域での掘削は考えにくく、畠作に関連した耕作痕である可能性が高い。畠における溝の性格としては、1. 畝間溝、2. 水路、3. 天地返し痕、4. 根菜類栽培のための深耕などが考えられる。先述のように一時期の開口期間を想定できる溝については、3、4 の可能性は極めて小さい。2 についても、(本来の掘削面が失われていることを差し引いたとしても) 掘削深度が浅く、またこれほど多くの溝を掘削する必要は考えにくい。1 については、本来氾濫堆積物に被覆されるなど良好な状態の耕作面で、畝とのセット関係で確認されることが必要であるが、当面では耕作面の残存が著しく悪いため、確認が難しい。以上のように積極的な根拠に乏しいものの、3・5 区で検出された等間隔の溝については、溝底部に砂礫層の認められるものがあることから、畝間溝である可能性を挙げておきたい。

#### 4. 瓦器碗と置き石

1 区では明確な遺構を確認することはできなかったが、第 6a 層の下部より瓦器碗 (図 67) と拳大ほどの礫が散在して出土した (図版 22-3・4)。これらの礫と、瓦器碗の中でも比較的残存率の高いものの出土位置を示したものが図 66 である。一見散在的である両者の分布であるが、瓦器碗の出土間隔を東西方向に絞って見てみると、図 67-1 ～ 6 までの 6 点の瓦器碗が、東西に約 11 m の距離を持って分布するような状況を確認することができる。

図 66 の右上に示した 1-39 畦畔は、第 3a 面で検出されたもので、当面とは直接関係するものではないが、東接する 2 区で検出された南北坪境畦畔から西に約 44 m の位置 (長地型地割で 4 段分の幅) にあたり、三十二ノ坪で確認された長地型地割を構成する条里畦畔である。そこで、1-39 畦畔から西方に 11 m 間隔で南北の条里畦畔設置を想定し、その位置を破線で示した (図 66)。これを見ると、図 67-1 ～ 6 の瓦器碗の出土位置が想定線に近接することがわかる。

瓦器碗はピットや土坑など遺構に伴って出土したものではなく、耕作土層である第 6a 層下部に含まれていたものである。耕作による攪拌を繰り返す継続的な耕地利用の中で、破碎されて小片となるはずの耕作土内の瓦器碗が状況よく残っていたということは、これらの瓦器碗が耕作による攪拌を免れ得たことを意味する。偶然を除けば、耕作域の中で確実に攪拌を免れ得る場所は、継続的な耕地利用の中で踏襲される条里畦畔の直下のみである。すなわち約 11 m の間隔で出土する瓦器碗は、その上部の条里



畦畔の存在を示唆するものであるといえ、その間隔が約 11 m となることは、第 3 面で見られた三十二ノ坪内の長地型地割の採用が、瓦器碗が埋置された時代まで遡及可能であることを示す。

出土した瓦器碗は、内面の圏線ミガキが密で、外面が省略化傾向にあり、6 には見込みの暗文が圏線ミガキの前に施されていることから、2-42 坪境溝から出土したものと特徴的に近似するといえる。ただし見込みの暗文は、坪境溝から出土したものはジグザグ状が連結輪状に優先していたのに対し、確認されるもの全てが連結輪状となる。ともあれ、帰属時期としては 12 世紀前半から中頃にかけてを大きく外れることはないと考えられ、その埋置と時を同じくして条里畦畔が設置されたと考えれば、その時期は平安時代後半、下っても鎌倉時代前半頃までと想定されよう。

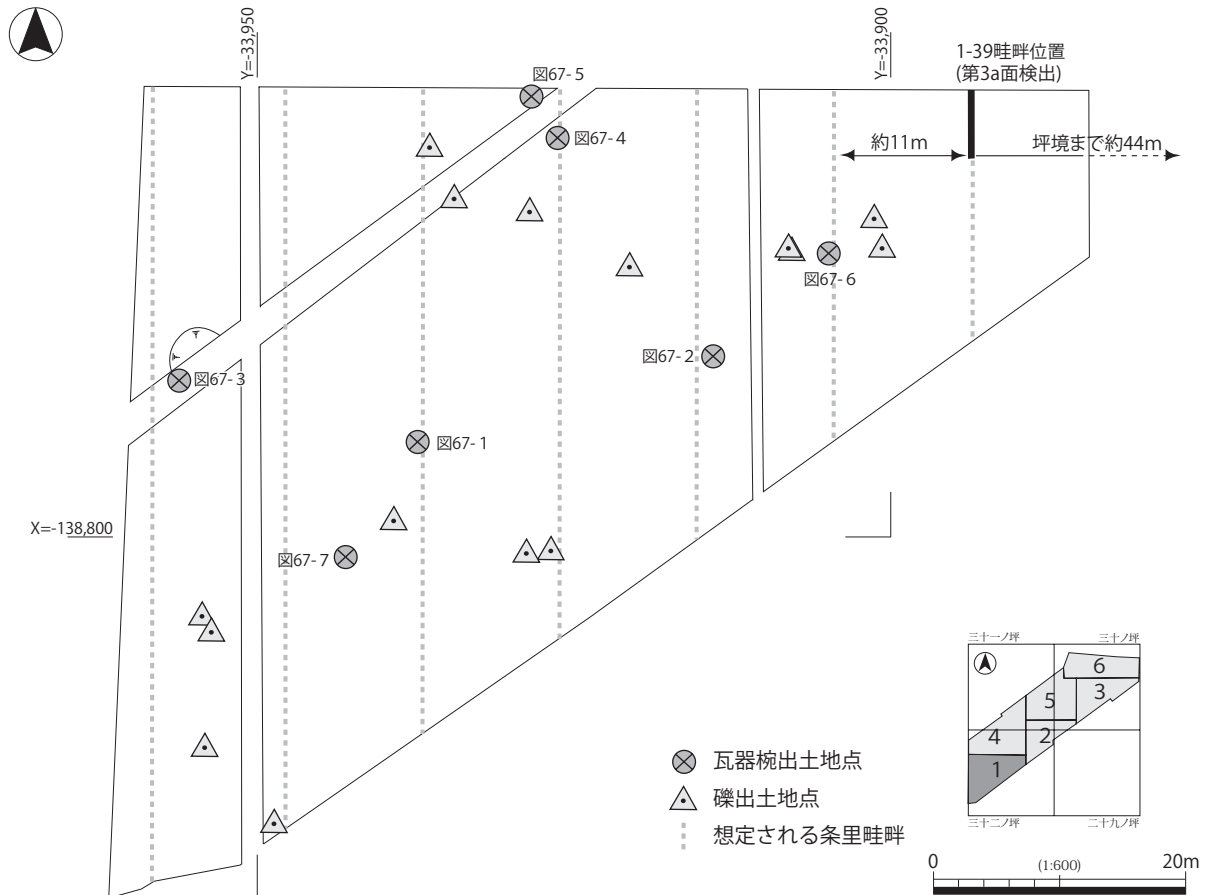


図 66 1 区第 6b 面 遺物出土位置図

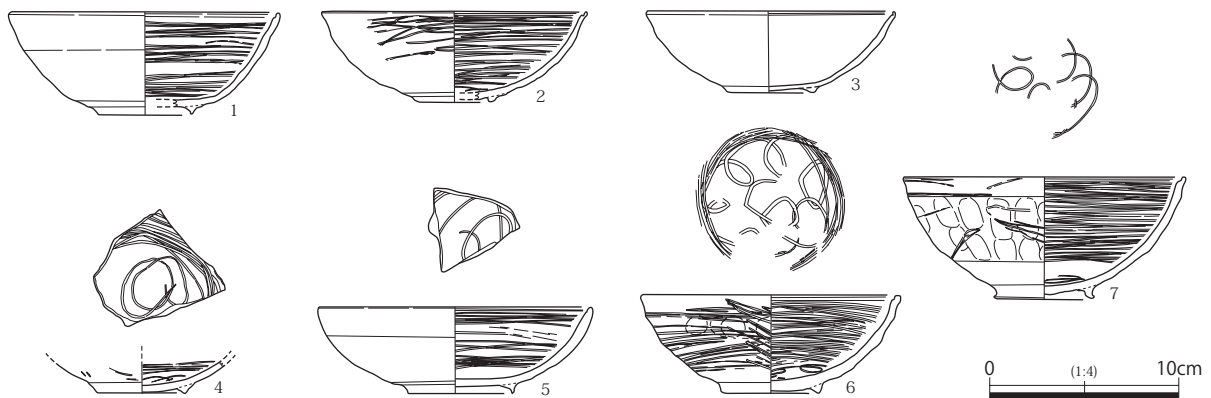


図 67 1 区出土瓦器碗 実測図

一方で礫についてはかなり散在した状況を示す。上面水田での礫の出土状況から、礫は畦畔上や水田面上に置かれていたと考えられ、耕作によって原位置を移動している可能性が高い。さらに容易に破損しないことから原位置を移動していてもわからないため、瓦器碗のように出土分布から看取できることはない。しかし、礫の多くが磨耗の進んでいない花崗岩で、その大きさから氾濫などで自然にもたらされたものとは考えにくいこと、坪境溝を除けば1区に集中して出土することから、当面の開発に伴って人為的に持ち込まれたものであることは間違いない。

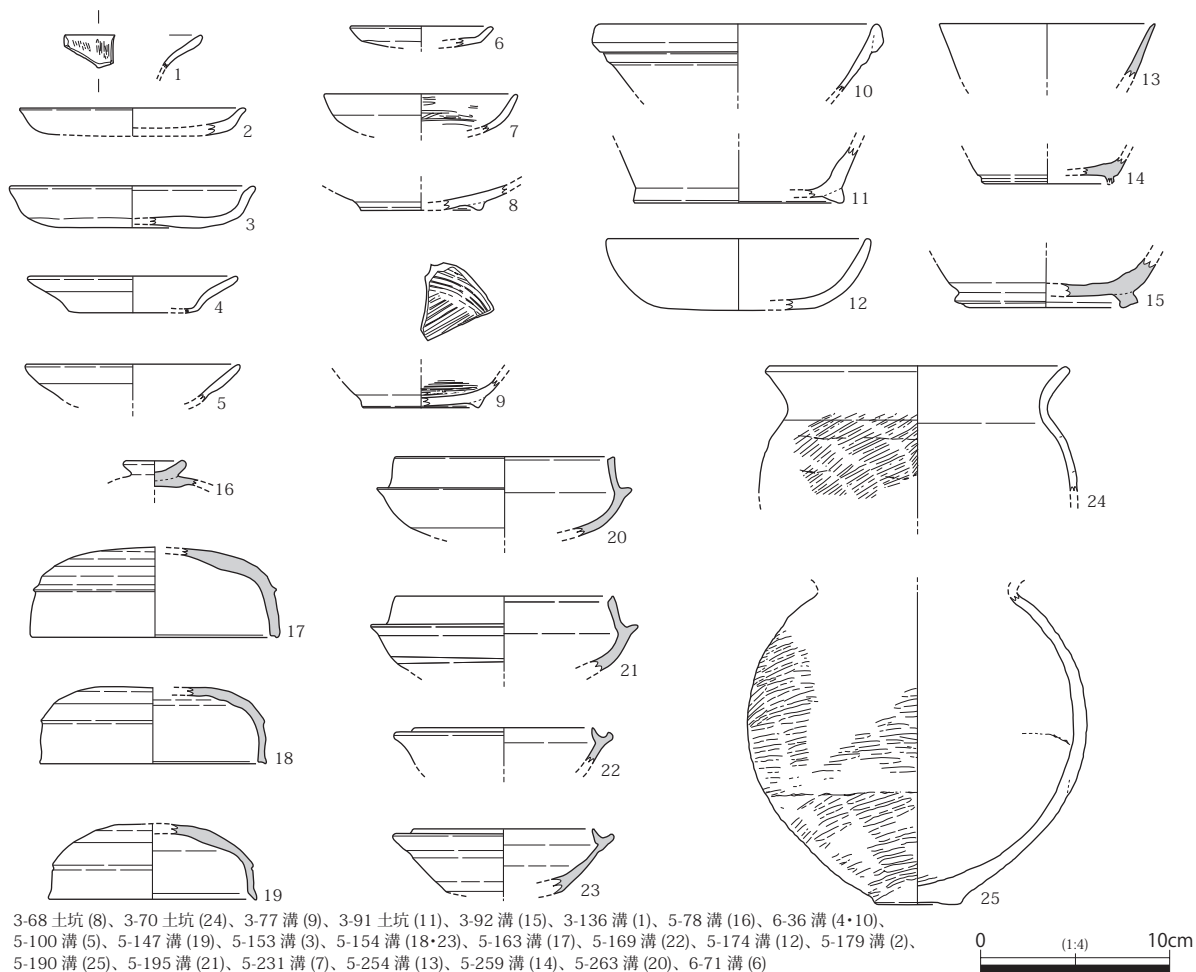
当遺跡と立地環境や利用状況の点で、多くの類似点を持つ池島・福万寺遺跡においても、同様の礫の出土が見られ、条里開発や耕地の再開発を行う際の目印として、耕地内に置かれた「置き石」としての性格が想定されてきた。当遺跡においても、第7a面段階の耕地が廃絶した後、一定期間水没したことが想定され、広い範囲で第6b層が堆積している。出土した礫が、再開発のための目印である可能性が高いと思われた。ただし、1区から出土した礫については、先述したように原位置を留めていない可能性が高いため、坪境溝内部から出土した礫について検討する(図60)。

坪境溝から出土する礫は多く、複数の礫が集中するものと、単体で出土するものに分かれるが、単体で出土している礫8・礫15・礫17が坪境交点を挟んで、約5mを一単位として東西に位置しているように見える。南北方向の礫については、出土量が多く集中しているものが多いため確実ではないが、東西方向で注意された5mを単位として交点からの距離を見ると、交点南側の礫集中部が5mほどの位置にあるように思える。10m地点は、断面観察用の断ち割りのため確認不能だが、15m地点には礫2が位置している。これらから導かれる坪境交点を〈交点A〉にとると、礫6は北方約5mに位置することになる。溝内からは多数の礫が出土しており、以上で見えてきたような5mを単位とした分布は偶然の結果であるとも思える。また、単位長である5mも長地型地割の11mとは異なっており、これらの礫を耕地開発の目印としての置き石とすることは難しいかもしれない。しかしながら、これらの礫が坪境周辺と、特に第6b層の厚く堆積した1区に集中して出土していることに合わせ、当面以外からは、礫の出土自体ほとんど見られないことから、下層の第7a面の廃絶以降の耕地再開発に関連するものとして積極的に評価しておきたい。

まとめると、約11m間隔での瓦器碗の埋置と礫の搬入・設置は、下面耕地(第7a面)を広い範囲で被覆する第6b層堆積後の再開発に伴う実態的作業を示すものと考えられる。再開発では特に第6b層の堆積が厚く、平坦化の進んだ三十二ノ坪において、坪内地割の規格化(長地型地割の導入)が行われた可能性が高い。ただし、三十二ノ坪以外には同様の地割が導入されていないことから、坪内地割の規格化には強い志向性を見出せない。これは上層の第3a～5a面においても同様で、三十二ノ坪以外の畦畔などでは、坪境を基準とする条里地割に合わせた軸方向を持つものの、畦畔間隔は一定せず長地型地割などの典型的な坪内地割は見られない。第4b層の供給後、三十二ノ坪以外に島畠が造成されることから、氾濫堆積物が頻繁に供給される耕地域では、坪内地割の規格化に拘らず、ある程度地形に即した合理的な耕地開発が行われている状況を想定することができる。

## 5. 遺構出土遺物

第6b面で検出された遺構から出土した遺物について、図68に示した。1～5は土師質皿である。12～14世紀頃のものと考えられる。6・7は瓦器皿、8は瓦器碗で、12～13世紀。これらは主に溝群からの出土であり、その形成時期の上限を示す。12～14世紀くらいと時期幅があるのは、開発期間を示すものだろうか。9は黒色土器碗で磨耗が著しいものの内外面ともに黒化しており、内面には



3-68 土坑 (8)、3-70 土坑 (24)、3-77 溝 (9)、3-91 土坑 (11)、3-92 溝 (15)、3-136 溝 (1)、5-78 溝 (16)、6-36 溝 (4・10)、5-100 溝 (5)、5-147 溝 (19)、5-153 溝 (3)、5-154 溝 (18・23)、5-163 溝 (17)、5-169 溝 (22)、5-174 溝 (12)、5-179 溝 (2)、5-190 溝 (25)、5-195 溝 (21)、5-231 溝 (7)、5-254 溝 (13)、5-259 溝 (14)、5-263 溝 (20)、6-71 溝 (6)

図 68 第 6b 面遺構 出土遺物実測図

ミガキの痕跡が密に確認される。10 は輸入白磁碗、11 は灰釉陶器の壺底部でいずれも 11 世紀頃のものか。先の土師皿や瓦器碗よりも若干遡った時期のものと考えられる。第 6 面の開発開始時期は、坪境出土遺物や 1 区からの出土瓦器碗から 12 世紀以降と考えられ、これらの遺物は、下層からの混入品と考えられる。

また、さらに遡って古墳時代初頭から末頃までの土器も多く含まれる。これらのうち、16～19 の須恵器は、全て 5 区で検出された小溝からの出土であり、同地点の下層（第 7b 面）で検出された古墳時代集落に関係するものであろう（第 7 節第 3 項）。同様に 24・25 の庄内期の甕も、第 7b 面で確認された庄内期の遺構に関係するものと考えられる。

以上のように、下層からの混入遺物によりやや煩雑な様相を示しているものの、当遺構面で検出された溝群は、12 世紀以降の畠地開発に伴うものと理解できる。

## 6. 包含層出土遺物

第 6a 層出土遺物に関しては、図 69 に示した。遺構出土遺物と同じく下層からの混入遺物がある。こうした混入品を除けば、やはり瓦器碗（1～11）の出土が目立ち、12 世紀以降の開発開始の想定を支持する。瓦器碗はいずれも口縁部をヨコナデし、口縁内面の沈線が段状に巡らされるもので、大和型瓦器碗を主体とする資料群と考えられる。ただし、6 は、口縁部のヨコナデが顕著でなく、沈線が段状ではなく器体に垂直に入られているため、樟葉型に類する資料と考えられる。見込みの暗文は連結輪状が多いが、9 は、細かい格子状の暗文が施される。

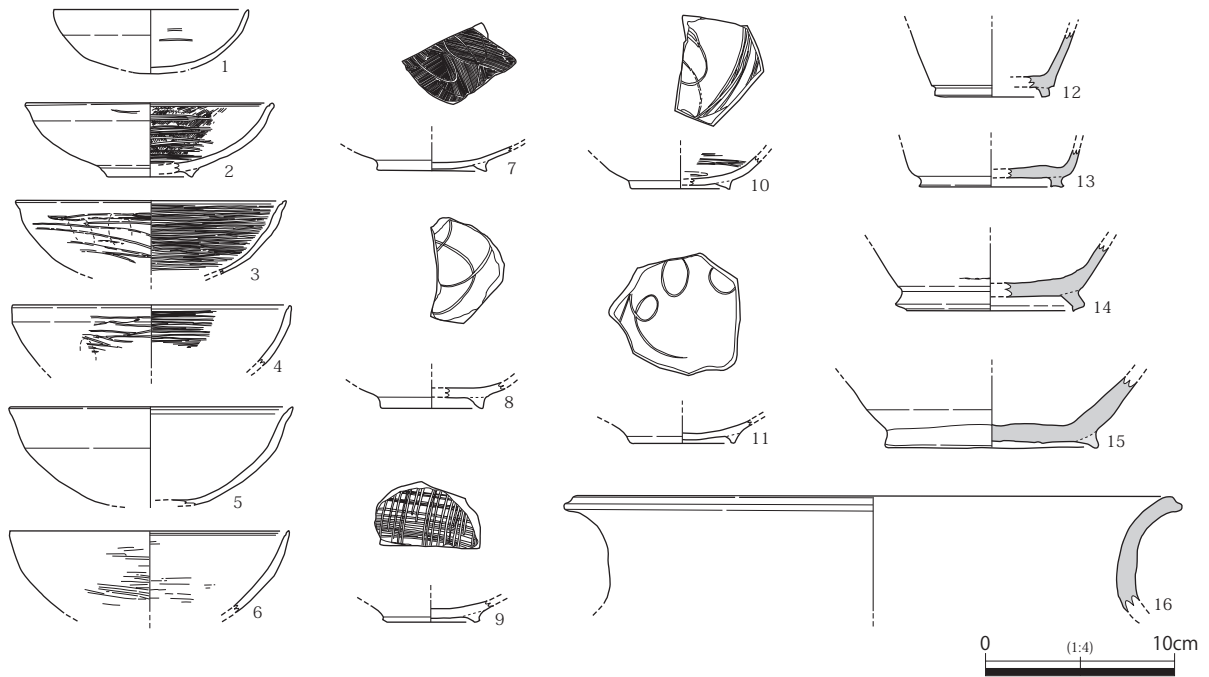


図 69 第 6a 層 出土遺物実測図

12～14 は、奈良時代の須恵器の杯・壺の底部だが、8 世紀前半のものと考えられる 13・14 は、耕地段差 B に付近で出土している。耕地段差 B は第 7b 面の開発以降に設置された地割と考えられ、第 5 面において耕地面の更新が行われるまで残存する。これらの遺物は、その初現を考える上で参考となる資料である。15 は、東播系須恵器の鉢底部と考えられるが、奇妙なことに高台が付されている。この高台部は青灰色を呈する器体とは、全く異なる灰白色の色調を呈しており（図版 68）、焼き締まりも甘い。完成品の鉢に高台を付して二次的に焼成したようにも見えるが、類例を知らない。

一方、第 6b 層には瓦器碗がほとんど含まれず、出土するものも細片ばかりで図化できなかった。第 6b 層からの出土遺物については図 70 に示す。1・2 は瓦器皿。いずれも口縁部がヨコナデされ、外反する。1 の見込みにはジグザグ状の暗文が施される。3 は土師質皿。4 は黒色土器碗である。内面と口縁部外面が黒化する。内面には幅広のミガキが施され、見込みには同じ方向で密なミガキが施される。5～9 は須恵器。9 は大形の壺と考えられるが、高台の残存部位 4 ヶ所に焼成前の小孔が確認され、6 方向透かしと考えられる。透かしは高台内から開けられており、径 3 mm の孔の周囲は径 6 mm の円状に窪む。おそらく、刺突用具の基部の痕跡であろう。また刺突穿孔した際にわずかに道具を回転させており、高台外面では、孔の直径が 5 mm 程度に広がっている。10 は古式土師器の高杯の杯身である。

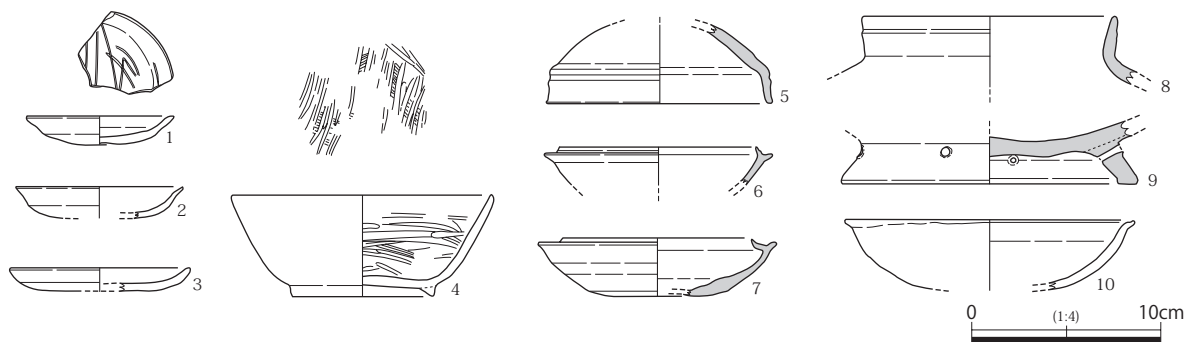


図 70 第 6b 層 出土遺物実測図

## 第6節 第7a面の遺構と遺物

第7a層を耕作土層とする耕作面であるが、調査地の東西で第7a層の残存状況に大きな差異がある。基盤層となる第7b層は調査地の北東側に厚く、全体として北東から南西に下る地形を形成する。相対的高位に位置する調査地北東側では、第5a・6a層を耕作層とする後世の耕地開発によって第6b～7a層の残存状況が悪く、第7a層上面での遺構検出が不可能な状況であった。そのため、北東側の高位部では第7a層下面もしくはその対応面（第7a層を母材として攪拌しつくした第6a層の下面など）で遺構検出を行い、前節で述べたような溝群を確認した。一方、南西側の低位部においては、第6b層の堆積により第7a層の残存状況が比較的良好で、同層上面において畦畔が検出され、三十一ノ坪南側と三十二ノ坪が水田として利用されていたことが確認された。

### 1. 坪境

坪境交点から四方に延びる2-48～2-51坪境畦畔が確認された（図版22-5）。残存状況は悪く、2-49坪境畦畔以外は、耕地段差として検出した。最も状況のよかった2-49坪境畦畔においても、盛土上部は後世の攪拌により失われている。坪境畦畔は裾部で幅1.2～2.0mを測り、後世の坪境と同様に北へ約2°の偏差を持ちながら西方に延びるが、図72のA地点においてわずかに角度を変え北に約4°の偏差を持つことになる。この約4°の偏差は、当面でしか確認できない。

また、B地点では水口が確認された（図版23-1）。水口を挟んだ南北の水田の比高差はほとんどないが、全体的な地形として北西から南西に下っていること、水口南側の水田面に浸食によるものと考えられる窪みが確認されたことから、三十一ノ坪から三十二ノ坪（北→南）への導水を目的としたものと考えられる。

2-49坪境畦畔の盛土中からは、図71に示すように比較的多くの遺物が出土している。1は瓦器碗で、見込みには斜格子暗文が二重に見られる。2～3は須恵器の壺である。特に3は、坪境畦畔の基底部から出土し、周囲に掘り込んだ痕跡も認められなかったことから、坪境畦畔の設置時に盛土内に埋置されたものと考えられる（図版22-7・8）。胴部の張りが少なく底部には短い高台が付くことから、8世紀後半のものと考えられる。次節で詳述するが、第7b面において検出された奈良時代集落についても、建物に近接する5-536井戸から同様な時期の出土遺物があり、同集落が条里地割の施工に関わった可能性が示唆され、3の須恵器壺が、周辺における条里水田の初現を検討する上で重要な意味を持つことがわかる。そのほか、4～6は土師器である。5・6の高杯は古墳時代以前の遺物と考えられ、下層からの混入遺物と捉えておきたい。

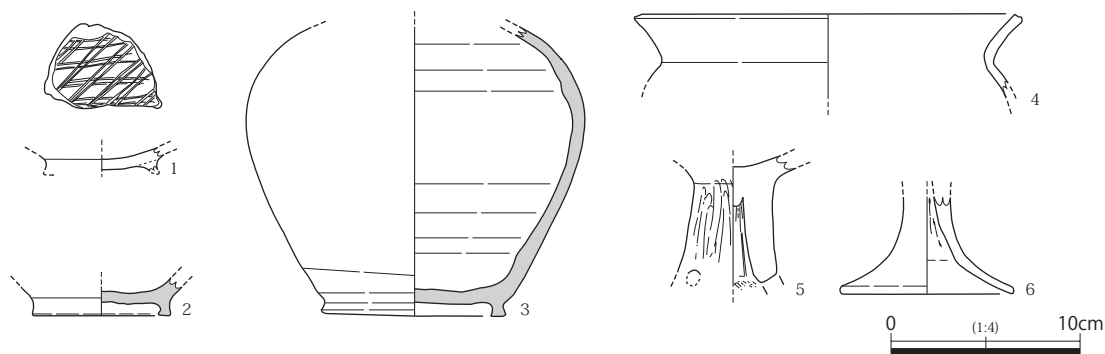


図71 2-49坪境畦畔 出土遺物実測図

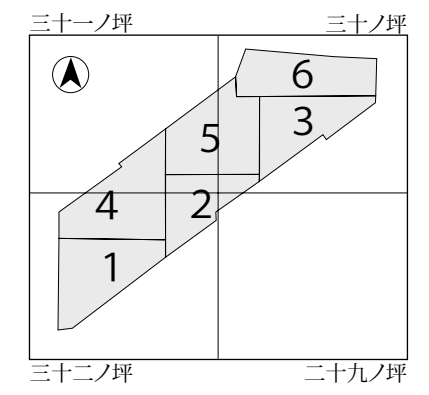
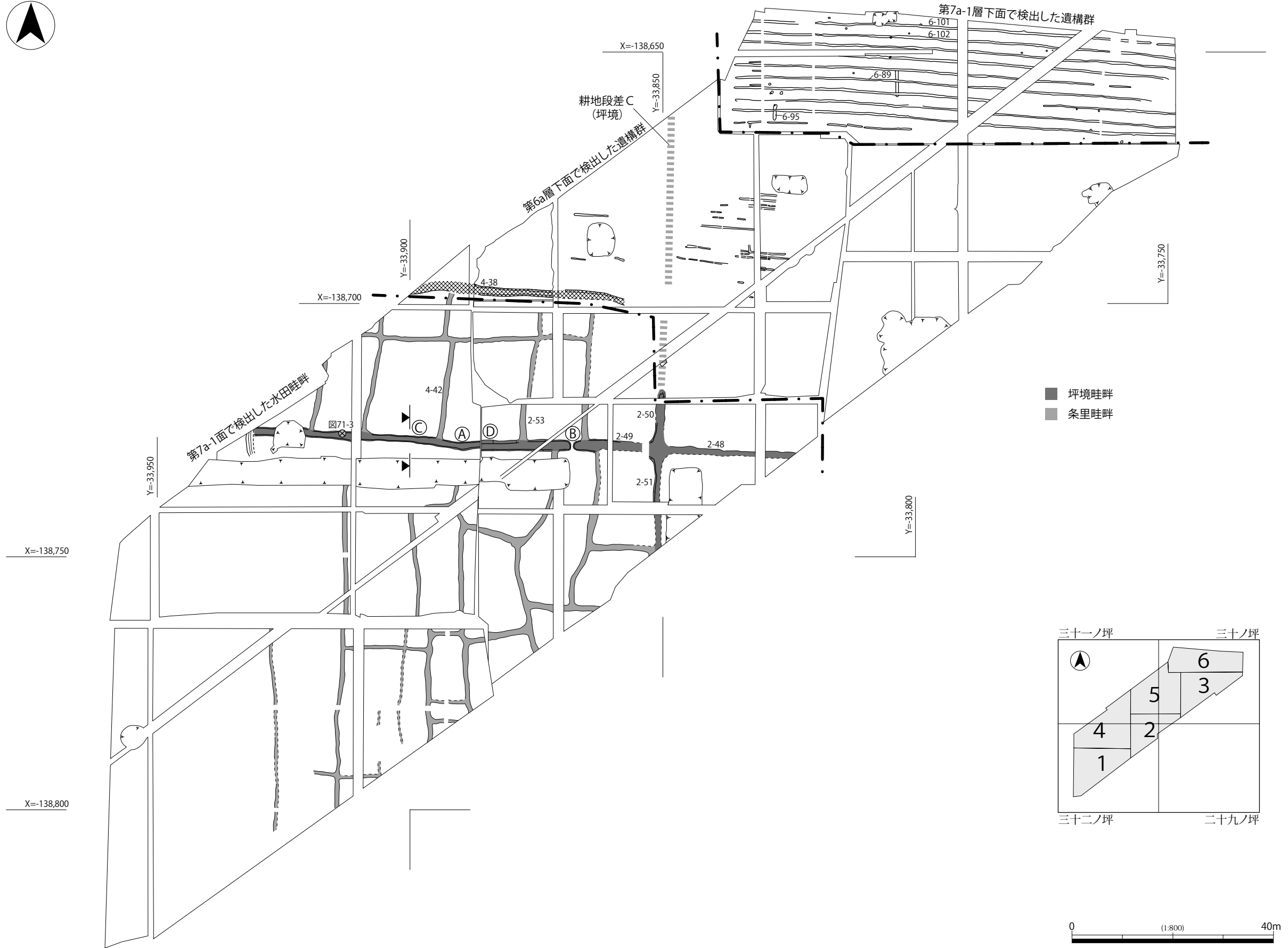
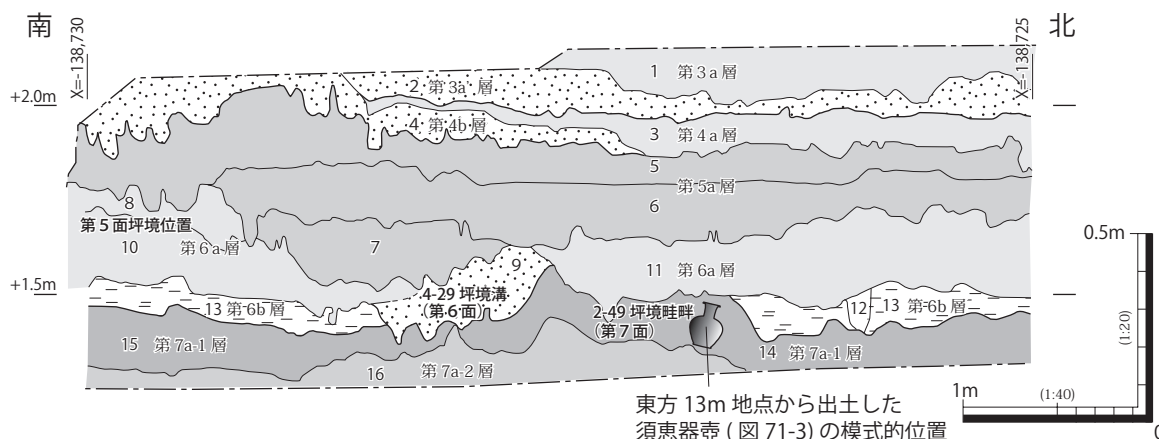


図72 第7a面 平面図



- 東方 13m 地点から出土した  
須恵器壺 (図 71-3) の模式的な位置
- |  |  |
|--|--|
| 1. 5Y 5/2 灰オリブ色 細砂～粗砂 (シルトブロック含む)                                  | 10. 5BG 5/1 青灰色 粗砂混じり粘土～シルト                              |
| 2. 5Y 7/2 灰白色 細砂～粗砂 (部分的に粘土ブロック含む)                                 | 11. 10GY 5/1 緑灰色 粗砂混じり粘土～シルト                             |
| 3. 5Y 5/1 灰色 細砂～粗砂 (シルトブロック含む)                                     | 12. 7.5Y 8/1 灰白色 細砂～粗砂<br>(溝の底に残存している砂層と同じ。踏み込みに残存した砂層か) |
| 4. 5Y 8/1～8/2 灰白色 細砂～粗砂 (北方ほどブロック土含む)                              | 13. 10BG 5/1 青灰色 粘土 (黒色化した植物遺体を含む)                       |
| 5. 10GY 5/1 緑灰色 粘土～シルト (わずかに粗砂含む)                                  | 14. 10Y 5/1 灰色 粘土混じり粗砂 (北方ほど粗粒)                          |
| 6. 5BG 5/1 青灰色 粘土～シルト (わずかに粗砂含む)                                   | 15. 5BG 5/1 青灰色 粘土 (わずかに粗砂含む)                            |
| 7. 10Y 5/1 灰色 粗砂混じり粘土～シルト<br>(部分的に粗砂ブロック含む。坪境際の部分的な落ち込み)           | 16. 5BG 5/1 青灰色 粘土                                       |
| 8. 10BG 5/1 青灰色 粘土～シルト (わずかに粗砂混じる)                                 |  |
| 9. 10GY 5/1 緑灰色 粗砂混じり粘土～シルト<br>(下方に踏み込み状に粗砂層を残存する。4-29 坪境溝：第 6b 面) |  |

図 73 2-49 坪境畦畔 断面図 (C 地点)

図 73 は、C 地点での 2-49 坪境畦畔の断面図である。図中には図 71-3 の須恵器壺の出土層位について模式的に示した (欠失した壺の上部は復元図示)。第 7a 層の水田部は第 6b 層に被覆されて良好に遺存するが、坪境畦畔の上部は第 6a 層によって削られている。坪境位置は時代によって変遷し、当面の 2-49 坪境畦畔と第 6b 面の 4-29 坪境溝とは、中心位置で約 1 m ほどのズレが存在する。第 5 面段階では、さらに 1.5 m ほど南に移動し、以降は第 3 面まで第 5 面で設置されたものが踏襲される。

## 2. 耕地区画

冒頭で述べたように、調査地北東側の高位部と南西側の低位部は、2-50 坪境畦畔とそこから直角に延びる 4-38 溝によって区分されており、第 6b 面で〈耕地段差 B〉として確認された耕地区画が当面でも存在していたことがわかる。4-38 溝の両側での比高差は、第 7a 層下部で 30cm に及んでいる。カラー図版 2-1 は、耕地段差付近を西方から撮影したものであるが、写真左側の高位部では厚く堆積した第 7b 層の砂礫が明るく、右側の低位部では対照的に粘質の第 7a 層が暗く見えることから、耕地段差が第 7b 層の供給によって形成されていることが理解できる。

第 7～6 面の開発では、この区画を挟んで遺構の残存状況や性格が大きく異なることが確認され、土地利用状況に大きな差異が存在することが想定される。高位部では第 6a 層を除去すると第 7b 層が露出する状況で、溝群が検出されている。一方で低位部では第 6b 層に被覆された第 7a 層上面で畦畔が検出される。溝群については後述するが、畝作に関連する遺構の可能性が高く、地形変換点を境として高位部で畝作を、低位部で水田稲作を行うような利用状況の差異が看取できよう。

## 3. 水田

畦畔は三十一ノ坪の南側と三十二ノ坪で検出された。第 6b 層に被覆されてはいるが、畦畔上部は上層の開発によって削平されている。三十一ノ坪では 4-38 溝と 2-49 坪境畦畔の間に畦畔が検出された。直線的な畦畔であるが、真北からやや東に振っており畦畔間の距離は一定しない。

また、2-53 畦畔の盛土内からは磚の破片 (図 74) が出土した。側面と表裏両面に縄タタキが見られ、

奈良時代以降のものと考えられる。当遺跡周辺には讚良寺や高宮廃寺など古代寺院が存在しており、そこから持ち込まれた可能性も考えられよう。

一方、三十二ノ坪の北東部では、地形に合わせて屈曲する畦畔が検出された（図 75）。坪境の設置による条里開発が始まっている状況でも、坪内の地割に関しては規格的な長地型地割などは導入されず、地形に即した前時代的な水田経営が行われている状況が考えられる。上層の第 6 面の開発段階では、瓦器碗の出土位置から、三十二ノ坪に長地型地割が導入されたことを想定した。同坪内での長地型地割は、第 3 面まで踏襲されている（カラー図版 1-3）。これら

から、当調査地における条里開発の過程を复原すると、

〔奈良時代末頃に坪境が設置され平安時代まで踏襲。坪内地割には明確な規格性なし。地下水位の上昇（第 6b 層の堆積）により水田放棄〕  
 →〔平安時代後半に再開発。置き石の設置と瓦器碗の埋置。長地型地割の導入〕  
 という変遷が確認できたことになる。条里開発における坪境の設置と、規格的な坪内地割の導入に時間差がある可能性については、金田章裕が早くに指摘しているが（金田 1985）、考古学的な確認例が少なかった。当遺跡で確認された水田の変遷過程は、条里地割の初現と開発の進展を考える上で重要な資料を提起するものといえよう。

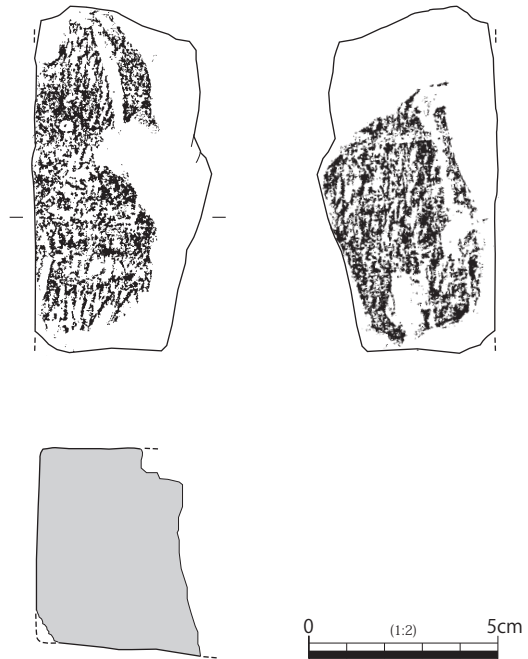


図 74 2-53 畦畔 出土磚実測図



図 75 調査地南西側水田 等高線図



#### 4. 小溝群

調査区北東側の高位部では小溝群が検出された。これらの小溝群は、第7b層上面において第6a層下面のものと一括して検出される。また、遺物はほとんど含まれない上に、下層からの混入遺物が多いため、当面に帰属するものだけを抽出することは難しい。特に3・5区では第5a・6a層の攪拌によって第7a層が残存していなかったため、大部分の遺構は第6b面で図示するに留めた（5区で検出された一部の溝に関しては、切り合い関係や埋土を根拠として、第6面のものと区別することが可能である）。しかしながら、6区では第7a層が層厚を保って残存していることから、当面に帰属するもの（第7a-1層下面で検出）と第6a層下面の溝を分けることができた（図77：図版23-5・6）。6区で検出した小溝群は、幅0.2～0.4m、深さ0.1～0.2mを測り、2.0～2.5mの間隔で南北に平行する（図版23-4）。平面規模や検出状況は第6a層下面の溝群と近似してはいるが、詳細に見ていくと相違点も多い。これについて、以下に列挙する。

1. 第6a層下面の溝（以下6a溝）には切り合い関係が多く見られるが、第7a層下面の溝（以下7a溝）には少ない。
2. 両者の主軸は、6a溝でE-2°-N、7a溝でE-4°-Nとなる。
3. 6a溝では最下部に砂礫が見られるものが多かったが、7a溝では見られない。
4. 6a溝からは細片でも遺物が出土したが、7a溝からは遺物がほとんど出土しない。
5. 溝の底面に残る足跡や工具痕の観察から、6a溝では畜力を利用した犁による掘削（図版22-2）、7a溝では、鋤のような工具による耕起（図版23-7）が想定できる。
6. 溝の断面形状が6a溝では大きく開いたV字形、7a溝ではU字形となる。
7. 溝の幅が6a溝では一定しないが、7a溝は比較的揃う。

このような相違点からは、東西方向に同規模の溝が平行して延びる検出状況こそ近似するものの、掘削方法などの点で異なるものである可能性が高いことが分かる。ただし、両者がともに調査地東側の高位部のみで確認されていることから、畠作に関係する遺構であることは共通すると考えられ、第7面から第6面にかけて、同様の土地利用状況があったことを想定できる（図78）。一方、第5面段階になると、高位部においても小溝群のような遺構は検出されず、部分的に屈曲するものの水田畦畔が確認されている。第5面以降は、調査区全域が水田として利用されていることが想定でき、第6面以下とは様相を大きく変えることとなる。

溝の掘削目的については、前節において第6a層下面の溝に一時的であっても開口期間が想定できることから、天地返しもしくは根菜用の深耕である可能性を否定したが、当面で検出された溝については、下面に工具痕が良好に観察され、埋土には下層（第7b層）がブロック状に含まれる。これから掘削直後の埋め戻し、または掘り上げを伴わない耕起行為が想定でき、第6a層下面のように畝間溝はなく、畠作に伴う天地返しや深耕の可能性を考えることができよう。なお、当面の溝底面の工具痕については、特に刃部背面側で明瞭に残存しており、わずかに内湾する刃部形状が想定できる（図版23-8）。

また4. について、溝から出土する遺物で図化の可能なものは、古墳時代の須恵器しかなく（図76）、下面の古墳時代集落に関連するものが溝の掘削によって混入したものと考えられる。また、第6a層下面の溝に見られたような瓦器碗の細片も出土しない。そのため、これらの溝の掘削時期については不明であるが、さらに下層の

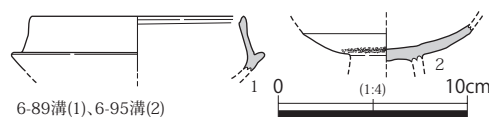


図76 第7a-1層下面溝群 出土遺物実測図

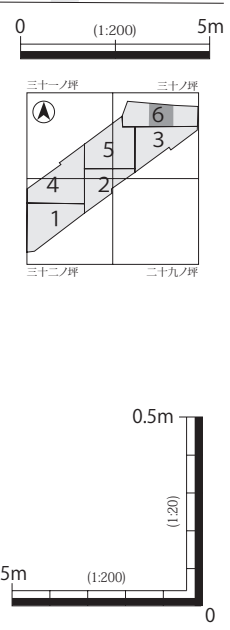
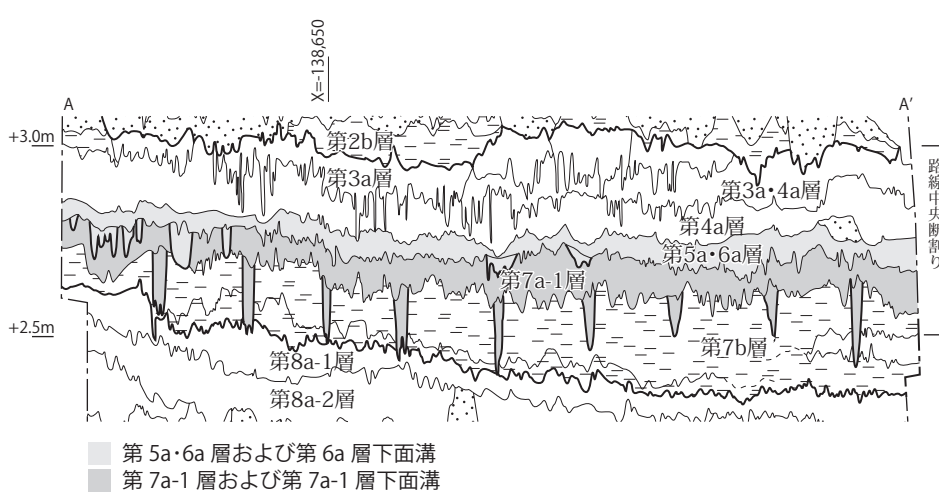


図77 第7a-1層下面溝群 平面図および断面図

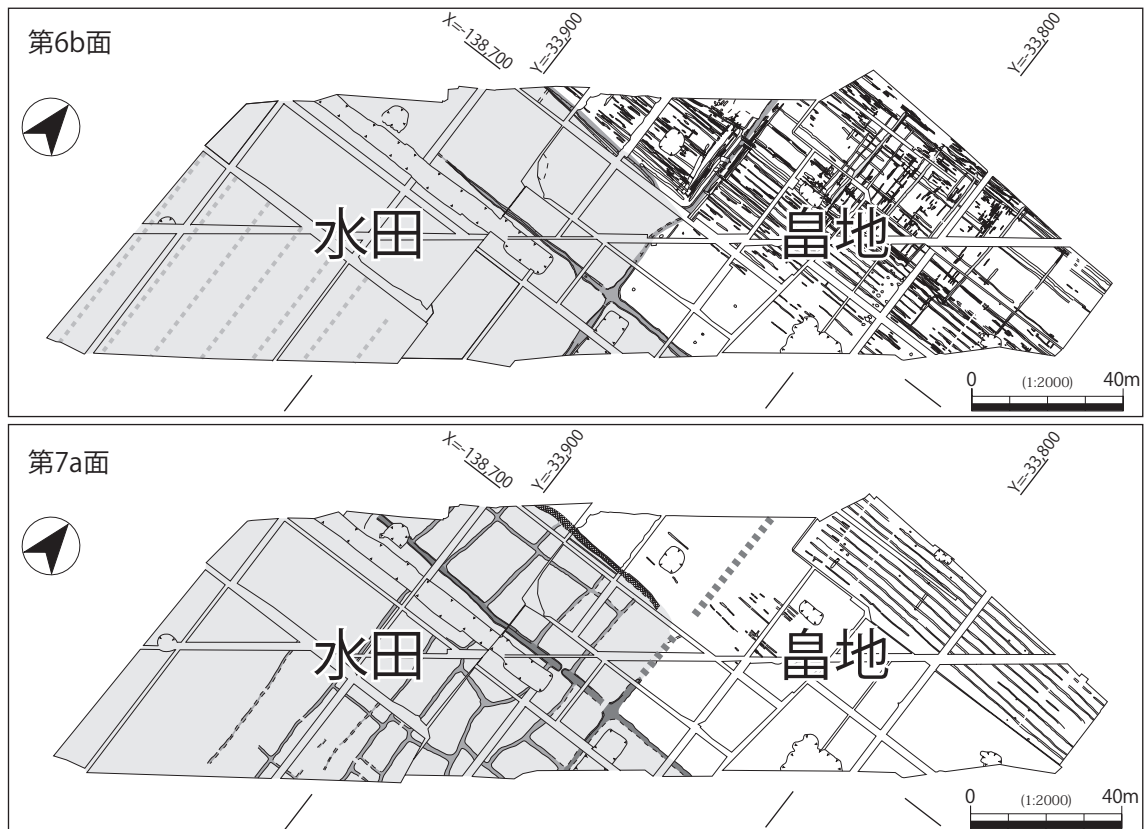


図78 第6・7面土地利用状況

第7b面で検出されている6-106、6-107溝（飛鳥時代）よりも新しくなることは疑いない。また、2.で示した当面の溝の主軸の傾きは、2-49坪境畦畔の持つ傾きに近似しており、坪境が設置された奈良時代後半以降のものである可能性が高いと思われる。

### 5. 包含層出土遺物

第7a層からは、古墳時代初頭から平安時代までの遺物が多く出土した。このうち、古墳時代から奈良時代にかけての遺物は非常に量が多く、第7b面で検出された当該時期の集落との関連性が強いものと考えられるため、次節にて詳述したい。ここでは第7a層出土遺物のうち、平安時代以降のものについて図79に示している。

1は高台のしっかりした瓦器椀で、口縁部内面の段状沈線も顕著であるが、見込みには連結輪状文が施され、第I段階でも新しい方の遺物と考えられる。12世紀頃初め頃のものか。2～4は黒色土器で2が椀、3・4が皿である。いずれも内黒。5～8は灰釉陶器もしくは緑釉陶器と考えられるものである。5は直線的に上方に開く頸部を持ち、口縁部が短く外反する。壺であろうか。内外面ともに自然釉が認められる。7は方形の短い高台と外反しながら薄くなる口縁部を持つが無釉である。山茶碗の可能性はある。8は灰釉陶器の底部と考えられる。底部の貼り付け高台は弱く内湾し、いわゆる「三日月高台」を示す。底部外面には糸切りの痕跡を持つ。体部は失われているものの、欠損箇所端部に釉が認められ、体部に施釉されていた可能性が高い。9は陶器の甕底部で、外面には密に平行タタキが施され、内面にはナデ消しているものの同心円の当て具痕が残る。外面には緑色の釉が認められ、部分的に垂れかかる。10～14は須恵器。10は瓶子の底部で、糸切り痕が顕著に残る。13は口縁部が丸みを帯びて内上方に肥厚する鉢で、京都府亀岡市の篠窯で生産される須恵器に特徴的な形態を持つ。10世紀中頃のものか。

これらの平安時代遺物の出土地点については、包含層出土ということもあり、一部出土位置を記録した遺物を除いて10mメッシュでの取り上げとなっている。しかしながら、図80に示すようにその出土位置は坪境近辺と区画溝周辺に集中する傾向が認められる。また、出土位置の確実な図71-3、図79-3については、ともに坪境からの出土である。このような出土状況からは、当面で検出される坪境畦畔の設置が奈良時代後半に遡る可能性と、その廃絶が平安時代中頃から後半頃になることを示唆する。また、次節でも詳述するが、奈良時代遺物の出土が坪境近辺に集中することもその傍証となろう。

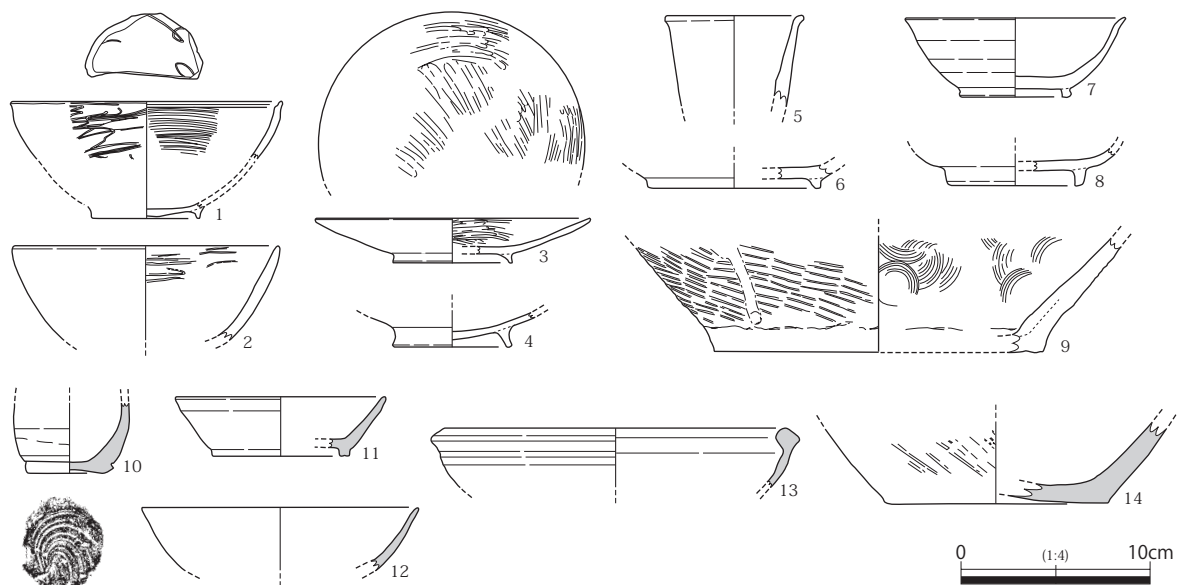


図79 第7a層 出土遺物実測図(古代)



図80 古代遺物 出土位置図

## 第7節 第7b面の遺構と遺物

第7b面は、第7b層を基盤層とする遺構面で、土壌化した第7a層を除去して遺構を検出した(図83)。第7a層には、前節で述べた平安時代の遺構面である第7a-1層と、3・5区を中心に砂質の強い第7a-2層とが存在している。ただし第7a-1層の攪拌の影響により、第7a-2層が部分的にしか残存していない場合や、両層の判別が困難な場合もあったため、第7b層まで掘り下げて調査を行った。

第7b層は、数次にわたって供給されたとみられる氾濫堆積物である。同層の最上部からは弥生時代後期後半～古墳時代初頭の土器が多く出土しており、意図的な配置と考えられるものもみられた。第7b面の調査では、これらの遺物の検出も併せて行っているため、弥生時代後期後半～奈良時代にいたるまでの遺構を同一面において検出したことになる。

第7b面は大局的にみると、東から西に向かって緩やかに傾斜する地形である(図81)。ただ調査区南西側にあたる1・4区では、弥生時代前期以降に形成された高まりの影響で、南東から北西へと下っていく。第7b面で最も低い4区西端部と、6区東端部の比高差は約1.8mとなっている。また第7b層の中でも砂礫層が堆積する範囲が、3区から4区の北東側にかけてと、1区の西側の2ヶ所で確認された。前者について、特に5区では南西部を除いて厚く堆積しており、砂礫層により微高地状の高まりとなっている。ラミナ方向から、東から西に向かって供給されたとみられ、南東側に旧河川の存在がうかがえる。1区西側でみられた砂礫層については、西接する03-5調査地でも確認されており、一部ラミナがみられるものの、どの方向から供給されたのか特定はできなかった。

調査の結果、多数の溝・土坑・ピットが検出され、微高地状となっている5区には特に遺構が集中する。複数の時期に渡る遺構を同一面で検出したため、時期の特定が問題となるが、遺構の規模、形状、相関性を考慮した上で、出土した遺物を基準に時期区分を行っている。最も新しい土器から遺構の時期を想定しているが、同時期のものが大半を占め、主体となっている土器から所属する時期を判断している場合もある。時期区分については、奈良時代、飛鳥時代、古墳時代中期～後期、古墳時代前期～中期、弥生時代後期後半～古墳時代初頭の5時期に分け、それぞれについて記述することとする。

### ・建物のグルーピング

第7b面では、17棟の建物が検出され、そのうち掘立柱建物が14棟(建物1～14)、竪穴建物が3棟(建物15～17)となっている。掘立柱建物出土の土器は細片で、時期の特定が困難なため、座標北を基準とした偏差角度によって、グルーピングを行い、周辺の遺構との関連性から時期を特定した(図82)。

角度から、大きくみて3つのグループに分けられる。ほぼ座標北に向く建物1～6については、南側に奈良時代に掘削されたとみられる正方位の5-503溝が検出されており、建物1～6はそれに基づいて配置されたと考えられる。次にやや西寄りに軸をもつ建物7・8について、西側にそれらとほぼ同軸方向の飛鳥時代に属す5-479、5-480溝があることから、同時期の建物と考えられる。東寄りに軸をもつ建物10～17のうち、建物15～17からは古墳時代中期～後期の土器が出土している。一部、重複関係がみられるものの、建物10～17は同軸方向を志向した、一定の時間幅の中で建てられた建物と判断される。ただこれらの建物の角度にはやや幅がみられることから、一方向を強く意識した建物ではなく、地形に即して建てられたとみられる。そうすると、西寄りに角度をもつ建物9も、隣接している立地状況など含めて、古墳時代中期～後期の建物であると考えられる。周辺の遺構との関係から、建物

1～6、建物7・8の時期を特定しているが、これを傍証する資料として、包含層出土物から抽出された奈良時代、飛鳥時代の土器が、出土量はそれほど多くないものの、各時期の建物周辺にやや多く出土しており、また本調査地の北東に位置する03-2調査地において、奈良時代ではほぼ正方位に、飛鳥時代にはやや西寄りに軸方向をもつ建物が検出されている点（大文セ2007a）を挙げておく。

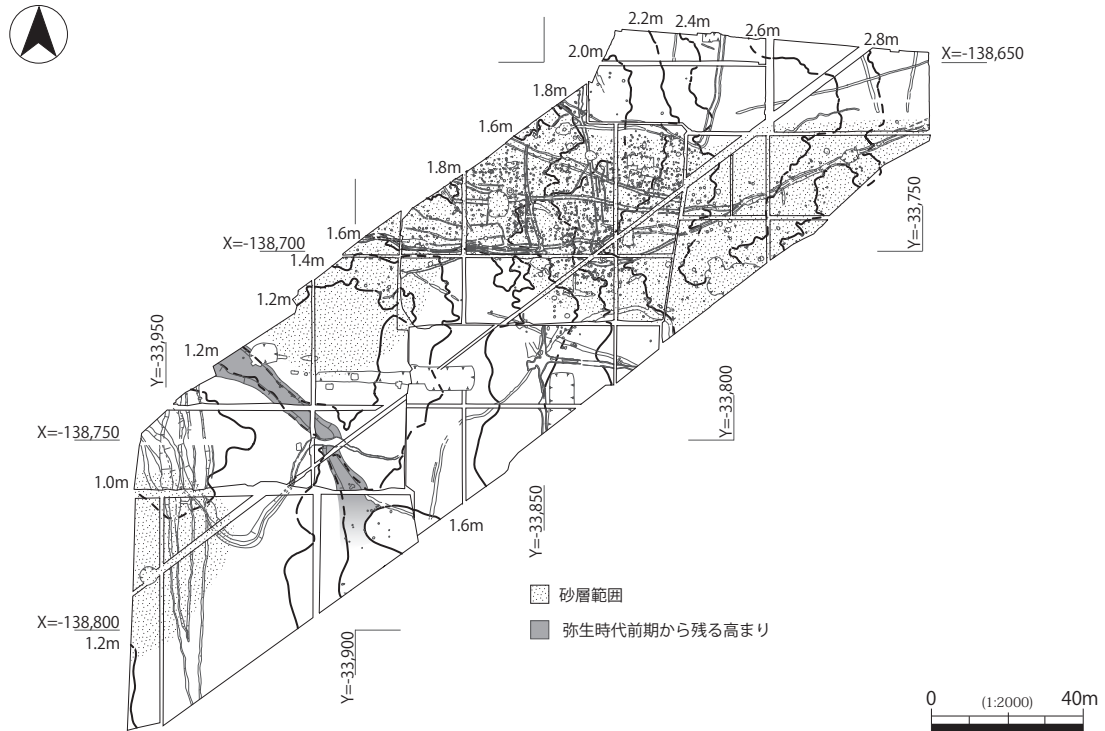


図81 第7b面 標高図および砂層範囲

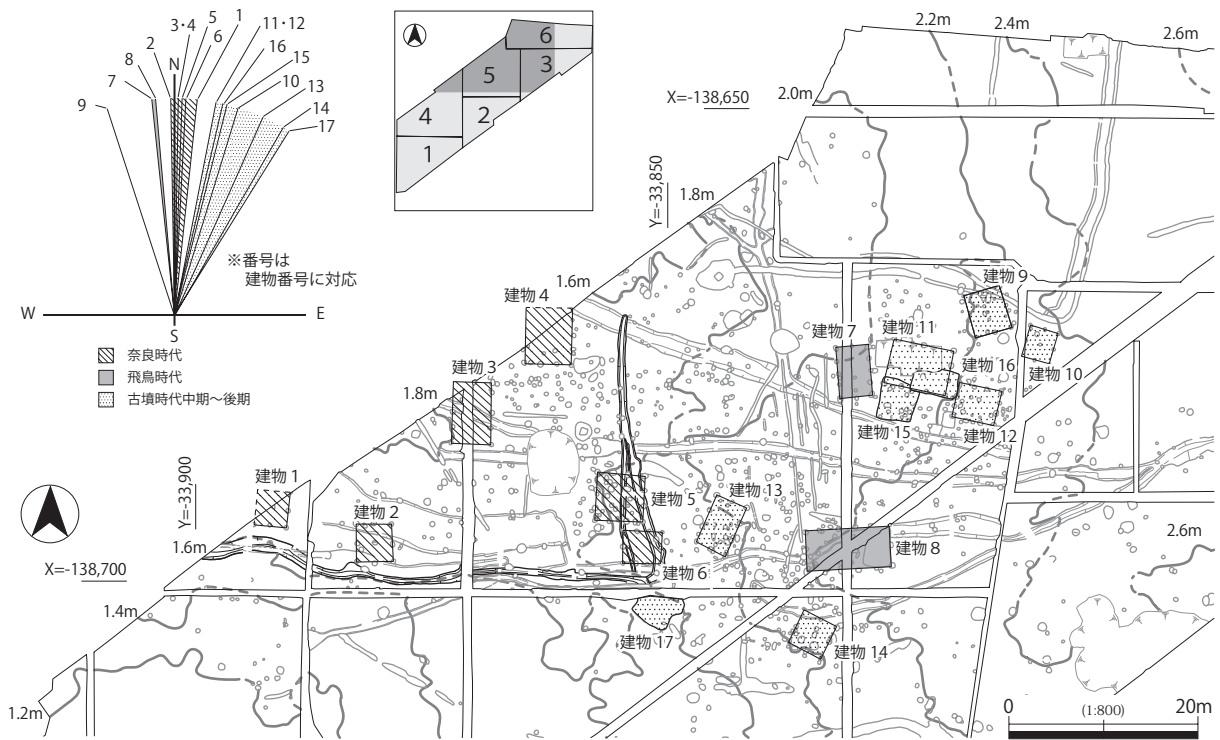


図82 建物1～17の偏差角度および位置図

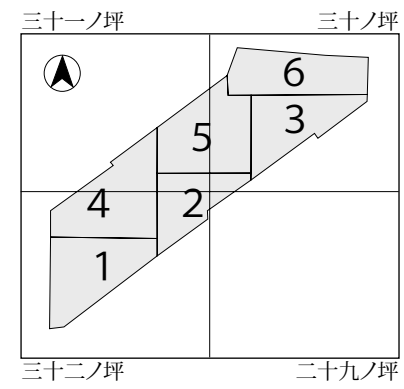
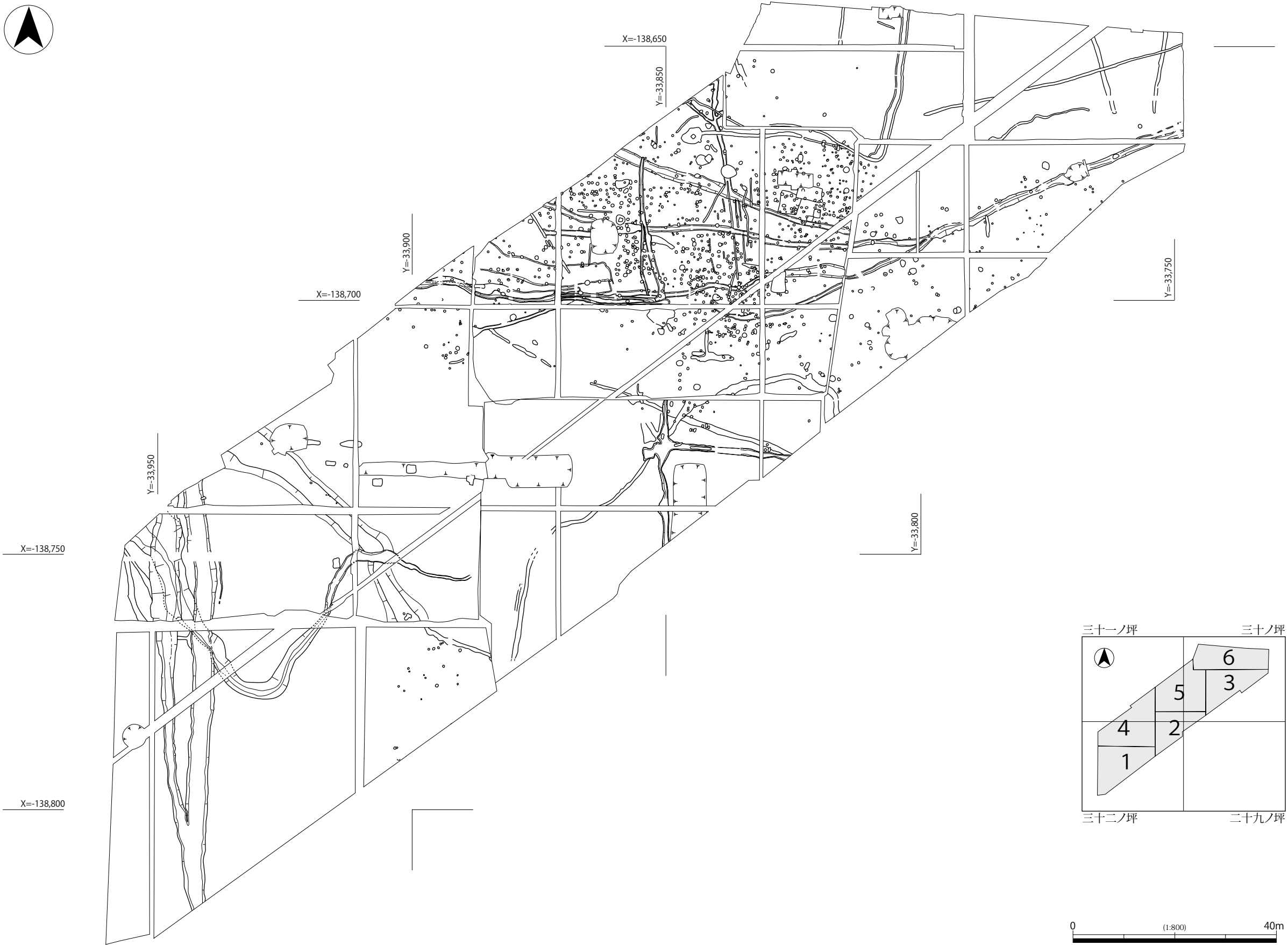


图 83 第 7b 面 (弥生時代後期後半～奈良時代) 平面図

## 第1項 奈良時代の遺構と遺物

坪境・区画溝、建物、井戸、土坑などが検出され、それらの遺構は主に5区の西側に集中している(図85)。この時期に相当する遺物は、他の時期に比べ、それほど多く出土していない。

### 1. 坪境・区画溝

坪境交点にあたる位置では、正方位の溝が検出され、初現段階の坪境溝と考えられる。また4区から5区にかけては、南北坪境に直角に接続する東西方向に延びる溝が検出された。いずれの溝もその機能は、数時期に渡って維持されたと考えられ、同位置での溝の累重が確認される。これらの溝すべてについて平面的な調査を行うことはできなかったが、層序と堆積状況から変遷過程を整理する。

2-94、2-95、2-105、2-106 坪境溝(図84・85：図版24-1・2) 2区で検出された正方位の坪境溝で、交点から北に2-95 坪境溝、南に2-106 坪境溝、東に2-105 坪境溝、西に2-94 坪境溝がそれぞれ延びる。それぞれを併せた総長は南北方向で30m、東西方向で29mで、幅0.6～2.0m、深さ0.15mの溝である。2-95 坪境溝は、北側に向かってやや浅くなる傾向があり、また上層での坪境設置の影響もあり検出されていないが、おそらく後述する5-503 溝まで延び、直角に近い角度で接続するものと考えられる。断面観察により、2-95 坪境溝の西側に堤部とみられる高まりが、確認されている(図84上-5層)。この坪境溝は、その後も規模を縮小しながら存続するようであるが、第7a-1面に属す2-50 坪境畦畔の設置によって完全に埋没している。

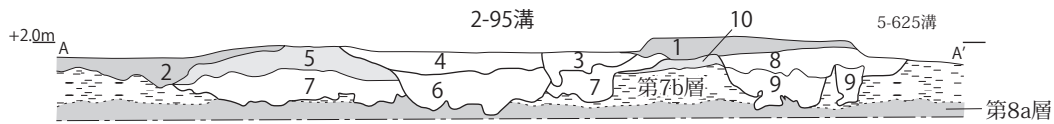
出土した遺物のうち、図示できたものは須恵器の杯蓋、杯身、甕であった(図87-5・6・7)。ただこれらの遺物は、わずかに西に延びる2-94 坪境溝からの出土であり、いずれも古墳時代中期～後期の溝である2-90 溝からの混入遺物とみられる。

5-503 溝(図84～86：図版24-3) 4・5区で検出された東西に延びる溝である。長さ48m、幅0.7～1.5m、深さ0.2～0.3mで、やや蛇行する。4区にかかる西側の部分では、長さ9.5m、幅0.5m、深さ0.15mの先行する4-99 溝と切り合う。5-503 溝の形成時には、北側に堤部があったとみられ(図84下-11層)、溝の埋没後に、第7a-1面の4-38 溝、そして第6b面の耕地段差Bが形成される。

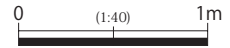
また東側では、この溝と並行して延びる長さ17m、幅0.5～0.7m、深さ0.2～0.3mの5-840 溝が検出された。上層ではさらに、4-38 溝があり、これらの溝は第7b層(③)によって形成される段差際に掘削されているのがわかる(図86)。また、第6a層(①)と第7a層(②)の確認される高さに大きな差異があり、第7b面ではこれが30cmほどの段差となっている。なおこの段差は、第5面の開発段階に解消されるようである。断面状況から〔第7b面：5-503 溝〕→〔第7a面：4-38 溝〕→〔第6b面5-840 溝〕の掘削順序が確認されたものの、これらの溝の埋土は周囲の耕作土層(第6a・7a層)と近似しており、耕作面上での検出が困難であったため、平面的な検出と調査は第7b面で一括して行った。その結果、第7a層を除去したことにより4-38 溝は失われ、5-840 溝はその底部のみが検出されることとなっているが、当面に帰属する遺構は5-503 溝のみである。

3条の溝については、各開発時期を通して、段差付近のほぼ同位置に掘り込まれ、また溝を挟んで遺構の分布状況や性格が異なることから、これらの溝がいずれも区画要素を持っていたことがわかる。第7b面で検出された、古墳時代から古代にかけての集落を構成する遺構は、5-503 溝北側の高位部に偏在し、低位部では対照的に遺構が希薄となっている。同様に東方でも、坪境溝(三十・三十一ノ坪境)を境に、東に遺構が多く、西に少ない。以上のことから、坪境と5-503 溝が大きな区画的意味を持ち、

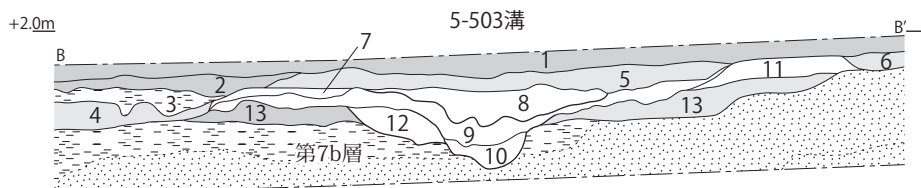
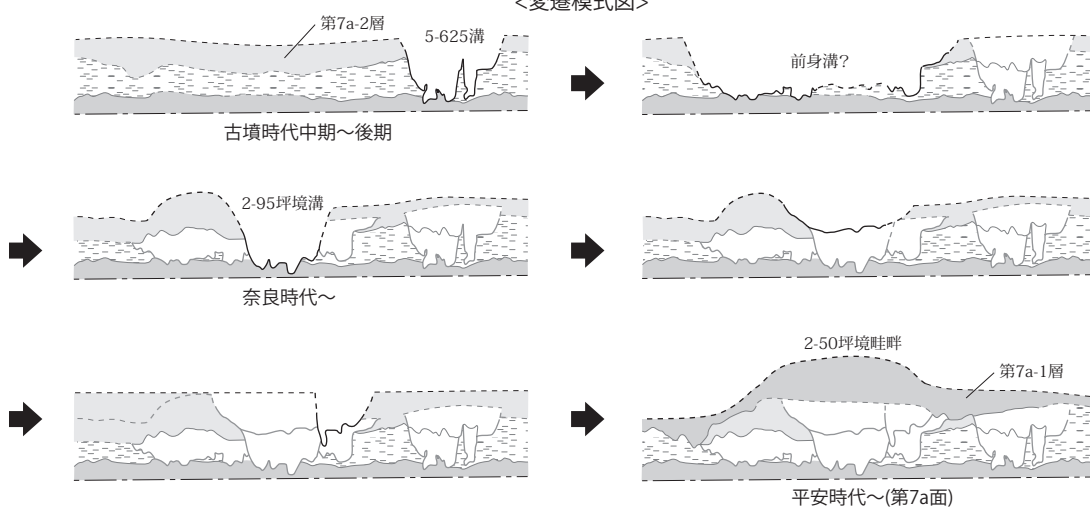




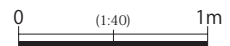
1. 2.5Y 5/2 暗灰黄色 シルト混じり細砂～粗砂 (締まりがよい。周辺ピットの埋土と近似)
2. 5Y 5/1 灰色 粘土混じり細砂～粗砂(ブロック土多い。須恵器混入)
3. 5Y 8/2 灰白色 細砂～粗砂(ブロック土混じる。部分的にラミナあり)
4. 10BG 5/1 青灰色 粗砂混じり粘土(畦畔際にラミナあり)
5. 5Y 7/2 灰白色 細砂～粗砂
6. 10GY 6/1 緑灰色 粘土～シルト(灰白シルト～細砂ブロック混じる)
7. 10GY 5/1 緑灰色 粘土混じり細砂～粗砂(下層のブロック土多く含む)
8. 5Y 8/2 灰白色 細砂～粗砂と10BG 6/1 青灰色 シルト～細砂の互層
9. 10BG 6/1 青灰色 シルト～細砂(下層の第7b層を多く含む)
10. 10G 5/1 緑灰色 シルト～粘土と5Y 8/2 灰白色 細砂～粗砂の互層



<変遷模式図>



1. 5Y 6/1 灰色 粘土～粗砂(第6a面耕作土。締りがよい)
2. 5Y 5/1 灰色 粘土～粗砂(1より粘質が強い。段差の下段にある耕作土)
3. 10GY 6/1 緑灰色 粘土(わずかに炭化物および粗砂混じる)
4. 5Y 5/1 灰色 粗砂～粘土
5. 4に近似するがより粘質が強い
6. 10GY 4/1 暗緑灰色 細砂～粗砂(遺物多く含む)
7. 7.5GY 5/1 緑灰色 粗砂～シルト(ブロック土多い。第7a-1面の畦畔の盛土か)
8. 10BG 5/1 青灰色 粘土～粗砂(ブロック多い。第7a-1面開発前の溝埋め戻し土か)
9. 10BG 6/1 青灰色 細砂混じり粘土(部分的に炭化物多く含む。第7a-2面溝機能時の止水性堆積か)
10. 5BG 6/1 青灰色 粗砂混じり粘土
11. 10GY 5/1 緑灰色 粘土～粗砂
12. 5Y 4/1 灰色 微砂～細砂混じりシルト(粗砂わずかに含む)
13. 5BG 5/1 青灰色 粘土～粗砂 (ブロック土含む。溝の埋戻し土の可能性はあるが不明)



<変遷模式図>

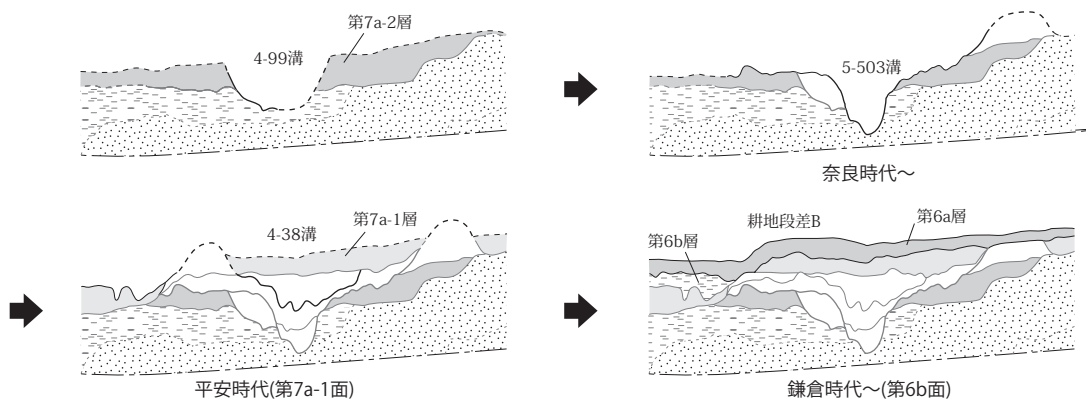


図 84 2-95、5-503 溝 断面図

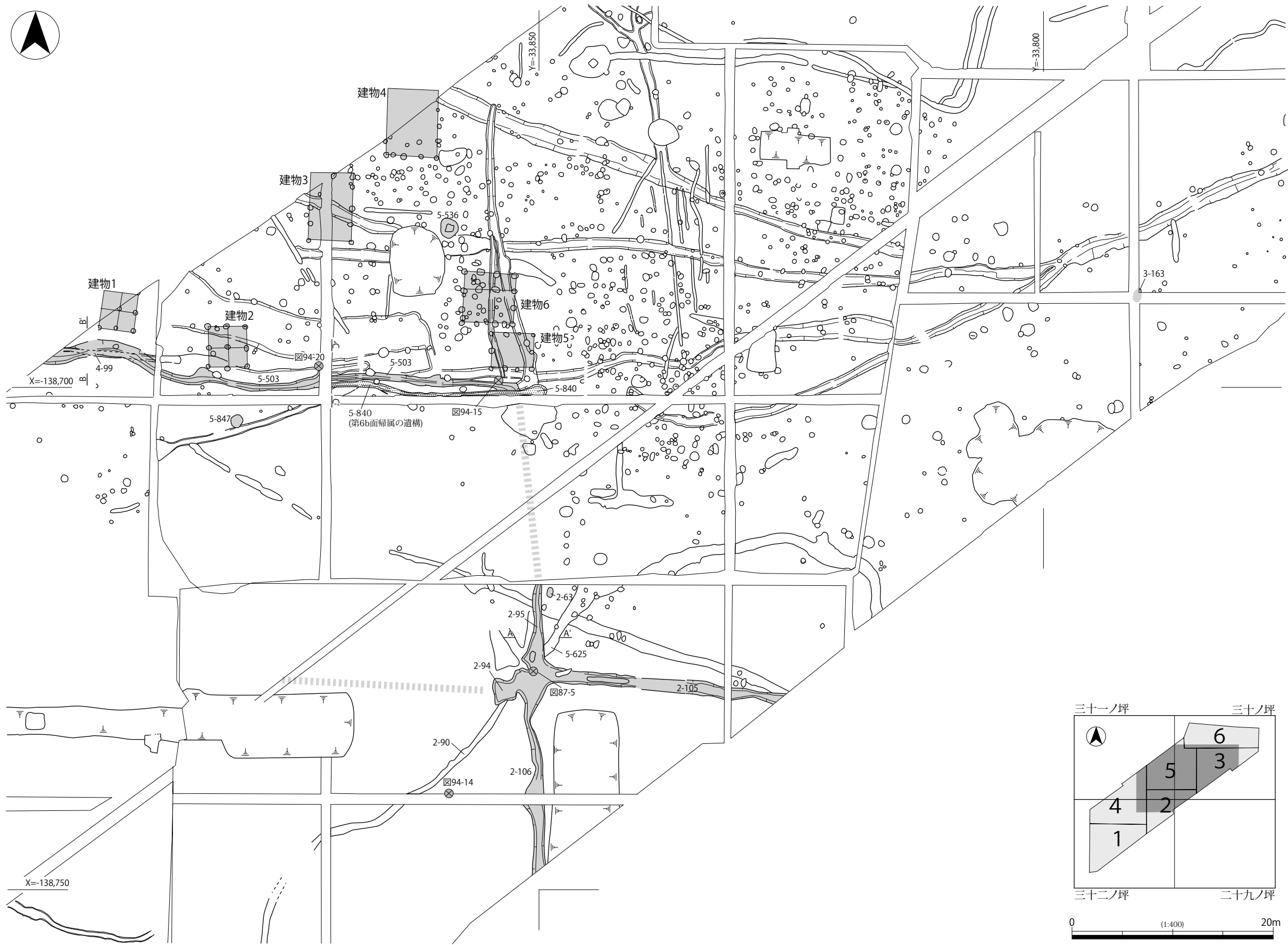


図85 第7b面(奈良時代) 平面図

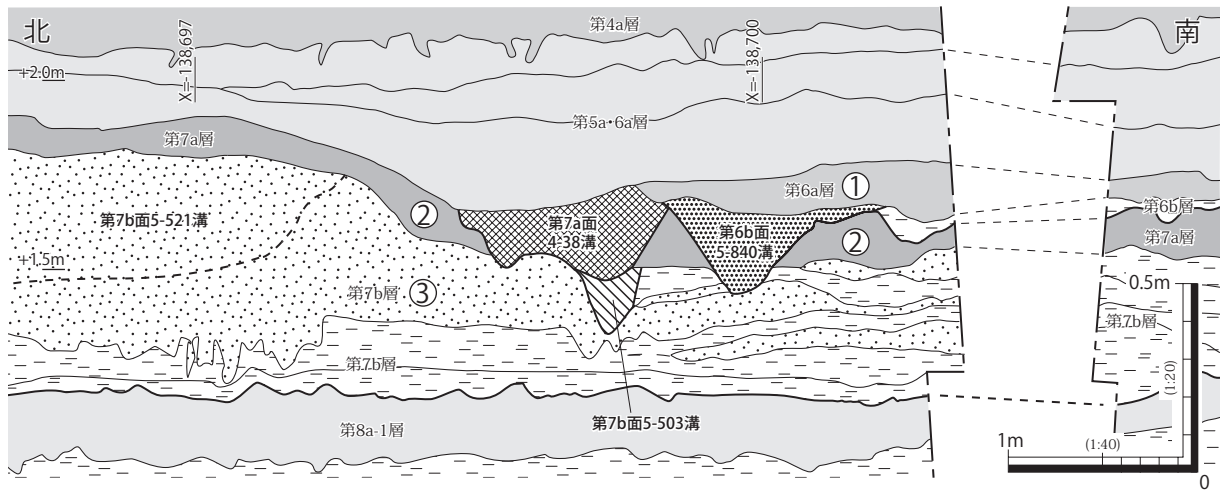
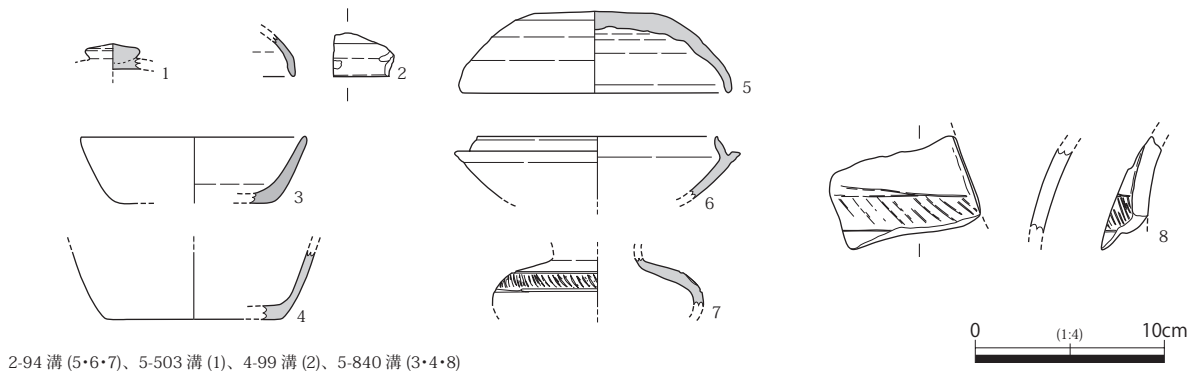


図 86 5-503 溝 (Cライン) 断面図



2-94 溝 (5・6・7)、5-503 溝 (1)、4-99 溝 (2)、5-840 溝 (3・4・8)

図 87 坪境溝 出土遺物実測図 (奈良時代)

さらに奈良時代～平安時代もしくは鎌倉時代まで踏襲されていたと考えられる。

出土した遺物をみると (図 87)、最も古い段階の溝である 4-99 溝からは 7 世紀代とみられる杯蓋 (2)、5-503 溝からは 8 世紀代とみられる宝珠形のつまみ (1) が出土している。

第 6b 面に所属する 5-840 溝からは、8 世紀後半を上限とした須恵器の杯身 2 点 (3・4)、弥生時代後期後半～古墳時代初頭の手焙形土器 1 点 (8) が出土している。須恵器の杯身を 5-840 溝の掘削もしくは埋没過程における、5-503 溝関連遺物の混入と捉えると、この区画の初現時期として、遅くとも奈良時代後半を考えることができる。北側で検出されている同時期の集落との有機的な関係が想起され、奈良時代においては遺構分布から 5-503 溝北側を集落域、南側を生産域 (水田) として利用していた状況を考えることができよう。

## 2. 建物

先述したように主に正方位をとる建物群である。建物は 6 棟認められ (建物 1～6)、全て掘立柱建物であるが、建物 1・2 のみ総柱建物である。建物については、後述する 5-536 井戸を中心に配置されているように見えるが、総柱建物 2 棟は、そこからやや西に離れた場所に位置する。

**建物 1** (図 88 左上: 図版 24-4) 4 区の北東隅で検出され、最も西側に位置する。北西側は調査地外のため、2 間×2 間の柱穴を検出したのみで、さらに北側に広がる可能性がある。軸は N-6°-E とみられ、後述する建物 2～6 に比べ、軸を若干東に振る。南側に隣接する 4-99 溝と軸をほぼ垂直にしており、両遺構が関連する可能性が高い。検出した南北規模は 3.8m、東西規模は 3.5m を測る。柱間は 1.7～2.0m である。いずれのピットも平面不整楕円形で、深さは 0.2～0.3m と浅い。柱痕跡ま

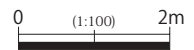
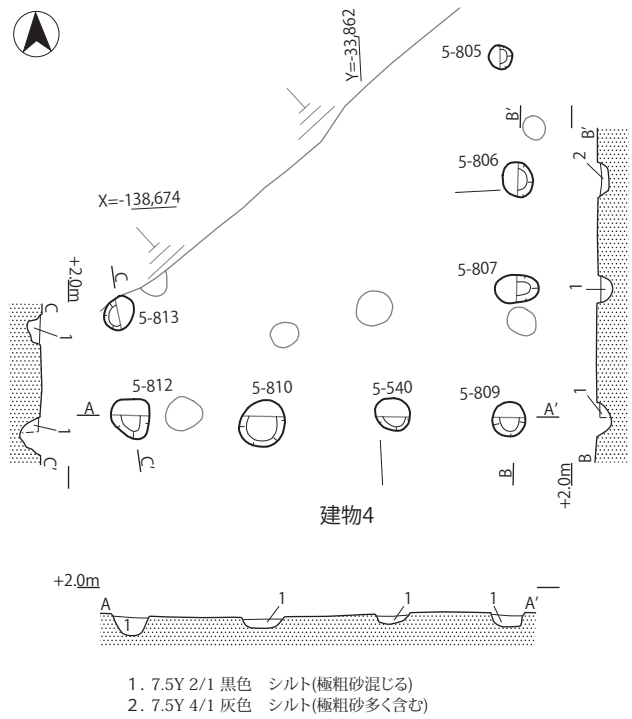
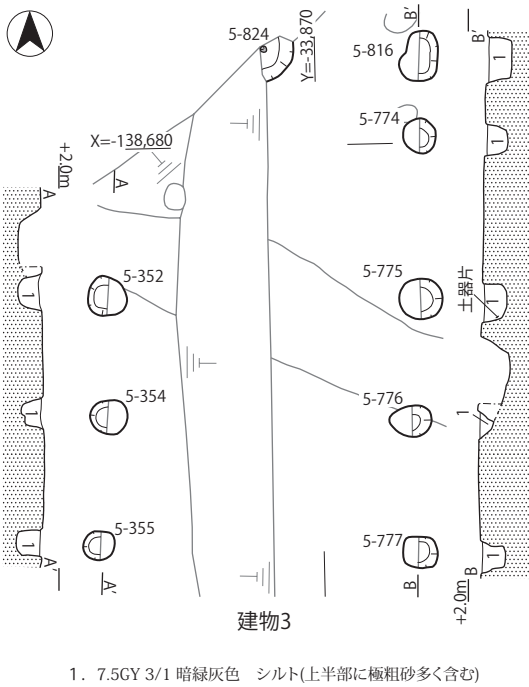
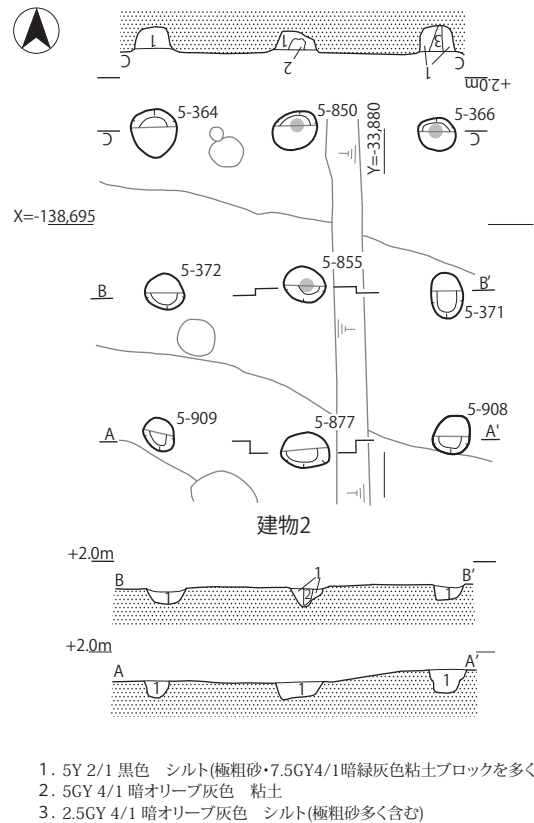
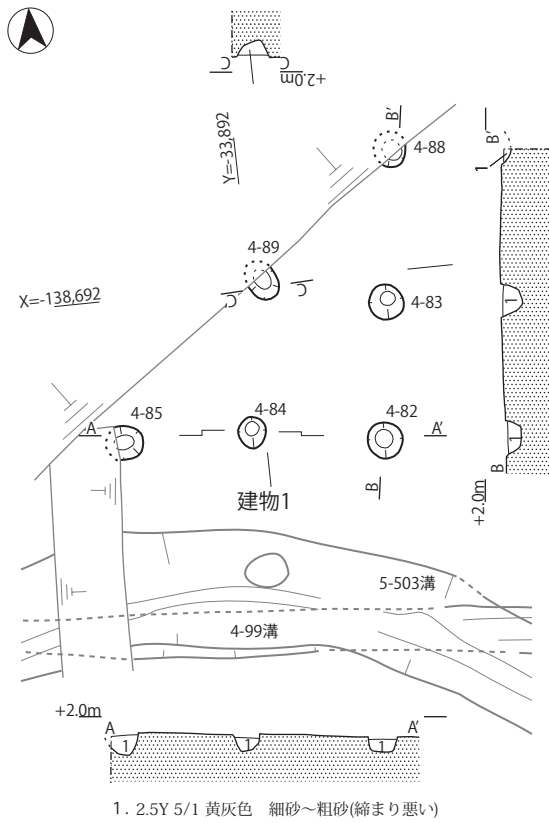


図88 建物1・2・3・4 平面図および断面図

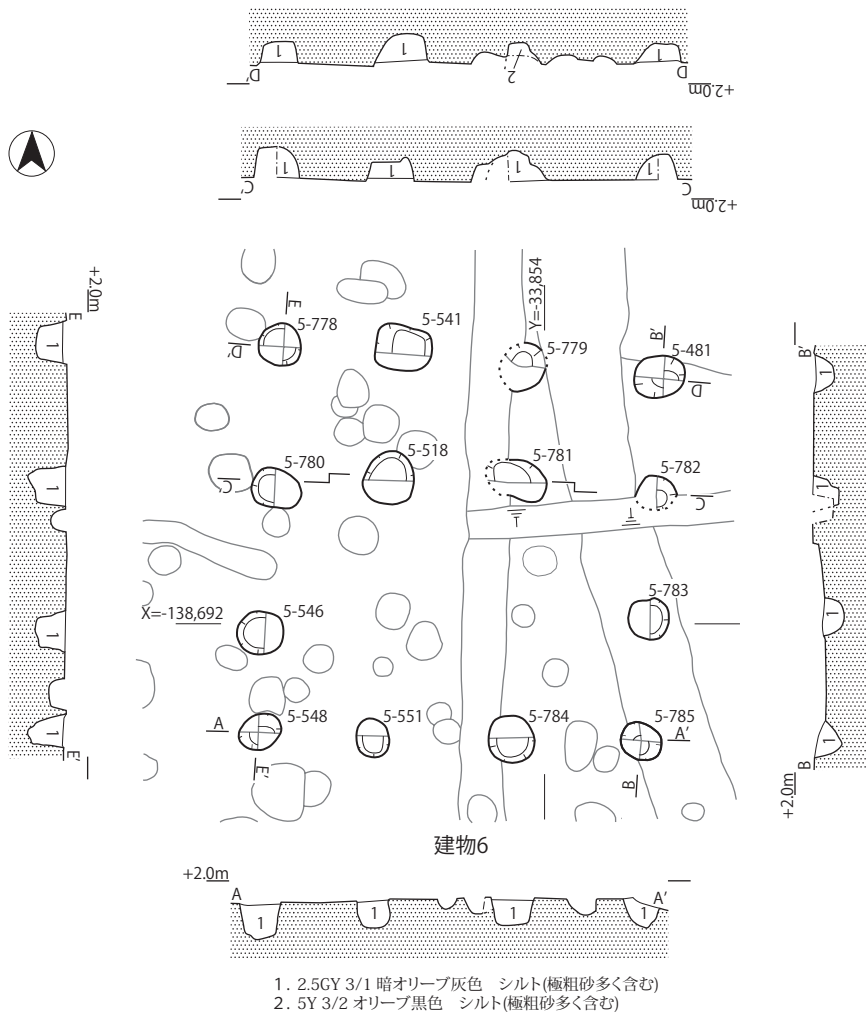
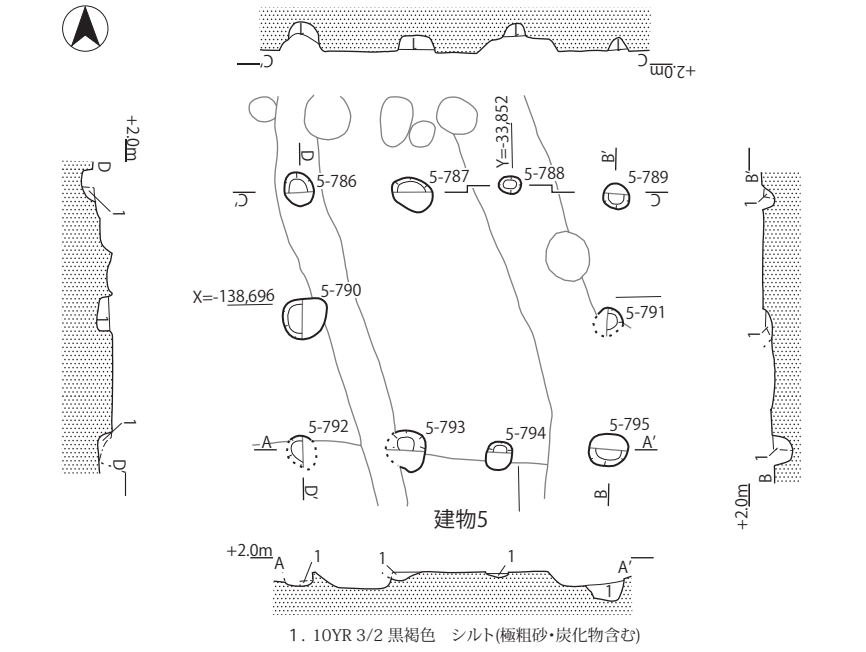


図 89 建物 5・6 平面図および断面図

たは抜取り痕はみられず、黄灰色の細砂～粗砂の埋土であった。4-89ピットを除いたすべてのピットから、土師器が出土しているが、細片のため図示していない。ただ時期については、軸が他とやや異なり、4-99溝が最も古い溝であることから、建物2～6より古い段階の建物である可能性が考えられる。

**建物2 (図88 右上：図版24-5)** 建物1の東側に位置し5-503溝と隣接する。軸方向はN-1°-Wで、2間×2間の柱穴を検出した。南北規模4.3m、東西規模3.8m、床面積は15.2㎡を測る。柱間は1.9～2.2mである。いずれの柱穴も、平面不整楕円形で、深さは0.2～0.35mの断面逆台形である。掘方の埋土は、黒色シルトで、5-366、5-850、5-855ピットでは、柱痕跡が認められた。5-364、5-366、5-371、5-372、5-850ピットから、須恵器・土師器が出土しているが、細片のため図示していない。

**建物3 (図88 左下：図版24-6)** 5区の北西側で検出され、5-503溝から北へ13mほどの場所に位置する。中央部にY=-33,870ラインの断割りが延びているため、南妻側の柱穴を検出していない。軸方向はN-1°-Eで、南北3間(6.5m)、東西2間(4.2m)、床面積は27.72㎡とみられる。ただ東側の桁行柱間が、北から1.0m、2.2m、1.6m、1.8mと差異が認められ、また5-816ピットの平面形が、他はほぼ円形なのに対し、隅丸長方形であることから、5-824、5-816ピットは、調査地外の北側に延長する別の建物である可能性もある。深さはいずれも0.3～0.35mである。埋土は暗緑灰色のシルトで、5-824ピットのみ柱根が検出され、樹種はスギであった。すべてのピットから須恵器・土師器片が出土しているが、細片のため図示していない。

**建物4 (図88 右下：図版24-7)** 建物3の北東側に位置する。軸方向はN-1°-Eで、北西側が調査地外に広がるため、規模の全容は不明であるが、東西3間(5.0m)、南北3間(4.8m)以上を測る。南側の柱間は1.5～1.8m、東側の柱間は1.4～1.7mとなっている。ピットは平面不整楕円形で、深さは0.15～0.3mと浅い。埋土は、粗砂を含む黒色もしくは灰色のシルトであった。すべてのピットから須恵器・土師器片が出土しているが、細片のため図示していない。

**建物5 (図89 上：図版25-1)** 5区のほぼ中央、5-503溝と2-95坪境溝が接続するとみられる場所から北へ約1.5mの場所に位置する。軸方向はN-2°-Eで、桁行3間(4.2m)、梁行2間(3.4m)、床面積は14.28㎡を測る。桁行柱間は1.2～1.5m、梁行柱間は1.6～1.7m、深さは、0.1～0.4mである。埋土はいずれも黒褐色のシルトであった。5-786、5-789、5-791、5-793ピットから、須恵器・土師器片が出土しているが、細片のため図示していない。

**建物6 (図89 下：図版25-2)** 建物5の北西約1mの場所に近接する一面庇付建物である。軸方向は、N-3°-Eで、北側一方に庇が付く。庇を含めた桁行・梁行それぞれの間数は3間(5.0m)×3間(4.9m)で、身舎の梁行は2間(3.2m)を測る。庇を含めた床面積は24.5㎡で、身舎では16㎡となる。身舎の東側梁行柱間がほぼ1.6mに対し、西側では北から1.9m、1.3mと等間ではない。ピットの平面形は、ほとんどが不整楕円形で、一部庇部分の5-541ピットのみ隅丸方形を呈する。断面形は逆台形で、深さは0.25～0.5mである。埋土は、粗砂を多く含むオリーブ系のシルトで、柱痕跡などがみられるピットはなかった。5-785ピットを除いたすべてのピットから、須恵器・土師器片が出土しているが、細片のため図示していない。

### 3. 井戸

**5-536井戸 (図90：図版25-3～6)** 建物3～6に囲まれた井戸である。掘方の平面形は不整楕円形で、長軸2.0m、短軸1.7mを測る。検出面からの深さは1.5mで、逆台形の断面で段をもつ。掘り

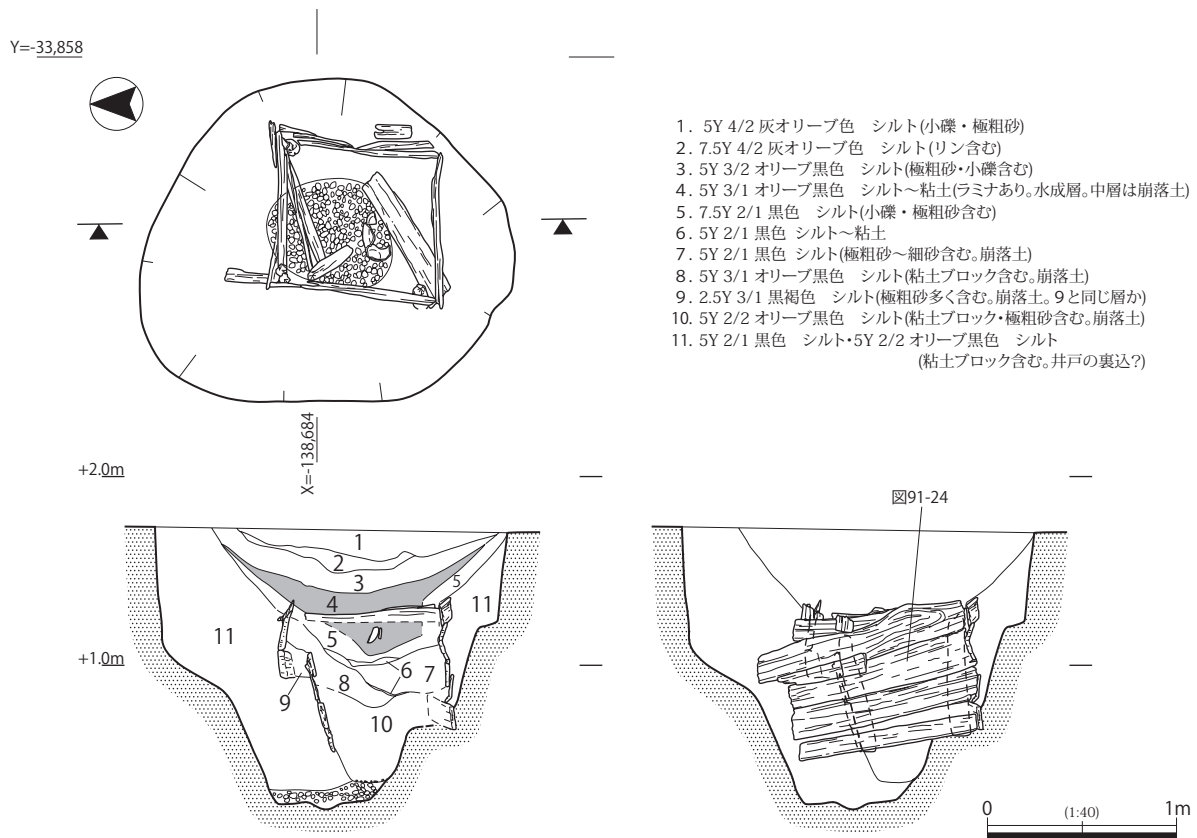


図 90 5-536 井戸 平面図および断面図

下げ途中において、掘方のやや南東寄りの位置で、井戸枠を検出した。井戸枠の各面はほぼ正方位に向き、平面形は一辺が0.7～0.8mの方形で、幅18cmほどの板材を4段積み上げている。また井戸枠内側の四隅には径10cmの支柱が立てられていたが、土圧によって一部の板材、支柱が井戸枠内に倒れている。井戸枠の上部構造については、井戸の廃棄時もしくはその後、抜き取られたものと考えられる。4層が自然堆積層である点から、廃棄後、一定期間は開口状態にあったことがわかる。

井戸底には径2～3cmの円礫が敷かれており、調査時においても湧水がみられた。ただし、この礫層まで上部の井戸枠が達しておらず、平面位置もやや南東にずれている点から、礫層と井戸枠に対してやや大きな掘方が、先行する井戸のものであった可能性が考えられる。礫敷きの井戸が廃絶した後に、やや規模を縮小した形で、井戸枠の設置が行われたのであろうか。井戸枠内は、1～10層によって埋没しているが、明確な埋め戻し土がみられず、4層や6層のような滞水時に堆積する泥土が間層として認められることから、廃絶後に自然埋没した可能性がある。

出土した遺物のうち、須恵器3点、土師器20点、木製品1点を図示した(図91)。4層から1・7・12・13・16、5～10層から2・4・6・8・9・11・15・17・22・23、先行する井戸の埋め戻し土、もしくは井戸枠の裏込め土と考えられる11層から3・5・10・14・18～21がそれぞれ出土している。壺1、椀7、皿9などは8世紀中頃～後半とみられる。11・12は8世紀末～9世紀初頭の長胴甕の口縁部で、13も同時期の高杯とみられる。14～23はいずれも手づくねの製塩土器である。小片のため器形をうかがえるものは少ない。外面に指頭圧痕が残るもののほかに、23では内面に布目痕がみられた。24は扉板で、西側井戸枠に転用されていた。一方にのみ軸が残り、反対側に断ち切られた痕がみられる。樹種はヒノキであった。なお他の井戸枠についてはスギ、支柱についてはヤナギ属

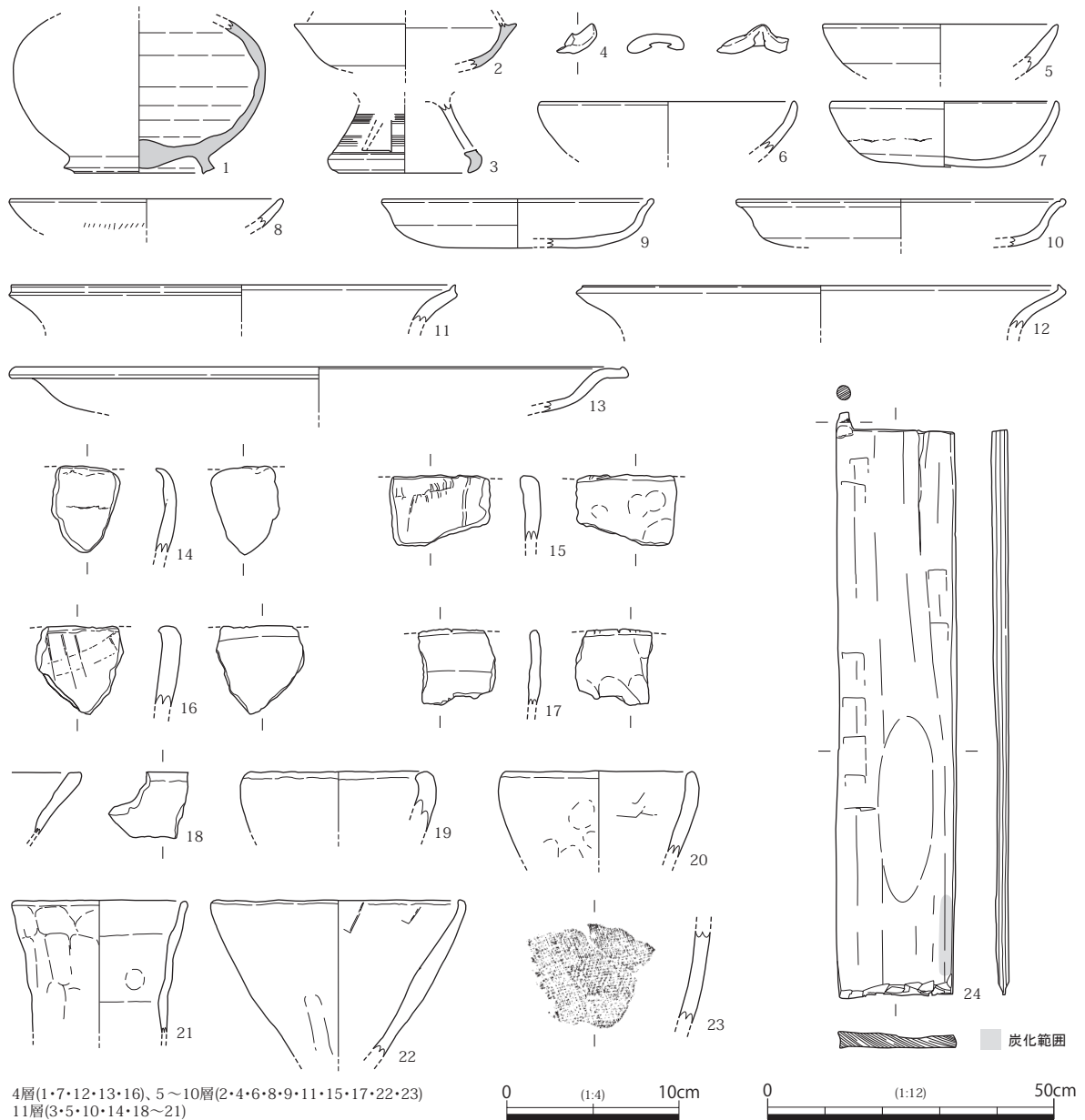


図91 5-536 井戸 出土遺物実測図

であった。また4層と11層から採集した土壌試料を洗浄したところ、4層からは何もみつからなかったが、11層から完形のモモの核1点がみつかった。

この井戸の時期については、2段階の掘削が想定されるが、いずれも8世紀中頃～後半に行われたと考えられ、9世紀初頭までには埋没したものと考えられる。

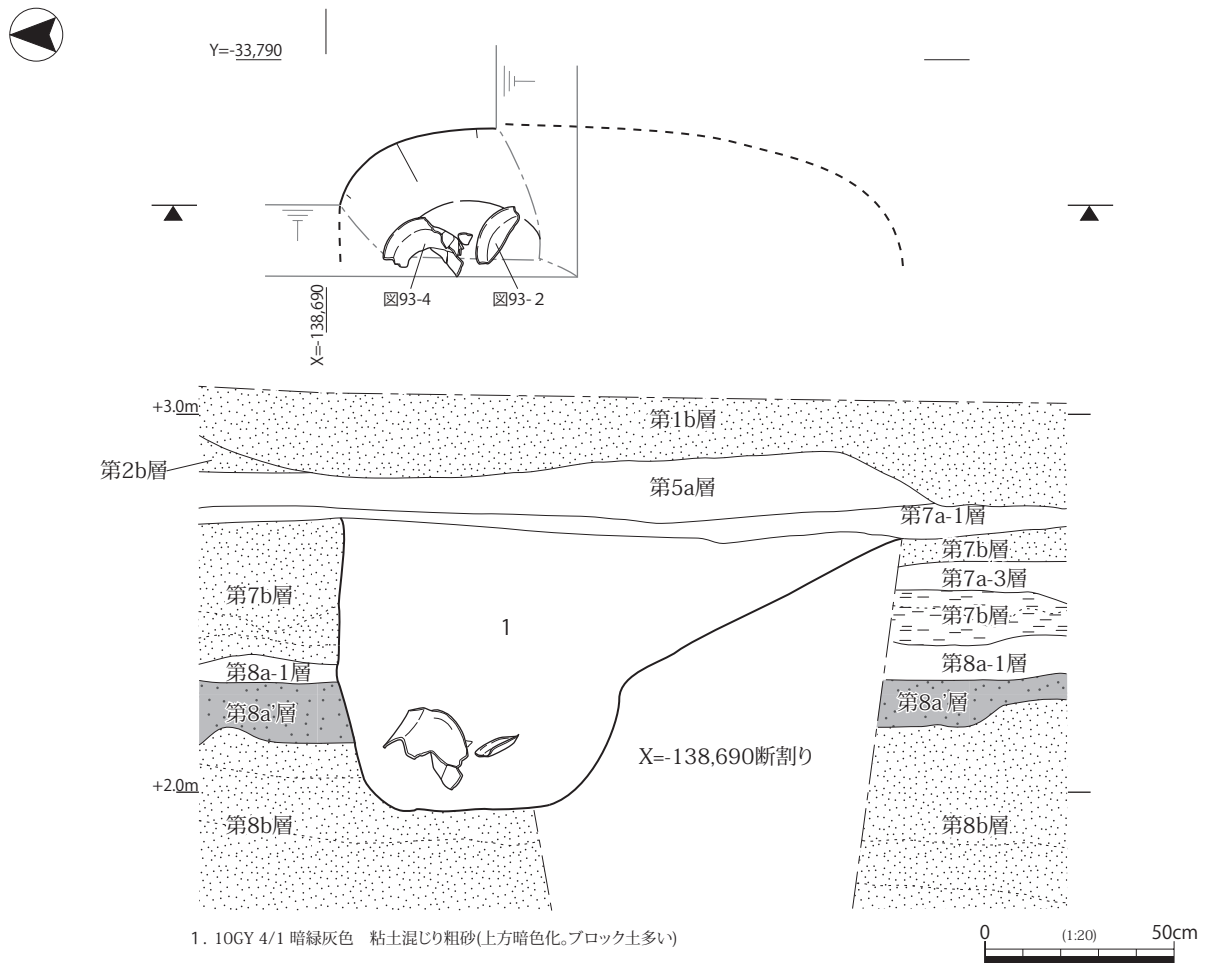
#### 4. 土坑

奈良時代の土器を伴う土坑は3基にとどまり、2・3・5区に点在する。5-503 溝北側の遺構集中部以外で、奈良時代の遺物を含む遺構は少ない。

**2-63 土坑** 2区の北側、2-95 坪境溝の東側に近接する。長軸 1.0m、短軸 0.5mの平面楕円形で、深さは 0.1m と浅い。須恵器の蓋が 1 点出土した (図 93-1)。8 世紀のものと思われる。

**3-163 土坑 (図 92 : 図版 25-7)** 3 区のほぼ中央で検出した。断割りにかかっていたため、北東隅の一部しか残存していない。南北軸は推定で 1.5m、東西軸は不明である。検出面からの深さは 0.77m





1. 10GY 4/1 暗緑灰色 粘土混じり粗砂(上方暗色化。ブロック土多い)

図 92 3-163 土坑 平面図および断面図



2-63 土坑 (1)、3-163 土坑 (2・4)、5-847 土坑 (3・5)

図 93 土坑 出土遺物実測図 (奈良時代)

で、埋土は暗緑灰色の粘土の混じる粗砂であった。埋土中から、土師器 2 点が出土した (図 93)。2 は皿で、外面下半から底部にかけて横方向のケズリ後、斜め方向のケズリが施される。8 世紀後半のものとみられる。4 は甕で、口縁端部に面をもつ。内外面にハケが施される。また体部下半を円形に打ち欠いている。8 世紀のものとみられる。

**5-847 土坑 (図版 25-8)** 5 区の西側で、5-503 溝の南側で検出した。径 1.2m の平面ほぼ円形の土坑で、検出面からの深さは 0.17m である。出土した遺物のうち、土師器 1 点、石器 1 点を図示した (図 93)。3 は甕で、口縁部が短く直線的に伸びる。内外面全体にコゲ・ススが付着する。8 世紀のも

のとみられる。5は石核で、磨製石器の素材か。石材は粘板岩である。重量は263.3gを量る。

### 5. 包含層出土遺物

第7a・7b層出土の土器の中で、この時期とみられるものを抽出して図示した(図94)。他の時期に比べ、相対的に少量である。また第7b層から出土しているのは23のみである。土器の出土位置を調査区別に見ると、やはり建物などを検出している5区が最も多く12点(5・10・11・13・15～21・23)、坪境交点が検出された2区で4点(1・7・12・14)、3区で4点(3・8・9・22)、4区で3点(2・4・6)となっている。土器の多くは、点在した状況であるが、11・13・17・18については、建物4の西側から出土している。また5区で出土している15・20については、区画溝とみられる5-503溝に近接した位置で出土している。

1～20は須恵器である。1～4は蓋である。1は宝珠形つまみ部分で、焼成がやや不良で灰白色を呈する。4は短頸壺の蓋、5は杯、6～15は壺で8世紀中頃～後半のものである。6は口縁端部が上下に拡張され、頸部はややすぼまる。8は口縁部が緩やかに外反し、頸部はやや太い。10は小型のものである。11の高台接地面は平坦であることから、8世紀後半～末のやや新しい時期のものか。16～19は甕である。16はかなり厚手で、小片のため口径は不明である。他の時期に属す可能性がある。

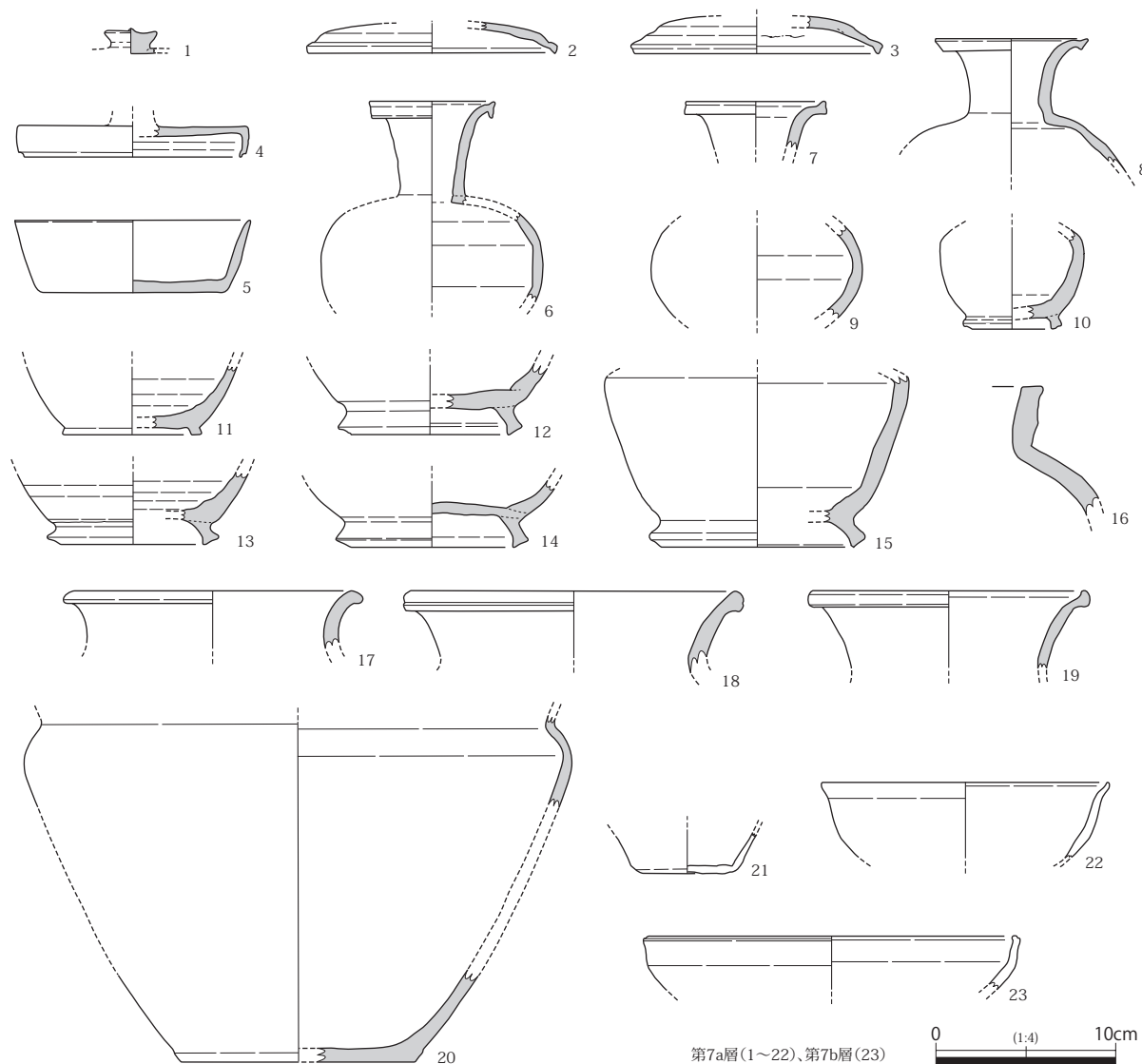


図94 第7a・7b層 出土遺物実測図(奈良時代)

20は大型の鉢である。体部の一部を欠くため、図上復元している。肩部がやや張り、底部に高台はつかない。21～23は土師器である。21は壺もしくは甕の底部とみられ、平底で薄手のつくりである。22は鉢である。口縁端部がわずかに外傾する。23は杯もしくは椀とみられ、口縁端部外面に面をもつ。8世紀中頃～後半のものか。

## 第2項 飛鳥時代の遺構と遺物

建物・井戸・溝・土坑・ピットなどを検出しているが、遺構数としては、他の時期と比較して少ない(図96)。遺構の分布状況をみると奈良時代と異なり、5区の東側に遺構がみられる。

### 1. 建物

軸方向が真北からやや西側に振る建物を、この時期のものとして判断しており、掘立柱建物が2棟(建物7・8)検出された。またこれらの建物のすぐ西側には、同様の軸方向をとる浅い溝が数条みつかっており、これらは耕作痕の可能性が考えられる。

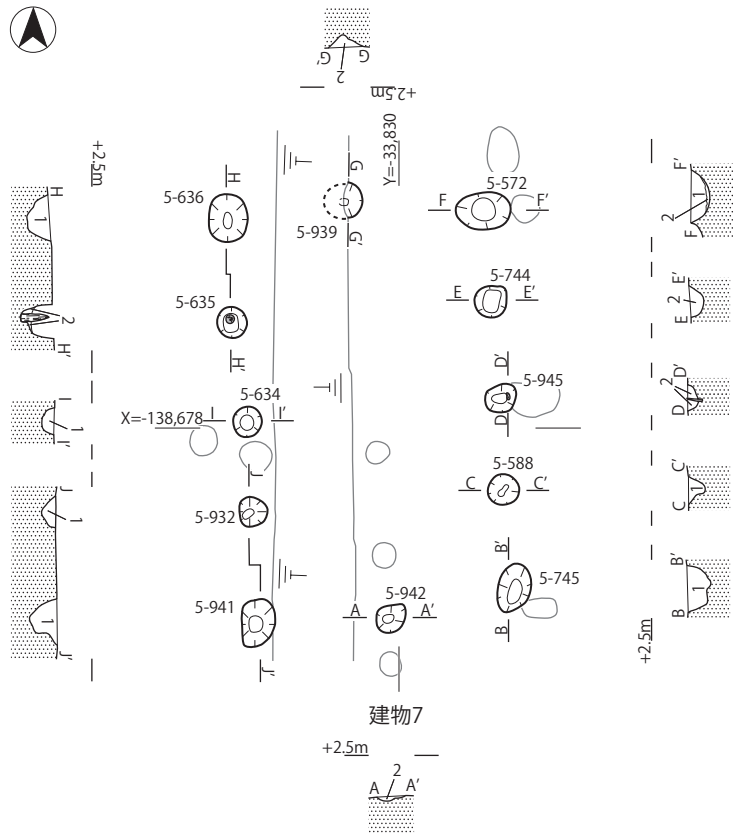
**建物7 (図95上：図版26-1)** 5区の東側に位置する。軸方向はN-6°-Wで、桁行4間(5.2～5.4m)、梁行2間(3.4m)、床面積17.68㎡を測る。桁行柱間は1.2～1.5m、梁行柱間は1.6～1.9mである。ピットは平面不整楕円形で、深さは0.15～0.4mである。5-635、5-945ピットでは柱根が検出され(図版26-2)、前者の樹種はスギであった。5-939、5-941、5-942、5-945を除いたピットから、須恵器・土師器片が出土しているが、細片のため図示していない。

**建物8 (図95下：図版26-3)** 建物7の南側約13mの場所に位置する。軸はN-5°-Wで、桁行5間(8.8～9.1m)、梁行2間(4.2～4.3m)、床面積は38.7㎡で、第7b面で検出した建物中では最大規模である。桁行柱間は1.5～2.0m、梁行柱間は2.0～2.3mを測る。ピットの平面形は、ほとんどが不整楕円形であるが、妻柱の5-379、5-714や南東隅柱の5-405ピットなどは、隅丸方形を呈する。深さは0.2～0.4mで、埋土は主に極粗砂や炭化物を含むオリーブ黒色のシルトであるが、5-650ピットにみられる2層は、柱根が腐食する過程で形成したものとみられる。また、5-648ピットには柱根が遺存しており(図版26-4)、樹種はスギであった。すべてのピットから、須恵器・土師器の細片が出土しているが、図示できたものは5-712ピットから出土した磨石のみである(図103-20)。20は各面とも平滑となっており、石材は不明である。重量は351.14gを量る。

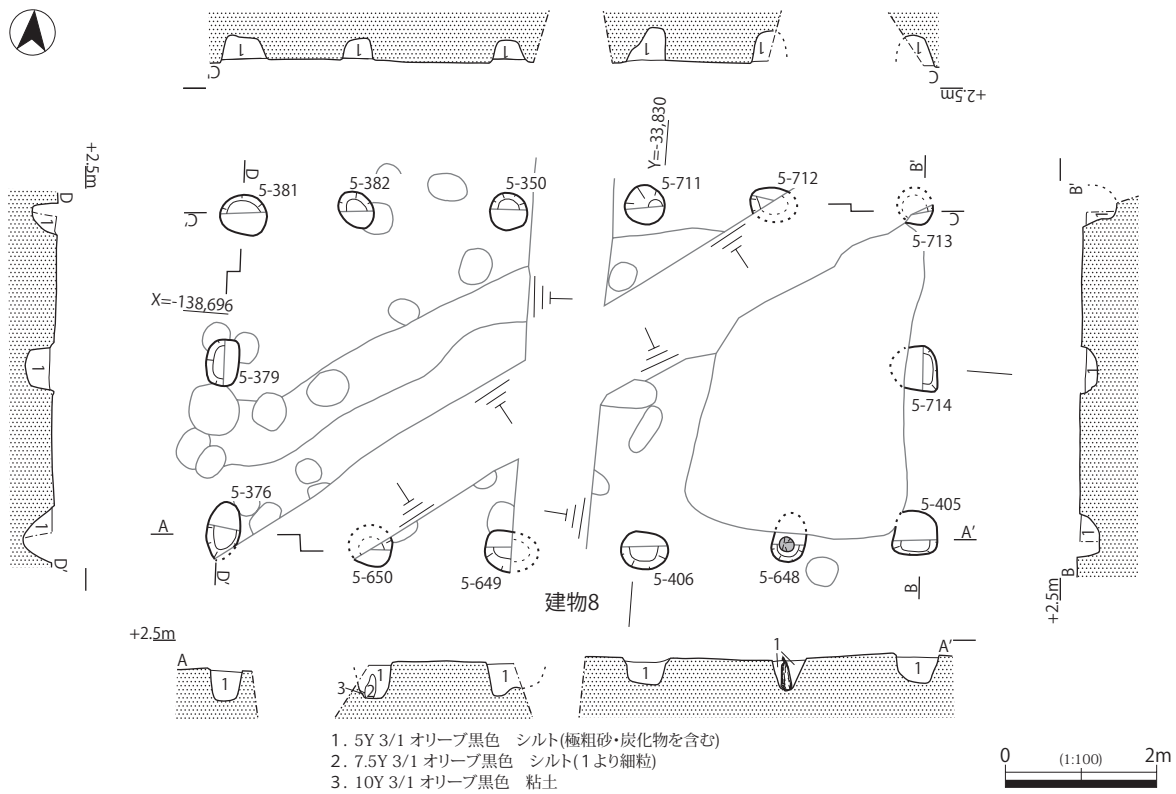
### 2. 井戸

**5-491井戸 (図97・98：図版26-5～27-8)** 5区の北側で検出された。掘方の平面形は長軸4.3m、短軸3.0mの不整楕円形で、検出面からの深さは2.1mを測る。断面は逆台形で、南西側では底面から1.4m、北東側では0.8mの高さに段をもつ。この段はそれほど大きな面積ではないが、おそらく井戸掘削の際、足場として機能していたものと考えられる。井戸の最下部中央は、さらに15cmほど掘り窪められている。

また円形の井戸枠と、その上部内側に平面方形の木枠が検出された。方形木枠は、長さ50～60cm、幅10～15cm、厚さ2cmほどの板材を四方に並べ、3～4段組まれていた可能性があるが、腐食などによって、明確な段数を把握できなかった。断面をみると、外側の井戸枠が5層まで堆積した後に掘り込まれ、4層を裏込として方形の木枠が設置されたとみられる。その後、3・2層が堆積し、1層によって埋め戻されている。水溜めとして機能していた可能性があるが、外側の井戸枠を利用せずに、新しく木枠を設置した理由は不明である。



1. 7.5Y 3/1 オリーブ黒色 シルト(粗砂多く含む)
2. 1に7.5Y 2/2 オリーブ黒色 シルト(粘土ブロックを多く含む)



1. 5Y 3/1 オリーブ黒色 シルト(極粗砂・炭化物を含む)
2. 7.5Y 3/1 オリーブ黒色 シルト(1より細粒)
3. 10Y 3/1 オリーブ黒色 粘土

図95 建物7・8 平面図および断面図

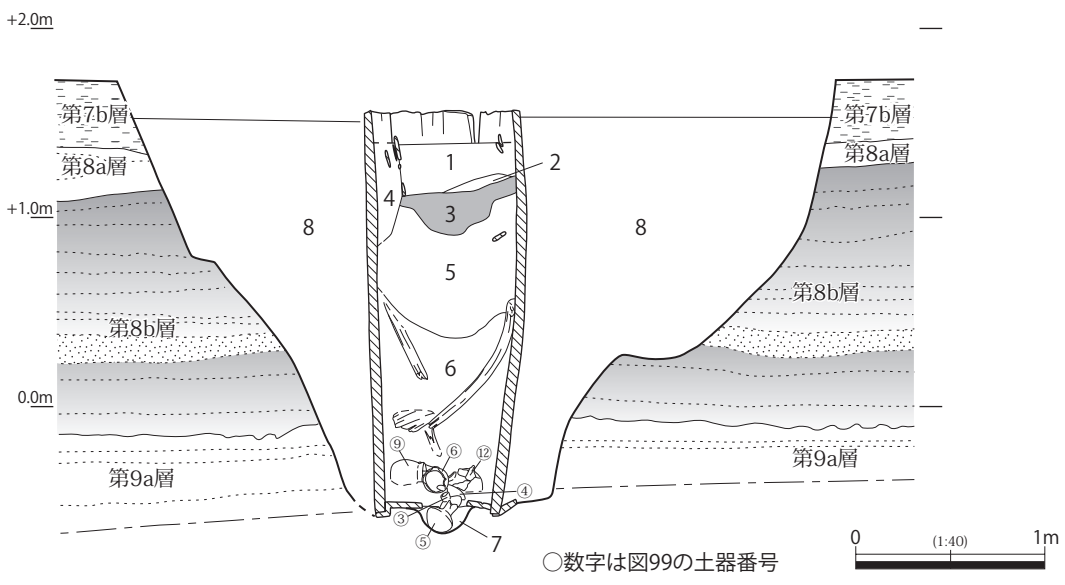
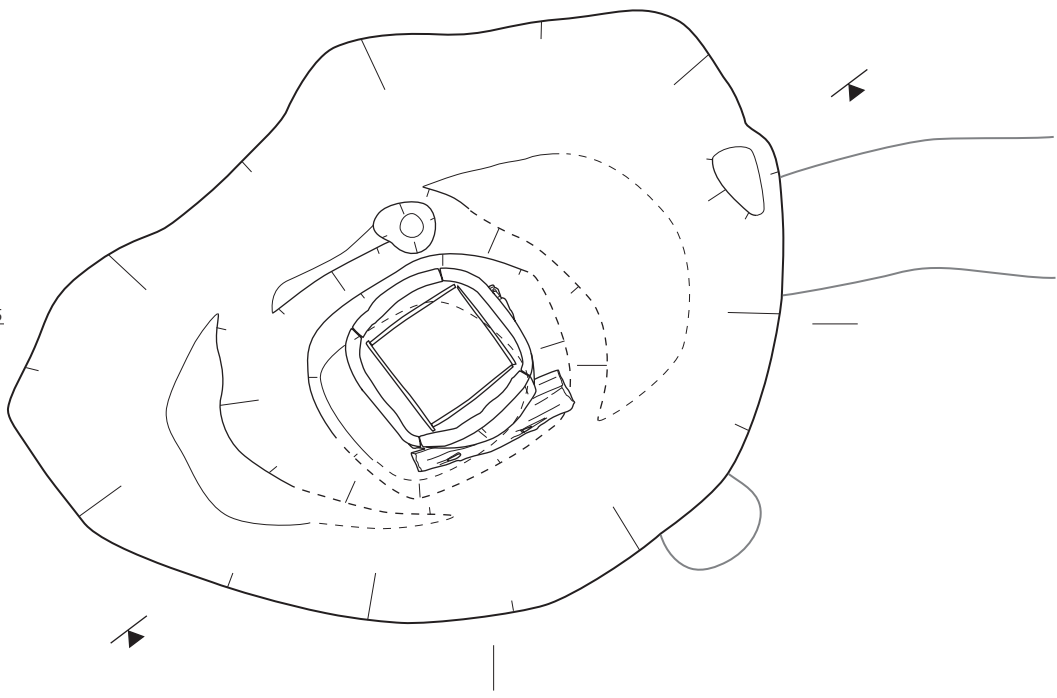


図96 第7b面(飛鳥時代)平面図



Y=33,844.5

X=-138,667.5



- 1. 5Y 3/1 オリーブ黒色 シルト～極粗砂
- 2. 2.5Y 3/1 黒褐色 粗砂～極粗砂(シルトブロック混じる。流水性の堆積)
- 3. 2.5Y 3/1 黒褐色 粘土(止水性の堆積)
- 4. 10YR 3/1 黒褐色 シルト(ブロック土多く含む)
- 5. 5Y 3/1 オリーブ黒色 粘土シルト(中砂～粗砂の互層。レンズ上のラミナあり。小枝などの植物遺体を含む)
- 6. 5に近似するがラミナ見られず。大型の木片が多く入る
- 7. 2.5Y 3/1 黒褐色 シルト
- 8. 第7a層～8b層の混土(径15mm程度のブロック土目立つ。掘方内埋土)

図 97 5-491 井戸 平面図および断面図

外側の井戸枠は、削り抜き丸太を分割したものを4枚、円形に立て並べていた。長さは210～220cm、幅は45～57cm、厚さは10～15cmを測る。4枚の部材は、それぞれ場所が異なるものの1ヶ所ずつ穿孔されている。またそれぞれの穿孔部分を塞ぐ形で、長さ30～40cm、幅7～10cm、厚さ2cmの板材が、外側に当てられている(図版27-2)。それら当て木にも穿孔されているものが認められる。さらに、井戸枠の下部には4枚の板材が組み合わせて敷かれていた(図版27-6)。これらの敷板は井戸枠の重さによって、著しく変形しているが、4枚とも幅22～24cm、厚さ2～4cmとほぼ共通する。ただし長さには長短がみられ、長いもので86～88cm、短いもので52～54cmとなっている。前者は北側・南側、後者は東側・西側の敷板で、後者を下に敷く。これらの敷板にも、当て木と同様の穿孔が認められる。

この井戸枠内埋土の5～7層は黒褐色系のシルトである。5層にはレンズ状のラミナがみられ、6層にはみられなかった。また5・6層には多くの植物遺体が含まれていたが、6層には特に大型のものが多く、これらは井戸内に投棄されたものとみられる。先のラミナの状況からも、5層はやや時間をかけて堆積した自然堆積層で、6層は人為的な埋め戻し土とみられる。5～7層については、土壌サンプルを採取し、0.5もしくは1mmメッシュの篩を使用し水洗選別を行った。その詳細は第7章第1節に譲るが、多数の種子や昆虫遺体などが確認されている。6層下部から7層中には、須恵器の杯身や壺、土師

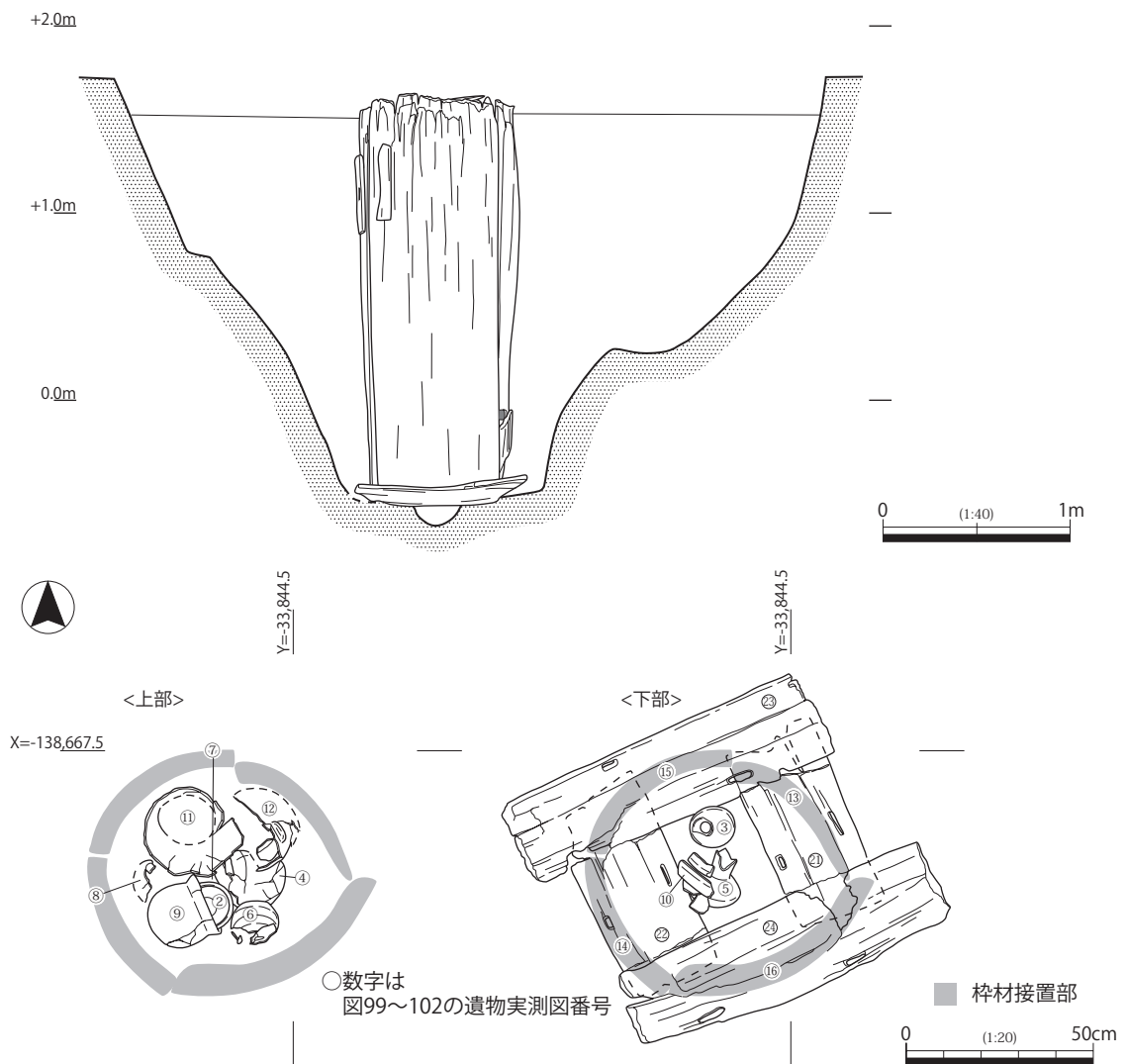


図 98 5-491 井戸 立面図および敷板平面図

器の甕などが一括して出土している（図版 27-4・5）。出土状況から、これらの土器は井戸設置から間もない状況で置かれた、あるいは投げ入れられたものとみられる。土器内の土についても、同様に水洗選別を行い、種子などが採取された。

遺物は、井戸内下部から一括して出土した須恵器 5 点、土師器 7 点、木製品 12 点を図示した（図 99～102：カラー図版 7-1）。これら以外にも 1～6 層・8 層から土師器・須恵器片が出土しているが、細片のため図化していない。1～5 は須恵器で、いずれも 7 世紀前半のものと思われる。1 は形状から蓋とも考えられたが、底部が未調整であることから杯と判断した。2 は杯身である。3 は平瓶で、口縁部は斜め上方に延びる。体部外面はカキメ、底部付近にはケズリが施される。4 は提瓶である。体部外面の正面にはナデ、裏面にはケズリが施される。5 は一括して出土した土器のうち最下部に位置していた壺である。頸部は直立し、口縁部付近で緩やかに外反する。肩部がやや張り、貼り付け高台をも

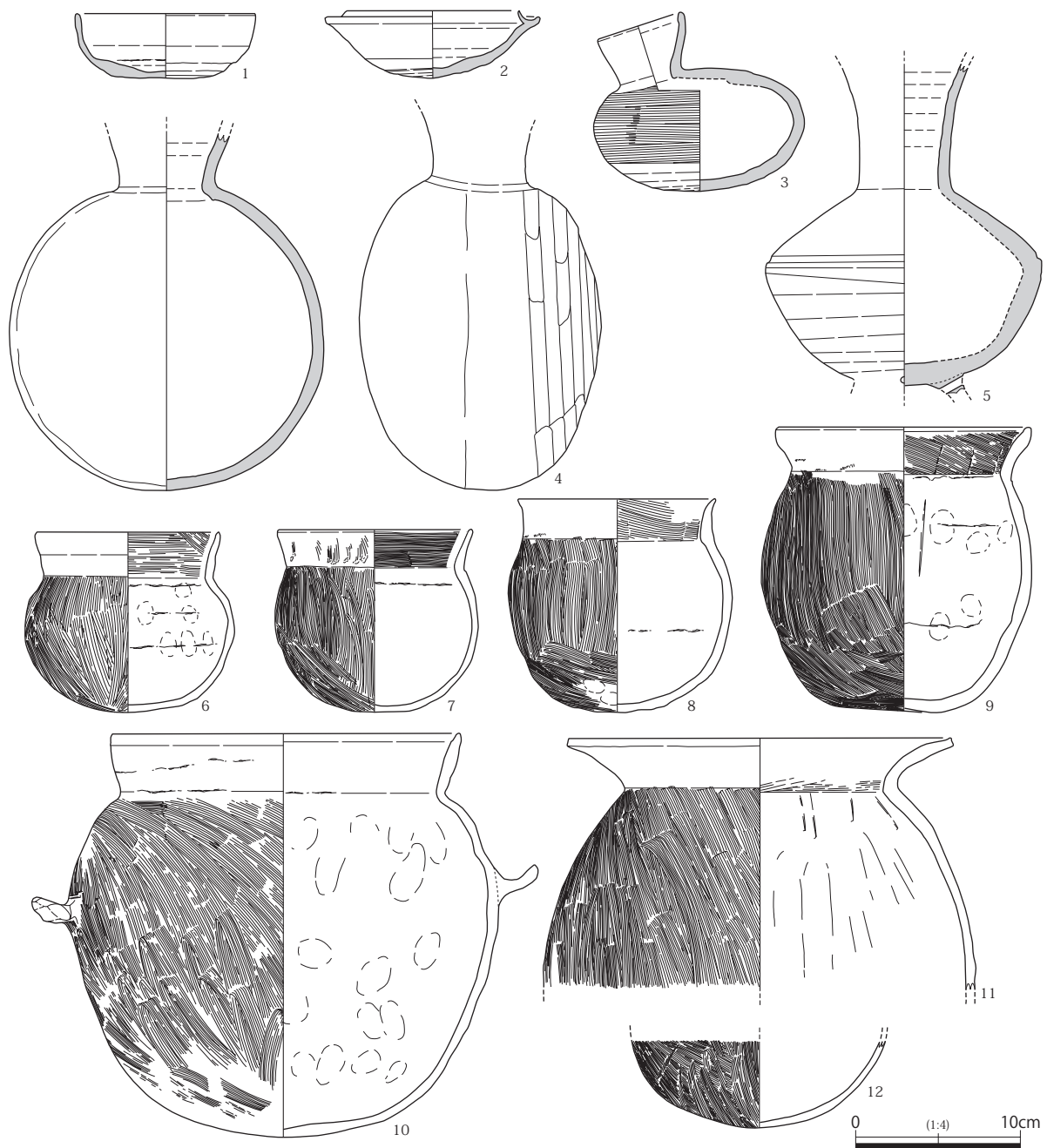


図 99 5-491 井戸 出土遺物実測図 1



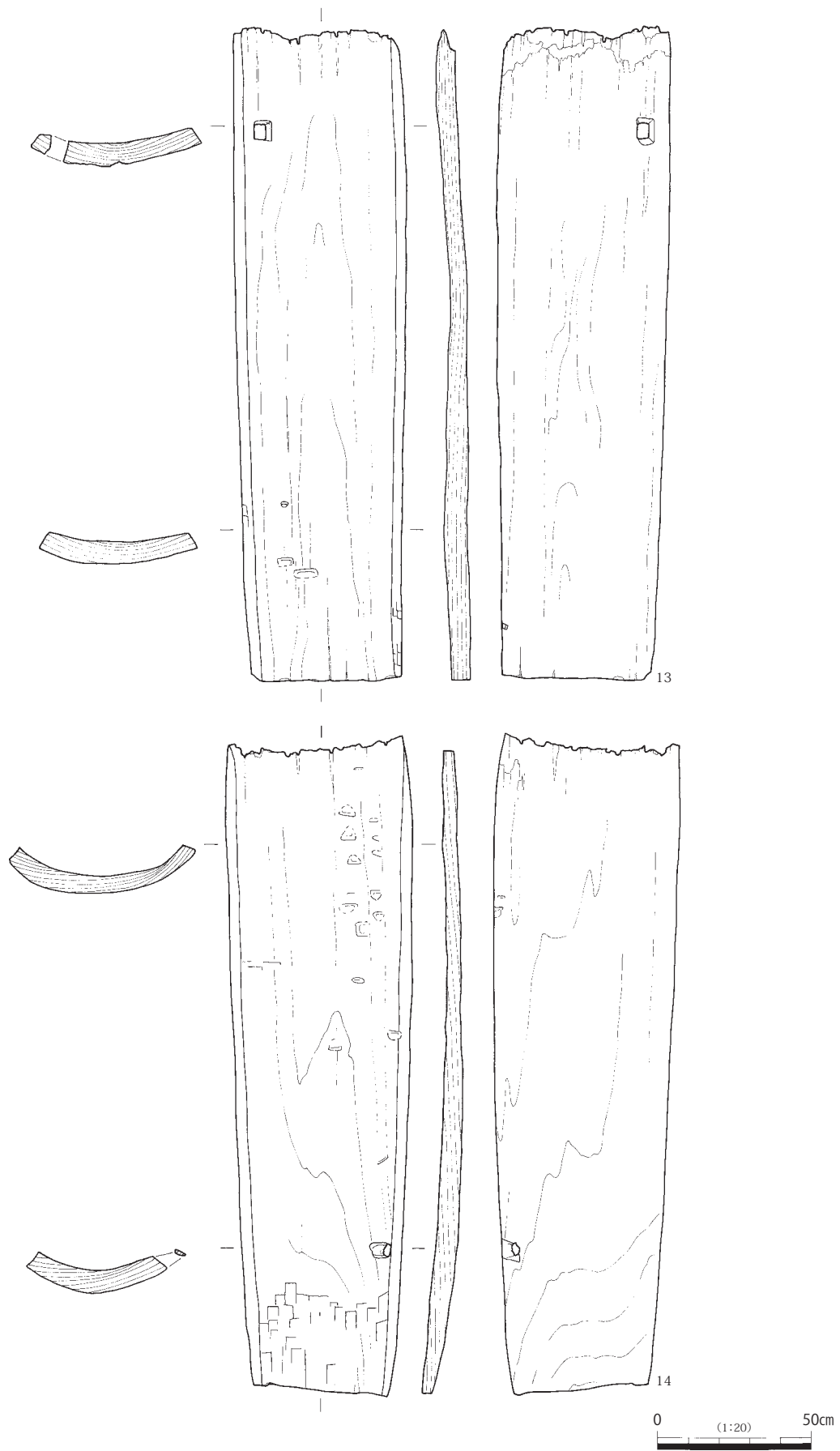


图 100 5-491 井戸 出土遺物実測図 2

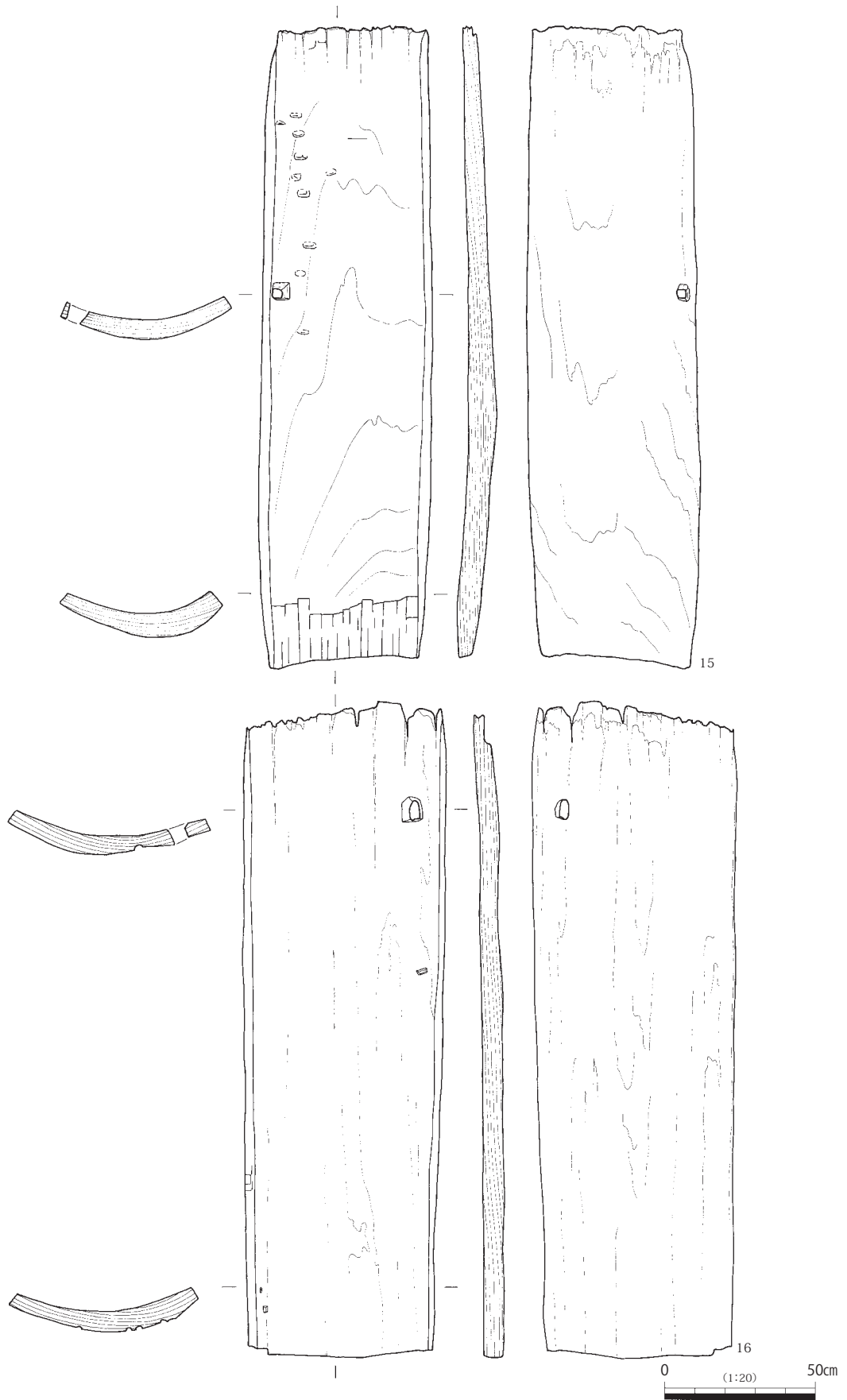


图 101 5-491 井戸 出土遺物実測図 3

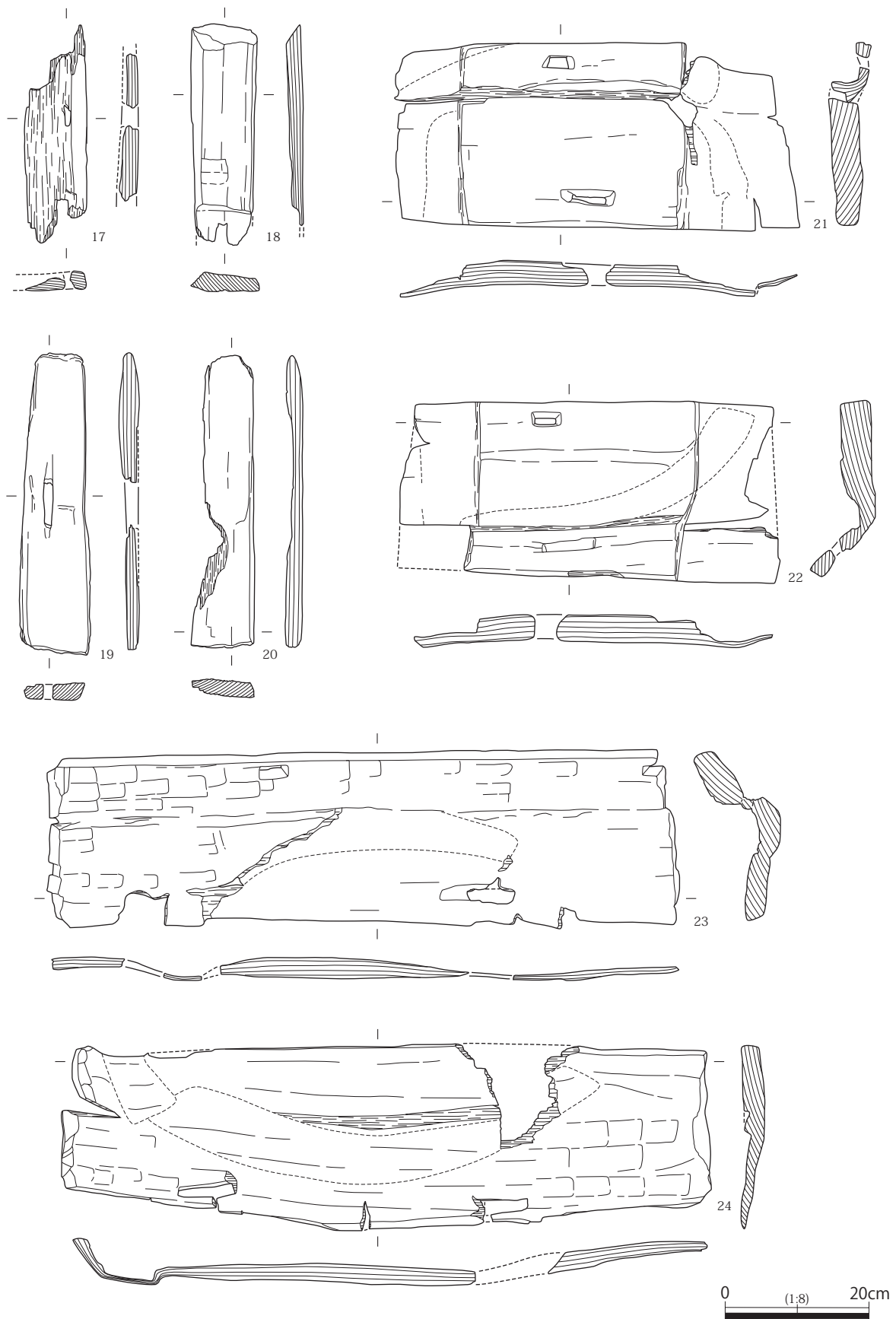


图 102 5-491 井戸 出土遺物実測図 4

つ。肩部外面に1条の沈線が巡り、以下にケズリが施される。高台上部には四方から穿孔がされている。底部を欠くが、意図的に打ち欠いた可能性がある。6～12は土師器で、いずれも甕である。6～9は小型～中型甕で、いずれも体部外面と口縁部内面にハケが施される。10は口縁部がやや厚手で、丸みをもった体部中程に把手が付く。体部外面にハケが施され、体部内面には指頭圧痕がみられる。11は長胴甕とみられ、口縁部は外反し、端部に面をもつ。頸部の屈曲は強い。体部外面、頸部内面の一部にハケが施される。なお10～12の内外面にはコゲ・ススが付着している。

13～24は井戸枠、当て木、敷板に使用されていた木製品である。なお当て木の上下、敷板の表裏は出土状態をもとにしている。形状、加工痕などから、これらは準構造船の船体を転用したものと考えられ、船体構造の復元を含めた詳細な検討を第6章第1節において行っている。13～16は井戸枠に使用されていた材で、いずれも側面・内面に手斧痕がみられた。加工痕や形状から、これらは船底材からの転用材と考えられる。各材には1ヶ所ずつ方形の穿孔が見られる。井戸の底側となっている下端部は残りが良いが、上端部は風化が進んで傷みが激しい。17～20は先の井戸枠穿孔部に外側から当てられていた板材である。13には19、14には17、15には18、16には20の当て木がそれぞれ対応する。17・19には大きさの異なる長方形の孔が開けられている。また、18の下部は工具によって削られ段状になっている。21～24は井戸枠下に敷かれていた板材である。21・22・24には2ヶ所、23には3ヶ所に長方形の穿孔がそれぞれ見られる。先の17～20と合わせ、これらは舷側板からの転用とみられる。穿孔は上下で大きさが異なっており、基本的に上部の孔は4×2cm、下部の孔は8×2cmとなっている。また21・22の左右には、23・24と組み合わせるために加工された段が左右にある。なお樹種については、上部の方形木枠の材も含め、すべてスギであった。

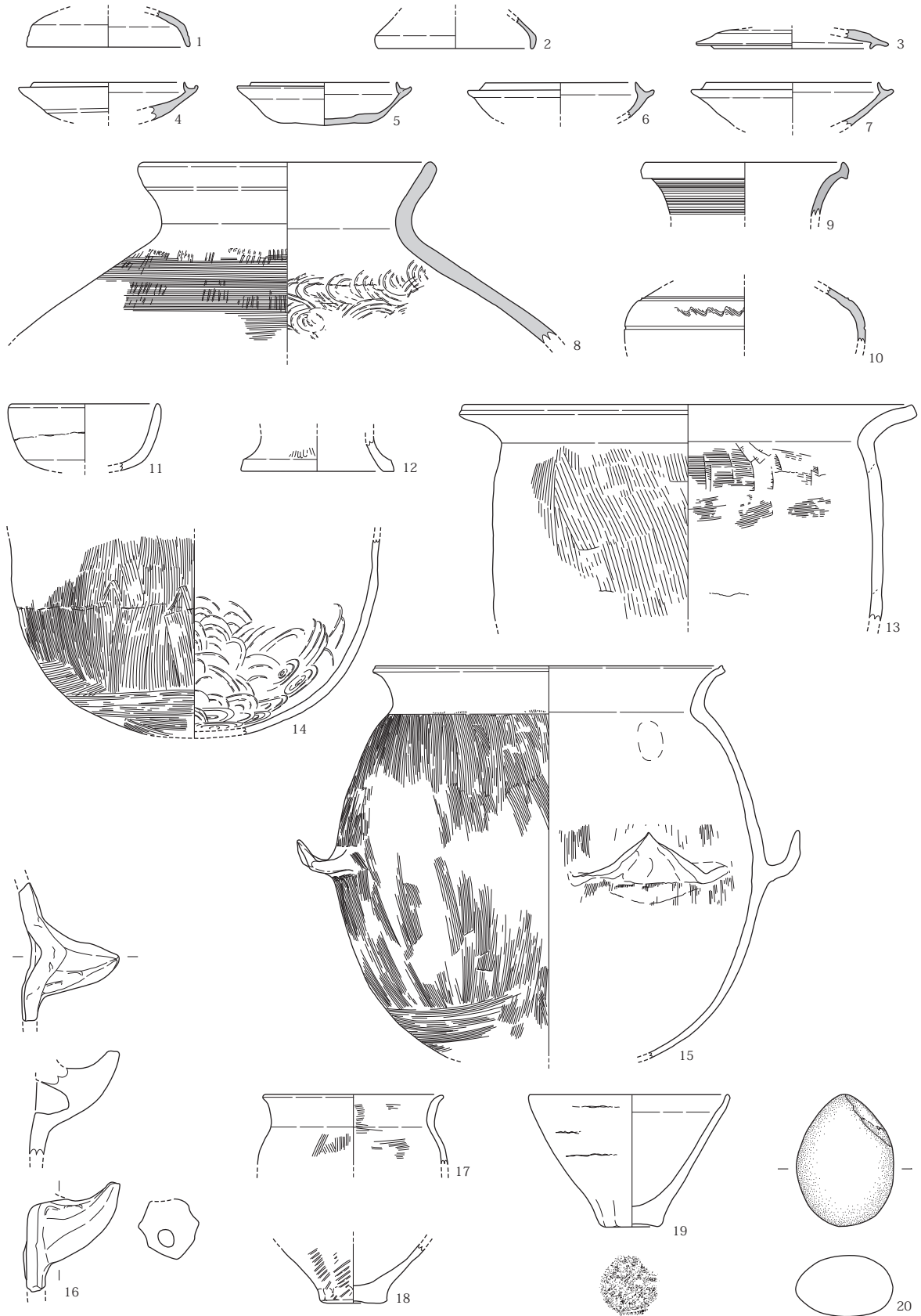
この井戸は、最下部で出土した土器より、7世紀前半に機能していたものとみられる。3分の2ほど埋没した段階で、上部に方形の木枠を据えて、水溜めなどに再利用されたようであるが、これがいつの時期にあたるかは不明である。ただ出土した土器片に8世紀以降のものは含まれていないことから、7世紀代には完全に埋没していたと考えられる。

### 3. 溝・ピット

5-479、5-480 溝 (図 96、図版 28-4) 5区の中央に位置する。5-479 溝は、長さ 14.0m、幅 0.6m、深さ 0.17m を測り、北側で 5-480 溝と合流する。5-480 溝は北西 - 南東方向に延び、長さ 29m、幅 0.8～1.0m、深さ 0.1～0.2m を測り、北に下る。両溝から出土した遺物のうち、須恵器 2 点、土師器 2 点を図示した (図 103)。4・17 は 5-479 溝から、3・16 は 5-480 溝から出土している。3 は須恵器の杯蓋である。器高が低く、口縁部内面の蓋の返りは弱い。7 世紀後半のものとみられる。4 は須恵器の杯身とみられるが、蓋の可能性もある。7 世紀前半～中頃のものとみられる。16 は甕の把手で、中空になる。17 は古墳時代中期～後期に属すとみられる甕で、混入遺物とみられる。

出土遺物が少量ではあるものの、両溝は 7 世紀代に掘削されたものとみられる。この時期の遺構は、基本的にこの溝から東側で検出されており、5-480 溝については、建物 7・8 や、溝状の耕作痕と軸方向を同一としていることから、それらと関連性の強い遺構と考えられる。なお上層において南北坪境が、この溝のやや東側で確認されており、7 世紀の段階で、近接した地点に 5-480 溝のような直線的な溝が掘削されている点は注意を要する。

5-316、6-104～6-107 溝 (図 96：図版 28-1～3) 5区北側から6区西側で検出した溝である。6-106 溝と 6-107 溝は並行して南北方向に延び、107 溝は南側で西に屈曲する。側溝により途切れる



建物8 <5-712ピット> (20)、3-155ピット (2)、5-311ピット (12)、5-316溝 (9)、5-386ピット (13)、5-479溝 (4・17)  
5-480溝 (3・16)、5-935ピット (7)、5-954ピット (1・6・11・14・15)、6-105溝 (10)、6-106溝 (18)、6-107溝 (5・8・19)

0 (1:4) 10cm

図 103 遺構 出土遺物実測図 (飛鳥時代)

が、6-107 溝は 6-105 溝、6-104 溝へと続くとみられる。また 5-316 溝は 6-105 溝に並行するように東西方向に延びる。いずれの溝も、幅 0.4～0.8m、深さ 0.1m で、西に向かって下る。全長は 5-316 溝は 29m、6-106 溝は 28m、6-107 溝は、6-104、6-105 溝を合わせると 73.0m を測る。各溝から出土した遺物のうち、須恵器 4 点、土師器 2 点を図示している（図 103）。5-316 溝から 9、6-105 溝から 10、6-106 溝から 18、6-107 溝から 5・8・19 が出土した。18・19 は弥生時代後期後半～古墳時代初頭、8～10 は古墳時代中期～後期の土器であり、溝付近は、後述する弥生時代後期後半～古墳時代後期の遺物密度が高く、5 の須恵器の杯身以外は、周辺からの混入遺物と考えたい。5 の杯身は、底部へラ切り後の調整はされていない。7 世紀中頃のものともみられる。19 の鉢の底部外面には、木葉痕がみられる。

時期を示す遺物が 6-107 溝出土の 5 のみと、資料が限られているが、それぞれの溝の規模や、検出状況などから、7 世紀代の遺構と考えられる。6-106 溝と 6-107 溝については、並行して延びる状況から、道の側溝の可能性が考えられたが、6-107 溝が西に屈曲し、6-106 溝が途切れているため、性格ははっきりしない。ただ、東西に延びている 6-104、6-105 溝については、図 81 で示した砂礫層が供給された北側のラインとほぼ並行しており、5 区の砂礫層上に形成されている集落との関連が考えられる。5-316 溝は、西端に 5-491 井戸が存在することから、5-491 井戸からの配水施設の可能性が考えられたが、溝底は井戸方向に下る。5-491 井戸は、先述したように廃絶後、段階的に埋没し、上部で検出した方形の井戸枠などからも、水溜めとして再利用されていた可能性が高く、5-316 溝は、井戸からの配水ではなく、そこへ集水するための溝と考えることができよう。

ピット この時期の土器を伴うピットが、3 区で 1 基、5 区で 4 基検出されており（図 96）、それらから出土した須恵器 4 点、土師器 5 点を図示した（図 103）。

3-155 ピットは 3 区のほぼ中央に位置し、須恵器の蓋杯（2）が出土している。7 世紀前半のものともみられる。5-311 ピットは 5 区の西側に位置し、土師器の脚部（12）が出土している。器種は不明である。外面にミガキがみられる。他の時期に属す可能性がある。5-386 ピットは 5-480 溝の西側に位置し、土師器の長胴甕（13）が出土している。口縁端部に面をもち、体部は直線的に延びる。体部内外面にハケが施される。7 世紀後半～8 世紀前半のものか。5-935 ピットは 5 区の南側に位置し、須恵器の杯身（7）が出土している。7 世紀前半のものともみられる。5-954 ピットは 5 区のほぼ中央に位置し、5-480 溝の南側を切る。須恵器・土師器片とともに大型礫が出土している（図版 28-5）。そのうち、須恵器 2 点、土師器 3 点を図示した。1 は須恵器の杯蓋、6 は須恵器の杯身で、いずれも 7 世紀前半のものともみられる。11 は土師器の鉢で、底部から口縁部の立ち上がりが強い。7 世紀前半のものか。14 は長胴甕の底部で、外面にハケが施され、内面に同心円状の当て具痕が残る。15 は把手付き甕で、口縁端部に面をもち、体部は球形を呈す。7 世紀前半のものともみられる。なお 14 の外面にはススが付着しており、図示していないが大型礫にも被熱痕跡がみられた。

#### 4. 包含層出土遺物

抽出した遺物は、すべて第 7a 層からの出土である（図 104）。調査区別にみると、2 区では 2 点（9・28）、3 区では 7 点（3・8・14・18・24・30・35）、4 区では 3 点（11・17・21）、6 区では 2 点（16・31）で、それ以外の 23 点は全て 5 区からの出土である。5 区からの出土した土器のうち、建物 8 の西側から 6 点（2・20・25・33・34・37）、5-491 井戸周辺から 8 点（1・5～7・10・22・26・29）とやや集中しており、また 5 区においては 5-479、5-480 溝より西側では土器がみ

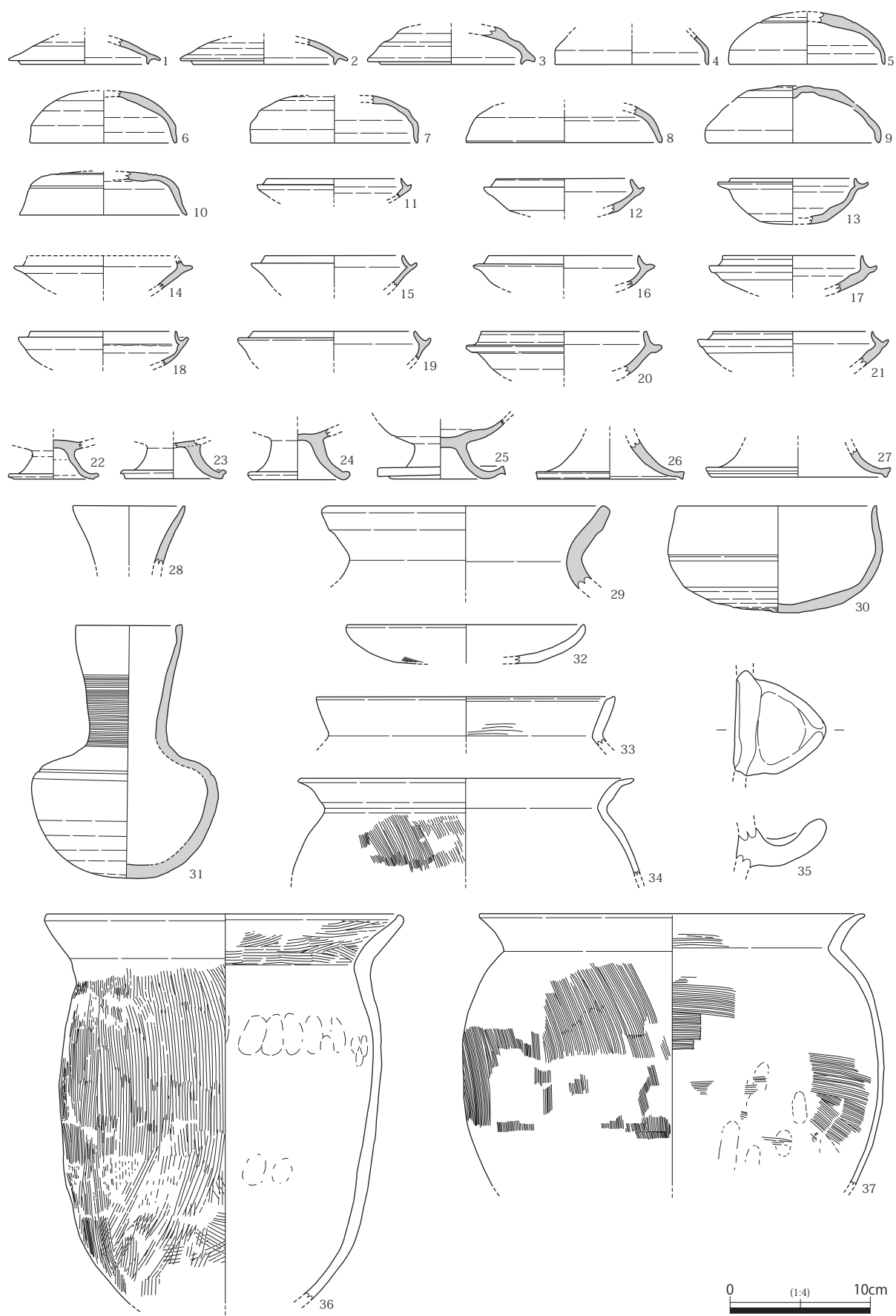


图 104 第 7a 層 出土遺物実測図 (飛鳥時代)

られない。以上の点からも、両溝の区画性が想定されよう。なお遺物の時期については7世紀前半のものが大半を占める。

1～31は須恵器である。1～9は杯蓋で、10のみ壺の蓋とみられる。11～21は杯身である。底部を欠くものが多いため、蓋を含んでいる可能性がある。22～27は高杯の脚部である。25は脚部の屈曲が強く、やや特異な形状である。28は提瓶もしくは平瓶の口縁部とみられる。29は甕である。30は鉢で、胴部ほぼ中央に浅い沈線が巡り、下部はケズリが施される。6世紀末～7世紀前半のものとみられる。31は長頸壺で、頸部にカキメ、肩部には浅い沈線が巡り、肩部以下はケズリが施される。32～37は土師器である。32は皿で、底部から口縁部にかけて緩やかに内湾する。33・34は甕である。34は口縁端部が外傾し、頸部が強く屈曲する。体部が外面にハケが施される。35は把手である。36は長胴甕で、口縁端部がわずかに肥厚し、頸部の屈曲は弱い。体部外面、口縁部内面にハケが施され、体部内面に指頭圧痕が残る。また体部全体に薄くススが付着する。37は甕で、口縁部は緩やかに外反し、端部は尖る。体部は球形に近い。体部内外面、口縁部内面にハケが施される。

### 第3項 古墳時代中期～後期の遺構と遺物

5区を中心に、建物・井戸・水溜め・溝・土坑・ピットなどを多数検出した(図106)。第7b面で検出した建物のうち、この時期に該当するものが最も多く、井戸・水溜めなども、奈良時代、飛鳥時代に比べ多く検出されている。包含層出土の遺物も非常に多いことから、この時期の積極的な人間活動が窺われる。

#### 1. 建物

掘立柱建物6棟(建物9～14)、竪穴建物3棟(建物15～17)の合計9棟が、この時期の建物と判断された。なお建物9・10・14は総柱建物である。

建物11・12・15・16は重複・近接しているが、建物15は北東隅において、建物16に切られ、建物15の北西壁の一部を、建物11の南西隅の柱穴(5-895ピット)が切る状況が確認されたことから、建物15→16→11という築造順となる。また、建物12の西側の柱穴(5-320ピット)が、建物16の東壁を上部から掘り込んでおり、また建物12の軸方向や柱穴の埋土が、建物11と同様であることから、両建物が同時並存していた可能性がある。しかし、建物11東側と建物12西側との距離は1m足らずで、両建物とも妻側であることから、近過ぎるようにも思える。以上から、建物15→16→11・12、もしくは建物15→16→11(12)→12(11)という変遷が想定される。このように竪穴建物から掘立柱建物への建物構造の移行は、本遺跡の南側に近接する部屋北遺跡でも確認されている(大阪府教育委員会2005)。具体的には、部屋北遺跡の古墳時代中期～後期の集落は、TK23～47段階まで竪穴建物・掘立柱建物が並存し、MT15～TK10段階になると掘立柱建物のみで構成されている。建物15から出土している須恵器が、後述するように主にTK47～MT15段階であることは、本遺跡の集落が、先の部屋北遺跡の集落よりもやや遅れた時期まで、竪穴建物が存続した状況を示すものとみられる。

**建物9(図105左:図版28-6)** 5区北東隅に位置する2間×2間の総柱建物である。調査当初、5-566ピットを東隅の柱穴と認識していたが、5-565ピットからも柱痕跡が確認された。両ピットは重複や切り合いをもたないため、部分的な修繕や、補強に伴う柱穴とも考えられるが、5-566ピットのみ他と比べて深いことから、無関係の柱である可能性も残る。軸方向はN-18°-Wで、床面積



18.06 m<sup>2</sup>を測る。柱間2.0～2.3mである。ピットの平面形は不整楕円形で、深さは0.2～0.5mで、先述したように566ピットはやや深い。埋土は極粗砂を含む黒褐色シルトで、5-290、5-298、5-561、5-564、5-565、5-566ピットには柱痕跡がみられた。5-290、5-294、5-298、5-562、5-563、5-564、5-566ピットから、土師器片が出土しているが、細片のため図示していない。

**建物10 (図105右：図版28-7)** 3区の北西隅に位置する。軸方向はN-17°-Eで、西隅が断割りにより失われているため、規模は推定で、北東-南西規模2間(3.4m)、北西-南東規模2間(3.1m)、床面積10.54 m<sup>2</sup>を測る。柱間1.5～1.7mである。ピットは平面不整楕円形で、深さは0.1～0.25mと浅い。埋土は、礫や粘土ブロックを含む灰色の砂質土で、柱痕跡などはみられなかった。5-190、5-192、5-194、5-200、5-201、5-202ピットから土師器片が出土しているが、細片のため図示していない。

**建物11 (図107上：図版29-1)** 建物9の南西に位置する。西側の一部は、第1面の5-6溜め井によって失われている。軸方向はN-11°-Eで、桁行3間(6.6m)、梁行3間(4.8m)、床面積は31.68 m<sup>2</sup>を測る。桁行柱間は1.9～2.7mで、5-896、5-897の柱間がやや広がる。梁行柱間は1.5～1.7mである。ピットは平面不整楕円形で、深さ0.4～0.75mで他の建物に比べ深く掘り込まれている。埋土は主に、粗砂を含む黒色～黒褐色のシルトであるが、北区側の5-957、5-959ピットの埋土にはブロック土が含まれており、埋め戻された可能性が考えられる。柱痕跡などはみられなかった。5-867、5-896ピットを除いて、須恵器・土師器片が出土しているが、細片のため図示していない。

**建物12 (図107下：図版29-2)** 建物11の東側に隣接する。軸方向はN-11°-Eで、桁行3間(4.5m)、梁行3間(3.5m)、床面積は15.7 m<sup>2</sup>を測る。桁行柱間は1.4～1.6m、梁行柱間は1.0～

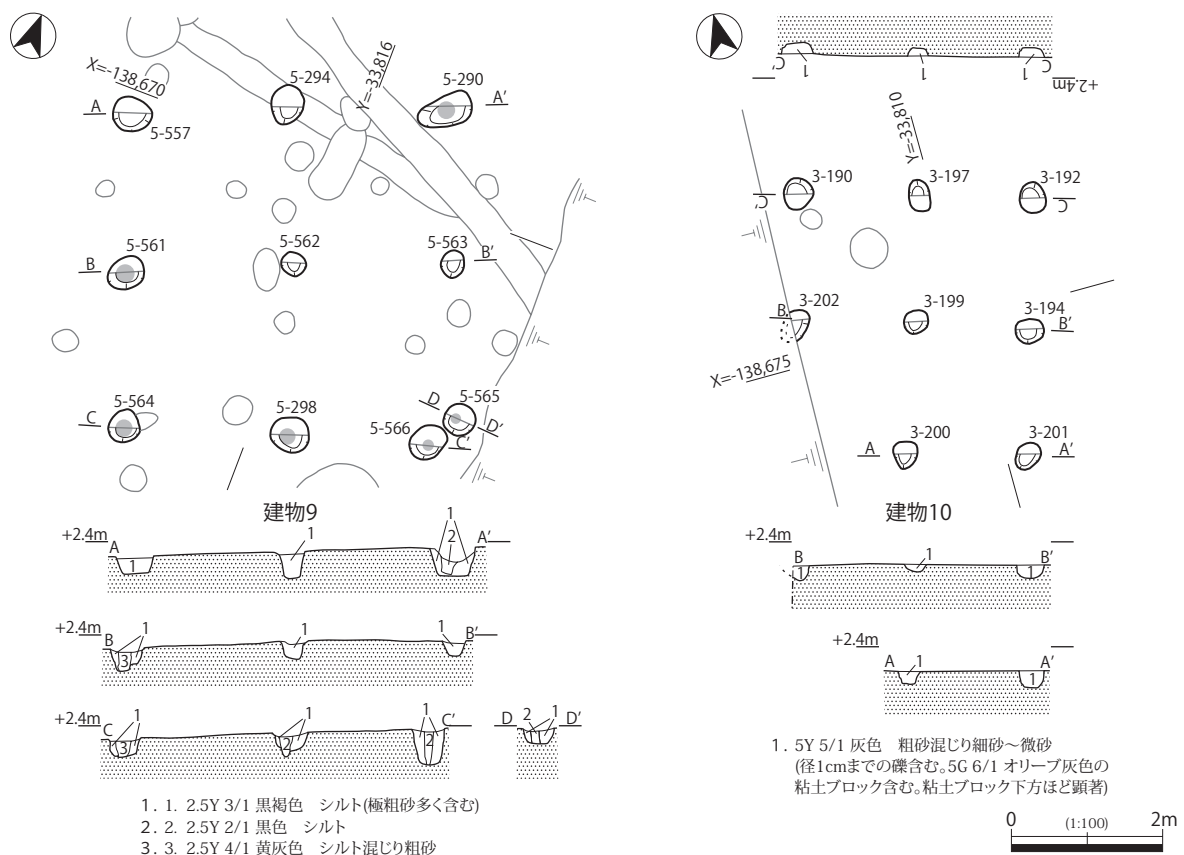
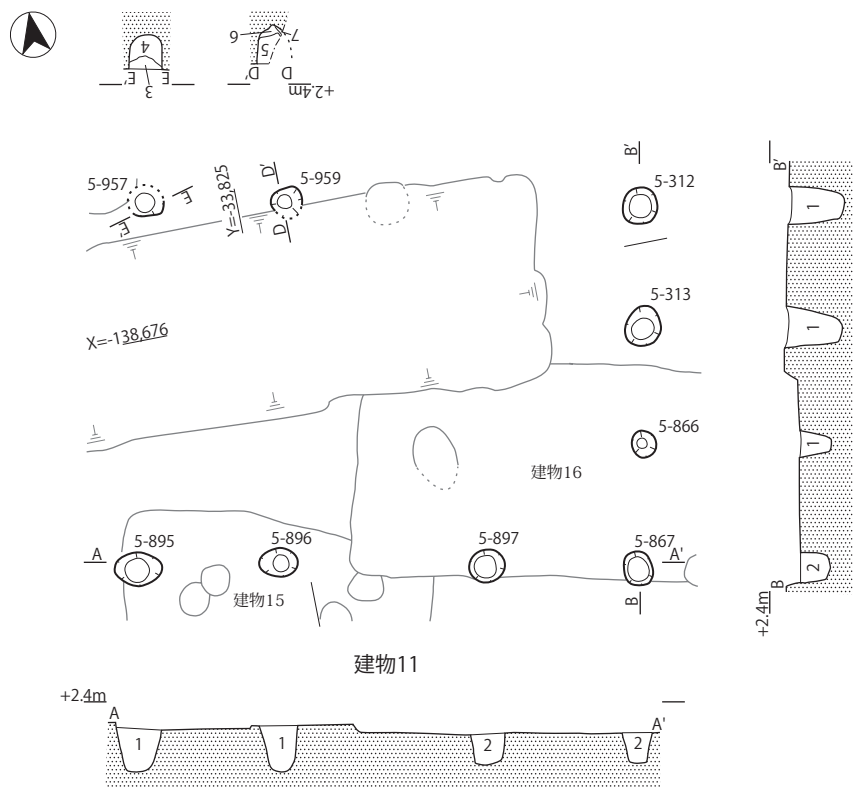


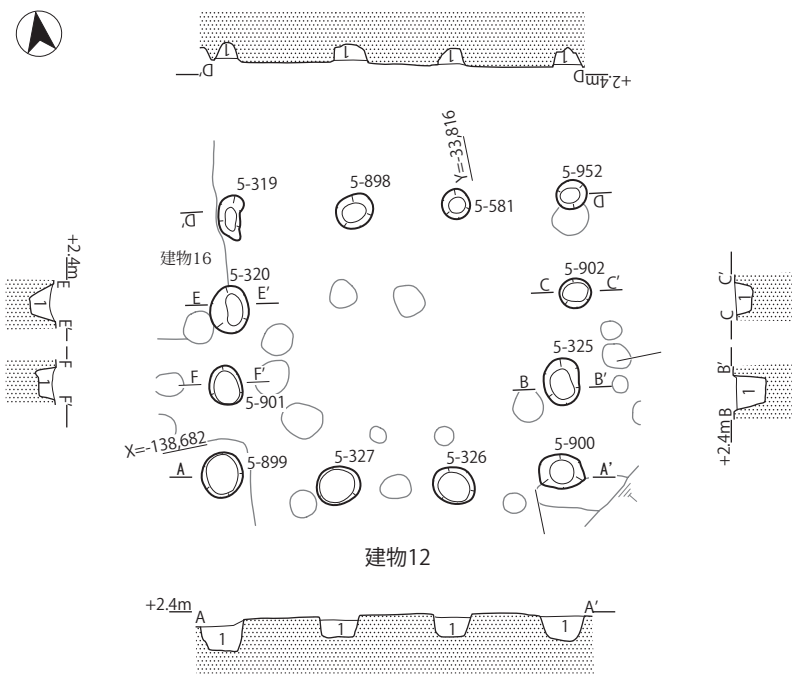
図105 建物9・10 平面図および断面図



图 106 第 7b 面 (古墳時代中期~後期) 平面図



- |                                      |                                      |
|--------------------------------------|--------------------------------------|
| 1. 5Y 3/1 オリーブ黒色 シルト(極粗砂を含む)         | 5. 10YR 5/1 褐灰色 粗砂混じりシルト(土器片を含む)     |
| 2. 2.5Y 3/1 黒褐色 シルト(粗砂を多く含む)         | 6. 10YR 4/1 褐灰色 シルト(第7b層のブロック土を多く含む) |
| 3. 5Y 6/2 灰オリーブ色 シルト(粗砂を多く含む)        | 7. 10YR 7/3 にぶい黄橙色 細砂〜シルト            |
| 4. 2.5Y 5/1 黄灰色 シルト(第7b層のブロック土を多く含む) |                                      |



1. 5Y 3/1 オリーブ黒色 シルト(粗砂多く含む)

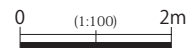


図 107 建物 11・12 平面図および断面図

1.3mである。ピットは主に平面不整楕円形で、5-319ピットのみ、いびつな平面形を呈する。深さは0.2～0.4mで、埋土は粗砂を含むオリーブ黒色のシルトである。柱痕跡などはみられなかった。5-898、5-952ピットを除いて、須恵器・土師器片が出土しているが、細片のため図示していない。

**建物 13 (図 108 左：図版 29-3)** 5区の中央やや東寄りに位置する。軸方向はN-24°-Eで、桁行3間(5.6m)、梁行2間(3.5m)、床面積は19.6㎡を測る。桁行柱間は1.6～2.1m、梁行柱間は1.7～1.8mである。ピットは平面不整楕円形で、深さは0.2～0.55m、埋土は粗砂を含むオリーブ黒色のシルトである。また5-425、5-464、5-905、5-906、5-910ピットから柱根を検出しており(図版 29-4～6)、樹種はすべてスギであった。5-425、5-426、5-462、5-464、5-465、5-911ピットから、土師器・須恵器片が出土しているが、細片のため図示していない。

**建物 14 (図 108 右：図版 29-7)** 建物 13 に南東に位置する。軸方向はN-30°-Eで、北東-南西規模2間(3.7m)、北西-南東規模2間(4.0m)、床面積14.8㎡を測る。柱間1.7～2.1mである。ピットは平面不整楕円形で、深さは0.25～0.55mである。埋土は主に極粗砂を含む黒色シルトで、5-667ピットには柱痕跡がみられ、5-858ピットには柱根が遺存していた(図版 29-8)。樹種はスギである。5-856ピットを除いて、須恵器・土師器片が出土しているが、細片のため図示していない。

**建物 15 (図 109 左：図版 30-1・2)** 建物 11 の南側に隣接し、北東隅は建物 16 に切られている。軸方向はN-14°-Eで、南北規模4.4m、東西規模4.1m、床面積18.04㎡を測る。深さ0.15mで、埋土は極粗砂を含む褐色シルトである。また主柱穴とみられるピットを4基検出しており、ピットは平面不整楕円形、深さは0.2mである。柱痕跡などはみられなかった。これら以外にも床面において、ピットを数基検出したが、建物 15 に伴うかは不明である。ただし5-556ピットから同時期の遺物が出土

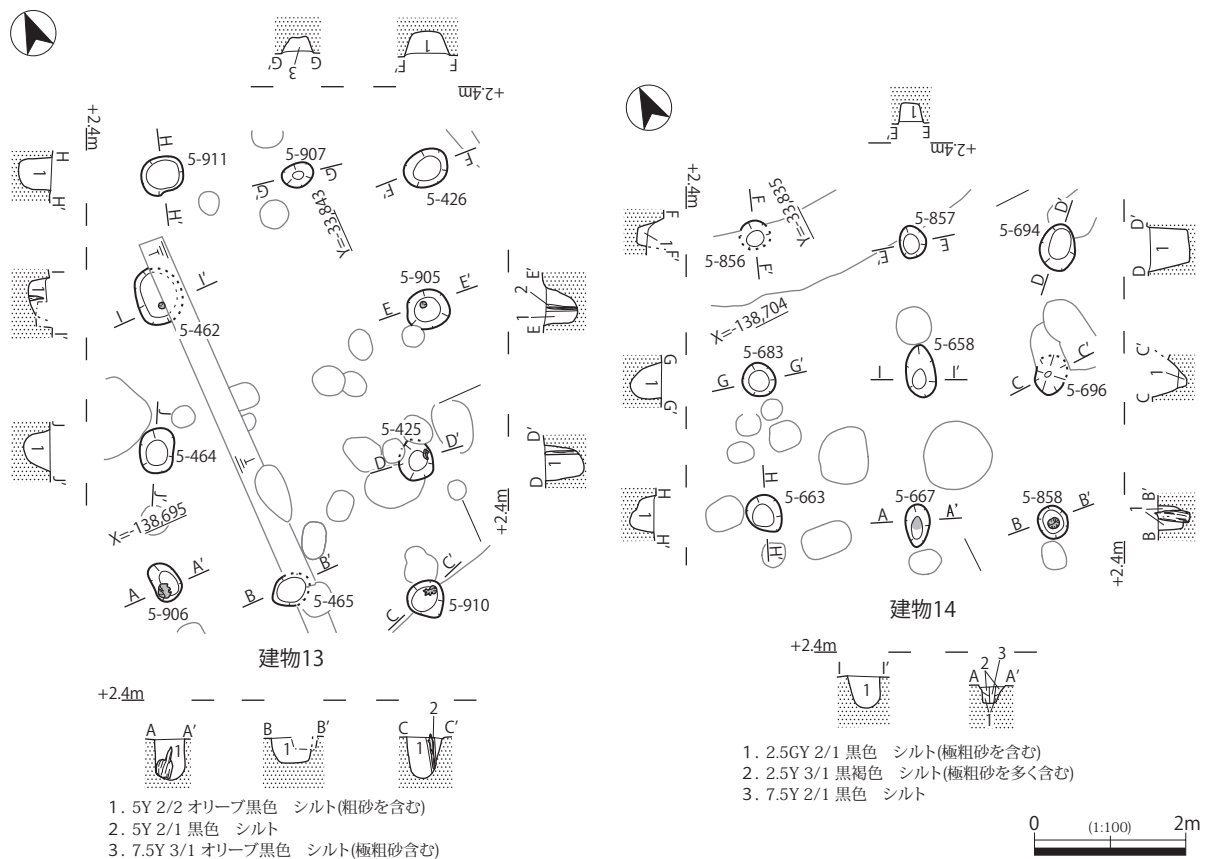


図 108 建物 13・14 平面図および断面図

しており（図版 30-3）、いくつかのピットは建物 15 に関連する遺構である可能性が考えられる。

出土した遺物のうち、須恵器 8 点、土師器 2 点を図示した（図 110）。竪穴埋土から 1・5・8・10・11、支柱穴とみられる 5-741 ピットから 9、床面で検出した 5-556 ピットから 6 がそれぞれ出土している。須恵器については、5 世紀前半～中頃と思われる高杯 9 もあるが、杯蓋をみると、天井部と体部の境界の稜が弱いものが多く、主に TK47～MT15 段階の須恵器である。したがってこの遺構の時期は主に 5 世紀末から 6 世紀初頭と考えられる。

**建物 16**（図 109 左：図版 30-4・5） 建物 16 の北東に位置する。軸方向は N - 13° - E で、南北規模 2.8m、東西規模 5.0m、床面積 14.0 m<sup>2</sup> を測る。深さ 0.1m、埋土は極粗砂を含むオリブ黒色のシルトで、その中にブロック土を含んでいることから、建物 11 もしくは建物 12 造成時に埋め戻された可能性がある。床面においてピットを数基検出したが、調査を進める中で建物 11・12 を構成するピ

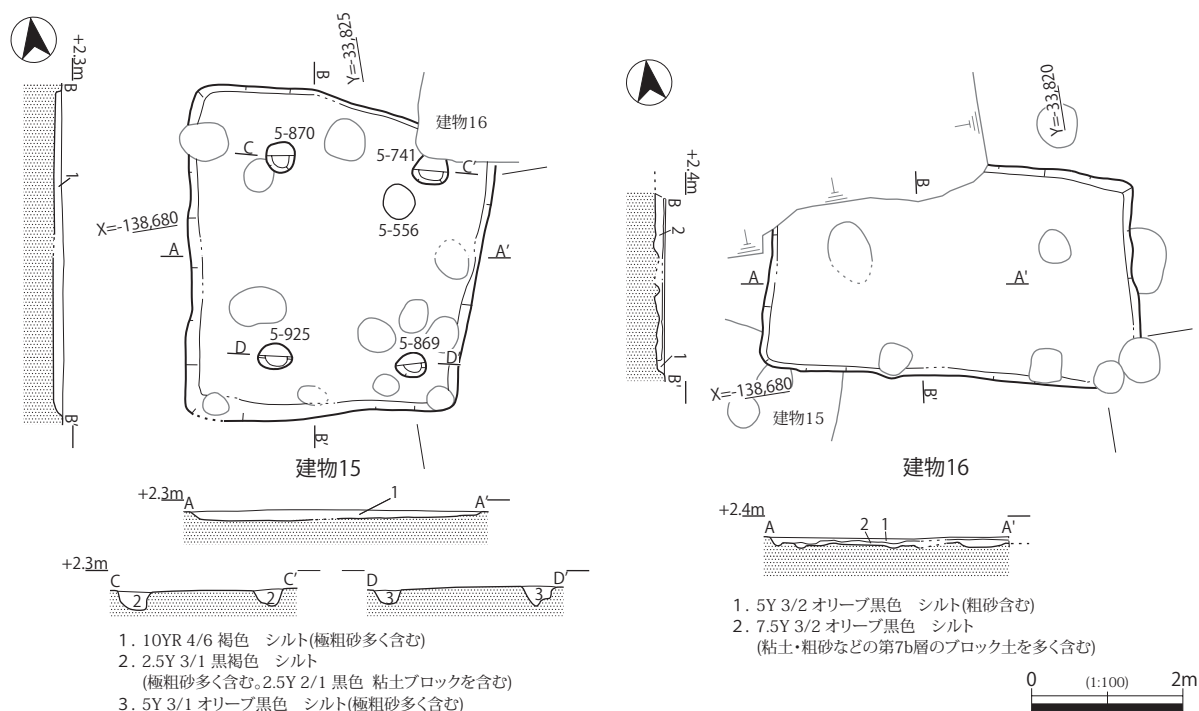
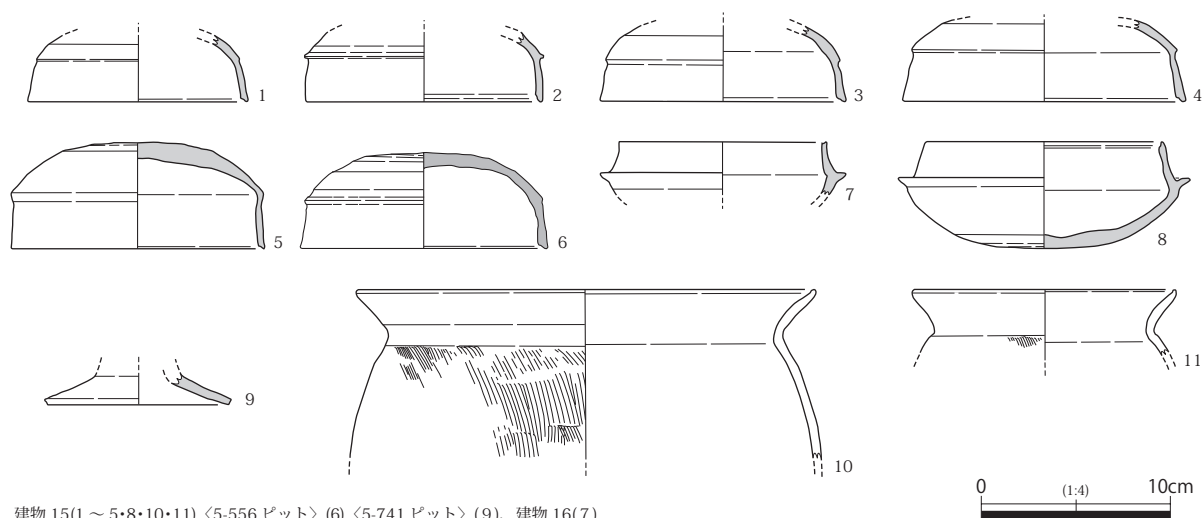


図 109 建物 15・16 平面図および断面図



建物 15(1～5・8・10・11)〈5-556 ピット〉(6)〈5-741 ピット〉(9)、建物 16(7)

図 110 建物 15・16 出土遺物実測図

ットであることが判明した。建物 16 に関連するピットを検出していないため、建物ではなく別の性格の遺構である可能性がある。

遺物は須恵器・土師器片が出土しているが、図示できたのは須恵器の杯身 7 のみである（図 110）。5 世紀中頃～後半の土器とみられるが、建物 16 は建物 15 より後出するのは確実であることから、周辺からの混入遺物とみられる。したがって建物 15 との関係から、建物 16 の時期は 6 世紀前半頃か。

**建物 17（図 111：図版 30-6～8）** 建物 13 の南西に 10m の場所に位置する。軸方向は N - 32° - E で、北側は断割りにより失われているが、北東 - 南西規模 4.0m、北西 - 南東規模 4.2m を測り、ほぼ方形の平面プランになるとみられ、床面積は 17.64 m<sup>2</sup>ほどと推定される。深さは 0.1m と浅く、埋土中には粗砂が混じる。柱穴などはみられないため、建物 16 と同様、建物ではない可能性がある。

竪穴埋土中から多数の遺物が出土し、そのうち須恵器 31 点、土師器 6 点、石器 1 点を図示した（図 112）。なお、石器については 38 以外にも滑石製品が出土しているが（図 193-33）、これについては第 6 項で詳しく述べる。5・13～15・17・23・30・32・33・35・36 については、床面近くから出土している。須恵器の杯蓋 6 の口縁端部外面と稜にいわゆる刻み目状調整がされており、特定工人集団による成形技法である可能性が指摘されている（江浦 1995・網 2007）。既往の研究で、同様の須恵器生産地として比定されるのは、陶邑周辺窯群と、千里古窯群であり、両窯群から離れた当遺跡の集落への供給元については不明だが、貴重な類例として挙げておきたい。土師器の直口壺 34 は口縁端部内面に、弱い稜をもつ。38 は砥石とみられ、一部しか遺存していないが、表・裏面、側面にも砥面がみられた。遺構の時期については須恵器を中心にみると、TK208 段階とみられる 8・10 や、MT15 段階とみられる 7・19・20、7 世紀代とみられる 21・31 などが出土しているが、床面付近から出土しているものも含めて、多くは TK23～TK47 段階のものであることから、この遺構の時期は 5 世紀後半～末とみられる。

## 2. 井戸

**3-187 井戸（図 113 左：図版 31-1）** 建物 12 の東側 10m の場所に位置する。上層の遺物のみが当初検出され、やや掘り下げた結果、平面プランが確認された。平面不整楕円形で、長軸 1.4m、短軸 1.1m、深さ 0.7m を測る。埋土の状況から、素掘りの井戸とみられ、3～6 層が堆積後、再掘削され、水溜めに利用されたとみられる。最終的にはブロック土を含む 1 層によって埋め戻されている。

1～2 層から土器片が多数出土し、そのうち須恵器 3 点、土師器 3 点を図示した（図 114）。2 は須恵器の杯身である。3・4 は須恵器の高杯で、杯部外面には波状文が巡る。7 は土師器の短頸壺口縁部とみられる。8 は土師器の甕で、口縁端部がわずかに肥厚する。体部外面にはハケ、内面には指ナゲが施される。9 は土師器の高杯で、杯部外面下方には、波状に接合痕が残る。他にも、モモの核の完形 1 点、同破片 1 点が採取された。須恵器は TK208～TK23 段階とみられ、遺構の埋没時期は 5 世紀後半

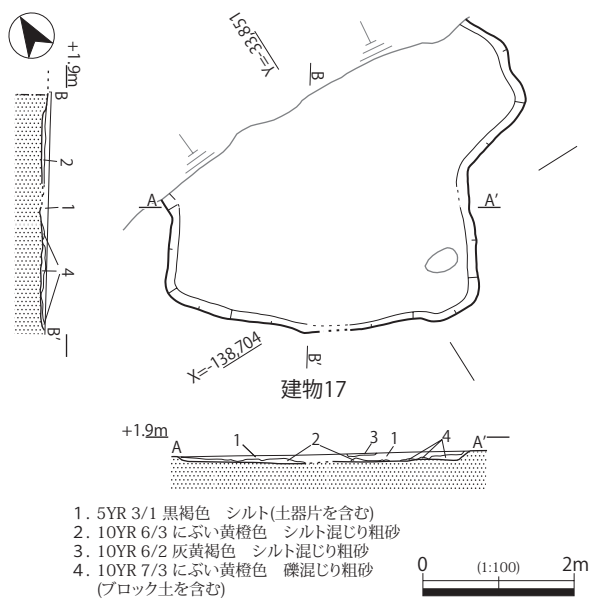


図 111 建物 17 平面図および断面図

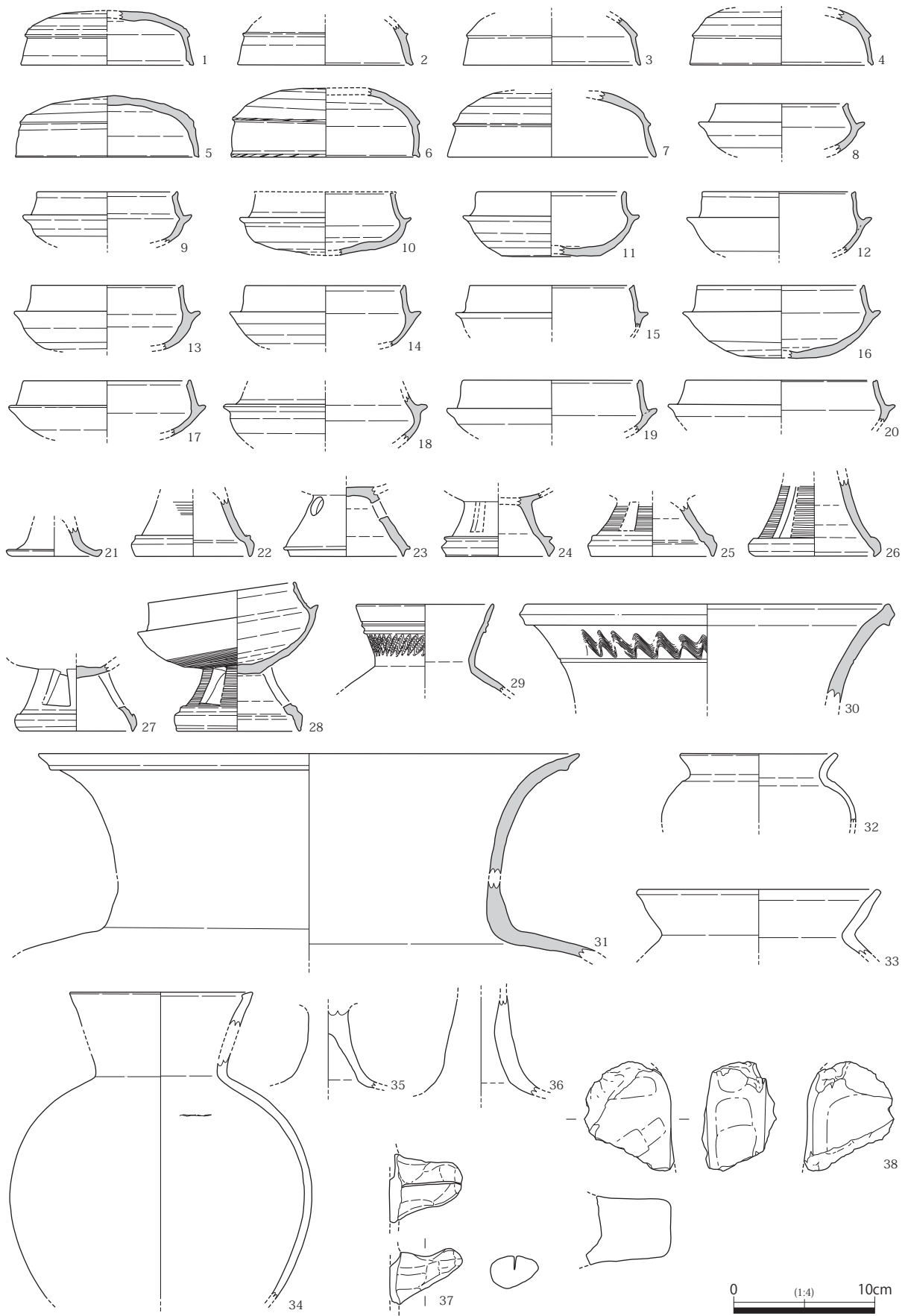


图 112 建物 17 出土遺物実測図

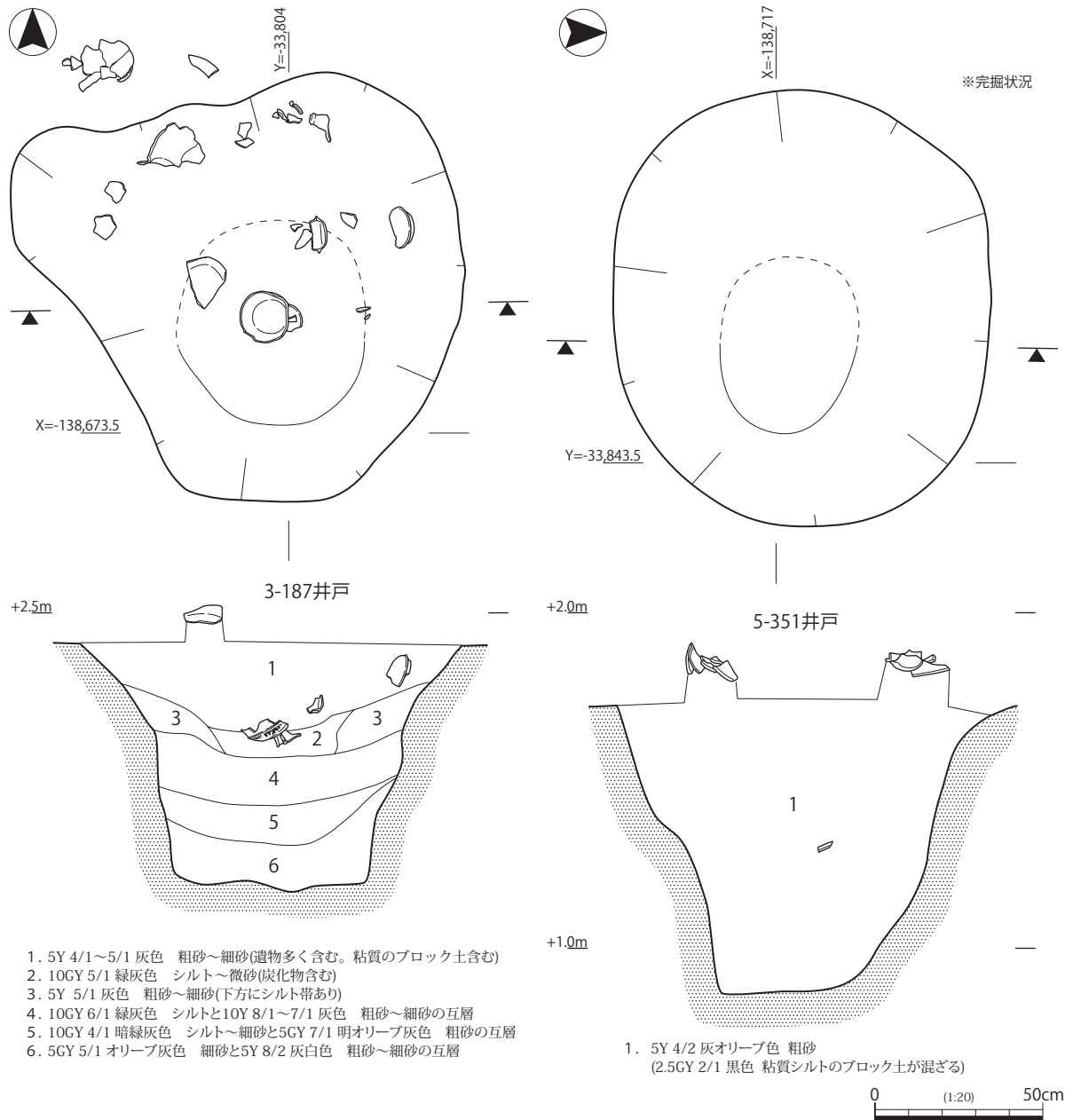


図 113 3-187、5-351 井戸 平面図および断面図

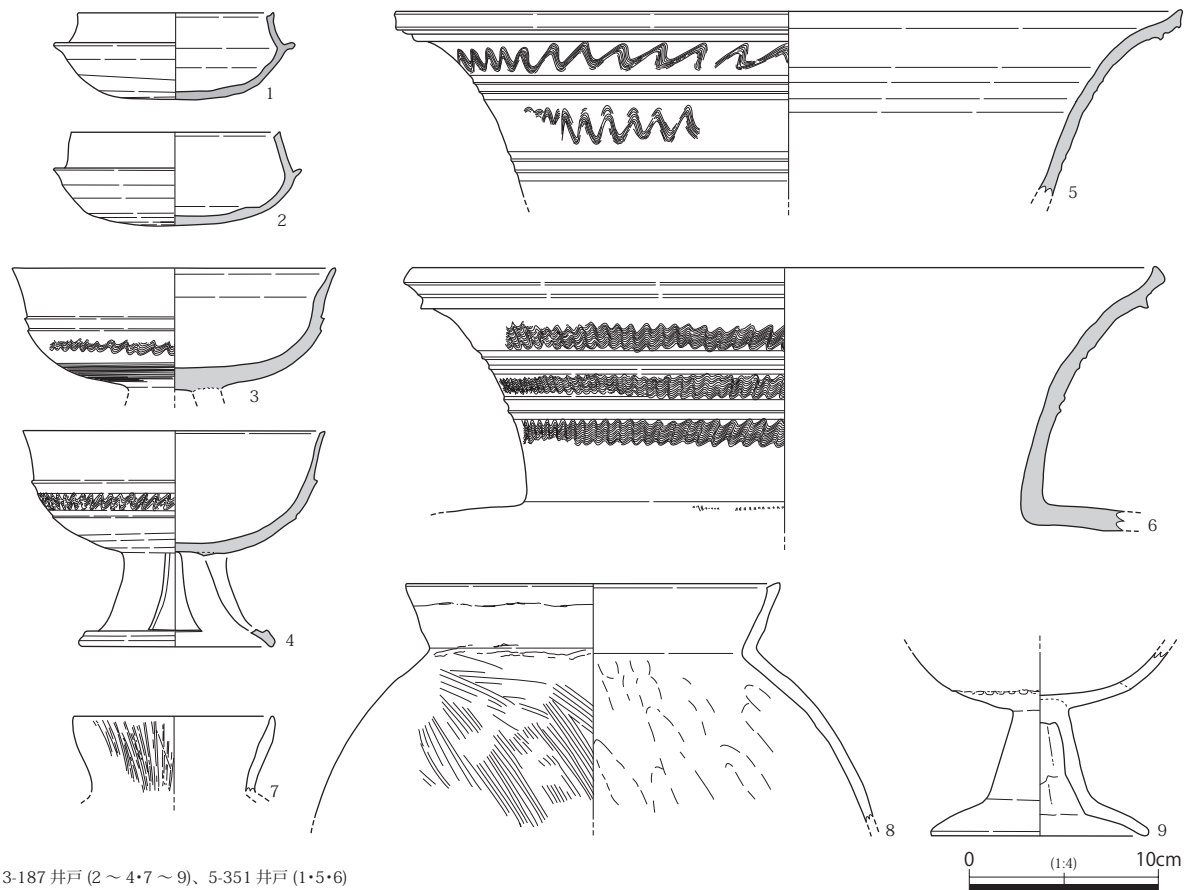
と考えられる。

5-351 井戸 (図 113 右: 図版 31-2) 5 区の南側に位置する。この遺構も 3-187 井戸同様、やや掘り下げて検出を行った。平面楕円形で、長軸 1.3m、短軸 1.1m、深さ 0.85m を測る。埋土は灰オリーブ色の粗砂で、シルトのブロック土を含む。機能時の堆積層らしきものがみられず、一度に埋め戻された状況であることから、掘削後、すぐに廃棄されたか、井戸以外の遺構である可能性も考えられる。

出土した土器のうち、須恵器 3 点を図示した (図 114)。1 は杯身で、TK23 段階とみられる。5・6 は大型甕の口縁部である。頸部には 5 では 2 段、6 では 3 段の波状文が巡っている。5・6 とも TK23 ~ TK47 段階とみられる。遺構の時期は須恵器から、5 世紀後半~末と考えられる。

5-416 井戸 (図 115: 図版 31-3 ~ 6) 建物 11・15 の西側に位置する井戸で、弥生時代後期後半~古墳時代初頭の溝を切る。断面の状況から、井戸廃絶後、土坑状の落ち込みとなっていることが判明している。井戸上部は、平面楕円形で、長軸 3.1m、短軸 2.6m、深さは最深部で 0.8m を測る。最下層





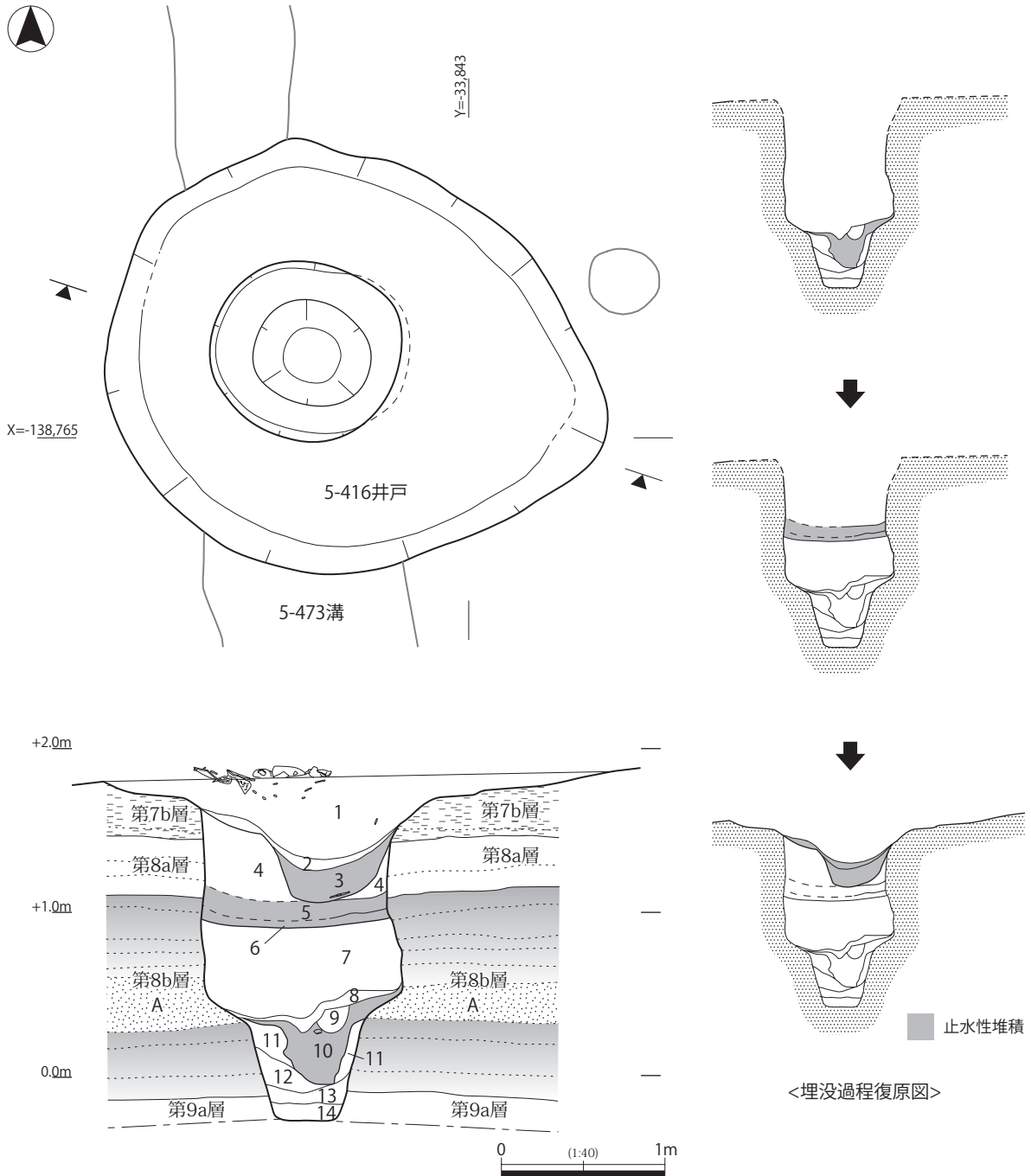
3-187 井戸 (2～4・7～9)、5-351 井戸 (1・5・6)

図 114 3-187、5-351 井戸 出土遺物実測図

の3層には止水性の、2層には流入したと考えられる粗粒の堆積物がみられた。1層によって、最終的に埋め戻されており、1層上部には土器を多く含む。

下部は径 1.1m の平面円形で、深さは 2.1m を測り、検出面から 1.3m の位置に段をもつ。井戸枠などは検出されなかった。埋土の状況から、数次にわたる埋め戻しと再掘削が行われたことが明らかとなっている。まず 11～14 層の堆積後、11・12 層を掘り込む形で再掘削される。そこに 10 層が自然堆積した後、7 層によって中程まで埋め戻される。この 7 層には、第 8b 層のブロック土が多く含まれているため、周辺での掘削行為とその際生じた排土の利用が想定される。掘削深度と規模から考えて、この井戸から北西 3m の場所に位置する 5-475 井戸が候補に挙げられよう。なお 7 層下部から 8 層にかけて、炭化した木材が出土している。その後、滞水状態の中で 5・6 層が堆積し、崩落土もしくは人為的埋土である 4 層によって、ほぼ埋没した状態となったと考えられる。そしてさらに、先に述べた土坑状の遺構が掘り込まれる。以上のように、埋没過程が良好に把握できることに注目し、各層から土壌サンプルを採集し、水洗選別を行った。その結果、多数の種子・昆虫遺体などが得られている。それらをもとに環境復原を行っているが、それについては第 7 章第 1 節で詳しく述べる。

出土した遺物のうち、須恵器 3 点、土師器 12 点、木製品 3 点を図示している (図 116)。ほとんどが上部の 1 層から出土したもので、下部の井戸の埋土では、8 層から木製品 16～18、9・10 層からは土師器 8・10 がそれぞれ出土している。なお、他にも 1 層から滑石製の白玉 1 点、有孔石器 1 点が出土している (図 193-17・194-40)。1 は杯蓋でつまみをもつ。2 は杯身で、ともに TK47 段階のものと思われる。3 は甕で、体部外面タタキ後、横方向のカキメが施される。5 世紀代後半のものと思ら



1. 5Y 2/2 オリーブ黒色 砂質シルト(崩落土、もしくは人為的埋土。土器多く含む)
2. 5Y 3/1 オリーブ黒色 極粗砂(流水性の堆積)
3. 5Y 2/1 黒色 粘土(止水性の堆積)
4. 5Y 3/1 オリーブ黒色 シルト(極粗砂、粘土などのブロック含む。人為的埋土もしくは崩落土)
5. 2.5GY 2/1 黒色 粘質シルト(ラミナあり。止水性堆積。3と同じか)
6. 5Y 3/1 オリーブ黒色 微砂(シルト混。ラミナあり)
7. 5Y 2/2 オリーブ黒色 極粗砂(第8b-1のブロック土が多く入る。人為的な埋め土)
8. 2.5Y 2/1 黒色 シルト(炭化材多く含む)
9. 10Y 4/1 灰色 粘土(第8b層のブロック土)
10. 7.5Y 3/1 オリーブ黒色 粘質シルト(第8b層のブロック土含む。部分的にラミナあり。止水性堆積か)
11. 7.5Y 2/2 オリーブ黒色 粘質シルト(Aのブロック含む。崩落土)
12. 5Y 6/2 灰オリーブ色 中～粗砂(斜めのラミナあり。流水性の堆積。A層の流入)
13. 5Y 2/1 黒色 粘質シルト(粗砂混じる。崩落もしくは人為的埋土。第9a層のブロック土含む)
14. 5Y 2/1 黒色 粘土(第9a層のブロック土含む。崩落もしくは人為的埋土)

図 115 5-416 井戸 平面図および断面図

れる。4・5は小型壺、6は直口壺とみられる。7は杯である。8～11は甕で、いずれも頸部の屈曲が弱く、8・10については内外面にハケメが施される。5世紀末～6世紀初頭のものみられる。12は甑の口縁部か。13・14は高杯である。14は器高がやや低く、裾部への屈曲は弱い。15と同様、混入遺物の可能性がある。15はタタキ甕で、この井戸が切る弥生時代後期後半～古墳時代初頭の5-473溝からの混入遺物である。16～18は木製品である。16・18は建物などの部材とみられ、一部炭化している。樹種は、16がモミ、17・18がヒノキであった。

遺構の時期については、上部と下部の土器では大きな時期差がみられず、5世紀末～6世紀初頭において段階的に、埋め戻されていったものとみられる。

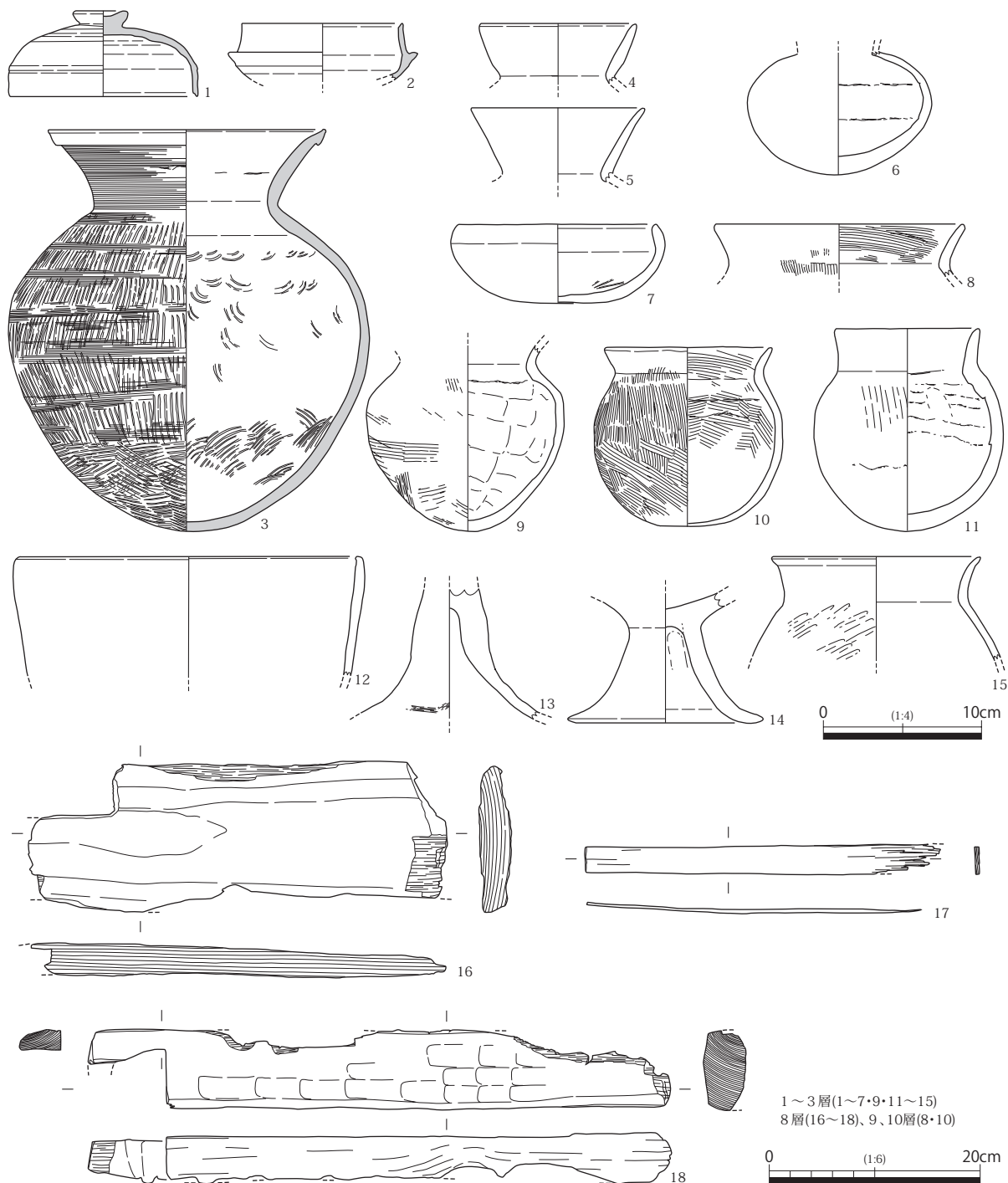


図 116 5-416 井戸 出土遺物実測図

5-474 水溜め (図 117: 図版 31-7) 5-416 井戸の北西側に位置し、径 0.9m の平面ほぼ円形の水溜めである。深さは 0.38m を測り、検出面から 0.22m の位置に段をもつ。高さ 20cm ほどの円形の木枠が検出され、段上に据えられていた。この木枠は、一部腐食しており遺存状態は良好ではないが、丸太を削り抜いて造られたものとみられる。樹種はスギであった。

出土した遺物のうち、土師器 1 点、須恵器 2 点を図示した (図 118)。他にも滑石製品 1 点が出土している (図 194-36)。1 は土師器の甕で、最下層の 2 層から出土した。頸部の屈曲が弱く、口縁部は緩やかに外反する。体部外面にはハケが施され、内面全体には指頭圧痕が残る。5 世紀前半～中頃のものと思われる。2・3 は須恵器の甕口縁部である。2 は口縁端部外面に緩い稜がみられる。2 は 5 世紀中頃～後半、3 は 6 世紀前半のものか。

遺構の時期については、最下層から出土した土師器の甕から、5 世紀前半～中頃を上限とする年代が考えられる。その後、埋没していく際に 2・3 の須恵器が混入したものと考えられる。

5-475 井戸 (図 119: 図版 31-8) 5-474 水溜めの南側に位置する井戸である。東側を時期不明の土坑で切られている。平面不整楕円形で、長軸は推定で 2.6m、短軸は 2.1m を測る。深さは 0.5m で、検出面から 0.1m の位置に段をもつ。井戸とするにはやや浅いため水溜めとも考えられるが、性格ははっきりしない。先述したように 5-416 井戸の埋め戻し土である 7 層には第 8b 層が含まれており、5-475 井戸の掘削排土が利用された可能性もある。微砂～粘土層である 4 層は滞水層とみられ、一定期間開口後、最終的には人為的な埋土である 1 層によって埋め戻されたものと考えられる。

遺物は須恵器・土師器の細片が出土しているが、いずれも図示できるものはなかった。

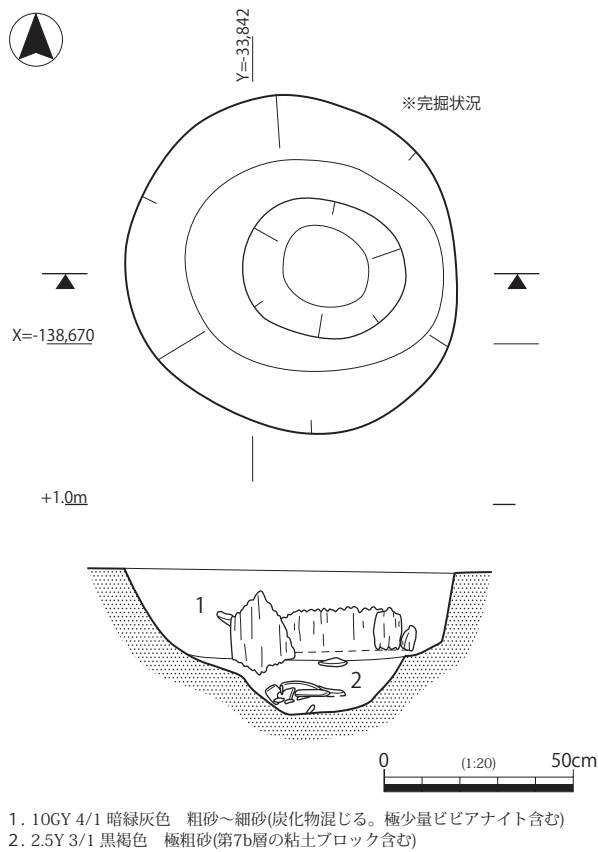


図 117 5-474 水溜め 平面図および断面図

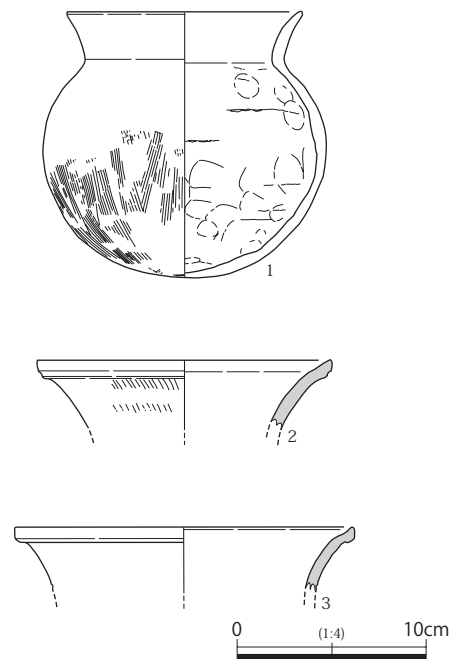
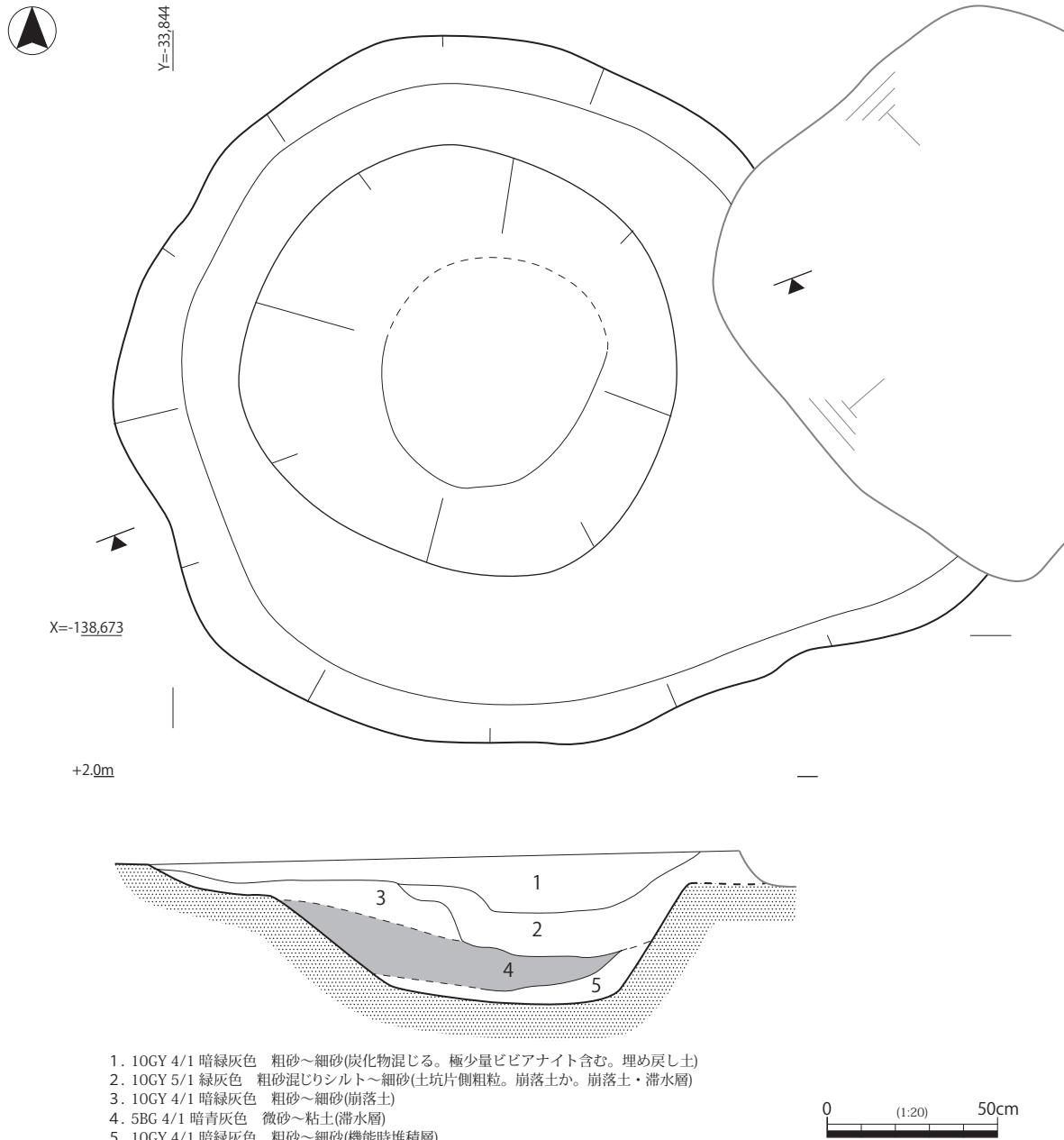


図 118 5-474 水溜め 出土遺物実測図



1. 10GY 4/1 暗緑灰色 粗砂～細砂(炭化物混じる。極少量ピビアナイト含む。埋め戻し土)
2. 10GY 5/1 緑灰色 粗砂混じりシルト～細砂(土坑片側粗粒。崩落土か。崩落土・滞水層)
3. 10GY 4/1 暗緑灰色 粗砂～細砂(崩落土)
4. 5BG 4/1 暗青灰色 微砂～粘土(滞水層)
5. 10GY 4/1 暗緑灰色 粗砂～細砂(機能時堆積層)

図 119 5-475 井戸 平面図および断面図

### 3. 溝

この時期に属すとみられる溝は、調査区中央の南半で主に検出している (図 120)。

**2-90、5-625 溝 (図 121 上)** 3 区の南西端から 2 区にかけて蛇行して延びる。中央部を奈良時代の埤境溝によって切られており、その東側が 5-625 溝、西側が 2-90 溝にあたるが、平面図上から同一の溝とみられる。検出した長さは約 90m、幅 0.5～2.0m、深さは 5-625 溝では 0.11～0.24m、2-90 溝では 0.03～0.28m を測り、北東から南西方向に下る。2-90 溝については浅いために、南側の一部で途切れている場所がみられた。溝底面は平坦ではなく凹凸がみられ、これは溝掘削時の踏み込みとみられる。両溝埋土ともに、滞水または流水していた痕跡は観察されなかった。

出土した遺物のうち、2-90 溝では須恵器 1 点 (11)、5-625 溝では須恵器 8 点 (1・3・5～9・14) と土師器 1 点 (16) を図示した (図 122)。1・3・5・6 は杯蓋である。1 は天井部と体部との境界の稜が明瞭で、口縁下端部内面にも稜をもつ。TK47 段階とみられる。3～6 は外面の稜が失わ



図 120 溝 平面図 (古墳時代中期～後期)

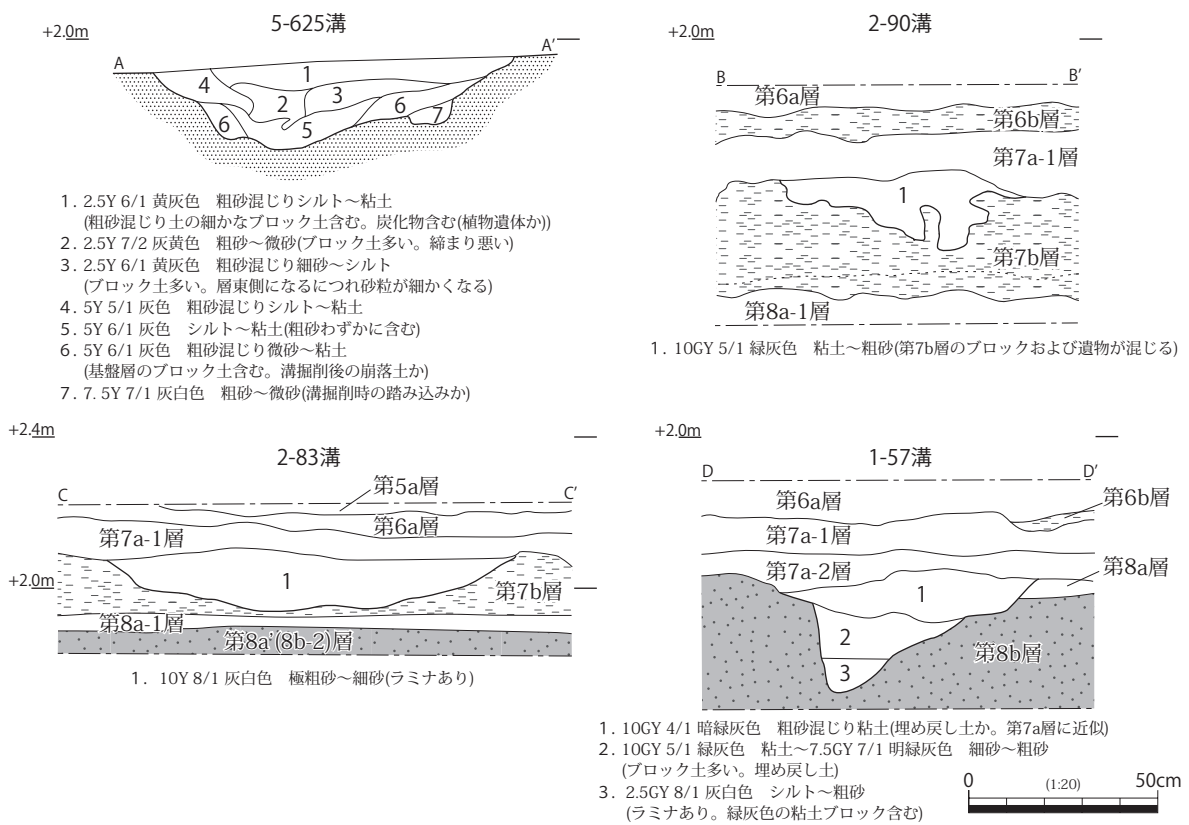


図 121 1-57、2-83、2-90、5-625 溝 断面図

れている。TK10 段階とみられる。7～9・11 は杯身である。7 は小型で口縁部を欠き、器高は低い。TK209～217 段階のものともみられる。8・9 は内面にみられる屈曲が強く、蓋受け部の端部も鋭く仕上げられている。TK23～47 段階のものともみられる。11 は径が大きく、口縁部が短く内傾する。TK10 段階のものともみられる。14 は壺の口縁部とみられ、口縁端部が上下に拡張する。MT15 段階のものか。16 は高杯の脚部である。明瞭ではないが、内面にケズリが施される。

5 世紀後半から 7 世紀初頭とやや時期幅のある土器が出土していることから、遺構の時期を明確にすることは難しい。ただ、これまでみた遺構では、あまり出土していない 6 世紀中頃の須恵器がやや目立つ点は、この時期において、5 区の遺構集中部からやや離れた 2-90、5-625 溝周辺で、何らかの活動が行われていたことが想定される。

**2-83、5-862 溝 (図 121 左下)** 2 区から 5 区にかけて、北西—南東方向に直線的に延びる。2-95 坪境溝、5-625 溝に一部切られ、また一部途切れる場所があるが、軸方向から 2-83 溝と 5-862 溝は同一の溝とみられる。検出した長さは 64m、幅 0.4～0.6m で、深さは 2-83 溝では 0.06～0.16m、5-862 溝では 0.05m を測り、北西方向に下る。埋土は砂層で、層中にラミナがみられることから、水が流れていたとみられ、それによって運ばれた砂により埋没したとみられる。遺物は須恵器・土師器が出土しているが、細片のため図示できなかった。そのため、この溝の時期は不明であるが、北西側に位置する建物 13・14・17 の軸方向と近似して延びることから、これらの建物と関連する溝の可能性はある。

**1-57 溝 (図 121 右下：図版 32-1・2)** 1 区の北東隅で検出した溝である。北西-南東方向に直線的に延びており、検出した長さは 14m、幅 0.4m、深さ 0.3m を測る。溝の最下層には、溝機能時に堆積したとみられるシルト～粗砂があり、その上層には埋め戻し土とみられるブロック土を含んだ層がみられる。遺物は須恵器・土師器が出土しており、須恵器 5 点を図示した (図 122)。2・4 は須恵器の蓋杯である。いずれも天井部と体部の境界に稜線はなく、口縁下端部は丸くおさまる。TK43～TK209 段階のものともみられる。10 は須恵器の杯身で、口縁部はやや直立気味で、先端部は丸くおさまる。TK10 古相段階のものともみられる。12 は須恵器の小型甕とみられる口縁部である。外面に 3 条 2 段の波状文とその上位に 1 条の沈線が施される。5 世紀代前半のものか。15 は須恵器の高杯の脚部である。

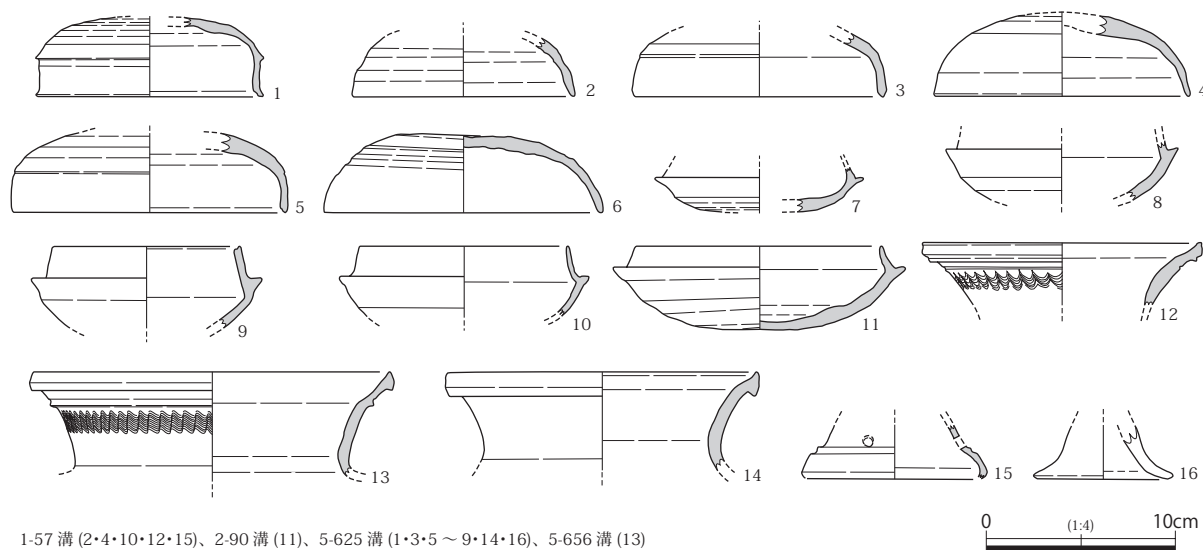


図 122 溝 出土遺物実測図 (古墳時代中期～後期)

円形の透かし孔をもつ。TK73～TK216 段階のものとみられる。

5～6世紀と時間幅のある遺物が出土しているため、遺構の時期を明確にすることは難しい。ただし6世紀中頃～後半の須恵器を含むことから、同様の須恵器が出土している2-90、5-625溝に関連する溝の可能性はある。

**5-656 溝** 建物14の南西側に隣接する逆T字形の溝である。南北方向に延びる部分は長さ4m、幅0.3m、東西方向に延びる部分は長さ9m、幅0.2～0.6mとなっている。深さは0.05～0.12mを測り、南方向に下る。遺物は須恵器・土師器が出土しており、そのうち須恵器1点を図示した(図122)。13は須恵器の甕である。外面には9条の波状文が施され、内面の一部には自然釉がみられる。TK208段階のものとみられる。なおこの須恵器の甕は、建物17の床面付近から出土したものと接合しており、両遺構が関連する可能性が考えられる。遺構の時期は5世紀中頃とみられる。

#### 4. 土坑・ピット

この時期の遺物を伴う土坑・ピットは、主に5区を中心に検出されている(図106)。

**5-510 ピット** (図123左: 図版32-3) 5区の中央やや北寄りに位置する平面円形のピットで、直径0.5m、深さは0.35mを測る。埋土は粘土ブロックを含むシルトで、人為的に埋め戻されたものとみられる。埋土中から、砥石2点、凹石1点が積み重なるように出土した。また下部に位置していた砥石29については、同一破片が重なった状態であった。遺物は須恵器・土師器が出土しているが、細片のため、石器3点のみを図示した(図125)。28・29は砥石である。ともに全面に擦痕がみられる。石材については28が軽石、29が砂岩である。30は凹石である。表面、裏面の中央部が窪んでおり、石皿などに使用された可能性がある。また表面の一部には砥石としても利用されたとみられる擦痕が観察された。石材は砂岩である。遺構の時期については、図示できなかったが、須恵器の杯蓋片より、5世紀代とみられる。

**5-567 土坑** 建物9の南側に隣接する直径1.2mの平面円形の土坑で、深さは0.3mを測る。埋土から須恵器・土師器が出土しており、そのうち須恵器2点、土師器4点を図示した(図124)。1は須恵器の杯蓋で、天井部と体部の境界の稜線がわずかに残り、径もそれほど大型でないことから、TK23～47段階のものとみられる。9は須恵器の杯身で、口縁部が直線的に立ち上がり、口縁端部内面に稜線

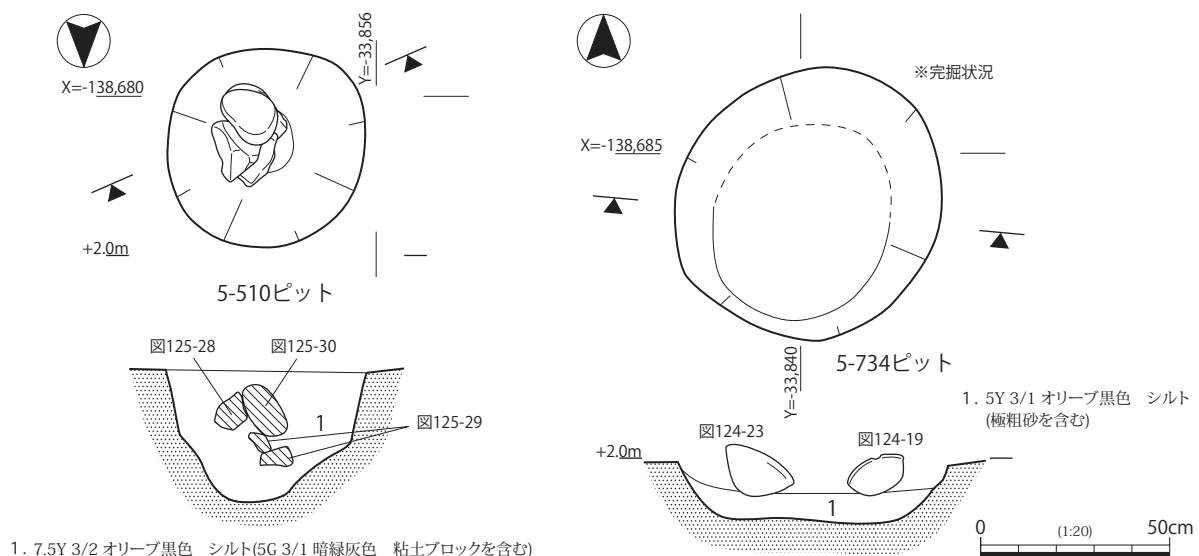


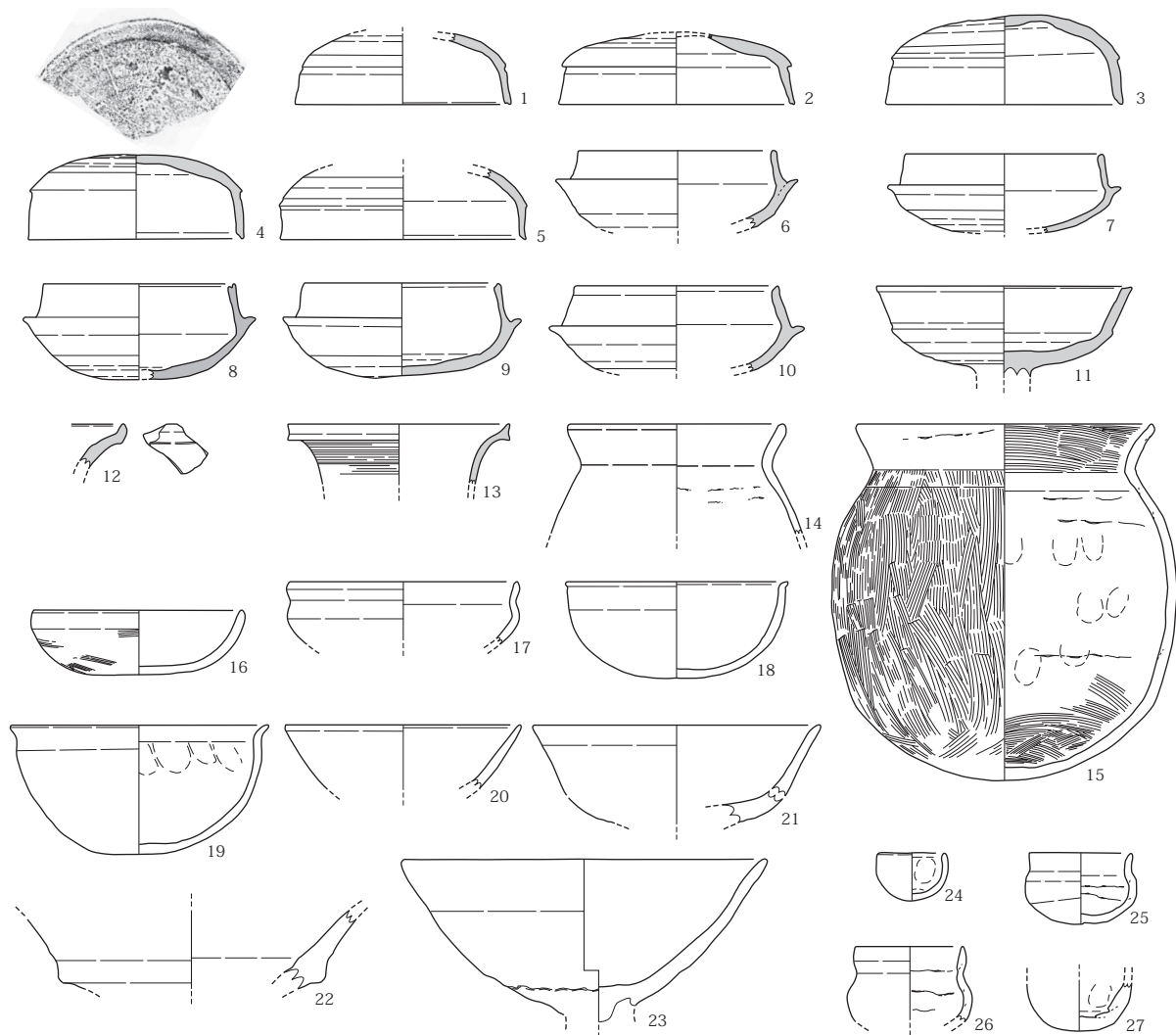
図123 5-510、5-734ピット 平面図および断面図



がみられる。1と同様TK23～47段階のものとみられる。17は土師器の杯とみられる。口縁部は屈曲して立ち上がる。5世紀後半のものとみられる。25～27はミニチュア土器である。いずれも内面には、粘土接合痕がみられた。25の外面にはやや不明瞭であるがケズリが施されている。遺構の時期は、5世紀後半から5世紀末とみられる。

5-734ピット（図123右：図版32-5）建物13の北側に位置し、弥生時代後期後半から古墳時代初頭に属す溝を切るピットである。直径約0.7mの平面円形を呈し、深さは0.25mを測る。断面逆台形で、埋土は極粗砂を含むシルトであった。埋土から土師器が出土し、そのうち4点を図示した（図124）。18・19は鉢である。いずれも口縁部を短く外反させている。19の体部内面には指頭圧痕がみられる。21・23は高杯の杯部である。23はやや大型の高杯で、外面下部には粘土接合痕が明瞭に残る。遺構の時期については、5世紀中頃から後半とみられる。

その他の土坑・ピットからの出土遺物（図124：図版32-4・6・7）2～8・10～13は須恵器である。2～5は杯蓋である。2は、器高が低く扁平で、天井部と体部の境界の稜線が鋭い。ON46段階のものとみられる。3は、肩部外面の稜線はやや弱い。TK23～TK47段階のものとみられる。4は、



3-140土坑(6・12・22)、3-174土坑(4)、5-396ピット(7・10)、5-429ピット(2)、5-555ピット(16)  
5-567土坑(1・9・17・25～27)、5-575土坑(24)、5-692ピット(5)、5-734ピット(18・19・21・23)  
5-743ピット(15)、5-769ピット(11)、5-843ピット(14)、5-876ピット(20)、5-882ピット(8・13)、5-950土坑(3)

図124 土坑・ピット 出土遺物実測図（古墳時代中期～後期）1

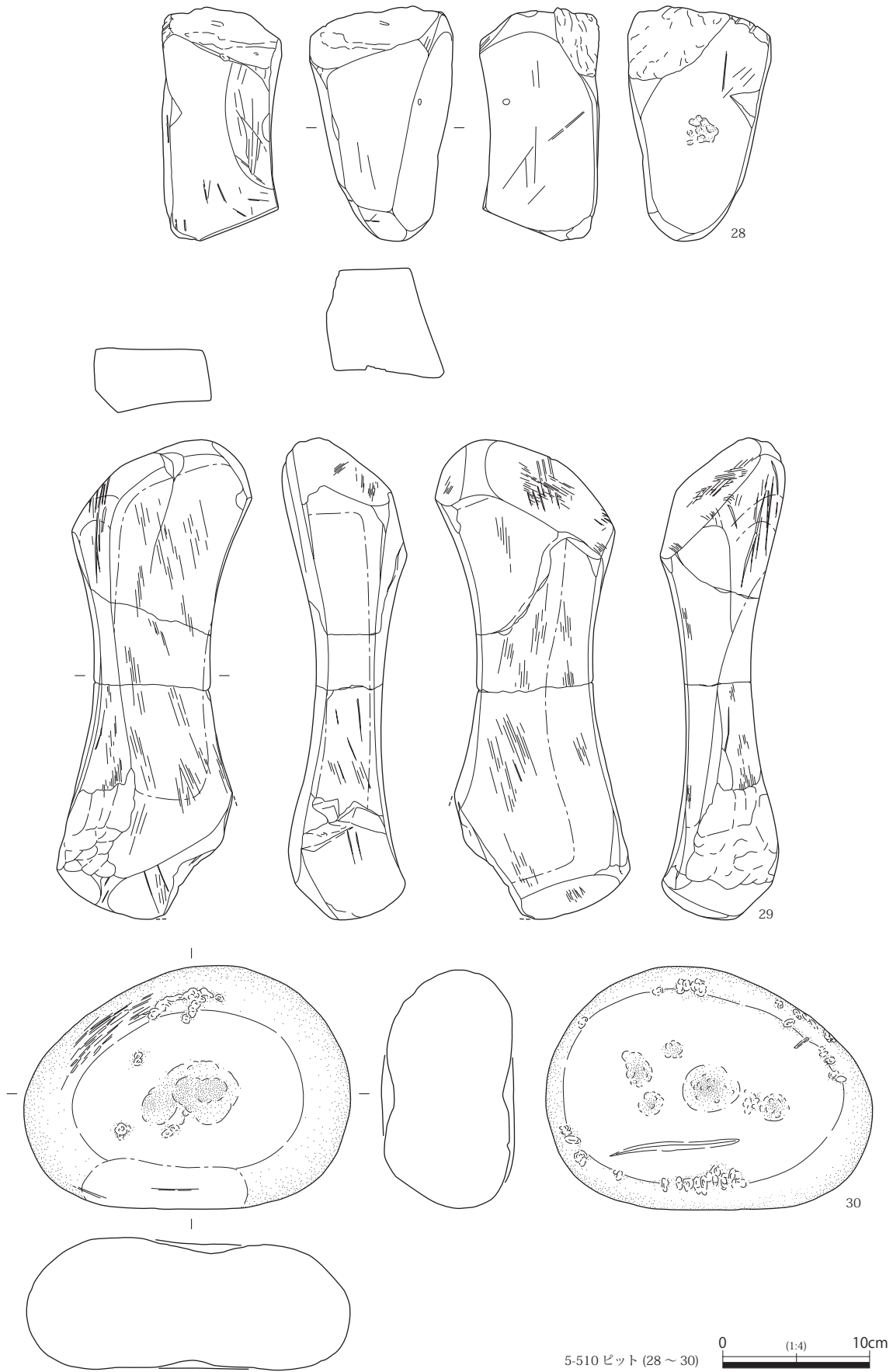


図 125 土坑・ピット 出土遺物実測図（古墳時代中期～後期） 2

体部外面、口縁端部内面の稜線が明瞭に残る。TK23 段階のものとみられる。5 は、体部外面の稜線が明瞭に残る。その稜線から口縁部までやや短い。TK216 段階のものとみられる。6～8・10 は杯身で 6 は、蓋受け部の先端が鋭い。TK47 段階のものとみられる。7・10 は、いずれも蓋受け部が水平に近く、底部は平らになるものと考えられる。TK216 段階のものとみられる。8 は器高がやや高く、口縁端部内面の稜線が明瞭に残る。TK23～47 段階のものとみられる。11 は高杯で脚部を欠き、杯部はやや浅い。MT15 段階のものとみられる。12 は甕口縁部とみられ、口縁部が屈曲し、端部は直立する。6 世紀代のものか。13 は甕口縁部で、体部外面にカキメが施される。TK47 段階のものか。

14～16・20・22 は土師器である。14 は甕で、内外面摩滅が著しく調整は不明であるが、内面に粘土接合痕が残る。6 世紀代のものか。15 は甕で、頸部以下外面、口縁部内面と底部内面にハケメが施され、体部内面には指頭圧痕が残る。6 世紀代のものとみられる。16 は杯で、底部外面にハケメがみられる。6 世紀後半のものか。20 は椀形高杯で、6 世紀代のものか。22 は高杯の杯部で、やや大型のものである。外面下部に段をもつ。5 世紀代のものか。24 はミニチュア土器である。手づくね成形によるもので、内面に指頭圧痕が残る。5～6 世紀のものか。

以上の土坑・ピットの時期については、大きくみると 5 世紀前半の土器を伴う 5-396 ピット・5-692 ピット、5 世紀後半から 5 世紀末の土器を伴う 3-174 土坑・5-882 ピット・5-950 ピット、6 世紀代の土器を伴う 3-140 土坑・5-555 ピット・5-743 ピット・5-769 ピット・5-843 ピット・5-876 ピットの 3 つに大別される。各時期のピットが集中するといった傾向はみられないものの、6 世紀代としたピットについては、3 区の中央に位置する 3-140 土坑を除くと、5 区の中央から西側にかけて偏在する。この点については、後述する包含層出土遺物の分布状況からも、6 世紀に入って活動範囲の変化があったことを示す可能性が考えられる。

## 5. 包含層出土遺物

第 7a 層出土のものがほとんどで、第 7b 層からは少量であった。調査区別にみると、3・6 区の東側では土器がみられず、特に 5 区で多くの土器が出土し、1・2・4 区ではやや散在した状況であることがわかる（図 126）。建物や井戸などの遺構周辺に土器が分布しており、中でも建物 13 周辺に多い。

土器全体をみると遺構が多い 5 区に土器が集中しているものの、最も出土例の多い須恵器の杯蓋と杯身を時期別にみた場合、5 世紀代の杯蓋 26 点のうち 20 点が 5 区出土で、6 世紀代の杯蓋 25 点のうち 5 区出土のものは 10 点（3・4・7・9・18・19・27・40・41・51）、1 区で 5 点（13・16・37・43・45）、2 区で 2 点（46・50）、3 区で 3 点（12・47・48）、4 区で 5 点（5・14・42・44・49）と、6 世紀代になると 5 区以外にやや出土数が多くなっている。同様に杯身では、5 世紀代のもの 36 点のうち、5 区からは 24 点出土しているが、6 世紀代では 14 点のうち 5 区では 3 点（94・96・97）にとどまり、1 区で 4 点（89・92・99・101）、2 区で 3 点（85・90・95・98）、4 区で 3 点（88・93・100）がそれぞれ出土している。

先述した 6 世紀代の遺物を伴う 1-57、2-90、5-625 溝や、同時期のピットが 5 区の西側に偏る状況なども含めて考えると、5 世紀代では 5 区を中心に活動していた範囲が、6 世紀の段階に入り、5 区の南西側にあたる 1・2・4 区までその範囲を広げていった様子が窺える。

**第 7a 層出土遺物** 須恵器 173 点、土師器 38 点を図示した（図 127～132）。1～51 は須恵器の杯蓋である。2 には体部外面にカキメが施され、一部に自然釉が付着する。TK23 段階のものか。3・4 の口縁部下端外面には刻み目が施されている。いずれも MT15～TK10 段階のものとみられる。な

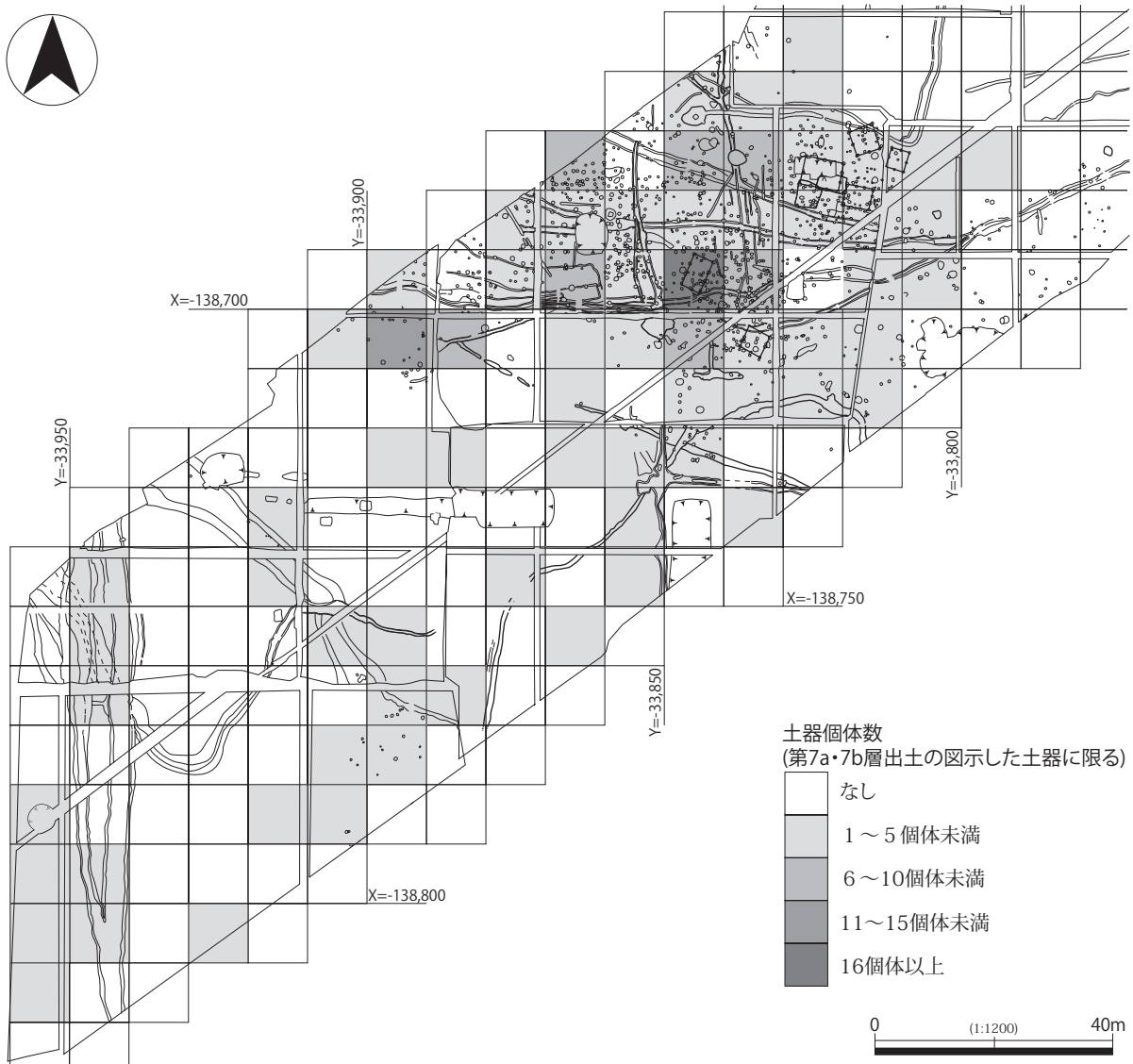


図 126 出土遺物量分布図 (古墳時代中期～後期)

お建物 17 出土の図 112-6 にも同様の調整がみられ、特定工人や集団による製作の可能性が考えられる。11 は口縁部が直立し、天井部と体部の境界は鋭い稜となっている。TK216～TK208 段階のものとみられる。46～48 については器高が低く、口縁端部は丸くおさめられている。TK43～TK209 段階のものとみられる。52～101 は須恵器の杯身である。52 の底部は不定方向のケズリが施されている。TK216～ON46 段階のものとみられる。73 は蓋受け部の稜がかなり緩やかになっており、やや特異な形態である。TK23～TK47 段階のものか。98 の底部内面には、同心円状の当て具痕がみられる。TK10 段階のものとみられる。102～131 は須恵器の高杯である。105 の蓋受け部には、焼成時に付着したとみられる蓋の一部が残存する。TK23～TK47 段階のものとみられる。109 の杯部底部はケズリ後、ナデが施され、脚部には 3 方向に円形の透かし孔をもつ。TK216 段階のものとみられる。116 は裾部への屈曲が明瞭で、端部は面をもつ。TK73～TK216 段階のものとみられる。117 はやや大型の高杯脚部である。一部しか残存していないが、4 方向の透かし孔である可能性がある。TK216 段階のものか。128 は高杯脚部の一部である。長脚で 3 方向二段の長方形透かし孔をもつ。TK43～TK209 段階のものとみられる。

132～142 は須恵器の壺・甃・提瓶などの口縁部である。138 は 10 条一単位の波状文が 3 段施さ

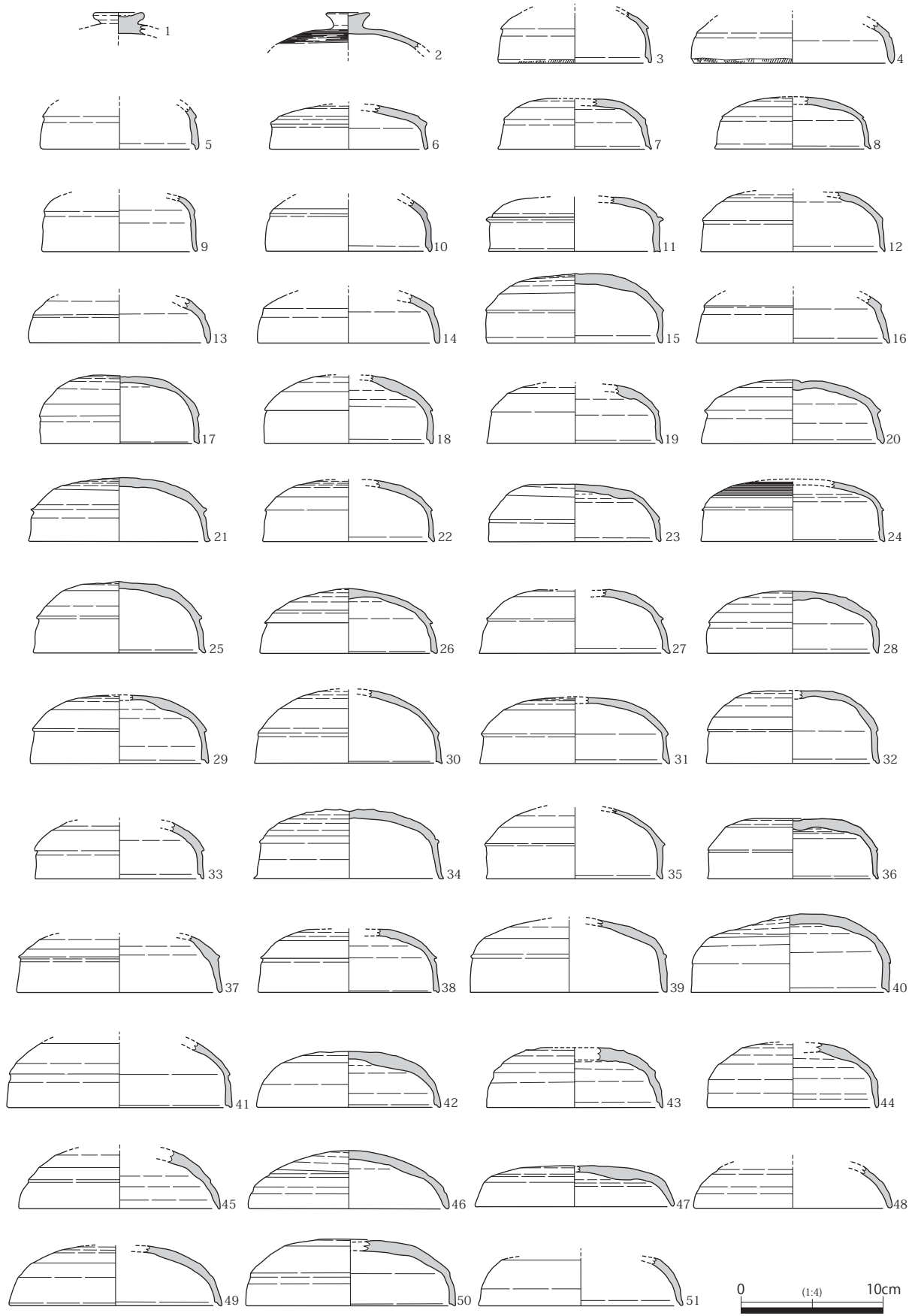


図 127 第7a層 出土遺物実測図（古墳時代中期～後期）1

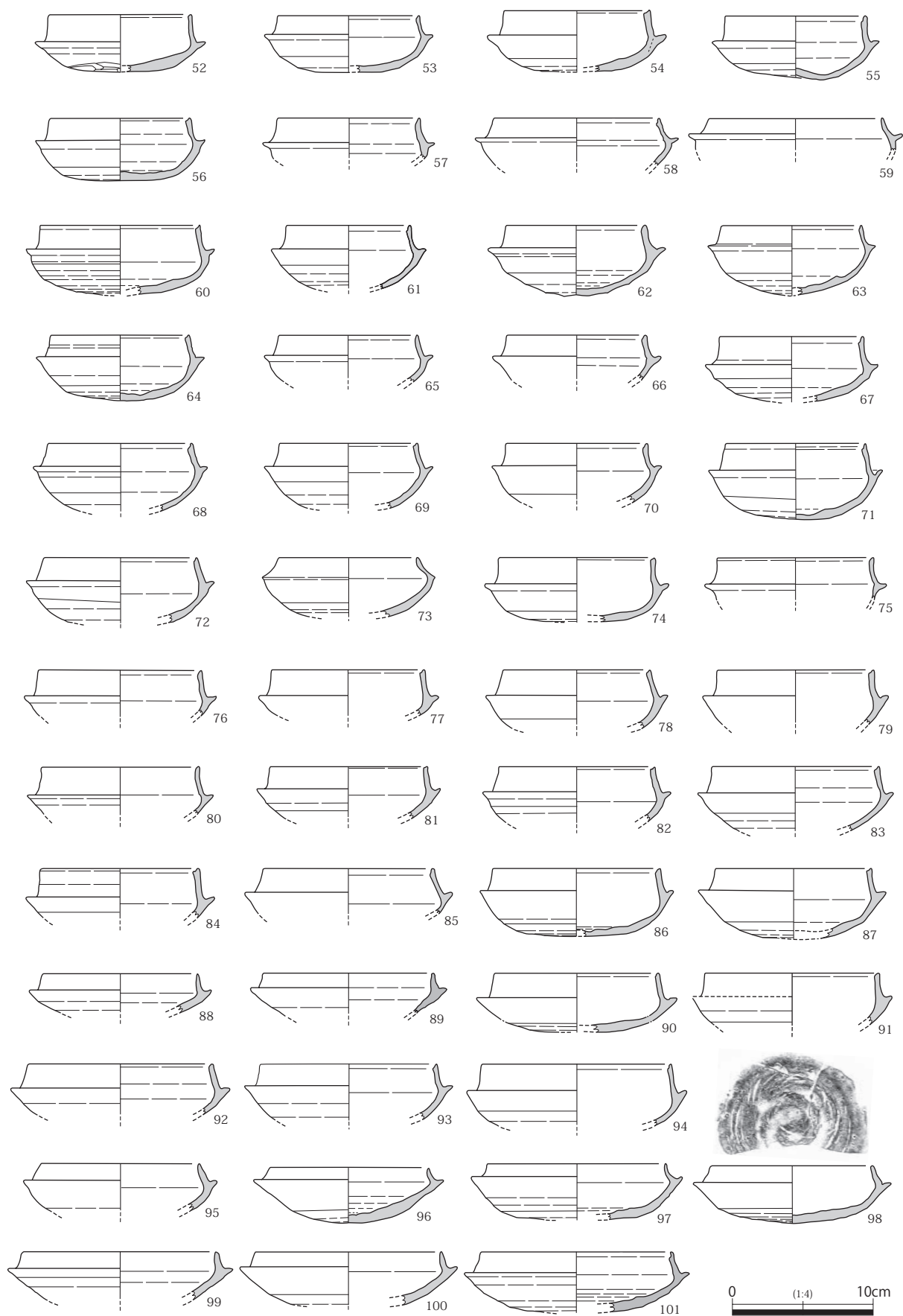


図 128 第 7a 層 出土遺物実測図 (古墳時代中期～後期) 2

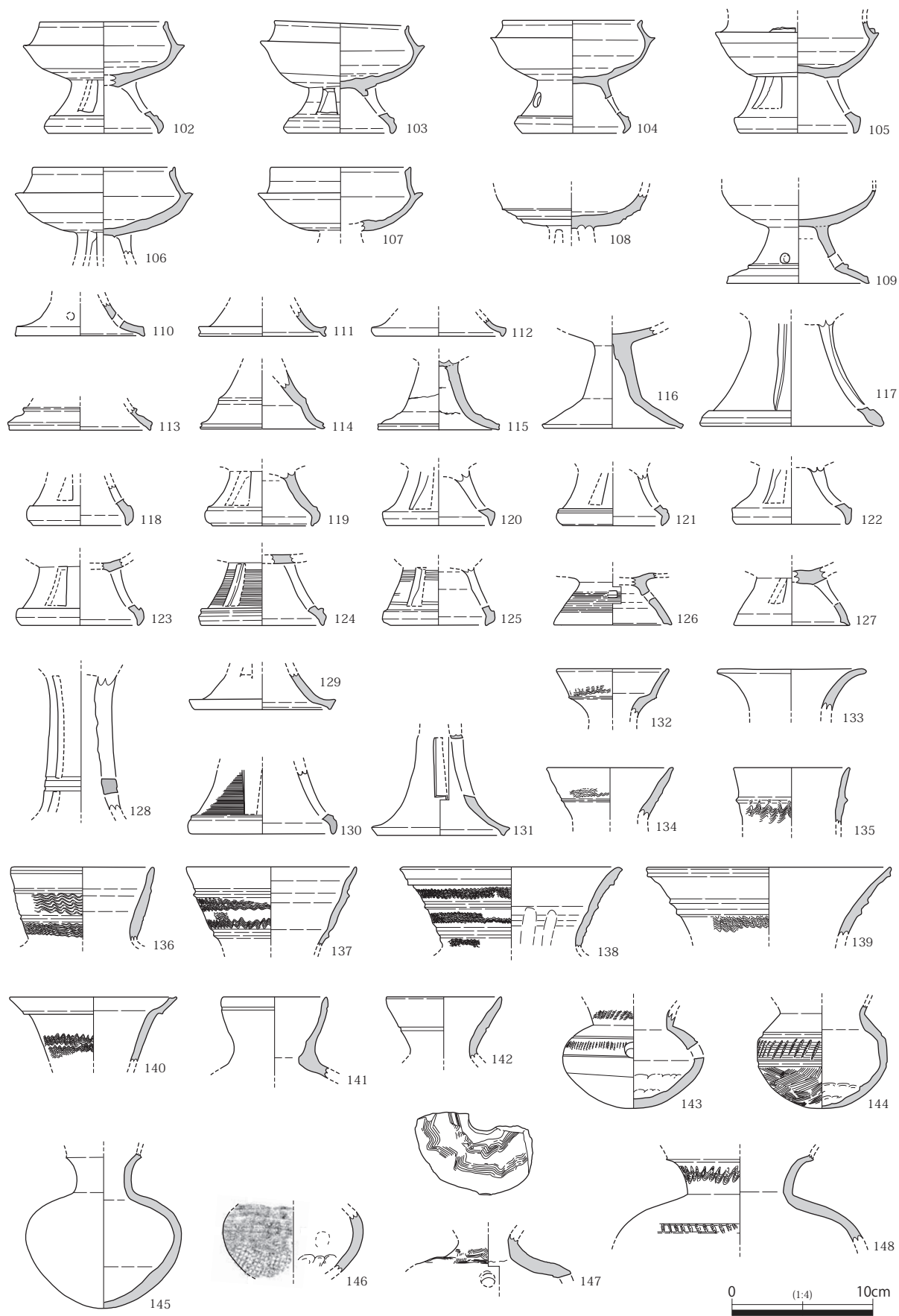


图 129 第 7a 層 出土遺物実測図 (古墳時代中期～後期) 3

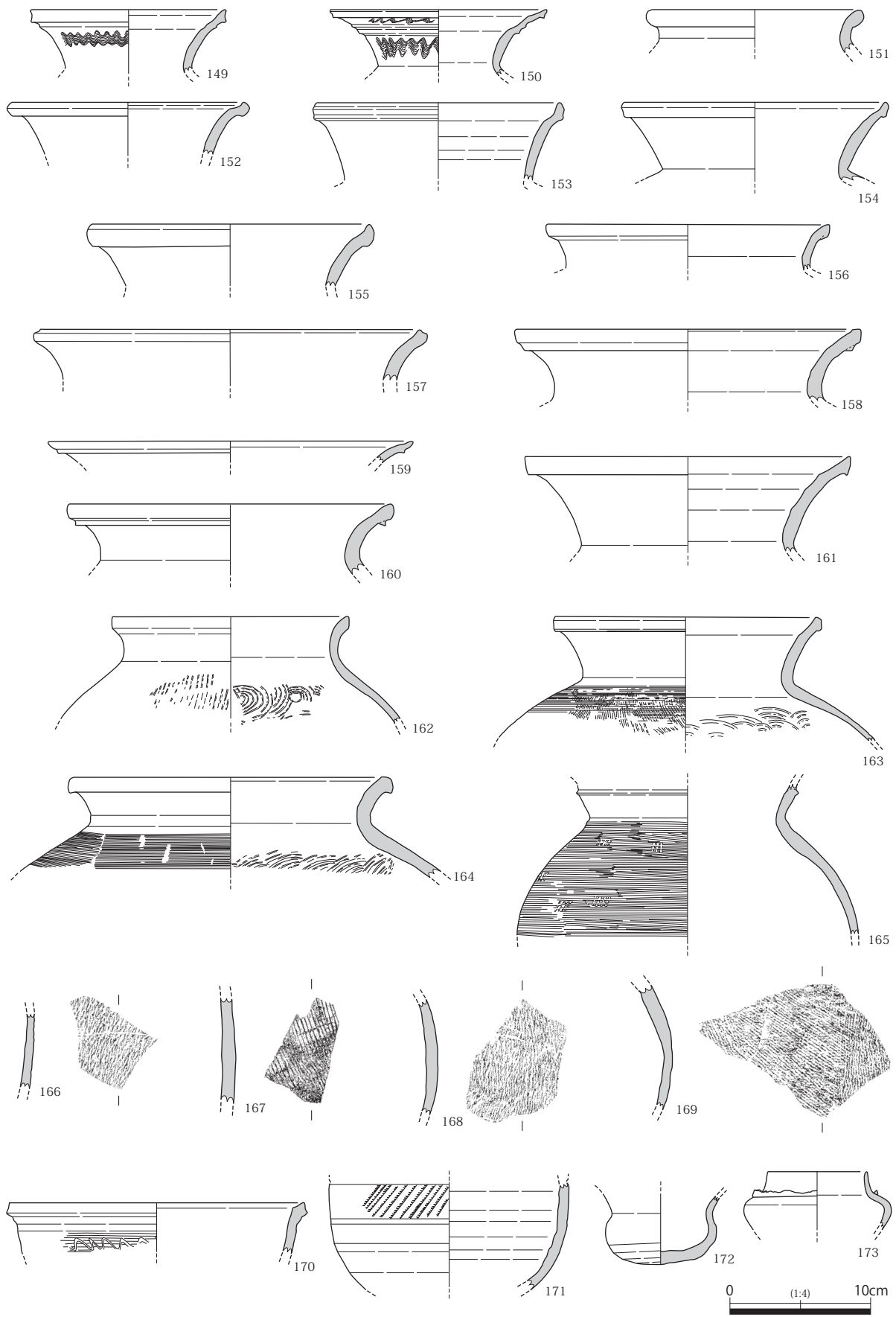


图 130 第 7a 層 出土遺物実測図 (古墳時代中期～後期) 4



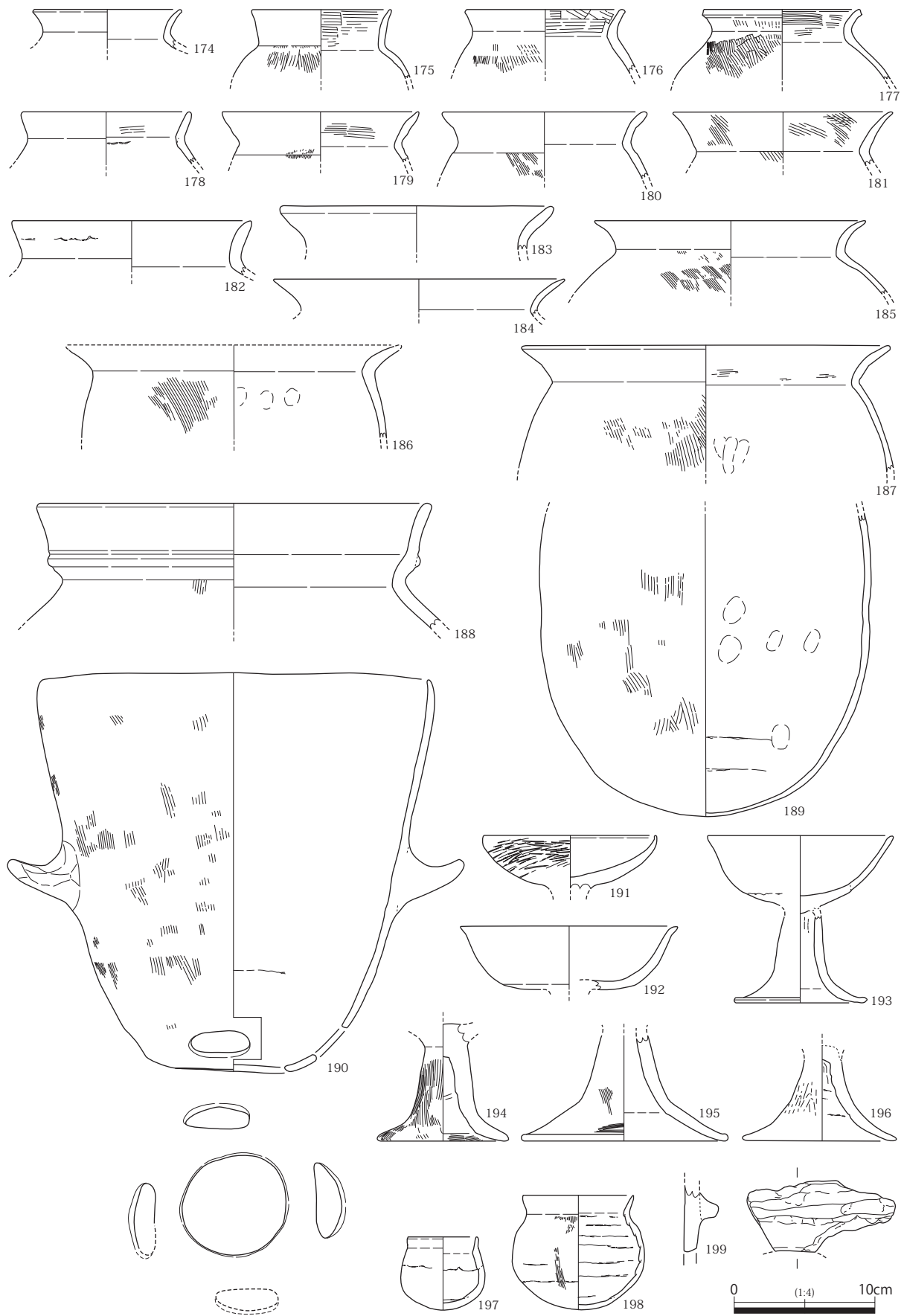


図131 第7a層 出土遺物実測図（古墳時代中期～後期）5

れている。頸部内面には、部分的に縦方向のナデがみられる。TK73 段階のものとみられる。141 は提瓶の口縁部である。口縁部外面に 1 条の沈線をもつ。TK43 段階のものとみられる。143～148 は須恵器の壺・甕の体部である。144 胴部の中程には横方向のカキメ後、櫛描列点文が、胴部下半には不定方向のカキメが施される。また底部内面に棒状工具による突き出し痕が残る。TK23～TK47 段階のものとみられる。146 は小型壺の胴部とみられ、底部外面に格子目状のタタキ目が、底部内面には棒状工具による突き出し痕が残る。5 世紀代のものか。147 は、甕の肩部とみられ、外面には櫛状工具による波状文が 2 条施されるが、やや歪である。148 は、やや大型の甕の胴部とみられ、頸部に櫛状工具による波状文、肩部からやや下がった位置に、同様の工具とみられる列点文が施される。TK208 段階のものとみられる。149～165 は須恵器の甕とみられるが、一部壺の口縁部を含む可能性がある。150 の頸部外面には上部に 5 条、下部には 9 条の波状文がみられる。5 世紀中頃ののものか。163 は体部外面に、平行タタキ後カキメが施される。MT15 段階のものか。165 は口縁部を欠き、体部外面にはカキメ後、格子目タタキが施される。5 世紀代のものとみられる。166～169 は須恵器の甕の体部とみられる。166・168・169 は外面縄蓆文タタキによるもので、166 には 1 条の沈線がみられる。167 の外面には、平行する多数の線に、ほぼ直角に 1 本の直線がはいるタタキが施されている。170 は須恵器の器台口縁部か。体部外面にカキメ後波状文が施される。171 は須恵器の壺体部とみられる。

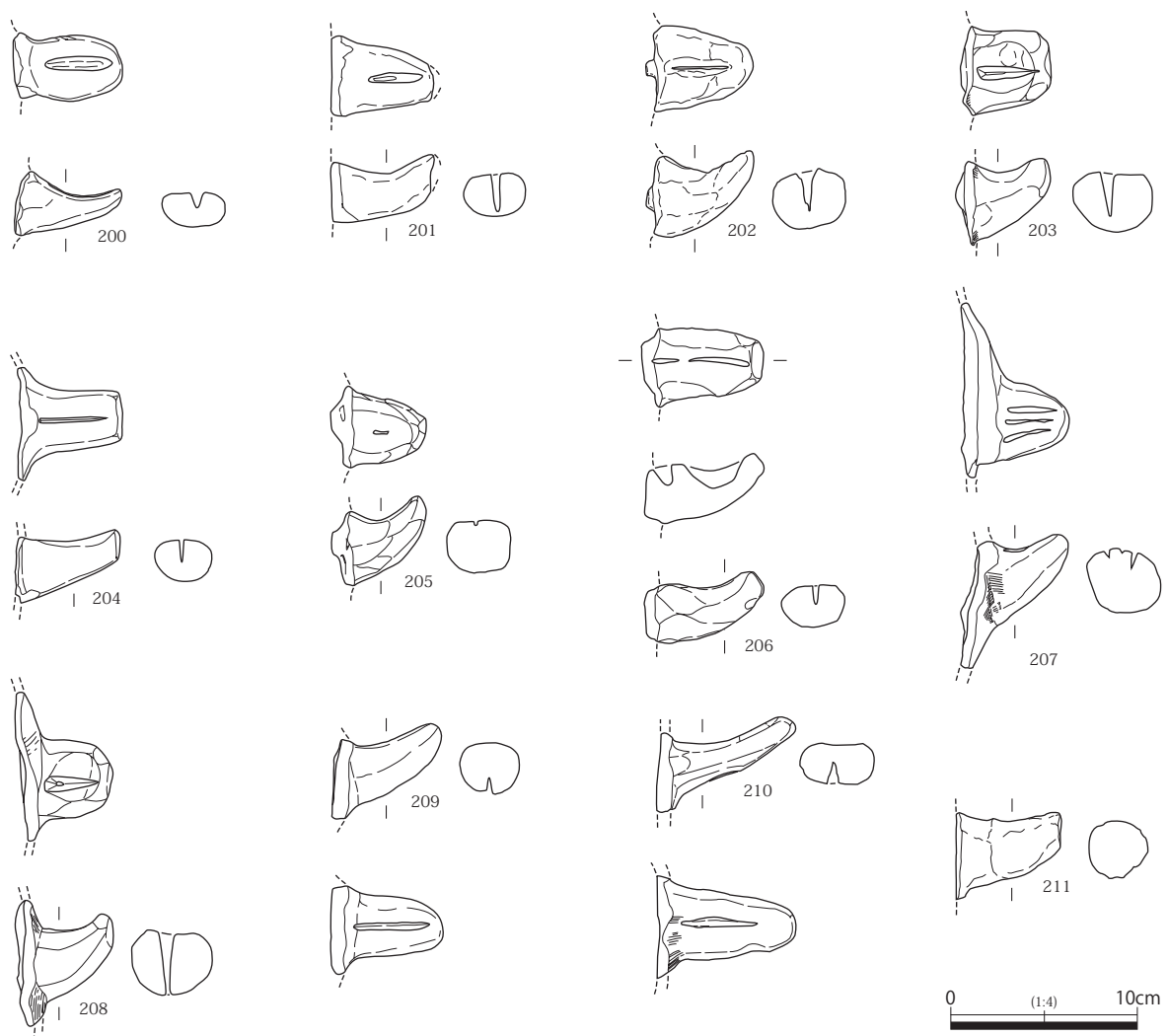


図 132 第 7a 層 出土遺物実測図 (古墳時代中期～後期) 6

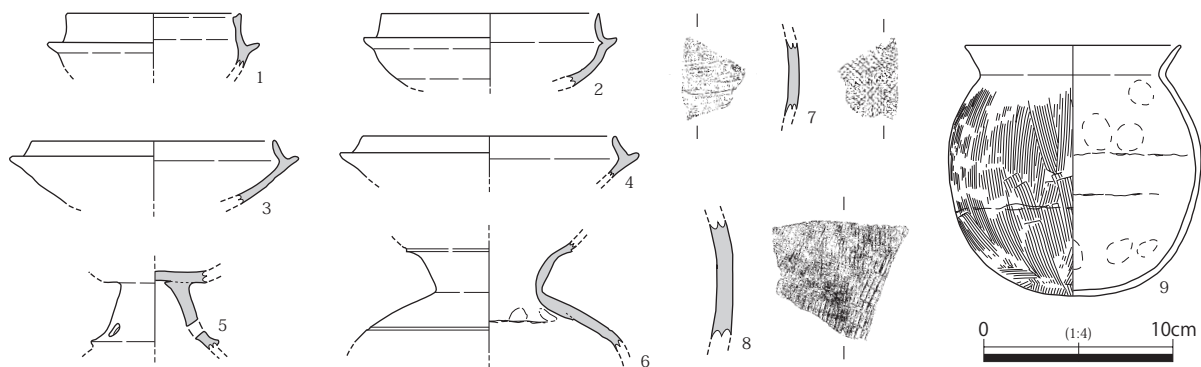


図 133 第 7b 層 出土遺物実測図 (古墳時代中期～後期)

体部外面中ほどに櫛状工具による列点文が施される。172 は須恵器の小型壺である。底部外面はケズリにより成形されている。173 は須恵器の短頸壺である。肩部に蓋とみられる口縁端部の一部が付着する。

174～185 は土師器の甕である。175～179・181 の口縁部内面にはハケメが施される。186・187・189 は土師器の長胴甕である。頸部から底部の内面に指頭圧痕がみられる。188 は土師器の壺である。口縁部外面下部に粘土紐貼り付けによる段をもつ。190 は土師器の甑である。外面の摩滅が著しいが一部にハケメがのこる。底部中央部と、その四方を囲む形で焼成前穿孔がされている。なおこの土器については第 6 層中で出土したものだが、古墳時代後期に属すとみられることからここに図示した。191～196 は土師器の高杯である。191 は椀形高杯の杯部で、外面に細かなミガキが施される。193 は杯部がやや深く、裾部への屈曲は弱い。5 世紀代でもやや古い段階のものか。197・198 はミニチュア土器である。198 は外面の一部に縦方向のハケメがみられ、内面には粘土接合痕が明瞭に残る。

199 は円筒埴輪で、摩滅が著しく調整は不明である。突帯の一部と、透かし孔の上部が残る。200～211 は甕の把手である。200～206 は上面に 1 条の、207 は 3 状の切り込みをもつ。208 のみ貫通しており、209・210 は下面に切り込みをもつ。211 のみ切り込みがみられない。

**第 7b 層出土遺物** 須恵器 8 点、土師器 1 点を図示した (図 133)。1～4 は須恵器の杯身である。1 のみ口縁部が直立し、口縁端部内面に稜をもつ。5 世紀後半から 5 世紀末のものともみられる。2～4 は 6 世紀代中頃から後半のものともみられる。5 は須恵器の高杯である。下部に 3 方向の円形の透かし孔をもつ。TK73 段階のものともみられる。6 は須恵器の甕である。7・8 は甕の体部片ともみられる。7 は外面に細かい格子目タタキが、内面にはハケメがみられる。8 は平行する多数の線に直角して、1 本の直線がみられるタタキが外面にみられる。図 130-167 に似る。

9 は土師器の甕である。体部から底部外面には縦方向のハケメがみられ、内面には粘土接合痕、指頭圧痕が残る。6 世紀代のものか。

#### 第 4 項 古墳時代前期～中期の遺構と遺物

この時期の遺構は、西側の 1・4 区で溝、中央の 5 区ではピット数基、東側の 3 区で土坑群をそれぞれ検出している。遺物は土師器を主体に、少量だが初期須恵器、韓式系軟質土器などが出土している。

##### 1. 溝

1-59・60 溝 (図 134～140: カラー図版 3-1・2: 図版 32-8～36-1) 1・4 区西寄りの地点で南北に延びる 2 条の溝である。西側が 1-59 溝、東側が 1-60 溝であるが、1 区の南側で両溝が合流し

ていることから、それ以南を 1-59・60 溝とする。北側では、蛇行する 1-62 溝と重複しており、掘削にあたって 1-62 溝の埋め戻しを行っていることが判明している。1-59 溝は、長さ 65m、幅は 1.9～6.0m で、北側が幅広で、南側の合流部付近では狭くなっている。深さは 0.28～0.39m を測る。1-60 溝は、長さ 68m、幅は 1-59 溝と異なりほぼ均一で 4.0～4.5m、深さは 0.29～0.47m を測る。1-59・60 溝では長さ 17.5m、幅は 3～6m で南側に向かってやや幅を狭めている。深さは 0.35～0.41m である。合流部も合わせた総長は 85.5m となる。わずかに北から南に向かって下っており、溝底部の北端と南端での比高差は 0.14m となっている。

溝内の堆積状況については、A ライン断面図（図 135 上：図版 32-8～33-1）をみると、1-62 溝の埋土である 10 層上に、1-59 溝と 1-60 溝を区切る堤盛土（7・8 層）がされ、1-59 溝は、1-62 溝埋土の 9・10 層を切る形で掘削されているのがわかる。この堤盛土は、後述する杭列周辺でも検出されている。そして一定期間開口後、4 層によって 1-59 溝と 1-60 溝が同時に埋め戻され、さらに 1-59 溝は 1・2 層に、1-60 溝は 3 層によってそれぞれ完全に埋め戻されたと考えられる。同時に埋め戻された状況は、B ライン断面図（図 135 中：図版 33-2・3）の 1・6 層、C ライン断面図（図 135 左下：図版 33-4～6）の 1・7 層でも確認された。したがって 1-59 溝と 1-60 溝は、掘削が同時に行われたかは不明であるが、同時期に並存していたとみられる。

また B・C ライン断面、合流部の D ライン断面（図 135 右下：図版 33-7）では、止水性の堆積層やラミナが観察されている（B：2・4・7 層、C：3・5 層、D：2・4 層）。層が薄いことや、溝の最下層ではなく、中ほどから検出されている点からは、浚渫作業が想定される。砂礫などの流水堆積物は認められないが、木製品や獣骨の遺存状況からは滞水状況にあった可能性が高い。この時期の集落と考えられる遺構は、検出されていないが、溝内からは扉板などの建築部材出土しており、おそらく調査地外の北側もしくは南側周辺に存在すると予想される。

#### ・1-59 溝と 1-60 溝周辺で検出された杭について

1-59 溝と 1-60 溝の溝肩、溝内で多数の杭が検出された。やや大型の杭については大杭とし、大杭 A～F を、直線状に並ぶものについては杭列とし、杭列 1・2・7～14 を設定した。なお、検出した杭のすべてではないが、樹種同定を行っており、表 1 と図 137 に示す。

**大杭 A～F（図 136 上：図版 33-8・34-1）** 4 区の 1-59 溝と 1-60 溝間で大杭 A～F の合計 6 本を検出した。いずれも上部が腐食しているため、本来の長さは不明であるが、長さ 50～100cm、径 12～20cm の丸木材で、すべてスギである。大杭 A と大杭 B、大杭 C と大杭 D、大杭 E と大杭 F がそれぞれ東側と西側に対になって打ち込まれおり、最も北側で検出した大杭 A・B から、南側に 5.5m の場所に大杭 C・D、そこから南側に 1m の場所に大杭 E・F が位置している。大杭 E はほぼ直立した状態であったが、それ以外の大杭についてはハの字状に内傾する。それぞれの大杭の下端部での距離は、大杭 A-B 間で 1.3m、大杭 C-D 間で 1.6m、大杭 E-F 間で 1.4m を測る。

これら大杭は、2 本 1 組で設置されているのは間違いなく、杭の大きさからも、周辺でみられる杭とは異なる性格をもつと推測される。後述する杭列と同じく、1-62 溝との交点に打設されていることから、1-59 溝、1-60 溝間の築堤に関係する可能性が高いが、他に大杭に関連するような構造物がなく、詳細は不明である。

**杭列 1（図 136 中：図版 34-2・3）** 1-60 溝内で検出され、1-59 溝、1-60 溝に関連する杭列の中で唯一、溝に直交する杭列である。溝内において北側と南側の 2 列に並び、それぞれ 8 本ずつ杭が打ち

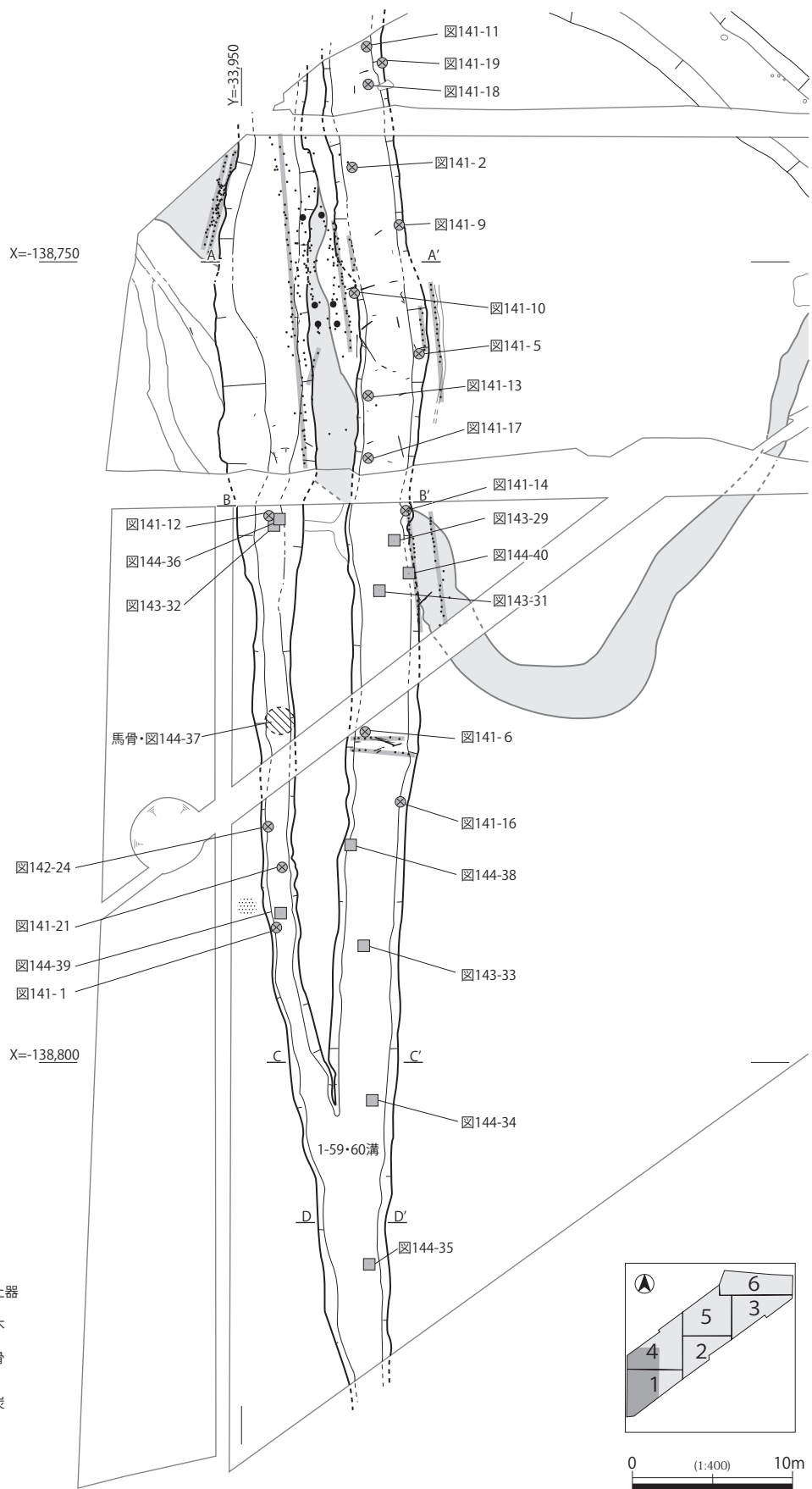
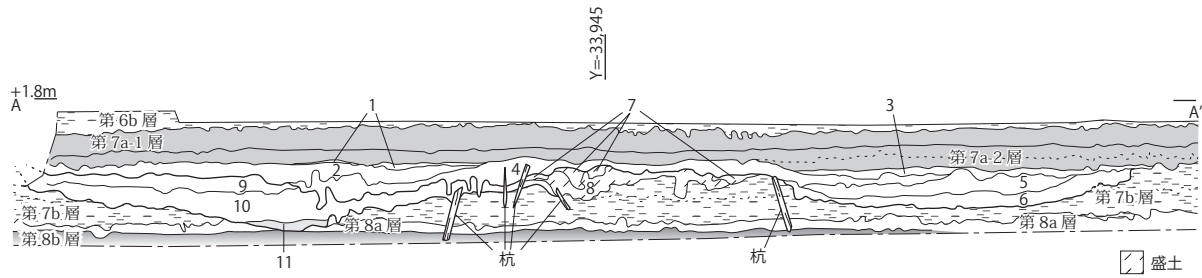
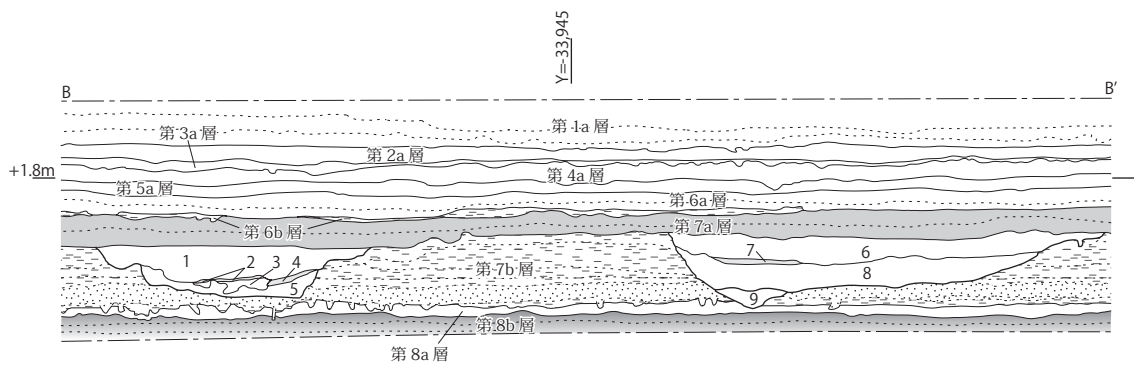


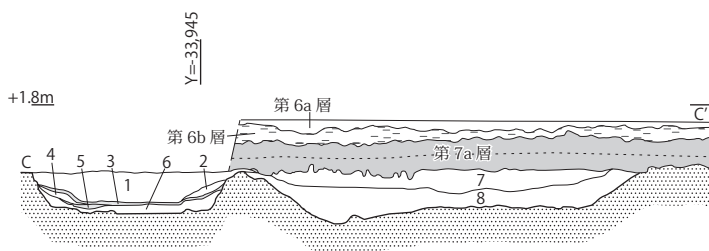
图 134 1-59・60 溝 平面图



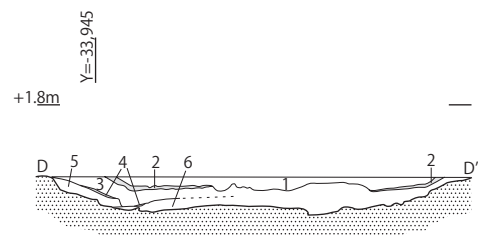
1. 5BG 5/1 青灰色 粘土 (ブロック状のシルト～粗砂を含む。1-59 溝埋土)
2. 7.5GY 5/1 緑灰色 細砂～粗砂 (ブロック状の粘土・シルトを多く含む。1-59 溝埋土)
3. 10G 6/1 緑灰色 粘土 (わずかに細砂混じる。粒状の灰白色粘土を含む。1-60 溝埋土)
4. 10GY 6/1 緑灰色 粗砂混じり粘土 (ブロック状の灰白色粘土を含む。1-59・60 溝を同時に埋め戻した埋土)
5. 10GY 5/1 緑灰色 粘土～シルト (粒状の灰白色粘土を含む。1-60 溝埋土)
6. 5GY 5/1 オリーブ灰色 シルト～粘土 (粒状の灰白色粘土を含む。1-60 溝埋土)
7. 5Y 8/4 淡黄色 粗砂 (1-59・60 溝の堤盛土)
8. 10GY 5/1 緑灰色 細砂～粗砂 (ブロック状の粘土を多く含む。1-59・60 溝の堤盛土)
9. 5BG 6/1 青灰色 粘土～シルト (ブロック状の灰白色粘土を多く含む。粘土塊は非常に細かい。1-62 溝埋土)
10. 7.5GY 5/1 緑灰色 シルト～粘土 (粒状の灰白色粘土を含む。下方には植物遺体を多く含む。1-62 溝埋土)
11. 5Y 8/2 灰白色～5/1 灰色 細砂～粗砂 (ラミナあり。1-62 溝機能時の堆積層か。1-62 溝埋土)



1. 5G 5/1 緑灰色 粗砂混じり粘土 (ブロック状の粘土を多く含む。1-59 溝埋土)
2. 5G 6/1 緑灰色 粘土 (レンズ状のラミナあり。止水性堆積。1-59 溝埋土)
3. 7.5GY 6/1 緑灰色 粗砂混じり粘土 (直下層のブロック土を多く含む。踏み込みか。1-59 溝埋土)
4. 7.5GY 5/1 緑灰色 シルト～粘土 (レンズ状のラミナあり。植物遺体多く含む。止水性堆積。1-59 溝埋土)
5. 5GY 4/1 暗オリーブ灰色 粗砂混じり粘土 (ブロック状の粘土を多く含む。埋め戻し土か。1-59 溝埋土)
6. 5G 5/1 緑灰色 粗砂混じり粘土 (ブロック土を多く含む。1-60 溝埋土)
7. 5G 5/1～6/1 緑灰色 粘土 (レンズ状のラミナあり。止水性堆積。1-60 溝埋土)
8. 10G 5/1 緑灰色 粗砂混じり粘土 (ブロック状の粘土を多く含む。1-60 溝埋土)
9. 10G 4/1 暗緑灰色 粗砂混じり粘土 (1-62 溝埋土)



1. 10Y 5/1 灰色 粗砂混じり粘土 (第7b層～第8a層のブロック土を多く含む。粒状の灰白色粘土を含む。7と近似。1-59 溝埋土)
2. 5Y 6/1 灰色 粘土 (下方ほど粒状の灰白色粘土を多く含む。水平方向のラミナあり。溝肩の崩落土。1-59 溝埋土)
3. 10Y 5/1～6/1 灰色 粘土 (上方ほど土壌化し、暗色化。有機物を水平方向の層状に含む。溝機能時の堆積層。1-59 溝埋土)
4. 7.5Y 5/1 灰色 粘土 (粒状の灰白色粘土を含む。溝肩の崩落土か。1-59 溝埋土)
5. 10Y 5/1 灰色 粘土 (水平方向のラミナあり。溝機能時の堆積層。1-59 溝埋土)
6. 10Y 5/2 オリーブ灰色 粗砂混じり粘土 (粒状の灰白色粘土を含む。埋め戻し土か。1-59 溝埋土)
7. 1に近似。(1-60 溝埋土)
8. 5GY 5/1 オリーブ灰色 粗砂混じり粘土 (粒状の灰白色粘土をわずかに含む。埋め戻し土。1-60 溝埋土)



1. 10Y 5/1 灰色 粗砂混じり粘土
2. 7.5GY 5/1 緑灰色 シルト～粘土 (止水性堆積か)
3. 7.5GY 4/1 暗緑灰色 粗砂混じり粘土 (粒状の白色粘土を含む)
4. 10GY 5/1 緑灰色～4/1 暗緑灰色 粘土 (上方程暗色化。止水性堆積)
5. 10GY 5/1 緑灰色 粘土 (粒状の白色粘土を含む。炭化物を少量含む)
6. 3に近似するが砂質が強く白色粘土目立たない



図 135 1-59・60 溝 断面図

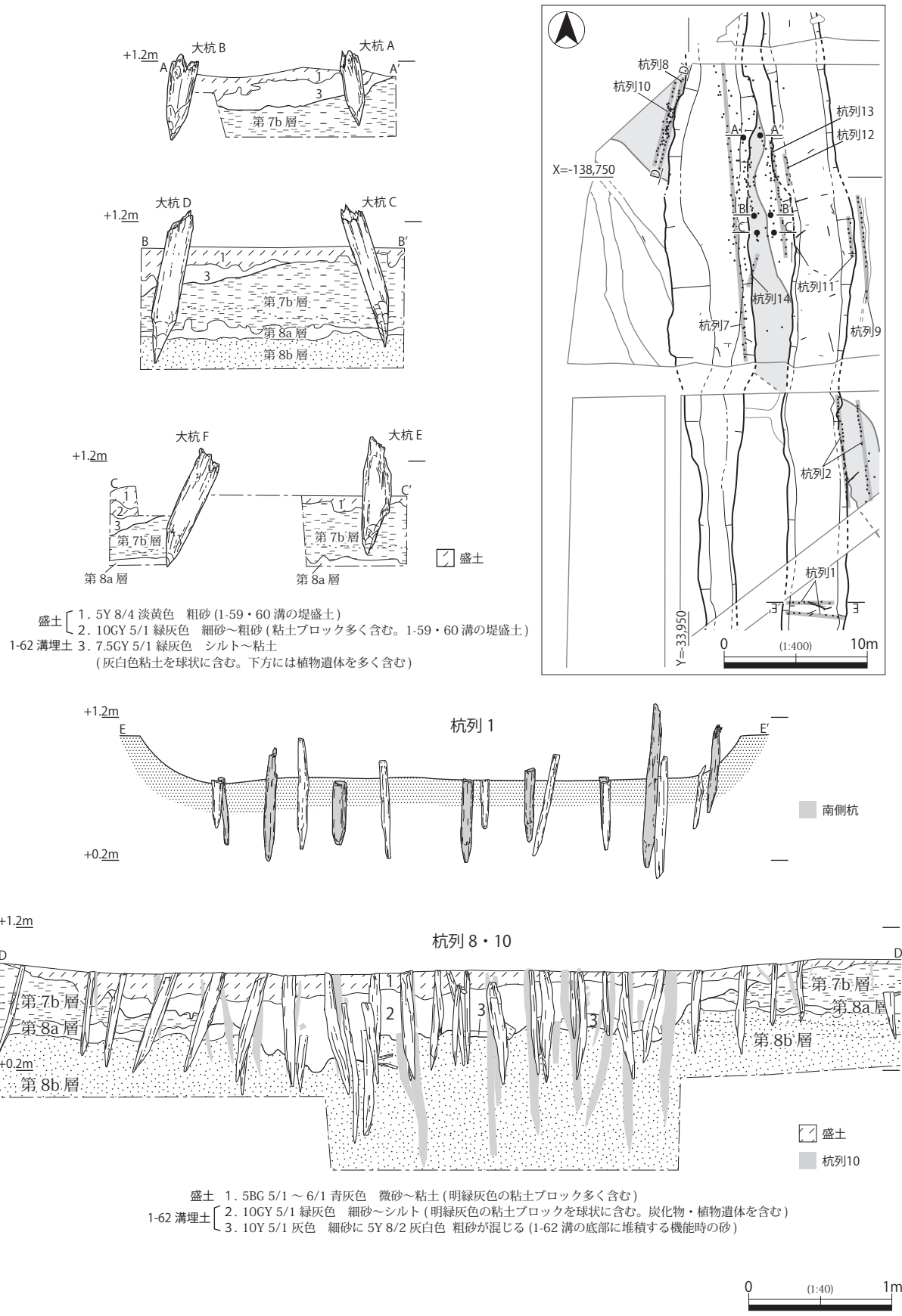


図 136 1-59・60 溝 杭列平面図および断面図

込まれている。上部を欠くため本来の長さは不明であるが、長さは30～110cm、太さは4～10cmを測り、丸木材や割り材など様々であった。北側杭列と南側杭列はほぼ並行しているものの、両杭列の幅が西端では0.6m、東端では1mと、東に向かってやや間隔を広げている。杭はほぼ直立しており、杭同士の間隔については、北側では25～70cm、南側では30～90cmと一定していない。

溝に直交することから、堰や橋といった性格が考えられたが、杭列の北側と南側で堆積状況の変化がみられず、また橋とした場合も、西側延長線上にあたる1-59溝内に同様の杭列がみられないことから、この杭列の性格は明確ではない。

**杭列2・7～14 (図版34-4～35-2)** 1-59溝、1-60溝にほぼ並行し南北方向に延びる杭列で、溝肩周辺で検出された。杭の総数は300本近くに上り、割り材・丸木材など様々で、転材とみられる加工痕をもつ杭もみられた。長さは20cmから100cmを超えるものまであり、太さは4～10cmを測る。杭同士の間隔は一定ではなく、基本的にほぼ垂直に打ち込まれているが、杭列7のX=-138,750ラインより南側では、1-59溝内にかなり傾いた状態で検出された(図版34-8)。本来、垂直であった杭が土圧により傾いた可能性も考えられたが、途中で折れているものや屈曲しているものが少ないことから本来の状況を保っていると考えられる。

それぞれの杭列の総長は、杭列2の東側が6.5m、西側が7.5m、杭列7が20m、杭列8が7m、杭列9が7m、杭列10が6m、杭列11が3m、杭列12が3m、杭列13が8m、杭列14が3mとなっている。杭列8・10については、調査対象外である北側にさらに延びると考えられる。また杭列7と杭列13に挟まれた場所では、杭が特に集中しており、杭が直線的に並ぶ状況が確認できなかったため杭列名を付与していないが、杭列が別に存在する、あるいはやや蛇行するが杭列14に続く可能性がある。杭列2の東側と西側、杭列9と杭列11は比較的整然と並び、2列1組で構成されているのがわかる。ただし先述した杭列7と杭列13に挟まれた場所以外にも、杭列8と杭列10でも杭が集中する地点が認められ、2列以上、あるいは列にするとといった意識がされることなく、杭が打ち込まれた可能性も考えられる。

これらの杭列は基本的に溝肩に並行していることから、1-59溝と1-60溝の堤防もしくは護岸のために設置されたとみられ、杭列が2列に並ぶ場所では、杭列周辺に堤盛土が検出されていることから、堤を挟む形、もしくは堤体の芯として打ち込まれたと考えられる。特に1-62溝の埋め戻し部分は、他と比べ溝肩が崩落しやすい状況が推測され、そのため杭列2・7・8・10・14が設置されたと考えられる。杭列8・10の断割り状況を見ると(図136下)、1-62溝が最も深くなる溝中央部付近において、特に杭が深く、集中的に打ち込まれている。この点からも、地盤の弱いこの地点の溝肩を強固にする意図が窺える。なお杭列7は1-59溝内に並んでいるが、崩落が進み、溝肩が東側へ広がっていった結果、上記の状況になったと考えられ、先述したX=-138,750ライン以南の杭が傾く点も、溝肩の崩落に起因していると考えられる。したがって、杭列7のラインは1-59溝掘削当初の溝肩を示している可能性が高い。杭列7と杭列13の間に多数の杭が集中する状況は、溝肩や堤盛土が崩落するたびに、新たな護岸や築堤作業が行われたことを物語るものといえよう。先述した大杭についても、最も脆弱と考えられる位置に打設されていることから、強固な築堤を行うための構造物であったと理解される。

以上のような想定から、検出された杭列は、1-59、1-60溝の掘削当初に設置された杭列(先行杭列)と、その後の溝肩の崩落によって新たに設置された杭列(後行杭列)に大別できる。前者は1-62溝埋土上に位置する杭列2・7・8・10・14、後者は杭列9・11～13である。



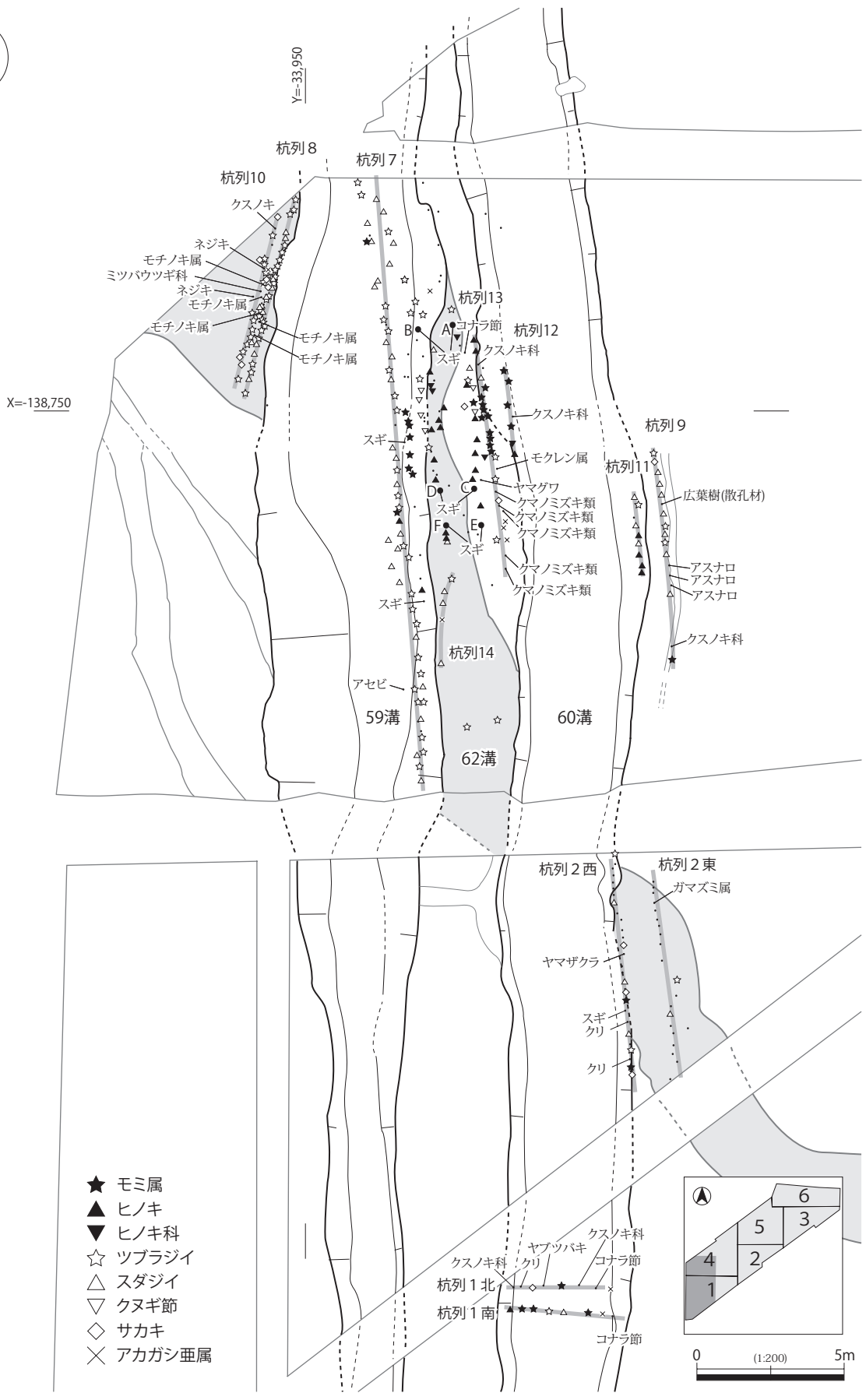


図 137 1-59・60溝 杭樹種状況図

先述したように杭列に使用された杭材のうち、232点について樹種同定を行っている（図137：表1）。同定された樹種は、全体で針葉樹モミ属・スギ・ヒノキ・アスナロ・ヒノキ科の5種類、広葉樹がクヌギ節・コナラ節・アカガシ亜属・ツブラジイ・スダジイ・クリ・ヤマグワ・サカキ・クスノキ・クスノキ科・モクレン属・モチノキ属・ヤブツバキ・ヤマザクラ・ミツバウツギ科・クマノミズキ類・ネジキ・アセビ・イボタノキ属・ガマズミ属の20種類である。

先ほど大別した「先行杭列」と「後行杭列」に分けて杭材の樹種傾向をみると、先行杭列では、針葉樹3種類、広葉樹11種類の樹種が利用されており、146点中121点が広葉樹材である。広葉樹材では、常緑広葉樹のシイノキ属（ツブラジイ・スダジイ）が140点中105点と多用されている傾向がある。杭材の形状をみると、ほとんどが割材からなり、丸木は140点中21点である。丸木材の樹種は、モミ属、アカガシ亜属、ツブラジイ、スダジイ、サカキ、モチノキ属、アセビ、ネジキ、ミツバウツギ科、イボタノキ属である。このうち、ネジキ、アセビ、ミツバウツギ科、イボタノキ属は丸木材の利用だけであるが、それ以外の樹種は割材としても利用されている。また、杭列別に樹種をみると、杭列7・8・10・14でシイノキ属が多用されている傾向がある。

一方、後行杭列では、針葉樹5種類、広葉樹10種類の樹種が利用されている。点数は、針葉樹材34点と広葉樹材42点とやや広葉樹が多いものの、80%以上が広葉樹で、針葉樹は20%に満たない先行杭列に比べ、針葉樹の割合が45%と高くなっていることが注意される。杭材の形状をみると、割材50点、丸木26点であった。杭列別に樹種をみると、杭列12・13ではモミ属・ヒノキといった針葉樹、杭列9ではシイノキ属が多用されている。

以上のことから、先行杭列と後行杭列では、樹種構成は概ね類似するものの、利用数における針葉樹・広葉樹の割合や丸木の利用数に差異が生じていることが確認される。すなわち、先行杭列では広葉樹材が多用され、かつ割材の利用が多いが、後行杭列では針葉樹材が比較的多用されており、また、広葉樹材を主とする丸木の利用が多い。こうした差異は、用材選択のあり方が異なっていたことを示唆するものと思われる。

次に杭材の樹種構成と、当時の植生との対応関係についてみる。杭材に利用されていた樹種のうち、針葉樹のモミ属・スギ・ヒノキ・アスナロ・ヒノキ科はいずれも温帯性針葉樹である。讃良郡条里遺跡における温帯性針葉樹の増加は、当調査地および03-1調査地の植物化石の検討結果から、縄文時代中期、縄文時代後期～晩期、弥生時代後期～古墳時代前期に起こっていることが確認されている（大文セ2008）。これらの時期は、扇状地面において開析流路が形成され、土砂流出量が増大する時期に該当する。温帯針葉樹は斜面崩壊地や地滑りなどにより鉱質土壌が露出する攪乱地が生育適地である（中静2004）ことから、開析流路からの土砂流出により形成された新たな土地や、土砂供給により変化した旧地形領域などを中心に温帯性針葉樹が分布を拡げたことが推定される。したがって、モミ属・スギ・ヒノキ・アスナロ・ヒノキ科は古墳時代に遺跡周辺で容易に入手できたことが示唆される。

一方、先行杭列に多用されていたシイノキ属は、アカガシ亜属・クスノキ・サカキなどと同様に暖温帯における気候的極相（いわゆる照葉樹林）の構成要素である。讃良郡条里遺跡が位置する扇状地域では、縄文時代中期の開析流路形成期以降に常緑広葉樹林が分布を拡げたことが03-1調査地の調査で確認されている。また、当調査地の花粉分析結果などからは、縄文時代中期以降も基本的には常緑広葉樹林が継続して分布していたが、弥生時代前期以降になると草地領域の拡大と林分域の縮小が起こり、林分域ではシイノキ属が目立つようになっていたことが想定される（第7章第1節）。ここでのシイノキ



属の増加は、シイノキ属が萌芽能力が高い樹種であること（山中 1979）などから、人為的植生攪乱に起因する萌芽林の増加に起因することが推定されている。したがって、シイノキ属も古墳時代に遺跡周辺で容易に入手できたことが示唆される。このほか、杭材に利用されていた広葉樹のクヌギ節・コナラ節・ヤマグワ・ネジキ・アセビといった樹種も二次林に普通の樹種であり、遺跡周辺で入手可能性であったと考えられる。

また、古植生の検討結果では、古墳時代以降になると、シイノキ属などの常緑広葉樹やスギ属を除く温帯性針葉樹が減少傾向を示すようになることが確認されている。これら減少する要素は、今回の杭材の樹種構成とほぼ一致する。本遺跡南側に隣接する部屋北遺跡では、古墳時代の住居構築材において温帯性針葉樹のスギ・ヒノキが多用されていることが確認されている。これらの本遺跡および周辺遺跡での木材利用状況は、古墳時代の森林植生変化の一端が、弥生時代から継続する人間による森林バイオマス利用に起因するものであることを示している。

一方、河内平野およびその周辺に位置する考古遺跡における、古墳時代の杭材の樹種同定事例は、久宝寺遺跡（その 1～3）の古墳時代中期の杭材でマツ属 1 点・コウヤマキ 1 点・スギ 8 点・アカガシ垂属 4 点・ヤブツバキ 1 点・モッコク 1 点（山口 1987）、新上小阪遺跡の古墳前期の杭材でスギ 2 点・コナラ垂属 1 点（山口 2003）、西ノ辻遺跡第 32 次調査区の古墳時代中期末～後期初頭の杭材でシキミ 1 点・サカキ 1 点、水利施設に伴う杭材でモミ属 1 点・ツガ属 1 点・コナラ節 2 点・アカガシ垂属 1 点・ケヤキ 2 点・クスノキ科 1 点（パリノ・サーヴェイ 1996a）、鬼虎川遺跡の古墳時代中期～後期の杭材でシキミ 1 点・モミ属 5 点（パリノ・サーヴェイ 1996b）、部屋北遺跡の古墳時代中期～後期の杭材でアカガシ垂属 1 点（岡田 2006）、長原遺跡東部地区の古墳時代中期～後期の杭材でモミ属 1 点（渡邊 2003）、長原遺跡の古墳時代中期～後期の杭材でコナラ節 2 点・サクラ属？ 1 点・クヌギ節 1 点（川崎地質 1998）、長原遺跡（NG02-8,03-6）の古墳時代の杭材でツブラジイ 1 点・スタジイ 5 点・ネジキ 1 点（辻本・高橋 2005）、溝咋遺跡（その 1）の古墳中期～後期の杭材でヒノキ 2 点（大文セ 2000）が存在する。これら各遺跡の杭材の樹種構成をみると、資料数が少ないものの、特定の樹種を選択・利用している傾向は認められない。むしろ、各遺跡周辺の古植生調査成果を踏まえると、周辺に存在した入手しやすい木材を利用していることが示唆される。時期は異なるが、瓜生堂遺跡の調査では、弥生時代以降、庄内式期までの雑木類が加工木と非加工木で利用樹種がほぼ一致することから、杭材などは集落周辺から獲得していたことが指摘されている（中原・秋山 2004）。今回の調査では未加工の雑木類について検討を行っていないが、古植生情報との比較検討から、古墳時代も基本的には同様の利用が行われていた可能性が高いと考える。杭列での使用樹種、また設置の先後関係における用材選択は、遺跡周辺における当時の植生環境と、その変化を如実に示すものといえよう。

#### ・ 1-59 溝出土の獣骨について

1-59 溝の溝底部に堆積した泥と考えられる粘土層の直上で、獣骨が出土した（図 138：カラー図版 3-3：図版 35-3）。この粘土層には顕著なラミナはみられず、滞水時に堆積する泥土のような性格が考えられる。粘土層は人為的な埋め戻し土によって埋没しており、上層からの攪乱も及んでいないことから、獣骨は、ほとんど移動することなく、原位置に近い状況であると推察される。

出土した獣骨は、その特徴からウマと考えられるが、頭骨のみで、中でも歯が良好に遺存していた。そのうち切歯、臼歯などに同定されたものは 33 点にのぼる（図 139：図版 164）。不明なものも含めると、約 40～50 点ほどの歯が集積していたと考えられる。またそれらの歯は上顎・下顎の左右にわ

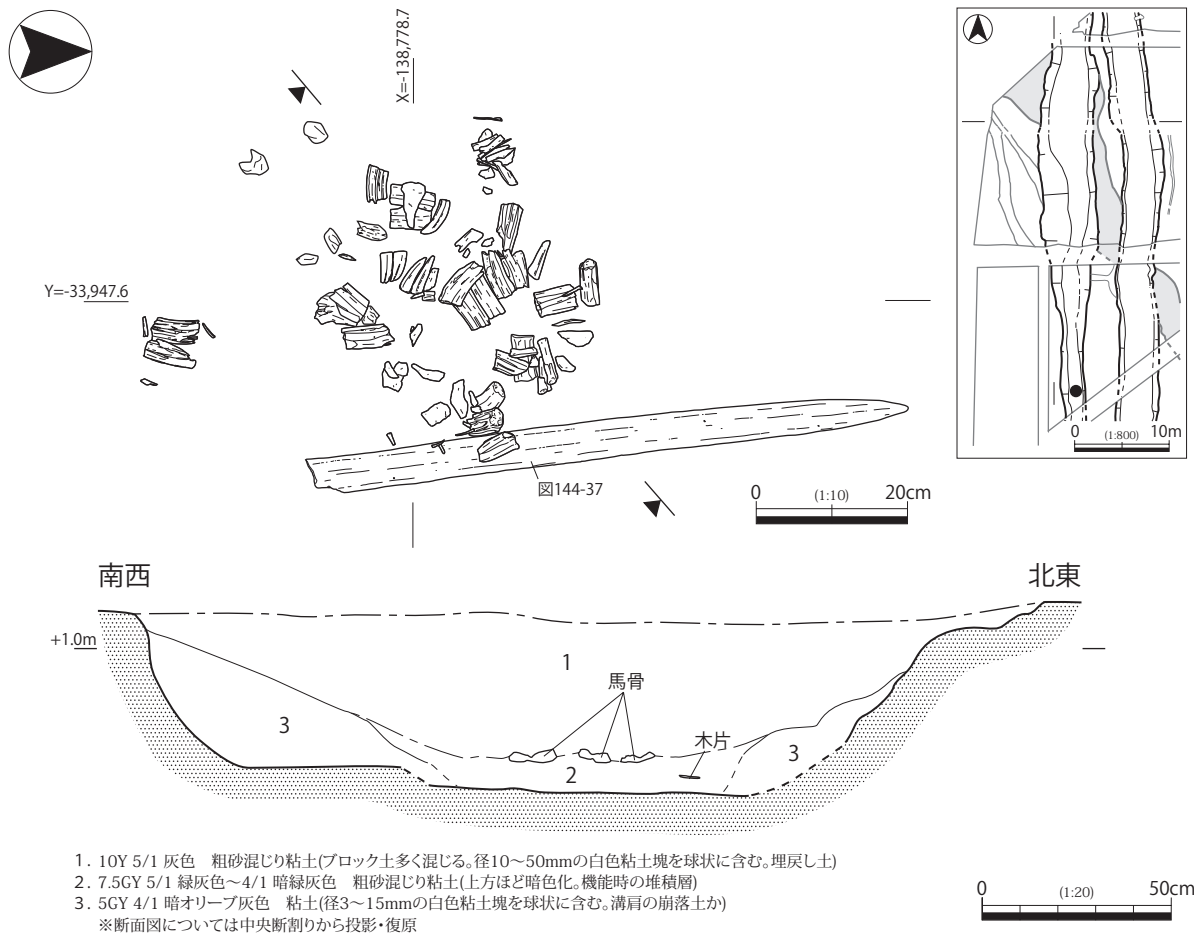


図 138 1-59 溝 獣骨出土状況図および断面投影図

けられ、同一の歯列と認められるものもみつかった。いくつかの切歯 (I) については、それ同士が密着した状態であったが、臼歯については散在しており、同一歯列といっても、下顎左臼歯列の l と m のように、約 20~30cm ほど離れているものもみられ、臼歯列は並んでいない状況であった。また、上顎の左右の臼歯が密着していた b・e などみられた。

ウマの個体数に関しては、上顎左第 1 後臼歯 (M1) や、下顎左第 2 切歯 (I2) が重複している点から、2 頭分存在することは確実である。歯の肉眼観察によるウマの年齢は、4~5 歳位とみられる臼歯が多くを占め、他にも 5~6 歳位とみられる e (上顎右第 3 後臼歯部分)、6~7 歳位とみられる n・o、10 歳位とみられる b (上顎臼歯部位不明部分) があった。年齢の点から推測すると、4 頭分のウマが認められる。年齢については、歯の遺存状態に左右されるため、不確定な要素がある点は否めないが、歯の重複している部位がある点も併せて考えると、少なくとも 3 頭分のウマの骨があったと見てよいだろう。

仮にウマ 3 頭がそのまま集積されたと考えた場合、重複する歯の部位が少ない点や、4~5 歳のウマの歯と、それより高齢のものとの出土量の違いをどのように理解するかが問題となる。この点については、同一条件下にもかかわらず、4~5 歳のウマの歯が良好に遺存し、より高齢の歯のみが腐朽し消失したと考えるよりも、最初からウマの一部しかなかったと考えれば、先の問題点と矛盾しない。つまり別の場所で解体された骨の一部が、若いウマを主体にこの地点に持ち込まれたと理解したい。この理解に立てば、先述した同一臼歯列の出土位置が離れている点も、解体された骨が当初から散在した状

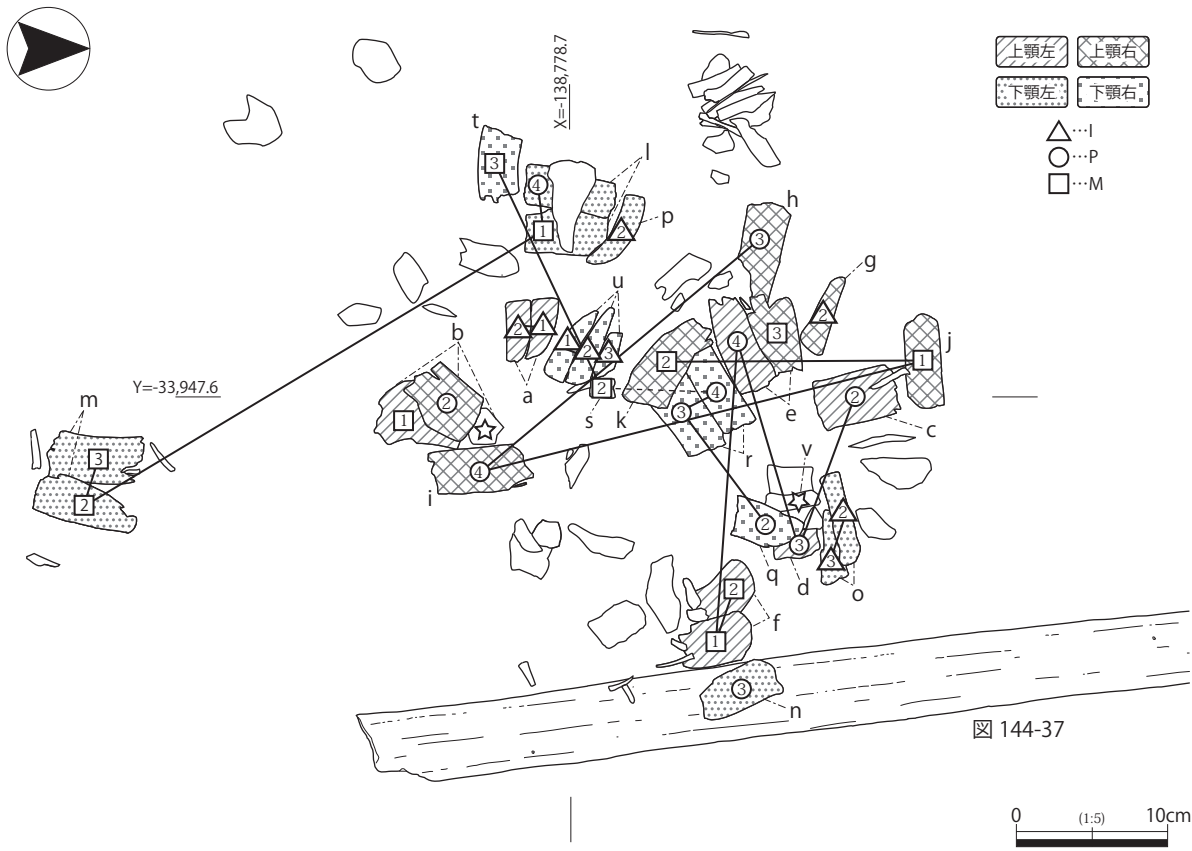
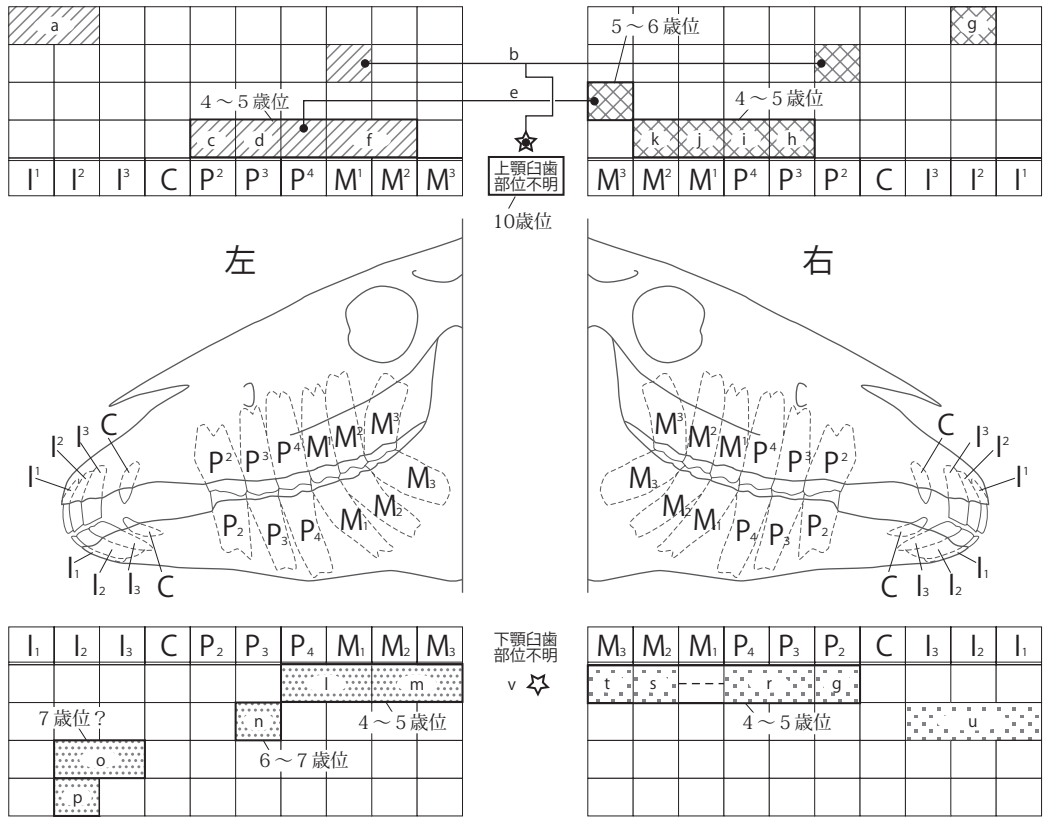


图 139 1-59 溝 獸骨部位狀況图

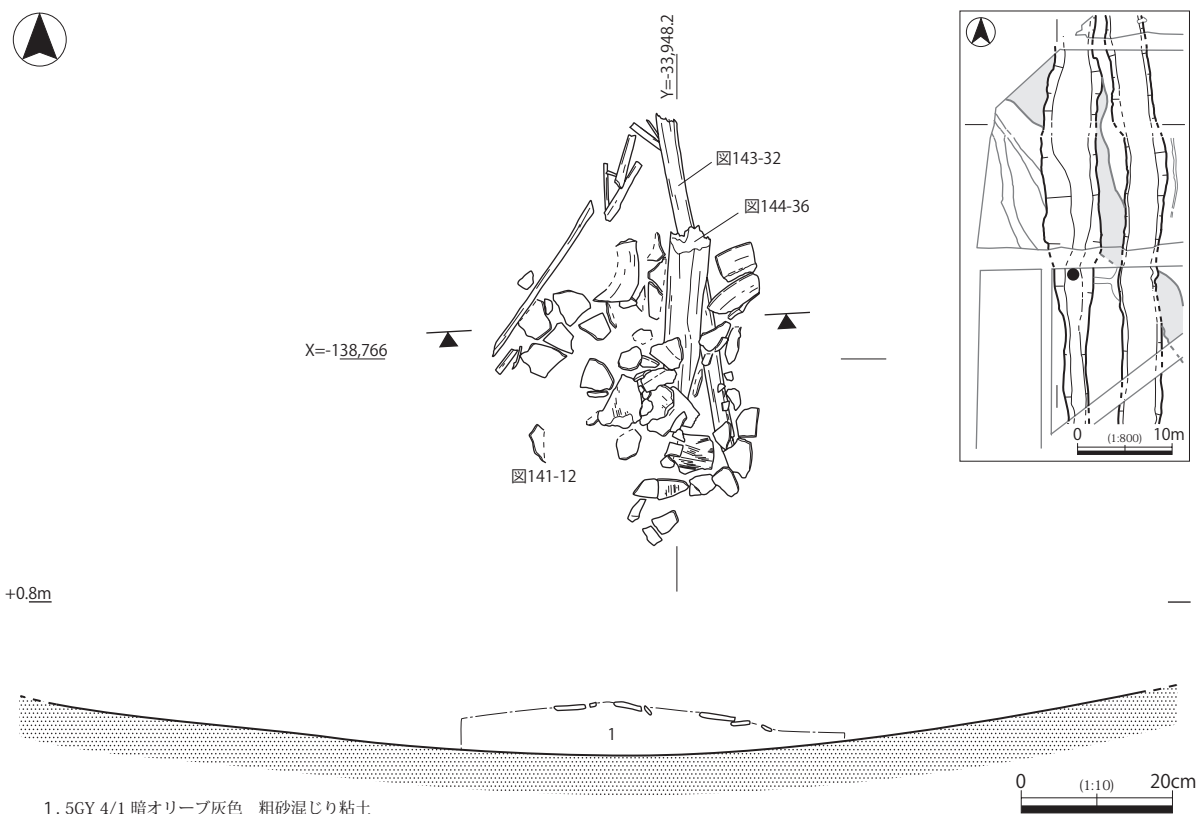


図 140 1-59 溝 遺物出土状況図

況にあったことに起因するものと理解できる。ただし、今回出土した資料の中で、解体時についたであろう切断痕などは見つかっていないため、同様な類例の増加をまち、再検討する必要があるだろう。

溝内へ獣骨を遺棄した目的は不明であるが、獣骨の下部からは剣もしくは刀形と考えられるような木製品（図 144-37）も出土していることから、単に遺棄したものとは考えにくい。1-59・60 溝では、他にも後述する鳥形土製品や木製品などの遺物も出土し、また獣骨から南に約 10m ほど下った溝の西側の肩上に炭が集中している地点も見つかっていることから（図版 35-4）、この獣骨の出土例も、溝を舞台とした祭祀的な行為の一端と考えることができよう。

#### ・出土遺物（カラー図版 7-2：図版 35-5～36-1）

1-59 溝、1-60 溝からは、多数の遺物が出土している。これらの遺物のほとんどは、埋土の中層～下層で出土している。また木片や木製品が多く、それらが溝内中央部において土師器片とともに集中している状況もみられた（図 140）。出土した遺物のうち、須恵器 2 点、土師器 22 点、弥生土器 3 点、石器 2 点、木製品 12 点、杭 11 点を図示した（図 141～145）。4 は 1 区の北側溝からの出土であるが、1-59 溝と 1-60 溝のいずれかに伴うものと考えられることから、ここに図示した。また 1-60 溝からは、滑石製有孔円盤が出土している（図 193-21）。

1 は須恵質の鳥形土製品である。頭部～頸部を欠くが、体部のプロポーションは写実的で、水鳥をモチーフとした可能性が高い。尾は粘土を水平に貼り付けることによって表現され、把手としても機能していたとみられる。体部後方で、上方に向かって大きく開口口をもち、胸部に注口がある。2 は須恵器の蓋である。天井部はケズリ後ナデによる調整がされ、その天井部と体部との境界の稜は短いが鋭く突出する。稜の上には棒状工具によるものと考えられる文様が並ぶ。TG232～ON231 段階のものと思われる。3 は土師器の二重口縁壺である。頸部に膨らみをもち、胴部は球状になるとみられる。体部

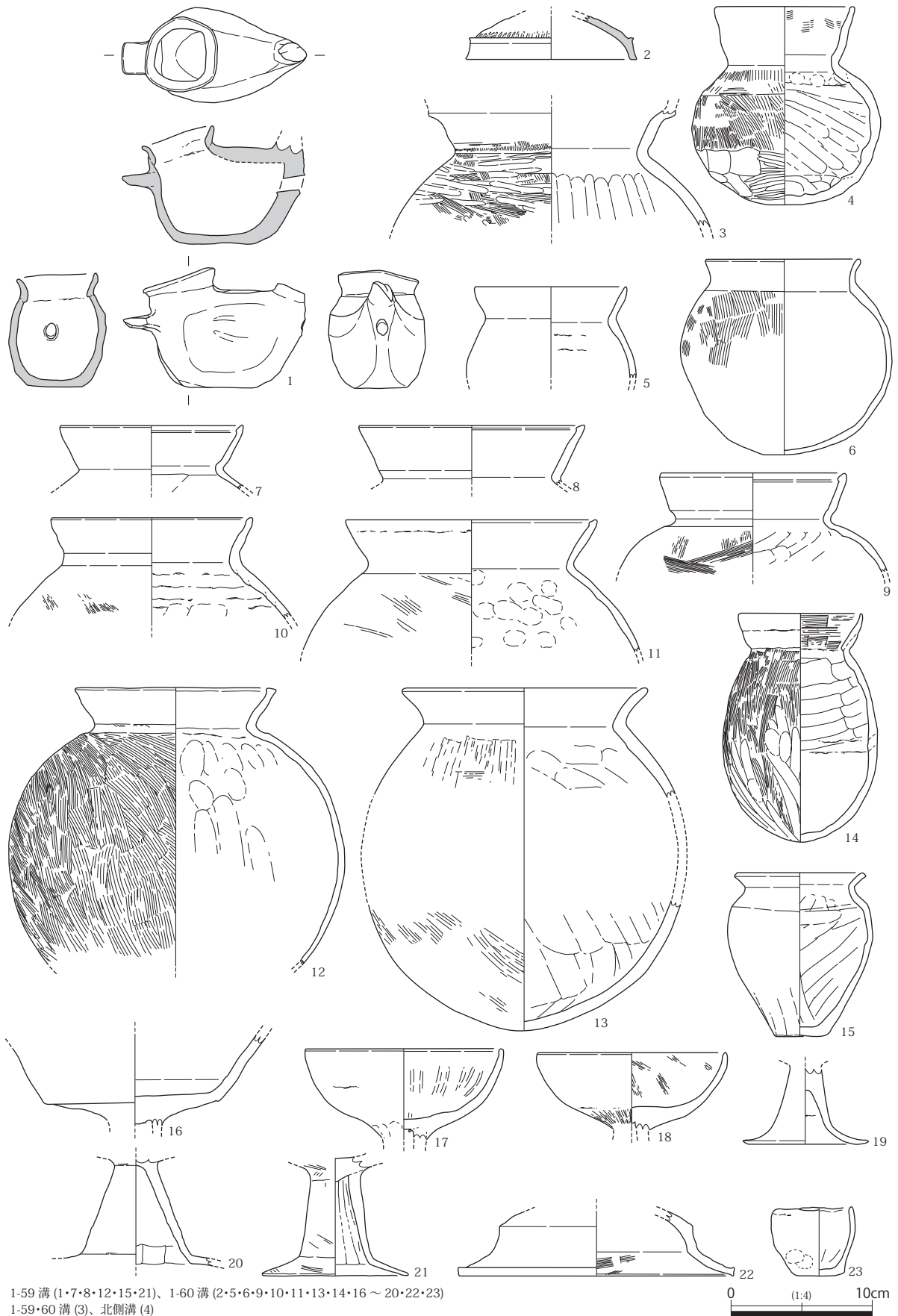


图 141 1-59·60 溝 出土遺物実測図 1



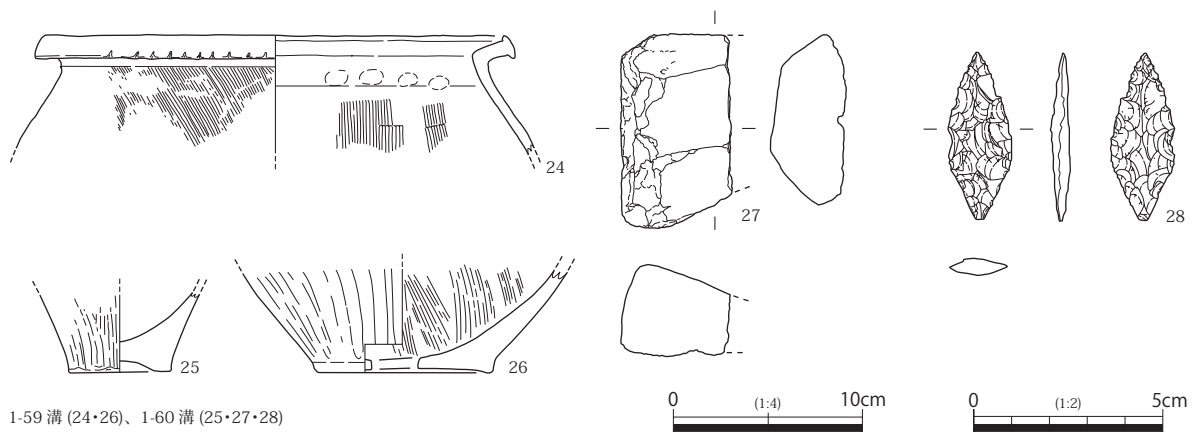


図 142 1-59・60 溝 出土遺物実測図 2

外面はハケの後、粗いミガキ、内面は強い縦方向のナデがされる。布留式後半のものとみられるが、同様の壺の類例がないため、時期は明確にできない。形態から弥生時代後期後半に属す可能性もある。4 は土師器の小型丸底壺である。外面の体部上半はハケメ、下半は幅広のケズリ後、横方向のミガキがされ、内面には、口縁部にハケメ、頸部には指頭圧痕、体部内面は強いナデがされている。また体部外面、底部内面にスス・コゲが付着する。

5～13 は甕である。6 は口縁部が短くわずかに外反し、体部は球形を呈す。体部外面にハケメがみられる。9 は口縁端部の肥厚が比較的明瞭で、体部の肩が張る。体部外面にハケメ、内面にケズリがみられる。10 は口縁部の肥厚がほとんどみられない。体部外面にハケメ、内面上部には接合痕を残し、下部にケズリがみられる。12 は口縁部に肥厚がみられるものの、内傾しておらずほぼ水平な面をつくる。体部外面は縦方向のハケメのみで、横方向のハケメはみられない。体部内面は指頭圧痕とナデにより仕上げられている。13 は口縁部がやや外反しており、端部の肥厚がみられない。体部外面にはハケメ、内面にはケズリがみられる。14 は製塩土器か。体部外面にハケメがみられ、下部は縦方向のハケ後、ナデがされ、部分的に指頭圧痕がみられる。口縁部内面にはハケメ、頸部以下にはケズリがみられる。全体的に薄いつくりで、外面全体にススが付着し、器壁の剥落する部分がある。15 は小型の甕で、口縁部が短く、肩部の屈曲が明瞭である。形状から、弥生時代後期初頭に属す可能性がある。16～22 は高杯である。16 は大型高杯の杯部で、下部に稜をもつ。18 は椀形高杯の杯部である。磨耗が著しいが、内外面にハケメがみられる。21 は高杯脚部で、柱部と裾部の境が明瞭に屈曲する。22 は高杯状の器台か。弥生時代後期末のものとみられ、混入品と考えられる。23 はミニチュア土器である。外面に指頭圧痕がみられる。24～26 は弥生土器で、弥生時代中期のものである。下層からの混入品であろう。27 は砥石と考えられるが、明瞭な研磨痕はみられない。全体的に被熱しており、一部ススが付着する。石材は不明である。28 は凸基Ⅱ式の石鏃で、裏面中央に稜を形成する。石材はサヌカイトである。

29～40 は木製品である。29 は、半分を欠くが方形の木槽で、断面は逆台形である。底部に長方形の低い脚があり、四隅に付くものと考えられる。木材を削り貫いて作られており、内外面に加工痕がみられる。左側小口には穿孔が2ヶ所みられ、丁度ここに亀裂が入っていることから、補修のための紐を通す孔とみられる。樹種はスギである。30 は遺存状態が悪いが、小口が方形で中央部が楕円形の木槽とみられ、断面は浅い皿形である。29 と同様、木材を削り貫いて作られている。樹種はコナラ亜属である。31 は大足の横木である。端部に段を持ち、中央部には長方形の穿孔がされる。樹種はスギである。32 は大足の横木とみられる。端部に段を持つ。樹種はヒノキである。33 は横鏃の鏃身である。中

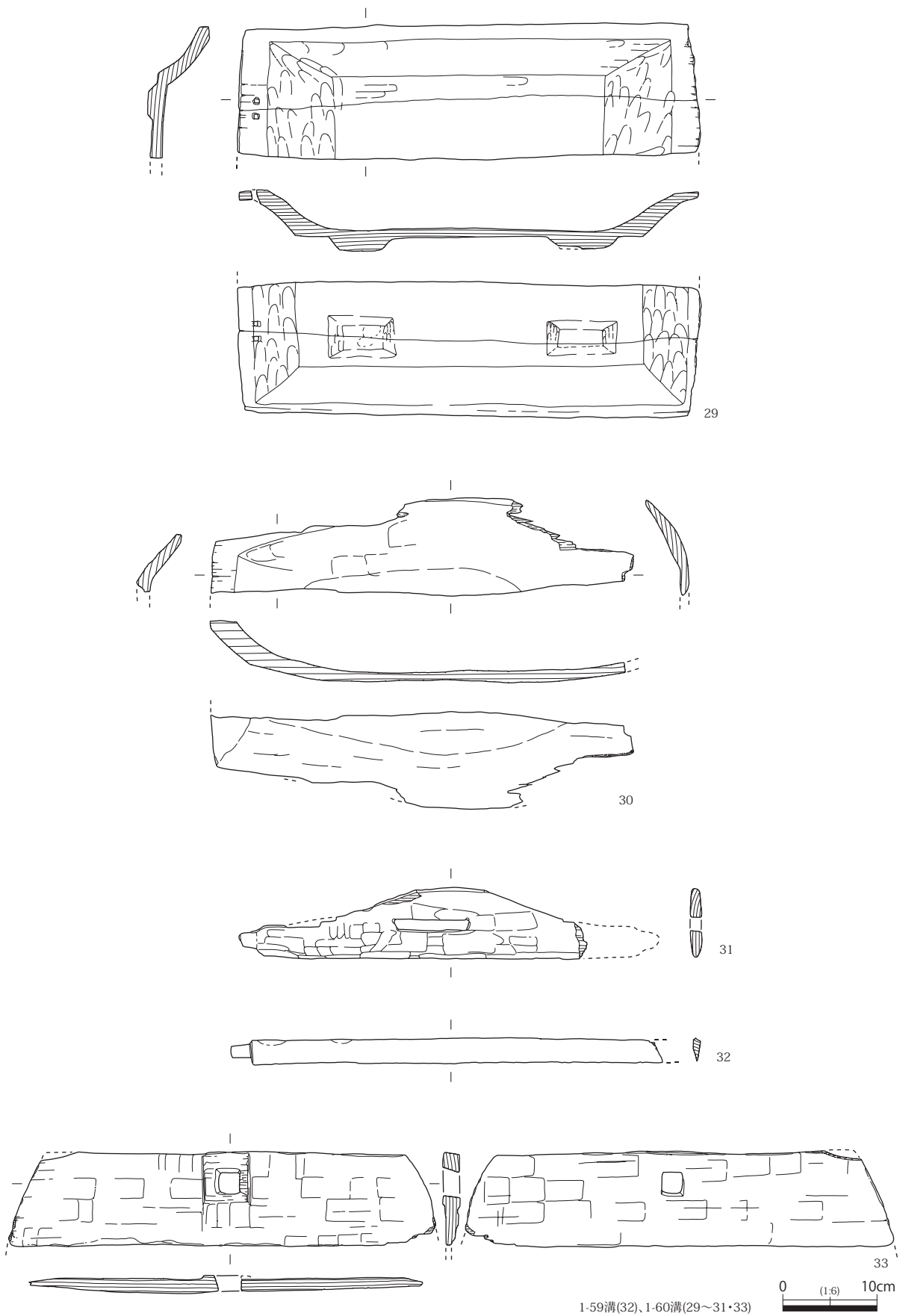
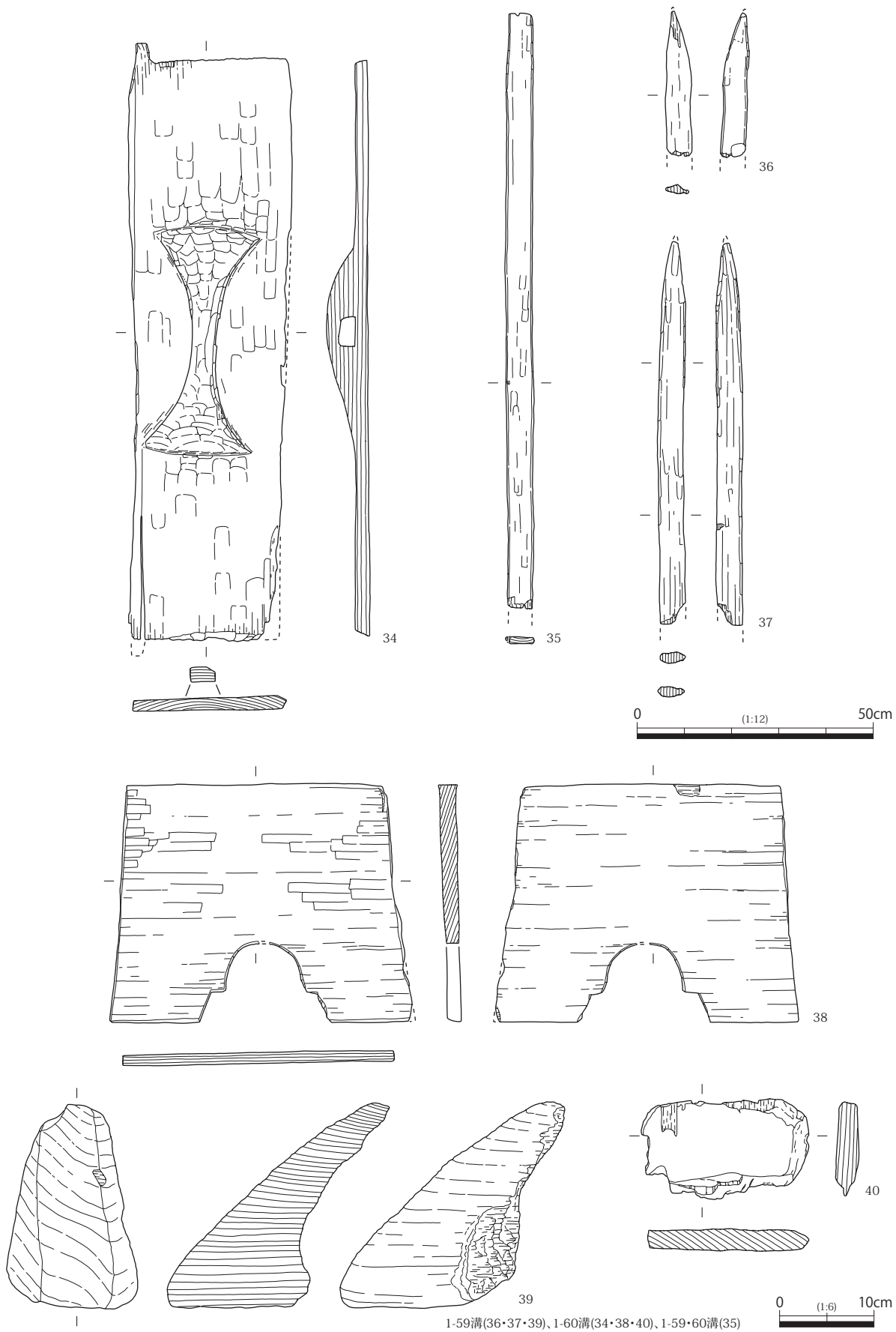
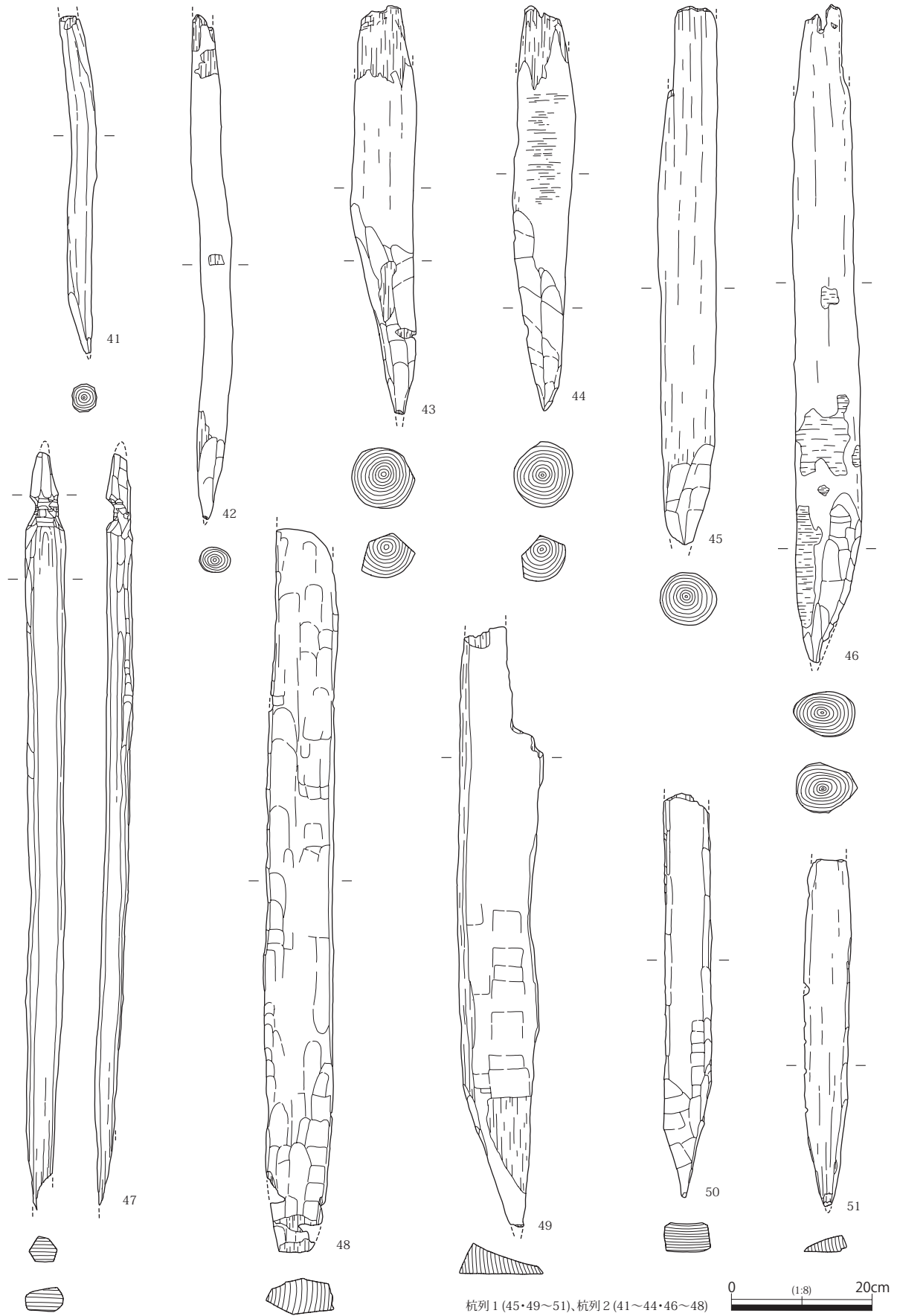


图 143 1-59·60 溝 出土遺物実測図 3



1-59溝(36·37·39)、1-60溝(34·38·40)、1-59·60溝(35)

图 144 1-59·60 溝 出土遺物実測図 4



杭列 1 (45·49~51)、杭列 2 (41~44·46~48)

图 145 1-59·60 溝 出土遺物実測図 5

央部やや上寄りに柄穴がみられる。樹種はアカガシ亜属である。34は扉板である。門受けが付き、一方にのみ軸が残る。樹種はスギである。35は断面長方形の板材で、扉部材の可能性が考えられる。樹種はスギである。36は板状木製品である。貫通している孔と、作業途中なのか貫通していない孔がみられた。樹種はスギである。37は剣形もしくは刀形の木製品で、先述した馬骨に伴って出土した。先端部は細く尖る。樹種はクリである。38は机脚部である。下部中央に抉りを持つ。樹種はカヤである。39は断面三角形の木製品である。側面が窪んでおり、加工途中のものか。樹種はスギである。40は板状木製品である。下部に段があり、全体的に炭化している。樹種はヒノキである。

41～51は検出した杭の一部を図示したものである。41～46は丸木材で、樹皮が残るものはいくつかみられる。太さをみると径3～4cmの41・42と、径8～9cmの43～46に大別される。いずれも下端部を加工し尖らせる。それぞれの樹種は41が不明であるが、42がサカキ、43がクリ、44がヤマザクラ、45がヤブツバキ、46がクリである。47～51は割り材、あるいは部材を転用したものとみられ、断面は三角形あるいは方形である。47は上部に抉りがあり、何らかの木製品から杭に転用されたものとみられる。それぞれの樹種は、47・51がサカキ、48がスギ、49がクリ、50はスタジイである。

遺構の時期については、1-59溝と1-60溝の出土遺物に時期差はみられず、いずれも布留式期Ⅳを主体とし、布留式期Ⅴまでにおさまる。さらに器種全体をみると、小型丸底壺が少量である点から、布留式期Ⅴには埋没したものとみてよいだろう。本稿で参考としている米田敏幸の編年では、布留式期Ⅳが須恵器出現前後、布留式期ⅤにTK216～TK208までの幅をもった年代観を与えているが（米田1990）、図141-2の杯蓋はTG232～ON231段階のものとみられる。これらの須恵器が、掘削開始時期を示すのか、出土している土師器との併行関係を示すのかは、重要な問題といえるが、出土している須恵器が少ないため、周辺遺跡での今後の資料増加を受け、検討を行うべきであろう。なおTG232～ON231段階における須恵質の鳥形土製品の類例はみられず、府内では古墳時代中期中段階の小阪合遺跡や、濁り池須恵器窯址の出土例まで下る。また土師質のものについては、溝咋遺跡や、船橋遺跡に古墳時代前期とされる資料があり（大文セ2002b）、韓国の鴨形土器を源流とするものであることが示唆される。ただし、以上の鳥形土製品は全て尾部に穿孔をもつもので、本遺跡のものとは異なることが注意される。

1-62溝（図146：図版36-2～6） 1区北側と4区南側で検出された蛇行する溝で、西側は1-59溝、1-60溝に切られる。総延長は約90m、幅は西側では約10mを測るものの、東側では急激に幅を狭めている。深さは下流の西側では0.5mを測るが、東側は上層の攪拌を受け0.1mと浅い。蛇行するものの、基本的には東から西へと緩やかに下る地形に沿って流下していたとみられる。埋土中に植物遺体が層状に含まれており、一定期間開口していた状況が窺えるが、最終的には前述の1-59溝、1-60溝の掘削の際、人為的に埋め戻されている。

遺物は多数出土しており、そのうち土師器31点、須恵器1点を図示した（図147・148）。14のみ溝内ではなく、1-62溝の北側のやや離れた地点で出土したものである。1・2は小型丸底壺である。1・2ともに口径は体部最大径よりやや小さい。3は小型甕か。磨滅が著しいが、体部外面の一部にハケメがみられる。4～15は甕である。5は薄手のつくりで、口縁端部は肥厚し、内傾する面をもつ。布留式期Ⅱのものとみられる。8は口縁部が外反気味で、体部を欠くが肩部の状況から長胴甕になるものと考えられる。9は口縁部がわずかながら内湾し、端部は内傾しやや幅広の面をもつ。10は口縁部

が直線的に立ち上がり、端部の肥厚はみられない。11は口縁部が外反し、端部が肥厚しない。体部内面はケズリが施され、薄くつくられる。12は口縁端部の肥厚が鈍い。体部外面のハケメが粗く、肩部内面のケズリがやや狭い。13は口縁部がやや内湾しており、端部が肥厚するが、内傾せずほぼ水平な面をもつ。体部内面はケズリが施される。14は口縁部が外反し、端部は細長い。体部は球形で、体部外面は斜め方向の粗いハケメ、底部内面に指頭圧痕がみられる。16～23は高杯である。16は椀形の高杯と考えられるが、口縁部が内湾せず、やや外方へ開く。弥生土器の可能性はある。19は杯部がやや深く、内外面にハケが施される。20は口縁端部がやや外反し、外面に弱い稜線をもつ。22は大型の高杯杯部で、下部に明瞭な稜をもち、内外面にハケが施される。24～31は下層からの混入遺物とみられる。24は吉備系甕である。口縁部が二重口縁で、外面に平行沈線をもつ。体部外面は縦方向のハケが施される。庄内式期IV～Vのものと思われる。25～28はタタキ甕である。27は口縁部がやや外

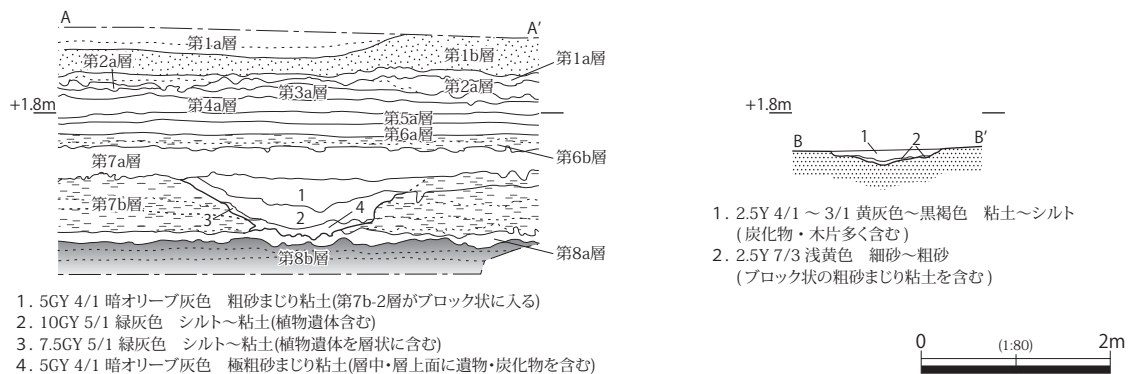
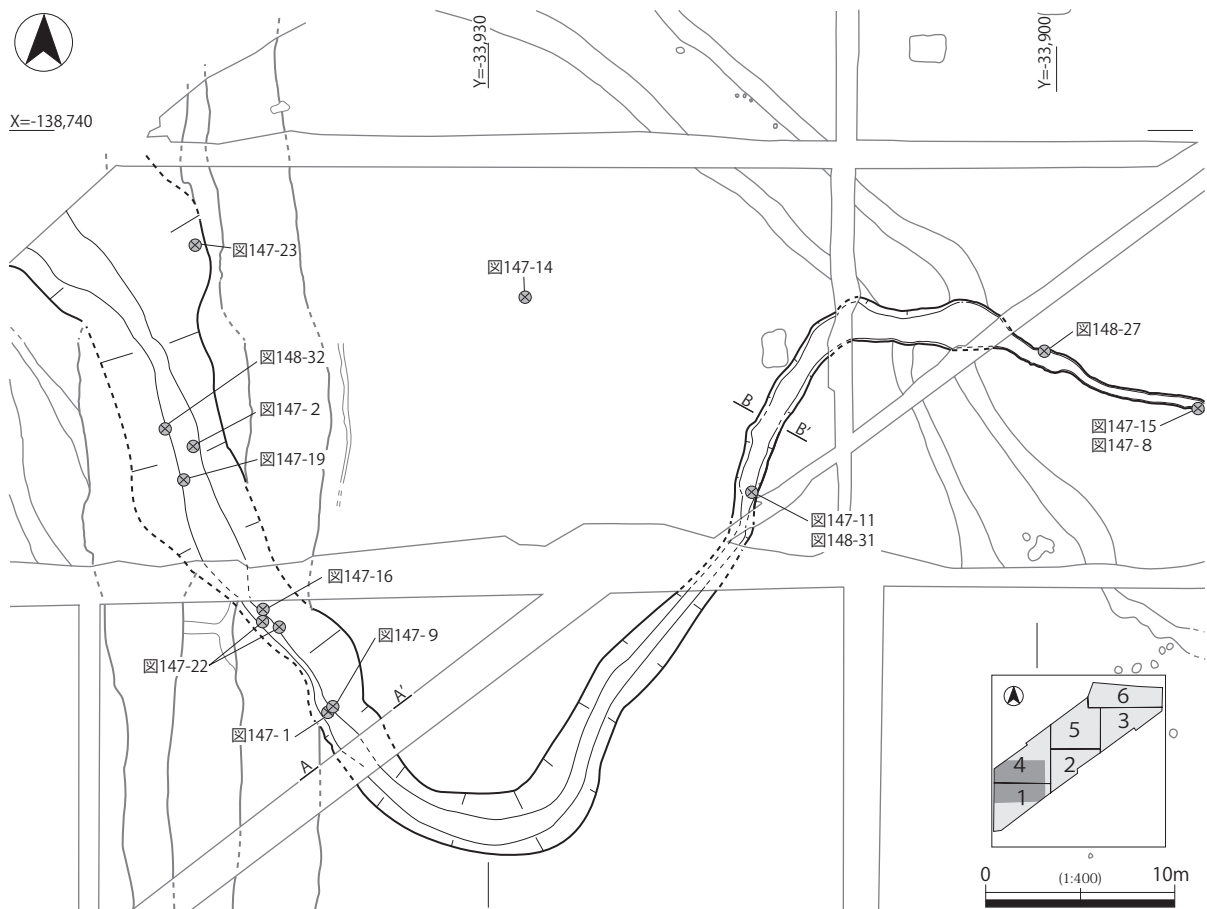


図 146 1-62 溝 平面図および断面図

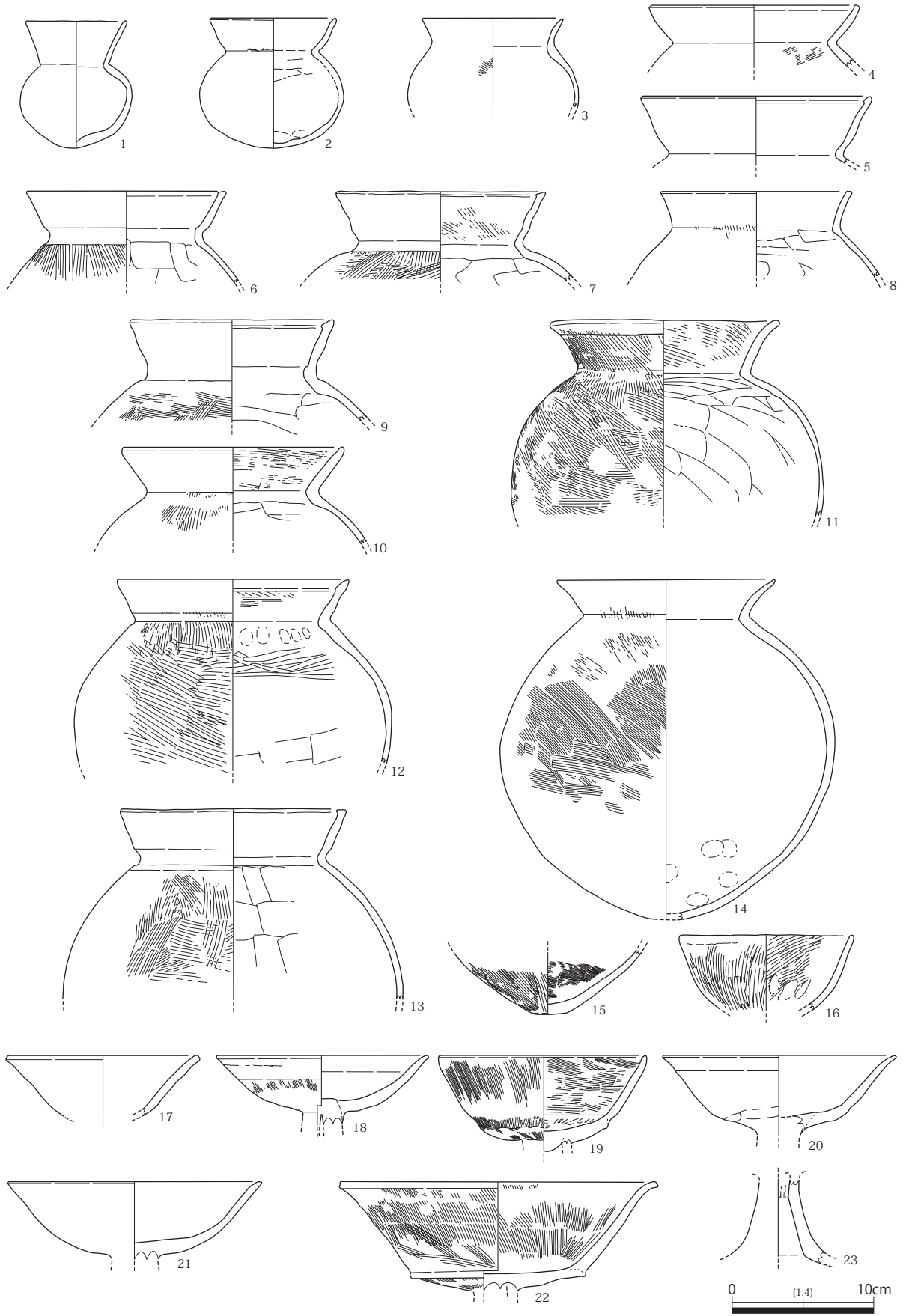


图 147 1-62 溝 出土遺物実測図 1

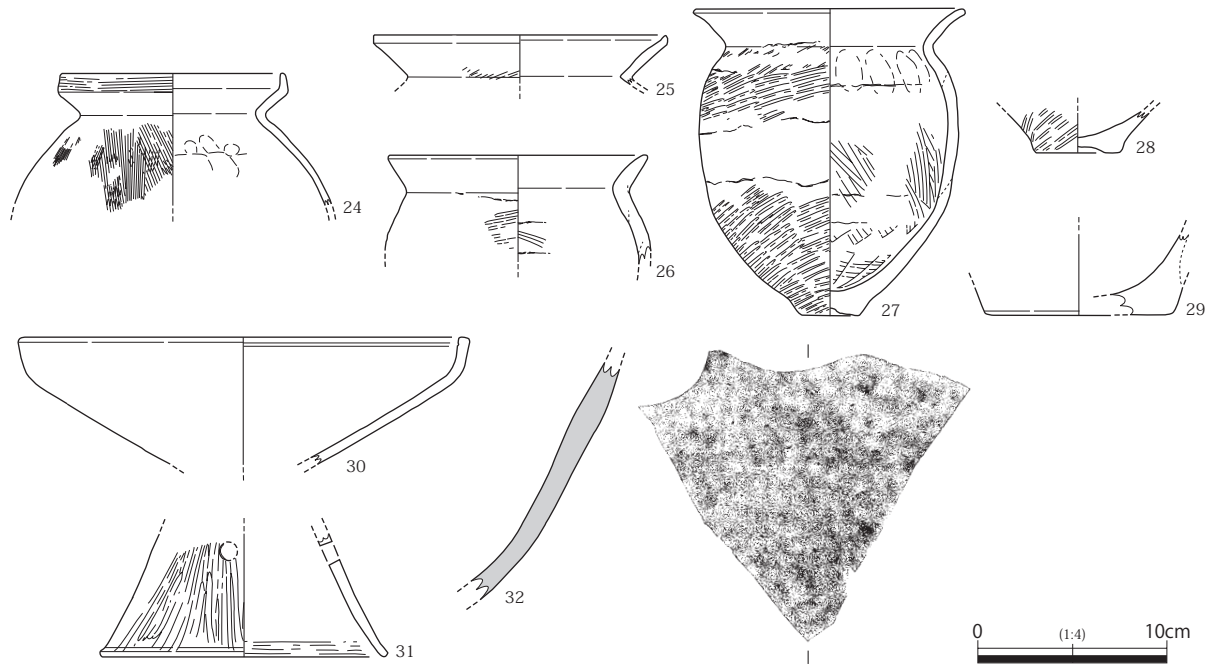


図 148 1-62 溝 出土遺物実測図 2

反し、体部は倒卵形で、底部が突出する。体部外面はタタキ、内面はナデが施される。弥生時代後期後半のものとみられる。29～31は弥生土器である。30は高杯とみられる。口縁端部内面に1条の沈線が施される。弥生時代中期のものとみられる。32は須恵器の甕の体部とみられる。外面に格子目タタキ後、ナデが施される。出土地点は1-59溝と交差する部分にあたり、混入遺物の可能性がある。

出土土器は、全体として布留式期Ⅲ～Ⅳを主体としており、布留式期Ⅴまでにおさまる。本溝埋没後に掘削される1-59溝、1-60溝と時期的に近似するが、やや古い布留式期Ⅲの土器を含んでおり、この溝が主に布留式期Ⅲ～Ⅳに機能していたことを示す。出土遺物に含まれる新相のものは、1-62溝の埋め戻しと、1-59溝、1-60溝の掘削年代を示すものと考えてよいだろう。溝の性格については、蛇行し、幅、深さなどが一定していない状況から、自然流路であった可能性が考えられる。

## 2. 土坑群とその周辺

3区西側を中心に、土坑群が検出された(図149)。いずれも径1.2～3mほどの平面ほぼ円形あるいは不整楕円形の土坑群である。最も北側で検出された5-579土坑を除く土坑は、北東-南西方向を軸にほぼ直線上に並ぶ。また、それらの土坑の北側において土器が集中している範囲が確認されたため、これを土器集中部とした。

**3-165土坑**(図150左:図版36-7) 最も北東側に位置し、北側はX=-138,650ライン断割りにより失われている。長軸1.1m、短軸0.9mの平面楕円形とみられ、深さは0.5mを測る。断面は逆台形で、自然堆積層はみられず、ブロック土が含まれることから、人為的に埋め戻されたものと考えられる。2層中から土師器片が出土しており、そのうち土師器2点を図示した(図151)。1は小型丸底壺である。口縁部は直線的に立ち上がり、体部は球形である。体部外面はハケが施される。7は甕である。口縁部がやや厚手で、わずかに外反する。体部内外面、口縁内面にハケが施される。いずれも、布留式期Ⅳ～Ⅴと考えられる。

**3-169土坑**(図150右:図版36-8) 径0.7mの平面ほぼ円形の土坑で、深さは0.45mを測る。断面は逆台形で、埋土は締りがなく、ブロック土を含む。人為的に埋め戻されたものと考えられる。遺物



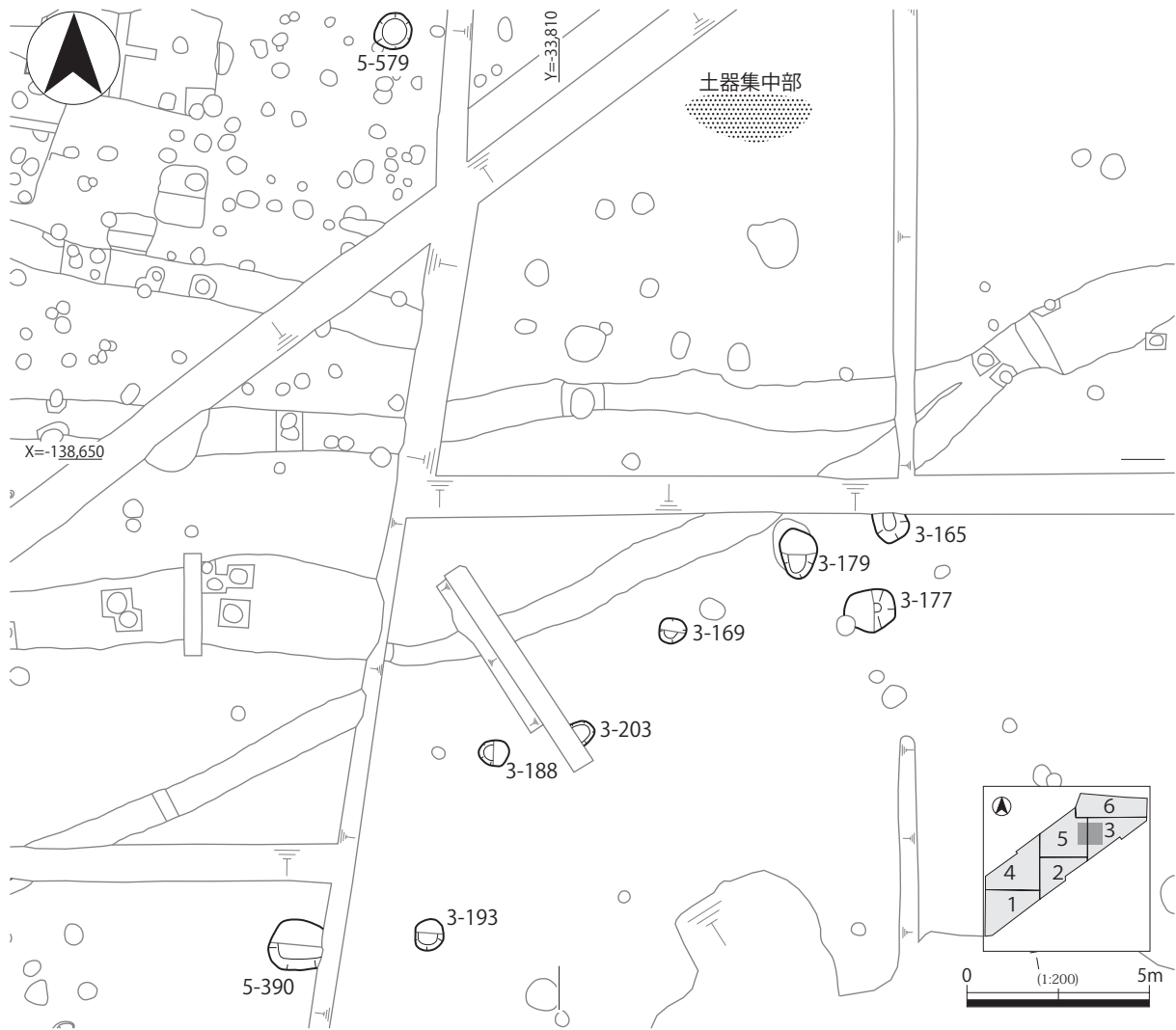


図 149 土坑群 平面図 (古墳時代前期)

は1層下部に土器片が散在しており、そのうち3点を図示した(図151)。4～6はいずれも甕口縁部である。いずれも直線的に立ち上がり、端部が肥厚せず、内傾する面をもたない。5のみ端部が外傾し、内面にハケがみられる。5が古い様相をもつものの、4・6は布留式期IVのものと思われる。

**3-177 土坑 (図版 37-1～3)** 長軸 1.4m、短軸 1.2m の平面楕円形の土坑である。深さは 0.5m を測る。埋土から、土師器片が多数出土しており、そのうち 8 点を図示した (図 151)。2 は壺もしくは甕の口縁部で、二重口縁をもち、厚手。3 は直口壺とみられる。頸部がやや外方へ開いて立ち上がり、下膨れの体部である。胎土は他と異なり、明橙色を呈する。搬入品か。8 は甕である。二重口縁で、口縁端部はやや肥厚する。体部外面はハケ、内面は指頭ナデが施される。9～11 は高杯である。11 は口縁部が外反し、長く伸びる、柱部から裾部へは緩やかに屈曲する。胎土は 3 と同様、明橙色を呈す。布留式期 V とみられるが、搬入品の可能性がある。12 はミニチュア土器である。手づくねにより成形され、内面には指頭圧痕、ヘラナデがみられる。13 は韓式系軟質土器の壺である。口縁部は緩やかに外反し、端部は短く折り曲げられている。体部外面には格子目タタキが施される。遺構の時期を明確に示す遺物が少なく、時期判断が難しいが、布留式期 IV～V に相当すると思われる。

**3-179 土坑 (図 152: カラー図版 2-2: 図版 37-4・5)** 長軸 1.3m、短軸 0.9m の平面不整楕円形の土坑である。北側には弧状の平坦面があり、そこからさらに落ち込んでいる。平坦面が深さ 0.2m、最

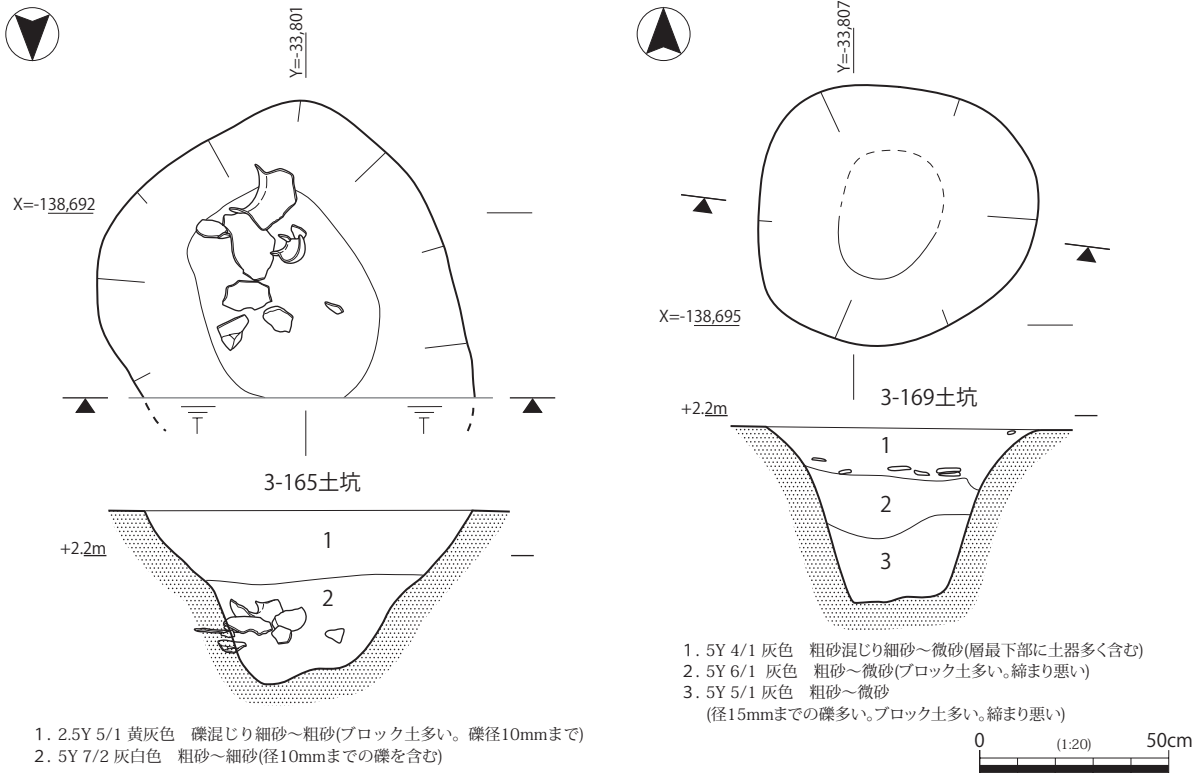


図 150 3-165、3-169 土坑 平面図および断面図

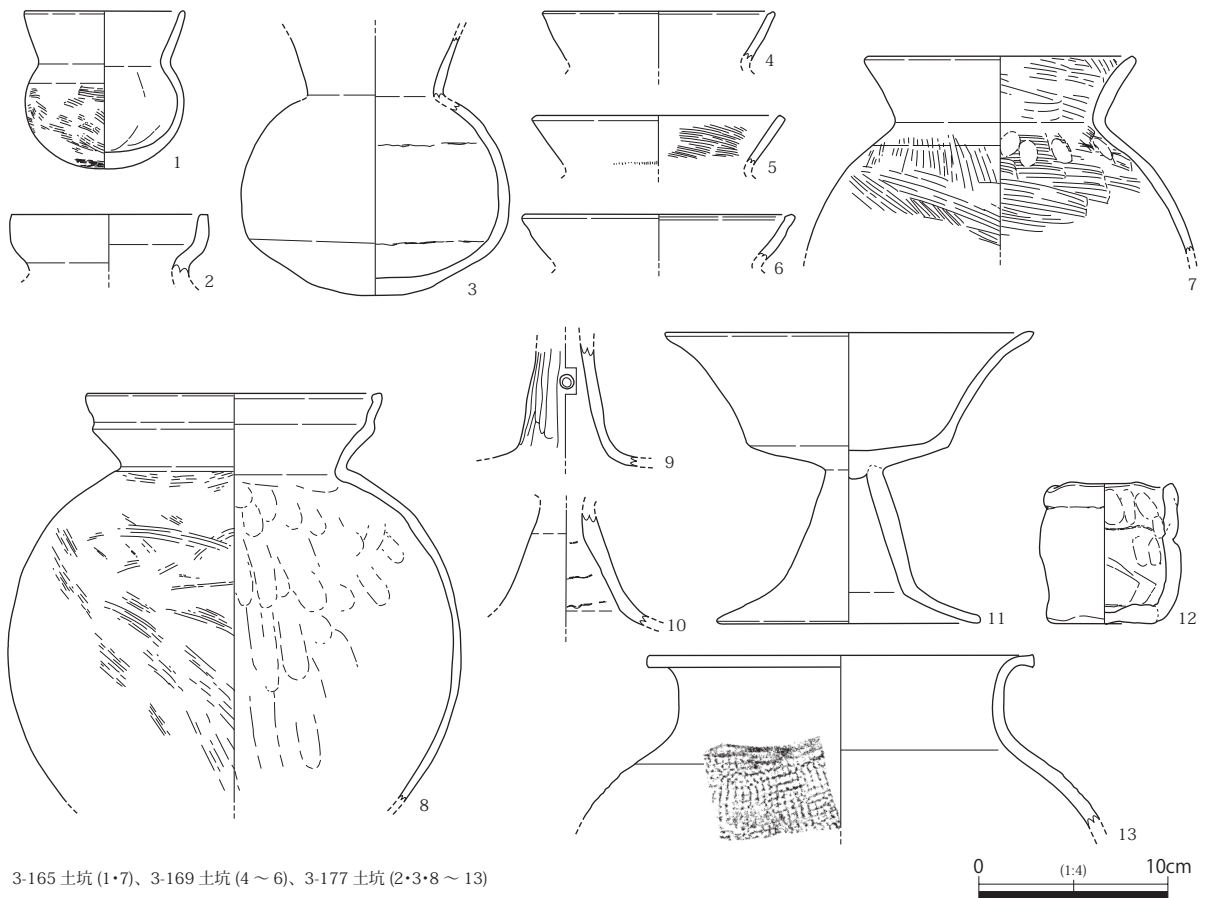


図 151 3-165、3-169、3-177 土坑 出土遺物実測図

深部が0.35mを測る。当初3-179土坑しか認識していなかったが、断面観察により、先行する3-296土坑が存在することが明らかとなった。3-296土坑は長軸1.5m、短軸1mほどの平面不整楕円形の土坑と推測され、深さは0.65mを測る。3-296土坑の埋土である5層にはラミナがみられることから、一定期間開口していたとみられ、埋没後、3-179土坑が掘り込まれている。3-179土坑は粗砂～微砂の単層であることから、掘削後、あまり時間をおかず、後述する土器とともに埋め戻されたとみられる。

3-296土坑から遺物は出土していないが、3-179土坑の平坦面からは土器とともに人頭大の礫が、落ち込み部分からは完形に近い多数の土器が出土している。そのうち土師器9点を図示した(図153)。1～4は小型丸底壺である。1は口縁部が直線的に立ち上がり、肩部がやや張る。3は二重口縁で、口縁部はやや外反する。山陰系土器とみられる。5は直口壺である。体部外面には上半はハケ、下半はケズリが施され、内面は頸部には指頭圧痕、体部にはハケが施される。9は甕である。口縁部はやや外反

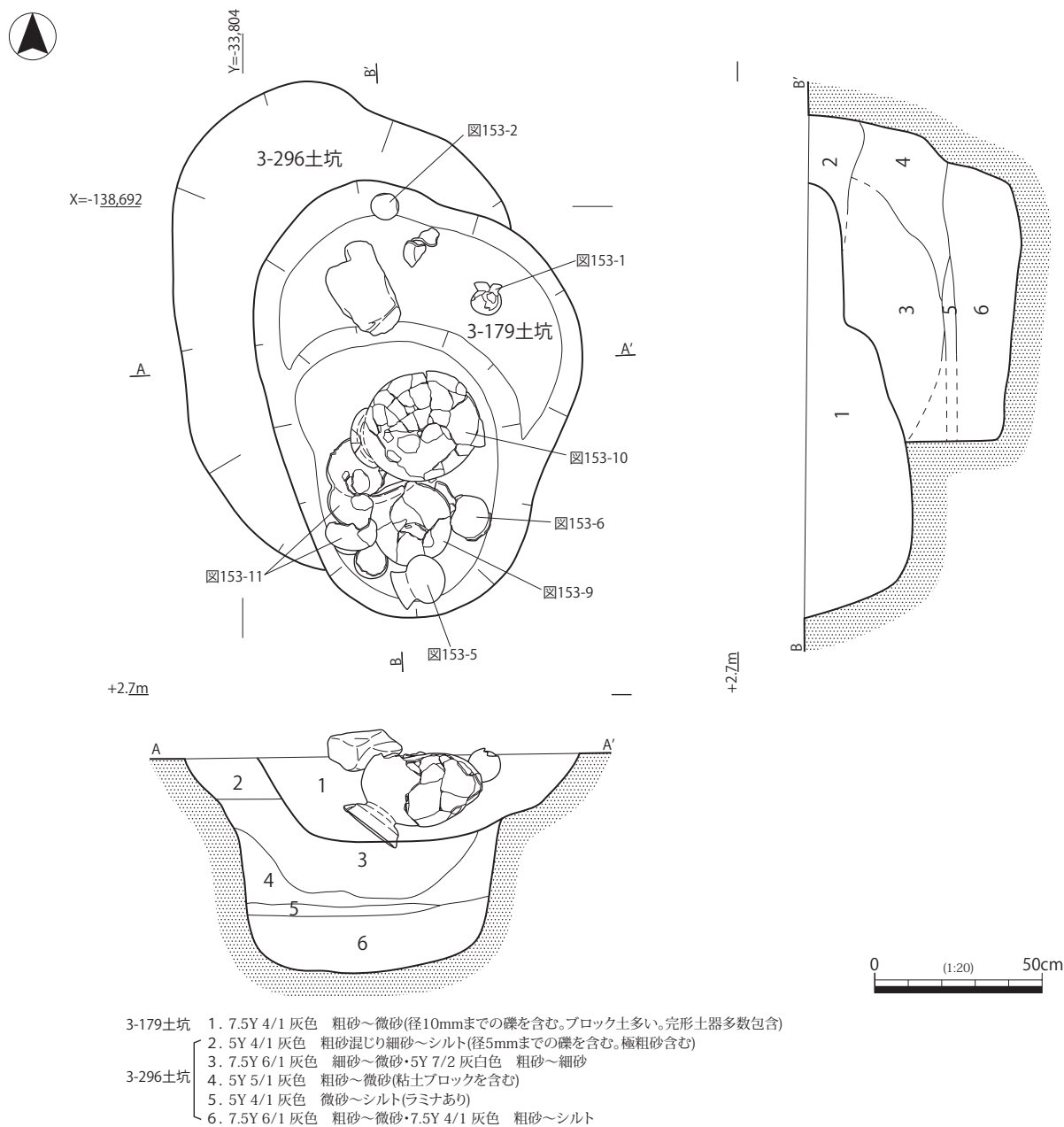
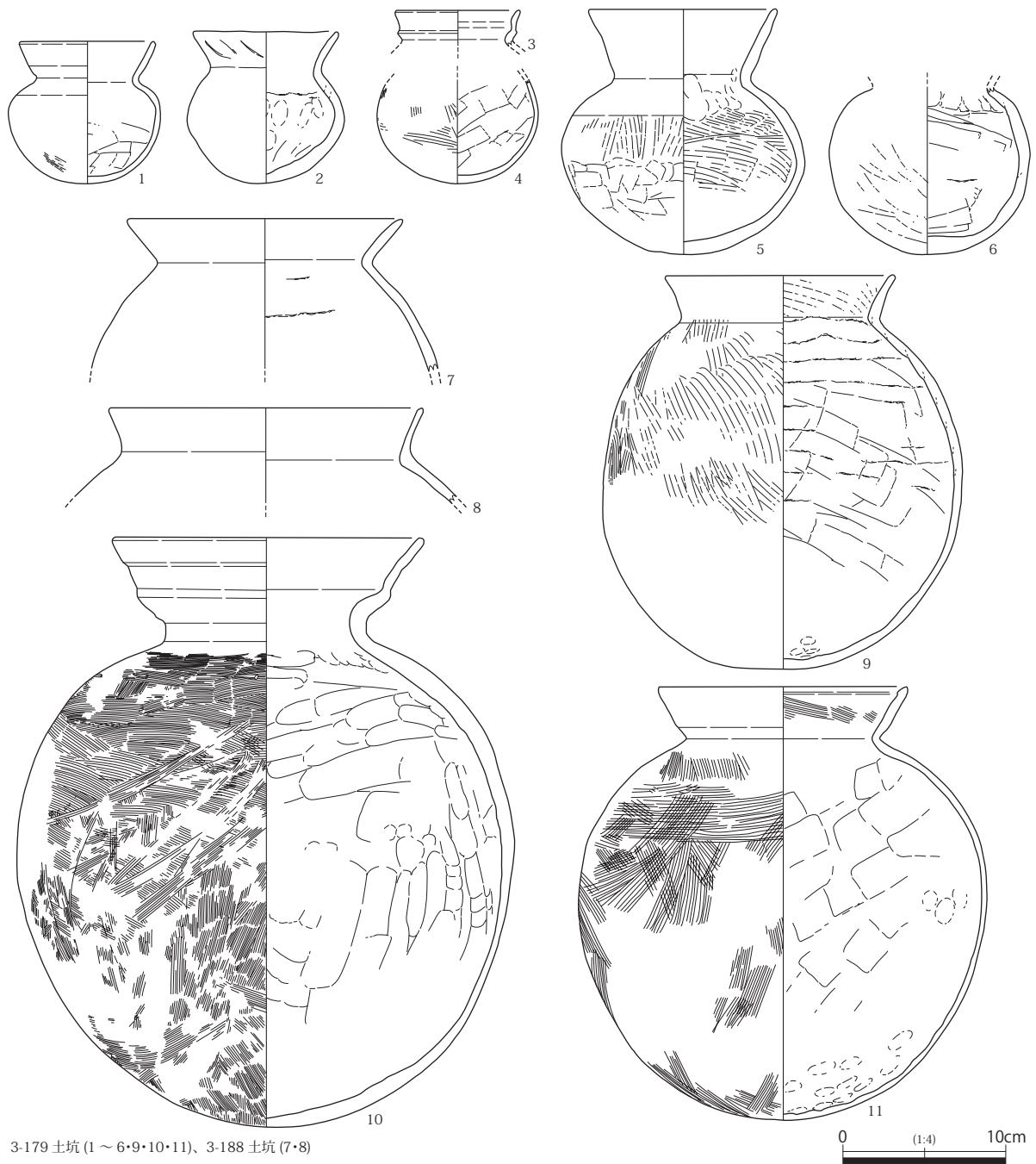


図152 3-179、3-296土坑 平面図および断面図

し、体部は球形である。体部外面、口縁内面に粗いハケが施されるが、口縁内面はヨコナデによって弱く消されている。体部内面は中程にケズリが施されるが、肩部にかけて粘土接合痕が残る。底部内面には、11と同様に指頭圧痕が残る。10は壺である。二重口縁で、口縁部外面の下方に浅い段をもつ。体部は球形で、肩部はやや厚手である。肩部外面は横ハケ、胴部は斜め方向のハケ、体部内面はケズリが施される。肩部にヘラ状工具による列点文が3点あり全体には巡らない。山陰系土器と考えられる。11は甕で口縁端部の肥厚がやや弱いものの、内傾する面をもつ。肩部外面には横ハケ、胴部外面には斜め方向のハケが施される。内面については口縁部にハケ、体部にはヘラナデが施され、底部には指頭圧痕が残る。やや古い様相をもつ土器もみられるが、布留式期IV~Vの土器群と考えられる。

3-188 土坑 (図版 37-6) 径 1.3m の平面ほぼ円形の土坑である。深さは 0.25m を測る。埋土から、



3-179 土坑 (1~6・9・10・11)、3-188 土坑 (7・8)

図 153 3-179、3-188 土坑 出土遺物実測図

土師器片が出土しており、そのうち土師器2点を図示した(図153)。7・8は甕である。7は口縁部が直線的に立ち上がり、やや厚手である。体部内面に粘土接合痕がみられる。8も7と同様、口縁部が直線的に立ち上がるが、端部にわずかに端部をもつ。いずれもの磨耗が著しく、調整は不明である。いずれも布留式期IV~Vのものと思われる。

**3-193 土坑** (図154左: 図版37-7・8) 径0.75mの平面ほぼ円形の土坑である。最上部の土器片からの深さは0.45mを測る。断面は方形で直立気味に掘り込まれている。埋土には全体的に炭化物が含まれている。埋土の状況から、5層によって中程まで埋め戻され、それから一定期間経過し、最終的に1~3層によって埋没したものとみられる。遺物は上層である1・2層から多数の土師の細片が、5層からは大型の甕体部1個体が出土している(図155)。そのうち土師器6点を図示しているが、11が5層から出土した甕である。6は甕である。口縁端部を欠くが、口縁部はわずかに外反する。磨滅が著しく調整は不明である。11は甕の体部である。外面はハケ後下部のみミガキ、内面はハケが施される。外面の一部にススが付着する。13・15・16は高杯である。13は口縁部が杯底部から内湾し、直線的に伸びる。16は長い柱部で、胎土は明橙色を呈す。搬入品の可能性がある。良好な資料を欠くが、いずれも布留式期IV~Vと考えられる。

**3-203 土坑** (図154右: 図版38-1) 長軸0.8m、短軸0.5mの平面楕円形の土坑である。深さは0.45mを測る。断面は上半が逆台形、下半は直立気味に掘り込まれている。埋土である2層にはブロック土が非常に多く含まれることから、人為的に埋め戻されたとみられる。1層からは土器片と磨石が出土し、そのうち土師器2点、石器1点を図示した(図155)。4・5は甕である。いずれも口縁端部は肥厚せず、頸部内面の屈曲が比較的明瞭である。布留式期IV~Vのものか。17は砥石とみられる。上面に比較的明瞭に使用痕がみられる。石材は不明である。

**5-390 土坑** 直線的に並ぶ土坑のうち、最も南西に位置する土坑である。東側が3区と5区の境界

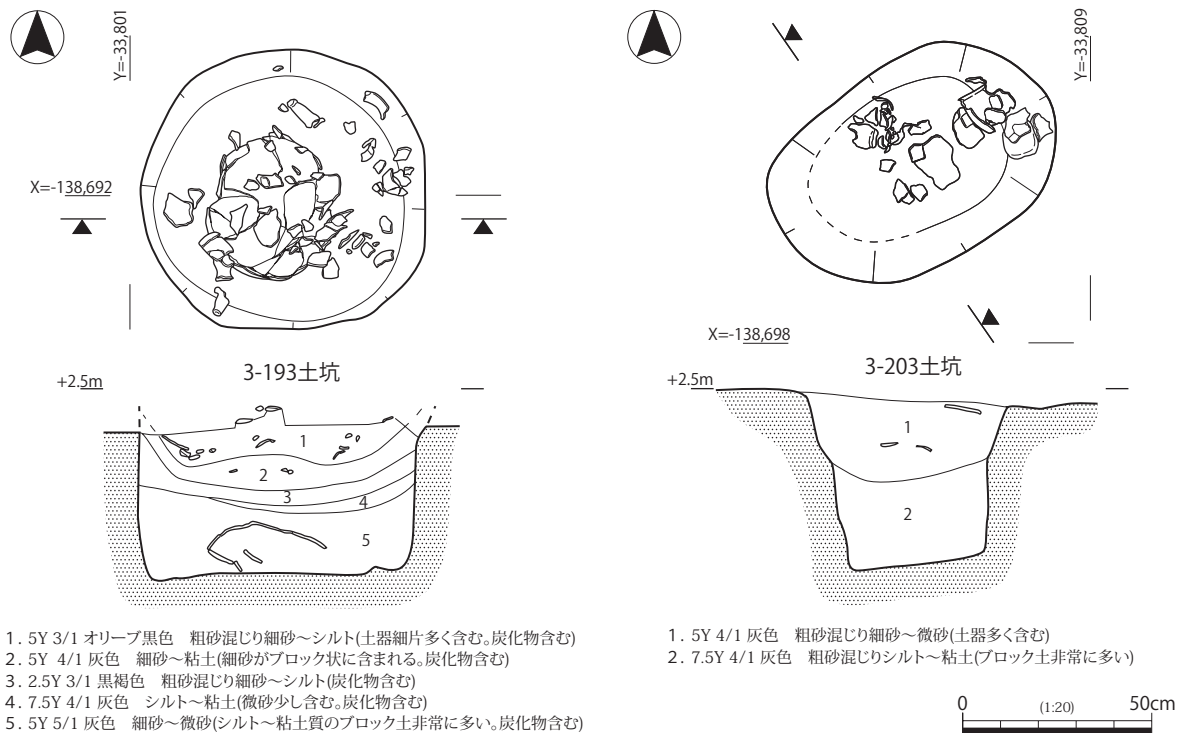
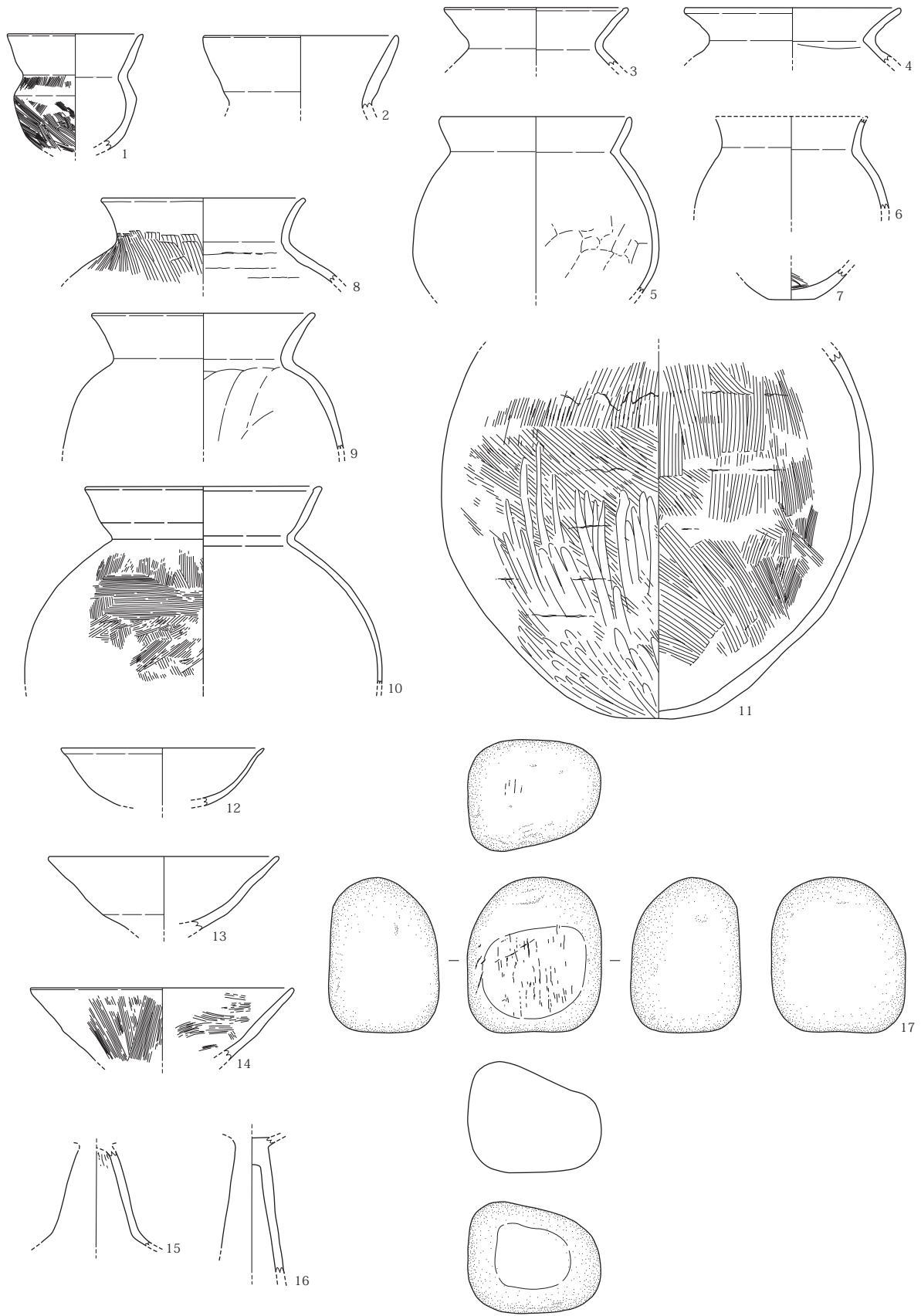


図154 3-193、3-203 土坑 平面図および断面図



3-193 土坑 (6·7·11·13·15·16)、3-203 土坑 (4·5·17)、5-390 土坑 (1·8·9·12)、5-579 土坑 (2·3·10·14)

0 (1:4) 10cm

图 155 3-193、3-203、5-390、5-579 土坑 出土遺物実測図

であったため失われているが、長軸 3.5m、短軸 2.5m の平面楕円形とみられ、深さは 0.2m を測る。出土した土師器 4 点を図示した (図 155)。1 は小型丸底壺。口径がやや体部径を上回る。体部外面はハケが施される。8・9 は甕で、口縁部はやや外反して立ち上がり、端部は肥厚しない。11・12 は高杯。11 は口縁端部がわずかに外反する。いずれも布留式期 IV~V と考えられる。

5-579 土坑 北側に位置する円形の土坑で、径 2m を測る。深さは 0.12m を測る。埋土から土器が出土しており、そのうち土師器 4 点を図示した (図 155)。2 は直口壺の口縁部とみられる。3・10 は甕である。10 は口縁部がわずかに内湾するが、端部の肥厚は弱い。肩部外面に横ハケが施される。14 は高杯で口縁部は直線的にのび、内外面にハケが施される。いずれも布留式期 IV と考えられる。

土器集中部 (図版 38-2) 5-579 土坑から東に約 7m の地点において、南北 1.5m、東西 3.5m の範囲に土器が集中している状況がみられた。平面プランは確認できていないが、浅い落ち込み状の遺構に遺棄された土器群である可能性が考えられる。出土した土器のうち、土師器 13 点を図示した (図 156)。1 は二重口縁壺である。頸部は屈曲が強く、外方に開いて立ち上がる。庄内式期前半のものである可能性がある。2・3 は小型丸底壺である。2 は口縁部がやや短く、口径は体部径とほぼ等しい。体部外面、口縁部内面にはハケが、体部内面はナデが施される。3 は口縁部が長く直線的に立ち上がり、頸部はすぼまる。体部内面には指頭圧痕がみられる。4 は甕で、口縁部の肥厚はほとんどみられない。体部内面に粘土接合痕がみられる。5 は直口壺か。口縁端部上面に面をもつ。6~9 は甕である。

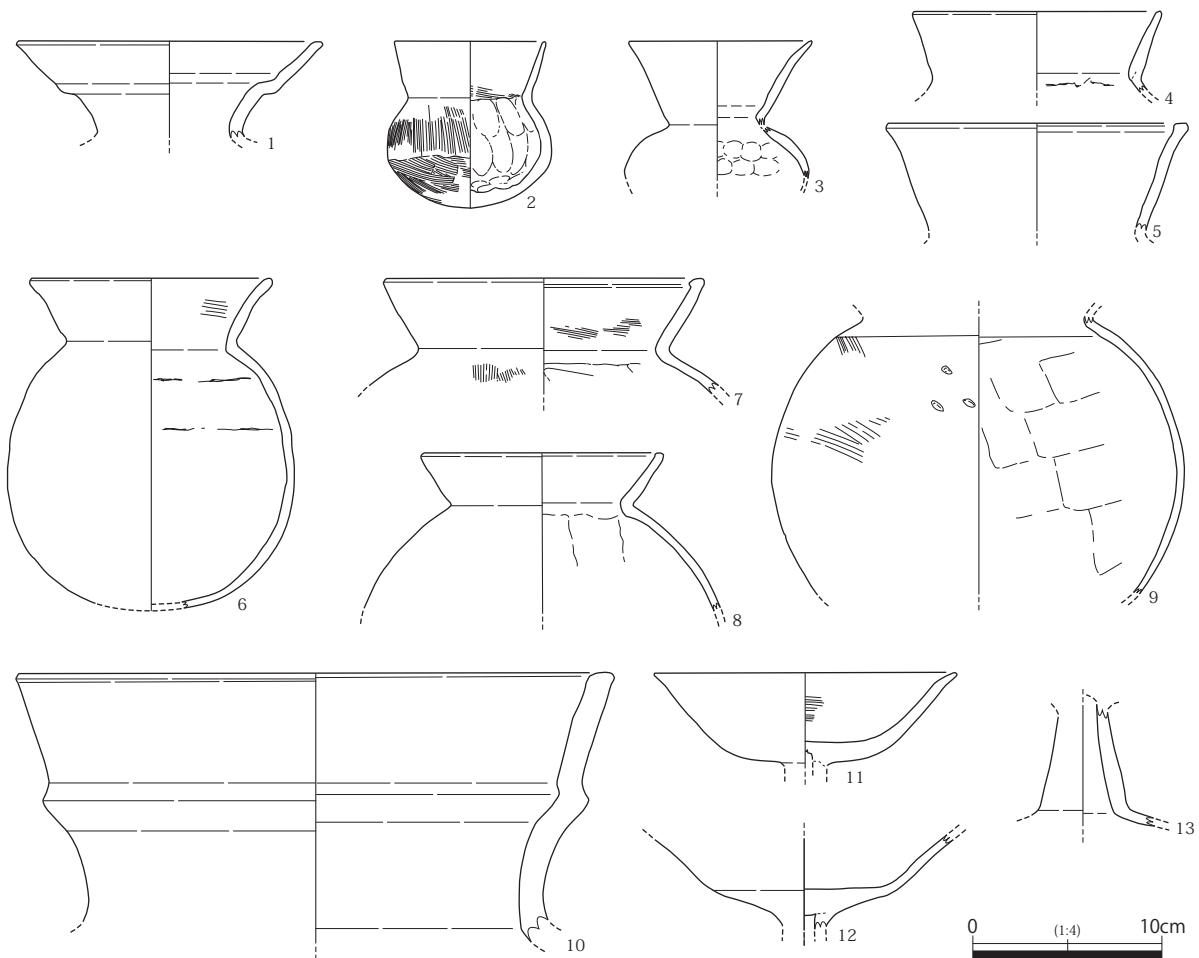


図 156 3区土器集中部 出土遺物実測図

6は全体的に厚手で、口縁部、体部がやや長い。7は口縁端部が肥厚し、内傾する面はやや幅広である。9は体部のみであるが、球形で比較的薄手である。肩部には米粒状の刺突文が3ヶ所みられ、三角形に並ぶ。10は大型の二重口縁壺とみられる。厚手で、口縁端部には水平な面をもつ。11～13は高杯である。11は口縁端部がわずかに外反する。磨耗が著しいが、内面にハケメがみられる。

以上の状況から、この土器集中部は、古相の布留式期Ⅰ～Ⅱ（5・9）も含まれるが、布留式期Ⅲ～Ⅳの土器を主体としている。南側に位置する土坑群には、大きな時期差はみられず、いずれも布留式期Ⅳ～Ⅴ期の範疇におさまる。土器集中部は土坑群よりも、やや古い段階の土器を含む状況で、布留式期Ⅲ以降、周辺の積極的な利用を示唆している。土器集中部や、それぞれの土坑の性格を明らかにすることは難しいが、直線的な土坑の配置や、短期間での掘削・埋め戻しがされている点、また完形の土器が多数出土している3-179土坑の状況から、特別な意図をもって掘削された土坑群であると想定される。3-179土坑以外の土坑についても、土器が上層あるいは下層にまとまっている状況は、意図的に土器を遺棄したためとみられる。土器集中部もそれら土坑群の前段階において、何らかの行為に伴って遺棄された土器群である可能性が高い。

なお西側で検出された1-62溝は布留式期Ⅲ～Ⅳ、1-59・60溝は布留式期Ⅳ～Ⅴの遺構とみられ、地理的な隔たりはあるものの、土器集中部と1-62溝、土坑群と1-59溝、1-60溝が、時期的にほぼ対応する。土坑群の出土遺物のなかには、搬入土器とみられる土器も散見され、布留式期Ⅳの段階に入って、土坑や大規模な溝の掘削など、この地域における活動が活発化していた状況が想定される。

### 3. ピット

5区を中心に、ピットが4基確認されている（図157）。

4-87ピット（図158左：図版38-3）4区の東端に位置する径0.3mの平面ほぼ円形のピットで、深さは0.1mを測る。埋土は粗砂混じりの粘土である。埋土からほぼ完形の土師器1点が出土した（図

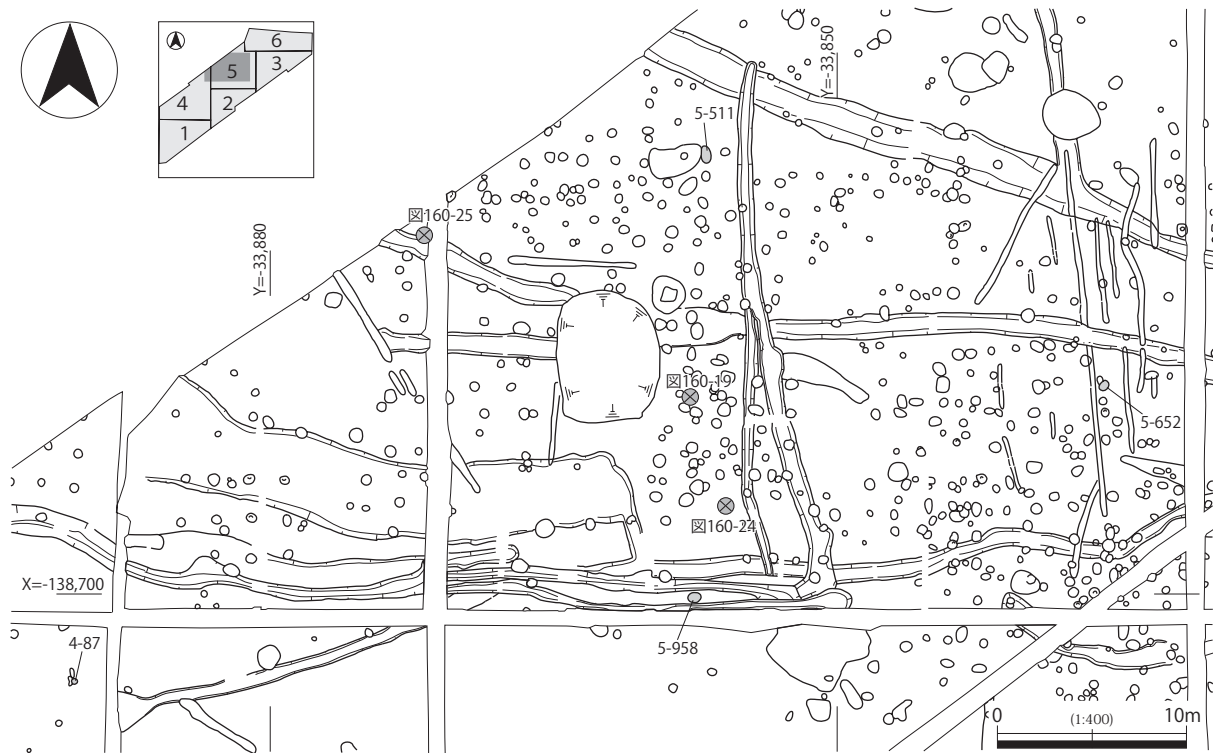


図157 ピット 平面図（古墳時代前期～中期）



159)。1は小型丸底壺である。口縁部は直線的に立ち上がり、体部中程がやや張る。体部外面はハケが施される。布留式期IV～Vのものか。

5-511ピット 5区のやや北寄りに位置する長軸0.8m、短軸0.3mの平面楕円形のピットで、深さは0.2mを測る。出土した土師器2点を図示した(図159)。3は甕で、口縁端部を外方へ摘み出している。布留式期Vのものか。5は高杯で、柱部が中実である。弥生土器の可能性はある。

5-652ピット 5区のやや東寄りに位置する径0.2mの平面ほぼ円形のピットで、深さは0.16mを測る。埋土から土師器片が多数出土し、そのうち韓式系土器1点を図示した(図159)。6は韓式系軟質土器の体部片である。外面に格子目タタキがみられる。なお、このピットからは5世紀代の可能性のある土器片も出土していることから、古墳時代中期の遺構である可能性がある。

5-958ピット(図158右:図版38-4) 5区のほぼ中央に位置する長軸0.55m、短軸0.4mの平面楕円形のピットで、深さは0.1mを測る。埋土は、シルト～粗砂で下方にラミナがみられる。埋土から土師器片が出土し、そのうち土師器2点を図示した(図159)。2は甕の口縁部である。口縁端部は弱く肥厚する。4は高杯である。口縁がわずかに外反し、杯部の底部は平坦である。柱部から裾部へは緩やかに屈曲する。いずれも布留式期IV頃と考えられる。

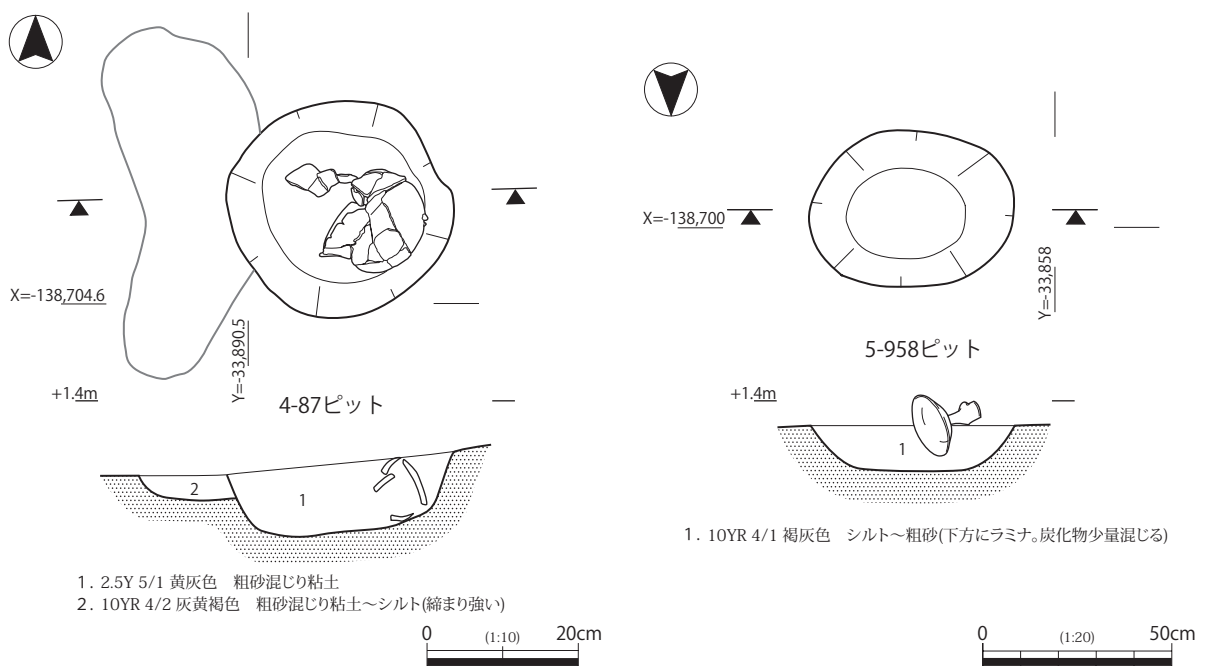


図158 4-87、5-958ピット 平面図および断面図

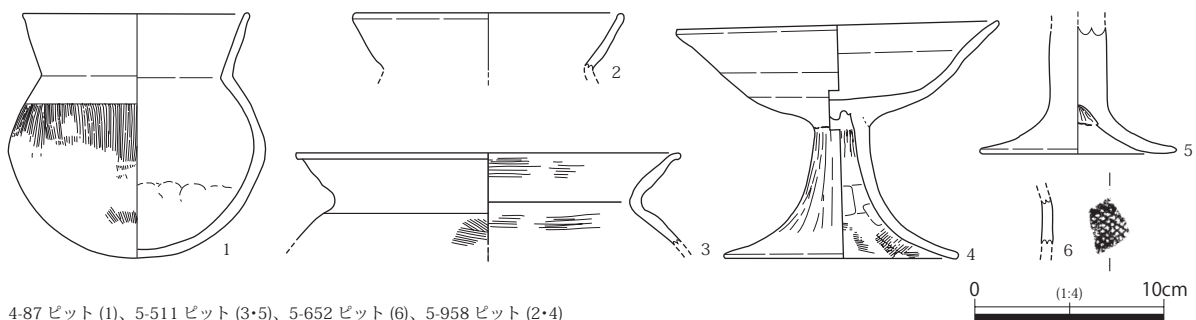


図159 ピット 出土遺物実測図(古墳時代前期)

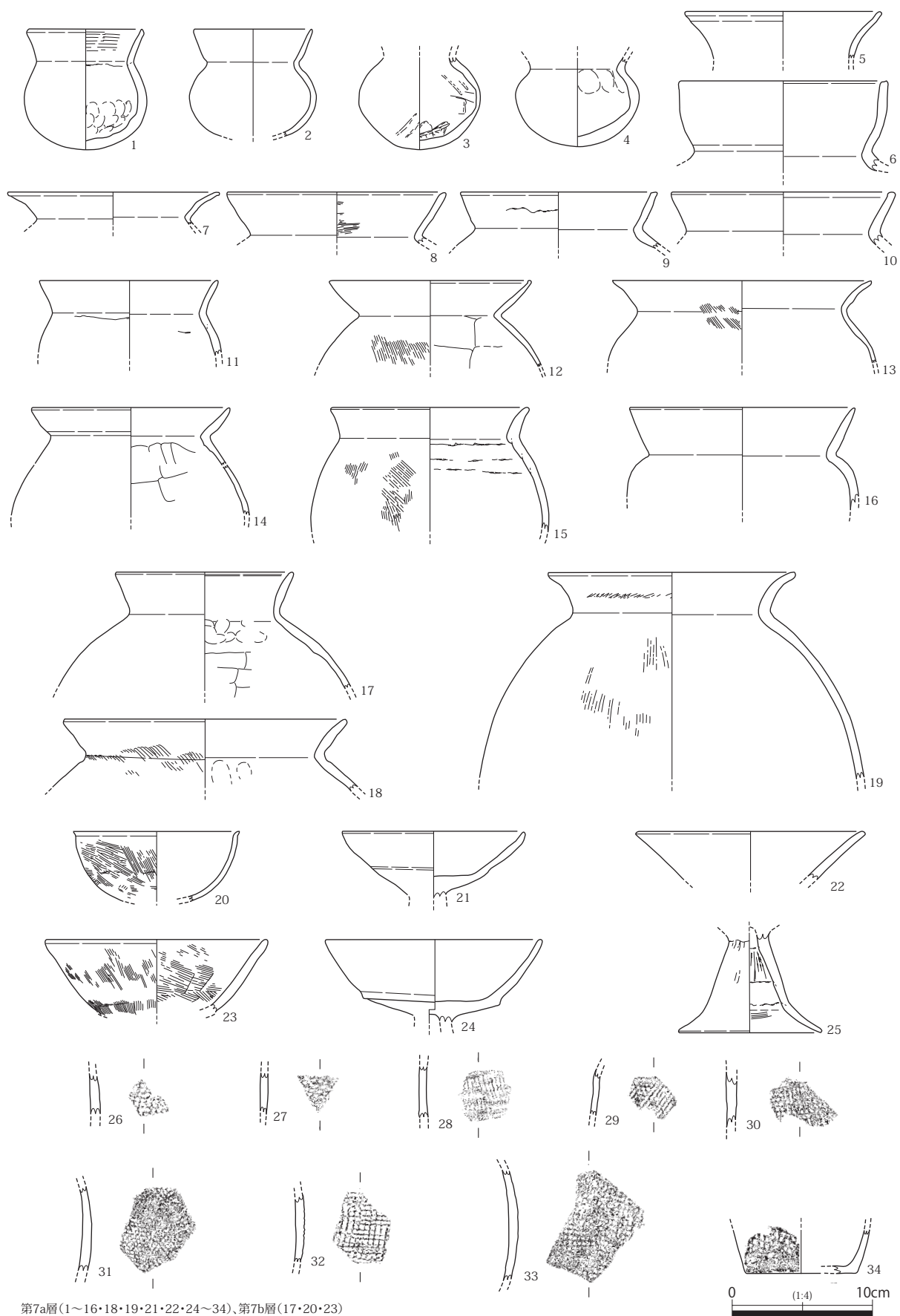


图 160 第 7a・7b 層 出土遺物実測図 (古墳時代前期~中期)

#### 4. 包含層出土遺物

この時期にあたる出土遺物のうち土師器 25 点、韓式系軟質土器 9 点を図示した (図 160)。第 7a 層からの出土が多く、第 7a 層からは 31 点 (1～16・18・19・21・22・24～34)、第 7b 層からは 3 点 (17・20・23) となっている。調査区別にみると、2 区と 6 区の土器はなく、1 区から 1 点 (14)、3 区から 11 点 (2～4・8・11・15・16・22・26・30・33)、4 区から 6 点 (12・17・23・27・28・34)、5 区から 16 点 (1・5～7・9・10・13・18・19～21・24・25・29・31・32) となっており、5 区が最も多い状況である。また遺構を中心にみた場合、1-59・60 溝周辺から 12・17・23、3 区の土坑群周辺から 4・16・22・26・30、3 区の土器集中部周辺から 2・3・8・11・15、4-87 ピット周辺から 27・28・34 がそれぞれ出土している。やや古相のものもみられるが、布留式期 IV～V が主体である。

最も多く土器が出土している 5 区での分布状況については、5 区北半にやや偏っており、土器の出土量に大きな差があるものの、古墳時代中期～後期の分布状況 (図 126) と似ている。これは同様の地形状況を背景とした土地利用が、前期～後期を通じて同様に推移したことを示唆するが、遺構・遺物の出土量からは前期における本格的な土地利用は考えにくく、当該時期の開発の中心は調査地外に位置するとみるほうが妥当だろう。5 区以外でも、1-59・60 溝や 3 区西側の土坑群など、遺構が特徴的に散在していることは、調査地周辺における開発内容や状況に起因すると考えられるが、これについては周辺での調査例の増加を待ちたい。

1～4 は小型丸底壺である。1 は口縁部が直線的に立ち上がり、体部は球形である。口縁部内面にはハケが施され、底部内面には指頭圧痕がみられる。3 は体部が球形で、底部内外面に筋状の工具痕がみられる。5・6 は壺である。6 は口縁部が内湾して立ち上がり、端部にほぼ水平の面をもつ。器壁はやや厚い。7～19 は甕である。口縁端部については、10・12 がわずかに肥厚するものの、多くのものは丸く収まるか、尖り気味で、内傾する面がみられない。14 は口縁部がやや内湾して立ち上がり、胴部中程が張る。頸部以下の内面にはケズリが施される。16 は口縁端部が尖り、肩部が張る。やや特異な器形であることから、搬入土器の可能性がある。19 は口縁部は外反し、体部は長胴形になるものとみられる。摩滅が著しいため明瞭ではないが、口縁部外面にタタキ、体部外面にハケがみられる。20 は鉢か。椀形で、口縁端部が外方へ短く屈曲する。外面にハケが施される。21～25 は高杯である。21 は口縁端部がわずかに内湾し、杯部は浅い。24 は杯部下方の屈曲が比較的明瞭にみられる。図示した土器の中では、やや古相の布留式期 II の可能性がある。

26～34 は韓式系軟質土器であるが、ほとんどが破片のため器種は不明である。体部外面に格子目タタキがみられるものが多いが、28 のみ平行タタキが施される。

#### 第 5 項 弥生時代後期後半～古墳時代初頭の遺構と遺物

3・5・6 区において、溝・土坑・ピットが検出された (図 162)。この時期の遺物が、各期を通して最も多く、特に溝周辺出土のものも含めた包含層からの出土が多くみられた。

##### 1. 溝

3 区から 5 区にかけて枝状に延びる溝と、5 区の西側で北西-南東方向に延びる 5-854 溝を検出している。前者の溝についての記載が多岐にわたり、かつ 5-854 溝については、詳細は後述するが、当該期の遺構ではない可能性が考えられるため、ここでは前者の溝を中心に記述することとし、5-854 溝

については、次のその他の遺構で述べることにする。

枝状に延びる溝は、大雨などにより形成された自然流路とみられ、基本的に 3-164 溝から分岐したものの、もしくは同溝が河道を変化させた痕跡と考えられる。ただ溝内や溝周辺の遺物の出土状況などの記述の際、煩雑さを避けるため遺構番号の統一は最小限に留めた。遺物の詳細はそれぞれ出土した溝ごとに述べるが、出土土器からみた溝全般の時期について先に触れておきたい。埋土中から、弥生時代後期以降の土器が多数出土しているが、時期的に新しいものは、混入遺物を除いて、庄内式前半～中頃のものとなっている。また埋土はいずれも砂層で、ブロック土などはみられず、人為的に埋め戻された状況はみられない。以上のことから、同時期かは不明であるが、これらの溝は、庄内式前半～中頃の段階には、放棄流路として埋没していたと考えられる。

**3-164 溝 (図 162 : 図版 38-5 ~ 8)** 6 区の南西隅から 3 区にかけて、北東 - 南西方向に直線的に延びる溝で、西に向かってやや幅を狭くしている。長さ 72m、幅 0.9 ~ 2 m、深さは東端で 0.2m、西端で 0.12m を測る。断面は皿形を呈し、埋土は砂層で、部分的にラミナが観察された (図 161 上段)。数層に分層されたことから、比較的長期間開口していたものとみられる。

出土した遺物のうち、弥生土器・土師器 38 点、石器 1 点を図示した (図 163)。1 は短頸壺の口縁部とみられる。摩滅が著しいが、口縁端部にヘラ状工具により 1 条の波状文が施される。2 ~ 10 は甕

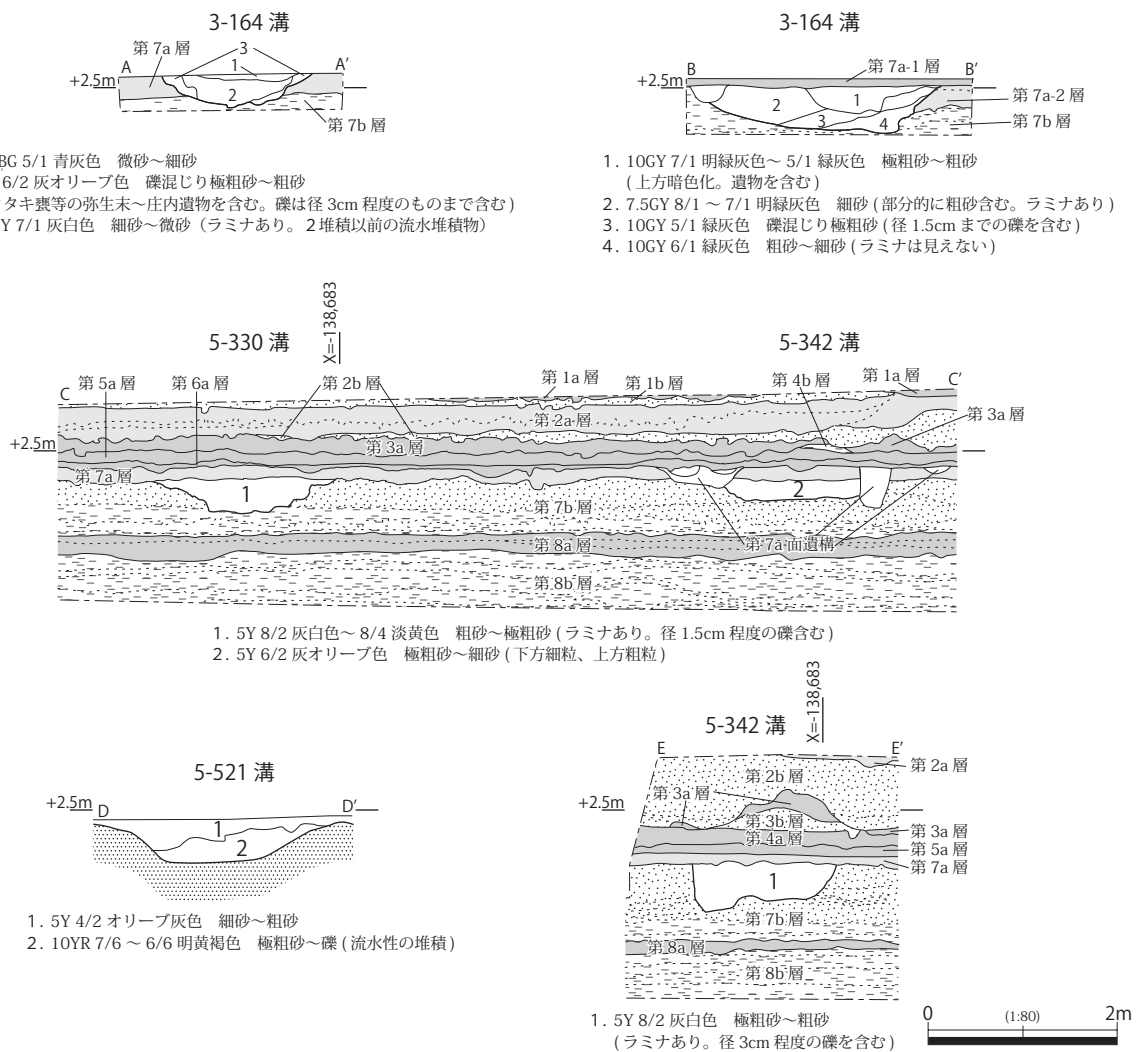


図 161 3-164、5-330、5-342、5-521 溝 断面図



図 162 第 7b 面 (弥生時代後期後半～古墳時代初頭) 平面図

で、体部が残るものには外面にタタキが施される。6は頸部の屈曲が緩やかで、口縁端部は丸くおさまる。8は受け口状の口縁部をもつ。内面にハケが施される。11～30は壺・甕・鉢などの底部である。12は底部中央部に焼成後穿孔がされる。20は底部の突出が緩やかで、中央部がドーナツ状に窪む。27は鉢の底部とみられ、上げ底状となる。31は鉢で、杯部はやや深い。32～37は高杯である。32は口縁部が短く外反し、体部に稜線をもつ。内外面にミガキが施される。37は裾部が緩やかに広がり、中程に低い段をもつ。38は手焙形土器である。覆部の破片で摩滅が著しいが、外面にハケメがみられる。39はサヌカイトの剥片である。背面右側には自然面が残り、左側縁辺には微細剥離がみられる。以上の土器群については、弥生時代後期後半～庄内式前半にかけてのもので、溝の開口時期を示す。

5-342 溝 (図 162 : 図版 39-1・2) 3-164 溝から東に分岐する溝で、西側でさらに二手に分岐する。ほぼ東西方向に伸び、長さ 75m、幅 1～2 m、深さは東端で 0.17m、西端で 0.3m を測り、西方向に下る。断面形は皿形から逆台形を呈し、埋土は砂層で、部分的にラミナがみられる (図 161 中段右・下段右)。下方が細粒で、単層であることから、一度に埋没した可能性が考えられる。

出土した遺物のうち、弥生土器・土師器 45 点を図示した (図 164・165)。40～49 は壺とみられる。41～43 は広口壺の口縁部で、いずれも櫛状工具による波状文の後、円形浮文が貼り付けられる。40 の下方に拡張された端面には刻み目が施される。43 は拡張された口縁部の上下の端面に刻み目がされ、口縁部外面は、波状文、円形浮文がみられる。44 は二重口縁で、口縁部下方に竹管文が施される。50～63 は甕である。57 は頸部の屈曲が明瞭で、口縁端部に面をもつ。60 は頸部がすぼまり、体部が球形に張り出す器形とみられる。体部外面はタタキ、内面にハケが施される。62 は口縁部が外反し、頸部の屈曲は強い。底部は突出した平底である。口縁部内面に筋状の工具痕が残る。63 は口縁端部が上方に摘み上げられ、受け口状の口縁部となる。底部は平底である。体部外面はタタキ、内面はハケが施される。64～77 は甕・鉢の底部である。73 は鉢の底部とみられ、底部が高台状に突出する。77 には中央部に焼成後穿孔がされ、その内面には筋状の工具痕が残る。81 は鉢で、口縁部が短く外反する。外面にタタキが施される。105・107・109・110 は高杯である。105 は椀形高杯で、柱部は短く、裾部へは緩やかに屈曲する。裾部には穿孔途中とみられる円形の窪みが残る。杯部内面にはミガキが施される。107 は口縁部がゆるやかに外反する。外面に粘土接合痕がみられ、内面にはミガキが施される。113 は韓式系軟質土器である。外面に格子目タタキが施される。上層からの混入遺物と考えられる。115 は弥生時代前期の壺である。口縁部と頸部境界に 1 条の沈線が施されており、下層からの混入遺物と考えられる。混入遺物を除けば、3-164 溝と同様に、弥生時代後期後半～庄内式前半にかけての土器が主体となっている。

5-330、5-473、6-99 溝 (図 162 : 図版 39-3～6) 5-342 溝から分岐したとみられる 5 区の北側と 6 区西側で検出された溝である。5-330 溝は、南東 - 北西方向に直線的に伸び、北西に向かってやや幅を広げている。長さ 49m、幅 1.0～2.2m、深さは東端で 0.16m、西端で 0.25m を測る。断面は皿形を呈し、埋土は砂層で部分的にラミナが観察された (図 161 中段左)。5-473 溝は、5-330 溝から分岐し、南北方向に延びる溝で、北側でさらに 3 方向に分岐する。長さは 21m、幅は 0.8～1 m、深さは南端で 0.12m、北端で 0.1m を測り、南方向に下る。断面は浅い皿形を呈し、埋土は砂層であった。6-99 溝は長さ 5 m、幅 0.6～1 m を測り、深さは 0.04m と浅い。南東側の平面プランは確認できなかったが、5-473 溝と合流する可能性がある。埋土は砂層であった。

出土した遺物のうち、弥生土器・土師器 11 点を図示した (図 165)。80 は鉢である。口縁部は直線

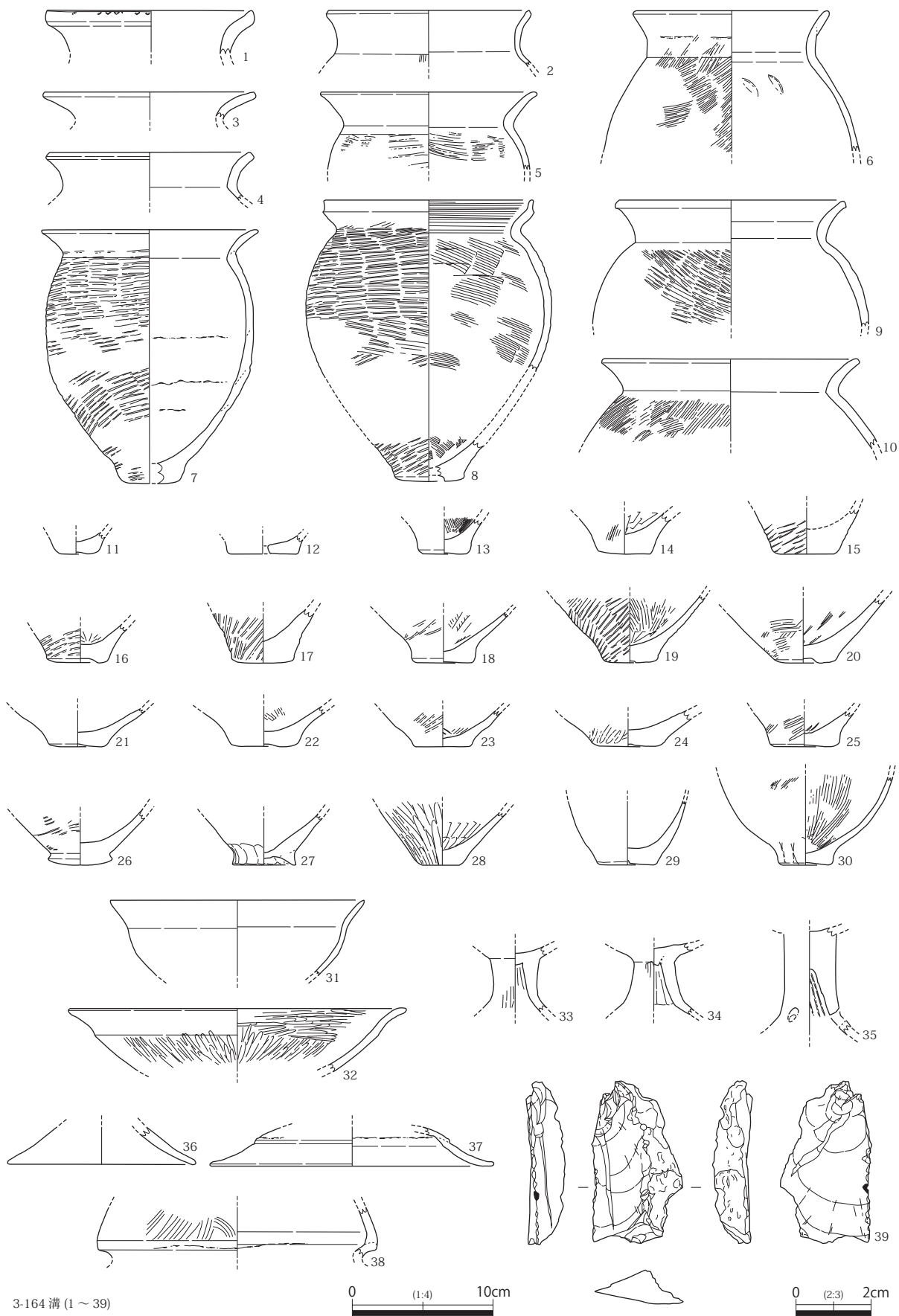


图 163 溝出土遺物実測図 (弥生時代後期後半～古墳時代初頭) 1

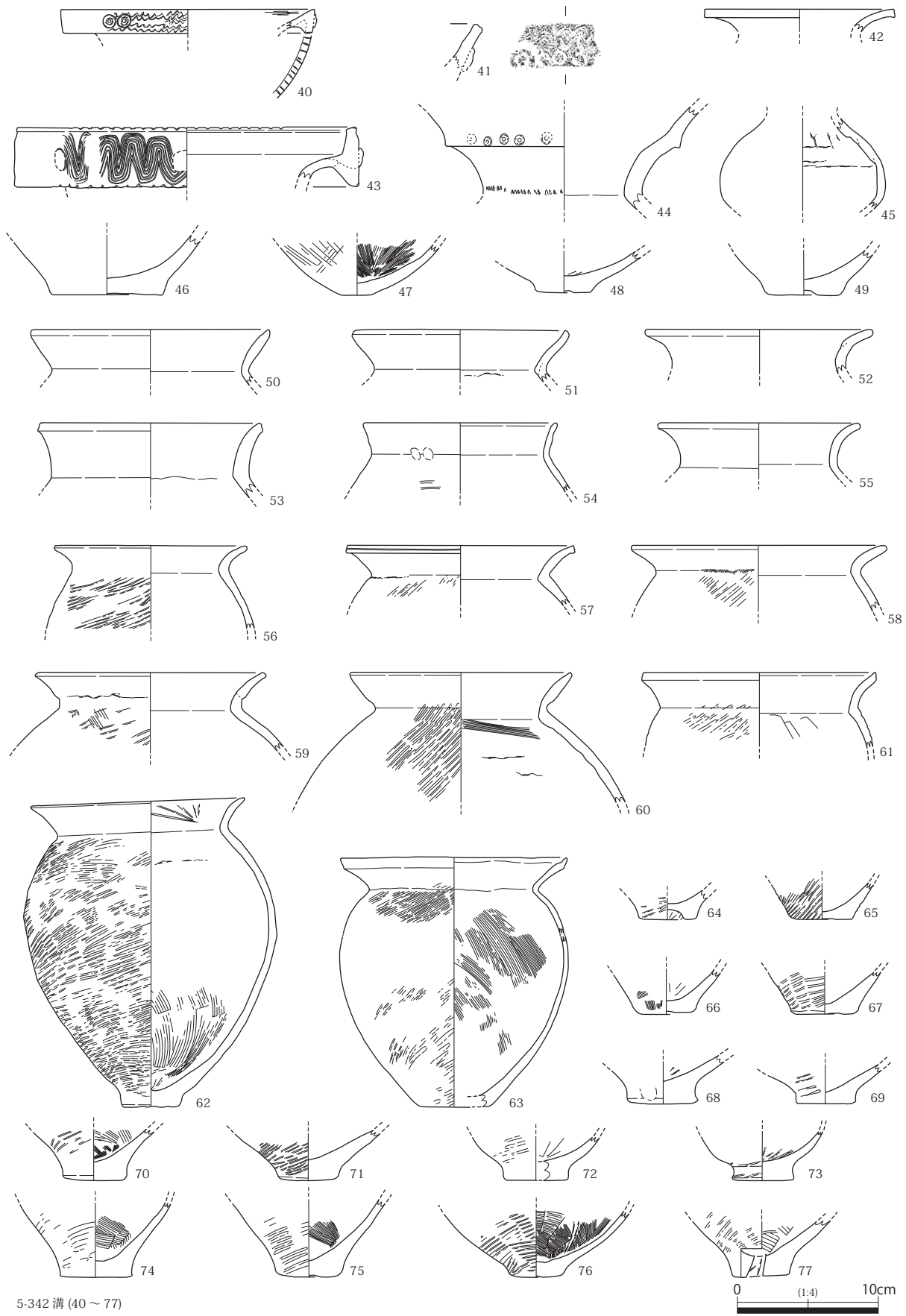
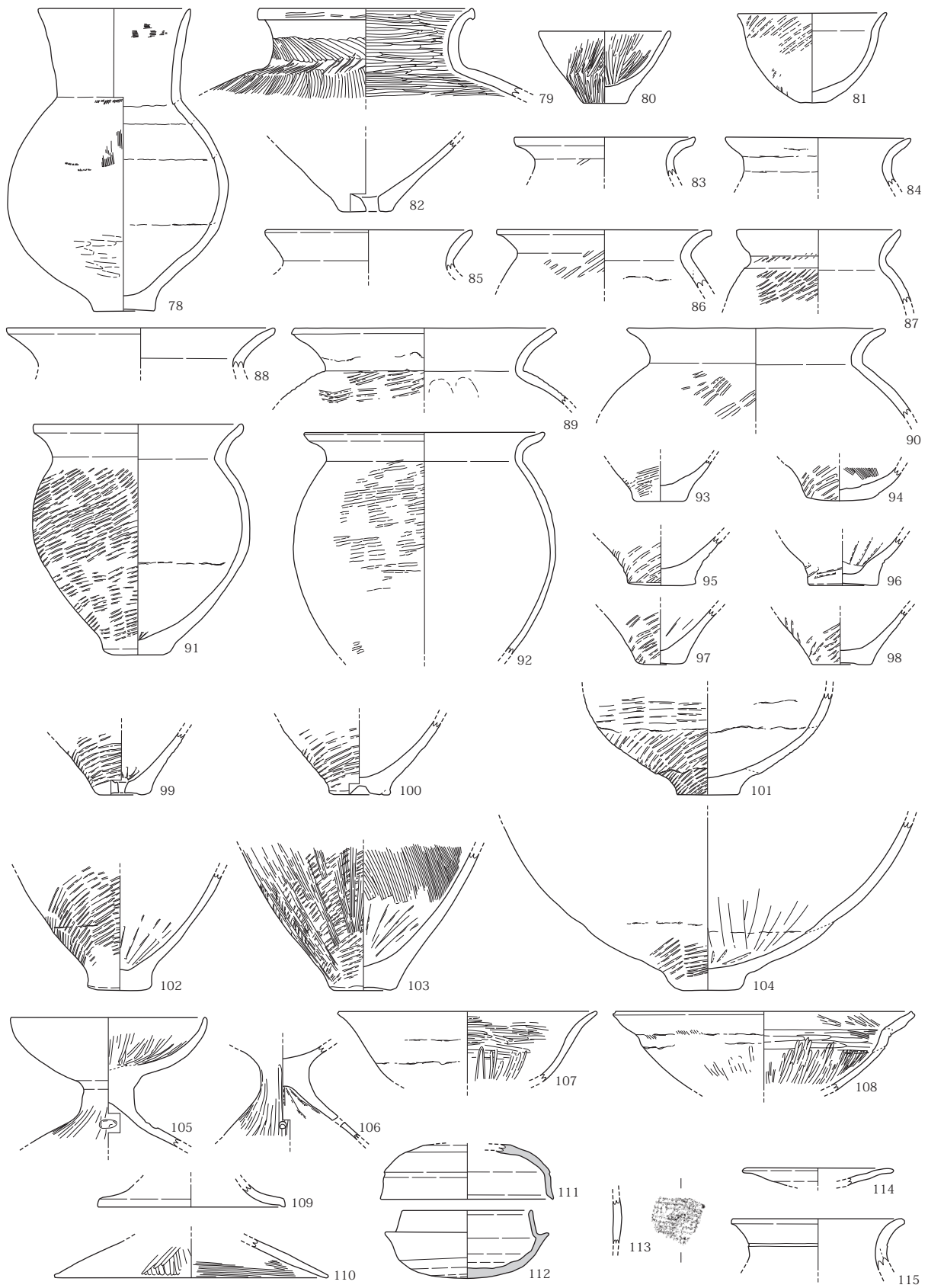


图 164 溝出土遺物実測図 (弥生時代後期後半～古墳時代初頭) 2





5-330 溝 (83・84・86・95・96・101・106)、5-473 溝 (80・85)、5-521 溝 (78・79・87 ~ 91・94・97 ~ 100・102 ~ 104・108)  
 5-342 溝 (81・105・107・109・110・113・115)、5-614 溝 (92・111・112・114)、6-99 溝 (82・93)

0 (1:4) 10cm

图 165 溝出土遺物実測図 (弥生時代後期後半~古墳時代初頭) 3

的に伸び、端部は丸くおさまる。内外面ミガキが施される。82は壺底部とみられる。底部中央に焼成後穿孔がみられる。83～86は甕口縁部である。86は口縁端部に面をもつ。体部外面にタタキが施され、内面には粘土接合痕がみられる。93・95・96・101は甕の底部である。101はやや突出した底部で、球形の体部とみられる。体部中程は水平方向、下半は右上がりのタタキが施される。また内外面に粘土接合痕がみられる。106は高杯である。柱部が短く、裾部へは緩やかに屈曲し、裾部に3方向の透かし孔がある。外面にミガキが施される。105と同様のものと考えられよう。いずれも弥生時代後期後半～庄内式前半のものと思われる。

5-521、5-614溝(図162:図版39-7・8) 3-164溝の西端から分岐する溝である。5-521溝は、やや蛇行して東西方向に延び、西側で直角に近い角度で二手に分岐する。そこから幅広の溝として西に延びているが、この地点では基盤層となっている第7b層と、溝埋土の砂層との判別がつきにくく、平面プランを誤認している可能性がある。また、この溝の続きを4区で確認することはできなかった。長さ74m、幅1～4.5m、深さは東端で0.36m、西端で0.14mを測り、西方向に下る。断面は皿形を呈し、埋土は砂層である(図161下段左)。5-614溝は、やや弧状に東西方向に延び、西端で途切れているが、5-521溝に合流していた可能性がある。長さ28m、幅1m、深さは東端で0.23m、西端で0.18mを測り、西方向に下る。断面は皿形で、埋土は砂層である。

出土した遺物のうち、弥生土器・土師器22点を図示した(図165・166)。78・79・116・117は壺である。78は長頸壺で、口縁部は直線的に立ち上がる。体部中程に最大径をもつが、それほど張らない。摩滅が著しいものの、体部外面上半にハケ、下半にミガキ、口縁部内面にハケがみられ、体部内面には粘土接合痕が残る。79は広口壺とみられ、やや頸部は短い。口縁端部は上下方向にわずかに拡張する。内外面ミガキが施される。116は大型壺の体部上半である。球形の体部で、外面にはミガキ

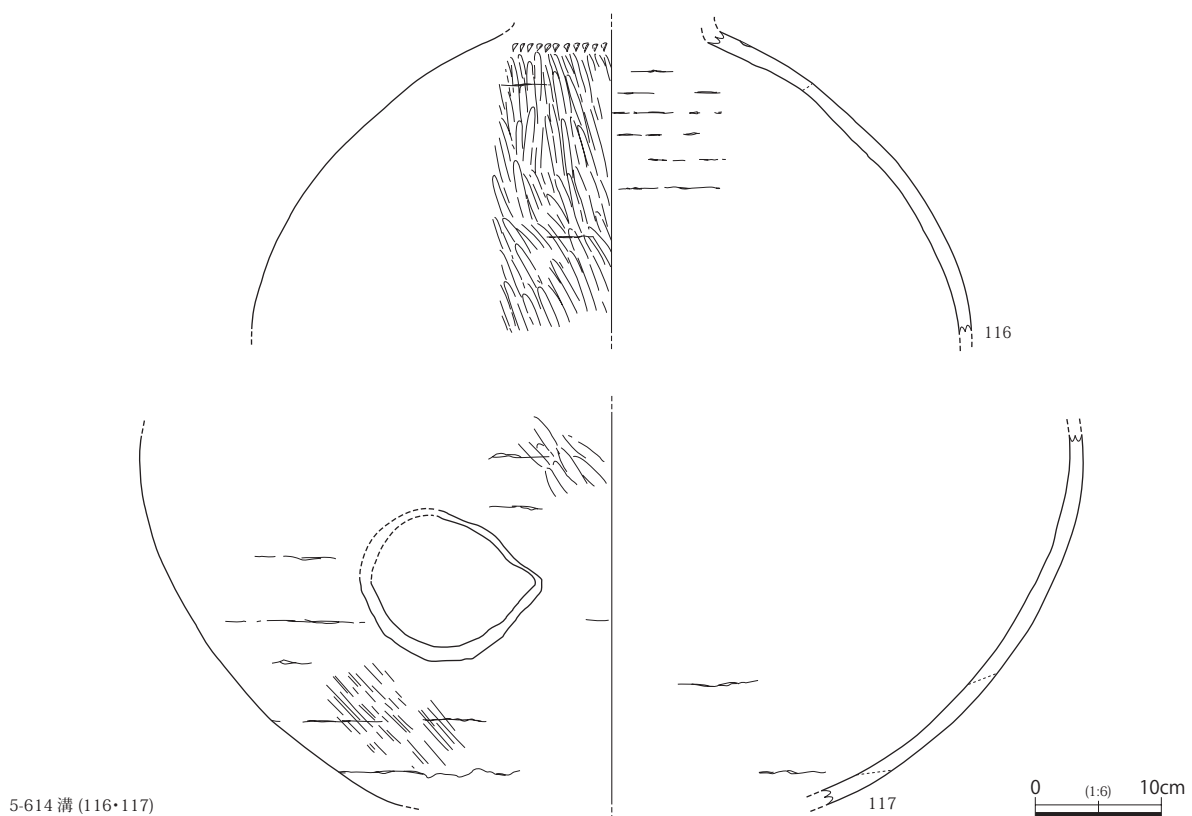


図166 溝出土遺物実測図(弥生時代後期後半～古墳時代初頭) 4

が施される。頸部と体部の境界に刺突文が巡る。内外面には粘土接合痕が残る。117は大型壺の体部下半である。球形の体部で、やや下がった位置に焼成後穿孔がされる。摩滅が著しいものの、外面の一部にミガキがみられる。内外面に粘土接合痕が残る。87～92は甕である。89は口縁端部に面をもち、頸部の屈曲が強く体部は球形になるものとみられる。外面にタタキが施される。91は口縁部がやや内湾し、外面に弱い稜線をもつ。肩部はそれほど張らず、底部は平底である。体部外面はタタキが施される。94・97～100・102～104は甕の底部である。99は底部中央に焼成後穿孔がされる。100は底部中央に窪みがみられるが、焼成後の穿孔途中のものともみられる。103は平底で、外面はタタキ後、ハケ、内面の中程にハケ、下半にナデが施される。104は球形の体部で、底部はやや突出する。摩滅が著しいものの、外面にタタキ、内面にナデがみられ、内外面に粘土接合痕が残る。108は鉢である。口縁部が短く屈曲し、端部に面をもつ。内外面にはミガキが施される。以上の土器は、弥生時代後期後半～庄内式前半のものともみられる。111は須恵器の蓋杯、112は須恵器の杯身である。いずれもTK23～47段階のもので、混入遺物である。114は小片で磨耗が著しい。皿状の形状を成すが器種不明。

#### ・溝周辺出土の土器について

溝周辺には多数の土器がみられ、これらは第7a層もしくは第7b層の出土であるが、遺存状態が良く、出土地点を記録している。ここでは、最も出土数が多い5区と、その周辺部にあたる1・2・4区とに分け、それぞれについて述べる。

5区(図162:カラー図版2-1) 5区においては、特に5-342溝と5-521溝に挟まれた5区中央部にあたる地点に集中してみられた。土器の出土状況をみると、単体のものや2～3個体が並んだ状態のものが主であったが(図版40-1～41-4)、甕の中に礫が入っているものや(図版41-5)、中型の甕に小型の甕を入れた状態のものもみられた(図167、図版41-6・7)。特徴的なのは、溝内出土の土器よりも遺存状態が良く、完形に近い状態に復元できるものが多数である点が挙げられる。以上のような出土状況から、これらの土器は溝によって流されたり、上層の攪乱などにより大きく移動したものではなく、原位置の状態を保っている可能性が高い。単に廃棄された土器も含まれているとみられるが、多くのおそらく溝周辺に意図的に置かれたものと考えられる。なお土器の全体的な時期を概観すると、甕などは体部の球形化が進み、底部の突出がみられないものもみられるなど、庄内式前半の土器が

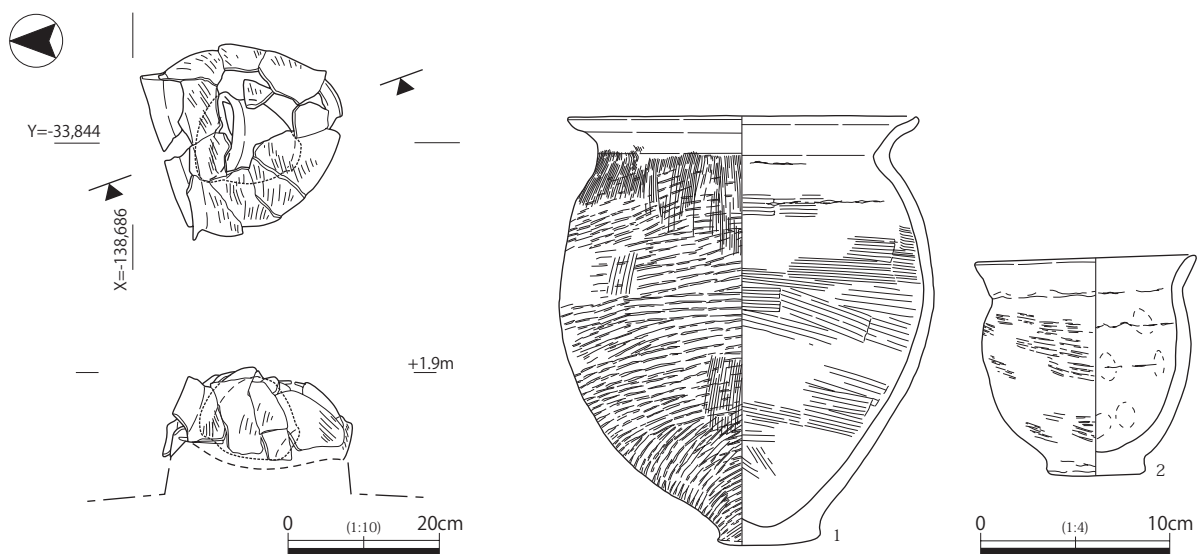


図167 溝周辺土器出土状況図および遺物実測図

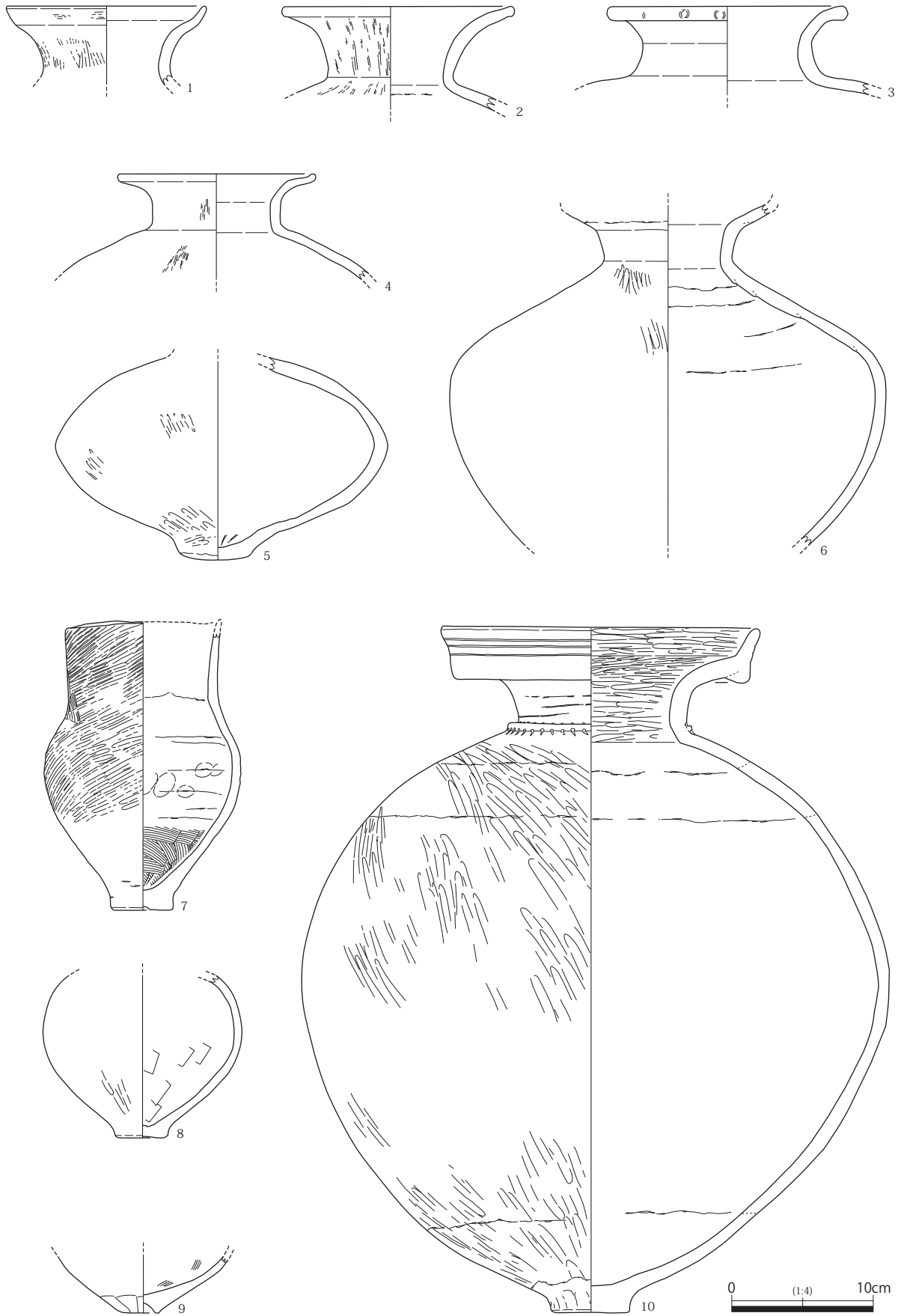


图 168 溝周辺出土遺物実測図（弥生時代後期後半～古墳時代初頭） 1

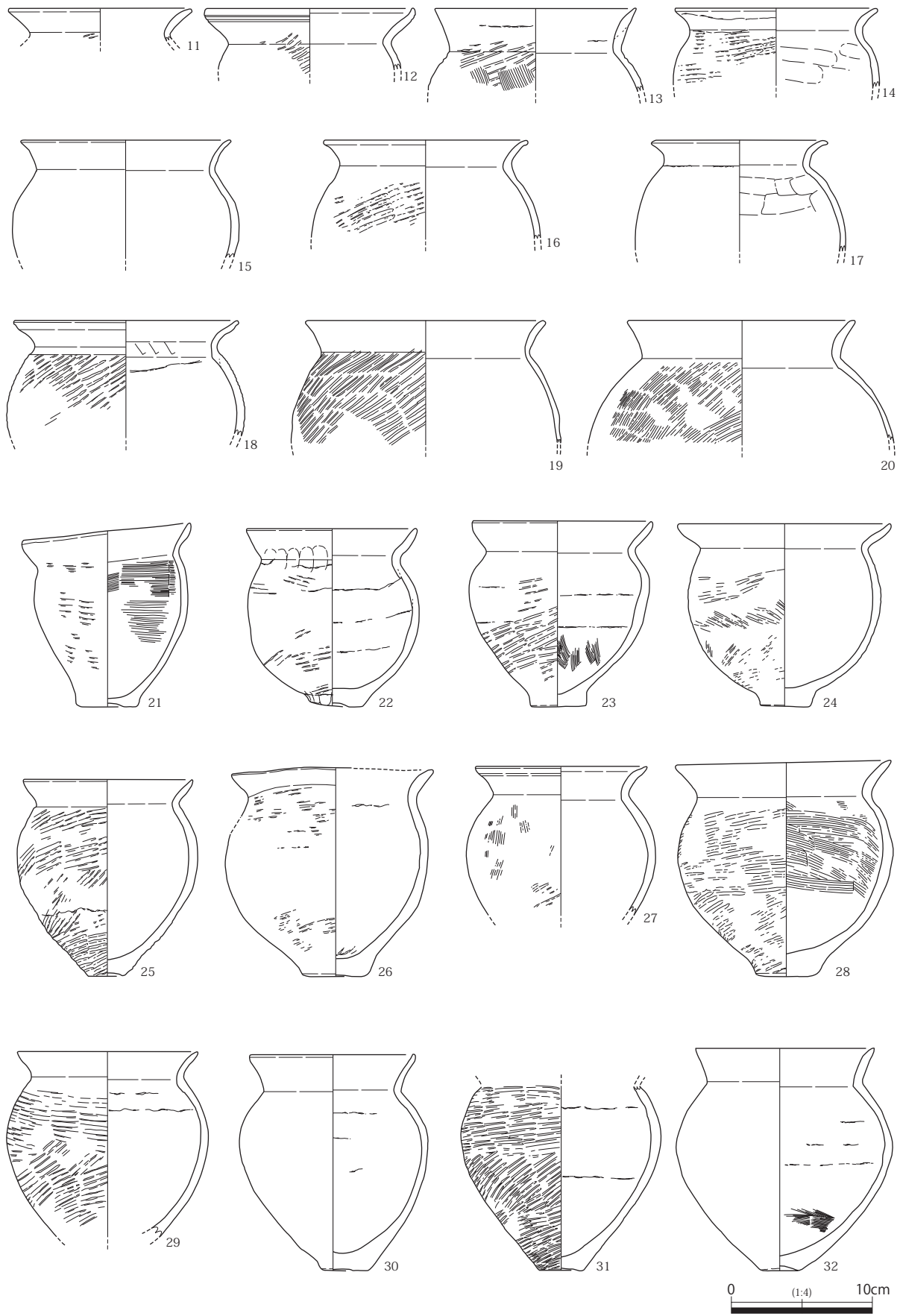


図 169 溝周辺出土遺物実測図（弥生時代後期後半～古墳時代初頭） 2

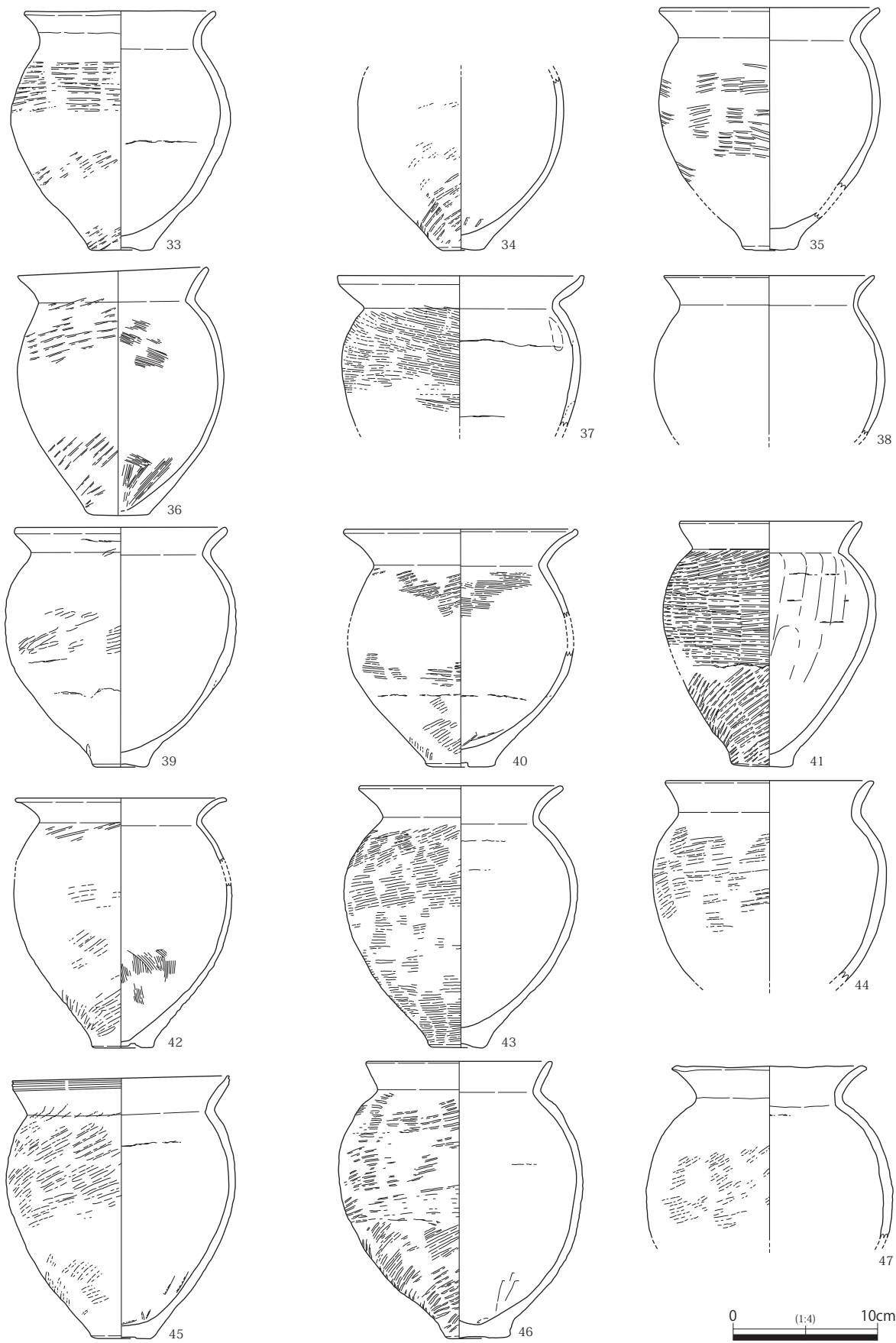


图 170 溝周辺出土遺物実測図（弥生時代後期後半～古墳時代初頭） 3



图 171 溝周辺出土遺物実測図（弥生時代後期後半～古墳時代初頭） 4

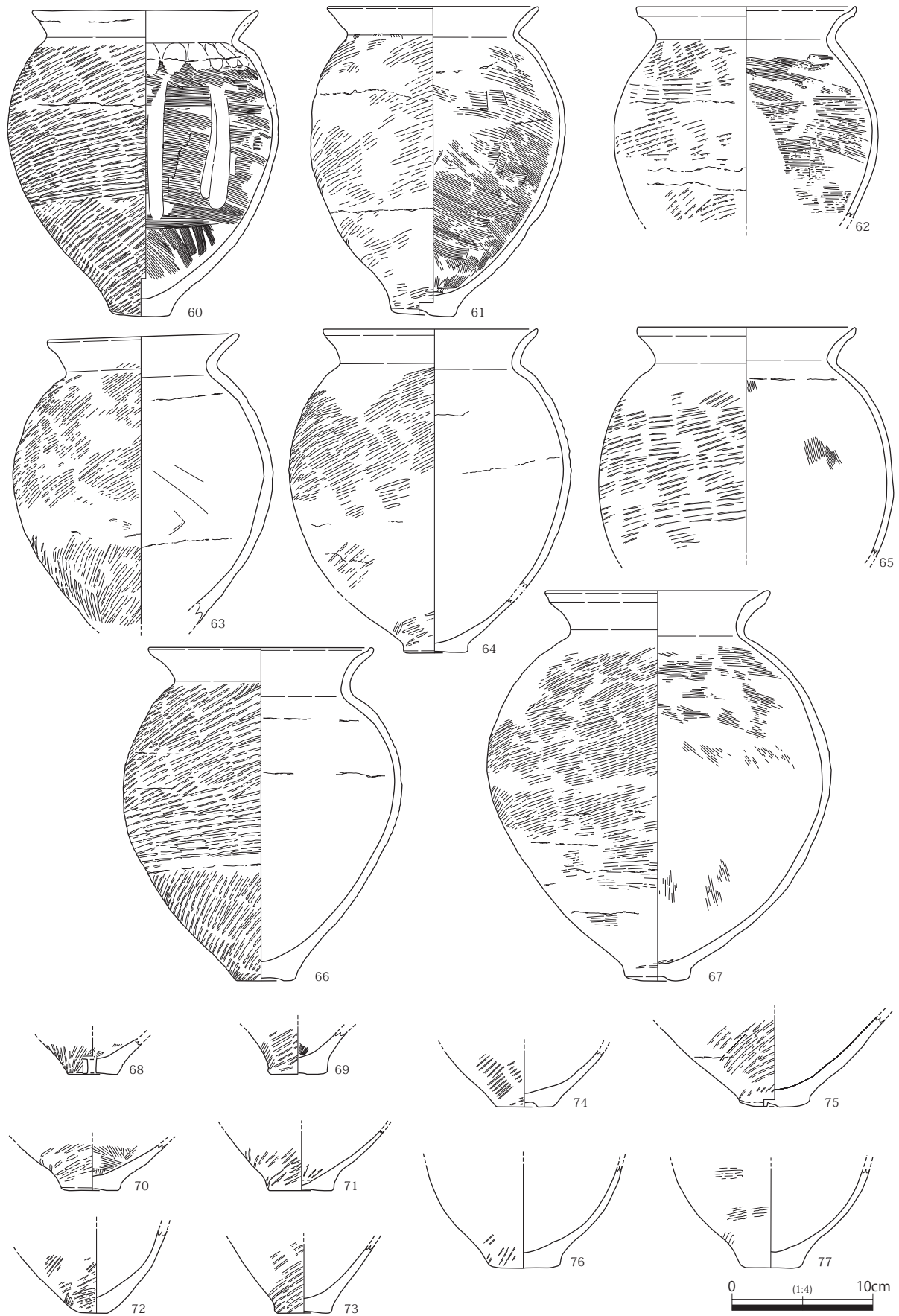


図 172 溝周辺出土遺物実測図（弥生時代後期後半～古墳時代初頭） 5



多くを占める。

出土した土器のうち、弥生土器・土師器 89 点、土製品 1 点を図示した（図 167-1・2、図 168～173）。図 168- 1～10 は壺である。2 は広口壺で、頸部から緩やかに外反し、端部は丸くおさまる。頸部外面にミガキが施される。3 は広口壺で、頸部で屈曲し、口縁部はやや肥厚する。口縁部外面に竹管文が施される。5 は壺の体部で、体部中程がかなり張る。外面にミガキが施される。6 は二重口縁壺か。頸部が直線的に伸び、肩部が張る。体部外面の一部にミガキ、内面に粘土接合痕がみられる。7 は長頸壺で、口径が大きく、頸部は直立する。底部はがやや突出し、中央部はわずかに窪む。外面にタタキ、底部内面にハケが施される。また体部内面には指頭圧痕、粘土接合痕が残る。10 は広口壺で、口縁部は上下に拡張され、頸部はややすぼまる。体部は球形で、底部は平底である。口縁部外面に 3 条の平行沈線が施され、頸部と体部の境界に貼り付けられた粘土紐の上端部と下端部に刺突文が巡る。体部外面と口縁～頸部内面にミガキが施される。

図 167-1・2、図 169-11～図 172-77 は甕である。図 167-1・2 は、1 の中に 2 が入った状態で出土した。1 は口縁部外面に弱い稜線をもつ。頸部の屈曲は強い。体部は球形で、底部は平底である。体部外面にはタタキ後、一部縦方向のハケ、内面は横方向のハケが施される。2 は口縁部が短く屈曲し、体部はやや丸みをもつ。底部は平底である。体部外面にはタタキが施され、内面には指頭圧痕、粘土接合痕が残る。24 は口縁端部がわずかに内湾し、体部は球形で、底部がやや突出する。体部外面はタタキ、内面はナデが施される。37 は体部上半に左上がりのタタキが施される。なお、左上がりのタタキは、今回出土した土器にはほとんどみられない。45 は口縁端部が上方に伸び、外面に横ナデにより沈線状の稜線が巡る。頸部の屈曲が強い。体部外面にタタキ、内面にナデが施される。56 は口縁部が直線的に伸び、肩部が弱く張る。平底の底部は、やや突出する。体部外面中程に左上がりタタキ後、右上がりタタキが施されているため、一部格子目状になる。体部内面下半にハケが施される。67 は最も大

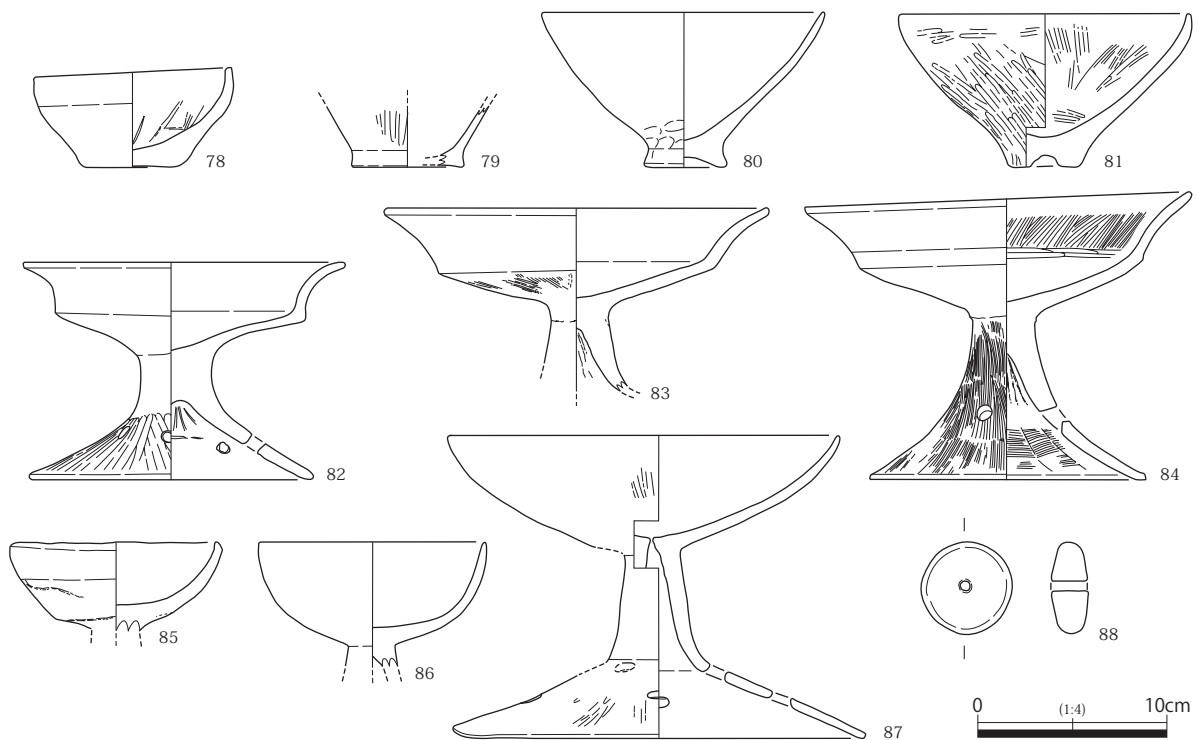


図 173 溝周辺出土遺物実測図（弥生時代後期後半～古墳時代初頭） 6

型の甕で、口縁端部が厚く、外面に弱い稜線をもつ。体部中程が張り、やや突出する底部中央には、ドーナツ状に窪みがみられる。体部外面にはタタキ、内面にはハケが施される。68～77は甕の底部である。68は底部中央に焼成後穿孔がされる。

78～81は鉢である。78は口縁部が内湾気味に立ち上がり、底部内面には筋状の工具痕がみられる。80は口縁部が直線的に立ち上がり、底部が外方に拡張され上げ底状になる。81は口縁部がやや内湾して立ち上がり、底部中央は窪み、ドーナツ状となる。内外面にミガキが施される。

82～87は高杯である。82は口縁部が外反し、杯部外面にやや強い稜をもつ。柱部が短く、裾部へは緩やかに屈曲する。裾部には5方向の透かし孔がある。裾部外面にはミガキがみられる。84は口縁部が外反し、杯部外面に弱い稜をもつ。裾部には3方向の透かし孔がある。杯部内面にミガキ、柱部～裾部にはハケが施される。87は杯部がやや浅く、柱部から裾部への屈曲は強い。裾部には互い違いで2段4方向の透かし孔がある。外面の一部にミガキがみられる。なお、杯部底部中央に細い孔があり、柱部内面と繋がっているが、これは意図的なものではないと考えられる。

88は土製紡錘車である。中央部に焼成前穿孔がされ、外面にはナデが施される。

1・2・4区(図174) 5区の南西側にあたるこの調査区では、遺構は検出されておらず、土器が点在する状況であった。ただ4区の北東側では土器がやや集中しており、5区での溝周辺に土器が置かれている状況から推測すると、5-521溝は土器が集中する辺りまで延びていた可能性がある。また、1区北東から4区南東にかけて帯状に分布する土器は、弥生時代前期末に形成される微高地に沿っており、庄内期までこの微高地が残存していたことを示唆する。

出土した土器のうち、弥生土器・土師器25点を図示した(図175)。1～19が4区、20～23が1区、24・25が2区からそれぞれ出土している。

1～3は壺である。1は直口壺で、口縁部はやや外方に直線的に立ち上がり、頸部はすぼまる。体部中程が張り、底部はやや尖底気味である。底部からやや上の位置に、焼成後穿孔がされる。外面にはミガキ、口縁部内面にはハケが施され、体部内面には指頭圧痕、筋状の工具痕がみられる。2は広口壺で、口縁部が上下に拡張され、外面には多条の平行沈線の後、円形浮文が貼り付けられる。内外面にミガキが施される。

4は高杯である。口縁部が内湾し、外面に弱い稜をもつ。柱部から裾部は直線的に伸びる。杯部の内外面にミガキがみられる。時期的にやや古い弥生時代後期前半のものと思われる。

5～8・10～19は甕である。16は口縁部は直線的に伸び、端部は丸くおさまる。体部は球形で、平底の底部である。体部外面はタタキ、内面はハケが施される。また体部外面には

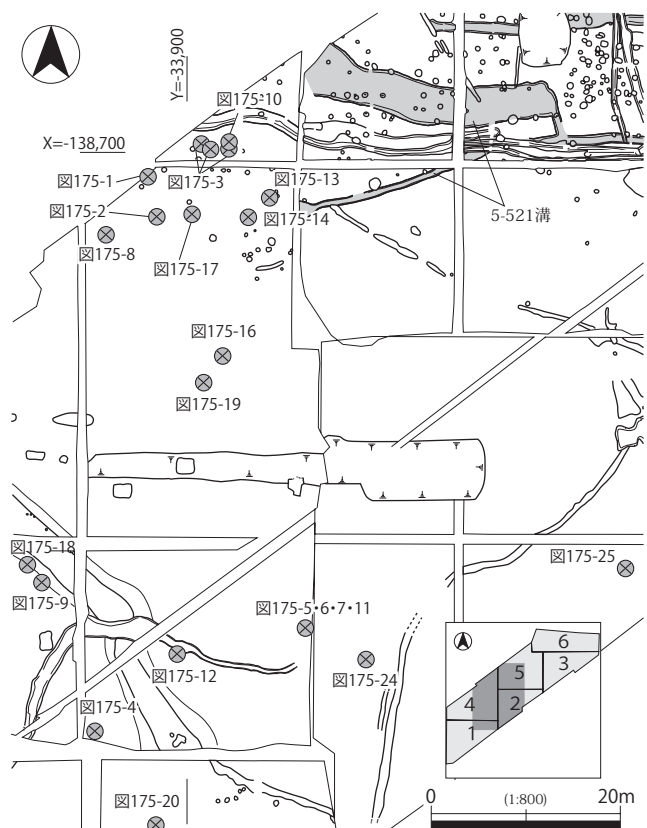


図174 1・2・4区 土器出土位置図

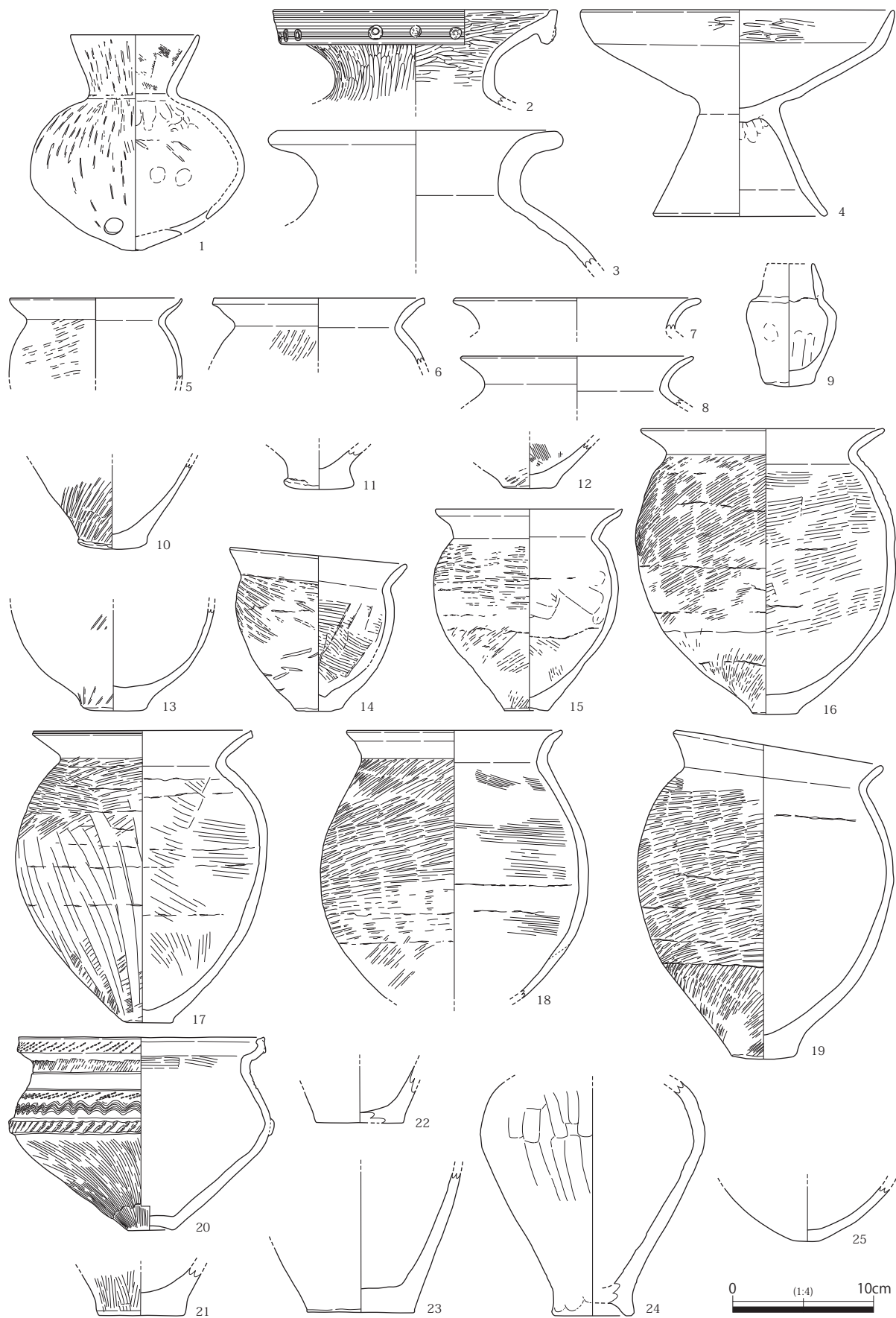


图 175 1·2·4区 出土遗物实测图

粘土接合痕が残る。17の口縁端部の面には、ナデにより沈線状の稜線がみられる。体部は肩部がやや張り、平底の底部である。頸部下の外面には左上がりタタキ後右上がりのタタキが、体部中程～底部外面にかけては右上がりタタキ後ナデが、体部内面にはハケが施される。

9はミニチュア土器である。口縁部が内傾して伸び、肩部に稜をもつ。内外面ナデが施される。

20は鉢である。受け口状の口縁部で、体部中程に粘土紐貼り付けによる突帯をもつ。櫛状工具による列点文が、口縁部外面、体部外面上半、突帯上に施され、さらに頸部下には間隔を空けて2条の沈線、突帯よりやや上の位置には4条一単位の波状文が施される。外面の頸部から底部にかけてハケ、頸部内面にはやや粗いハケが施される。近江系の土器と考えられる。

21～25は壺もしくは甕の体部から底部である。24は壺か。肩部が張り、底部は上げ底状である。体部外面にはケズリが施される。以上の土器群も、5区と同様、庄内式前半のものが主体である。

ここまでで触れた土器は、それぞれ出土位置を記録したものに限定されているが、包含層として取り上げた土器のなかにも、本来、溝周辺に置かれていた土器も含まれているとみられる。したがって、土器の詳細は後述することとして、包含層からの土器の出土状況もあわせてみてみよう（図176）。調査区北東側にあたる3区と6区の東側、調査区南西側にあたる1区の南側からは土器は出土しておらず、3区から5区に延びる溝を中心に、東西方向に土器が分布している。そのなかでも、5区の中央部から西側にかけて密に出土している。1・2・4区は5区に比べると、5-521溝が延びると予想された4区北東側を除いて、出土が少ない。

当調査地周辺に目を向けてみると、北東側に位置する讚良郡条里遺跡03-2・03-3調査地において

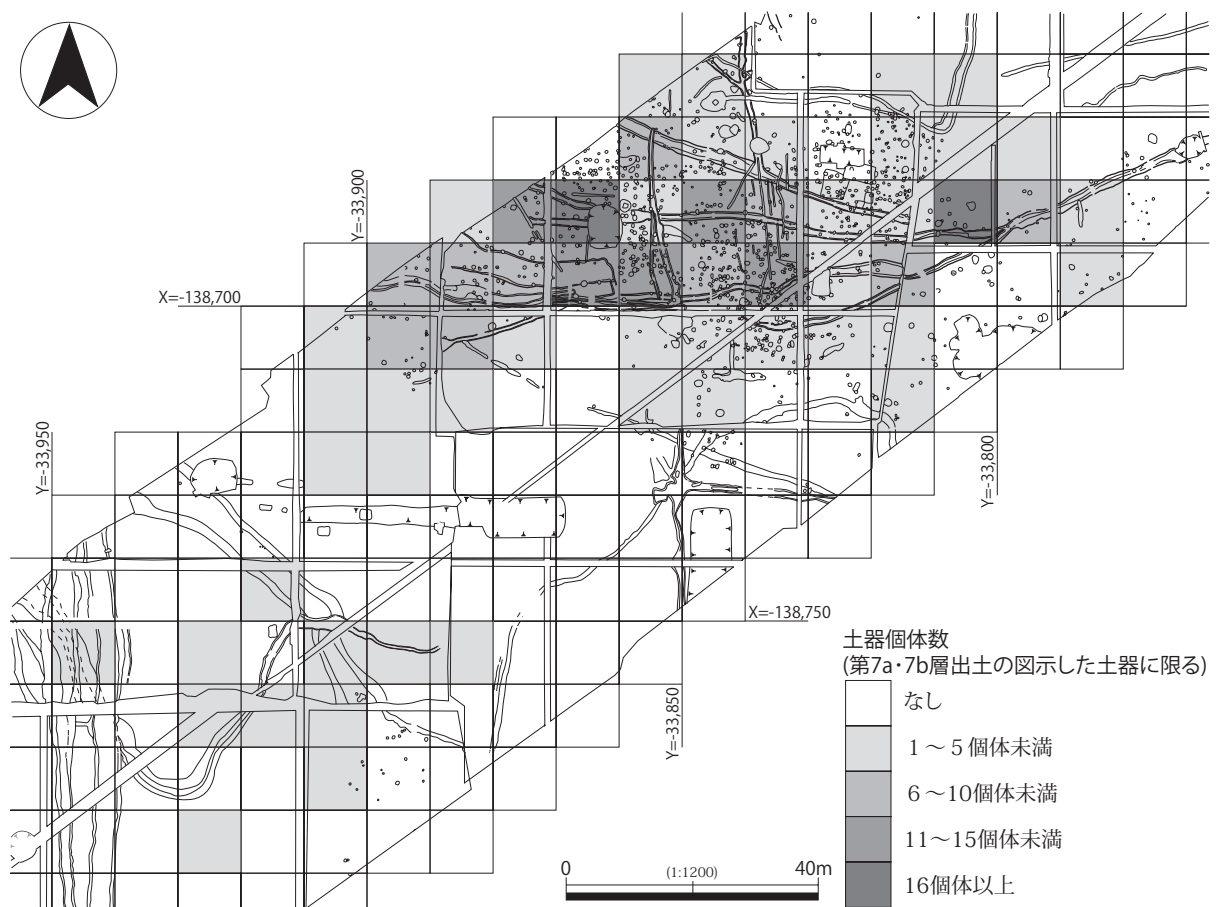


図176 出土遺物量分布図（弥生時代後期後半～古墳時代初頭）

も、同時期の溝が検出されているが、遺物がほとんどみられない（大文セ 2006b・2007a）。それに対し本調査地において、特に溝周辺に土器が多く出土する理由としては、本調査地が丁度、扇状地先端部の沖積低地に立地し、溝の下流の湿地際にあたるという、立地条件の違いに起因していると思われる。本遺跡と立地環境が近似する池島・福万寺遺跡でも、同様の時期の土器が、流路や落ち込みなどに多く含まれる状況が確認されている（大文セ 2002c・2007b）。本調査地は東から西に向かって緩やかに下る地形で、標高の高い東側は、後世の攪乱の影響で、当時の状況とは異なる可能性があるものの、溝周辺から出土している土器は、西側に多く分布している。つまり、より溝を流れる水が湿地に注ぐ付近で、土器を置くあるいは廃棄するという行為が頻繁に行われていたと推測される。そういった湿地際での行為の内容を、具体的に明らかにすることはできないが、甕に礫を詰めたり、大小の甕を入れ子にするなど、単に水汲みといった行為だけにとどまらない、何らかの祭祀行為が想定される。

## 2. その他の遺構

5区を中心に、小規模な溝・土坑・ピットが検出されている（図 162）。土坑・ピットは、主に 5-342、5-521 溝周辺に多いことから、溝に関連する遺構である可能性がある。ただし、検出された遺構の中には、それらの溝を切っているものがあり、そういった土坑・ピットからの出土遺物は、元々は溝に伴う遺物であった可能性が考えられる。また、先でみたように、溝周辺には多数の土器が廃棄あるいは置かれていた状況であり、土坑やピットの掘削・埋没の過程において、それらの遺物が混入することは容易に想定される。そのため、当該期以降に属す遺構が含まれている可能性がある。

**5-854 溝** 5区の西側に位置する。北西-南東方向を軸にもち、調査対象外である北西側にさらに延びるものとみられる。中央の一部が途切れているが、軸方向から同一の溝とみてよいだろう。長さ 14m、幅 0.5m、深さ 0.1～0.3m を測る。埋土から土器片が出土し、そのうち土師器 2 点を図示した（図 178）。いずれも甕の底部で、外面にタタキが施される。弥生時代後期後半～庄内式前半のものと思われる。ただこの溝は、5-342、5-521 溝を切っていることから、それらからの混入遺物とも考えられ、遺構の形成自体は新しくなる可能性がある。

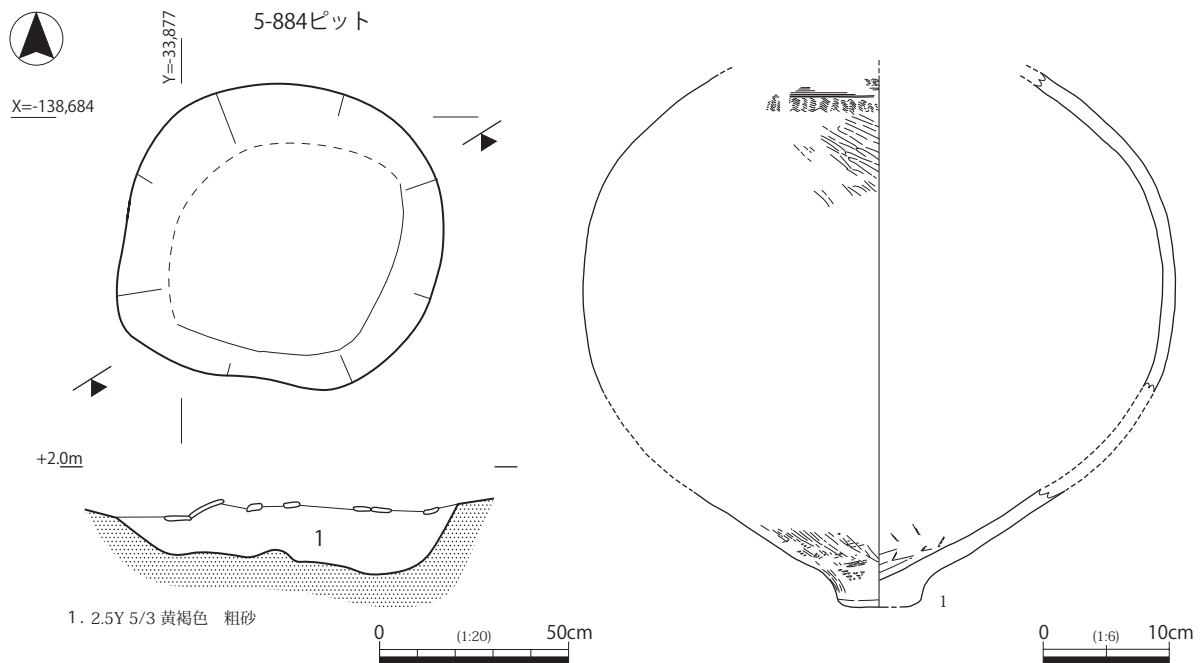
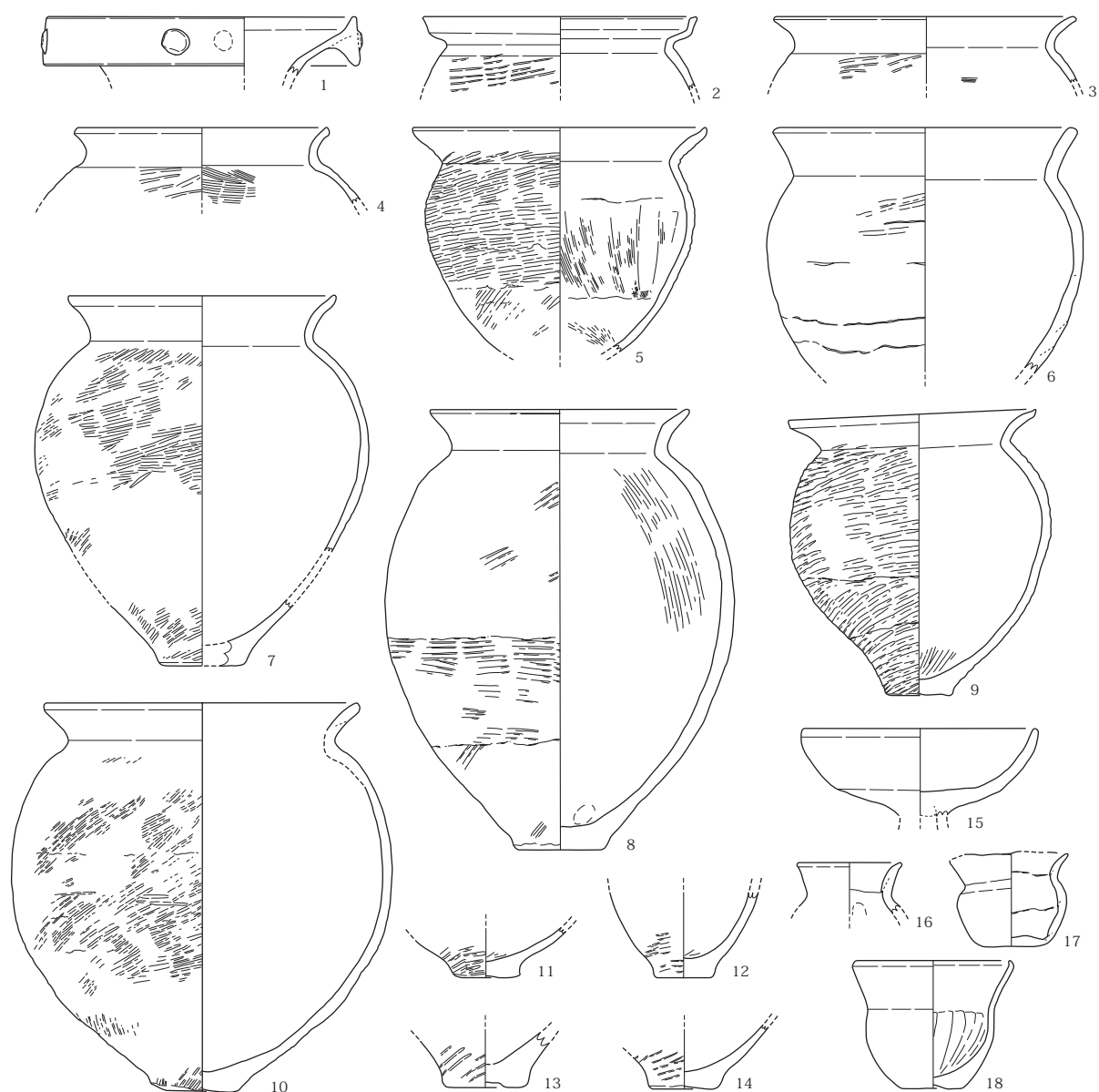


図 177 5-884 土坑 平面図および断面図

5-884 土坑 (図 177: 図版 41-8) 5 区の西側に位置する。径 0.9m のほぼ円形の土坑で、深さは 0.1 ~ 0.15m と浅い。埋土は粗砂である。埋土から大型壺 1 点が出土した。1 は口縁部から頸部を欠くが、体部は球形で、突出した平底の底部をもつ。外面の頸部下とみられる位置に、櫛状工具による多条沈線文があり、その上下には波状文が施される。体部外面にはミガキがみられるが、底部付近ではタタキ後、ミガキが施されている。庄内式前半のものと思われる。

その他の土坑・ピットからの出土遺物 (図版 42-1・2) 上記の遺構以外にも、土坑・ピットが 3 区で 1 基、5 区で 13 基検出されている (図 162)。出土した遺物のうち、弥生土器・土師器 18 点を図示しているが (図 178)、いずれも弥生時代後期後半~庄内式前半に位置付けられるものである。

1 は壺で、上下に拡張された口縁部外面に、円形浮文が貼り付けられる。2~14 は甕である。2 は、受け口状の口縁部をもち、端部に水平の面をもつ。体部外面にやや細目のタタキが施される。近江



3-150 土坑 (1)、5-369 ピット (16)、5-380 ピット (5)、5-389 ピット (17)、5-478 ピット (11)、5-486 ピット (6)  
5-530 ピット (14)、5-571 ピット (10)、5-725 土坑 (3・4)、5-733 ピット (9)、5-736 ピット (2)、5-833 ピット (8)  
5-854 溝 (12・13)、5-883 ピット (7・18)、5-888 土坑 (15)

0 (1:4) 10cm

図 178 土坑ほか出土遺物実測図 (弥生時代後期後半~古墳時代初頭)

系土器と考えられる。7は口縁端部がわずかに内湾し、肩部がやや張る。体部外面にはタタキが施される。8は口縁端部がやや外傾し、内面に弱い稜線をもつ。体部が長く、底部は平底である。体部外面にタタキ、内面にハケが施される。9は、口縁部が摘み上げられ、外面に弱い稜線をもつ。体部はやや肩部が張り、底部は平底である。体部外面にタタキが施される。10は、やや径の広い口縁部で、体部は球形、平底の底部である。体部外面にタタキが施される。15は高杯である。杯底部が平らで、やや浅い。16は小型丸底壺か。内面に粘土接合痕、指頭圧痕がみられる。17はミニチュア土器である。手づくね成形で、口縁部はやや外反し肩部が張る。なお、この土器内から、白玉8点が出土している(図193-1～8)。18は鉢としているが、口縁部がやや長いことから、小型の長頸壺の可能性もある。口縁端部がわずかに内湾し、頸部の屈曲は弱い。体部内面にはナデが施される。

### 3. 包含層出土遺物

抽出された遺物は、第7a層、第7b層ともに、5区出土のものが際立って多い。なお、土器の時期については、いずれも弥生時代後期後半～庄内式前半のもので、両層に大きな差はない。

**第7a層出土遺物** 弥生土器・土師器104点を図示している(図179～181)。それぞれを調査区別にみると、3区から28点(4・6・9・10・13・16・17・22・31・33・34・36・38・41・48・49・54・63・70・79・82・86・89・93・94・97・99・104)、4区から24点(2・8・11・20・25・27・45・51・59・62・65・67・71・76・84・85・87・88・91・92・95・96・98・103)、それ以外の52点は5区からの出土となっている。

1～12は壺である。3は二重口縁をもち、口縁部外面の下方に竹管文が施される。4は口縁端部が下方に拡張され、外面に円形浮文が貼り付けられる。6は口縁端部が上下に拡張され、その外面に櫛状工具により波状文、その下方に多条の平行沈線が施され、さらに円形浮文が貼り付けられる。8は大型の広口壺とみられる。口縁端部がわずかに上方に拡張され、外面に円形浮文が貼り付けられる。9は二重口縁で、口縁部外面には3～4段の竹管文が巡る。頸部にはミガキが施される。12は直口壺の体部とみられる。外面にミガキ、内面にハケが施される。13～49は甕である。13は受け口状の口縁部をもつもので、鉢の可能性もある。46は口縁部がやや外反し、端部は丸くおさまる。体部外面に左上がりのタタキ、内面にハケが施される。48は口縁部がやや短く、肩部がやや張る。体部下半には分割成形による段が明瞭に残る。体部外面にはタタキ、内面にはナデが施される。49は口縁端部に面をもち、その面にナデによる沈線状の稜線がみられる。体部は中程で張り、平底の底部をもつ。50～70は甕もしくは鉢の体部から底部である。62は底部が厚く、底径も小さいことから、鉢の可能性もある。64は底部に木葉の圧痕がみられ、中央がドーナツ状に窪む。66は底部中央に焼成前穿孔がされている。71～77は小型壺もしくは鉢である。71は小型壺で、短い口縁部をもち、肩部が張る。76は底部中央に焼成前とみられる穿孔があるが、摩滅が著しいため明確ではない。77は口縁部が屈曲して外方に開き、体部の立ち上がりは強く、平底の底部をもつ。口縁部外面にはミガキ、体部外面はタタキ後、ハケ、さらにミガキが施される。体部内面はハケ後、ミガキが施される。78・79はミニチュア土器である。78は手づくね成形で、頸部が緩やかに屈曲する。内外面ナデが施される。79は高杯形のもので、裾部には5方向とみられる透かし孔がある。80～102は高杯である。83は杯部が椀形で、やや浅い。84は口縁部が強く外反し、下位に稜線をもつ。内外面にはミガキが施される。86は椀形の高杯とみられ、柱部は短い。裾部には3方向の透かし孔がある。92は柱部に3方向に焼成後穿孔がされる。99は柱部が裾部にむかって開き、裾部はやや強く屈曲する。やや時期が下がった庄内式後半～布留式段階の

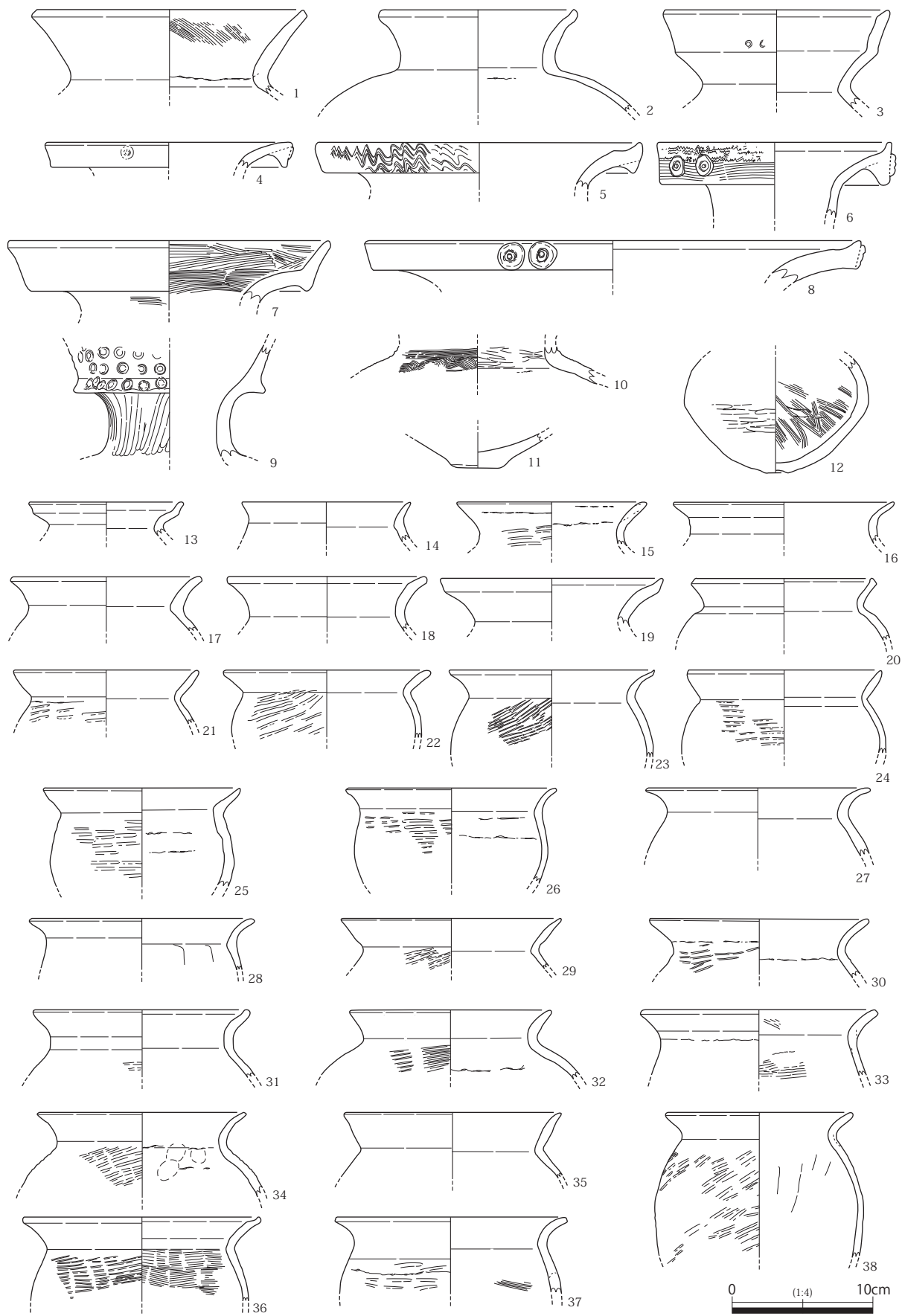


图 179 第 7a 層 出土遺物実測図 (弥生時代後期後半～古墳時代初頭) 1



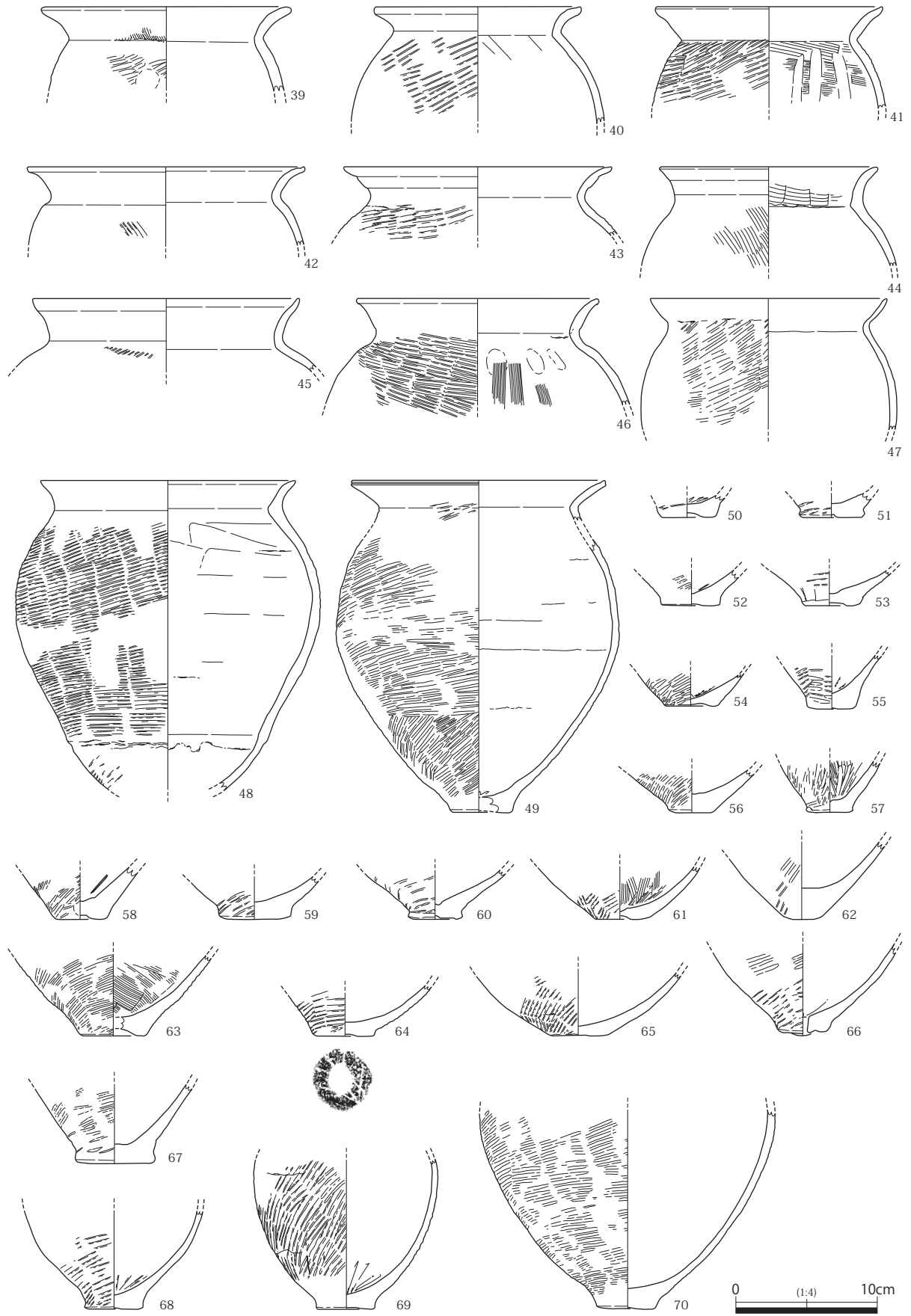


図 180 第 7a 層 出土遺物実測図 (弥生時代後期後半～古墳時代初頭) 2

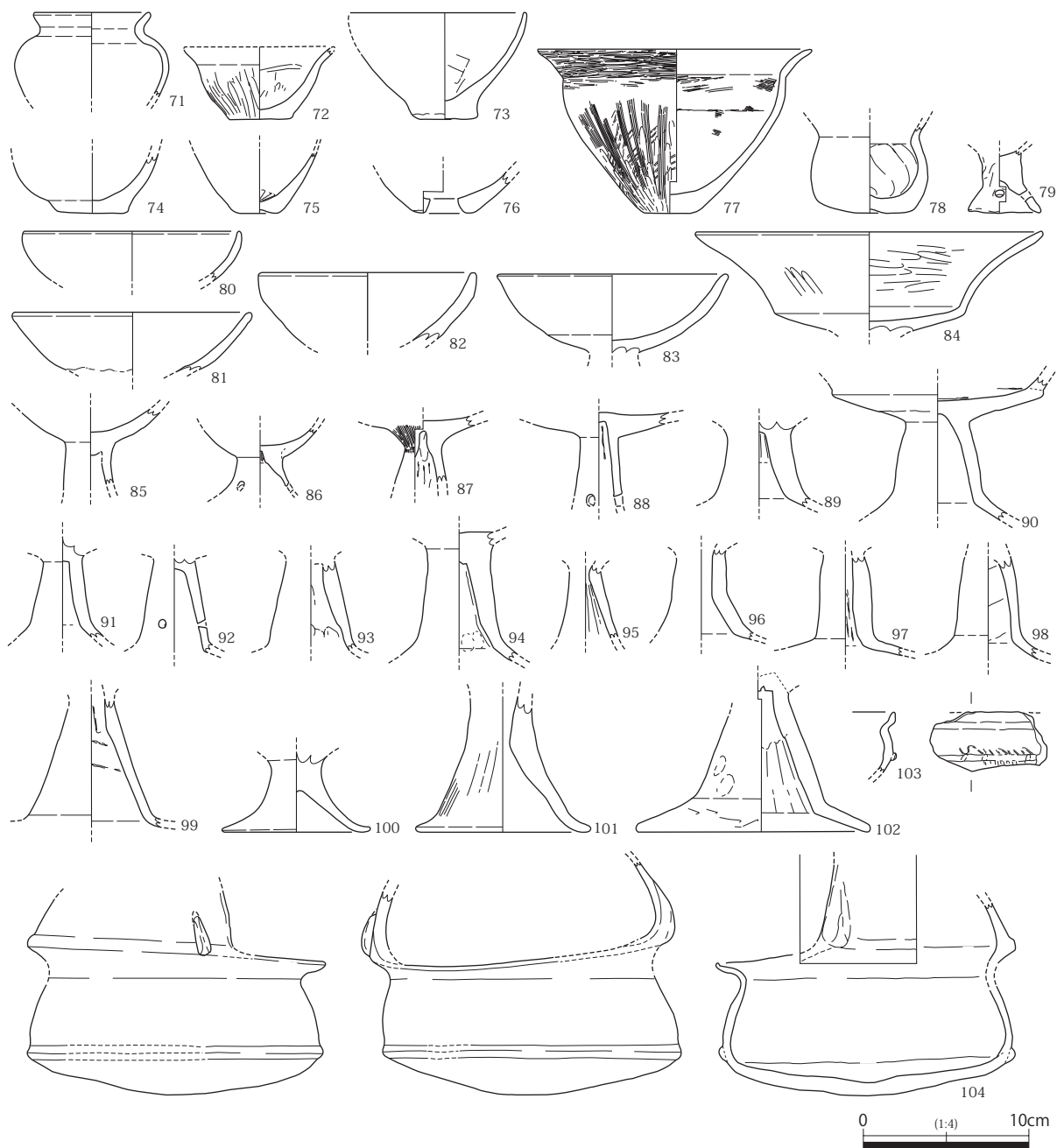


図 181 第7a層 出土遺物実測図（弥生時代後期後半～古墳時代初頭） 3

ものである可能性がある。103・104は手焙形土器である。103は受け口状の口縁部をもち、体部中程に突帯が貼り付けられる。突帯上には刻み目、その上方と下方には波状文が施される。小形鉢の可能性もある。104は開口部の両側に突帯をもつが、正面から右側のは摘み出しにより、左側のは粘土紐貼り付けによるものである。体部の下がった位置に粘土紐貼り付けによる突帯をもつ。底部に平坦面はみられない。

**第7b層出土遺物** 弥生土器・土師器59点を図示している（図182～184）。1区から3点（22・40・45）、4区から12点（4・5・6・10・20・25・26・31・39・41・55・56）、6区から1点（50）で、それ以外の43点は5区からの出土である。

1～10は壺である。3は広口壺で、口縁部が緩やかに外反する。外面にミガキが施され、頸部内面にハケと工具痕がみられる。4は長頸壺で、口縁部はやや外方に開き、直線的に伸びる。体部は下膨れ

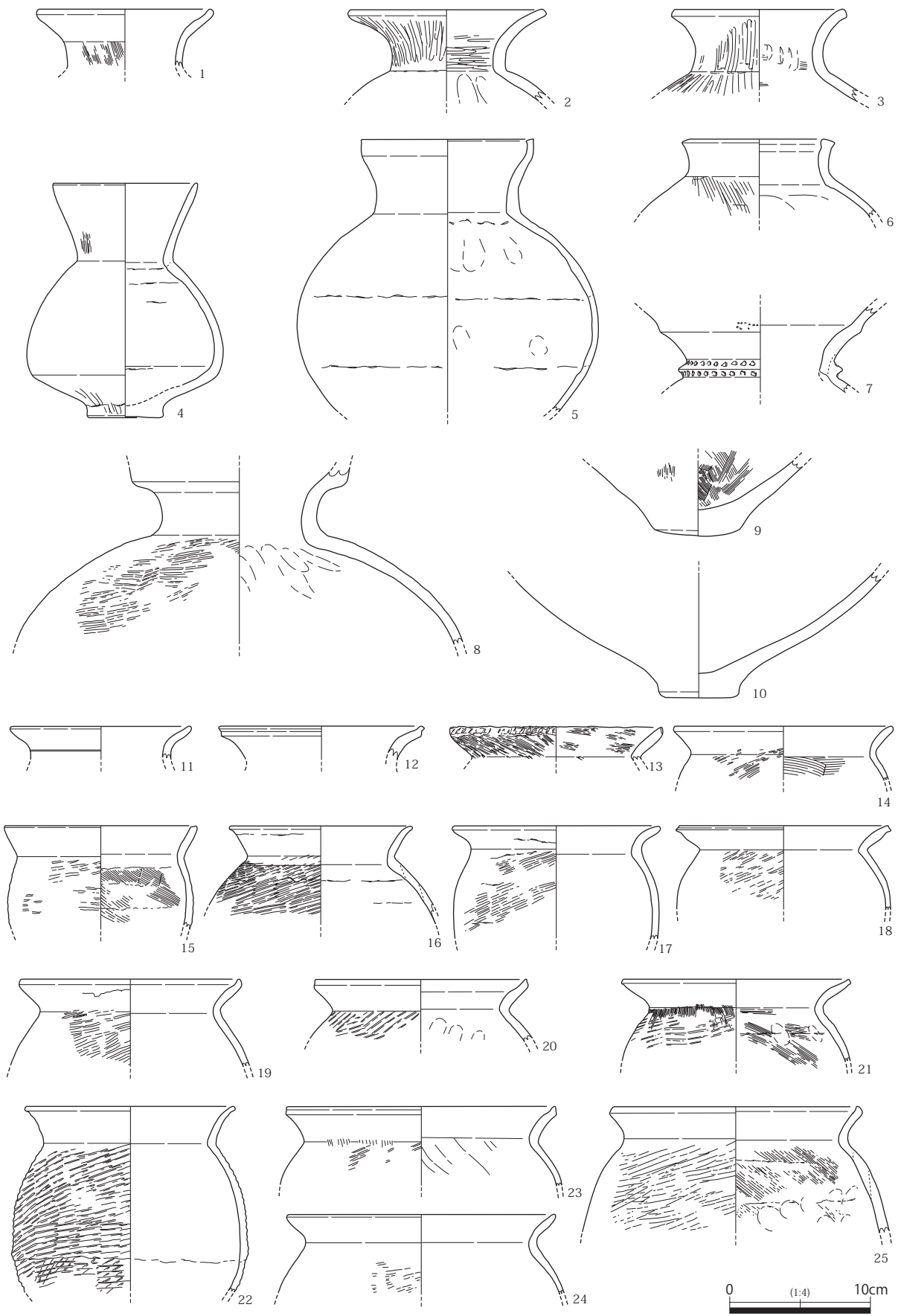


图 182 第 7b 層 出土遺物実測図 (弥生時代後期後半～古墳時代初頭) 1

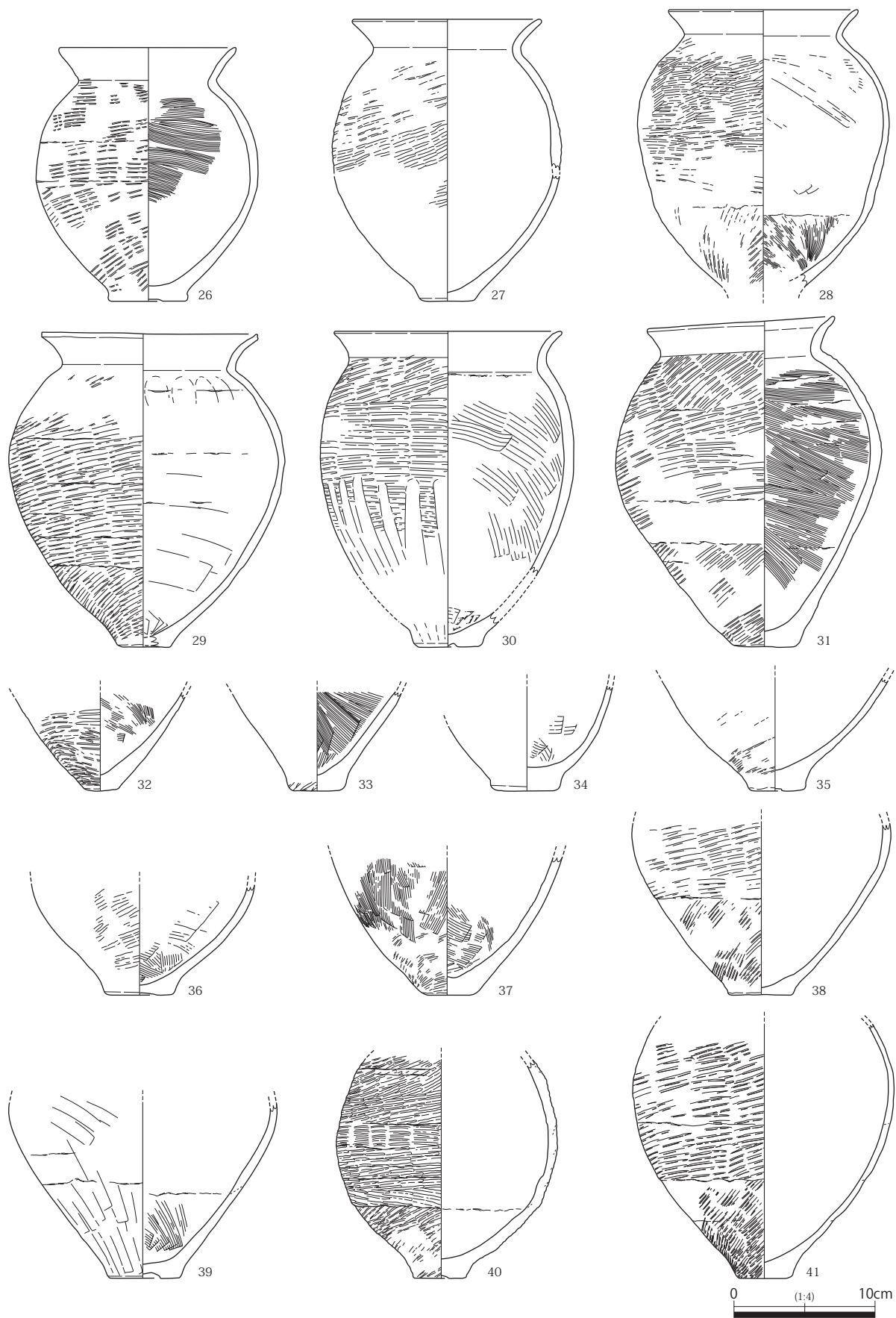


图 183 第 7b 層 出土遺物実測図 (弥生時代後期後半～古墳時代初頭) 2

で、突出した平底の底部をもつ。頸部外面にハケ、底部外面にミガキがみられる。5は長頸壺で、口縁端部がやや内湾し、端部にほぼ水平の面をもつ。体部は球形である。体部内外面に粘土接合痕が残る。7は二重口縁壺とみられ、口縁部外面の下方に、かなり細い竹管状の工具による刺突文がみられる。また頸部と体部の境界に断面三角形の粘土紐が貼り付けられ、その上面と下面に刺突文が施される。8は二重口縁で、口縁部はやや直立するものとみられる。体部外面にタタキが施される。

11～52は甕である。13は口縁端部に刻み目がみられ、内外面にはハケメが施される。22は口縁部がやや外反し、体部はほぼ球形になるとみられる。体部外面はタタキが施されるが、下半では右上がりタタキの後、平行タタキがされ格子目状となる。体部内外面に粘土接合痕が明瞭に残る。25は口縁端部が摘み上げられ、外面に稜線をもつ。肩部がやや張っており、体部は長胴形になるとみられる。体部内外面にハケが施され、体部内面には粘土接合痕、指頭圧痕が残る。28は口縁部が直線的に伸びるがやや短く、体部は肩部が張りやや長胴形となる。体部外面はタタキが施されるが、肩部では平行タタキ後、右上がりのタタキがされ格子目状となる。体部内面の上半はナデ、中程からやや下がった底部付近ではハケが施される。30は口縁部が外反し、肩部は張らない。やや突出した平底の底部中央には窪みがある。体部外面はタタキであるが、下半のみタタキ後、ナデが施される。体部内面は粗いハケが施される。32は体部が直線的に外方に開き、底径が狭く、鉢の可能性もある。37は体部が内湾気味に立ち上がり、平底の底部をもつ。体部外面はタタキ後、ハケ、内面はハケが施される。39は体部が外方に大きく開き、平底の底部中央部はドーナツ状に窪む。体部外面はヘラナデ、内面はハケが施される。46は底部に木葉の圧痕がみられる。51は底部中央に焼成前穿孔がされる。

53～56は鉢である。54は口縁部はわずかに内湾し、体部は直線的に伸びる。やや突出した平底の底部をもつ。体部外面はナデが施され、内面は不明瞭であるがハケがみられる。55は体部が椀形で、上げ底状の底部をもつ。56は口縁端部に内傾する面をもち、体部の立ち上がりが強い。平底の底部である。摩滅が著しいため、明確ではないが、底部外面にハケとみられる痕跡がわずかに残る。57は手焙形土器とみられる。覆部は残っていないが、口縁部がわずかに摘み上げられ、受け口状となる。体部

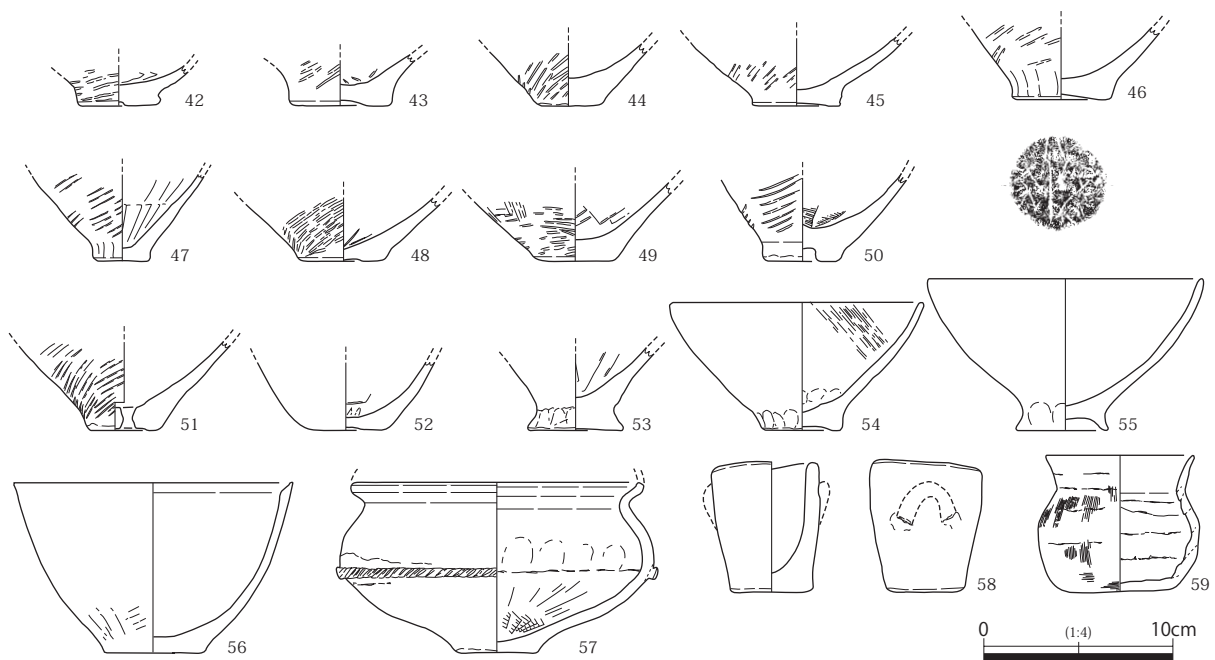


図 184 第 7b 層 出土遺物実測図 (弥生時代後期後半～古墳時代初頭) 3

中程が張り、そこに粘土紐による突帯をもつ。突帯上には刻み目が巡る。底部はやや突出した平底である。体部内外面はナデ、底部内面にはハケ後、ナデが施される。58・59はミニチュア土器である。58は筒形で、体部中程に二対の把手状の粘土紐が貼り付けられた痕がみられる。59は口縁部がわずかに外反し、端部は薄くつくられる。体部中程が張り、底部は平底である。体部外面にハケが施され、内外面に粘土接合痕が明瞭に残る。なおこの土器内から、滑石製白玉8点が出土している（図193-9～16）。

## 第6項 その他の遺構と遺物

第7b面では、第1～5項で述べた遺構以外にも、遺物を伴わない遺構、あるいは土器が細片のため時期が不明な遺構が多数検出されている。ここでは、それらの中で注目される遺構について触れ、また第7a層、第7b層から出土した遺物の中で、これまでに述べた時期に該当しない縄文時代～弥生時代中期の土器、時期不明の遺物、さらに石器について述べる。

### 1. 遺構

ピット列3～9（図185）ピットが多数検出された5区では、ほぼ同規模で、等間隔に直線上に並ぶピットがいくつかみられ、それらをピット列とした。ピット列については柵列、あるいは未検出の建物であった可能性が考えられる。なおこれらピット列と、後述するその他のピットから出土した遺物のうち、須恵器1点、弥生土器・土師器5点、木製品2点を図示している（図186）。

ピット列3は5区の北西側に位置する。全長5mで、N-75°-Eを軸に、径0.5～0.6mの平面ほぼ円形のピットが、1.5～1.7m間隔に4基並ぶ。深さは0.3～0.35mを測る。いずれのピットからも遺物は出土していないが、最も南西に位置する5-796ピットでは、柱根を検出した（図版42-3）。柵列であった可能性が考えられるが、この周囲で検出している奈良時代の建物3・4は、主軸がN-

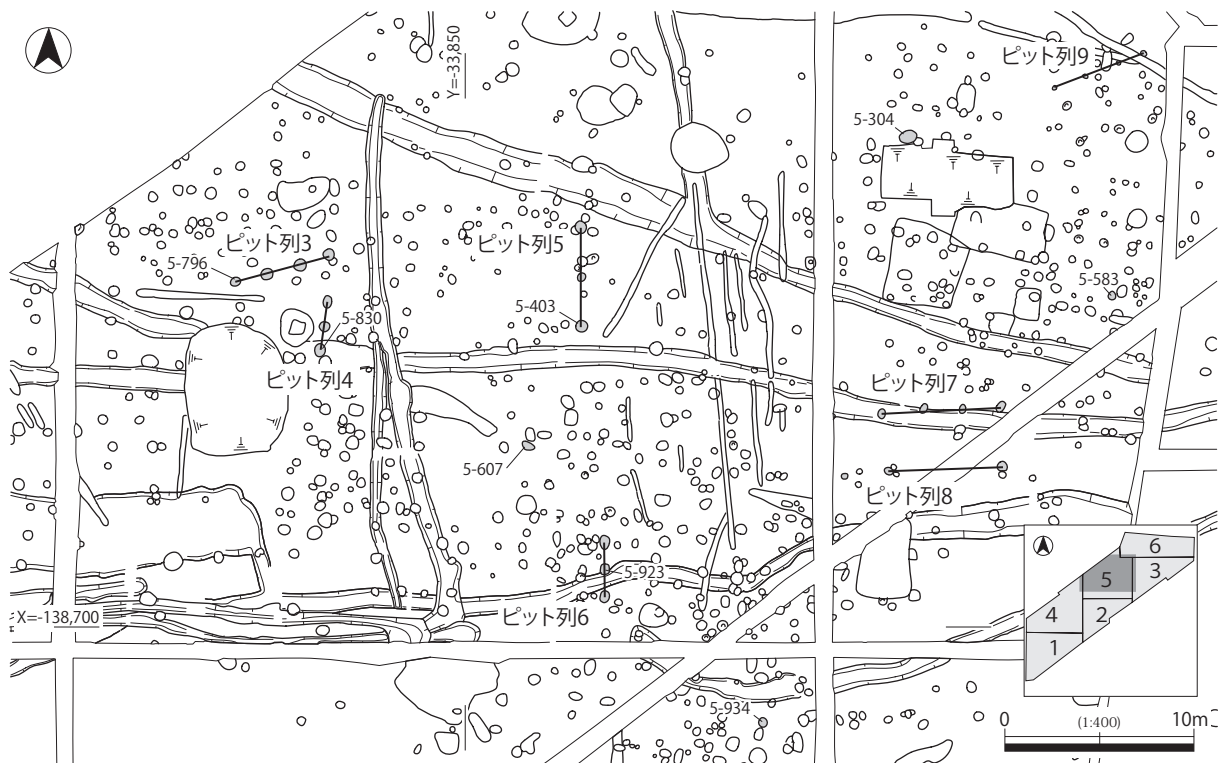


図185 ピット列3～9・ピット 平面図

1° - E とほぼ正方位であることから、これらの建物に関連する可能性は低い。

ピット列4は5区の北西側に位置し、奈良時代の5-536井戸が西側に隣接する。全長2.6mで、N-8° - Eを軸に、径0.4~0.5mの平面ほぼ円形のピットが、1.3~1.5m間隔に3基並ぶ。深さは0.13~0.25mを測る。最も南に位置する5-830ピットから、長胴甕(2)が出土している。2は口縁部が斜め上方に外傾し、内外面にハケが施される。やや時期を特定し難いが、8世紀代のものの可能性があり、5-536井戸に関連する柵列の可能性が考えられる。

ピット列5は5区のほぼ中央に位置する。全長5.2mで、方位軸に合わせて、径0.4~0.7mの平面ほぼ円形のピットが、2.5m間隔に3基並ぶ。深さは0.09~0.14mを測る。最も南に位置する5-403ピットから、須恵器の杯蓋片(1)が出土している。1は天井部と体部の境界の稜線が明瞭で、TK23~47段階のものともみられる。なお、これ以外に滑石製有孔円盤が1点出土している(図193-22)。遺物が示す時期は5世紀後半~末であるが、この時期の建物の多くは東寄りの軸方向となっており(図83参照)、軸方向から考えれば、奈良時代の遺構である可能性が高い。

ピット列6は5区のやや南寄りに位置する。全長3mで、方位軸に合わせて、径0.5~0.7mの平面ほぼ円形のピットが、1.5m間隔に3基並ぶ。深さは0.15~0.26mを測る。中央に位置する5-923ピットから甕(3)が出土している。3は口縁部が体部に比べやや厚手で、頸部の屈曲は強い。体部外面にハケが施される。5~6世紀代のものか。ピット列5と同様、遺物の示す時期とは異なるが、軸方向から奈良時代の遺構である可能性が考えられる。

ピット列7・8は5区の東寄りに位置し、東西方向に並行するピット列である。いずれも全長6mで、N-88° - Eを軸に、径0.3~0.5mの平面ほぼ円形のピットが、ピット列7では2m間隔に4基並ぶ。ピット列8は2基のピットで構成される。いずれのピットも深さは0.07~0.17mを測る。遺物は出土していない。ピット列8上には、路線中央断割りが延びており、それによって中央部のピットが失われてしまった可能性があり、その場合、ピット列7を含めて、東西規模が3間(6m)、南北規模が1間(3m)の掘立柱建物が復元できる。周囲には、ほぼ同軸方向の飛鳥時代の建物7・8が存在していることから、同時代の建物である可能性が考えられる。

ピット列9は5区の北東側に位置する。全長5mで、N-69° - Eを軸に、径0.2~0.3mの平面ほぼ円形のピットが、1.4~1.8m間隔に4基並ぶ。深さは0.12~0.2mを測る。遺物は出土していない。古墳時代中期~後期に属すとみられる建物9と重複しており、軸方向も近似することから、当初、

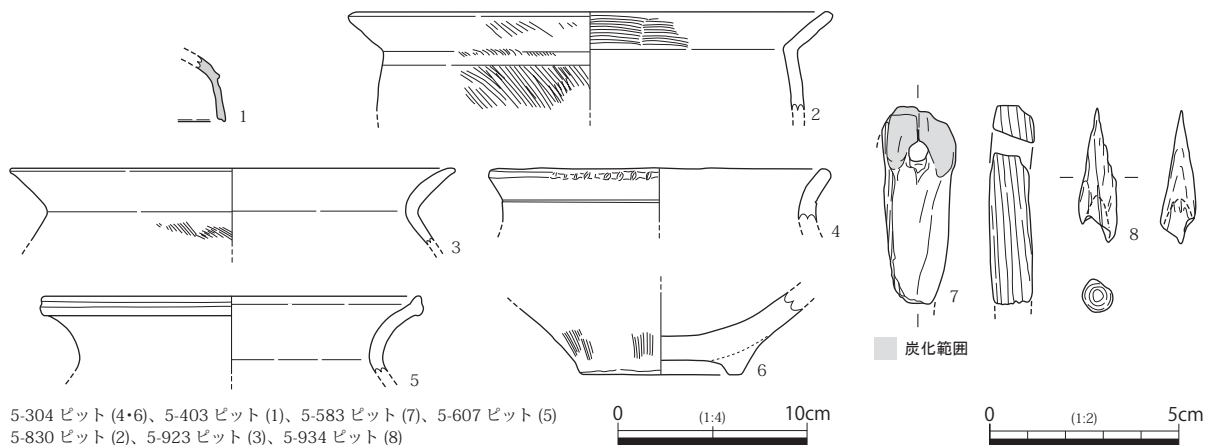


図186 ピット列・ピット 出土遺物実測図

建物9の柱列の一部と考えられた。しかし建物の構造上、建物9とピット列9との関連が不明であるため、ピット列9は独立した遺構と判断している。隣接する古墳時代中期～後期の建物10～12・15・16に関連する柵列とも考えられるが、軸方向を異にしており、その性格は不明である。

**その他のピット（図185）** 5区で検出されたピットから、以下の遺物が出土している（図186）。4は甕で口縁部が短く、端部に刻み目が施される。頸部には1条の沈線が巡る。5は壺で緩やかに外反する口縁端部に面をもち、その面に沈線が1条巡る。6は壺の底部とみられ、周縁に粘土紐が貼り付けられ高台状となる。外面にはハケが施される。4・6は、弥生時代前期、5は弥生時代中期後葉のものとみられ、いずれも下層からの混入遺物とみられる。7・8は木製品である。7は付け木とみられ、上部の節穴周辺が炭化している。樹種はカヤである。8は刺突具とみられ、上端が鋭く尖り、下部には窪みをもつ。樹種はヒノキである。

**方形土坑群** 4区の中央部やや東寄りの地点で、土坑を5基検出した（図187、図版42-4～7）。やや大小があるものの、長軸は2m前後で、平面形は方形を基調とし、ほぼ正方位を軸にもつ。深さは0.13～0.95mを測る。いずれの土坑からも、遺物は出土していない。

南側に位置する4-54土坑については、長軸1.85m、短軸1.25m、深さは0.45mを測り、断面は箱形を呈する。埋土には、第7b層もしくは第8b層である粘土層と、第8a層である粗砂混じりの粘土層が、ブロック状に含まれる（図188）。これらブロック土の輪郭は明瞭であることから、この土坑は掘削後、ほとんど時間をおかず一度に埋め戻されたとみられる。他の4基の土坑も、同様の埋土であったことから、共通の性格をもった遺構といえるが、詳細は不明である。

時期についても、遺物が出土していないため特定はできないが、いずれの土坑も正方位に近い軸を持つことから、飛鳥時代以降の可能性が考えられる。

**ラッセル痕（図版42-8）** 6区の東側、3区との調査区境界にあたる地点で、北東-南西方向に蛇行

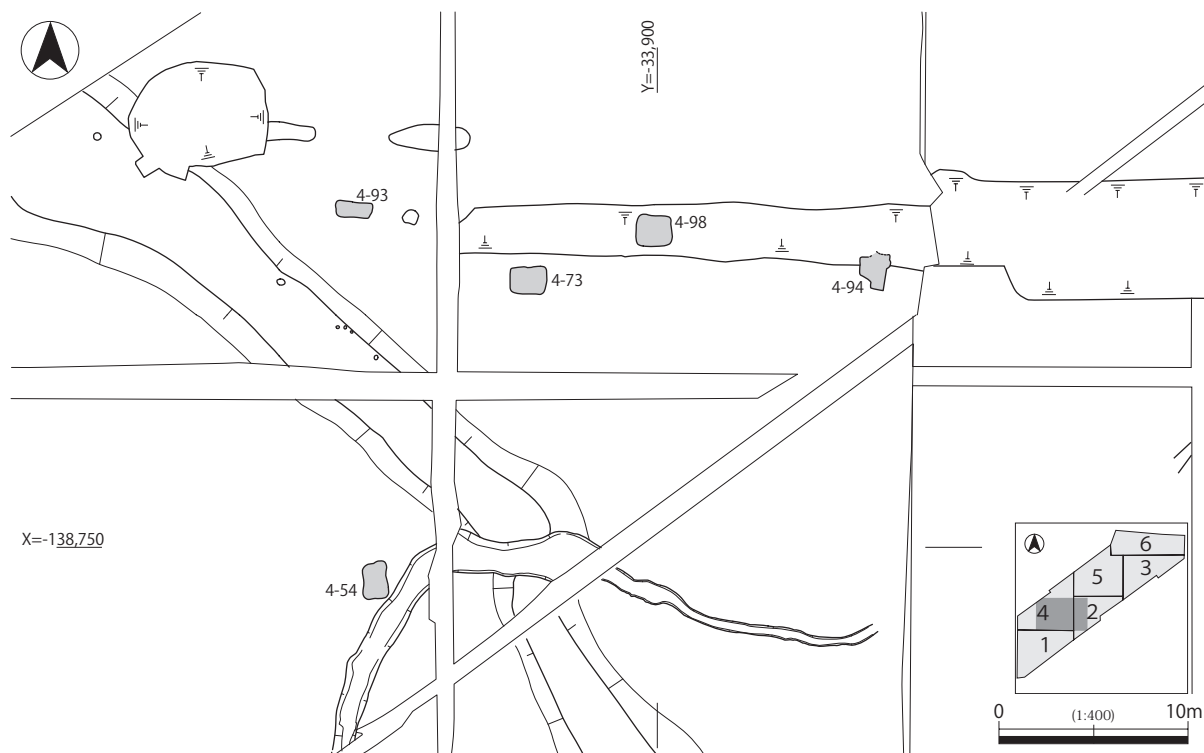


図187 方形土坑群 平面図



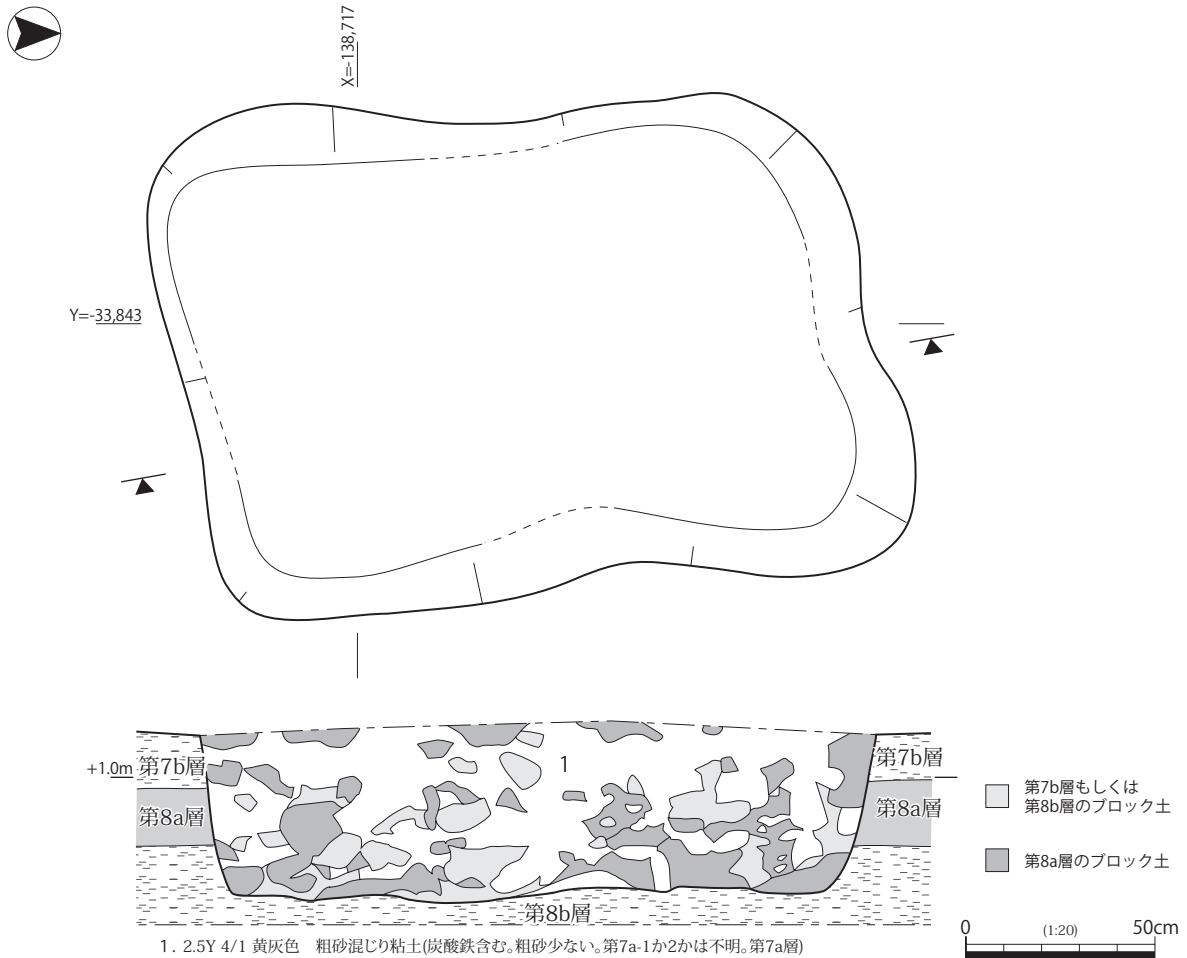


図 188 4-54 土坑 平面図および断面図

する溝状の遺構が検出された。遺構底部にはイノシシと考えられる足跡が並んでおり、人為的な遺構ではなく、ラッセル痕と判断した。当時の自然環境を物語る痕跡である。

## 2. 包含層出土遺物

主に第 8a 面（弥生時代中期）から混入したとみられる弥生土器の他に、鉄製品、木製品、さらに洪水などによって運ばれてきたとみられる縄文土器について述べる。弥生土器については、第 7a・7b 層をあわせてみると、1・2・4 区出土のものが多くを占めている。

**第 7a 層出土遺物** 弥生土器 12 点、鉄製品 1 点、木製品 2 点を図示している（図 189）。調査区別にみると、1 区から 4 点（3・7・9・14）、2 区から 1 点（15）、4 区から 6 点（1・2・6・8・11・12）、5 区から 3 点（4・5・13）、6 区から 1 点（10）がそれぞれ出土している。

1～9 は壺・甕である。1 は口縁部が短く、やや厚手である。2 は甕で、口縁部が短く、頸部は強く屈曲する。4 は甕で、口縁部が短く、端部が下方に拡張される。5 は内外面ハケが施され、底部に筋状の圧痕がみられる。6 は壺で、肩部が張り、底部は平底である。時期は不明である。10・11 は蓋である。11 は体部に 3 方向に焼成後穿孔がされる。12 は高杯で、筒状の柱部をもち、裾部はそれほど広がらない。以上の土器については、弥生時代中期を主体とし、一部前期まで遡るとみられる。13 は棒状鉄製品である。断面方形で、下部はやや細くなっている。馬鍬の刃か。14 は板状木製品で、棺材もしくは、部材か。樹種はコウヤマキである。15 は部材である。右側が欠損しているが、左側は細くなり尖る。また中央やや左寄りに木釘が打ち込まれている。樹種はヒノキである。

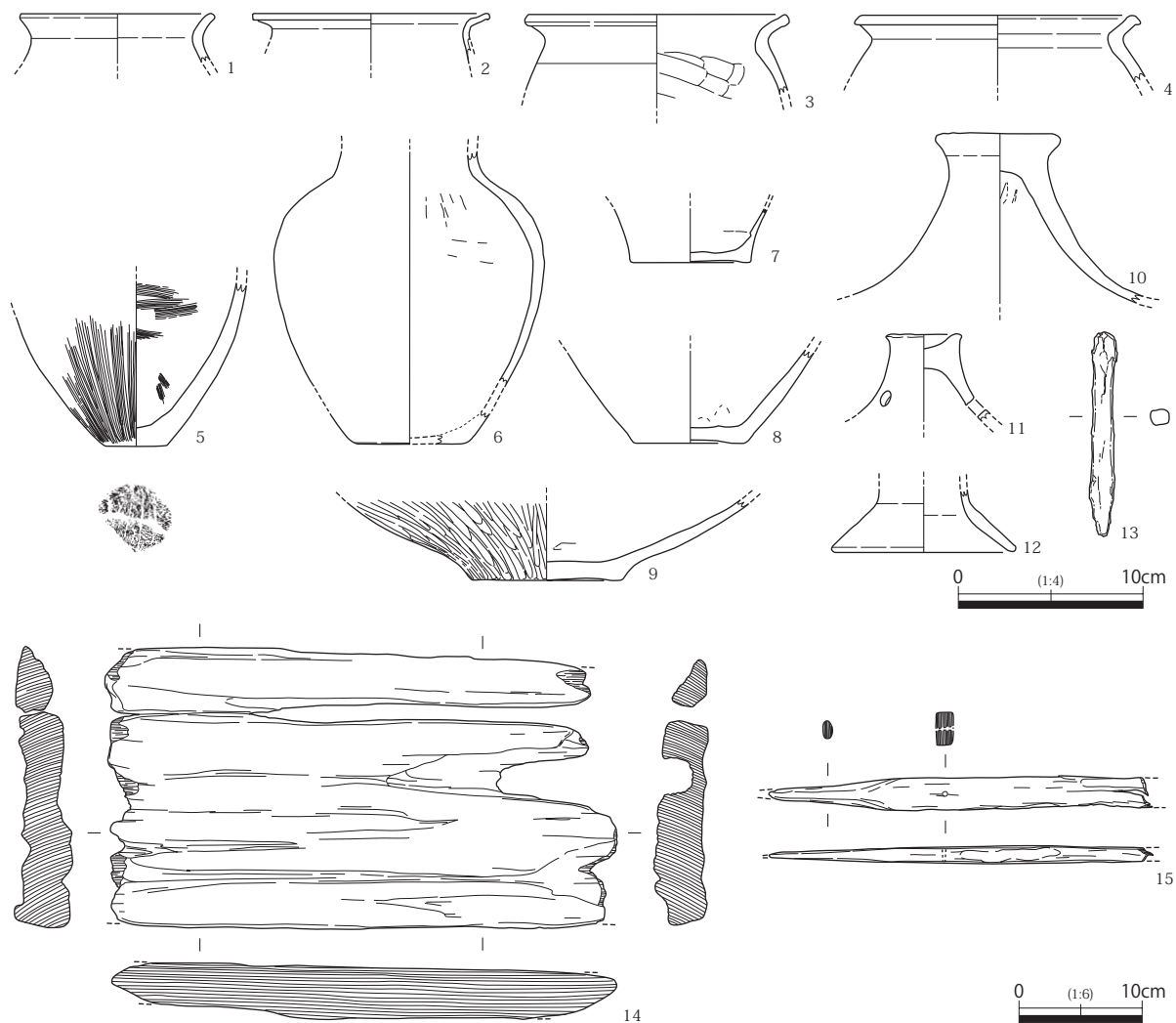


図189 第7a層 出土遺物実測図（その他）

**第7b層出土遺物** 弥生土器36点を図示している（図190）。調査区別にみると1区では12点（10・15～17・19・25・27～29・34～36）、2区では13点（1～4・6～8・18・20～23・26）、3区では2点（9・30）、4区では9点（5・11～14・24・31～33）がそれぞれ出土している。

1～17は壺・甕である。1～5は弥生時代前期の壺体部で、一部剥落しているが、粘土紐を貼り付けて突帯をつくり、突帯上に圧痕を施す。突帯を貼り付けるための沈線が2・3・5にみられる。6は口縁端部に刻み目を持ち、頸部が強く屈曲する。口縁部内面にハケメが施されており、大和型甕と考えられる。12は壺で、口縁端部が上下に拡張され、外面に3条の沈線がみられる。頸部の屈曲が強く、体部中程には列点文が巡る。体部外面はハケ、内面は上半にハケ、下半にケズリが施される。弥生時代中期後葉のものとみられ、吉備系土器である。17は壺で、口縁部がやや外反し、端部が下方にわずかに拡張され面をもつ。その面には凹線がみられる。18～30は壺・甕・鉢の底部である。29は脚台付きの鉢底部とみられる。31～36は高杯である。31はほぼ直立する口縁部で、端部内面に沈線状の稜線をもつ。柱部はやや短く、裾部へは緩やかに屈曲する。杯部内外面にはミガキが施される。34は大型の高杯で、口縁部が肥厚し、端部にほぼ水平な面をもつ。内外面にミガキが施される。以上の土器は、第7a層と同様、弥生時代中期を主体とする。

**縄文土器** 各時期の溝から縄文土器が出土しており、そのうち9点を図示した（図191）。1は口縁

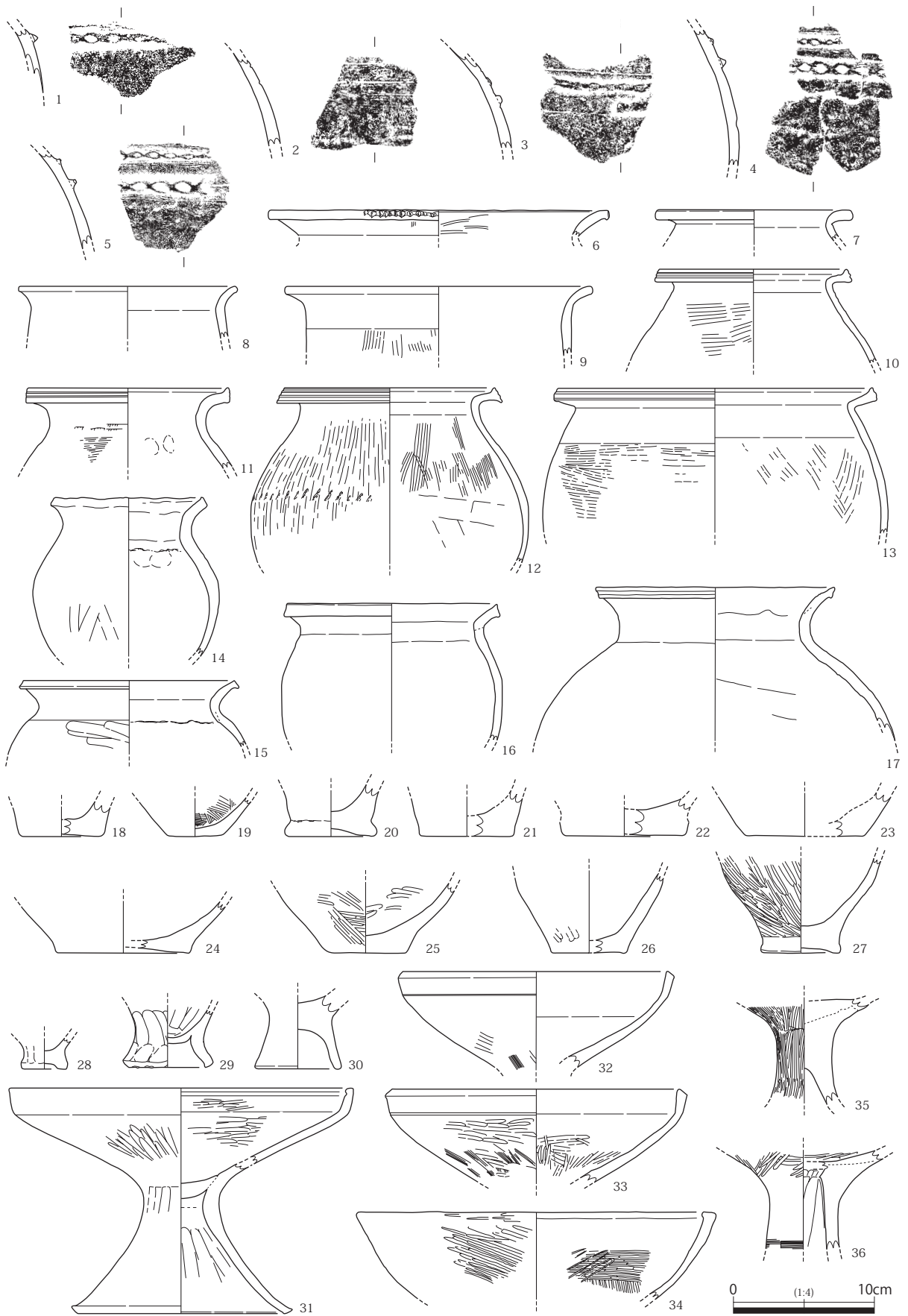
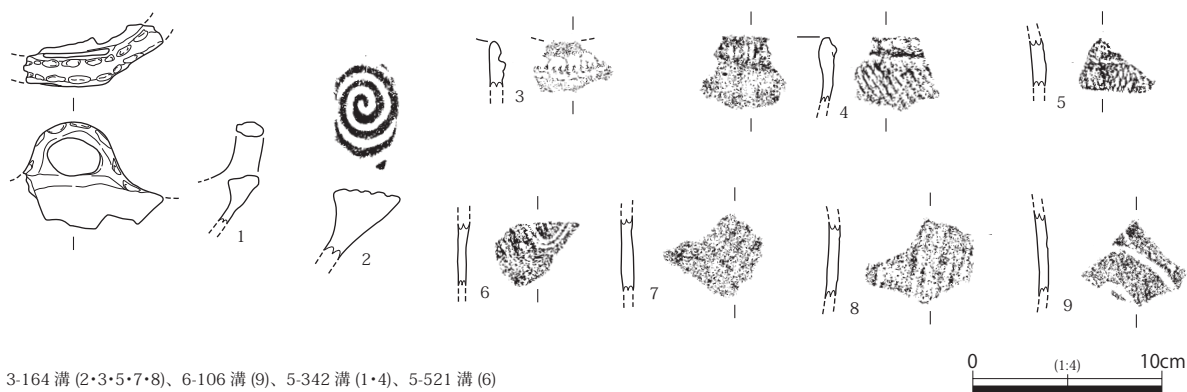


図 190 第 7b 層出土遺物実測図 (その他)



3-164 溝 (2・3・5・7・8)、6-106 溝 (9)、5-342 溝 (1・4)、5-521 溝 (6)

図 191 縄文土器実測図

部上端に把手が付くもので、把手の上面に刺突文が施される。縄文時代後期前半のものか。2は拡張された口縁端部に渦巻文が施される。縄文時代中期末のものか。3は口縁端からやや下がった位置に突帯が貼り付けられ、その上方には刻み目、下方には刺突文が施されている。縄文時代中期前半の船元Ⅰ～Ⅱ式のものともみられる。4は口縁端部外面に突帯が貼り付けられ、その上面に刺突文、下方にはRL縄文が施される。また口縁端部内面には刻み目が施される。縄文時代中期前半の船元Ⅱ式のものともみられる。8は外面に撚糸文が施される。縄文時代中期中葉の里木式Ⅱ式のものともみられる。9は外面に沈線による区画がみられ、その中にRL縄文が施される。縄文時代後期前半の中津式のものか。

### 3. 石器

遺構から単独で出土した石器および、包含層から出土した石器について述べる。滑石製品については、本稿の他、第6章第2節にて検討を行っている。

**滑石製品** 主に5区を中心とし、各時期の遺構に加え、包含層からも出土している(図192、表2)。完成品・未成品などを合わせて42点を図示した(図193～195)。また図示していないが、剥片も数点出土している(図192-▲印:カラー図版8-1右上)。1～20は白玉で、側面の形状・研磨、端面の形状により分類した(図196)。21～27は有孔円盤である。26は1/4ほどしか残存していない。28・29は管玉未成品である。いずれも各側面には横方向の研磨痕がみられる。30・31は円盤の未成品か。30の上端部中央に穿孔された形跡がある。32～42は、ほぼ板状の滑石に径約4mm、深さ1～4mmの円形の穴が、1～7ヶ所ほど穿孔されている原石である。この原石は、白玉などの製作工程を示している可能性が考えられ、その工程の復原については第6章第2節において述べる。各面に単独で穴が開けられているもの(33・34・37・40)もみられるが、多くは2ヶ所以上穿孔されており、最も多いものは42で表面に7ヶ所、裏面に6ヶ所の穴がみられる。基本的には面に対して垂直に穴が開けられているが、37のように斜め方向から開けられているものも存在する。また同じ個体でも深さは一定ではなく、42のように1～4mmと幅がある。

白玉(1～20)は弥生時代後期後半～古墳時代初頭の5-389ピット、古墳時代中期～後期の5-416井戸、飛鳥時代の5-491井戸からそれぞれ出土している。5-389ピットの白玉については、それに伴うミニチュア土器の形状から弥生時代後期後半～古墳時代初頭のものとしているが、土器の性格上、時期を明確に特定できる土器とはいえない。ただこの地点は、古墳時代中期～後期の土器が多く出土しているにもかかわらず(図126参照)、5-389ピットの出土遺物には、須恵器片が含まれていないことから、古墳時代中期以降に属す可能性は低い。有孔円盤(21～27)については、古墳時代前期の1-60

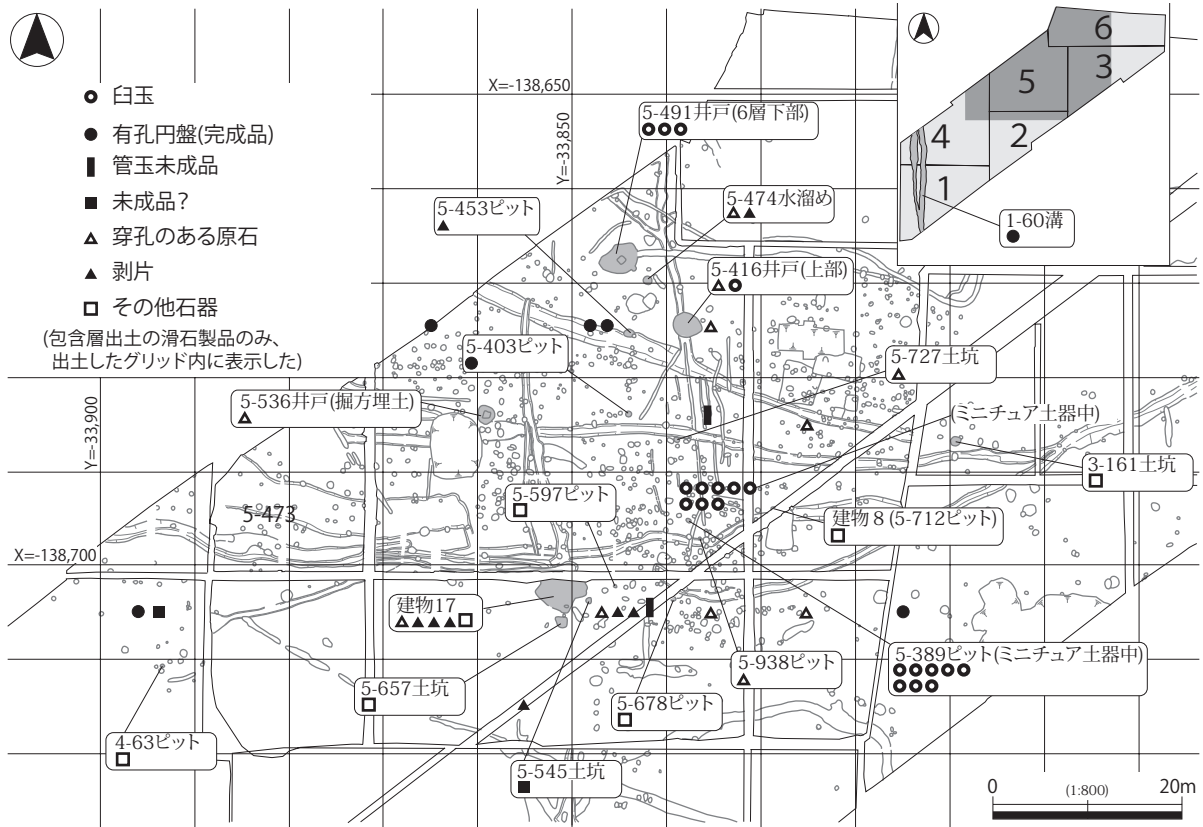
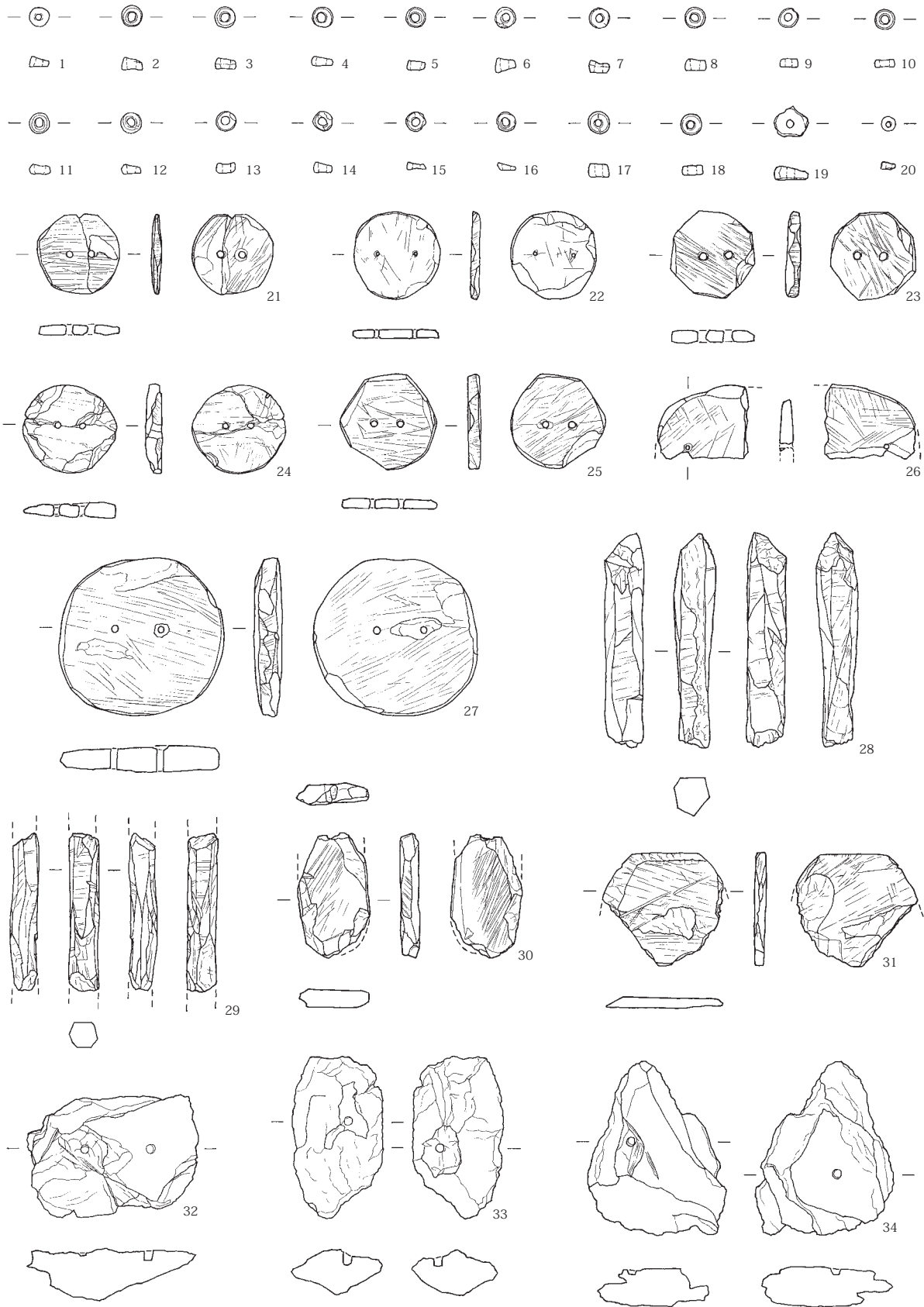


図 192 滑石製品 出土位置図

表 2 滑石製品一覧表

掲載番号	出土遺構 出土層位	所属時期	器種	特徴(※)	重量 (g)	掲載番号	出土遺構 出土層位	所属時期	器種	特徴(※)	重量 (g)		
図193	1	5-389ピット (ミニチュア土器中)	弥生時代後期後半 ～古墳時代初頭	白玉	E 2 II a	0.08	図193	22	5-403ピット	-	有孔円盤	-	2.18
	2			白玉	- 2 II a	0.11		23	第7a層 (3区)	-	有孔円盤	-	2.33
	3			白玉	A 2 II a	0.09		24	第7a層 (4区)	-	有孔円盤	-	2.67
	4			白玉	E 3 II a	0.07		25	第7a層 (5区)	-	有孔円盤	-	3.37
	5			白玉	E 2 II a	0.07		26	第7a層 (5区)	-	有孔円盤	-	2.60
	6			白玉	- 2 -	0.11		27	第7a層 (5区)	-	有孔円盤	-	18.78
	7			白玉	A 2 -	0.10		28	第7a層 (5区)	-	管玉未成品	-	7.98
	8			白玉	B 2 I	0.11		29	第7a層 (5区)	-	管玉未成品	-	3.68
	9			白玉	E 2 I	0.07		30	5-545土坑	-	未成品?	-	4.33
	10			白玉	B 2 I	0.08		31	第7a層 (4区)	-	未成品?	-	3.73
	11			白玉	B 2 II a	0.08		32	5-727土坑	-	穿孔原石	表1	21.28
	12			白玉	B 2 II a	0.08		33	建物17	古墳時代中期	穿孔原石	表1・裏1	13.87
	13			白玉	B 2 I	0.08		34	5-536井戸	奈良時代	穿孔原石	表1・裏1	17.52
	14			白玉	B 2 II a	0.08		35	5-147溝	平安～(第6b面)	穿孔原石	表2	20.41
	15			白玉	E 2 II b	0.06		36	5-474水溜め	古墳時代中期	穿孔原石	表4・裏3	33.80
	16			白玉	E 2 II a	0.05		図194	37	5-938ピット	-	穿孔原石	表1
	17	5-416井戸 (上部)	古墳時代中期	白玉	B 2 II a	0.15		38	第7a層 (5区)	-	穿孔原石	表3	143.58
	18	白玉	E 3 I	0.12	39	第7a層 (5区)		-	穿孔原石	表2・裏1	60.39		
	19	5-491井戸 (6層)	飛鳥時代	白玉	-	0.24		40	5-416井戸 (上部)	古墳時代中期	穿孔原石	表1・裏1	193.68
	20	白玉	E 4 I	0.03	図195	41		第7a層 (5区)	-	穿孔原石	表2・裏3	144.04	
	21	1-60溝	古墳時代前期	有孔円盤	-	1.63		42	第7a層 (5区)	-	穿孔原石	表7・裏5	190.95

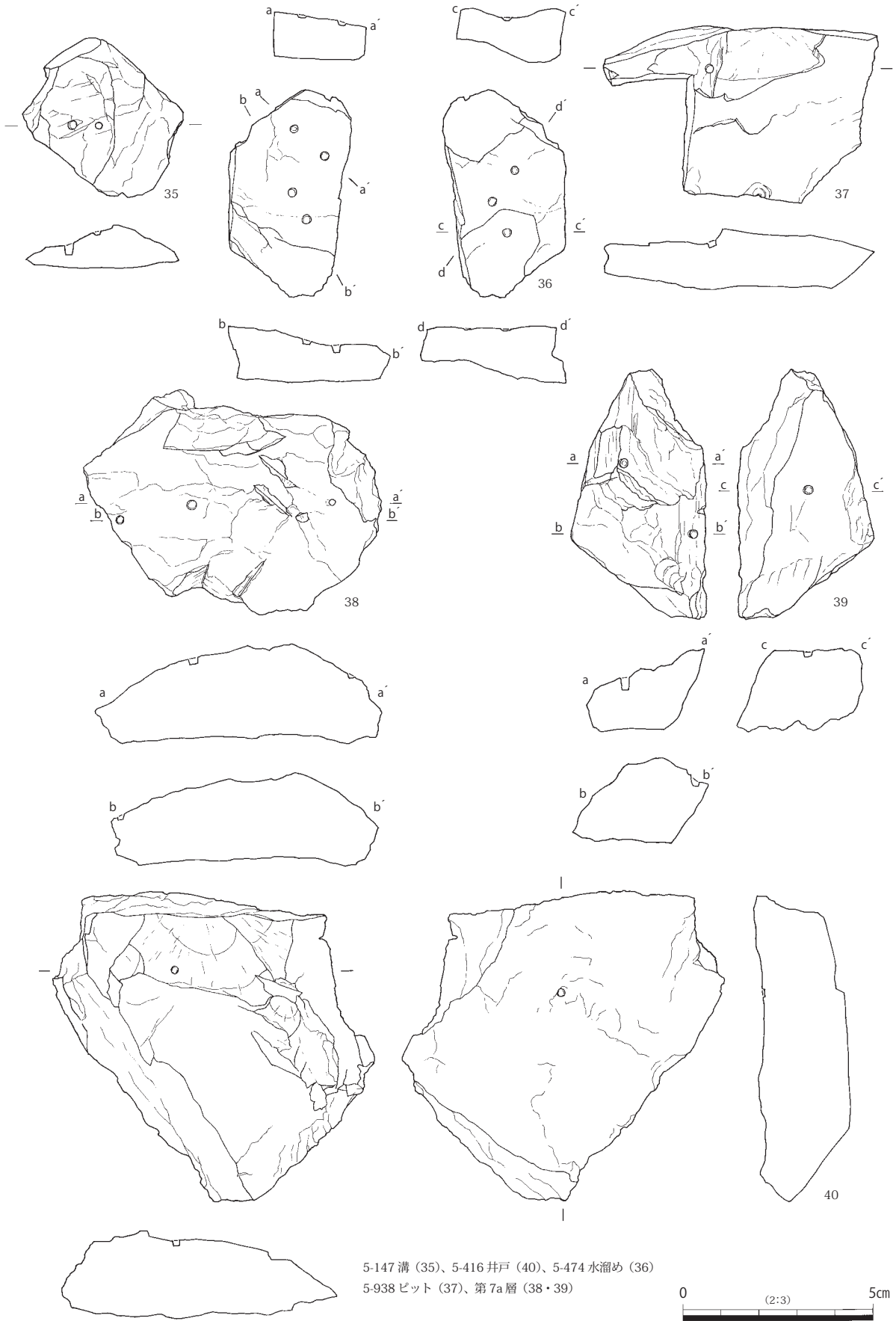
※白玉 (1～20) は図196による分類、穿孔原石 (32～42) は表・裏面の穿孔数をそれぞれ示す。



1-60溝 (21)、5-389ピット (1~8)、5-403ピット (22)、5-416井戸 (17)、5-491井戸 (18~20)、5-536井戸 (34)  
 5-545土坑 (30)、5-727土坑 (32)、建物17 (33)、第7a層 (23~29・31)、第7b層 (9~16)

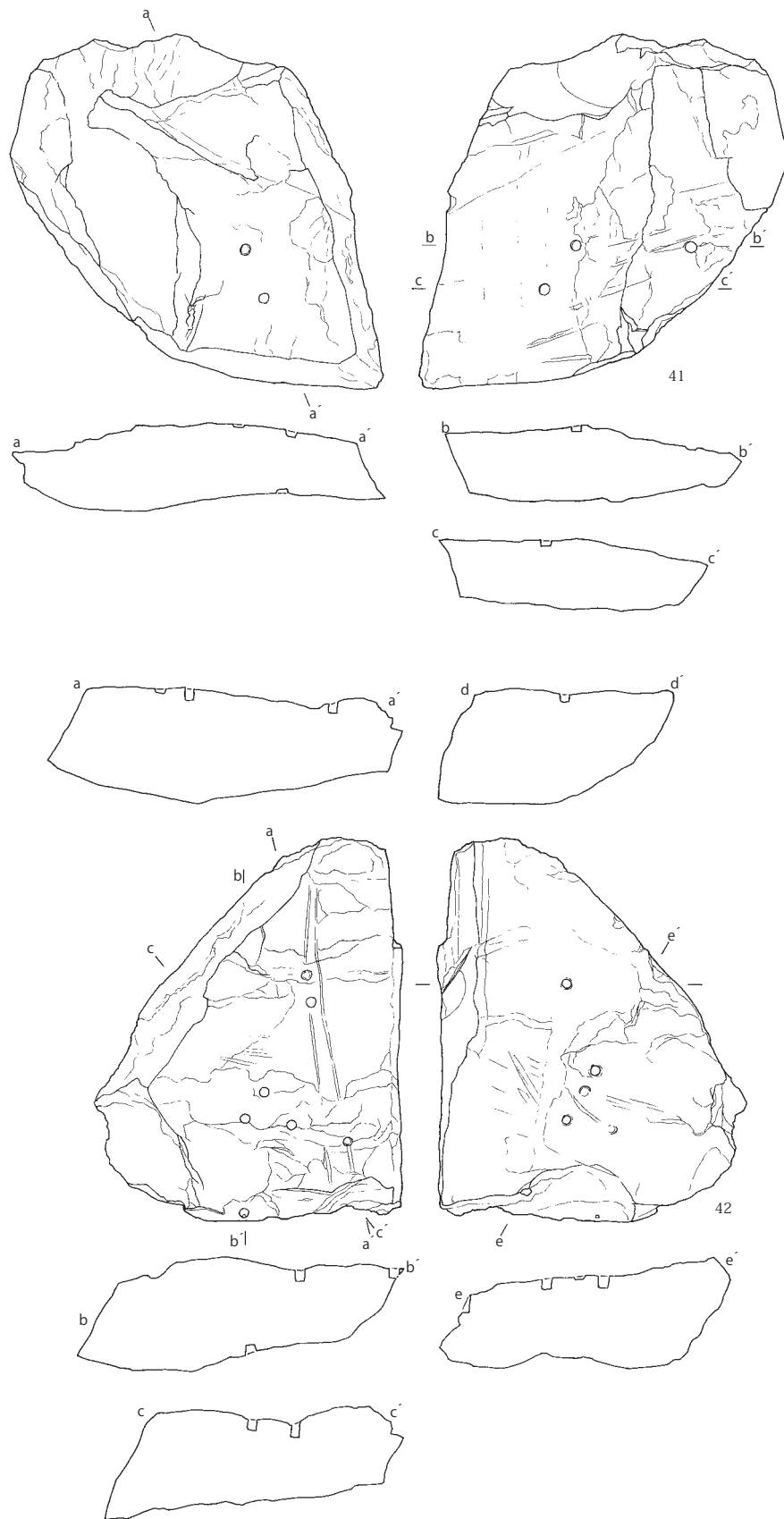


図 193 滑石製品実測図 1



5-147 溝 (35)、5-416 井戸 (40)、5-474 水溜め (36)  
 5-938 ピット (37)、第7a層 (38・39)





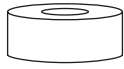







図 194 滑石製品実測図 2



第7a層 (41・42) 0 (2:3) 5cm

图 195 滑石製品実測图 3



側面の形状	A	B	C	D	E
					
	側面に稜をもつもの	側面が太鼓状に膨らむもの	側面が直線的なもの	側面が直線的で直径以上の厚さを持つもの	側面が直線的で直径以下の厚さであるもの
側面の研磨	1	2	3	4	
					
	横方向	斜め方向	縦方向	ほとんど研磨痕(擦痕)が観察できないもの	
端面の形状	I	II-a	II-b		
					
	側面を垂直方向に置いた時、両端面が水平となるもの	側面を垂直方向に置いた時、一方が水平にならないもの	側面を垂直方向に置いた時、両端面が水平にならないもの		

市川・島崎2005をもとに作成、一部改変

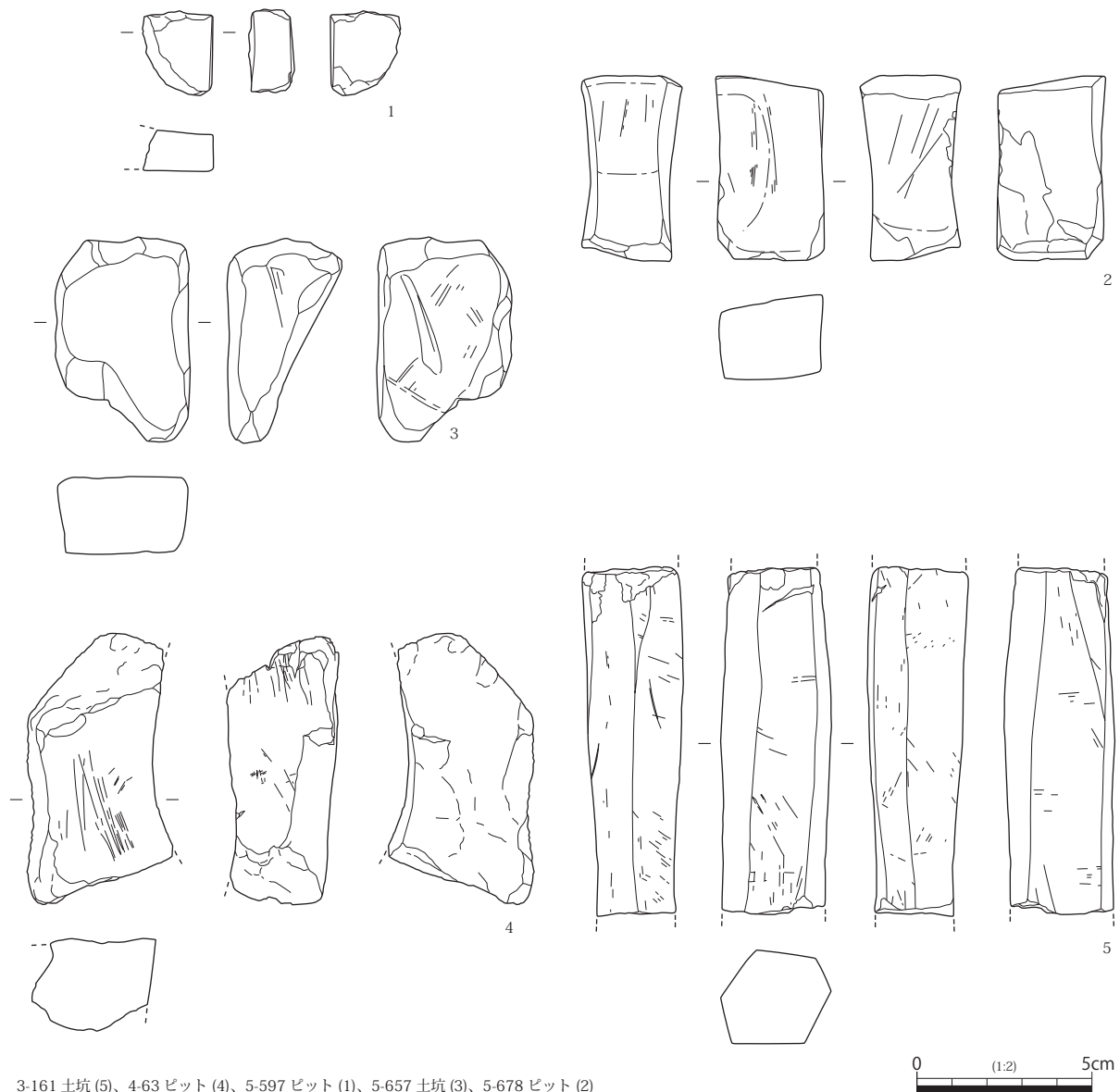
図 196 滑石製白玉の分類

溝と、時期不明の 5-403 ピット（ピット列 5）からそれぞれ 1 点出土で、他の 5 点は 3～5 区の包含層からの出土であることから、時期を特定できないものが多くを占める。

以上の製品に加え、未成品、剥片、砥石、さらに穿孔のある原石の出土は、遺跡内での滑石製品の生産を示唆する。製作に関連するとみられる石器（28～42）が出土している遺構のうち、上面の第 6b 面で検出している 5-147 溝、掘方埋土からの出土である 5-536 井戸のものについては、混入遺物とみられることから、それらの石器が属する時期は、主に古墳時代中期～後期の時期と推定される。5-416 井戸・5-474 水溜め・建物 17 の出土土器については、やや時間幅が認められるものの、主に 5 世紀後半～6 世紀初頭の土器が多くを占めており、この時期において生産が行われていたと考えられる。また、建物 17 から東側の範囲にかけて穿孔のある原石、剥片などが、比較的多く出土していることから、この周辺で製作を行っていた可能性が高い。

5 世紀後半にはいと、本遺跡では建物や井戸が造られるなど、集落が形成されていく。それに伴って、集落内で滑石製品の生産を開始したとみられるが、製品については時期が特定できるものが限られ、そのなかでも時間幅があるため、実態は明らかにし得ない。ただ全体の出土量からみて、その生産は小規模なものであったと考えられる。

**遺構出土石器** 土器の細片が伴うものの、時期の特定ができなかった遺構から出土した石器 5 点を図示している（図 197、表 3）。すべて砥石である。1 は建物 17 の東側に位置する 5-597 ピット出土のもので、断面長方形、全体的に摩滅する。2 は建物 17 から東へ 10m ほどの場所に位置する 5-678 ピット出土のもので、断面長方形で、やや不明瞭ながら研磨痕がみられる。3 は建物 17 の南側に隣接する 5-657 土坑出土のもので、右側面、表面に研磨痕がみられる。4 は 4 区の北東側に位置する 4-63 ピ



3-161 土坑 (5)、4-63 ピット (4)、5-597 ピット (1)、5-657 土坑 (3)、5-678 ピット (2)

図 197 遺構出土石器実測図

ット出土のもので、左側面・表面が欠損する。断面長方形とみられる。表面に研磨痕が明瞭に残る。5は3区の西側に位置する3-161土坑から出土したもので、断面六角形で、上端・下端を欠く。各面に横～斜め方向の研磨痕がみられる。

**第7a層出土石器** 18点を図示した(図198～200、表3)。調査区別にみると、1区から1点(1)、2区から1点(2)、4区から1点(4)、5区から15点(3・5～18)出土となっている。

1は石庖丁で、外湾刃半月形のものともみられる。一部斜め方向の研磨痕が残るが、表面の剥離が著しい。2～4は丸石で、研磨された痕跡がみられないため、自然石の可能性がある。5～7は砥石である。5は断面方形とみられ、表面・左側面に研磨痕がみられる。6は表面が砥面とみられるが、明瞭な研磨痕は確認できない。7は断面方形で、全面に不定方向の研磨痕がみられる。8～11は敲石である。8は表面と下端部に敲打痕がみられる。9は裏面を欠き断面半円状になる。表面と右側縁部に敲打痕がみられる。10は上部・裏面を欠く。表面に敲打痕がみられる。11は上部・下端部を欠く。敲打痕などがみられないため、自然石の可能性がある。12～14は石皿とみられる。12は断面隅丸長方形で、

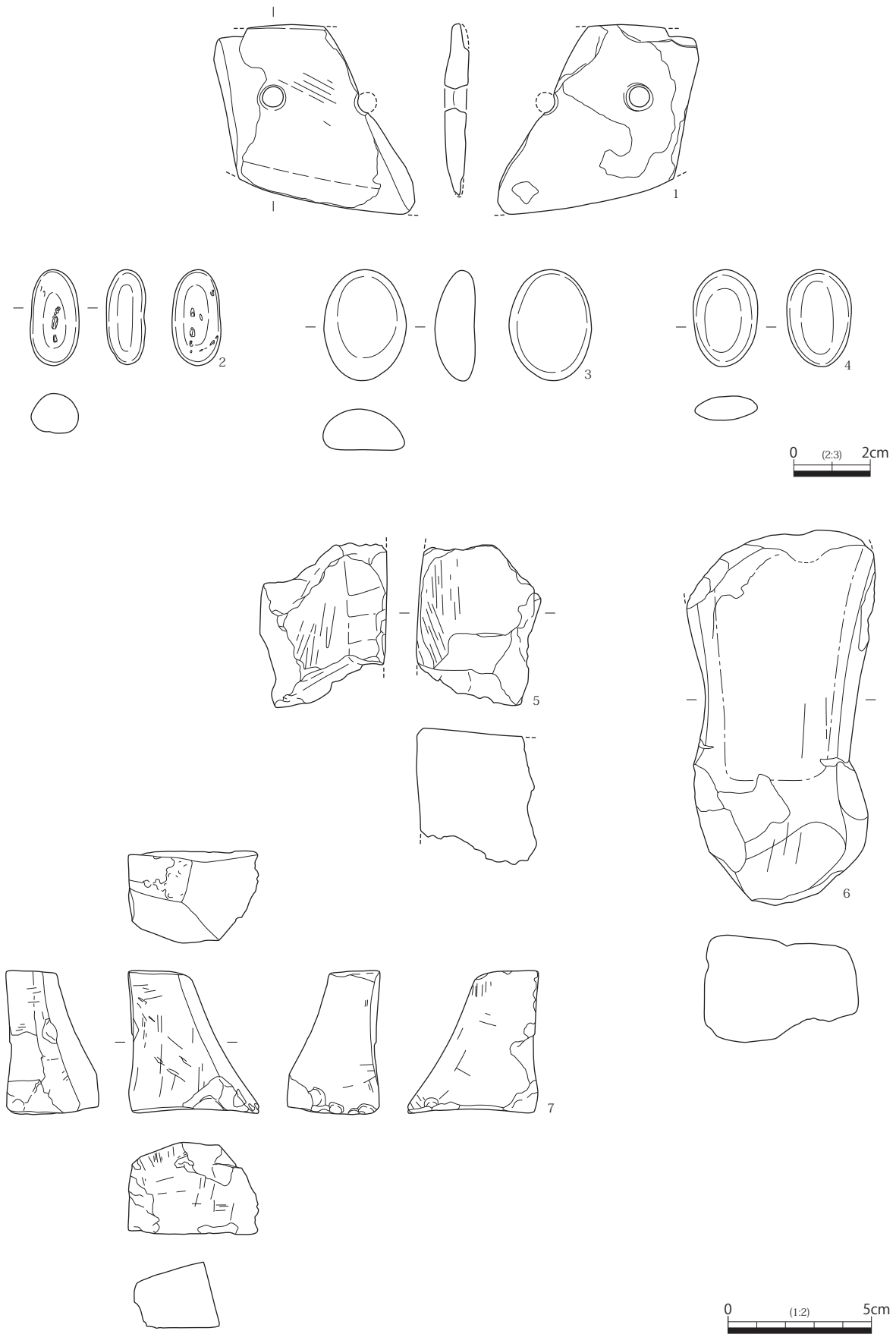


图 198 第 7a 层 出土石器实测图 1

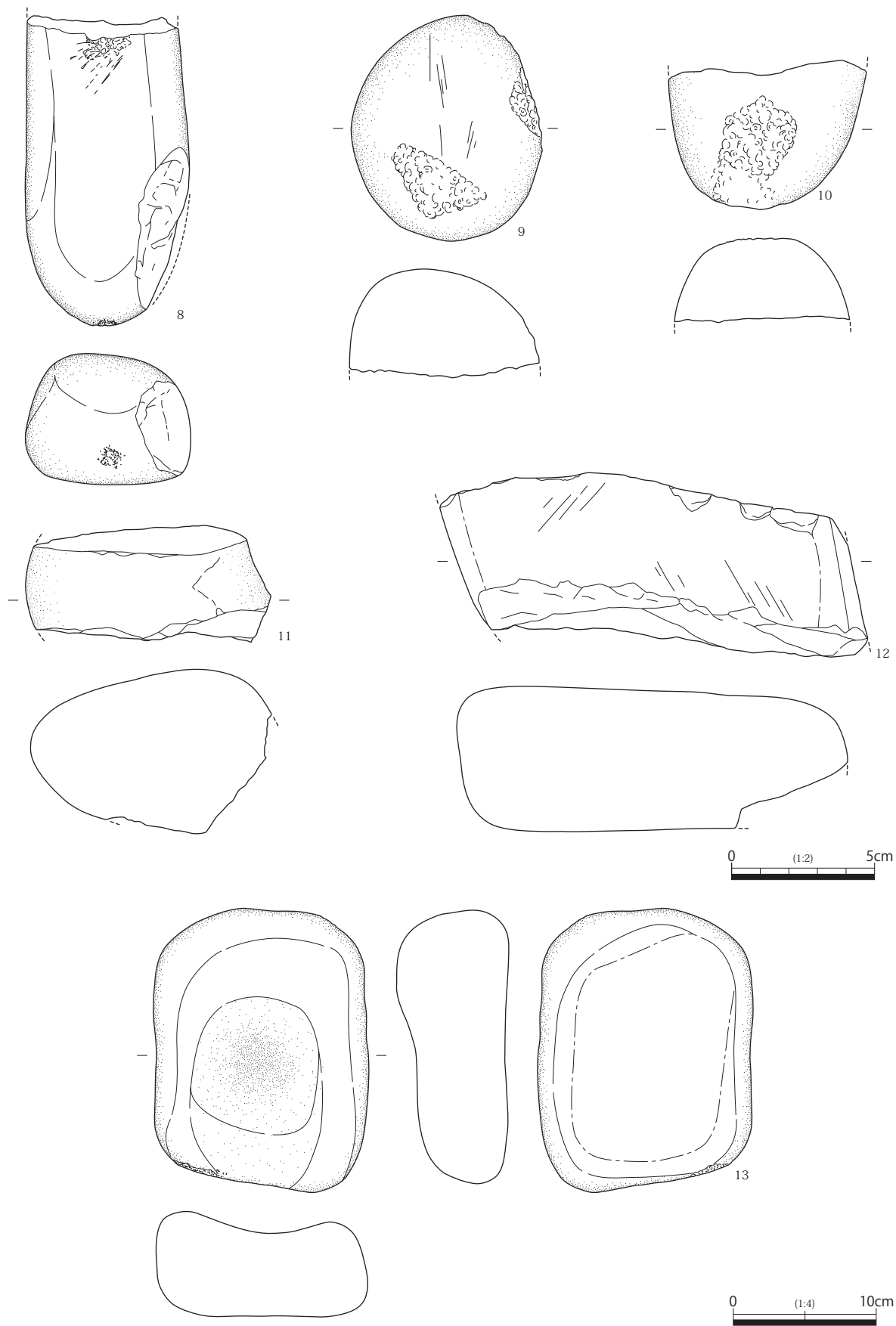


图 199 第 7a 层 出土石器实测图 2

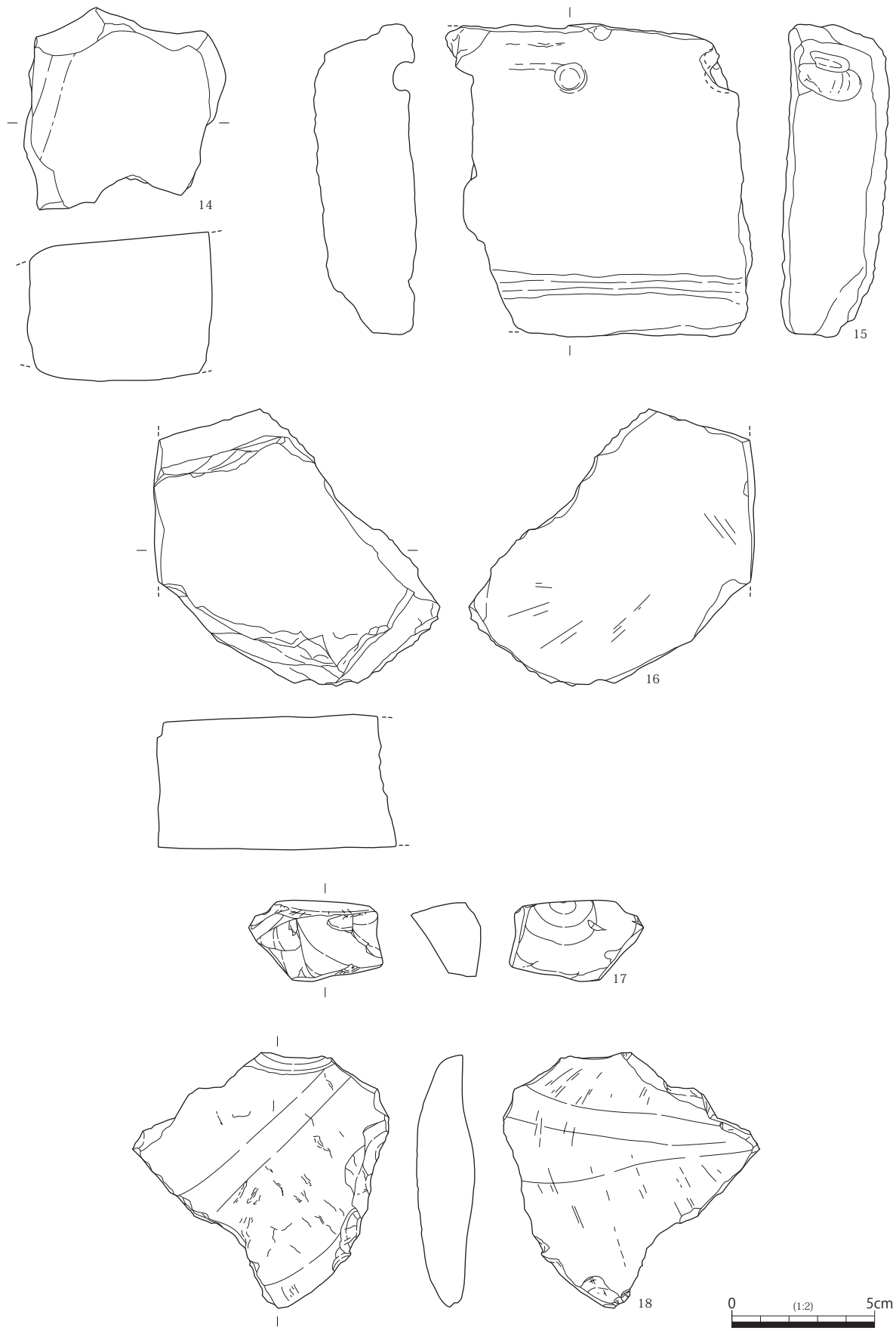


图 200 第 7a 层 出土石器实测图 3

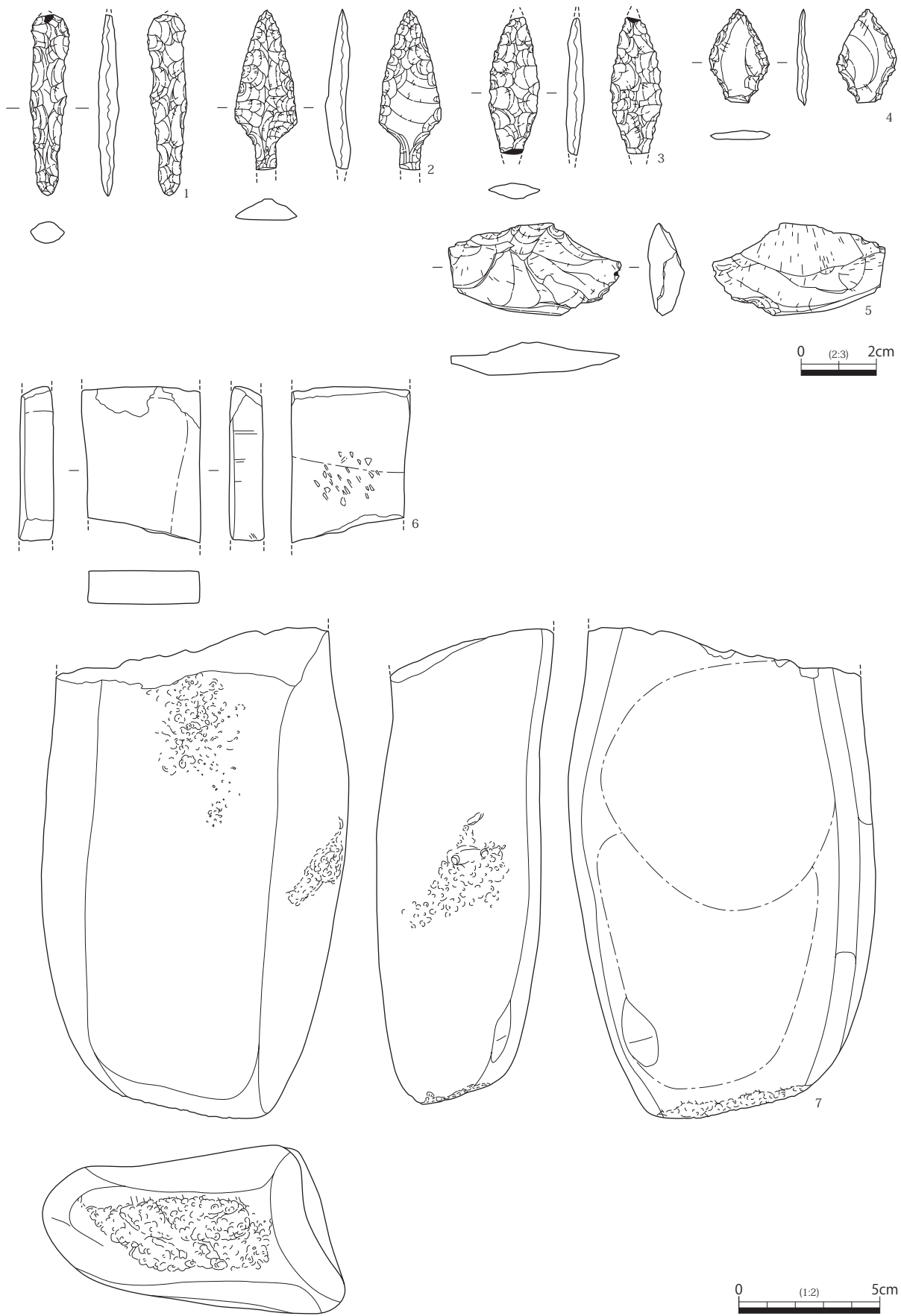


图 201 第 7b 层 出土石器实测图 1

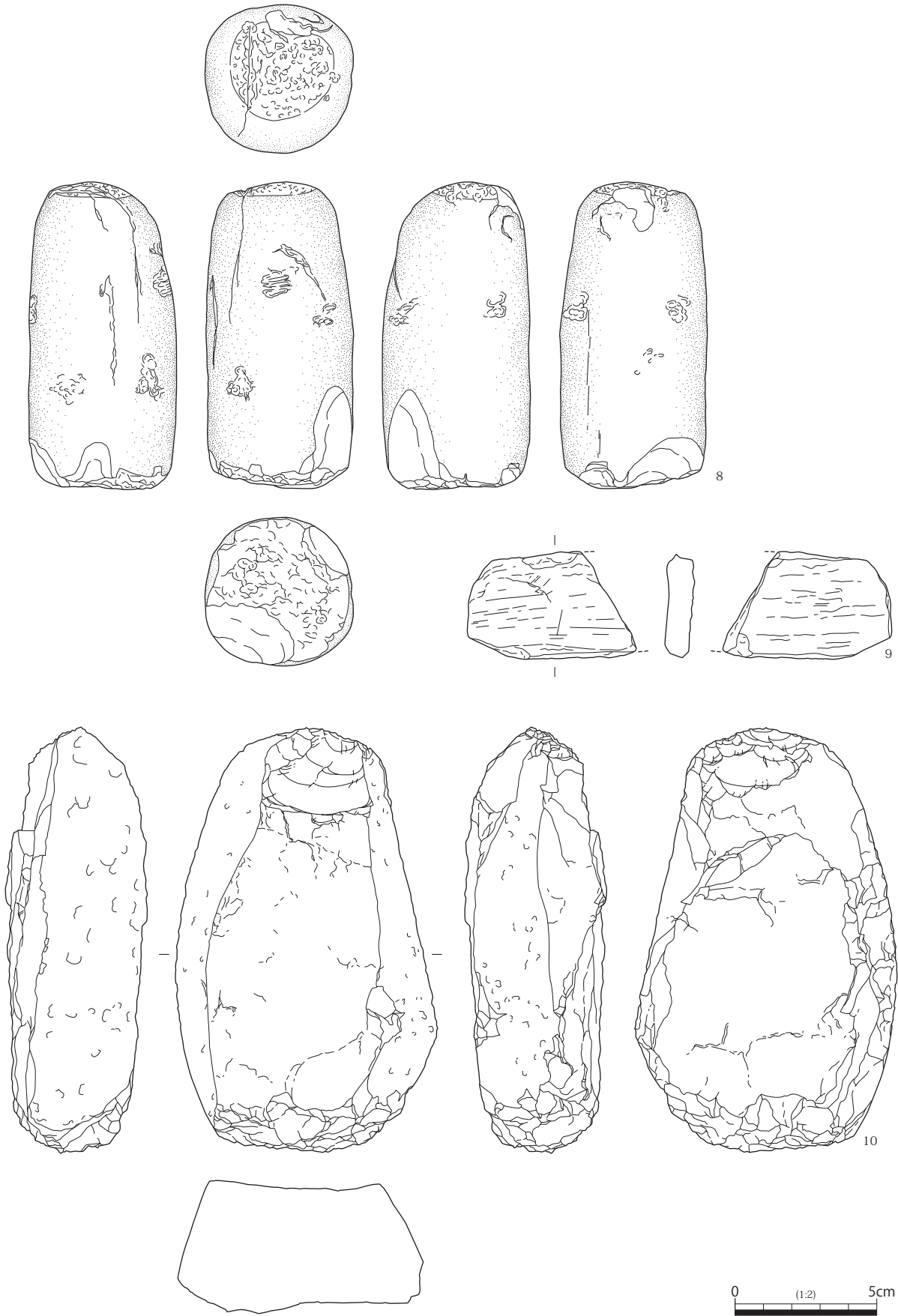


图 202 第 7b 层 出土石器实测图 2

表面は非常に平滑である。13は表面中央部が窪み、裏面は平滑になっている。14は、表面に平滑となっている範囲が確認できるが大半を欠損する。15の表面上方と右側面には加工痕かは不明であるが円形の窪みがみられる。また表面下方には、溝状の窪みがあり、玉製品を加工する際に使用した砥石の可能性があり、また全体が被熱している。16は明瞭な使用痕が確認できないが、表面・裏面ともに平坦な面となっている。17は緑色凝灰岩で、玉製品の素材か。18は背面に自然面が残り、その右側には調整剥離がされる。

**第7b層出土石器** 10点を図示した(図201・202、表3)。調査区別にみると1区から1点(5)、2区から5点(1・3・4・8・10)、4区から1点(2)、5区から2点(7・9)、6区から1点(6)がそれぞれ出土している。

1～5は打製石器である。1は石錐で、頭部・錐部の境界がなく、棒状を呈する。両面調整によって、中央に稜が作られる。2～4は凸基式の石鏃である。2は、縦長剥片を用い腹面には主要剥離面が残る。背面中央には稜が作られる。3は、先端部・基部の一部を欠損する。両面調整によって中央に稜が作られる。4

は、扁平で薄手の横長剥片を素材とし、縁辺に簡単な調整が加えられ整形される。5は横長剥片で、背面右側・腹面左側に調整剥離がみられる。末端は蝶番状の割れとなっている。6は砥石で、上部・下部を欠く。断面長方形で、研磨痕は顕著ではないが、各面平滑となっている。裏面ほぼ中央に敲打痕がみられる。7は石皿で、上部を欠く。表面・右側面・下端部に敲打痕がみられ、裏面は平滑となっている。8は敲石で、上端・下端部に敲打痕がみられる。9は、調整などは確認できないものの、石庖丁の素材の可能性があり、10は断面台形で、各面に自然面を残し、上端部には調整剥離がみられる。下端部も同様に調整されているようであるが、摩滅している。石斧の未成品の可能性があり、

## 第7項 小結

第7b面は他の遺構面と異なり、複数の時期の遺構を同一面で検出しており、また出土した遺物は、遺構・包含層出土のものを合わせると、掲載したもので1200点を超える。その膨大な数量の遺物をもとに、大きく5時期に分け、その概要を述べた。ここでは、その調査成果をまとめておきたい。

弥生時代後期後半～奈良時代という長い期間の中で、各時期における人的活動は多様な様相を示し、変化している状況が明らかとなった。その変遷を辿る一助として、包含層出土遺物について一括した視点で検討する(表4)。

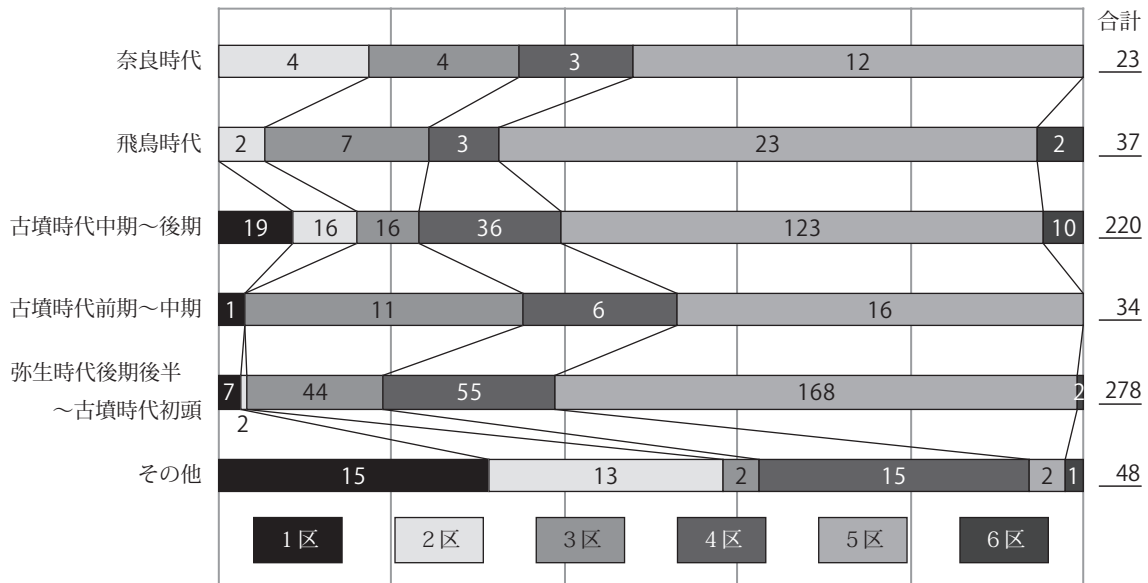
下層からの混入遺物が大半を占め、弥生時代中期の土器が主体である「その他」では、1・2・4区からの出土が目立つ。それに対して、弥生時代後期後半以降、その様相は大きく異なり、特に5区の土

表3 石器一覧表

掲載番号	出土遺構 出土層位	器種	石材	重量(g)	
図197	1	5-597ピット	砥石	砂岩?	8.23
	2	5-678ピット	砥石	流紋岩	82.32
	3	5-657土坑	砥石	凝灰岩質流紋岩	68.49
	4	4-63ピット	砥石	不明	125.89
	5	3-161土坑	砥石	凝灰岩質流紋岩	122.07
図198	1	第7a層	石庖丁	凝灰岩?	17.55
	2	第7a層	自然石?	石英?	4.63
	3	第7a層	自然石?	チャート	4.44
	4	第7a層	自然石?	石英?	8.66
	5	第7a層	砥石	不明	86.6
	6	第7a層	砥石	不明	474.05
	7	第7a層	砥石	流紋岩質凝灰岩	49.41
図199	8	第7a層	敲石	砂岩	393.1
	9	第7a層	敲石	斑レイ岩?	215.81
	10	第7a層	敲石	砂岩	122.9
	11	第7a層	敲石?	不明	269.89
	12	第7a層	石皿	砂岩?	675
	13	第7a層	石皿	砂岩	3960
図200	14	第7a層	石皿	不明	415.48
	15	第7a層	砥石?	不明	645
	16	第7a層	砥石?	流紋岩?	645
	17	第7a層	剥片	緑色凝灰岩	29.82
図201	18	第7a層	剥片	流紋岩?	159.11
	1	第7b層	石錐	サヌカイト	2.45
	2	第7b層	石鏃	サヌカイト	3.17
	3	第7b層	石鏃	サヌカイト	2.03
	4	第7b層	石鏃	サヌカイト	1.03
	5	第7b層	剥片	サヌカイト	8.73
	6	第7b層	砥石	砂岩?	49.16
図202	7	第7b層	石皿	砂岩	1715
	8	第7b層	敲石	石英斑岩?	513.6
	9	第7b層	素材剥片?	緑泥片岩	38.92
	10	第7b層	素材剥片?	チャート	898



表4 第7b面 時期別にみた包含層出土土器の割合



※表中の数値は、図示した土器の点数を示す。

器が各時期において5～6割を占めている。弥生時代中期以降、氾濫などで形成された砂礫層の影響により、活動範囲が大きく変化し、その中心が5区に移ったことは明らかである。

ただ古墳時代前期～中期では、土坑群が検出されている3区での割合が、他時期より多いのが特徴的である。なぜこのような土地利用がされたのかは不明であるが、この時期に全長80m以上にわたる直線的な溝である1-59、1-60溝の掘削など、大規模な活動が行われており、主に自然流路と数基のピットしか検出されていない弥生時代後期後半～古墳時代初頭に比べ、積極的な開発が始まった段階と考えられる。また1-59溝出土の獣骨からは、周辺での馬の飼育が想起される。他に馬に関連するとみられる遺物は、製塩土器の可能性のある甕(図141-14)以外に出土しておらず、その具体的な姿を探ることは難しいが、周辺に想定される「河内の牧」の初現にかかわる重要な資料といえよう。

集落が形成され、遺構数も最も多い古墳時代中期～後期でも、土器が5区に集中する状況は他と変わらない。これは検出された集落遺構の分布と調和的である。この時期の建物遺構の一部で見られる切り合い関係からは、一定期間にわたって集落が営まれていたことが想定される。出土遺物からは、5世紀後半から6世紀中頃までの年代幅が考えられよう。

本遺跡の南西部に位置する部屋北遺跡では、古墳時代中期以降に牧の経営が本格化し、TK23段階に最盛期を迎える(大阪府教育委員会2005)。これを背景として考えれば、本遺跡の集落は、中心的な集落(部屋北集落)の規模拡大と分散化に伴って成立したと理解されよう。ただし、本調査地においてはこの時期にあたる馬関連の遺物はない。同時期において滑石製品の製作が想定される点を評価すれば、この集落が玉生産の役割を担っていた可能性が考えられる。

飛鳥時代でも引き続き集落が形成されるが、建物数、遺物の出土量ともに減少しており、規模は縮小している。出土遺物が7世紀前半のものに限られることから、7世紀前半に成立し、やや短期間の内に廃絶した集落とみられる。大型の5-491井戸から出土している井戸枠、当て木、敷板には、準構造船の船底部、舷側板が転用されていた。この時期の船体構造の復原を可能にする貴重な資料である。

奈良時代にはいって、包含層における土器の出土量は減少しているものの、建物は前代の2棟から6棟へと増加している。その建物群も、これまでの集落が5区の東側に偏在していたものが、5区の中央

からやや西寄りに移動し、飛鳥時代では少量ながら6区で出土していた土器もみられなくなるなど、集落域に変化がみられる。また5-536井戸からは複数個体の製塩土器が出土しており、周辺で想定される馬の飼育などに関わる可能性が考えられるが、他に関連する遺物がないため、詳細は不明である。

なお、古墳時代中期～後期において1区で土器が出土していたのに対し、飛鳥時代～奈良時代ではみられない。あくまで、出土遺物から抽出した土器に限られるため、まったくなかったとは言い切れないが、極めて土器が少ない状況であったといえよう。飛鳥時代では5区において、集落の西限を示すとみられる5-479、5-480溝、奈良時代では2・5区に渡って南北に延びる坪境溝と、それに接続する東西方向の5-503溝という、それぞれ区画性の強さが窺われる溝が確認されている。奈良時代に先立つ飛鳥時代の段階においても、すでに5区の集落域と、その南（西）側の生産域とが明確に意識されていたと考えられる。

今回遺構が検出されなかった庄内式後半～布留式前半、6世紀後半（TK43～TK209）、7世紀後半の様相をどのように捉えるかは、周辺遺跡の動向や環境の変化なども含め、今後の課題として挙げておきたい。

## 第8節 第8a面の遺構と遺物

弥生時代に形成された古土壌は2枚に分かれ、それぞれ第8a-1層、第8a-2層と呼称している（分層困難な場所では両者を合わせて第8a層と呼称している）。後者は弥生時代前期前半の遺物を包含しており、その下面で検出する当該時期の遺構・遺物については次節にて詳述する。一方、前者は遺物を多く含まず、時期は弥生時代中期頃と明確ではないが、その上面では第7b層に被覆された水田面が良好な状態で検出された（図204）。ただし、東から西に傾斜する地形のため、調査地東端では上層の攪拌により第8a面が残存しておらず、畦畔も削平されて残存していなかった。また、調査地西側では第8b-1層の供給によって形成された微高地1が存在しており、検出された水田はこの微高地を挟んで東西に分かれる。微高地1の上部および東裾部では、第8a-1層の下面に弥生時代中期前半と考えられる集落が検出された。これらの遺構については次節第1項で〈西側遺構群〉として詳述する。

水田は地形に合わせた小区画水田である。導水路は検出されず、明確な水口も見られないことから豊富な地下水に依存した水田経営を行っていたものと考えられる。水田は微高地1によって大きく東西に分割されている。両者の水田を被覆する第7b層は微高地1を挟んで堆積状況が大きく異なり、含まれる遺物は少ないものの、時期差がある可能性がある。ここでは微高地1西側の水田を〈西側水田〉、東側の水田を〈東側水田〉と呼称し詳述する。

### 1. 西側水田

西側水田は微高地1西側で検出されたため、調査面積は狭い。南側で東西方向の大畦畔とそこから北に展開する水田畦畔が確認された（図版43-1）。水田面は部分的にヒシの実などの植物遺体を豊富に含む泥質な堆積（第7b-5層）で被覆されていたが、畦畔の高さは低く、水田放棄後の滞水環境の中で崩壊した可能性が考えられる。第7b-5層の堆積が見られない場所では、第7b-4層による水田面の浸食が著しい。第7b-4層は砂礫を主体とする氾濫堆積物で、微高地1西側のみに認められる。この第7b-4層と第7b-5層の間からは、石庖丁や鋤などの農具のほか、弥生土器の甕・鉢・壺が出土した（図205：図版43-4～7）。

1は緑泥片岩の石庖丁で、穿孔部で破損している。刃部は直線的で両刃。使用痕は明瞭でない。2は木製の鋤で背部に弱い峯を持ち、刃先に向かって細くなる。おそらく鉄製の刃先は装着されなかったと思われる。材については鑑定の結果、アカガシ亜属と判断された。3・4の甕は、いずれも弱く外反す

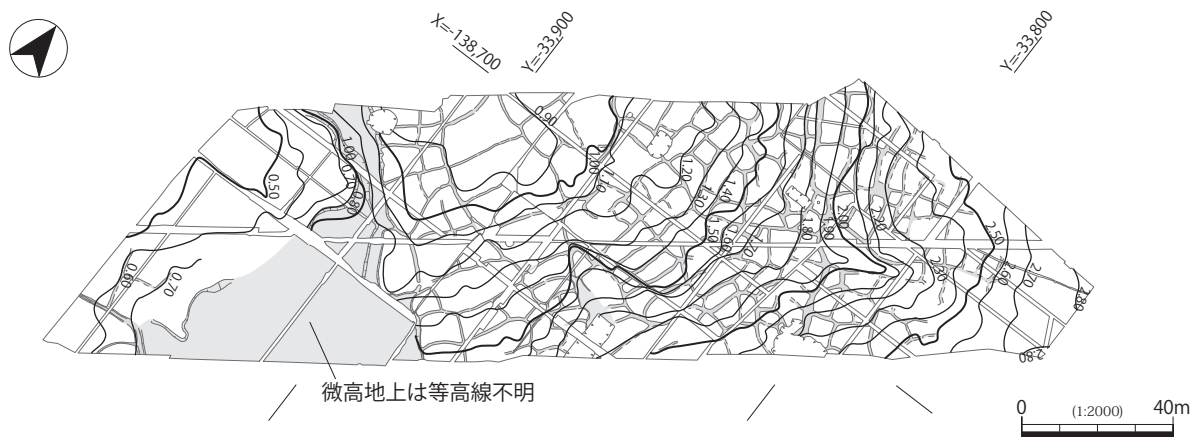


図203 第8a面 等高線図



図 204 第 8a 面 平面図

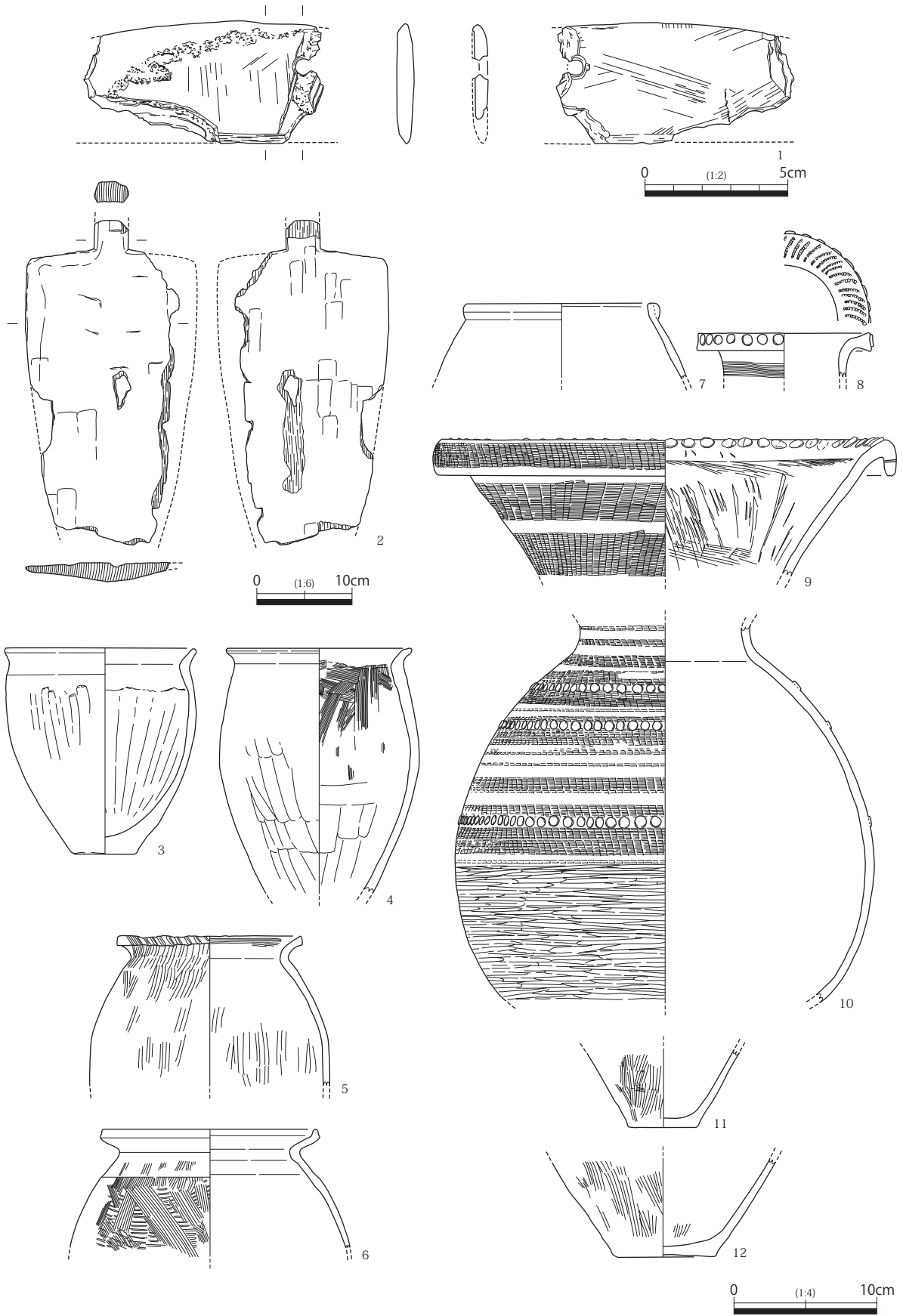


图 205 第 7b-5 层 出土遗物实测图

る口縁部を持つ無文のものである。器表にはタテ方向のケズリが見られ、4の口縁部内面は強くヨコナデされる。後述する第8b面の東側遺構群に伴うものと同じく、Ⅱ様式の甕と考えられる。一方、6は口縁端部を上方に拡張する甕で、タタキ成形の後にハケメを施しており、Ⅴ様式まで下る遺物と考えられ、幅広い時期のものが含まれることが分かる。8～10の壺はいずれも円形浮文や刺突文、簾状文などで飾っており、Ⅳ様式の弥生土器と考えられる。

これらの遺物は、第8a面の西側水田の廃絶時期を考える上で重要であり、微高地1上で検出された集落に関係する可能性の高いⅡ様式の遺物を除くと、Ⅳ様式からⅤ様式のものが見られることになる。ただし、これらの遺物は水田面直上から出土したわけではなく、第7b-5層の堆積過程から第7b-4層の供給の中で投棄された遺物群と考えられるため、水田の廃絶年代を直接示すものではないことには注意が必要である。なお、Ⅳ様式に属する弥生土器は、当調査地では西側水田付近と、微高地上に検出された遺構からわずかに出土している。第7b-4層の上には、第7b-3層～第7b-1層までの粘土層が堆積している。第7b-1・7b-2層には、弥生時代後期後半から古墳時代初頭頃の遺物が含まれており、第7b層が弥生時代中期後半から古墳時代初頭にかけて堆積したことを示す。

また、第7b-5面上には人の足跡の他、鹿の足跡が多数確認されている（図版43-2・3）。足跡には第7b-4層が充填されており、第7b-4層供給直前の状況として、低湿な環境にありながらも水深はそれほどなく、動物や人が活動していたことがわかる。図版43-3はA地点で検出された足跡だが、南東側のやや高い位置に鹿の足跡が集中しており、その北東側の低い場所には人の足跡しか認められない。低湿な当面において、低い場所には滞水し、水場のような状態になっていたのかもしれない。水田畦畔の検出されない北側については、20cm近く落ち込んでおり、明確な水田耕作土が確認されない（図21）。ただし地形的には平坦であるため、水田が広がっていた可能性については否定できない。

**1-295 畦畔** 微高地1の西辺から西方向に延びる比較的規模の大きい畦畔である。下層調査の際に微高地1を除去したところ、その下部に1-295畦畔から連続する畦畔（1-300畦畔）が確認された（図206）。これにより、1-295畦畔が微高地1形成前の弥生時代前期から踏襲されている可能性が考えられる。この畦畔の南北で水田面の高さが異なり、西側水田が区画されている可能性があるが、検出面積が狭く不明である。この畦畔の盛土からは比較的多くの遺物が出土したが、細かな土器片が多く図化できなかったものはわずかしかなかった。このことから、これらの土器が盛土内に意図的に埋蔵されたものではなく、畦の設置や修復に伴って周囲にあった土器片が掻き込まれたものと考えられることができる。図207

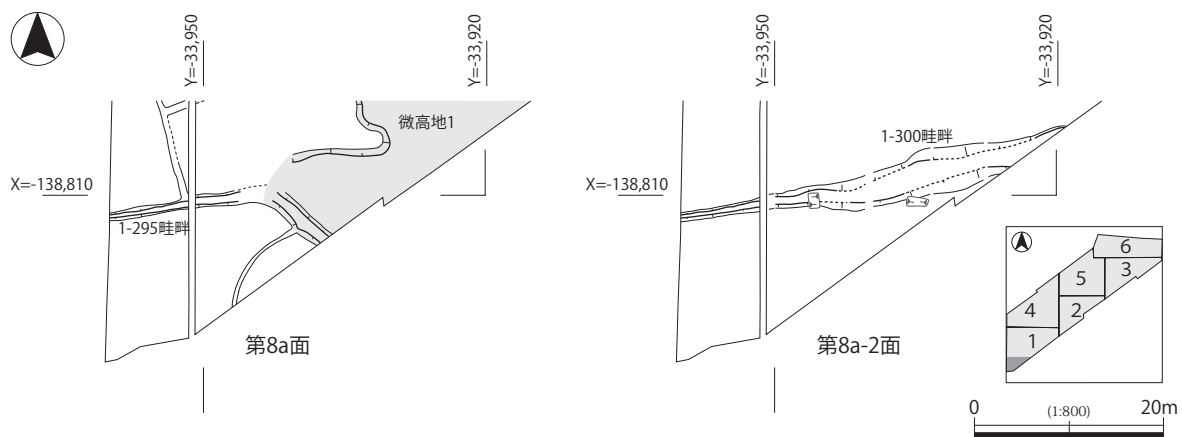


図206 1-295 畦畔および1-300 畦畔 平面図

には図化が可能であった4点を示した。1は甕の口縁部と考えられる。器面はハケ調整後、内外面にミガキを施すが、非常に粗雑な印象を受ける。体部からくの字に屈曲してほぼ水平に延びる口縁部を持ち、頸部には部分的に削り出された段状の施文が認められるが、段の端部はミガキと同じヘラ状工具により粗く潰されている。非常に奇妙な形状であり、類例を見ない。胎土が緻密で灰白色を呈するなど、当遺跡で一般的に見られる土器の黄灰色の胎土とは異なるため、搬入品の可能性も考えられる。

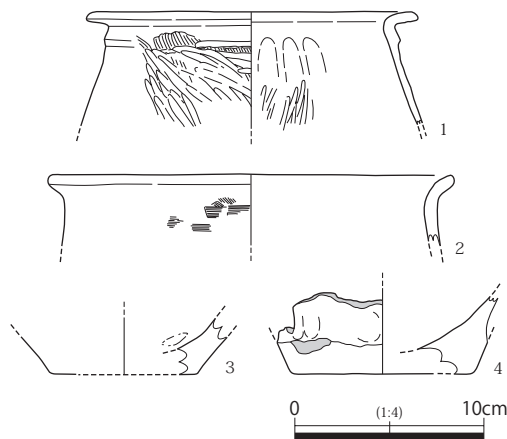


図 207 1-295 畦畔 出土遺物実測図

4は壺の底部と考えられるが、外面に粘土接合部から剥離したと考えられる痕跡を持つ。剥離面には弱く指頭圧痕が認められ、第6章第4節で詳述する弥生時代前期前半の土器に特徴的な接合部剥離資料に近似する。1-295 畦畔が弥生時代前期から踏襲されている可能性を考えると、他の接合部剥離資料と同じ弥生時代前期のものであるとも思われるが不明である。

以上のように出土遺物の時期は不明であるが、図化できなかった土器片の中には、櫛描直線文が施された壺の頸部などが含まれている。これから弥生時代中期を上限とした時期を考えることができよう。

## 2. 東側水田

微高地1 東側から調査地東端まで広い範囲で畦畔が検出された。ただし、調査地東端は上層の攪拌により削平され畦畔が失われている。畦畔を被覆する第7b層は、西側水田上層に見られた第7b-2層に近似する青灰色の粘土層が主体だが、第7b面で検出された集落の直下には砂礫層が存在する(図81)。検出された畦畔は東から西に下る地形傾斜に合わせた小区画水田を構成しており、東端付近の標高は2.6m、西端付近の標高は0.8mを測る。東端から西端までは直線距離にして約150mであり、比較的比高差の大きな斜面地形を利用して水田経営を行っていることがわかる。

水田は、畦畔の形状や主軸、水田間の比高差などから8つのブロックに分けることができ、導水径路のみならず、水田の開発単位や畦畔の計画的設置に深い関連性を持つと思われる。ただし、ブロックを区分する畦は一部を除いて特別大きなものではなく、ブロックを越えて隣接する水田比高差も小さいことから、各ブロックが完全に独立して機能したわけではなく、隣接したブロックと相関して機能していたことが想定される。図208には、水田ブロックと各水田の持つ標高、それから復原される導水径路を示した。以下では各水田ブロックについて詳述する。

**ブロックI** 調査地東端に位置する。水田ブロックの検出面積は約1400㎡で、畦畔検出範囲における水田標高は1.90～2.63mを測る。ブロック西側を北西方向に延びる比較的規模の大きな畦畔(以下、大畦畔と呼称)によってブロックⅢ・Ⅳと画される。大畦畔を境として水田畦畔の主軸や水田標高等に顕著な変化があることから、比較的強い区画意識が窺われる。大畦畔東側の水田は多くで標高2mを超え、大畦畔西側の水田とは環境的にも異にする可能性がある。ブロックIとⅡの間には、東西に長い不定形の区画(A地点)が確認される。この区画内は平坦ではなく中央部が谷状に窪んでおり(図203)、1.9～2.2mと30cmもの起伏を持つことから、水田としての機能は考えがたい。区画西側は大畦畔を挟んでブロックⅢ・Ⅳに接しており、大畦畔もこの部分でやや規模を小さくしている。ブロックI内の灌漑用水が最終的にこの区画に集水される構造になっていることから、この区画が隣接ブ

ロックへの導水を意図したものであることは疑いないといえよう。ただし後述するように、この位置からの導水はブロックⅣよりもブロックⅢを目指して行われた可能性が高い。

**ブロックⅡ** ブロックⅠの北側に位置する。検出面積は約 1700 m<sup>2</sup>、畦畔検出範囲での標高は 1.86～2.63 mを測る。A地点の区画の北側を東に延びる畦畔によってブロックⅠと区画されるが、隣接地点においてはブロックⅡの方が標高の高い水田が多く、ブロックⅠからⅡへの導水は想定しにくい。ただし、上層の削平によって水田面の確認ができなかった調査地東端付近の状況は不明である。ブロック内の灌漑は、大きく東方から北西方向に向かって行われたと考えられるが、東方からの導水は、水田形状と等高線分布より、B地点から西に延びる畦畔によって南北に分けられていた可能性が高い。南側の導水はブロックⅠとの境界沿いを西流し、ブロックⅢとの境界沿いを北西流する。北側の導水は、西流した後に南側の導水と合流して北西方向に流下すると考えられる。これらの導水は最終的に北西方向に排水されたと考えられるが、後述するように、調査地外でブロックⅢに導水された可能性がある。

**ブロックⅢ** 調査地北側で検出されたブロックで、検出面積は約 1300 m<sup>2</sup>、水田面の標高は 1.08～1.88 mを測る。先述したようにブロックⅠからの導水がある。ブロックⅢ東端から入ってきた灌漑用水は西流してブロックⅥとの境界にいたるが、これとは別にブロック北側からの導水径路を考えることができる。ブロック北側のC地点付近の水田は、比較的標高が高く、相対的低位の南側水田からの導水が見込めない。これにより、北側からの導水を考えざるを得ないことから、調査地外の北方でブロックⅡからの導水があった可能性を考えたい。また、D地点では畦畔の直下で半裁した木材が伏せ置かれた状態で出土した（図版 45-3・4）。ブロックⅣとの導水に用いられた暗渠と考えられるが、導水方向は不明である。木材は非常に堅固で、樹種鑑定の結果ニレ属と判断された。

さらに、ブロック西端では 5-868 土坑が検出されている（図 209：図版 45-2）。1.5 × 1.2 mの楕円形の土坑で、深さは 0.6 mを測る。人為的に埋め戻された形跡はなく、第 7b 層の堆積によって自然埋没している。遺物は出土しなかった。性格については不明であるが、水溜めのような遺構であろうか。5-868 土坑の南側では畦畔上から根株が確認された。株直下の畦畔はやや幅が広く、根は畦畔上に広がっており、水田経営時に畦畔上に生えていた立ち木と考えられる（図 209：図版 44-7・8）。樹種鑑定の結果、ヤナギと判断された。確認された地点はブロックⅢ・Ⅳ・Ⅵを区画する畦畔の交点にあたり、視覚明示的な効果を持っていた可能性も否定できない。

**ブロックⅣ** ブロックⅢの南側に位置する。検出面積は約 1300 m<sup>2</sup>、水田面標高は 1.15～2.10 mである。ブロック形状は不定形の帯状を成すが、各辺がブロックⅠ・Ⅲ・Ⅴ・Ⅵに接しており、唯一、全体範囲が想定できるブロックである（東端はわずかに調査地外に広がる）。他のブロックがこれと同等、もしくは大きくなることから、水田の各ブロックが 1300 m<sup>2</sup>以上を単位として設定されていた可能性を考えることができる。導水径路については、ブロックⅢと同様に 2つの可能性が考えられる。一つは先述したようにブロックⅠから導水される径路である。A地点からの導水を受ける水田面の標高は 1.85 mであり、そこからブロックⅢとの境界沿いに西流する。もう一つは調査地外の東側から導水する径路である。ブロックⅣの中で最も標高が高いのはE地点の水田で、2.1 mを測る。この周囲の水田にはA地点から入ってきた水を引くことはできないため、調査地外の東方から地形に沿って流下する導水径路を想定せざるを得ない。ブロックⅤ・Ⅶ・Ⅷも同様に東方からの導水によって灌漑用水を得ており、調査地外の東方に取水源もしくは導水路などの施設が存在する可能性が高いと考える。E地点からの導水は基本的にブロック内を地形に沿って西流するが、前述したようにブロックⅠからの導水がE地点付近



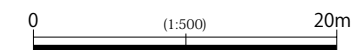
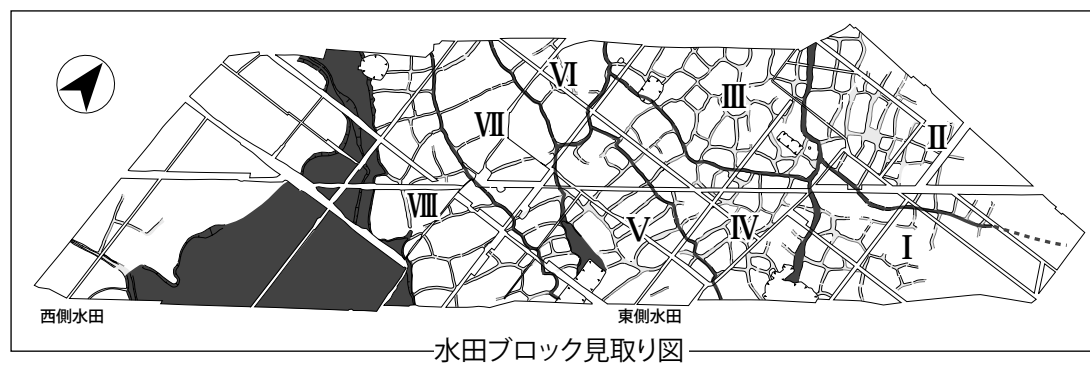
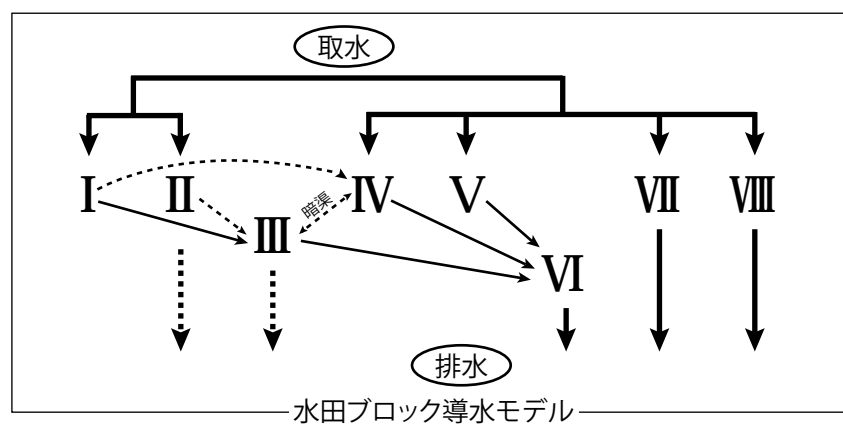
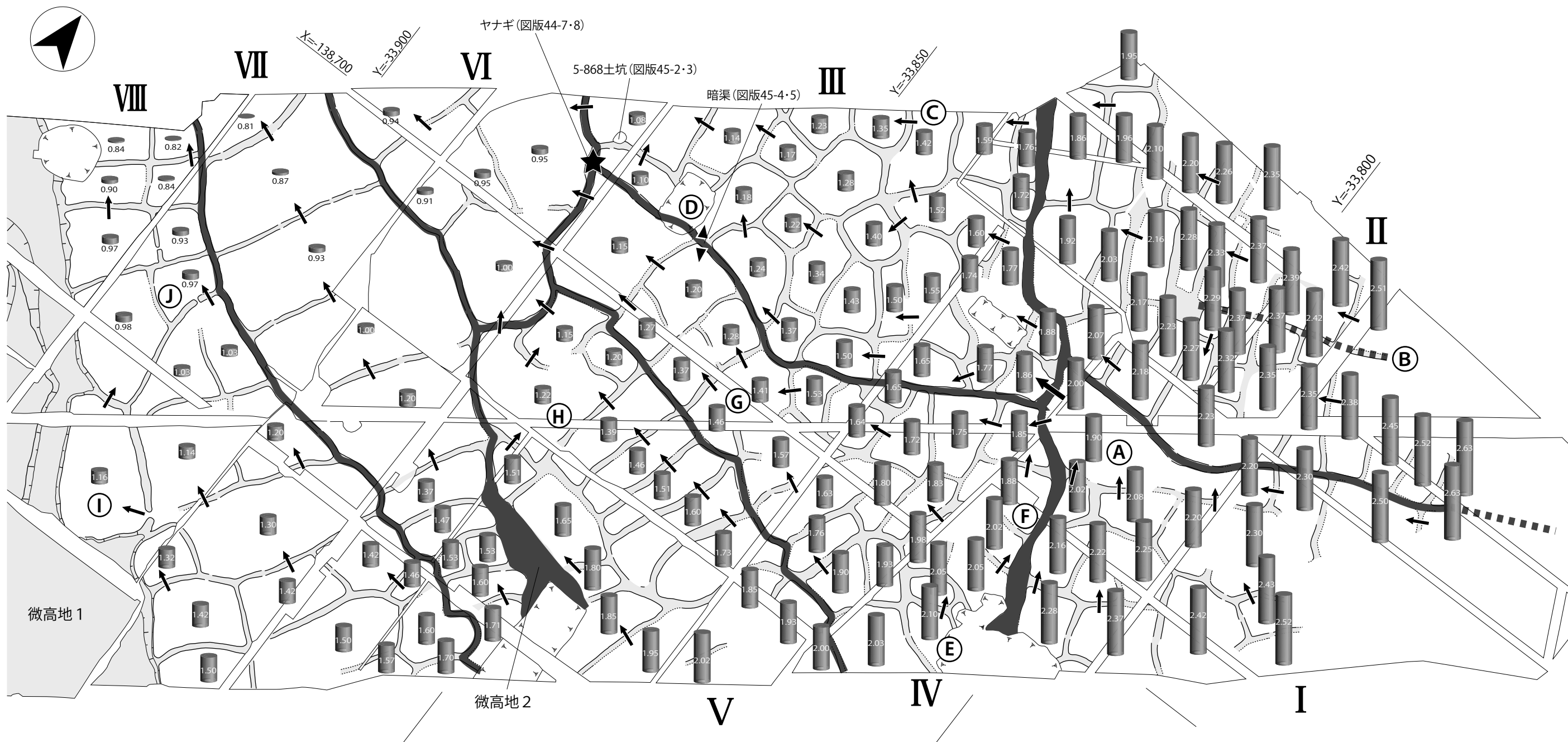


図 208 東側水田導水径路

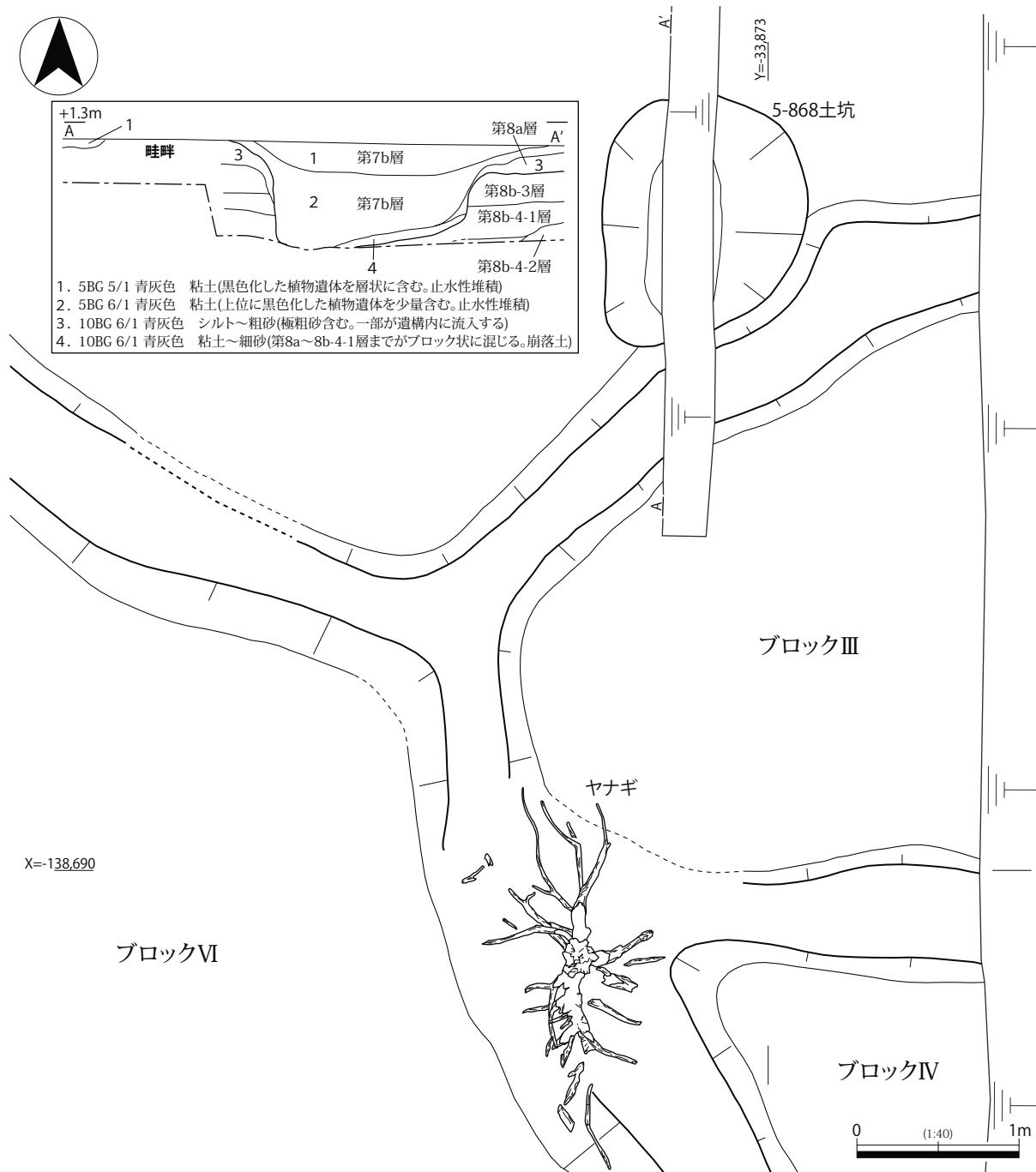


図 209 ヤナギ株・5-868 土坑 平面図および断面図

の水田に向かって流れることはないため、E 地点から F 地点に向かう導水径路も存在した可能性が高い。そう考えると、ブロック内の灌漑は調査地外の東方からの導水によってまかなえることになり、相対的にブロック I からの導水の必要性は低くなる。ブロック I からの導水は、他のブロックを介してしか導水を得ることのできないブロックⅢを指向していた可能性が高いといえよう。

**ブロックⅤ** ブロックⅣのさらに南側で確認された。検出面積は約 1100 m<sup>2</sup>、水田面標高は 1.15 ～ 2.02 mを測る。ブロック北側では西方に下る斜面を等高線に沿って仕切ることで、長方形の水田を造成しているが、南側は微高地 2 を形成する第 8b 層の供給によって水田面標高が高く、微高地 2 に沿って大きさも不統一な水田が作られる。これらの水田を経由した灌漑用水は H 地点で合流する。ブロックⅣの G 地点も同様だが、複数の導水径路が合流する地点では、不定形で面積の広い水田区画が見られる。

ブロックⅥ ブロックⅢ～Ⅴの西側に位置している。検出面積は約 510 m<sup>2</sup>、水田標高は 0.94 ～ 1.0 mを測り、ほぼ平坦な低地部の様相を見せる。ブロックⅢ～Ⅴとの比高差は隣接する水田間で約 15cmあり、境界となる畦畔の規模もやや大きい。また、この境界畦畔上には先述したようなヤナギの株が検出されている。当ブロックは、ブロックⅢ～Ⅴを通る導水径路の流末に位置することから、これらのブロックからの排水を受け、低温な環境にあったと思われる。地形的にも水田面の標高が 1 m以下となっており、水田耕作土である第 8a 層は西方の低地部ほど細粒傾向を示す。

ブロックⅦ 微高地 2 を挟んでブロックⅤの南側に位置する。検出面積は約 1150 m<sup>2</sup>、水田標高は 0.81 ～ 1.71 mを測る。最もシンプルな地形傾斜を持っており、ブロック内の導水は東→西方向に直線的に流れるが、地形傾斜の緩急によって水田規模が異なる様子が見える。微高地 2 の南側では地形傾斜がきついため (25 mで 50cmの比高差)、畦畔を細かい単位で設置する必要があり、面積の小さな水田が作られている。微高地 2 の西方では地形傾斜が緩やかになるため (40 mで 40cmの比高差)、水田面積は大きくなる。地形に合わせた合理的な畦畔の設置を明瞭に看取できよう。

ブロックⅧ 東側水田の南西端に位置する。検出面積は約 1600 m<sup>2</sup>、水田標高は 0.82 ～ 1.70 mと、ブロックⅦとほぼ同じ数値を示す。南西側は微高地 1 に沿うことになり、この水田ブロックの造成時に微高地 1 の整形が行われた可能性が高い。特に I 地点の水田は、おそらくはこの水田の南側でやや東方に膨れていたであろう微高地 1 の旧状を利用しながらも、長方形に近い水田形状を見せている。西接する微高地 1 縁辺には盛土による鞍部が認められ (図版 44-1)、I 地点水田の設置に伴って微高地 1 を削り込み、その土を微高地 1 上に盛り上げることによって鞍部が形成されていると考えることができる。さらに、I 地点水田から北東方向に連なる水田に接する微高地 1 上にも鞍部が認められる。直線的に見える微高地 1 縁辺は水田開発時の造成に伴って整形されたものである可能性は高い (これらの鞍部は第 7b 層の供給により水田と微高地 1 の大部分が埋没しても地表面に露出していたと考えられ、弥生時代後期後半から古墳時代初頭の遺物などが鞍部に沿って出土している (図 174))。また、他のブロックでは見られなかったが、当ブロックでは水口のように畦畔が途切れる場所が確認される。特に J 地点付近で確認されるが、標高 1 mを切る低位の水田ではかなり低温な環境が想定されるため、畦畔自体あまりしっかりと作られていない。他のブロックでは水口が確認されていないことから、畦上の踏み込みのようなものを誤認した可能性がある。ただし、I 地点水田南東端に開口する水口は、その東側の標高 1.30

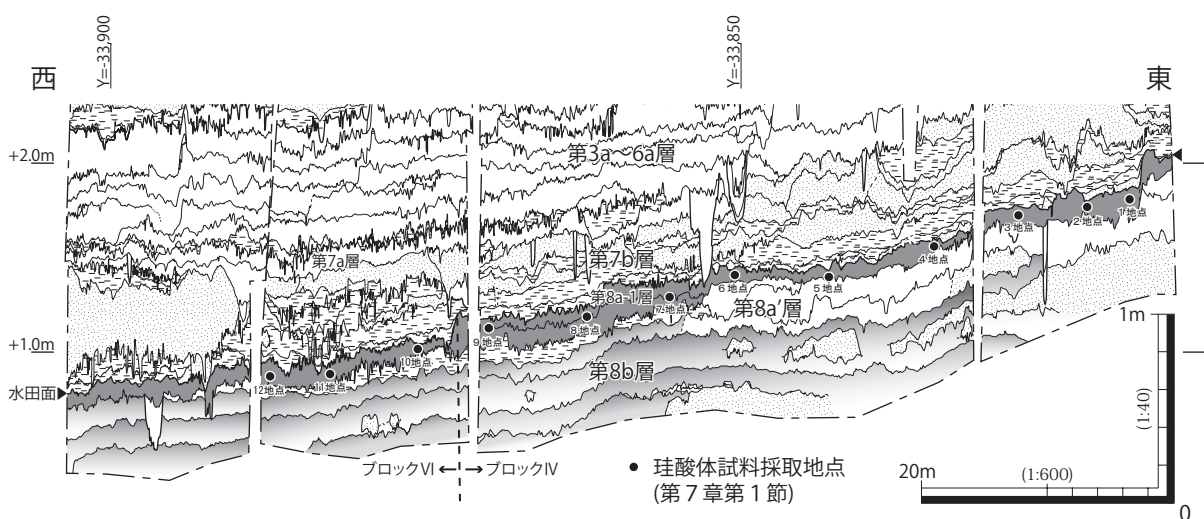


図 210 東側水田 (ブロックⅣ・Ⅵ) 断面図

mの水田から導水するための施設として必要性が高く、水口として理解できるものとする。

以上、8つの水田ブロックについてそれぞれ詳述した。各水田ブロックが地形に合わせて極めて合理的に設定されていることがわかるが、中でも特に注意されるのはブロックⅣ～Ⅷが、東から西に下る単一の地形上をいわば縦方向に分割する形で設定されていることである。この水田ブロックの設定は、当時の開発単位や導水径路の設定、乾湿などの水田環境に深く関連している可能性が高い。ブロックⅣとブロックⅥを横断するX=-138,700ラインにおいては、珪酸体の分析を横断的に行った(図210)。詳細は第7章第1節にて報告するが、珪酸体の含有量が段階的に変化する状況が確認されている。具体的には、①ブロックⅣ東端からG地点まで、②G地点からブロックⅣ・Ⅵ境界付近まで、③ブロックⅥの順に土中に含まれる珪酸体量が増加する(標高で分けるなら1.4mが①・②の、1.1m②・③の境となる)。これは、低湿部において珪酸体が良好に遺存することに合わせ、高位部からの珪酸体の流失・再堆積を示すものと考えられているが、約80mの間においても水田環境が異なる可能性が提示されているとも言え、地形傾斜の強さを物語る。また一方で珪酸体量の変化地点と、導水径路の合流地点やブロック境界がよく一致することは、水田形状やブロックの設定に地形や水田環境が顕著に反映されていることを示しており、極めて興味深い。

東側水田での広域にわたった調査により、多くの興味深い成果が得られたが、その水田域の全てを検出できたわけではない。周辺の状況については今後の調査の成果を期したいが、ある程度の予測は可能であろう。まず下流側となる調査地西側については、すでに標高0.8mで耕作土がかなり低湿な様相を見せている。西側水田の標高0.7m以下の水田がかなり低湿な様相を見せ、あまり積極的な開発状況を想定できなかったことから、東側水田もあつとわず西方で、排水不良な湿地の状況となっているか、もしくは排水路の設置によって水田域の末端が確認できるのではなかろうか。

一方で上流側に関しては、調査地外の東方からの導水が想定されていることもあり、どこまで水田域が広がるかの予想は難しい。ブロックⅠ・Ⅱの東端で見えるように、標高2.6mを超える高位部においても、取水できる導水径路さえあれば水田開発は可能だからである。しかしながら、微高地1・2を形成する第8b-1層は比較的粗粒であり、それを供給した河川や水路などがかなり遠方にあるとは考えにくい。微高地Ⅰ・Ⅱの形成後とはいえ、大きく見れば同様の地形傾斜を利用して経営されている水田が、これらの河川や水路を取水源として利用している可能性は高いと考えるならば、上流側に関しても調査地南東端からそう遠くない場所で、取水路などが確認されることを想定しておきたい。

また、この水田を経営した集団の居住地については、次節第1項の〈西側遺構群〉で述べる微高地1上の弥生時代中期前半の集落を候補としてあげておきたい。ただし、Ⅰ地点水田より南東側の水田に関しては、その直下から建物20、21を検出していることから、それと近接した時期と考えられる微高地上の集落もまた、水田よりも古い時期のものである可能性が高い。しかしながら東側水田の検出された緩斜面は、水田適地として長く利用されてきたと考えられる。次節第2項の〈東側遺構群〉の弥生時代前期集落に関連する遺構も、ブロックⅠ・ⅡとⅢ・Ⅳの境界付近より西側(次節第3項〈中央遺構群〉にて詳述)には非常に少なく、東側の高燥な場所を居住域とし、西側の低湿な緩斜面を生産域として水田経営を行っていた可能性を考えている。その仮定に立てば、東側水田は範囲の大小こそあれ、弥生時代前期から中期(もしくは後期)にかけて継続的に利用された水田域と想定できよう。

## 第9節 第8b面の遺構と遺物

第8a層および直下の古土壌を除去して検出した遺構面が第8b面である。第8a層は大きく第8a-1層と第8a-2層の2層に分かれるが、調査地の大部分において両者は判別できないか、第8a-1層の攪拌により第8a-2層が失われている。ただし1区から4区にかけては、両者の間に局所的な氾濫堆積物(第8b-1層)が堆積し、微高地1と呼ぶ高まりを形成している。この第8b-1層供給範囲においては、両者は明確に分かれ、遺構面の認識としても、第8b-1面、第8b-2面の2面が捉えることが可能であった。しかしながら、1・4区では第8b-2面においてほとんど遺構が確認されなかったため、当面においての詳細な調査は実施していない。そのため、図213では、1・4区の第8b-1層供給範囲においては、第8b-1面の検出遺構を示した形となっている。それ以外の場所については第8b-1層が堆積しないことにより、第8a-1層が直接第8a-2層を攪拌し、同化してしまっている(第8a-2層が残存する場所でも、長期にわたる土壌化作用により著しい変色が見られ、両者の判別を難しくしており、このような場所では、両層の明確な区別は行わず〈第8a層〉として一括把握している)。そのため、両層を同時に除去して検出作業を行った結果、本来2つの遺構面(第8b-1面・第8b-2面)に分かれて確認される遺構であっても、同一の遺構面で検出されることとなった(図211)。

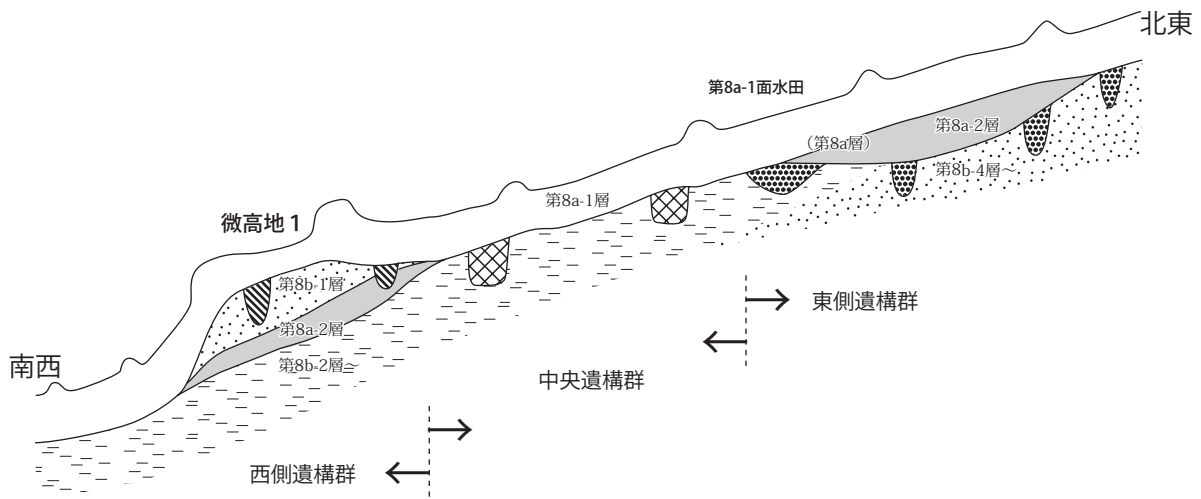


図211 第8b面遺構検出層序 模式断面図

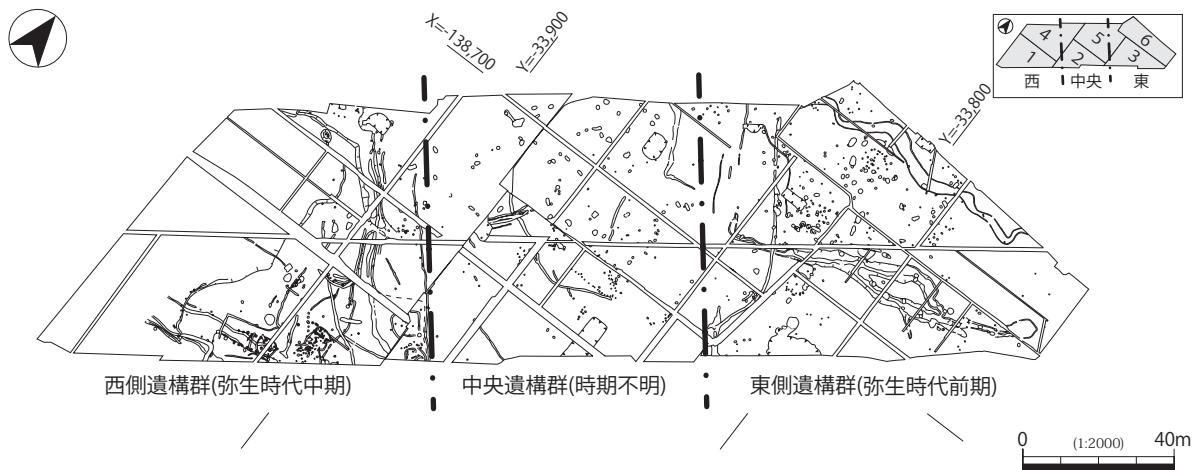


図212 時期別遺構分布

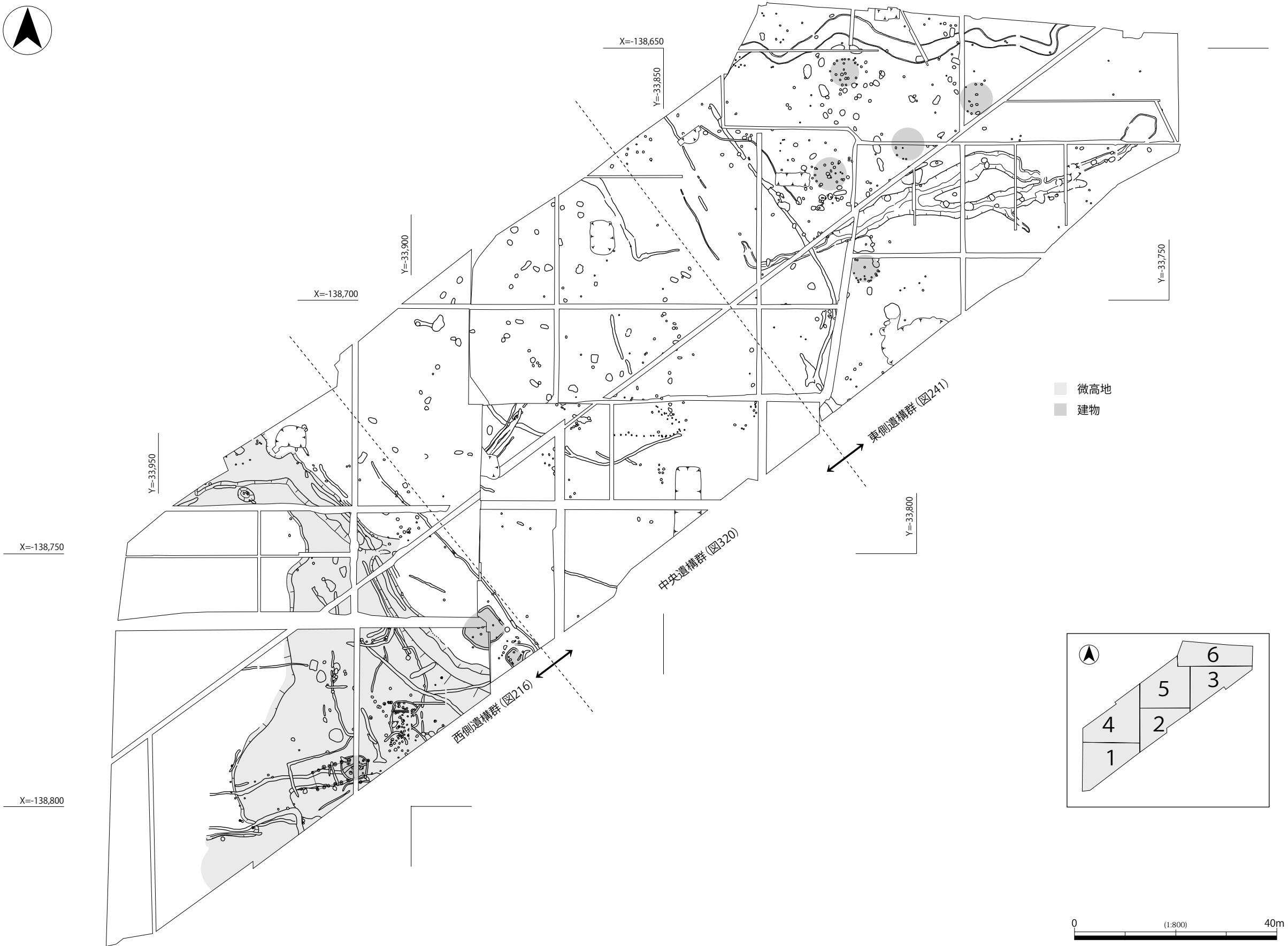


図 213 第 8b 面 (弥生時代前期 (一部中期)) 平面図



図 214 第 8b 面 等高線図

当面では第 8a 面同様に、西方向に降る斜面地形が確認され、調査地東端と西端の比高差は約 2.4 m である（図 214）。第 8a-1 層は先述した弥生時代中期～後期の水田に伴う耕作土と考えられ、第 7b 層に被覆され残存状況がいい。一方第 8a-2 層については、弥生時代前期の遺物を多く含んでおり、当該期の包含層と判断されるが、先述したように局所的な氾濫堆積物（第 8b-1 層）の供給箇所以外では、上層（第 8a-1 層）の攪拌を受け残存状況が悪い。第 8b 面で検出された弥生時代前期の遺構の本来の帰属面（当時の地表面）は、第 8a-2 層の上部（第 8a-2 面）にあると考えられるが、上層の攪拌や著しい土壌化により、第 8a-2 層上面での遺構検出は不可能であり、第 8a-1・8a-2 両層（第 8a 層）を除去した第 8b 面で遺構の検出作業を行った。そのため、深度の浅い遺構や凸状の遺構について、検出できていない可能性は高い。

遺構は調査地西端を除くほぼ全域で検出され、弥生時代前期～中期にかけてのものと考えられる。時期によって遺構の分布に偏りがあり、大別すると、調査地西側（主に 1・2・4 区）に弥生時代前期後半～中期、調査地東側（主に 3・5・6 区）に弥生時代前期前半を主体とする遺構群が検出される。特に 1 区と 4 区の第 8b 面調査では、微高地 1（この微高地 1 は古墳時代初頭まで残存する）上部や裾部で弥生時代中期の遺物を出土する遺構が検出されている。この微高地 1 を形成する砂礫層中（第 8b-1 層）からは弥生時代前期後半と考えられる遺物（図 238）の出土があり、その形成時期の上限を当該時期に置きたい。

一方で 3 区・6 区と 5 区東側の遺構から出土する遺物は、ほとんどが縄文時代晩期から弥生時代前期前半にかけてのものであり、微高地 1 の形成以前に帰属時期が求められることから、調査地の東西で検出された遺構群の時期差は明確である。調査時には第 8a 層を除去して検出される面として、両者とも〈第 8b 面遺構〉として扱っていたが、本節においては混乱を防ぐために、前者を〈西側遺構群〉、後者を〈東側遺構群〉とする。さらに、両者の間、調査地中央部（2 区・4 区の東側・5 区の西側）の遺構については出土遺物が少なく、微高地 1 を形成する砂礫層の堆積も見られないため、帰属時期が不明となっている。これらについては、〈中央遺構群〉として別に扱うこととした。つまり、本節での記述は、西側（前期後半～中期）、東側（前期前半）、中央（時期不明）の 3 つの遺構群に分けて行うこととする（図 212）。なお出土した遺物のうち、当遺構面に関連して出土した石器については、本節の文中において適宜紹介したが、石材や法量、サヌカイトの産地などについては第 6 章第 5 節表 15 に一括して示している。また、実測不可能であったサヌカイト剥片についても、第 6 章第 5 節で検討を行った。

### 第1項 西側遺構群（弥生時代前期後半～中期）

西側遺構群は、微高地1の形成と密接に関連しており、ほとんどの遺構は微高地1の上部で検出されるが、1・2・4区の境界付近で検出された4-128溝や建物20・21のように微高地1の東裾部に位置するものもある。ただし、これらの遺構についても、微高地1を形成した砂礫層の上位から掘り込まれているため、層序的な矛盾はない。第8b面での微高地1の形状は、第8a面での造成の影響を受けており、当時の形状を留めるものではないことに注意が必要である。特に微高地1東辺はその影響が大きいと見られ、本来、東裾部の遺構までも含めた範囲で微高地1が広がっていた可能性が高いと考えられる(図216)。建物を中心とした遺構分布や包含層(第8a層)の遺物出土量の分布が調査地南側に偏って、一体的なエリアを形成していることもその傍証となろう(図215)。しかしながら、第8a面での形状になる前の微高地1の形状について確実に復原することはできず、微高地上部の遺構と東裾部の遺構の間に時間差が存在する可能性も否定できない。本項では検出状況に従って、両者を〈微高地1上部遺構〉と〈微高地1東裾部遺構〉に分け、それぞれの成果について述べることにする。

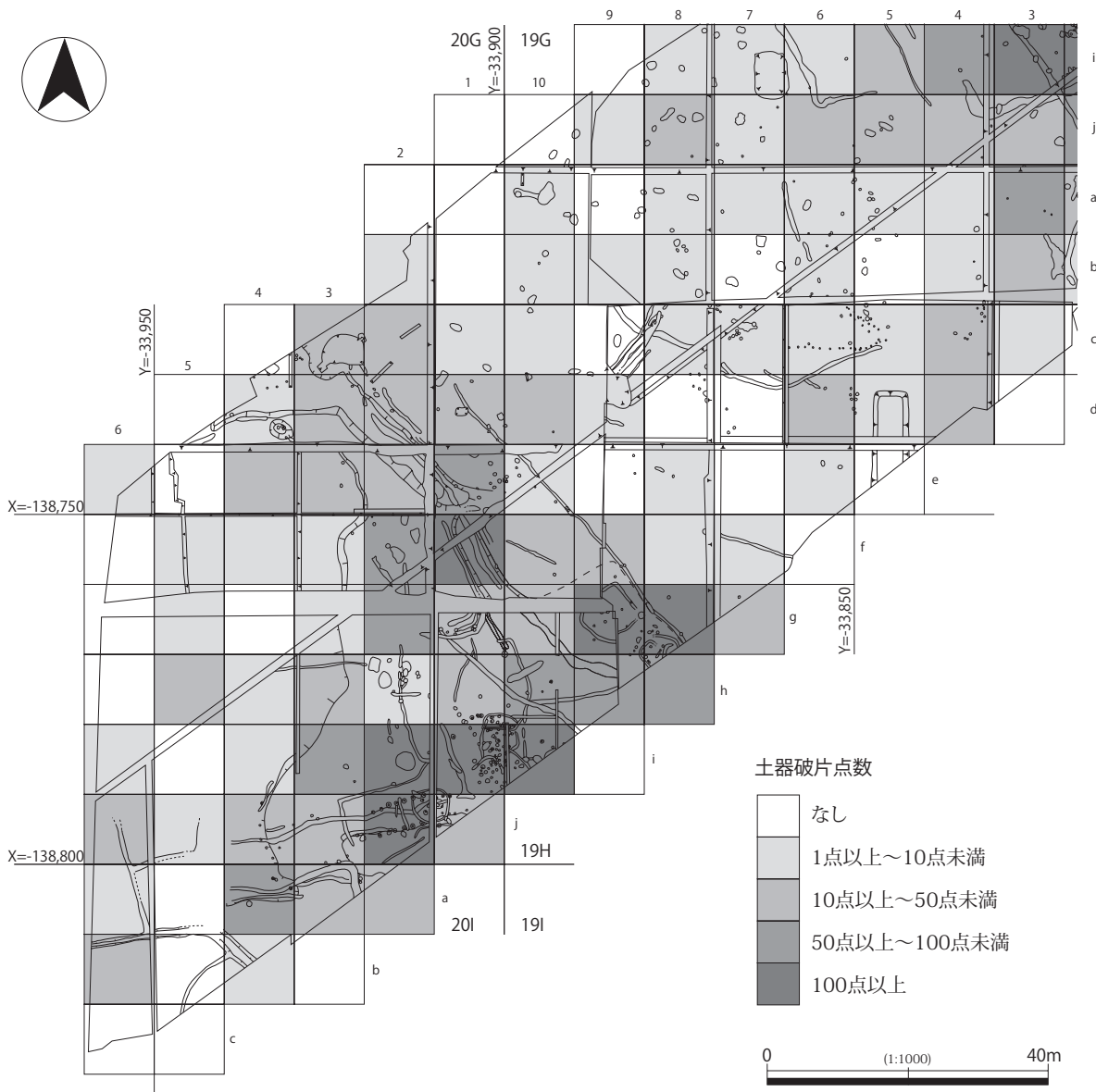


図215 調査地西半 第8a層出土遺物量分布



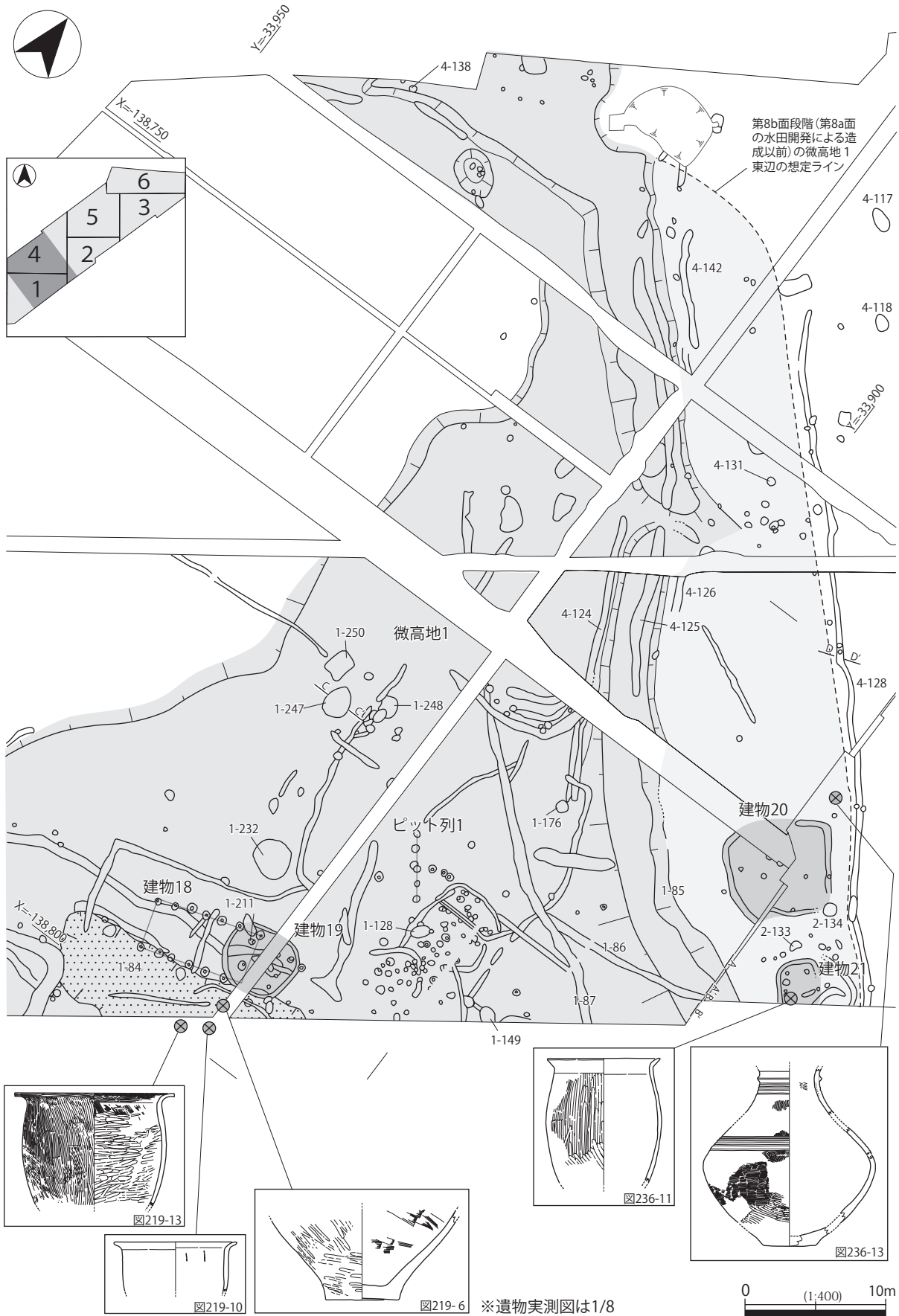


図 216 西側遺構群 平面図

## 1. 微高地1上部の遺構

微高地1については、先に述べたように第8b面当初の形状を留めるものではないが、第8b-1層の供給源である調査地南方に向かって大きく広がる形状を持っていたことは疑いない。建物を始めとする遺構は、微高地1が広がる南側で集中的に検出された。図215に示すように、包含層（第8a層）からの遺物出土量も遺構密度に比例して多くなっている状況が看取され、周辺が居住域の中心として利用されていた状況が考えられるが、集落がさらに広がると考えられる南側は調査地外となるため、確認できない。検出された遺構には、建物の他、ピット、土坑、溝がある。

### ・建物18と関連遺構（図217：図版45-7～46-3）

建物18は、6間×1間の掘立柱建物である。建物プラン東側では、建物19と重複し、その壁溝を切っていることから、建物19に後出する建物と考えられる。建物主軸はN-74°-Eで、床面積は28㎡を測る。径0.4～0.6のピットが1.0～1.2mの間隔で東西に2列並び、桁行6間（7.7m）を測る。ただし、北辺は1-201ピット以西が、南辺は1-208ピット以西で主軸の通りが悪くなり、ピット間隔がバラつくものがある。異なる建物が並列するもしくは時期を違えて存在する可能性も考えられるところではあるが、遺構のまとめりと、後述する1-216溝によって区画される範囲から同一の建物柱穴として認識した。梁行に関しては、建物東妻側の1-197・1-204ピット間で3.8m、西妻側の1-203・1-210ピット間で3.4mを測るが、梁間に柱穴は確認されない。建物の東西には1-188・1-223ピットが位置しており、独立棟持柱を持つ建物である可能性がある。しかし、1-188ピットと建物東妻側との距離は1.7m、1-223ピットと建物西妻側との距離は3.0mと、両者が異なった距離を示すうえ、1-223ピットは建物の中心軸からも南にずれている。また支柱穴に比べ両ピットの深さも浅いことから、独立棟持柱として捉えるのは難しいようにも思われる。ただし、近畿地方の独立棟持柱建物については、「ほぼ1：2の長方形の平面プラン」が特徴の一つとして想定されており（後藤2007）、形状的には当建物もこれに類似するといえよう。1-201～1-203ピット、1-205、1-206ピットでは柱痕跡が確認された。径20cmほどで、埋土を上下に貫通する細砂主体の層が確認されたものであるが、掘方と思われる土層と明瞭な差異はなく、誤認している可能性もある。

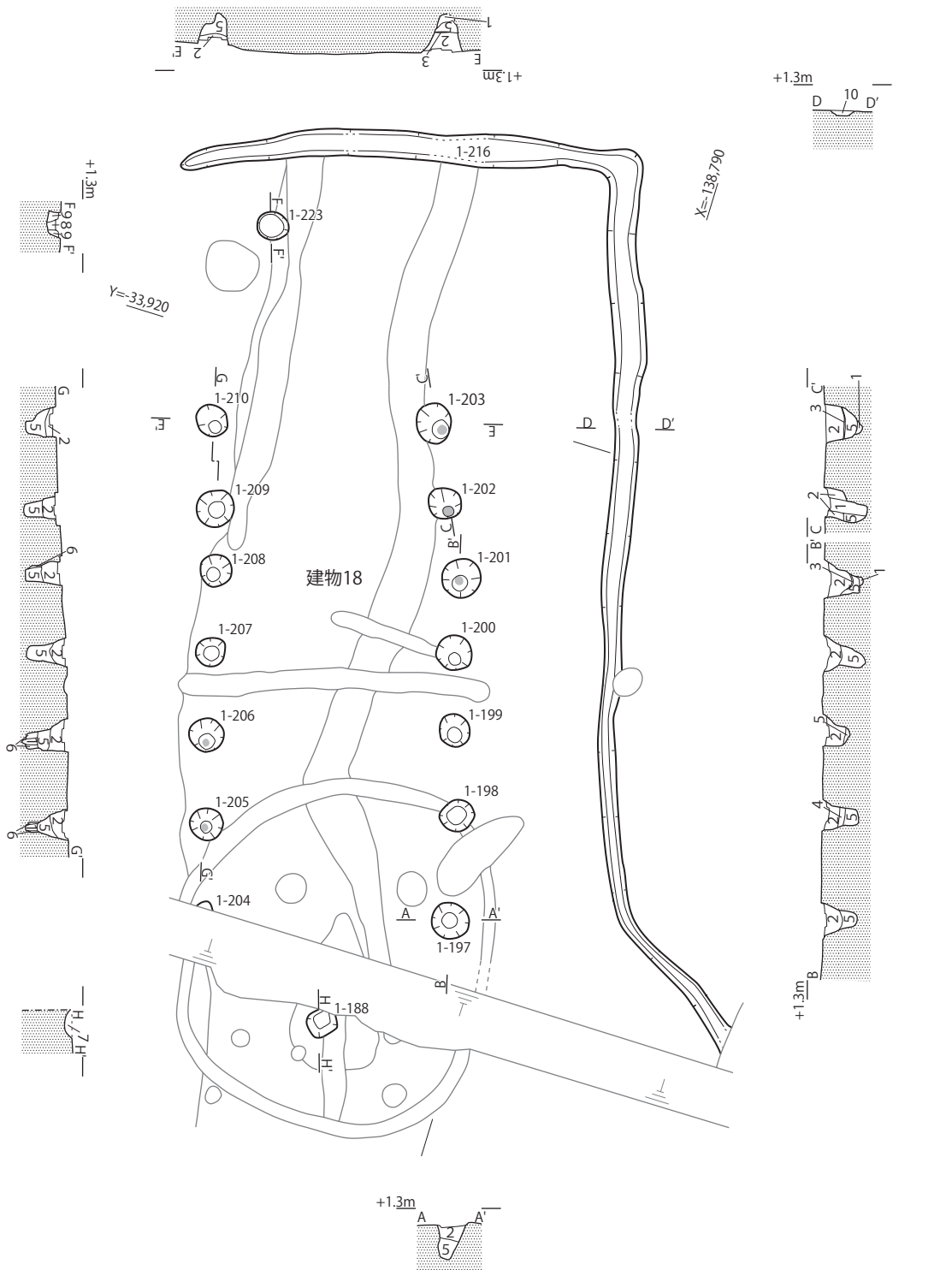
**1-216溝** また、建物北側と西側には1-216溝が掘削されている。幅0.25～0.5m、深さ0.1mを測る小規模な溝だが、建物18のプランに沿った直線的な平面形状を持つことから、建物18に関連して排水や区画などを目的として掘削されたものである可能性が考えられる。ただし、内部に流水もしくは滞水した痕跡は見られなかった。

### ・建物19と関連遺構（図218：図版46-4～7）

建物19は、1区の南側で検出された円形の建物である。プラン中央部を調査時に断ち割ってしまったが、壁溝と考えられる溝が平面円形にめぐり、長径5.5m、短径5.0mを測る。住居中央には1-196土坑があり、掘方底部には炭化物の集積が見られたことから、炉としての機能が考えられる。1-211・1-212ピットを支柱穴とすれば4本柱の建物を想定できるが、プラン中央部の断ち割りのためか、対になるピットは不明である。かろうじて東端が検出された1-184ピットがその候補の一つとなるだろうか。当住居の関連遺構からの遺物の出土はほとんどなく、帰属時期は不明だが、1-211ピットからは小型方柱状片刃石斧（図226-15）が出土している。15は蛇紋岩製と考えられ、刃部角37°を測る。

### ・1-84落ち込み

建物18・19の南側では、包含層（第8a-1層）が比較的厚く堆積していることが確認された。包含



1. 10GY 5/1 緑灰色 細砂～粗砂(柱痕跡か)
2. 10GY 5/1 緑灰色 細砂～粗砂(ブロック土多く含む。第8b-1層多く第8b-2層少ない)
3. 10GY 4/1 暗緑灰色 シルト～粘土(レンズ状の堆積。埋め戻し時に流れ込んだものか)
4. 7.5GY 5/1 緑灰色 細砂(上面に2と類似の堆積あり。埋め戻し時の崩落土か)
5. 10GY 5/1 緑灰色 細砂～粗砂(ブロック土多く含む。第8b-1層少なく第8b-2層多い)
6. 10GY 7/1 明緑灰色 粘土(第8b-2層のブロック。崩落土か)
7. 5BG 3/1 暗青灰色 シルト～粗砂
8. 5G 4/1 暗緑灰色 細砂～粗砂
9. 5G 3/1 暗緑灰色 細砂～粗砂
10. 7.5GY 4/1 暗緑灰色 シルト～粗砂

図 217 建物 18 平面図および断面図

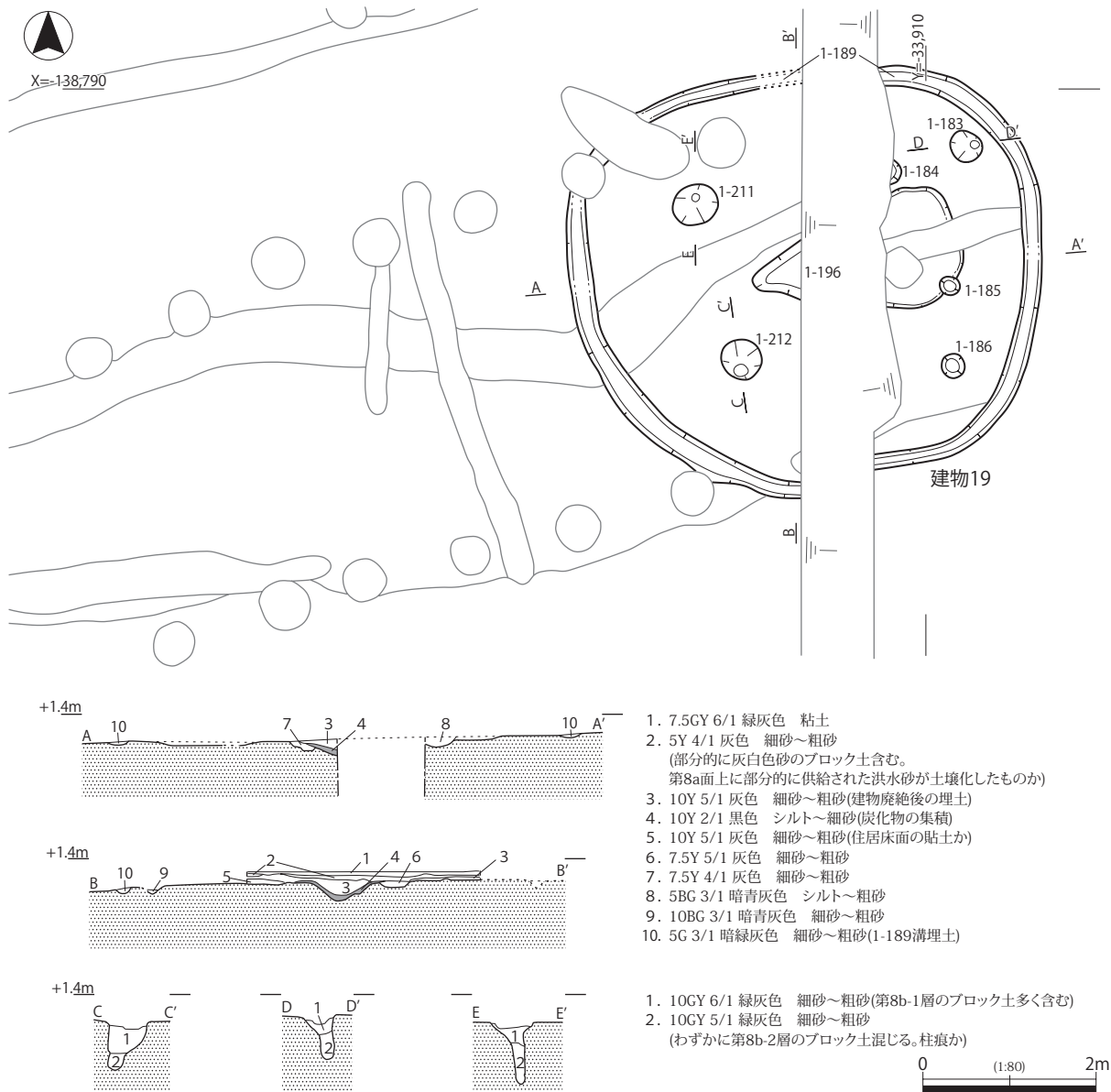


図 218 建物 19 平面図および断面図

層の除去中には比較的多くの遺物が出土し、隣接する建物との関連性が想起された。包含層の除去が完了した時点で、深さはわずか5～10cm程度ではあるものの落ち込み状の窪地が確認されたため、これを1-84落ち込みと呼称することとした。なお、ここから出土した遺物のうち、図219-6・10・13に関しては、断ち割りや側溝掘削中に確認され、その平面位置と層位を確認することができた(図216:図版46-8～47-2)。これら3点の遺物を含めた出土遺物について、図219に示す。なお、全て弥生土器である。

1は甕蓋。外面はケズリの後、ミガキ調整される。3は壺の口縁部であるが、外面は垂下もしくは肥厚する口縁端部が剥落しており、内面は頸部との接合部で剥離している。剥離面は擬口縁逆形を成し、指頭圧痕が見られる。4は弱く外反する短い口縁部を持つ壺で、ハケ調整した後に頸部を直線文と波状文で飾る。5は外面をハケ調整した大型壺の底部で接合部から破損する。6は外面を丁寧にミガキ調整した壺の底部だが、接合部での破損が著しい。2・7～13は甕である。7・8のように口縁端部に刻目を入れるものはあるが、頸部についてはいずれも無文。外面調整はミガキもしくはナデが主体だが、

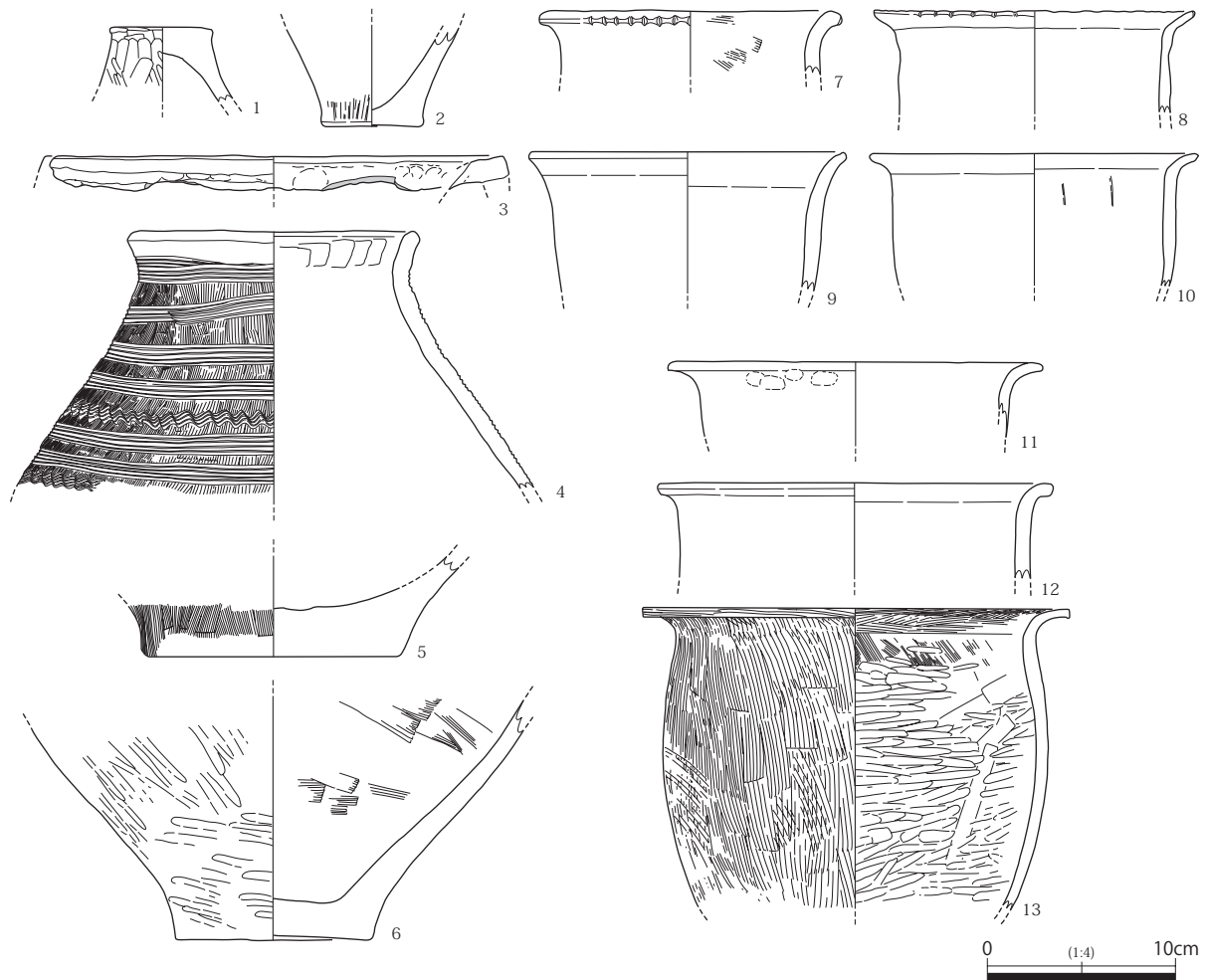


図 219 1-84 落ち込み 出土遺物実測図

13のみ外面をハケ調整する。13は強く外反する口縁部を持ち、方形に仕上げられる口縁端部は内面までハケ調整されている。胴部内面はケズリの後、ヨコ方向に丁寧にミガキ調整されている。

以上の遺物は、時期比定の困難なものもあるがⅡ様式を主体とする遺物群と考えられ、建物 18・19のいずれか、もしくは両方の帰属時期を示す可能性がある。

#### ・遺構集中部

また建物 18・19の東側には、図 220 に示したような遺構の集中部が存在する（図版 47-3）。壁溝など明確なプランを確認できなかったため、建物としての評価は行えなかったが、部分的に弧状をなす溝の存在から、2棟以上の建物が存在している可能性がある。遺構から出土する遺物は少なく、細片が多かったが、1-128 土坑から弥生土器の壺（図 226-1）が、1-149 土坑からは、同じく甕（図 226-10）が出土しており、いずれもⅡ様式と考えられる。

**1-128 土坑** 1.3 × 0.8 mを測る長円形の土坑で、深さは 0.15 mを測る。出土した壺（図 226-1）は頸部の細片ではあるが、直線文と扇形文を組み合わせており、擬似流水文となる可能性がある。

**1-149 土坑** 1.0 × 1.2 m以上の長円形土坑となると考えられるが、南東端は調査地外に延びる。深さは 0.1 m。出土した甕（図 226-10）は、やや肥厚する口縁端部を持ち、内外面ともに丁寧にミガキが施される。口縁部内面にはミガキ前のハケメが観察された。

**ピット列 1** 遺構群北東側の 1-106 ~ 1-110 ピットは N - 38° - W で直線的に並び、同じく直線的



図 220 微高地 1 上部遺構集中部 平面図

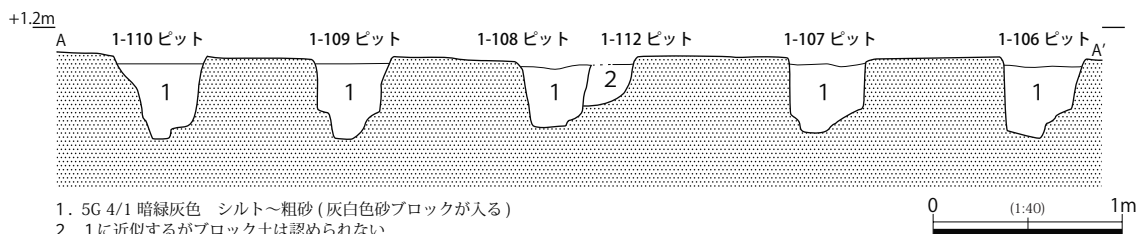


図 221 ピット列 1 断面図

な形状を見せる微高地 1 東辺と同様の傾きを持つことから、地形に合わせた柵列のような遺構であると考えられ、これをピット列 1 と呼称した。いずれのピットも断面で柱根や明確な柱痕跡が確認できず、埋土はブロック土が多く含まれる単層である (図 221)。しかし、ピット底部には柱痕跡と思われる窪みが確認されることから、廃棄時に柱を抜き取った可能性が考えられよう。遺物の出土はなかった。

### ・溝

溝は建物に関連するものを除くと、微高地 1 東辺付近で多く検出されている。微高地 1 の東辺は、一部の張り出しを除いて  $N-35^{\circ}-W$  の方向に直線的に延びており、第 8a 面の水田造成時に成形されたと考えられる。成形の際、削られて発生した廃土は微高地 1 の上に積み上げられたと考えられ、第 8a 面では、微高地 1 東辺に沿って堤防状の鞍部が見られる。この堤防状の鞍部の直下では、第 8b-1 層がいわゆる擬似畦畔状に残存することになり、第 8b 面においても微高地 1 東側には鞍部状の高まりが確認されることになる。この高まりの上や、高まりに平行して 1-85、4-124、4-125、4-126、4-142

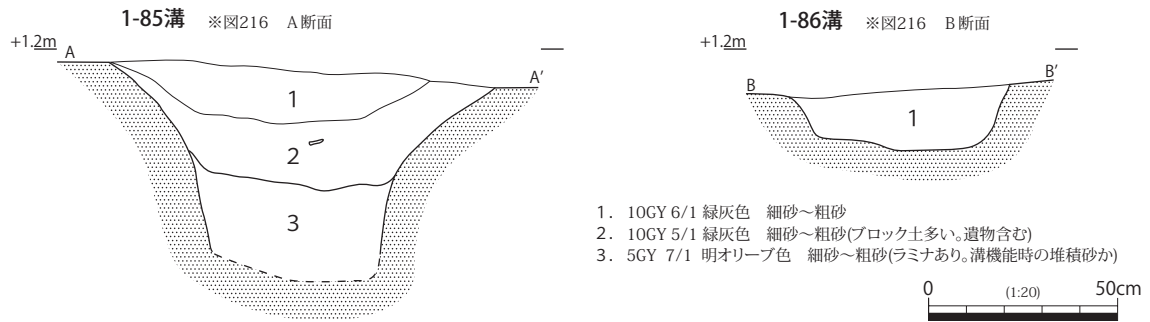


図 222 1-85、1-86 溝 断面図

溝が掘削されている状況が確認された。

**1-85 溝 (図 222: 図版 47-4・5)** 幅 1.0 m 程度の比較的大きな溝で、深さは 0.6 m を測る。最下層の 3 層にはラミナが部分的に認められ、流路内堆積物と考えられる。2 層からは弥生土器の壺 (図 226-5) と甕 (図 226-8) が出土した。5 の頸部には直線文と波状文が施されている。8 は口縁部が弱く外反し、やや肥厚した端部を持つもので、無文だが図 226-9 の甕に似る。いずれも II 様式。

**1-86 溝 (図 222)** 1-85 溝などのように微高地 1 に平行せず、ほぼ東西方向に伸びる溝で、幅 0.4 m、深さ 0.1 m と規模も小さい。他の遺構に切られていることから、これらより古い遺構であることがわかるが、微高地 1 上部の検出であるので、弥生時代前期末は遡らない。内部からは弥生土器の甕 (図 226-9) が出土した。9 は口縁端部に刻目を入れ、頸部に 2 条の沈線を入れるものである。西側遺構群において、頸部に少条沈線の入る甕の出土は少ない。

**4-125 溝 (図版 47-6)** 4 区で確認される溝は、内部に流路内堆積物が見られない。埋土は上層の第 8a 層と近似しており、遺物はほとんど出土しないが、4-125 溝からは小型の弥生土器の鉢が出土している (図 226-7)。7 は、壺底部のみ成形し、胴部を積み上げることなく焼成したような特殊な形状をしている。丸く仕上げられた口縁端部には、部分的に布目と刻目のような圧痕 (図版 107 左下) 認められる。

・土坑

**1-232 土坑 (図 223: 図版 47-7・8)** 建物 18・19 の北側で検出された。径 2.6 m を測る円形の土

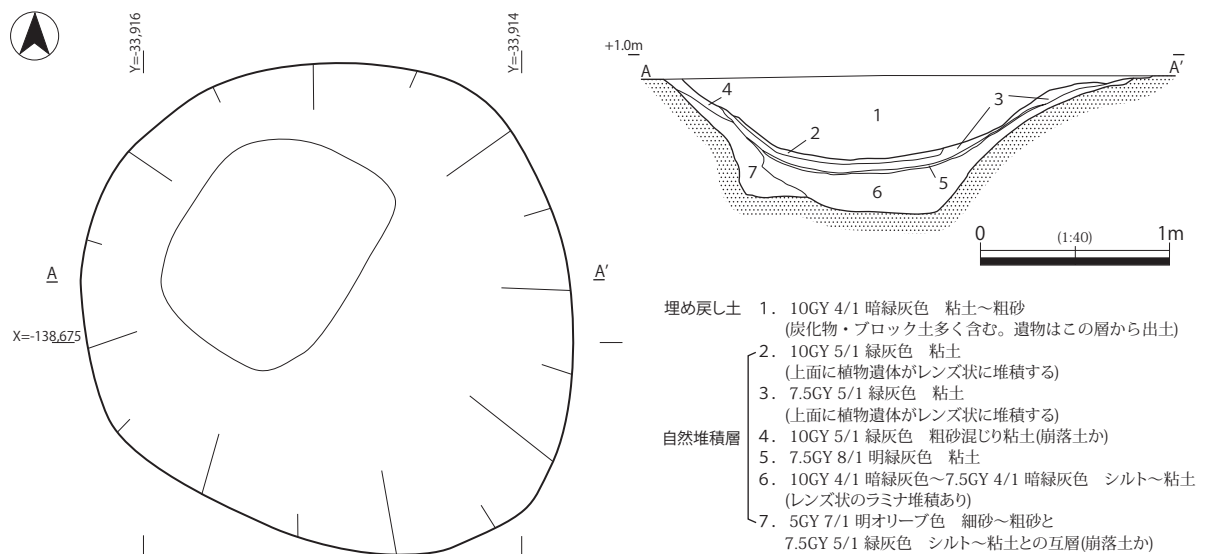


図 223 1-232 土坑 平面図および断面図

坑で、深さは 0.7 m を測る。内部には滞水した状況を示す粘土堆積が厚く見られた。土坑底部に堆積した泥土と考えられる 6 層については、土壌試料を持ち帰り洗浄したところ、約 100 点の種子を得ることができた。同定作業の結果、不明なものを除いて、ほぼ全てがブドウ属の種子であることがわかった(第 7 章第 1 節)。周辺に自生していたものであろうか。土坑は 6 層の堆積後もしばらく開口し、滞水状況にあったと考えられるが、最終的には 1 層によって人為的に埋め戻されている。遺物は 1 層からのみ出土し、弥生土器の壺が 3 点(図 226-2・4・12) 図化できた。2 には 5 条の凹線文が施される。壺の頸部と思われるが、高杯の脚部となる可能性もある。4 は頸部に直線文を施し、頸胴部境には小円形の刺突文を施す。いずれも細片であるが、2 での凹線文の採用から見てⅢ～Ⅳ様式の資料群と考えられる。

1-247 土坑 (図 224: 図版 48-2・3) 2.2 × 1.7 m を測る長円形の土坑で、深さは 1.1 m を測る。内部には砂礫層と粘土～シルトが互層を成して堆積しており、開口期間のうちに数次にわたって自然埋

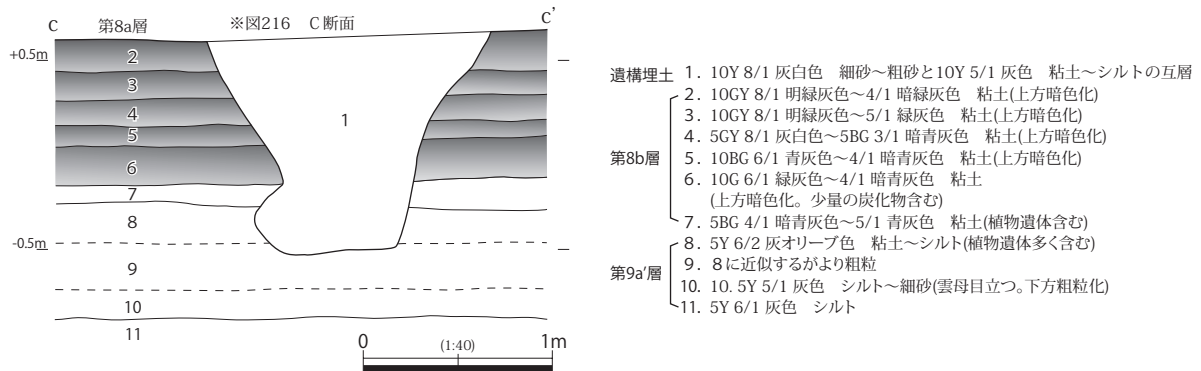


図 224 1-247 土坑 断面図

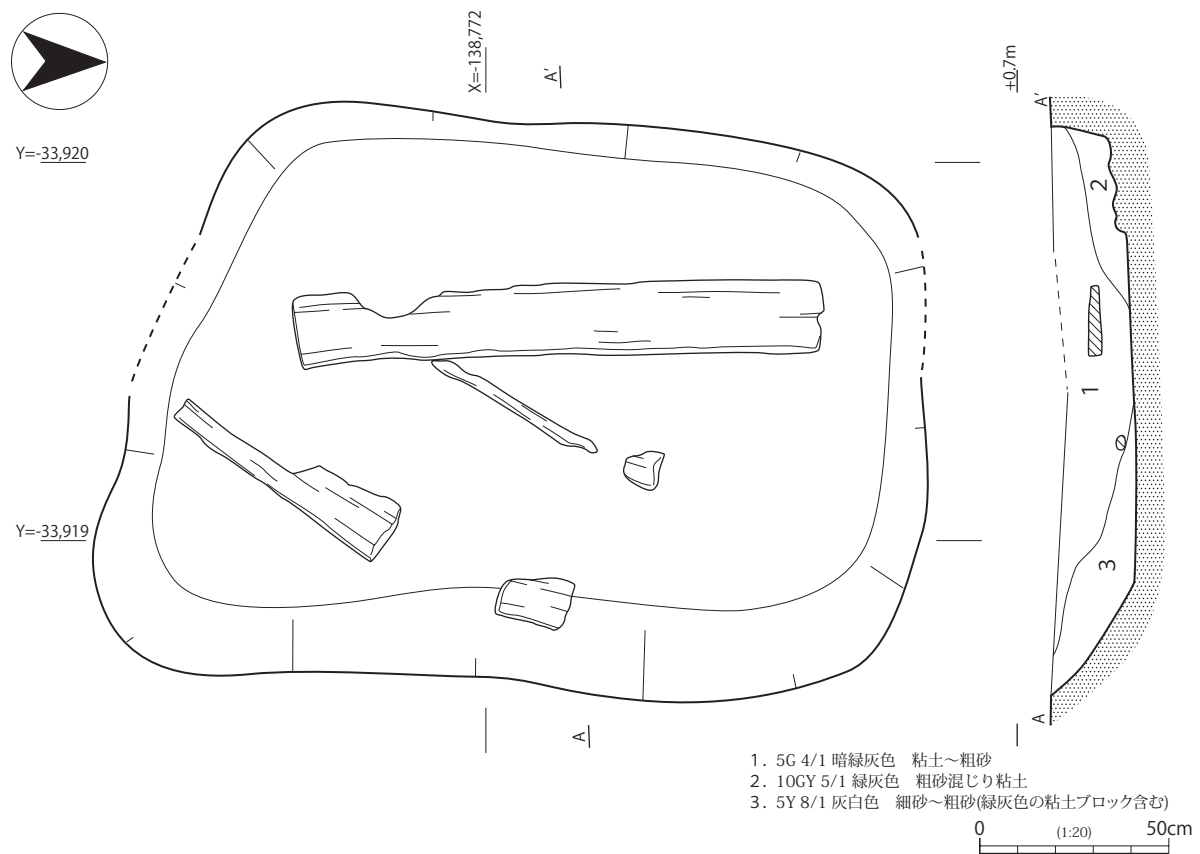
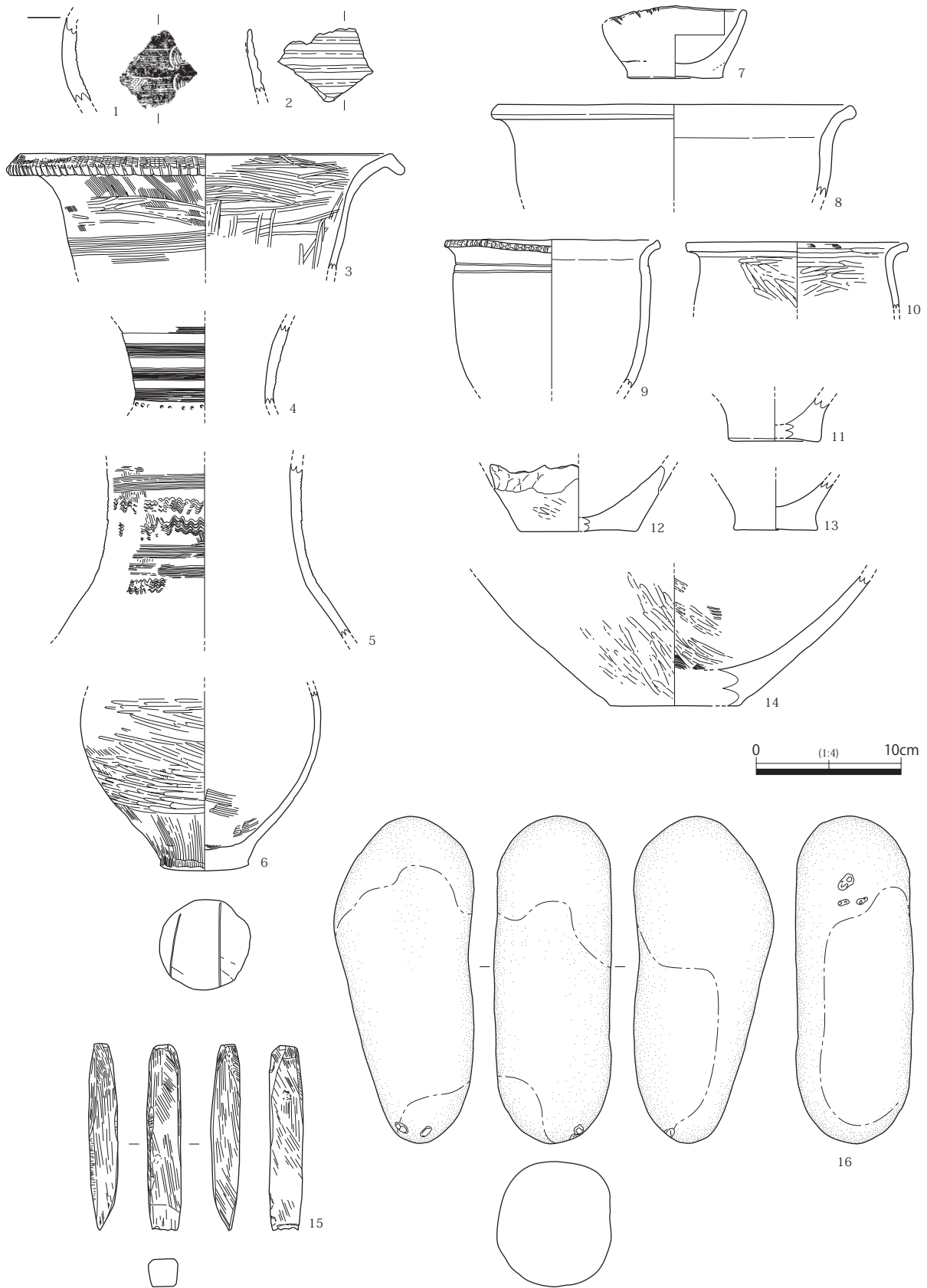


図 225 1-250 土坑 平面図および断面図





1-85 溝 (5・8)、1-86 溝 (9)、1-87 溝 (13)、1-128 土坑 (1)、1-149 土坑 (10)、1-176 ピット (11)、1-211 ピット (15)  
 1-232 土坑 (2・4・12)、1-247 土坑 (6)、1-248 土坑 (14)、4-125 溝 (7)、4-131 ピット (16)、4-138 土坑 (3)

0 (1:2) 5cm

図 226 微高地 1 上部遺構 出土遺物実測図 1

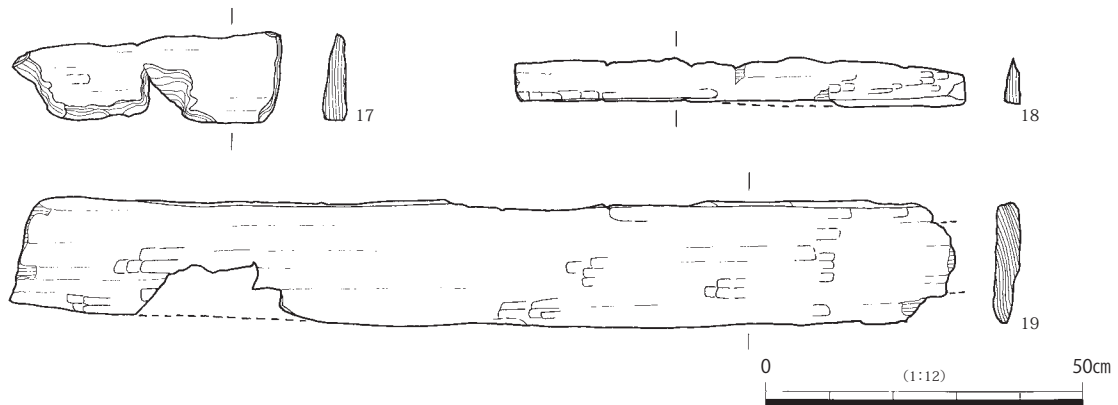


図 227 微高地 1 上部遺構 出土遺物実測図 2

没した状況を示す。土坑の下端は第 9a' 層まで及んでおり、素掘りの井戸と考えられる。内部からは、弥生土器の壺と 2 点の木片（図 226-6、図 227-17・18）が出土した。6 はヨコ方向のミガキで調整された球状の胴部を持ち、底部外面にはナデ消されているものの、葉の圧痕が残る。17 は板状の木片で、長さ 43cm、幅 13cm を測る。表面に抉れのような部分があるが、加工痕などは確認できなかった。18 は断面三角形の棒状の木片である。長さ 71cm、幅 7cm を測る。こちらにも明確な加工痕跡などは見られなかったが、樹種はアカガシ亜属であり、農耕具などの未成品である可能性が考えられる。

1-250 土坑（図 225：図版 48-4・5） 2.0 m× 1.5 m を測る長方形の土坑で、深さは 0.25 m を測る。内部からは木片が数点出土した。そのうち、図 227-19 は長さ 150cm、幅 20cm、厚さ 4 cm を測る大きな板材で、樹種鑑定の結果、コナラ亜属と推定された。前述のアラカシもコナラも同じブナ科コナラ属に属しており堅材として多様な用途に使用されることから、これらの土坑から出土している木片は、農具や容器などの未成品である可能性が考えられよう。

以上のように、1-232、1-247、1-250 土坑は、微高地 1 上部の居住域の北側に掘削された井戸や水溜などの性格が考えられるが、未成品の可能性のある木片の出土からは、貯木穴としての性格も考えられるかもしれない。

4-138 土坑（図版 48-6・7） 微高地 1 上の鞍部は、4 区北側で西方に向きを変えながら幅を広げる。4-138 土坑は、広がった鞍部の南端で検出された。0.7 × 0.6 m の長円形の土坑で、深さは 0.3 m を測る。内部から弥生土器の壺（図 226-3）が出土した。垂下する口縁部には簾状文が施され、端部には刻目が入られる。器面調整はハケメ後ミガキで、頸部には広い幅で櫛描直線文が施される。IV 様式。

## 2. 微高地 1 東裾部の遺構

微高地 1 の東裾部では溝と建物などの遺構が検出された。遺構は 1 区の北東隅と 2 区の南東隅にまたがって集中している。遺物の出土も遺構密度に対応しており（図 215）、建物 20・21 の検出作業時には多くの遺物が第 8a 層から出土した（図 236）。

建物 20（図 228） 2 区南西端で検出された。1・2・4 区の調査区境にあたったため、検出状況が悪い。長軸 7.0 m、短軸 6.4 m のやや歪な隅丸方形のプランを持つ。プラン内ではないが、包含層掘削の際、建物の北側では弥生土器の壺が出土している（図版 48-8）。壺（図 236-13）は、比較的肩の張った胴部の下半をミガキ、上半をハケ調整している。口頸部境には断面三角形の貼付突帯を 1 条設け、その下に 4 条の沈線を、頸胴部境には 5 条の沈線をハケメの上から施している。I 様式の後半か。

建物 21（図 228） 建物 20 の南東に隣接して検出された。一辺 3.0 m 程度の隅丸方形のプランを持

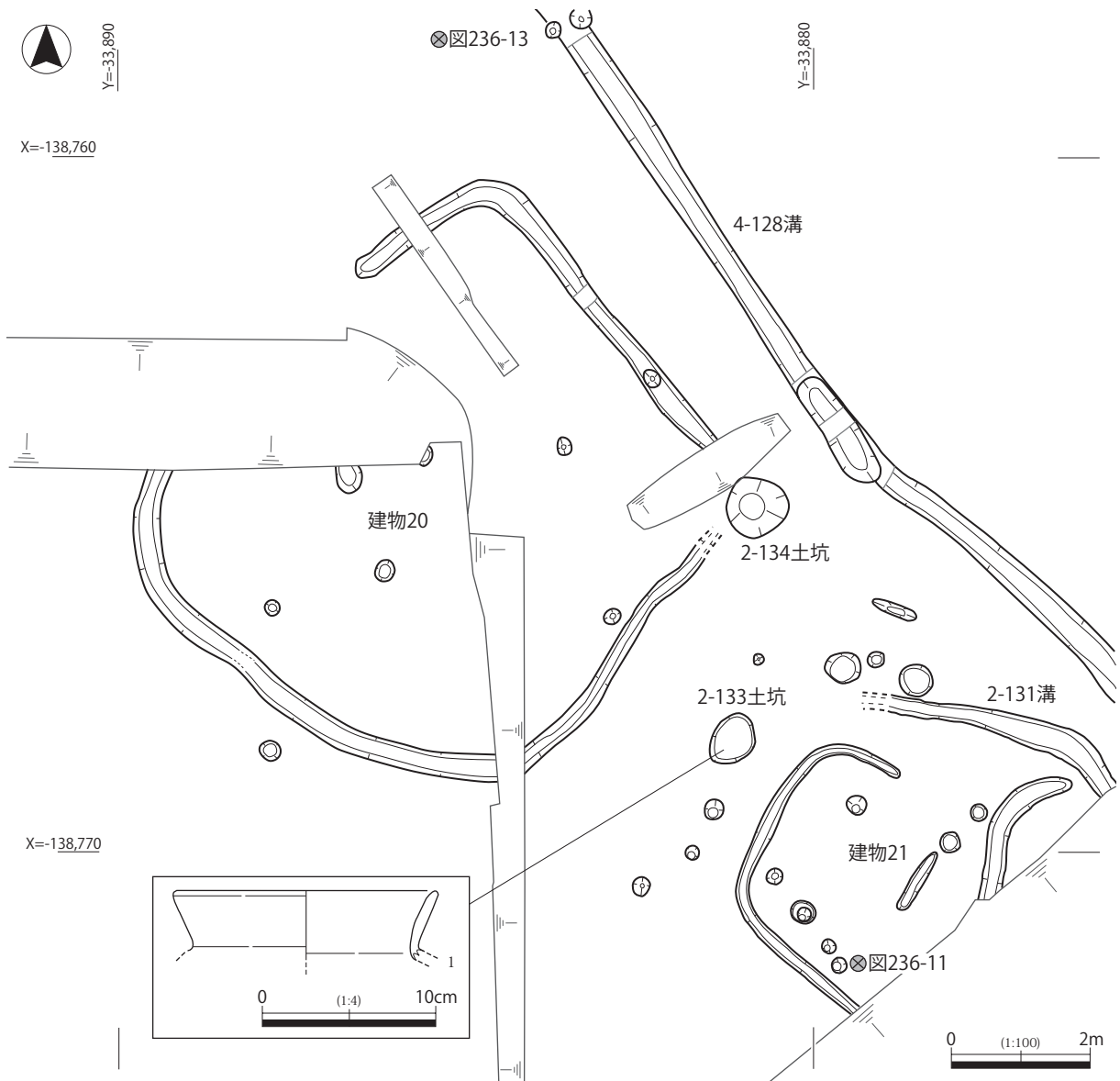


図 228 建物 20・21 平面図

つが、かなり削り込んでの検出となったため壁溝の残存が悪い。南側は調査地外にかかるため判断が難しいが、2-131 溝までを含んで直径約 5.0 m の不整円形の建物になる可能性も考えられる。建物プラン内のピットは周囲のものに比して深く、柱穴となる可能性があるが、配置に規則性は認められない。プラン内からは包含層除去中に弥生土器の甕（図 236-11）が出土した（図版 49-1）。弱く外反する口縁部を持ち、外面は丁寧にミガキ調整される。Ⅱ様式か。

**2-133、2-134 土坑** 2 棟の建物間には 2-133、2-134 土坑が位置する。2-133 土坑からは、土器が 1 点出土している（図 228-1）。頸部の屈曲が強く時期の下る遺物のように見えるが不明。両土坑の埋土には炭化物が多く含まれており、この炭化物を試料として、AMS 法による炭素年代測定を行った（第 7 章第 6 節）。結果として 2-133 土坑では  $2650 \pm 40$ 、2-134 土坑では  $2620 \pm 60$  という測定年代が得られた。これは、第 8b 面東側遺構群の縄文時代晩期～弥生時代前期の試料から得られた数値よりも古い年代を示している。両土坑は、弥生時代前期末～中期までに堆積したと考えられる第 8b-1 層の上面から掘削されており、測定値と年代観の間に齟齬を生じることになる。これについては、測定資料が炭化材の芯部分に近かった、または炭化材そのものが古い倒木や流木を由来としたものであった可能性

などが考えられよう。

4-128 溝 (図版 49-2) 2区と4区にまたがって検出され、幅 0.4 m、深さ 0.2 ~ 0.3 mを測る直線的な溝である。総延長は 50 m以上を測り、南東端は調査地外に延びる。埋土は灰黄色の砂層となっており、ラミナが確認される (図 229)。遺物はほとんど出土せず、図化可能なものもなかったが、わずかに出土した土器片は、弥生時代前期~中期のものと考えられる。微高地 1 に平行して掘削されており、この溝を境として遺物出土量や遺構分布が異なることから、区画溝としての性格を考えることができる (図 215)。第 8a 面の水田開発によって造成される以前の微高地 1 (もしくは、建物を始めとした生活領域が広がっている範囲) の東辺がこの溝によって限られていた可能性を考えておきたい (図 216・230)。

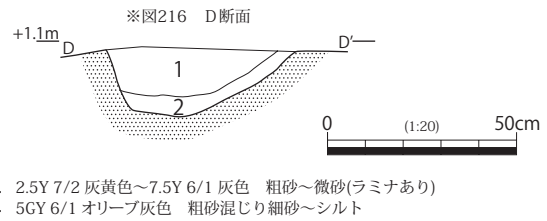


図 229 4-128 溝 断面図

### 3. 第 8a 層からの出土遺物

第 8a 層からの出土遺物については、調査区ごとに図 232 ~ 237 に示した。

1 区から出土したのは弥生土器とサヌカイト製石器で、弥生土器については、I 様式から V 様式まで広い年代幅を持っている。大きくは弥生時代前期中段階から中期前半 (1 ~ 9) と、弥生時代中期後半から後期 (10 ~ 17) にかけてのものに分けることができ、図 232 の上下に示した。

1 は壺の頸部で櫛描直線文と扇形文が見られ、疑似流水文を構成している可能性がある。3 は内外面を丁寧にミガキ調整する甕。胴部外面にはスガが付着するが、内面にコゲはない。4 は甕の口縁である。口縁端部は粘土を貼り付けて下方に肥厚させ、端部上面と外側面に 2 単位の刻目を施す。口縁部の内外面には粗いハケ調整が認められ、胎土も在地のものと異なり、やや褐色が強いことから、大和地方に特徴的な甕と思われる。5 は弱く外反する口縁を持つ鉢。I 様式の中段階頃の遺物と考えられ、1 区の包

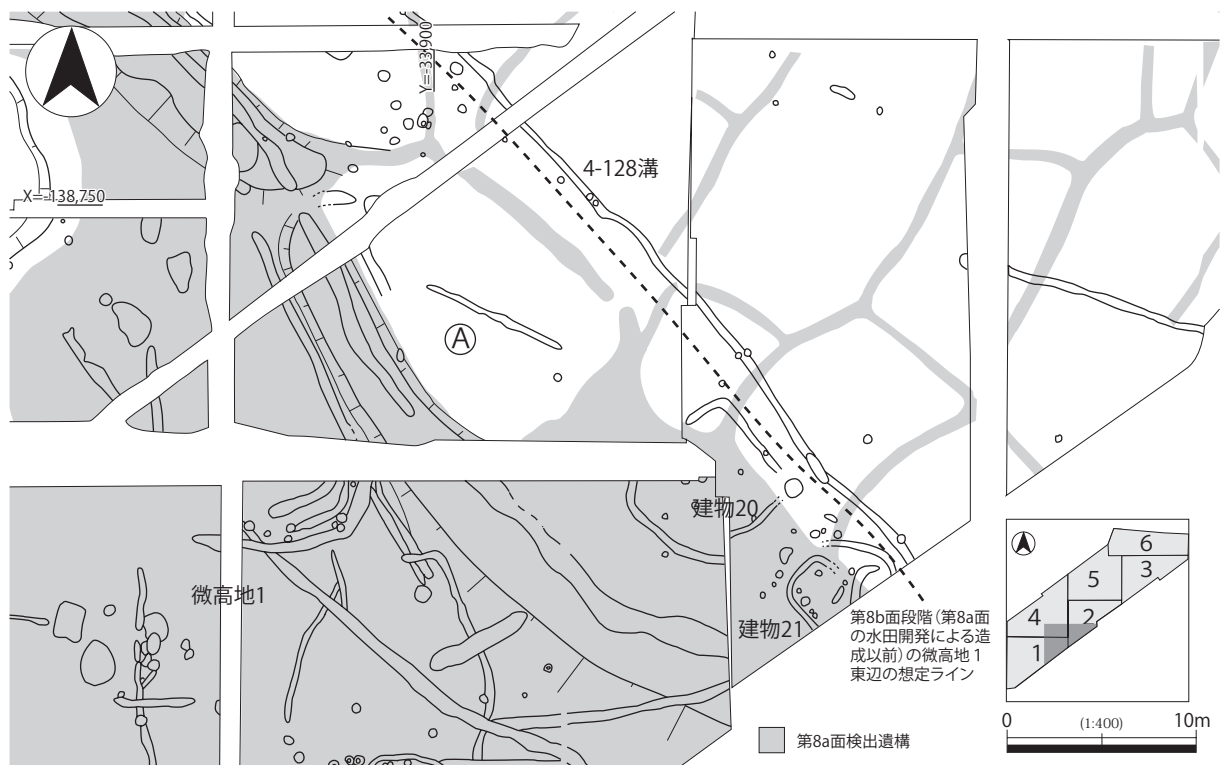


図 230 微高地 1 東裾部 第 8a 面水田と第 8b 面遺構 平面図



図 231 1区第8a層出土遺物分布

含層出土遺物としては最も古い。外面器表のハケ調整は口縁部のみヨコナデによって消されている。器体の各所に粘土接合部で剥離破損したと考えられる痕跡が認められ、擬口縁状を呈している。8は壺で胴部中ほどから頸部までの残存であるが、施文は認められない。肩部の内面器表には内傾する粘土接合痕が認められる。また、頸胴部の境には工具痕跡が多く認められる。器面調整を行った際のアタリであろうか。胴部最大径付近にススの付着があり、吹きこぼれ痕も見られるが、内面にコゲは見られない。12は底面に焼成前の1孔を持つ有孔鉢である。外面にはタタキ目が明瞭に観察できるが、口縁部外面は端部下3cmくらいでヨコナデされる。14は、肥厚しながら内湾する壺の口縁部で、外面を3列の円形浮文で飾る。胎土はやや明るい発色を示す部分もあるが、角閃石の目立つ生駒西麓産。16は凹線文で飾られた短頸壺の口縁部。17は折り返して上部に拡張した口縁端部外面に凹線文を入れた甕で、胴部外面にはタタキ目が残り、その上には粗いハケメが見られる。吉備地方からの搬入品とも考えられる。同様の遺物は同じ1区の第7b層からも出土している(図205-6)。

以上の土器の出土地点について、10mの遺物取り上げグリッドごとに示したものが図231である。□の枠で示した弥生時代前期～中期の遺物は、建物18・19など、微高地1上の建物や遺構集中部付近に集中することがよく分かる。一方、○で囲んだ中期後半以降の遺物の分布は散在しており、遺構の集中部との一致を見せない。検出された遺構との間に関係性がないことを示すことが明らかとなろう。

図233～235には石器を示した。18・19は石鏃でいずれも凸基式で重さは2gを超える。20～22は石槍である。20は先端部のみが残存。23は茎状の柄部があり、打製短剣か。先端は折損する。24は楔形石器、25～28は二次加工のある剥片、29・30は微細剥離のある剥片、31～34は石核である。比較的大きな石鏃、石槍、石剣などの出土から、弥生時代中期の遺物群と思われる。

2区の第8a層出土遺物は微高地1東裾部に集中している。出土遺物に関しては図236に図示した。

1は石鏃の未成品と考えられる。サヌカイト製で重さ2.97g。縦長剥片素材から取った剥片の周縁を加工しているが、加工は部分的に留まる。2～13は全て弥生土器である。11・13については図228に示すように、建物20・21に伴う可能性がある土器であるが、これら以外の遺物についても、建

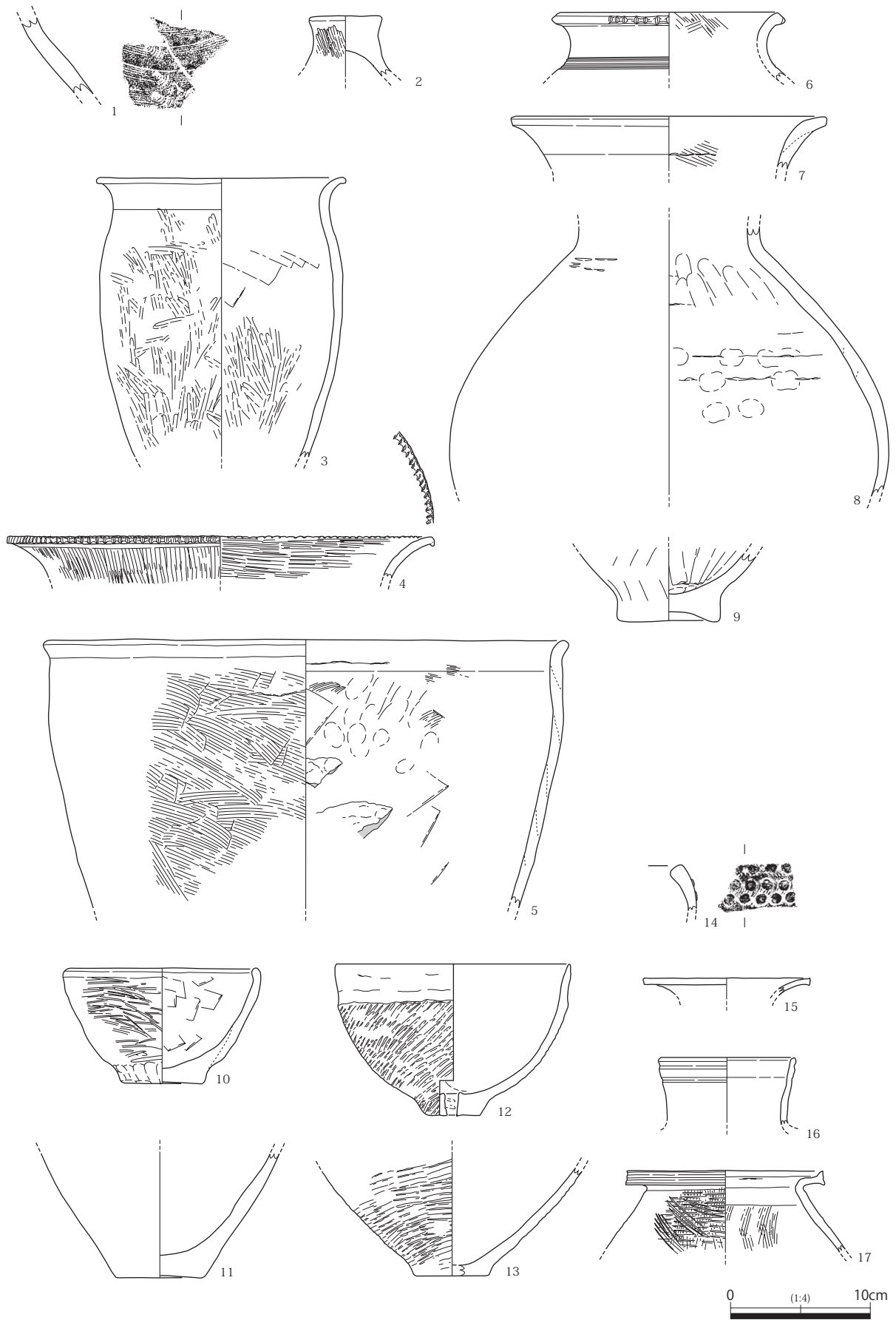


图 232 1区第8a層 出土遺物実測図 1

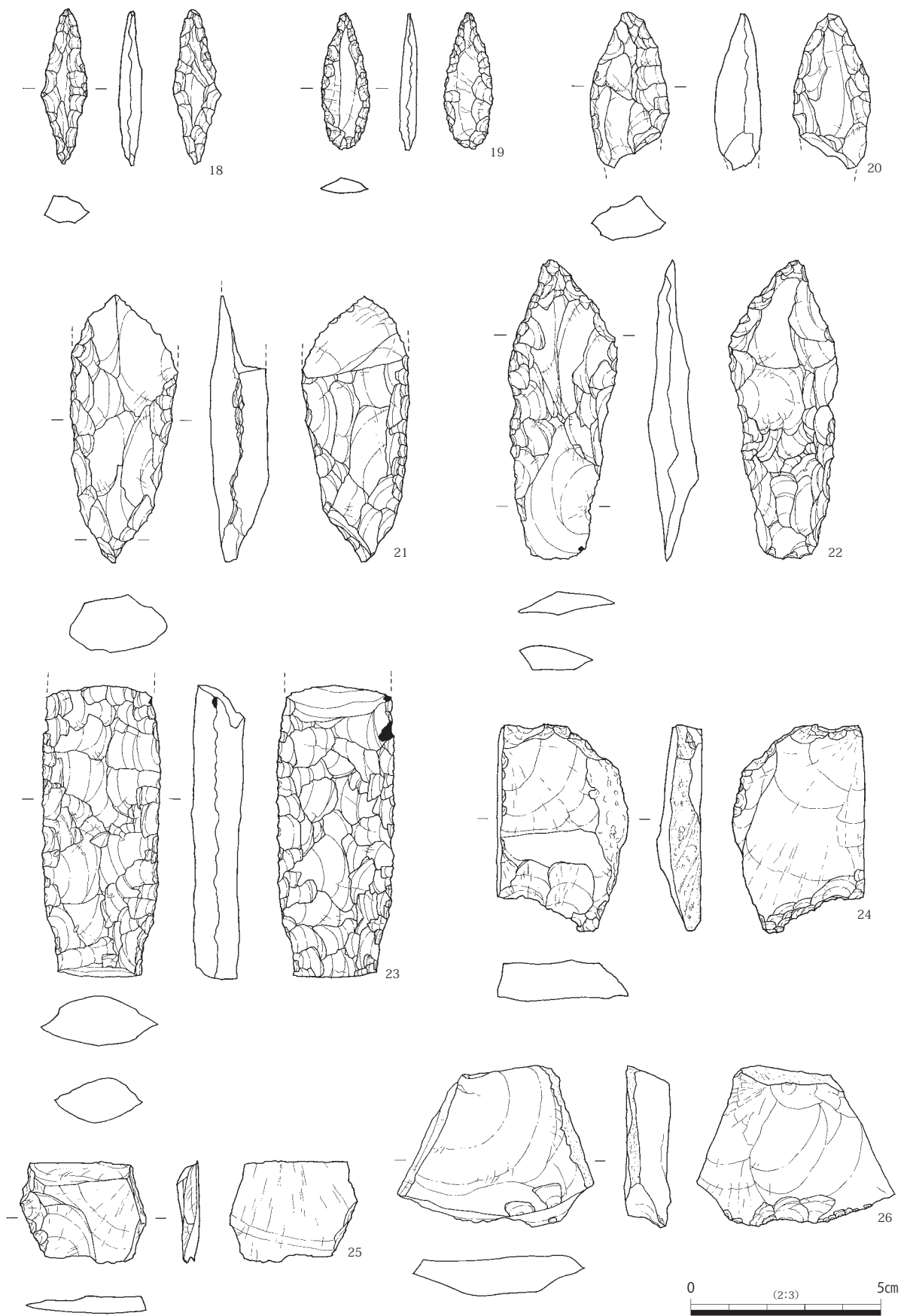


图 233 1区第8a层 出土遗物实测图2

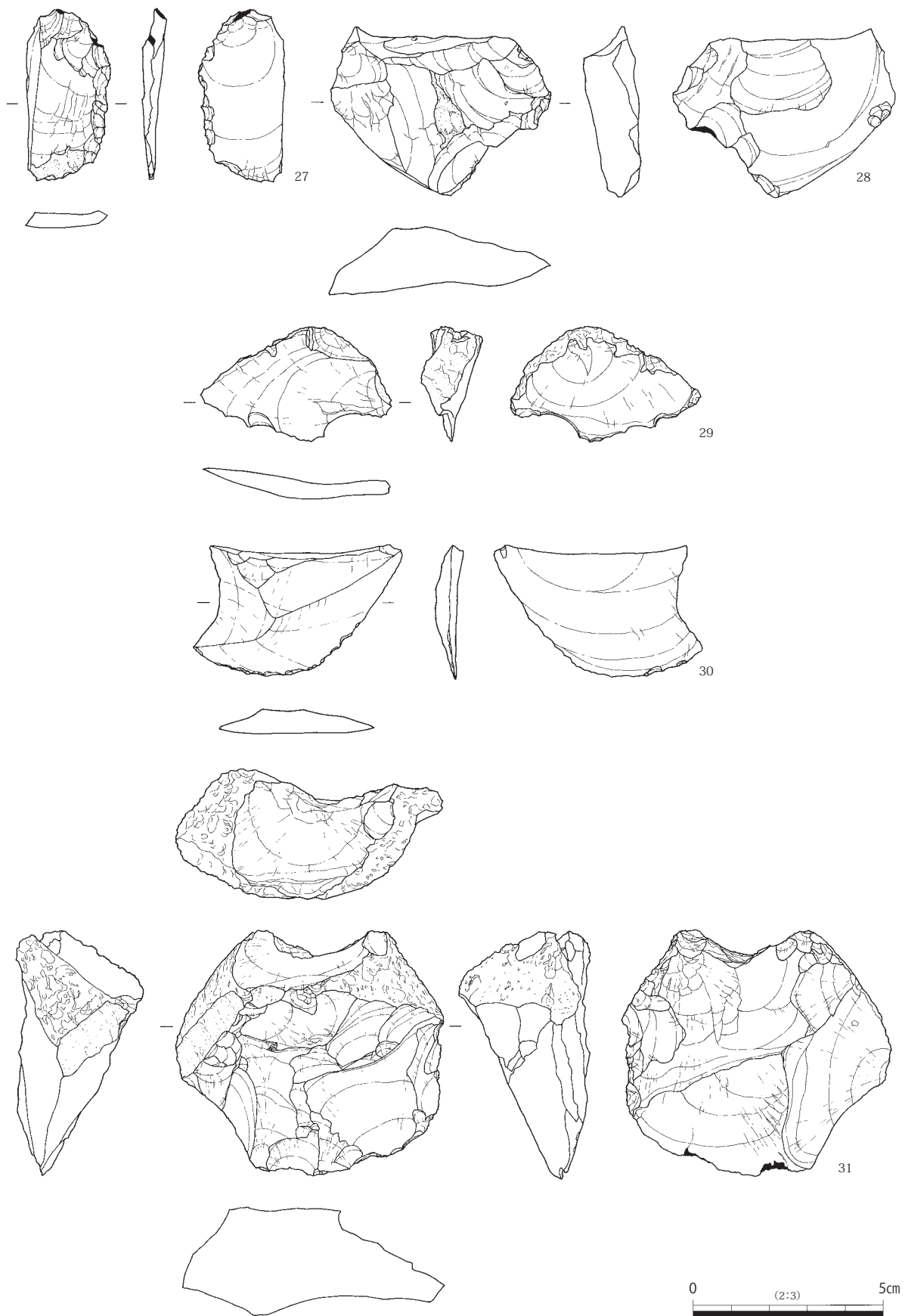


图 234 1区第8a層 出土遺物実測図3



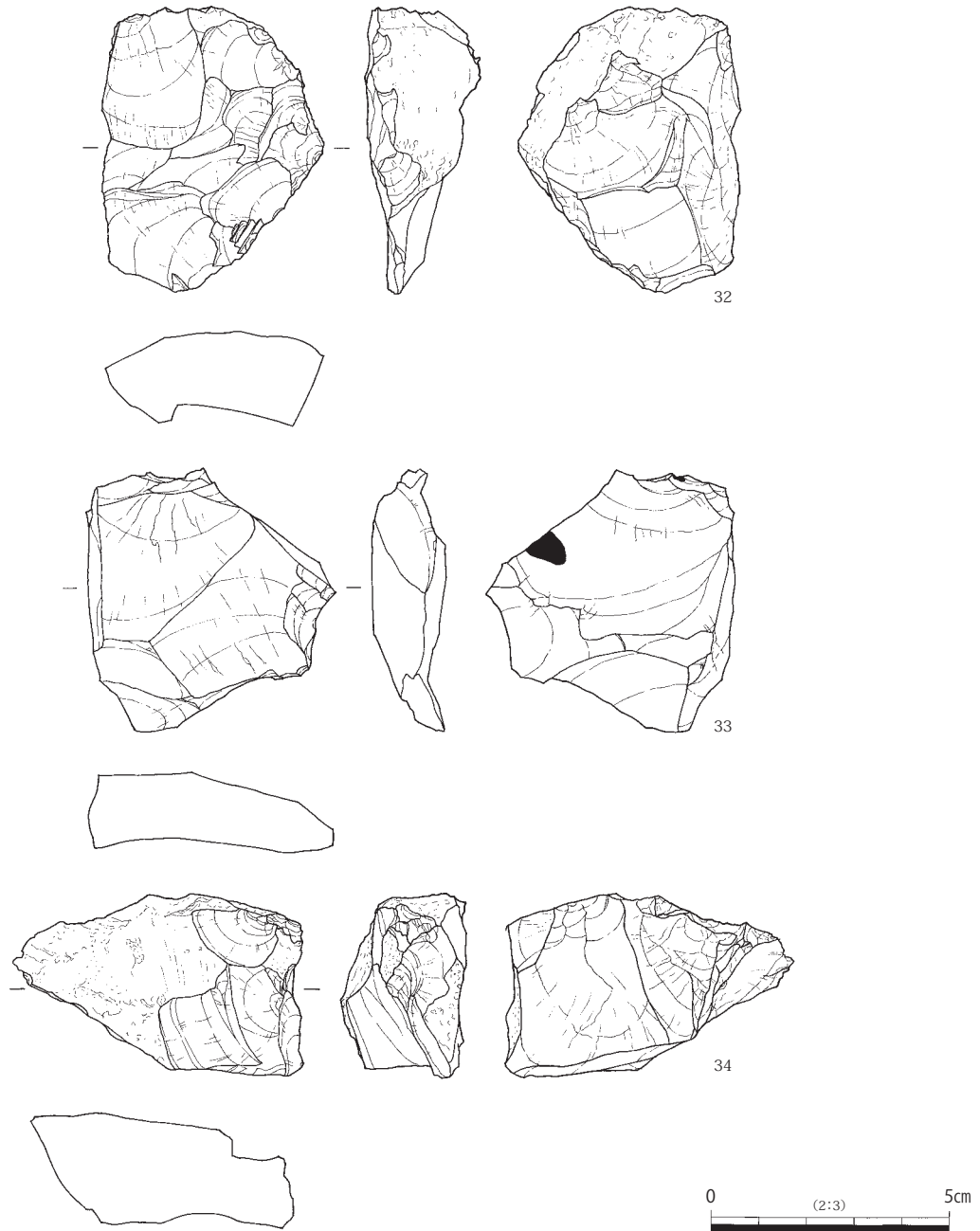


図 235 1区第8a層 出土遺物実測図4

物 20・21 の位置する微高地 1 東裾部に集中して出土しているため、建物に関連する遺物である可能性が考えられ、1 区の第 8a 層のように、後期に下る遺物は含まれない。2 は方形に仕上げた口縁端部の全面に刻目を入れる甕であるが、頸部は無文。9～11 の甕は口縁部も含め無文である。11 は建物 21 プラン内から出土した甕であるが、胴部外面中ほどから上部にスス、肩部には吹きこぼれ痕、胴部内面下部にコゲが認められる。炊飯に利用されたものであろうか（小林 2006,2007）。3・4 は直線文の施された壺の頸部片である。5 はへら描き沈線文の間に細い竹管状の工具を用いて刺突施文している。13 は、算盤玉形の胴部を持ち、へら描き沈線と貼付け突帯で飾る壺。胴部から頸部にかけてはハケメが残存する。以上のようにこれらの土器は、Ⅱ様式の弥生土器の特徴を持つ。頸部に沈線の入らない無文の甕の中に口縁端部に刻目の入る甕が混じり、櫛描直線文で飾る壺と伴出する様相は、微高地上の建物 18・19 との関連性が考えられた 1-84 落ち込みの出土遺物況と類似しており、建物 18～21 が近

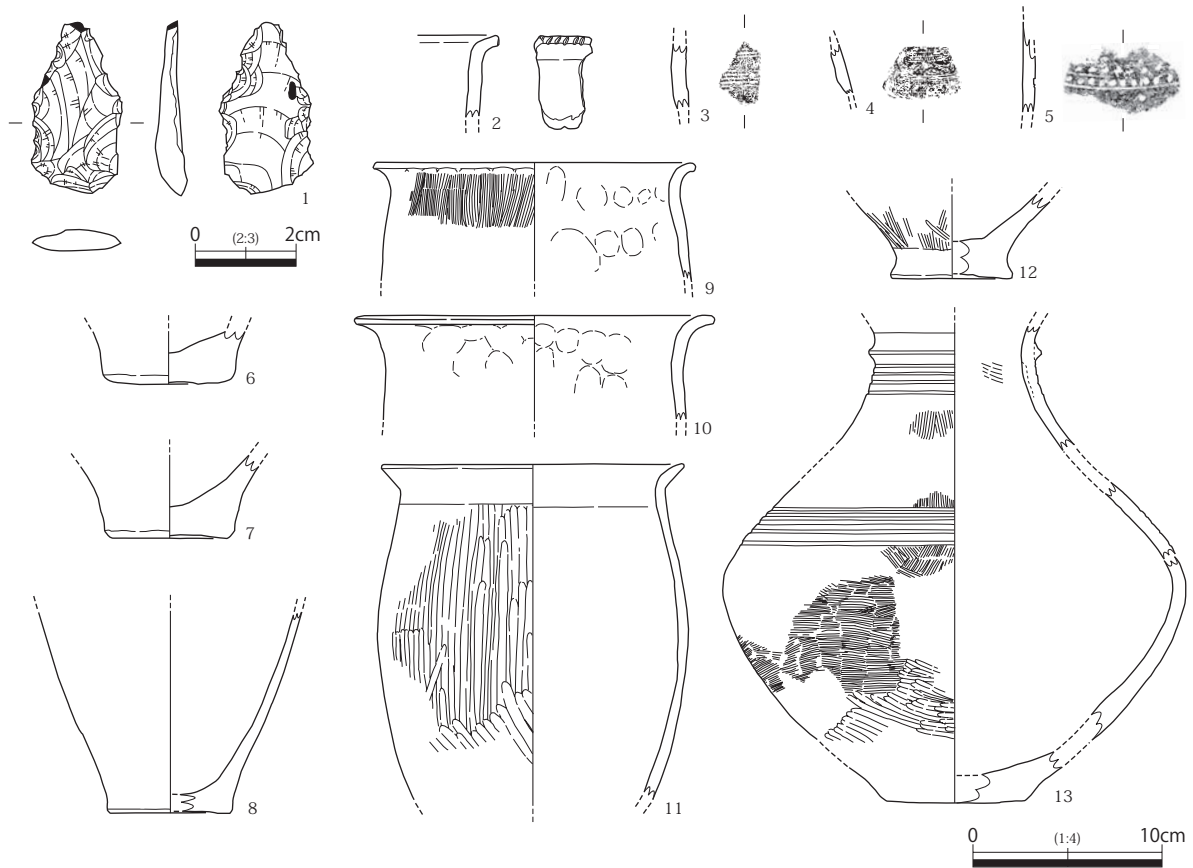


図 236 2区第8a層 出土遺物実測図

接した時期に存在した可能性を示す。

4区の第8a層出土遺物は、図237に示した。1は、凸基Ⅱ式のサヌカイト製石鏃で、先端を欠くが両面に押圧剥離を施し、鏃身中央に稜を形成する。主に背面側を最終調整している。2～9は甕である。8のみ弥生時代後期に下る遺物と考えられるが、それ以外は前期後半から中期前半にかけての遺物と考えられる。これらの甕は口縁端部に刻目を入れ、頸部にヘラ描き沈線のあるもの（2・3）と無文のもの（4～7）に分かれる。また、2・4のように頸部の外反が弱いものがある一方で、3のように水平に近いくらい開くものもある。9は下方に肥厚させた口縁端部外面に、ヘラ状工具の木口面で刺突施文した甕で、内外面のハケメは粗く明瞭。胎土は粗い長石や石英を含むが暗灰色を呈しており、摂津地方などからの搬入品である可能性が考えられる。10～13は壺。10は比較的短い口縁と頸部に1条沈線を持つ。一方、11・12は伸長した口縁部を持ち、12は胴部まで無文。

以上、1・2・4区の第8a層出土遺物を見ると、その主体は弥生時代中期でも前半頃にあり、微高地上の集落や開発の時期をそのあたりにおくことができよう。

#### 4. 微高地1直下（第8b-1層・第8a-2層）からの出土遺物

先述したように、次項で述べる〈東側遺構群〉との時期差を明確にしたものとして、集落が立地する微高地1の形成年代が挙げられる。これについては、微高地1を形成する第8b-1層からの出土遺物から弥生時代前期後半を上限とした年代が考えられるところであるが、これらの遺物について、図238に示した。

1は口縁端部に刻目を入れ、頸部に5条のヘラ描き沈線を入れる弥生土器の甕である。2～5は弥生土器の壺。5は頸部の沈線文の多条化が進んでおり、遺存部位の中で8条の沈線が確認される。一方

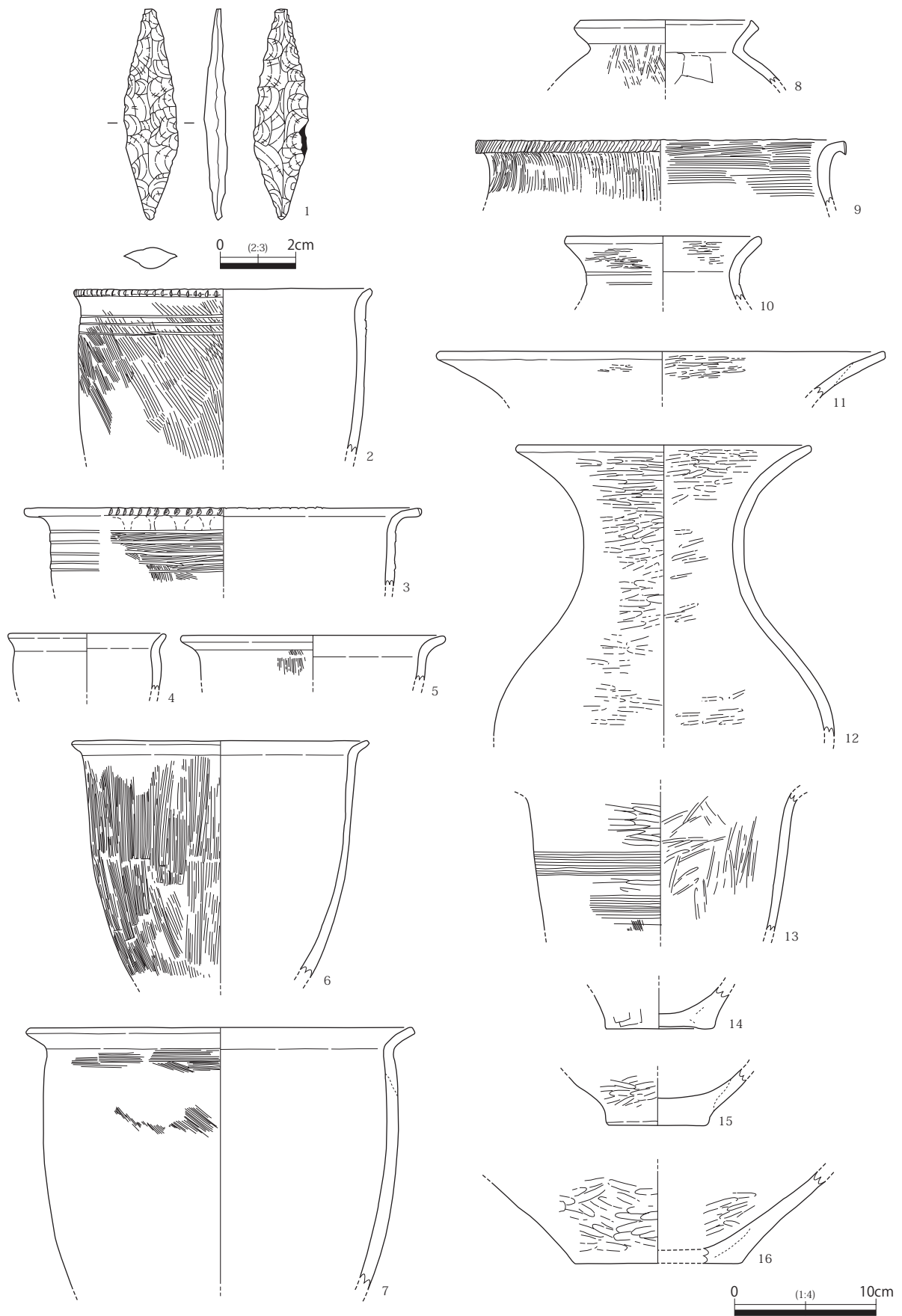


图 237 4区第8a层 出土遗物实测图

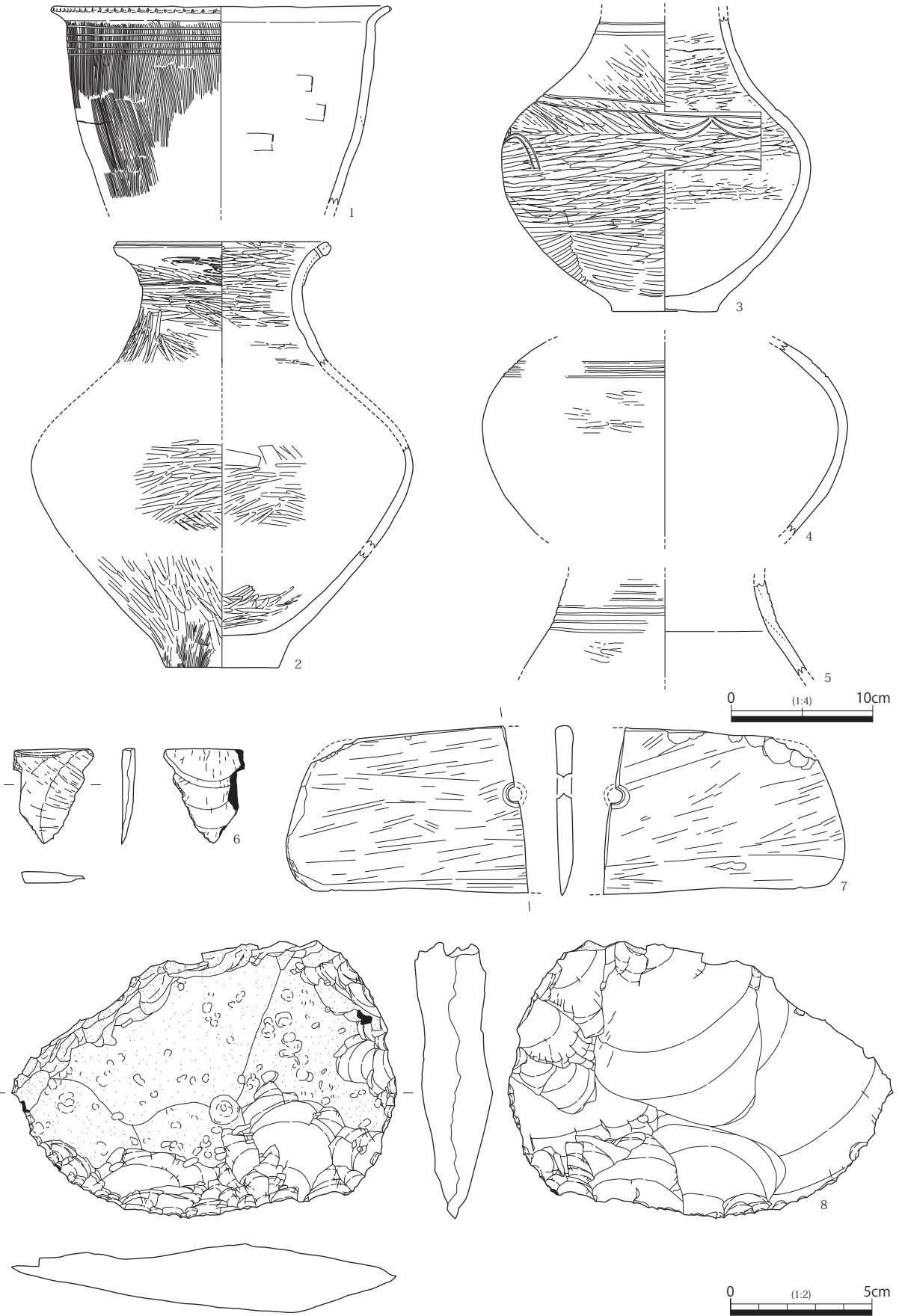
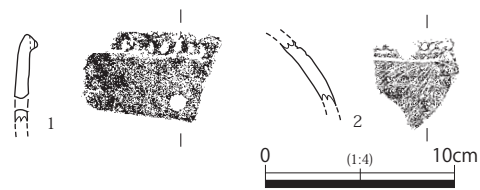


图 238 第 8b-1 層 (微高地 1 形成層) 出土遺物実測図

で2・3はやや古い時期の様相を示し、3は頸部と頸胴部境に2条の沈線を入れ、胴部には重弧文を施すが、この重弧文は部分的な施文に止まり、全周を飾ってはいない。また2は、滑らかに連続する頸部から口縁部の境に粘土貼り付けによる段を持つ壺で、口縁部の小孔によって壺蓋の存在



を示す。次項で述べるように、東側遺構群で出土した弥生時代前期前半の土器の中には、壺蓋やその存在を示す壺口縁部の小孔が見られず、2との時期差を示すものと考えられる。

6・8はサヌカイト製の剥片とスクレイパー、7は緑泥片岩製の石庖丁である。8の刃部は背面側のみの片側調整。

これらの遺物の中では1の甕や5の壺が、より新しい様相を示すものといえ、弥生時代前期末頃に比定されることから、微高地1の形成時期として、当該時期を考えたい。

一方、第8b-1層を除去した下面には、調査地東側で確認された弥生時代前期の包含層である、第8a-2層に対応すると考えられる土層（図20の110層）が確認される。有機物を多く含んだ泥質な層相を示す同層からは、ほとんど遺物が出土しなかったが、突帯文土器と弥生土器の小片が確認された。図239に示す。

1は、突帯文土器の深鉢で、口縁端部に設けられた突帯上に右D字刻みを施す。口縁部から3.5cm下には、径0.8cmの孔が器体の両側から穿孔されており、補修孔と考えられる。胎土は灰褐色で角閃石が目立たない非生駒西麓産。2は、弥生土器壺の肩部で、竹管状の工具による刺突文と無軸木葉文で飾る。

## 第2項 東側遺構群（弥生時代前期前半）

調査地北東側で検出された遺構群である。南西側に比べ相対的に高い北東側では、第8b-1層の厚い供給は見られず、2枚ある土壌層（第8a-1、8a-2層）の間にも挟在しない。そのため、時期差のある両層の区別は難しく、遺構の検出にあたっては、両層を同時に除去する形で作業を進めている。また、高位にあるがゆえに堆積層などで地中に埋没することなく、長期にわたって表土面であった周辺は、動植物などによる擾乱などの土壌化作用が下層の基盤層（第8b-2層以下）まで及んでおり、これらの基盤層の上部を除去しなければ遺構の検出が難しい状況であった。結果として、東側遺構群の遺構検出はかなり削り込んでのもの（第8a-1層上面から20～40cm）となり、多くの遺構の残存深さは浅い。また、調査地内で最も高位となる6区の東側で遺構がほとんど検出されていない状況については、後世の攪拌や、調査時の土壌層除去によって遺構が失われた可能性が考えられる。しかしながら、図240に示したように第8a層からの出土遺物の量的分布は、検出された遺構密度と相関しており、調査地東側の高位部については、本来的に遺構が希薄であった状況が考えられる。

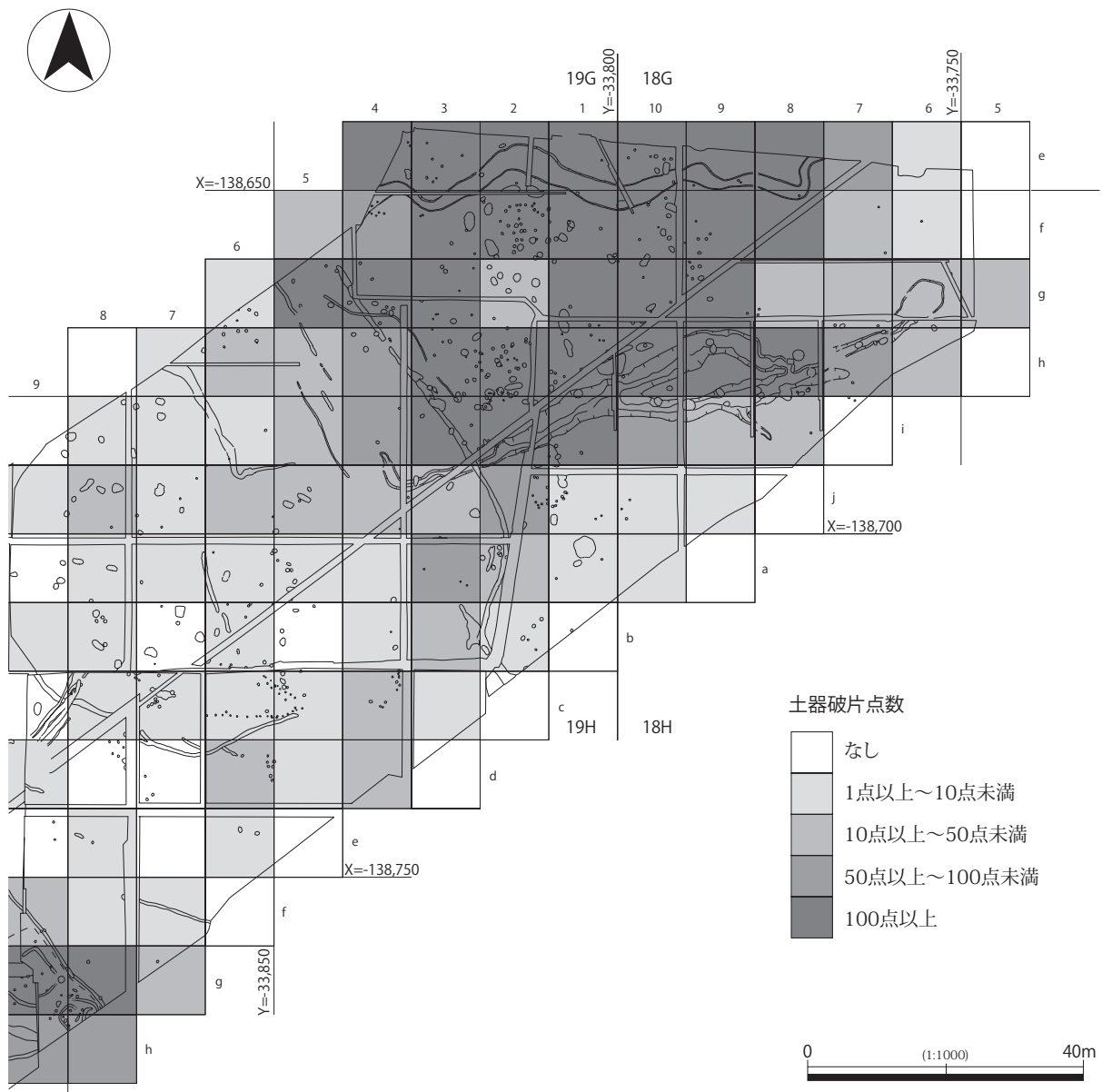


図240 調査区東半 第8a層出土遺物量分布



図 241 東側遺構群 平面図

検出された遺構群は、建物数棟からなる集落を構成すると考えられる。遺構からは、弥生土器を主体とした遺物が出土しており、これらの弥生土器が、近畿地方では稀に見る古相を持っていることから、確認された集落を、河内平野における初現期の弥生集落として位置付けることができよう。

また遺構群の南北に2条見られる溝は、切り合い関係や層序対比から、縄文時代晩期の自然流路が完全に埋没せずに残存したものと理解される。南側の3-267・268溝の最上層からは、弥生土器のほか大量の突帯文土器が出土しており、両土器文化の移行期における重要な資料として捉えられる。これらの突帯文土器には、角閃石や雲母などの有色鉱物を多く含み、茶褐色を呈する「生駒西麓産胎土」を持つものが半数程度含まれていた。そこで、本項においては、これら生駒西麓産胎土を持つ土器について、実測図に付した番号の横に▲を付けて示している（ただし、同胎土は突帯文土器の約半数で見られるが、弥生土器にはほとんどない）。

## 1. 建物

東側遺構群では、ピットや土坑の集中部がいくつか確認された。こうした集中部ではピットや土坑が環状にめぐむ状況が見られる。遺物の出土状況や分布なども考え合わせると、これらの集中部が建物遺構である可能性を考えることができる。ここでは合計5棟の建物を想定したが、各建物の検出状況には差異があり、建物として確実な根拠に乏しいものもある。これについては、各建物について詳述する中で述べたい。建物は、いずれも竪穴が確認されず平地式建物となると考えられるが、前述のようにかなり削り込んで遺構検出を行っていることから確実ではない（浅い竪穴を持つ可能性は否定できない）。径10～20cmのピットが環状に並ぶ状況からは、円形もしくは円形に近いプランを持つことがわかる（関西地方の縄文時代後・晩期の建物については、柱穴配置の不明確なものが多くなるのが特徴として挙げられ、さらに円形で円周上に柱が並ぶものが多くなる点が指摘されている（矢野2006））。環状のピット列は、①垂木尻を直接地面に葺き降ろした痕跡、②側壁や周堤を保持する支柱の痕跡、③建物主柱の痕跡、のいずれかを示すものと思われるが、ピットの断面形状に内傾するものが見られなかったことから、②もしくは③の可能性が高い。建物プランの図化にあたっては、環状のピット列の配置から真円を用いて復元的に示したが、建物の全体規模・床面積を直接示すものではない。

### ・「周溝を持つ建物」

建物22・23・26では、環状ピット列のさらに外周を長円形の土坑が取り巻く状況を確認できる。これらの土坑の検出面からの深さは浅く、6-124土坑を除いて遺物の出土も少ないが、各土坑の長軸を建物プランに合わせたような指向性が見られることから、建物に関連して掘削されていることは疑いない。周囲に土坑や溝を巡らす建物の調査例については北陸・関東に多く、早くから注目されてきた（研究史は（岡本淳2006）に詳しい）。西日本の調査例についても、近年になって集成・検討が行われており（岡本茂2008）、類例の整理・分類がなされている。

当遺跡の建物のうち、周囲に土坑の存在する建物22・23・26については、土坑タイプ、土坑型、土坑式などと呼称される例に近似するところが多い。その初現例としては、福井県下屋敷遺跡、守口市八雲遺跡の建物が例に挙げられている。土坑型多主柱とされる下屋敷遺跡の例は、平面形状を見る限り当遺跡の検出状況に近似するものといえよう。また、滋賀県門ヶ町遺跡でも土坑状に途切れる周溝の内側にピットが多角形もしくは円形に巡る例がある（近藤2006）。これらの建物の帰属年代については、遡っても弥生時代中期前半とされている（ただし、これらの集成には含まれないが、兵庫県玉津田中遺跡において、弥生時代前期と見られる竪穴住居の周囲に土坑が巡る例がある（兵庫県教育委員会



1984))。当遺跡で検出された建物は、これらの年代を大きく遡る弥生時代前期前半と考えられるため、周溝を持つ建物の成立過程を考える上で重要な資料を提供することになる。

既往の研究成果に従えば、環状にめぐるピット列とそれを取り巻く長円形の土坑の間には周堤の存在が想定される。土坑とピット列間の距離は、建物 22 で約 1.2 ～ 2.0 m、建物 23 で約 0.5 ～ 1.5 m、建物 26 で約 1.0 ～ 3.0 m を測り、同一の建物内でも一定していないことから、周堤規模にばらつきがあるか、小規模な周堤が想定される場所である。実際、上層の削平を受けているとはいえ、土坑の検出面からの深さは 0.1 ～ 0.2 m 程度であるため、土坑からの掘削排土だけでは大規模な築堤は難しい。もう一つ注意されることは、3 棟の建物に伴う長円形の土坑は全周に存在するわけではなく、ほぼ半周程度の範囲に分布することである。土坑の途切れる方向は建物の中心から見て、建物 22 で南東、建物 23 で北東、建物 26 で北東となっており、明確な一致を見せない。しかし、検出遺構面の等高線図(図 214)からは、長円形土坑が建物周囲でも低位側に存在する傾向があるように見え、低位側での築堤と、高位側への建物出入口の存在の 2 つの可能性を想起させる。以下では各建物について個別に述べる。

#### ・建物 22 と周辺遺構(図 242: 図版 49-5)

建物 22 は 6 区西側で検出された。検出標高は T.P.1.9 ～ 2.1 m。環状のピット列と、それを取り巻く土坑が最も状況よく確認された建物である。ピット列から復元される直径は約 5.5 m、面積は約 23 m<sup>2</sup>となる。建物の北側から南西側にかけては、規模・形状の近似する長円形の土坑が建物を囲むように分布している。一方で建物南東側には円形の土坑が多く確認されており、遺構形状によって分布に偏りが見られる。

**6-119、6-144、6-171、6-172 土坑** 建物北側から南西側にかけて建物を取り巻く長円形の土坑で、いずれの土坑も長軸が建物 22 の円形プランの同心円上に沿う。環状ピット列との距離は一定しないが、最も近い 6-171 土坑で 1.2 m (建物に近い土坑上端から)、最も離れた 6-119 土坑で 2.0 m を測る。土坑の深さは 0.1 ～ 0.2 m と浅いが、先述したように上層の攪乱と基盤層にまで及んだ土壌化により、かなり削り込んだ遺構検出作業のため、土坑の検出面は本来の掘込み面(生活面)から 0.1 ～ 0.2 m 程度下がっている可能性がある。断面は大きく 2 層に分かれる(図 243: 図版 50-1)。上層にはブロック土や炭化物が含まれるため、人為的な埋め戻し土と考えられるが、下層には粘質が強く均質な黒色シルトが堆積している。ラミナは確認できなかったものの、滞水時に堆積した泥土と考えられることから、これらの土坑が掘削後すぐに埋め戻されることなく、一定期間開口していたものと想定される。こうした状況も、建物周囲の土坑が周堤構築土の採取を目的として掘削されたことの傍証となる。

また、建物の西方約 4 m には、これらの土坑と近似した長円形の土坑である 6-124 土坑が検出されている。ただし同土坑については、やや建物から距離がある上に、例外的に多量の土器が出土している。埋土の状況も 6-119 土坑を始めとした土坑群とは部分的に異なることから、建物 22 と関連する可能性は高いものの、他の土坑群とは異なる性格を持つ可能性がある。6-124 土坑については後述したい。

これらの土坑からの出土遺物については図 244 に示した。1 のみ突帯文土器で、後は弥生土器である。1 は深鉢胴部片で磨耗が著しいが、断面三角形の突帯上に刻目が確認できる。生駒西麓産胎土。2 は甕口縁である。茶褐色の胎土で、外面器表には顕著なハケメ調整を施し頸部に明瞭な段を持つが、口縁端部と頸部の段の間に 2 条のへら描き沈線を入れる。このような文様構成を持つものは当遺跡では他になく搬入品の可能性を考えたが、胎土分析では在地性の高い粘土を使用している可能性が示された。段と口縁の間に沈線を持つ類例は、徳島県庄・蔵本遺跡、香川県一の谷遺跡の出土遺物に見られる(中村

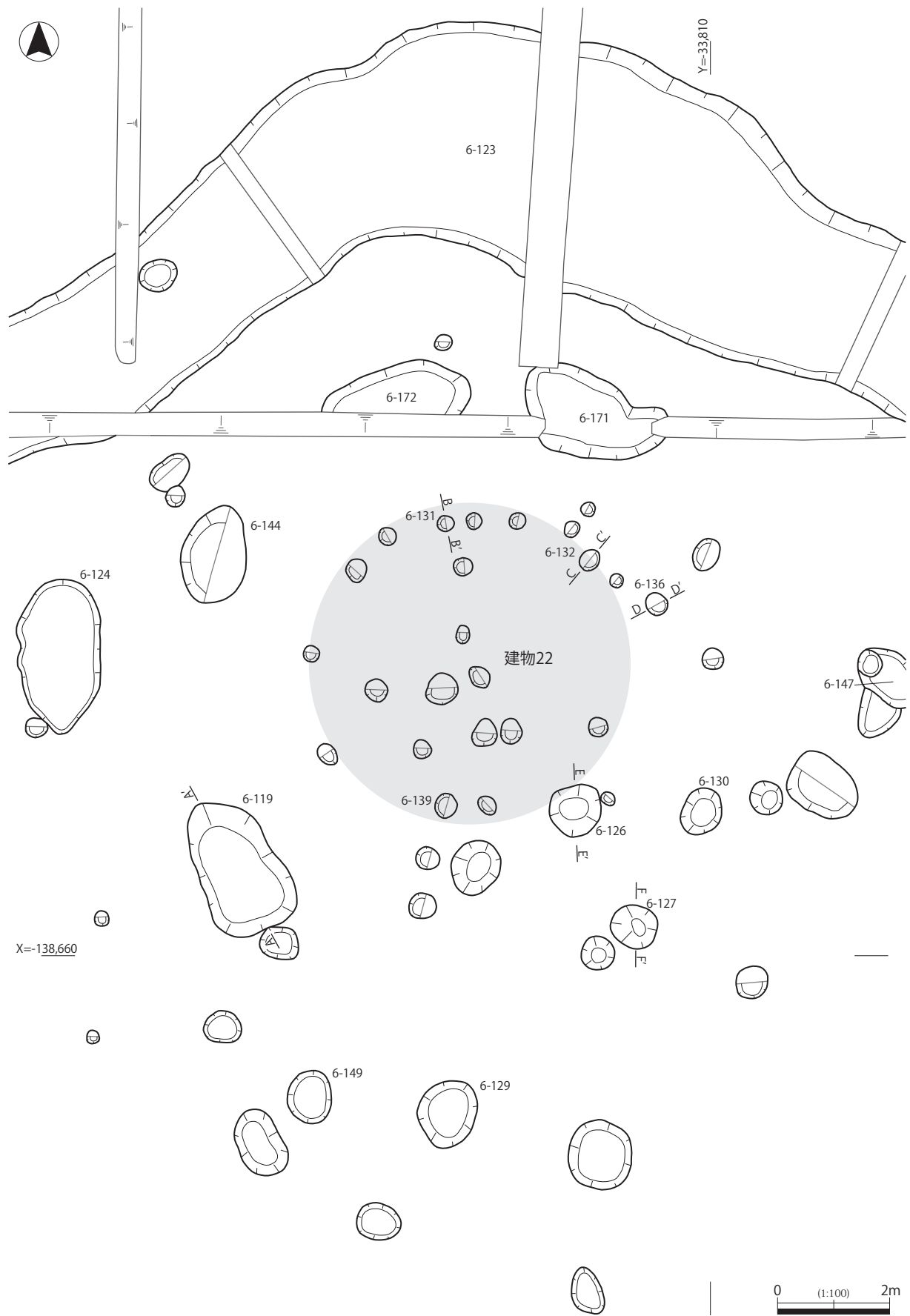


图 242 建物 22 平面图

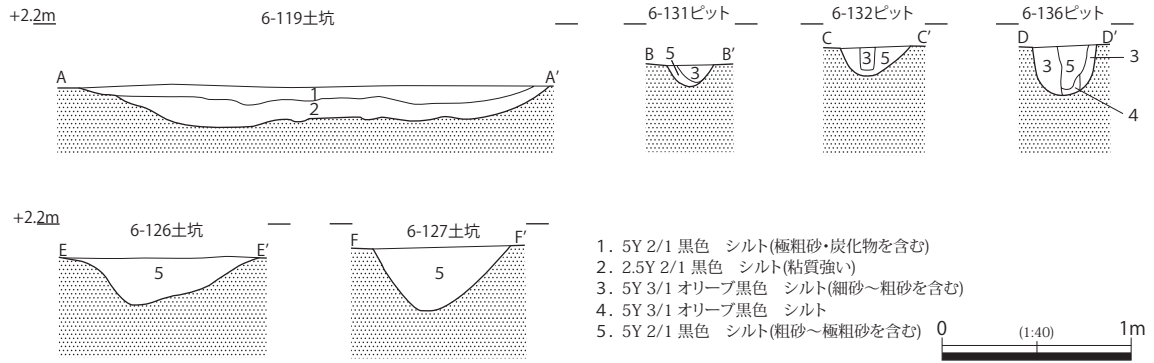
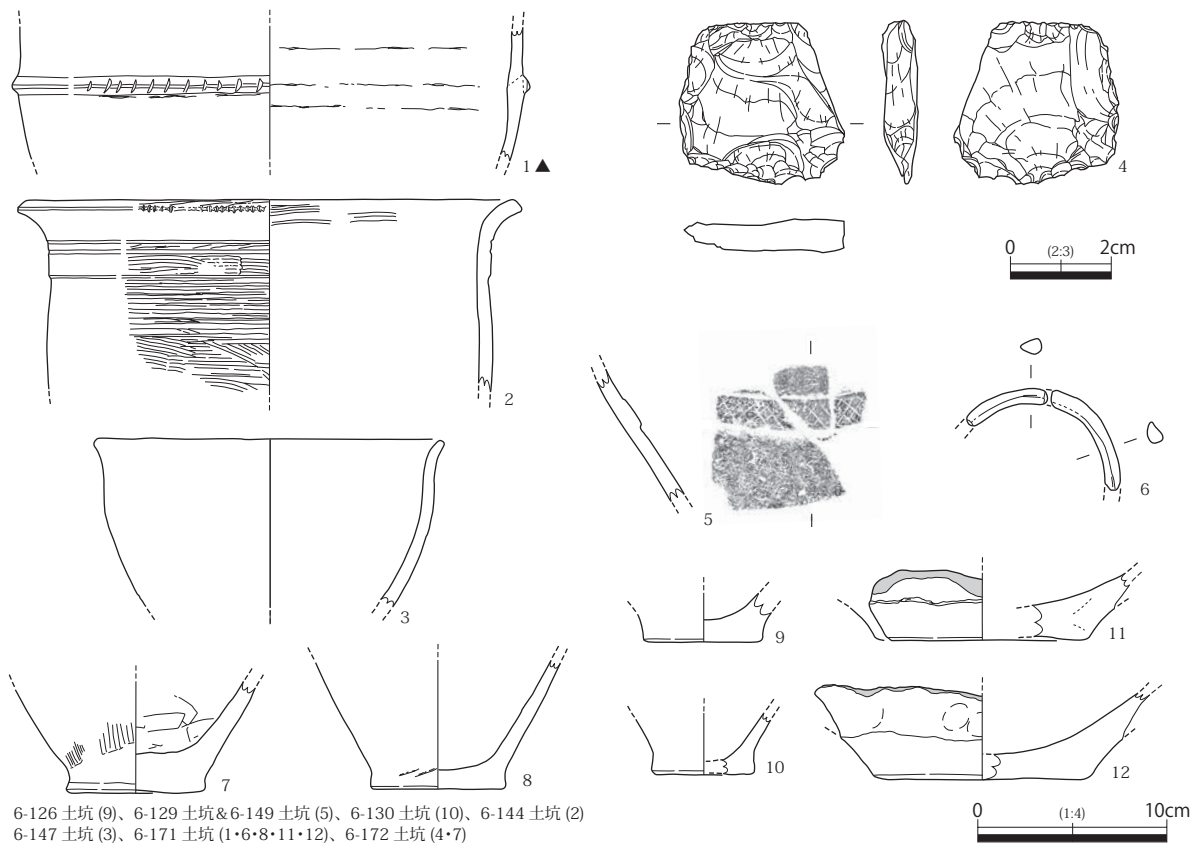


図 243 建物 22 周辺遺構 断面図



6-126 土坑 (9)、6-129 土坑 & 6-149 土坑 (5)、6-130 土坑 (10)、6-144 土坑 (2)  
6-147 土坑 (3)、6-171 土坑 (1・6・8・11・12)、6-172 土坑 (4・7)

図 244 建物 22 周辺遺構 出土遺物実測図

2000、森下ほか 2000)。6 は用途不明の土製品。胎土は明るい灰黄色で他の弥生土器と近似する。断面形状は隅丸の三角形で底面は平滑。残存部位が少なく全体形状は不明だが、環状になると思われ、土製腕輪の可能性が考えられる。11・12 は壺底部であるが、両者ともに接合部から剥離して擬口縁を呈しており、接合時のものと考えられる指頭圧痕がわずかに残る。4 は 6-172 土坑から出土した楔形石器で、上下と側面に顕著な潰れが認められる。

**6-126、6-127 土坑** 建物南東側に位置する円形の土坑で、深さ 0.25 ～ 0.35 m と比較的深い。埋土は、埋戻し土と考えられる黒色粗砂混じりシルトを主体としており、建物北西側の長円形土坑に見られたような滞水時の泥土のようなものは見られない (図版 50-2)。遺物はほとんど出土せず、性格不明の礫のほかは各土坑から数片の弥生土器が出土するのみであった。これらの土坑から出土した遺物についても図 244 に示している。3 は 6-147 土坑から出土した鉢で、深い椀形を呈する。口縁端部はわずかに外反して丸く仕上げられる。5 は 6-129 土坑と 6-149 土坑から出土した土器片が接合したもので、

削り出し突帯を持つ壺の肩部である。低い幅広の削り出し突帯の上は斜格子文で飾られる。

6-124 土坑 (図 245 : 図版 50-6 ~ 8) 建物 22 から約 4 m 西側で検出された。付近の土坑と同じく長円形の土坑で、長軸 2.65 m、短軸 1.45 m を測る。土坑の上部は第 8a-1 層の攪拌により削平されており、残存深さは 0.1 m ほどしかない。埋土は、6-119 土坑など上述した土坑の上層と同じ、ブロック土や炭化物を含んだ黒色の極粗砂混じりシルトだが、下層に確認された粘質の強いシルト層 (図 243 の 2 層) は見られない。土坑の西側に偏って多数の土器が出土し、うち 33 点を図 246・247 に示した。図 246-10 の壺と 23 の甕は横倒しになったような状態で出土した。両者は、当土坑から出土した資料の中で残存部位が多い 2 点である。いずれも器体の片側のみが残存しており、10 は片側 3 分の 2 が、23 は片側 3 分の 1 が失われていた。このことから、土坑内に横倒し状態で埋没していた完形土器が、上部からの攪拌などにより、器体片側を失った状況が考えられる。当土坑からはミニチュア土器も出土しており、完形の壺・甕を埋納した可能性も考えると、祭祀的な性格も考えうるのではないだろうか。

他の遺物を見ていくと、1 は砂岩の扁平な円礫で石錘か。側面にわずかに擦痕が見られる。2・3 は 2 点だけ出土した突帯文土器である。2 は口縁端部から 1 cm ほど下がった位置に刻目のある突帯を設け、上下を工具の先端でナデつけている。暗褐色を呈する胎土は肉眼では生駒西麓産に近いものに見えるが、実体顕微鏡による観察では角閃石をあまり含まない。3 は深鉢の胴部片と思われるが磨耗が著しく、幅の狭い突帯の刻目の有無は不明。角閃石を多く含み茶褐色を呈する生駒西麓産。

1 ~ 3 以外の遺物は全て弥生土器である。12・13 は甕蓋。13 の端部はつまみあげられて外上方に突出する。内面には端部から 2 cm くらいまで炭化物が付着している。12 も同様で、端部から 3 cm くらいまで炭化物が付着する。5・6 は甕形のミニチュア土器である。5 は口縁部を短く外反させたもの

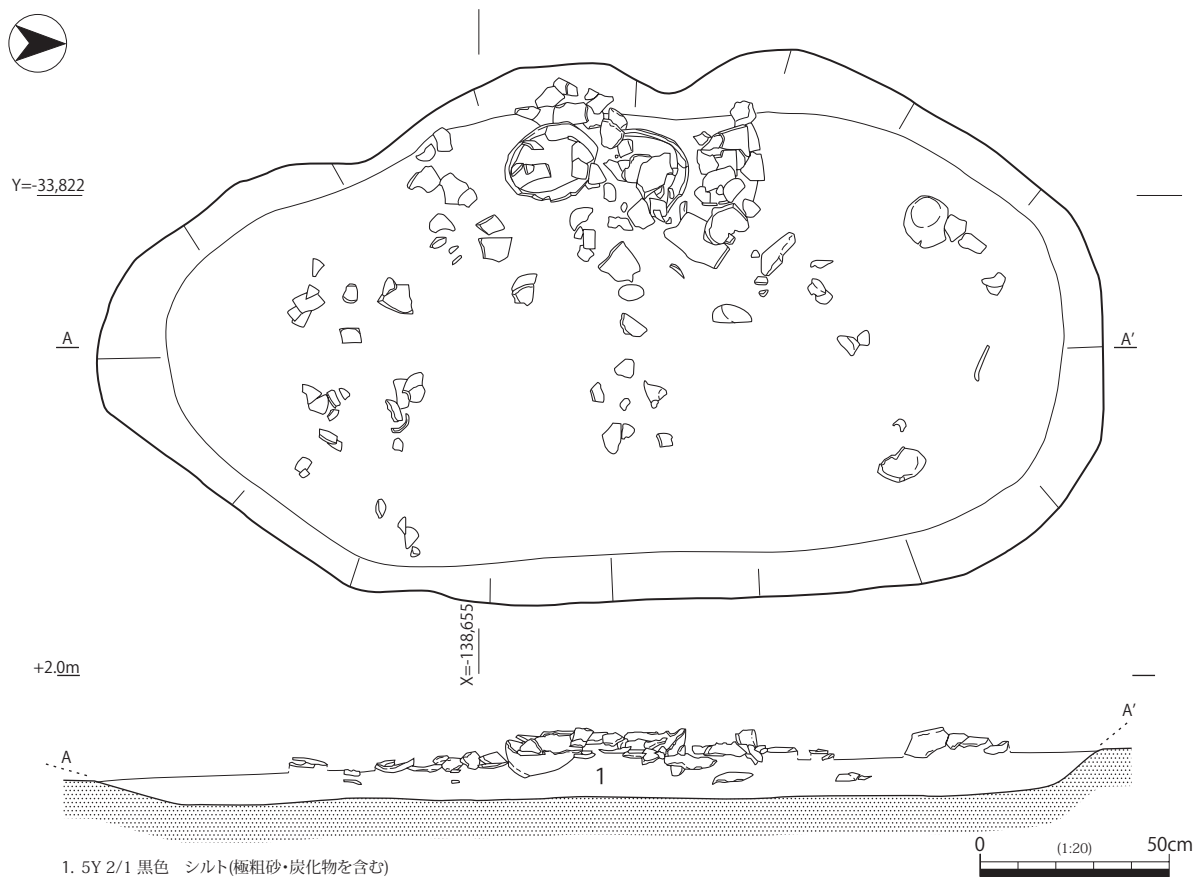


図 245 6-124 土坑 平面図および断面図

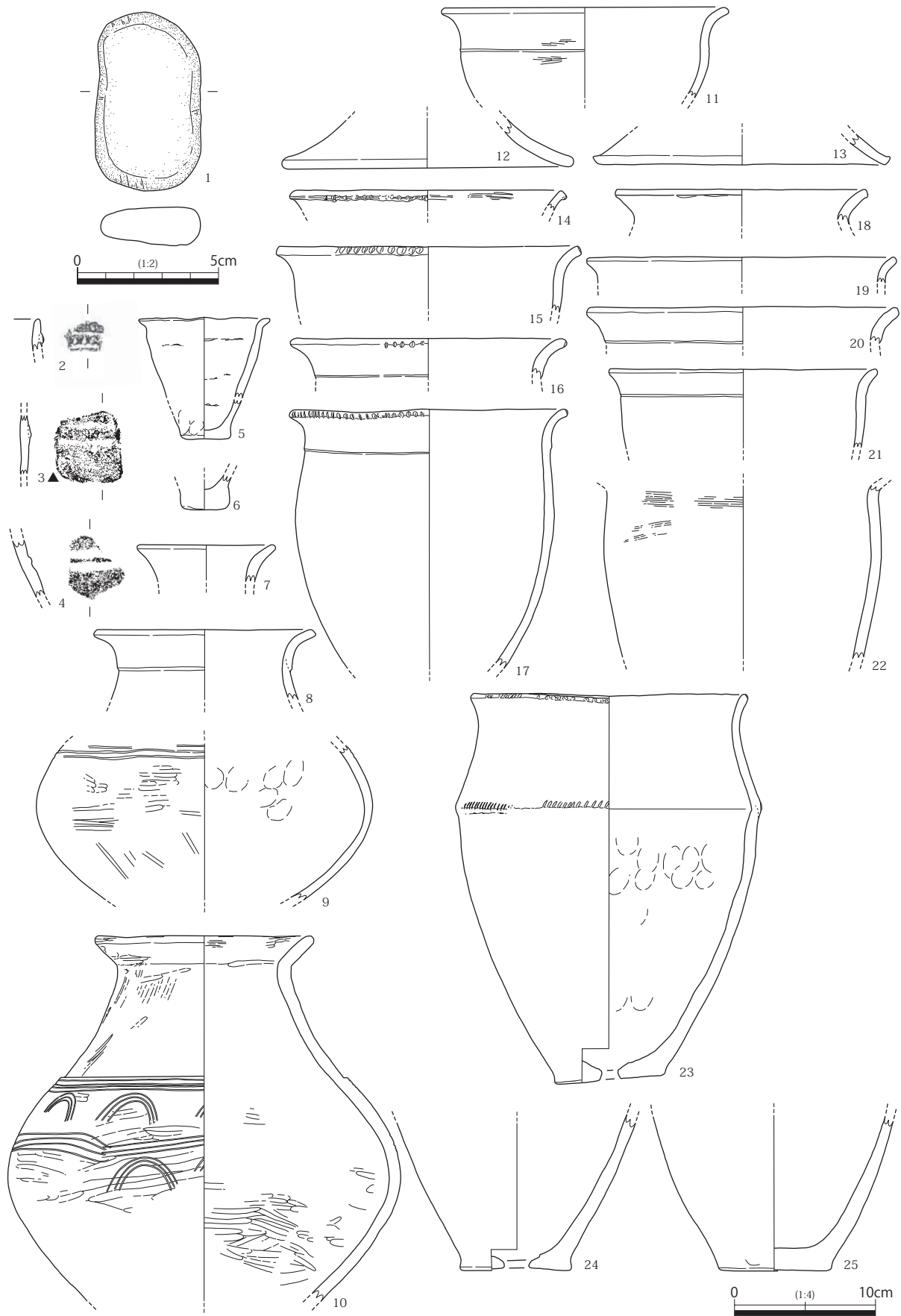


图 246 6-124 土坑 出土遺物実測图 1

で、器面には粘土接合痕が明瞭に確認できる。4・7～10は壺。4は肩部片で幅4mmの削り出し突帯を設ける。8は、口縁部の湾曲が強く口頸部境に浅い段を持つ壺で、10とは対照的である。9は、腰の張る胴部片で、ミガキ調整の後に頸胴部境に沈線を3条入れるが、上部欠損のため条数等が増える可能性を残す。10は、短く直線的な口縁部と傾斜の強い頸部を持ち、頸胴部境には深い段を持つ。頸胴部境と胴部上方に4条の沈線を描き（胴部上方の沈線は、器体を上から見て反時計回りに施文。結合部付近で直線性が乱れている）、重弧文で飾るが、施文は部分的で全周しない。器体の残存が3割程度のため明確でないが、「正面感を意識させるような」施文が行われている可能性がある（三好1996）。

甕は、口縁端部に刻目を入れるもの（14～17・23）と、入れないもの（18～21）、頸部に段（16・17・20）、もしくは1条の沈線（21）を入れるものと、無文のもの（15・22）に分けられる。これらの属性については、東側遺構群出土遺物を一括してグラフ化した（図318）。14は、口縁に貼り付けた突帯状の端部に刻目を入れるもので、他のものと比べ薄い器壁を持つ。当遺跡では他に類例が見られない。15は、口縁端部全面にO字形の幅の広い刻目を入れるが段や沈線は見られない。17は、口縁端部に刻目を入れ頸部に段を持つ甕である。21は、頸部に1条の沈線を持つ。頸部に沈線を持つ甕は、遺構からはほとんど出土しないが（他に図244-2、図265-31・33）、3-267・268溝など、形成時期がより古いと考えられる遺構からも出土している。22は、甕の胴部で口縁部を欠いている。器面は丁寧なナデもしくはミガキによって平滑に仕上げられるが、口縁部直下にはハケメが残る。胴部上方に刻目を施した段を持ち、段部から屈曲・内湾する頸部と弱く短く外反する口縁部によって、通常の如意形口縁の甕とは異なった器形と文様構成を持つ。これに類する資料は、深澤芳樹により「刻目段甕」として整理・検討されている。深澤は刻目段について紋様として着目し、刻目段→直線紋刻目段→両直線紋間刻目という変遷過程を提示した（深澤2000）。当遺跡においても数個体の刻目段甕が出土しているが、6-125土坑から出土している図297-5の「両直線紋間刻目」を除くと、遺構から出土しているものは全て「刻目段」である（包含層から出土した資料には「両直線紋間刻目」が含まれる）。

このような甕の類例は、九州から瀬戸内地方の西日本各地で見られるが、図246-23のように胴部上半の段部で屈曲するような器形を持つものはあまり見られず、砲弾形の器形の中に刻目段を持つものがほとんどである。福岡県寺内遺跡（宇野1991）の資料には屈曲する器形が見られるが、帰属時期は大きく遡り夜白式併行期とされる。ただし、この甕について「突帯文土器の深鉢形から変化し、如意形口縁の甕に変化する最終的な形態」（梅崎2000）と指摘されていることは、初現期にある当遺跡の弥生

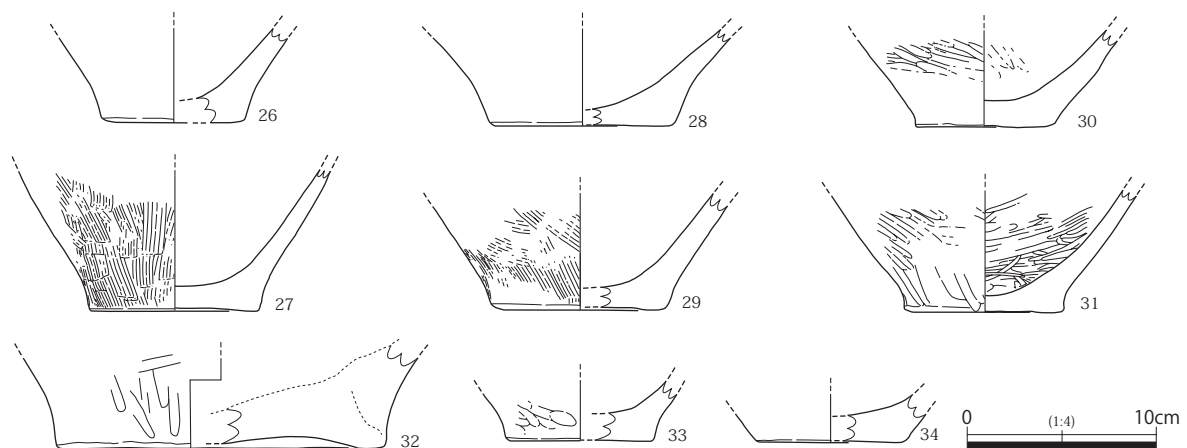


図247 6-124土坑 出土遺物実測図2

土器を考える上で重要である。図 246-23 の胎土、表面調整、成形方法などからは、突帯文土器との技術的な系譜関係を想定することは難しいが、器形や文様面で影響を受けた可能性については否定できない。〈縄文と弥生の折衷型土器〉という型式学的意味ではなく、移行期において製作される特殊な土器として理解したい。その意味でこの土器の製作由来は、当遺跡の集落を営む集団の実態的性格に深く関わる可能性があるが現時点での評価は難しい。ここではとりあえず、〈屈曲する〉刻目段甕の例として注目しておきたい。なお、底部には、焼成後に外面からの敲打によって一孔が穿たれている（24 の甕底部にも同様の穿孔あり）。

26～34 は底部片で器種は明確でないが、26・27 は甕、28～34 は壺だろうか。28 は磨耗が著しい。胎土は赤橙色で脆く、後述の図 291-20 に似る。図 291-20 は胎土分析によって、胎土中に鉄分を多く含み、比較的高温で焼成されている可能性が提示されており、28 も同様のものだろうか。31 は、内外面を丁寧にミガキ調整した壺の底部で、底部外面には稲籾のほか、複数の植物質（種子？）の痕跡が見られる。32 は、大型壺の底部と考えられるが、内面は広範囲に剥離して器表が残存しない。

なお、5・9・10・17・23 の 5 点については、胎土分析を行った。詳細は第 7 章第 4 節に譲るが、

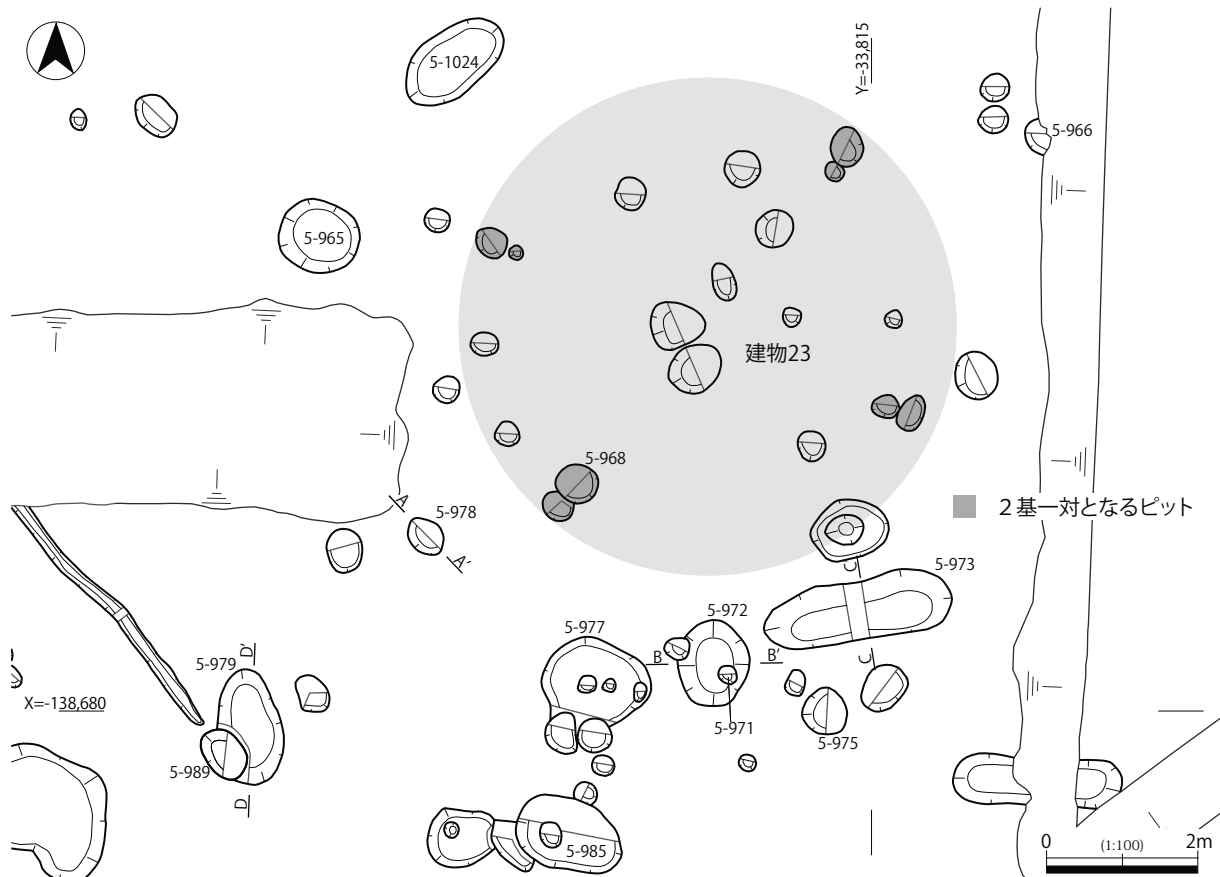


図 248 建物 23 平面図

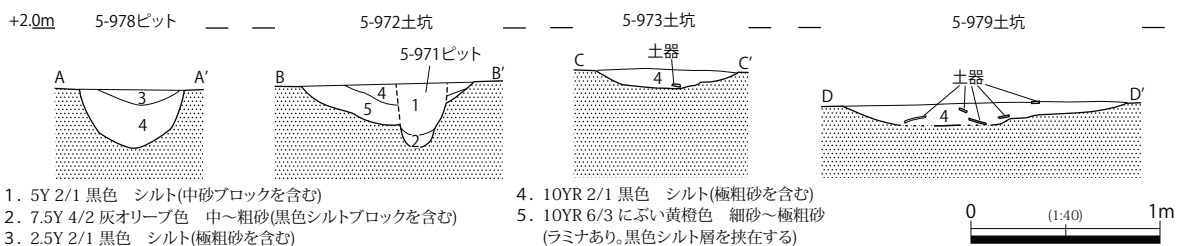


図 249 建物 23 周辺遺構 断面図

これらの5点の土器については、鉱物・岩石・粒径組成が近似していることから、在地性が高いとの可能性が提示されている。器種・器形による素地土の使い分けなどは見出されなかった。

・建物 23 と周辺遺構 (図 248 : 図版 49-6)

建物 23 は 5 区東端、建物 22 の南方約 20 m で検出された。検出標高は T.P.1.6 ~ 1.8 m。建物 22 と同じく、環状のピット列が見られ、その周囲にも北西から南東部にかけて土坑が位置する。ただし図 248 に示したように、環状に分布するピット列の中の 4 ヶ所で、規模の異なる大小 2 基のピットが一对となって検出された。これらは相互に等距離を保っており支柱穴としての可能性が考えられる。ただし、深さは 0.1 ~ 0.2 m と浅く、他のピットや土坑と変わらない。建物周囲の土坑は多くないが、5-965、5-977、5-1024 土坑については、建物プランからの距離が 1.2 ~ 1.5 m となり、建物 22 における 6-144、6-171、6-172 土坑と建物の距離と近似する。また、土坑が建物の南や西側の低位側に偏って掘削されていることも建物 22 での状況と近似するといえよう。ただし、5-972、5-973 土坑 (図版 50-4) については、やや建物に近接しており、最も近い 5-973 土坑と建物プラン間の距離は約 0.5 m となる。これらの土坑群のうち、建物南側に位置する土坑などからは少量の遺物出土があり、図 250 に一括して示した。

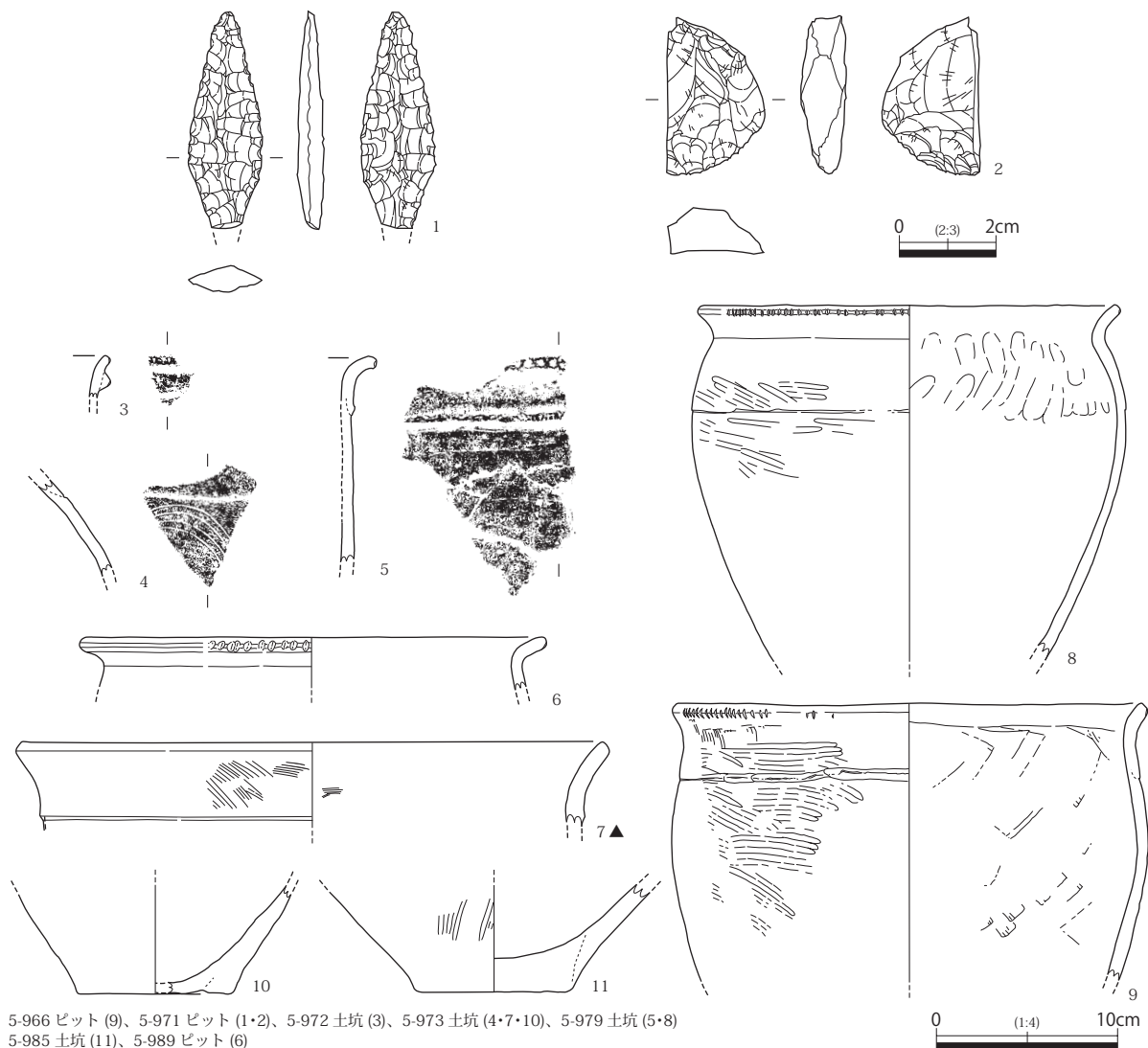


図 250 建物 23 周辺遺構 出土遺物実測図



1・2は5-971ピットから出土した石鏃と楔形石器である。同ピットからは剥片を含めたサヌカイト石器が3点出土したのみで、土器は出土しなかった。1は凸基Ⅱ式の石鏃で3.06 g。弥生時代中期に下るものと考えられる。同ピットは5-972土坑の上部から掘り込まれており、形成時期が下る可能性があろう。出土した3点の石器についてはいずれも、産地同定分析によって二上山産と判断されている。遺構から弥生前期土器を伴って出土するサヌカイト石器に、金山・城山産のものが多くいることを考えると、同ピットの形成時期が下ることに矛盾はない。

3は5-972土坑から出土した突帯文土器の小片。口縁上端と、口縁から8mmほど下がった位置に貼り付けた突帯上に刻目を入れており、当遺跡から出土しているものの中では形態的に古い特徴を持つ。ただし、刻目は小さい。5は、5-979土坑から出土した甕の口縁で、8の甕に伴って出土している。口縁端部と頸部の段上に刻目を入れ、短く外反する口縁部と直線的な胴部（頸部？）を持つ。細片のため口径や胴部径が復元できず、甕として直立した断面図を示したが、口縁部が内傾して壺になる可能性もある。内面器表は広い範囲にわたって厚さ1mmほどの剥離が連続しており、焼成時に層状剥離を起こしている可能性がある。白色系の胎土と特殊な器形から搬入品の可能性が考えられ、胎土分析の対象としたところ、粒径組成において特徴的な分布が見られ搬入品との所見を支持する結果となった。6も口縁部に刻目を入れる甕で、頸部の段から折れて欠損している可能性がある。頸部をへら状の工具で調整したのか、口縁下に直線的な段差が見える。5同様に白色系の胎土を持ち搬入品の可能性があるが、胎土分析は実施していない。8は、口縁下端部に弱い刻目を入れ、張り出した肩部に段を設ける甕である。段は最終的なミガキ調整によって潰れたり消されたりしているが、その調整は粗く完全に消されていない。同様の調整は5-966ピットから出土した9にも施されている。9は弱く外反する口縁端部に刻目を入れ頸部に段を持つが、段をへら状の工具によってナデ消そうとしている状況が見られる。両者とともに、やや方形を成す口縁下端部に刻目を入れ、最大径を胴部に持ち、外面器表をミガキ調整するなど類似点が多い。後述する建物26周囲の土坑から出土した甕（図254-2・3）についても同様の特徴が見られ、当遺跡における甕の一類型として抽出できよう。7は5-973土坑から出土した鉢もしくは大型の甕の口縁部である。頸部に段を持ち、外面には粗いハケメが残る。茶褐色で角閃石を含む胎土は、生駒西麓産のものと考えられるが、東側遺構群出土資料のうち、遺構から出土した弥生土器において生駒西麓産胎土を持つものはこの鉢のみである（包含層では数点認められる）。10も5-973土坑から出土した甕の底部で、底部外面に接合痕跡と考えられる深いシワが確認され、底部の成形技法を検討する上で興味深い資料である。これについては接合部剥離資料と合わせて後述したい。なお、この甕の胎土を分析したところ、粒径組成が他の遺物に比べてかなり粗いことがわかっている。

#### ・建物24と周辺遺構（図251：図版49-7）

3区西端で検出された。建物23の南方約20mの位置にあたり、建物22・23・24が南北にほぼ等間隔で並ぶように検出された形になる。建物西側は5区との調査区境にあたり、建物北側は断面観察用の断ち割り（X=138.690ライン）で失ってしまい、調査できていない。ピット列は建物南側で集中して検出されており、弧状を成す。これにより復原される建物プランは直径5.5mの円形である。建物24には周囲を取り巻くような土坑は確認されていないが、北側に3-292土坑が位置する。

**3-292土坑** 4.2×2.6mを測る隅丸方形の土坑だが、南側の掘方が円形の建物プランに合わせたような変形を見せる。復原した建物プランとの間隔は0.7mを測る。深さは0.5mを測るが、遺物は出土しなかった。周囲の遺構からも遺物の出土はない。



图 251 建物 24 平面图

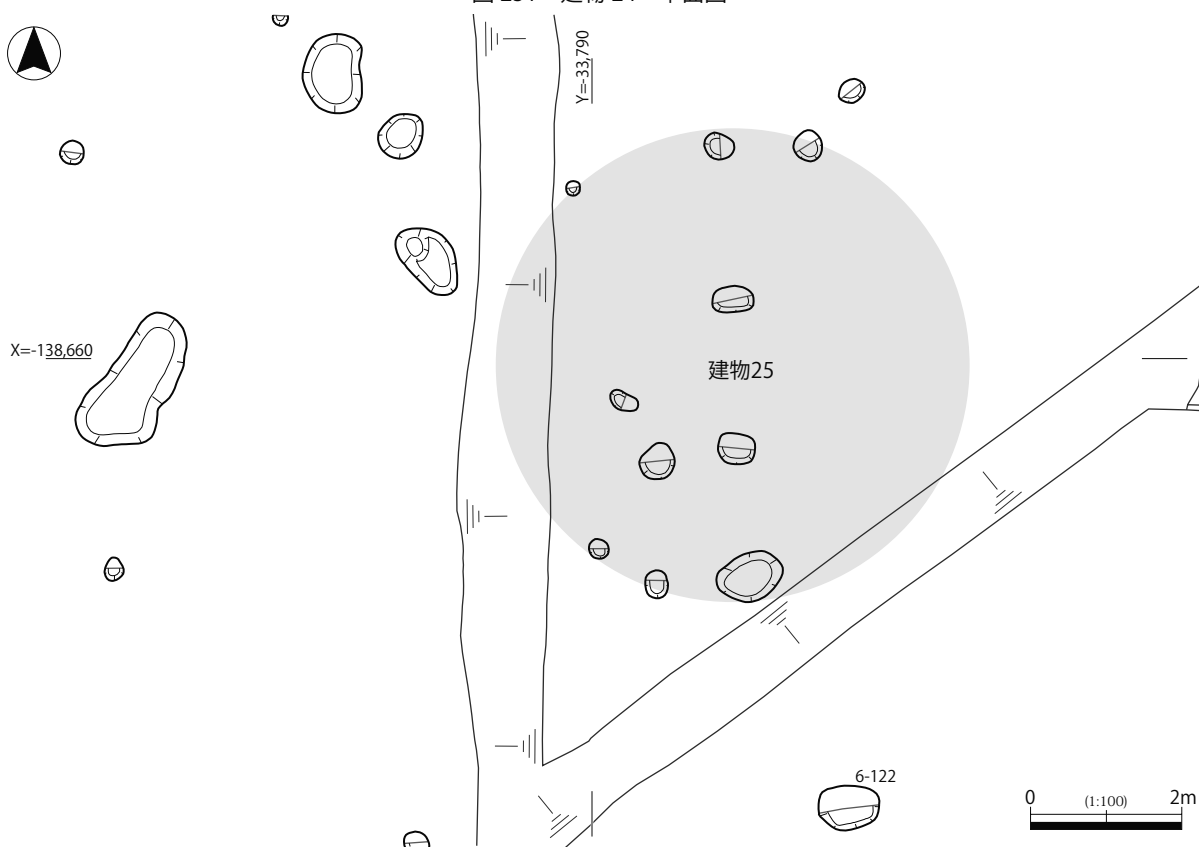


图 252 建物 25 平面图

・建物 25 (図 252 : 図版 49-8)

6区中央付近で検出された。建物西側、南東側は断面観察の断割りによって失ってしまい、調査できていない。周辺は上層の水田耕作土である第 8a-1 層の攪拌が強く及ぶ場所で、遺構の残存状況が悪かったが、北側と南側でピットが環状に並ぶ可能性があることと、周辺の包含層掘削の際に多くの遺物が出土したため (図 240・304)、断割りによって失ってしまったピットが存在した可能性も考慮に入れ、

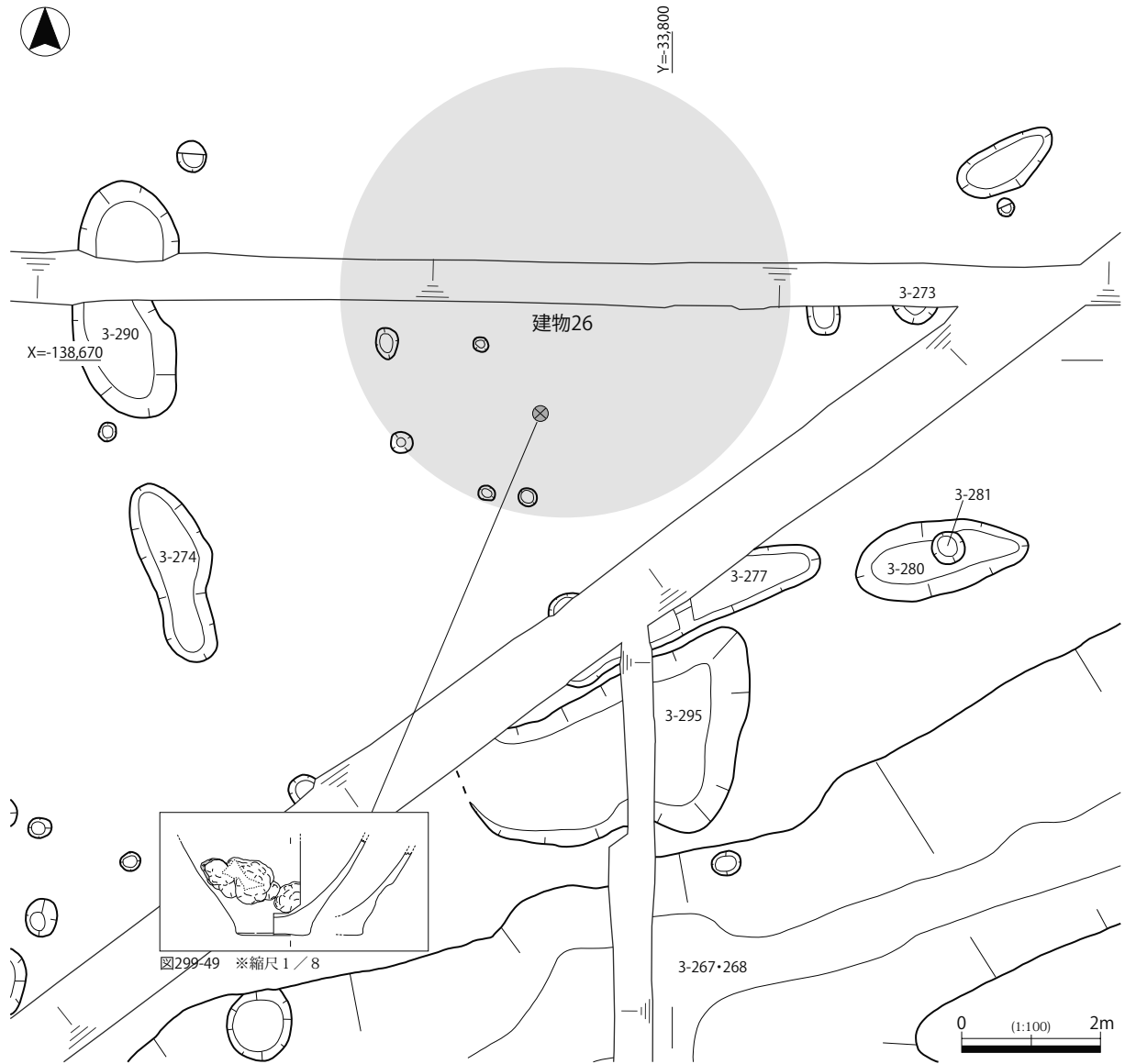
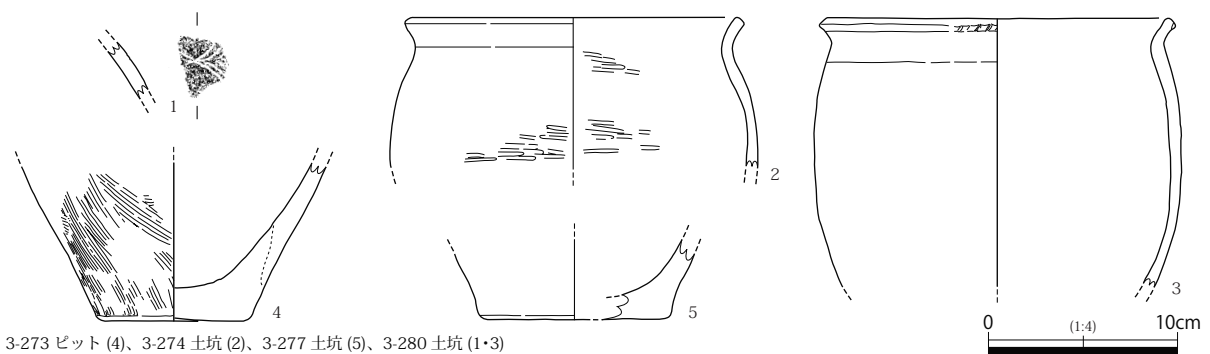


図 253 建物 26 平面図



3-273 ピット (4)、3-274 土坑 (2)、3-277 土坑 (5)、3-280 土坑 (1・3)

図 254 建物 26 周辺遺構 出土遺物実測図

直径 6.2 m の円形建物を想定した。ただし周囲を取り巻く土坑群は確認されず、積極的な根拠に乏しい。

#### ・建物 26 (図 253)

3区と6区の調査区境で検出された。環状ピット列は、建物南西側にわずかに検出されたのみである。調査時期の異なる調査区境に位置していたこともあって、当初は建物として復原していなかった。しかしながら、〈建物周囲を取り巻く土坑群〉が南側から西側まで円弧を成すように検出されていることと、周囲の包含層から多くの遺物が出土していること(図 240・304)を積極的に評価し、直径 6.4 m の円形建物として認識するに至った(同遺構群を建物として認識できるのではないかとの教示については、久田正弘、及川良彦の両氏よりいただいた。記して感謝する)。建物プランとの距離は 3-277 土坑が最も近く約 1 m となり、最も遠い 3-274 土坑で約 3 m を測る。これらの土坑から出土した遺物は、図 254 に示した。1 は弥生土器の壺胴部片で、小片であるため詳細は不明ながら羽状文の結節点であろうか。2・3 は甕である。いずれも弱く外反する口縁端部を方形に仕上げ、胴部に最大径を持っており、口縁の刻目の有無など施文は異なるものの、近似した器形を持つものといえよう。また、建物プラン内の包含層からは、胴部下部に焼成破裂痕跡を持つ壺の底部(図 299-49)が出土した。

## 2. 溝

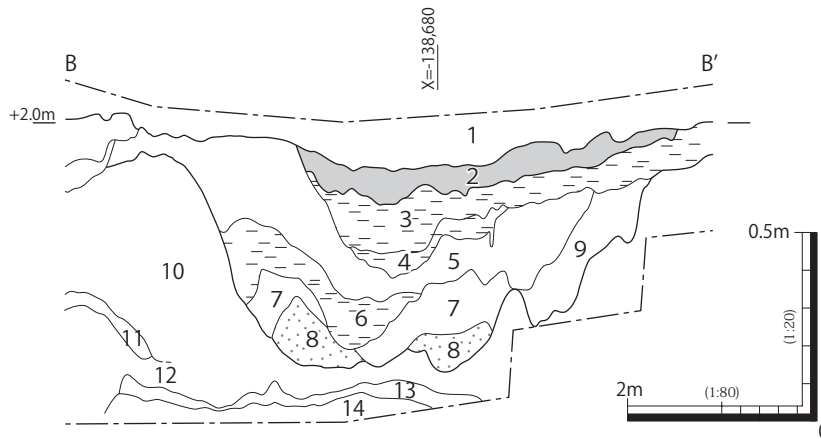
**3-267・268 溝(図版 51-1～53-7)** 調査地内を西流する溝である。3区中央部で一旦分岐、合流する。北側を 268 溝、南側を 267 溝と便宜的に呼称しているが、埋土の共通性に加えて両溝から出土した土器片が接合することから、同時期に開口していたことがわかる。埋土は上下に明瞭に分かれ、下層の砂礫層はラミナが顕著で遺物を含まない(図 255)。この砂礫層を除去した溝底面には、激しい水流によって抉られた起伏が部分的に確認される(図版 51-2)ことから、この溝が氾濫や増水時などに発達した小流路の下刻によって形成されたことがわかる。形成時期については、縄文時代晩期に形成されたと考えられる第 8b-4 層よりも上位から切り込んでいるため、当該時期を上限とすることはできる。一方、上層は粘土～シルトの泥質な自然堆積層と、攪拌を受けた粘土～粗砂層で構成されており、下層とは対照的にブロック土や遺物を多く含む。下層における自然流路の形成と砂礫による埋没が終了した後、溝状に残った落ち込みに堆積する泥土と、部分的な埋め戻し土と評価できよう。

当溝において最も注意されるのが、大量の突帯文土器の出土である。初現期の弥生土器を出土する当遺跡において、その前段階もしくは並行関係にあると考えられる突帯文土器の出土は重要な意味を持つ。これらの突帯文土器については、溝の最上層(図 255 上段の 3・8 層、下段の 2 層)から弥生土器とともに出土している。層厚 10～20cm の同層から同時に出土する突帯文土器と弥生土器の共伴関係については、現地調査時には厳密な検討を行えず、いくつかの遺物集中部(図 256)の出土状況を記録するに留まった。しかしながら、遺物整理が進むにつれ、突帯文土器の出土の約 9 割が 3-267・268 溝に集中しており、その他の遺構から出土する土器のほぼ全てが弥生前期土器である状況(表 5)が確認されてくると、当溝への土器埋没過程について再検討の必要性が強く認識された。ここでは遺物集中部〈土器群 1～8〉について、報告と検討を進める。

**土器群 1(図 257: 図版 51-3～5)** 3-268 溝は、3-267 溝に比べ出土遺物が多く、土器群 1・2・5・6 と遺物集中部の密度も濃い。土器群 1 はこれらの遺物集中部で最も東に位置する。図 257 下段や図版 51-5 からわかるように、遺物は溝の最上部の 1 層から出土している。直下の 2～5 層はラミナの顕著な流路内堆積物で遺物の出土はない。特に 3 層や 5 層の下部には基盤層である第 8b 層由来の偽礫を含んでおり、流水営力の強さを示すとともに、流水による下刻が溝を形成したことを裏付ける。



- 第8a-1層 1. 10GY 3/1 暗緑灰色 粘土～粗砂  
 第8a-2層 2. 10G 3/1 暗緑灰色 粘土～粗砂  
 3-268溝 3. 5BG 3/1 暗青灰色 粘土～粗砂(炭化物および土器を多く含む)  
 4. 5BG 5/1 青灰色 粗砂混じり粘土～シルト(層状に炭化物を含む。溝滞水時の自然堆積層か)  
 5. 5Y 7/2 灰白色 粗砂～極粗砂(流水堆積物か)  
 6. 5BG 5/1 青灰色 粗砂混じりシルト～粘土(溝肩の崩落土か)  
 7. 5BG 5/1 青灰色 粗砂混じり粘土(層状に炭化物を含む。溝滞水時の自然堆積層か)  
 3-267溝 8. 10G 3/1 暗緑灰色 粘土～粗砂(炭化物および土器を多く含む。3に対応か)  
 9. 5BG 6/1 青灰色 粘土～5Y 7/1 灰白色 細砂(ラミナあり。上方細粒化。溝滞水時の自然堆積層か。4に対応か)  
 10. 5Y 7/2～8/2 灰白色 極粗砂～粗砂(ラミナ顕著。偽礫を含む。5に対応か)  
 11. 10Y 4/1 灰色 粘土～シルトと6/1 灰色 細砂～微砂の互層(部分的な落ち込みの自然堆積層か)  
 12. 5BG 4/1 暗青灰色 粘土～粗砂(ブロック土多い。溝肩の崩落土か。6に対応か)  
 13. 5Y 6/1 灰色～7/1 灰白色 粗砂～細砂(顕著ではないが部分的にラミナあり)  
 第8b-5-2層 14. 10G 6/1 青灰色～4/1 暗青灰色 粘土～シルト(上方明色化。層状に炭化物を含む)  
 第8b-5-3層 15. 5BG 3/1 暗青灰色 シルト～粗砂  
 第8b-6-1層



- 第8a-1層 1. 10GY 4/1 暗緑灰色 シルト～粗砂  
 2. 5BG 3/1 暗青灰色 シルト～粗砂(土器を含む)  
 3. 5BG 4/1 暗青灰色 粗砂混じり粘土～シルト(炭化物を層状に含む。溝滞水時の自然堆積層か)  
 4. 5BG 4/1 暗青灰色 粗砂混じり粘土(炭化物を層状に含む)  
 5. 5BG 4/1 暗青灰色 シルト～粗砂(一時的な土壌化層か)  
 3-267・268溝 6. 5BG 5/1 青灰色 粘土～シルト(炭化物を含む。溝滞水時の自然堆積層か)  
 7. 7.5GY 5/1 緑灰色 シルト～粗砂(部分的にラミナあり。崩落土か)  
 8. 5Y 7/1～7/2 灰白色 粗砂～極粗砂(ラミナあり。流水堆積物)  
 9. 10GY 4/1 暗緑灰色 シルト～極粗砂(ブロック土多い。溝肩の崩落土か)  
 第8b-4-2層 10. 5Y 7/1～7/2 灰白色 粗砂～極粗砂(部分的にラミナあり)  
 第8b-5-1層 11. 5Y 5/1 灰色 シルト～粗砂(北方ほど淘汰が悪い)  
 第8b-5-2層 12. 5Y 6/1 灰色～7/1 灰白色 粗砂～細砂(顕著ではないが部分的にラミナあり)  
 第8b-5-3層 13. 10BG 6/1 青灰色～4/1 暗青灰色 粘土～シルト(上方明色化。層状に炭化物含む)  
 第8b-6-1層 14. 5BG 3/1 暗青灰色 シルト～粘土

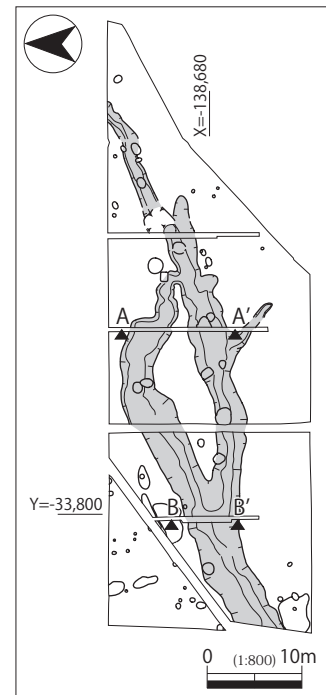


図 255 3-267・268 溝 断面図

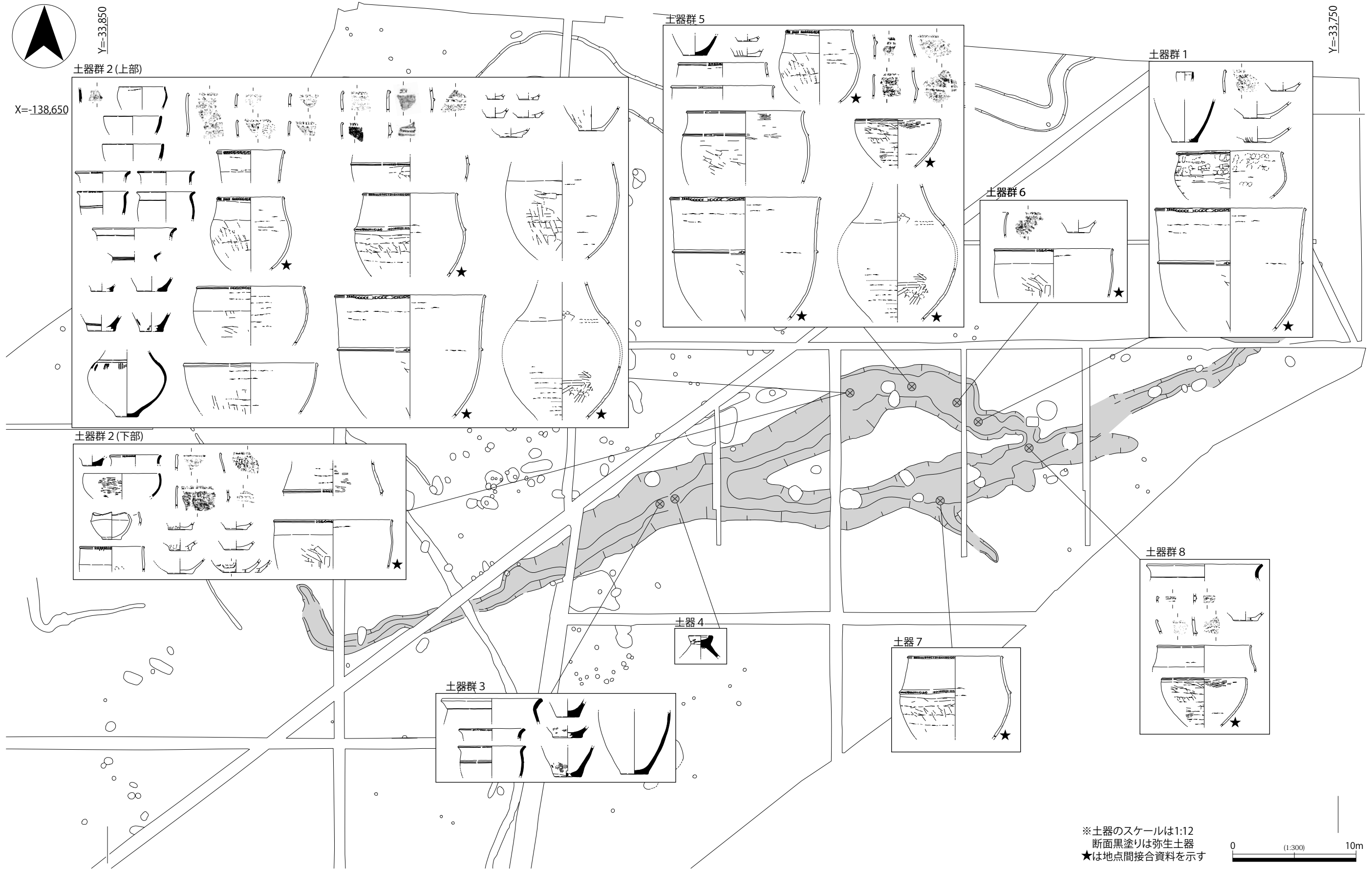


図 256 3-267・268 溝土器・土器群 出土位置図

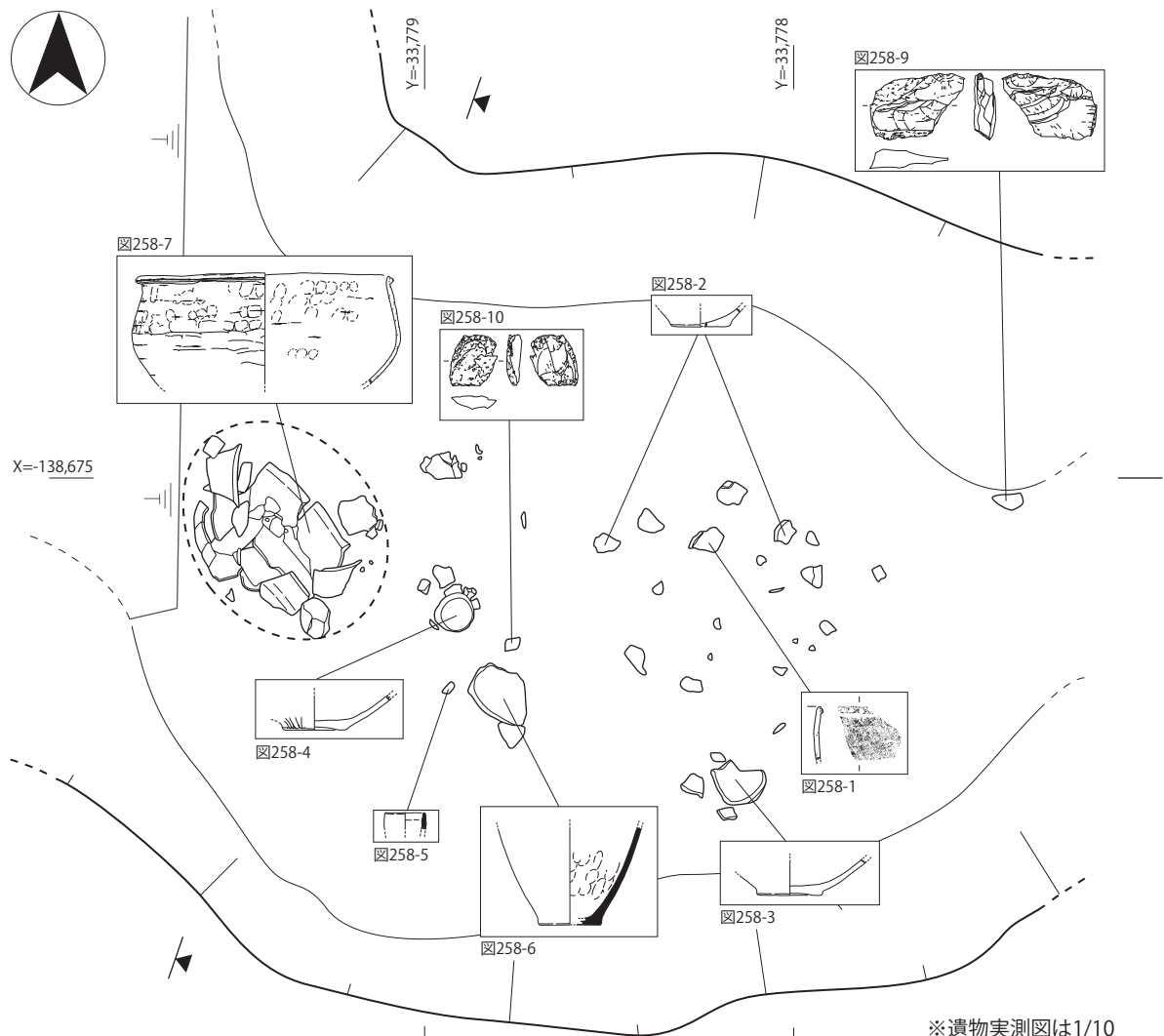
表5 第8b面遺構出土土器点数

遺構名	実測土器			非実測土器			備考
	弥生	縄文	不明	弥生	縄文	不明	
3-267・268溝	81	105	1	1198	1107	595	
3-270土坑	0	1	0	2	0	2	突帯文でない縄文土器浅鉢
3-273ピット	1	0	0	5	0	0	
3-274土坑	1	0	0	6	0	0	
3-277土坑	1	0	0	7	0	0	
3-278土坑	0	1	0	0	12	2	3-267・268溝を切り込む
3-279井戸	1	0	0	4	1	0	3-267・268溝を切り込む
3-280土坑	2	0	0	4	0	1	
3-282土坑	0	1	0	0	7	0	3-267・268溝を切り込む
3-286土坑	5	2	0	39	15	1	3-267・268溝を切り込む
3-287土坑	1	0	0	0	0	0	3-267・268溝を切り込む
5-1001ピット	1	0	0	2	0	0	
5-1003土坑	2	0	0	12	1	1	
5-1005溝	1	0	0	0	0	0	
5-966ピット	1	0	0	0	0	0	
5-972土坑	0	1	0	4	0	0	建物23（住居2）関連
5-973土坑	3	0	0	27	2	1	建物23（住居2）関連
5-979土坑	2	0	0	7	0	1	建物23（住居2）関連
5-980溝	2	0	0	0	0	0	弥生時代中期土器
5-984土坑	1	0	0	120	3	10	5-991溝と同一？
5-985土坑	1	0	0	3	0	2	
5-989ピット	1	0	0	23	0	0	
5-990土坑	3	0	0	0	0	0	弥生時代中期土器（2点）
5-991溝	23	0	0	170	0	5	
5-1016ピット	1	0	0	0	0	0	
6-122土坑	0	1	0	0	0	0	突帯文土器棺
6-123溝	31	2	0	442	23	40	
6-124土坑	30	2	0	223	0	39	建物22（住居1）関連
6-125土坑	2	0	0	60	3	10	
6-126土坑	1	0	0	0	0	0	建物22（住居1）関連
6-130土坑	1	0	0	0	0	0	建物22（住居1）関連
6-137ピット	1	0	0	0	0	0	
6-143土坑	5	1	0	91	7	31	下部に炭化物堆積する土坑
6-144土坑	1	0	0	5	0	3	建物22（住居1）関連
6-147土坑	1	0	0	0	0	1	建物22（住居1）関連
6-149土坑	1	0	0	3	0	0	建物22（住居1）関連
6-152土坑	7	0	0	175	16	23	下部に炭化物堆積する土坑
6-156土坑	1	0	0	2	0	0	
6-157土坑	6	1	0	78	0	6	下部に炭化物堆積する土坑
6-160土坑	1	0	0	17	0	1	
6-171土坑	3	1	1	3	1	4	建物22（住居1）関連
6-172土坑	1	0	0	5	0	0	建物22（住居1）関連
6-178土坑状変形	1	0	0	1	0	0	地震による土坑状変形
6-179土坑状変形	0	1	0	11	0	4	地震による土坑状変形
合計	229	120	2	2749	1198	783	

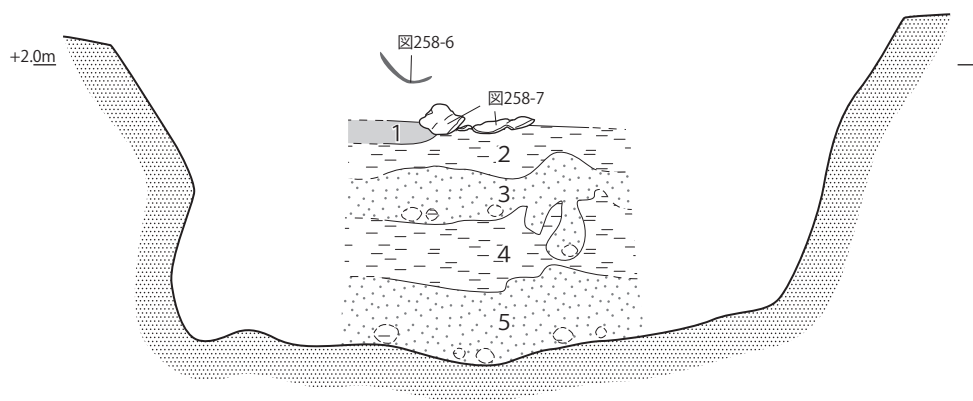
※実測土器は個体数、非実測土器は破片数により数量化した。  
また、実測土器には、焼成破裂土器片・接合部剥離資料を含まない。

出土遺物は、図258に示した。なお、3-267・268溝から出土している遺物の図面で、番号の横に★の付くものについては、遺物集中部間で接合関係が認められた土器であり（▲については、これまで同様に生駒西麓産胎土を持つ土器を示す）、遺物集中部ごとに出土遺物の内容を明示する目的のもと、重複して掲載している。なお、重複図示遺物に付す番号は図番号の若いものを基準とし、後出のものには新たな番号を付していない。

土器群1の出土遺物は突帯文土器が多く、弥生土器で図化できたものは、5のミニチュア土器と6の甕底部のみである。突帯文土器と石器が1層の最下部から出土したのに比べ、5・6の弥生土器は1層



※遺物実測図は1/10  
 石器実測図は1/6  
 断面黒塗りは弥生土器



1. 10BG 3/1 暗青灰色 粘土～粗砂(ブロック土多く埋め戻し土か)
2. 10GY 5/1 緑灰色 粗砂混じり粘土(黒色化した植物遺体を層状に含む。溝滞水時の止水性堆積か)
3. 5Y 8/3 淡黄色 粗砂～細砂(ラミナあり。偽礫を含む)
4. 5GY 4/1 暗緑灰色 シルトと5Y 8/1 灰白色 細砂～粗砂の互層(植物遺体含む。下方にブロック土入る)
5. 5Y 8/2 灰白色 極粗砂～粗砂(ラミナあり。下方に偽礫を含む)



図 257 3-268 溝土器群 1 平面図および断面図



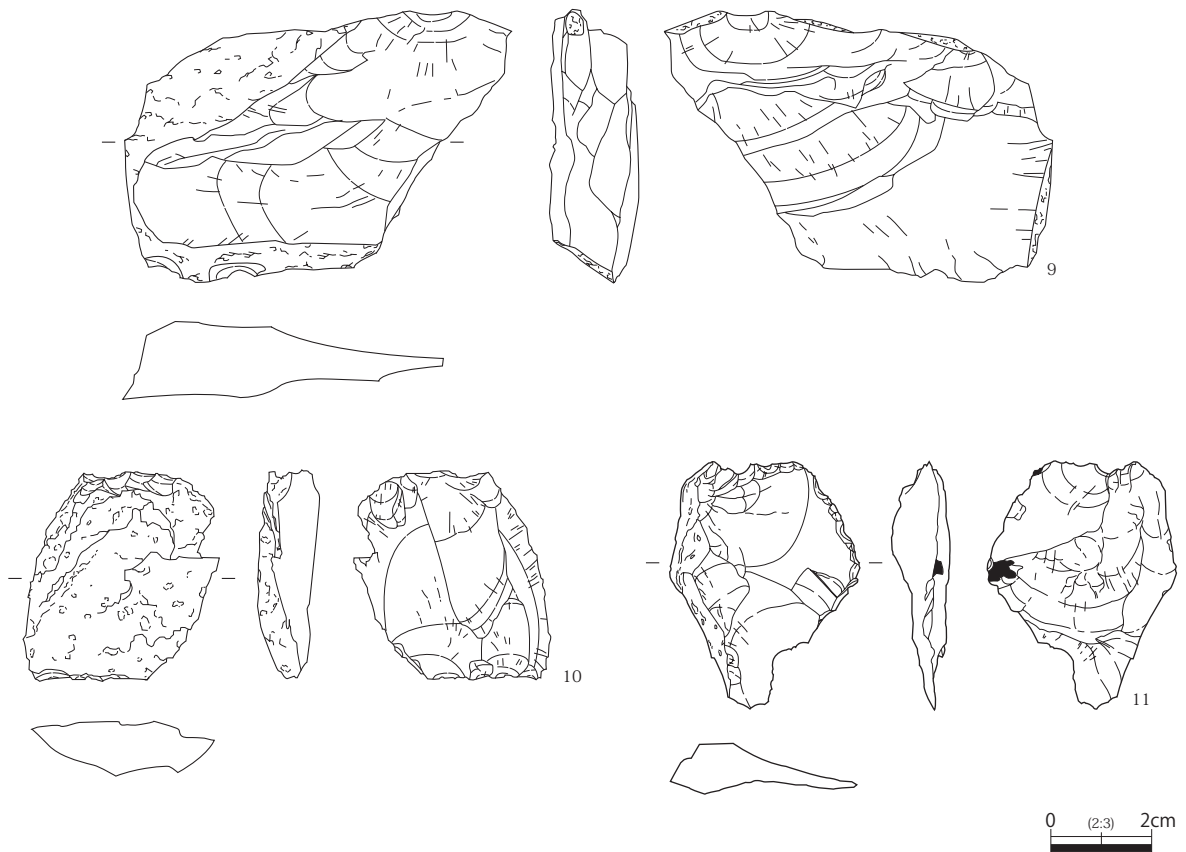
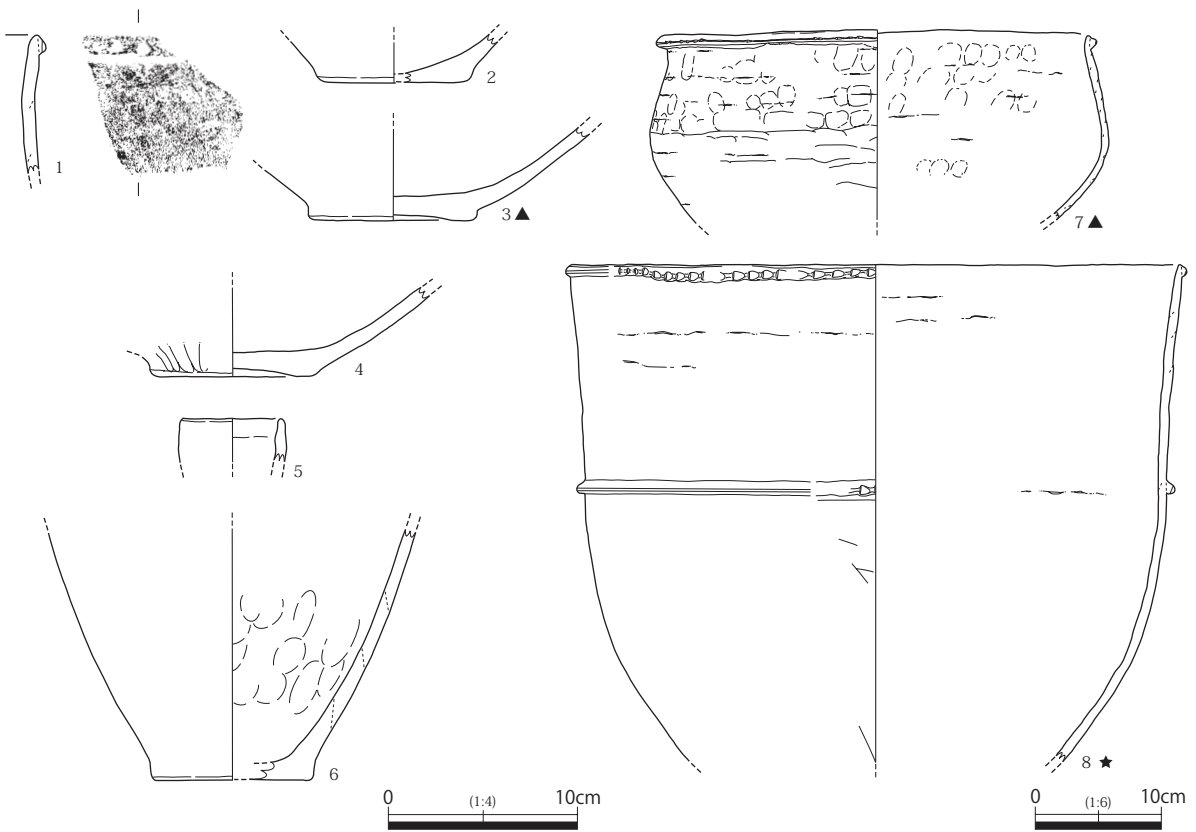


图 258 3-268 溝土器群 1 出土遺物実測図

でも中位から出土しており、5～10cmほどの標高差が認められる（図 257）。これにより、埋没に時期差のある可能性も考えられ、最も多くの遺物が出土した土器群 2 において改めて検討したい。

7・8 は突帯文土器の鉢。7 は 1 条突帯の浅鉢で、底部を欠くが遺存状況がよい。口縁端部に無刻み突帯を付す。外面にはススの残存が部分的に厚く認められ、このススを対象試料（OSF356）として炭素年代測定を行った。測定の詳細については、第 7 章第 6 節に国立歴史民俗博物館・年代測定研究グループによる報告を寄稿していただいている。8 は 2 条突帯の深鉢で、胴部から直線的に立ち上がる口頸部に比較的しっかりした右 D 字刻目を持つ。推定容量 60 l の大型品である。東方の土器群 2・5 のみならず、3-267 溝からも接合する土器片が出土しており、破碎された状態で広範囲に投棄されたと考えられる。9～11 は石器である。これらの石器も 1 層の下部から出土している。なお、第 8b 面東側遺構群の検出遺構から出土したサヌカイト製の石器 57 点については、全て産地同定分析を実施している（第 7 章第 3 節）。9 は石核、10 は楔形石器、11 は使用痕のある剥片であり、いずれも二上山産。

土器群 2（図 259～262：図版 51-6～52-6）最も多くの遺物が出土した遺物集中部である。3-268 溝の北肩に沿うように直径 3 m ほどの範囲で遺物の出土が見られる。土器群 2 の東側には 3-286 土坑があるが、これは溝埋没後に掘削されている。土器群 1 と同じく、遺物の出土は埋土最上部の 1 層に限られるが、1 層掘削中に遺物の垂直的累重が確認されたため、遺物の取り上げを上部と下部に機械的に分けて行った。ただし 1 層内で分層はできず、層厚も 10～20cm を測る程度であったため、上部と下部の遺物同士が接合するものも少なくなく、厳密な区別ができたわけではない。結果として、上部・下部いずれにおいても弥生土器と突帯文土器が出土した。そこで、両者の出土状況を細かく見てみると、土器群 2 の上部遺物群（図 259）では、比較的大きな破片が貼り付くように出土する集中部の北側に比べ、南側には細かな土器片が集中する傾向が見られる。ここでは、ブロック土も多かったことから溝の埋め戻しに伴う土器細片の混入が想定された。さらに遺物内容に注目すると、北側の大きな破片は突帯文土器、南側の小破片に弥生土器が多いことが明らかとなった。土器群 2 の下部遺物群（図 260）でも、突帯文土器が比較的大きな破片であることと対照的に、弥生土器は細片で出土する。また、図 260-5・9・11 など、突帯文土器が正置された状態で埋没していたことが想定されるのに対し、弥生土器は図 266-17 のような底部片も転倒して出土している。

以上のように、機械的に上部・下部に分けて調査した土器群 2 ではあったが、出土遺物の内容や、出土状況は近似している。前述したように、両者の標高差が小さいこと、両者間で接合する資料があることも合わせて考えると、上部・下部の遺物群は、別個のものとするよりは土器群 2 として一括把握されるべきものであると思われる。ただし、その中での弥生土器と突帯文土器の共伴関係については、さらに慎重な検討が必要である。縄文時代晩期の突帯文土器と初現期の弥生土器との共伴関係については、学会・研究会において長く検討されてきた。突帯文土器の出土は包含層からのものが多く、遺構からの出土であっても流路や溝など、開口期間と埋没の状況が不明なものが多かったためである。実際、当遺跡における突帯文土器の出土も 3-267・268 溝に集中しており、他の土坑やピットなどから出土するものが非常に少ないことから、その共伴関係には疑問の余地がある。

ただし現地調査時には、厳密な検討を可能にするような記録の作成と観察を行えていなかった。これはひとえに担当者の責に負うものである。そこで整理作業を行うにあたり、現地調査時に撮影された写真記録と図面記録の整合性を確認しながら再検討を実施し、可能な限り現場状況を復原、記録への補注を行った。すると、先に述べたような突帯文土器と弥生土器の出土状況と遺存状況の相違に合わせ、突



Y=33,790

X=138,670

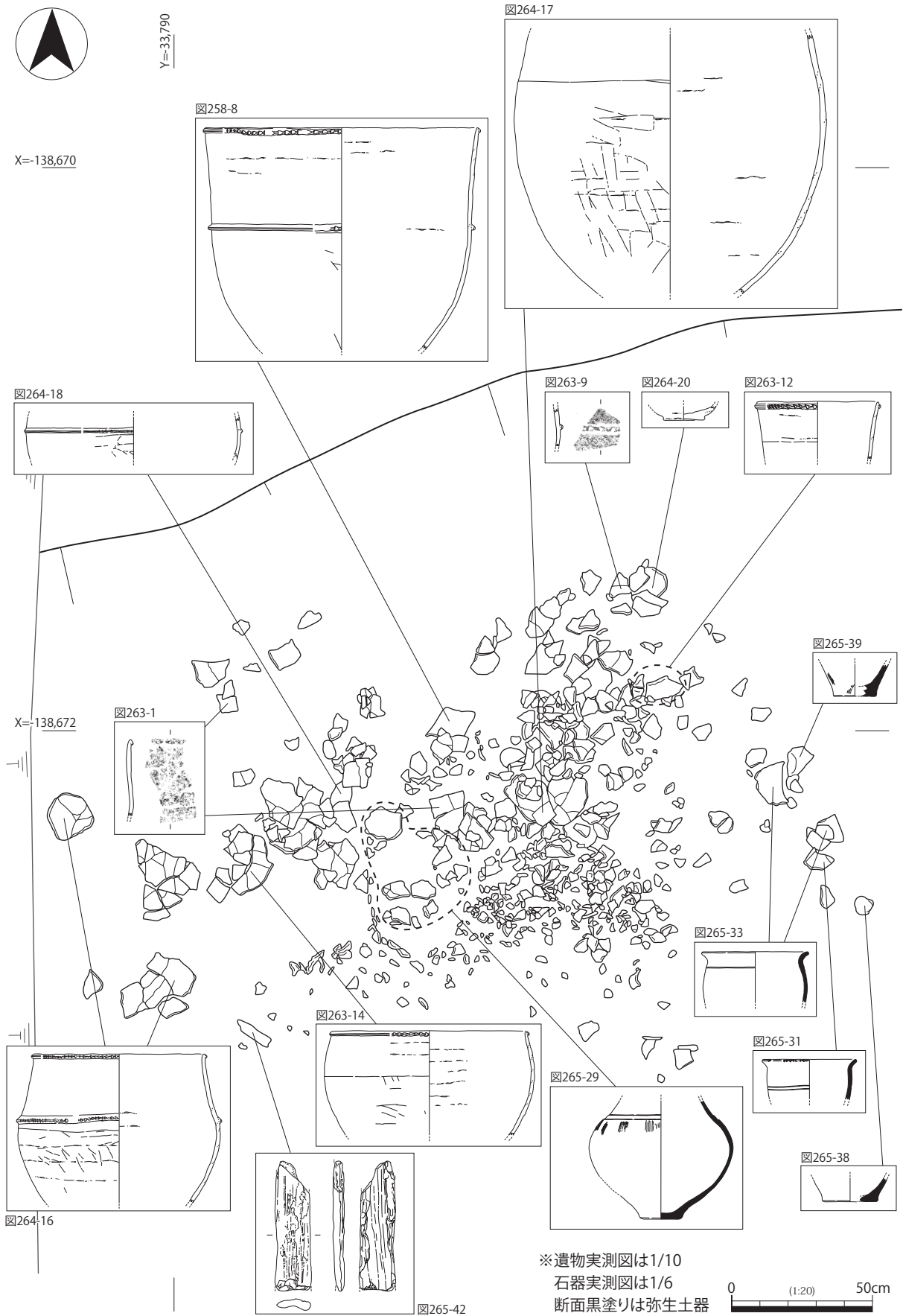


図 259 3-268 溝土器群2 (上部) 平面図



Y=33,790

図263-13

Y=33,788

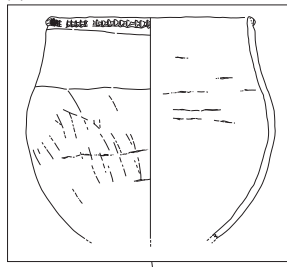


図266-5

図266-1

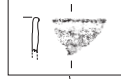
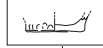
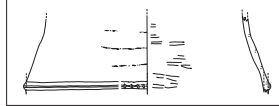


図266-13



X=138,672

X=138,674

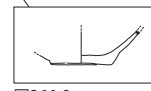
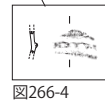
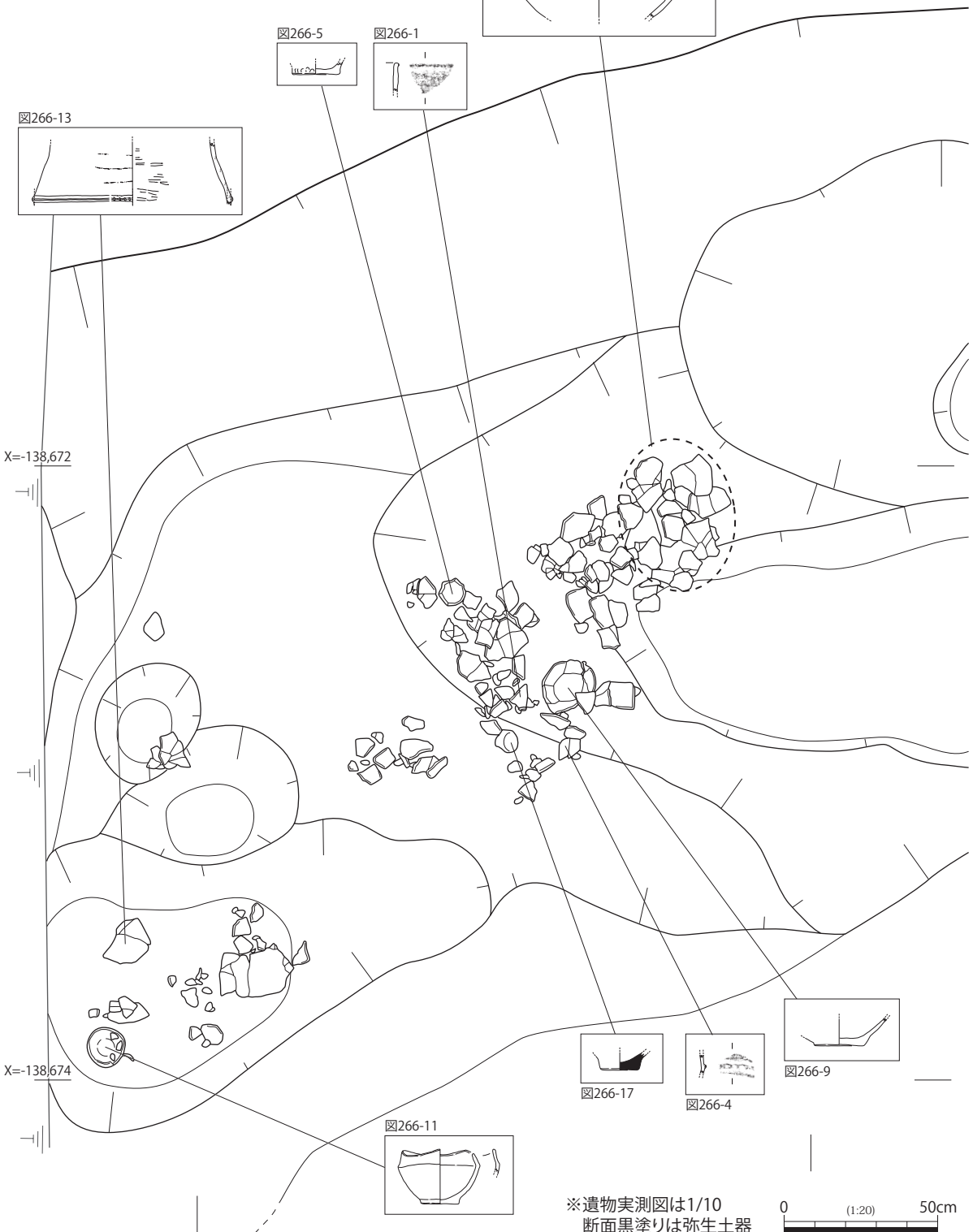
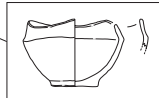


図266-11



※遺物実測図は1/10  
断面黒塗りは弥生土器

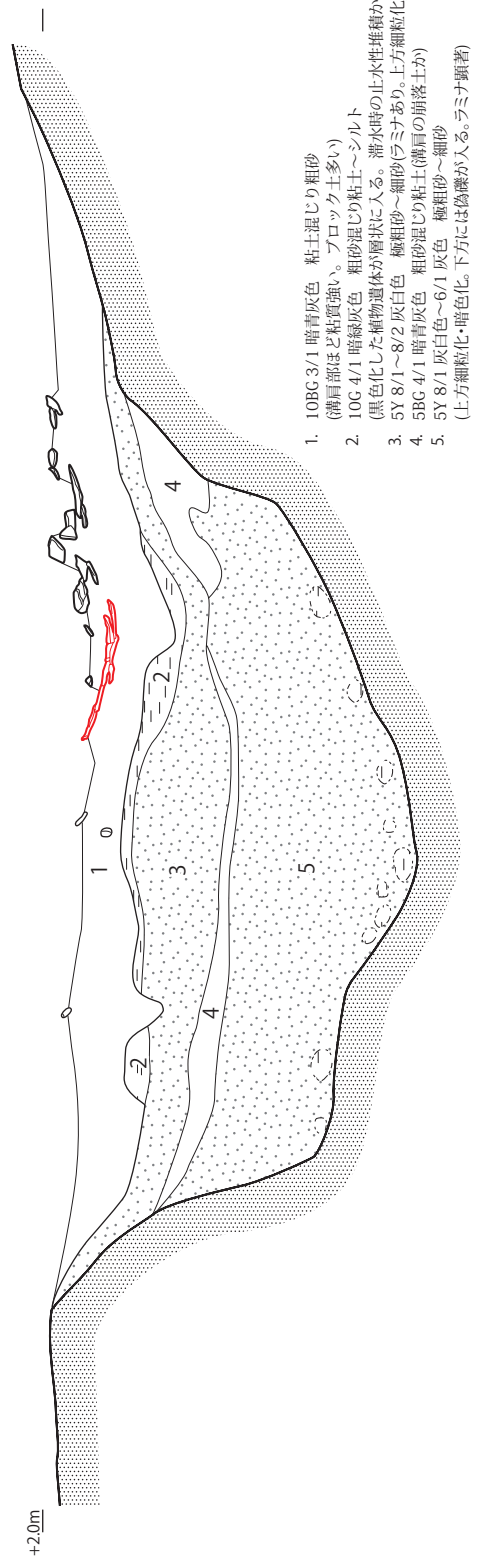
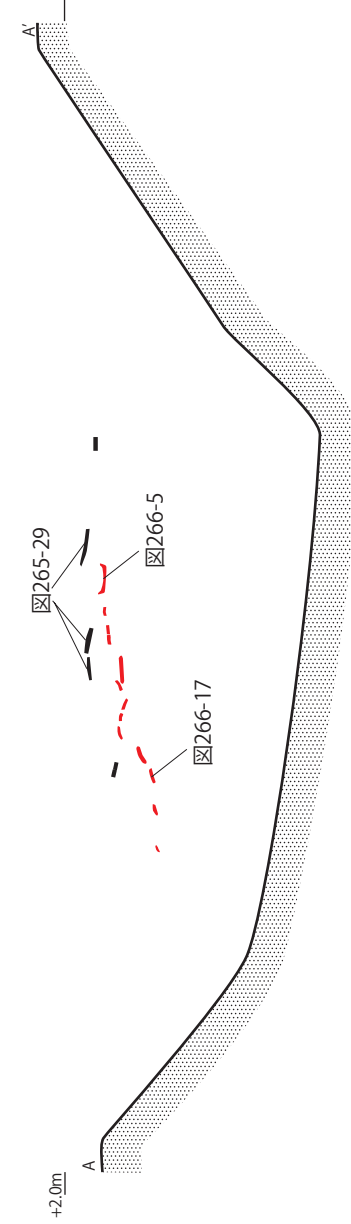
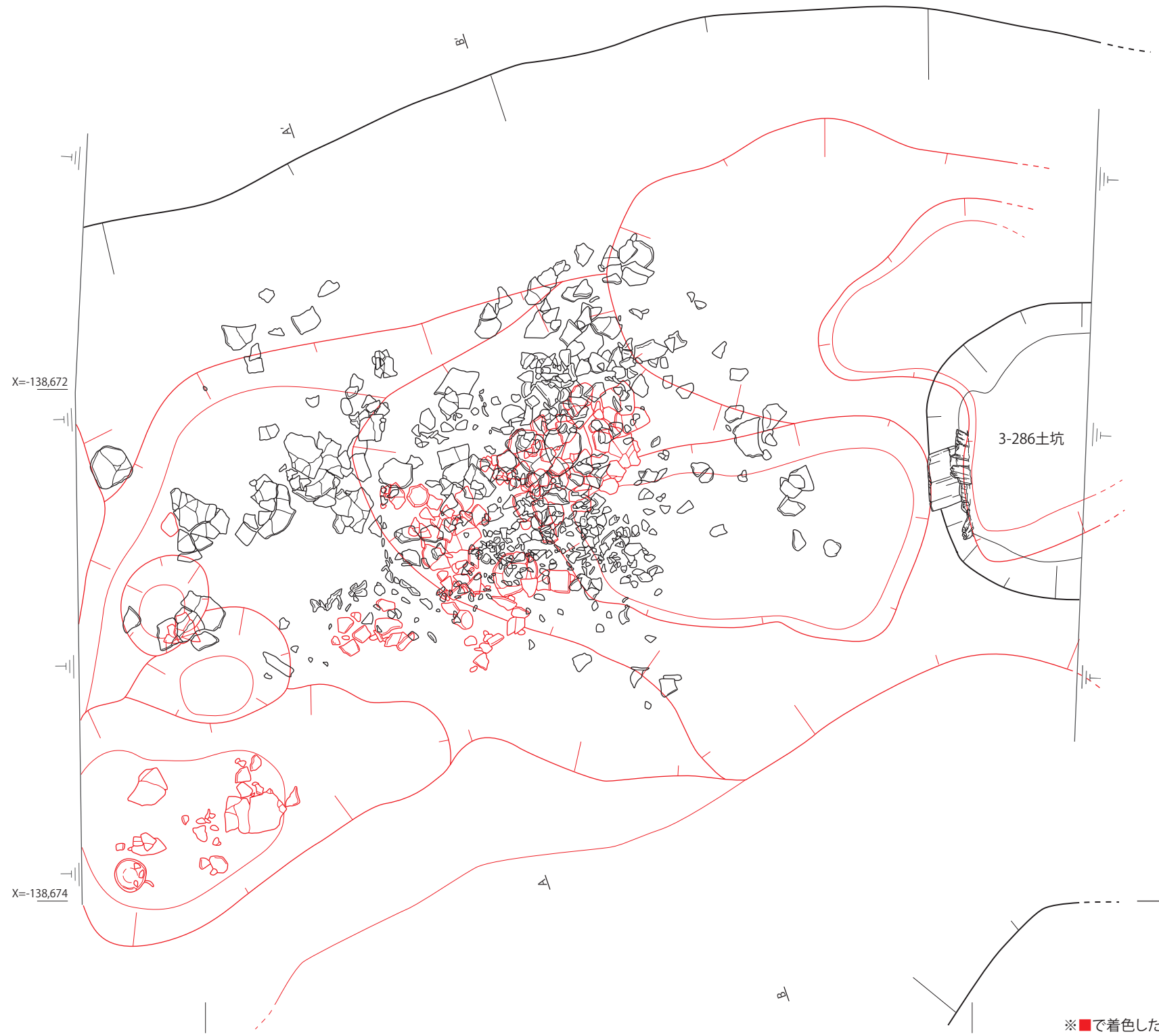
0 (1:20) 50cm

図 260 3-268 溝土器群 2 (下部) 平面図



Y=33,790

Y=33,787



1. 10BG 3/1 暗青灰色 粘土混じり粗砂 (溝肩部ほど粘質強い。ブロック土多い)
2. 10C 4/1 暗緑灰色 粗砂混じり粘土〜シルト (黒色化した植物遺体が層状に入る。流水時の止水性堆積か)
3. 5Y 8/1〜8/2 灰白色 極粗砂〜細砂(ワミナあり。上方細粒化)
4. 5BG 4/1 暗青灰色 粗砂混じり粘土 (溝肩の崩落土か)
5. 5Y 8/1 灰白色〜6/1 灰色 極粗砂〜細砂 (上方細粒化・暗色化。下方には腐葉が入る。ワミナ顕著)

※■で着色したものは、下部の遺構ラインと遺物



図 261 3-268 溝土器群2 平面図および断面図

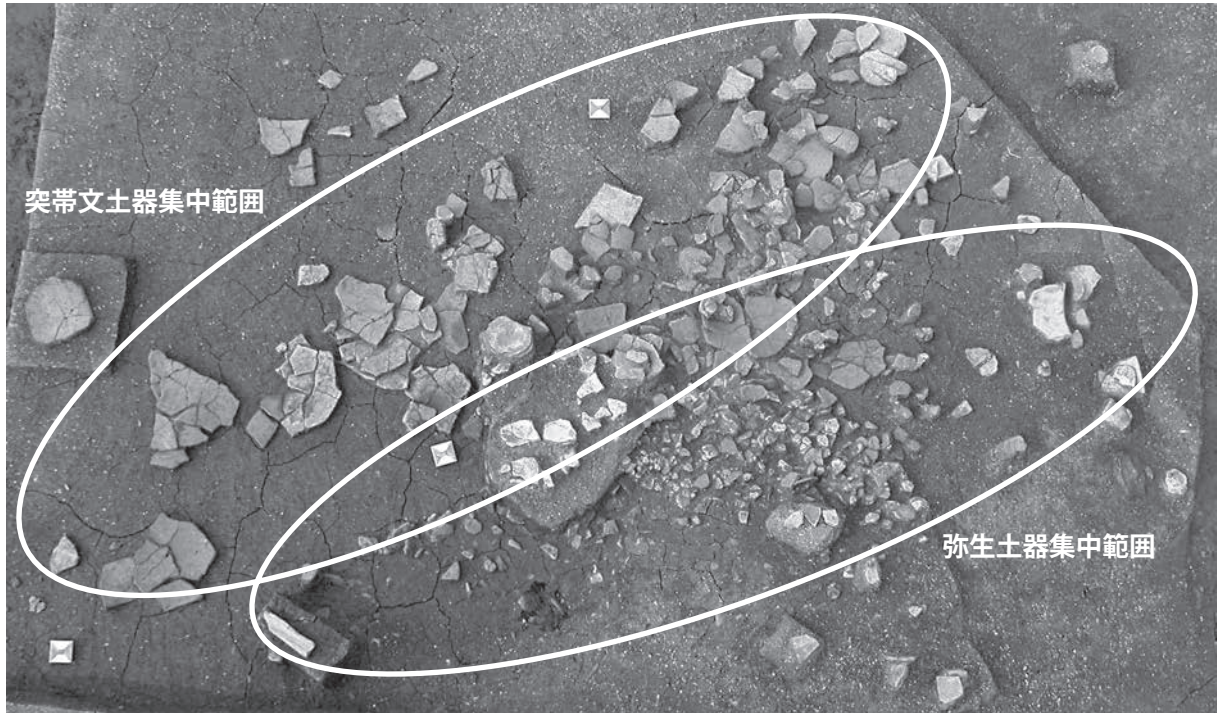


図 262 3-268 溝土器群 2 出土状況

帯文土器が溝の北肩に近く、弥生土器が溝の中央部に近い南側に、それぞれ帯状に分布する傾向が見出された(図 262)。また、突帯文土器が出土した溝北側については、1層の粘質が強くなるとの調査所見があり、出土分布に合致するように1層が細分できた可能性もある。さらに、同溝と周辺の遺構からの出土遺物については、突帯文土器の含有比のほかに図 354 に示したような、サヌカイト産地の比率の相違が確認されている。こうした状況も溝の埋没時期と過程に起因する可能性がある。

以上のように、改めて土器群 2 での両者の共伴関係を考えると、両者が異なる時期に溝内に埋没した可能性が浮上してくる。もちろん現場での詳細な調査や遺物の取り上げに基づく検討ではないため、最終的には不明とせざるを得ないものの、可能性として以上の検討結果を提示しておきたい。

#### ・土器群 2 の出土遺物

土器群 2 (上部) の出土遺物については図 263 ~ 265 に示した。縄文土器 (1 ~ 25) に関しては突帯文土器の深鉢が主体である。個体によりサイズ差が大きく、大型の製品が含まれるため、図 264 については掲載縮尺を 1 / 6 としている。11 はわずかに外反する口縁を持つ小型鉢である。器壁が薄い、図 273-20 と同様の資料と考えられる。両資料については、いずれも生駒西麓産胎土を持ち内傾接合の痕跡が見られるため、縄文土器として扱った。12 は直線的に開く口縁部からやや下がった位置に突帯を持つ。13 は球胴形に膨らんだ胴部から弱く屈曲して、やや内側に立ち上がる口頸部を持つ 1 条突帯の深鉢。土器群 5 から接合片が出土している。14 は 1 条突帯の浅鉢で、外面器表には粘土接合痕が明瞭に観察できる。接合単位は 2.0 ~ 2.2cm である。12 ~ 14 は突帯上に比較的是っきりした右 D 字刻目を持つが、15 の浅鉢は口縁端部に無刻み突帯を持つ。16 は 2 条突帯の深鉢で胴部と口頸部間が明瞭に屈曲するが、口頸部の内湾は弱い。胴部の外面器表には粘土接合痕が観察できる。19 は深鉢変容壺と考えられる。口縁部と胴部中ほど、底部を欠くものの、口縁部に 1 条の突帯を設け、最大径を胴部上方に持つ器形を復原した。肩部と胴部下半には成形時に付いたものと考えられる指頭圧痕が顕著に認められる。20 は鉢の底部であるが、板状の工具によって底部内面が粗くナデつけられている。

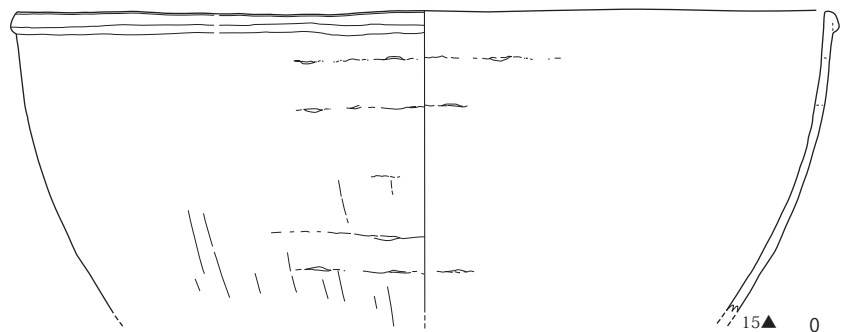
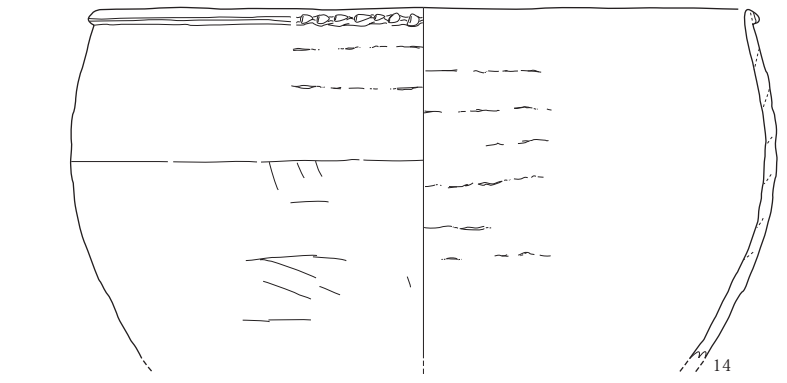
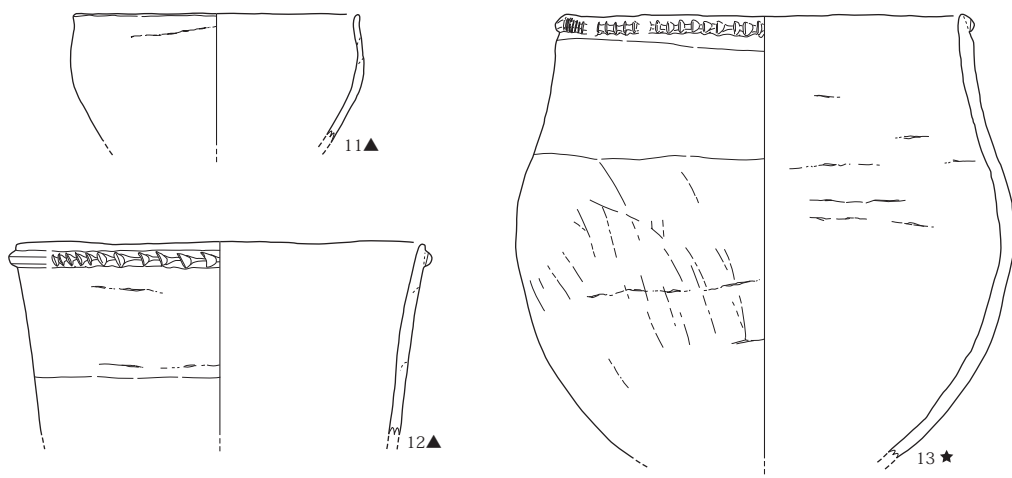
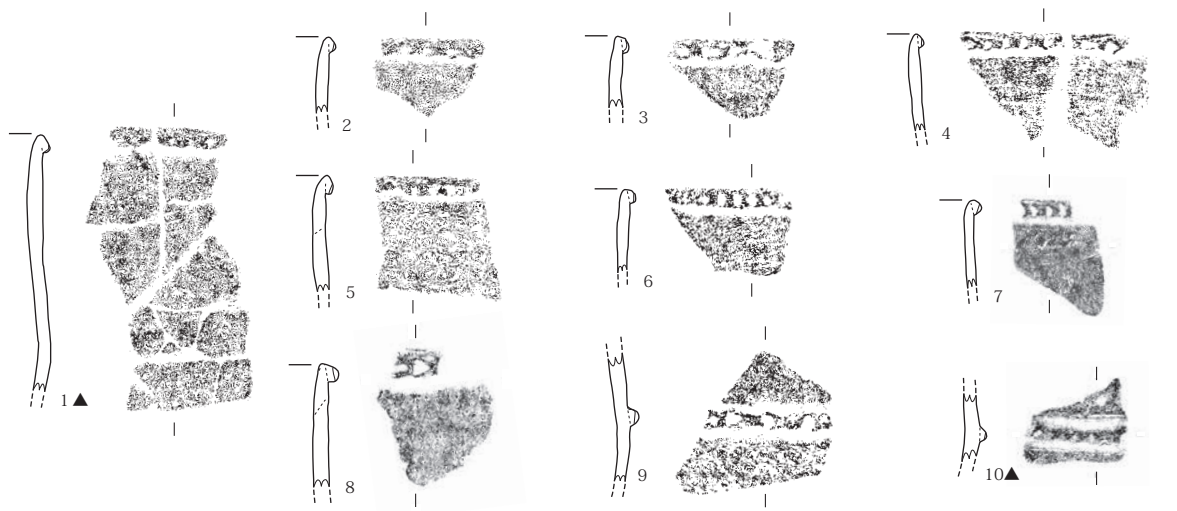


图 263 3-268 满土器群 2 (上部) 出土遺物実測図 1

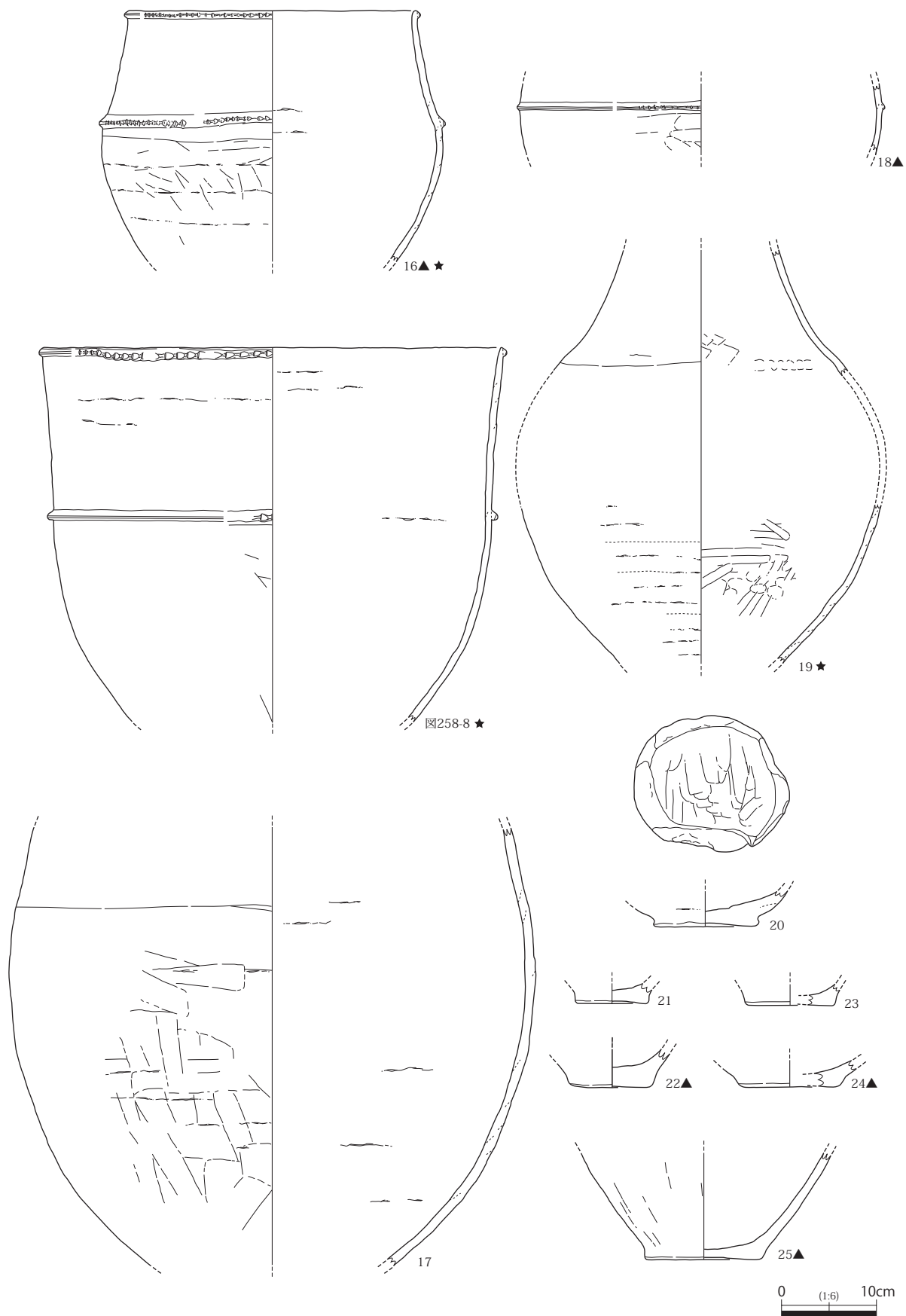


图 264 3-268 满土器群 2 (上部) 出土遺物実測図 2



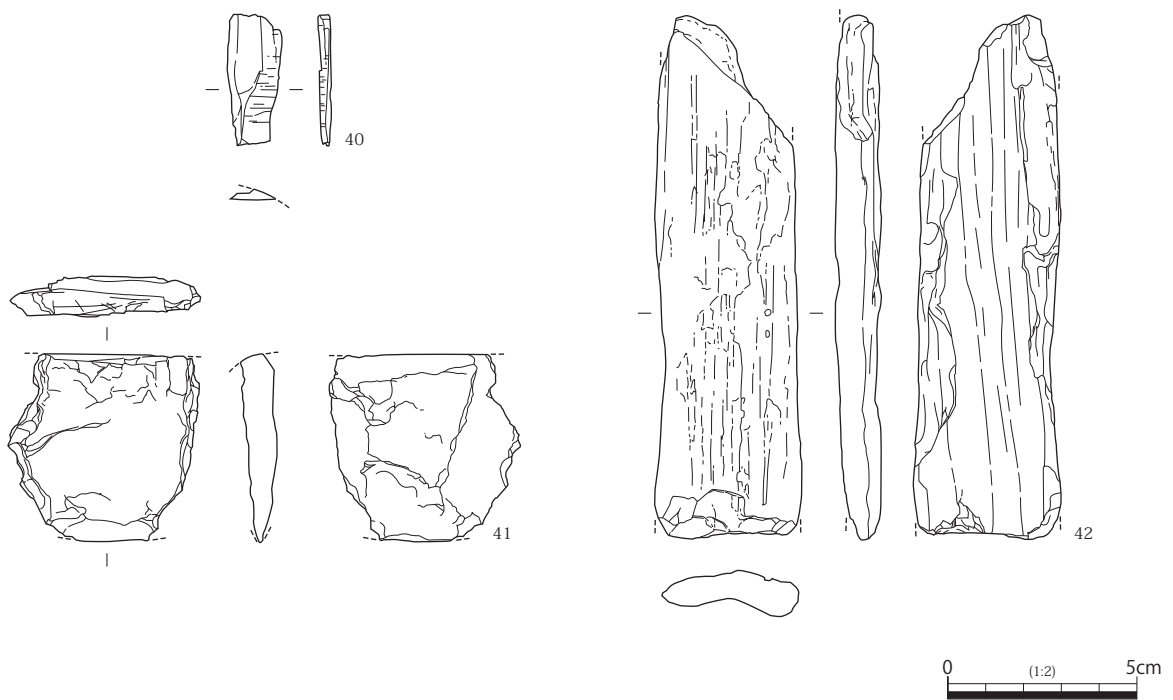
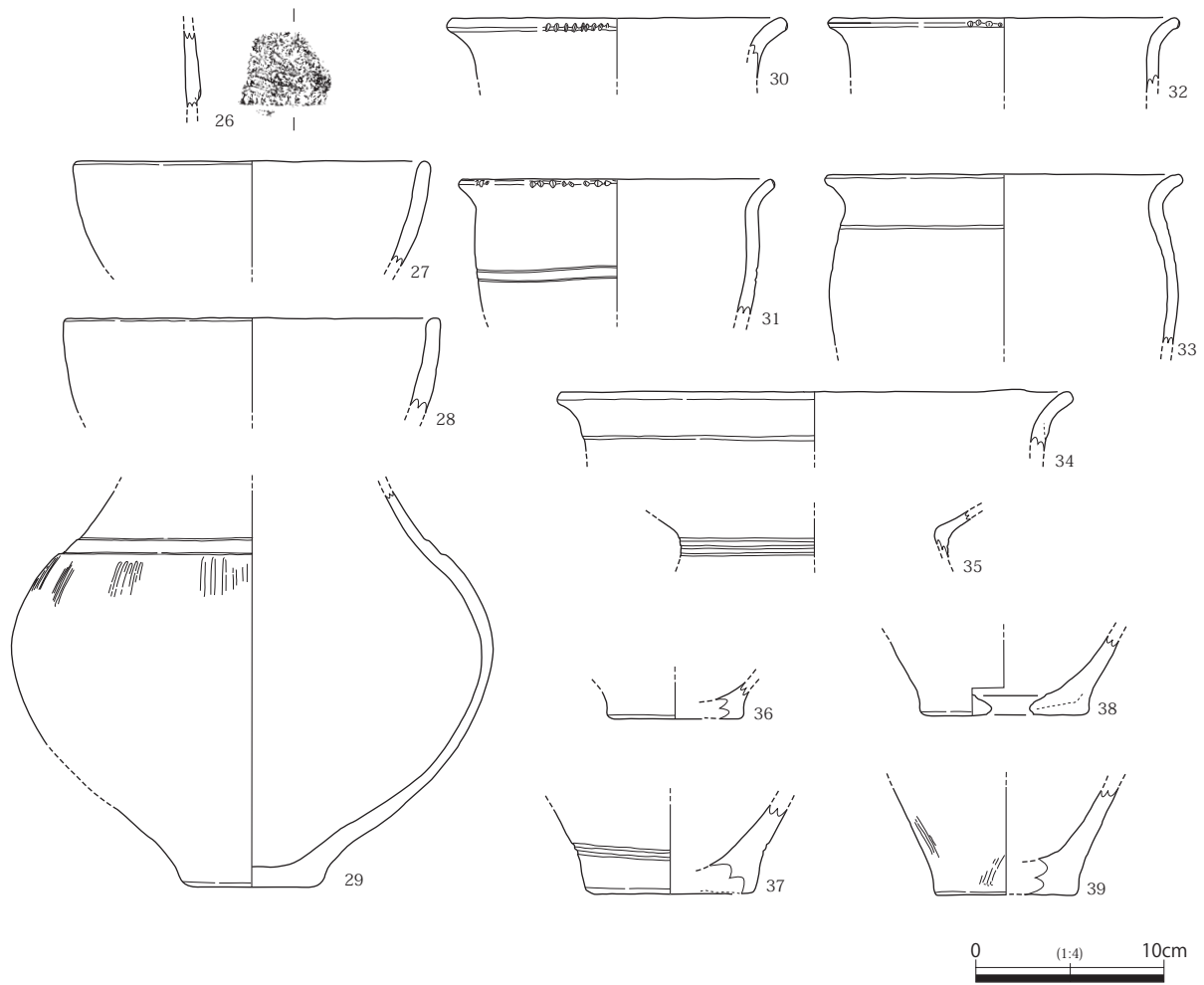


图 265 3-268 溝土器群 2 (上部) 出土遺物実測図 3

弥生土器は図化できた点数が少なく、図 265 (26 ~ 39) に示した。27・28 は高杯の口縁部と思われるが鉢の可能性も考えられる。端部を丸く収め、文様などは見られない。両者の形状・サイズは近似するが、28 の胎土には 3 mm 大までの長石や石英が目立ち、比較的精良な 27 とは相違する。また、28 は口縁部内面の広い範囲に黒斑が認められる。外面の口縁端部まで連続して付着するため、口縁部を下にして伏せた状態で焼成されたものであろうか。29 は壺で頸胴部境に 2 単位の段を持ち、肩部には 5 条一単位のミガキが縦線として施されている。こうした文様は他に例を見ず、胎土についても流紋

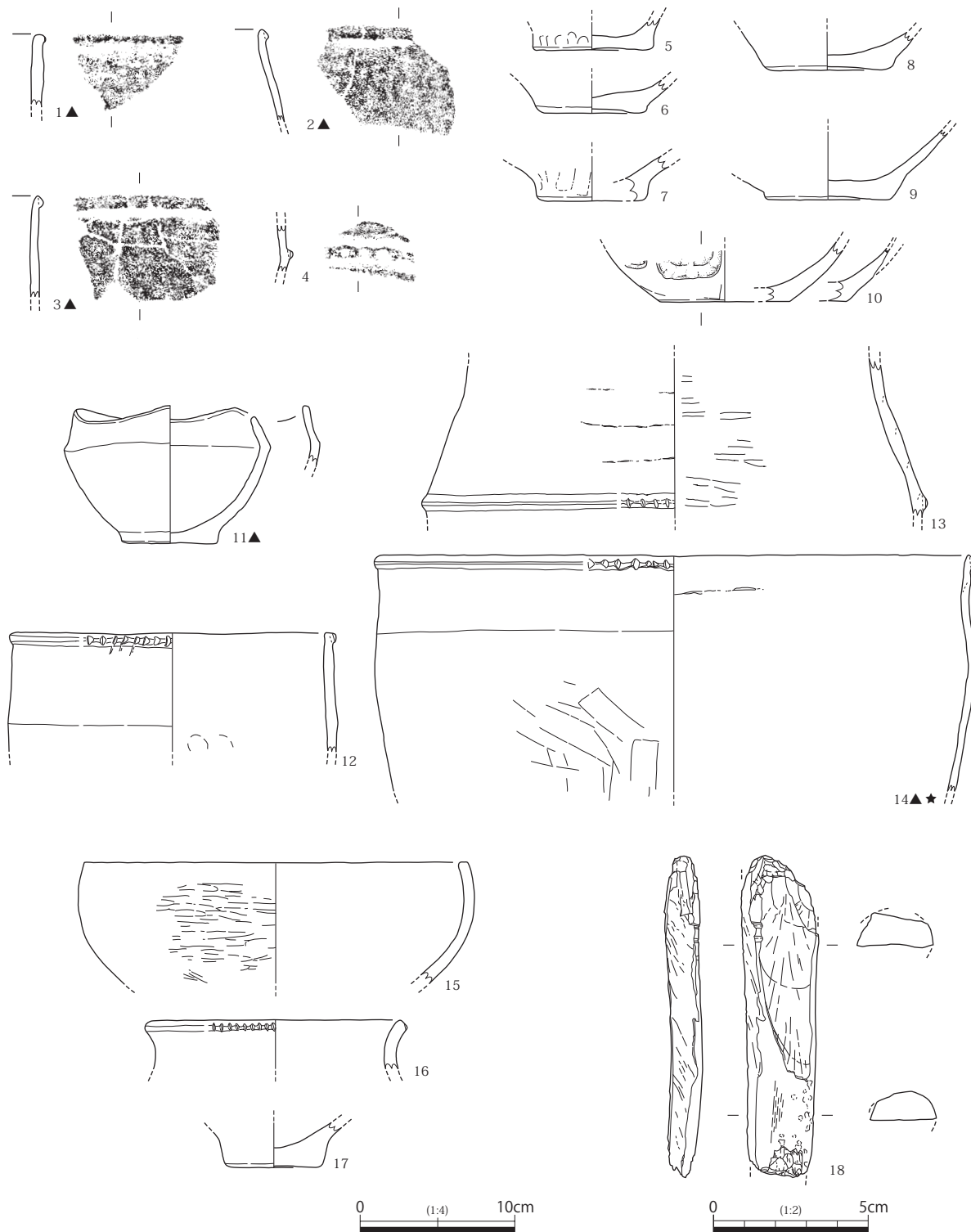


図 266 3-268 溝土器群 2 (下部) 出土遺物実測図

岩を含む白色系のものとなっていることから搬入品と考えられた。胎土分析の結果もこれを支持する。26は甕の胴部片だが、粘土紐接合部を利用して設けた段上に刻目を入れており、「刻目段甕」に類する資料と考えられる。30～34は甕の口縁部。口縁に刻目を入れるもの(30・31)と入れないもの(32～34)がある。31は、胴部上方に2条の沈線を入れる。第8b面東側遺構群の遺構から出土した甕において2条沈線のあるものは、図244-2、図297-5のみであるが、31の沈線は2条がほぼ正確に平行していることと、沈線部分の断面形状から半裁竹管を用いた一単位の施文と考えられる。なお、33にも1条の沈線が見られるが、こちらはヘラ状工具によるものである。34は頸部に段を持つ。35は壺の頸部であろうか。36～39は底部片。37は底部と胴部の境目に2条のヘラ描き沈線を施しており、壺の底部と考えられる。38は甕の底部で、底部の中心に一孔を持つ。孔は焼成後に外面から開けられている。

図265-40～42は石器。40は粘板岩系の細片であり、図266-18、図269-4、図277-104と近似

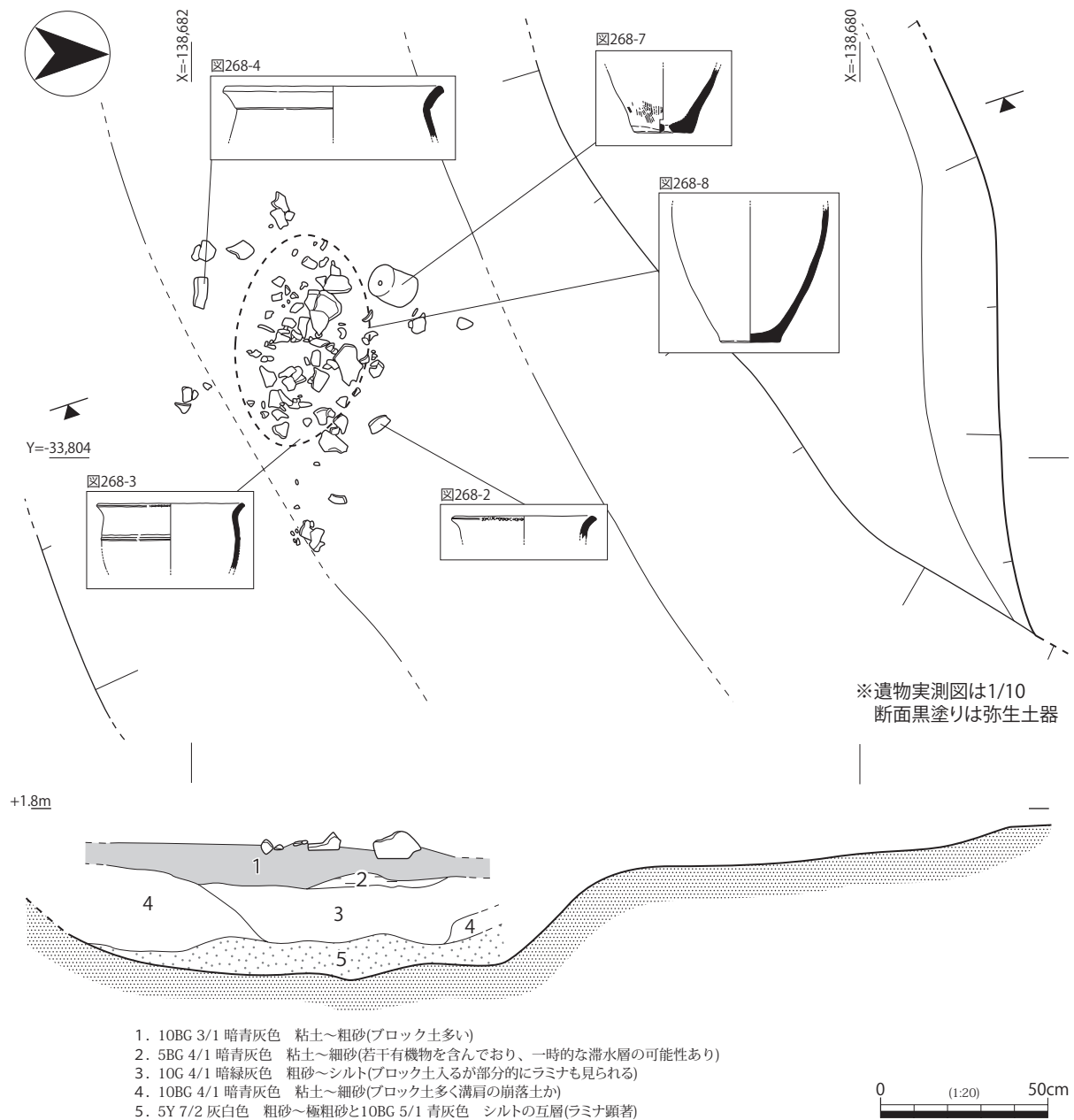


図267 3-267・268 溝土器群3 平面図および断面図

している。出土地点も全て 10 m 以内で近接しており、図 266-18 と同じような石棒の破片と考えられるが、細片に過ぎるため不明である。41 は破損が著しいが、石庖丁と考えられる。表面は剥離破損しており、背面の一部に磨かれた調整面が残る。図 277-104 と同じく粘板岩系の石材を使用しているが、厚さは 1 cm を超えるものと考えられる。42 は紅廉片岩の棒状片である。確実な調整面などはなく、どのような性格を持つものかは不明。石材産地は紀ノ川流域であろうか。重さは 78.38 g。

土器群 2 (下部) の出土遺物については、図 266 に示した。ここでも突帯文土器が主体となり、弥生土器は 3 点 (15 ~ 17) のみである。突帯は口縁端部に直接設けられているものが多く、〈土器群 2 上部〉で確認された様相と大差ない。底部片の中には、焼成破裂痕の可能性のある剥離痕跡を持つものがある (10)。11 は遺物群の最下層で正置した状態で出土した鉢で、サイズに比して器厚が厚い。胴部上半で屈曲して内傾する口頸部を持つ。口縁部は高さが揃わず波状口縁を示す可能性があるが、あまり明瞭ではない。13 は 2 条突帯の深鉢で、口頸部の外面器表には粘土接合痕が明瞭に観察できる。内面には工具によるナデがヨコ方向に施されているが、器表の剥落によりあまり明確ではない。

15 は弥生土器の鉢もしくは高杯か。外面には丁寧なヨコミガキが施される。16 は甕口縁部。方形に収めた口縁下端に刻目を入れる。18 は、粘板岩系の石材を使用した石棒である。直径約 2.2cm の小形品であるが被熱しており、そのためか表面の剥離破損が著しいが、わずかに残った調整面は丁寧に磨かれ、上方に 2 条の平行沈線が入れているのが確認できる。

土器群 3・4 (図 267: 図版 52-7 ~ 53-2) 3-267 溝と 3-268 溝の合流点から約 5 m 西方に位置する。ここでも遺物は最上層の 1 層からのみ出土する状況であるが、他の遺物集中部と異なりほぼ全てが弥生土器である点を特徴とする。土器群 3 の東方に近接する土器群 4 についても同様で、弥生土器片が少数出土しただけであり、図化できたものは図 268-1 の甕蓋のみであった。表 5、図 279 に示すように、当溝から出土する突帯文土器は多いとはいっても、溝全体の半数程度である。土器群 3・4 を除いた遺物集中部での図化可能遺物が突帯文土器ばかりであることは、土器群 2 で見たような埋没状況の相違に

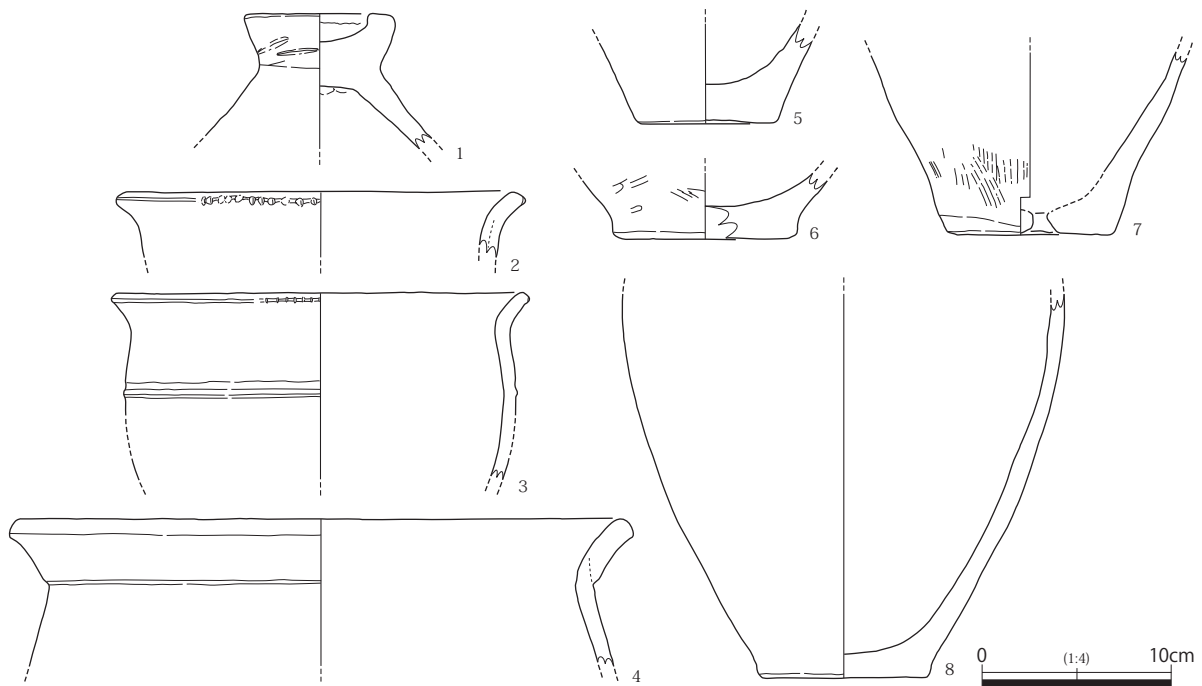


図 268 3-267・268 溝土器群 3・4 出土遺物実測図

起因するところが大きい。土器群3・4で比較的遺存状況のよい弥生土器が出土することは、ここでの弥生土器の遺棄・埋没が他の集中部と異なっていた可能性を示す。

土器群3・4の出土遺物は図268に示した。1は甕蓋で頂部は中実しない。頂部端は方形に収める。2・3は口縁端部に刻目を入れる甕である。3は胴部に貼り付けたような段を持つが磨耗が著しく刻目の有無は不明である。8と胎土やサイズが近似しており、同一個体の可能性が高い。4は壺の口縁部で頸部との境に段を成す。直線的で短い口縁部を持つ大型品。7は甕の底部である。底部の中心から少しずれた場所に一孔を持つ。孔は焼成後に開けられており、外面からの回転穿孔。

土器群5（図版53-3・4） 土器群2の東方に近接して位置する遺物集中部。土器群2ほどの遺物密

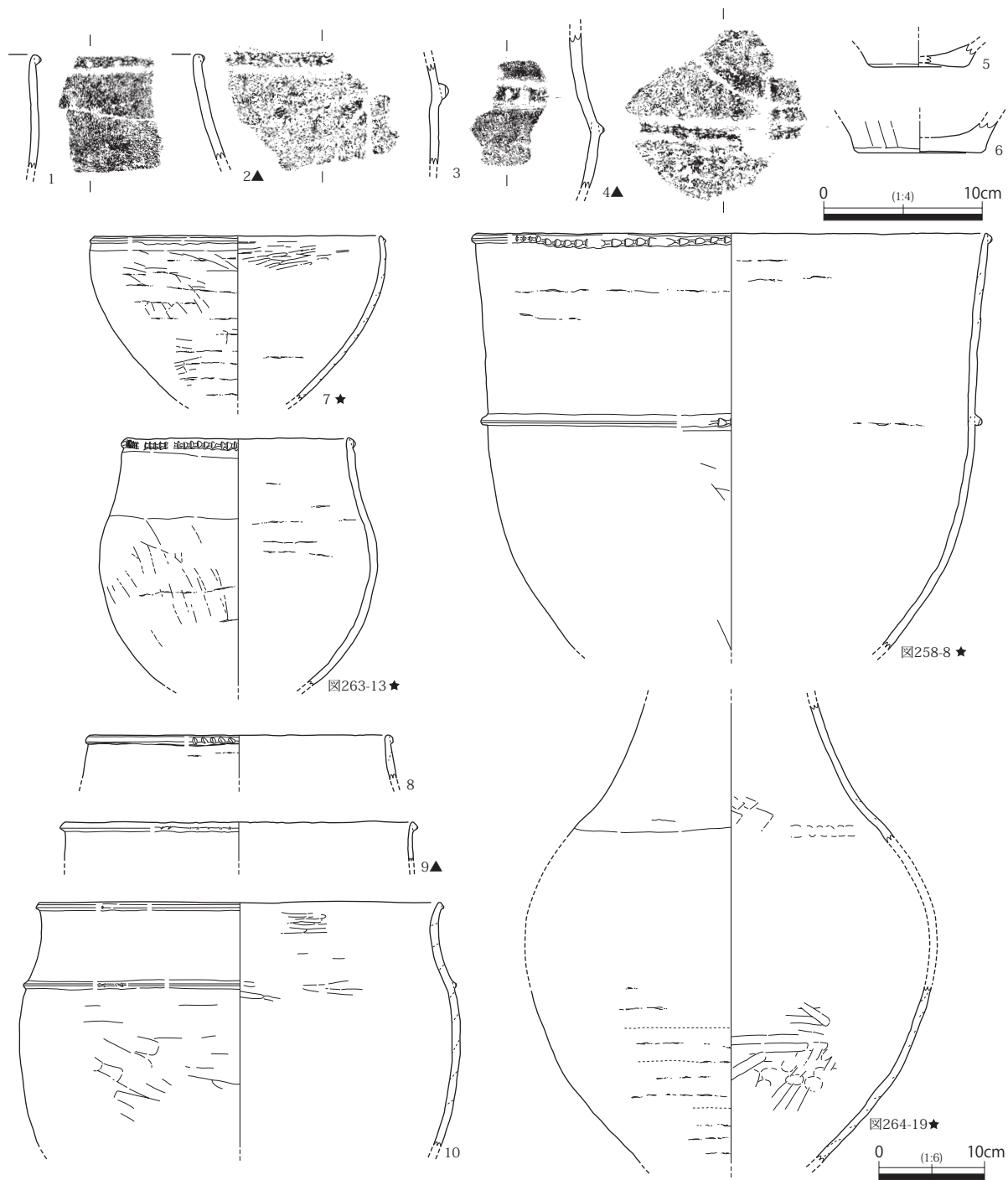


図269 3-267・268 溝土器群5 出土遺物実測図1

度はないが突帯文土器が主体となる点で共通する。図 269 には突帯文土器を示した。7 は口縁部からわずかに下がった位置に無刻みの突帯を 1 条持つ浅鉢。胴部下半の外面器表には粘土接合痕が明瞭に観察できる。口縁部内面にはへら状工具によるヨコ方向のナデが見られる。土器群 8 からも接合片が出土している。10 は 2 条突帯の深鉢。口頸部は屈曲部から外湾して伸びる。外面器表には粘土接合痕が確認でき、胴部上半の接合片の中には上下に剥離を持つ〈接合部剥離資料〉が含まれる。

図 270 には 1 点だけ図化できた弥生土器と、石器を示した。11 は弥生土器の甕底部と考えられる。12 は、頭部を欠損する石錐であるが欠損部は一部で打面調整される。錐部は先端に向かって細くなり磨耗している。13 はヒン岩もしくは輝緑岩の両刃石斧。刃部角 60 度、刃部幅で 5 cm、残存部の厚さ 3.2cm を測り、重さは 93.88 g。14 は粘板岩系の棒状片である。図 266-18 のように同種の石材を用いた石棒が出土していることから、石棒の可能性が考えられるが、断面形状が整っておらず表面調整も見られない。被熱痕跡などもなく、石棒とするには根拠に乏しい。

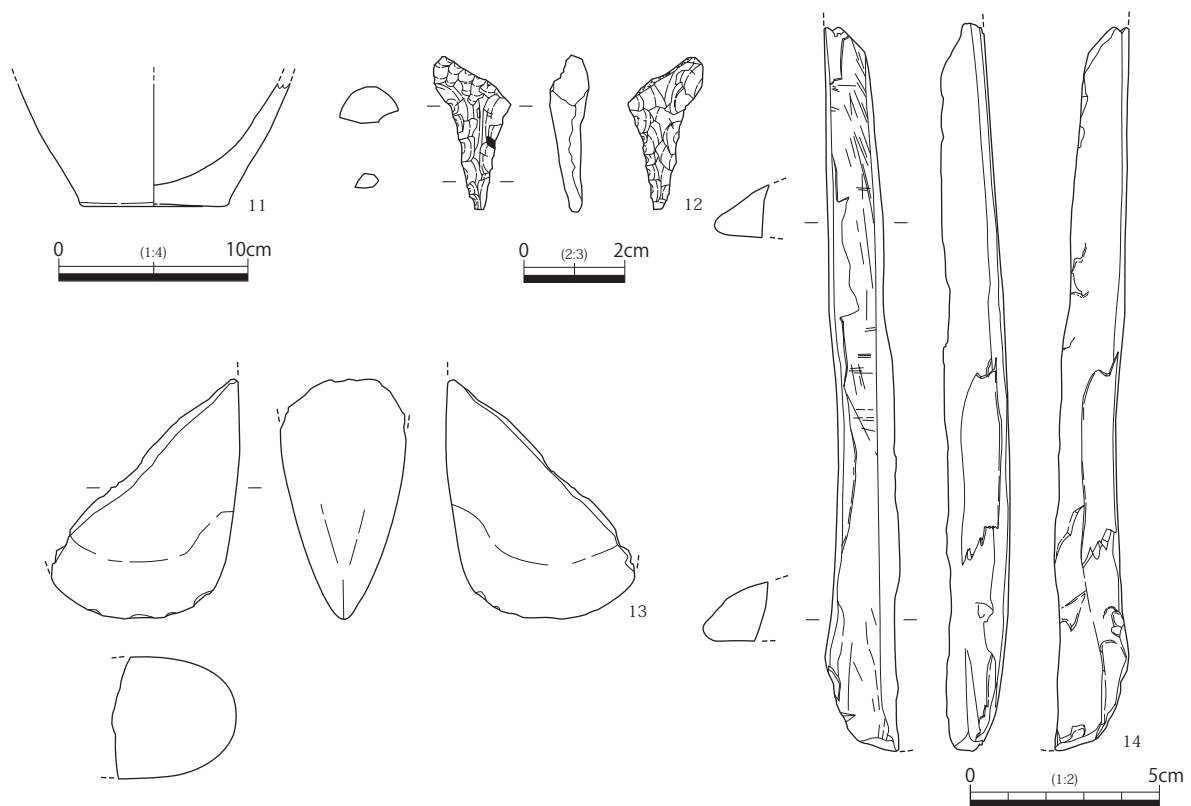


図 270 3-267・268 溝土器群 5 出土遺物実測図 2

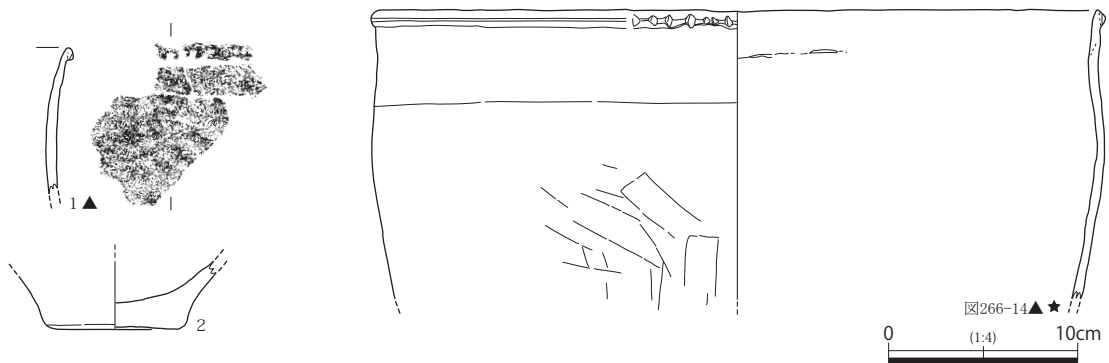


図 271 3-267・268 溝土器群 6 出土遺物実測図

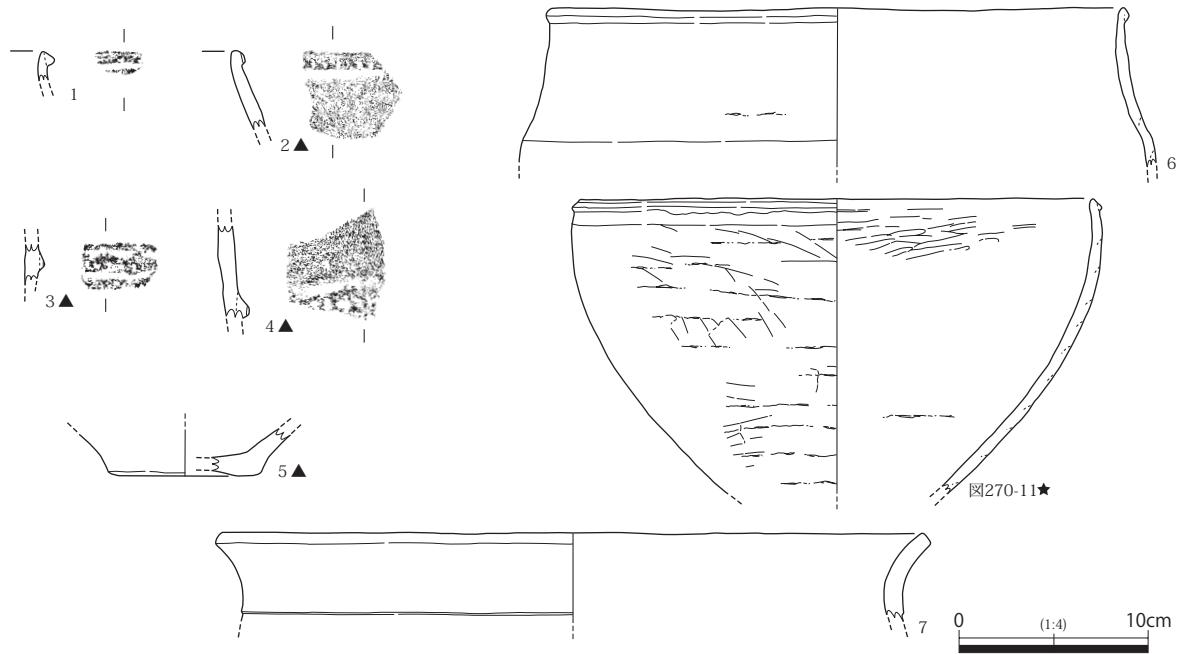


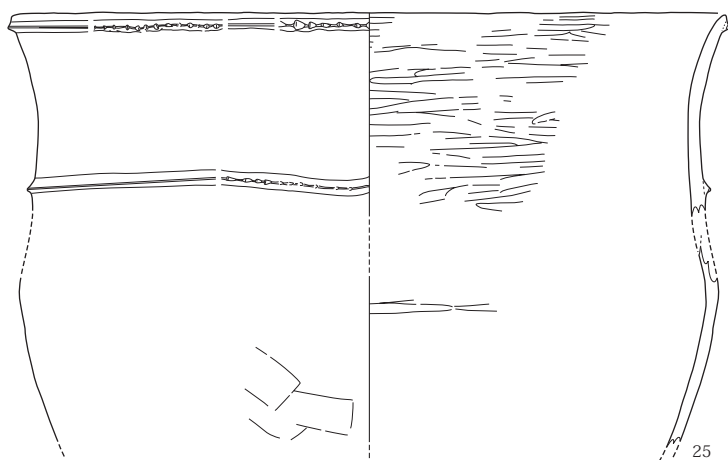
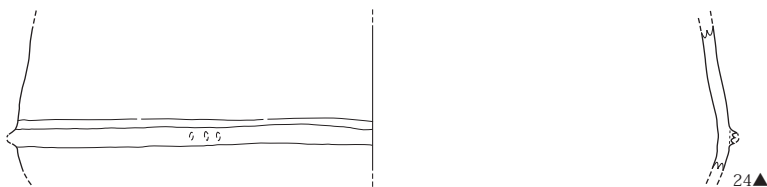
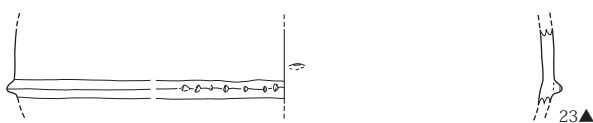
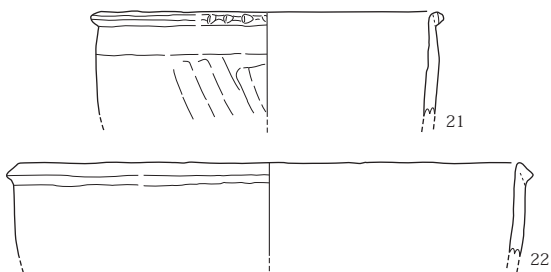
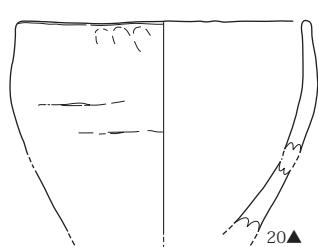
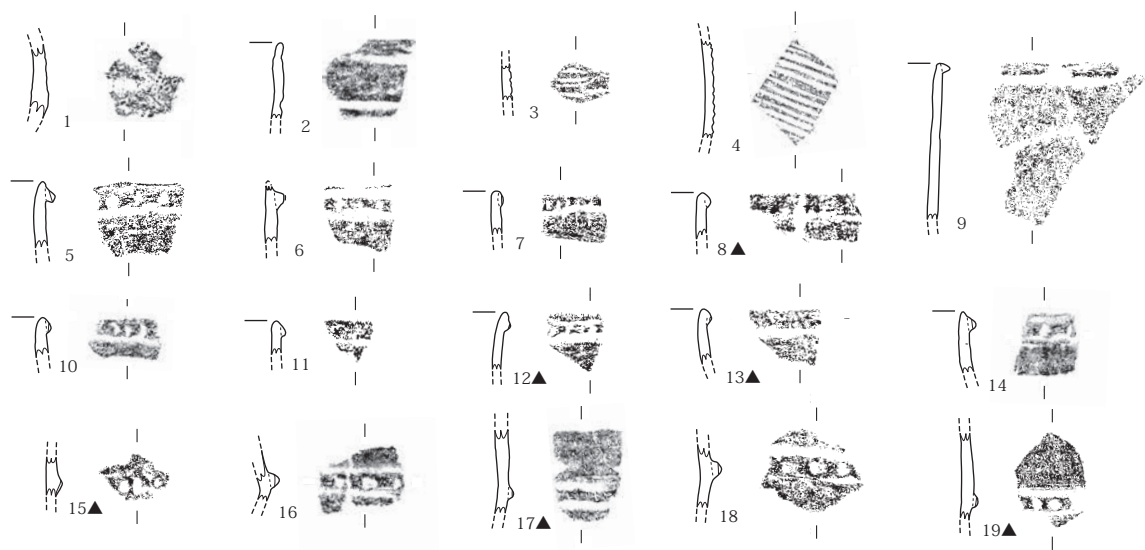
図 272 3-267・268 溝土器群 8 出土遺物実測図

**土器群 6** 土器群 2 の東方に近接して位置する遺物集中部。土器群 2 ほどの遺物密度はないが、突帯文土器がほとんどで、図化できた弥生土器はない。ただし、図 271-2 は底部のみの出土であり、胎土も突帯文土器の半数に特徴的な生駒西麓産のものではないため弥生土器の可能性を残す。

**土器 7 (図版 53-7)** 現地調査時には土器群として設定したが、出土した遺物が全て図 264-16 の突帯文深鉢の接合片であったため、土器 7 として再設定することとした (図 256)。同一個体の破片の遺棄には大きな時間差を想定しにくく、3-267 溝と 3-268 溝の同時開口を示す遺物といえよう。

**土器群 8 (図版 53-5・6)** 3-267 溝から 3-268 溝が分岐する位置で検出された。出土遺物は図 272 に示したが、ここでも図化できたものには突帯文土器が多く、弥生土器は 1 点のみ (7) である。6 は胴部の屈曲部からわずかに内傾して立ち上がる口縁部に、無刻みの突帯を 1 条持つ深鉢である。7 は弥生土器の鉢もしくは広口壺の口縁部である。頸部に作り出した段の場所で破損している。

**土器群以外の溝内出土遺物** 上記のような遺物集中部以外でも、溝の掘削中には多くの土器が出土している (図 273～277)。1～41 は縄文土器である。突帯文土器主体だが、1 は、沈線と刺突による円形の文様で飾っており、北白川 C 式と考えられる。2～4 も突帯文土器ではなく、後晩期の縄文土器と考えられる。第 1b～4b 層など砂礫を主体とした氾濫堆積物に同時期の遺物の混入が見られるため、これらについても上流の遺跡から流出・二次堆積した混入遺物と捉えられよう。5～19 は突帯の見られる口縁部もしくは胴部片である。5・6 など、口縁端部からわずかに下がった位置に突帯を設けるものもある。20 は図 263-11 と近似した器形を持つ鉢。ただし、こちらの方が器壁が厚い。内外面にコゲ・ススが見られ、煮沸調理に用いられた可能性がある。25 は 2 条突帯の深鉢。屈曲部から外湾して開く口縁部を持つ。口縁部の突帯は端部から垂れ下がって付き、下端部に弱い刻目を入れる。内面はヨコ方向に丁寧にミガキ調整される。胴部には粗いケズリが施され、〈接合部剥離資料〉が確認される。26～41 は突帯文土器のものと考えられる底部である。平底のものには、くぼみ底を持つもの (28・29・30) 丸みを帯びた平底を持つもの (26・31・34)、弱い台形状の底部を持つもの (33・36・39) など、いくつかのバリエーションが存在する。41 は唯一丸底となるが、器形は不明である。



0 (1:4) 10cm

图 273 3-267·268 沟 出土遗物实测图 1



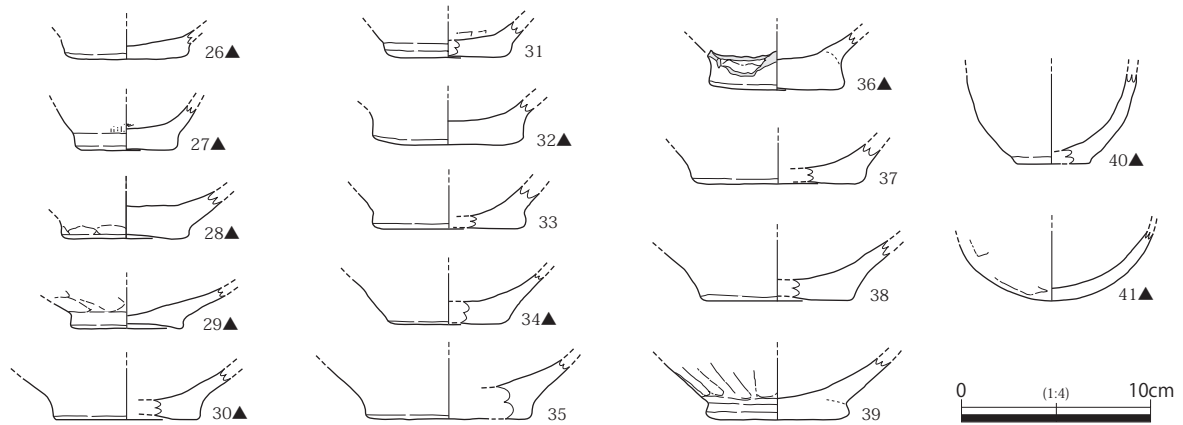


図 274 3-267・268 溝 出土遺物実測図 2

図 275-42 ~ 73 は弥生土器である。42・43、54 ~ 59 は甕。43 については不明だが、他はいずれも口縁端部に刻目を入れる。43 は胴部片であるが貼り付けたような低い突帯を持ち、その上に刻目を入れる。壺の可能性も考えられたが同様の施文はなく、刻目段甕に類する資料と考えられた。54 ~ 56 は頸部に段を設ける。54 は口縁の外反が弱い甕で、段部から下を欠損するが段上に刻目を入れる刻目段甕である。57 は最大径を胴部に持つ。44 ~ 53 は壺の胴部片など、文様が認められる部位について断面図と拓本で示した。44 は有軸の羽状文の上に木葉文を施している。45 は山形文か。46 は不明。47 は頸胴部境の段下部に大形の重弧文を描く。48 ~ 53 は突帯を持つ壺の肩部である。突帯幅は 0.6cm (48・49)、1.1cm (50・51)、2.1cm (52・53) の 3 種あり、52・53 の突帯上には斜格子文様が描かれている。48・49 は胎土・器厚が近似しており、同一個体と思われるが、出土地点は 40 m ほど離れている。また、包含層から出土した図 298-17 も同一個体の可能性が高い。60 ~ 63 は壺の口縁部。口頸部境に段を持つもの (60・63) と、持たないもの (61・62) に分かれる。特に 63 の段は明瞭で、直線的な口縁部の下に深い段が認められる。64 は壺の頸胴部である。頸胴部境に段を持ち、胴部には重弧文が描かれる。65 は壺・もしくは鉢の口縁だが残存部位が少なく不明。66 は鉢と考えられ、口縁部は頸部で屈曲して外方に開く。67 は高杯の口縁部と考えられるが、口縁端部からやや下がった内面に断面三角形の突帯を設ける。蓋受けであろうか。杯内部に突帯を持つ例は、東大阪市若江北遺跡にも見られる (大文セ 1996, 図 128-2)。68・69 は高杯の脚部か。69 は裾の広がった脚部を持つ。脚部内面にはしぼり痕が残る。70・71 はミニチュア土器。甕形であろうか。72 はおそらく鉢形の容器の底部で、平面形状は小判形を呈する。側面にはへら状工具による文様が描かれているが、残存部が少なく詳細は不明。当遺跡では他に類例のない奇異な土器ではあるが、胎土分析では在地性の高い胎土を使用していると判断された。73 は土錘。長軸方向に直径 0.8cm の紐通し孔を設ける。重さは 94.30 g。

図 276-74 ~ 94 も弥生土器で底部片。立ち上がりなどから考えて 74 ~ 83 は甕、84 ~ 94 は壺もしくは鉢だろうか。76 は内面器表が剥離しているが、中央に 1 孔を持つ。穿孔は焼成後に外面から回転穿孔され、断面形は三角形を呈する。78 は胴部下半との接合部が剥離して擬口縁を呈する。剥離面には指頭圧痕が観察できる。93 は内外面を丁寧にミガキ調整する。底部外面には舂圧痕が良好に観察される。胴部下半から底部端にかけて設置面黒斑が認められ、斜位にて焼成されたことを示す。94 は外面に沈線を 3 条巡らす。図 265-37 もそうだが、底部に巡らされる沈線は頸部や胴部に描かれている文様の沈線に比べ、やや太く深い傾向がある。成形途中での施文を示唆するものだろうか。

図 277-95 ~ 106 は石器。土器と同様に石棒や凹石などの縄文系石器と、石庖丁のような弥生系石

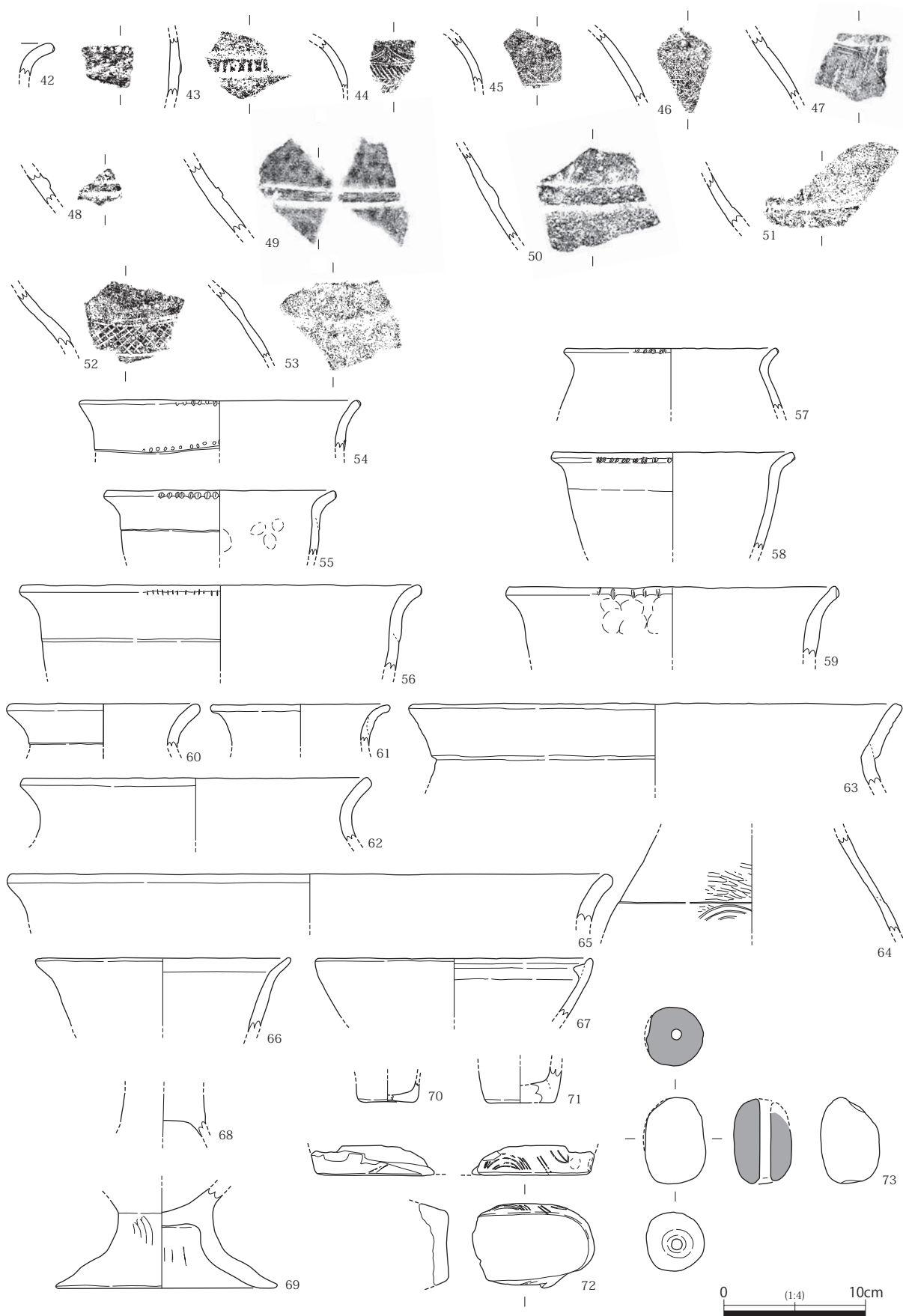


图 275 3-267·268 溝 出土遺物実測図 3

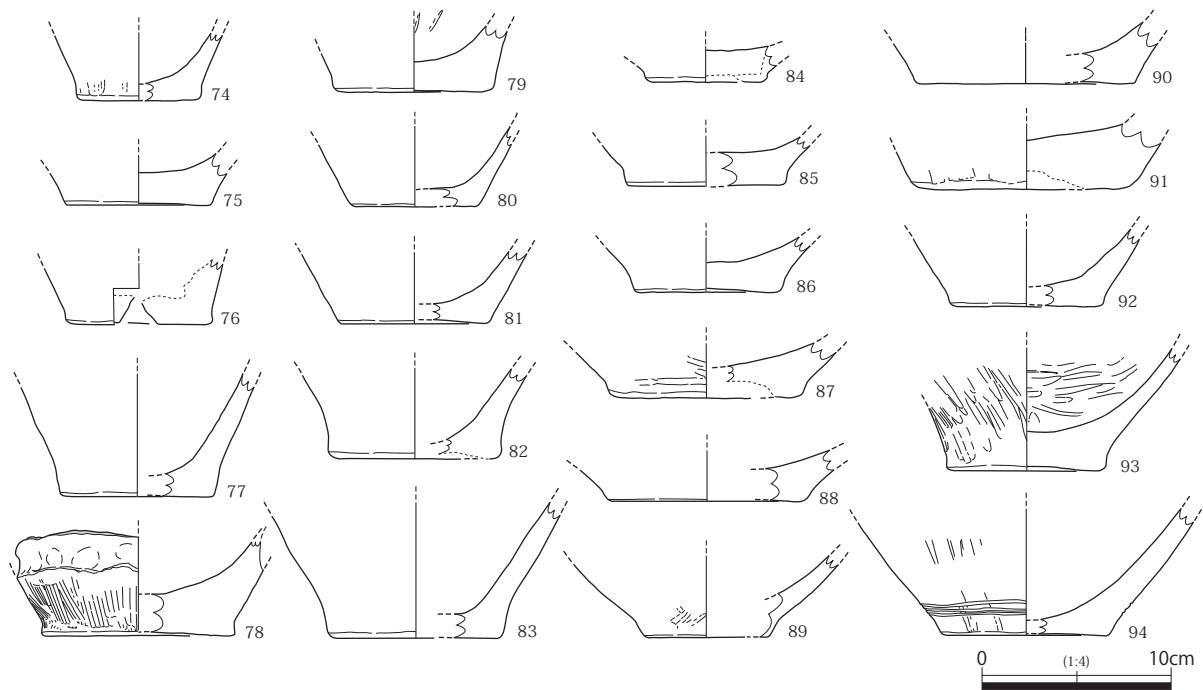


図 276 3-267・268 溝 出土遺物実測図 4

器が混在する。95～102はサヌカイトの打製石器で、産地は全て二上山産と判定された(第7章3節)。95は、抉りの弱い凹基式の石鏃で、両面とも丁寧に調整し素材面を残さない。重さは0.75g。96～101は楔形石器およびその剥片。102は剥片であるが部分的に二次加工が認められる。103は、凹石。深い研磨痕や、側面には打痕が多く認められ、砥石や敲石として用いられていたようである。104は、粘板岩系の石材で作られた石庖丁である。有側で直線的な刃部と弱く湾曲した背部を持ち、厚さ2mmと非常に薄い。表面は丁寧に磨かれており、刃部は両刃の可能性があるが、一部で欠損している上、刃部が薄いため明瞭でない。穿孔間隔は1.8mmを測り、両側から丁寧に開けられている。105は、267溝から出土した白色の石英片である。表面に擦痕が認められ、石器素材と考えられるが、3方を欠損しているため不明。106は、粘板岩系の棒状片である。破損が著しいが、調整面が丁寧に磨かれ被熱している(破損部にも被熱痕が見られる)ことから、図266-18と同じく石棒である可能性が考えられる。

表 6 3-267・268 溝出土縄文土器胎土別数量

	突帯文土器	その他
生駒西麓産胎土	42	3
非生駒西麓産胎土	56	4

※ただし、実測遺物のみ計数

#### ・突帯文土器の胎土の相違と施文

以上では、土器群とそれ以外の出土遺物を概観した。当溝で出土する突帯文土器は図化できた遺物の半数程度を占めており、他の遺構に比べ突出した数量である。これらの突帯文土器は、器形や突帯数、突帯の付設位置、刻目の形状など多様な様相を示す。その中で注意されるのが、河内平野で頻出し、多くの遺跡でその主体を占める生駒西麓胎土を持つ突帯文土器が半数程度しかないことである(表6)。

そこで出土した突帯文土器のうち、突帯を持つ口縁部もしくは胴部片について、生駒西麓胎土と、それ以外の胎土(非生駒西麓胎土)に分け、諸属性を整理した(表7)。突帯数については、破片が多く含まれるため不明な部分が多く、明確な傾向などは抽出できなかったが、突帯上の刻目について、多様な形状の中に一定の傾向が認められたため、〈刻目なし〉、〈弱い刻目〉、〈強い刻目〉に3分類し、胎土別にその量比を見た。図278はその結果をグラフ化したものだが、胎土による刻目の相違が顕著に看取できる。すなわち、生駒西麓胎土においては弱い刻目が多く全体の半数を占めるのに対し、強い刻目

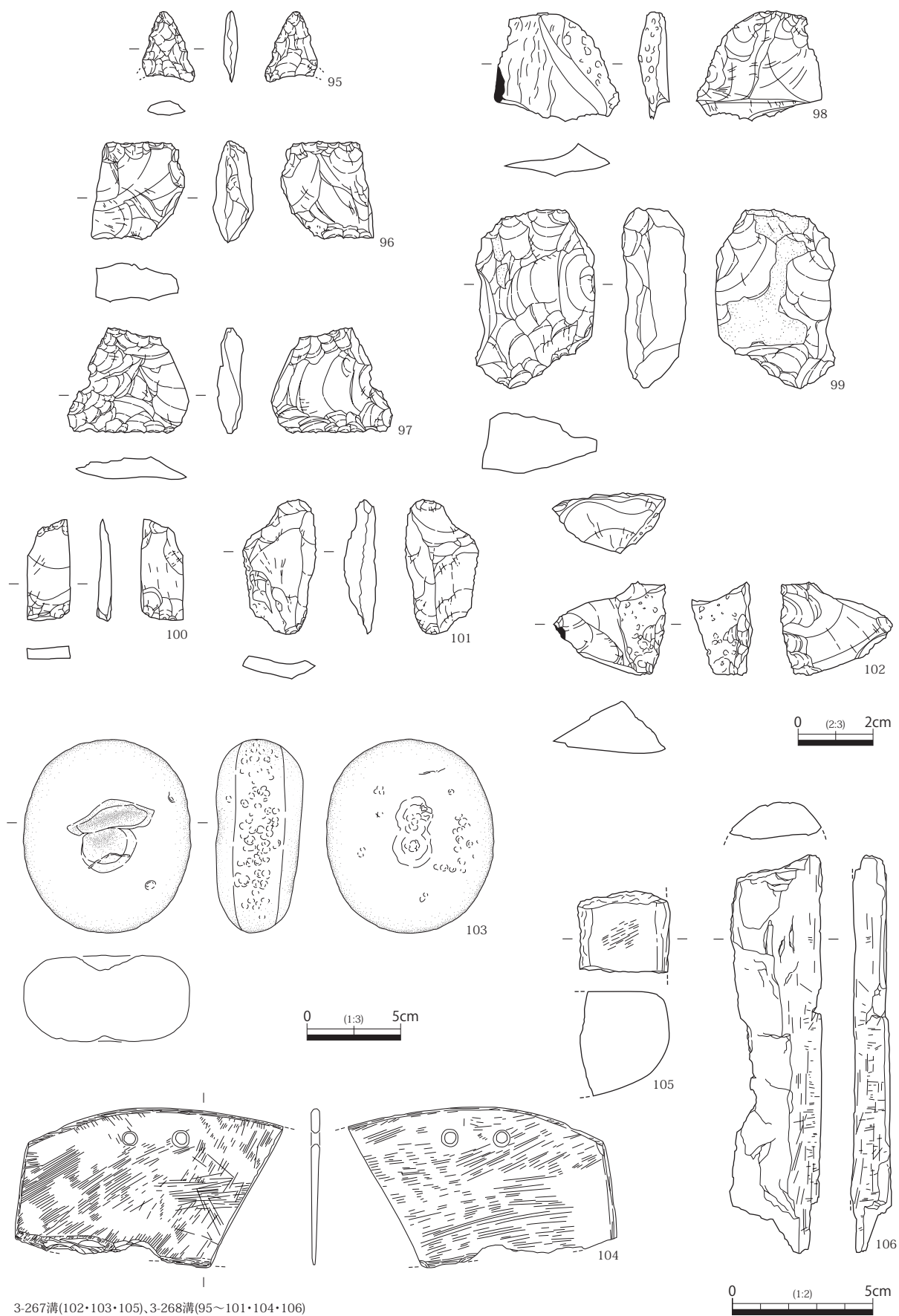


图 277 3-267·268 溝 出土遺物実測図 5

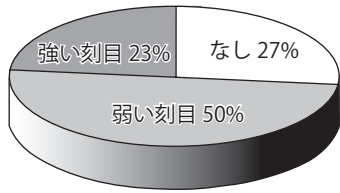
表7 突帯文土器諸属性表

No.	図番号	出土地点	土器群	器種	部位	胎土	突帯	突帯幅(mm)	刻目
1	258-7	18G8h	土器群 1	浅鉢	口縁部~胴部	生駒	1条	10	なし
2	266-1	18G9h	土器群 2 下層	深鉢	口縁部	生駒	1条or 2条	6	なし
3	266-2	18G9h	土器群 2 下層	深鉢	口縁部	生駒	1条or 2条	8	なし
4	266-3	18G9h	土器群 2 下層	深鉢	口縁部	生駒	1条or 2条	8	なし
5	263-15	18G9h	土器群 2 下層	浅鉢	口縁部~胴部	生駒	1条	11	なし
6	273-13	18G8h		深鉢	口縁部	生駒	1条or 2条	9	なし
7	273-8	18G9h		深鉢	口縁部	生駒	1条or 2条	8	なし
8	273-17	19G1i		深鉢	胴部	生駒	2条	7	弱いV字
9	263-10	18G9h	土器群 2	深鉢	胴部	生駒	2条	9	弱いO字
10	271-1	18G9h	土器群 6	深鉢	口縁部	生駒	1条or 2条	8	弱い右D字
11	263-1	18G9h	土器群 2	深鉢	口縁部~胴部	生駒	1条	8	弱いO字
12	270-13	18G9h	土器群 5	深鉢	口縁部	生駒	1条or 2条	8	弱いO字
13	270-8	18G9h	土器群 5	深鉢	胴部	生駒	2条	9	弱いO字
14	273-24	18G7h		深鉢	胴部	生駒	2条	10	弱いO字
15	266-14	18G9h 18G9h	土器群 2 下層 土器群 6	深鉢	口縁部~胴部	生駒	1条	9	弱い右D字
16	264-18	18G9h	土器群 2	深鉢	胴部	生駒	2条	7	弱い右D字
17	272-2	18G8h	土器群 8	深鉢	口縁部	生駒	1条or 2条	7	弱い右D字
18	272-3	18G8h	土器群 8	深鉢	胴部	生駒	2条	10	弱い右D字
19	272-4	18G8h	土器群 8	深鉢	胴部	生駒	2条	12	弱い右D字
20	273-12	18G9h		深鉢	口縁部	生駒	1条or 2条	9	弱い右D字
21	273-15	18G8h		深鉢	胴部	生駒	2条	11	O字
22	270-6	18G9h	土器群 5	深鉢	口縁部	生駒	1条or 2条	7	V字
23	273-23	18G9h		深鉢	胴部	生駒	2条	8	V字
24	264-16	18G9h 18G9i	土器群 2 土器群 7	深鉢	口縁部~胴部	生駒	2条	12	右D字
25	273-19	18G8h		深鉢	胴部	生駒	2条	8	右D字
26	263-12	18G9h	土器群 2	深鉢	口縁部~胴部	生駒	1条	9	右D字 (斜V字)

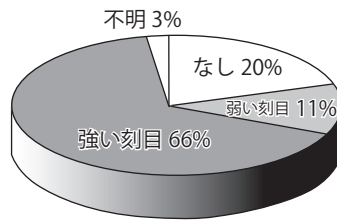
27	264-17	18G9h	土器群 2	深鉢	胴部	非生駒	1条		不明
28	270-5	18G9h	土器群 5	深鉢	口縁部	非生駒	1条or 2条	6	なし
29	273-22	18G7h		深鉢	口縁部	非生駒	1条or 2条	8	なし
30	270-11	18G9h 18G8h	土器群 5 土器群 8	浅鉢	口縁部~胴部	非生駒	1条	6	なし
31	272-1	18G8h	土器群 8	深鉢	口縁部	非生駒	1条or 2条	8	なし
32	272-6	18G8h	土器群 8	深鉢	口縁部~胴部	非生駒	1条	7	なし
33	273-11	18G9h		深鉢	口縁部	非生駒	1条or 2条	7	なし
34	273-9	18G9h		深鉢	口縁部	非生駒	1条or 2条	6	なし
35	263-5	18G9h	土器群 2	深鉢	口縁部	非生駒	1条or 2条	10	弱い右D字
36	263-2	18G9h	土器群 2	深鉢	口縁部	非生駒	1条or 2条	9	弱い右D字
37	273-25	18G9h		深鉢	口縁部~胴部	非生駒	2条	8	弱い右D字
38	273-6	18G9h		深鉢	口縁部	非生駒	1条or 2条	10	弱い右D字
39	258-1	18G8h	土器群 1	深鉢	口縁部	非生駒	1条or 2条	10	O字
40	270-14	18G9h	土器群 5	深鉢	口縁部~胴部	非生駒	2条	7	O字
41	263-6	18G9h	土器群 2	深鉢	口縁部	非生駒	1条or 2条	9	開V字
42	266-13	18G9h	土器群 2	深鉢	胴部	非生駒	2条	9	開V字
43	270-12	18G9h	土器群 5	深鉢	口縁部	非生駒	1条or 2条	9	開V字
44	258-8	18G8h 18G9h	土器群 1 土器群 2	深鉢	口縁部~胴部	非生駒	2条	11	右D字
45	263-14	18G9h	土器群 2	深鉢	口縁部~胴部	非生駒	1条	8	右D字
46	263-3	18G9h	土器群 2	深鉢	口縁部	非生駒	1条or 2条	10	右D字
47	263-4	18G9h	土器群 2	深鉢	口縁部	非生駒	1条or 2条	8	右D字
48	263-8	18G9h	土器群 2	深鉢	口縁部	非生駒	1条or 2条	10	右D字
49	263-9	18G9h	土器群 2	深鉢	胴部	非生駒	2条	10	右D字
50	266-4	18G9h	土器群 2 下層	深鉢	胴部	非生駒	2条	9	右D字
51	270-7	18G9h	土器群 5	深鉢	口縁部	非生駒	2条	11	右D字
52	273-10	18G9h		深鉢	口縁部	非生駒	1条or 2条	10	右D字
53	273-5	18G8h		深鉢	口縁部	非生駒	1条or 2条	10	右D字
54	273-14	18G7h		深鉢	口縁部	非生駒	1条or 2条	9	右D字
55	273-16	18G9h		深鉢	口縁部	非生駒	2条	10	右D字
56	273-21	18G9h		深鉢	口縁部~胴部	非生駒	1条	7	右D字
57	273-18	18G8h		深鉢	胴部	非生駒	2条	10	右D字
58	266-12	18G9h	土器群 2 下層	深鉢	口縁部~胴部	非生駒	1条	8	右D字 (斜V字)
59	263-13	18G9h	土器群 2 土器群 5	深鉢	口縁部~胴部	非生駒	1条	9	右D字 (斜V字)
60	273-7	18G9h		深鉢	口縁部	非生駒	1条or 2条	9	右D字 (斜V字)
61	263-7	18G9h	土器群 2	深鉢	口縁部	非生駒	1条or 2条	9	右D字 (斜V字)

※No. のアミカケは図 278 の表・グラフの各属性に対応

生駒西麓胎土の刻目



非生駒西麓胎土の刻目



	生駒	非生駒
なし	7	7
弱い刻目	13	4
強い刻目	6	23
不明	0	1

図 278 刻目形状の比率分布

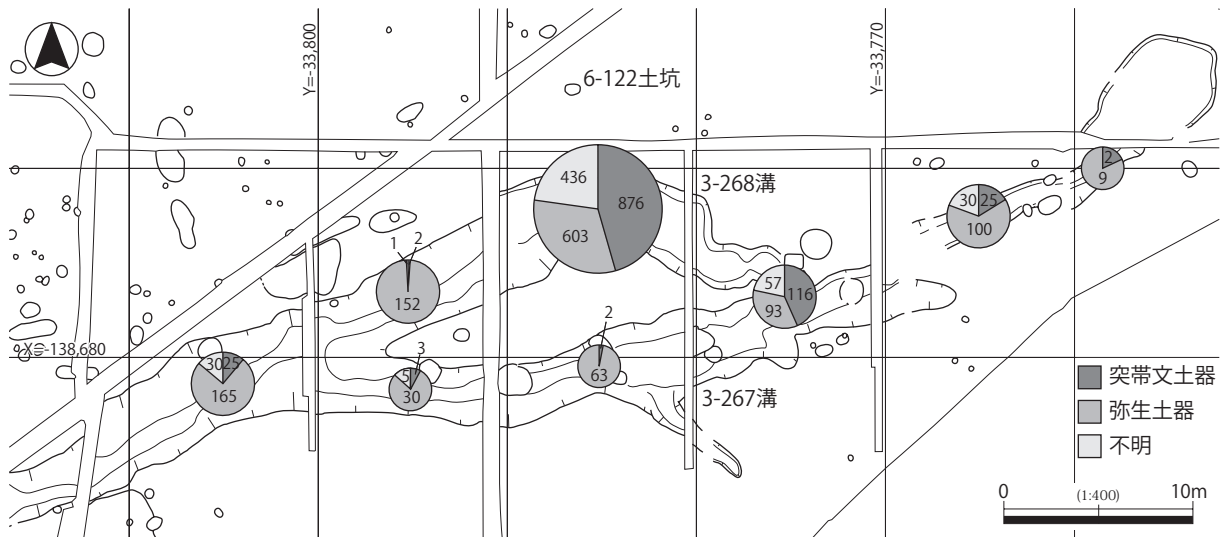


図 279 3-267・268 溝出土土器片 時代別数量分布

は2割程度と低率だが、非生駒西麓胎土については強い刻目が7割近くを占める。このような胎土による文様の相違は、土器の製作単位や集団に関わる可能性があるが、大阪市長原遺跡を始めとする中河内地域に比べ、当遺跡の位置する北河内地域では、同時期の遺跡調査や遺物の出土が少ない。周辺地域での類例の増加を待って再検討を行う必要がある。

#### ・出土遺物の時代別量比

第8b面で出土した突帯文土器の約9割が、3-267・268溝からのものであることは先に述べた。そこで、これらの土器が溝内でどのように分布するのか検討を行った。図279は、図化不能な土器片について計数し、弥生土器と突帯文土器の量比を10mごとの遺物取り上げグリッドでグラフ化したものである（明らかに接合する資料については1点として数えている）。これで見ると、突帯文土器の出土に偏りがあることが分かる。3-268溝の中央部（土器群2・5・6が位置する）と3-267・268溝の分岐点付近（土器群1・8が位置する）では、突帯文土器の出土が5割近いものの、それ以外の地点ではむしろ突帯文土器の比率は低く、弥生土器の数量が卓越しているところがほとんどである。つまり突帯文土器は、3-267・268溝の分岐点から3-268溝の中ほどの範囲に集中的に遺棄されたといえよう。この突帯文土器の集中が意味するところについては不明であるが、突帯文土器の土器棺墓として後述する6-122土坑が、3-268溝の北側に位置していることには注意される。いずれにせよ、突帯文土器の3-267・268溝での集中出土と溝内での偏在からは、検出された集落内で突帯文土器と弥生土器が通有的に並存していた状況を考えにくい。

#### ・3-267・268 溝埋没後に掘削された遺構

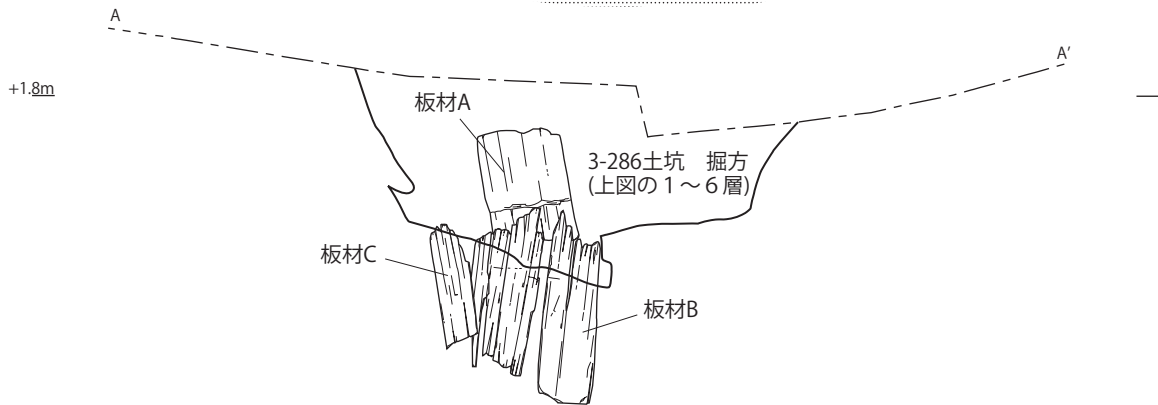
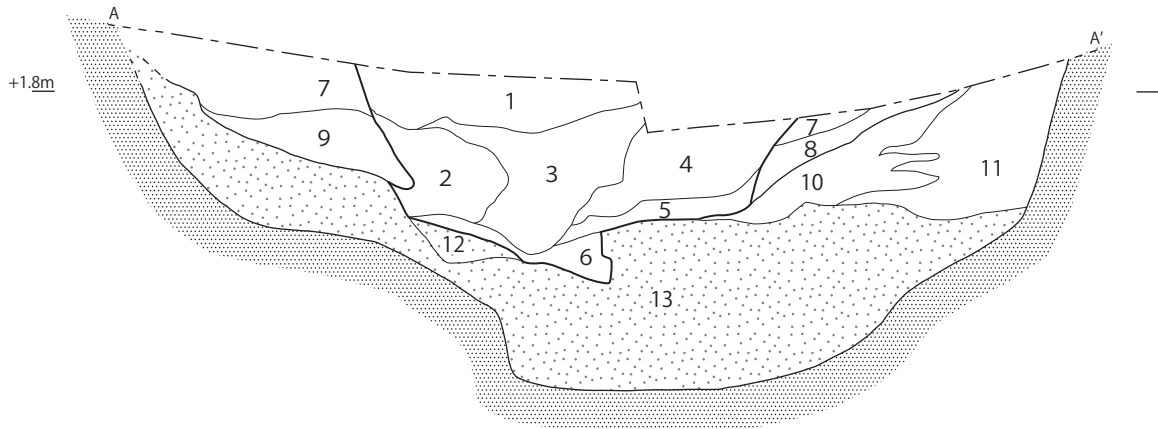
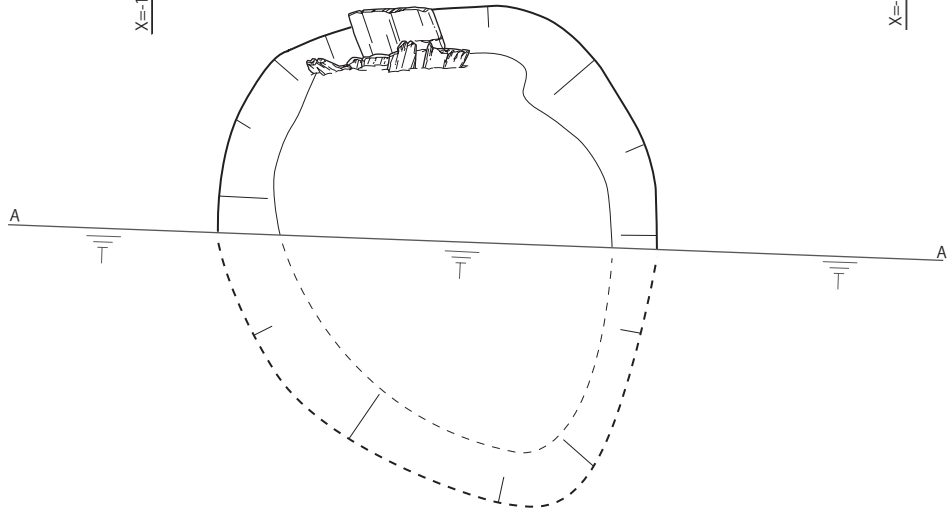
当遺構面の遺構には切り合い関係が少ないものの、いくつかの遺構が3-267・268溝の埋没後に掘



Y=-33,787

X=-138,673

X=-138,671



- |            |     |                            |   |
|------------|-----|----------------------------|---|
| 3-286土坑埋土  | 1.  | 10GY 3/1 暗緑灰色              | 細砂混じり粘土(第8b層がブロック状に混じる)                   |
|            | 2.  | 5Y 8/1~7/1 灰白色             | 細砂~シルト(土壌化した第8b層がブロック状に混じる。炭化物含む)         |
|            | 3.  | 7.5GY 3/1 暗緑灰色             | 粗砂混じり粘土~シルト(植物遺体を多く。木製品を含む遺物のほとんどが当層から出土) |
|            | 4.  | 10G 3/1 暗緑灰色               | 粘土~粗砂(部分的に炭化物および土器の細片を多く含む)               |
|            | 5.  | 7.5GY 4/1 暗緑灰色             | 粗砂混じりシルト~粘土(植物遺体を多く含む。部分的に炭化物を多く含む)       |
|            | 6.  | 7.5GY 4/1 暗緑灰色             | 粗砂混じり粘土(炭化物を含む)                           |
| 3-268溝上層埋土 | 7.  | 10GY 4/1 暗緑灰色              | 細砂~粗砂(遺物およびブロック土を多く含む)                    |
|            | 8.  | 10GY 4/1 暗緑灰色              | 粗砂混じり粘土                                   |
| 3-268溝下層埋土 | 9.  | 10G 4/1 暗緑灰色               | 粘土~粗砂                                     |
|            | 10. | 5Y 8/1 灰白色                 | 細砂~シルト                                    |
|            | 11. | 10G 4/1 暗緑灰色               | 粗砂混じり粘土                                   |
|            | 12. | 10GY 5/1 緑灰色~2.5GY 8/1 灰白色 | シルト~粗砂(ラミナ顕著)                             |
|            | 13. | 5Y 8/2 灰白色                 | 極粗砂~粗砂(上方細粒化。偽礫を含む)                       |



図 280 3-286 土坑 平面図および断面図

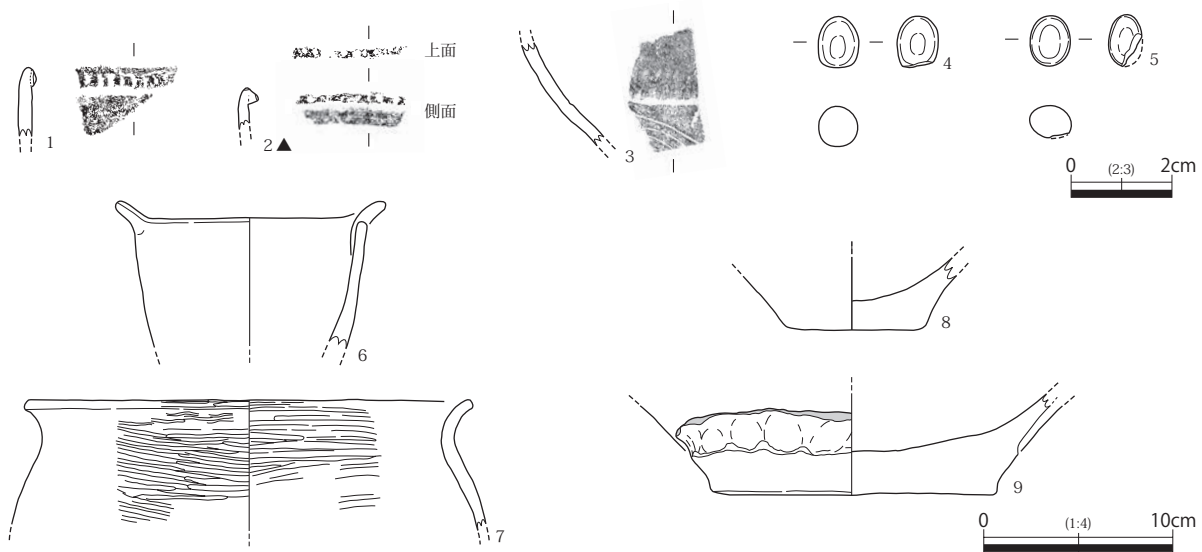


图 281 3-286 土坑 出土遺物実測図

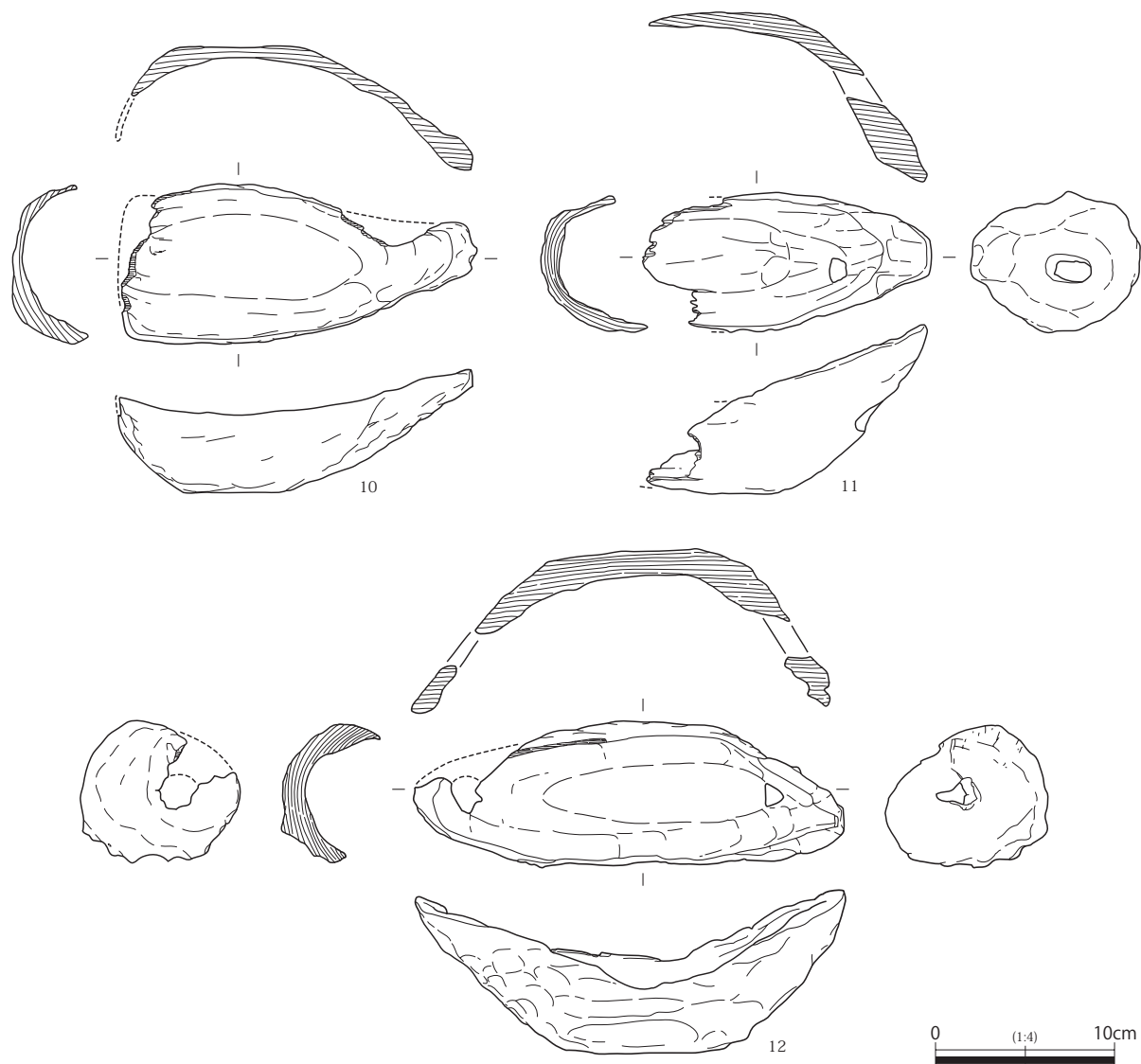


图 282 3-286 土坑 出土木製品実測図



削されている状況が確認された。出土遺物の様相は周囲の遺構のものと近似しており、時期的な隔たりは見られない。

**3-286 土坑** (図 280: 図版 54-1 ~ 4) 3-268 溝内の土器集中部、土器群 2 と土器群 5 の間で検出された。溝内において土器群が出土したのは図 280 の 7 層に対応する層準であり、3-286 土坑が同層を切って掘削されていることから先後関係は明確である。直径 1.0 m、深さ 0.6 m を測る円形の土坑で、土坑の西側の壁面には板材が並立している。板材 A より下部の板材については土坑の掘方より下部に打ち込まれており、矢板のように打設したものと考えられる。これらの板材の樹種は板材 A・B がアカガシ垂属、板材 C がコナラ垂属となっている。埋土の下部には炭化物が層状に含まれており、滞水状況にあったものと考えられる。上部は人為的な埋め戻し土と考えられ、この層から土器や木器などの遺物が出土した。また土坑の埋土を洗浄すると、ヒョウタンの果皮や種子が多く確認された (第 7 章第 1 節)。ヒョウタンについては他に出土する遺構がなく、人為的な廃棄が考えられる。

出土遺物は図 281・282 に示した。1・2 は突帯文土器。2 は刻目を口縁外端部と上端部の 2 ヶ所に持つ。3 は弥生土器の壺で頸胴部境に段を持ち、胴部には重弧文と見られる沈線文様が確認される。4・5 は円礫である。調整痕などは見えず自然石である可能性が高いが、長径 1.0cm、短径 0.8cm と近似した法量を持っていたため図示した。4 は白色、5 は黒色を呈する。6 は直口の鉢と考えられるが、口縁端部から肥厚しつつ外上方に伸びる突起を持つ (図版 121)。なお、外面にはススの付着が見られ、器表の剥落が著しい。弥生土器の直口鉢に把手を付すものは、近畿では神戸市大開遺跡 (神戸市教育委員会ほか 1993) や東大阪市鬼塚遺跡 (帝塚山考古学研究所 1984) などの出土資料に見られるが、いずれも口縁端部からやや下がった位置に把手を付している。八尾市田井中遺跡では、口縁端部に把手を付した鉢の出土が見られるが (大文セ 1997)、把手は口縁部から水平に付されており、外上方に伸びる本例とは異なる。縄文土器の可能性も含め、類例を検討する必要がある。7 はやや腰の張る鉢。無文だが、内外面ともに丁寧にミガキ調整されている。同様の鉢は 6 区の包含層中からも出土している (図 311-29・30)。9 は大型の壺である。接合部から剥離し、円板状になった底部のみが出土した。

図 282 の木器は、埋土中から 3 点がまとまって出土したが、図面・写真等の詳細な記録は取れていない。12 は、平らな船底状の底部から両側が外上方に伸び、側面には穿孔がなされている。11 にも直径 1.5cm の穿孔があり、形状からも 12 と同様の木製品と考えられる。一方、10 の側面には穿孔がなく、11・12 とは形状を異にする。上面図左側が方形に収まることから、レンゲ状の杓子である可能性が考えられよう。ただし、11・12 に関しては穿孔の存在などから容器としての性格は考えにくく、不明遺物とせざるを得ない。樹種はいずれもクルミ属。第 8b 面東側遺構群において、木製品の出土がこの 3 点に限られることは、3-286 土坑内の湿潤な環境と、埋め戻しによる完全埋没を示唆する。

**3-279 井戸** (図 283: 図版 53-8) 3-267 溝の埋没面から掘り込まれる。西端は調査時の断割りによって失われているが、約 2.0 × 1.65 m の楕円形を呈する。検出面からの深さは 1.35 m を測り、断面形は角度の急な逆台形を呈する。内部からはほとんど遺物が出土しなかったが、弥生土器の甕 (図 295-4) と〈接合部剥離資料〉となる土器片 (図 347-15) が図化できた。当遺跡では、接合部剥離資料は弥生時代前期の土器群の中に特徴的に含まれており、その出土は、当遺構が弥生時代前期の集落に伴う可能性を示唆するものであるが、当該時期の井戸に関しては検出例が少なく (宇野 1986・藤田 1988)、大阪では山賀遺跡などの例があるが、木製品の出土するものが半数近くあることから、木器貯蔵用の穴である可能性も考えられている。当遺構については、木製品なども出土しておらず、逆台形の

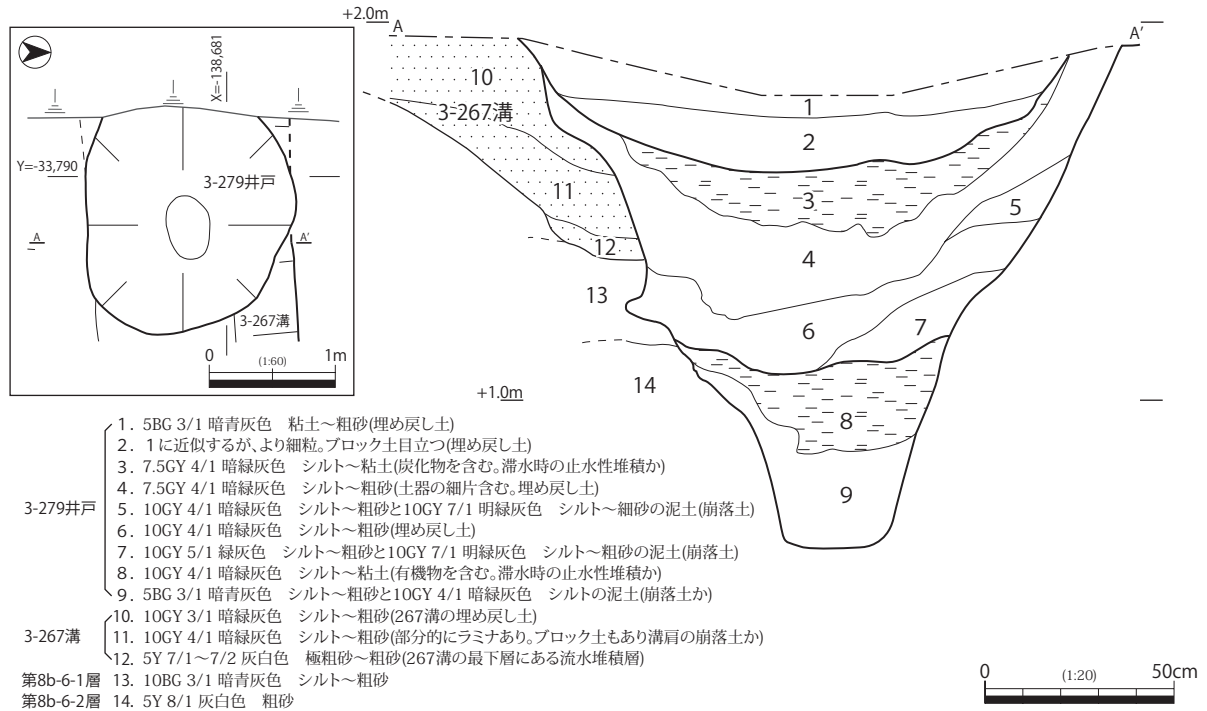


図 283 3-279 井戸 平面図および断面図

断面形状は深い掘削を可能とし、その掘方底部が第 8b-6 層の厚い砂層内まで達していることから、これを湧水源とする井戸の可能性を考えた。発掘調査で確認されたものとしては最古の井戸ということになる。しかしながら、積極的な物証がない中では可能性の提示に留め、類例の増加を待ちたい。

5-991 溝 (図版 54-5 ～ 55-3) 5 区の南東端から北西に向かって直線的に延びる溝である。途中、3-267・268 溝と直交するが検出面は 5 cm ほど高く、同溝の埋没後に掘削されたことがわかる。北側で 5-980 溝に切られているが、同溝からは前期末頃に下るとされる壺 (図 296-11・12) が出土している。幅は 0.5 ～ 1.0 m、深さは 0.1 ～ 0.2 m を測り、延長距離は 70 m に及ぶ。内部には砂礫など流水性の堆積物は見られず、第 8a 層と近似する古土壌を埋土としている。埋土を除去すると、底面に掘削工具によるものと考えられる痕跡が明瞭に観察された (図版 55-2・3)。工具痕は不整な楕円、もしくは半円形を呈するものが多く、工具の刺突痕跡を示すと考えられる直線的な辺は 10 ～ 15cm を測ることから、同幅程度の刃部を持った鋤などの使用が想定される。工具痕の明瞭な残存はこの溝が流水もしくは滞水状態になかったことを示しており、掘削後の開口期間が存在しなかったことがわかる。この溝を境として東西で遺構・遺物の分布密度が異なることから、単なる耕起痕ではなく区画要素を持つ可能性が高いと思われるが、規模の小ささと粗雑な掘削からは長期間にわたって存続した施設とは考えにくく、集落の西限付近に一時的に掘削された小規模な溝としておきたい。

内部からは比較的多くの土器が出土した。いくつかの不明土器片を除くと全てが弥生土器であり、図 284 に示した。1 と 6 は口縁端部に刻目を入れる甕である。6 は頸部に段を持つ。2 は壺の肩部で低い幅広の突帯上に斜格子文様、その下部に 3 条の沈線を入れる。3 は細い貼り付け突帯を持つ壺肩部。刻目の有無は明瞭でない。器体に入れた凹線状の段に突帯を貼り付けている。ちなみに貼り付け突帯を持つ土器を出土する遺構は当溝のみで、3-267・268 溝埋没以後に掘削された一段階新しい遺構として矛盾しない。4 は壺胴部で、細い沈線で木葉文を描く。7 は広口の大型壺で口縁部への粘土貼り付けによる段を口頸部境を持つ。頸部の一部に明るい橙色を呈する場所があり、スリップなどの使用が考えら

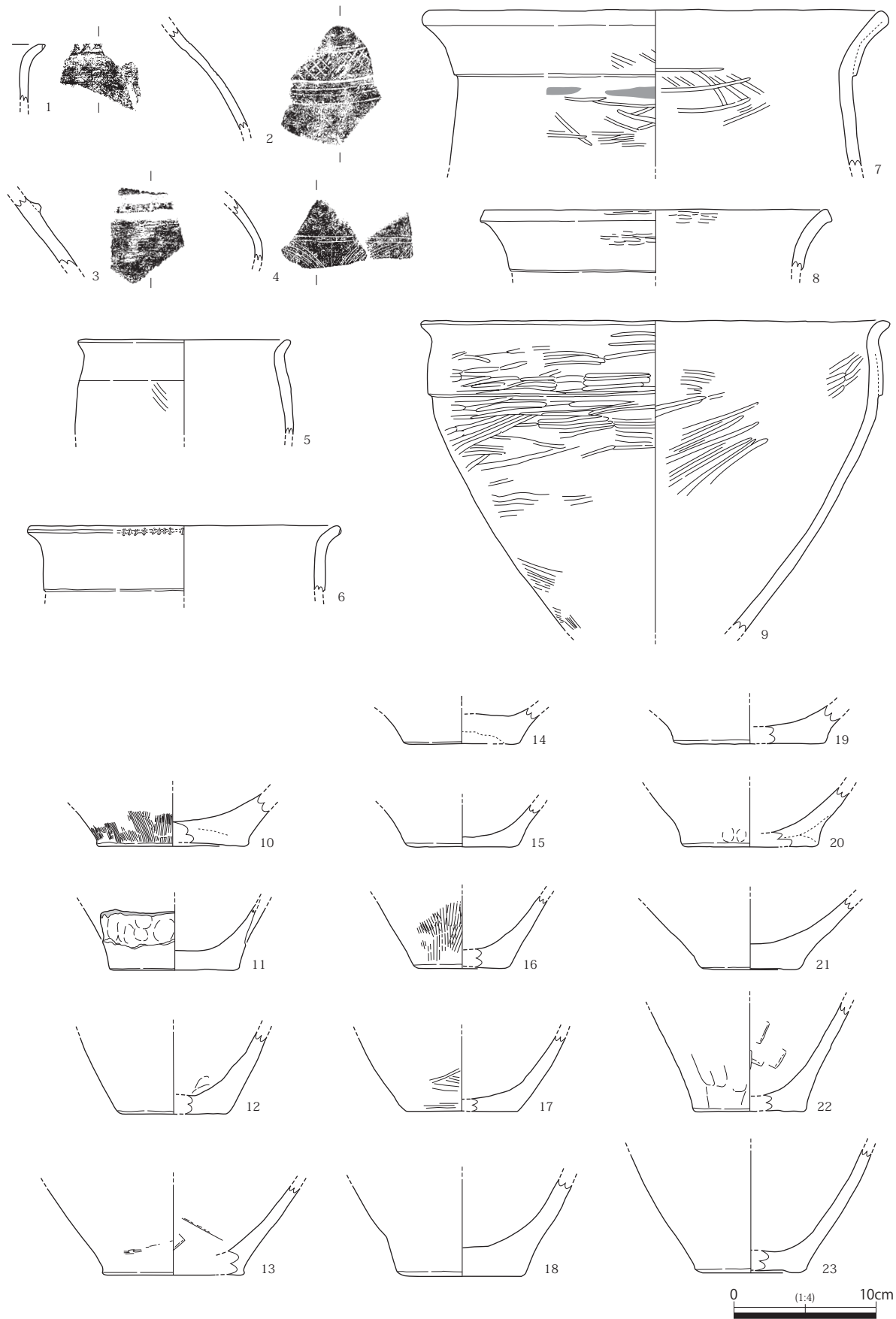


图 284 5-991 溝 出土遺物実測図

れる。8・9は鉢。9は、口縁部に貼り付けた粘土によって段を形成する鉢である。器面は丁寧にミガキ調整され、灰黒色を呈することから、いぶし焼きによる黒色仕上げを行っている可能性がある。14は、底部片であるが、黒斑のある底部外面の中央部が剥離したように破損している。焼成不完全品と考えられ、第6章第3節において検討を行う。

**6-123 溝** 調査地北端で検出された。埋土の下部には砂礫があり、埋土最上部に遺物を包含する粘質のシルト層が確認されることから、3-267・268 溝と同じく小流路の下刻と埋没によってできた溝状の窪みとして捉えられる。東から西に蛇行しながら伸び、幅の広い場所では4.5 mを測る。比較的削り込んでの検出となったため、遺物を包含する最上部のシルト層の残存は薄く、0.1 m程度である。遺物の出土は局所的で、実測遺物の7割がY=33,780～33,800間からの出土である(図285)。また周辺で遺構検出作業時に〈土器群〉として取り上げた遺物も多い(図304)。これらの遺物はいずれも包含層の最下部で出土しており、当溝に伴うものである可能性があろう。また、3-267・268 溝同様、当溝でも埋没後に上部から掘削されている遺構があり(6-143 土坑など)、当溝の開口時期が一段階古い可能性を示唆する。一方で、建物22のプランは当溝の蛇行に合うようにも見え(図242)、両者が並存していた可能性も考えられる。

溝内から出土した遺物については、36点が図化できた(図286・287)。出土遺物の5割を突帯文土器が占めた3-267・268 溝と異なり、当溝では突帯文土器がほとんど含まれず、1・4のみが突帯文土器の深鉢である。4は口縁端部からやや下がった位置に突帯を設け、右D字の刻目を入れる。胎土は生駒西麓産。2・3は壺肩部。2は木葉文、3は山形文か。5はミニチュア土器、6・7は直口の鉢で、サイズに比して器壁が厚く粗雑なつくりで実用品ではないと考えられる。8～12は壺もしくは鉢の口縁部と考えられる。12は頸部に2条のヘラ描き沈線を持つ。13～17は甕。口縁部を欠く17以外は、

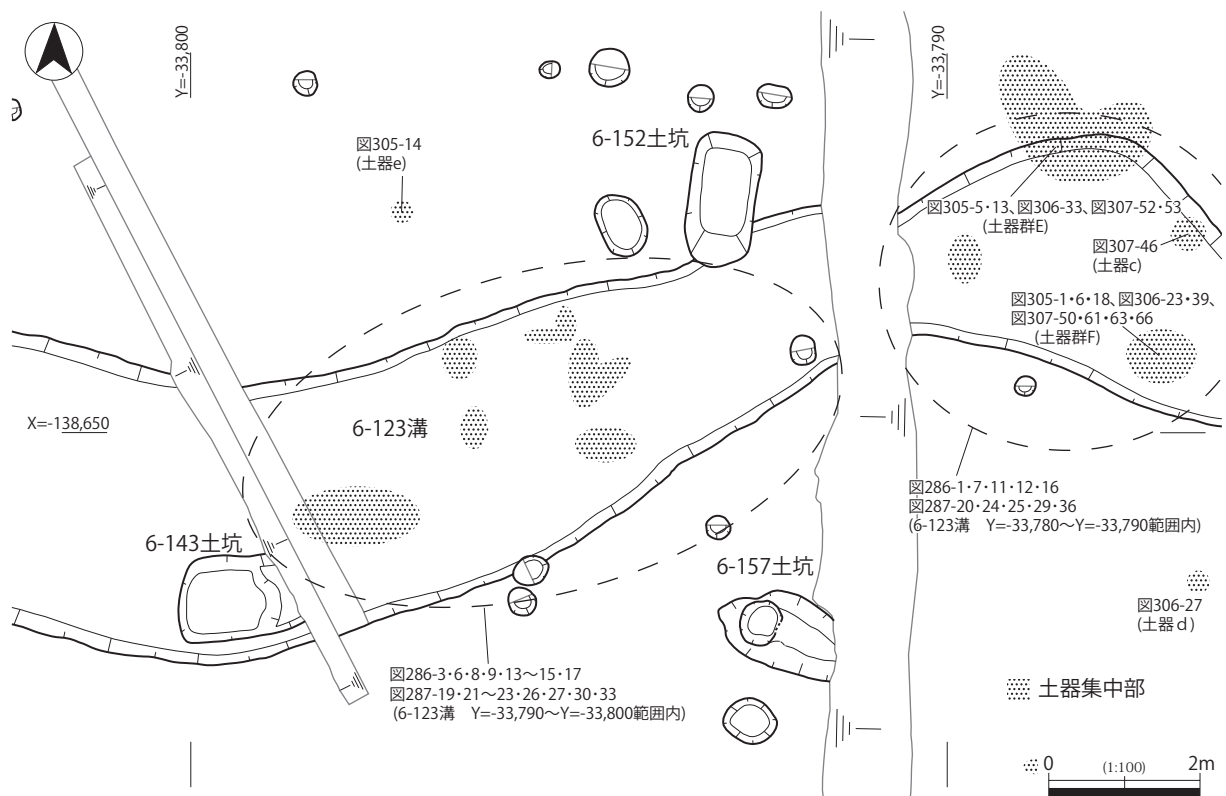


図285 6-123 溝 遺物集中部

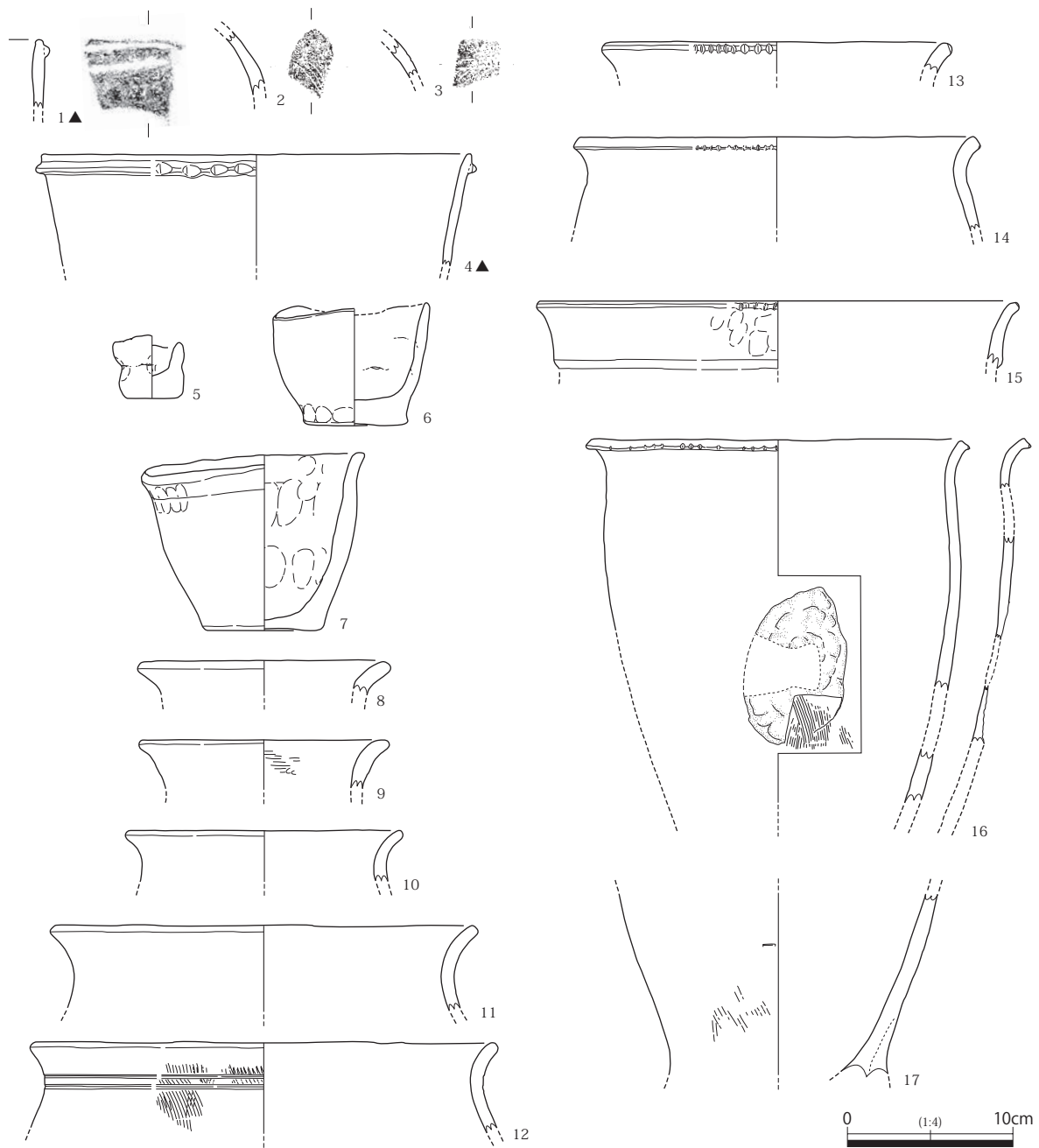


図 286 6-123 溝 出土遺物実測図 1

口縁端部を刻むが、14 と 16 は口縁端部の下端のみを刻んでいる。特に 16 は口縁下端部をつまみ出すように肥厚させており、明確な調整意図が感じられる。胴部には焼成破裂痕と考えられる剥離破損があり、詳細については第 6 章第 3 節で述べる。やや白色を呈する胎土を持ち、流紋岩などの有色鉱物を含むことから、胎土分析の対象としたところ、搬入品としての可能性が提示されている。18～33 は底部片で、胎土や成形方法から全て弥生土器と考えられる。中には 28 のように、接合部から剥離して擬口縁を呈するものもある。34 はスクレイパーであるが、側面に二次加工による刃部がつけられている。ただし、裏面の刃部調整は粗い。35 は緑泥片岩で円盤状となっているが明確な調整痕はない。紡錘車の未成品である可能性が考えられるが不明である。36 は石英の円礫である。含有鉱物により一部橙色を呈する。上面を滑らかに研磨しているが、他に調整痕はなく性格は不明。欠損部や側面に一部打痕らしきものがあり、敲石として使用されていた可能性がある。

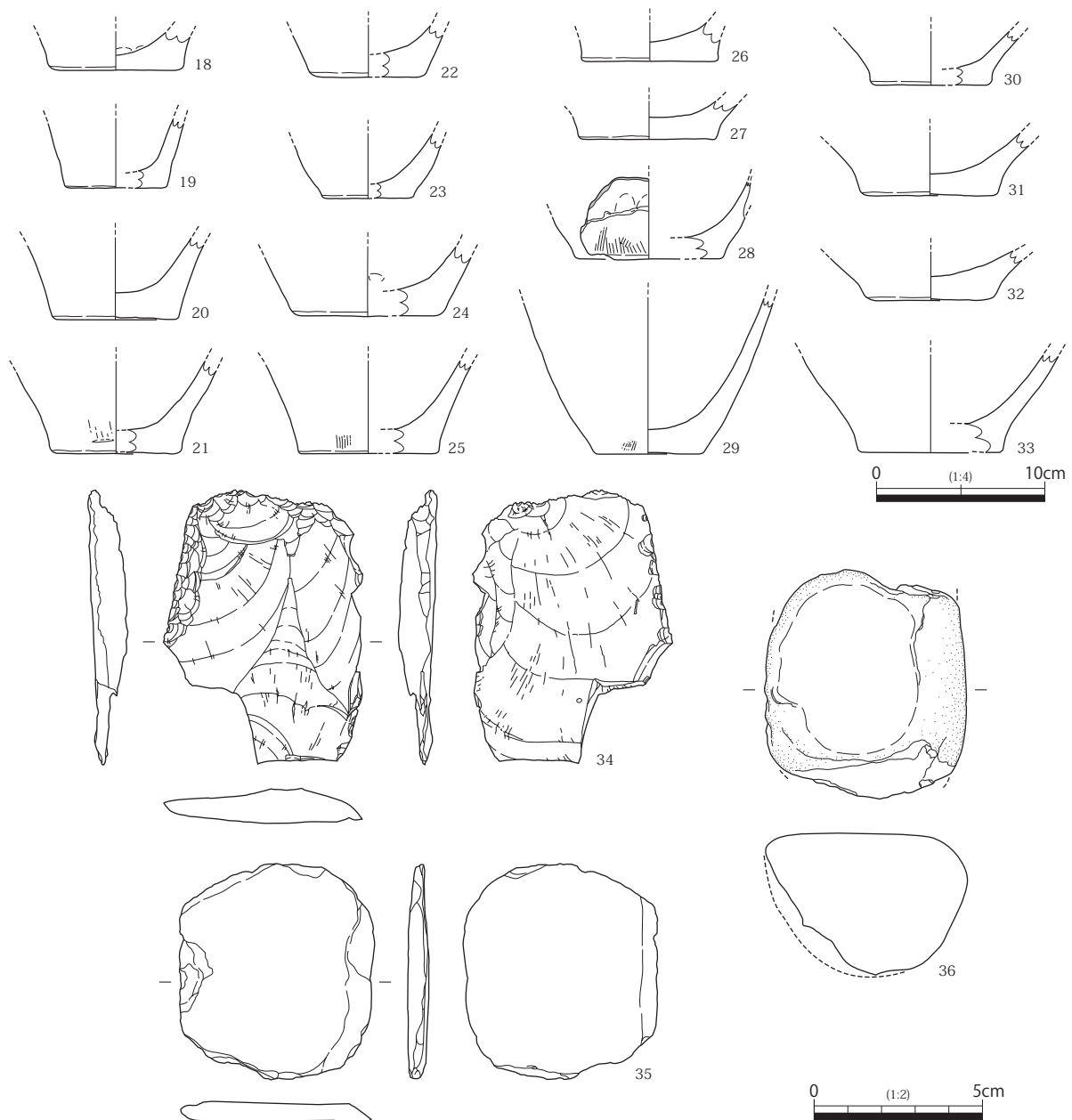


図 287 6-123 溝 出土遺物実測図 2

### 3. 土坑

#### ・炭化物を含む土坑

建物 22 の東側では、6-143、152、157 土坑が検出された。これらの土坑はいずれも埋土下部に炭化物を多く含み、直径 1～3 cm 程度の土器細片を多く出土する（表 5）。また、6-143、6-152 土坑では、底部に堆積する灰と炭化物層、炭化米、焼成作用を受けていない灰白色の粘土塊の出土が共通して認められた。これらの土坑は何らかの燃焼行為に伴うものであると考えられ、類似の機能もしくは、相互に関係性を持っていた可能性が想定される。

**6-143 土坑**（図 288：図版 55-4～56-7） 建物 22 の東側に位置する長方形の土坑であるが、東側は調査時の断割りにより損じた。長軸は残存している部分で 1.6 m、短軸は 1.0 m、深さ 0.45 m を測る。

土坑は、人為的に埋め戻されたと見られるが（図 288 の 1～3 層）、底部に炭化物や灰が堆積している状況が確認された（カラー図版 6-4・5）。部分的に互層を成す箇所もあるが、基本的に上から、灰・

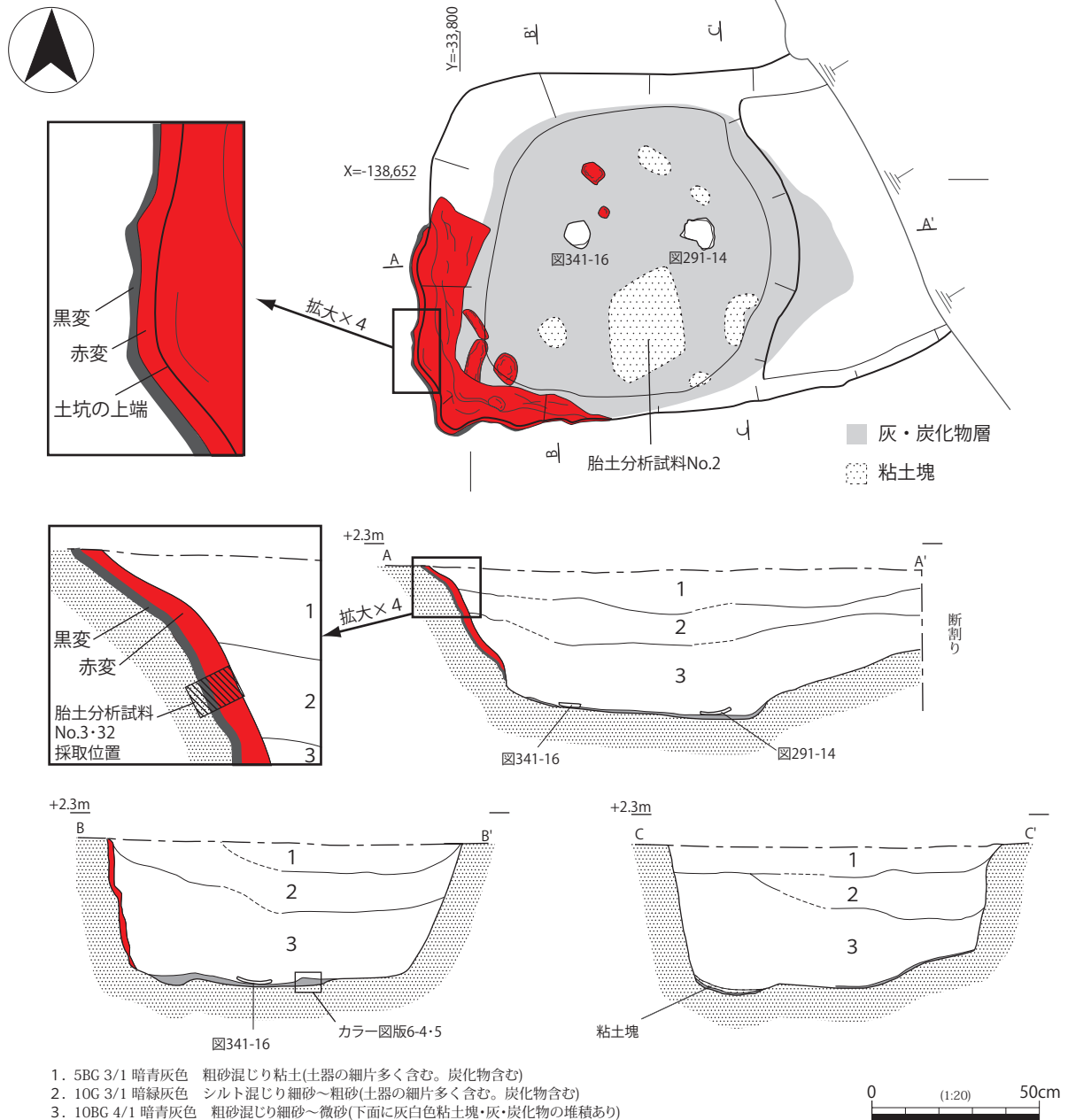


図 288 6-143 土坑 平面図および断面図

炭化物・地山の順に堆積しており、灰と炭化物の間には橙色の粘土（焼土塊？）が確認された。これらを洗浄・観察すると、炭化物から燃料と考えられる木材片（遺存状態が悪いため正確な樹種同定はできなかったが広葉樹のものと考えられる）、灰からは炭化米（胚乳、カラー図版 6-2）を始めとした植物種子類のほか（第 7 章第 1 節：表 19）、イネ属の珪酸体が確認された。珪酸体では、列状の構造が破壊されていない短細胞珪酸体や機動細胞珪酸体の他、穎珪酸体が確認され、粉の付いたままの稲藁が土坑内で燃焼した可能性を示唆する（カラー図版 6-3）。また炭化米については、炭素年代測定を行い、炭素年代で  $2450 \pm 25$  年（較正年代（ $2\sigma$ ）：BC 5～7 世紀）の数値が得られている（第 7 章第 7 節）。

南西隅の壁面は赤色および黒色を呈しており（カラー図版 6-1）、被熱による変色と考えられたため、土壤剥片の観察を行ったところ、 $800 \sim 900^{\circ}\text{C}$  に被熱していることがわかった。また、被熱壁面が地山（掘削基盤層）に比べやや細粒に見えることから貼り土の存在を考えたが、土壤剥片や軟 X 線写真

の観察からは積極的に支持できる結果を得ることはできなかった（第7章第4節）。

さらに、土坑底部からは灰や炭化物層に半ば埋もれるようにして灰白色の粘土塊が出土した（図288 C断面）。これらには顕著な被熱痕跡は認められない。いくつかの塊がブロック状に認められたが、そのうち大型の2個を持ち帰り、重量を量ったところ3.4kgと2.2kgとなった。3.4kgの粘土塊については、胎土分析を行い（第7章第4節：試料No.2）、3-267・268溝から出土した「焼成破裂土器片」（田崎2005。第6章第3節にて詳述）と同様の岩石・鉱物組成を持っていることが確認された（試料No.31）。同様の粘土塊については、竪穴住居や土坑などからの出土例がよく知られており、縄文時代から古墳時代まで各地で出土例が見られる。近年では粘土塊についての科学的分析も行われており、土器胎土との類似性を挙げる成果も少なくない（同志社大学歴史資料館2006・兵庫県教育委員会2007）。粘土塊は多くの場合、白色もしくは灰白色を呈する未焼成のものであるが、一部に被熱して赤褐色から黄褐色を呈するものがある（こうした粘土塊には籠目や縄目のような痕跡が認められる（東大阪市遺跡保護調査会1979、六甲山麓遺跡調査会1996））。土器の素地土に使用される粘土の色調については、Mn（マンガン）の含有量が少ない「灰白系」粘土が主体的に使用された可能性が指摘されている（松本2008）。胎土分析に合わせ、未焼成の粘土塊の色調なども土器の原料粘土を検討する上での一視点となるやもしれない。こうした研究成果からは、当土坑から出土した粘土塊についても土器製作に関連するものであることを想起させるが、その性格については不明とせざるを得ない。いずれにせよ被熱していないことから、土坑での焼成行為終了後の埋没が考えられよう。

出土遺物の中には、土器焼成の際に生じる失敗品として焼成破裂土器片が含まれる。図339-7は、焼成破裂によって壺の胴部から剥離した土器片である。破裂面の中央には内面器表が確認され、焼成時の破損によって壺の胴部に穴が開いたことがわかる。穴の開いた焼成失敗品はともかく、器面から剥離した破裂土器片については小片のため再利用が考えにくく、土器製作地から大きな移動を想定し難い。そのため焼成破裂土器片は、出土地点付近での土器焼成を示唆するものといえる。また他に、焼成時に破損した可能性のある弥生土器の底部も（図341-16）、6-143土坑の底面から出土している。

以上から6-143土坑については、土器焼成坑としての可能性が想起される。縄文土器以降、土師器に至るまでの素焼きの土器の焼成方法については、特別な施設構造体を持たない「野焼き」によって行われることが一般的と考えられているが、近年になって土坑を利用した土器焼成についての調査例が蓄積されつつある（窯跡研究会1997）。被熱痕跡と形態的特徴から土師器焼成坑の3類型を抽出した望月精司は、古代において基準的な土師器焼成坑として、「A類焼成坑」を設定し、石川県二ツ梨一貫山窯25号焼成坑を例示した（望月1997）。規模こそ約半分であるが、6-143土坑の形態的特徴と被熱痕跡は、この25号焼成坑に近似している。初現を6世紀後半代とするA類焼成坑とは、大きく時期が異なるものの参考となる事例であろう。また、図339-7のような焼成破裂土器片の土坑内からの出土は、土坑内での焼成破裂を想定させ、土器焼成坑としての性格を支持するものといえる。

土坑は東側に向かって浅くなっているが（図288 A断面）、その床面にはわずかが西から東方向へ掻き出したような筋状の痕跡が確認された。土器焼成坑と考えた場合、焼成の完了した土器を取り出した後、次回の焼成に備えて土坑内を清掃する行為が想定でき、灰や炭を掻き出した際についた痕跡とも考えられる。埋土からは図339-7の焼成破裂土器片と接合関係にある土器片は出土していないが、焼成時に穴が開いた壺は、失敗品として土坑内から持ち出されて廃棄され、破裂土器片のような小片が取り残されて土坑内に残ったと推測できよう。一方、土坑底部の灰と炭化物は、堆積構造が乱されていない



いことから、最終的な焼成終了後には掻き出されることなく放置され、埋め戻されることによって残存したものと考えられる。列状の構造を保った珪酸体から稲藁の燃焼が想定されることは、焼成方法として覆い焼きに近いものを復原できるのみならず、炭化米の出土と合わせ当地における稲作の導入を示すものといえよう。また、灰・炭化物の堆積構造や分布からは、燃焼規模や燃焼材の量を推定できる可能性がある（確認されている厚さは灰 0.5cm（取り上げ時に上部をわずかに失っている）、炭化物 0.8cm）。燃焼実験などからの実証的な検討を必要とするが、今後の課題としておきたい。

出土遺物については、6-152、6-157 土坑からのものと合わせて図 291・292 に示した。1 は 1 点だけ出土した突帯文土器。口縁部からわずかに下がった位置に幅の狭い突帯を 1 条付し、弱く刻目を入れる。7 は口縁端部より下をタテハケ調整することによって、やや突出させた口縁部下端に刻目を入れる甕。また 8 の甕や、6-152、6-157 土坑から出土した 9～11 も、刻目の大小こそあれ同様に口縁部下端に刻目を入れる。21・23 はいずれもサヌカイト製の楔形石器で加撃による潰れが上下に認められる。蛍光 X 線による産地同定を行ったが、いずれも既往の産地データとは対応せず、「向出 No.49 遺物群」と近似した分析数値を示す資料と判断された（第 7 章第 3 節）。

6-152 土坑（図 289：図版 56-8～57-3） 3-143 土坑から約 8 m 北東に位置し、6-123 溝の上から掘り込まれる。長軸 1.7 m、短軸 0.8 m という平面規模が 6-143 土坑に近似するだけでなく、土坑内に灰や炭化物が集積し、灰白色の粘土塊も確認されることで、近似した性格の遺構である可能性が高い。深さ 0.7 m、平底から上方へ大きく広がる断面形状の点では、6-143 土坑と相違しているように思われるが、図 289 の 5 層上部に堆積する炭化物層を一時点での土坑底部と考えると、深さ 0.4～0.5 m、

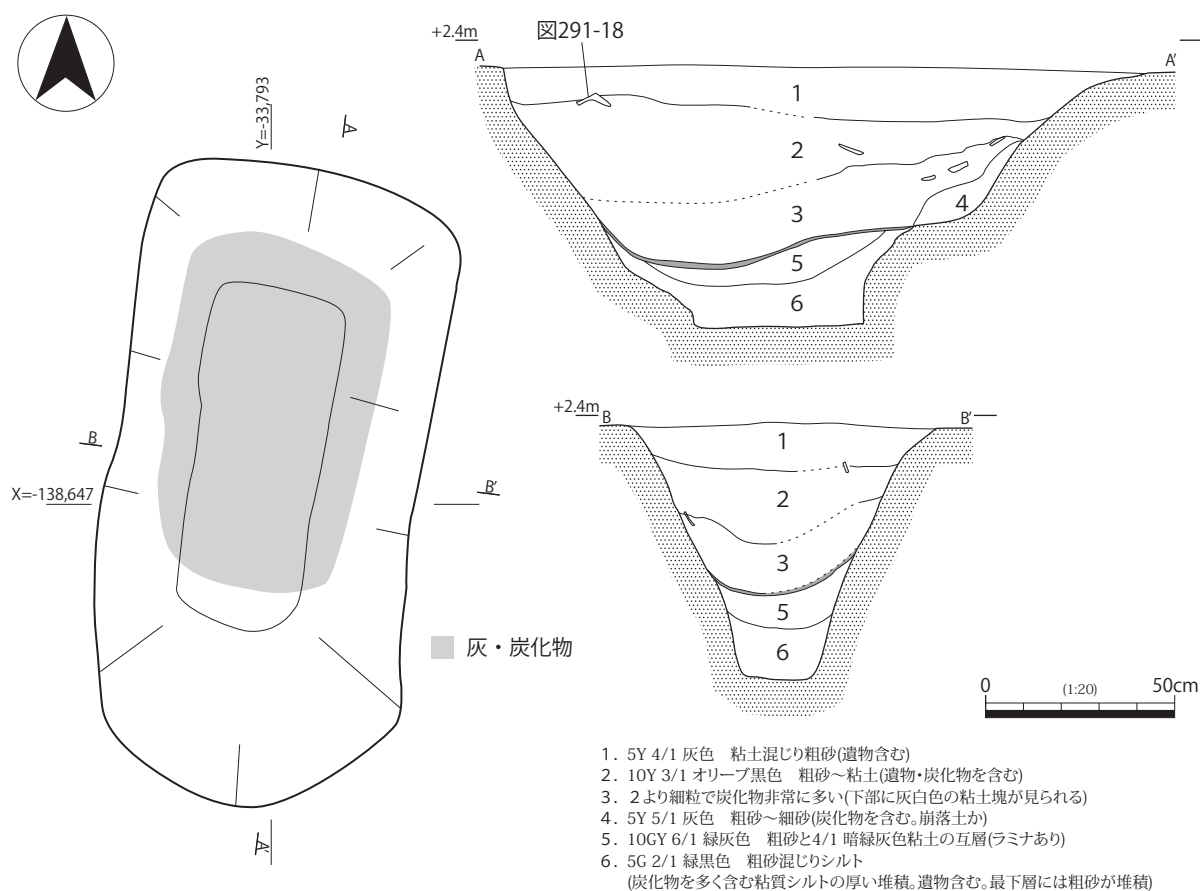


図 289 6-152 土坑 平面図および断面図

となり、断面形状も 6-143 土坑と近似する。また、炭化物や 5・6 層の洗浄によって、炭化米が 343 点出土した（先述の 6-143 土坑では 29 点）。発泡したものも含まれる中、穎（粃）の付着が見られるものは 5 点であったが（第 7 章第 1 節：表 19）、6-143 土坑の灰から穎珪酸体を確認していることから、粃すり後の胚乳のみが炭化したのではなく、土坑内での燃焼時に表面の粃殻が燃失した可能性が考えられよう。この炭化米については、国立歴史民俗博物館による炭素年代測定が行われ、炭素年代で 2540 ± 35 年（校正年代（2σ）：BC 6～8 世紀）の数値が得られている（第 7 章第 6 節）。

以上のように、6-143 土坑との共通点が多く、両者が近接することからも同様な性格（土器焼成坑）が考えられる。ただし、図 291 に示した出土遺物には、6-143 土坑に見られたような焼成失敗品は含まれない。4 は無頸壺で口縁部と底部を欠くが、口縁端部からやや下がった位置と思われる場所に穿孔を持つ。5 は甕蓋。端部内面にはコゲが付着する（図版 123）。9 は頸部に段を持つ甕。18 は内外面を丁寧にミガキ調整しており、壺と考えられる。当土坑からは図化できなかった剥片を含め、8 点のサヌカイト製石器が出土している。これらを対象とした産地同定分析では、243.29 g と大型の素材剥片である 25 のみが二上山産で、他は全て讃岐地方からの搬入品と判断された。22 は、楔形石器である。24 は、自然面の残る剥片であるが、部分的に二次加工が施されている。

6-157 土坑（図 290：図版 57-4・5） 6-143 土坑の 7 m 東に位置する楕円形の土坑で、東側は調査

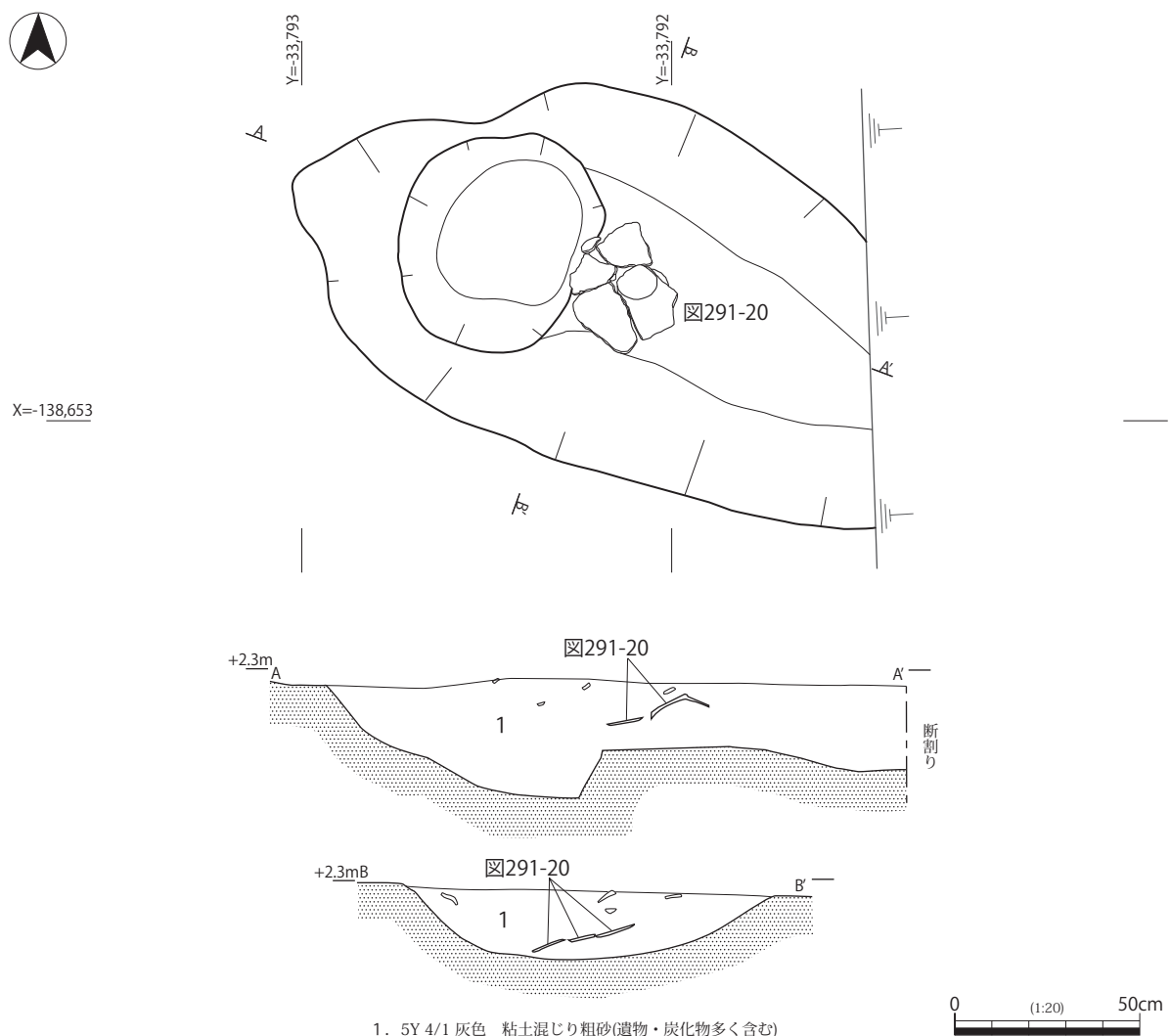
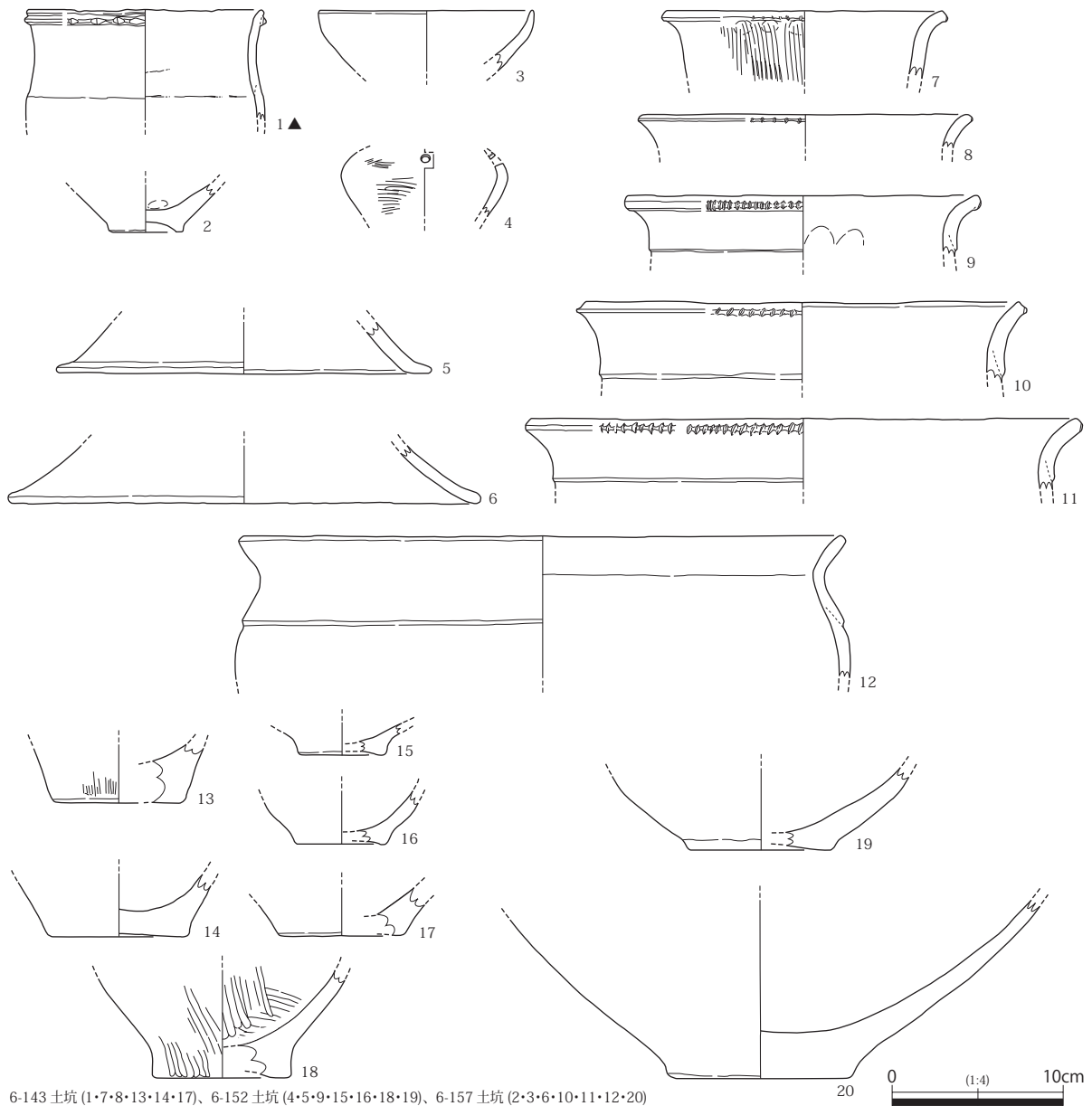


図 290 6-157 土坑 平面図および断面図

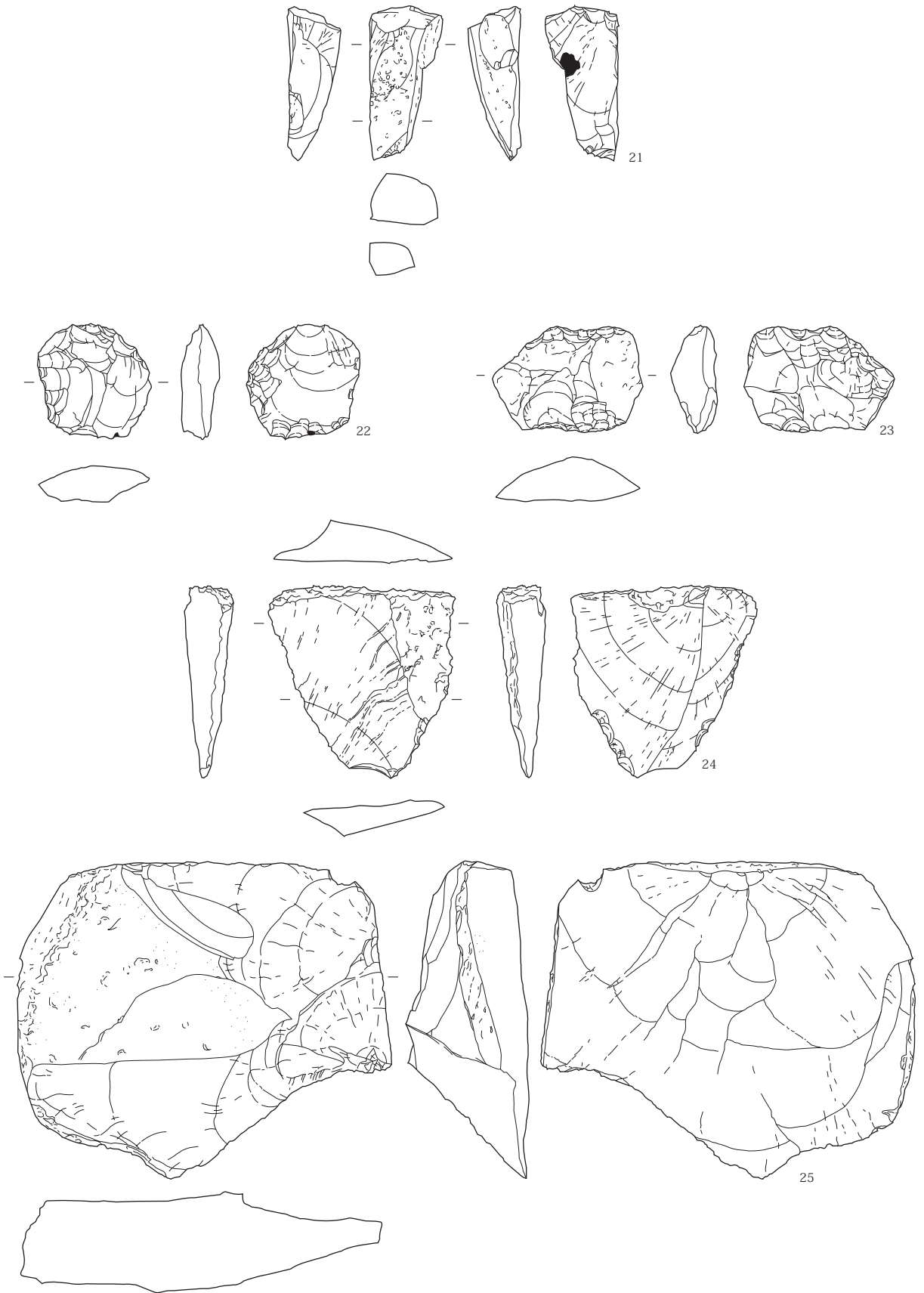


6-143 土坑 (1・7・8・13・14・17)、6-152 土坑 (4・5・9・15・16・18・19)、6-157 土坑 (2・3・6・10・11・12・20)

図 291 6-143、6-152、6-157 土坑 出土土器実測図

時の断割りによって失ってしまった。やや形状が異なるとはいえ、規模と、埋土に炭化物を含む点で 6-143、6-152 土坑に似る。しかし、炭化物が層状をなすこともなく、土坑自体の断面形状も異なることから、両土坑と同様の性格は考えにくい。埋土中に比較的大型の遺物片（図 291-20）が含まれることも相違点といえよう。とはいえ埋土に多く含まれる炭化物は、両土坑との関連性を示唆している。

出土遺物は図 291 に示した。6-143、6-152 土坑と異なり、石器を含まない。2 はくぼみ底を持つ縄文土器鉢の底部である。他は全て弥生土器で、3 は口縁部が内湾し薄くなる高杯の杯部。6 は甕蓋で、6-152 土坑から出土した 5 と同様に端部内面にコゲが付着する。10・11 の甕はいずれも口縁の下端部を刻み、頸部に段を有するものだが、10 の口縁下端部は意図的に摘み出されて突出する。他の出土資料に類例が少ないため胎土分析を行ったが、在地性の高い胎土を持つとの結果を得た。20 は土坑の中央部で、見込みを下に向けて出土した壺の底部で、赤橙色を呈し器表の残存が悪い。二次被熱や高温で



6-143 土坑 (21·23)、3-152 土坑 (22·24·25)

0 (2.3) 2cm

图 292 6-143、6-152 土坑 出土石器实测图

の焼成などを想定し胎土分析を行ったが、胎土自体に他地域のものである根拠を示すものは含まれていなかった。しかしながら、多量の酸化鉄が含まれていることがわかり、赤みはこれに由来するものと判断される。

6-122 土坑 (図 293 : 図版 57-6 ~ 58-3) 0.85 × 0.7 mの楕円形土坑に突帯文土器の深鉢を斜位で埋置するもので、土坑底面に向けた深鉢の胴部下部には穿孔が認められる。この深鉢以外に土器の出土はなく、当調査地では唯一、突帯文土器のみが出土した遺構といえる。土器棺墓と考えられるが、周辺で類似する遺構はなく単体での検出となることから、ある一定数をもって墓域を形成する当該時期の様相とはやや異なる。

土坑の掘方と深鉢内の埋土は近似しているが、掘方埋土の方がやや粗く、ブロック土が含まれる点において区別できた。また現地調査時に、深鉢口縁部付近の埋土と掘方埋土の境界が、粒度によって比較的明瞭に観察できたため(図版 57-7)、木製の蓋などが存在した可能性が考えられる。掘方、深鉢内の埋土について、水洗選別したところ、漆と見られる赤色塗膜が出土している(カラー図版 6-6・7)。

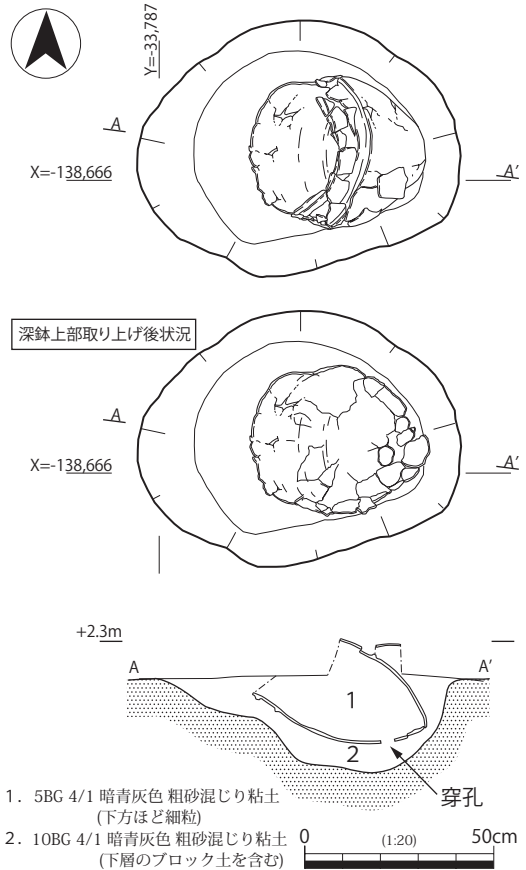


図 293 6-122 土坑 平面図および断面図

木製品などの有機物に塗布されていた漆が膜状に残存した可能性が考えられるが、小片であるため本来どのような遺物であったのかは不明である。幅 1 cm 程度の細かい塗膜片が多いことから、棒状もしくは小形の木製品などに塗布されていた可能性も考えられよう。発色から、図 310-5 の浮線文土器に塗

スス・コゲの付着状況 ※不定形のパッチ状範囲は欠損部位を示す

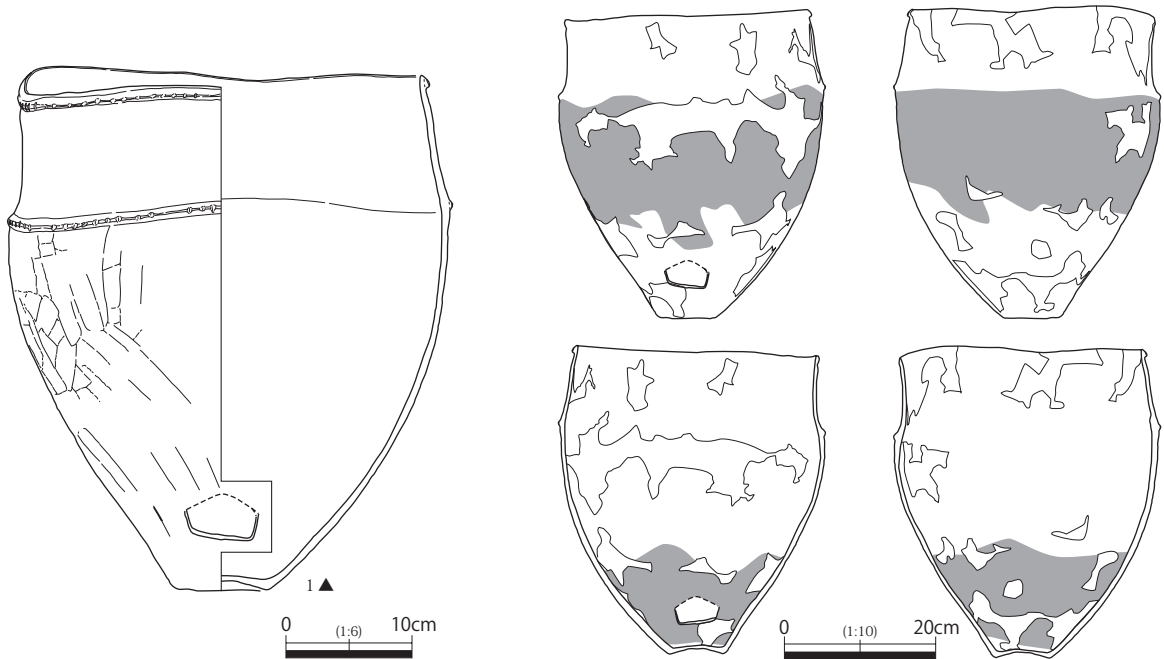
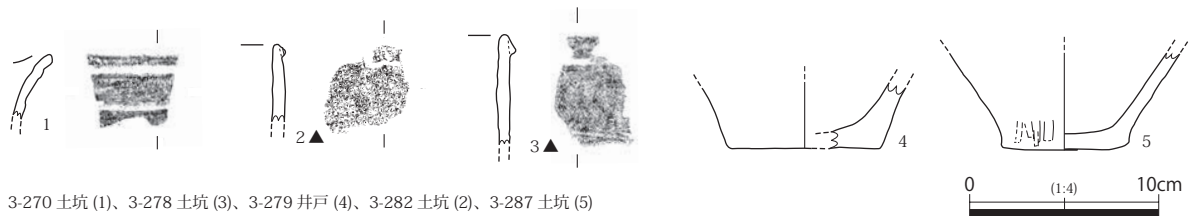


図 294 6-122 土坑 出土深鉢実測図

布された朱漆と同様のものとも見られるが、科学的な分析は実施していない。

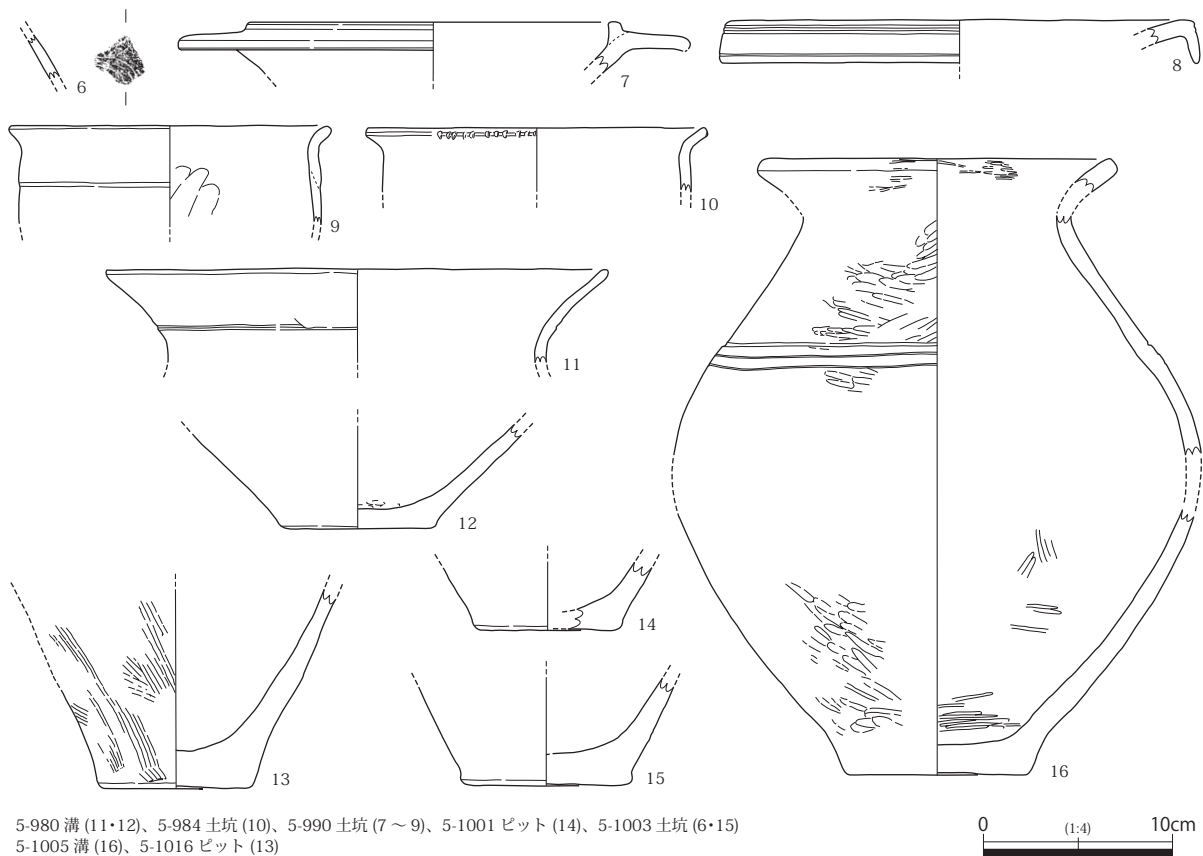
深鉢（図 294-1）は屈曲する肩部に刻目突帯を付す 2 条突帯のもので、くぼみ底を持つ。歪みが著しいが、口縁部突帯がやや端部から下がった位置に付けられている箇所もある。大型で容量は約 28 l を測る。内外面には煮沸調理の痕跡と考えられるスス・コゲが明瞭に観察できる。外面のススには大きな濃度差はなく、最大径を示す肩部の突帯まで付着している。突帯より上部には付着していないことから、調理への使用回数は少ないと思われる。下端ラインは被熱による酸化のため、不定形を成し境界は不明瞭。内面のコゲの上端ラインは、外面のスス酸化部上端ラインまで認められる。コゲ下端ラインは底部直上まで達し水平だが、底面にはコゲが付着しない。こうしたスス・コゲの状況からは、この深鉢を用いた調理実態に迫れる可能性があるが（小林正 2008）、検討には一定数の土器資料による比較検討を必要とする。当遺跡から出土した深鉢には他に良好な資料がなく、十分な検討を行うことは難しい。ここでは資料蓄積のためにスス・コゲの付着状況を記録するに留めておきたい。

いずれにしても、胴部下部の穿孔が、コゲの付着後に開けられたものであることから、煮沸調理などに使用された深鉢が土器棺として転用されたことがわかる。



3-270 土坑 (1)、3-278 土坑 (3)、3-279 井戸 (4)、3-282 土坑 (2)、3-287 土坑 (5)

図 295 3区第 8b 面遺構 出土遺物実測図



5-980 溝 (11・12)、5-984 土坑 (10)、5-990 土坑 (7～9)、5-1001 ピット (14)、5-1003 土坑 (6・15)  
5-1005 溝 (16)、5-1016 ピット (13)

図 296 5区第 8b 面遺構 出土遺物実測図

#### 4. その他の遺構

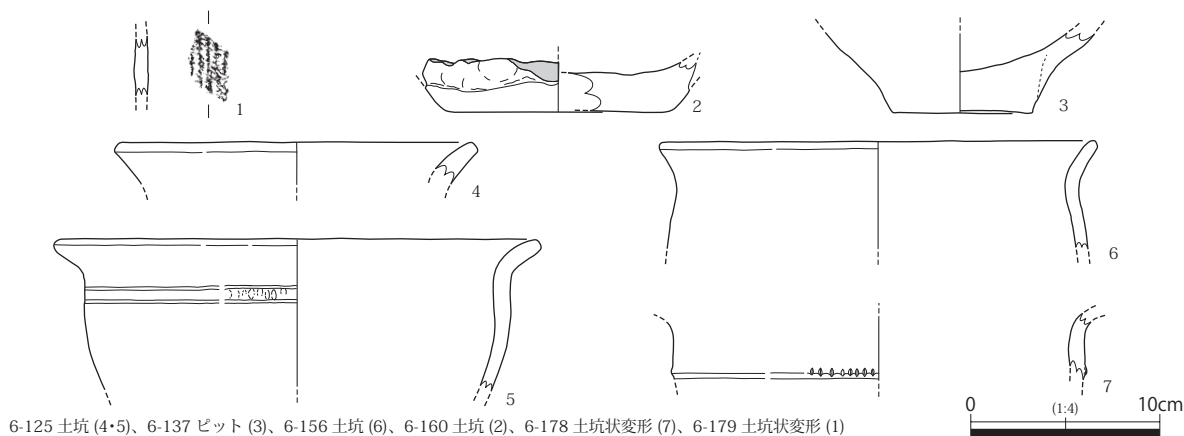
前述した遺構以外から出土した遺物について、図 295 ~ 297 に示す。大まかな出土位置の切り分けを行うために、調査区ごとにまとめた。

図 295 は、3 区で検出された遺構から出土した遺物である。1 は、縄文土器の浅鉢口縁部で、端部から 1 cm と 3 cm 下がった場所に段を持つ。内外面ともへら状の工具によって丁寧にナデられている。波状口縁を成すと考えられるが、遺存部位が少なく不明。胎土は非生駒西麓産。2・3 はそれぞれ 3-282、3-278 土坑から出土した突帯文土器。いずれも出土遺構が 3-267・268 溝の上面から掘削されており、遺物が小片であることから、溝内の遺物が混入した可能性が高い。いずれも生駒西麓産胎土。

図 296 は、5 区で検出された遺構から出土した遺物である。注目されるのは、7・8・11 など帰属時期が下る遺物の存在である。7 は水平口縁を持つ高杯、8 は外面に沈線が 2 条入った垂下口縁を持つ高杯もしくは壺であり、Ⅲ様式～Ⅳ様式のものと考えられる。また、11 は薄く伸長した口縁部を持つ壺で頸部のやや上方に 2 条の沈線を持つ。これらの遺物は、弥生時代前期の集落解体後の年代に帰属するものといえ、東側遺構群においては包含層も含め同時期の遺物をほとんど見ない。7・8 が出土した 5-990 土坑、11 が出土した 5-980 溝は、ともに 5-991 溝の上から掘り込まれており、切り合い関係からも新しい時期のものであることが分かる。弥生時代中期と考えられる石鏃（図 250-1）などが出土した 5-971 ピットなど、周辺ではやや新しい時期の遺物を含む遺構が集中して分布する状況にあり、東側遺構群ではあまり見られない遺構の切り合い関係が多く認められる。これらの遺構が標高 1.4 ~ 1.5 m 前後の地点に分布する状況は、前期集落解体後に極微地形の変化点付近での集中的な遺構形成が行われた様子を窺わせる。

以上の遺物以外は弥生時代前期に属するものと考えられ、7・8 とともに 5-990 土坑から出土した 9 も頸部に段を持つ古い様相を持った甕である。土坑掘削時に直下の 5-991 溝内の遺物を混入した可能性が考えられよう。16 は、5-1005 溝から出土した弥生土器の壺である。欠損部が多いため明確でないが、口縁部は短く直線的で端部は方形に仕上げられる。頸胴部境には沈線を入れた段を設け、その下に 2 条の沈線を描く。口縁と頸部の境に段があるかどうかは不明であるが、6-124 土坑出土の図 246-10 の壺と似た器形から段を持たない可能性を考えたい。

6 区の遺構から出土した遺物については、図 297 に示した。1 は外面器表に撚糸文を施す縄文土器片であるが、時期などは不明。これ以外の遺物は全て弥生土器である。2 はおそらく壺の底部で側面の粘土接合部から剥離破損している。5 は甕もしくは鉢であるが、頸部に「両直線紋間刻目」（深澤



6-125 土坑 (4・5)、6-137 ピット (3)、6-156 土坑 (6)、6-160 土坑 (2)、6-178 土坑状変形 (7)、6-179 土坑状変形 (1)

図 297 6 区第 8b 面遺構 出土遺物実測図

2000) を持っている。図 246-23 の刻目段を持つ甕について先述したように、甕の頸部もしくは胴部上方に見られる「刻目段」は、段の上部に沈線を持つ「直線紋刻目段」、段を持たず2条の沈線文間に刻目を持つ「両直線紋間刻目」へと変遷していく可能性が唱えられている。その仮定に立てば、5はやや新しい様相を持つものといえよう。実態として、東側遺構群の遺構出土遺物のうち、両直線紋間刻目を持つ土器は5の1点のみであり、刻目段を持つものは6点の出土が見られる。一方、やや新しい時期の遺物も含むと見られる包含層からの出土資料では、その割合が逆転する(図 318)。5の甕が出土した6-125土坑は、6-123溝を隔てた北側の遺構が希薄になる場所で検出されていることから、弥生時代前期前半の遺物を含む遺構で構成される集落よりも、やや新しい時期に形成された可能性が考えられよう。一方、7は頸部の段に刻目を持つ刻目段甕になると考えられ、他の遺構出土資料と同じ古い様相を持つ。ただし、出土した6-178土坑状変形は、1を出土した6-179土坑状変形と同じく、地震による変形構造が土坑状を呈しているものであり、人為的な遺構ではない。これについては本章第10項において詳述する。

## 5. 包含層出土遺物

東側遺構群の検出の際には、第8a-1層、および第8a-2層から多くの遺物が出土した。東側遺構群においては、西側遺構群の微高地1を形成した第8b-1層のように、第8a-1・8a-2層を明瞭に分ける自然堆積層がなく、両層は連続した古土壌として形成されているため、一部を除いて確実な分層が難しい。掘削自体も同時に行っている場所がほとんどであるため、包含層遺物については、両層を一括した第8a層出土資料として扱っている。また、突帯文土器を多く出土した3-267・268溝が検出された3区や、集落の西端を限る5区など、遺構の分布や性格により、含まれる遺物の内容に若干の差異が存在する可能性が考えられた、そこで包含層出土遺物に関しても、調査区ごとに図示している。

### ・3区の第8a層出土遺物

図 298～300 に示した。1～3は縄文土器である。1・2は突帯文土器深鉢の口縁部および胴部。3は浅鉢か。くの字形に屈曲する胴部上半にへら状の工具で文様が描かれる。三叉状の沈線は榎原式文様にも見えるが、小片のため不明。他の土器は全て弥生土器と考えられ、4～11は全て口縁端部に刻目の入る甕。これらは、頸部に段を持つもの(4・5)、頸部もしくはやや下がった胴部上半に1条もしくは2条の沈線を持つもの(6～8)、段や沈線の確認されない無文のもの(9～11)に分けることができる。8のみ角閃石を比較的多く含み、弥生前期土器には珍しく、生駒西麓産胎土と考えられる。

12～25は壺。口頸部境に段を持つもの(12・20)と、無文のもの(19・21)、4条の沈線が入るもの(22)がある。14は羽状文の上部に木葉文を入れるもので、木葉文は2重の縦位区画線で分けられている。区画線と羽状文の交点付近には直径1.5mmくらいの円形刺突がある。15・16には重弧文が見られるが、16は上部の重弧文の下に対向するような形で重弧文が描かれていると考えられ、上向きと下向きの2種の重弧文を組み合わせた施文が考えられる。胴部文様は木葉文(14)のほか、重弧文(15・16)があり、削り出し突帯を持つもの(17・18)も含まれる。18の突帯上は斜格子文で飾られる。26はミニチュア土器の口縁部。図 246-5 に似る。27は高杯脚部。杯部との境には無文の突帯を持つ。28～49は底部資料である。29のようにくぼみ底のものも見られる。また49は建物26のプラン内から出土した壺の底部であるが(図 253)、胴部下半に焼成破裂痕と見られる破損痕跡を持つ。これについては、第6章第3節で詳述する。

石器については、図 300 に示した。50は、緑泥片岩の石庖丁である。直線的な背面を持ち、刃部は



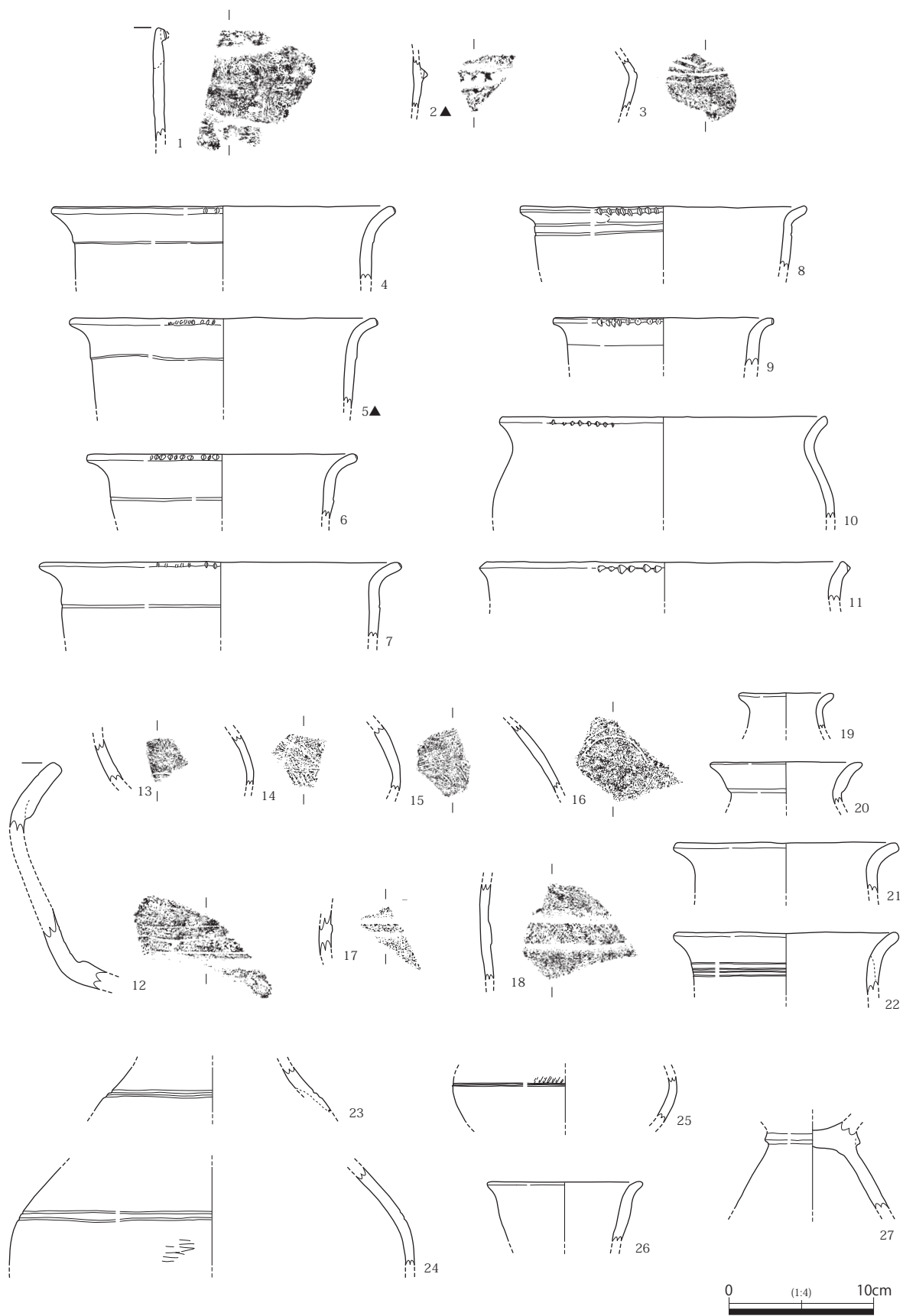


图 298 3区第8a層 出土遺物実測図1

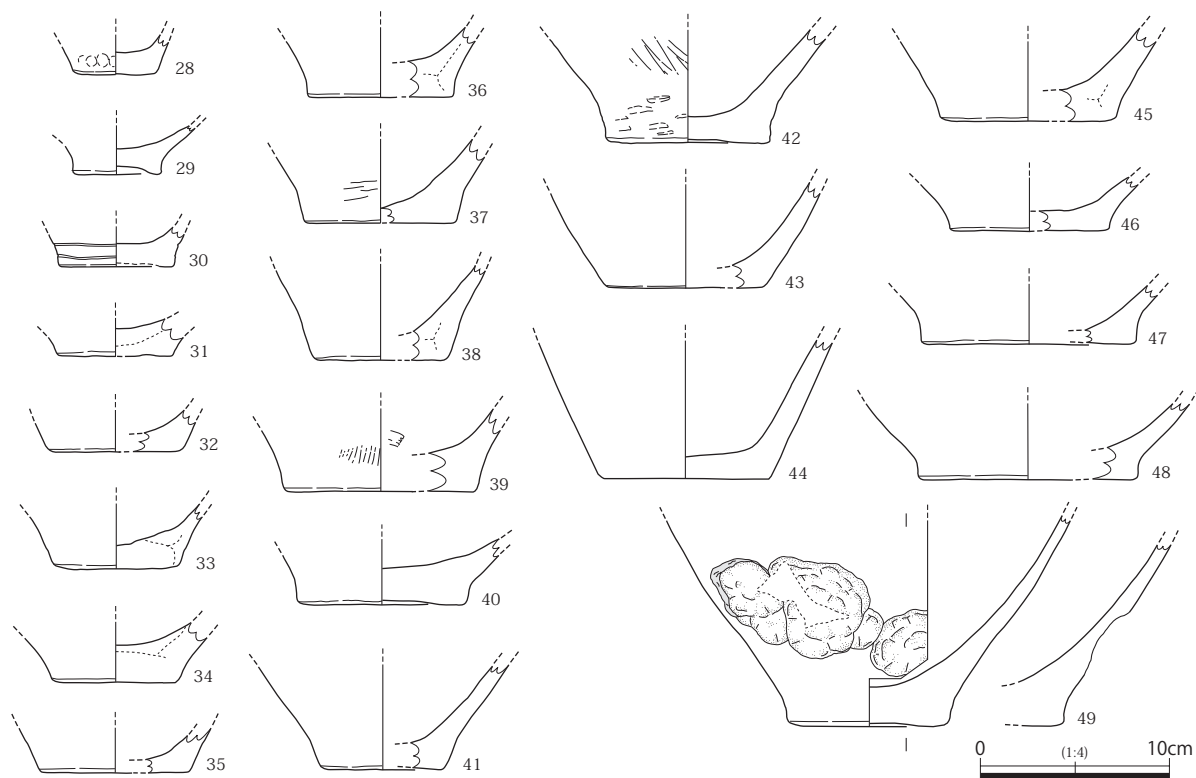


図 299 3区第8a層 出土遺物実測図2

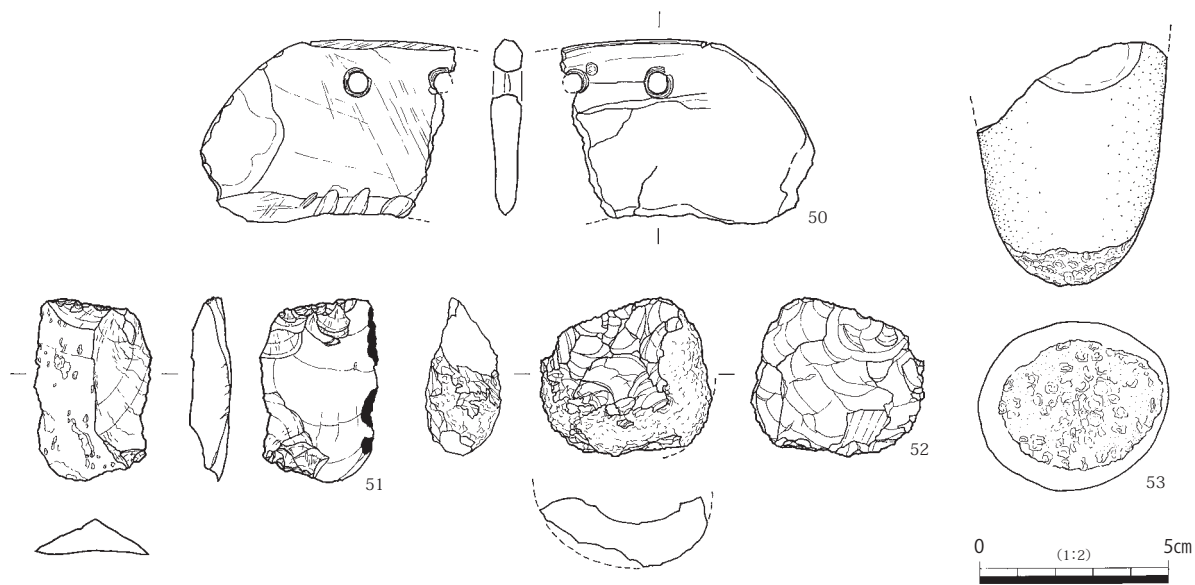


図 300 3区第8a層 出土遺物実測図3

磨り減ってわずかに内湾する。穿孔間隔は 2.3cm で、両側から開けられている。刃部には幅 5 mm ほどの溝状の摩擦痕が斜めに入っており、破損後に砥石などへ転用されたと考えられる。51 はサヌカイトの剥片で、重さは 13.40 g である。背面に広い範囲で自然面を残す。両端につぶれが確認され、楔形石器の剥片であると考えられるが、剥片を取る際の両極技法によって生じたものである可能性もある。52 はチャートの原石である。剥離面は青灰色を呈し、細かく剥離する。自然面には敲打痕が多く見られ、敲打石として使用されていた可能性も考えられるが不明である。53 は輝緑岩製の磨製石斧の基部と考えられるが、基端面に顕著な敲打痕が認められる。敲打痕が調整面の上から付いていることから、破損後の石斧を敲打石として転用した可能性などが考えられる。

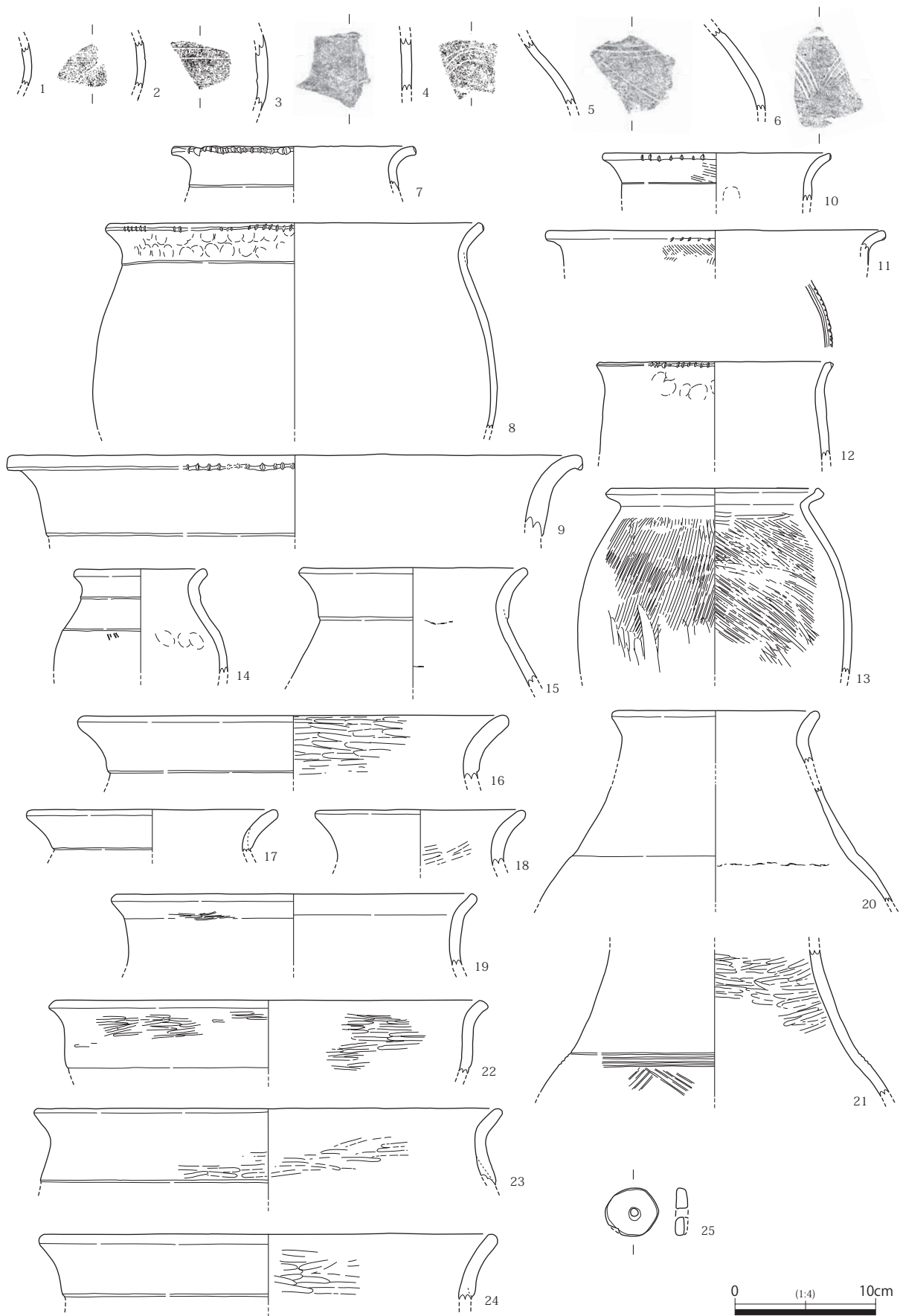


图 301 5区第8a層 出土遺物実測図（東側遺構群）1

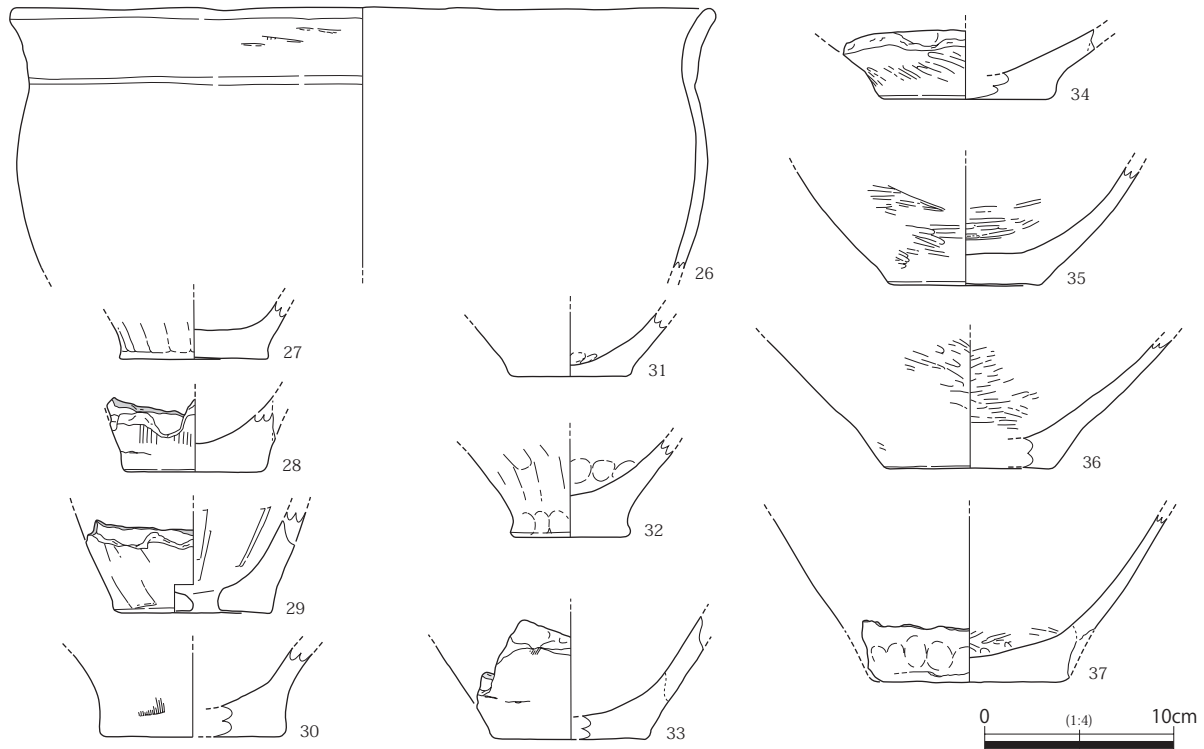


図 302 5区第8a層 出土遺物実測図（東側遺構群）2

・5区第8a層出土遺物

図 301～303 に示した。5区第8a層出土遺物については、出土地点によって〈東側遺構群〉と〈中央遺構群〉に分けて図示している。東側遺構群で出土した土器は全て弥生土器で、7～13は甕。時期の下る資料と考えられる13を除いて全て口縁端部に刻目が入られる。頸部に段を持つもの（7～9）、頸部もしくはやや下がった胴部上半に1条の沈線を持つもの（10）、段や沈線の確認されない無文のもの（11・12）に分けることができる。8は、胴部が張る甕で最大径は胴部中ほどにある。頸部には指頭圧痕が目立ち、段は削り出しにより形成される。9は口径40cmを測る大型品で鉢の可能性も考えられる。やや垂下するように突出させた口縁下端部に刻目を入れる。内外面にはナデ消されているものの、ハケメが残存し、内面には口縁部まで黒斑が認められる。12は口縁部の外反が非常に弱い特殊な形状を持つのみならず、口縁端部上面には沈線が巡らされており、文様面でも特殊である。胎土は黄白色を呈する緻密なもので、搬入品の可能性が考えられた。同じく白色系の胎土を持つ図 250-5・図 265-29 とともに胎土分析を行ったところ、鉱物・岩石組成のみならず、粒径組成に特徴的な傾向が見られ、搬入品としての可能性を支持する。類例については、徳島県庄・蔵本遺跡に見られる（徳島大学1998：図 102-21）。頸部に一条の沈線を持ち、やや口縁部の外反が強い。また高知県田村遺跡には、最古段階の弥生土器群の中に、口縁端部に貼付け突帯を持つ直口甕がある（高知県教育委員会ほか1986：第163図 232～235）。これらの口縁上端面は貼り付けた突帯との間がわずかに窪み、沈線状に見える。これらの甕と比べ、12の口縁部の外反はやや目立つが、あるいはこうした甕の系譜上にあるのではないかと想起される。13は内外面ともにハケメが目立つ甕で、くの字状に屈曲する口縁部は端部を上方につまみ上げている。Ⅲ様式に属する資料と考えられる。

図 301- 1～6、14～21は壺である。口頸部境に段を持つもの（14～17）と、無文のもの（18～20）がある。胴部文様は重弧文（4・6）のほか、木葉文（1）、山形文（5・21）、沈線文間に弱い

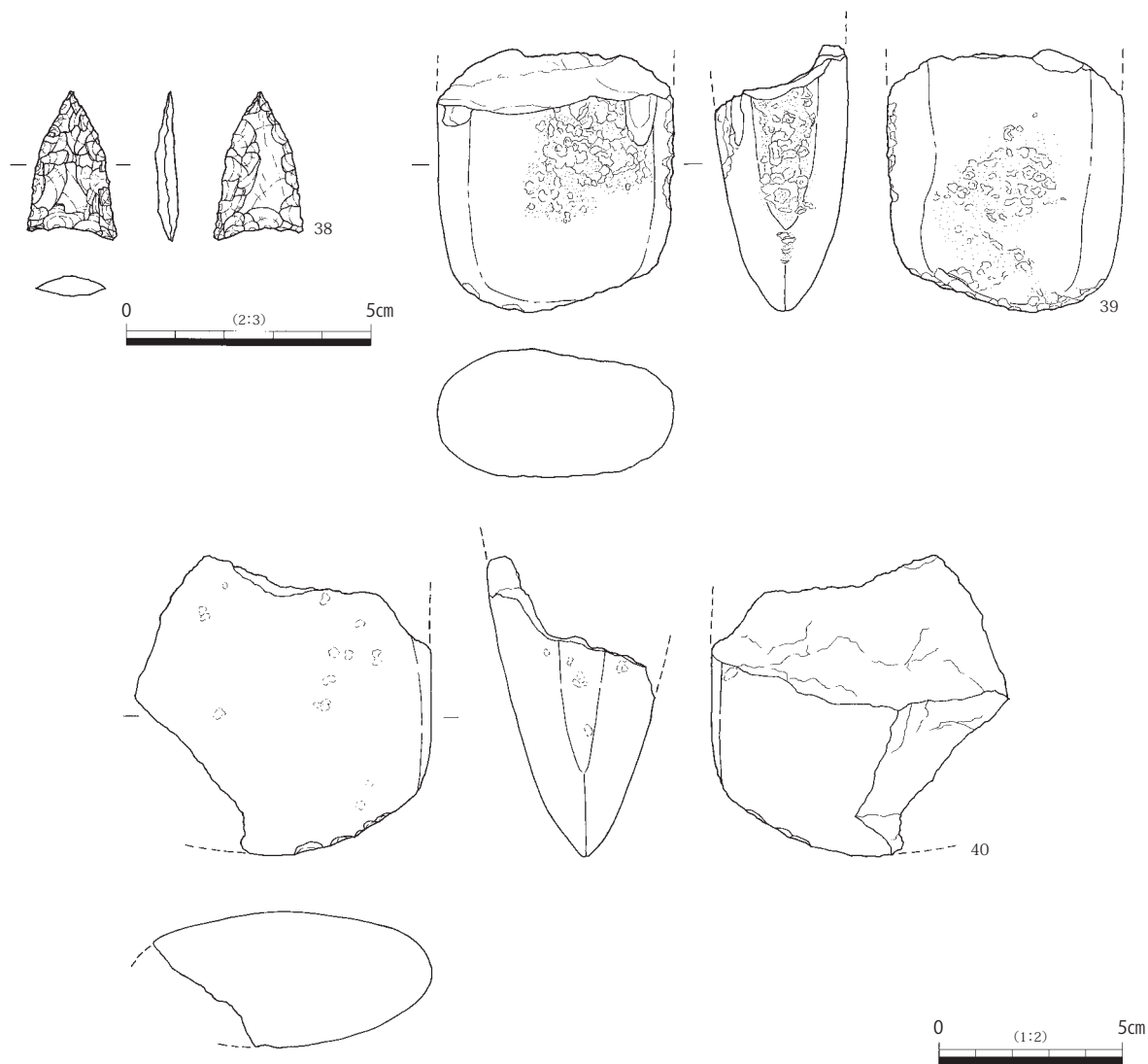
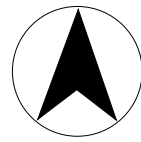


図303 5区第8a層 出土遺物実測図（東側遺構群）3

刻みを入れたもの（2）、区画線と考えられる2重の縦線（3）がある。14は口径10cm以下の小型品で、頸胴部境には胴部の方が高い逆段差があるように見えるが、段差は弱く沈線の可能性もある。胴部には4条の沈線が斜位に配されているが、欠損により下部は確認できない。19は大きく口の開いた壺として図化した。

22～24・26は鉢である。22～24は内外面を丁寧にミガキ調整し、頸部に段を持つ。いずれも段直下で破損しており、粘土接合部位を利用した段形成があったことを示唆する。26も頸部に段を持つ鉢だが、磨耗が著しく表面調整は不明。口縁部外面には工具のアタリ痕がある。25は土製紡錘車。

27は甕の底部と思われるが、径1mm程度の長石粒を多く含み、流紋岩と思われる有色鉱物も含まれている。特に土器の破断面には砂粒が目立ち、焼成不良を示すと見られる黒色化層が認められ、触れると容易に崩れそうである。ただし、器表は水挽きされたのか、粒度の細かい粘土がスリップ状に被覆しており一見精良に見える。以上の特徴は図310-17の甕などと近似し、搬入品である可能性が高い。29は一孔を持つ甕の底部で、焼成後に外面からの敲打によって穿孔している。内面にはヘラ状工具の痕跡が顕著に認められる。また、胴部下付近は粘土接合部から剥離している。他に28・33・34・37



Y=33,850

Y=33,750

X=138,650

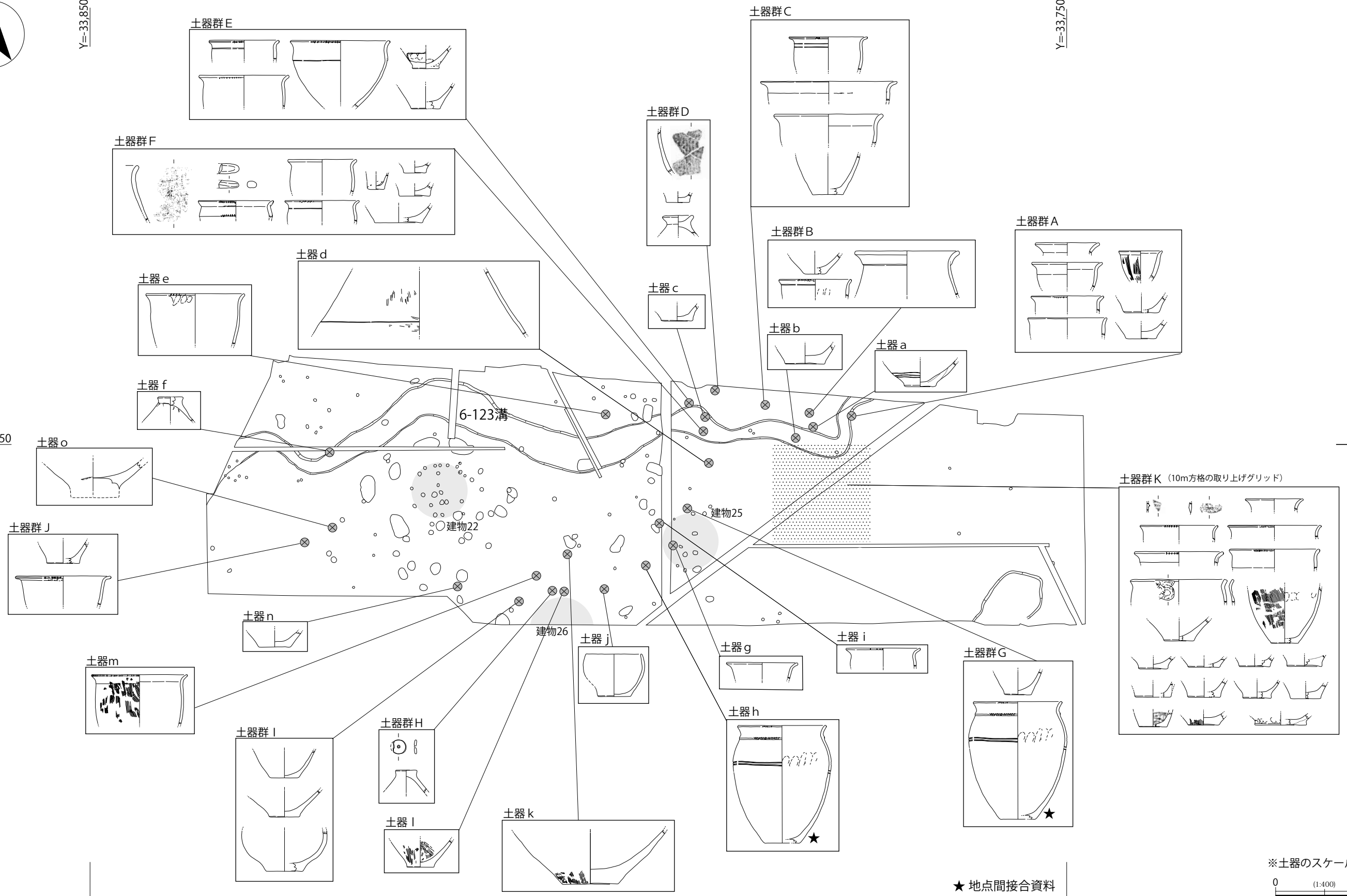
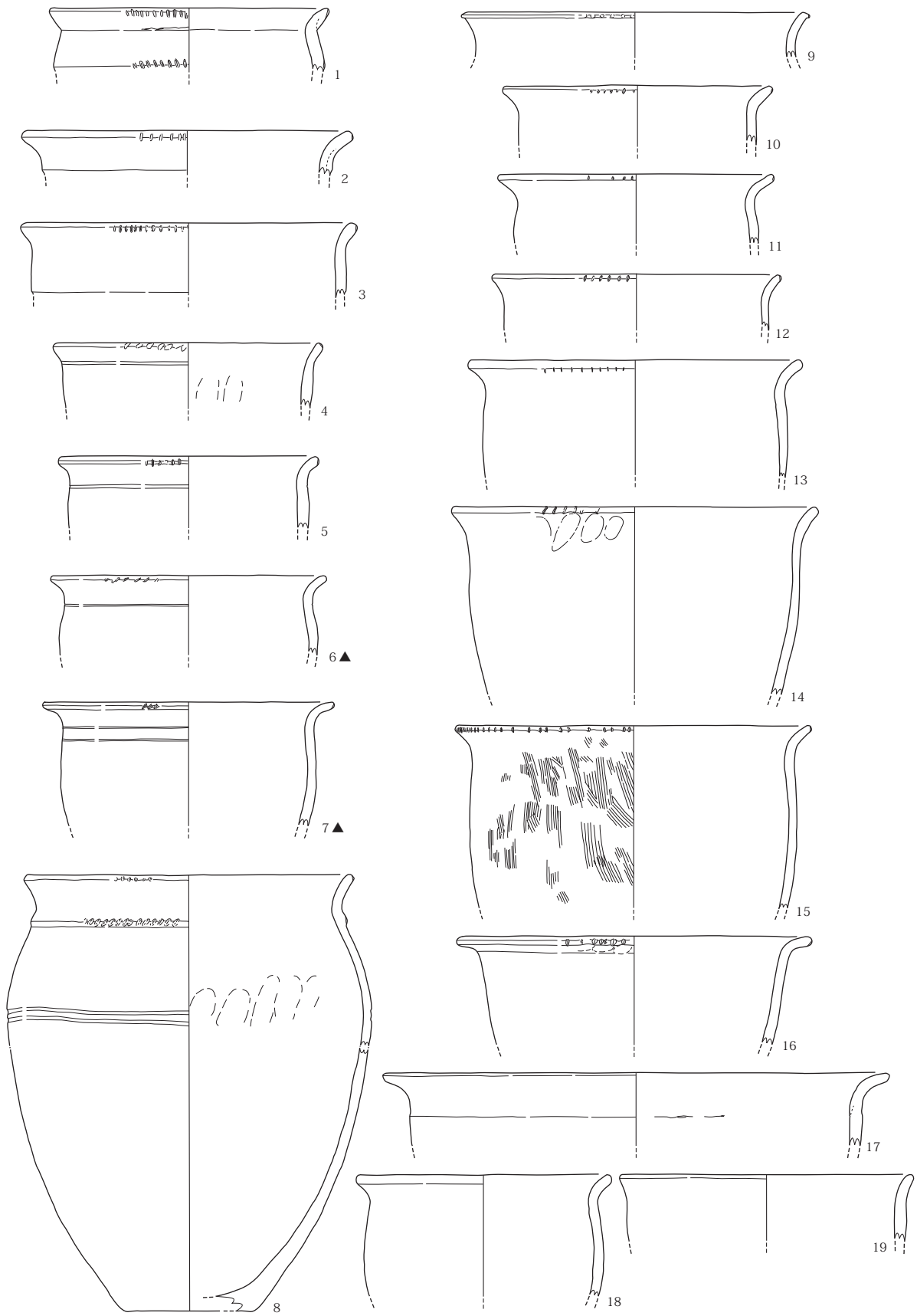
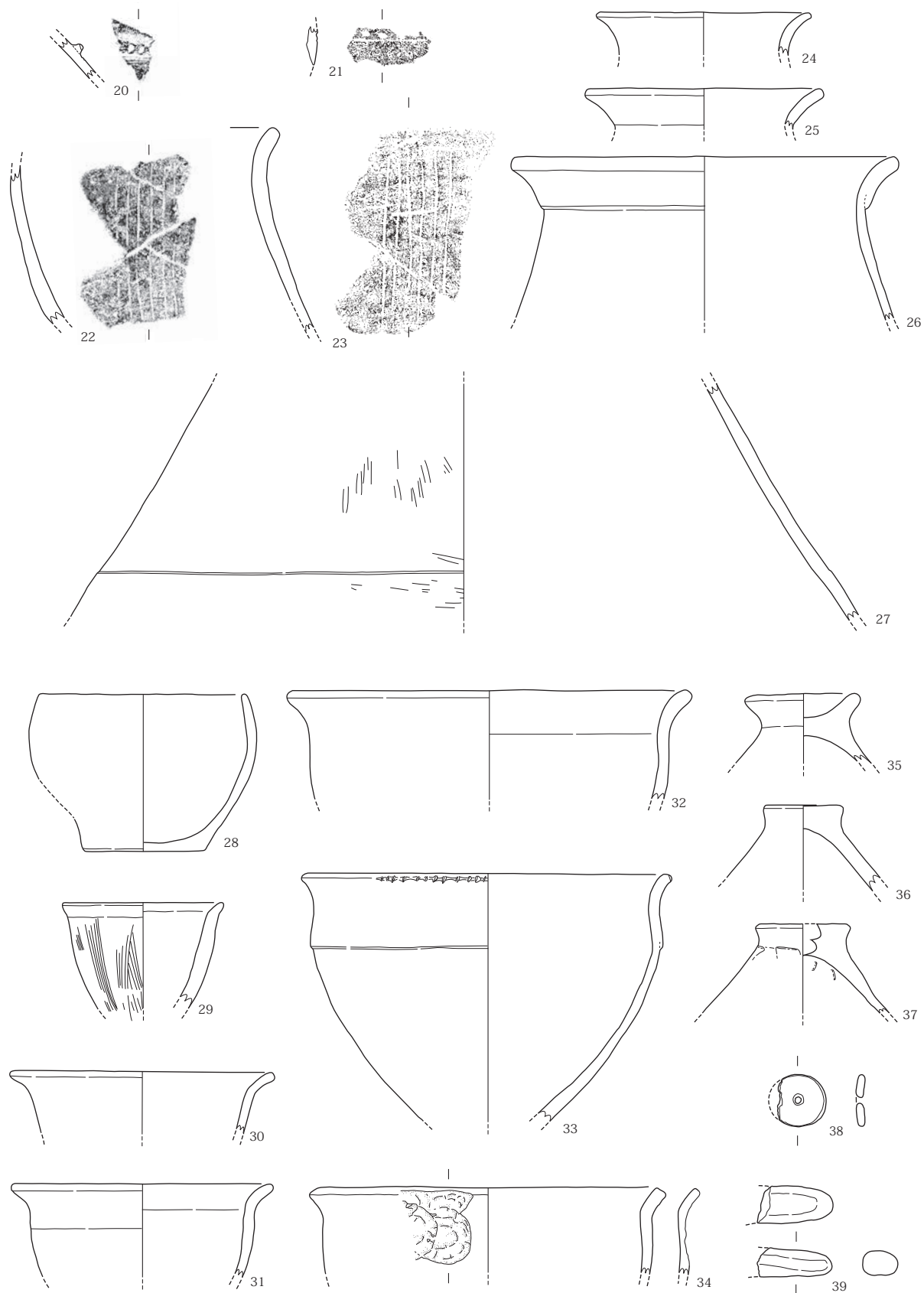


図 304 6区第8a層 出土遺物位置図



土器群 A(10・19)、土器群 B(4)、土器群 C(7・17)、土器群 E(5・13)、土器群 F(1・6・18)、土器群 G&土器 h(8)  
 土器群 J(16)、土器群 K(2・3・9・12)、土器 e(14)、土器 i(11)、土器 m(15)

图 305 6区第8a層 出土遺物実測図（出土地点記録）1

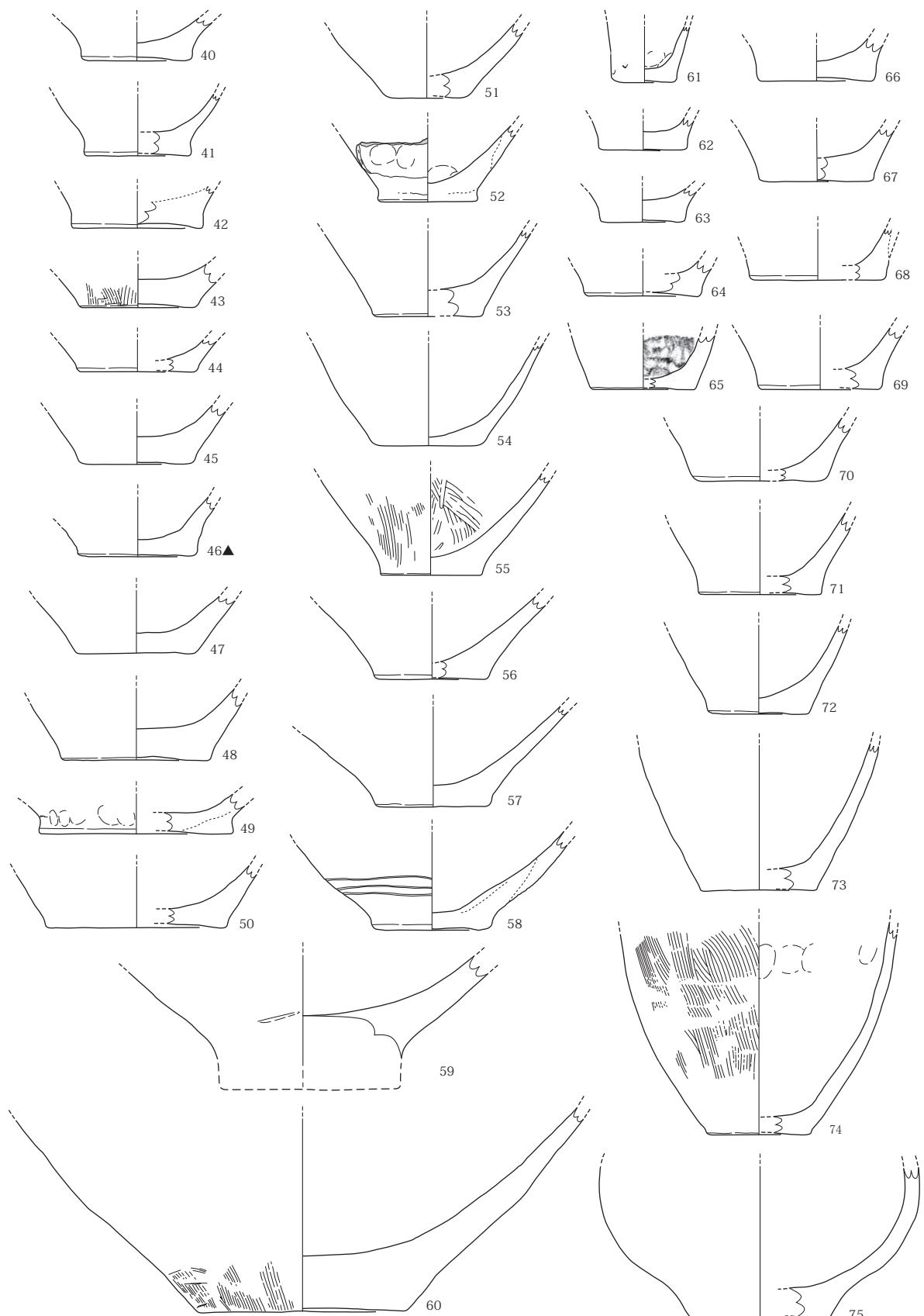


土器群 A(25・29・31)、土器群 B(26)、土器群 C(32)、土器群 D(22・35)、土器群 E(33)、土器群 F(23・39)、土器群 H(36・38)  
 土器群 K(20・21・24・34)、土器 d(27)、土器 f(37)、土器 g(30)、土器 j(28)

0 (1:4) 10cm

图 306 6区第8a層 出土遺物実測図（出土地点記録）2





土器群 A(45・70)、土器群 B(51)、土器群 C(73)、土器群 D(62)、土器群 E(52・53)、土器群 F(50・61・63・66)、土器群 G(72)  
 土器群 I(54・55・57・75)、土器群 J(71)、土器群 K(40～44・49・56・64・65・67～69・74)  
 土器 a(58)、土器 b(48)、土器 c(46)、土器 k(60)、土器 n(47)、土器 o(59)

0 (1:4) 10cm

图 307 6区第8a層 出土遺物実測図（出土地点記録）3

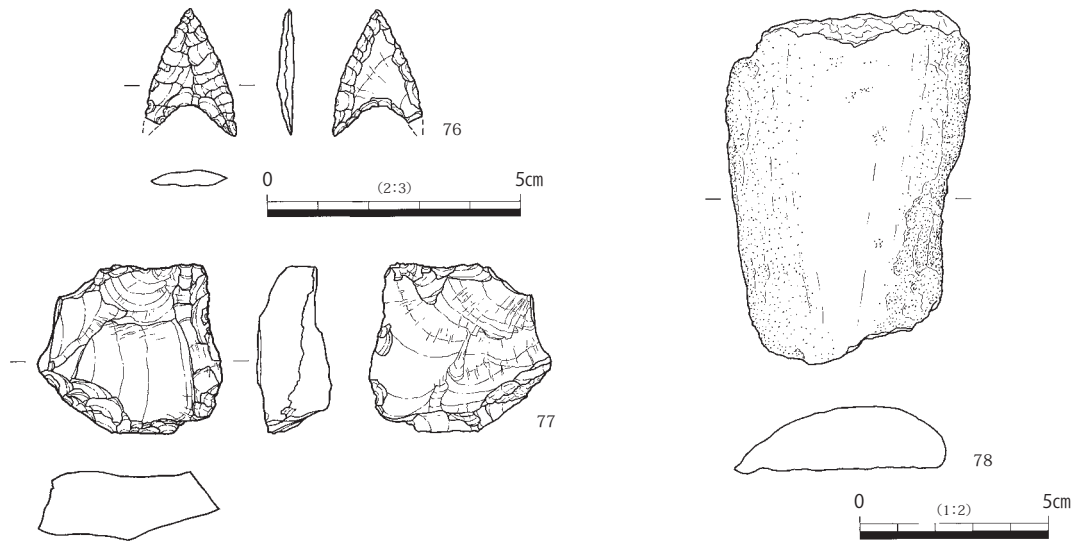


図 308 6区第8a層 出土遺物実測図（出土地点記録）4

など、接合部からの剥離痕を持つ資料は多く、全てではないが第6章第4節で詳述する。なお、35・37については、5区の南東側、5-991溝に沿って出土している（図241）。

図303-38は凹基式の石鏃であるが、基部のくぼみは弱い。裏面中央部に素材面を残す。1.93g。39・40は、ヒン岩もしくは輝緑岩の両刃石斧である。いずれも刃部のみの出土である。39は刃部角70°で重さ239.55g。表面には打痕が確認できることから、敲石として転用されていた可能性がある。40は、刃部角65°で重さ207.66g。刃部には顕著な使用痕が確認される。また部分的ではあるが、製作時のものと見られる敲打痕が確認される。

#### ・6区第8a層出土遺物（出土地点記録）

6区の調査では、包含層の除去中に多くの遺物が出土したのみならず、比較的大型の破片が多く含まれることに注意された。そこで包含層の下部から出土する遺物については、遺構検出段階において出土位置を記録した。各遺物の出土位置については図304に示し、実測図は図305～308に示した。土器は全て弥生土器と考えられ、突帯文土器などは含まれない。

図305に示したものは全て甕である。口縁端部に刻目が入るものが多く、刻目のないものは17～19の3点だけである。口縁刻目を持つ甕は、頸部に段を持つもの（1～3）、頸部もしくはやや下がった胴部上半に1条もしくは2条のへら描き沈線を持つもの（4～6）、段や沈線の確認されない無文のもの（10～14）に分けることができる。口縁部に注目すると、口縁部の外反が弱く、顕著な如意形を呈さないものがあり（3・4・5・12・14・19）、こうした特徴が、文様構成に関係なく存在することがわかる。一方で、口縁部が強く屈曲し水平に近い角度で外方に伸びるものに7・16・17があり、こちらは段を持つ甕には認められない。胎土を見ると、6と7のみは角閃石を多く含み、生駒西麓産胎土と考えられる。ただし、両者の器表は著しく磨耗していることから、確認できた沈線数はそれぞれ1条と2条で異なるものの、同一個体となる可能性は高い。

8は、土器群Gと、土器hから出土した土器片が接合して同一個体となったもので、頸部に刻目段を持ちながら、胴部の最大径付近に2条のへら描き沈線を入れる特殊な文様構成を持つ。当遺跡においては同様の資料は、他に出土していない。9は、口縁端部を摘み出して突出させており、6-123溝出土の図286-16、6-124土坑出土の図246-14などに近似する。

20～27は壺である。20は貼り付け突帯に刻目を入れ、突帯下部には2条の平行沈線を入れる。21は沈線上をやや横長で先端が丸い棒状工具によって刺突し文様としている。壺の胴部片である可能性があるが不明。22・23は黄灰色の胎土が共通するほか、いずれも頸部に強いミガキ（暗文）によって6条一単位の平行縦線を入れており、接合箇所はなかったが同一個体と考えられる。大型品で歪みも大きいため、出土部位から器形を復原することはできなかった。傾きの強い頸部と、ほとんど外反しない短い口縁部を持つ大型壺の頸部と理解したい。26は口頸部境に顕著な段を持つ大型壺。27は頸胴部境に弱い段を持つ大型壺である。

28～34は鉢である。28は緩く内湾して立ち上がる口縁部を持つ鉢。29は口縁部を軽く折り曲げて外反させた小型の鉢である。器壁は厚く、外面にはハケメを残す。30～34は如意形に外反して広がる厚い口縁部を特徴とするが、無文のものが主体だが、33のように口縁部刻目を刻み、頸胴部境に段を持つものがある。33と同様の鉢は、5-991溝でも出土しているが（図284-9）、こちらは口縁部を刻まない。34は口縁部の外反が弱い鉢で、口縁端部は方形で面を成す。口縁端部から頸部にかけて焼成破裂痕が認められ、第6章第3節にて詳述する。

35～37は甕蓋である。頂部がくぼむもの（35）と、平坦なもの（36・37）に分かれる。38は土製紡錘車。東側遺構群で出土した土製紡錘車は全部で4点（図301-25、図311-52・53）だが、全て包含層出土である。38は4点中最も薄い。39は把手状の土製品である。鉢か甕に付されていたものか。

図307には底部片をまとめて示した（40～75）。54・57には外面に黒斑が顕著に認められる。これらは焼成の際の設置面黒斑と見られ、底部中央からずれた位置に認められることから、斜位での焼成を示すものといえる。58の壺は、底部の側面に3条の沈線を入れる。60は大型の壺で、外面にはハケメが残る。顕著な黒斑の見られる底部中央部から崩れたように破損しており、焼成不完全品の可能性が考えられる。61はミニチュア土器であろうか。小型で円筒状の器体を持つ。65の内面には直径4～6mm程度の浅い窪みが無数に認められる（図版131）。土器焼成前に丸い棒状の工具で突いた痕跡かと思われるが、意図するところは不明である。

図308の76～78は石器である。いずれも土器群Kに伴って出土している。76の石鏃は凹基式で、背面側は丁寧に押圧剥離し中央の稜を作り出しているものの、腹面側は周縁加工のみで素材面を大きく残す。重さは0.96g。77は楔形石器で、上下に潰れが見られ背面には部分的に自然面が残存する。重さ48.62gと比較的大きい。78は緑泥片岩で、柱状となる形状から石棒もしくは石庖丁の素材である可能性があるが、明瞭な調整痕などは見られない。

#### ・6区の第8a層出土遺物

以上まで、6区の包含層遺物で出土位置を記録したものについて報告した。上記の遺物以外に包含層掘削中に取り上げられ、出土位置を記録できなかった遺物も多数存在しており、これらについては、図310～315に示す。

1・2・6・7は、突帯文土器である。いずれも深鉢と考えられるが、1・6のように、刻目の入らない断面三角形の突帯を持つものと、2・7のように、かまぼこ形の突帯に右D字の刻目を施すものがある。いずれも口縁端部からやや下がった位置に突帯を設ける。胎土は6・7が生駒西麓産、1・2が黄灰色の在地胎土と考えられる。3は凹線が2条もしくは3条入る土器片で、4と近似する。3は黄灰色、4は暗灰色と胎土の発色が異なっているが、出土位置も近接しており同一個体の可能性がある。

4・5は浮線文土器である。東日本に分布の集中がある土器であるが、西日本でも類例が増加しつつ

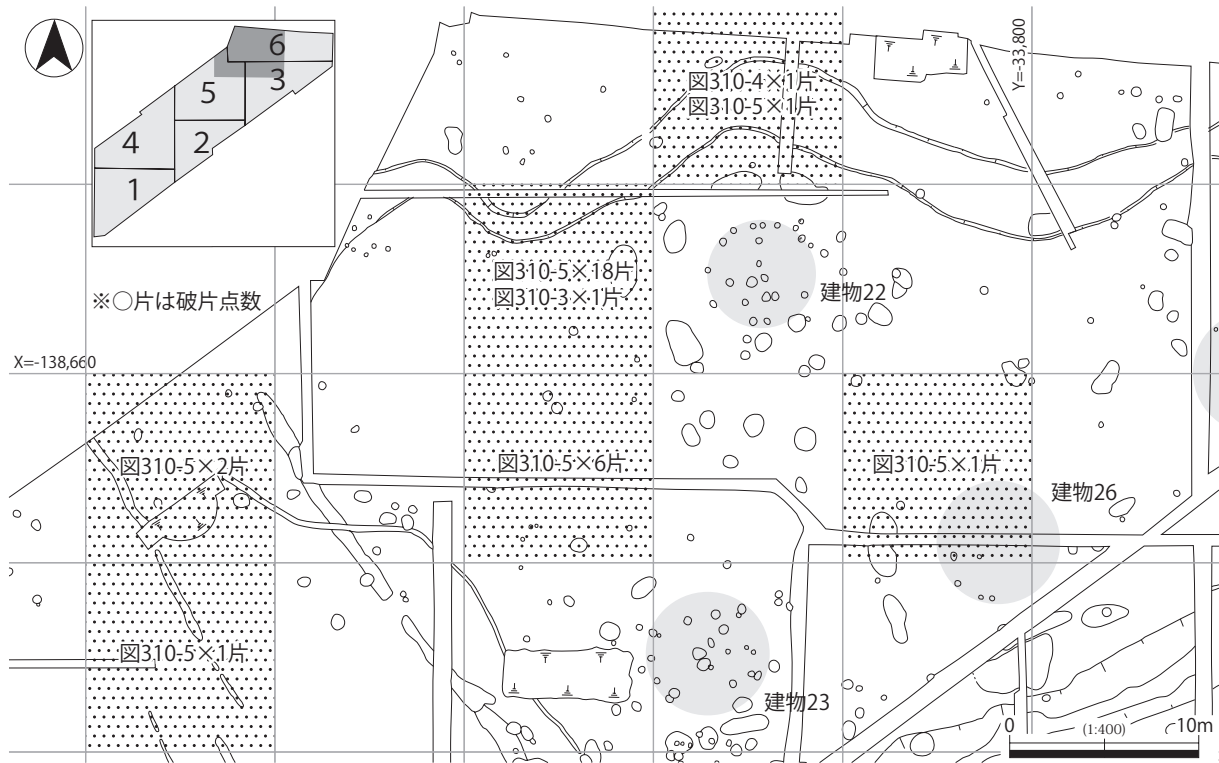


図 309 浮線文土器片出土分布

ある。府内では四ツ池、小阪遺跡などの泉州地域、長原、池島・福万寺遺跡などの中河内地域の遺跡で出土が見られるが、より西方地域では、岡山県百間川沢田遺跡や鳥取県智頭枕田遺跡、徳島県三谷遺跡まで分布を広げている（三好 1992、小林青 1999、智頭町教育委員会 2006、大文セ 2008b）。これらの土器は、縄文時代晩期から弥生時代前期にかけての遺物に伴って少数が出土するが、その性格については明らかになっていない。浮線文土器にはいくつかの地方型式が存在しており、本例に近似するものは長野県の氷遺跡を標式遺跡とする氷式である。両者とも胴部中ほどから口縁部にかけて曲線的な浮線文で飾る浅鉢で、文様構成も似ると考えられるが、胴部下半の無文部位を区画する2条の区画文様が、4では凹線文、5は浮線文となっている。

遺存部位の多い5については、径50mほどの範囲にかけて破片が出土している（図309）。こうした出土状況からは、意図的な散布行為が想起されるが、建物22に西接する取り上げ区画から18片、さらにその南方の区画からも6片と、全体の85%に達する数が出土している。この分布中心から東西20mほどの範囲で出土しているのは、1～2片のみであり、攪拌などによる二次的な移動も否定し難いため、積極的な評価は控える。また同様の出土状況を考えると、4について出土分布の中心を当調査地外の北側に持つ可能性を想定することもできよう。

5には、外面の全面と、内面の口縁部からやや下がった位置に赤彩が認められる。特に外面は、ススなどで下地処理した後にペースト状の水銀を塗布し、その上から水銀朱を混和した漆を塗ることによって赤彩していると考えられ（第7章第5節参照）、赤彩部が塗膜状を呈している。緩く内湾する口縁部は眼鏡状の浮線文で飾られ、底部はくぼみ底となる。胎土分析では、他の資料と大きく異なる鉱物・岩石組成を持っていることが確認され、その形式的特徴と合わせて搬入品と考えられる。中部高地を分布主体とする浮線文土器の出土は、他の搬入品と考えられる弥生土器や、讃岐地方を原産とするサヌカイトの出土を含め、当遺跡の集落における広域の交易・交流関係を示すものといえよう。

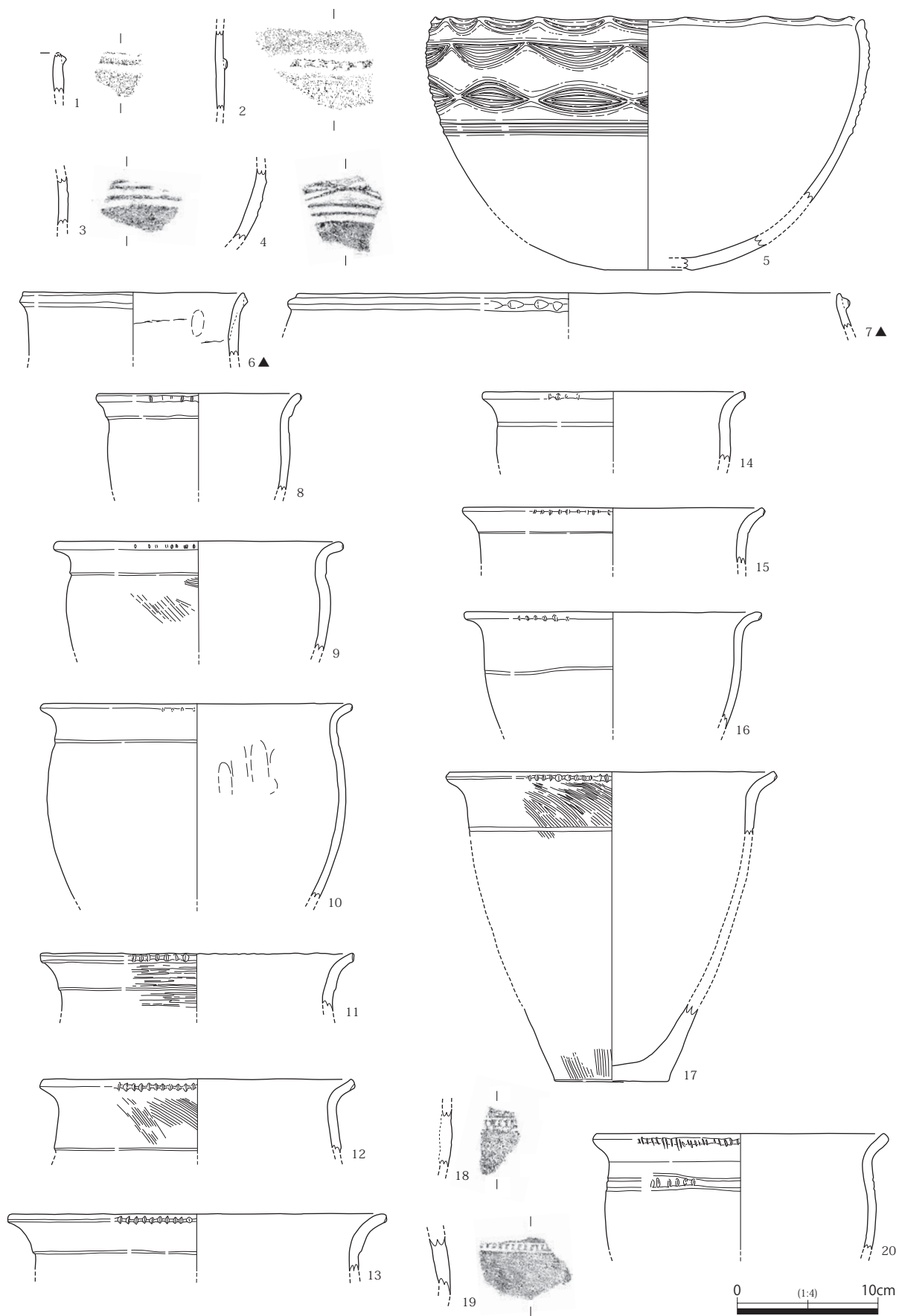


图 310 6区第8a层 出土遗物实测图 1

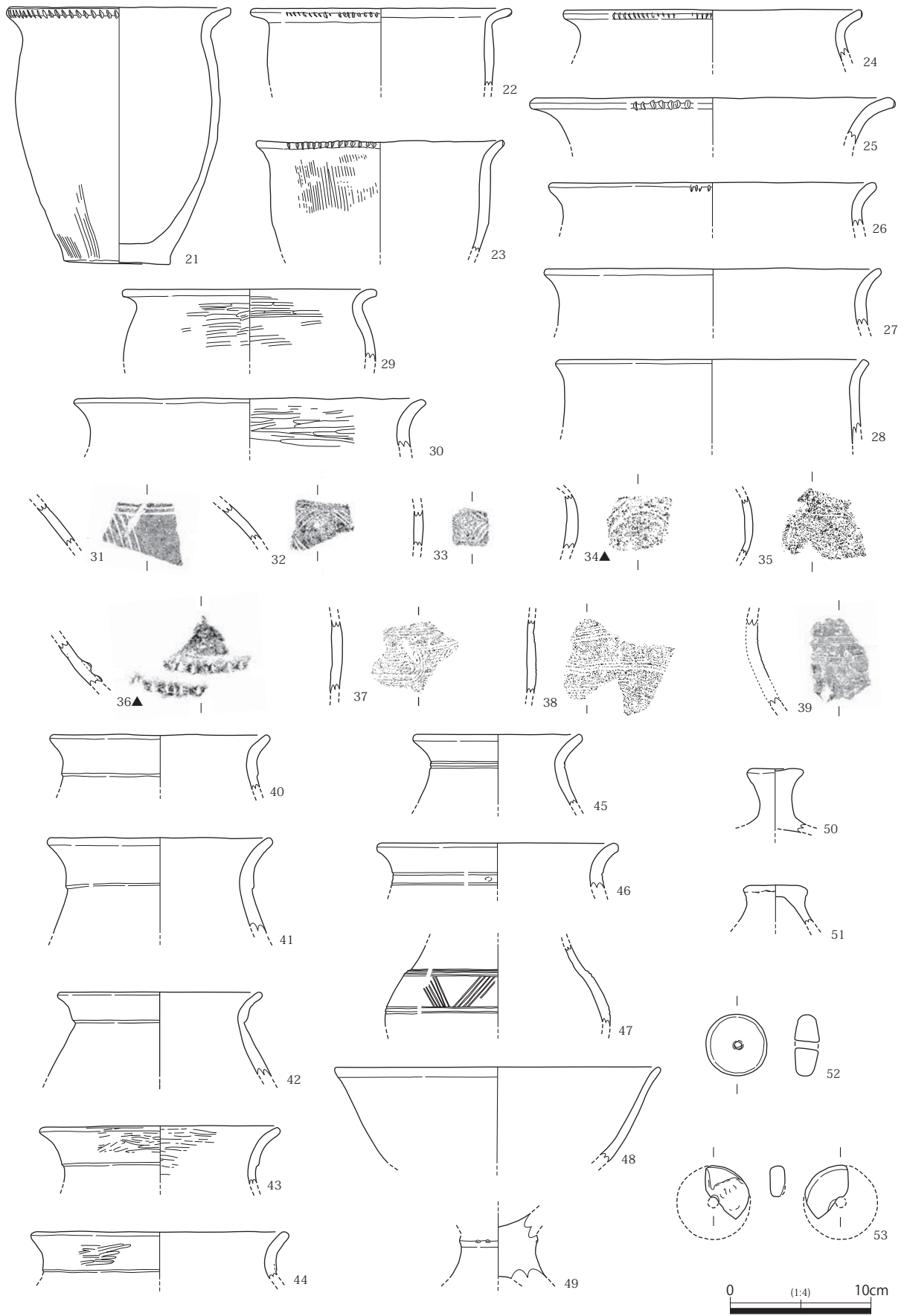


图 311 6区第8a层 出土遗物实测图2

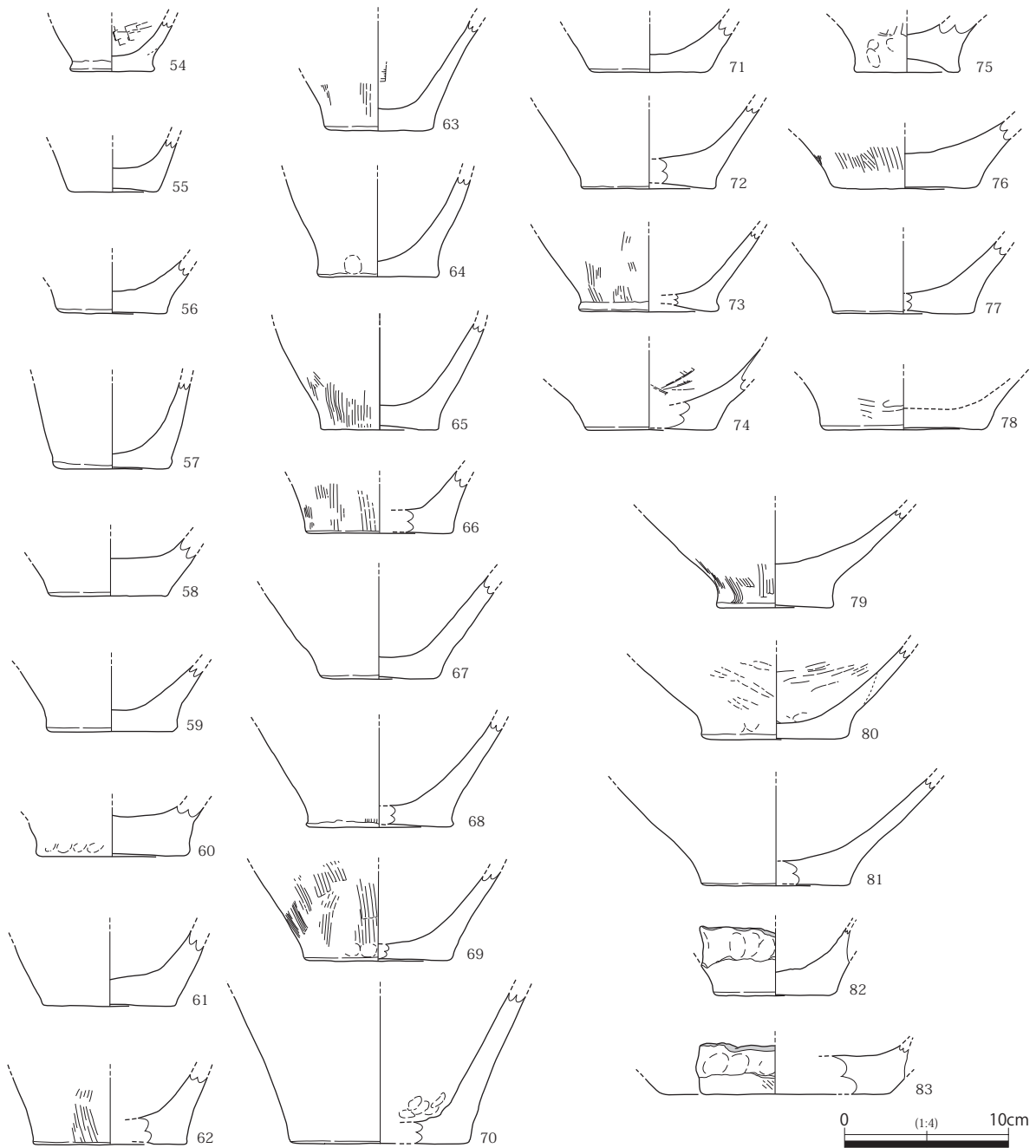


図 312 6区第8a層 出土遺物実測図3

8～28は、弥生土器の甕である。出土位置を記録した包含層出土資料（図305）と同様に、口縁端部に刻目を入れる甕が主体であり、無刻みのものは27・28のみである。刻目を入れる甕は、頸部に段を持つもの（8～13）、頸部もしくはやや下がった胴部上半に1条の沈線を持つもの（14～17）、2条の沈線間に刻目を入れるもの（18～20）、段や沈線の確認されない無文のもの（21～23）に分けることができる（24～26については頸部以下を欠損しているため不明）。

29・30は鉢と考えられ、器表を丁寧にミガキ調整している。29は、図281-7に類似する鉢であろうか。30はおそらく頸部に段を持つ鉢と考えられるが、粘土接合部でもある段部で折れている。

31～47は弥生土器の壺である。胴部や頸部片には、細い沈線で木葉文や重弧文が描かれるもの（31～35）のように前期前半と考えられるものだが、2条の貼り付け突帯を持つもの（36）や、櫛描直線文や扇形文を持つもの（37～39）など、前期新段階や中期まで下る資料も含まれる。6区においては

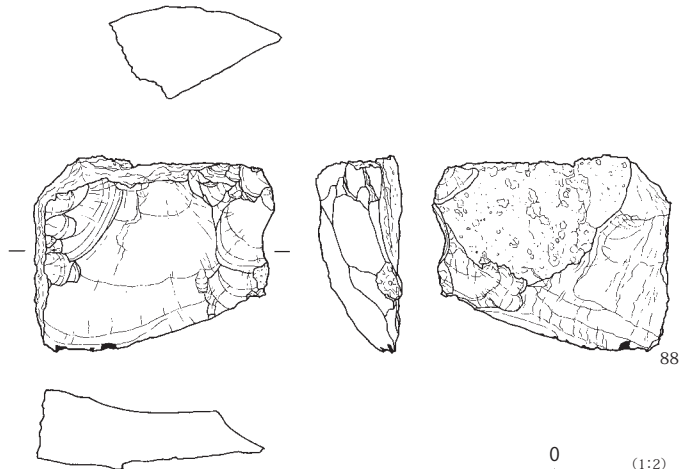
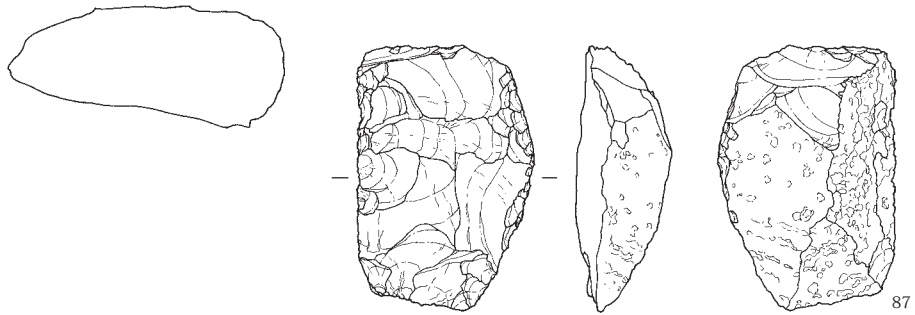
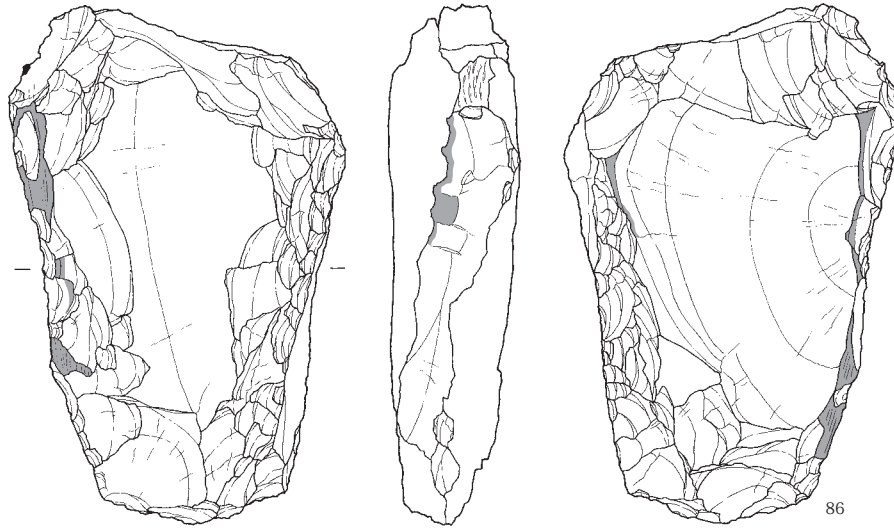
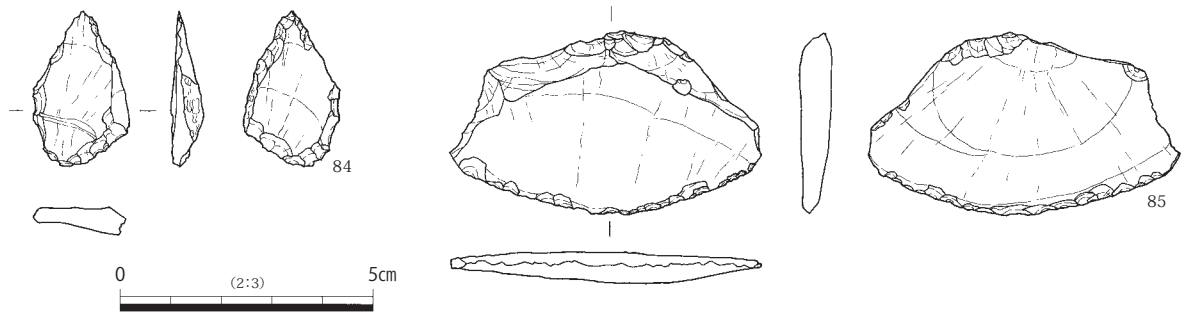
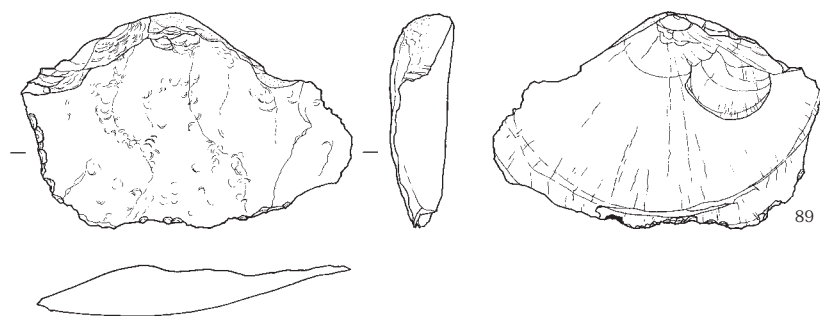
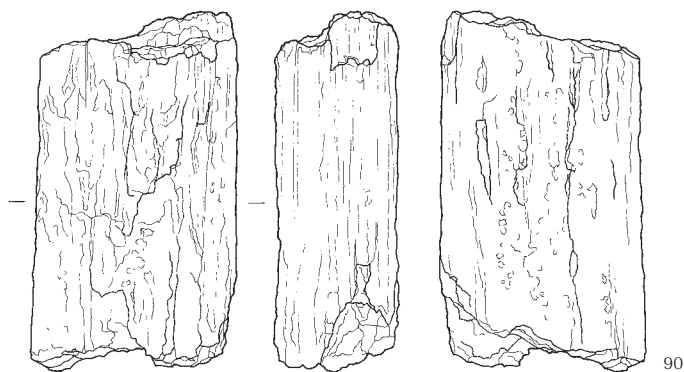


图 313 6区第8a层 出土遗物实测图4

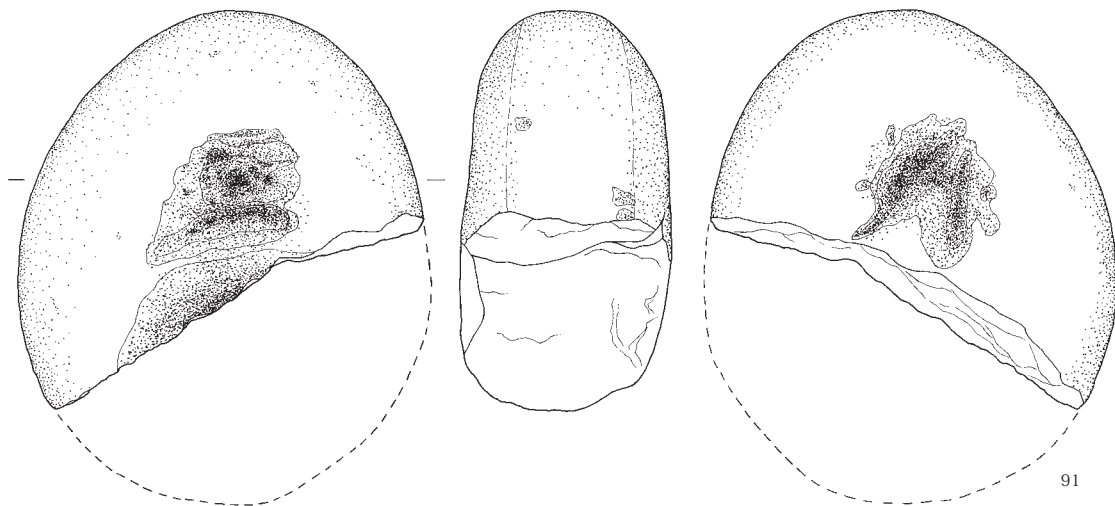
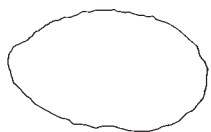




89



90



91

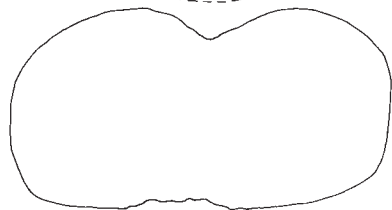


图 314 6区第8a层 出土遗物实测图 5

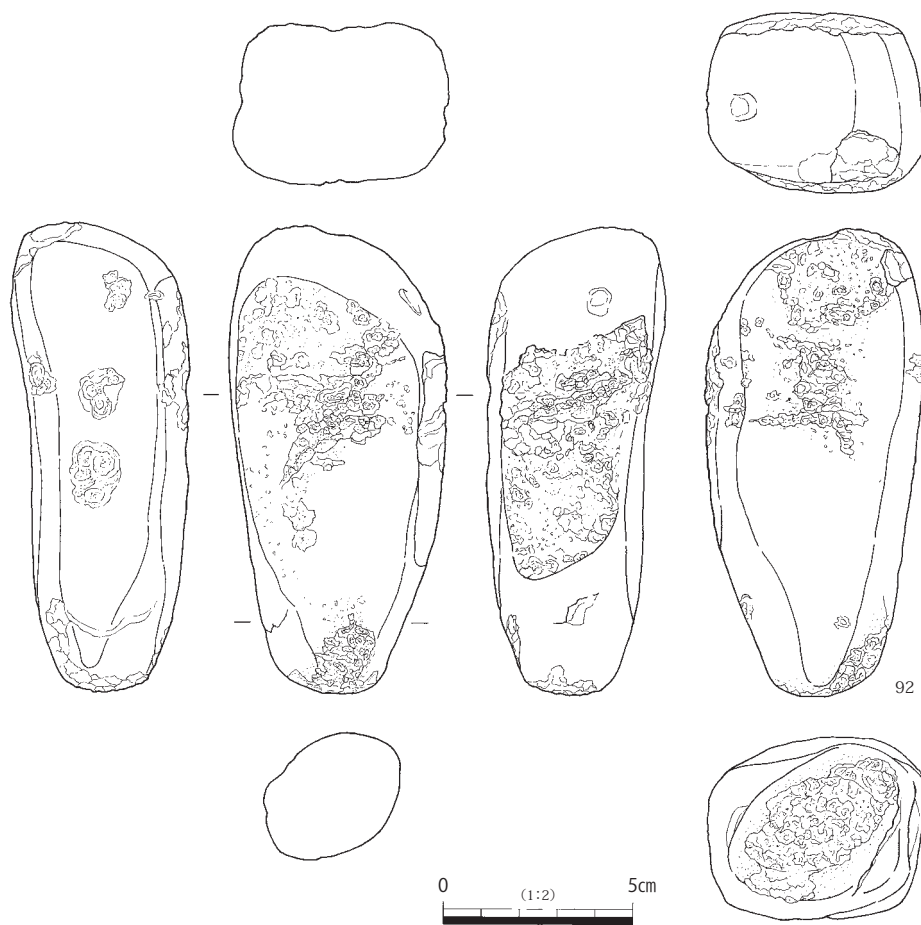


図 315 6区第8a層 出土遺物実測図6

調査地内で相対的高所に位置するため、弥生時代前期包含層である第8a-2層が直上の第8a-1層に攪拌され残存状態が悪い（両者の区別は困難であり、第8a層として掘削、遺物取り上げを行っている）。中期まで下る可能性のある遺物については、西側遺構群で検出された集落付近から出土する遺物と時期的にも近似するため、これらの上層遺物が混入したものと理解したい。口頸部境には、段を持つもの（40～44）と、2条の沈線を持つもの（45・46）がある。47は頸胴部境の沈線と胴部の沈線間を斜位のへら描き直線文によって飾る。48・49は高杯。同一個体の可能性がある。49の脚部は杯部との境目の突帯に細かい刻目を入れる。50・51は甕蓋。50の頂部は上方へ大きく伸び、つまみとしての形状を有している。52・53は土製紡錘車である。両者ともに比較的厚い。

石器は図313～315に示した。84は石鏃である。サヌカイト製で重さは2.71g。側面に自然面を残しており、縦長の剥片素材の側縁を加工して製作したものと考えられる。85はスクレイパーで、背部は潰され、刃部は表裏交互に調整されている。86・87はサヌカイトの打製石斧で、86の側面には潰れと、部分的に磨耗痕が確認される。重さは495.28g。87は、背面に広い範囲で自然面を残す。刃部には使用による摩滅が見られる。また、基部の両側には潰れが見られ、特に顕著な潰れは基端側に確認される。斧柄への装着部分と考えられよう。86.04g。88・89はサヌカイトの石核と微細剥離痕のある剥片（MF）である。89の上部には古い敲打痕が見られる。90は結晶片岩の石棒。91は砂岩の凹石。中央のくぼみには深さ8mm程度の短い溝状の磨耗痕が見られる。92は敲石で、各面に打痕が確認される。

### 第3項 小結

以上までで、第8b面東側遺構群において確認された成果を述べた。集落遺構に伴って、近畿地方でも稀に見る古相を示す弥生土器が出土したこと、3-267・268溝での突帯文土器と弥生土器の共伴関係、焼成失敗品や焼土坑が示す集落内での土器生産の可能性など、得られた成果は多い。ここで小結として整理しておきたい。

#### 1. 東側遺構群出土遺物について

ここでは、東側遺構群から出土した遺物について整理し、数量的な分析・検討を行う。図316は東側遺構群より出土した遺物のうち、図化可能であった土器について、時期別に計数したものである。弥生前期土器が主体

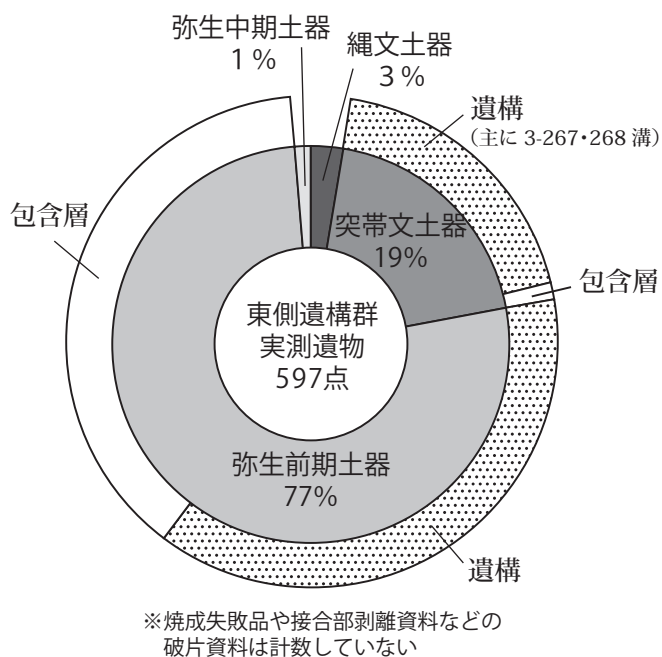


図316 東側遺構群 時期別土器数量

を占めており、第8b面で検出された東側遺構群の中心時期が弥生時代前期にあることを再確認できる。一方、弥生前期土器が遺構と包含層からほぼ同数出土しているのに対し、突帯文土器については包含層からの出土はほとんどなく、ほぼ全てが遺構からの出土である。さらに遺構からの出土遺物の内訳に関しても、前述したように3-267・268溝に出土が集中しており（表5）、改めて同溝の埋没時期と過程に注意が引かれる。

また、弥生土器に関しては、多くはないものの中期に下る遺物も出土している。中には遺構から出土したものもあるが（図296）、わずかな数量である上に遺構分布が集中し、遺構間の切り合い関係でも上位になることから、後世の土地利用過程において形成された遺構と、それに含まれる遺物としての評価が妥当であろう。

#### ・土器胎土

出土した土器のうち、茶褐色で角閃石などの有色鉱物を多く含む胎土を「生駒西麓産胎土」として抽出した結果、突帯文土器では、ほぼ半数が同胎土を持つことが確認できた（表6）。河内平野の中ほどに位置する遺跡群では、同時期の突帯文土器においては生駒西麓産胎土が主体を占める状況が普遍的に見られることに比べると、当遺跡の様相は異質ともいえる。生駒西麓産胎土以外の「非生駒西麓産胎土」については、色調などから数種あることが想定されるが、その中で主体を占める黄灰色胎土について胎土分析を行った（第7章第4節 試料No.4・5・8）。結果として、在地性が高いとされた弥生土器の胎土と非常に近似していることが確認され、これらの突帯文土器が遺跡周辺の沖積粘土を用いて製作されていることが想定された。ただし、これをもって両者の製作主体の関係性を過大に評価することはできない。同一の河川流域に堆積する沖積粘土は、同じ地質背景を持っていることになり、岩石・鉱物組成面では近似した特長を見せることが予測されるからである。分析例の増加を待って再検討したい。また、胎土によって突帯上の刻目施文に相違する傾向があることは、先述した通りである（図278）。

一方の弥生土器については、生駒西麓産胎土を持つものは実測土器中に7点しか認められない。遺構から出土したものは、図250-7の1点のみで、あとの6点は第8a層（包含層）からの出土である。当

遺跡では、焼成失敗品の出土などから集落内での弥生土器製作が想定されるところであるが、その素地土としては、周辺の沖積粘土などが選択されたと考えられよう。次項で述べる中央遺構群では〈不定形の土坑〉が多数検出されており、これが粘土採掘坑である可能性もある。ただし弥生土器の中には、周辺の地質背景には由来しない岩石・鉱物組成や、異質な粒径組成を持つ胎土を持つものがあり、土器の形態的特徴も踏まえて他地域からの搬入品が含まれていることが分かる。今のところ、これらの搬入品の故地は特定し得ないが、讃岐地方原産のサヌカイトが一定量含まれることから考えても、弥生土器の伝播ルートである瀬戸内海沿岸地域からの搬入が意識される。

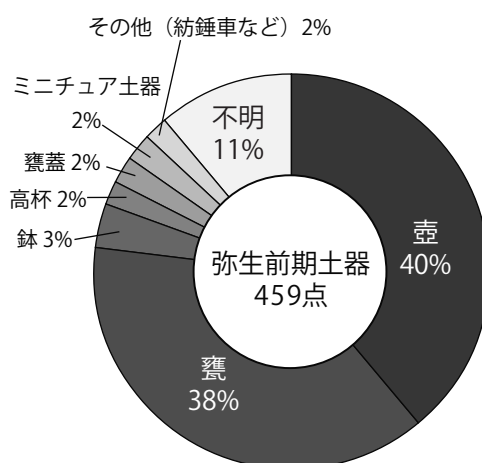


図 317 弥生時代前期土器 器種別数量

### ・弥生前期土器の器種

図 317 に示すのは、弥生前期土器の器種内訳である（底部片については、器種の不明なものが多い）。壺と甕の比率が高く、全体の約 80% を占める。両者の比率は壺がやや多いもののほぼ同率と言ってよいだろう。鉢や高杯などの器種はわずかに含まれる程度となっている。蓋に関しては、頂部が窪むものと平坦なもの、長く伸びるものと、バリエーションがあるが、いずれも甕蓋と考えられ、壺蓋はなく、壺の口縁部に紐穴を有するものもない。壺蓋については初現期の弥生土器にはなく、やや遅れての出現が考えられており（豆谷 1991・田畑 1997）、当遺跡の出土資料が壺蓋出現前の段階にあるとも考えられよう。ただし、甕蓋も甕の総数に比べ出土は少ない。ミニチュア土器は甕形のもので、3-267・268 溝や 6-124 土坑などから出土している。その他の遺物には土錘などのほか、器種の不明なものも含めた。全て第 8a 層からの出土であるものの、紡錘車 4 点も含まれている。

### ・弥生前期土器の文様

図 318（上段）は、弥生前期土器の甕について、遺構出土と包含層（第 8a 層）出土のものに分け、口縁部および頸胴部の文様構成からグラフ化したものである（よって底部片は計数していない）。口縁部文様については、無文のものもあるが、刻目を入れるものが多く主体を占める。特に包含層出土の甕には 87% という高率で刻目が見られる。頸胴部文様については、無し（無文）もしくは段を持つものが主体を占めており、当遺跡の弥生土器を特徴付ける古相といえる。また、遺構資料に一定数含まれる刻目段については、初現期の弥生土器に特徴的に伴うものと考えられている。

遺構資料と包含層資料で大きく異なるのは、頸部にへら描き沈線を入れる甕の出土量で、遺構資料ではごく少数の出土（1 条沈線 2 点、2 条沈線 2 点があるが、2 条沈線のものとは段と組み合わせられていたり、半裁竹管による一単位の施文など、やや特殊なものである）であったものが包含層資料では急増し、無文・段とほぼ同率の出土が見られる。逆に段や刻目段の数は減少していることから、遺構資料と包含層資料では、後者の方がより新しい様相を持っていると捉えることができる。ただし、包含層資料においても確認される沈線は 2 条までであり、それ以上に多条化した資料がないことから、弥生時代前期中段階までを下限とした時期幅を持つ遺物群と考えることができよう。遺構から出土している資料群に比べて、包含層に新しい時期の資料が含まれることは、短期間での集落の廃絶を示す一方で、その後も継続した人間活動を示唆するものといえる。その実態としては、相対的な遺物量の少なさや直上の第 8a

面で検出された水田遺構から、耕地開発を想定することができよう。

また文様ではないが、底部中央に一孔を持つ甕が6点確認された。包含層から出土したものは1点のみ(図302-29)で、6-124土坑から2点(図246-23・24)、3-267・268溝から3点の出土が見られる(図265-38、図268-7、図276-76)。いずれも焼成後に外面から穿孔されている。同様の底部穿孔土器については、西日本各地で出土例がある。縄文晩期土器には同様の穿孔が見られない一方で、地域を越えた多くの弥生前期遺跡において底部穿孔土器が認められる状況からは(ただし一遺跡の出土量は少なく、畿内の資料などでは出土遺物中に占める含有率は5%に満たないとされている(木下1976))、弥生文化を構成する一要素として広汎に伝播している状況が窺えるのだが、その性格については明らかになっていない。水田稲作の開始と有機的に関連付け、「蒸器」とする説が早くから提唱されていたが、使用痕などの観察から否定される傾向にあり、弥生時代中期に下る事例などにおいて、「土器機能の否定」という祭祀的な性格が想定されている(田中1988・前原市教育委員会2007)。当遺跡においても底部穿孔土器が出土した6-124土坑や3-267・268溝からは、ミニチュア土器など非日常的器種の出土が見られる上、穿孔土器そのものにも図246-23のように特殊な甕がある。こうした成果がすぐに祭祀的側面を示すものではないが、注目しておきたい。いずれにしても、弥生前期遺跡で見られる底部穿孔土器については、時期的な切り分けを前提として、地域を越えた共通性をあらためて確認し、器種・器形、出土遺構と出土状況、共伴遺物、土器の使用痕、穿孔方法など多様な視点から検討した上で、その性格を明らかにしていく必要がある。

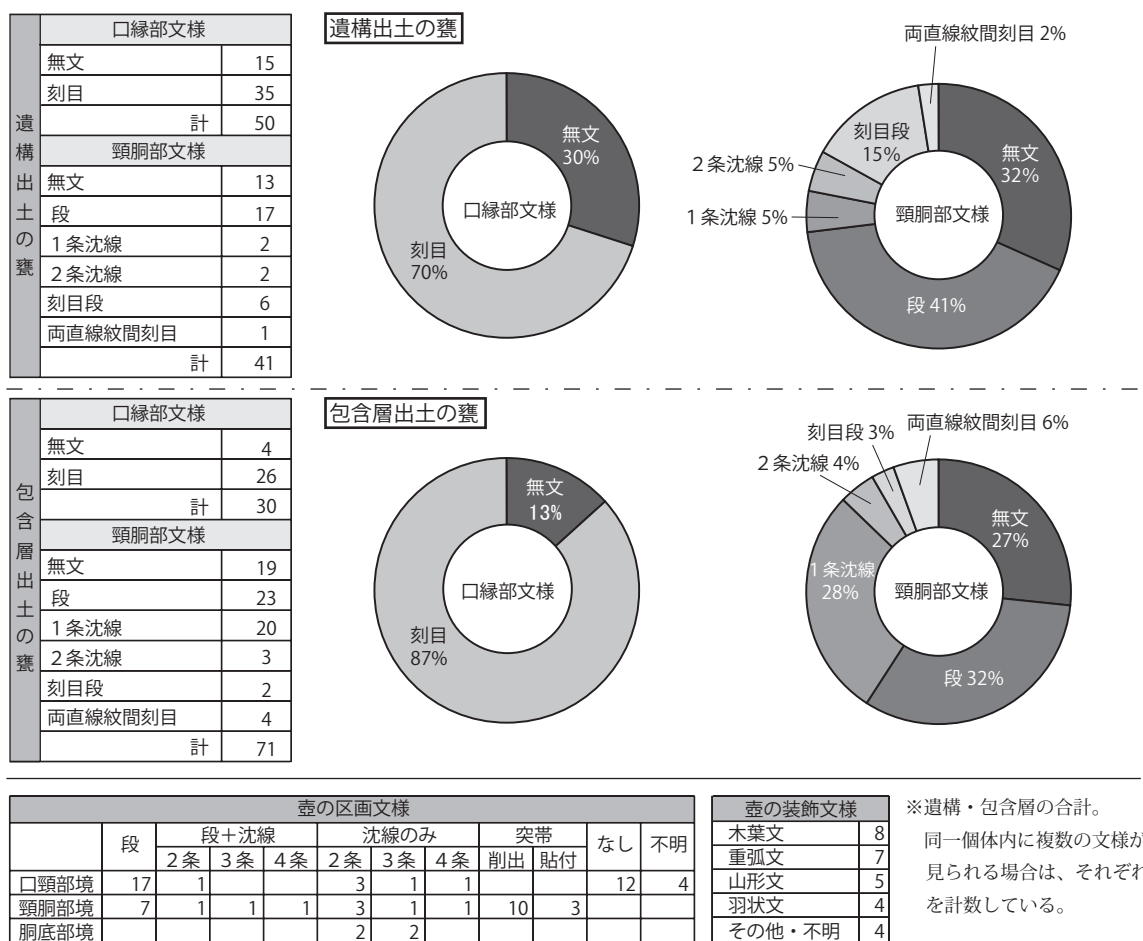


図318 弥生時代前期甕 文様比率

特に土器表面のスス・コゲなどを確認し、〈通常の甕〉から〈穿孔土器〉を作成する行為が、どのタイミング（焼成前 or 後・使用前 or 後）で行われたのかについて検討しておくことは、性格を解明するための大きな手がかりとなろう（筆者が実見させていただいた高知県田村遺跡、香川県一の谷遺跡の弥生時代前期の底部穿孔甕には、胴下部にバンド状のコゲが付着するものが認められた（高知県教育委員会 1986：第 160 図 189、第 163 図 241、高知県教育委員会 2004：C4-29 図 19、乗松ほか 2000：第 3 図 12）。これらについては煮沸調理（炊飯？）を行った後に穿孔されていることは疑いない）。当遺跡の出土資料にはスス・コゲなどの使用痕は観察できなかったが、今後の分析視点として提示しておきたい。また、先にも述べたが当遺跡の刻目段甕（図 246-23）のような特殊な文様・器形を持つ甕に穿孔が認められることに注意される。6-124 土坑内に、おそらくは完形で埋没していた同甕に穿孔が見られることは、穿孔土器の性格を考える上で重要な意味を持つ可能性がある。他遺跡の資料でも、福岡県那珂遺跡の刻目段甕（福岡市教育委員会 1992：Fig.178-25）、先述した香川県一の谷遺跡の段甕（乗松ほか 2000：第 3 図 12）などにおいて穿孔が認められ、今後類例調査の必要を感じる。

また壺に関しては、区画文様として段、平行沈線、突帯があり、その内訳は図 318 下段に示した。口頸部境と頸胴部境を段のみで区画するものが多いが、2～4 条の平行沈線や、段と沈線を組み合わせた区画文様帯も一定数認められる。また、底部側面に 2～3 条の平行沈線を入れるものが 4 点確認されている（図 265-37、図 276-94、図 299-30、図 307-58）。これについても胴底部境の区画文様として意識されていたとも思われるが、前期中段階以降の土器にはほとんど類例を見ない（平行沈線文のほか、弧文や羽状文などで底部側面を飾る土器については、山口県で類例が多いとされる（秋山 2007））。口頸部境や頸胴部境のように区画文様の系譜として受け継がれず、前期前半のうちに姿を消したものと考えられよう。突帯についてはほとんど全てが削り出し突帯である。貼り付け突帯は、図 284-3 のみが遺構からの出土で、他の 2 点は包含層からの出土である。一方、削り出し突帯については、8 点（小片が多いため、同一個体を重複計数している可能性がある）が遺構から出土していることから、周辺地域において弥生土器が初現した当初から文様構成の一つに削り出し突帯が存在していたことを示唆する。また突帯は頸胴部境で見られ、口頸部境にはない。突帯の幅には少なくとも 3 種認められ（図 275-48～53）、最も幅広のものは高さが低いが、突帯上下に沈線を入れて強調するとともに、上面を斜格子文で飾る。また、平行沈線と組み合わせるものもある（図 284-2）。

装飾文様については、重弧文、木葉文、山形文などが見られるが、無文のものも多い。施文部位については、頸部に施したものが 6 区の第 8a 層から出土した図 306-22・23 のみであり、胴部上方から中ほどを対象としていることに特徴がある。文様は、器面のミガキ調整を行った後に描かれており、細く鋭い沈線の特徴としている（追加型施文：深澤 1989）。特殊なものでは、頸胴部境を 2 単位の段で区画し、直下の肩部に 5 条一単位のミガキ文様（暗文）を入れた壺（図 265-29）があるが、これについては搬入品の可能性が指摘されている（第 7 章第 4 節）。

石器に関しては、特にサヌカイト剥片の詳細な分析と検討を、第 6 章第 5 節、第 7 章第 3 節で行っている。突帯文土器を多く含む 3-267・268 溝から出土したサヌカイト剥片のほとんどが二上山産であるのに対し、その他の集落遺構から出土した剥片の 40% が金山・城山などの讃岐地方産であることには留意される。石棒や凹石など縄文系石器とされるものも、遺構では同溝からのみ出土している。同溝での突帯文土器と弥生前期土器の埋没に時間差があった可能性については前述したが、石器の産状もこれを支持するものかもしれない。また、同溝から出土した石庖丁（図 277-104）は、粘板岩製で非常

に薄いつくり、有側で直線的な刃部を持つなど類例を見ない。さらに、刃部は明らかでないが、同様に粘板岩製で薄いつくりの石庖丁が 5-1015 溝からも出土しており（図 321-2）、これらの出土を当遺跡での地域性とみるかどうか、類例の増加を待ちたい。磨製石斧については、太型蛤刃石斧と見られる両刃のものがいくつか出土しているが、柱状片刃石斧などは見られない（西側遺構群からは小型のものが出土している（図 226-15）。

#### ・周辺遺跡との比較

以上までで見てきたように、弥生土器については主に文様面から分析・整理を行った。これは出土した遺物の多くが、集落での生活により消費・廃棄された土器であるために、細片であったり遺存状態が悪く、全体器形の復元が不可能な遺物が多い上、磨耗により器面調整が不明なものが多かったためである。しかしながら、甕では頸部区画文様として段、もしくは無文のものが主体を占めること、壺では直線的で短く外反する口縁部や、器体各部位の境界が明瞭といった器形要素のほか、区画文様に段・2～4 条の沈線・削り出し突帯が用いられており、貼付け突帯はほとんど見られないという文様要素が確認され、近畿地方最古の様相を持つ資料群と位置付けることができる。屈曲の強い刻目段甕の存在や、壺蓋が確認されないことなども、これを支持しよう。

河内平野の遺跡において、古相の弥生土器が出土したのは当遺跡が初めてではなく、中河内地域での出土例がある。特に東大阪市若江北遺跡については、やや時期の下る遺物を含んでいるものの、大量の弥生土器が出土し、中でも土坑 14・15、溝 25（以下、3 遺構）と呼ばれる遺構からは、古相を持つ弥生土器が出土している。これらについては、三好孝一によって詳細な観察・分析が行われており、瀬戸内地域の諸遺跡との比較を通じた検討が行われている（三好 1996）。当遺跡と若江北遺跡は、河内潟を間に直線距離にして約 10km の距離に位置するが、遺物の様相にはやや相違が見られる。ここで、両遺跡の弥生土器を比較することで、初現期の弥生土器の地域性を考えることもできよう。ここでは、若江北遺跡で出土した弥生土器の特徴とされる属性について、当遺跡の資料との比較を行ってみたい。

若江北遺跡では、突帯文土器はほとんど出土していない。弥生土器は「3 遺構」だけで約 350 点の弥生土器が出土している。甕では、口径が胴部最大径より大きいもの、ほぼ同じもの、小さいものの 3 種があり、当遺跡の資料と共通する。区画文様では、無文のものや段を有するものが多いが、3 条までの沈線が見られるものを含む。ただし段については、その下部の削り込み、もしくは押圧が強く施される傾向があり、当遺跡のものよりもさらに段が強調される傾向がある。

壺については、口頸部境には段のみ（段Ⅰ種）、頸胴部境には段＋沈線（段Ⅱ種）と部位によって区画文様の構成に差異がある点、追加型施文による細く浅い沈線文など、区画文様の構成や調整手法など、基礎的な属性において当遺跡資料と近似した特徴を見出せる。一方で、有文率が高く文様が複合的で多様性に富んでいる点、頸部に施文される例が多い点、口頸部境の削り出し突帯の存在など、装飾文様の構成や施文部位の点では、当遺跡資料と異なる様相が目立つ。特に口頸部境の削り出し突帯に関しては当遺跡資料では見られなかった（ただし突帯を持つ土器片は小片が多く確実ではない）。また、口頸部境の段については、香川県下川津遺跡などで見られる「突出段」（信里 2000a）に似た様相を持つものがあり、讃岐地方からの伝播も想定されているが（秋山 2007）、これについても当遺跡資料には同様のものが含まれない。

さらに、若江北遺跡の土器胎土には、生駒西麓産のものが 5 割以上含まれ、壺・甕では 7 割を超える高率で確認され、縄文集団との「生産領域の共有化」が想定されている。当遺跡の弥生土器には、生駒

西麓産胎土がほとんど見られないことは対照的であるが、「生駒山西麓産」粘土の産出地については、生駒山はんれい岩体の風化粘土が堆積分布する、東大阪市客坊谷付近の可能性が考えられているところでもあり（中園ほか 2008）、調達地と遺跡との距離を無視できない。

次に時期的指標となるような諸属性について見ると、3遺構の出土資料のいずれからも甕の区画文様として、3条までの沈線が見られる。また、刻目段の変遷により出現する「直線紋刻目段」や「両直線紋間刻目段」（深澤 2000）が含まれていることも確認される。さらに、土坑 14 からは 1 点のみであるが、壺蓋が出土している。以上のように 3 遺構出土資料には、当遺跡資料に比較するとやや後出するとされる様相が見られるのであるが、これを両資料群の時期差であるというように単純に考えることはできない。これまで比較したように、両資料群には装飾文様面などでも特徴的な相違が確認されるものの、ともに周辺地域における初現期の弥生土器の様相を示していることは疑いなく、それは伝播元の土器様相と近いものであることが想定されるからである。信里芳紀が「複数の系列の遠賀川式土器が交錯しながら伝播」する状況を考えてように、河内平野への弥生土器伝播は単一の伝播元と同一の経路を辿って現象したものではない。複数の伝播元における弥生土器の型式変遷が同時性を持って進行していたことが証されない限り、様相の異なる遺跡間の資料の先後関係は明らかにし得ない。特に文様には集団間の差異が大きいと考えられることから、慎重な検討が必要であろう。

## 2. 集落の様相

調査で確認された遺構・遺物の分布は、50～60 m ほどの範囲に集中しており、弥生時代前期の集落域を構成する遺構群と考えられる。遺構から出土した弥生土器は凶化できたものだけでも 250 点を超えるが、おしなべて大きな形式差が認められず集落の存続期間が比較的短いことが窺われる。ただし、3-267・268 溝からの弥生土器の出土と、同溝や 6-123 溝埋没後に掘削される土坑や井戸の存在からは、少なくとも溝の埋没前・後の 2 段階にわたって集落が継続していることが想定されるとともに、集落空間内での機能更新も示唆される。

検出された 5 棟の建物には、いずれも竪穴や壁溝が認められない。土壌層（第 8a 層）を除去した第 8b 面での遺構検出作業を考えると、浅い竪穴や壁溝が存在した可能性を否定できるものではないが、環状に並ぶピット列や周囲を取り巻く土坑の存在から、現時点では周堤を持つ平地建物として理解しておきたい。ただし、これらの建物については、遺物の出土量や周囲を巡る土坑の存在などから、その存在を積極的に評価して記述したものの、確実な根拠は得られていない。中でも建物 25・26 の認定については不確実な部分があることは否めない。ただし、検出例の少ない当該時期の建物について、不確実とはいえ、現場の所見として議論の俎上に乗せることに一定の意義は見出せよう。

5 棟の並存関係については、建物プランの重複がないため明確でない。建物を構成する遺構に注意して見ていくと、5-991 溝に沿うように並ぶ建物 23・24 で、環状のピット列のうち、いくつかのピットが円形プランの内外に 2 基並ぶ、もしくは切り合う状況が看取できる。また一方で、建物 22・26 にはこれらを取り巻く長円形の土坑が明確に検出されているが、建物 23～25 には同規模の土坑は付随しない（ただし、建物 23 には規模は小さいものの土坑が取り巻くような状況が見られる）。検出状況により遺構を完全な状態で確認できていない危惧は残るが、建物 22・26、建物 23・24 という 2 棟を一単位とした、遺構状況の近似性には注意される（建物 25 については不明）。もちろん、こうしたグルーピングを行ったところで、5 棟の建物が同時並存した可能性を否定することはできない。また仮に、同時並存の単位を 2 棟程度のグループで想定したとしても、その組み合わせは上述のように検出状況が近



似するもの同士のほか、近似しないもの同士の組み合わせである建物 22・23、建物 24・26 のグループをも考えることができる。周囲の遺構の関係性から見ると、蛇行する 6-123 溝の北方向への屈曲に合わせたような平面プランを持った建物 22 については、同溝の開口時に存在したとも見え、3-267・268 溝を挟んで南側に位置する建物 24 は、同溝埋没後に成立したと考えることもできるが、根拠には乏しい。

以上のように同時並存棟数の問題は残るが、この集落については直径 50～60 m 程度の比較的小さな範囲、短期間での集落移動もしくは廃絶、少ない建物棟数とその平面プランが重複しないことなど、縄文集落の持つ特徴とされるものが見られる。また、建物についても環状のピット列を巡らすものは、縄文時代晩期の集落でしばしば確認される構造である（信里 2000b、矢野 2006）。一方で、環濠や掘立柱建物、松菊里型住居など、弥生集落に特徴的な遺構は見られず、建物規模にも相互に大きな差はない。建物周辺の土坑などの出土遺物から、集落を営んでいたのは初現期の弥生土器を使用する人々であったことは疑いないが、その集落構造自体は縄文的といえ、弥生集落の成立過程を考える上で重要な示唆を含むものと評価できよう。

### 3. 突帯文土器と弥生前期土器の伴出

集落内を西流する 3-267・268 溝の最上層からは、多量の突帯文土器が弥生土器とともに出土し、両者の共伴関係が想定された。しかしながら、第 8b 面東側遺構群内において、突帯文土器の出土が 3-267・268 溝に集中し（約 9 割が同溝からの出土）、その他の遺構からの出土はほぼ見られないという状況から、集落内で両者が同時に存在したとは考えにくく、同溝への突帯文土器と弥生土器の埋没についても、異なるタイミングで行われた可能性が想起された。

最も多く土器が出土した〈土器群 2〉（図 262）における現地記録と、出土遺物の整理を踏まえた再検討では、溝内の突帯文土器と弥生土器が分布を異にしていること、両者の遺存状態が異なること、突帯文土器には正置して埋没したような資料が認められることなど、出土状況の相違が認められた（土器群 1 では、弥生土器の相対的上位からの出土が見られる）。同溝内での突帯文土器の分布を詳しく見ると、溝内においても一部に偏在する状況が確認される（図 279）。実際、最も多く突帯文土器を出土した 3-268 溝の遺物集中部（土器群 2・5）付近と、3-267・268 溝の分岐点付近以外での突帯文土器の出土量は意外なほど少ない。土器群 2 の北側 5 m には、突帯文土器を土器棺とした 6-122 土坑が位置しており（図 293）、遺跡内における突帯文土器の出土は、6-122 土坑から 3-267・268 溝の分岐点付近までの約 20 m ほどの範囲に、さらに絞り込めることになる。

当遺跡における弥生土器の出現が、弥生集落の成立と同期することについては疑いない。突帯文土器と弥生土器の集落内での同時存在を想定するならば、縄文集団と弥生集団の極めて密接な関係性を考える必要がある。仮に突帯文土器の集中出土する範囲に縄文集団の居住などの活動を想定すると、両者は数十歩の近接距離で軒を並べていたことになるからである。また縄文集団の居住はなく、突帯文土器のみが搬入、遺棄された状況を考えるにしても、弥生集落内に突帯文土器の土器棺墓（6-122 土坑）が存在する不自然な状況を想定せねばならない。以上より、〈6-122 土坑への埋葬、3-267・268 溝への突帯文土器の廃棄〉と〈弥生集落の成立〉については、時間的連続性はともかく先後関係にあったものと考えたい。3-267・268 溝とその他の遺構の、サヌカイト産地や石器内容についての相違も、これを支持すると思われる。

3-267・268 溝は、人為的に掘削されたものではなく、縄文時代晩期に形成・埋没を繰り返す小流路

の一つである。砂礫により埋没した流路上が溝状に窪んで滞水し、泥土が堆積する中で突帯文土器の廃棄（設置？）が行われたと考えられる。その目的は明らかにし得ないが、墓域を形成せずに単独で存在している 6-122 土坑に注意される。南側に開口する 3-268 溝への突帯文土器の廃棄と、土坑への埋葬には関連性があることを想像しうるが、根拠は無い。

一方、弥生前期土器については、3-267・268 溝の広い範囲で出土が見られることから、弥生集落成立時点でも同溝が開口していたことがわかる。しかし、3-279 井戸や 3-286 土坑との切り合い関係からも想定できるように、溝は集落存続期間の内に埋没している。3-268 溝の土器群 2・5（図 256）から出土した弥生土器には細片が目立つ（図 279 では、中央部のグラフで弥生土器片数量が 600 点を超えているが、これは細片が多いためである）。ここでは埋土中のブロック土も目立っていたことから、溝の埋没の要因として、人為的な埋め戻しがあったことを想定しておきたい。

#### 4. 弥生土器の製作

また他に注目すべき遺構として、6-143 土坑がある。壁面の被熱と焼成失敗品の出土により、土器焼成坑の可能性が想定された当土坑の調査に際しては、詳細な遺構・遺物の検討のほか、科学的分析によって多様な視点から検討を加えた。各検討の対象と内容については以下の通り。

焼成失敗品の検討（第 6 章第 3 節）

接合部剥離資料の検討（第 6 章第 4 節）

灰・炭化物の観察と水洗による微細遺物採取（第 7 章第 1 節・カラー図版 6）

被熱した壁体と地山（掘削基盤層）、灰白色粘土塊の胎土分析および剥片観察（第 7 章第 4 節）

炭化米の炭素年代測定（第 7 章第 7 節）

結果として、当土坑が土器焼成坑とする確実な根拠を得ることはできなかったが、類例に乏しい現状では可能性の高いものとして提示する意義があろう。また、仮に当土坑が焼成施設ではなかったとしても、焼成破裂土器片を始めとした焼成失敗品の出土から、集落内での弥生土器生産が想定できる。ここでは、得られた成果から弥生時代前期前半における弥生土器の製作状況を想定してみたい。

胎土：生駒西麓産胎土はほとんど用いられない。第 8b 層と弥生土器胎土との鉱物組成などの近似性から、中央遺構群で多く検出された不定形の土坑が粘土採掘溝である可能性が考えられる。

成形：粘土紐を用いた積み上げ成形。外傾する接合面は器厚の 2 倍程度の幅を持つ。突帯文土器とは粘土紐の太さ、積み上げ方法など成形技法上の大きな差異が想定できる。

調整・施文：基本的に成形を完了してから器面調整・施文を行う。ただし、成形途中で器面調整を行っている可能性もある。壺の文様はミガキ調整が終わってから施される。

焼成：（6-143 土坑を焼成施設として考える）土坑内にて少量の木材と土器の上に被せた稲藁による覆い焼き。焼成温度は約 800 度に達する。部分的に高温になった壁体は赤変する。数次にわたって土坑を利用し、焼成後は中の土器を取り出すとともに、灰や炭も掻き出して掃除する（民族誌例では、焼成時に土器を覆った藁の上に灰を被せることも多く、掻き出された灰が同様に再利用された可能性もあろう）。焼成失敗品は、集落の端の溝などに廃棄される。細片である焼成破裂土器片は、片付け時の掻き出しを免れて土坑内に残存することもあった（図 339-7）。

※ 6-143 土坑底部で確認された灰や炭化物は、堆積状況に大きな乱れが見られない（カラー図版 6-4・5）。最終次の焼成を終えた後に土器だけを取り出し、灰や炭化物の掻き出しを行わずに土坑を埋め戻した状況が想定できる。灰・炭化物の分布や堆積の厚さからは燃料や燃焼の

規模を分析できると考えるが、今回はそこまでの検討を行っていない。

## 5. 集落の立地と西側低地部の利用

縄文時代晩期の当調査地周辺は、扇状地扇端の堆積様相を呈し、水没・離水を繰り返しながらシルト質の第8b層が累重堆積する状況にあった。また、扇状地の発達にしたがって砂礫の供給が東方から進み、西に下る斜面地形が形成されていくとともに、局所的な小流路の形成と埋没（図版60-4）が繰り返される不安定な状況が想定できる。埋土下部に砂礫が充填される、3-267・268溝や6-123溝もこうした埋没流路として理解される（建物22の直下には埋没流路が集中している状況が見られ（カラー図版5-1）、埋没流路内の砂礫による排水・脱湿効果を体感的に理解した上で、建物位置を選択した可能性さえ考えられる）。東側遺構群で検出された弥生集落は、縄文時代晩期を通した一連の堆積がほぼ終了した段階で、相対的高位となる斜面地形の上部を選択して立地している。集落域の標高は、1.4～2.6mを測り（図214、ただし、これは第8a層を除去した検出面（第8b面）での標高であり、実際の生活面（当時の地表面）は10～20cm高いと考えられる）、比較的傾斜の強い地形上での集落立地が窺える。標高1.4～1.5mに掘削された5-991溝付近から西側は、極端に遺構・遺物の出土量が減り、集落の西限を示している。ここから西方に向かっては緩やかに下る地形となっており、調査地西端では標高0.3mまで下がる（弥生時代前期前半には微高地1は存在しない）。この間（0.3～1.4m）には、〈不定形の土坑〉や〈直線的な溝〉が数条確認されるのみである。

直上の第8a面においては、標高によって水田環境（相対的な乾湿）が異なっていた可能性が指摘されており（第5章第8節・第7章第1節）、「微地形に応じた環境勾配」の存在が想定されている。それは、扇状地扇端から沖積低地への地形変換点に位置する当調査地において顕著な傾斜地形に起因するものである。同様の環境勾配は、第8b面においても存在した可能性が高く、相対的高位で乾燥した調査地東側に比べ、調査地西側は低湿な環境にあったことが想定できる。

4区の中央断割り東端付近で行った珪酸体分析では、イネ属珪酸体は第8a-2層以上の層準で初めて確認される（図362）。第8a-2層ではイネ属珪酸体の含有量こそ少ないものの、下層までに多く含まれるヨシ属が急減しており、開発に伴う周辺環境の変化が示唆される。第8a-2層は、東側遺構群における弥生時代前期土器の包含層（同層もしくは直上の第8a-1層を合わせて除去し、遺構検出を行った面が第8b面）と対応する層準である。これによって弥生時代前期における水田耕作が想定されるのであるが、第8a-1層と第8a-2層間には、微高地1を形成した第8b-1層のほかに間層が存在せず、第8b-1層の供給も1区から4区にかけてと局所的である。そのため調査地の大部分では、水田耕作土である第8a-1層が第8a-2層を攪拌しており、分層すらできない場所が多く、第8a-2面上における水田畦畔の確認などは不可能な状況であった。しかしながら、本章第8節で述べたように、微高地1直下において、1-300畦畔が確認された（図206）。同畦畔は規模が大きく通常の水田畦畔ではないが、微高地1形成以前に設置されていたことは疑いない。もちろん、東側遺構群の形成された弥生時代前期前半にまで遡るかどうかについては不明だが、珪酸体分析の結果も踏まえ、弥生時代前期において集落西側の低位部を対象とした水田開発が行われた可能性を考えておきたい。

最後に、傾斜の強い斜面地形で想定される環境勾配からは、西側低位部が相対的水位の上昇などによって、容易に湿地化する状況も想定できる。水位の上昇により、標高1m付近までの低位部に営まれた水田が排水不良に陥り、逆に相対的高位の調査地東側が水田適地となったと考えれば、比較的短期間での集落の消長と水田への転換が理解できるかもしれない。

#### 第4項 中央遺構群（時期不明）

東側と西側の遺構群に挟まれたエリアでは、遺構・遺物の密度が低く、小規模な溝と不定形の土坑が散在する検出状況となっている（図320）。これらの遺構からは、ほとんど遺物が出土しないことから帰属時期も明確ではない。また、微高地1を形成した砂礫層（第8b-1層）もこのエリアではほとんど確認されないため、層序からのおおまかな時期把握も困難となっている（図211）。そのため、これらの遺構群について、東側・西側の遺構群との同時期性、もしくは有機的な関連性などは見出しがたく、時期不明の「中央遺構群」として扱い、ここで述べる。

##### 1. 不定形の土坑

5区西側では直径0.8～1.3m程度の不定形の土坑が多く掘削されている。これらの土坑に特徴的であるのは、いずれも埋土下層に泥土の堆積と考えられるシルト層が認められる点である（図319の4層：図版58-8～59-6）。同層は土坑内における滞水を示唆し、これらの土坑が一定期間開口していたことが想定できる。上層はブロック土を多く含む古土壌となっており、人為的な埋め戻し土と考えられる（図319）。注意されるのは、このブロック土の中に第8b層と考えられる明緑灰色粘土～シルトのブロック土が含まれていることである。同層は下層の掘削なしには得られないため、埋土中の第8b層は、土坑掘削土に由来するものである可能性が高い。周囲に遺構が希薄な状況から考えられるのは、土坑の掘削時に掘り上げた土を土坑近くに積み上げておき、また埋め戻すという行為である。土坑の検出され

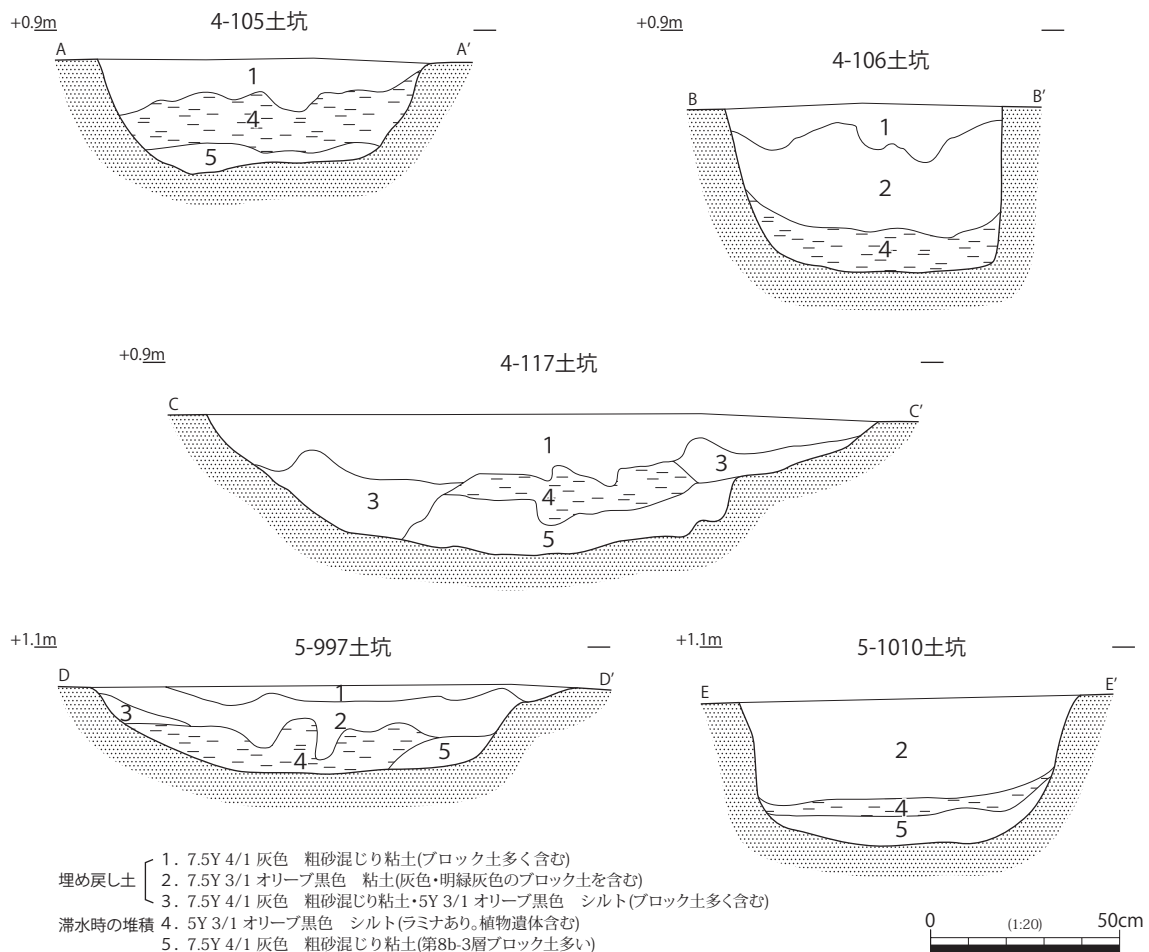


図319 4-105、4-106、4-117、5-997、5-1010 土坑 断面図

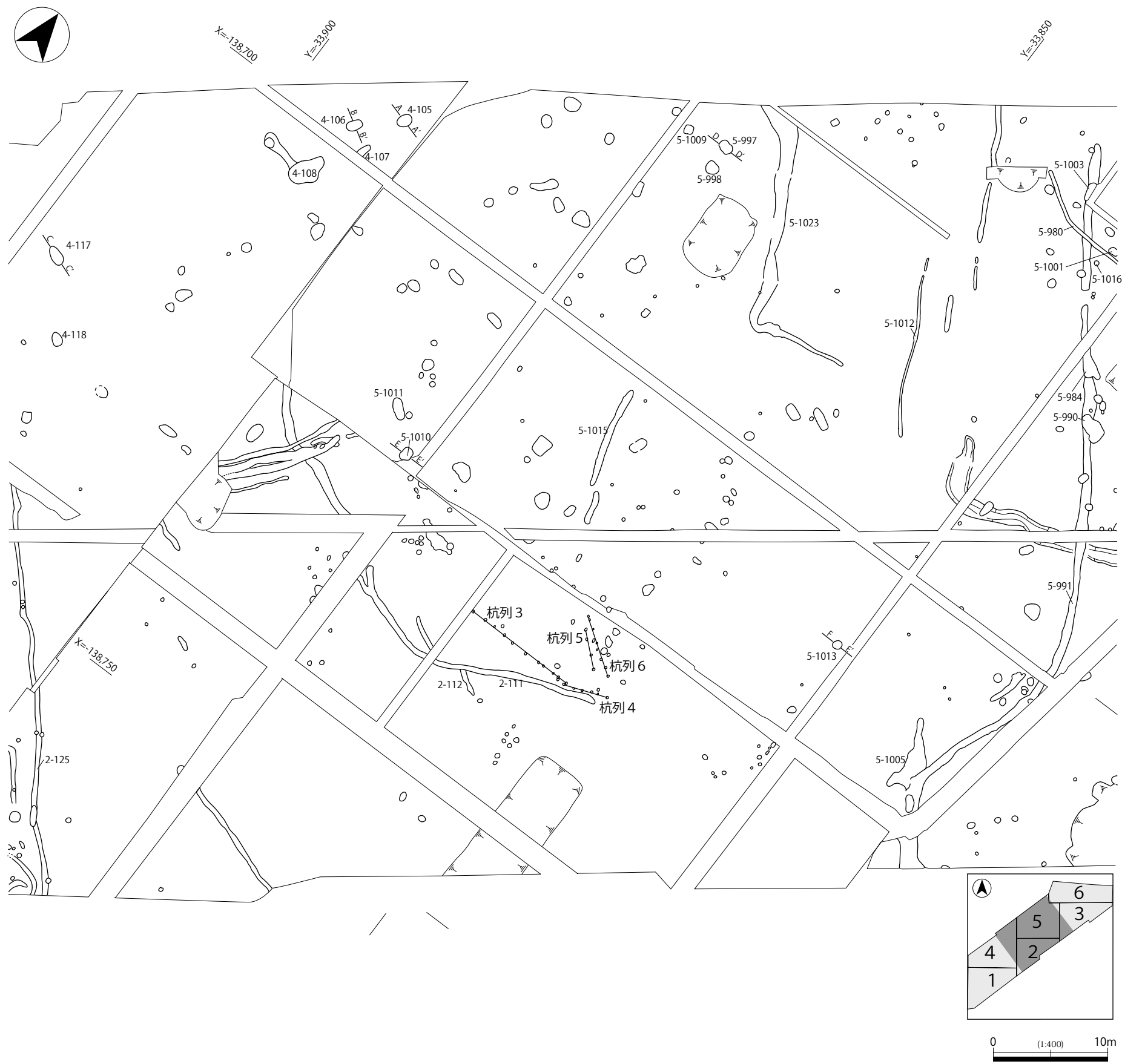


图 320 中央遺構群 平面図

る範囲において、掘削面直下の第8b層が砂礫層ではなく粘土層であることも考え合わせると、粘土採掘坑などの性格を想定することができよう。そのため、土坑底部が達している第8b層の粘土については、対応層において胎土分析を実施した。結果として、第8b層粘土に含まれる岩石や鉱物組成が、弥生土器胎土に含まれるものと近似し、第8b層粘土が弥生土器製作の際の素地土に使用されている可能性が提示されたことは、これら不定形の土坑群が粘土採掘坑である想定を支持するものといえる。

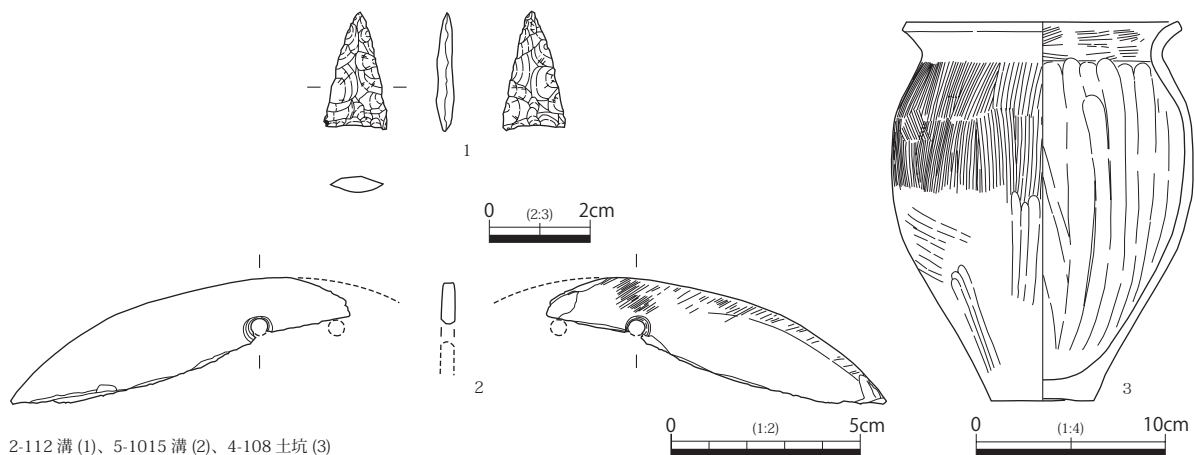
## 2. 溝

5区で検出される溝（5-1012、5-1015溝など）は、東側遺構群を限る区画溝としての性格が想定された5-991溝に平行するような傾きを持って掘削されているものが多い。小規模で掘削深度が安定せず、上層の第8a層が埋土となっている状況から、これらの溝は耕作痕跡と考えられ、西方に傾斜する緩斜面地で比較的低湿な中央遺構群エリアの耕作地利用を示唆する。溝からの遺物の出土は少なく時期は不明であるが、5-1015溝から出土した石庖丁の背部片（図321-2）は、粘板岩系の石材の使用と非常に薄いつくりが、東側遺構群の3-268溝から出土した図277-104と近似している（厚さ4mm。図277-104は最大部で3mm）。仮に両者を同時期のものであると考えれば、当エリアが弥生時代前期前半において、耕作域として利用されていた可能性を支持するようと思われるが、他に明確な遺物の出土はない。

また、2-112溝から出土した図321-1は、平基式の石鎌だが、基部はやや凹む。重さは0.71g。背腹両面に素材面を残さない丁寧な作りで、特に表面側を細かく最終調整する。調整順序は頂部から時計回りと考えられる。図321-2と同様に、3-268溝から出土した石器と比較すると、図277-95と重量が近似し、形状についてもやや鎌身が長いものの、背腹両面の丁寧な作りや弱く凹んだ基部など、共通性がある。またサヌカイトの産地についても、図277-95と同じく二上山産と判断された。

## 3. 杭列

杭列3～6は、2区の北側で検出されたピット列である。同規模の小ピットの連続により、杭列として復原したが、帰属時期については不明である。2-111溝に平行する杭列4はいいとしても、他の杭列については、周辺遺構との関連性が見出しがたく、後世に上層から打設された杭痕跡を当面で検出している可能性がある。特に杭列3は地形傾斜に沿うことなく、東西方位に乗っている。上面で検出された坪境にも近いことから、第7b面以上の坪境に伴う杭列である可能性も考えられよう。



2-112溝(1)、5-1015溝(2)、4-108土坑(3)

図321 中央遺構群 出土遺物実測図

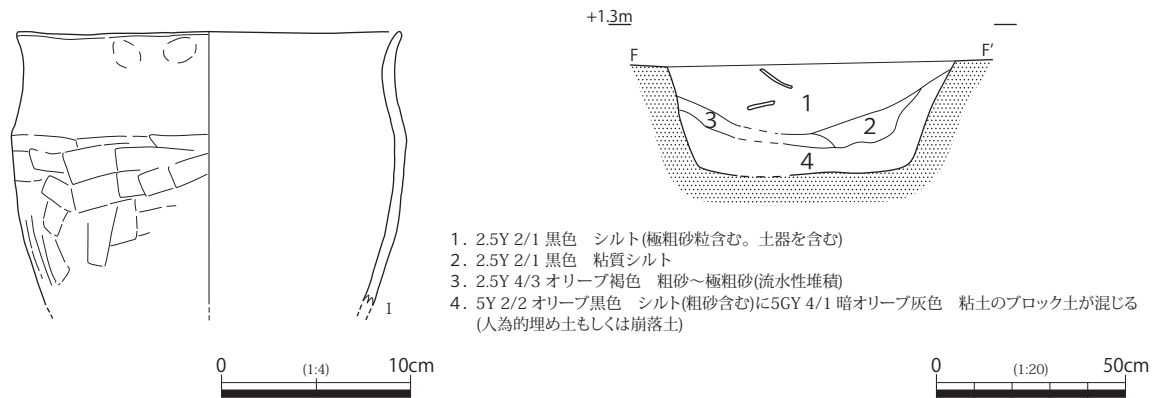


図 322 5-1013 土坑 出土遺物実測図および断面図

#### 4. その他の遺構

先述したように中央遺構群として捉えられるエリアの遺構からは、ほとんど遺物が出土しない。実際に遺構出土遺物で図化可能であったのは、4-108 土坑から出土した弥生土器の甕（図 321-3）と、5-1013 ピットから出土した縄文土器の深鉢（図 322-1）だけであった。

**4-108 土坑** 4 区の北側で検出された。近接して先述の 4-105、4-106 土坑が位置するが、埋土や規模はこれらの土坑とは異なる。4-108 土坑は、3.2 × 2.0 m を測る不整形の土坑で、深さも 0.1 m と浅い。土坑というよりは踏み込みや自然の落ち込みの可能性があるが、滞水した状況などは見られない。出土した図 321-3 は口縁端部が方形でやや肩の張る弥生土器の甕で、ハケメが明瞭に見られる胴部外面の上半部と比べ、下半部にはハケメの上からタテとナナメ方向のミガキが施される。口縁部内面には粗いハケメが残るが、胴部内面にはタテ方向の指ナデ調整が明瞭に観察される。Ⅲ様式～Ⅳ様式の資料と考えられる。底部外面と胴部下部内面には黒斑が確認され、内外面の器表にはスス・コゲが付着する。外面のススは、胴部最大径付近で濃く口縁部外面にも認められるが、頸部の括れには付着しない。胴部下半ではススがパッチ状に付着しない部分が見られる。その境界が比較的明瞭であることから、煮沸時に支石や支脚などを使用した可能性が考えられる。内面のコゲは胴部最大径付近で、パッチ状に認められる以外は付着していない。

**5-1013 土坑（図版 59-7）** 5 区の南側で検出された。先述の粘土採掘坑と思われる遺構群からは大きく離れており、東側遺構群に近い。平面円形で径 0.7 m、深さ 0.3 m を測る（図 322）。上層埋土から出土した図 322-1 以外に遺物は見られなかった。図 322-1 は縄文時代晩期の深鉢の胴部片と思われるが、突帯は付されない。胴部をヘラケズリし、頸部をナデ調整している。その器形と調整からは篠原式（家根 1994）に属する資料のように思われるが、口頸部の外反が弱く、胴部との境の屈曲が弱い。篠原式の中でも新段階のものか、それに後続する段階の資料である可能性を考えたい。なお、この土器の胎土については胎土分析の対象試料としており、在地性の高い粘土を胎土として使用している可能性が提示されている。

#### 5. 包含層出土遺物

図 323 には、中央遺構群の範囲の包含層（第 8a 層）から出土した遺物を示した。2 区や 4 区では中央遺構群の範囲からの出土遺物がほとんどなく、図示したものは全て 5 区の第 8a 層から出土したものである。1～3 は突帯文土器でいずれも生駒山西麓胎土を持つ。表面の磨耗が著しく、突帯状の刻目など確認できない。出土地点が近接しており、同一個体の破片である可能性が高い。4～10 は弥生土器

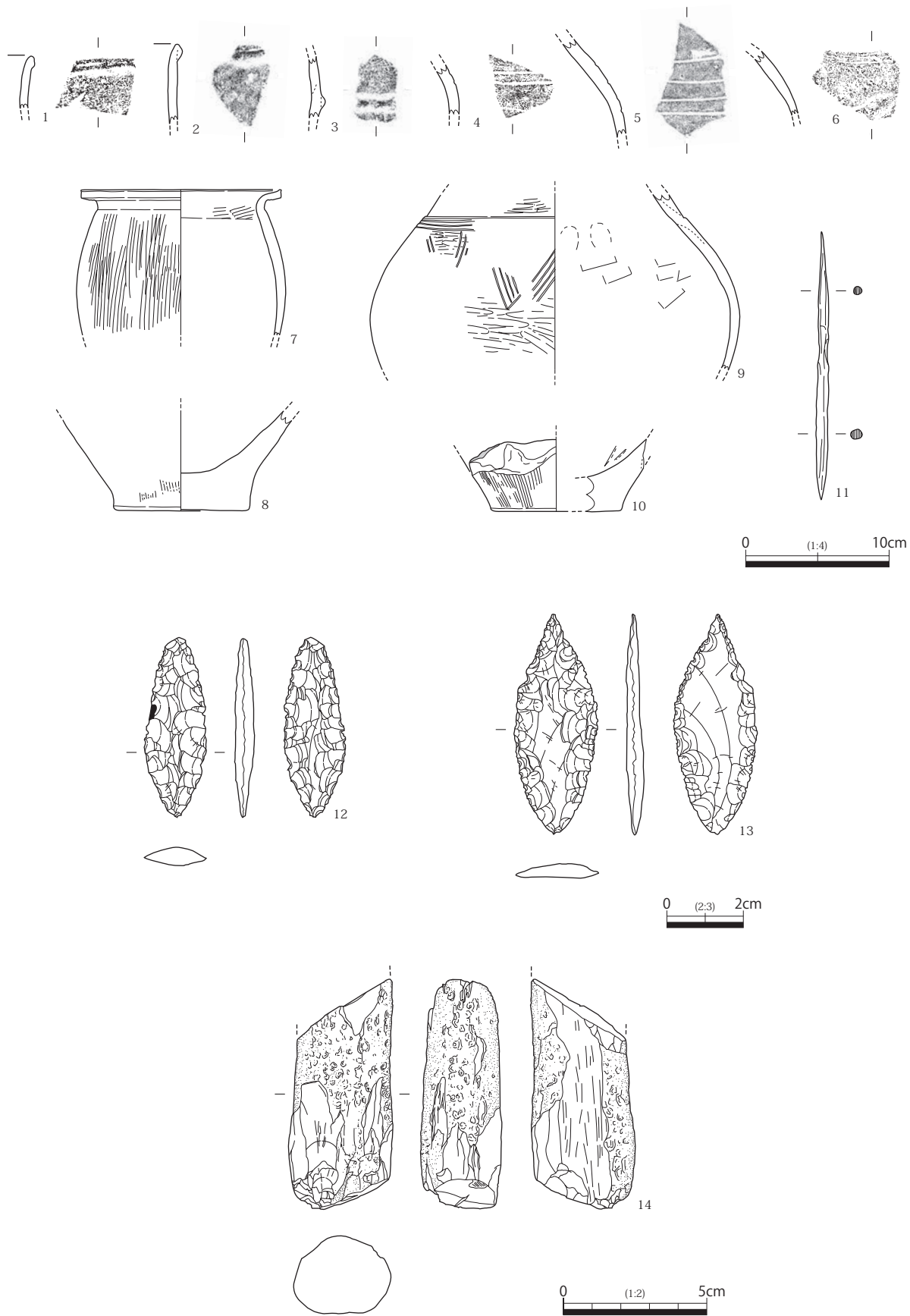


图 323 5区第8a层 出土遗物实测图 (中央遺構群)



である。4・5は壺の肩部と考えられ、同一個体の可能性が高い。5にはしっかりとしたヘラ描き沈線が4条施される。6も同様の壺で、肩部に平行して4条以上入れられたヘラ描き沈線の下部に、4条一単位で斜め方向の沈線を入れ、山形文を描く。9にも同様の文様が見られ、同一個体の可能性があるが不明。7は甕で胴部上半に明瞭なハケメが認められる。口縁端部はわずかに上方に摘み上げられ、中期～後期に下る時期が考えられる。内外面にスス・コゲが認められ、外面のススは口縁端部外面まで全体に、内面の茶褐色のコゲは胴部最大径付近まで濃く付着する。

11は両端が鋭く尖る棒状の木製品で、ヤス先端に取り付ける刺突部材と考えられる。樹種はモミ属である。東大阪市鬼虎川遺跡や八尾市山賀遺跡で出土している弥生時代のヤスは、ほぼ全てがモミ属のものであり、用途に応じた樹種選択が示唆される（東大阪市文化財協会 1987・大文セ 2007c など）。

12と13は、凸基Ⅱ式の石鏃である。12は重さ3.50 g。押圧剥離により、鏃身に弱い稜を形成する。側縁部は鋸歯状。13も同様の鏃で重さ4.64 g。背腹両面ともに素材面を残しており、やや粗雑だが側縁は鋸歯状に仕上げる。両者ともに大型で形状も図321-1とは異なる。弥生時代中期に属する資料と考えられよう。14は粘板岩の石棒と考えられる。敲打による成形の後に研磨しており、表面には部分的に丁寧な研磨痕が見られる。

また、東側遺構群の5-991溝西側付近では軽石が数点出土した（図版155）。穿孔や抉りなどの加工の痕跡はないが、浮子などの漁具である可能性が考えられよう。

## 第 10 節 第 8b-2 層以下の遺構と遺物

第 4 章(2)で述べたように、第 8b 層は縄文時代後期から晩期にかけての泥質な堆積層を主体とする。第 8b 層中には人為的な遺構はほとんど確認されなかったため、一部を除いて断割り断面や部分的な掘り下げでの下層確認調査を行ったのみである。乾湿を繰り返しながら堆積したと考えられる同層は、垂直的累重の中に氾濫堆積物である砂礫や、弱い攪拌を受けた古土壌を挟在する。これらの古土壌上面や下面では動植物による生痕や、氾濫流路や地震による変形など自然遺構が確認された。

第 8b-2 面や第 8b-6 層上面などでは小規模な自然流路が不規則に流れている状況が確認されており(図版 60-4)、低湿な自然環境が想定される。また、第 8b-7 層上面ではカニなどの生痕と考えられる小穴群が見られた(図版 61-5・6)。地震痕跡は地割れや土坑状の変形構造などが確認されたものである。第 8a 面や第 8a 層掘削中には検出されなかったが、第 8b-2 層などが遺構内部に落ち込んでいる状況が見られ、縄文時代晩期頃に発生した地震による痕跡である可能性がある。

泥質な堆積物に挟在される砂礫層は調査地東方から供給された氾濫堆積物であり、当調査地で最も古い段階のものは第 8b-7 層で見られる。断面観察では、第 8b-8 層段階までは比較的平坦な湿地としての地形が確認されており、第 8b-7 層の氾濫堆積物の供給により、東から西に下る斜面地形が形成されたことがわかる(図 10)。その後も東方からの氾濫堆積物の供給が断続的にあり、斜面地形が西進しながら発達する。2 区では第 8b-3 層において著しい同時異相が見られ、堆積物の供給により離水した陸域と、滞水域との境界があったことが想定できる。離水して陸域化した場所では、動植物による攪乱などによって古土壌が形成されている。こうした古土壌においても積極的な人間活動の痕跡はあまり認められないが、部分的に遺物を包含したり、遺構が確認できる場所がある。

扱う時期幅は広いが、以上を第 8b-2 層以下の遺構と遺物として本節において述べることとする。

### 1. 水陸分岐線と周囲の遺構・遺物

2 区において、下層確認のため X=-138,740 ラインに断割りを入れたところ、第 8b-3 層が東西で大きく層相を変化させていることが確認された。図 324 下段に示すように、Y=-33,855 ラインと直交する付近において、東側が古土壌(第 8a' 層)、西側が上方暗色化する典型的な第 8b 層(第 8b-3 層)となっている。第 8a' 層の下部には第 8a-4-2 層の砂礫が厚く堆積しており、西へ下る傾斜を形成していることから、ある時期の滞水域と陸域の堆積環境の差がこうした堆積構造の相違として認識されることが想定された。そうすると、時々水位により変化はあったであろうが、両層の境界が水陸分岐線であった可能性が高い。周囲を精査すると標高約 1.1 m を境として同様の堆積構造の変化が見られ、南北に延びる。同様の変化は北接する 5 区でも見られたが、徐々に不明瞭になった。

第 8a' 層を除去すると、ちょうど分岐線付近で径 0.5 ~ 0.7 m の円形土坑が集中する状況が検出された(図版 59-8)。ただし、これらの土坑からの出土遺物はない。一方、第 8b-3 層を除去すると、土器片が径 10 m ほどの範囲に散乱して出土した。破片数は多いものの、ほとんどが同一遺物の破片と考えられ、復元できたものは突帯文土器の浅鉢 1 点のみである(図 325-4)。無刻みの突帯を口縁部からやや下がった位置に持ち、胴部の屈曲はやや強い。この土器の出土により、第 8b-3 層は縄文時代晩期を上限とする時期に堆積したことがわかる。

また、上位の層準になるが、第 8b-2 層からも突帯文土器の浅鉢が出土している(図 325-5)。図 325-4 とは出土地点が近接しており、他に第 8b 層からの出土遺物がほとんどないことなどからも、両

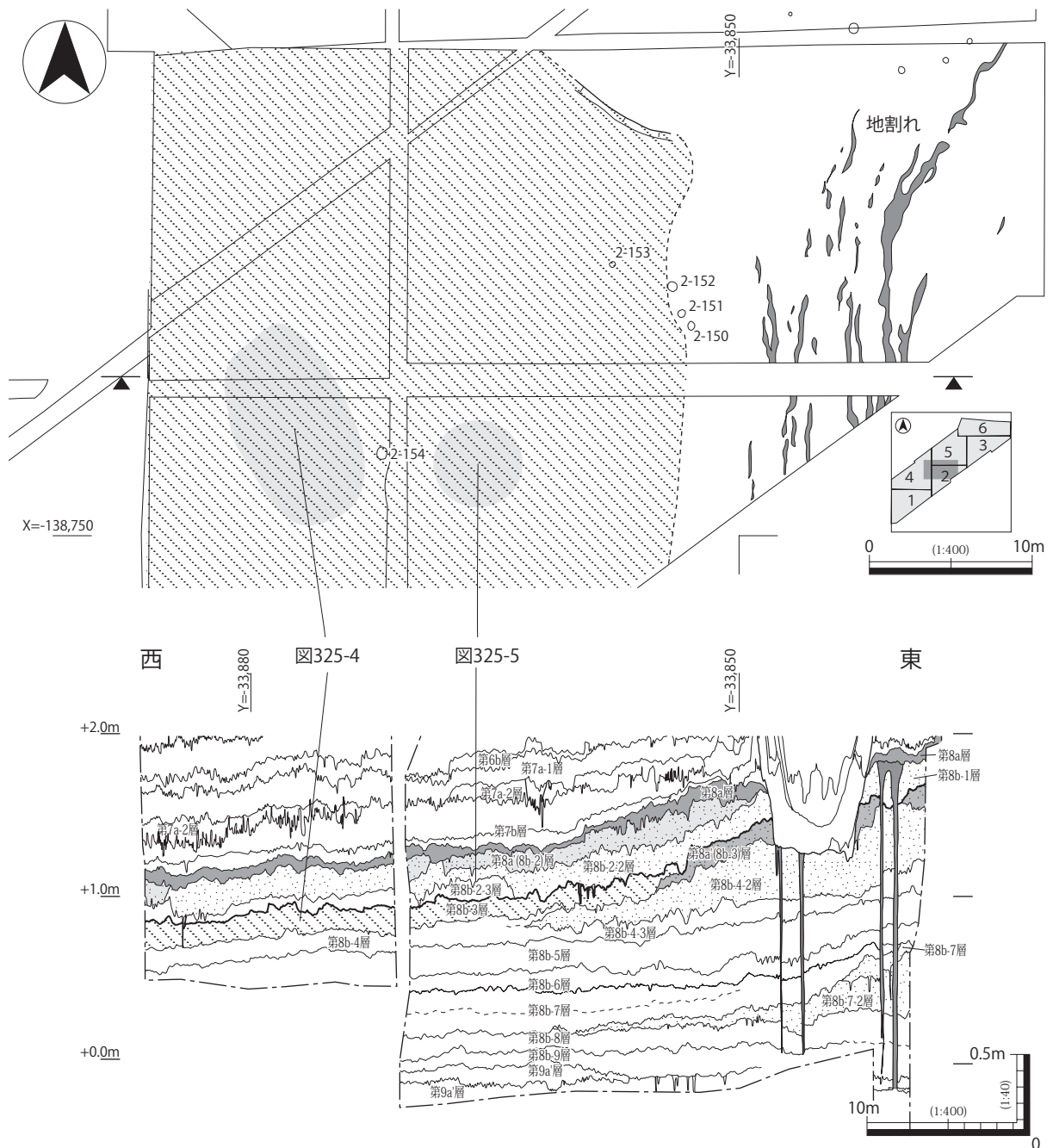


図 324 水陸分岐線と地震痕跡

者が関連する可能性が考えられよう。口縁端部よりやや下がった位置に幅 1 cm の突帯を設け、大型の左D字刻目を施す。口縁部と胴部の境には明瞭な沈線を引く。4・5ともに、突帯位置や刻みの形状などから、第8b面東側遺構群の3-267・268溝で出土した突帯文土器群よりも古い様相を持つと考えられ、出土層位と調和的である。3-267・268溝の形成前の段階における人間活動の痕跡を示すものといえよう。付近ではサヌカイト剥片も出土している（図325-1）。

また、少し離れた5区でも第8b-2層から、図325-3が出土している。突帯文期の浅鉢の口縁であろうか。図325-2は、より下層の第8b-4層から出土した縄文土器で、口唇部かとは思いますが器形は不明。中期末くらいのものだろうか。

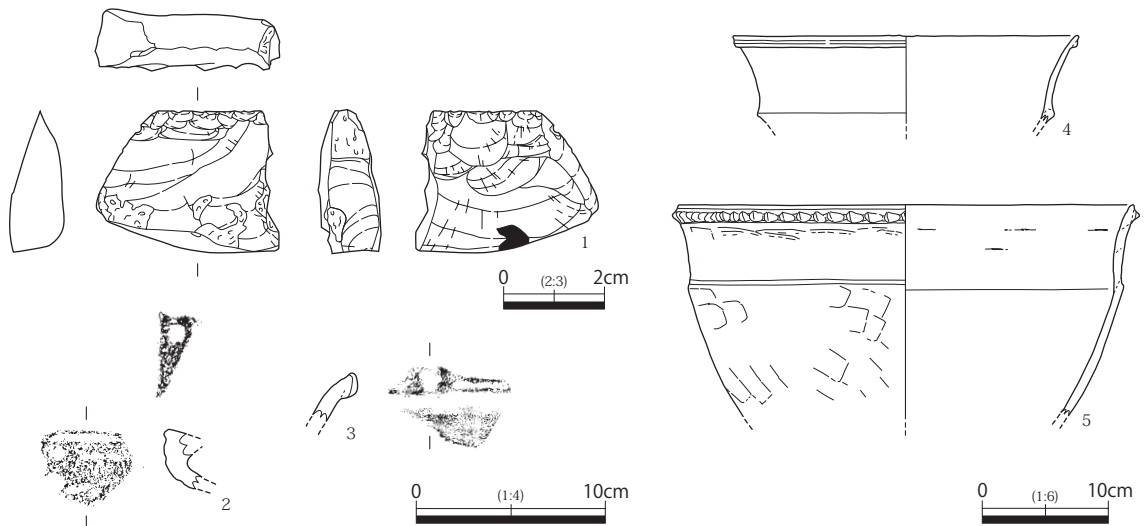


図 325 第 8b-2 層以下 出土遺物実測図

## 2. 地震痕跡

第 8a 層を除去した第 8b 面においては、第 9 節で述べた集落などの遺構のほか、地震による痕跡と考えられる土坑状の変形構造や地割れが確認されている（図 326）。変形構造については、3 区で 1 基、6 区で 3 基が検出された。いずれも長円形の土坑状を呈しており、検出段階では土坑として扱って

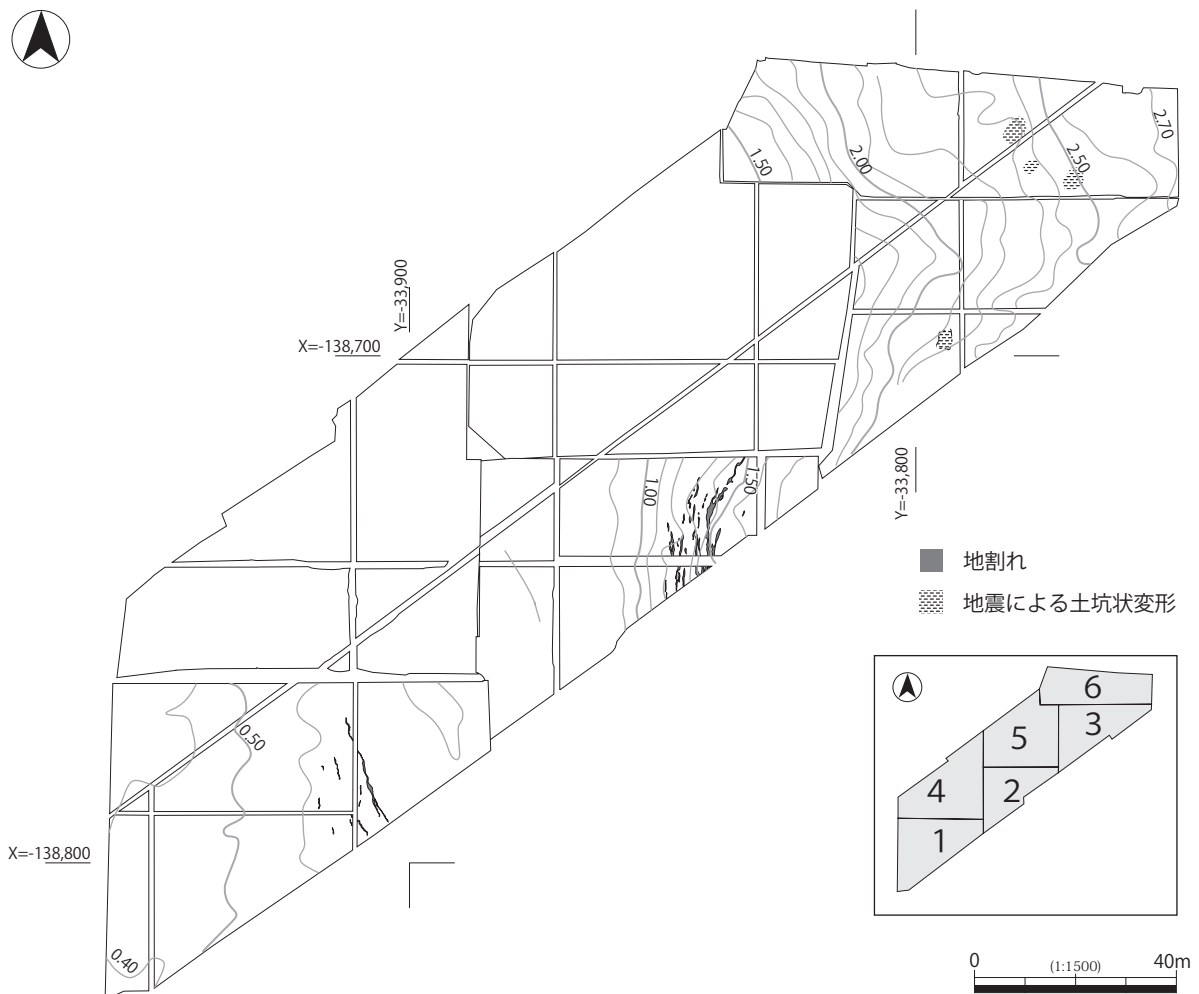


図 326 地震痕跡 平面図

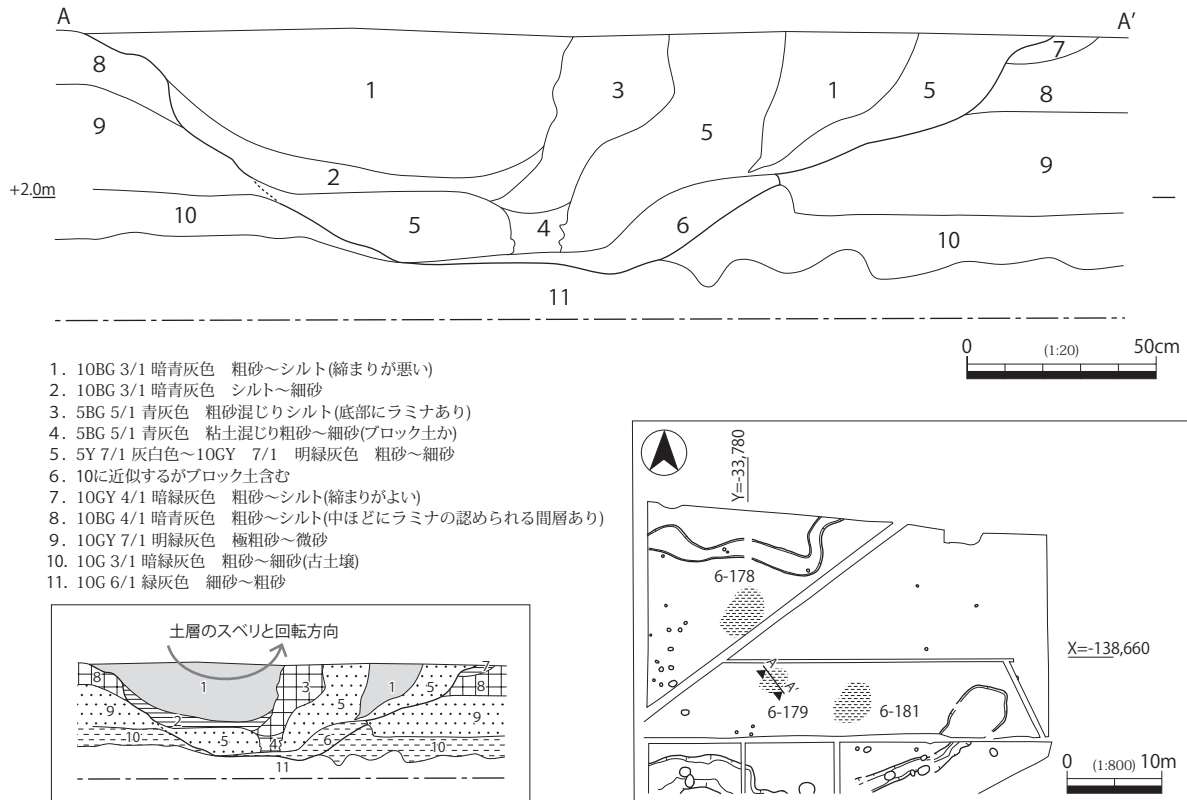


図 327 6-179 土坑状変形 断面図

る。6区で検出された3基(6-178、6-179、6-181土坑状変形)は長軸を南西-北西方向に持つ点で共通する。いずれの変形構造も周囲の土層が引き伸ばされつつ転がり込んだような複雑な断面構造を持つ(図版60-5～7)。このような土坑状を呈する変形構造については、沖積地での発掘調査において類例が見られるが(大文セ2001a)、その性格については不明とされてきた。ところが、当調査地北東の讃良那条里遺跡03-1調査地において100基以上の類例が検出され、これを検討した松田順一郎・井上智博によって、古墳時代前期に発生した地震による変形構造である可能性が示され、「土坑状変形」の呼称が与えられた(松田・井上2005・大文セ2008)。当調査地における変形構造の断面は、両氏によって示される土坑状変形の断面構造に近似しており、同様の性格を持つものと理解できる(図327)。ただ、その形成年代についてはより遡り、縄文時代晩期頃と考えられる。これは当遺跡と東大阪市の池島・福万寺遺跡での類例と同様の時期となると考えられ、生駒西麓の扇状地にほど近い低湿地遺跡という立地の共通性からも興味深い。なお、6-178、6-179土坑状変形からは土器細片も出土している(図297-1・7)。これらの遺物については混入遺物の可能性が高いが、弥生時代前期前半と考えられる土器片(図297-7)の出土は、土坑状変形を生じさせた地震の発生時期の上限を示す可能性がある。

検出された地震痕跡は、変形構造だけではない。1区と2区では地割れが検出された。特に2区で検出された地割れは顕著で、図324にも示したようにやや東に振りながら南北に延びる様子が看取できる。地割れは上端が第8a層除去面で確認され、下端は第9a層にまで達する。深さは2m以上にもおよび、地震発生時の衝撃の強さを物語る。地割れの両側では断層も起きており、図版61-2に見られるように第8b層が大きくずれている。地割れ内には上部から落ち込むか流入した土層が見られるが、下部では噴砂が確認できる(図版61-3・4)。これら地震痕跡は、世界有数の地震国である我が国において、災害予知や被害の軽減を図るための重要な資料といえよう。

## 第6章 特筆すべき遺物の検討

### 第1節 飛鳥時代の井戸杵転用船材における復元的検討

第7b面で検出された5-491井戸では、準構造船と考えられる船材を井戸杵や敷板、当て木として転用している状況が確認された。ここではこれらの船材について、転用原材としての船体構造を復元する視点から検討を行う。

**船底部** 図100-13・14、図101-15・16（以下では図番号を省略）は、井戸杵に転用されていた船底部である。図329にはこれらの実測図内面をまとめて示した。これらの材にはそれぞれ1ヶ所に方形の穿孔が認められ、上部の舷側板と組み合わせるための綴じ孔と思われたが、穿孔は粗く穿たれており、内面に結束材（樹皮）による磨耗痕跡などは見られない。舷側板と考えられる板材（図102-21～24）には約50cm前後の間隔で上下に穿孔が認められており、これらが綴じ孔と考えられることから、船底部に1ヶ所だけ穿たれた穿孔は別の性格を持つ可能性が高い。船が廃棄された後に、材の運搬、もしくは井戸杵の設置作業の際の縄掛けを目的として開けられたものだろうか。船底部の上端は井戸杵転用時と考えられる加工によってハツられているため、綴じ孔や仕口については、失われたものと考えられよう。

14・15の船底部の内面には工具痕などが明瞭に観察できる。両材は図面下部で内側に向かって反り上がっており（図329 j断面）、船首か船尾側となると考えられるが、反り上がった先端部について、井戸杵に転用する際に内面を手斧でハツっている。これは井戸の容積確保のためと考えられよう。もうひとつ注目されるのが、材の内面上半に偏在するくぼみである。くぼみは何らかの打撃痕跡とみられ、端部はあまり明瞭ではない。興味深いのは両材のくぼみがそれぞれ対応するような位置に確認されることである。この対応について、図329にA～Gのラインで示した。特にA～Dのラインについては、水平・垂直的位置ともに揃っており、単なる偶然とは思えない。同様のくぼみについては、滋賀県弘前遺跡出土の丸木舟に確認され、別部材の当たり痕と推定された（滋賀県教育委員会ほか2008）。同様のものは、当調査地南西の03-6調査地から出土した井戸杵転用船底部に

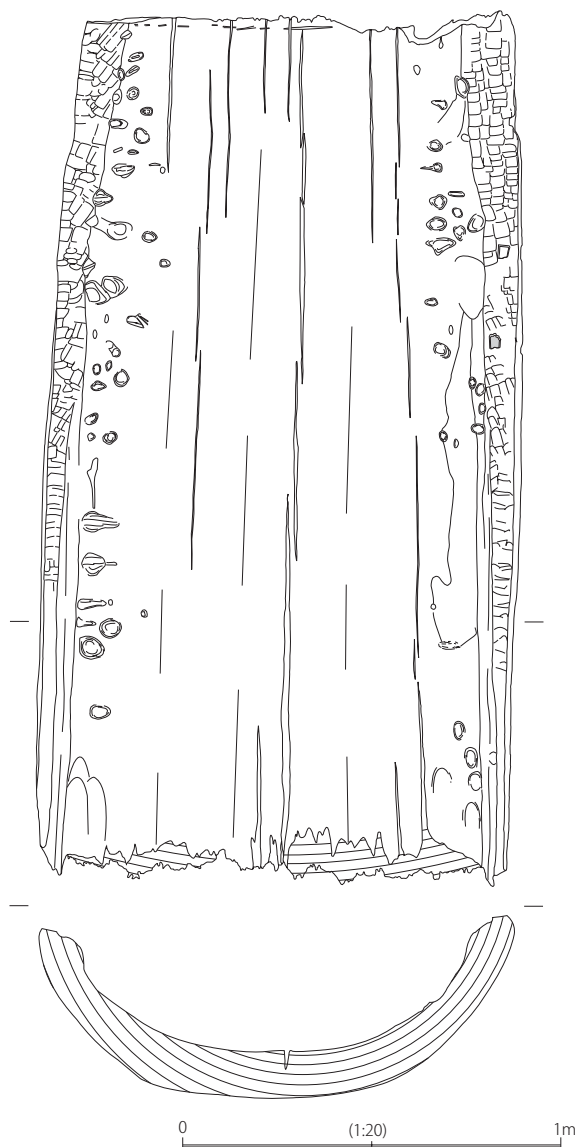


図328 讃良郡条里遺跡03-6調査地 船底部実測図

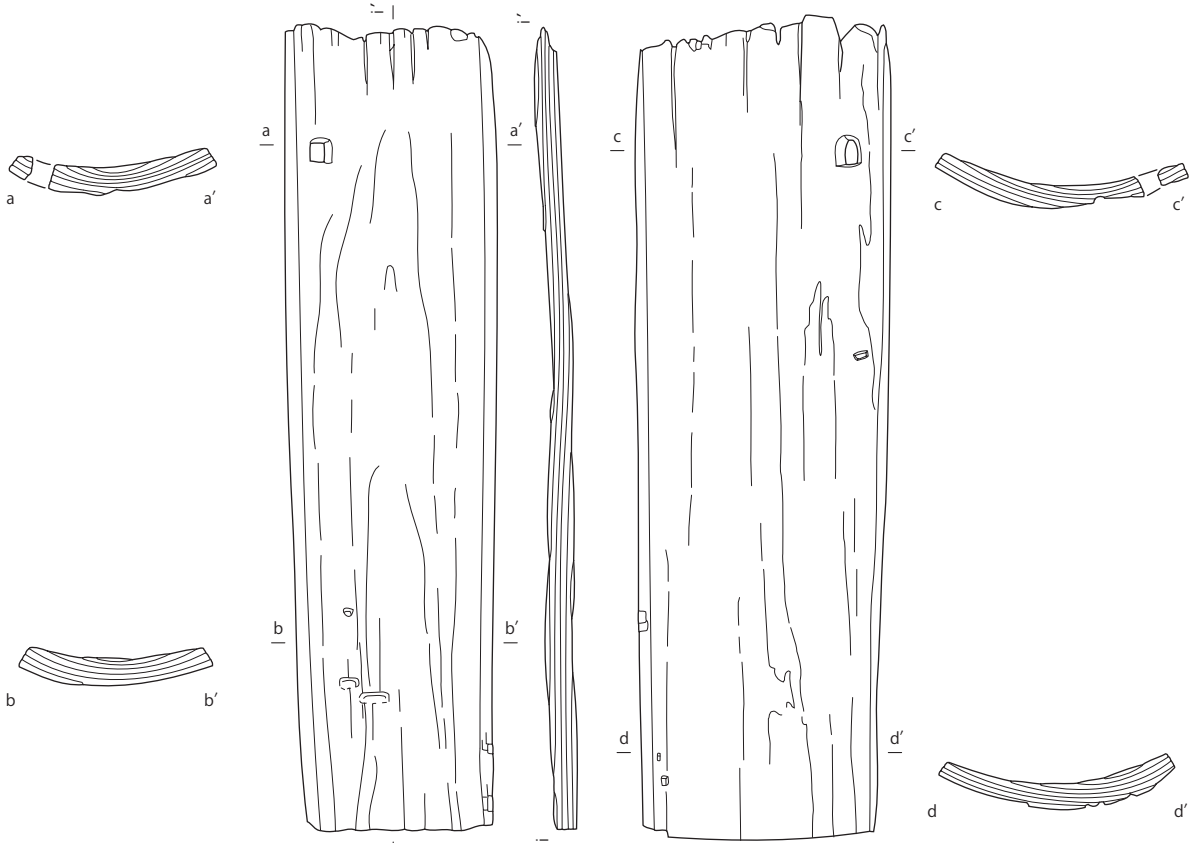


图100-13

图101-16

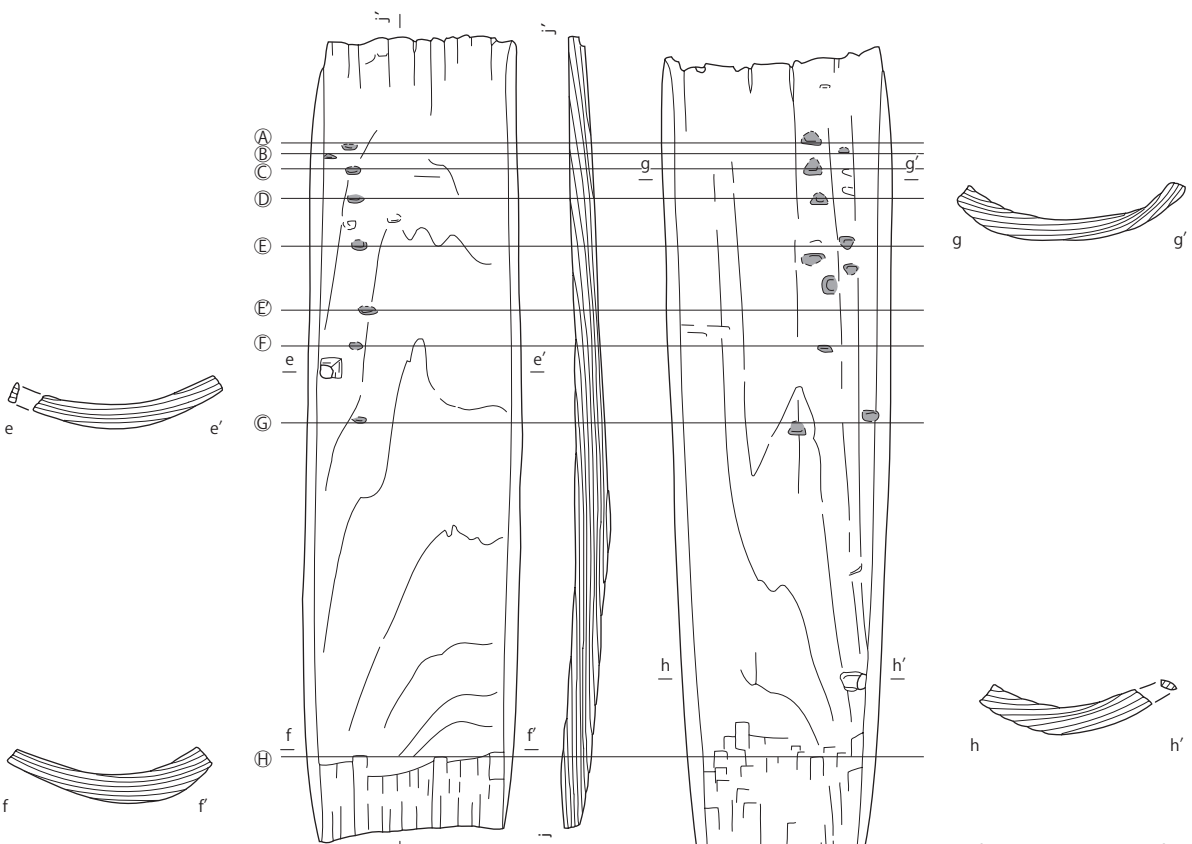


图101-15

图100-14



图 329 船底材实测图

も見られる（図 328）。この船底部は中軸線で分割されておらず、割竹形の船底部の断面形状が良く観察できる。13～16 と同様に上端部はハツられているが、部分的に内側に舷側板を接合するための受け部を作り出した仕口や綴じ孔が残存する（当遺跡南方の部屋北遺跡において検出された古墳時代中期の井戸（SE494）に転用された船底部にも、内側に受け部を作り出した仕口が見られる（大阪府教育委員会 2004）。一方、古墳時代初頭（庄内期）とされる久宝寺遺跡出土の船底部は外側に受け部を作り出す（大文セ 1987）。船底部と舷側板との接合にはいくつかの方法が想定できる）。03-6 調査地の船底部のくぼみも上端部に集中するとともに「左右一対」となる状況が見られ、担当者は「半月状の仕切り板」をはめ込む際の押圧によって生じた痕跡と考えている（大文セ 2008）。また、船形埴輪から準構造船の構造を想定した横田洋三は、左右の舷側板を挟み込むことで、湾曲を作り出し船体強度の増大と船幅の拡大を図るための部材として、「隔壁」を想定している（横田 2007）。隔壁は舷側板の上からはめ込まれるものだが、その下端が船底部まで達していた可能性がある。船形埴輪に表現される「仕切り板」や「隔壁」は、船首・船尾側に見られ、船体中央部には表現されていない。当遺跡の船底部内面に見られるくぼみが、14・15 のように船首もしくは船尾に近い部材のみに見られ、13・16 には確認されないことは、同様の構造材の設置に伴ってできた痕跡であることを示すものといえよう。それでは、仕切り板と隔壁、どちらの構造材による痕跡と考えるか。

横田の想定する隔壁は相当の圧力をもって舷側板を挟み込むため、何度もその位置を変えるような性格のものではなく、船底部内面に多数のくぼみが付くような状況は考えにくい。また、後述のように当遺跡の舷側板には、綴じ孔としての下部の穿孔だけでなく、上部にも規則的な穿孔が見られることから、さらに上部に舷側板を有した 2 階建ての構造を持っていた可能性がある。船体上部から挟み込んだ隔壁の下端が船底部まで届かないことも考えられよう。以上から、舷側板と船底部を船体内部から支持し、ヨコ方向の圧力から守るための部材として、仕切り状の板材（あるいは棒状の支持材）の存在を考えたい。上部から打ち込むように設置された板材は、船体の収縮や航海後の傷みなどから生じる、舷側板や船底材の湾曲、緩みなどの状況に応じて位置を変え、設置し直されたと考えられ

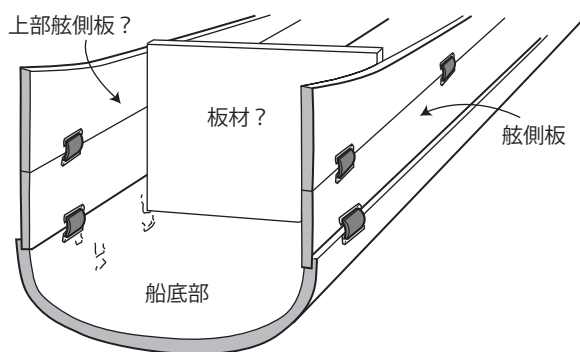


図 330 船体構造復元図

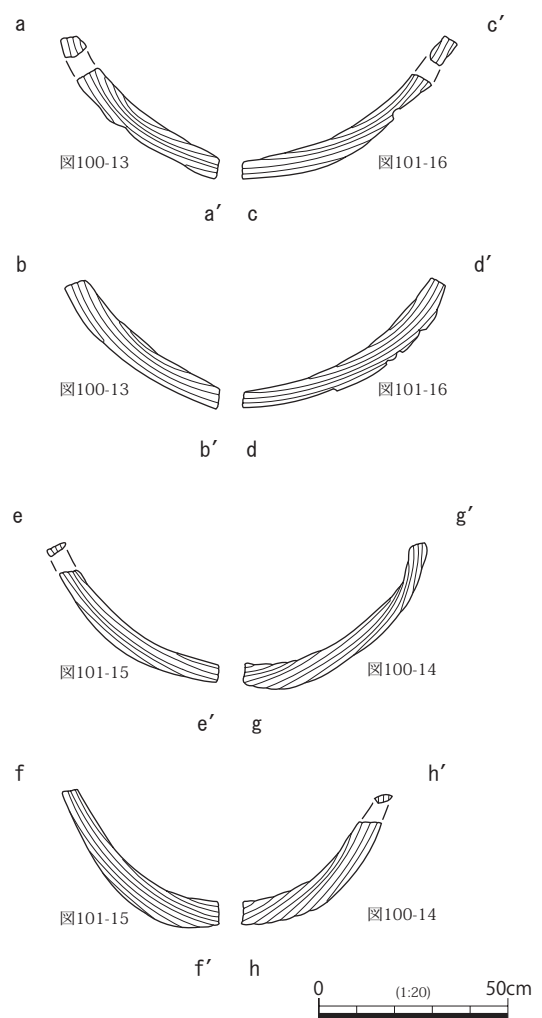


図 331 船底材復元断面図



る。そうした設置の繰り返しの都度、板材の下部が船底材と衝突して生じた打痕が、複数の左右一対のくぼみとして認められているのではなからうか。舷側板を加えた復元図で示すと、図 330 のような構造が想定できよう。

いずれにしてもこのくぼみの存在により、14・15 の両材が中軸船から分割された同一個体の船底部であることが証明できる。船底部の横断面 a～h については、その形状と小口の年輪から傾きを変え、図 331 に示した。中軸線から分割された接合部材について、同じライン上で断面図を作成していないうえ、転用によって上端部を失うため確実ではないが、約 1 m の船幅が復元できる。また、図上部の断面から下部の断面にかけて内法が狭くなる様子が看取でき、14・15 と 13・16 の両者が一体の船底部から分割された可能性を示す。さらに、図 329 では 16 の実測図左下部に切断時にできた切り欠きが見られるが、14 の左上部にも風化により傷んでいるものの、16 の切り欠きに対応するような凸部が見ることができ、14 と 16 が接合資料となることを示唆する。つまり船材の転用に際しては、船底部の一部を 4 分割して使用していることが考えられるのである。

**舷側板** 図 102-21～24 は、方形に組み合わされた状態で井戸枠の下から出土した敷板、図 102-17～20 は井戸枠に開いた穿孔を塞ぐような状態で出土した当て木である。これらはいずれも同様の厚さと穿孔を有しており、舷側板が転用されたものと考えられる。これらについて、小口の年輪と穿孔の大小により上下を揃えて示したものが図 332 である。なお、揃える際に図 102 に掲載した面の裏側を図示するものについては、外形線のみで表現している。さらに、井戸枠が上に据えられることによって変形した材に関しては、図 102 においてはそのまま示したが、図 332 においては、船体構造を復元する本稿の目的に則って、できる限り変形の無い状態を図示した。さらに取得する断面もいくつか加えている。21～24 の材は上下に幅の異なる穿孔（上部：4×2 cm、下部：7×2 cm）を持つ。21・22 は上下に 1 孔ずつ。23 は明確なものが上部に 2 孔、下部に 1 孔であるが、24 の下部穿孔の状況から、図左下の欠損部に穿孔の存在を想定した。24 についても、下部の 2 孔のほかに、上部の欠損部に 2 孔の存在を想定している。これら上下の穿孔のうち、どちらかは船底部と舷側板を接合するための綴じ孔と考えられるが、13～16 の船底部に綴じ孔が認められなかったため、不明である。本稿では幅広の穿孔について船底部との綴じ孔と仮定し、下部になるよう図示した。一方の上部穿孔については、後述するように 54cm を基準として規則的に開けられている。これについては船の前後部に図 330 で示したような上部舷側板の存在を想定し、結合のための綴じ孔と理解した。

さて、これらの材が同一の舷側板から切り出されたものとするならば、どのような接合関係にあるのか。上下の穿孔が手がかりになりそうである。図 333 では、穿孔間の距離が近似値を示すように各材を並べた。短い材（21・22）と長い材（23・24）は交互に並ぶ。上部の穿孔に関しては、54cm でほぼ等間隔となったが、下部の穿孔に関しては不統一で、41～58cm の間隔を持つ。なお、21・22 の長さ（横幅）は 54～56cm となっており、穿孔間の距離と近似することに注意される。図上で復元される 21～24 の長さの合計は 290cm となっており、21・24 の材間でちょうど半分分割できる。

次に 17～20 の当て木に関してだが、17・19（18 の左端は穿孔ではなく欠損の可能性が高い）に見える穿孔から、これらについても 21～24 と同じ舷側板から転用された可能性が高い。18 の表面に、21・22 と同様の削り出し段が見られることもこれを補強しよう。ただし、これらの材に関しては小片に過ぎ、21～24 で行ったような資料操作ができず原材の復元が不可能である。図 333 の下部には試案として配置したものを示した。18～20 は木口に見える年輪の傾きと密度から、舷側板下部の材と

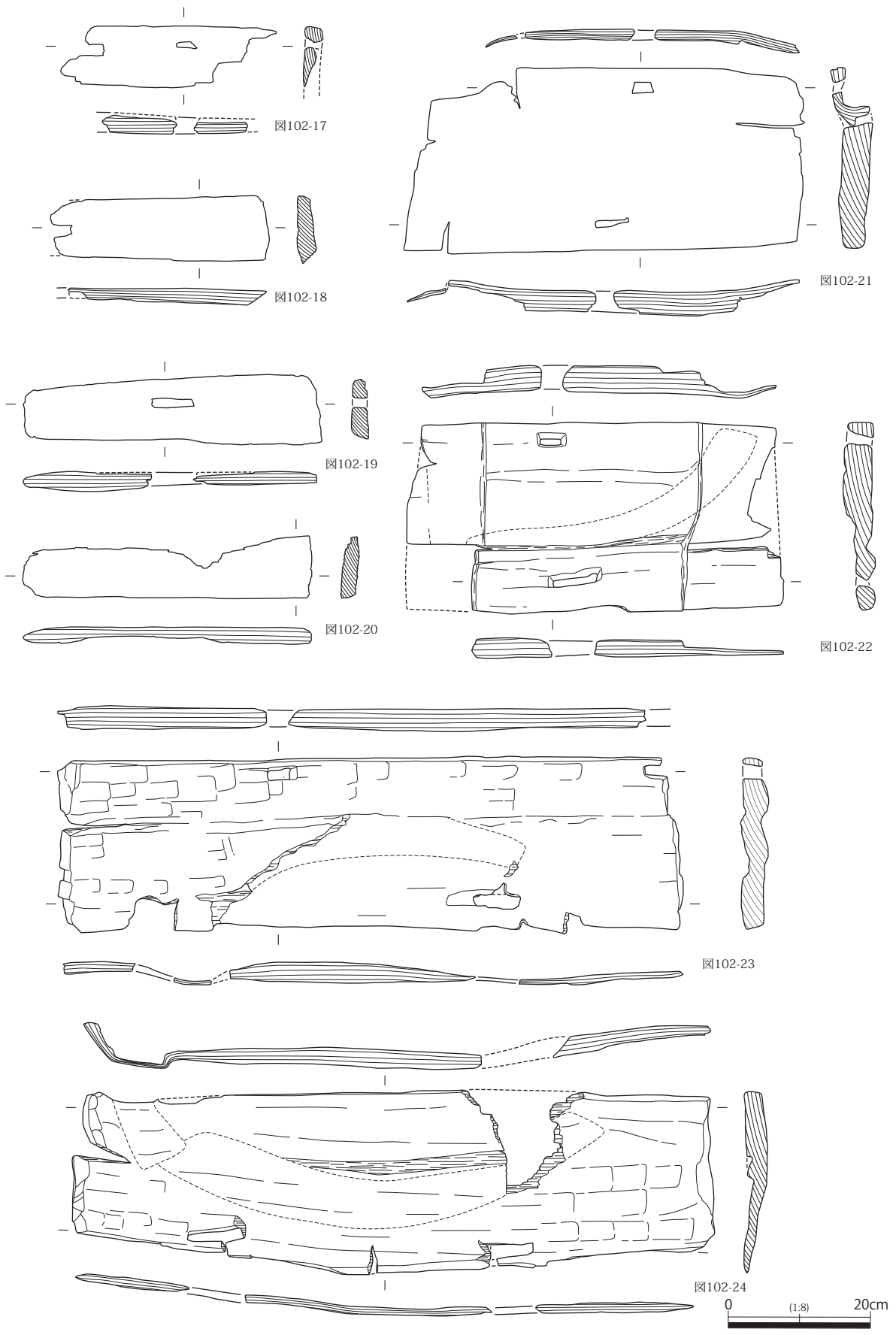


图 332 舷側板実測図

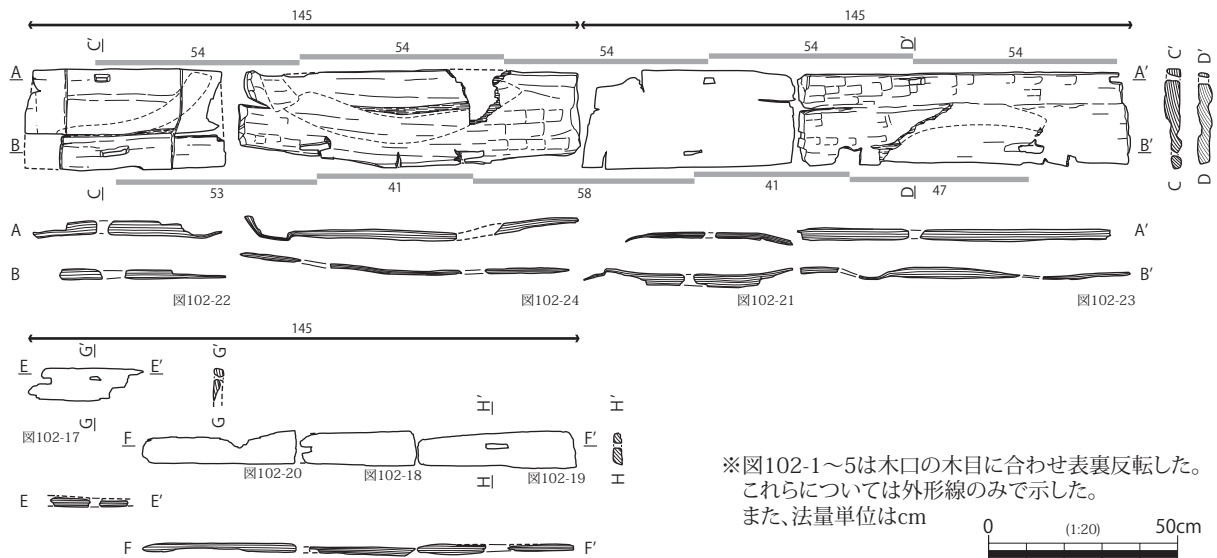


図 333 舷側板復元図

考えられる。18～20を接合するように横に並べるとその長さは115cmとなる。一方17は、穿孔の大きさと年輪の傾きから上部の材だろう。欠損部が多く、ひとつだけ上部の材となることから配置が難しいが、残存部位の長さが30cmとなることに注意される。21～24の長さが290cmと考えられることは先に述べたが、それを半分に切断した長さは145cmである。18～20の長さ115cmに17の30cmを足した長さも145cmとなる。もちろん偶然の一致を否定できるわけではないが、17～20の材が145cmの板材から切り出されたと仮定すれば、17～24までの材は、約430cmの舷側板を3分割したのから切り出されたことになる。翻って再度船底部の法量を見てみると、13～16の各船底部の長さが、約210～220cm。13・16と14・15が接合する可能性が高いことから、復元長は約430cmとなり、17～24の長さの合計と合致するのである。このことから廃船となった船材の転用に際して、船底部と一方の舷側板430cm分を原材として使用した状況を考えてことができよう(図334)。船体規模については、船幅1に対し、12.5程度の比率で全長が復元できるとされている(横田2007)。当遺跡の船材転用に関しては船体の3分の1程度の材を対象として行われたものとも考えることもできよう。

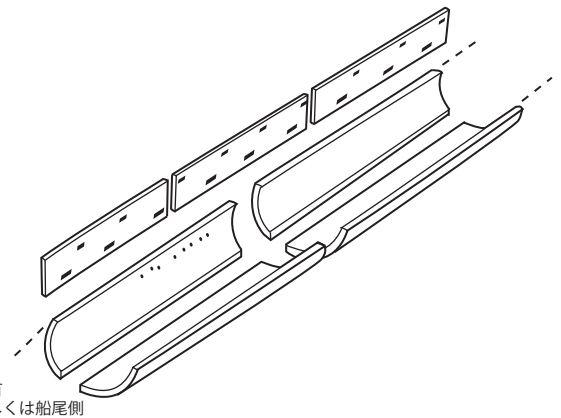


図 334 想定される船材分割図

以上までの検討により、転用材から船体構造を復元するとともに、切り出された各材に見られる法量に規則性を見出すことができた。これにより、廃船材の調達と加工過程の一端を明らかにしえたと考えられる。さらに、材に見られる基準尺などを抽出できれば、飛鳥時代における度量衡をも検討することができよう。当遺跡周辺での大規模調査の実施により、準構造船船体の出土資料は増加している。これらを加えて検討することで、さらに新しい知見を得ることも可能と考える。

なお資料を検討するにあたり、横田洋三、上垣幸徳、中川治美の各氏からご指導・ご教示をいただいた。文末ではあるが記して感謝したい。

## 第2節 滑石原材における穿孔からみた製作技術の復原

### はじめに

第7b面では5区を中心として滑石製品が多く出土しており、原石が一定量含まれることから、当遺跡内において滑石製品の製作が行われていることが想定された。これらの原石の中には、表面に穿孔を施した例が多数認められた。通常、これらの穿孔は石材の硬度を確認するためにあけられると考えられており（篠原 1996）、原石に1つないし2つ穿かれるものがあることが報告されている（大岡 1998）。しかし、当遺跡の出土資料では、1つの原石に2ヶ所以上の穿孔が認められ、図195-42にいたっては12ヶ所を数える。石材の硬度を確認するためであれば、このように複数の穿孔を行う必要は考えにくく、またこれらの穿孔をおこなっている面には、ネガティブな剥離が認められる資料が確認できたため、これらの穿孔が当遺跡での滑石製品の製作技術に関わるものであることが考えられた。

そこで、本稿ではこれらの資料から、滑石製品製作、特に白玉の工程について試論を提示するものである。

### 1. 白玉製作に関する研究史

白玉の製作方法に関する研究はこれまでに多数行われている。これらの技法は滑石産地の差によって石材に制約をうける（有効に利用する）ことによって成立したものと考えられる。椋山林繼と篠原祐一は、白玉の製作技法として以下の4種類に分類している（椋山 1971・篠原 1995）。

- A. 平板石に基盤目状に直交する溝を入れ、各々の中央に穿孔し、チョコレートのように割るもの。
- B. 研磨を行った扁平長方形の細長い板材を次々と切断し長方形の材をつくり、整形、穿孔するもの。
- C. 荒割された板状の扁平石を原材とし、一個ずつ割り出していくもの。
- D. 管玉を切断するもの。

このうち、Aについては類例が少なく、またDについては可能性としてあげられているものである。このうちB・Cが一般にみられる製作方法であるとしている。

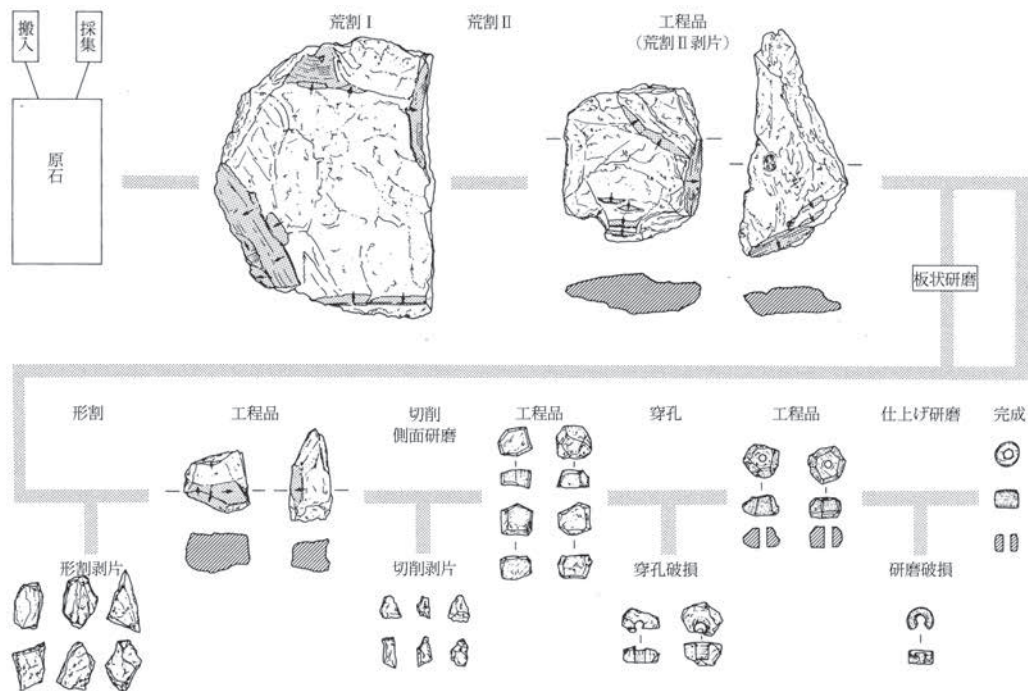
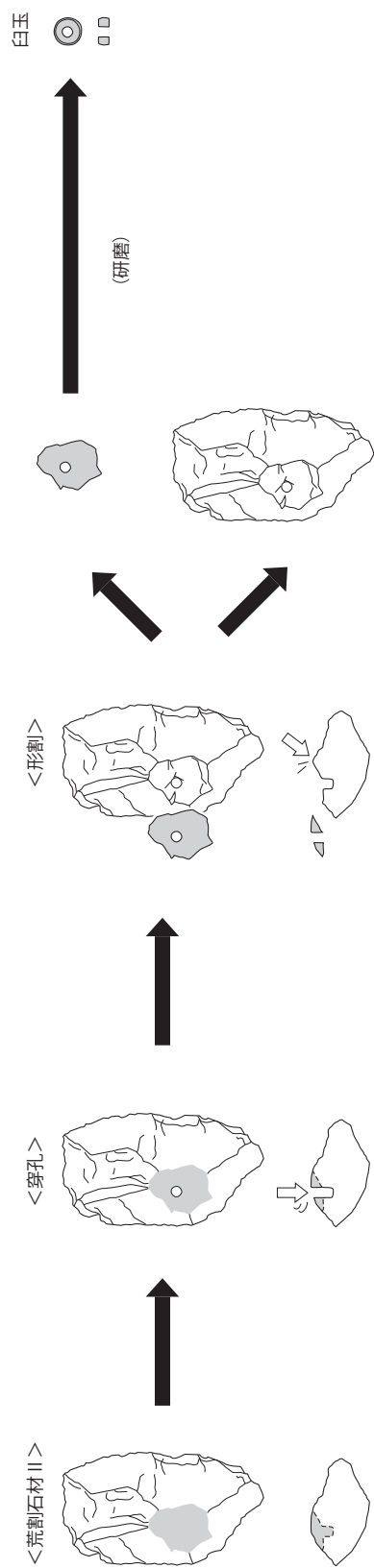


図335 白玉製作工程模式図（篠原 1995 より）S = 2 / 3

製作工程案①



製作工程案②

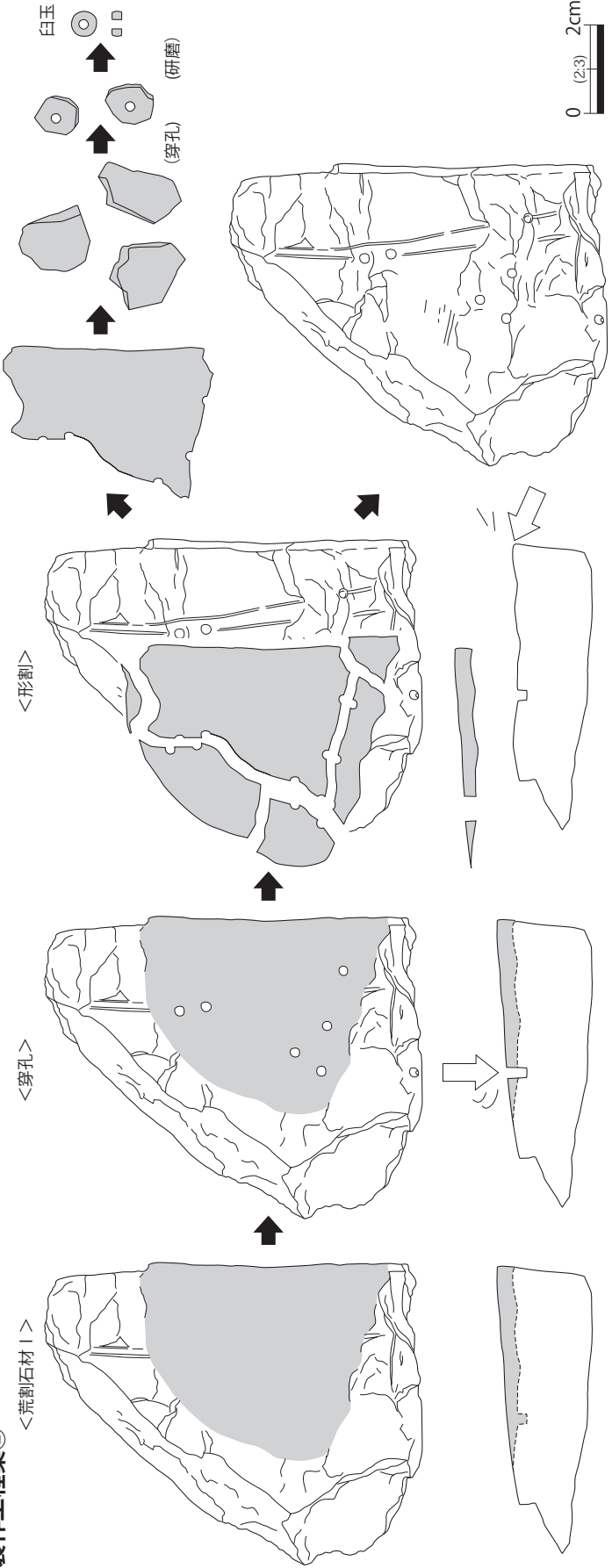


图 336 滑石製白玉製作工程復原图

また、篠原は石製模造品製作の工程を、荒割Ⅰ→荒割Ⅱ→形割→切削・側面荒研磨→穿孔→仕上げ研磨→完成の順に復原している（図 335）。

荒割Ⅰは原石を荒割したもので、打突によって分割する第一段階のもの。剥離片は、一面以上が平坦化し、安定化したものを求めて削り出す工程である。図 194-40、図 195-41・42 が相当する。

荒割Ⅱは荒割Ⅰをさらに荒割したものである。比較的、方形・長方形を意識して削り出すことが多い。この段階で、平坦面に研磨を施し、板状に揃える場合がある。また、穿孔工具（錐）の先端痕が見られるものがあり、Bの方法や穿孔を先行させてから形割する方法等になるもので、この段階の細分も可能であるとしている（篠原 1995）。図 194-35～39 が相当する。

## 2. 讚良郡条里遺跡の白玉製作工程復原案

当遺跡の製作技法はCに該当し、一個ずつ削り出していく工程の違いから以下の工程復原が考えられる（図 336）。

### ・製作工程案①（初期穿孔形割）

荒割石材Ⅰ or Ⅱ→穿孔→形割→切削・平面研磨→側面研磨→完成

まず、荒割された石材に穿孔を行い、その後その箇所を切り離し、成形・加工し白玉に仕上げる工程をたどる。なお、出土資料の中で未成品は図 193-19 のみであるが、これには側面の荒研磨が施されていないことから、側面研磨は平面研磨の後に行われたものとして工程復原した。ただ、この方法では必ずしも穿孔した場所を中心として、形割による切り離しができるとは限らないという問題点がある。

### ・製作工程案②（ミシン目形割）

荒割石材Ⅰ or Ⅱ→穿孔→形割→切削・平面研磨→穿孔→側面研磨→完成

荒割された石材に穿孔を行い、加撃を行って穿孔にそって扁平な剥片を剥離し、そこから形割・切削・平面研磨を行ったのちに、再度穿孔を行う工程をたどる。ただ穿孔が一定に行われておらず、最初から剥離の衝撃で切削を得ることを目的として穿孔を行った可能性も考えられる。

### おわりに

当遺跡には、荒割Ⅰ段階の大型の石材が持ち込まれているにもかかわらず、他の遺跡と比較して特異な滑石製品の製作工程案が復原できた。こうした工程がはたして滑石製品の製作に慣れた工人が行ったといえるか疑問である。廣瀬時習は池島・福万寺遺跡の滑石製品の生産について、「集落で使用された玉類は、基本的に専業生産・流通と言った行為を介在することなく、集落内において随時生産され使用されたのではないだろうか。」としている（廣瀬 2002）。当遺跡でも集落内での生産・消費を目的として、試行錯誤を繰り返しながら滑石製品を製作し、祭祀の際に使用していたと可能性が考えられる。

滑石製品の生産は、5世紀後半～6世紀初頭にかけて最盛期を迎え、その後減少することが先行研究から明らかになっている（関川 1986・米田 2008）。当遺跡出土例は、滑石製品の生産規模の縮小という転換・衰退期に集落がとった試行錯誤の末のオリジナリティーの結果なのではないだろうか。今後こうした類例が報告されることを期待したい。

### 【謝辞】

資料の検討にあたっては、大岡由記子、島崎久恵、廣瀬時習、山岡邦章、各氏のご指導を得た。記して謝意を表す次第である。

### 第3節 弥生時代前期前半の土器焼成失敗品

#### はじめに

第8b面で出土した弥生土器の中には、田崎博之が「焼成失敗品」と呼称する、土器製作に深く関係する資料が含まれていることが確認された（2006年12月、2007年6月の2回にわたり氏から直接の調査指導をいただいた。記して感謝する）。これらの資料は、当遺跡内において土器焼成行為が行われていた可能性を示すものであり、近畿地方への弥生土器伝播の初期段階において、確立した土器製作技術の伝播があったことを示唆する点で極めて重要である。

これらの焼成失敗品については表8に一括して示した。焼成失敗品として抽出した資料18点のうち、東側遺構群（弥生時代前期前半）のものは16点、西側遺構群（弥生時代中期）のものが2点あり、全て弥生土器である。ただし、焼成失敗品と積極的に認定できないものの、その可能性があるため参考資料としたもの（7点）の中には、突帯文土器が含まれている。

図337は東側遺構群から出土した16点の焼成失敗品の出土分布を示したものである。比較的散在しているかのように見えるが、遺構から出土している13点については、6-143、6-152土坑などの炭化物の入る焼土坑の周辺、3-267・268溝、5-991溝とそれぞれ分布を持ちながら集中する状況がわかる。こうした出土分布は土器焼成の場と失敗品廃棄の場を示している可能性があるが、類例の乏しい現時点での判断は避けたい。

田崎はこれらの焼成失敗品について、その形状や想定される成因から大きく4つに分類して検討を行っている（田崎2005・2007b）。当項においても、田崎の分類に拠って各資料を整理したい。

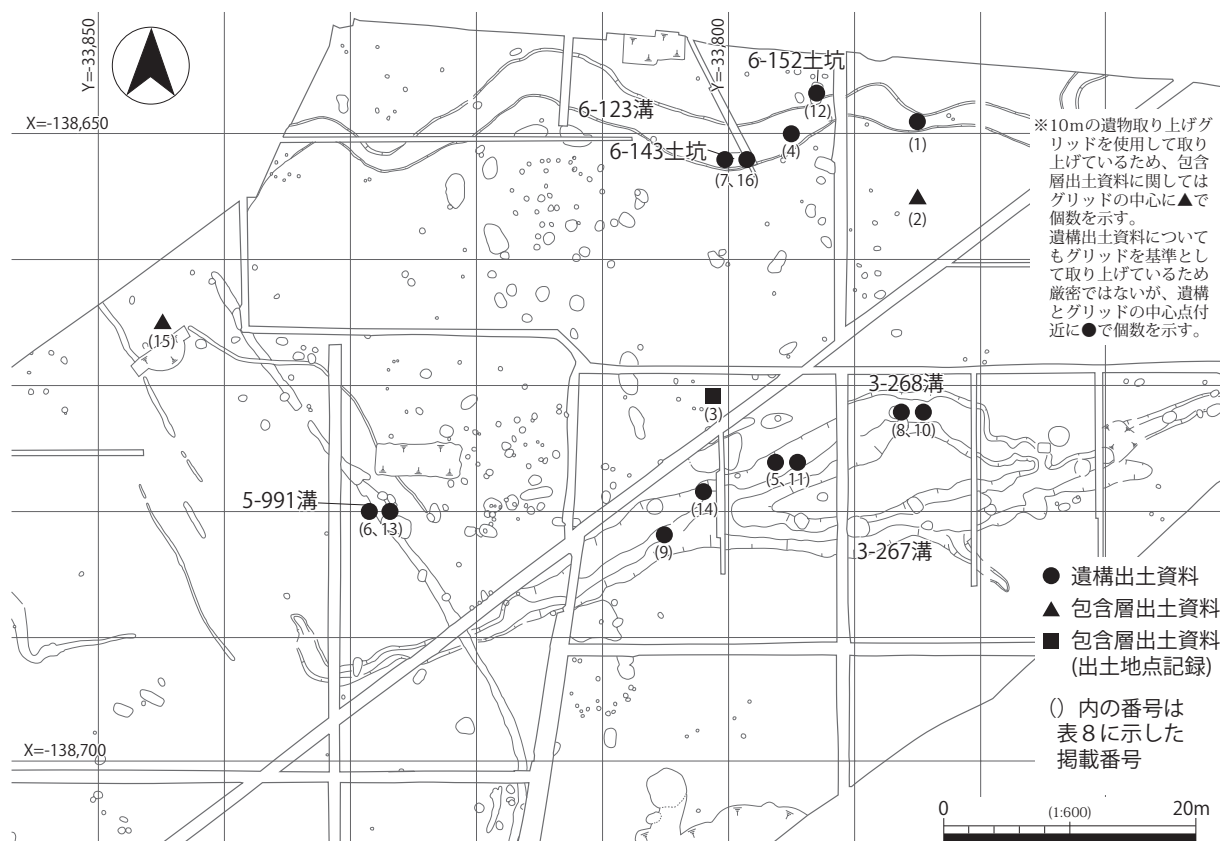


図337 焼成失敗品出土分布図

## 1. 焼成破裂痕土器

土器焼成時に器面が弾け飛んだように剥離した破損痕跡を持つ土器（片）である。これについて田崎が特徴として挙げるのは以下の通り。

- (i) 不整な円形もしくは楕円形
- (ii) 中央が深く周縁が次第に浅くなるクレーター状の窪み
- (iii) 破損した面も器表面と同じ色調に焼き上がる
- (iv) 器体の外面に生じることが一般的
- (v) 連続して二重三重に重なる例がある

さらに上記の特徴について、「中でも (i) ~ (iii) については、特徴的であり、とくに (ii)・(iii) は二次的な火熱、打撃や加圧による器面剥離では決してみられない。焼成過程で生じる特徴的な破損痕跡であり、以上の特徴をもつ焼成中に生じる破損を「焼成破裂」、その痕跡を「焼成破裂痕」と呼ぶ」としている。

当遺跡出土資料の中で以上の特徴を持ち、焼成破裂痕土器と考えられる資料は6点あり、図338に示した。1は、6-123溝から出土した甕である。底部を欠くが、体部中央に焼成破裂痕が認められる。径10×6cmとやや大きく、いくつかの破裂痕が重複している可能性もあるが、破裂痕中央部を欠いており不明である。破裂痕右下部には剥がれ残った外面器表が残存しており、あるいは他の器表面も焼成時ではなく使用中に剥離した可能性もある。2は、6区の第8a層から出土した甕の口縁部である。体部上半から口縁端部にかけて破裂痕が3単位以上重なって確認され、最も大きく残存する右下部の破裂痕は推定径4.0cmの円形を呈する。3は、建物26プラン内の包含層から出土した壺胴部で（図253）、胴部下半に連続した破裂痕を持つ。破裂痕の直径は4cm前後と考えられる。以上の3点は破裂痕が認められるものの、いずれも浅く器体に孔が開くには至っていないと考えられる。こうした土器については容器としての機能を損ねているわけではないので、製品として通常使用された可能性があり、土器自体の遺存状態が比較的良好なことも、一旦は完成品として焼成が完了していたことを示唆するもの

表8 第8b面焼成失敗品

	掲載番号	出土遺構・層位	種別	分類	備考欄	
焼成失敗品	図338	1	6-123溝	弥生土器	焼成破裂痕	(図286-16) 浅い焼成破裂痕
		2	6区第8a層	弥生土器	焼成破裂痕	(図306-34) 連続した痕跡
		3	3区第8a層	弥生土器	焼成破裂痕	(図299-49)
		4	6-123溝	弥生土器	焼成破裂痕	
		5	3-268溝	弥生土器	焼成破裂痕	(図348-41) 内面側接合部剥離あり
		6	5-991溝	弥生土器	焼成破裂痕	(図348-40) 内面側接合部剥離あり
	図339	7	6-143土坑	弥生土器	焼成破裂土器片	
		8	3-268溝	弥生土器	焼成破裂土器片	エッジの残存悪い。外面側接合部剥離あり
		9	3-267・268溝	弥生土器	焼成破裂土器片	外面黒斑
		10	3-267・268溝	弥生土器	焼成破裂土器片	エッジの残存悪い
		11	3-268溝	弥生土器	焼成破裂土器片	
	図340	12	6-152土坑	弥生土器	焼成不完全品	(図291-18) 外面黒斑 底部円形剥離
		13	5-991溝	弥生土器	焼成不完全品	(図284-14) 外面黒斑 底部円形剥離
		14	3-267・268溝	弥生土器	焼成不完全品	(図276-91)
		15	5区第8a層	弥生土器	焼成不完全品	(図350-54) 外面黒斑
参考資料	図341-16	6-143土坑	弥生土器	焼成時破損I種 e	剥離面にまで黒斑付着	
	図版138左下	4区第8a層	弥生土器	焼成時破損I種 c & f	(図237-14) 中期遺物?	
	図版138右下	4区第8a層	弥生土器	焼成時破損I種 f	(図237-15) 中期遺物?	
参考資料	図342	1	3-267溝	突帯文土器	焼成破裂痕	接合部剥離資料の可能性あり
		2	3-268溝	突帯文土器	焼成破裂痕	(図266-10)
		3	3-268溝	突帯文土器	焼成破裂痕	浅い焼成破裂痕
		4	6-119土坑	弥生土器	焼成破裂土器片	エッジが全周に残存せず
		5	3-268溝	弥生土器	焼成破裂土器片	接合部剥離資料の可能性あり
		6	3-268溝	弥生土器	焼成破裂土器片	エッジが全周に残存せず
		7	3-268溝	弥生土器	焼成破裂土器片	



焼成破裂痕土器

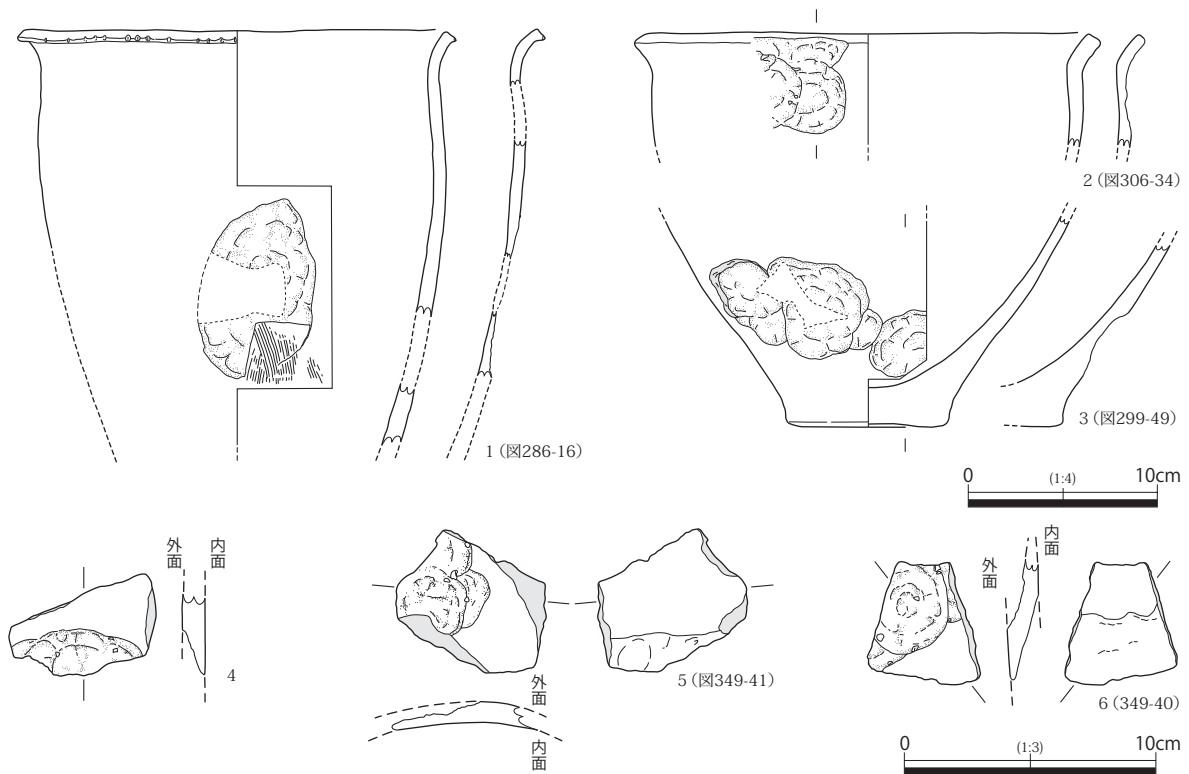


図 338 焼成失敗品実測図 1

といえる。

一方、4～6は器形の復原が不可能な小片である。4は、6-123溝から出土した胴部片である。推定径6cm前後の円形でクレーター状に窪む破裂痕は器表外面から内面にまで達しており、焼成破裂によって器体に孔が開いたことがわかる。焼成破裂面は外面器表と同じ灰白～淡黄色を示す。5は、3-268溝から出土した。器体の湾曲が強いことから、壺の胴部上半もしくは頸部片である可能性が考えられる。内面には粘土接合部から破損したと考えられる剥離痕が確認された（剥離面を呈する〈接合部剥離資料〉については次節にて検討）。外面に3単位以上の焼成破裂が重なって確認され、最も大きく残存する左下部の破裂痕は推定径5.0×3.5cmの楕円形を呈する。破裂痕の中心部が土器片の左端部ほどに位置すると見られ、深さは推定0.5cmを測る。土器片の持つ器厚は0.8cmであるため、焼成破裂によって器体に孔が開いた可能性は高い。6は、5-991溝から出土した体部片である。器種は不明。内面には5同様に粘土接合部からの剥離痕が確認された。外面には3単位以上の焼成破裂が重なって確認され、最も大きく残存する中央の破裂痕は推定径4.5×3.5cmほどの楕円形を呈する。クレーター状の中央破裂痕の中央部が最も深くなるが、その部分での深さは推定0.7cm、土器片の持つ推定器厚は1.2cmであるため、この場所での焼成破裂によって孔が開くまでは至らなかったと考えられる。破裂面は外面器表と同じ灰白～灰黄色を示す。5・6の内面器表に見られる接合部剥離面は平滑で外傾する接合面の状態をよく示しており、破裂痕の荒れた器面とは大きく異なる。

## 2. 焼成破裂土器片

焼成破裂により器体から剥離した土器片である。田崎が挙げる特徴は以下の通り。

- (i) 不整な円形もしくは楕円形
- (ii) 焼成破裂面の中央が凸レンズのように膨らみ縁辺が薄く尖る

- (iii) 焼成破裂面も器表面と同じ色調に焼き上がる
- (iv) 径3～7cm前後、厚さが2～5mmほどのものが多い
- (v) 土器の外表面が弾け飛んだ破片が多い

「焼成破裂土器片」は焼成破裂痕と「ネガとポジの関係」にあるため、上記の特徴も焼成破裂痕の持つ特徴を裏返したものであり、特に重視されるのも(ii)・(iii)である。焼成破裂痕土器片と考えられる資料は5点認められ、図339に示した。

7は、6-143土坑から出土した壺の体部片である。幅3.2cm、長さ2.9cm、最大厚0.7cmを測る。わずかに残存する器表内面の周囲は焼成破裂面となっており、推定される直径は4.5cmである。ただし、右下部については、土器成形の際の接合方向に平行して破損しており、焼成破裂面ではなく接合部剥離面である可能性を残す。土器片中央部に器表内面が確認されることから、焼成破裂によって器体に孔が開いたことがわかるが、6-143土坑からはこの土器片と接合関係にあるような壺の出土はない。9は、3-267・268溝から出土した。器種は不明。幅5.1cm、長さ5.0cm、最大厚1.2cmを測る。器表外面は全面に黒斑が生じている。器表内面は全面が破裂面で器表の残存はない。ただ、最大厚1.2cmであることを考えても、焼成破裂によって器体に孔が開いた可能性が高い。推定される直径も約10cmとなり、かなり大型の焼成破裂土器片といえよう。黒斑が断面や破裂面には認められないことから、器表外面に黒斑が生じた後に9が剥離したのは間違いない。田崎は焼成破裂が最も起きやすいのは、焼成温度が500～600°に達して胎土中の構造水分が消失する前後であると考えており、黒斑が生じると考えられている焼成過程の終了段階に、

焼成破裂土器片

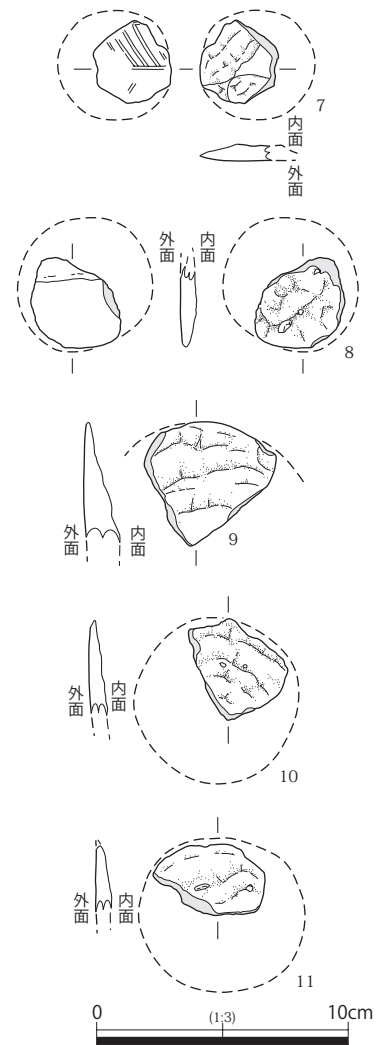


図339 焼成失敗品実測図2

焼成破裂による破損が起きるとなると不自然な感もあるが、1の焼成破裂痕の右下部に剥がれ残った器表があったように、焼成破裂が起きてもその時点で器表が剥離しない状況も考えることができ、確実な評価は難しい。10は、3-267・268溝から出土した。器種は不明。幅4.2cm、長さ4.0cm、最大厚0.7cmを測る。縁辺部はほとんど欠損しているが、一部に残存している。径5.5cmほどの円形を呈すると考えられる。なお、この土器片については、胎土分析の対象試料とした(第7章第4節試料No.31)。結果として、在地胎土と考えられる試料とは完全な一致は見せず、試料No.2とした6-143土坑底部出土の粘土塊とよく似た組成を見せた。しかしながら、在地胎土との違いは大きなものではないため、やはり在地性が高いものと考えておきたい。

11は、3-268溝から出土した。器種は不明。幅4.5cm、長さ2.7cm、最大厚0.6cmを測る。縁辺部は欠損しているものの、径6.0cmほどの円形を呈すると考えられる。内面に器表は認められず、最大厚も0.6cmと薄いため、焼成破裂によって器体に孔が開いたかどうかは不明。

### 3. 焼成不完全品

焼成の中断や、十分な焼成温度が得られなかった際に生じる、いわゆる生焼け品である。焼成温度や時間が足らずに胎土中の構造水分が抜け切らなかった場合に生じると考えられ、器体が非常に脆いもの

や、十分に焼き締まらず溶けたように崩れていたりするものを抽出した。前記の焼成破裂痕や焼成破裂土器片と異なり、焼成中に破損が起こったのではなく、完成後使用中に脆くなった部分が破損したものと考えられる。また、同様の理由によるものかどうか分からないが、粘土の接合部分や器表が著しく剥がれたような資料もここに入れた（ただし、この破損が焼成中に起きているのであれば、後述する「焼成時破損土器」に分類すべきものと考えられる）。

焼成不完全品

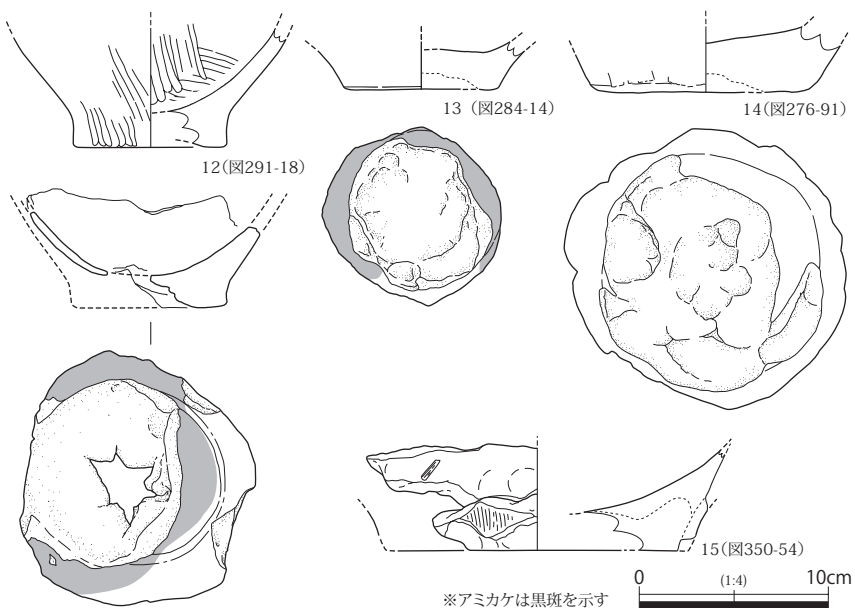


図 340 焼成失敗品実測図 3

ただし、これらの資料については実測図によってその状況を伝えることが困難であり、図 340 に 3 点を図示した以外に、図版 137・138 に写真を掲載している。図示した 12～14 は底部の外面器表が抉れたように破損するものである。12・13 の外面器表には破損の他、設置面黒斑と見られる広い範囲の黒斑が見られ、これらの土器が正置ではなくやや斜位で焼成されたことを想定させる。破損はこの黒斑に沿うように広く深くなっており、不完全な焼成の要因として、設置面における温度上昇が十分でなかった可能性を考えることができる。また、13 の内面や 14 の外面は溶けたように破損している。15 は大型の壺の底部と考えられるが、器表が溶けたように破損している他、粘土の接合部からの剥離破損が著しい。

#### 4. 焼成時破損土器

焼成時に破損したと考えることのできる痕跡を持つ土器である。田崎はこれをⅠ種（接合資料間における黒化層・黒変部・黒斑の相違などから）とⅡ種（接合資料間における焼成破裂痕の相違などから）に分類し、さらに細分を行った。

これにあたる土器としては、6-143 土坑より 1 点（図 341-16）、4 区の微高地 1 上部の第 8a 層から 2 点（図 237-14・図 237-15）確認されている。いずれも底部片であり時期は不明だが、共伴遺物より図 341-16 は弥生時代前期前半、図 237-14・図 237-15 は弥生時代前期末に形成される微高地上からの出土であるため、前期末から中期にかけての帰属年代が考えられる。

図 341-16 は、底部外面が器体から剥離した土器片で、内面側は全面が剥離面となっている。外面器表には広い範囲で黒斑が見られ、図 340-12・13 のように、設置面における焼成不良が剥離の原因となった可能性があるが、この土器片において注目されるのが、内面側の剥離面にも黒斑が周って認められる点である。これによって焼成時の破損である可能性を考えることができ、Ⅰ種 e に分類できる。

図 237-14 の破片 A の外面器表には黒斑が生じているが、これに接合する破片 B には黒斑が認められない（図版 138 左下）。このことから焼成時破損Ⅰ種 c に該当する資料であると考えられる。また、内面器

表には剥離が見られるが、破片Aの断面や剥離面に見られる器壁芯に黒化層が見られるのに対し、破片Bは器表と同じ黄灰色を呈する。この特徴は焼成時破損I種fに該当する。以上から、図237-14は焼成過程において破片Aと破片Bが破損・分離し、それぞれ異なる焼成環境で焼き上がったものと想定される。

図237-15は、底部に接合した体部がその接合部から部分的に剥離しているものである。剥離面は平滑で接合時の圧痕が見られ、接合部剥離資料にも該当する。器壁芯に黒化層が見られ、断面でも剥離面でも芯にあたる部分で黒色を呈する状況が見え

る。接合資料である破片Aでも器壁芯で同様の黒化が見られるが、破片Aの左側の剥離面には器壁芯の黒化が確認できない(図版138右下下段)。このことから図237-14同様、I種fに該当する資料であり、器表と同じ色調に焼き上がった剥離面は焼成途中での破損を示すものと考えられる。

以上のように、器面に生じた黒斑、器壁芯の黒化層から焼成時破損品と考えられる資料を提示した。これらは全てI種に属するものである。焼成時破損I種の認定根拠となる黒化層・黒変部・黒斑に関しては、土器破片に対する二次的な火熱による消失や新たな発生があることが想定されており、これら3点の資料が焼成時の破損で生じたものかどうかは確実でない。特に図341-16は、遺構内での燃焼行為が想定される6-143土坑からの出土のため、土坑内に存在した破片に二次的な火熱が加わって黒斑が生じた可能性も高いといえる。ただし、6-143土坑からは図339-7の焼成破裂土器片が出土しているため、焼成失敗品として検討する意義はあろう。また、図237-14・15に関しても、西側遺構群から出土した焼成失敗品は、この2点のみであり、焼成破裂痕土器や破裂土器片など、確実な資料は確認されていないことから、この2点が焼成失敗品であるかどうか疑問ではある。若林邦彦が亀井遺跡の接合資料について検討したように、廃棄の過程で接合関係にある土器片のどちらか一方が被熱し、黒斑を失っている可能性も考えられる(若林1994)。しかしながら、図237-15については、破片間でなく同一資料の中で黒色層の状態が異なっており、焼成時の破損である可能性は高い。

図237-14・15は、弥生時代末に供給される砂礫によって形成された微高地1上部の第8a層から出土しており、図338-1～341-16の資料と帰属時期が異なる。これらを焼成時破損であると考えれば、両者に見える破損は器形を維持できないほどの深刻なものであり、明らかに製品として成り立たない。微高地1上部で検出された弥生時代前期末～中期にかけての集落においても、土器生産が行われた可能性を示唆する資料として提示しておきたい。

## 5. 参考資料

図342には、確実に焼成失敗品であるとはいえないものの、その可能性がある土器片を示した。なお、これらの遺物は、6-119土坑から出土した4を除き、全て3-267・268溝からの出土である。1～3は突帯土器である。胎土は非生駒西麓産。いずれも焼成破裂痕土器の可能性はある。1の破損面上端ラインは直線的で接合部から剥離破損したものを誤認している可能性がある。2の破損面は器表とよく似た色調に焼け上がっているが、図中央部の大きな破裂痕は薄い黒斑を切るように生じている。3は、胴部の突帯に上端がかかるように破損している。破損面は浅く、クレーター状を呈さない。また、破損面の色調は器壁の芯にある弱い黒色層と近似するよう見え、器表と同じ色調に焼き上がっていない。以上のような状況からこれらを焼成破裂痕土器として確実視することは難しいが、可能性のあるものと

焼成時破損  
<I種e> 剥離面に黒斑がまわる底部

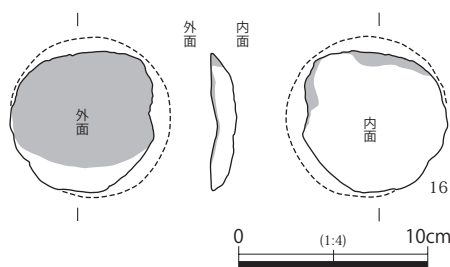


図341 焼成失敗品実測図4

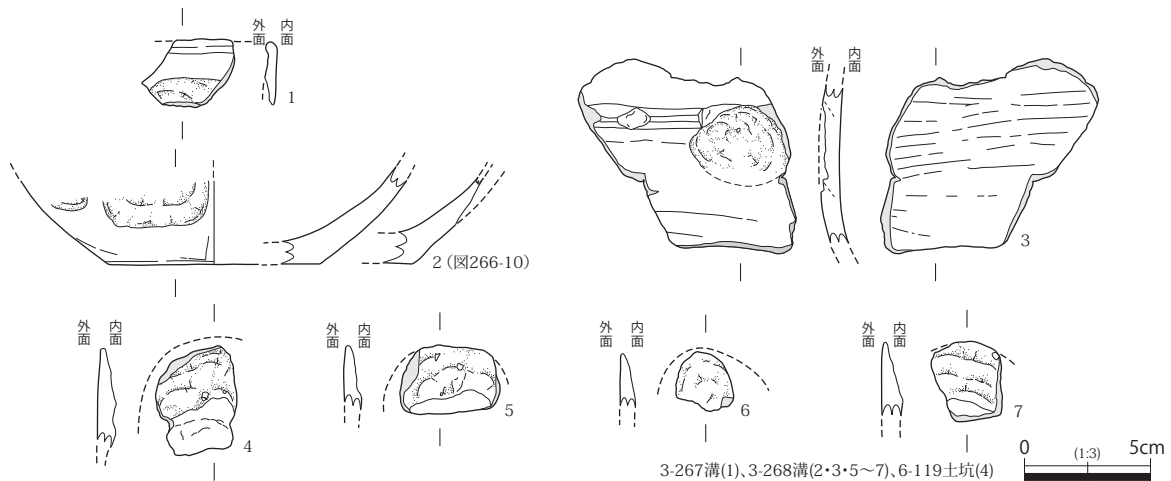


図 342 参考資料実測図

して提示しておきたい。4～7は、焼成破裂土器片の可能性ある弥生土器の小片である。いずれも周縁部が欠損していたり、器表との色調の差異が大きかったりなどで、焼成破裂土器片とは確実に認定できない。また、5は、円形になる焼成破裂の中心部の残存器表と破損部との境界が直線的であり、接合部から剥離破損した土器片（接合部剥離資料）の可能性もある。

#### おわりに

以上、当調査地から出土した焼成失敗品について述べた。田崎が4分類した、焼成破裂痕土器、焼成破裂土器片、焼成不完全品、焼成時破損土器のいずれもが確認されているが、この内、小片であり再利用もできないことから遠方への移動が考えにくいから、「土器焼成の場」を特定する最も有効な資料として田崎が捉える「焼成破裂土器片」は、当調査地で5点の出土が確認されている（図 339-7～11）。8～11は3-267・268溝内からの出土だが、7は6-143土坑からの出土である。6-143土坑では、壁面が800～900℃に被熱し赤変している状況が確認されたほか、底部に灰や炭化物の堆積が見られた。灰からは珪酸体のほか、機動細胞珪酸体や短細胞珪酸体が列を留めた状態で確認され、炭化物からは炭化米が出土した（カラー図版6）。こうした土坑内の痕跡に加え、7が出土するような状況からは、6-143土坑が土器焼成坑として利用された可能性を考察することができよう。

焼成失敗品から土器生産の場を特定することは、ミクロ的視点では、土器製作技術の実態、遺跡内での空間配置、マクロ的視点では周囲の遺跡を包含した土器の生産・供給・消費の動態、を検討する上で重要である。田崎博之は、板付遺跡や津古・三沢遺跡群など、弥生時代初頭における北部九州の遺跡動態から、「遺跡群内の複数の拠点における生産と供給の体制」を想定し、特定器種の生産を集中して行う器種分業の萌芽も推定している（田崎 2005・2007b）。しかしながら、同時期性の高い遺跡や住居のまとまりの抽出が可能な北九州の遺跡と異なり、河内平野においては当遺跡で出土しているような古相を示す弥生土器の出土例はほとんどなく、同様の状況を想定することは難しい。例えば、最も至近の弥生時代前期前半の遺跡に東大阪市若江北遺跡が挙げられるが、当遺跡とは直線距離にして10km以上離れている。また、若江北遺跡で出土した弥生前期土器の5～8割は生駒西麓産胎土を持っており、ほとんど全てが在地の沖積粘土を使用して作られていると考えられる当遺跡の弥生土器の様相とは大きな相違が見られる。また、文様などの属性面の差異からも、両集団間の関係性を想定し難い。今後、周辺で同時期の遺跡調査例が増えることを期待しつつ、現時点においては弥生前期集落内での自立的な土器生産と消費を想定しておきたい。

## 第4節 弥生前期前半土器における接合部剥離資料

### はじめに

第8b面東側遺構群の弥生土器の中に、土器の積み上げ成形の際の接合部から破損（剥離）し、破損部に剥離面を呈する土器片が確認された。こうした剥離面については、従来から「擬口縁」もしくは「擬口縁逆形」の呼称が使用されており（佐原 1967）、出土例も多くあるが、「接合部から破損した土器（片）」以上の意味を見出されることはなかった。ところが、当遺跡で出土する土器片の中には、上下両端に剥離面を持つものが一定数見出され、別個体と考えられる土器片においても同様な大きさのものがあることから、積み上げ成形における一単位を示すものではないかと考えられた。

すなわち、土器片の断面形状における全周の長さが、積み上げ粘土の原体となる粘土紐の太さを直接的に示すと理解されたのである。これにより、弥生時代前期前半の土器製作における成形技法の一端を解明できる重要な資料と捉えた。また、剥離面には調整痕跡の残るものがあり、その検討からは成形工程における土器の乾湿や、器面に施す調整順序に至るまでの復元的考察を行うことができる。こうした意義を鑑みて、剥離面を持つ土器片について、「接合部剥離資料」の呼称を与えるとともに、本書の刊行に先立って資料の紹介・検討を行った（中尾 2008）。したがって本書では、その概要を述べるに留め、詳細については拙稿を参照していただきたい。ただし、突帯文土器など、一部の資料については本書において追加している。

### 1. 出土分布

図343は、接合部剥離資料55点の出土分布を示したものである。前節の焼成失敗品に比べ、まとまった分布を示さず、集落の各所から出土しているように見える。特に、6-124、6-171土坑、5-975ピツ

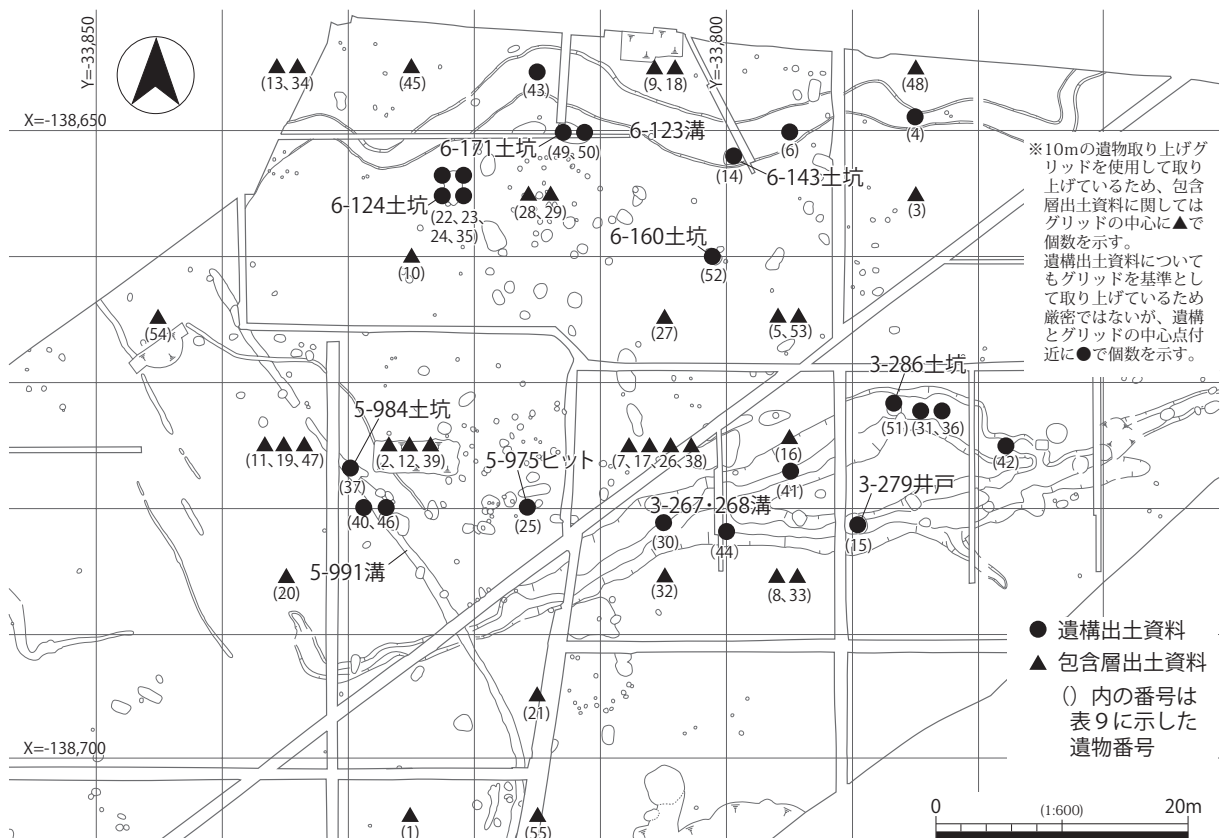


図343 接合部剥離資料出土分布

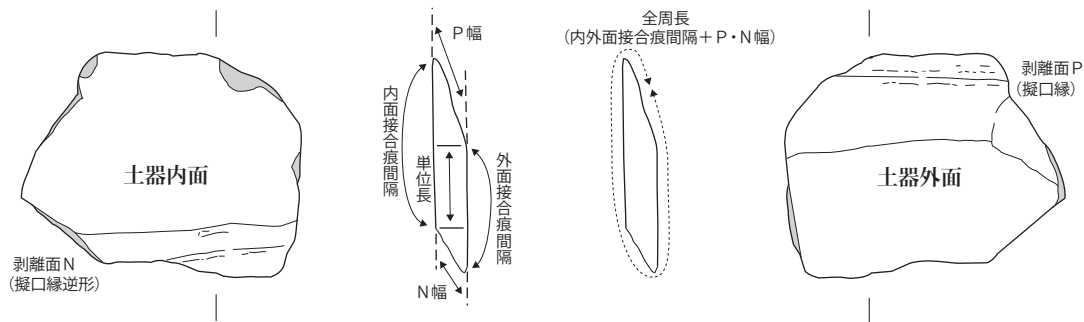


図 344 接合部剥離資料計測図 (中尾 2008) に加筆・修正

トなどの建物に近接する遺構や周辺包含層からの出土は、焼成失敗品には見られなかった。また、3-279 井戸からの出土は、遺物がほとんど出土しない同遺構の帰属年代を検討する上で重要である。

## 2. 接合部剥離資料の呼称と計測

接合部剥離資料は器形の不明な土器の小片であることが多いため、計測・図化にあたっては天地を設定する必要がある。弥生前期土器については、接合部の断面傾斜が外側に傾く、「外傾」となることが早くから指摘されてきた(家根 1984)。実際に当遺跡で出土した弥生前期土器の中で、接合痕が確認できるものは全て外傾接合である。さらに、口縁部・底部の接合部剥離資料の剥離面が全て外傾接合を示すことから、器形の不明な胴部などの土器片についても、剥離面の傾きによって天地を設定した。

土器片の各部には図 344 のような呼称を付し、計測を行った。土器成形時に粘土帯の上端接合面が、新たに積み上げられる粘土帯の下端接合面に転写されるというポジとネガの関係にあることから、土器片上部の剥離面(擬口縁)について「剥離面 P」、下部の剥離面(擬口縁逆形)を「剥離面 N」とした。計測は断面上で行ったが、上下の剥離面の持つ幅(長さ)について、それぞれ「P 幅」、「N 幅」とし、剥離面にかからない器体部分の長さについて「単位長」とした。単位長は、器厚と相関関係にあり、積み上げられた粘土紐の伸展の度合いを示す。ただし、胴部資料だけしか計測できない。「全周長」は断面形状における全周の長さを計測したもので、土器片両端に剥離面が確認できない資料や底部片などについては計測不能とした。全周長は、積み上げ成形に用いた粘土紐の径を直接的に示すものであり、極めて重要である。なお、土器片の断面は最も残存率の高い場所で図示しているが、必ずしも図示した断面中に P・N 両方の剥離面が端部まで良好に残っているわけではない。そのため、全周長については、図示した断面に限らず、部分的に残存率の高い場所を使用して復元的な計測を行っている場合がある。

以上の呼称と計測数値に関しては表 9 に一括掲載したが、これらの接合部剥離資料と、しばしば土器器表に観察できる粘土接合痕との比較を進める上では、器表に見える「接合痕間隔」を合わせて計測しておくことが望ましいと思われる。

## 3. 部位ごとの接合部剥離資料

確認された接合部剥離資料は、ほとんどが弥生土器で、器壁の厚いものが多く、大型品を主体として中型品までの土器片が含まれる。器種としては壺・鉢と考えられる土器片であり、明らかに甕となるものは認められない。弥生時代前期前半の遺物とともに遺構から出土した資料が半数程度あり、それらと近似する胎土や特徴を持つ包含層資料もまた同時期のものとする。接合部剥離資料として抽出される土器片は、口縁部から底部までの各部位に分けることができ、それぞれ得られる成果が異なる。そこで、接合部剥離資料の検討については、口縁部・胴部・底部の 3 つの部位に大別して行う。

### (1) 口縁部

表9 接合部剥離資料

掲載番号	出土遺構 出土層位	部位	剥離面の形状・調整		器厚	単位長	剥離面幅		全周長	備考		
			剥離面P	剥離面N			P幅	N幅				
図345	1	5区第8a層	口縁部	—	平ら・ナデ	—	—	—	1.4	7.6		
	2	5区第8a層	口縁部	—	平ら・ナデ	—	—	—	2.0	10.8	剥離面モミ圧痕	
	3	6区第8a層	口縁部	—	平ら・ナデ	—	—	—	2.2	10.6		
	4	6-123溝	口縁部	—	平ら・ミガキ?	—	—	—	1.8	10.9	ミガキ状の調整	
	5	6区第8a層	口縁部	—	平ら・ナデ	—	—	—	2.4	10.7		
図347	6	6-123溝	胴部	平ら・ナデ	平ら・ナデ	0.8	2.4	2.0	1.9	11.9		
	7	3区第8a層	胴部	平ら・ナデ	平ら・ナデ	1.1	3.9	2.0	2.4	15.4	内面黒斑	
	8	3区第8a層	胴部	平ら・ナデ	平ら・ナデ	1.3	1.6	3.0	3.3	13.7	8/33は同一個体 内面使用痕(スス)	
	9	6区第8a層	胴部	平ら・ナデ?	平ら・ナデ	0.7	1.7	—	1.6	—		
	10	6区第8a層	胴部	平ら・ナデ	平ら・ナデ	1.3	1.4	2.5	3.1	13.9	22/23/24は同一個体(10も可能性あり)	
	11	5区第8a層	胴部	平ら・ナデ	平ら・ナデ	1.1	1.6	3.1	3.0	14.9		
	12	5区第8a層	胴部	—	平ら・ナデ	1.2	1.5	—	3.3	—		
	13	6区第8a層	胴部	平ら・ナデ	平ら・ナデ	1.1	1.2	3.0	2.8	13.0		
	14	6-143土坑	胴部	平ら・ナデ?	くぼみ・ヨコナデ	0.9	2.1	0.9	2.4	13.0		
	15	3-279井戸	胴部	平ら・ナデ	くぼみ・ヨコナデ	1.1	3.0	2.1	2.1	12.8		
	16	3区第8a層	胴部	稜・ヨコナデ	平ら・ナデ	0.9	—	2.0	—	—	N面層状剥離か?	
	17	3区第8a層	胴部	平ら・ナデ	くぼみ・ヨコナデ	1.3	1.0	2.1	2.9	11.3	外面黒斑	
	18	6区第8a層	胴部	稜・ヨコナデ	くぼみ・ヨコナデ	0.9	2.0	2.5	1.5	12.5		
	19	5区第8a層	胴部	稜・ヨコナデ	くぼみ・ヨコナデ	1.0	2.1	2.4	2.4	13.8	外面黒斑	
	20	5区第8a層	胴部	平ら・ナデ	くぼみ・ヨコナデ	0.8	2.7	1.7	1.9	12.9	外面黒斑	
	21	5区第8a層	胴部	平ら・ナデ	くぼみ・ヨコナデ?	0.9	1.0	—	2.4	12.7		
	図348	22	6-124土坑	胴部	稜・ヨコナデ	平ら・ナデ?	1.0	1.0	2.6	—	12.4	22/23/24は同一個体(10も可能性あり)
		23	6-124土坑	胴部	平ら・ナデ	平ら・ナデ	1.1	(2.5)	1.8	(2.3)	—	22/23/24は同一個体(10も可能性あり)
		24	6-124土坑	胴部	—	平ら・ナデ	1.0	—	—	3.3	—	22/23/24は同一個体(10も可能性あり)
		25	5-975ピット	胴部	稜・ヨコナデ	くぼみ・ヨコナデ	1.9	0.6	3.0	3.7	12.7	胴部下部資料
		26	3区第8a層	胴部	平ら・ナデ	くぼみ・ヨコナデ	2.0	0.5	2.9	3.4	12.4	26/38は同一個体 胴部下部資料
27		6区第8a層	胴部	平ら・ナデ	平ら・ナデ	1.8	0.7	3.2	3.9	13.5	胴部下部資料	
図349		28	6区第8a層	胴部	—	くぼみ・ヨコナデ	1.0	—	—	2.3	—	29と接合 内面黒斑or使用痕
	29	6区第8a層	胴部	稜・ヨコナデ	—	1.1	—	2.3	—	—	28と接合 内面黒斑or使用痕	
	30	3-267 268溝	胴部	—	くぼみ・ヨコナデ	1.0	—	—	2.0	—	30/36は同一個体	
	31	3-268溝	胴部	稜・ヨコナデ	—	(1.2)	—	3.2	—	—	内面器表が層状に剥離	
	32	3区第8a層	胴部	稜・ヨコナデ	—	1.0	—	2.3	—	—	内面モミ圧痕	
	33	3区第8a層	胴部	稜・ヨコナデ	—	1.1	—	2.1	—	—	8/33は同一個体	
	34	6区第8a層	胴部	—	くぼみ・ヨコナデ	1.0	—	—	2.0	—	内面黒斑	
	35	6-124土坑	胴部	稜・ヨコナデ	—	1.1	—	2.3	—	—		
	36	3-268溝	胴部	—	ハケのちナデ	1.0	—	—	2.3	—	30/36は同一個体	
	37	5-984土坑	胴部	平ら・ナデ	—	1.2	—	2.5	—	—		
	38	3区第8a層	胴部	平ら・ナデ	—	1.1	—	2.3	—	—	26/38は同一個体	
	39	5区第8a層	胴部	平ら・ナデ	—	—	—	—	—	—	内面器表が層状に剥離	
	40	5-991溝	胴部	—	くぼみ・ヨコナデ?	(1.2)	—	—	2.7	—	(図338-6) 外面焼成破裂痕	
	41	3-268溝	胴部	—	平ら・ナデ	0.7	—	—	1.6	—	(図338-5) 外面焼成破裂痕	
	図350	42	3-267溝	底部	平ら・ナデ?	—	—	—	—	—	—	(図274-36) 生駒西麓産胎土 縄文深鉢か。
43		6区第8a層	底部	指頭圧痕	—	—	—	1.8	—	—	(図312-82)	
44		6区第8a層	底部	指頭圧痕	—	—	—	2.5	—	—	(図307-52)	
45		6-123溝	底部	指頭圧痕	—	—	—	1.8	—	—	(図287-28)	
46		5-991溝	底部	指頭圧痕	—	—	—	3.0	—	—	(図284-11)	
47		6-171土坑	底部	平ら・ナデ?	—	—	—	—	—	—	(図244-11)	
48		3-268溝	底部	指頭圧痕	—	—	—	1.7	—	—	(図276-78)	
49		5区第8a層	底部	平ら・ナデ?	—	—	—	1.9	—	—	2単位の剥離面あり。上段の全周10.4cm (図302-33)	
50		6-171土坑	底部	指頭圧痕	—	—	—	—	—	—	(図244-12)	
51		3-286土坑	底部	指頭圧痕	—	—	—	—	—	—	(図281-9)	
52		6-160土坑	底部	指頭圧痕	—	—	—	—	—	—	(図297-2)	
53		6区第8a層	底部	指頭圧痕	—	—	—	—	—	—	(図312-83)	
54		5区第8a層	底部	指頭圧痕・ナデ	—	—	—	—	—	—	(図340-15)	
55		5区第8a層	底部	指頭圧痕	—	—	—	—	—	—	(図302-37)	

※なお、法量にかかる数値は全てcm単位

外反する口縁部が頸部との接合部から剥離した土器片である。5点が確認され、いずれも弥生土器の壺、もしくは鉢の口縁部で、甕と考えられるものはない(図345)。全ての資料において土器片下端に剥離面Nを現し、頸部最上部の接合面形状や調整痕が転写されている。ただし、剥離面には明瞭な調整痕が確認できるものは少なく、ナデが施されていた程度と考えられるが、4の剥離面Nにはミガキ状の痕跡が確認でき、成形途中での器面調整の存在を示唆する。

## (2) 胴部

最も多い36点もの資料が確認できた。この資料群で最も重要なことは、口縁部・底部の資料と異なり、土器片の上下に剥離面が確認できる資料が含まれることである。これらは、積み上げ原体となる粘土紐の太さや成形技法の実態的解明に多くの手がかりを与えてくれる。剥離面には特徴的な形状が見られる



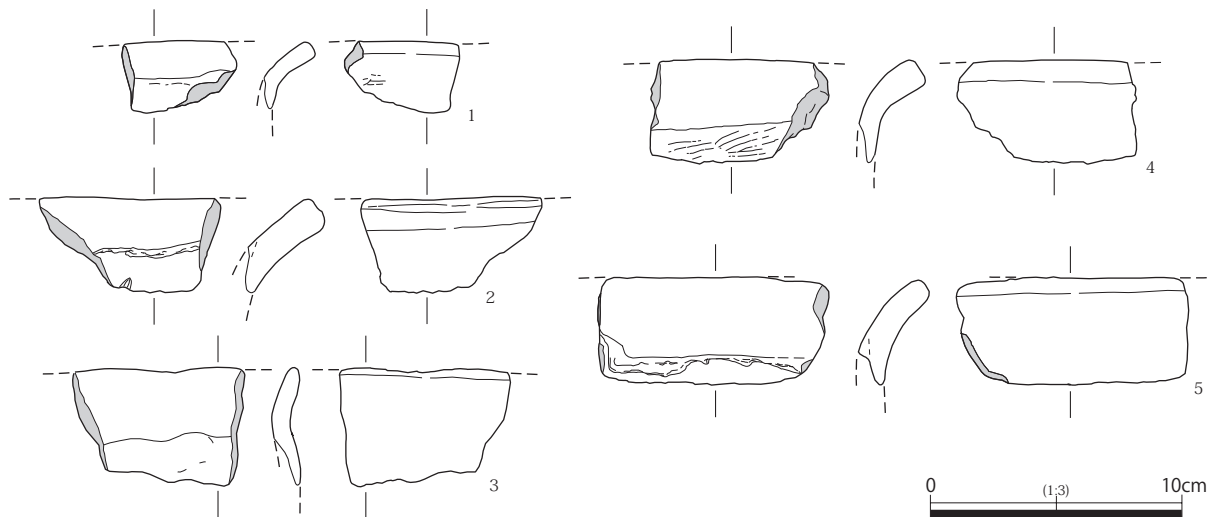


図 345 接合部剥離資料（口縁部）実測図

資料も多く、成形時の接合部の調整・形状を知ることができる。また、外面器表に、「焼成破裂痕」（田崎 2005・2007）の見えるものや（40・41）、接合資料間で黒斑の付着するもの（28・29）など、接合部剥離の起こるタイミングを考察する上で重要な資料も含まれる。

ここでは、胴部資料の検討から得られた成果を整理して示す。

a. 接合面幅は器厚の2倍程度

図 346 は、表 9 に示した胴部資料の器厚と剥離面幅について、数値分布を示したものである。数値が散在せず、比較的まとまりを持つことは弥生土器製作における規格性の高さを感じさせる（器壁が厚く単位長が短いことから胴部下部の資料となると考えられる 25～27 についてはグラフ右上に集中する）。さらにグラフ内に引かれた  $x$ （剥離面幅）=  $2y$ （器厚）直線によって、器厚に対して2倍程度の幅が接合面積として設けられていることがわかる。

b. 「稜」を持つ剥離面

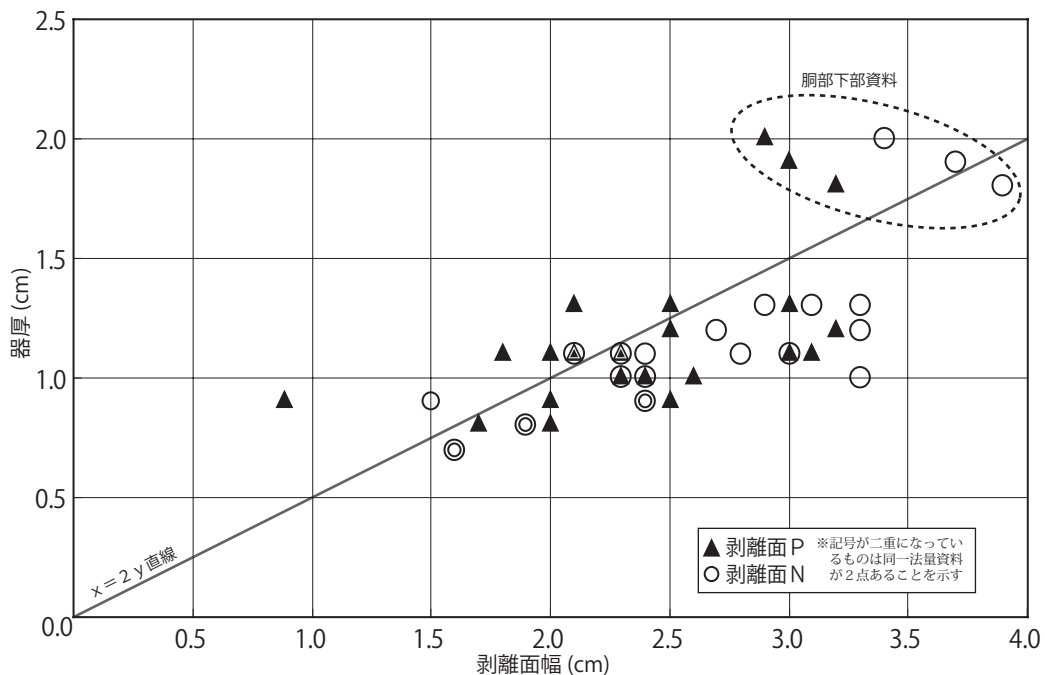


図 346 器厚・剥離面幅の数値分布

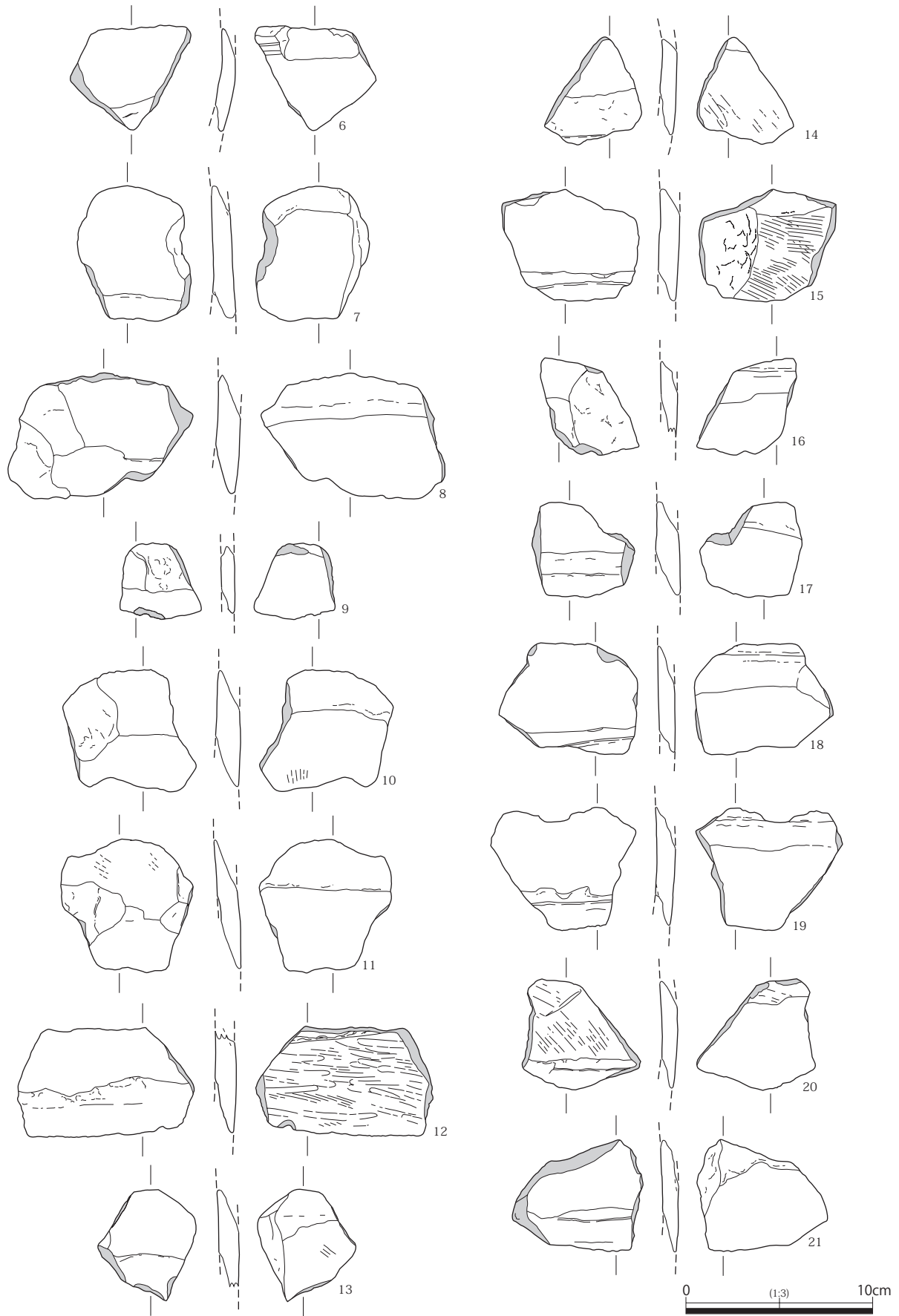


图 347 接合部剥離資料 (胴部) 実測図 1



図 348 接合部剥離資料（胴部）実測図 2

14～22・25・26・28～35と、多くの資料の剥離面Pには剥離面と平行する稜が認められる。また、28・29の接合資料によって明らかのように、剥離面Nにはそれを転写した溝状のくぼみが観察され、積み上げ成形時の接合部に稜が存在していたことを証明する。剥離面が滑らかで工具などによる調整痕が見られないことから、上下2段に施したヨコナデ調整の単位間が盛り上がることにより、稜として形成されているものと理解したい。稜の形成目的については不明であるが、接合面積や端部強度の増加などを意図したものであろうか。接合部剥離資料の全てに稜が見られるわけではなく、こうした調整が普遍的に存在するものかどうかについては類例の増加を待たねばならないが、当遺跡においては特徴的な痕跡として抽出できる。いずれにしても、この稜の存在は、弥生前期土器の接合部に見られる外傾が、粘土紐積み上げ後の板ナデなど二次的な調整によって成されるものではなく、成形時より形成されているものであることを証するものといえ、成形技法を考える上で重要な意味を持つ。

c. 直径4cm程度の粘土紐を原体とした積み上げ成形

胴部資料の全周長は、12～14cmのものがほとんどで、平均値は13.1cmとなっている。全周長から粘土紐の直径を算出するには、断面形状を円形として、以下の計算式を用いる。

$$[2r(\text{直径}) \times 3.14(\text{円周率}) = \text{全周長}]$$

これに13.1cmを代入すると、粘土紐の直径として4.2cmが求められる。もちろんこの数値が積み上げ時の粘土紐の直径をそのまま表わすものではない。粘土紐を積み上げる際の圧展や引き伸ばしの程度が不明であるし、乾燥や焼成によって生粘土の状態から10～30%程度収縮することも想定されて

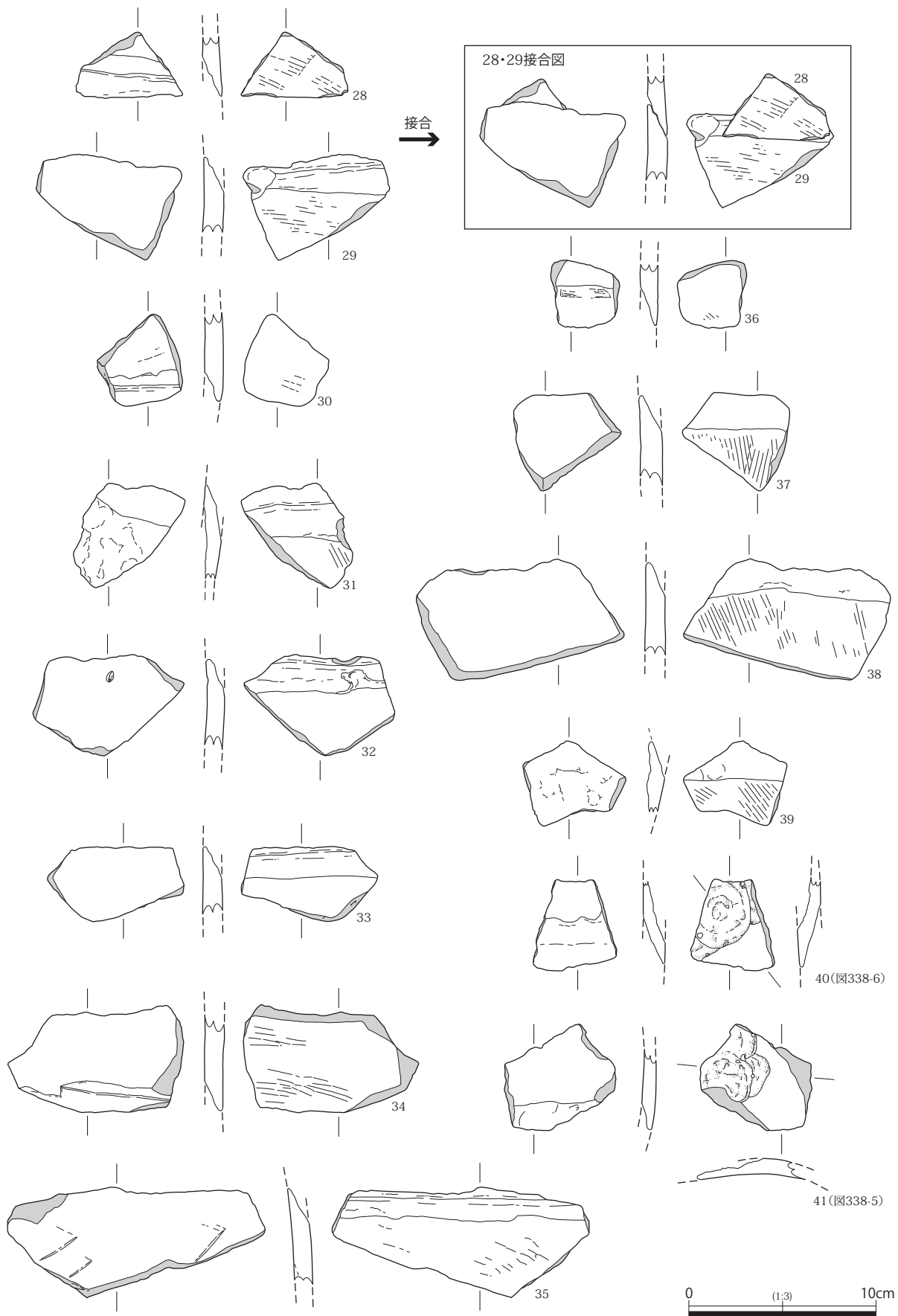


图 349 接合部剥離資料 (胴部) 実測図 3

いる（木立 2003）。また、器面調整によって削り落とされる粘土の有無なども考慮する必要があるだろう。

ただし、現代における越前や唐津など陶器の大甕の製作や、アジアにおける稲作農耕民の伝統的土器製作（小林ほか 2007）など、粘土紐積み上げの土器成形を行う民俗・民族誌例では、4～5 cm 程度の粘土紐を用いる様子が観察される。これらの例を見る限り、先の計算式から導かれる粘土紐の直径は、比較的近い数値であるとも思える。

また、各資料における全周長が近似しており、器厚が厚く図 346 のグラフで異なった分布を示した胴部下部資料 25～27 についても、他の資料と同様となることに注目される。先の民俗・民族誌例では、準備工程としてあらかじめ粘土紐を作成しておく場合が認められる。佐賀県横枕の大甕の製作では助手によって直径 5 cm、長さ 140 cm の粘土紐が（横山 1982）、中国雲南省の曼徳村では、直径 4 cm、長さ 25 cm の「泥条」が作成される（汪 2003）。こうした準備工程での粘土紐の作成は、同径の粘土紐の共通使用に直結するものと評価でき、全周長の近似として確認されることが考えられる。4 cm 程度の太い粘土紐の採用と、同径の粘土紐を共通して用いる成形技法・製作過程は、規格的とも斉一的とも評される弥生前期土器の成立に基盤的な役割を果たしていることが想定できよう。

さらに、製作される土器（陶器）のサイズが異なるため、単純な比較は難しいかもしれないが、男性が製作を行う横枕と、女性が製作を行う曼徳で紐の太さが異なることに注目される。両者の土器成形では、右手で握った粘土紐を左手の掌に当てて伸展させながら積み上げを行っており、積み上げられた時点で粘土紐は、板状の粘土帯として形成されている。こうした手技を行うために握りやすい太さとして 4～5 cm の粘土紐が用いられているのであり、必然、掌の大きさと密接な関連性を持つといえよう。弥生土器の成形において同様の手技が行われているかどうかは不明であるが、全周長から導かれる粘土紐の太さは、製作者の身体技法から性別にまで至る復元的な考察に重要な視点を提供する可能性がある。

#### d. 接合部剥離は、粘土紐の積み上げ接合部のいずれにおいても発生する

接合部での破損原因については、深澤芳樹の研究がある（深澤 1985）。深澤は Childe の「物理的化粧土による調整」、Stevenson の「粘土薄膜の生成」、Fairbanks の「気温によるひずみの集中」、佐原の「乾燥による粘土帯収縮率の相違」の各説を支持・統合した上で、剥離面の生じる主たる原因を、上部に積み上げられる粘土帯の荷重に耐えて、器形を保つことを目的とした成形の中断とそれによる乾燥（これを成形完了後の土器を焼成前に乾燥させる工程と区別するために「半乾燥」と呼んでいる）に求める。また、この半乾燥は一度だけでなく、成形過程の「器形と大きさを決定する重要な分岐点」において幾度か行われたとしている。ここで考えられたのは、粘土紐数本を 1 単位とした半乾燥の実施と、半乾燥部位での剥離破損であった。確かに口頸部境で剥離した 1～5 や頸胴部境で剥離した 6 など、半乾燥を実施したと考えられる部位での剥離面も存在するため、半乾燥が成因の一つとして考えられることは否定できないが、それだけで全ての接合部剥離を説明することは難しいと言わざるを得ない。粘土紐 1 単位分の土器片の上下に剥離面が発生する資料が多く見られることは、剥離破損が特定の部位だけでなく、接着力の弱い接合部があれば、そのいずれにおいても起こり得ることを示している。

### (3) 底部

底部の資料については 14 点が確認され、図 350 に示した（中尾 2008 に 4 点加筆）。剥離面は胴部を接合していく際の形状をあらわしており、全て剥離面 P を呈す。胴部や口縁部資料とは対照的に、ほとんどの資料の剥離面には顕著な指頭圧痕が確認される。弥生土器の底部成形については、深澤芳樹が「側面積上法・上面積上法・充填法」の 3 技法を提唱し、それぞれの成立時期とその変化の背景を論じ

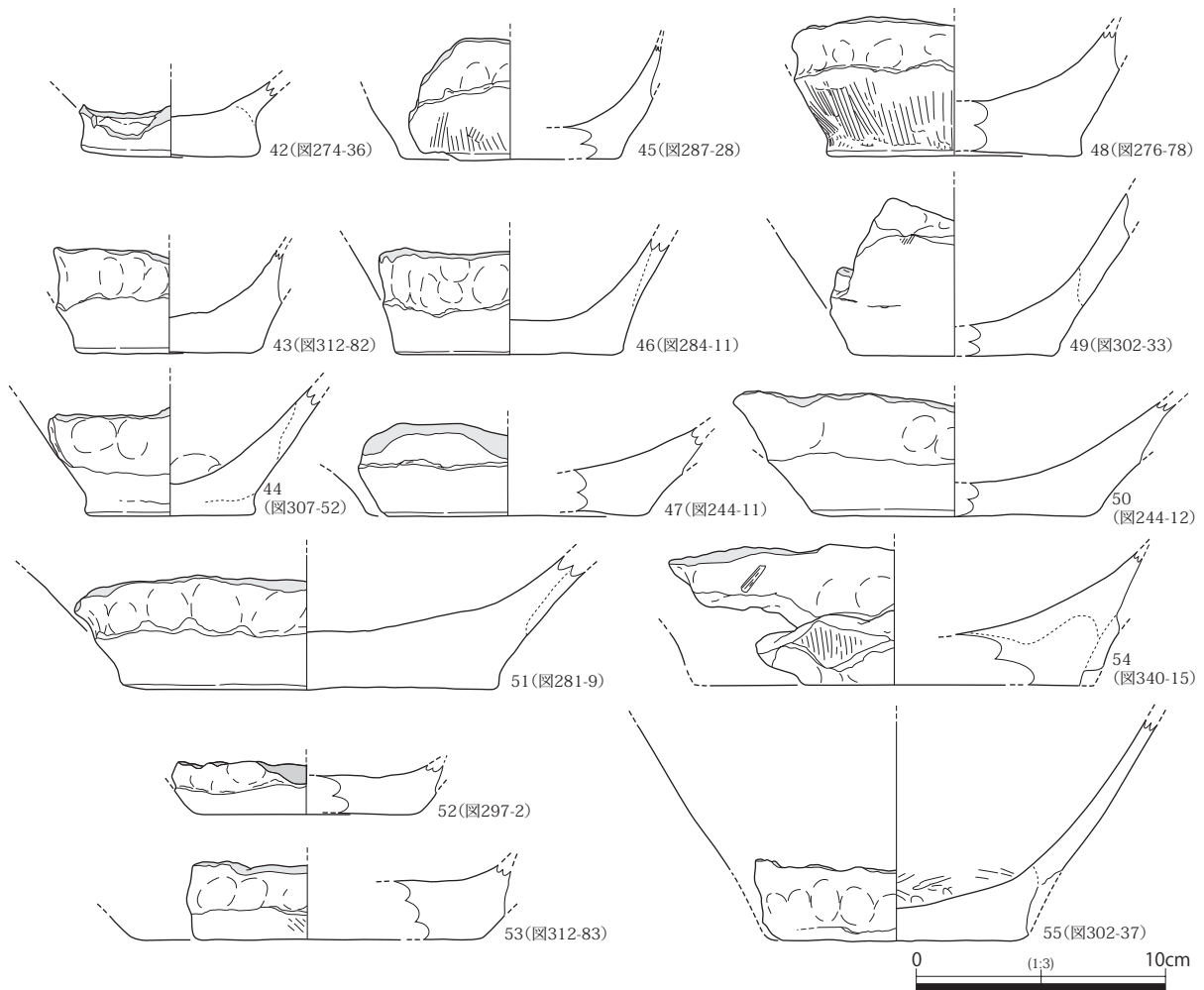


図 350 接合部剥離資料（底部）実測図

ている（深澤 1991）。当遺跡の資料群においては、剥離面の現れる場所によって次の a～c に分類した。

- a. 底部上面：42
- b. 底部側面：52～55
- c. 胴部下部の側面：43～51

a に分類された 42 は、生駒西麓産胎土を持ち、突帯文土器の底部であると思われる。円板状の底部の上に胴部器壁を積み上げていく「上面積上法」を示す資料と考えられる。

b に分類された 52～55 は、底部の側面に胴部器壁を接合していく「側面積上法」を示す資料と考えられる。これらの資料は、底部粘土円板に大きく手を加えず、その側面に 1 段目の粘土積み上げを行っており、その接合部から剥離したものと理解されよう。

c に分類された 43～51 については、底部を成形する際に、胴部最下部となる側壁（底部の成形時に作り出されるこの部位については胴部資料ではなく底部資料として扱うべきものである）を捏ね出した上で、1 段目の粘土紐積み上げを行っている資料と考えられ、b と同様に「側面積上法」を示すものといえる。弥生前期前半土器の底部から胴部にかけての成形においては、側面積上法が取られているものの、円板状の底部側面に直接胴部を接合する方法と、底部から捏ね出した側壁に胴部を接合していく方法の 2 種があったことが想定できよう。一方で、特徴的な指頭圧痕については、成形作業の端緒となる底部成形において粘土が十分な可塑性を保持していたことを示すものともいえる。

#### 4. 突帯文土器の粘土接合痕と接合部剥離資料

以上、東側遺構群から出土した弥生時代前期の資料について述べてきたが、粘土接合痕や接合部剥離資料は突帯文土器にも見ることができる。表 10 には、それらの突帯文土器 7 点について、計測数値とともに示した。全て 3-268 溝からの出土である。接合方向については、全て内傾で弥生土器資料とは対照的である。接合痕の間隔は一定しておらず、同一の土器内でも 2 mm 程度のバラつきが見られる。また、口頸部よりも胴部の接合痕間隔の方が広くなる傾向がある。胎土は図 264-16 のみが生駒西麓産で、接合痕間隔も最も広い。これらの資料から想定される全周長は、5.0～7.2cm となり、そこから計算される粘土紐の直径は 1.6～2.3cm となる。弥生前期土器と比較すると明らかに細い。

さらに、図 269-10、273-25 の 2 点には、上下に剥離面を持つ接合部剥離資料が認められた（図 351：図版 118、140）。1 は、胴部において粘土接合痕が確認できた。頸部から口縁部にかけては板状もしくはへら状の工具により丁寧にナデられており、接合痕は確認できない。胴部片の最上部が剥離

表 10 突帯文土器計測表

前章での掲載番号	出土遺構 出土層位	器種	時期	胎土	観察部位	接合方向	器厚 (cm)	接合痕間隔 (cm)	接合面 P幅(cm)	接合面 N幅(cm)	全周長 (cm)	備考
図263-14	3-268溝	突帯文土器	縄文晩期	非生駒	口頸部	内傾	0.6	2.0~2.2	(0.7)		5.4~5.8	
図264-16	3-268溝	突帯文土器	縄文晩期	生駒	胴部	内傾	0.7	2.6~2.8	(0.8)		6.8~7.2	
図264-19	3-268溝	突帯文土器	壺	縄文晩期	非生駒	胴部下半	0.7	1.7~2.2	(0.8)		5.0~6.0	
図266-13	3-268溝	突帯文土器	深鉢	縄文晩期	非生駒	口頸部	0.8	2.0~2.2	(0.9)		5.8~6.2	
図269-7	3-268溝	突帯文土器	浅鉢	縄文晩期	非生駒	胴部下半	0.6	1.9~2.1	(0.7)		5.2~5.6	
図269-10	3-268溝	突帯文土器	深鉢	縄文晩期	非生駒	口頸部	0.7	1.9~2.0	(0.7)		5.2~5.4	接合部剥離資料あり(図351-2)
						胴部上半	0.7	2.3~2.5	1.0	1.0	6.6~7.0	
図273-25	3-268溝	突帯文土器	深鉢	縄文晩期	非生駒	胴部上半	0.6	2.4~2.5	1.0	0.7	6.5~6.7	接合部剥離資料あり(図351-1)

\* ( )内は断面中の接合線からの復元数値

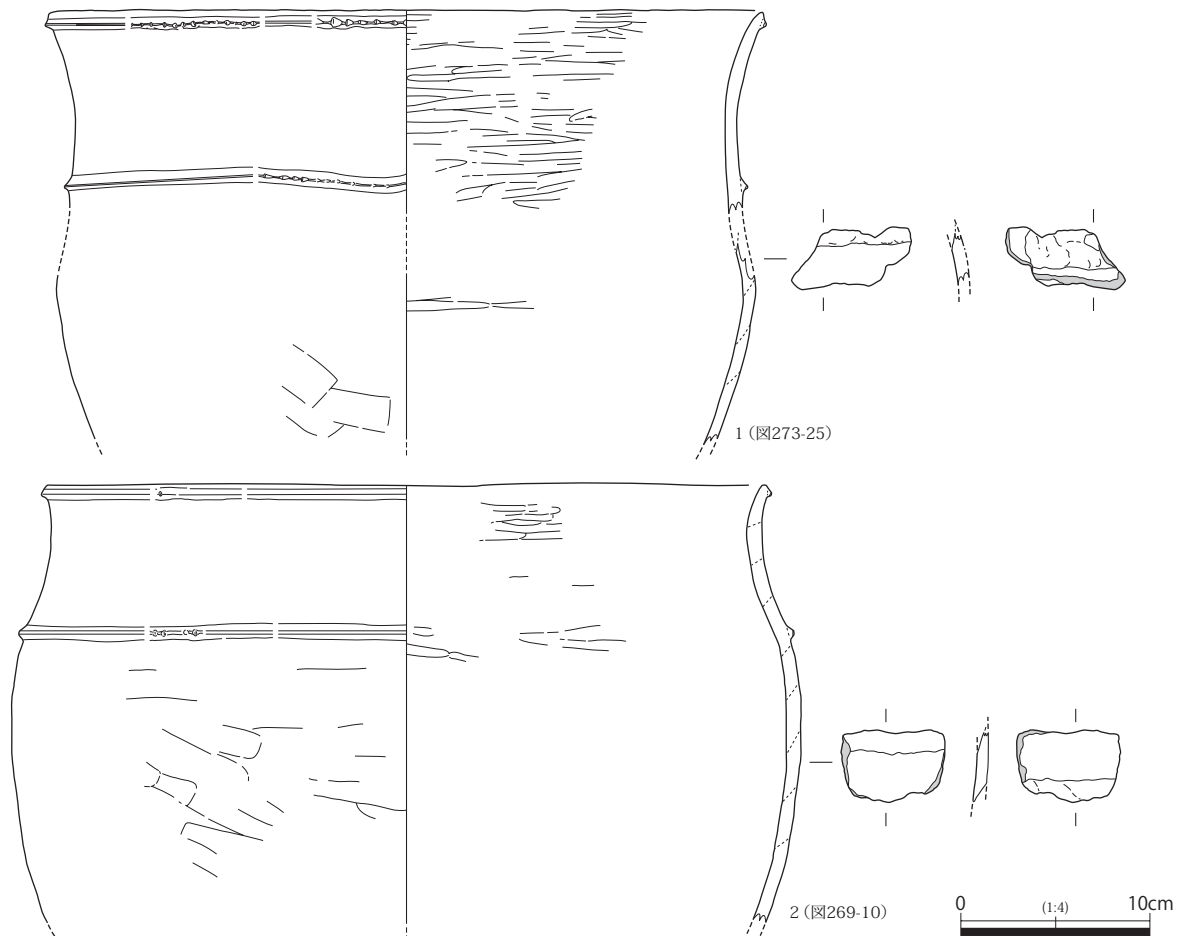


図 351 突帯文土器接合部剥離資料実測図

して接合部剥離資料が確認できる。ただし、剥離面Nは欠損部が多く良好ではない。2は、土器群5から出土した深鉢で、接合部位での破損が著しい。接合部剥離資料は、胴部中ほどで見られた。垂直方向に3単位の接合部剥離資料が見られたが、最も良好に観察できる最上部の土器片を図示している。両者ともに剥離面に顕著な調整痕跡は見られない。

当遺跡から出土した突帯文土器と弥生前期土器における、粘土接合痕と接合部剥離資料の観察からは、接合方向や接合面（剥離面）幅も含めた両者の成形技法が大きく異なることがわかる。〈細い粘土紐〉を積み上げた後に、指や掌で挟んで圧展させる突帯文土器と、その2倍程度の〈太い粘土紐〉を、おそらくは両手の所作によって伸展させ、帯状にしながら積み上げる弥生前期土器では、製作者の所作のみならず、素地土の硬軟、混和材の種類などにおいても、相違が存在する可能性がある。

## 5. 弥生時代前期中頃～古墳時代土器の粘土接合痕

顕著な粘土接合痕が確認できる資料は少なく、詳細な分析・検討には資料の増加を待つ必要があるが、参考例として示しておきたい。表11に示した4点の土器は、当調査地から出土した弥生時代前期中頃～古墳時代初頭までのうち、明瞭な粘土接合痕の認められるものである。

図232-5は弱く外反する口縁を持つ鉢。I様式の中段階頃の遺物と考えられ、1区の包含層出土遺物としては最も古い。外面器表のハケ調整は口縁部のみヨコナデによって消されている。器体の各所に粘土接合部で剥離破損したと考えられる痕跡（図版140）が認められ、擬口縁状を呈している。残存部位は、口縁端部から胴部下部までだが、この部位に見られる断面中の接合線と接合部剥離から考えて5本の粘土紐積み上げ単位が確認できる。これらの各単位の全周長が全て約10cmとなることから、この鉢の成形作業を通して直径3cm程度の粘土紐が用いられた可能性を指摘できよう。弥生前期前半土器群に含まれた接合部剥離資料のうち、胴部資料の全周長の平均は13.1cmであり、弥生前期中段階土器の図232-5では、やや細い粘土紐の使用が示唆されることになるが、前期前半土器の中にも、全周長11.3cmを測る、図347-17のような例もある。時期や個体差による粘土紐の太さの相違の有無については、資料の増加を経てから再検討したい。図232-8は、図232-5と同じく1区第8a層出土の壺で、文様が認められず帰属時期が不明だが、胴部下半に最大径があるやや下膨れの器形から、弥生時代中期に下る遺物と考えられる。器面調整により粘土接合痕は見えなくなっているが、肩部内面のみ接合痕が確認できた。間隔は狭く、全周長は6.0cm程度と、突帯文土器に近い数値になる。図166-116・117は、第7b面の5-614溝から出土した土師器の大型壺である。116は肩部に、117は胴部下半にそれぞれ顕著な粘土接合痕が確認できた。接合痕の間隔は一定せずバラつきがある。特に117は積み上げ単位ごとに大きく間隔が異なり、積み上げに使用する粘土紐の太さが共通していないとも考えられる。こうした大型品は、同時期に多く見られるタタキ甕などとは異なった成形技法を用いて製作されている可能性があり、類例を検討することで、器面調整を含めた製作工程を復原することができよう。

なお、接合方法としては図232-5のみ外傾接合となり、他は全て内傾接合である。弥生時代前期土器

表11 弥生前期中頃～古墳初頭土器計測表

前章での掲載番号	出土遺構 出土層位	器種	時期	胎土	観察部位	接合方向	器厚 (cm)	接合痕間隔 (cm)	接合面幅(cm)	全周長 (cm)	備考	
図232-5	1区第8a層	弥生土器	鉢	弥生前期中頃	非生駒	胴部	外傾	0.8	3.5	(1.5)	10.0	
図232-8	1区第8a層	弥生土器	壺	弥生中期?	非生駒	肩部	内傾	0.9	1.8	(1.2)	6.0	
図166-116	5-614溝	土師器	大型壺	弥生後期～ 古墳初頭	非生駒	肩部	内傾	1.0	2.2～2.8	(1.2)	6.8～8.0	
図166-117	5-614溝	土師器	大型壺	弥生後期～ 古墳初頭	非生駒	胴部下半(上)	内傾	1.4	4.4	(1.5)	11.8	
						胴部下半(中)	内傾	1.4	3.8	(1.5)	10.6	
						胴部下半(下)	内傾	1.3	2.9	(1.5)	8.8	接合部剥離資料あり

\*( )内は断面中の接合線からの復元数値



器に特徴的な外傾接合は、前期のうちに途絶えるようで、弥生時代中期以降には、内傾接合を示す土器が確認される（松本 2000）。接合方向の相違や粘土接合痕間隔の変化は、タタキ技法の導入など、土器製作における技術的变化を直接的に示している可能性があり、今後は各時期の資料データを蓄積することで検討材料としたい。

#### おわりに

当遺跡で出土した弥生土器は河内平野における初現期のものであることは間違いない。縄文土器からの移行期における弥生土器の成立を実態的に解明するには、土器の製作技術の検討を欠かすことはできない。かつて佐原眞は、弥生土器における轆轤の不使用、土器窯の存在否定から、縄文土器から弥生土器、さらには土師器に至るまでが、「基本的技術を共有する一連の土器」であるとして、「技術革新はなかった」としている（佐原 1979）。しかしながら、本稿で検討したように縄文時代晩期の突帯文土器と初現期の弥生土器の間には、家根祥多が明らかにした内傾・外傾の接合方向（家根 1984）の他、器厚に対しての接合面の幅（剥離面幅）、積み上げ成形の原体となる粘土紐の直径などに大きな差異が見られる（弥生土器の粘土原体については、縄文土器と大きく変化しない細い粘土紐を数本重ねた「結果としての粘土帯」が含まれる可能性が考えられたが（佐原 1986）、当遺跡での接合部剥離資料の産状から否定できる）。また焼成方法についても、近年の研究で開放型野焼きから覆い型野焼きへの変化が提唱されている（大手前大学史学研究所 2007）。つまり、縄文土器から弥生土器への移行期には、成形・焼成技術における大きな変化が想定できるのである。

当遺跡の接合部剥離資料における全周長の近似は、弥生土器製作を支える基礎的な属性として、ほぼ同径の粘土紐の使用があったことを示す。突帯文土器に比べ、相対的に太い粘土紐の採用と、成形における同径の粘土紐の共通使用は、弥生土器の規格化に大きな役割を果たした。板付式土器の製作工程について検討した田崎博之はすでに、掌の大きさによってほぼ一定した幅の「粘土板」が使用されていたことを想定し、「土器のサイズは、接合される粘土板の数によって決まる」としている（田崎 2000）。

当遺跡で抽出した資料がどこまで普遍化できるものか、類例の少ない中では判断できない。粘土紐積み上げによって製作された土器の成形技法にかかる既往の研究は、断面に見える接合線の観察が中心であり、成形技法や積み上げられる粘土原体までを意識したものは少なかった。これは、復元的図化によって器種・器形を明らかにした上で検討を行う通常の遺物整理過程の中で、擬口縁を呈する胴部片などは「図化不能の土器片」として詳細な検討の対象となることがなかったことに起因すると思われる（実際、口縁や底部など通常の土器実測の方法で図化が可能なものは「擬口縁資料」として報告されているものを散見するが、擬口縁を呈す胴部片などを掲載する報告書等を見ることはない）。当遺跡出土の弥生前期土器に限ってみても、その出現率はわずか数%に過ぎず、頻出する資料ではない。それは弥生土器製作技術の確かさを物語るものではあるが、資料の抽出を難しくしているともいえよう。

しかしながら、本稿でその一端を検討できたように、接合部剥離資料の持つ意味は大きい。今後各地で同様の資料の抽出が進めば、土器文化の移行期における製作技術の変化もしくは共通性を明らかにできると考える。特に成立期の弥生土器においては、各地の同時期資料との比較のほか、突帯文土器や、韓国無文土器との技法上の類似をあらためて確認する上で、接合部剥離資料が新しい視点を提供できる可能性があるだろう。同資料の増加を期待したい。

なお、当資料の検討に関しては、深澤芳樹、田崎浩之、田畑直彦の各氏よりご指導、ご教示をいただいた。文末ではあるが、記して感謝したい。

## 第5節 第8b面出土石器の検討

### はじめに

第8b面の調査では、弥生時代前期前半と前期末～中期初頭に帰属する石器の出土をみた。弥生時代前期前半の石器は、遺構から土器を伴って出土しており良好な資料といえる。本節では、弥生時代前期前半に帰属する第8b面東側遺構群の石器を中心に、石器組成と剥片剥離技術の復原、石器石材の搬入について検討するものとする。

#### 1. 石器組成

石器は総点数で134点出土しており、前期前半に帰属する石器は、第8b面東側遺構群と周辺の包含層から出土している95点で、前期末以降に帰属する石器は、中央遺構群と西側遺構群および周辺の包含層から出土しており、それぞれ11点、28点である(表12)。

前期前半の石器では、ツール類は打製・磨製を通じて多様な組成を示しており、当遺跡内での活発な石器の使用を物語っているといえる。使用されている石材も、サヌカイトのほか、粘板岩や結晶片岩系の石材など、多くの地域から搬入されていることがわかる(表13)。サヌカイト製のツール類は9点・9.0%、RFやMFを含めても14点・14.1%とやや低調であるが、石核が2点・2.0%、楔形石器が11点・11.1%、剥片が40点・40.4%出土しており、遺跡内で使用される石器の製作を日常的に行っていたものと考えられる(表14)。

前期末～中期初頭に帰属する石器には大型の武器類が加わるとともに、伐採斧が姿を消し、変わって加工斧が登場する(表15)。また石材においても、結晶片岩系の石材が使用されなくなる傾向がうかがえる(表13)。

#### 2. 剥片剥離技術の復原

東側遺構群から出土している石核・剥片を対象として検討する。

##### (1) 石核の観察

石核は2点出土している(図258-9、図313-88)。やや大型で14.5mmと18.0mmの厚みのある剥片を素材としており、自然面を打面に小型の剥片を剥離していることが伺える。また石核の素材と考えられる最大長83.0mm、最大幅98.5mm、最大厚32.0mmの剥片(図292-25)も出土しており、剥片を石核素材として搬入し、剥片生産を行っていたと考えられる。

讚良郡条里遺跡の石鏃と石核、楔形石

表12 石器組成表

器種	中央	西	東	合計
石鏃	4	2	4	10
石槍		3		3
打製石剣		1		1
石錐		1	1	2
スクレイパー		1	2	3
磨製石包丁	1	1	4	6
太型蛤刃石斧			1	1
磨製石斧			3	3
小型方柱状片刃石斧		1		1
打製石斧			2	2
石棒	1		3	4
浮子?	4			4
石錘?			1	1
紡錘車未成品			1	1
凹石			2	2
円礫			2	2
石核		3	2	5
楔形石器		1	11	12
RF	1	5	2	8
MF		4	3	7
剥片		4	40	44
原石・素材			8	8
敲石			1	1
磨石		1		1
不明			2	2
計	11	28	95	134

表13 石器石材表

石材	中央	西	東
サヌカイト	5	25	68
チャート			2
石英			2
流紋岩		1	
粘板岩	2		6
結晶片岩			1
緑泥片岩			3
紅簾片岩			1
蛇紋岩		1	
輝緑岩			2
ヒン岩or輝緑岩			3
砂岩		1	3
軽石	4		
不明			4
計	11	28	95

表14 サヌカイト製石器組成表

サヌカイト製	中央	西	東
石鏃	4	2	4
打製石剣		1	
石槍		3	
石錐		1	1
スクレイパー		1	2
打製石斧			2
石核		3	2
楔形石器		1	11
RF	1	5	2
MF		4	3
剥片		4	40
素材剥片			1
計	5	25	68

器、剥片の法量関係を示したグラフが図352である。石鏃の分布は石核や楔形石器の分布の中心よりも下方に位置する。楔形石器は不安定な石材の供給量に対応するための一手段とされ、より小型の剥片を量産する方法と捉えられている(絹川・富樫 1992) ほか、縄文時代晩期の馬場川遺跡の楔形石器の分析を行った松田によると、石鏃が余りもの剥片を適当に選んで作られたのではなく、素材の選択から仕上がりに至るまでの技術についての準則と範疇によって、オーセンティックな石鏃が作られたのではなからうか、と述べている(松田 1999)。

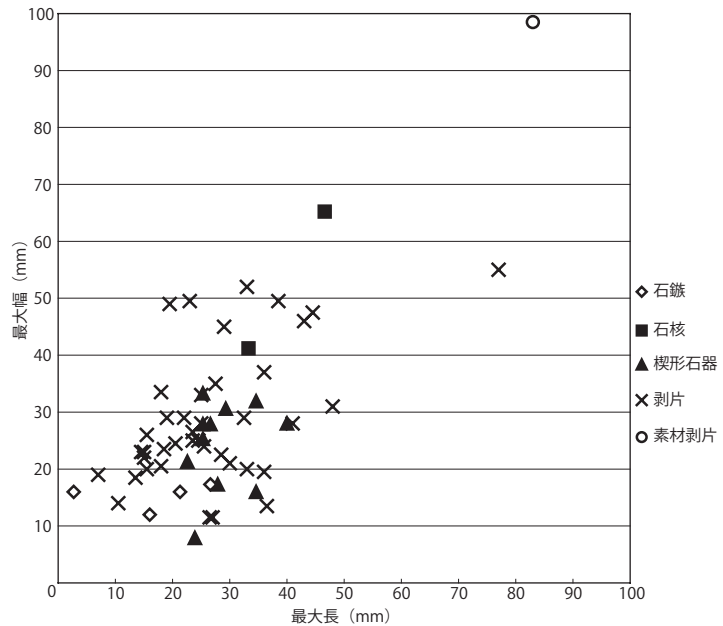
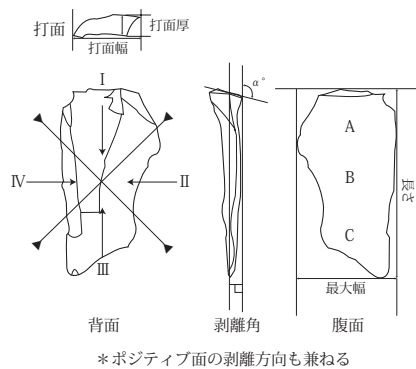


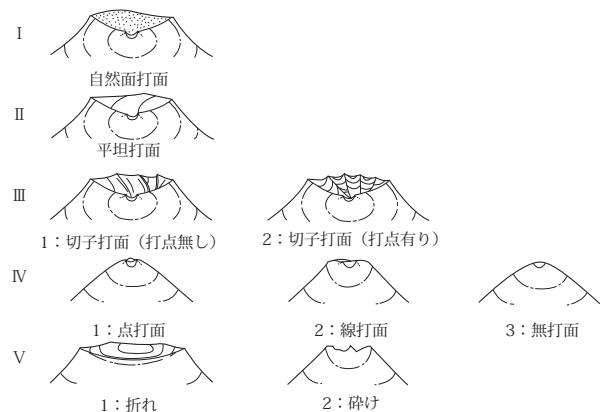
図 352 法量分布図

第8b面東側遺構群から出土したサヌカイトの総重量は1508.5gで、石核やその素材となる剥片も大型のものはみられないことから、ふんだんに石材を確保していたとは考えにくい。集落内における剥片生産は、必要最低限度の石材をより効率良く利用するために、石材の大きさに応じて直接加撃と両極技法を使い分けて、剥片の生産を行っていたものと考えられる。

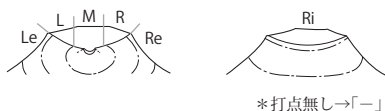
計測部位



打面形状の分類



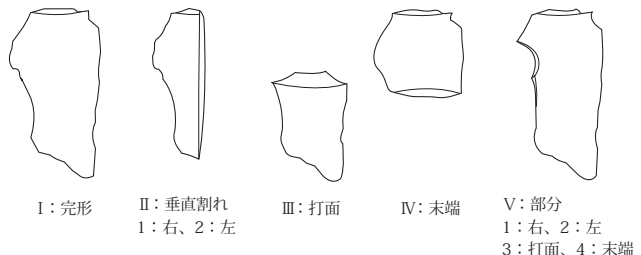
打点位置の分類



末端部の分類

- f: 羽毛状剥離 (Feather-like detachment)
- h: ウートラパッセ (Woolly pass)
- s: 階段状剥離 (Step-like detachment)
- o: 蝶番状剥離 (Butterfly-like detachment)

欠損状況の分類



\* 属性で「-」とあるのは、その部位が欠損していて不明な場合である。

\* 重量で「>」とあるのは、新しい欠損部位があるもので、最少重量を示す。

図 353 石器属性表分類基準 (井上ほか 2003 を一部改変)

表 15 第 8b 面出土 実測石器一覧表

掲載番号	遺構群	出土層位・出土遺構	器種	石材	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)	産地	
図226	15	西	1-211ビット	小型方柱状片刃石斧	蛇紋岩?	64.5	12.0	9.5	16.59	
	16	西	4-131ビット	磨石	砂岩	113.5	40.0	48.0	313.72	
図233	18	西	1区第8a層	石鏃	サヌカイト	41.0	12.5	6.0	2.80	二上山
	19	西	1区第8a層	石槍	サヌカイト	37.0	13.0	4.5	2.00	二上山
	20	西	1区第8a層	石槍	サヌカイト	40.5	20.5	10.5	9.53	
	21	西	1区第8a層	石槍	サヌカイト	71.0	28.0	14.0	29.14	
	22	西	1区第8a層	石槍	サヌカイト	78.5	28.5	6.5	21.41	
	23	西	1区第8a層	打製短剣	サヌカイト	77.0	30.5	13.0	42.22	
	24	西	1区第8a層	楔形石器	サヌカイト	54.0	34.0	10.0	27.48	二上山
	25	西	1区第8a層	二次加工のある剥片	サヌカイト	27.0	33.5	4.0	5.72	
26	西	1区第8a層	二次加工のある剥片	サヌカイト	42.5	51.5	9.5	26.75	二上山	
図234	27	西	1区第8a層	二次加工のある剥片	サヌカイト	45.0	22.0	3.5	>5.45	
	28	西	1区第8a層	二次加工のある剥片	サヌカイト	44.5	57.5	16.0	34.14	二上山
	29	西	1区第8a層	二次加工のある剥片	サヌカイト	30.0	50.0	5.0	12.40	
	30	西	1区第8a層	微細剥離痕のある剥片	サヌカイト	34.0	54.5	6.0	10.53	
図235	31	西	1区第8a層	石核	サヌカイト	64.0	70.0	28.0	107.99	
	32	西	1区第8a層	石核	サヌカイト	59.5	46.5	17.0	55.54	
	33	西	1区第8a層	二次加工のある剥片	サヌカイト	55.0	52.0	14.0	>43.11	
	34	西	1区第8a層	石核	サヌカイト	28.0	61.0	23.0	58.54	二上山
図236	1	西	2区第8a層	石鏃未製品	サヌカイト	34.0	18.0	4.0	2.97	
図237	1	西	4区第8a層	石鏃	サヌカイト	56.0	14.5	5.5	3.82	
図238	6	西	1区第8b-1層	微細剥離痕のある剥片	サヌカイト	34.0	23.5	4.0	>3.95	
	7	西	1区第8b-1層	石庖丁	流紋岩	59.0	86.0	5.0	50.84	
	8	西	1区第8b-1層	スクレイパー	サヌカイト	98.0	136.0	28.0	264.88	
図244	4	東	6-172土坑	楔形石器	サヌカイト	32.0	32.5	7.0	8.42	二上山
図246	1	東	6-124土坑	石錘?	砂岩	64.0	37.5	13.5	56.17	
図250	1	東	5-971ビット	石鏃	サヌカイト	45.0	15.5	5.5	3.06	二上山
	2	東	5-971ビット	楔形石器	サヌカイト	32.5	20.5	9.0	6.42	向出No.49遺物群
図258	9	東	3-268溝	石核	サヌカイト	54.0	77.0	14.5	63.47	二上山
	10	東	3-268溝	楔形石器	サヌカイト	41.5	39.5	11.0	18.16	二上山
	11	東	3-268溝	使用痕のある剥片	サヌカイト	49.0	38.0	10.0	>12.25	二上山
図265	40	東	3-268溝	石庖丁?石棒?	粘板岩系	35.0	14.5	2.5	1.76	
	41	東	3-268溝	石庖丁?	粘板岩系	50.0	51.0	8.0	29.00	
図266	42	東	3-268溝	砥石	紅簾片岩	139.0	39.0	10.0	78.38	
	18	東	3-268溝	石棒	粘板岩	104.0	25.0	10.5	39.86	
図269	12	東	3-268溝	石錘	サヌカイト	30.5	15.5	7.0	>2.01	二上山
	13	東	3-268溝	両刃石斧	ヒン岩or輝緑岩	64.5	50.0	32.0	93.88	
	14	東	3-268溝	不明石製品	粘板岩系	192.0	19.5	15.5	65.87	
図277	95	東	3-268溝	石鏃	サヌカイト	19.0	13.5	4.0	0.75	二上山
	96	東	3-268溝	楔形石器	サヌカイト	26.0	25.0	9.0	7.12	二上山
	97	東	3-268溝	楔形石器	サヌカイト	28.0	32.0	5.5	5.29	二上山
	98	東	3-268溝	楔形石器	サヌカイト	33.0	29.0	7.0	5.35	二上山
	99	東	3-268溝	楔形石器	サヌカイト	48.0	32.0	16.0	29.21	二上山
	100	東	3-268溝	楔形石器の剥片	サヌカイト	26.5	11.5	3.0	1.58	二上山
	101	東	3-268溝	楔形石器の剥片	サヌカイト	36.0	19.5	8.0	3.49	二上山
	102	東	3-267溝	二次加工のある剥片	サヌカイト	25.0	30.0	14.0	8.93	二上山
	103	東	3-267溝	凹石	砂岩	104.0	90.0	46.5	665.00	
	104	東	3-268溝	石庖丁	粘板岩	57.0	95.5	3.0	28.29	
	105	東	3-267溝	不明(砥石?)	石英	29.0	33.0	37.0	59.55	
図281	106	東	3-268溝	石棒?	粘板岩	142.0	33.0	12.0	67.35	
	4	東	3-286土坑	円礫	不明	10.0	8.0	8.0	0.83	
図287	5	東	3-286土坑	円礫	不明	10.0	8.0	6.5	0.63	
	34	東	6-123溝	スクレイパー	サヌカイト	81.0	59.0	10.5	45.43	向出No.49遺物群
	35	東	6-123溝	紡錘車未製品?	緑泥片岩	64.0	57.0	6.0	34.06	
図292	36	東	6-123溝	不明	石英	68.0	60.0	42.0	239.95	
	21	東	6-143土坑	楔形石器	サヌカイト	40.0	19.5	12.5	11.01	向出No.49遺物群
	22	東	6-152土坑	楔形石器	サヌカイト	30.0	29.5	9.5	8.87	金山東
	23	東	6-143土坑	楔形石器	サヌカイト	28.0	39.5	12.0	11.72	向出No.49遺物群
	24	東	6-152土坑	二次加工のある剥片	サヌカイト	50.5	49.0	11.0	22.25	金山東
	25	東	6-152土坑	素材剥片	サヌカイト	83.0	98.5	24.0	243.29	二上山
図300	50	東	3区第8a層	石庖丁	緑泥片岩	48.5	67.0	8.0	38.03	
	51	東	3区第8a層	楔形石器の剥片	サヌカイト	48.0	>31.0	10.5	>13.40	
	52	東	3区第8a層	原石	チャート	42.0	45.0	11.5	30.55	
図303	53	東	3区第8a層	石斧・敲石	輝緑岩系	64.0	50.0	44.5	187.78	
	38	東	5区第8a層	石鏃	サヌカイト	30.5	18.5	4.0	1.93	
	39	東	5区第8a層	石斧	ヒン岩or輝緑岩	71.5	64.5	34.5	239.55	
図308	40	東	5区第8a層	石斧	ヒン岩?	80.5	81.5	36.5	207.66	
	76	東	6区第8a層	石鏃	サヌカイト	25.0	18.0	3.0	0.96	
	77	東	6区第8a層	楔形石器	サヌカイト	44.0	48.0	17.0	48.62	
図313	78	東	6区第8a層	不明	緑泥片岩	93.0	64.5	16.0	174.47	
	84	東	6区第8a層	石鏃	サヌカイト	31.0	19.0	5.0	2.71	
	85	東	6区第8a層	スクレイパー	サヌカイト	48.5	82.0	8.5	30.85	金山東
	86	東	6区第8a層	打製石斧	サヌカイト	13.8	89.0	30.0	495.28	城山・金山西
	87	東	6区第8a層	打製石斧	サヌカイト	70.0	46.5	24.0	86.04	
図314	88	東	6区第8a層	石核	サヌカイト	52.0	62.5	18.0	72.89	
	89	東	6区第8a層	微細剥離痕のある剥片	サヌカイト	57.0	87.5	13.0	70.34	
	90	東	6区第8a層	石棒	結晶片岩	95.0	54.0	31.0	255.46	
図315	91	東	6区第8a層	凹石	砂岩	106.0	107.0	52.5	745.00	
	92	東	6区第8a層	敲石	不明	123.5	57.5	42.0	442.70	
図321	1	中央	2-112溝	石鏃	サヌカイト	23.0	12.0	3.5	>0.71	二上山
	2	中央	5-1015溝	石庖丁	粘板岩	29.0	92.0	4.0	11.22	
図323	12	中央	5区第8a層	石鏃	サヌカイト	47.0	26.0	5.0	3.50	二上山
	13	中央	5区第8a層	石鏃	サヌカイト	57.0	22.0	4.0	4.64	
	14	中央	5区第8a層	石棒	粘板岩系	80.0	36.5	27.0	113.91	

※産地については、第7章第3節の成果に拠る

表 16 サヌカイト剥片計測表

No.	遺構群	出土層位 出土遺構	器種	形態	長 (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	重量 (g)	最大幅	打面幅 (mm)	打面厚 (mm)	打面 状況	打点 位置	剥離角	背面構成	ボシ面	自然面	末端	欠損状況	備考・産地
1	東	3-267溝	剥片	短形	43.0	46.0	5.0	6.85	B	A	—	V2	—	—	I	I	○(右側辺)	f	V2	向出No.49遺物群
2	東	3-267溝	剥片	短形	27.5	35.0	2.5	2.20	A	A	—	V1	—	—	I	I	○(左側辺)	—	III+IV	向出No.49遺物群
3	東	3-268溝	剥片	短形	33.0	52.0	8.0	7.56	A	A	5.0	5.0	I	R	I+II	I	○(打・同側辺)	f	I	二上山
4	東	3-268溝	剥片	縦長	32.5	29.0	5.0	5.55	B	B	1.9	0.6	V2	—	I+III	I+III	○(打)	g	—	二上山
5	東	3-268溝	剥片	縦長	27.0	11.5	7.5	2.09	B	B	—	IV2	M	—	I+III	I	—	g	II 1	二上山
6	東	3-268溝	剥片	縦長	33.0	20.0	4.0	2.91	B	B	—	V2	—	—	I	I	—	—	IV	二上山
7	東	3-268溝	剥片	短形	25.0	28.0	9.5	10.28	B	A	7.0	9.0	II	M	I+II+IV	I	○(右側辺)	—	IV	二上山
8	東	3-268溝	剥片	短形	23.0	49.5	12.5	10.14	B	B	24.0	4.5	II	M	155	I	—	o	I	二上山
9	東	3-268溝	剥片	縦長	26.5	11.5	3.0	1.58	B	B	—	V2	—	—	I+III	I+III	—	g	II 1+V2	実測(図277-100) 二上山
10	東	3-268溝	剥片	縦長	19.0	29.0	6.0	2.33	C	B	—	V2	—	—	I+II	I	—	f	V1	二上山
11	東	3-268溝	剥片	縦長	36.0	19.5	8.0	3.49	B	B	—	V2	—	—	I+III	I+III	○(背)	g	I	実測(図277-101) 二上山
12	東	3-268溝	剥片	短形	15.0	23.0	2.5	0.93	B	B	15.0	2.5	II	L	II	II	—	—	IV+V 1+V2	金山東
13	東	3-268溝	剥片	短形	22.0	29.0	5.5	2.17	C	C	—	V2	—	—	I+自	I	○(背)	g・o	V2	二上山
14	東	3-268溝	剥片	短形	38.5	49.5	7.0	7.25	C	A	2.5	6.0	I	M	I	I	○(打・同側辺)	o	V4	二上山
15	東	3-268溝	剥片	縦長	28.5	22.5	4.0	1.37	A	A	—	V2	—	—	I+II	I	—	—	IV	二上山
16	東	3-268溝	剥片	短形	18.0	20.5	3.5	1.23	B	B	10.5	1.0	I	M	IV	I	○(打)	f	I	二上山
17	東	3-268溝	剥片	短形	24.5	25.0	7.0	3.13	A	A	—	V1	—	—	I+II	I	—	f	III+V2	二上山
18	東	3-268溝	剥片	縦長	30.0	21.0	5.5	3.84	C	C	—	V2	—	—	I+III	I+III	—	—	IV	二上山
19	東	3-268溝	剥片	短形	19.5	>49.0	7.0	>5.91	B	A	—	V1	—	—	I+II+III	I	○(左側辺・末端)	h	III	二上山
20	東	3-268溝	剥片	短形	15.5	20.0	2.5	0.74	B	B	1.5	—	IV1	M	I	I	—	f	V1+V2	二上山
21	東	3-267・268溝	剥片	短形	23.5	26.5	3.5	2.09	A	B	—	—	—	—	I+III	I	○(背)	—	IV+V 1+V4	二上山
22	東	3-267・268溝	剥片	短形	20.5	24.5	9.0	2.77	B	B	—	V2	—	—	I+III	I+III	○(右側辺)	g	I	向出No.49遺物群
23	東	3-286土坑	剥片	短形	10.5	14.0	2.0	0.22	B	A	—	V1	—	—	I+III	I	—	g	III	プランテイングチップ。二上山
24	東	6-119土坑	剥片	短形	44.5	>47.5	9.0	>20.18	B	B	18.0	5.5	II	Le	I+III+自	I	○(背)	f	V4	二上山
25	東	6-123溝	剥片	短形	23.5	25.0	4.0	2.60	B	B	—	IV2	L	—	自	I	○(背)	f	IV+V 1	讃良郡桑里遺物群
26	東	6-123溝	剥片	縦長	41.0	28.0	6.0	7.37	B	B	7.0	3.0	I	M	I	I	—	—	III	向出No.49遺物群
27	東	6-130土坑	剥片	短形	15.0	22.0	2.5	0.58	A	B	—	IV2	M	—	I	I	—	f	III	金山東
28	東	6-139ピット	剥片	短形	7.0	19.0	2.0	0.34	C	B	—	V1	—	—	III	I	—	f	III	プランテイングチップ。金山東
29	東	6-152土坑	剥片	短形	29.0	45.0	6.5	6.47	C	C	2.0	—	IV2	M	I+II	I	○(打・左側辺)	—	IV+V 2	金山東
30	東	6-152土坑	剥片	短形	15.5	26.0	3.0	1.59	B	B	1.0	—	IV2	M	I	I	—	f	V4	金山東
31	東	6-152土坑	剥片	短形	36.0	37.0	9.0	7.11	B	A	—	V2	—	—	I+II	I	—	f	V2	金山東
32	東	6-152土坑	剥片	短形	18.0	33.5	7.0	5.29	B	A	—	I	Le	—	I+III+IV	I	○(打)	—	IV+V 1	金山東
33	東	6-152土坑	剥片	縦長	36.5	13.5	7.0	2.98	C	C	—	V1	—	—	I+III	I	—	g	III+V 2	城山・金山西
34	東	6-157土坑	剥片	短形	14.5	23.0	2.5	0.88	B	C	—	IV2	M	—	I	I	—	—	IV	金山東
35	東	6-157土坑	剥片	短形	18.5	23.5	3.5	1.02	B	B	2.5	—	IV2	M	I+II	I	—	f	I	二上山
36	東	5-971ピット	剥片	短形	25.5	24.0	3.0	1.48	A	A	6.0	2.0	I	M	II	I	○(打)	f	V1	向出No.49遺物群
37	東	5-975ピット	剥片	短形	13.5	18.5	3.0	0.78	C	A	13.0	2.0	I	L	I	I	○(打・右側辺)	—	IV+V 2	二上山
38	東	5-979土坑	剥片	短形	25.0	33.0	5.0	3.81	A	B	—	V1	—	—	III+自	I	—	f	III	向出No.49遺物群
39	東	3区第8a層	剥片	縦長	48.0	>31.0	10.5	>13.40	B	B	—	V2	—	—	I+III+自	I+III	○(背)	g	I	実測(図300-51)
40	東	6区第8a層	剥片	縦長	77.0	55.0	11.5	29.32	B	A	4.5	5.0	IV2	M	I+自	I	○(右側辺・背)	f	I	—
41	西	1区第8a-1層	剥片	短形	30.2	32.5	8.0	5.14	B	A	6.0	4.0	I	M	II+自	I	○(打・背)	—	IV	—
42	西	1区第8a-1層	剥片	短形	>29.5	27.0	8.0	>6.71	B	A	—	V2	—	—	I+III	I+III	—	—	V1+V2	—
43	西	1区第8a-1層	剥片	短形	24.5	39.0	11.0	9.55	A	A	—	V1	—	—	I+III+IV	I	○(右側辺)	—	III+IV	二上山
44	西	1区第8b-1層	剥片	短形	33.5	49.5	4.0	6.14	A	A	—	V1	—	—	I+II	I	—	—	III+IV	—

## (2) 剥片の属性

ここで、剥片の属性をみてみたい。剥片の属性として背面構成と打面の形状を中心にみていく。その他の属性については、剥片計測表（表 16）を参照されたい。なお、属性分類については図 353 に拠る。

### 1) 背面構成

東側遺構群出土の剥片の背面構成の内訳は表 17 のとおりである。主要剥離面に直交する剥離（I）が 13 点・32.5% を占め、続いて主要剥離面に直交する剥離と 180 度回転する剥離（I + III）が 8 点・20.0%、主要剥離面に直交する剥離と 90 度回転する剥離（I + II）が 7 点・17.5% となる。これら

の背面構成で全体の 70% を占めることから、剥片剥離の際には、大きく打面を展開することは少なく、ほぼ打面を固定した状態で剥片を剥離したものと考えられる。

### 2) 打面形状（表 18）

打面は砕け（V 2）12 点・30.0%、線打面（IV 2）8 点・20.0%、自然面打面（I）と折れ（V 1）が各 7 点・17.5% の順である。また主要剥離面を片面に残し、末端部に階段状の剥離を残す剥片も一定量存在する。

以上のことから、最初に手に持つての直接加撃で剥片を剥離し、石材が小型になったのちは両極技法を用いて剥片剥離を行ったと考えられる。

### 3) 自然面

自然面の付着状況は、21 点、52.5% で過半数にのぼる。このうち背面に自然面を残す剥片は 7 点・17.5% で、蛍光 X 線分析を行った 5 点中 4 点が二上山、1 点が向出 No. 49 遺物群という結果であった。金山産サヌカイトについては、2 点のみに自然面が認められ、打面と 1 側面に認められるものと、打面のみに認められるものがある。石核や楔形石器、剥片の法量や自然面の付着状況の結果から、サヌカイト原石や大型の板状剥片が搬入されたとは考えにくく、小型の原石を粗割りした剥片が遺跡内に搬入されたものと考えられる。

### 4) サヌカイトの搬入状況

第 8b 面東側遺構群の遺構から出土したサヌカイト製石器、57 点の石器の蛍光 X 線分析の結果、二上山産サヌカイトが 34 点・59.7%、金山東・城山・金山西産サヌカイトが 13 点・22.8%、その他が 10 点・17.5% という結果を得た。二上山産サヌカイトが優勢であるが、スクレイパーや打製石斧などの大型のツールについては金山東産や城山・金山西産のサヌカイトが使用されており、一方で石核や楔形石器、素材剥片などは二上山産が多用されるという結果となっている。このことから、大型の素材が必要なツールについては、製品あるいは半製品の状態で搬入され、遺跡内で一部の再調整を行った可能性が考えられる。

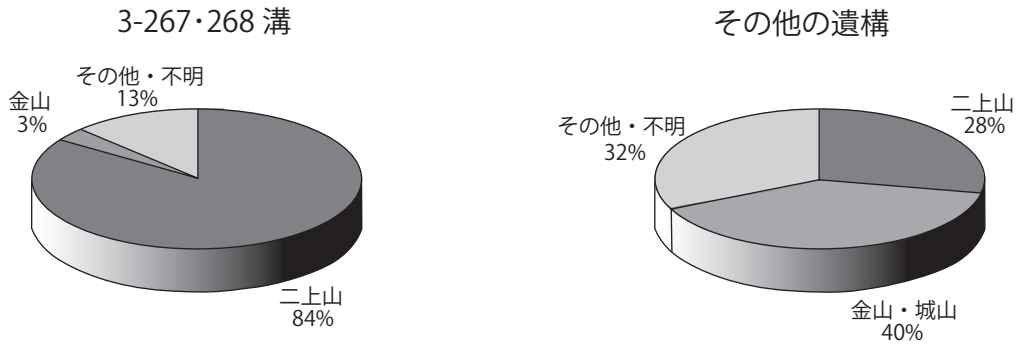
またこれら 57 点の石器を、突帯文土器を多く出土した 3-267・268 溝と、その他の遺構に分けてグラフ化したものが図 354 である。3-267・268 溝から出土したサヌカイトのほとんどが二上山産で、金山・城山産はわずか 1 点のみ含まれるのに対し、「その他の遺構」では金山・城山産のサヌカイトの比率が二上山産を上回る。上述のような器種ごとの出土分布もあろうが、弥生土器の出土が 9 割以上を

表 17 背面構成表

背面構成	点数	%
I or I + 自	13	32.5
II	2	5.0
III	1	2.5
IV	2	5.0
自然面	1	2.5
I + II	7	17.5
I + II + III or I + II + IV	2	5.0
I + III	8	20.0
I + III + IV or I + III + 自	3	7.5
III + IV	1	2.5
計	40	100

表 18 打面形状表

打面形状	点数	%
I	7	17.5
II	4	10.0
IV1	1	2.5
IV2	8	20.0
V1	7	17.5
V2	12	30.0
不明	1	2.5
計	40	100



	二上山	金山・城山	その他・不明
3-267・268溝	27	1	4
その他の遺構	7	10	8
6区包含層	0	2	0
1・2区包含層・遺構	8	0	0

図 354 第 8b 面東側遺構群 遺構出土サヌカイト産地比率

占める「その他の遺構」で金山・城山産と見られるサヌカイトが増加していることは示唆的である。

河内平野の遺跡で出土するサヌカイトに関しては、近隣産地である二上山産を主要石材とする縄文時代と異なり、弥生時代が始まる頃になると、金山・城山産など讃岐地方から供給される石材の比率が増加することがわかってきている（秋山 2007）。今回の分析結果は、端的に既往の研究成果と調和的といえるが、土坑などの遺構から出土した複数の剥片が、同一の石核や素材剥片から分割されたものである可能性を否定できないため、数量的な分析によってどこまで実態に迫ることができるのかわからない。しかしながら、当遺跡の弥生時代前期段階に、近隣の二上山産石材に加えて讃岐地方の石材を入手・加工していた状況については具体化できたといえる。

また、これらの 57 点のほかに対照試料として、弥生時代前期集落の約 120 m 南西の微高地上で確認された、弥生時代中期前半の集落に伴うと考えられるサヌカイト 8 点の分析も行っている。こちらに関しては分析の結果、全てが二上山産と判断された。また、東側遺構群の包含層から出土した 2 点の石器（図 313-85・86）については、金山・城山産とされている。

#### おわりに

以上、第 8b 面から出土した石器類の検討を行った。特にこれまで近畿地方で明らかになっていなかった前期前半のまとまった資料の検討の結果、剥片剥離技術を復原でき、また、二上山・金山の石材の搬入状況について一部ではあるが明らかにできたといえる。

今後は、縄文時代晩期から弥生時代前期・中期への石器の変遷について検討を行い、近畿圏の弥生文化の成立について明らかにしていく必要があり、検討課題とする。

## 第7章 その他の科学的分析と検討

### 第1節 讃良郡条里遺跡の古環境復原

#### はじめに

讃良郡条里遺跡は、生駒山西麓の扇状地から沖積低地にかけて位置し、今回の03-4調査地は扇状地扇端から沖積低地に至る地形環境の変換点に位置する。本遺跡における古環境復原を目的とした分析調査は、これまで扇状地に位置する調査地を中心に情報が蓄積されてきている。今回の調査では現地調査による堆積層の累重状況の観察、および珪藻・花粉・植物珪酸体分析、さらに遺構埋土中の大型植物化石の産状について検討を行った。本節では、これらの分析結果について報告する。なお、分析方法および分析結果の一部については紙幅の都合により割愛しているが、詳細は(財)大阪府文化財センターに保管されているので参照されたい。

#### 1. 調査地点

分析調査地点の位置および各地点の堆積層の累重状況を模式柱状図として図355に示す。

#### 2. 調査地およびその周辺の地層と地形

本項では現地で観察した堆積層の層相と珪藻分析結果(図356・357)に基づき、調査地での堆積・土壌および古水文環境について検討する。

03-4および03-5調査地では、堆積層中に黒褐色を呈し、腐植質に富む古土壌が複数挟在する(図358)。特に弥生時代中期までに形成された第8a-1層は第7b層に被覆されて、側方への連続性が極めて良く、隣り合う調査地間の層序対比の鍵層となる。これらの古土壌は、讃良郡条里遺跡が立地する生駒山西麓部の沖積扇状地面の地形に沿い、基本的に東から西への傾きを示す。本遺跡が立地する沖積扇状地については、発掘調査や地層の詳細な層序対比、空中写真判読などから、更新世末期以降の離水時期が異なる幾つかの地形面によって形作られていることが認識される。今回分析を実施した03-4調査地は、上記した沖積扇状地面群において相対的に下部に位置する。03-4調査地が立地する扇状地面は、扇中央部が東接する03-2・03-3調査地に存在し、縄文時代後期に形成されたことが明らかにされている(井上2005)。また03-4調査地は、扇状地扇端部～沖積低地への移行部に位置していることが、これまでの調査・分析で明らかとなっている。

#### ・縄文時代晩期以前

19地点のT.P.-0.5～-1.0m付近には、泥質砂層から泥層へと上方細粒化を示す、縄文時代晩期以前に累重した第9a'-1～第9a'-3層が存在する。泥質砂層の第9a'-3層は、葉理をなす植物遺体片を多く含む。腐植質に富む泥層の第9a'-1層では、葉理をなして累積する横位の植物遺体の密集層が形成されている。植物遺体は、日本ペトロロジー学会編(1997)の握り法による分解度判定基準によると、やや分解～軽度に分解(H3～H4)に相当する。このような分解度から、第9a'-1層は、泥炭(坂口1974)、土壌分類上での泥炭土(安西2001)に相当する。泥炭や泥炭土は地下水位が高く、水位が地表付近に存在するような土壌環境下で形成される(坂口1974、犬伏・安西2001)。含まれる植物遺体のほとんどが葉理をなしていることから、第9a'-1層を構成する泥炭は、異地性の植物遺体からなる他生泥炭に分類される(坂口1974)。





凡例

	古土壤		腐植質泥		炭化物		植物遺体
	泥炭質粘土		トラフ型斜交層理・薬理		微化石分析試料採取層理		腐植に富む薬理
	砂質泥～泥質砂		細礫～中礫		材化石		
	砂		平行層理・薬理				

図 355 分析地点の層序と柱状図

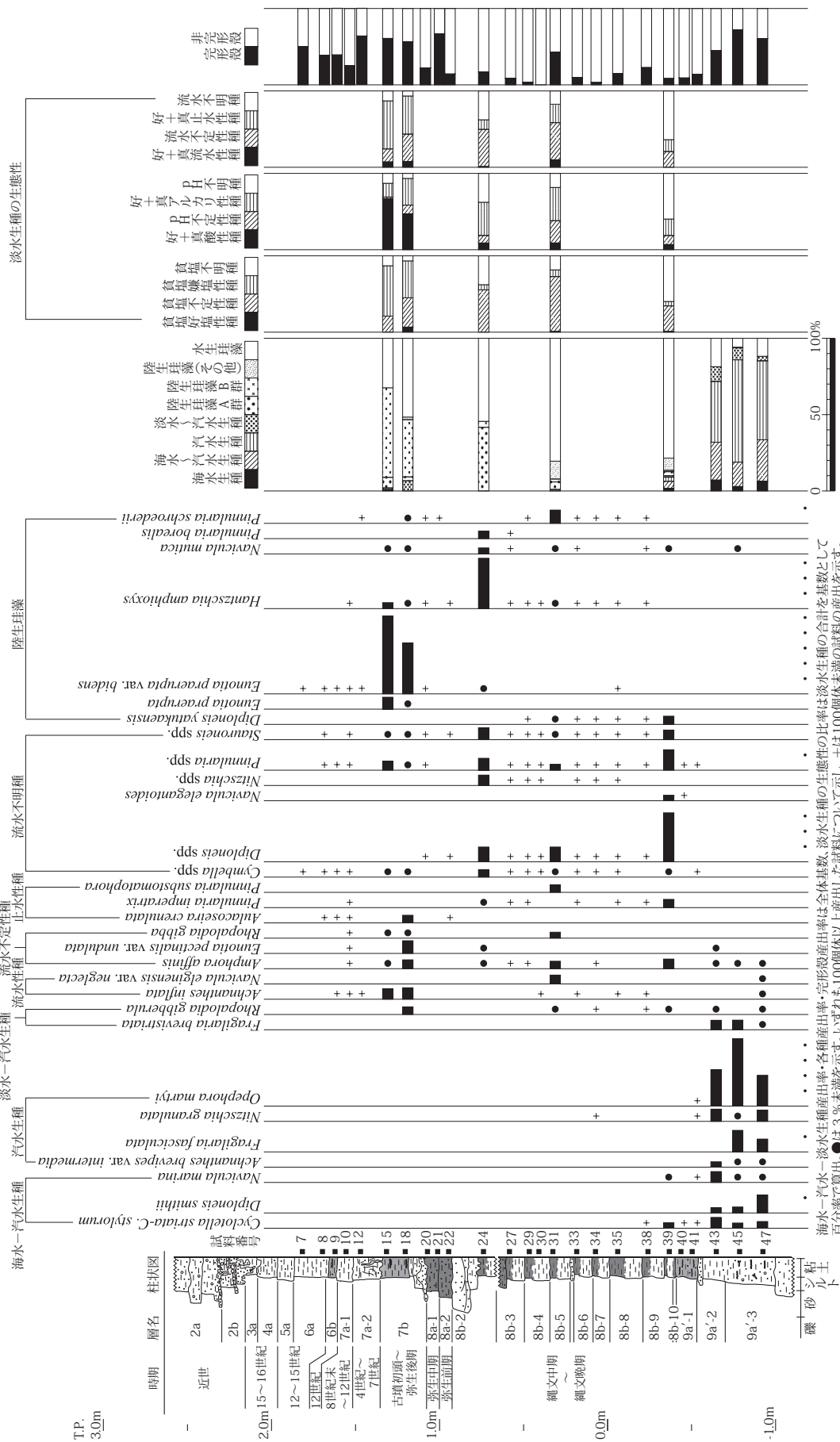


図 356 19地点の主要珪藻化石群集の層位分布

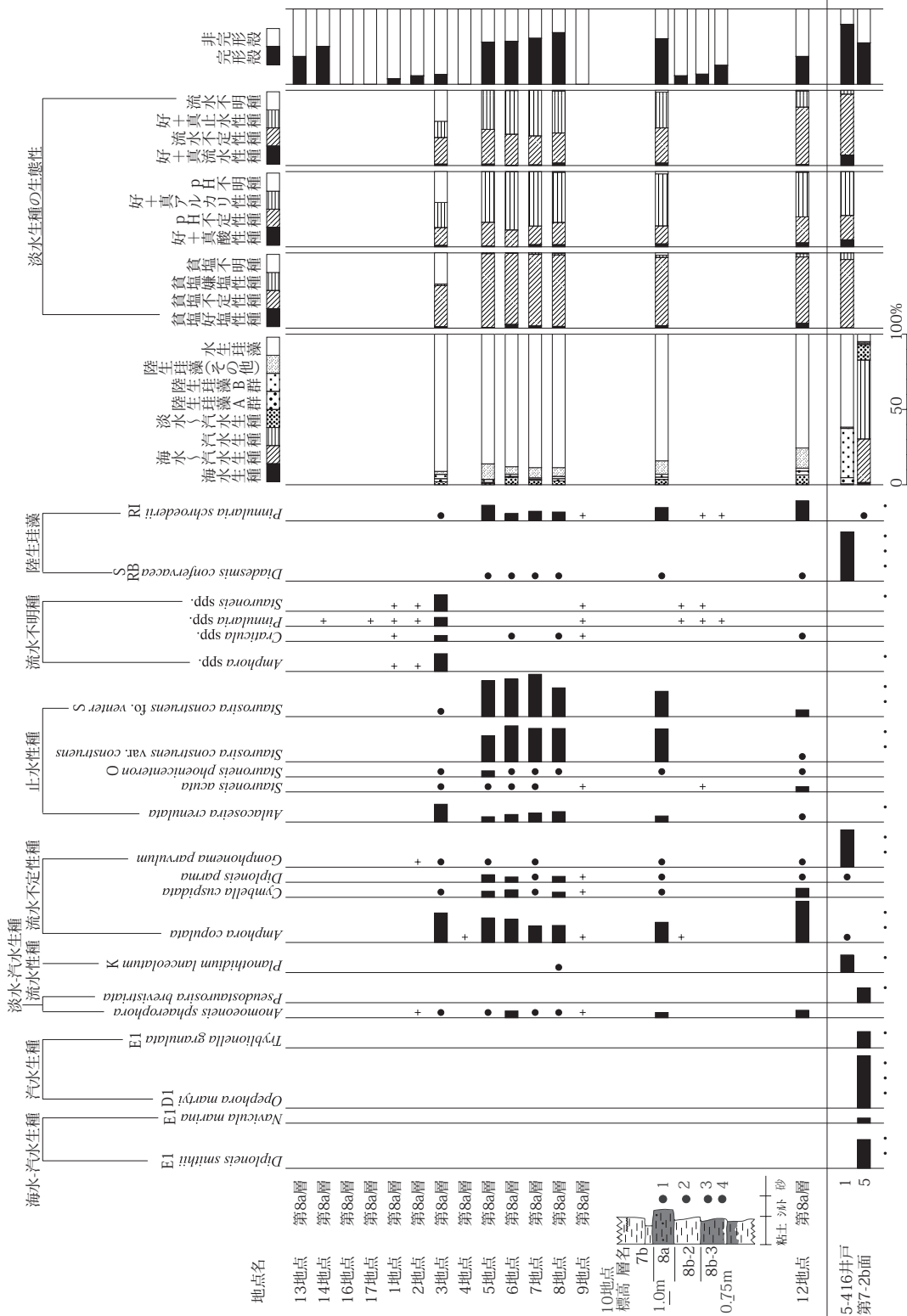


図 357 第 8a 面水田と第 7b 面 5-416 井戸の主要珪藻化石群集

海水・汽水・汽水生種産出率・各種産出率は全体基数、完形産出率は全体基数、淡水生種の比率は淡水生種の合計を基数として百分率で算出。いずれも100個体以上産出した試料について示す。  
 なお、●は3%未満、+は100個体未満の試料について産出した種類を示す。また、各種類末尾のアルファベットは下記の環境指標群を示す。  
 D1: 海水砂質干潟指標群 E1: 海水泥質干潟指標群 (以上は小杉, 1988) K: 中〜下流河川指標群 O: 沼沢地付着生種 (以上は安藤, 1990)  
 S: 好汚濁性種, U: 広域適応性種, T: 好清水性種 (Asai and Watanabe, 1995) R: 陸生珪藻 (RA: A群, RB: B群, RI: 未区分, 伊藤・堀内, 1991)

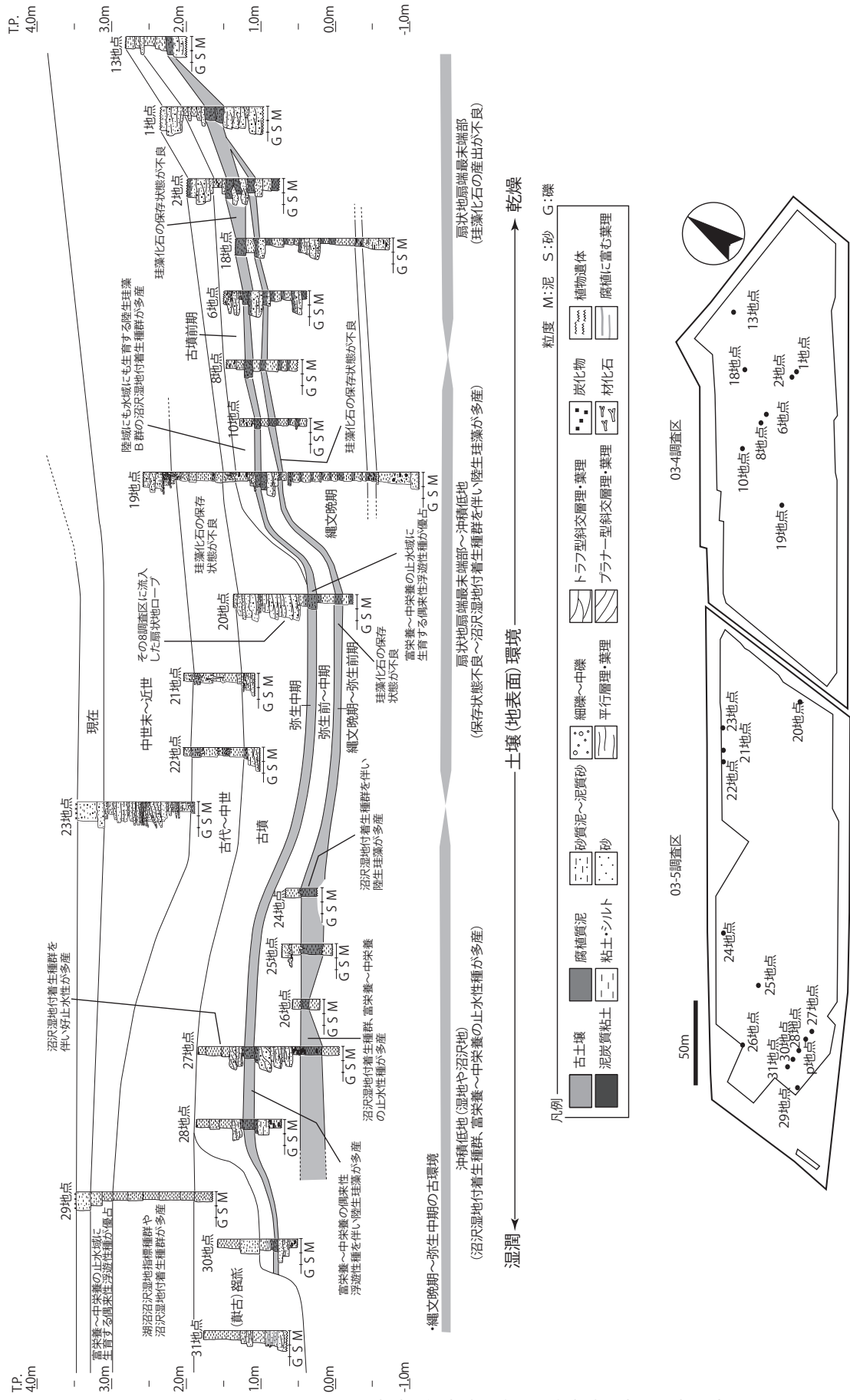


図 358 03-4 ~ 03-5 調査地の縄文時代晩期〜弥生時代中期の古環境

上記のような層相から、第 9a'-3 ～第 9a'-1 層は、洪水流によって運搬されてきた浮遊土砂や植物遺体が後背湿地などの滞水域で浮遊沈降するような堆積場で形成されたと判断される。なお第 9a'-3 層・第 9a'-2 層の珪藻分析結果では、汽水生種が多産し、小杉（1988）の汽水底生の海水砂質干潟指標種群や海水浮遊性で内湾指標種群、海水～汽水生種で海水泥質干潟指標種群が特徴的に産出する。これらの珪藻化石群集から、第 9a'-3 層・第 9a'-2 層については、汽水の影響を強く受けるような河川氾濫原の堆積環境であったことがうかがえる。第 9a'-1 層中の植物遺体の  $^{14}\text{C}$  年代値が補正年代値で  $4085 \pm 30\text{yrsBP}$  を示していることから、第 9a'-3 層・第 9a'-2 層はそれ以前の時期に形成されたことになる。本調査地後背の扇状地扇央に位置する 03-1・2 調査地では、縄文時代中期から後期中葉にかけて浸食・堆積を繰り返す開析谷が検出されており、初期段階の開析谷充填堆積物中の  $^{14}\text{C}$  年代値は  $4490 \pm 40\text{yrsBP}$  を示している（大文セ 2008）。この本調査地後背で起こっている地形変化を踏まえると、第 9a'-3 層・第 9a'-2 層は開析谷から流出した堆積物に由来する可能性が高い。

#### ・縄文時代後期～縄文時代晩期

T.P.-0.5 ～ 0.8 m 付近には、縄文時代晩期に累重した堆積層（第 8b-10 ～第 8b-2 層）が分布する。これらの堆積層は、調査地の東側へ側方粗粒化を示す。粗粒化が顕著な調査地東部に位置する 1 ～ 2 地点では、古土壌をなす砂質泥～泥質砂層に、トラフ型斜交層理・葉理をなす砂礫層の挟在が認められる。砂礫層については、下部の堆積層をあまり侵食せず、層状ないしレンズ状をなして堆積する。砂礫層については、扇状地上へ流出してきた洪水堆積物と判断される。調査地中西部の 19 地点では、層厚 20cm 前後の黒褐色部分と、その基盤をなす緑灰色～灰色部分を 1 セットとなす泥層～砂質泥層からなる互層が積層する。緑灰色部分は、洪水時の水位上昇に伴い滞水域となった本地点へ流入してきた浮遊土砂が沈降して形成された泥層である。黒褐色部分は、洪水後の水位低下によって地表面が離水し大気下に曝されることで発達した土壌である。

以上のような層相から、縄文時代晩期には、調査地東部で砂礫層からなる粗粒の洪水堆積物が時折流入する堆積場、西部で離水と水没を繰り返す湿地が形成されながら全体的に氾濫原面が上昇したことがうかがえる。上記の第 8b-10 ～第 8b-2 層で認められる側方への堆積環境の漸移的变化は、扇状地扇端部に形成されたロープからその周囲に広がる沖積低地への地形と層相の変化を示している。

第 8b 層では、10 地点と 19 地点の第 8b-10 ～第 8b-2 層で珪藻分析を実施しているが、いずれの層準も化石の保存状態が極めて不良である。珪藻化石を構成するシリカは、温度が高いほど、流速が早いほど、水素イオン濃度が高いほど溶解度が大きくなり溶けやすいことが実験により推定されている（千木良 1995）。また、湿原の乾燥化によって珪藻殻数が急減し保存が悪くなる現象もみられる（小杉 1987）。考古遺跡では、安定した地表面となり土壌発達が認められる遺構検出面で、珪藻化石の産出が極めて不良となることが指摘されている（井上 2003）。上記のような珪藻化石の風化に関する事例と層相をふまえると、本層での保存状態の悪さは、好氣的な環境下での土壌発達や離水没を繰り返すような堆積場の影響が大きな要因と判断される。

#### ・縄文時代晩期～弥生時代前期

縄文時代晩期の第 8b-2 層は、相対的に標高の低い 03-4 調査地西半部を中心に分布する。調査地中西部の 19 地点では、上に凸型をなし舌状に堆積するトラフ型斜交層理・葉理の砂礫層が累重する。同様の砂礫層は 03-5 調査地でも形成されている。また、19 地点の西側では、第 8b-2 層の最上部に相当する弥生時代前期の第 8a-2 層の古土壌を覆う同様な上に凸型をなし舌状に堆積する砂礫層の堆積が確

認められている。砂礫層の堆積状況から、これらは扇状地発達に伴うローブ堆積物であると考えられる。当該期には、沖積扇状地扇端部から沖積低地にかけて、新たな扇状地ローブを形成するような土砂流出があったものと判断される。

第 8b-2 層の最上部に相当する弥生時代前期の第 8a-2 層および弥生時代中期の第 8a-1 層は、03-4・03-5 調査地において側方への連続性が良好な古土壌である。この古土壌では、03-4 調査地のほか、03-5 調査地でも多くの珪藻分析結果が得られている。03-4 調査地では、珪藻化石の保存状態が不良であることが特徴である。珪藻化石群集からは、03-4 調査地で縄文時代晩期～弥生時代前期にかけて乾燥した土壌環境が維持されていたことが示唆される。これに対し、03-5 調査地では珪藻化石の保存状態が良好で、多くの水生珪藻の産出が認められている。珪藻化石群集と層相から、03-5 調査地では、調査地西部でしばしば乾燥するような湿地、調査地東部で塩類の豊富な沼沢地～池沼の止水域ないし過湿の湿地であったことがうかがえる。

上記のような 03-4・03-5 調査地の珪藻分析結果および層相から、調査地は、03-5 調査地に比べ地表面が大気下に曝される時期が長期間にわたって維持され、好気的で乾燥した土壌環境が広がる領域であったと考えられる。但し、花粉および植物珪酸体分析結果から、縄文時代晩期～弥生時代前期に 03-4・03-5 調査地では、広い範囲にわたってヨシ属やガマ属を中心とした水湿地生植物に覆われていたことが読みとれる。このような古植物相からは、後述する弥生時代前期～中期の時期に比べれば、相対的に水位が高く、より湿潤な堆積・土壌環境であったことが推定される。

以上のような層相および分析結果から、03-4 調査地では、縄文時代晩期～弥生時代前期に扇状地ローブが発達するような地形変化が生じ、そのようなローブ上が、周囲の氾濫原面に比べ微高地を形成するようになったと考えられる。微高地上では、土壌発達が進行するような高燥な場所が形成される。発掘調査では弥生時代前期の集落が検出されており、積極的な土地利用状況を確認できる。

#### ・弥生時代中期

弥生時代中期の第 8a-1 層は、腐植質に富み砂質泥～泥質砂層からなる。03-4・03-5 調査地にわたって連続的に側方へ追跡できる古土壌である。第 8a-1 層上面では、水田遺構が 03-4・03-5 調査地の広範囲で検出されている。03-4 調査地では、第 8a-1 層において平面的な珪藻分析を実施し、調査地内の古水文環境復元において興味深い知見が得られている。珪藻化石の産状は、完形殻の出現率に示されるように、5 地点より西側の地点と 4 地点より東側の地点で大きく異なることが指摘される。このような珪藻化石の産状については、調査地内の微地形と極めて良い対応を示すことが、第 8a-1 層での標高分布から読みとることができる。

調査地東端部に位置する T.P.1.8～2.3m の 13・14・16・17 地点、T.P.1.5～1.8m の 1・2・4 地点では、化石の保存状態が極めて不良である。これに対し、1～4 地点・13～17 地点より標高の低い T.P.1.0～1.4 m の 5～10 地点および T.P.0.9m の 12 地点では、珪藻化石が多産する。12 地点よりも標高がやや高くなる 19 地点では、珪藻化石の保存状態が不良である。このうち 5～10 地点では、有機汚濁の進んだ富栄養水域に出現する好汚濁性種でかつ偶来性浮遊性種が出現することから、塩分や塩類の豊富な富栄養の止水域の水文環境が示唆される。12 地点では、偶来性浮遊性種の産出が少ない。この 12 地点付近以西では、水田区画の形態に変化が認められる。12 地点と 10 地点～5 地点との珪藻化石群集の差異については、水田区間やそれに伴う地表の古水文環境との差による可能性も想定されるが、現段階でその要因の特定には至っておらず今後の課題である。

上記の標高分布をふまえると、1～4地点と13～17地点は、5～10地点に比べ高燥な土壤環境であったと解釈される。従って、これらの地点での珪藻化石の保存状態の悪さは、好氣的な土壤環境下での風化の進行によるものと考えられる。

なお、03-4 調査地の西端部では、水田領域が途切れ非耕作域の湿地が形成されている。この湿地部分については、隣接する 03-5 調査地で珪藻分析を実施している。凹地をなす湿地部分では、腐植に富む黒褐色泥層が累重する。この腐植質泥層では、腐植酸性水域の止水域に生育する偶来性浮遊生種が優占することから、降雨時などの水位上昇時に、周囲の土壤物質の流れ込みを伴いながら、閉鎖的な湿地ないし滞水域が形成されていたことが窺える。また 03-5 調査地の弥生時代中期の水田遺構の分布領域では、富栄養～中栄養の止水域の偶来性浮遊生種を伴い、陸生珪藻が多産する珪藻分析結果が得られており、地表面がしばしば乾燥するような湿地の堆積環境が推定される。

調査地の立地および分析結果と層相を総合的にふまえると、弥生時代中期に形成された水田領域内では、地点によって異なった古水文環境が形成されていたと解釈される。分析結果から、03-4 調査地の相対的に標高が高い水田領域（1～4地点・13～17地点）では、標高が低い領域（5～10地点・12地点）に比べ水がかりが相対的に不良であった可能性が示唆される。1～4地点の花粉分析結果のうち、局地性が強いとされる草本花粉では、河原の乾いた荒れ地に分布するヨモギ属が多産しており、地形・珪藻化石群集から推定される古水文環境と調和的な傾向を示している。

以上のような 03-4・03-5 調査地の弥生時代中期の水田跡における空間的な珪藻化石群集の分布から、03-4 調査地の水田面では、一部で極浅い排水不良の湿地が存在するものの、基本的に常時大気下に曝されるような乾燥した好氣的な土壤環境が広がっていたものと認識される。これに対し、沖積低地に立地する 03-5 調査地の水田領域では、しばしば地表面が乾燥する時期を挟在する湿性の土壤環境が広く分布していたと推定される。また、非耕作地である 03-4 調査地西端部から 03-5 調査地東端部の凹地内では、閉鎖的な滞水域ないし過湿の土壤環境からなる湿地であったと判断される。

ところで、上記のような珪藻分析結果については、同時に実施された植物珪酸体分析結果とも連動していることが読みとれる。珪藻化石の保存が不良であった 1～4地点・13～17地点では、植物珪酸体含量が 6,000～13,000 個/g 前後である。これに対し、保存が良好であった 5～10地点では、植物珪酸体含量が 12,000～47,000 個/g 前後、最も標高が低い 12地点では、植物珪酸体含量が 44,000 個/g 前後と明らかに高い含量を示す。03-5 調査地については、植物珪酸体含量が 30,000 個/g 前後となる結果が得られている。上記の植物珪酸体分析結果からは、珪藻化石の保存状態が悪い分析地点で、植物珪酸体含量が共に低くなることが明白に読みとれる。このような空間的分布の共変動は、調査地の地形やそれに伴う古環境、珪藻分析結果を考慮すると、土壤化による風化消失の影響の差異に規定されていると解釈される。

#### ・古墳時代～中世

古墳時代以降の分析は、調査地西端部の 19 地点で分析を実施している。古土壤上面に形成された弥生時代中期の水田面は、洪水堆積物の砂層～礫質砂層に覆われる。砂層～礫質砂層の直上には、腐植を多く含む植物遺体の葉理を挟在する後背湿地の堆積環境下で累重した泥層が調査地のほぼ全域に累重している。この泥層は第 7b 層に相当し、出土遺物の相対年代から、弥生時代後期～古墳時代初頭に形成されたことが判明している。第 7b 層の珪藻分析結果では、沼沢湿地付着生種群が多産し、水深 1 m 前後までの水域に水生植物が繁茂した湿地であったことが示唆され、層相と調和的である。

以上の層相と珪藻分析結果から、03-4 調査地では、弥生時代後期～古墳時代初頭に相対的水位が上昇し、調査地全域が水没するような湿地や沼沢地からなる堆積・水文環境が形成されたと判断される。

古墳時代以降から中世までの層準の第 7a-2 層～第 3a 層では、畦畔跡などが累層的に検出されている。これらの堆積層は塊状をなす泥層で構成され、砂層の葉理が認められず、細粒の細礫を含む砂粒が泥のマトリクス中に散在して存在する。また堆積層のしまりは非常に良く、植物遺体がほとんど挟在しない。第 7a-2 層より上位の層準では、赤褐色を呈する管状ないし糸根状の斑紋に富む。これらの特徴は、西ノ辻遺跡で記載された古水田耕作土の特徴に類似する（松田・パリノ・サーヴェイ 1996）。上記した層相から、第 7a-2 ～第 3a 層の累重時期に調査地では、浮遊土砂を多く含む洪水堆積物がしばしば流入するような堆積場において、それらの堆積物を母材として耕作土が連綿と形成されるような人間活動が展開したと考えられる。第 7a-2 層～第 3a 層での珪藻化石の保存状態は極めて悪い。これに対し、本調査地より低所に位置する 03-5 調査地では、古代～中世の層準で沼沢地を示唆する種群が多産する珪藻化石群集が得られている。地形を考慮すると、このような 03-4・03-5 調査地で認められる珪藻化石の保存状態の違いは、当時の地表面付近における堆積・土壌環境の差を示しており、03-4 調査地が 03-5 調査地に比べ相対的に乾燥しており、また乾湿の変動も激しかったと判断される。古代以降の 03-4・03-5 調査地の堆積・土壌環境の違いは、堆積層中の酸化鉄斑紋の有無でも確認することができる。酸化鉄斑紋については、03-5 調査地で酸化鉄の斑紋がほとんど存在しないのに対し、03-4 調査地において顕著に観察される。このような酸化鉄斑紋の沈着状況の違いは、地下水位によって規定されていると判断される。松井（2001）の分類を参考にすると、古代ないしそれ以降の水田が両地点で存在したと想定した場合には、03-5 調査地が中間型～地下水型、03-4 調査地が表面水型に分類される可能性がある。

以上のことから、古代から中世にかけて、03-4 調査地では、湿～過湿の土壌環境が示唆される 03-5 調査地に比べ、好氣的土壌環境が維持される乾燥した場所であったと判断される。12～15 世紀の第 5a 層・第 6a 層、15～16 世紀の第 3a 層・第 4a 層では、植物珪酸体含量も急減することが確認される。珪藻化石および植物珪酸体の層位的な群集変化から、03-4 調査地では特に中世の段階において、微化石の風化が進行する好氣的な土壌環境が維持されたことが示唆される。

#### ・近世

近世に形成された第 2b 層・第 2a 層では、明瞭な水平葉理かなる砂礫層が累重する。この水平葉理は、高流領域に生じる平滑なベットフォームと判断され、流路からの破堤によって調査地に流入した洪水堆積物と考えられる。このような破堤堆積物は、03-4・03-5 調査地に広く分布している。近世において厚く累重する洪水堆積物は、中世以前に存在しない。そのため讚良郡条里遺跡では、中世末頃から洪水堆積物の堆積環境に変化が生じたことが示唆される。当該期の花粉分析結果では、マツ属花粉が優占するとともに、草本花粉の比率が卓越する。花粉分析結果からは、後背地の生駒山地西麓斜面で、中世末以降に疎林ないしはげ山に変化していたと解釈される。上記の堆積環境および古植生変化をふまえると、03-4・03-5 調査地付近で広く認められる中世末頃以降の粗粒洪水堆積物の流入は、後背地の生駒山地西麓斜面の植生破壊に基因する土砂流出量の増大に基因すると判断される。中世における山地斜面の植生破壊と土砂流出量の増大は、交野地域の私部南遺跡、上私部遺跡、津田遺跡でも確認されている（辻ほか 2007 など）。津田遺跡では、山地斜面麓部の開析谷内の花粉分析結果で、土砂流出量の増大とマツ属花粉の優占が鎌倉時代頃から認められることが明らかとなっている。また讚良郡条里遺跡に隣接す



る薮屋北遺跡では、岡部川沿いの調査地において古代後半～中世に顕著な洪水堆積物の累重が報告されている（辻・辻本 2006）。本遺跡および周辺の遺跡の状況から、現在天井川となっている生駒山地西麓斜面を流下する諸河川は、14 世紀頃以降の山地斜面での植生破壊と、それに基因する土砂流出量の増大と人為的な河道固定によって形成されたと考えられる。

#### ・5-416 井戸

古墳時代の 5-416 井戸埋土では、埋土下部（試料 5）と埋土上部（試料 1）で群集組成が全く異なる。埋土下部では、干潟指標主群が優占する特徴を示した。同様な珪藻化石群集は 19 地点における、おもに浮遊土砂起源の堆積物で構成されている第 9a'-3 層～第 9a'-1 層の群集に類似する。このことから、埋土下部は、第 9a'-3 層～第 9a'-1 層に由来する堆積物を多く含んでいる可能性が示唆される。

一方、埋土上部は化石の保存状態も良く、全て淡水生種で構成されていた。本試料から産出した陸生珪藻 B 群の *Diadsmis confervacea* は、その他の陸生珪藻をほとんど伴わなかったことから、本地点では水生珪藻として水域に生育していた種と判断される。埋土上部が形成された時期の水質については、水素イオン濃度的に、好 + 真アルカリ性種が多産したことからアルカリ性側に偏っていたと考えられる。汚濁耐性については、渡辺・山田・浅井（1988）の汚濁指数値 (DAIpo 値) から、試料 1 の汚濁指数が 39.8 と計算される。この値は弱～中腐水性 ( $\beta$ -mesosaprobic) で、水質的には「ややきれい」という範囲であり（福島 1982）。水質的に少し汚れた水質であったことが推定される。

### 3. 植物化石群集からみた古植生の変遷

本項では、上述の調査地における堆積・土壌および古水文環境に基づいて、花粉化石・大型植物化石・植物珪酸体の産状（図 359・360）を検討し、これらの検討結果を複合的に捉えることにより調査地およびその周辺の古植生変遷について推定する。

#### ・縄文時代中期～晩期

縄文時代中期頃に形成された第 9a'-3 層から第 9a'-1 層の花粉化石群集は、上述の堆積環境を踏まえると、後背の扇状地や山地斜面の広い範囲の植生を反映していることになる。木本花粉が多産し、その中ではアカガシ亜属が優占することが特徴である。このことから、当時の調査地後背の扇状地や山地斜面にはアカガシ亜属を主とする常緑広葉樹林が成立していたことが推定される。

本調査地背後の扇状地扇央部にあたる 03-1 調査地では、縄文時代中期前半の開析谷形成期に植生が大きく変化したことが確認されている（大文セ 2008a）。扇状地扇央部では、縄文時代中期になり開析谷が形成されることにより、水文環境と河川氾濫などの植生に及ぼす植生攪乱の程度・頻度が変化し、離水した開析谷河岸部において、それまで分布が確認されなかったアカガシ亜属などの常緑広葉樹が林分を形成するようになる。第 9a'-1 層の  $^{14}\text{C}$  年代値は、03-1 調査地の開析谷充填堆積物の  $^{14}\text{C}$  年代値に近似することを踏まえると、第 9a'-3 層から第 9a'-1 層の植生は後背扇状地において常緑広葉樹が分布拡大期以降の植生を反映していると判断される。

なお、縄文時代中期における扇状地域での常緑広葉樹の分布拡大と、讃良川遺跡における縄文時代中期の貯蔵穴の構築とが概ね時期を同じくしている点は、当時の人間活動を考える上で興味深い。

縄文時代中期～晩期にかけて形成された第 8b-10 層～第 8b-3 層になると、花粉化石群集において優占していたアカガシ亜属が減少し、モミ属・ツガ属・コウヤマキ属・スギ属・イチイ科 - イヌガヤ科 - ヒノキ科といった針葉樹花粉が増加ないし漸増するようになる。また、イネ科・カヤツリグサ科やヨモギ属などの草本花粉の占める割合も増加傾向を示すようになる。第 8b-10 層～第 8b-2 層形成期の調査地

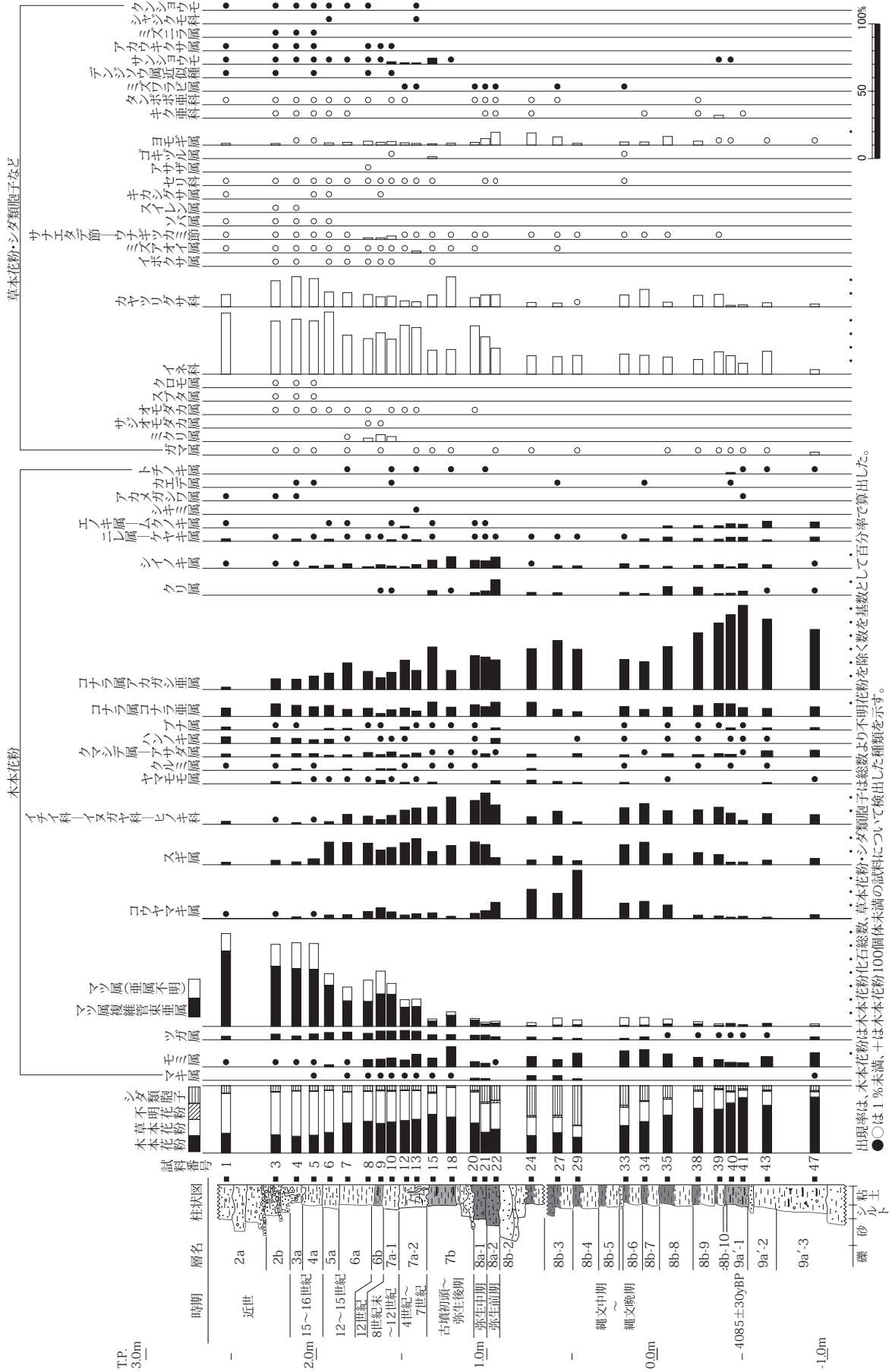


図 359 19 地点の主要花粉化石群集層位分布

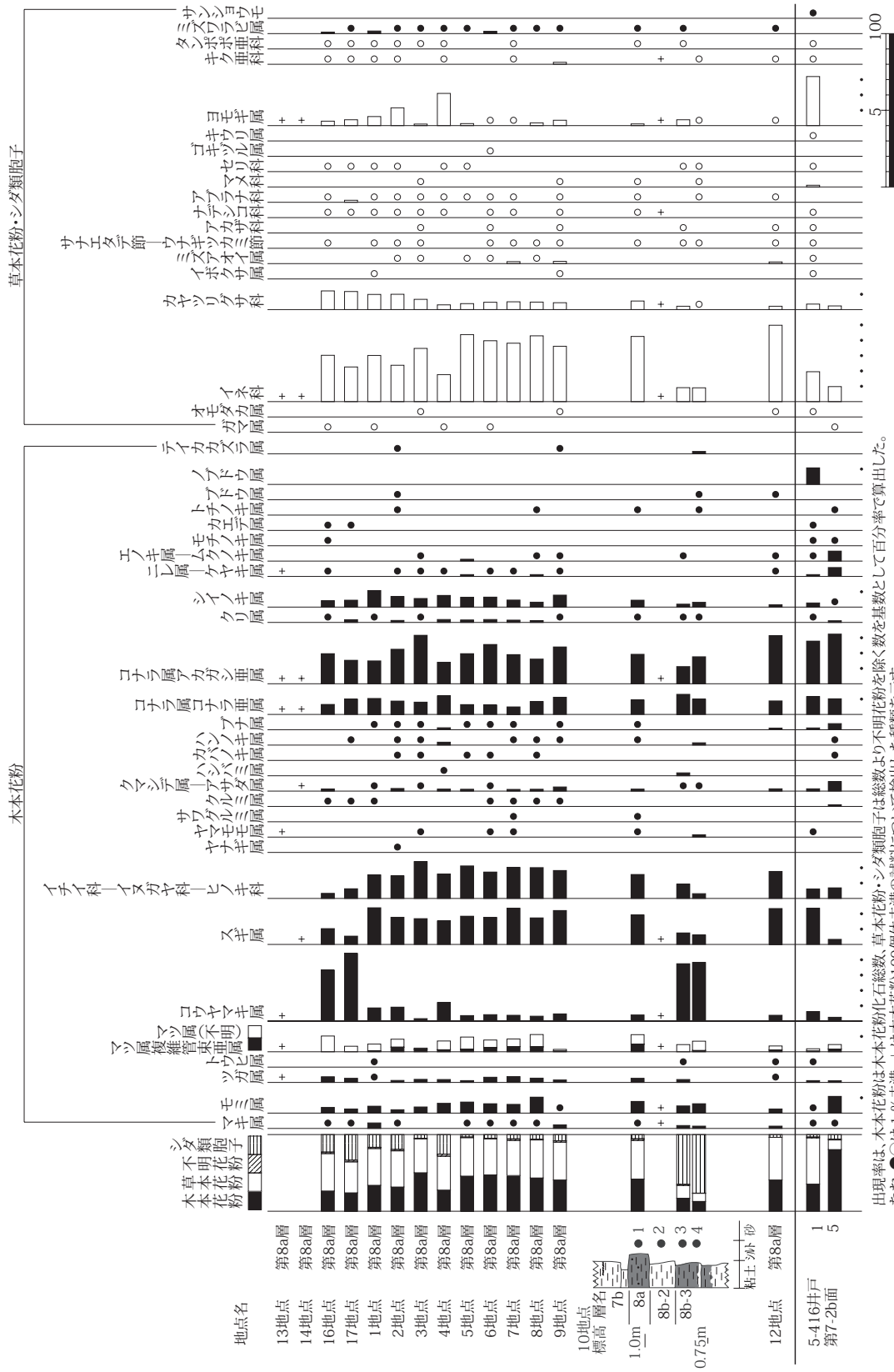


図 360 第 8a 面水田と第 7b 面 5-416 井戸の主要花粉化石群集

は、洪水時に水位上昇に伴い滞水域へと変化し、浮遊土砂が堆積するが、洪水後に水位低下に伴い土壌生成が行われる堆積場となる状況を繰り返していた。このような堆積環境と、本時期の花粉化石群集の層位変化は同調的な変化として認識できる。すなわち、調査地が位置する低地の領域は、継続的な河川攪乱を受ける領域であり、かつ過湿であった。そのため安定した土壌条件で成立可能な林分の形成が抑制され、草本からなる植生が低地を中心に分布を挙げたことが推定される。

また、増加する針葉樹花粉については、暖温帯性種を多く伴うことから、温帯性針葉樹のモミ・ツガ・ヒノキなどに由来すると判断される。温帯性針葉樹は、斜面崩壊地や地滑りなどにより鉍質土壌が露出する攪乱地が生育適地とされる（中静 2004）。讚良郡条里遺跡では、今回の調査地のほか 03-1 区・03-3 区のいずれの調査地でも縄文時代中域以降に温帯性針葉樹花粉の産状が目立つようになるが、その産出率は扇状地扇端付近から低地にかけて高くなる傾向がある。これらのことを総合的に捉えると、温帯性針葉樹の分布拡大が、縄文時代中期以降の扇状地発達や山地斜面崩壊地などの攪乱地を中心に起こっていることが示唆される。河内平野およびその周辺の考古遺跡では、弥生時代以降の木製品において温帯性針葉樹材も多用されている（島地ほか 1987 など）。今回の結果を踏まえると、温帯性針葉樹材は比較的調達しやすい木材であった可能性がある。

以上のことから、縄文時代中期～晩期の調査地後背地の植生は、扇状地発達に伴う植生攪乱の影響を受け変化していったことが推定される。生駒山西麓では、本遺跡以外にも天の川水系に位置する私部南遺跡（辻・辻本 2007a）・上ノ山遺跡（辻・辻 2007b）・茄子作遺跡（大文セ 2008b）、鬼虎川水系に位置する鬼虎川遺跡（パリノ・サーヴェイ 1998）、馬場川水系に位置する段ノ上遺跡（パリノ・サーヴェイ 2001）において古植生の検討が行われている。これら各遺跡の結果をみると、各水系で植生変遷の様相が多少異なり、その差異が地形発達過程の差異と関係していることが認識される。讚良郡条里遺跡が位置する讚良川の扇状地領域では河川攪乱による草本植生の発達が他地域に比較して顕著であることが窺える。

#### ・弥生時代前期から後期

古土壌からなる弥生時代前期の第 8a-2 層、弥生時代中期の第 8a-1 層形成期になると、草本花粉の割合がさらに増加する。縄文時代晩期の第 8b-2 層形成期には、本調査地まで扇状地ロープが発達し、微高地となった領域において土壌発達が進行する。草本花粉の増加は、このような地形条件の変化に回答した植生の変化とも考えられるが、微高地上の土壌生成領域は林分の成立可能領域となったと判断されること（事実、弥生時代中期の第 8a-1 層の水田畦畔にはヤナギの立木が確認されている）、発掘調査結果から、微高地が弥生時代前期に居住域として利用されるなど積極的な人間による土地利用が行われたことが確認されていることから、人為的植生攪乱に起因する変化と考えるのが妥当である。

弥生時代前期の 6-143 土坑・6-152 土坑埋土からは、栽培植物のイネの炭化胚乳が多産した。また、6-143 土坑埋土下部の炭化物集積層中に挟在する灰層からは、栽培植物のイネ属の葉部や穎に由来する珪酸体組織片が多数確認された。これらのことから、弥生時代前期に稲作が行われていたことが示唆される。生駒山北部では、天の川水系に位置する私部南遺跡において弥生時代前期の住居跡からの産出が確認されている（辻・辻本 2005）。また、イネ属以外の有用植物として、弥生時代前期の 3-286 土坑から、容器等としての利用が可能なヒョウタン類の種子が多産した。河内平野およびその周辺の考古遺跡における弥生時代のヒョウタン類の産出は、久宝寺遺跡、下池田遺跡、亀井遺跡、瓜生堂遺跡、池島・福万寺遺跡などで確認されているが、いずれも弥生時代中期以降である（藤下 1984、山口 1993・1999、

古環境研究所 2004、辻本・辻 2002)。

弥生時代の植生に対する人為的植生攪乱は、調査地後背の扇状地や山地斜面などに成立していた林分にも及んでいたようである。弥生時代の木本花粉群集では、縄文時代層準で低率であった落葉広葉樹のクリ属や常緑広葉樹のシイノキ属が増加している。シイノキ属の多産傾向は本調査地後背の 06-1-1 区の弥生時代後期の開析谷埋土でも確認されており（大文セ 2008d）、地域的变化であることが窺える。

増加する種類のうち、クリ属は陽樹であり、暖温帯における二次林構成要素でもある。一方、シイノキ属は極相林である暖温帯性常緑広葉樹林（いわゆる照葉樹林）の主要構成要素であるが、萌芽能力が高く、照葉樹林に植生攪乱が及んだ場合、萌芽能力が高い、アラカシやシイ類などが分布を拡げることが確認されている（山中 1977）。これらのことと、弥生時代前期・中期に急激な地形変化が起こっていないことを踏まえると、弥生時代におけるクリ属やシイノキ属の増加は、人為的植生攪乱に起因する二次林的性格の林分への変化を反映している可能性が高い。

弥生時代の林地利用のあり方については未だ不明な点が多いが、本遺跡南方の鬼虎川沿いに位置する鬼虎川遺跡や西の辻遺跡では、木材の性質を理解した木器未製品の出土や開析谷を利用した貯木跡が確認されており、高度な木器製作技術や用材選択が行われていたことが確認されている（東大阪市文化財協会 1987・1996）。今回の調査地で確認された弥生時代の木本花粉化石群集の層位分布をみると、変化後は弥生時代の層準を通じて急激な変化を示しておらず、過度の人為的植生攪乱が及ぶことはなかったことが示唆される。

以上のことから、弥生時代には森林植生に対する人為的攪乱が及んだことは確実であるが、後述する古墳時代や中世のような植生を変化（破壊）させるような過度の人為的攪乱ではなかったことが推定される。

#### ・弥生時代後期～古墳時代初頭

弥生時代後期～古墳時代初頭の第 7b 層形成期は、相対的水位が上昇し、調査地全域が水没し、湿地や沼沢地へと変化する。第 7b 層の花粉化石群集をみると、木本花粉ではクリ属が減少し、アカガシ亜属が増加する。草本花粉ではイネ科が減少し、カヤツリグサ科が増加する。これらの変化は、調査地の水文環境の変化に伴い、扇状地扇端部などの林分の衰退や、草本植生の変化を反映しているものと判断される。

#### ・古墳時代～古代

4 世紀～7 世紀に形成された第 7a-2 層では、木本花粉化石群集においてマツ属複維管束亜属を含むマツ属が顕著に増加する。これとは逆に温帯性針葉樹の種類やシイノキ属が減少傾向を示す。発掘調査の結果、古墳時代前期から中期には、調査地西部において 1-59 溝・1-60 溝が掘削されるが、その護岸の杭列材として木材が多数利用されている。この杭列の木材利用状況については第 5 章第 7 節で詳述されているが、利用されている樹種はヒノキなどの温帯性針葉樹とスダジイ・ツブラジイなどのシイノキ属が中心であり、花粉化石群集において減少傾向変化と同調的な変化として認識できる。このように古墳時代には、弥生時代に増して、森林植生の対する人為的攪乱の影響が強くなり、植生破壊を伴う林地利用が行われていたことが推定される。その結果、二次林要素をまじえた多様性の高い林分が形成され、また、攪乱の程度が大きかった領域では草地へ変化したことが推定される。古墳時代には、弥生時代に存在した植生景観と大きく異なる林分が形成されたことが推定される。

一方、調査地およびその近辺は、下記するように 7b 層上面で検出された 5 世紀以降の遺構埋土の大

型植物化石群集が草本類を主体とすること、花粉化石でも草本花粉が多産することから、森林と呼べる林分の存在は考えにくく、開けた場所であったことが推定される。

4世紀後半～5世紀初頭の1-59、1-60、1-62溝から産出した大型植物化石をみると、木本類では有用植物のモモの核と、草地などにも生育するツル性植物のノブドウ属・ブドウ科が産出するだけで、それ以外は草本類を主体とする。草本類の構成は、湿地生ないし湿地生種を含む種類であるホタルイ属、サナエタデ近似種、タガラシ、シロネ属なども産出するが、カヤツリグサ科、イネ科、ツユクサ、タデ属、アカザ科、エノキグサ、メナモミ属、オナモミ属など荒地など開けた場所に生育する、いわゆる「雑草」を主体としている。これらの草本類が溝内やその近辺に生育していたことが推定される。また、栽培のため渡来した種類であるアワーヒエも産出することから、モモを含め、当時の有用植物であった可能性が高い。

5世紀末～6世紀初頭の5-416井戸埋土から産出した大型植物化石も草本植物に由来するものが大部分を占める。木本植物で確認されている種類は、ブドウ属・ノブドウなどのツル性植物のほか、クワ科・カジノキ属・サンショウ属といった明るい林地に生育する中・低木類であり、森林の林縁を構成する種でもある。このほか、堅果類としてシイノキ属が、また有用植物であるモモ・スモモが確認されている。草本植物では、ホタルイ属・チドメグサ属などの湿地生植物も産出するが、エノコログサ属、イネ科、カヤツリグサ科、ナデシコ科、アカザ科、ヒユ科、タデ属、スベリヒユ、カタバミ属、エノキグサなど開けた草地に生育するいわゆる「雑草」を主体とする。これらが遺構周辺に生育していたものに由来すると思われる。また、有用植物としては、モモ、アワーヒエ、アサ、マメ類、エゴマ、メロン類が産出している。これらは、いずれも栽培のため渡来した種類であり、本遺跡に隣接する葎屋北遺跡でも確認されている。これらの有用植物のうち、アワーヒエ、マメ類は炭化していることから、火熱を受けている可能性がある。

7世紀前半の5-491井戸埋土から産出する大型化石も草本植物に由来するものが大部分を占め、上記の5-416井戸埋土の組成と概ね類似する。有用植物は、モモ、イネ、コムギ、エゴマ、メロン類・ヒョウタン類が産出しており、当該期に利用されていたことが推定される。このうち、コムギは河内平野では長原遺跡の弥生時代中期の住居跡から産出が最古であり（上中2005）、本遺跡近辺では葎屋北遺跡において古墳時代の溝埋土（5世紀後半以降）から大量に産出している。これらのことから、コムギは本地域において5世紀以降に普遍的に栽培されていたことが推定される。

一方、時期が特定できない4-73土坑・4-54土坑・4-98土坑（方形土坑群）は、上記の遺構と同様に草本類が多産するものの種類構成が大きく異なっている。これらの土坑埋土から産出する草本類は、水生～湿地生植物であるホタルイ属が優占しており、4-98土坑では浮葉植物のヒメビシも産出する。上記の井戸埋土や溝などから産出したエノコログサなどの「雑草」がほとんど産出しない。このような差異は、ホタルイ属やヒメビシなどが第7b層からの再堆積の可能性もあるが、産出量が多いこと、これらの遺構が上記の遺構より低所で検出されていることを踏まえると、水文環境の違いによる局所的な植生の違いを反映している可能性が高い。

#### ・中世

8世紀～12世紀とされる第7a-1層から第6b層の堆積にかけて、木本花粉化石群集に占めるマツ属花粉の割合が急激に増加する。また、分類群構成が多様になり、増加する分類群の多くが二次林の構成要素や人里植物からなることとも同調的である。この変化は、8世紀以前にも増して、森林植生に対す

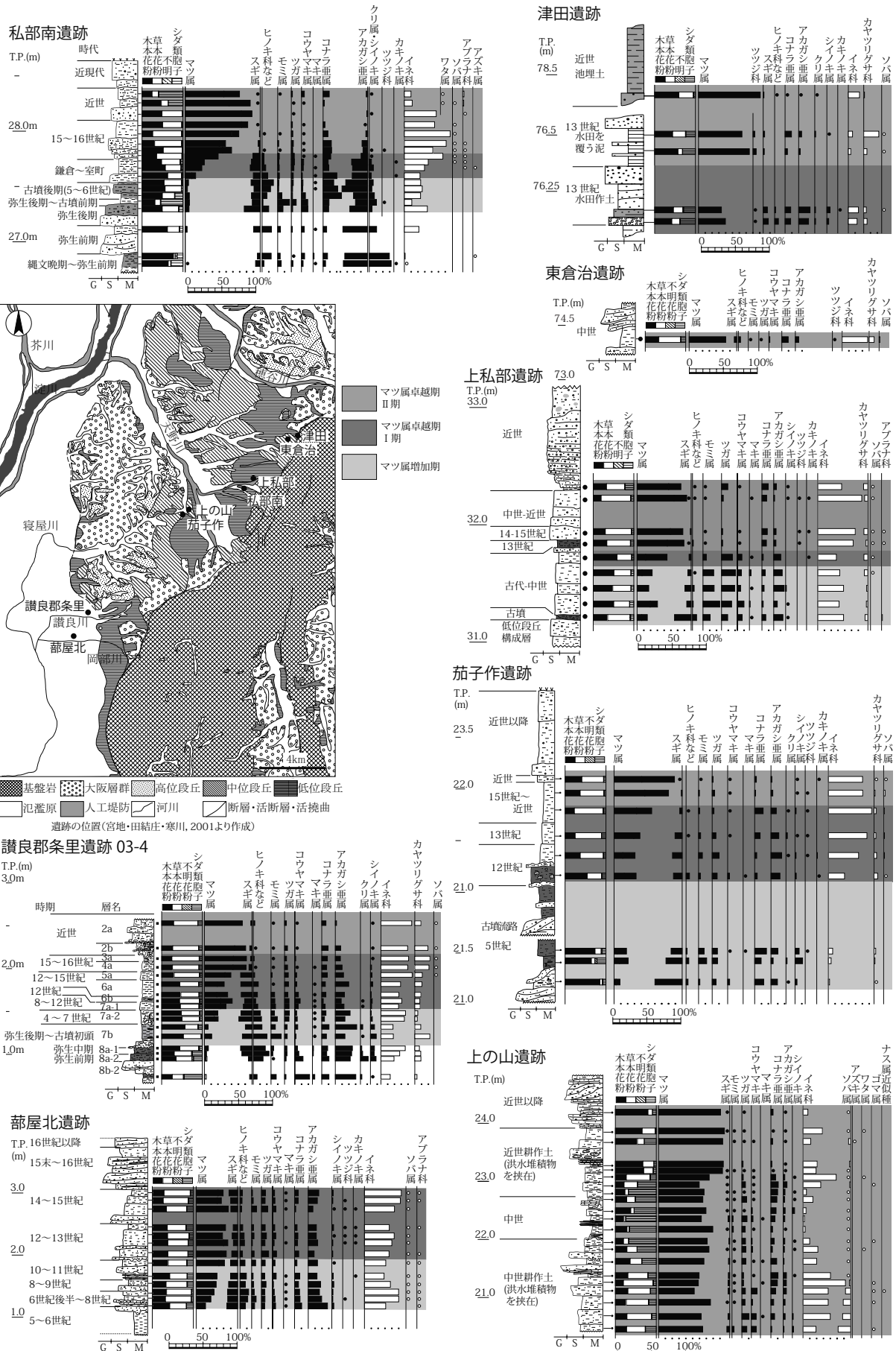


図 361 本遺跡および周辺遺跡の主要花粉化石の消長

る人為的植生攪乱（植生破壊）が進行し、二次林としてのマツ林が分布を拡げたことが示唆される。一方、調査地ないしその近辺は、8世紀の5-847土坑や5-503溝の大型植物化石の産状や草本花粉の産状から、古墳時代・古代のころと同様に基本的に草地であったことが推定される。ただし、第7a-1層上部から第6b層では、草本花粉群集において大型の抽水植物であるミクリ属などの水生植物の産状が目立つようになり、調査地の植生が変化していることが窺える。先述の堆積環境から、第7a-1層形成期には相対的水位の上昇による後背湿地のような堆積環境に変化していることが確認されているが、第7a-1層上部および第6b層形成期にはその傾向が顕著となり、水生植物が繁茂する水湿地が拡がったことが推定される。

12～15世紀に形成された第6a～5a層になると、マツ属花粉の増加は収まり、多少の増減は存在するものの層位的に安定した産状を示すようになる。このことは、12世紀以降、15世紀にかけて森林植生に大きな変化が起こっていないことを示唆する。暖温帯域において退行遷移により形成された二次林は、人為的攪乱が及ばなくなり、放置されることによって遷移が進行し、アカガシなどの常緑広葉樹林が回復してくるのだが、今回の結果は退行・進行遷移のいずれにも該当せず、むしろ二次林が維持されている状況が窺える。また、第6a～5a層では、第7a-1層上部～第6b層で増加した水生植物の種類が減少する。この変化は、同層準において植物珪酸体含量密度が低下し、珪藻化石の産出が悪くなること、層相変化から、調査地内の水文環境が変化し、植物珪酸体などが風化作用の影響を受ける乾湿を繰り返す堆積環境に変化したことと同調的変化として認識できる。

以上のことから、中世前半には後背扇状地から山地斜面において、森林植生に対する人為的攪乱が継続して及ぶようになり、12世紀頃をピークに二次林化が進行する。しかし、12世紀以降、15世紀までの期間は二次林化が止まり、二次林が維持されていたことが示唆される。一方、8世紀以降の調査地および近辺の低地は、12世紀頃に水位が上昇し、水生植物が繁茂する湿地の領域が拡大する時期を挟むものの、基本的にはイネ科植物を主体とする草地領域が維持されている。このような草地の維持も、発掘調査の結果、中世になると耕作地としての土地利用が連綿と続くことが確認されていることを踏まえると、人為的植生攪乱に起因することが推定される。

このような中世における山地から低地にかけての人為的植生攪乱に起因する植生変化は、本遺跡に限って起こった変化でなく、本遺跡周辺の生駒山西麓のほとんどの考古遺跡の調査成果でも確認される（図361）。ただし、その変化の時期や傾度は地点によって異なっていることも認識される。本遺跡の北東側の生駒山北部の天の川水系に位置する、上の山遺跡（辻・辻本2007b）、上私部遺跡（辻ほか2007）、茄子作遺跡（大文セ2008b）、津田遺跡（大文セ2008c）などの考古遺跡の成果から、天の川水系では、この変化が急激であり、12世紀段階で部分的にはげ山に変化していたと推定されている（大文セ2008）。本遺跡が位置する讃良川水系では、天の川水系のように林域が急速に衰退していないことが今回の結果から推定される。このような地域間での植生の違いは、遺跡が立地する領域における森林バイオマス量と人間活動とのバランスの違いに起因している可能性が高く、森林域が狭い天の川地域では、古墳時代以降の連綿とつづく人間活動の影響によって、森林バイオマスの枯渇が早い段階で進行したことを示唆する。

また、12世紀から15世紀にかけてのマツ属からなる二次林の急激な分布拡大とその維持については、当概期に林地の管理のあり方が変化したことを示している可能性が高い。12世紀には本遺跡の南西側の巣本遺跡では、12世紀に河道の固定を示す築堤跡が構築されていることが確認されている（大文セ



2008e)。このような河道の固定により耕作地への肥料成分の供給状況は大きく変化し、耕作地への何らかの施肥が必要になったことが想定される。近世の絵図等の研究から、耕作地における草肥農業が行われていたことが確認されている（水本 2003）。このような草肥農業が本地域において中世段階から行われていたかは不明であるが、マツ二次林の分布拡大から林床におけるススキなどの草地領域の拡大が示唆されること、その林分が長期に渡り維持されていることを踏まえると、12世紀以降の林域での植生変化は農用林として山林の維持管理といった、いわゆる「里山」の利用が行われていた可能性は充分予測される。マツ二次林の成立については、単純な森林破壊に減少を求めるのではなく、当時の社会背景を踏まえた評価が必要であり（千葉 1973）、今後、考古学調査成果を踏まえた複合的な評価が必要である。

#### ・近世

15世紀～16世紀頃の第4a・3a層では、花粉化石群集に占める草本花粉の割合が急増し、木本花粉の中でマツ属が急増・優占するようになり、アカガシ亜属などの常緑広葉樹が減少傾向を示すようになる。これらの変化は、調査地周辺における林分の縮小と草地領域の拡大を示唆する。第3a層を覆う第2b層・第2a層の砂礫層の形成は、このような周辺の植生変化と密接に関係した土砂流出量の増大を反映しているものと考えられる。16～17世紀の第2a層の花粉化石群集では、木本・草本ともに種類構成が単調となり、常緑広葉樹のアカガシ亜属もほとんど産出しなくなることから、当概期の扇状地から山地斜面は、はげ山のような状態に変化していた可能性が高い。

以上のことから、15世紀頃に起こった植生変化、中世の時期とは大きく異なり、破壊型の山林利用であったことが推定される。

### 4. 栽培植物イネ属植物珪酸体の産状について

#### (1) 層位的産状

層位的な植物珪酸体群集変化は、調査地西端部の19地点の分析結果に基づき記述する（図362）。縄文時代中期の第9層では、ネザサ節やヨシ属、樹木を起源とする植物珪酸体が産出する。堆積環境を考慮すれば、ネザサ節や樹木起源の植物珪酸体は、上流域に生育していた植物やその植物珪酸体を含む土壌に由来するものと考えられる。弥生時代前期の第8b-2～9a'層での植物珪酸体含量は、10万個/g前後に増加し、その多くが湿潤な場所を好むヨシ属である。このことから、第8b-2～9a'層堆積時には、周囲で湿地などの堆積環境が広がっていたものと判断される。

弥生時代中期の水田跡の第8a-1層やその下位の弥生時代前期の第8a-2層では、栽培種のイネ属珪酸体が認められる。第8a-1層では、イネ属珪酸体の含量が短細胞珪酸体で約700～1,300個/g、機動細胞珪酸体で約3,200～5,300個/g、第8a-2層では短細胞珪酸体で約90個/g、機動細胞珪酸体で約500個/gである。これらの分析結果から、水田面が検出された第8a-1層では、イネ属珪酸体が急増することが確認され、本層において稲作が実施されたことが確認される。第8a-1層では、イネ属の他、乾燥した場所を好むネザサ節を含むタケ亜科、ススキ属を含むウシクサ族、湿潤な場所を好むヨシ属、コブナグサ属、その他イチゴツナギ亜科といったイネ科草本が主に生育していたことが花粉および植物珪酸体分析結果からうかがえる。当該期には、水田の周囲にネザサ節やウシクサ族が分布する高燥地も多く広がっていたことが想定される。

弥生時代前期の第8a-2層についてはイネ属珪酸体が多産しておらず、水田や稲が多量に持ち込まれるような場所から離れていた可能性がある。ただし、大阪湾岸や瀬戸内沿岸域の氾濫原上に立地する考

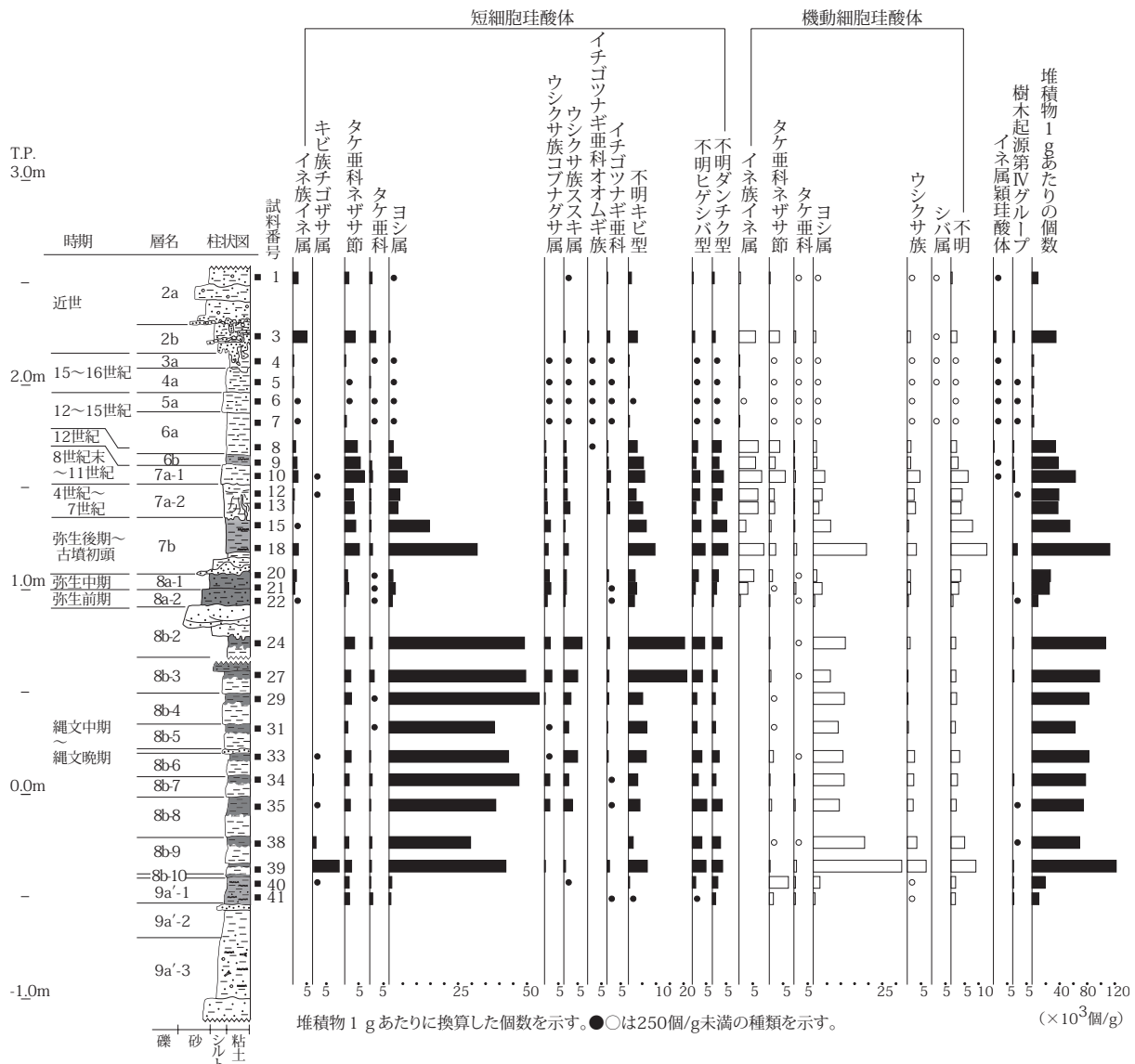


図 362 19 地点の植物珪酸体含量密度の層的变化

古遺跡の弥生時代前期の水田跡では、イネ属機動細胞珪酸体含量が数百個/g程度にとどまる分析事例が多く、水田耕作土の指標となる機動細胞珪酸体が5,000個/g(古環境研究所1999)を超える分析事例は弥生時代前期～中期以降の水田跡で多いことが指摘されている(辻本ほか2007)。また、水田面におけるイネ属珪酸体含量は、耕作地の微地形およびそれを構成する堆積物の粒度組成や一筆単位の水田面積の違いと関連することが指摘されている(外山2002)。これらのことを踏まえると、今回の第8-2a層における植物珪酸体含量は少ないものの、既往の弥生時代前期の水田跡の分析事例と比較して大きく異なるものではないことが認識される。先述したように今回の調査地では弥生時代前期の遺構埋土から栽培種のイネ由来の炭化胚乳や葉部や穎の植物珪酸体が産出していることを合わせ考えると、弥生時代前期の調査地近辺において稲作が行われていた可能性は充分考えられる。

なお、水田跡の検出面およびその基盤層に相当する第8a-1層と第8a-2層は、層相から古土壌と判断される。これらの堆積層では、植物珪酸体含量が下位および上位の層準に比べ急減する。植物珪酸体は、土壌が風化する早い段階で粘土化する可能性が指摘されている(近藤1988)ほか、乾湿を繰り返すような環境下でも、保存が悪くなることが指摘されている(江口1994・1996)。これらのことから、第

8a-1 層と第 8a-2 層における植物珪酸体含量の急減は、土壤発達に伴う化石の風化によるものと判断される。

弥生時代後期～古墳時代初頭とされる第 7b 層では、ヨシ属の含量が増加しており、調査地およびその周辺においてヨシ属が再び生育するような湿地が広がったことが示唆される。このような産状は、層相および珪藻分析結果と調和的である。植物珪酸体含量の急増も認められ、本時期には相対的水位上昇に伴い、微化石の良好な保存状態が維持されたことがうかがえる。弥生時代後期～古墳時代初頭の第 7b 層では、弥生時代中期の水田耕作土である第 8a-1 層を上回る約 9,000 個 /g 前後のイネ属機動細胞珪酸体含量が得られている。本層準の層相および発掘調査結果をふまえると、検出されたイネ属珪酸体は、周囲からの流れ込みによる異地性が高いものと判断される。第 7b 層上部から 4 世紀～7 世紀の第 7a-2 層におけるイネ属珪酸体は、第 7b 層上部で機動細胞珪酸体含量が約 2,500 個 /g と下部の層準に比べ一端減少した後、第 7a-2 層、第 7a-1 層で 6,900～8,200 個 /g の含量へと再び増加する。層相および発掘結果からは、第 7b 層が後背湿地、第 7a-2 層・第 7a-1 層が耕作地であることをふまえると、上記の分析結果は妥当である。

12～15 世紀の条里型水田の第 6a 層上部と第 5a 層および 15～16 世紀の条里型水田の第 4a 層と第 3a 層では、植物珪酸体含量が下位に比べ急減する。本層では珪藻化石の保存状態も著しく不良であり、上述した植物珪酸体の風化の知見をふまえると、当該期に相対的な水位低下と、それに伴い土壤環境が乾燥化したことが示唆される。これらの堆積層では、ネザサ節の産状も目立つようになり、調査地やその周囲で乾燥した場所が拡大したことが示唆される。イネ属機動細胞珪酸体の含量についても、植物珪酸体含量の急減に対応して、300～500 個 /g 前後へと変化する。なお第 6 層では、オオムギ族の短細胞珪酸体も認められる。栽培種に由来するものであれば、周囲でのムギ栽培の可能性も考えられるが、植物珪酸体の形状からは、野生種と栽培種を区別することは難しい。

近世の洪水砂の第 2b 層では、イネ属の短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体の含量がともに 5,000 個 /g を超える。またオオムギ族も約 400 個 /g となり、下位よりも増加する。本層に含まれるイネ属珪酸体の多くは、洪水時に周囲の水田域から運搬されてきた異地性の化石である。耕作土である近世の第 2 層では、洪水砂層の第 2b 層よりもイネ属珪酸体も減少し、植物珪酸体含量全体も急減する。このような産状は、好氣的な土壤環境が維持される耕作地での風化によるものと考えられる。

## (2) 第 8a-1 層上部で検出された弥生時代中期水田

上述の層位的な産状では、弥生時代中期の水田面が検出された第 8a-1 層において、栽培種のイネ属が直下の堆積層に比べ急増する特徴が認めることができた。第 8a-1 層の空間的な植物珪酸体群集の特徴については、水田面検出面の地形勾配に対応して、標高の低い地点から高い地点にかけて植物珪酸体含量密度が減少していく傾向が確認される (図 363・364)。調査地内東端部の最高所付近に位置する T.P.1.8～2.3m の 13～17 地点、T.P.1.5～1.7m の 1～4 地点では、植物珪酸体含量が 6,000～13,000 個 /g 前後、イネ属機動細胞珪酸体が 400～1,500 個 /g 前後を示す。これに対し、4 地点より西側の T.P.1.2～1.4 m の 5～10 地点および T.P.0.9～1.1m の 12 地点では、植物珪酸体含量が 1,200～47,000 個 /g 前後、イネ属機動細胞珪酸体が 3,000～5,700 個 /g 前後、最も標高が低い 12 地点で植物珪酸体含量が 44,000 個 /g 前後、イネ属機動細胞珪酸体が 9,000 個 /g 前後を示す。このように植物珪酸体含量は概ね地形勾配に応じて変化しているが、各種類の含量密度と、総含量密度とは必ずしも相関していない。イネ属やウシクサ族は、植物珪酸体総含量が減少する 5～8 地点でも多産する。これ

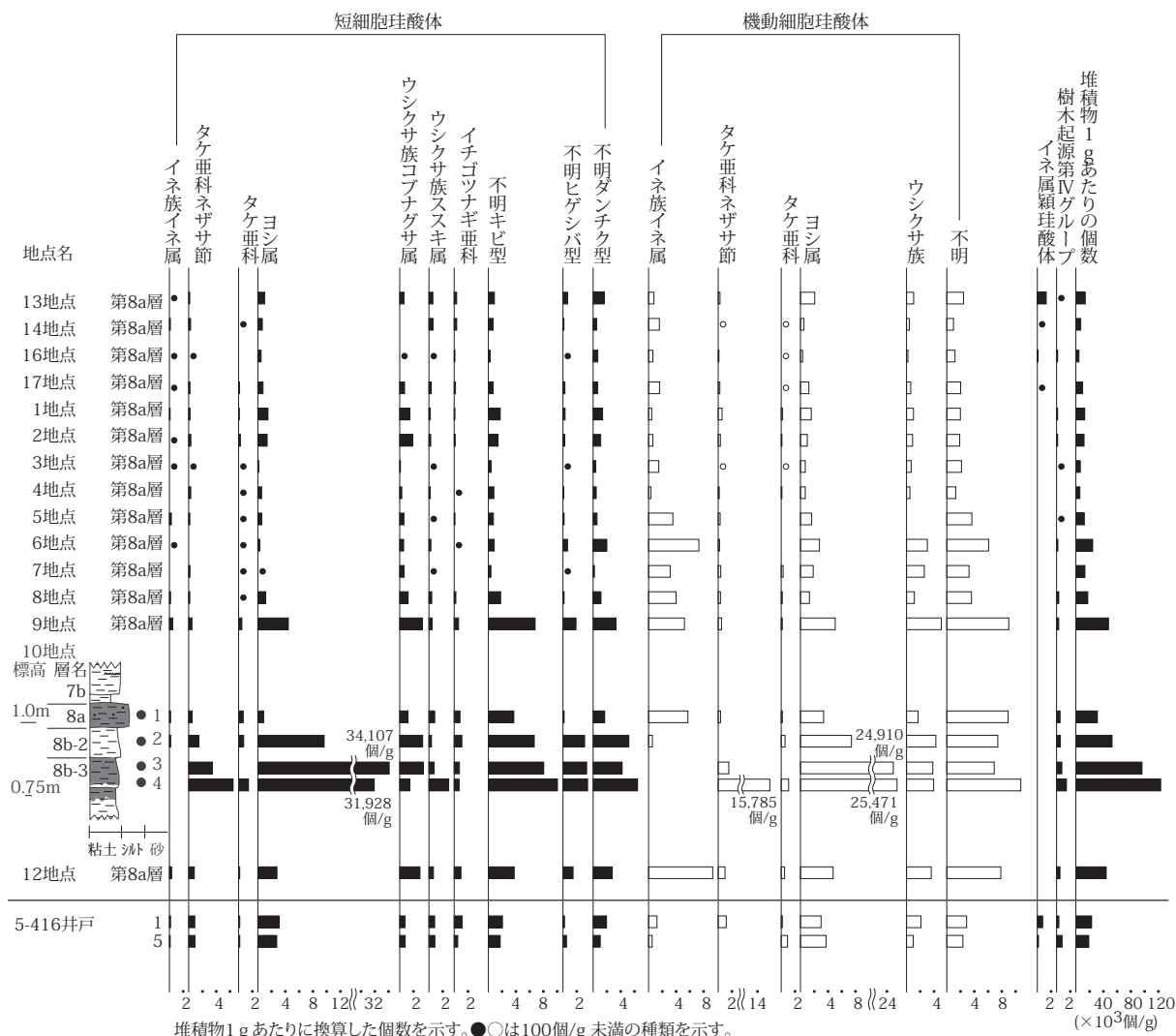


図 363 第 8a 面水田と第 7b 面 5-416 井戸の植物珪酸体含量密度

に対して、大型抽水植物であるヨシ属はほぼ含量密度に相関する産状を示す。稲の籾殻に形成される穎珪酸体については、13～17地点のみで産出する。このような分析結果は、人為的な攪乱が強くおよび耕作土の性質に由来するものと思われる。これまでの河内平野の弥生時代の水田面の分析事例でも、イネ属を始めとした植物珪酸体の空間的分布にかなりのばらつきが存在することが確認される（辻本・辻 2002）。

なお、03-4 調査地よりも標高が低く湿潤な土壤環境である 03-5 調査地では、植物珪酸体含量が 30,000 個/g 前後、イネ属機動細胞珪酸体が 2,300～3,200 個/g 前後を示す。さらに、03-4 調査地西端から 03-5 調査地東端部の非耕作域の凹地状湿地では、明瞭な水田畦畔が検出されている場所よりも遙かに多い、7,300～8,400 個/g 前後のイネ属機動細胞珪酸体が検出されている。凹地状湿地の分析結果は、周囲の水田面から相対的に低く、かつ良好な保存環境が維持される局地的な低所へ流れ込んだイネ属が集積した結果であると解釈される。

上記の分析結果は、同地点で実施した珪藻化石群集の産状と空間的共変動をしており、水田面の堆積・土壤環境および先述の微化石の保存状態に関する知見に基づくと、微地形に即した土壤発達の差異に規定されたものと判断される。

ところで考古遺跡では、イネ属機動細胞珪酸体の含量の量比を目安に、分析地点における水田耕作

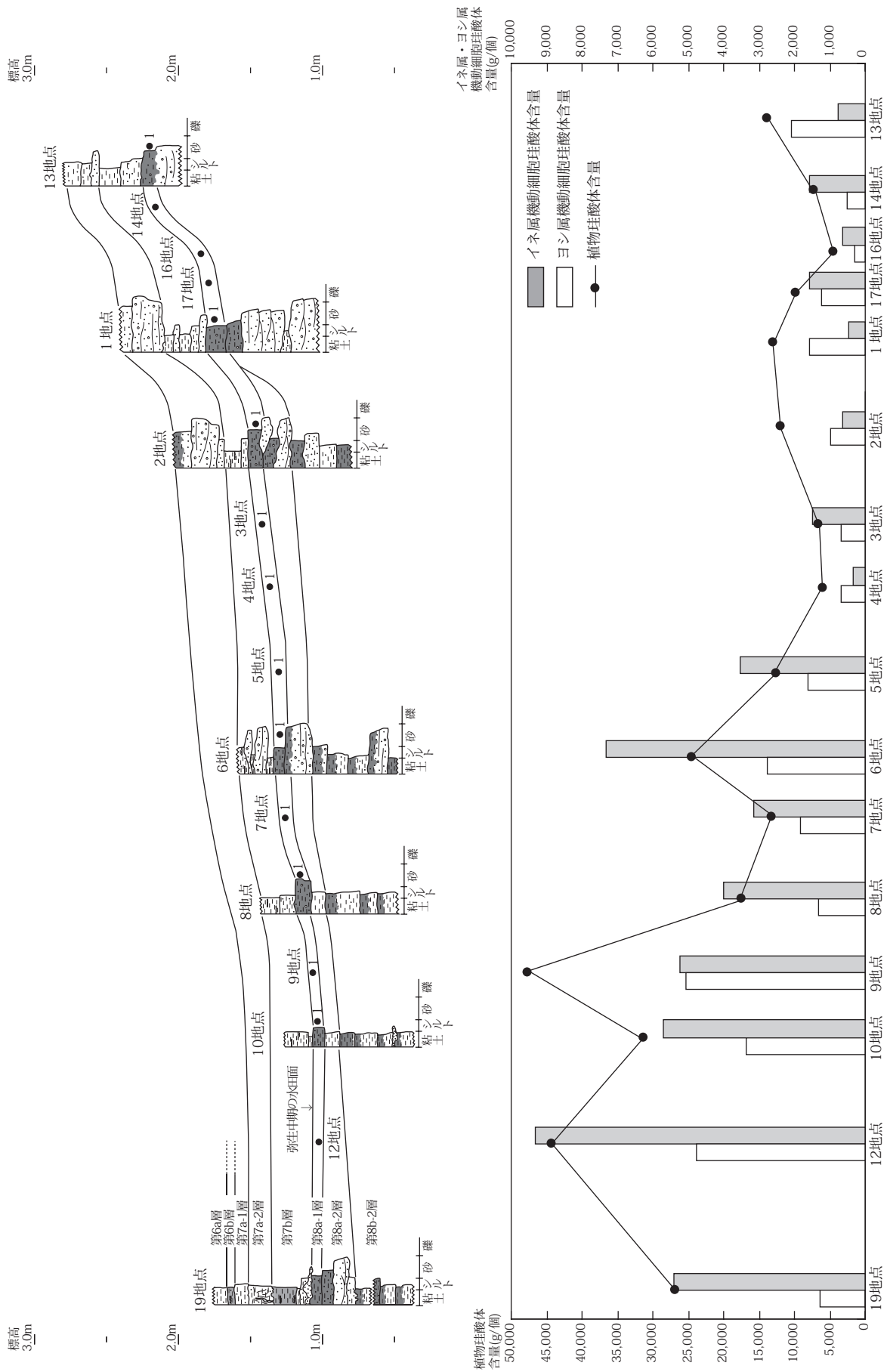


図 364 第 8a-1 層植物珪酸体の産状

の実施の検証や、当時の生産量などを検討する試みがなされる場合がある。このような観点に基づけば、03-4 調査地やその周囲で得られたイネ属珪酸体含量分布からは、発掘調査で非耕作地と判断された 03-4 調査地西端～03-5 調査地東端部での稲作や、より水がかりの悪い 03-4 調査地東半部でイネの生産性が低かった可能性も示唆される。しかしながら、発掘調査結果と現地での層相観察に基づけば、弥生時代中期の水田面では、地表面の土壌・水文環境が一律でなく、微地形に応じた環境勾配が存在し、微化石の産状がこれらに明白に対応を示すことが確認される。外山（2002）では、池島・福万寺遺跡において弥生時代中期の水田面の空間的な植物珪酸体の含量についての検討を試み、耕作地の微地形およびそれを構成する堆積物の粒度組成や一筆単位の水田面積の違いに関連があることを指摘している。今回の分析結果および外山（2002）の指摘は、本調査地において植物珪酸体の産状が人間活動よりも、遺構検出面の堆積・土壌の形成システムとその発達史および続成作用に関連するタフォノミーの影響を強く受けていると判断される。

上記のようなタフォノミーをふまえた植物珪酸体分析および珪藻分析結果をふまえると、今回の分析結果から読みとれることは、弥生時代中期に 03-4～03-5 調査地において、沖積扇状地扇端部から沖積低地に至る地形傾斜上に形成された乾燥～湿性の土壌環境領域にまたがり広範囲に水田が構築されていたことではないかと認識される。

### （3）5-416 井戸

5-416 井戸埋土の植物珪酸体群集は、弥生時代中期の群集に類似するものであった（図 363）。井戸周囲には、同様のイネ科植物の分布が想定される。また栽培種のイネ属も確認されることから、稲の植物体や水田耕土などが再堆積している可能性も考えられる。

## 5. まとめ

扇状地扇端部から沖積低地にかけて位置する 03-4 調査地では、縄文時代中期以降の古環境変遷に関する多くの情報を得ることができた。

縄文時代中期の 03-4 調査地は、汽水の影響を強く受ける河川氾濫原であった。後背の扇状地では開析流路の形成により離水する領域が拡大し、カシ類などの常緑広葉樹が分布を拡げた。

縄文時代後期～晩期には、調査地東部が砂礫からなる洪水堆積物が時折流入する堆積場、西部が離水と水没を繰り返す湿地へと変化した。その後、縄文時代晩期から弥生時代前期には扇状地ローブの発達による地形変化が生じた。ローブからなる微高地上では土壌発達が進行し、ヨモギ属などが分布する草地へと変化した。弥生時代中期に調査地西部の微高地 1 東側の領域に構築されている水田は、地形勾配に応じて水文環境が異なり、標高の高い領域は低い領域に比べ、水がかりが相対的に悪かった。また、この時期には後背の扇状地の常緑広葉樹林に変化が起こり、シイ類が分布を拡げた。

弥生時代後期～古墳時代初頭には相対的水位が上昇し、調査地全域が水没する湿地や沼沢地へと変化した。その後は、古墳時代を通じて好気的な土壌環境が継続していた。古墳時代中期以降には周辺遺跡なども含めて集落の成立が活発化し、多量の木材資源が消費されることによって、後背の扇状地などの林分が衰退していった。

古代～中世にかけては、基本的に好気的な土壌環境が維持されており、耕作地として土地利用されている。ただし、12 世紀頃には相対的水位上昇に伴い調査地が水没し湿地や沼沢地へと変化する。本時期には後背の扇状地から山地斜面の植生も大きく変化し、マツ属などが目立つ二次林へ変化する。この 12 世紀頃に起こった地形および植生の変化の順列については不明であるが、一連の変化であるとすれ

ば、水位上昇に伴う低地における人間活動領域の減少が森林開発を促進する要因となったとも考えられる。また、12世紀に形成された二次林は、16～17世紀頃まで退行・進行遷移することなく、維持されており、人間による管理が行われていた可能性がある。このような12世紀以降の森林資源の利用については、第二京阪道路建設に伴う各地点での発掘調査でも確認されており、その変化の傾度が地点によって多少異なっていることも明らかとなってきた。

16～17世紀以降になると、調査地への土砂供給量が増加し、粗粒洪水堆積物が厚く累重するようになる。この土砂供給量の増大は、中世後半に維持されていた後背地の森林植生が著しく破壊されたことに起因する。近世には山林利用のあり方が大きく変化したことが窺える。

#### 引用・参考文献

千木良雅弘 1995『風化と崩壊』近未来社

江口誠一 1994「沿岸域における植物珪酸体の分布 千葉県小櫃川河口域を例にして」『植生誌研究』2 p19-27

江口誠一 1996「沿岸域における植物珪酸体の風化と堆積物のpH値」『ペドロジスト』40 p81-84

藤下典之 1984「出土遺体よりみたくウリ科植物の種類と変遷とその利用法」『古文化財の自然科学的研究』古文化財編集委員会編 p638-654 同朋舎

福島博 1982「多摩川の植物」『東京生物史』p92-104 紀伊国屋書店

井上智博 2003「目的と概要」『尺度遺跡Ⅱ - 国道165号(南阪奈道路)の建設に伴う発掘調査報告書 -』p153  
(財)大阪府文化財センター

井上智博 2003「讚良郡条里遺跡 地形のなりたち」『北河内発掘! 緑立つ道に歴史わきたつ 第二京阪道路内遺跡の発掘調査記録』p3-4 (財)大阪府文化財センター

犬伏和之・安西徹郎 2001「水田土壌」『土壌学概論』p132-149 朝倉書店

近藤鍊三・佐瀬隆 1986「植物珪酸体分析, その特性と応用」『第四紀研究』25 p31-64

近藤鍊三 1988「十二遺跡土壌の植物珪酸体分析」

『鑄師屋遺跡群 十二遺跡—長野県北佐久郡御代田町十二遺跡発掘調査報告書—』p377-383 御代田町教育委員会

古環境研究所 1999「プラント・オパール分析から見た静岡バイパス関連諸遺跡・静岡・清水平野の埋没古環境情報」

『考古学的調査と自然科学分析資料・建設省地質調査資料から見た古環境の様相—一般国道1号線バイパス埋蔵文化財発掘調査1984～1993—』p83-86 (財)静岡県埋蔵文化財調査研究所

小杉正人 1987「北江古田遺跡の珪藻化石群集と古環境」『北江古田遺跡発掘調査報告書(2)』p419-433

中野区北江古田遺跡調査会

小杉正人 1988「珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用」『第四紀研究』27 p1-20

松井建 2001「水田土壌の考古学への応用 - ケース・スタディーと提言 -」『土壌学と考古学』p163-186 博友社

松田順一郎・バリノ・サーヴェイ 1996『北島遺跡の耕作地と古環境

—寝屋川南部流域植付ポンプ場土木工事に伴う北島遺跡第1次発掘調査報告書— (財)東大阪市文化財協会

松谷暁子 1980「十勝若月遺跡出土炭化物の識別について」『浦幌町郷土博物館報告』第16号 p203-211

松谷暁子 2000「植物遺残の識別と保存について」『Ouroboros』Volume5 Number1 p8-10 東京大学総合研究博物館ニュース

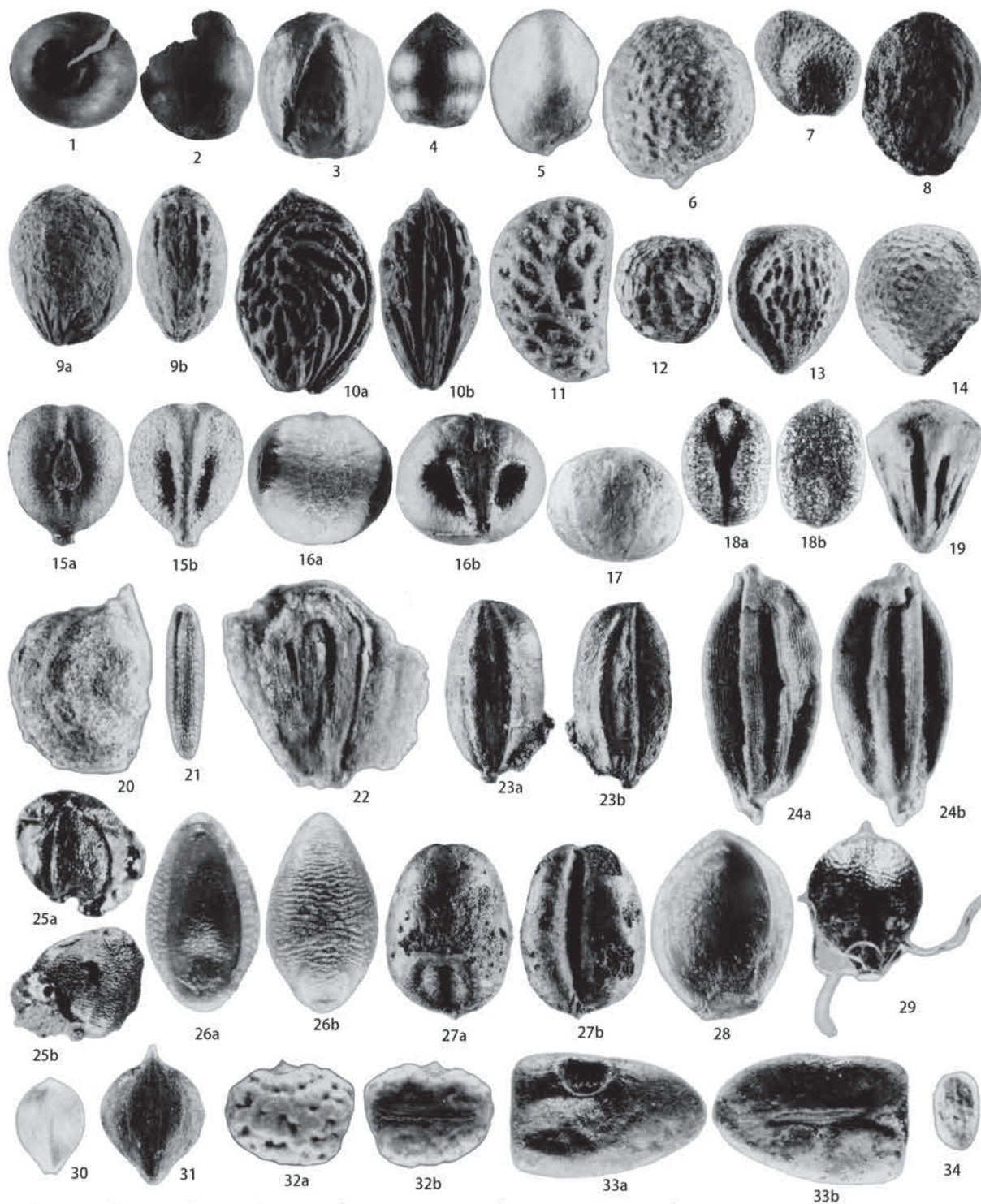
南木睦彦 1991「栽培植物」『古墳時代の研究4 生産と流通I』p165-174 雄山閣

日本ペドロロジー学会編 1997『土壌調査ハンドブック 改訂版』博友社

バリノ・サーヴェイ 1998「鬼虎川遺跡の古環境復元」『鬼虎川遺跡第35-2・3次発掘調査報告—大阪府道大阪東大阪線建設に係わる西石切工区下部工事に伴う鬼虎川遺跡第35-2・3次発掘調査報告報告書』p56-84(財)東大阪市文化財協会

- パリーノ・サーヴェイ 2001 「段上遺跡の自然科学分析」『主要地方道大阪東大阪線道路新設工事に伴う段上遺跡第3・4時発掘調査報告書』(財)東大阪市文化財協会(本書付録 CD-ROM 所収)
- 坂口豊 1974 『泥炭地の地学—環境の変化を探る—』東京大学出版会
- 千葉徳爾 1973 『はげ山の文化』学生社
- 島地謙・林昭三・植田弥生 1987 「第4章 鬼虎川遺跡出土木製品の樹種(第7次)」  
『鬼虎川遺跡の木質遺物—第7次発掘調査報告書 第4冊—』p39-67 (財)東大阪市文化財協会
- 外山秀一 2002 「池島・福万寺遺跡の立地と環境」『池島・福万寺遺跡2(福万寺I期地区)一級河川恩知川治水緑地建設に伴う発掘調査報告書-分析・考察編』p411-429 (財)大阪府文化財センター
- 辻康男・辻本裕也 2006 「葎屋北遺跡における古環境の復元」『葎屋北遺跡発掘調査概要・IV-自然科学編-』p25-37  
大阪府教育委員会
- 辻康男・辻本裕也 2007a 「私部南遺跡の古環境変遷」『私部南遺跡I 一般国道1号バイパス(大阪北道路)・第二京阪道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』第154集 p158-180 (財)大阪府文化財センター
- 辻康男・辻本裕也 2007b 「上の山遺跡の古環境変遷」『上の山遺跡II 一般国道1号バイパス(大阪北道路)・第二京阪道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』第155集 p320-341 (財)大阪府文化財センター
- 辻康男・辻本裕也・大嶋秀明・高橋敦・斉藤紀行・伊藤良永・馬場健司 2007 「上私部遺跡の古環境開析」  
『上私部遺跡II 一般国道1号バイパス(大阪北道路)・第二京阪道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』第165集 p174-204 (財)大阪府文化財センター
- 辻本裕也・辻康男 2002 「池島・福万寺遺跡の古環境復元」『池島・福万寺遺跡2(福万寺I期地区)一級河川恩知川治水緑地建設に伴う発掘調査報告書-分析・考察編』p361-410 (財)大阪府文化財センター
- 辻本裕也・辻康男・伊藤良永・堀内誠示・田中義文・高橋敦・松元美由紀・馬場健司 2007 「池島・福万寺遺跡の古環境変遷2」  
『池島・福万寺遺跡3-恩知川治水緑地建設に伴う発掘調査報告書-(池島I期地区)本文・考察編』p397-473  
(財)大阪府文化財センター
- 上中央子 2005 「長原遺跡 NG02-8・03-6 次調査における炭化種実同定」『大阪市平野区長原遺跡発掘調査報告書XII  
市営永吉長原東住宅6・7号館建設に伴う発掘調査報告書』p258-259 (財)大阪市文化財協会
- 渡辺仁治・山田恵子・浅井一視 1988 「珪藻群集による有機汚濁指数(DAI po)の止水域への適用」『水質汚濁研究』11  
p765-773
- 山口誠治 1993 「自然遺物」『河内平野遺跡群の動態VI』p253-312 大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター
- 山口誠治 1999 「植物遺体」『河内平野遺跡群の動態VII』p167-177 大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター
- (財)東大阪市文化財協会 1987 『鬼虎川遺跡の木質遺物—第7次発掘調査報告書 第4冊—』84p
- (財)東大阪市文化財協会 1996 『西ノ辻遺跡大32次発掘調査報告』
- (財)大阪府文化財センター 2008a 「自然科学分析」『讃良郡条里遺跡IV 一般国道1号バイパス(大阪北道路)・  
第二京阪道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』第173集 p205-267
- (財)大阪府文化財センター 2008b 「花粉分析(1)」『茄子作遺跡 一般国道1号バイパス(大阪北道路)・  
第二京阪道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』第174集 p230-236
- (財)大阪府文化財センター 2008 「44 焼土坑・1区開析谷埋土の自然科学分析概要」『津田遺跡一般国道1号バイパス(大阪北道路)・  
第二京阪道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』第175集 p91-98
- (財)大阪府文化財センター 2008d 『寝屋東遺跡、太秦遺跡、太秦古墳群、大尾遺跡、讃良群条里遺跡、砂遺跡 一般国道1号  
バイパス(大阪北道路)・第二京阪道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』第176集 p83-123





1cm      5mm      5mm      1mm      2mm      3mm      3mm  
 (1,2,10)    (3,18,19)    (4,8,9)    (5~7,11)    (12~17)    (20~22,25,26,28~31,33,34)    (23,24,27,32)

1.コナラ亜属 果実(3-284土坑埋土) 2.コナラ亜属 果実(3-284土坑埋土) 3.イチイガシ子葉(6-152土坑最下部炭化物層) 4.ツブラジイ近似種 果実(5-491井戸6層下部) 5.クワ属 種子(5-847土坑埋土) 6.カジノキ属 種子(5-491井戸7層) 7.ヒサカキ属 種子(5-416井戸9・10層) 8.スモモ 果実(5-416井戸13・14層) 9.スモモ 核(5-416井戸13・14層) 10.モモ 核(1・4-60溝埋土) 11.キイチゴ属 核(5-491井戸6層下部) 12.カラスザンショウ 核(5-847土坑埋土) 13.イヌザンショウ属 核(5-491井戸6層下部) 14.サンショウ属 核(5-491井戸6層下部) 15.ブドウ属 種子(1-232土坑最下部) 16.ノブドウ 種子(1-232土坑最下部) 17.クマノミズキ 核(1-232土坑最下部) 18.ガマズミ属 核(5-491井戸6層下部) 19.ミクリ属 果実(5-503溝最下部埋土) 20.ヒルムシロ属 果実(4-73土坑埋土) 21.イバラモ属 種子(4-98土坑埋土) 22.オモダカ属 果実(4-73土坑) 23.イネ 胚乳・穎(6-152土坑最下部炭化物層) 24.イネ 穎(5-491井戸6層下部) 25.アワーヒエ 果実(5-416井戸7層) 26.エノコログサ属 果実(5-491井戸4層下部) 27.コムギ 胚乳(4381) 28.イネ科 果実(5-503溝埋土) 29.ホタルイ属 果実(4-73土坑埋土) 30.カヤツリグサ科 果実(5-416井戸7層) 31.カヤツリグサ科 果実(5-416井戸7層) 32.ツユクサ 種子(5-491井戸6層下部) 33.イボクサ 種子(5-491井戸4層下部) 34.ミスオアイ属 種子(4-98土坑埋土)



35.イラクサ科 果実(2741) 36.カナムグラ 種子(5-491井戸6層下部) 37.アサ 種子(5-491井戸6層下部) 38.ギシギシ属 果実(5-491井戸6層下部) 39.ギシギシ属 果実(5-491井戸6層下部) 40.イシミカワ近似種 果実(5-491井戸4層下部) 41.ミソソバ近似種 果実(5-491井戸6層下部) 42.サナエタデ 近似種 果実(5-491井戸6層下部) 43.タデ属 果実(4-59溝埋土) 44.アカザ科 種子(5-491井戸6層下部) 45.ヒユ科 種子(5-491井戸6層下部) 46.ザクロソウ科 種子(5-847土坑埋土) 47.スベリヒユ科 種子(5-416井戸7層) 48.ナデシコ科 種子(5-491井戸6層下部) 49.タガラシ果実(5-491井戸6層下部) 50.キンボウゲ属 果実(5-491井戸4層下部) 51.キケマン属 種子(5-491井戸6層下部) 52.キジムシロ属-ヘビイチゴ属-オランダイチゴ属 核(3-286土坑埋土) 53.マメ科 種子(5-416井戸9・10層) 54.マメ科 種子(5-416井戸7層) 55.マメ科 種子(5-503溝埋土) 56.マメ科? 果実(5-503溝埋土) 57.マメ科? 果実(5-503溝埋土) 58.カタバミ属 種子(5-491井戸4層下部) 59.エノキグサ 種子(5-491井戸4層下部) 60.オトギリソウ属 種子(5-491井戸6層下部) 61.スミレ属 種子(5-503溝埋土) 62.ヒメビシ 果実(1170) 63.セリ科 果実(5-491井戸4層下部) 64.チドメグサ属 果実(5-416井戸7層) 65.ヤブジラミ 果実(5-491井戸底部土器群) 66.サクラソウ科 種子(5-491井戸6層下部) 67.ガガイモ科 種子(5-416井戸13・14層) 68.イヌコウジュ属 果実(5-491井戸4層下部) 69.エゴマ 果実(5-416井戸9・10層) 70.シロネ属 果実(4-59溝埋土) 71.メハジキ属 果実(5-491井戸底部土器群) 72.キランソウ属 果実(5-416井戸4~6層) 73.ナス科 種子(5-416井戸9・10層) 74.アカネ科 核(5-491井戸7層) 75.オミナエシ属 果実(3-286土坑埋土) 76.ススメリ 種子(5-491井戸6層下部) 77.ヒョウタン類 種子(3-286土坑埋土) 78.メロン類 種子(5-491井戸6層下部) 79.タカサブロウ属 果実(5-491井戸4層下部) 80.メナモミ属 果実(5-491井戸4層下部) 81.キク科 果実(5-491井戸6層下部)

## 第2節 第2a層上面で検出された小穴遺構の形成過程の検討

### はじめに

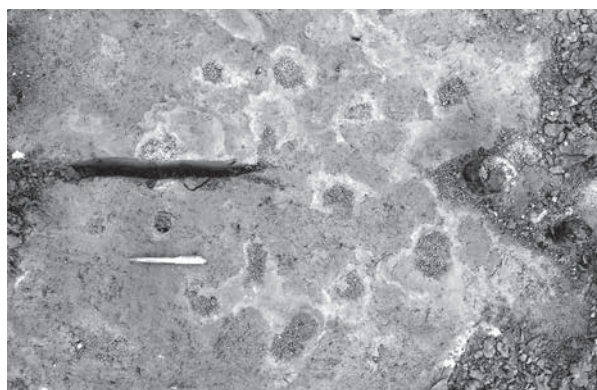
第2a層で検出された水田跡上面では、砂で充填された直径10cm程度、深さ8cmの円状の平面形をなす構造（小穴遺構）が多数検出された（図42）。この小穴遺構については、検出面が耕作土上面に相当することと既往の発掘調査知見から、稲株痕の可能性が示唆された。本分析では、小穴遺構について、堆積学的視点からの検討を行うことを目的として、現地で採取した不攪乱堆積物試料の軟X線写真による層相観察を実施する。

### 1. 試料

試料採取地点の位置および断面図と柱状図を図365・366に示す。分析試料は、小穴遺構の検出層準を挟在するようにして、連続的な不攪乱堆積物の採取を行った。試料採取箇所は2ヶ所である。1地点は垂直方向の層相変化を捉えるために、第1b層～第4a層までの高さ約70cmの範囲の堆積層を2つに分割して採取した。2地点は第1b層と第2a層の水平方向の層相変化を捉えることを目的として、幅約70cmの範囲を3つに分割して採取した。

### 2. 分析方法

不攪乱堆積物試料については、厚さ1cmの板状に整形して、アクリル板上に設置、周囲を幅1cmの棒状のアクリル樹脂で固定した。試料調整および撮影は、齊藤（1993）、公文・立石編（1998）を参考とした。軟X線写真の記載は、堆積物について宮田ほか（1990）など、土壌について佐藤（1990a・b）、森ほか（1992）、成岡（1993）などを参考とした。



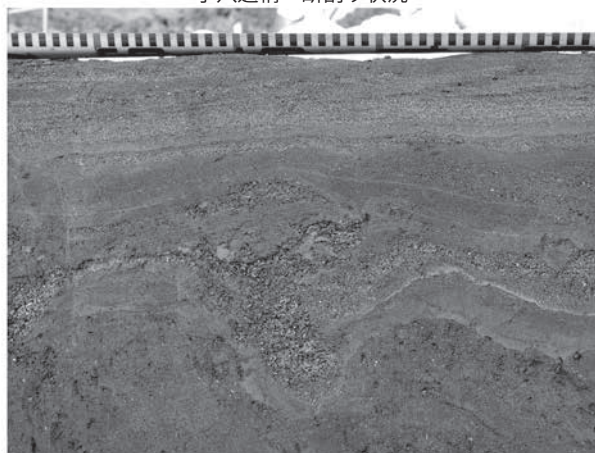
小穴遺構 検出状況



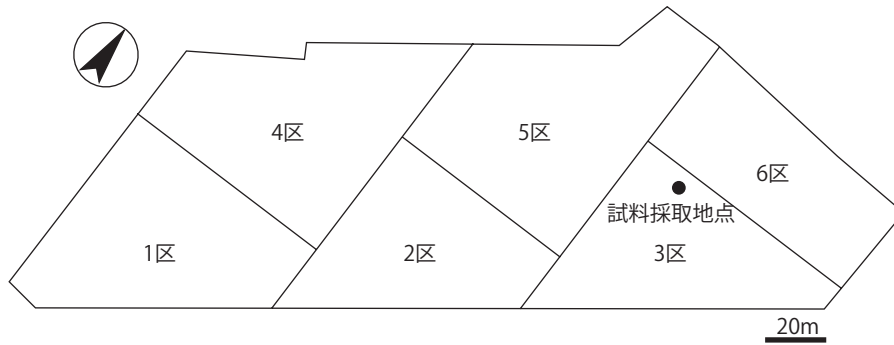
小穴遺構 断割り状況



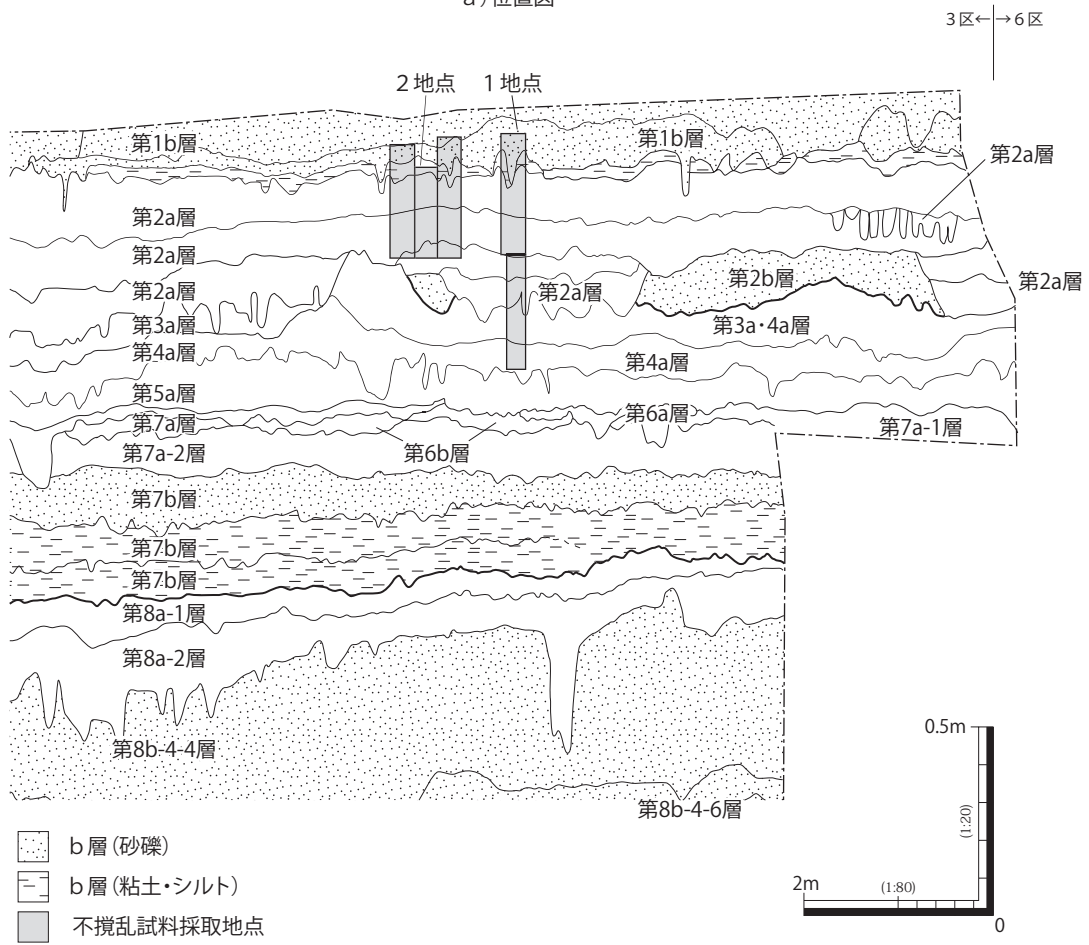
第1b層から第8b層累重状況



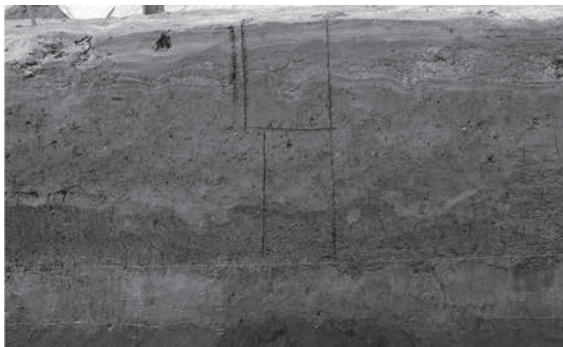
小穴遺構断面



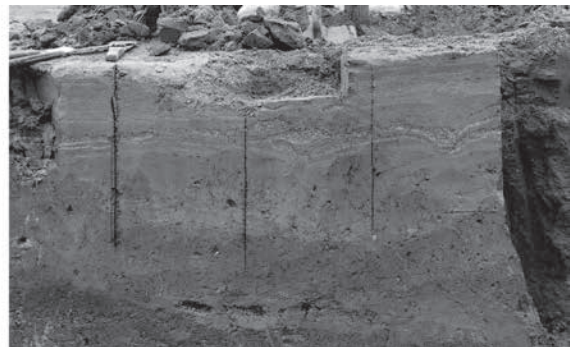
a) 位置図



b) 試料採取地点断面図



1 地点試料採取状況



2 地点試料採取状況

c) 採取地点の断面写真

図 365 試料採取位置と採取地点の断面図

### 3. 結果

軟X線写真および層理・葉理のトレース図を図 367・368 に示す。観察を行った堆積層については、第 1b 層が水平ないし波状をなす砂とシルトの砂泥互層で構成される。第 2a 層は、上半部が見かけ上塊状をなす砂混じりのシルト、下半部が粒団の発達する細礫混じりの砂質シルト。第 3a 層・第 4a 層は、塊状をなし粒団が発達するシルト質砂である。

### 4. 考察

図 367・368 の矢印で示した部分は、稲株痕の可能性が示唆された小穴 (SP) の部分に相当する。この部分では、砂礫が下に凸状の形態をなし、下位の地層へ潜り込むような層理・葉理の流線パターンが観察される。また小穴の上半部に存在する砂泥互層では、上に凸状をなすような流線パターンを描く。第 2 地点の観察では、この小穴遺構の上半部に累重する砂泥互層の第 1b 層が、水平方向に波状のパターンを示すことがうかがえる。さらに小穴遺構の直下の堆積層では、水平の葉理や層

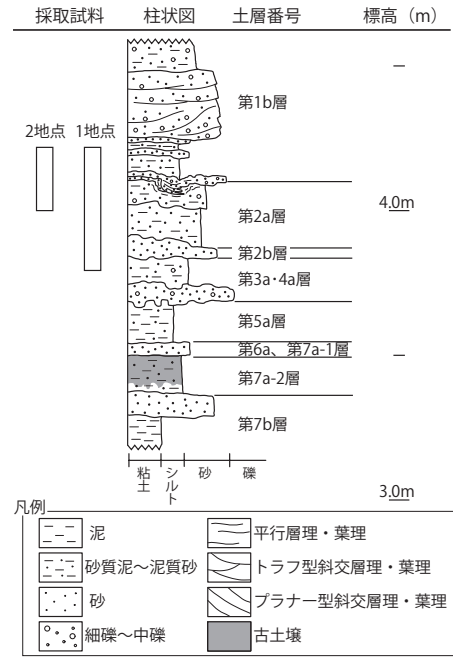


図 366 試料採取地点の柱状図

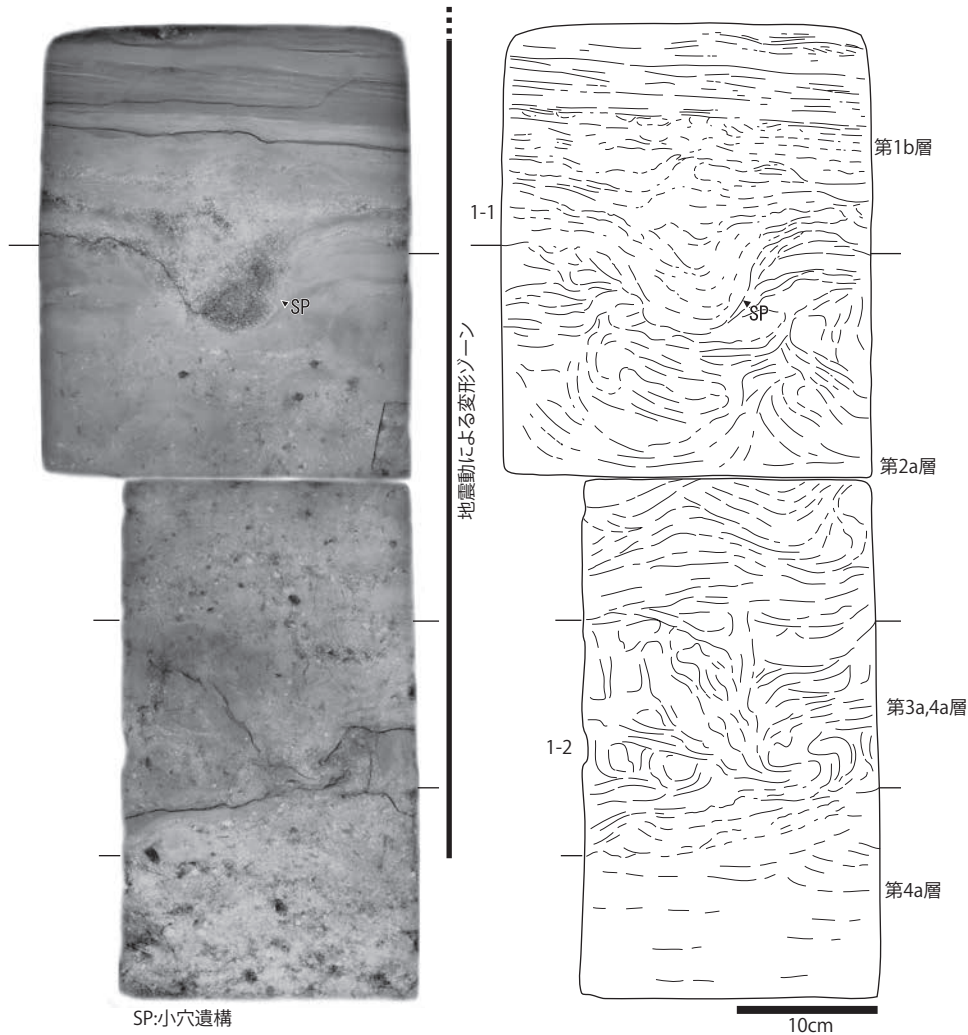


図 367 1 地点の軟X線写真と堆積構造のトレース図

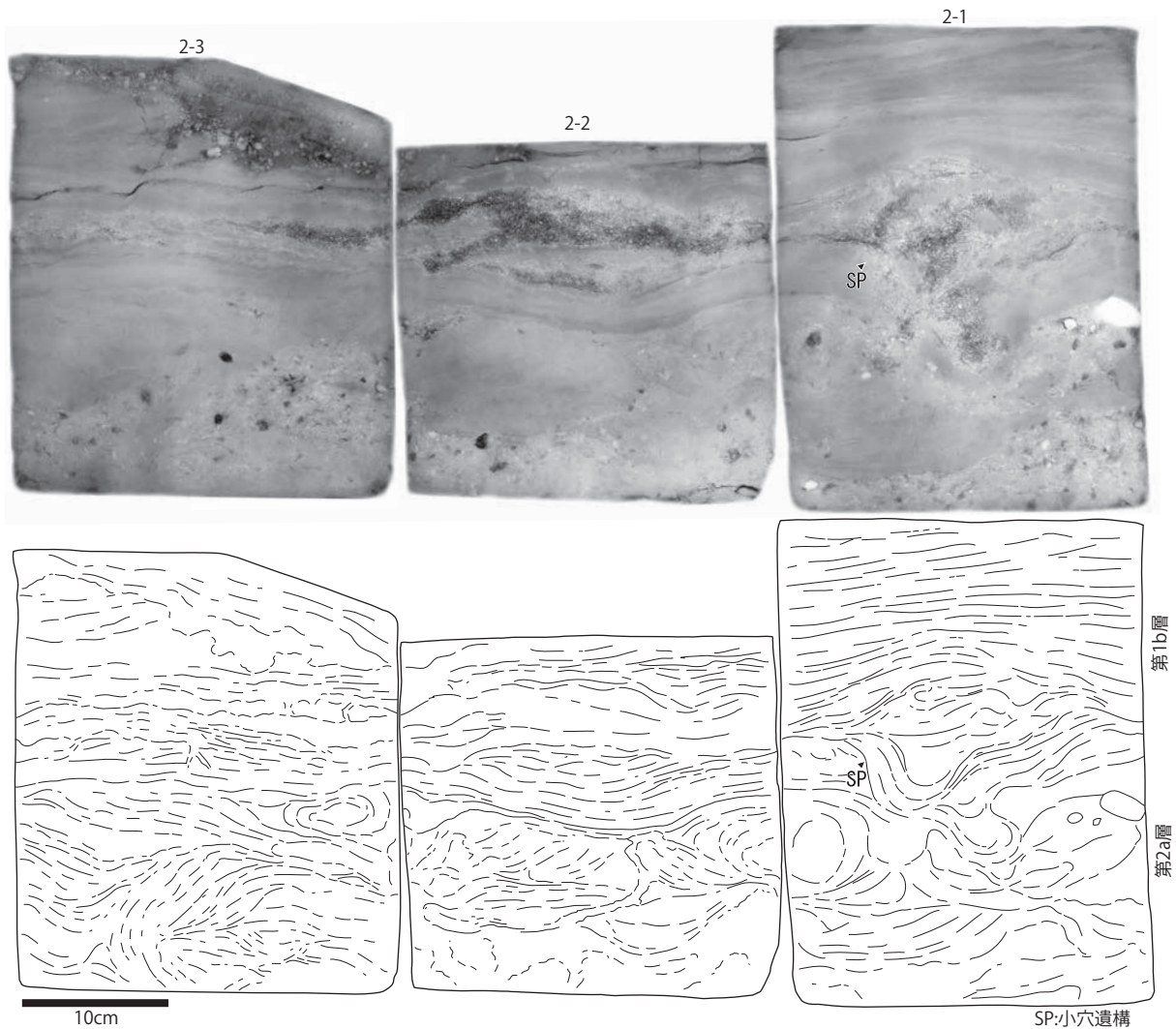


図 368 2地点の軟X線写真と堆積構造のトレース図

理の形成が認められず、第1b層～第4a層上部の約70cmの垂直範囲にかけて、下に凸型ないし渦状を呈す葉理からなる乱れた流線パターンや、下に円弧状に落ち込むような構造が顕著に観察される。

本遺跡が立地する沖積河川の氾濫原では、堆積層が概ね水平に累重することが多く、小穴遺構を挟在する堆積層で観察された水平および垂直方向の広い範囲にわたっての乱れた流線は、かなり特異な構造である。従って乱れた流線については、堆積過程で形成された初生の構造とは考えられず、堆積後の変形構造に由来すると判断される。これまでに河内平野の遺跡では、地震動による泥質堆積物の変形層準の存在が多数報告されている（Matsuda1999、松田1999など）。松田によると、1回の地震動によって変形した堆積物の垂直範囲を変形ゾーンと呼び、水底に堆積した泥質堆積物（上部ほど水分を多く含むとともに、厚密を受けていないため流動性に富む。より下位では粘性・可塑性に富み、最下部では剛性が高まる性質をもつ）に認められる1つの変形ゾーンは、上から順に（1）水と堆積物が乱流によって混ざり合い、ほとんど塊状を呈する液層の流動変形ユニット（liquidized deformation unit）、（2）上部で、変形に際して引きずり上げられた下位層の羽毛状、火焰状（ただしフレイム構造とは別種）の流線パターンや細粒の中礫サイズ以細のブロックの散乱、下部に下向きに凸な形に変形した葉理から構成されるロード構造をなす含水塑性変形ユニット（hydroplastic deformation unit）、（3）下向きのフィッシャーや微小断層がみられる脆性変形ユニット（brittle deformation unit）から構成されるとされる。

図 367・368 の層理・葉理のトレース図からは、小穴遺構が検出された下位の堆積層で、羽毛状、火焰状と認定できる流線や、明らかなロード構造と判断されるパターンを読みとることができる。従って、第 1b 層～第 4a 層上部の乱れた流線は、地震動による変形によって形成されたものであり、その構造から松田（1999）の含水塑性変形ユニット（hydroplastic deformation unit）に相当する部分と認識される。このことから、第 2a 層の水田面上面で検出された小穴遺構は、含水塑性変形により直上の砂泥互層で発生したロード構造によって下位の地層に落ち込んだ砂の充填によるものと考えられる。また小穴遺構では、その直下に根痕がまったく認められない。小穴遺構が稲株痕であれば、遺構直下には放射状に伸びるとされる（森田 2000）稲の根茎の存在が想定される。しかし、小穴遺構ではそのような根茎が認められず、この点からも遺構内に稲株が存在した可能性が極めて低いことが示唆される。

なお、今回の観察地点では、小穴遺構を覆う第 1b 層より上部の堆積層について、連続した試料採取を行うことが出来なかった。調査区壁面の観察によると、変形が認められる第 1b 層上部は、人為的に擾乱された耕作土である第 1a 層によって削平されていることが確認できる。現地での肉眼観察では、第 1a 層において地震動による変形構造が認められない。ただし、今回の分析では、第 1a 層を挟在する堆積層の採取を怠り、本層についての軟 X 線写真による検証が不可能となってしまった。この点は、大きな反省点である。第 1a 層の肉眼による層相観察結果をふまえると、小穴遺構を形成した地震の発生時期については、第 1a 層以前、第 1b 層堆積以降であることが指摘できるものの、より詳細な年代や発生層準に関する層序学的検討が現段階で難しい状況であることが指摘される。小穴遺構が関係する地震動の発生時期とその変形層序および古地震編年との関係については、周囲の調査地や遺跡での調査・分析からさらなる絞り込みを試みていくことが今後の課題である。

## 5. 結語

以上、軟 X 線写真による層相観察から、第 2a 層の水田面上面で検出され、稲株痕の可能性が示唆された小穴群遺構は、地震動の変形に伴って形成された自然営力に由来する構造と判断された。

### 引用・参考文献

- Matsuda, J.-I., 2000, Seismic deformation structures of the post-2300 a BP muddy sediments in Kawachi lowland plain, Osaka, Japan, *Sedimentary Geology*, 135, p99-116
- 松田順一郎 1999「瓜生堂遺跡第 45-2 時発掘調査でみられた古地震痕跡，都市計画道路大阪瓢箪山線建設に伴う瓜生堂遺跡第 45 時」『発掘調査概要報告』 p233-242 （財）東大阪市文化財協会
- 宮田雄一郎・山村恒夫・鍋谷淳・岩田尊夫・八幡雅之・結城智也・徳橋秀一 1990 「淡水生デルタの形成過程－琵琶湖愛知川河口部を例として－ 2. 地質構成と堆積相」『地質学雑誌』 96 p839-858
- 森也寸志・滋賀摂子・岩間憲治・渡辺紹裕・丸山利輔 1992 「土地利用による土壌間隙構造の差異－軟 X 線による観察を中心として－」『土壌の物理性』 No. 66 p19-27
- 森田茂紀 2000 『根の発育学』 東京大学出版会
- 成岡市 1993 「土壌粗孔隙の形態とその測定法 土壌の不均一性と物質移動の研究前線」『日本土壌肥料科学雑誌』 64-1 p90-97
- 斉藤文紀 1993 「軟 X 線写真観察法」『第四紀試料分析法 2』 p103-108 東京大学出版会
- 佐藤幸一 1990a 「八郎潟干拓地重粘土水田土の粗孔隙の発達とその意義」『農業土木学会誌』 60 p25-30
- 佐藤幸一 1990b 「八郎潟干拓地における畑地と草地土壌の粗孔隙の発達とその意義」『農業土木学会誌』 60 p287-292

## 第3節 弥生時代前期前半の遺構から出土したサヌカイトの産地

### はじめに

石器の材料となる石材は比較的広い流通圏を持っており、これらの産地を分析することで過去における交流や文化圏、および交易圏などを検討することができる。特に縄文時代晩期から弥生時代前期のサヌカイトの産地分析については既往の研究成果があり、近畿の遺跡においては弥生時代前期において讃岐地方を原産地とするサヌカイト石材が増加することが唱えられており（秋山 2007）、文化伝播や交流を考える上で重要な資料となっている。当調査地東側の第 8b 面で検出された遺構・遺物は、まさに縄文時代晩期から弥生時代前期にかけてのものであり、出土したサヌカイトの産地については、極めて重要な意味を持つものと考えられたため、蛍光 X 線による分析を行った。

### 1. 試料

第 8b 面で検出された遺構群からは剥片が主体となるものの、57 点のサヌカイト製石器が出土した。これに 6 区の包含層から出土したスクレイパー（図 313-85）、石斧（図 313-86）の 2 点を加え、縄文時代晩期から弥生時代前期の出土資料として産地同定の試料とした（表 21:No.1～59）。ただし、5-971 ピット出土の 3 点（No.53～55）については、出土遺物の形状や遺構の切り合いなどから弥生時代中期に下る可能性が考えられる。また、03-4 調査地南西部の 1・2 区では弥生時代前期末から中期と考えられる遺構群が検出されており、これらの遺構から出土したものと、付近の包含層から出土した 8 点を対照試料として、ともに分析対象とした（No.60～67）。対象試料の合計は 67 点となる。

### 2. 分析方法

試料を分析して得られる元素組成と、全国各地の原産地（図 369）の原石群の元素比データとの比較・対照から行う分析方法については紙幅の関係で省略するが、(藁科ほか 1975・1977・1983) に詳しい。また、最近では八尾市山賀遺跡においても同様の分析を行っている（遺物材料研究所 2007）。

### 3. 結果と考察

分析結果を表 20 に示した。この分析結果から数理統計の手法（東村武信 1976・1980）を用いて原石群との比較を行い、高い確率で同定された産地のみの結果を表 21 に記入した。

今回分析した 67 点について、ホテリングの T 2 乗検定法で全国各地の原石群・遺物群と比較した結果、二上山群が 43 点（64%）、金山東群が 11 点（16%）、向出 No.49 遺物群が 10 点（15%）、城山・金山西群が 2 点（3%）、讃良郡条里遺物群が 1 点（1%）同定された。

また、複数の原産地に信頼限界の 0.1% を越えて同定されたものの中で川棚第 2 群は最大で 0.3% であり、同じく同定された二上山に比べて極めて低い確率なので判定結果を二上山とした。さらに、判定結果を金山東としたもの全てが城山や金山西にも同時に同定されているが、K/Si、Ca/K、Ti/K、Rb/Fe、Fe/Zr、Sr/Zr、Si/Fe の新元素比によるホテリングの T 2 乗検定結果より、金山産地の東麓、西麓、南麓の地点より採取した原石の区別を試みた結果を「新元素比によるホテリングの T 2 乗検定結果」の欄に示した。この地点の元素比の差は非常に小さく、分析遺物の薄さ、大きさなど、試料形状による分析値への影響が大きいと思われる。特に、金山東麓の原石と南麓の成分組成の差が小さく、



No.38・39の薄く小さい遺物は、分析値に大きく影響していると思えるため、金山南群に確率が高く同定されているが、判定は金山東麓産と判定した。また、すべて金山東・金山南で信頼限界の0.1%を越えて同定され城山や金山西には同定されなかった。

一方、No.45・59のホテリングのT2乗検定結果はいずれも信頼限界の0.1%を越えた高確率で城山と金山西に同定された。そこで金山東と判定したときと同じように、城山と金山西とで新元素比によるホテリングのT2乗検定を行ったが、いずれの場合も両方に同定されたので、判定結果も城山・金山西の両群を併記した。さらに、No.35の剥片については既存の原石群・遺物群のいずれにも同定しなかったため、この剥片を複数回測定し新たに讃良郡条里遺物群を設定した。これにより他の遺跡で讃良郡条里遺物群に同定される遺物が見つかった場合、その遺跡と讃良郡条里遺跡の間で交流があった、共通の石材供給源であるなどの可能性が考えられるようになる（向出No.49遺物群についても同様に阪南市向出遺跡において見出された原産地不明の石材を遺物群として設定したもの）。

以上の結果について検討すると、縄文時代晩期から弥生時代前期の試料としたNo.1～59について、坂出市金山東麓、西麓または城山と同定される試料が多く含まれており、当該期における地域間交流を示唆するといえる。ただし、縄文時代晩期の突帯土器を多く出土した3-267・268溝の出土試料には金山東麓、西麓または城山と同定される試料はNo.29のみとなっている。一方でその他の遺構には、同産地の試料が約4割含まれており、3-267・268溝とは対照的な様相を見せている。

また、弥生時代前期後半から中期の帰属年代が考えられる西側遺構群から出土したため、東側遺構群の弥生時代前半石器との対照試料としたNo.60～67については、すべて二上山産と同定された。

なお、紙幅の関係で割愛した詳細な分析結果と方法（全国各地の原産地の原石群の元素比データ等を含む）については、委託分析結果報告として当センターで保管している。

#### 引用・参考文献

- 藁科哲男・東村武信 1975「蛍光X線分析法によるサヌカイト石器の原産地推定（II）」『考古学と自然科学』日本文化財学会
- 藁科哲男・東村武信・鎌木義昌 1977,1978「蛍光X線分析法によるサヌカイト石器の原産地推定（III），（IV）」『考古学と自然科学』日本文化財学会
- 藁科哲男・東村武信 1983「石器原材の産地分析」『考古学と自然科学』日本文化財学会
- 藁科哲男 2000「向出遺跡出土のサヌカイト製遺物の石材産地分析」『向出遺跡』（財）大阪府文化財調査研究センター
- 遺物材料研究所 2007「山賀遺跡出土サヌカイト製遺物の原材産地分析」『山賀遺跡』（財）大阪府文化財センター
- 東村武信 1976「産地推定における統計的手法」『考古学と自然科学』日本文化財学会
- 東村武信 1980『考古学と物理化学』学生社



図 369 サヌカイトおよびサヌカイト様岩石の原産地

表 20 対象試料の元素比分析結果

No.	分析番号	元 素 比									
		K/Ca	Ti/Ca	Mn/Sr	Fe/Sr	Rb/Sr	Y/Sr	Zr/Sr	Nb/Sr	Al/Ca	Si/Ca
1	99315	0.301	0.199	0.053	3.740	0.230	0.060	0.602	0.002	0.017	0.145
2	99316	0.305	0.205	0.052	3.728	0.230	0.062	0.612	0.010	0.016	0.143
3	99305	0.278	0.220	0.067	4.398	0.202	0.068	0.618	0.008	0.015	0.123
4	99286	0.273	0.223	0.069	4.465	0.219	0.067	0.642	0.021	0.015	0.124
5	99287	0.277	0.226	0.070	4.442	0.203	0.065	0.620	0.000	0.014	0.119
6	99288	0.278	0.225	0.067	4.426	0.200	0.069	0.615	0.007	0.015	0.123
7	99289	0.279	0.222	0.069	4.354	0.210	0.060	0.621	0.009	0.015	0.120
8	99290	0.279	0.226	0.067	4.338	0.212	0.067	0.628	0.008	0.015	0.120
9	99291	0.273	0.225	0.069	4.353	0.207	0.070	0.626	0.011	0.015	0.120
10	99300	0.276	0.227	0.069	4.290	0.222	0.074	0.637	0.018	0.015	0.124
11	99301	0.258	0.209	0.069	4.578	0.212	0.078	0.611	0.017	0.014	0.116
12	99302	0.289	0.222	0.070	4.308	0.207	0.064	0.636	0.019	0.014	0.119
13	99303	0.256	0.208	0.072	4.709	0.202	0.067	0.629	0.024	0.014	0.116
14	99304	0.280	0.225	0.068	4.377	0.209	0.071	0.623	0.025	0.015	0.121
15	99306	0.276	0.226	0.066	4.349	0.196	0.068	0.628	0.020	0.015	0.123
16	99307	0.277	0.221	0.066	4.342	0.206	0.069	0.628	0.018	0.015	0.122
17	99308	0.284	0.225	0.066	4.210	0.204	0.075	0.622	0.016	0.015	0.122
18	99309	0.285	0.222	0.065	4.195	0.209	0.072	0.633	0.022	0.015	0.121
19	99310	0.277	0.226	0.067	4.451	0.202	0.068	0.623	0.008	0.015	0.119
20	99311	0.264	0.208	0.068	4.477	0.202	0.072	0.615	0.009	0.014	0.112
21	99312	0.279	0.223	0.069	4.458	0.197	0.069	0.627	0.002	0.015	0.120
22	99314	0.277	0.222	0.068	4.380	0.206	0.072	0.628	0.018	0.015	0.122
23	99318	0.277	0.225	0.070	4.503	0.201	0.061	0.623	0.001	0.015	0.123
24	99319	0.276	0.224	0.068	4.370	0.206	0.065	0.609	0.008	0.015	0.120
25	99320	0.271	0.220	0.070	4.447	0.210	0.063	0.626	0.020	0.015	0.119
26	99321	0.278	0.229	0.068	4.345	0.208	0.066	0.617	0.018	0.015	0.120
27	99322	0.275	0.226	0.069	4.368	0.210	0.076	0.625	0.028	0.014	0.115
28	99323	0.277	0.226	0.070	4.512	0.201	0.069	0.648	0.020	0.015	0.124
29	99313	0.434	0.218	0.081	4.439	0.291	0.097	1.200	0.012	0.023	0.178
30	99341	0.276	0.224	0.068	4.353	0.203	0.070	0.621	0.018	0.015	0.121
31	99285	0.284	0.228	0.067	4.405	0.217	0.072	0.628	0.007	0.015	0.126
32	99299	0.305	0.200	0.052	3.715	0.229	0.063	0.603	0.011	0.017	0.145
33	99317	0.274	0.232	0.070	4.428	0.206	0.069	0.631	0.019	0.015	0.122
34	99325	0.285	0.225	0.067	4.322	0.208	0.074	0.615	0.002	0.015	0.122
35	99327	0.499	0.188	0.052	3.878	0.219	0.074	0.557	0.002	0.012	0.112
36	99328	0.304	0.197	0.053	3.725	0.237	0.058	0.600	0.008	0.017	0.146
37	99292	0.303	0.199	0.053	3.712	0.229	0.068	0.601	0.007	0.017	0.145
38	99324	0.438	0.222	0.082	4.546	0.301	0.091	1.183	0.013	0.023	0.176
39	99326	0.444	0.226	0.088	4.601	0.293	0.085	1.166	0.026	0.023	0.179
40	99331	0.307	0.200	0.052	3.759	0.233	0.067	0.616	0.019	0.016	0.143
41	99332	0.448	0.222	0.082	4.478	0.277	0.085	1.187	0.023	0.024	0.180
42	99333	0.435	0.218	0.082	4.445	0.282	0.084	1.167	0.012	0.023	0.176
43	99334	0.443	0.222	0.083	4.562	0.291	0.090	1.195	0.045	0.024	0.179
44	99335	0.453	0.217	0.079	4.441	0.296	0.067	1.127	0.030	0.014	0.127
45	99336	0.413	0.220	0.081	4.713	0.283	0.070	1.077	0.025	0.013	0.119
46	99337	0.282	0.228	0.068	4.472	0.215	0.075	0.629	0.015	0.015	0.121
47	99329	0.439	0.216	0.082	4.534	0.282	0.087	1.180	0.029	0.023	0.176
48	99330	0.283	0.228	0.069	4.396	0.210	0.072	0.611	0.012	0.015	0.123
49	99293	0.305	0.203	0.055	3.723	0.235	0.060	0.600	0.006	0.016	0.136
50	99294	0.444	0.220	0.085	4.543	0.296	0.087	1.190	0.039	0.024	0.182
51	99295	0.443	0.221	0.086	4.492	0.296	0.082	1.190	0.027	0.024	0.178
52	99296	0.276	0.226	0.067	4.384	0.205	0.075	0.627	0.020	0.015	0.121
53	99297	0.276	0.222	0.068	4.367	0.214	0.068	0.615	0.003	0.015	0.121
54	99298	0.305	0.200	0.052	3.721	0.238	0.067	0.600	0.004	0.017	0.146
55	99339	0.303	0.202	0.051	3.726	0.239	0.068	0.613	0.012	0.016	0.144
56	99340	0.267	0.216	0.068	4.516	0.202	0.066	0.629	0.013	0.015	0.120
57	99338	0.304	0.199	0.051	3.697	0.233	0.056	0.596	0.009	0.017	0.145
58	99343	0.455	0.228	0.079	4.470	0.289	0.078	1.166	0.031	0.024	0.182
59	99342	0.424	0.225	0.076	4.629	0.285	0.076	1.084	0.024	0.013	0.115
60	99346	0.276	0.223	0.067	4.321	0.198	0.067	0.605	0.011	0.015	0.121
61	99351	0.280	0.226	0.067	4.475	0.206	0.061	0.613	0.008	0.015	0.122
62	99344	0.278	0.228	0.069	4.434	0.193	0.076	0.628	0.009	0.015	0.122
63	99345	0.279	0.231	0.069	4.456	0.207	0.069	0.623	0.015	0.015	0.123
64	99347	0.274	0.226	0.068	4.398	0.208	0.068	0.628	0.025	0.015	0.120
65	99348	0.278	0.223	0.068	4.330	0.216	0.075	0.623	0.024	0.015	0.121
66	99349	0.280	0.234	0.067	4.289	0.195	0.067	0.623	0.003	0.016	0.127
67	99350	0.278	0.228	0.069	4.385	0.204	0.068	0.618	0.013	0.015	0.122
	JG-1	1.265	0.284	0.052	2.736	0.737	0.171	0.854	0.045	0.036	0.410

JG-1 : 標準試料-Ando,A.,Kurasawa,H.,Ohmori,T.& Takeda,E. 1974 compilation of data on the GJS geochemical reference samples JG-1 granodiorite and JB-1 basalt. Geochemical Journal, Vol.8 175-192 (1974)

表 21 対象試料の検定結果

No.	分析番号	掲載番号	遺構	器種	時期	ホテリングのT2乗検定結果(確率)	新元素比によるホテリングのT2乗検定結果(%)	判定結果	備考
1	99315	表 16-1	3-267溝	剥片	縄文晩期～弥生前期	向出No.49遺物群(49%)		向出No.49遺物群	
2	99316	表 16-2	3-267溝	剥片	縄文晩期～弥生前期	向出No.49遺物群(81%)		向出No.49遺物群	
3	99305	図 277-102	3-267溝	剥片	縄文晩期～弥生前期	二上山(97%),川棚第2群(0.1%)		二上山	
4	99286	図 277-97	3-268溝	楔形石器	縄文晩期～弥生前期	二上山(77%)		二上山	
5	99287	図 277-95	3-268溝	石鏃	縄文晩期～弥生前期	二上山(86%),川棚第2群(0.1%)		二上山	
6	99288	表 16-3	3-268溝	剥片	縄文晩期～弥生前期	二上山(99.5%),川棚第2群(0.3%)		二上山	
7	99289	図 258-11	3-268溝	剥片	縄文晩期～弥生前期	二上山(60%)		二上山	
8	99290	図 269-2	3-268溝	石鏃	縄文晩期～弥生前期	二上山(92%)		二上山	
9	99291	表 16-4	3-268溝	剥片	縄文晩期～弥生前期	二上山(89%)		二上山	
10	99300	表 16-5	3-268溝	剥片	縄文晩期～弥生前期	二上山(35%)		二上山	
11	99301	表 16-6	3-268溝	剥片	縄文晩期～弥生前期	二上山(27%)		二上山	
12	99302	表 16-7	3-268溝	剥片	縄文晩期～弥生前期	二上山(26%)		二上山	
13	99303	図 277-98	3-268溝	楔形石器	縄文晩期～弥生前期	二上山(22%),向出No.6遺物群(0.3%)		二上山	
14	99304	表 16-8	3-268溝	剥片	縄文晩期～弥生前期	二上山(98%)		二上山	
15	99306	図 277-100	3-268溝	剥片	縄文晩期～弥生前期	二上山(71%),永道2 No.18遺物群(0.2%),川棚第2群(0.1%)		二上山	
16	99307	表 16-10	3-268溝	剥片	縄文晩期～弥生前期	二上山(90%)		二上山	
17	99308	図 277-96	3-268溝	楔形石器	縄文晩期～弥生前期	二上山(65%)		二上山	
18	99309	図 277-99	3-268溝	楔形石器	縄文晩期～弥生前期	二上山(40%)		二上山	
19	99310	図 277-101	3-268溝	楔形石器	縄文晩期～弥生前期	二上山(99.6%),川棚第2群(0.2%)		二上山	
20	99311	図 258-10	3-268溝	楔形石器	縄文晩期～弥生前期	二上山(38%)		二上山	
21	99312	図 258-9	3-268溝	石核	縄文晩期～弥生前期	二上山(86%),川棚第2群(0.3%)		二上山	
22	99314	表 16-13	3-268溝	剥片	縄文晩期～弥生前期	二上山(98%)		二上山	
23	99318	表 16-14	3-268溝	剥片	縄文晩期～弥生前期	二上山(75%),川棚第2群(0.2%)		二上山	
24	99319	表 16-15	3-268溝	剥片	縄文晩期～弥生前期	二上山(97%)		二上山	
25	99320	表 16-16	3-268溝	剥片	縄文晩期～弥生前期	二上山(91%)		二上山	
26	99321	表 16-17	3-268溝	剥片	縄文晩期～弥生前期	二上山(98%)		二上山	
27	99322	表 16-18	3-268溝	剥片	縄文晩期～弥生前期	二上山(76%)		二上山	
28	99323	表 16-19	3-268溝	剥片	縄文晩期～弥生前期	二上山(81%),川棚第2群(0.2%)		二上山	
29	99313	表 16-12	3-268溝	剥片	縄文晩期～弥生前期	金山東(7%),城山(0.1%)	金山東(27%),金山南(5%)	金山東	
30	99341	表 16-20	3-268溝	剥片	縄文晩期～弥生前期	二上山(98%)		二上山	
31	99285	表 16-21	3-267・268溝	剥片	縄文晩期～弥生前期	二上山(88%)		二上山	
32	99299	表 16-22	3-267・268溝	剥片	縄文晩期～弥生前期	向出No.49遺物群(88%)		向出No.49遺物群	
33	99317	表 16-23	3-286土坑	剥片	縄文晩期～弥生前期	二上山(89%)		二上山	
34	99325	表 16-24	6-119土坑	剥片	縄文晩期～弥生前期	二上山(88%)		二上山	
35	99327	表 16-25	6-123溝	剥片	縄文晩期～弥生前期	讃良郡条里遺物群(31%)		讃良郡条里遺物群	
36	99328	表 16-26	6-123溝	剥片	縄文晩期～弥生前期	向出No.49遺物群(50%)		向出No.49遺物群	
37	99292	図 287-35	6-123溝	スクレイパー	縄文晩期～弥生前期	向出No.49遺物群(39%)		向出No.49遺物群	
38	99324	表 16-27	6-130土坑	剥片	縄文晩期～弥生前期	金山東(74%),城山(1%),金山西(0.6%)	金山南(8%),金山東(1%)	金山東	極薄く
39	99326	表 16-28	6-139ピット	剥片	縄文晩期～弥生前期	金山東(35%),城山(0.6%),金山西(0.9%)	金山南(9%),金山東(4%)	金山東	薄く、小さい
40	99331	図 292-21	6-143土坑	楔形石器	縄文晩期～弥生前期	向出No.49遺物群(57%)		向出No.49遺物群	
41	99332	表 16-29	6-152土坑	剥片	縄文晩期～弥生前期	金山東(59%),城山(1%),金山西(0.2%)	金山東(57%),金山南(10%)	金山東	
42	99333	表 16-30	6-152土坑	剥片	縄文晩期～弥生前期	金山東(26%),城山(7%),金山西(1%)	金山東(43%),金山南(0.8%)	金山東	
43	99334	表 16-31	6-152土坑	剥片	縄文晩期～弥生前期	金山東(46%),城山(0.3%),金山西(0.2%)	金山東(59%),金山南(5%)	金山東	
44	99335	表 16-32	6-152土坑	剥片	縄文晩期～弥生前期	城山(21%),金山東(12%),金山西(1%)	金山東(47%),金山南(1%)	金山東	
45	99336	表 16-33	6-152土坑	剥片	縄文晩期～弥生前期	城山(94%),金山西(41%)	城山(61%),金山西(24%)	城山・金山西	
46	99337	図 292-25	6-152土坑	素材剥片	縄文晩期～弥生前期	二上山(97%)		二上山	
47	99329	表 16-34	6-157土坑	剥片	縄文晩期～弥生前期	金山東(31%),城山(3%),金山西(0.5%)	金山東(32%),金山南(14%)	金山東	薄い
48	99330	表 16-35	6-157土坑	剥片	縄文晩期～弥生前期	二上山(88%)		二上山	
49	99293	図 292-23	6-143土坑	楔形石器	縄文晩期～弥生前期	向出No.49遺物群(6%)		向出No.49遺物群	
50	99294	図 292-24	6-152土坑	剥片	縄文晩期～弥生前期	金山東(82%),城山(0.3%)	金山東(47%),金山南(0.5%)	金山東	
51	99295	図 292-22	6-152土坑	剥片	縄文晩期～弥生前期	金山東(80%),城山(0.4%)	金山東(26%),金山南(0.8%)	金山東	
52	99296	図 244-4	6-172土坑	楔形石器	縄文晩期～弥生前期	二上山(97%)		二上山	
53	99297	図 250-1	5-971ピット	石鏃	縄文晩期～弥生前期	二上山(91%)		二上山	
54	99298	図 250-2	5-971ピット	剥片	縄文晩期～弥生前期	向出No.49遺物群(41%)		向出No.49遺物群	
55	99339	表 16-36	5-971ピット	剥片	縄文晩期～弥生前期	向出No.49遺物群(36%)		向出No.49遺物群	
56	99340	表 16-37	5-975ピット	剥片	縄文晩期～弥生前期	二上山(76%)		二上山	
57	99338	表 16-38	5-979土坑	剥片	縄文晩期～弥生前期	向出No.49遺物群(81%)		向出No.49遺物群	
58	99343	図 313-85	6区第8a層	スクレイパー	縄文晩期～弥生前期	金山東(61%),城山(4%),金山西(0.2%)	金山東(99%),金山南(15%)	金山東	
59	99342	図 313-86	6区第8a層	石斧	縄文晩期～弥生前期	城山(45%),金山西(37%)	城山(20%),金山西(3%)	城山・金山西	
60	99346	図 233-26	1区8a落ち込み	剥片	弥生前期末～中期	二上山(90%),川棚第2群(0.1%)		二上山	
61	99351	図 321-1	2区112溝	石鏃	縄文晩期～弥生中期?	二上山(96%),川棚第2群(0.3%)		二上山	
62	99344	図 233-19	1区第8a-1層	石鏃	弥生前期末～中期	二上山(74%),川棚第2群(0.3%)		二上山	
63	99345	図 234-28	1区第8a-1層	剥片	弥生前期末～中期	二上山(99%),川棚第2群(0.1%)		二上山	
64	99347	図 233-24	1区第8a-1層	剥片	弥生前期末～中期	二上山(95%)		二上山	
65	99348	図 235-34	1区第8a-1層	剥片	弥生前期末～中期	二上山(83%)		二上山	
66	99349	図 233-19	1区第8a-1層	石鏃	弥生前期末～中期	二上山(60%)		二上山	
67	99350	表 16-43	1区第8a-1層	剥片	弥生前期末～中期	二上山(99.5%)		二上山	

新元素比によるホテリングのT2乗検定: K/Si, Ca/K, Ti/K, Rb/Fe, Fe/Zr, Sr/Zr, Sr/Zr, Si/Feの元素比により金山産地の中の何処の地点の原石を使用しているかの区別をホテリングのT2乗検定で行う。この検定で分析された遺物は金山東群と城山・金山西群の組み合わせにより明確になった。しかし、表1に掲載している他の原石群について、この検定を行っていないために、他の原石・遺物群については、従来のK/Ca, Ti/Ca, Mn/Sr, Fe/Sr, Rb/Sr, Y/Sr, Zr/Sr, Nb/Srの元素比によるホテリングのT2乗検定により判定をおこなった。高検定で、高確率で共通に一致した原石群は金山東群で必要条件を満たし、また、他の179個の原石・遺物群には信頼限界の0.1%に達しなかったことから、十分条件を満たしている。

注意: 近年産地分析を行う所が多くなりましたが、判定根拠が曖昧にも関わらず結果のみを報告される場合があります。本報告では日本における各遺跡の産地分析の判定基準を一定にして、産地分析を行っています。判定基準の異なる研究方法(土器様式の基準も研究方法で異なるように)にも関わらず、似た産地名のために同じ結果のように思われるが、全く関係(相互チェックなし)ありません。本研究結果に連続させるには本研究法で再分析が必要です。本報告の分析結果を考古学資料とする場合には常に同じ基準で判定されている結果で古代交流圏などを考察する必要があります。

## 第4節 縄文晩期～弥生前期土器および周辺資料群の胎土分析および薄片観察

### はじめに

寝屋川市と四条畷市の両市に広がる讃良郡条里遺跡は、生駒山系西側の扇状地末端から沖積低地にかけて立地する。これまでの発掘調査により、旧石器時代から近世に至るまでの各時代・時期の遺構および遺物が確認されている。その中で、03-4 調査地では、10 面以上の遺構面が確認されており、その最下層に位置する縄文時代晩期から弥生時代前期とされる遺構面では集落を構成する遺構群が検出され、それらに伴い、実測可能なものだけで300点以上の土器が出土している。

本報告では、讃良郡条里遺跡 03-4 調査地から出土した弥生時代前期とされる土器および縄文時代晩期とされる土器を対象として、その材質（胎土）の特性を明らかにする。特に、本調査地では、縄文土器と弥生土器の共伴する溝遺構が確認され、また、関東や中部地方に主な分布を示す縄文土器の出土が認められている。これらの土器について、その胎土の違いあるいは類似性さらには地域性などを推定することは、讃良郡条里遺跡の位置する大阪平野北東部における縄文土器から弥生土器への移行時期において、その製作と流通を考える際の重要な資料となることが期待される。

### 1. 目的の整理

本分析を行うにあたっての主たる目的は、以下の通りである。

- ① 第8b層の土器素地土としての可能性の検討
- ② 非生駒西麓胎土を持つ突帯文土器胎土と弥生土器胎土との比較
- ③ 在地胎土の確認と搬入品の抽出
- ④ 各試料の被熱温度の推定
- ⑤ 器種・器形による胎土の相違の有無
- ⑥ 東日本系土器（浮線網状文土器）の胎土の特徴確認
- ⑦ 6-143 土坑出土の粘土塊と被熱壁体の、土器胎土・第8b層との比較

### 2. 試料

試料は、讃良郡条里遺跡から出土した縄文土器片9点と弥生土器片19点、および対照試料として4区第8b層の粘土層より採取した粘土1点、さらには、土器焼成遺構の可能性があるとされている6-143土坑の底面より出土した焼成されていない粘土塊1点と、被熱により赤変硬化した6-143土坑壁体と地山各1点の合計32点である。試料には、今回の分析のため通し番号を付した。各試料の番号、出土遺構名、器種、所見および各試料において胎土分析により確認する事項等は一覧にして表22に示す。

### 3. 分析方法

胎土分析には、現在様々な分析方法が用いられているが、大きく分けて鉱物組成や岩片組成を求める方法と化学組成を求める方法とがある。前者は粉碎による重鉱物分析や切片による薄片作製などが主に用いられており、後者では蛍光X線分析が最もよく用いられている方法である。前者の方法は、胎土の特徴が捉えやすいこと、地質との関連性を考えやすいことなどの利点があり、その中でも薄片観察は、胎土中における砂粒の量はもちろんのこと、その粒径組成や砂を構成する鉱物、岩石片および微化石の種類なども捉えることが可能であり、得られる情報は多い。

この情報をより客観的な方法で表現したものとして、松田ほか（1999）の方法がある。これは、胎土中の砂粒について、中粒シルトから細礫までを対象とし、各粒度階ごとに砂粒を構成する鉱物片およ

表 22 試料一覧および胎土分類結果

No.	採取・出土	試料状態	土器情報	資料の特徴	胎土分類																							
					鉱物・岩石組成										粗←粒径組成→細										焼成温度(℃)			
					A	B	C	C'	D	E	F	G	O	I	2	3	4	5	6	総合								
1	4区第8b層	粘土層		第7章第1節 19地点試料25																						A5	—	
2	6-143上坑	粘土塊		土坑底面からの出土。焼成作用は受けていない																							D3	—
3	6-143上坑	被焼塊		壁面に貼り付けた粘土が被焼により赤変したもの																							A3	800-900
4	3-267・268溝	土器	図263-13	突帯文土器深鉢																							B3	799以下
5	3-267・268溝	土器	図258-8	突帯文土器深鉢																							B3	799以下
6	3-267・268溝	土器	図266-14	突帯文土器深鉢																							E3	800弱
7	3-267・268溝	土器	図264-16	突帯文土器深鉢																							E2-3	800弱
8	3-267・268溝	土器	図264-19	突帯文土器壺																							B3	799以下
9	3-267・268溝	土器	図275-55	弥生土器壺																							B3	800-900
10	3-267・268溝	土器	図268-4	弥生土器壺																							C2	799以下
11	3-267・268溝	土器	図265-29	弥生土器壺																							C6	799以下
12	3-267・268溝	土器	図275-72	弥生土器鉢																							B2	799以下
13	3-267・268溝	土器	図273-20	縄文土器鉢																							E5	799以下
14	3-267・268溝	土器	図263-11	縄文土器鉢																							E3	799以下
15	5-1013ピット	土器	図322-1	縄文土器鉢																							A1	799以下
16	5-973上坑	土器	図250-10	弥生土器壺																							A1	800-900
17	5-979上坑	土器	図250-5	弥生土器壺																							A6	800-900
18	5-979上坑	土器	図250-8	弥生土器壺																							B2	799以下
19	6-123溝	土器	図286-16	弥生土器壺																							C'0	799以下
20	6-124上坑	土器	図246-10	弥生土器壺																							B2-3	799以下
21	6-124上坑	土器	図246-9	弥生土器壺																							A3	799以下
22	6-124上坑	土器	図246-17	弥生土器壺																							B3	799以下
23	6-124上坑	土器	図246-23	弥生土器壺																							C3	799以下
24	6-124上坑	土器	図246-5	ミニチュア土器																							A2	799以下
25	6-144上坑	土器	図244-2	弥生土器壺																							B3	799以下
26	6-157上坑	土器	図291-10	弥生土器壺																							B3	799以下
27	6-157上坑	土器	図291-20	弥生土器鉢																							C3	800-900
28	5-991溝	土器	図284-9	弥生土器鉢																							B3	799以下
29	6区第8a-2層	土器	図310-5	滑線文土器深鉢																							F3	800-900
30	5区第8a層	土器	図301-12	弥生土器壺																							G6	799以下
31	3-267・268溝	土器	図339-10	弥生土器片																							D3	799以下
32	6-143上坑	地山		焼成破裂土器片																							A4	799以下

< 鉱物・岩石組成 >

- A 鉱物片では石英・カリ長石・斜長石以外に、少量または微量の角閃石を含み、岩石片では多結晶石英・花崗岩類以外にチャートを含む。
- B 鉱物片では石英・カリ長石・斜長石以外に、微量の角閃石を含み、チャートを含まない。また、火山ガラスを伴うものも多量。
- C 鉱物片では石英・カリ長石・斜長石以外に、微量の角閃石を含み、黒雲母は含まない。岩石片では多結晶石英・花崗岩類以外にチャートを含む。また、火山ガラスを伴うものも多量。
- D 鉱物片では石英・カリ長石・斜長石以外に、微量の角閃石を伴うが、黒雲母は含まない。岩石片では多結晶石英・花崗岩類を含むのみ。
- E 鉱物片では多量の角閃石を含み、カリ長石は極めて微量かほとんど含まれない。岩石片では花崗岩類を比較的多く含む、閃輝綠岩類を伴う。
- F 鉱物片では斜長石が多く、石英は少量、カリ長石は微量である。岩石片では少量の流紋岩・デイサイトと微量の花崗岩類を含む。
- G 砂粒の全体量が少なく、鉱物片では少量の石英と斜長石および微量のカリ長石のみ、岩石片では微量の多結晶石英のみである。

< 粒径組成 >

- 0 極粗粒砂～極細粒砂がほぼ同率。
- 1 粗粒砂をモードとする。
- 2 中粒砂をモードとする。
- 3 細粒砂をモードとする。
- 4 極細粒砂をモードとする。
- 5 粗粒シルトをモードとする。
- 6 粒径組成が粗粒砂と細粒シルトの双峰性を示す。

び岩石片の種類構成を調べたものである。この方法では、胎土中における砂の含量や粒径組成により、土器の製作技法の違いを見出すことができるために、同一の地質分布範囲内にある近接した遺跡間での土器製作事情の解析も可能である。なお、本報告では、前述した目的⑦における被熱壁体について、その微細構造を捉えるために、軟X線写真を撮影し、その画像からの検討も行う。以下に各分析における試料の処理過程を述べる。

1) 薄片作製鑑定 薄片は、試料の一部をダイヤモンドカッターで切断、正確に0.03mmの厚さに研磨して作製した。観察は偏光顕微鏡による岩石学的な手法を用い、胎土中に含まれる鉱物片、岩石片および微化石の種類構成を明らかにした。

砂粒の計数は、メカニカルステージを用いて0.5mm間隔で移動させ、細礫～中粒シルトまでの粒子をポイント法により200個あるいはプレパラート全面で行った。なお、径0.5mm以上の粗粒砂以上の粒子については、ポイント数ではなく粒数を計数した。また、同時に孔隙と基質のポイントも計数した。これらの結果から、各粒度階における鉱物・岩石別出現頻度の3次元棒グラフ、砂粒の粒径組成ヒストグラム、孔隙・砂粒・基質の割合を示す棒グラフを呈示する。

2) 堆積物微細構造軟X線分析 地層断面より採取した不攪乱柱状堆積物を厚さ1cmの板状に整形し、それをアクリル板上に設置、周囲を幅1cmの棒状のアクリル樹脂で固定し、軟X線写真撮影を実施した。撮影したフィルムについては、肉眼とルーペによる観察およびスキャナーでコンピューター上に取り込んだ画像の補整などから、堆積・土壌構造の特徴把握を行う。構造の記載では、粗孔隙と間隙の用語について成岡(1993)に従う。「粗孔隙」とは、土の乾燥収縮、植物根の腐朽跡あるいは地中動物の通行跡などに相当する。また、面状や管状などの構造単位の設定が可能な亀裂や管状孔隙など粗孔隙を含むすべてのスキ間に対して、「間隙」を使用する。

## 4. 結果

### (1) 胎土の分類

観察結果を表22、図370～375に示す。各試料で計数された鉱物片および岩石片の種類構成をみると、多くの試料で互いに類似した種類構成を示す。すなわち、鉱物片では石英と斜長石が多く、少量のカリ長石を伴い、少量または微量の角閃石や黒雲母を含み、岩石片ではほとんどの試料で多結晶石英および花崗岩類が少量含まれ、少量または微量のチャートや火山ガラスを含む試料も比較的多く認められる。試料によっては、角閃石の鉱物片を多く含むものや石英が少量かつ斜長石が突出して多いというものもあり、微量の凝灰岩や流紋岩・デイサイトの岩片を含むものも認められる。

一方、各試料の粒径組成をみると、細粒砂の粒径にモードのある試料が多いが、中粒砂や粗粒砂および粗粒シルトの各粒径にモードのある試料も認められる。また、粗粒砂と粗粒シルトの2つのピークを示す試料も認められる。

以上述べた鉱物・岩石組成と粒径組成の状況を整理して、ここでは以下に示すような分類を設定した。

#### a) 鉱物片・岩石片の種類構成

A類: 鉱物片では石英と斜長石が多く、少量のカリ長石を伴い、それ以外に、少量または微量の角閃石と黒雲母を含む。岩石片では少量の多結晶石英・花崗岩類と少量または微量のチャートを含む。

B類: 鉱物片はA類と同様であるが、岩石片では多結晶石英・花崗岩類を含み、チャートを含まない。また、火山ガラスを伴うものも多い。

C類: 鉱物片では石英・カリ長石・斜長石以外に、微量の角閃石を伴うが、黒雲母は含まない。岩石

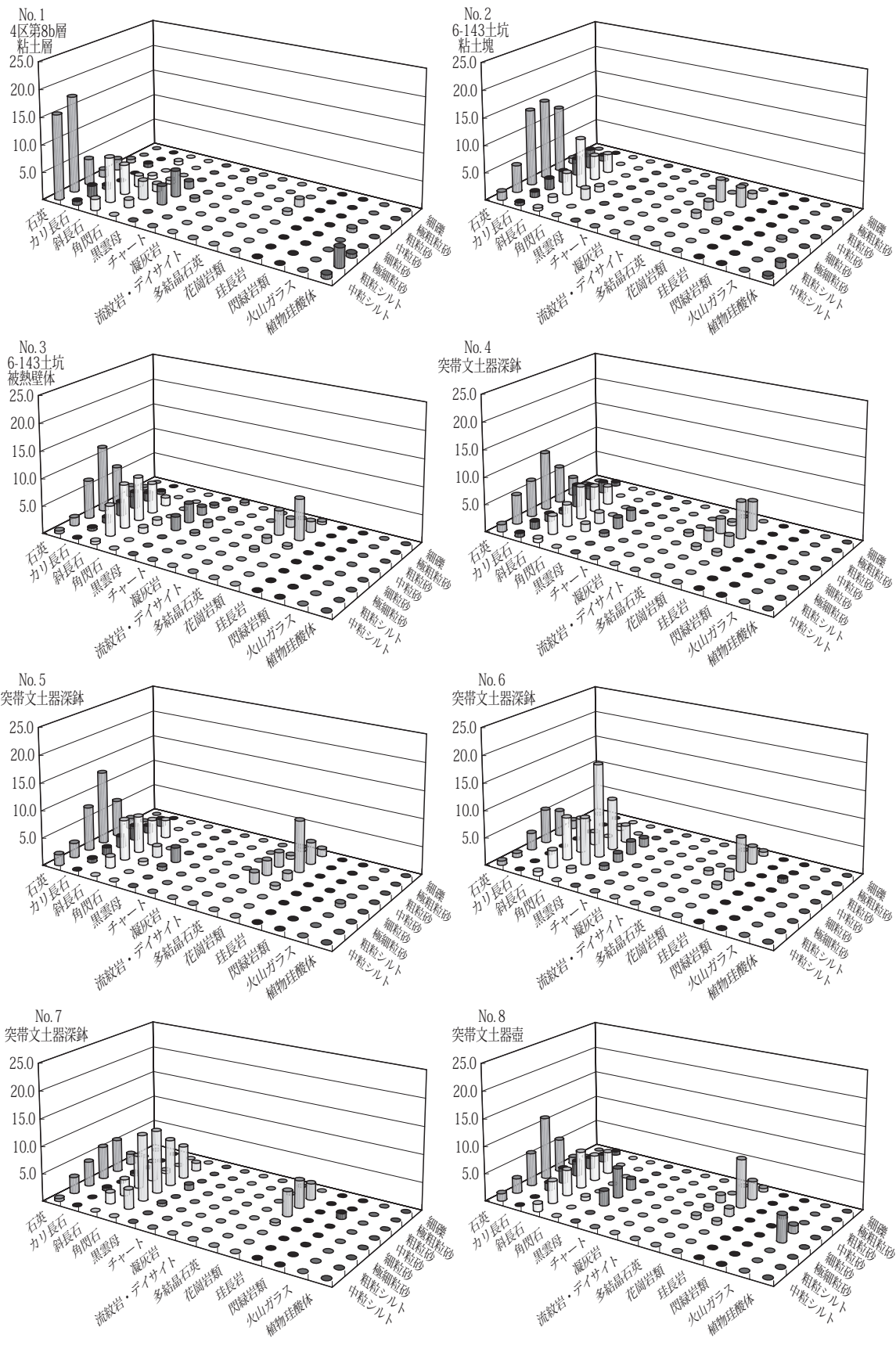


図 370 各粒度階における鉱物・岩石出現頻度 1



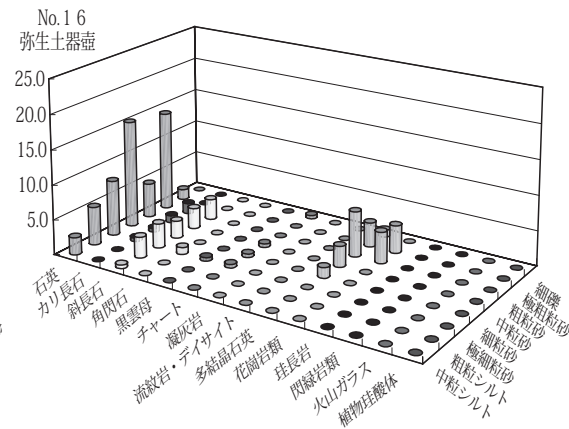
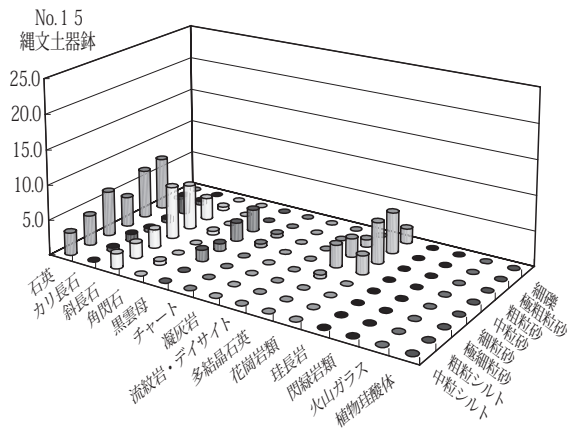
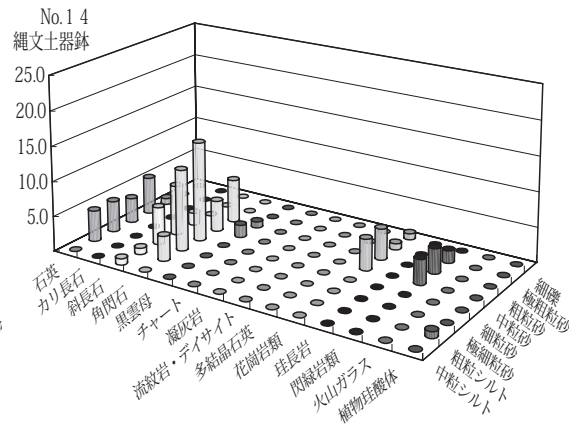
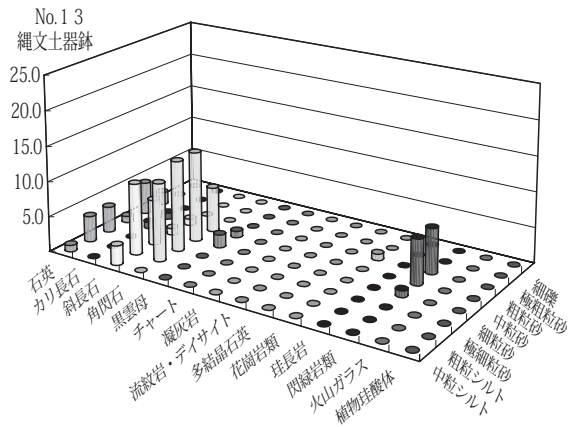
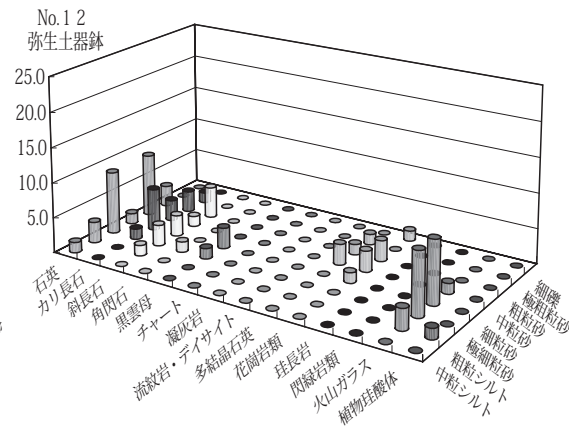
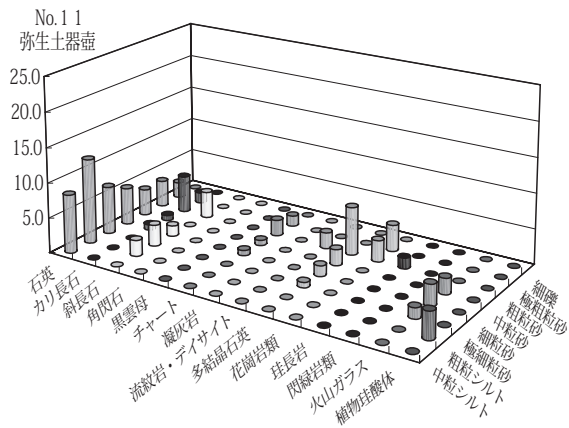
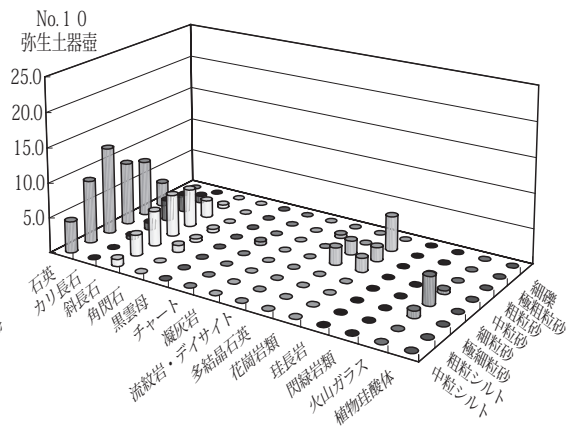
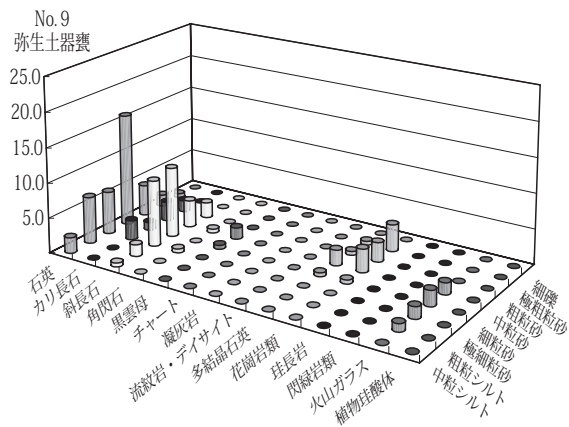


図 371 各粒度階における鉱物・岩石出現頻度 2

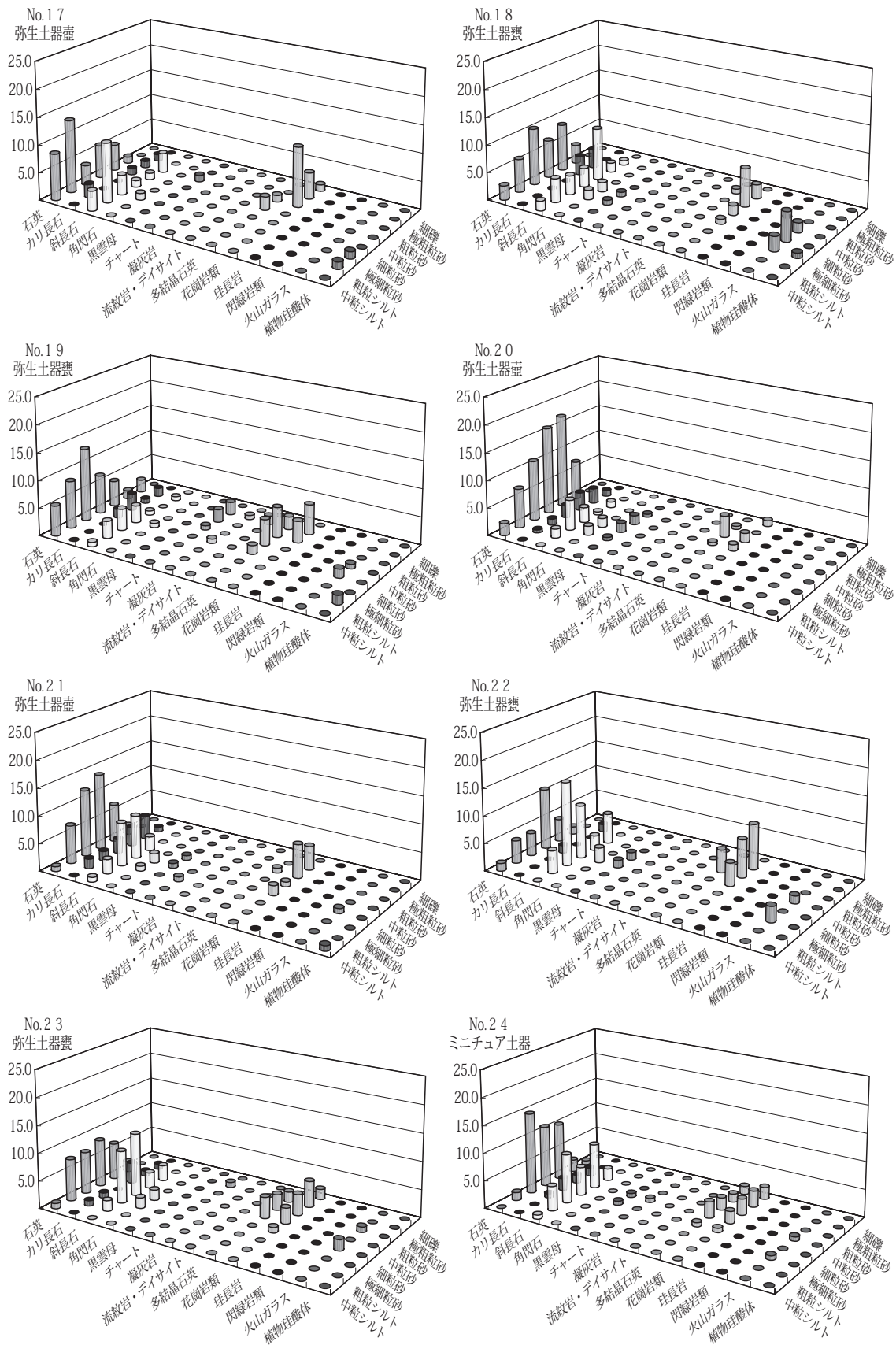


図 372 各粒度階における鉱物・岩石出現頻度 3

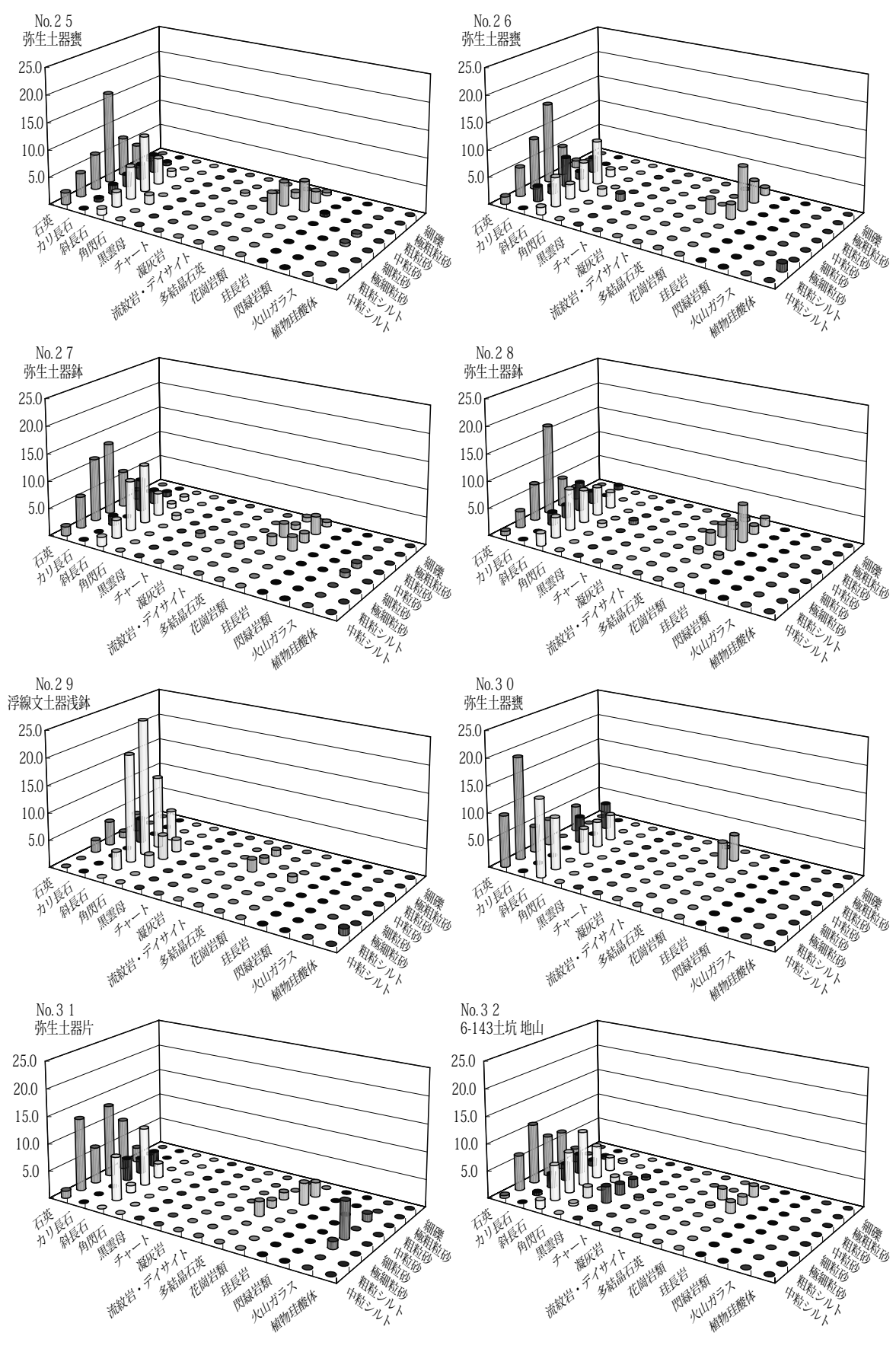


図 373 各粒度階における鉱物・岩石出現頻度 4



図 374 胎土中の砂の粒径組成

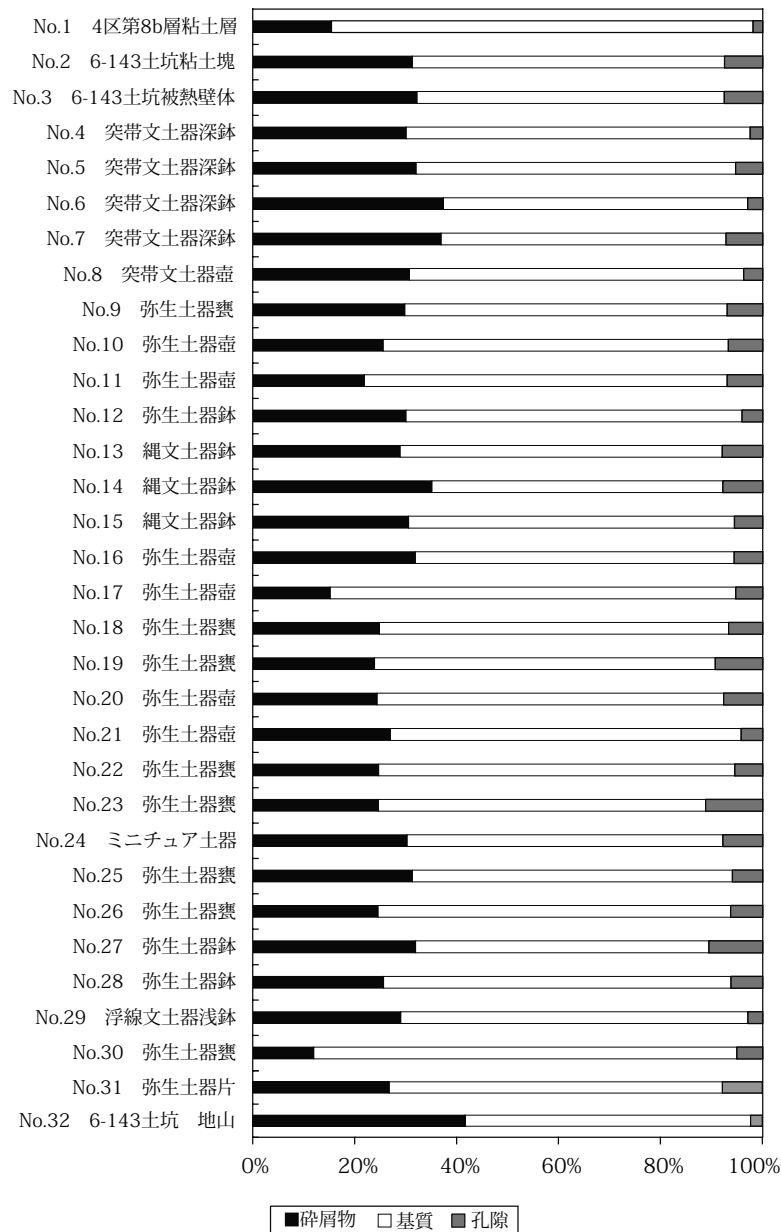


図 375 砂粒・基質・孔隙の割合

片では多結晶石英・花崗岩類以外にチャートを含む。また、火山ガラスを伴うものも多く、試料によっては微量の凝灰岩や流紋岩・デイサイトを含む。

D類: 鈎物片では石英・カリ長石・斜長石以外に、微量の角閃石を伴うが、黒雲母は含まない。岩石片では多結晶石英・花崗岩類を含むのみ。

E類: 鈎物片では多量の角閃石を含み、カリ長石は極めて微量かほとんど含まれない。岩石片では花崗岩類を比較的多く含み、閃緑岩類を伴う。多結晶石英はほとんど含まれない。

F類: 鈎物片では斜長石が多く、石英は少量、カリ長石は微量である。岩石片では少量の流紋岩・デイサイトと微量の花崗岩類を含む。

G類: 砂粒の全体量が少なく、鈎物片では少量の石英と斜長石および微量のカリ長石のみ、岩石片で

は微量の多結晶石英のみである。

#### b) 粒径組成

0類：極粗粒砂～極細粒砂がほぼ同率。

1類：粗粒砂をモードとする。

2類：中粒砂をモードとする。

3類：細粒砂をモードとする。

4類：極細粒砂をモードとする。

5類：粗粒シルトをモードとする。

6類：粒径組成が粗粒砂と粗粒シルトの双峰性を示す。

#### (2) 各試料の胎土分類

上記分類基準に従って各試料の胎土を分類した結果を表 22 に併記する。以下に各試料の胎土の状況を述べる。なお、文中では、鉱物・岩石組成と粒径組成を合わせた表記（例えば A1 類）も適宜用いる。また、焼成温度については、特に記載のない試料は全て、酸化角閃石が認められなかったことから 800℃未満であることが推定される。

##### 1) 4区第 8b 層粘土 (No.1)

鉱物・岩石組成は A 類、粒径組成は 5 類である。後述するように土器試料においては、A 類の試料はそれほど多くない。また、粒径組成 5 類を示す土器試料は認められない。

##### 2) 6-143 土坑試料 (No.2・3・32)

粘土塊 (No.2) の鉱物・岩石組成は D 類であり、土器試料には認められない組成であった。一方、その粒径組成は 3 類であり、今回の土器試料胎土のなかで最も多い粒径組成と同分類である。

被熱壁体 (No.3) の鉱物・岩石組成は A 類であり、上述した第 8b 層粘土と同様の組成である。また、粒径組成は 3 類であり、上述したように、今回の土器試料胎土の中で最も多い粒径組成と同様である。

土坑の地山と思われる部分 (No.32) の鉱物・岩石組成は被熱壁体と同様の A 類であり、上述した第 8b 層粘土と同様の組成である。しかし、粒径組成は 4 類であり、被熱壁体 (No.3) に比べて、粗粒砂が少なく極細粒砂が多い傾向を示す。

No.3 の赤色化の原因としては、変色部において弱酸化角閃石化している角閃石が散見されることから、焼成の影響と推定される。また、壁体表面部の基質粘土は、地山と考えられる部分の基質粘土に比べて淡色化が認められ、これも焼成に伴う粘土鉱物の非晶質化によるものと推定される。角閃石が酸化角閃石化する温度は、約 800℃程度とされており、粘土鉱物の非晶質化が起こる温度は 900℃付近とされている。したがって、壁体表面は、800～900℃程度の焼成を受けた可能性が示唆される。一方、地山と考えられる部分では、酸化角閃石や粘土の淡色化などの被熱の痕跡は認められない。

発掘調査時の肉眼観察においては、土坑の地山 (No.32) に比べ、被熱壁体 (No.3) が細粒傾向にあるように見えたことから、土坑壁体に粘土貼り付けが行われた可能性を考えた。実際に試料の肉眼観察では、壁面から内側にかけて厚さ 1～2cm 程度の赤色化・硬化している層準およびその内側 1cm 以下の黒色化している層準が明瞭に確認される (図 376)。上述したように顕微鏡下における土壌薄片観察では、変色した壁体表面部と変色の認められない地山と考えられる部分との間で、含まれる碎屑物の粒径組成に若干の違いが認められた。この違いは、壁体表面部が単に地山の変色したものではないことを示唆している可能性がある。ただし、顕微鏡下の観察では、変色部の境界は不明瞭であり、また、変色

部の境界付近には多量の植物根痕が認められ、その影響による攪乱等も考えられる。したがって、現時点では、壁体に粘土を貼り付けたということについて否定することはできないが、それを積極的に支持する材料も得られていない。一方、軟X線写真観察の結果、土坑壁表面をなす赤色硬化部分から、変質していない遺構のベース堆積物である第8b-4層にかけて、堆積・土壌構造に有意な違いは確認されない(図376:範囲A)。同様の傾向は、土壌薄片でも確認される。また、軟X線写真では赤色化部分および黒色化部分が、変質していない堆積物に対して、相対的に暗くなっている状況が確認される。軟X線写真画像では、より暗色な領域は相対的に堆積物の密度が低いことを示すことから、粘土などで充填されていない根痕や孔隙などは、周囲より相対的に暗色となる。このことから、土坑壁表層をなす赤色化および黒色化している部分は、明らかにその内側の堆積物とは密度が異なっていることになる。この軟X線写真画像上で暗色化している領域の拡大写真をみると、0.2mm程度の間隙が密度高く確認される(図376:範囲b)。このような構造は、被熱の影響を受けていないベース堆積物にかけて間隙密度が低下し、ベース堆積物では確認されない(図376:範囲c)。同様の状況は土壌薄片でも確認される。この土坑壁表面付近の間隙は、被熱による堆積物の収縮等によって生じた構造と判断される。

### 3) 3-267・268 溝出土試料 (No. 4～No.14)

突帯文土器のうち、生駒西麓産胎土とされたNo.6とNo.7はともにE類、それ以外の非生駒西麓産胎土とされた突帯文土器3点(No.4・5・8)はいずれもB類である。粒径組成では、No.7以外の4点が3類であり、No.7は中粒砂と細粒砂が同率でモードとなっている(2-3類として示す)。なお、No.6とNo.7で花崗岩類とした岩石片のほとんどは花崗閃緑岩である。また、これらには、角閃石の弱酸化角閃石化が認められたことから、その焼成温度は800℃弱程度であると推定される。

弥生土器では、No.9の甕が鉍物・岩石組成も粒径組成も、非生駒西麓産とされた突帯文土器と同様のB3類に分類され、No.12の舟底を持つ鉢は、粒径組成がやや粗粒となるB2類に分類された。なお、No.9には酸化角閃石が認められ、かつ、基質のセリサイトのガラス化が認められないことから、その焼成温度は800～900℃であることが推定される。

他の弥生土器では、No.10の大型壺がC2類に分類され、白色系胎土を持つNo.11の壺がC6類となった。なお、No.11はC類としたが、他の試料ではほとんど含まれない流紋岩・デイサイトの量比がやや高いことから、後述する地質学的背景も考慮すると、特にC'類として区別しておきたい。

No.13とNo.14の鉢は、小型の鉢で一見は弥生土器の無頸壺にも似るが、胴部の屈曲が弱い。No.14の断面中の接合線は内傾接合による成形が行われたことを示しており、縄文土器の鉢の可能性が高いといえる。その胎土は生駒西麓産胎土とされた突帯文土器(No.6・7)と鉍物・岩石組成が同様のE類に分類された。特にNo.14については、粒径組成もNo.6・7の突帯文土器と同様の3類となり、E3類に分類される。No.13については、より細粒のE5類に分類された。弥生時代前期面で検出された遺構から出土した弥生土器の中には、生駒西麓産胎土のものが認められず、この点でも二つの鉢が縄文土器であることが支持される。

### 4) 篠原式に類似する鉢 (No.15)

鉍物・岩石組成は、突帯文土器とは異なり、4区第8b層粘土と同様のA類であり、粒径組成は突帯文土器より粗粒傾向を示す1類である。

### 5) 5-973 土坑出土の弥生土器 (No.16)

弥生土器の壺底部の試料であり、底部外面の中心部に特徴的なシワが見られ、他の弥生土器とは異な

る技法によって、底部の成形が行われている可能性が考えられる試料である。鉱物・岩石組成は4区第8b層粘土と同様のA類であるが、粒径組成は他の多くの弥生土器より粗粒傾向の1類に分類された。なお、No.16には酸化角閃石が認められ、かつ、基質のセリサイトのガラス化が認められないことから、その焼成温度は800～900℃であることが推定される。

#### 6) 5-979 土坑出土の弥生土器 (No.17・18)

2点の試料のうち、白色系胎土を持つNo.17の壺は、鉱物・岩石組成は4区第8b層粘土と同様のA類であるが、粒径組成は上述した白色系胎土のNo.11と同様の6類に分類された。また、No.17には酸化角閃石が認められ、かつ、基質のセリサイトのガラス化が認められないことから、その焼成温度は800～900℃であることが推定される。一方、白色系胎土ではないNo.18の甕は、鉱物・岩石組成はB類、粒径組成は2類に分類された。

#### 7) 6-123 溝出土弥生土器 (No.19)

やや長胴の甕で、胴部に焼成破裂痕と呼ばれる土器焼成時の特徴的な破損痕跡が認められている。鉱物・岩石組成はC類に分類された。ただし、微量伴う凝灰岩および流紋岩・デイサイトの岩石片は、基質の結晶化が進んでいることが観察されたことから、その由来は、中生代に形成されたいわゆる古期岩類の火砕岩に由来する。なお、前述したNo.11も含めて、他の試料に認められた凝灰岩および流紋岩・デイサイトの岩石片は、基質のほとんどがガラスであり、比較的新鮮なことから、いずれも新第三紀以降に形成された、いわゆる新期の火砕岩類に由来する。このことから、本試料のC類は、特にC'類として区別する。

また、本試料の粒径組成は、今回の試料の中では唯一の0類を示す。

#### 8) 6-124 土坑出土弥生土器 (No.20～24)

5点の試料のうち、No.20の壺とNo.22の甕は、ともに鉱物・岩石組成はB類であり、粒径組成は、前者は2-3類、後者は3類である。No.20は、肉眼観察では、やや赤味が強く精良な胎土を持つものに見え、今回の分析対象としたが、胎土の鉱物・岩石組成からみれば、他の多くの弥生土器にも認められるB類を示し、特別に異なるものではなかった。やや細粒傾向の粒径組成が認められることから、精良とされた感じを受けるものかもしれないが、4類や5類のように顕著な細粒傾向を示すものでもない。No.22については、鉱物・岩石組成および粒径組成ともに突帯文土器と同様であり、後述するように、今回の試料だけでみれば、B3類は、弥生土器試料の中で最も多い胎土分類である。

No.21の壺とNo.24のミニチュア土器は、ともに鉱物・岩石組成はA類であり、粒径組成は、前者は3類、後者は2類である。刻目段の見られるNo.23の甕は、C3類である。

#### 9) 6-144 土坑出土弥生土器 (No.25)

No.25は、段の上の頸部に2条の沈線が施された甕である。本調査区において同様の施文のある土器は出土していない。鉱物・岩石組成および粒径組成ともに、他の比較的多くの弥生土器と同様のB3類である。

#### 10) 6-157 土坑出土弥生土器 (No.26・27)

No.26は、口縁部下端を摘み出して強調し刻目を入れるもので、最近の研究では、口縁下端凸状甕と呼ばれる資料に類する甕と考えられ、本調査区でもいくつかの該当資料がある。No.26の口縁部下端の摘み出しは比較的明瞭であり、他資料に比べて形式学的には古い様相を示すといえる。鉱物・岩石組成および粒径組成ともに突帯文土器および他の比較的多くの弥生土器と同様のB3類である。



No.27 の鉢は、C3 類に分類された。No.27 は、他の土器に比べて赤味が強いのが特徴であるが、顕微鏡下では、胎土の基質中に多量の酸化鉄が含まれている状況が観察された。色調は、この多量の酸化鉄に由来すると考えられる。なお、No.27 には酸化角閃石が認められ、かつ、基質のセリサイトのガラス化が認められないことから、その焼成温度は 800～900℃であることが推定される。他の多くの弥生土器に比べて若干焼成温度が高いことも、赤味の強い色調の一因となっている可能性がある。

#### 11) 5-991 溝出土弥生土器 (No.28)

器表が丁寧に磨かれ、黒色磨研土器の可能性が考えられる鉢であるが、その胎土は、鉱物・岩石組成および粒径組成ともに突帯文土器および他の比較的多くの弥生土器と同様の B3 類である。

#### 12) 6 区 8a-2 層出土浮線文土器 (No.29)

浮線文土器の浅鉢であり、外面器表には水銀朱を混和した漆の塗膜が確認される。鉱物・岩石組成は他の試料とは全く異なる F 類である。ただし、粒径組成は、今回の多くの試料と同様の 3 類である。また、酸化角閃石が認められ、かつ、基質のセリサイトのガラス化が認められないことから、その焼成温度は 800～900℃であることが推定される。

#### 13) 5 区 8a 層出土弥生土器 (No.30)

白色系胎土で、弱く外反する口縁端部の上面に沈線を持つ甕である。当遺跡からの同様の器形・施文を持つ土器の出土は他になく、搬入品の可能性が考えられた。鉱物・岩石組成は他の試料とは全く異なる G 類である。また、粒径組成は、同様に白色系胎土を持つ No.11・17 と同じく 6 類を示す。

#### 14) 3-267・268 溝出土弥生土器 (No.31)

焼成失敗品のうち、焼成破裂土器片と呼ばれる土器片で、焼成時に器面から剥離したと思われる特徴的な形状と破損痕跡を持つ。鉱物・岩石組成のうち、岩石片の組成は B 類または D 類に似るが、鉱物片の組成において角閃石も黒雲母も含まれない。相対的には、両者を含む B 類よりは、片方の角閃石しか含まない D 類に近いといえることから、ここでは D 類とする。また、粒径組成は 3 類に分類される。

## 5. 考察

### (1) 胎土の地域性について

胎土中の砂粒における鉱物片および岩石片の種類構成は、胎土の材料となった砂や粘土などの堆積物が採取された場所の地質学的背景を示唆しているといえる。前述したように今回の試料の胎土における鉱物片および岩石片の種類構成は A 類から G 類までの 7 種類に分類された。これらのうち、A 類は、4 区第 8b 層の粘土および 6-143 土坑の被熱壁体の組成であることから、いわゆる在地の組成を示すとしてよい。大阪平野周辺の地質を YOSHIZAWA et al (1965)、河田ほか (1986)、市原ほか (1991)、宮地ほか (1998・2001) などの地質図と日本の地質「近畿地方」編集委員会 (1987) などの記載により概観すると、讃良郡条里遺跡が所在する大阪平野北東部の背景となる主要な地質は、生駒山地北部を構成する領家帯の花崗岩類であり、さらに淀川水系でみれば、木津川や宇治川および桂川を通じて京都盆地の南東方と北西方の山地を構成する丹波帯とよばれる頁岩・砂岩・チャートなどの堆積岩からなる地質である。A 類に認められた碎屑物のうち、鉱物片の主体を占める石英、カリ長石、斜長石は主に花崗岩類に由来すると考えられ、角閃石および黒雲母も同様に花崗岩類に由来すると考えられる。また、多結晶石英は、おそらく花崗岩類の破砕片に由来すると考えられる。したがって、A 類の鉱物片・岩石片の種類構成は、大阪平野北東部の地質学的背景を反映している。

B 類は A 類からチャートが欠けた組成、C 類は A 類から黒雲母が欠けた組成、D 類は A 類から黒雲母

とチャートが欠けた組成とみることができる。これらのうちD類は、今回の試料では6-143土坑底部より出土した粘土塊（No. 2）および焼成破裂土器片（No.31）に認められた。6-143土坑については、明確な根拠は少ないものの土器焼成施設の可能性が考えられている。今回の分析により、No.3の壁体に800～900℃の被熱が推定されたことも、この所見を支持するものである。

また、焼成時に器体から剥離した土器小片である焼成破裂土器片は、再利用などもできないことから生産地付近に廃棄されると考えられており（田崎2007）、周辺で土器の製作が行われていた可能性を示唆する。これと同様の組成を示した粘土塊は、土器の素地土もしくは、土器焼成作業に伴い何らかの効果・機能を持って使用された粘土である可能性がある。そのような粘土の遠方よりの搬入は想定しがたく、D類の組成も讃良郡条里遺跡周辺の地質を反映していると考えられる。その場合、D類よりも、よりA類に近い組成を示すB類およびC類についても讃良郡条里遺跡周辺の地質を反映している可能性が高い。

なお、B類およびC類に含まれることが多い火山ガラスは、形態が比較的明瞭であることから、第三紀鮮新世～第四紀更新世の大阪層群中に挟在するテフラ層（例えば吉川1976など）に由来する可能性が高い。大阪層群は、大阪平野北東部に分布する段丘および丘陵を構成している地質であるから、火山ガラスの含有についても、その示唆する地域は大阪平野北東部としてよい。

ただし、C'類として区別した流紋岩・デイサイトについては、上述した大阪平野北東部の背景となる地質とは異質な岩石である。上述した地質図や記載から、大阪平野周辺域における流紋岩・デイサイトの分布をみると、それは金剛山地北部の二上山周辺に分布する新第三紀の火山岩および凝灰岩からなる二上層群にほぼ限定される。水系からみて、二上層群に由来する碎屑物が分布する範囲は、八尾市など大阪平野南東部に推定されるため、この地域が、C'類の示す地域に相当する可能性がある。なお、藤井寺市所在の古墳出土埴輪および土師の里埴輪窯出土埴輪の胎土分析例（矢作ほか2003・2004、矢作2005）で認められた鉱物片・岩石片の種類構成は、今回のC'類とよく類似している。弥生土器とは種類も時代も異なる試料の分析結果ではあるが、その地域の堆積物を使用した例として参考になり得る事例であると考えられる<sup>註1</sup>）。

さらに、C''類として区別した古期岩類に由来する凝灰岩および流紋岩・デイサイトについては、至近の分布域としては、兵庫県南東部に分布する有馬層群をあげることができる。有馬層群は、白亜紀後期に形成された流紋岩・デイサイトの溶岩や溶結凝灰岩および同岩質の凝灰岩からなる地質である。兵庫県南東部には、有馬層群の分布域に接して白亜紀の花崗岩類や上述した丹波帯の分布域も広がっており、例えば武庫川や猪名川流域の堆積物を想定した場合にC''類のような鉱物・岩石組成を考えることができる。また、実際に猪名川左岸に位置する伊丹市小阪田遺跡出土の弥生時代後期の土器胎土の多くが今回のC''類と同様の組成を示している（矢作・石岡2006）。

E類は、上述したA～D類とは角閃石の量比と閃緑岩類の岩石片を含むことで、その地質学的背景は異なり、したがって示唆する地域性も異なっていると考えられる。E類の特徴である角閃石は、閃緑岩類の岩石片を伴うことから、至近の地質でみれば、生駒山地北部を構成する中粒塊状花崗閃緑岩（生駒山地領家帯研究グループ1986）に由来する可能性がある。さらに、多量の角閃石の中には、生駒山地の中部を構成する角閃石斑れい岩（生駒山地領家帯研究グループ1986）に由来するものも混在していると考えられる。今回の分析では、E類に分類された試料のうち、No.7とNo.8については肉眼観察で、生駒西麓産胎土が使用されていることを想定しており、分析結果はこれを支持するものである。

F類は、石英が少量しか含まれずに斜長石が突出して多いことにより、A～D類ともまたE類およびG類とも大きく異なる組成である。一般的に河川によって形成される沖積低地では、その碎屑物の鉱物組成として、風化変質に対して最も抵抗力の強い石英が最も多くなる。しかし、ある岩石からなる崖の下に形成された崖錘堆積物などは、崖の岩石に由来する鉱物が圧倒的に多いであろうから、必ずしも石英が多くはならない。F類の胎土の地質学的背景は、このような局地的な地質を反映している可能性がある。F類の場合、斜長石、石英に次いで多い鉱物は角閃石であり、また岩石片では流紋岩・デイサイトが少量認められることから、おそらく流紋岩・デイサイトの分布する地質をすぐ背後に有する場所の堆積物に由来すると考えられる。C'類の説明でも述べたように、至近の地質では、新期の流紋岩・デイサイトの分布は二上層群にほぼ限定される。ただし、二上層群も詳細にみれば、安山岩質の火山岩類や砂岩などの堆積岩類の分布もあり、流紋岩・デイサイト質の岩石の分布はさらに限定的である（二上山地学研究会 1986）。F類に分類された今回の試料はNo.29のみであり、No.29は、関東から中部地方にかけて主な分布域をもつとされている文様の縄文土器であることを考慮すれば、現時点で、F類の由来する地域を二上山周辺に限定することはできない。F類の地質学的背景については、大阪平野周辺地域を離れた広域的な地質も視野に入れる必要があると考えられる。

G類については、砂粒全体が少量であることを特徴としたのであるが、鉱物・岩石組成自体は、D類からさらに花崗岩類の欠けたものという見方もできる。したがって、地域性自体は、大阪平野北東部の可能性もあると考えられる。

## （2）胎土の比較

### a) いわゆる「在地」の胎土

今回の分析結果のみから判断すれば、B類の胎土が最も多かったことから、讃良郡条里遺跡におけるいわゆる在地を示す胎土はB類であると考えられる。さらに、粒径組成については3類に分類された試料が最も多かった。したがって、現時点では、B3類に分類される胎土を有する土器が、讃良郡条里遺跡における最も在地性の高い土器であると考えることができる。B3類の胎土は、弥生土器試料では20点中5点に認められる。

また、B3類の胎土は、非生駒西麓産とされた突帯文土器3点全てに認められたことから、讃良郡条里遺跡においては、縄文時代晩期終末の土器に使用された素地土（成形直前の状態の土という意味で用いる）が、弥生土器の製作にも共通して使用されていた可能性がある。

B3類に次いで在地性が高いとされるのは、粒径のみが若干異なるB2類であり、4区第8b層粘土および6-143土坑壁体と鉱物・岩石組成が同様のA類を示し、かつ、粒径組成が2類および3類を示す胎土であるA2類とA3類である。B2類にはNo.12の舟底を持つ鉢やNo.18の甕が分類されているが、これらは、B3類に次いで讃良郡条里遺跡における在地性の高い土器と言える。B2-3類に分類されたNo.20の壺、A2類に分類されたNo.24のミニチュア土器およびA3類に分類されたNo.21の壺なども在地性が比較的高いと言える。

なお、No.20～No.24はいずれも6-124土坑出土土器であり、No.22はB3類である。残るNo.23の甕は刻目段を持つ特殊品であるが、その胎土はC3類を示している。前述したようにC類の地域性はA～D類と同様であることと3類の粒径組成が今回の試料中最も多く認められたことを考慮すれば、C3類の在地性も比較的高いと考えられる。C3類の胎土は、6-157出土の鉢（No.27）にも認められている。

また、C3類よりやや粗粒傾向を示すC2類という胎土がNo.10の大型壺に認められる。これは、C3類に次いで在地性が高い胎土ということができよう。

b) 4区第8b層の粘土について

4区第8b層の粘土(No.1)と鉱物・岩石組成が同様のA類の胎土を持つ土器試料は、No.15の縄文土器1点およびNo.17、No.21、No.24の弥生土器3点に認められたが、4区第8b層の粘土と粒径組成が同様の5類の試料は、今回の試料では認められなかった。土器を製作する際には、採取した粘土をそのまま使用するのではなく、強度や耐火力を増すために、岩石片や有機物の混和材を混ぜ込んで素地土(成形直前段階の土)とする。そのため土器胎土(素地土を成形し焼成した後の土)の粒径組成は混和材の影響により粗粒傾向を示し、反対に混和材を含まない第8b層は細粒傾向を示すことになると考えられる。つまり、第8b層の示すA5類は、混和材混入前の粘土の状況を示すものと理解できよう。

c) 弥生土器の搬入品について

今回の弥生土器の中には白色系胎土を持つ試料がNo.11、17、30の3点あり、特徴的な胎土と器形・調整技法から、いずれも搬入品である可能性が考えられた。これら3点の胎土をみると粒径組成が、いずれも6類を示している。6類とした粒径組成は、在地性の高い2類や3類の粒径組成とは大きく異なることから、これら3点の試料を搬入品とする所見と整合する結果と言える。さらに、No.11については、鉱物・岩石組成の地域性において在地のものとは異質な様相を示すC'類であること、No.30については他の試料には認められないG類であることなども、これらが搬入品である可能性を支持している。

なお、今回の弥生土器試料の中で、白色系胎土とされた試料以外に搬入品である可能性があるものとして、No.19の甕をあげることができる。前述したように、胎土の鉱物・岩石組成から推定される地域性は、近くとも大阪平野北西部であり、粒径組成においても2類や3類とは大きく異なる0類に分類されているからである。第6章第3節で述べたように、No.19は焼成失敗品と考えられ、外面器表には「焼成破裂痕」と呼ばれる破損痕跡が認められるが、焼成破裂痕による破損自体は浅く、器体に孔が空くまでに至っていないため、製品として使用・流通していたと考えられる。口縁下端部を摘み出し、無段で比較的長胴となる器形は他資料と比べて若干の違和感があり、搬入品である可能性を支持するものと思われる。

d) 縄文土器の胎土について

前述したように非生駒西麓産とされた突帯文土器3点は、いずれも讃良郡条里遺跡において最も在地性の高い胎土のB3類であった。3点は、それぞれ一条突帯深鉢、二条突帯深鉢、深鉢変容壺という器種・施文方法の違いがあるが、これらの属性による胎土の相違は、現時点では認められない。また、生駒西麓産とされた2点の突帯文土器も、一条と二条で突帯条数が異なるが、胎土はE3類とE2-3類であり、その差異は明瞭ではない。

No.15は、突帯文土器よりも一段階古い篠原式の可能性があるとした縄文土器であるが、その胎土はA1類であり、突帯文土器とは生駒西麓産とも非生駒西麓産とも異なる鉱物・岩石組成および粒径組成を示す。A類という胎土は、讃良郡条里遺跡における在地性が高いことから、一般的に生駒西麓産胎土を特徴とする縄文時代晩期末の突帯文土器より古い段階では、製作地付近の在地性の高い素地土が使用されていた可能性がある。ただし、今回は1点のみの分析であり、本調査では篠原式の可能性のある土器資料の出土自体が他にないため、突帯文土器より古い段階における縄文土器の胎土の様相については、より多くの分析例を得る必要がある。

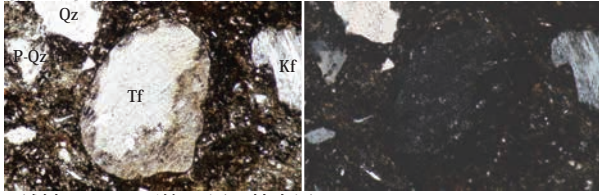
No.29 の浮線文土器については、F 類の地域性で述べたように、讃良郡条里遺跡の地質学的背景とはかなり異質の胎土を有している。F 類の特徴である流紋岩・デイサイトは、日本全国各地に広く分布している地質であることから、現時点では、その地域性を絞ることはできない。中部高地を主体として、西日本まで分布の見られる浮線文土器について、考古学・自然科学両面からの研究が進展し、その地域性についての所見が示されるようになった段階で、より具体的な検証が可能になる。

註1) 肉眼観察ではあるが、兵庫県神戸市の玉津田中遺跡の弥生前期土器の中に、試料 No.11 (C' 類) によく似た胎土を持つ弥生前期土器群を確認した。玉津田中遺跡は明石川の流域に立地する。明石川の上流には、試料 No.19(C'' 類) の地質背景を構成する有馬層群がその分布の西限を見せ、流域の丘陵や段丘には火山ガラスからなるテフラを含む大阪層群が分布することから、明石川流域は C'' 類の示す候補地域の一つとして考えることができる。一方、C' 類については、その特徴とする流紋岩・デイサイトの基質がガラス質であることから由来する地質の候補として新第三紀の二上層群をあげた。ただし、有馬層群のような古期岩類の流紋岩・デイサイトにもガラス質の基質を持つ岩石は少なからず含まれている。試料 No.11 中に含まれている流紋岩・デイサイトの岩石片が微量であることを考慮すれば、試料 No.11 の胎土中の流紋岩・デイサイトが、有馬層群のような古期岩類に由来する可能性も全く否定することはできないため、C' 類の示す候補地域の一つとしても考えることはできる。しかし、周辺で同様手法を用いた分析の実施例はない。蛍光 X 線などを用いた分析でも同様であるが、産地同定には全国各地の分析データが必要となる。搬入品と考えられる試料については、本文中でもある程度の地域性を示したが、あくまで周辺地域で得られた分析データに基づいた想定であることを明記しておき、今後のデータの蓄積を期したい (中尾)。

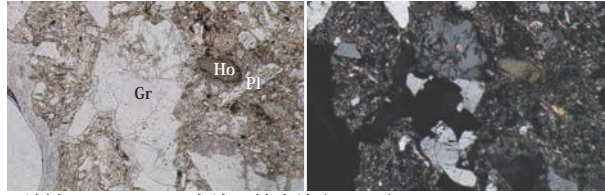
#### 引用・参考文献

- 市原実・吉川周作・三田村宗樹・水野清秀・林隆夫 1991 「大阪とその周辺地域の第四紀地質図」『アーバンクボタ』30
- 生駒山地領家帯研究グループ 1986 「生駒山はんれい岩体について」『地球科学』40 p102-114
- 河田清雄・宮村学・吉田史郎 1986 『20 万分の 1 地質図幅 京都及大阪』地質調査所
- 松田順一郎・三輪若葉・別所秀高 1999 「瓜生堂遺跡より出土した弥生時代中期の土器薄片の観察—岩石学的・堆積学的による—」『日本文化財科学会第 16 回大会発表要旨集』p120-121
- 宮地良典・田結庄良昭・吉川敏之・寒川旭 1998 「大阪東南部地域の地質」『地域地質研究報告 (5 万分の 1 図幅)』地質調査所
- 宮地良典・田結庄良昭・寒川旭 2001 「大阪東北部地域の地質」『地域地質研究報告 (5 万分の 1 図幅)』地質調査所
- 成岡市 1993 「土壌粗孔隙の形態とその測定法 土壌の不均一性と物質移動の研究前線」『日本土壌肥料科学雑誌』64-1 p90-97
- 日本の地質「近畿地方」編集委員会 1987 『日本の地質 6 近畿地方』共立出版
- 二上山地質研究会 1986 「二上層群の原川累層・定ヶ城累層の層序とサヌキトイドの活動時期」『地球科学』40 p89-101
- 矢作健二 2005 「土師の里埴輪窯跡群出土埴輪の胎土分析」『石川流域遺跡群発掘調査報告 XX』藤井寺市文化財報告第 25 p78-94
- 矢作健二・石岡智武 2006 「小阪田遺跡出土弥生土器の胎土分析」『小阪田遺跡 大阪府道・兵庫県道高速大阪池田線 (延伸部) 建設に伴う埋蔵文化財調査報告書』兵庫県文化財調査報告第 297 冊 p62-76 兵庫県教育委員会
- 矢作健二・辻康男・辻本裕也 2003 「古市古墳群とその周辺古墳出土の埴輪胎土分析」『石川流域遺跡群発掘調査報告 XVIII』藤井寺市文化財報告第 23 集 p157-176
- 矢作健二・辻康男・辻本裕也 2004 「藤井寺市内出土埴輪の胎土分析」『石川流域遺跡群発掘調査報告 XIX』藤井寺市文化財報告第 24 集 p94-122
- 吉川周作 1976 「大阪層群の火山灰層について」『地質学雑誌』82 p497-515
- YOSHIZAWA,H.,NAKAJIMA,W.,and ISHIZAKA,K.,1965,The Ryoke metamorphic zone of the Kinki district,southwest Japan: Accomplishment of a regional geological map.Mem.Coll.Sci.,Univ.Kyoto,Ser.B,vol.32,p437-454
- 田崎博之 2007 「土器焼成失敗品からみた焼成方法と生産体制」『土器研究の新視点』考古学リーダー 9 六一書房

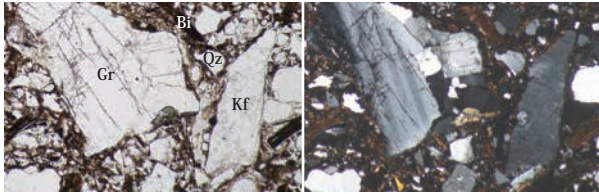
胎土薄片写真(1)



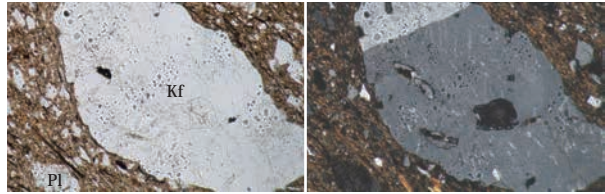
試料No.1 4区第8b層 粘土層



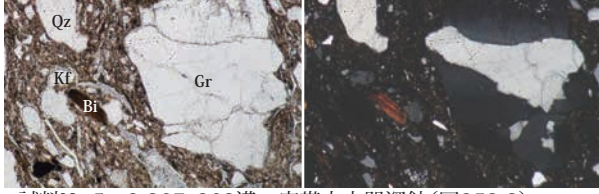
試料No.2 6-143土坑 粘土塊(図288)



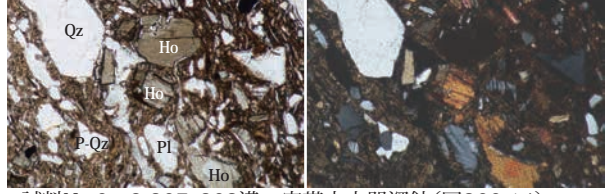
試料No.3 6-143土坑 被熱壁体(図288)



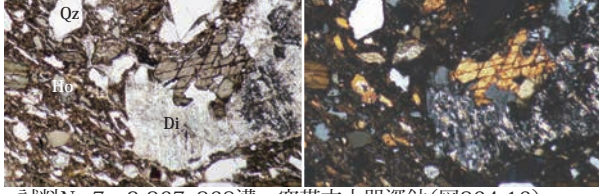
試料No.4 3-267・268溝 突帯文土器深鉢(図263-13)



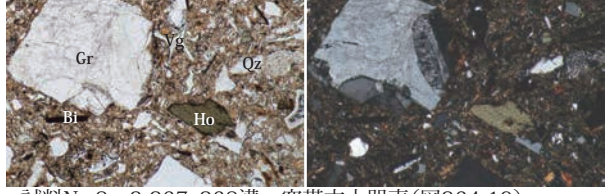
試料No.5 3-267・268溝 突帯文土器深鉢(図258-8)



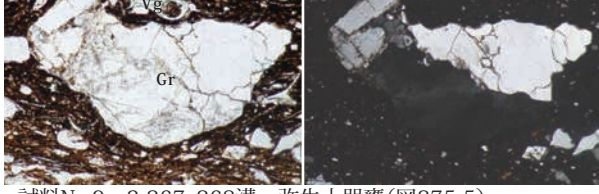
試料No.6 3-267・268溝 突帯文土器深鉢(図266-14)



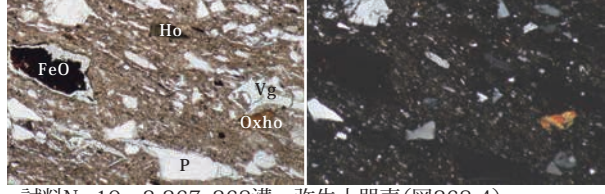
試料No.7 3-267・268溝 突帯文土器深鉢(図264-16)



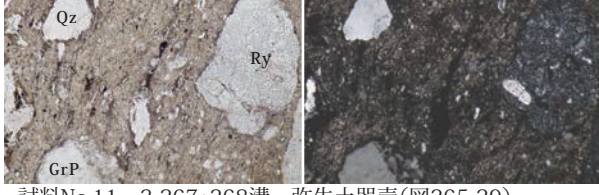
試料No.8 3-267・268溝 突帯文土器壺(図264-19)



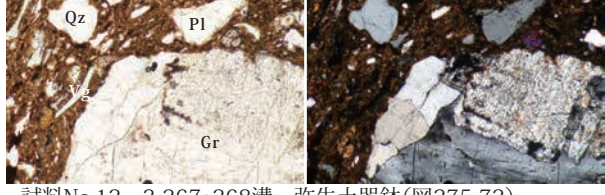
試料No.9 3-267・268溝 弥生土器甕(図275-5)



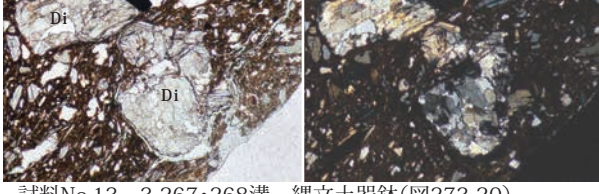
試料No.10 3-267・268溝 弥生土器壺(図268-4)



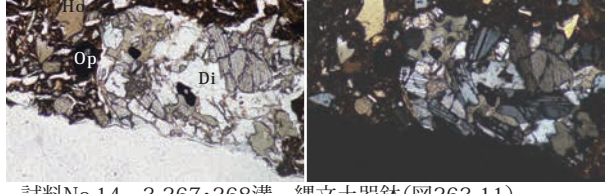
試料No.11 3-267・268溝 弥生土器壺(図265-29)



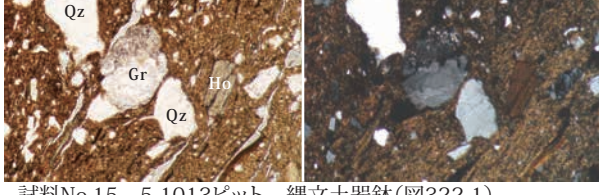
試料No.12 3-267・268溝 弥生土器鉢(図275-72)



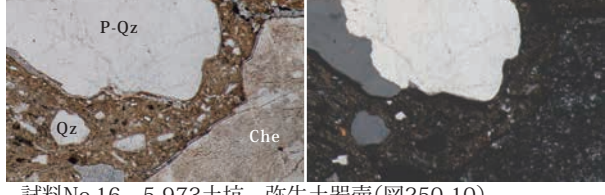
試料No.13 3-267・268溝 縄文土器鉢(図273-20)



試料No.14 3-267・268溝 縄文土器鉢(図263-11)



試料No.15 5-1013ピット 縄文土器鉢(図322-1)

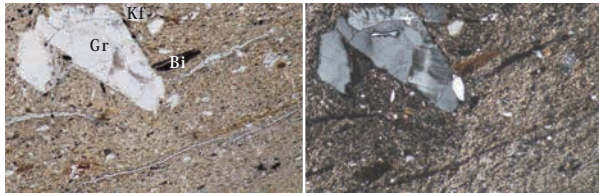


試料No.16 5-973土坑 弥生土器壺(図250-10)

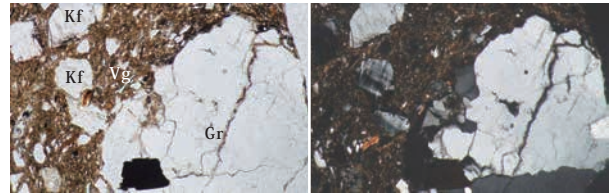
Qz:石英, Kf:カリ長石, Pl:斜長石, Ho:角閃石, Oxho:酸化角閃石, Bi:黒雲母, Tf:凝灰岩, Op:不透明鉱物, Che:チャート, Ry:流紋岩, Gr:花崗岩, GrP:花崗斑岩, Vg:火山ガラス, FeO:水酸化鉄, P:孔隙, P-Qz:多結晶石英, Di:閃緑岩, 写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

0.5mm

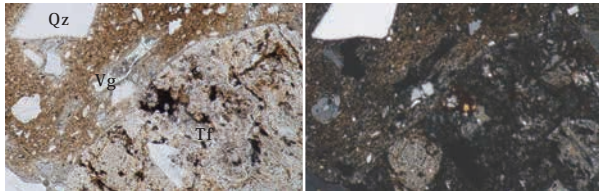
胎土薄片写真(2)



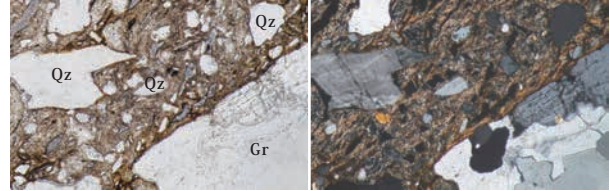
試料No.17 5-979土坑 弥生土器壺(図250-5)



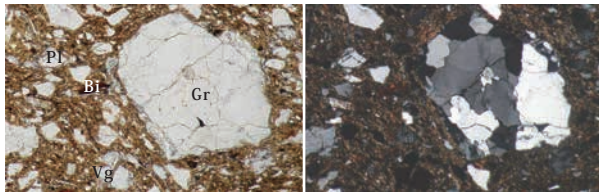
試料No.18 5-979土坑 弥生土器甕(図250-8)



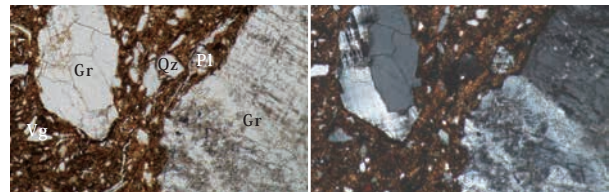
試料No.19 6-123溝 弥生土器甕(図286-16)



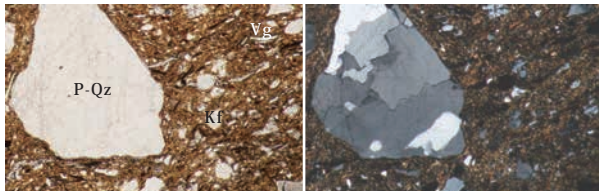
試料No.20 6-124土坑 弥生土器壺(図246-10)



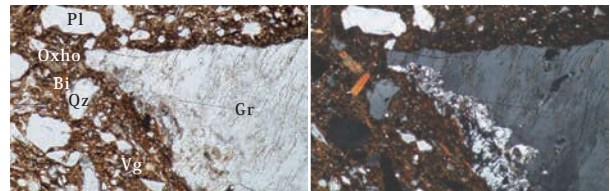
試料No.21 6-124土坑 弥生土器壺(図246-9)



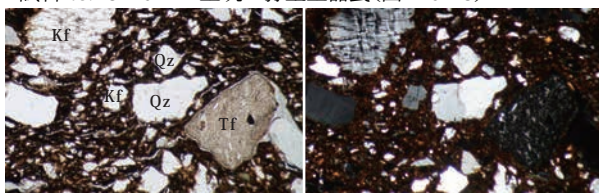
試料No.22 6-124土坑 弥生土器甕(図246-17)



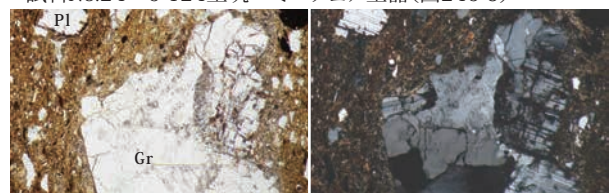
試料No.23 6-124土坑 弥生土器甕(図246-23)



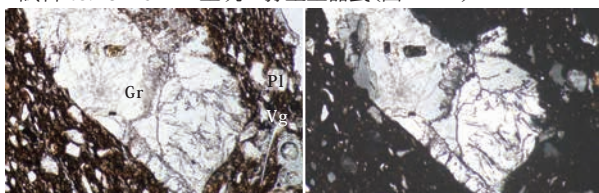
試料No.24 6-124土坑 ミニチュア土器(図246-5)



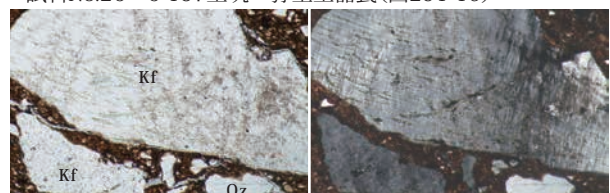
試料No.25 6-144土坑 弥生土器甕(図244-2)



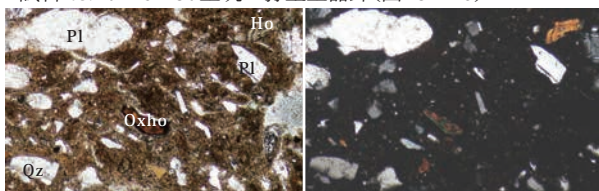
試料No.26 6-157土坑 弥生土器甕(図291-10)



試料No.27 6-157土坑 弥生土器鉢(図291-20)



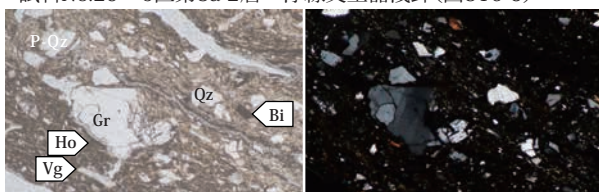
試料No.28 6-991溝 弥生土器鉢(図284-9)



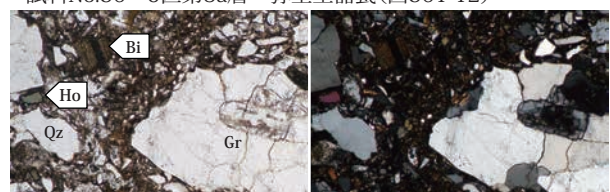
試料No.29 6区第8a-2層 浮線文土器浅鉢(図310-5)



試料No.30 5区第8a層 弥生土器甕(図301-12)



試料No.31 3-267・268溝 弥生土器片(実2908)



試料No.32 6-143土坑 地山(図288)

0.5mm

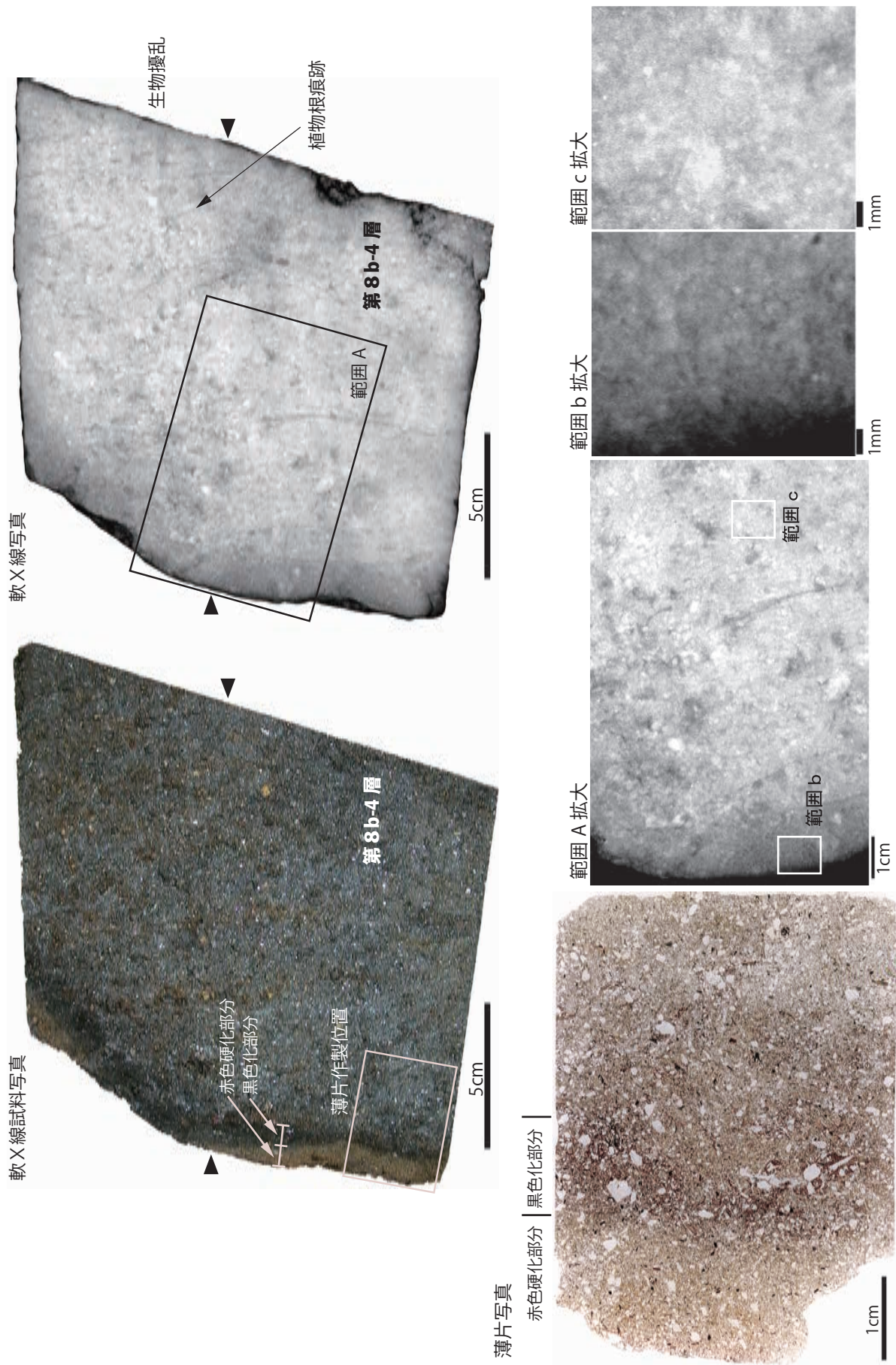


図 376 試料 No. 3・32 土壤薄片および土壤軟 X 線写真



## 第5節 浮線文土器浅鉢の赤色塗膜および黒色層の材質分析

### はじめに

第8b面で検出された建物22の西方包含層より、浮線文土器が2点出土した(図310-4・5)。図310-5の外面器表には広い範囲で赤色を呈する塗膜が観察され、塗膜直下には下地と思われる黒色層が確認された。また内面器表の一部にも肉眼では膜状に見えないものの、赤色を呈する塗膜が認められた。そこで、これらの塗膜および下地の材質を検討するため、平成17年度に赤外分光分析・元素マッピング分析を行い、その結果を踏まえて、平成18年度に塗膜部を含む断面薄片の光学顕微鏡観察およびEPMA分析を行った。

### 1. 試料と方法

試料は、浮線文土器の口縁部である。分析方法は、土器外面塗膜の材質を確認するために赤外分光分析、下地を含めた外面器表の元素分布を調べるために元素マッピング分析を行い、塗膜構造を調べるために塗膜薄片の光学顕微鏡観察およびEPMA分析を行った。以下に、項目ごとに試料の処理と分析方法について述べる。

#### [赤外分光分析]

測定試料は、表面から手術用メスを用いて0.2mm角程度を薄く削り取った後、押しつぶして厚さ1mm程度に裁断した臭化カリウム(KBr)結晶板に挟んで、油圧プレス器を用いて約7トンで加圧整形した。測定は、フーリエ変換型顕微赤外分光光度計(日本分光(株)製FT/IR-410、IRT-30-16)を用いて透過法により赤外吸収スペクトルを測定した。

#### [土器外面の元素マッピング分析]

測定試料は、赤彩状態の良い破片について元素マッピング分析を行い、特徴的な元素の高い部分について点分析を行った。測定は、X線分析顕微鏡((株)堀場製作所製XGT-5000Type II)を用いた。測定条件は、X線導管径100 $\mu$ m、電圧50KV、電流自動設定、元素マッピング分析測定時間6000sec、点分析測定時間500secである。

#### [塗膜薄片の光学顕微鏡観察およびEPMA分析]

土器は、良好な部分について断面1cm角程度を岩石カッターで採取し、エポキシ樹脂で包埋し厚さ30 $\mu$ m前後の薄片を作成した。塗膜薄片は、光学顕微鏡を用いて塗膜構造について観察し、EPMA分析による元素分析を行った。EPMA分析は、作成した薄片についてエネルギー分散型X線マイクロアナライザー(日本電子(株)製JSM-5900LV+JES-2200)を用いて行った。測定条件は、電圧30kV、分解能3.0nm、Si(Li)検出器、測定時間300秒である。分析は、反射電子像による観察を行った後、主な塗膜部分について点分析を行った。なお、定量計算は、FP法(ファンダメンタルパラメータ法)で計算した。

### 2. 結果

図377に、生漆とともに試料の赤外吸収スペクトル図を示す。縦軸は吸光度(Abs)、横軸が波数(Wavenumber( $\text{cm}^{-1}$ );カイザー)である。なお、スペクトルは、ノーマライズしてあり、吸収スペクトルに示した数字は、生漆の赤外吸収位置を示す。また、生漆の吸収位置とその強度を表23に示す。赤外分光分析を行った結果、生漆の成分であるウルシオール(主に吸収No.7およびNo.8)の吸収が明瞭

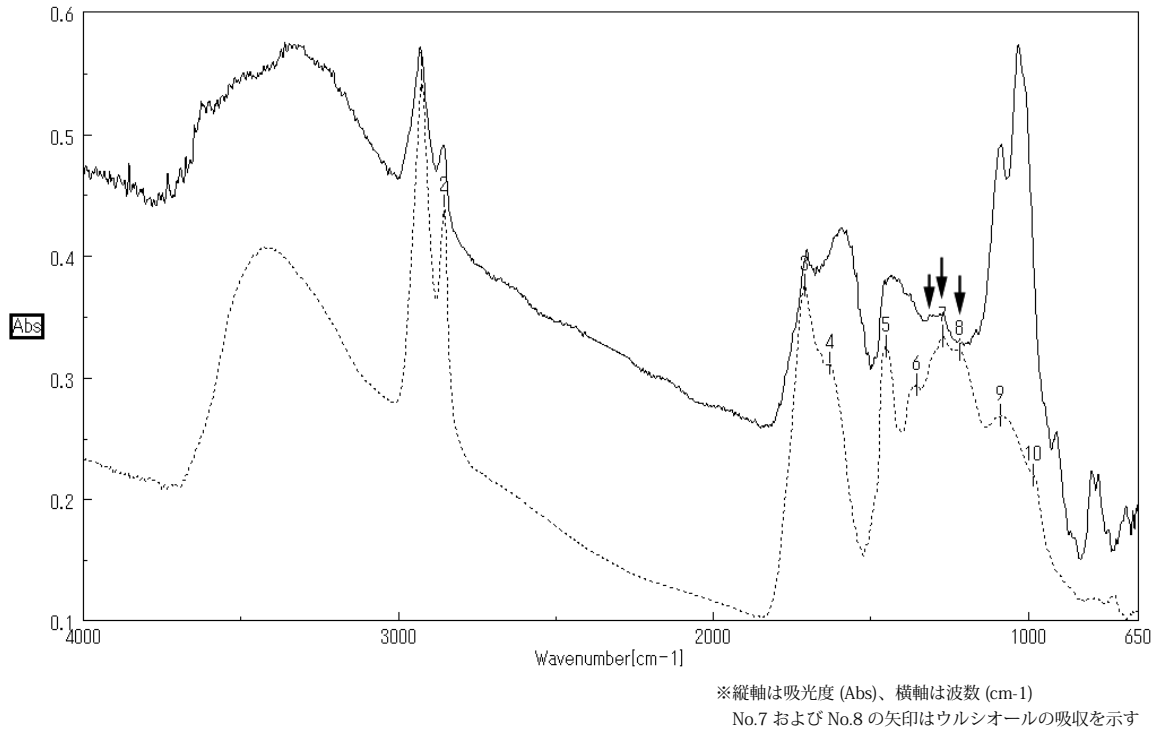


図 377 塗膜表面の赤外分光スペクトル図

に検出され、全吸収スペクトルも生漆の吸収スペクトルとほぼ一致したことから、表面の赤色層には漆成分が含まれていた。なお、1083 cm<sup>-1</sup> 付近に大きな吸収が見られるが、漆に含まれるゴム質である。

外面の元素マッピング分析では、水銀 Hg とイオウ S が赤色部分に対応して明瞭に検出された。その他の元素は、赤色部以外の部分において検出されたことから、土器胎土中の主な成分である。このことから、赤色顔料は硫化水銀 HgS（水銀朱）である。

塗膜薄片の光学顕微鏡観察を行った結果、土器の外面および内面塗膜薄片において黒色（肉眼的には赤色部分に相当する）を呈する塗膜 1 層が確認された。

外面の塗膜部分には黒色の下地と思われる部分が見られたが（図 378 の 1）、内面の塗膜部分には下地層は見られなかった（図 378 の 2）。なお、外面の黒色の下地と思われる部分には、炭粒は見られず、鉍物粒子などの挟雑物を含んでおり、文様の凹部において厚く、その他の部分で薄といった不均一な分布を示すことが確認された。

電子顕微鏡観察では、化学組成を示す反射電子像で観察すると、水銀粒を示す輝度の高い部分が不均質に分布する様子が観察された（図 378 の A～D）。特に、外面および内面ともに、水銀の輝度の高い部分が土器側に近い部分において層状に見られた（図 378 の C・D）。

代表的な組成を示す部分の点分析では、水銀 (HgO) は外面塗膜部分において 14.69%、内面塗膜部分において 16.18% であった。一方、内面の水銀輝度の高い層では 58.34% であった（表 24）。なお、下地と思われる部分は、炭素 (C) の含有量が高く、その他元素としてアルミニウム (Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>)、ケイ素 (SiO<sub>2</sub>)、鉄 (Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>) などの含有量が高い。

表 23 生漆の赤外吸収位置とその強度

吸収No.	生漆	
	位置	強度
1	2925.48	0.5446
2	2854.13	0.4411
3	1710.55	0.3764
4	1631.48	0.3115
5	1452.14	0.3256
6	1353.78	0.2942
7	1270.86	0.3341
8	1218.79	0.3230
9	1083.80	0.2686
10	983.52	0.2203

表 24 塗膜の元素分析結果 (EPMA 分析による FP 法; 単位%, 点分析の位置は図 3 の B・D に示す)

試料	点分析位置	C	Na <sub>2</sub> O	MgO	Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	SiO <sub>2</sub>	P <sub>2</sub> O <sub>5</sub>	SO <sub>3</sub>	Cl	K <sub>2</sub> O	CaO	TiO <sub>2</sub>	FeO	HgO	total
外面塗膜	1 塗膜	49.64	0.11	0.03	3.14	10.07	0.21	7.02	0.16	0.11	0.97	0.28	13.56	14.69	99.99
	2 下地?	34.70	0.06	0.38	10.26	35.04	0.66	0.57	0.26	0.22	1.07	1.20	15.52	0.06	100.00
内面塗膜	3 塗膜	48.07	0.41	0.01	3.28	7.43	0.40	8.96	0.18	0.28	1.82	-	12.98	16.18	100.00
	4 塗膜	-	0.19	-	0.54	6.62	1.44	29.94	0.66	-	0.25	-	2.03	58.34	100.01

### 3. 考察

赤外分光分析を行った結果、生漆の成分であるウルシオールが確認できたことから、外面器表に見える赤色を呈する塗膜は、赤色顔料を混和した漆であると判断された。なお、ゴム質の大きな吸収が見られることから、漆に含まれるゴム質が長い年月の間に劣化が進んだことを示す。

赤色顔料は、外面の元素マッピング分析および EPMA 分析により、水銀朱と判断された。水銀朱は、組成が HgS であり天然鉱物としても得ることができ、中国では辰砂と呼んでいる (馬淵ほか 2003)。児玉 (2005) は、北海道～東北北部における主に縄文時代赤彩遺物の分析事例についてまとめ、水銀朱は遅くとも縄文時代後期後半より普及するが、ベンガラは縄文時代早期～弥生時代中期まで使用されていたとしている。

外面の下地と思われる部分(図 378 の B の No. 2)は、底部外面まで外面器表全面にわたって認められる。この時期の浅鉢の製作仕上げとして、土器外面に炭粉などを用いて黒色研磨する技法が特徴的であること、また、内面にはこの黒色層が見られなかったことから、この下地と思われる部分はこの黒色研磨による黒色層と考えられた。

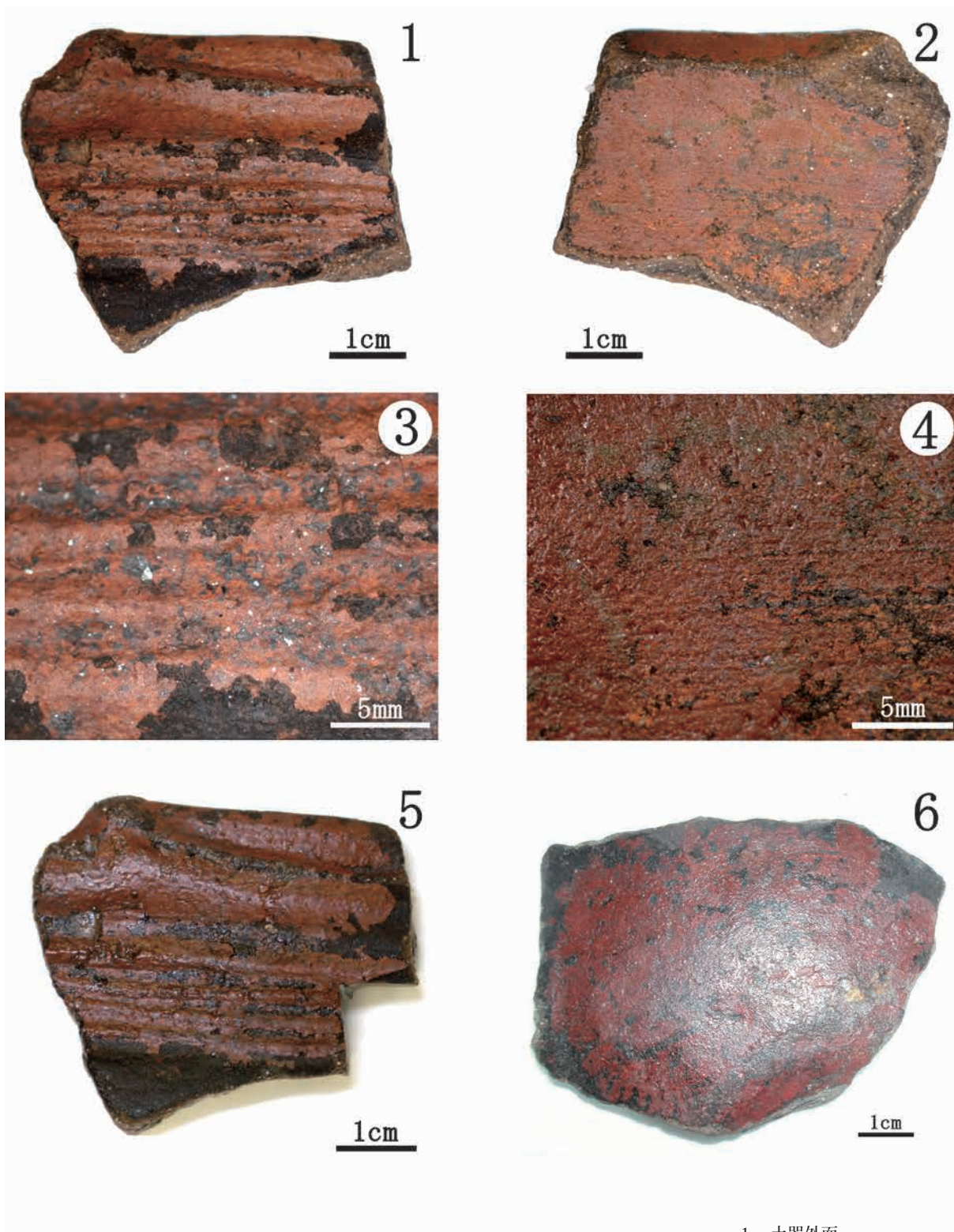
この部分の元素分析では、炭素 (C) の含有量も高いが、アルミニウム (Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>) やケイ素 (SiO<sub>2</sub>) なども多く含まれていることが確認された。このことから、鉱物粒子などの挟雑物が混入する炭化物が想定され、さらに、薄片観察では、特徴的な炭粒が確認されなかったことから、より微細粒のすす類などの塗布により黒色層を形成したものと考えられる。

以上の観察および分析結果から、対象とした浮線文土器浅鉢は、外面を黒色に処理した土器に対して、初めに水銀粉または水に溶いた水銀ペーストを塗り、水銀朱を混和した漆の塗布を一回行ったものと推定される。

#### 引用・参考文献

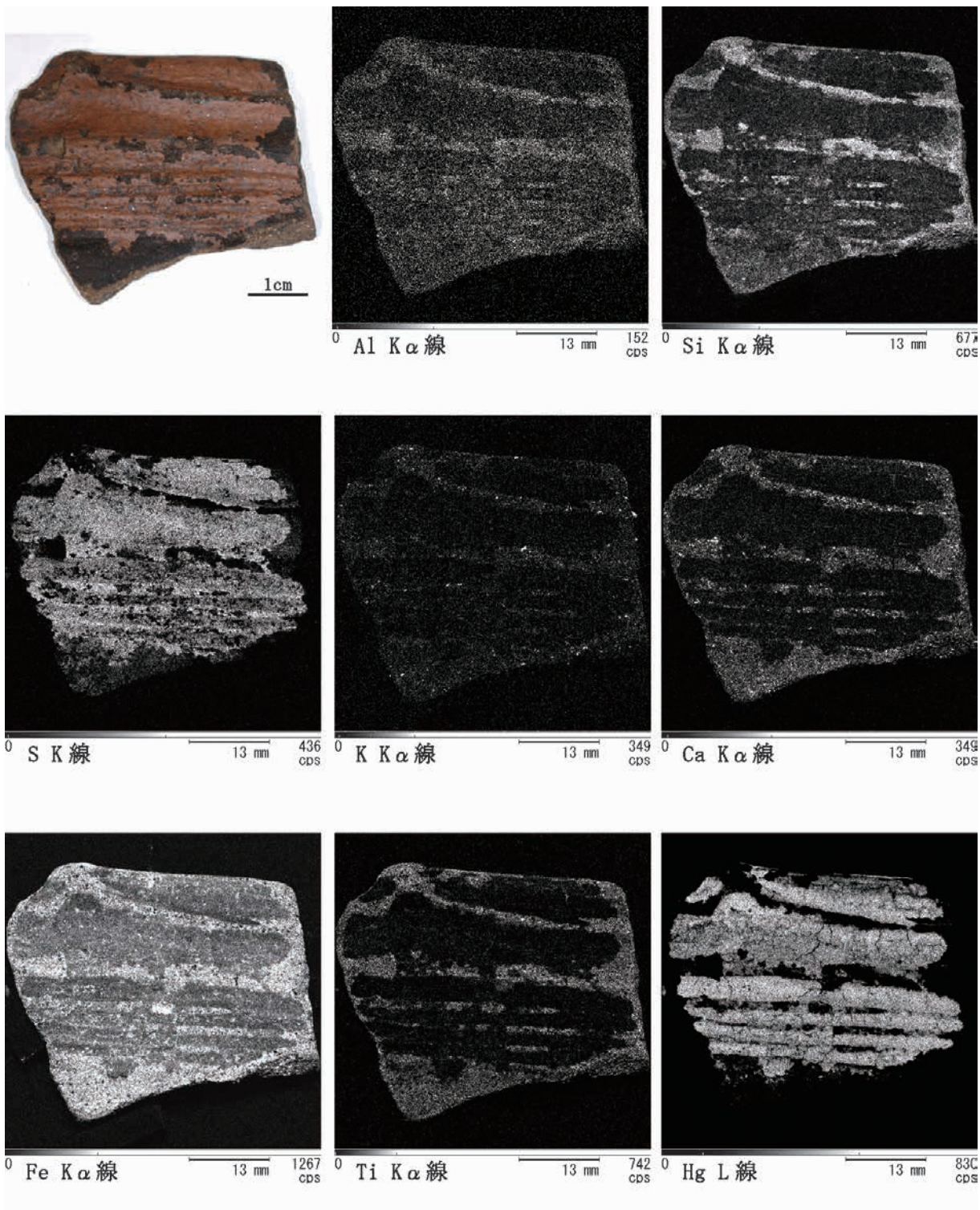
児玉大成 2005 「亀ヶ岡文化を中心としたベンガラ生産の復元」『日本考古学』第 20 号 p25-45

馬淵久夫・杉下龍一郎・三輪嘉六・沢田正昭・三浦定俊 2003 『文化財科学の事典』朝倉書店



1. 土器外面
2. 土器内面
3. 外面の拡大
4. 内面の拡大
5. 薄片試料採取後（外面）
6. 底部外面

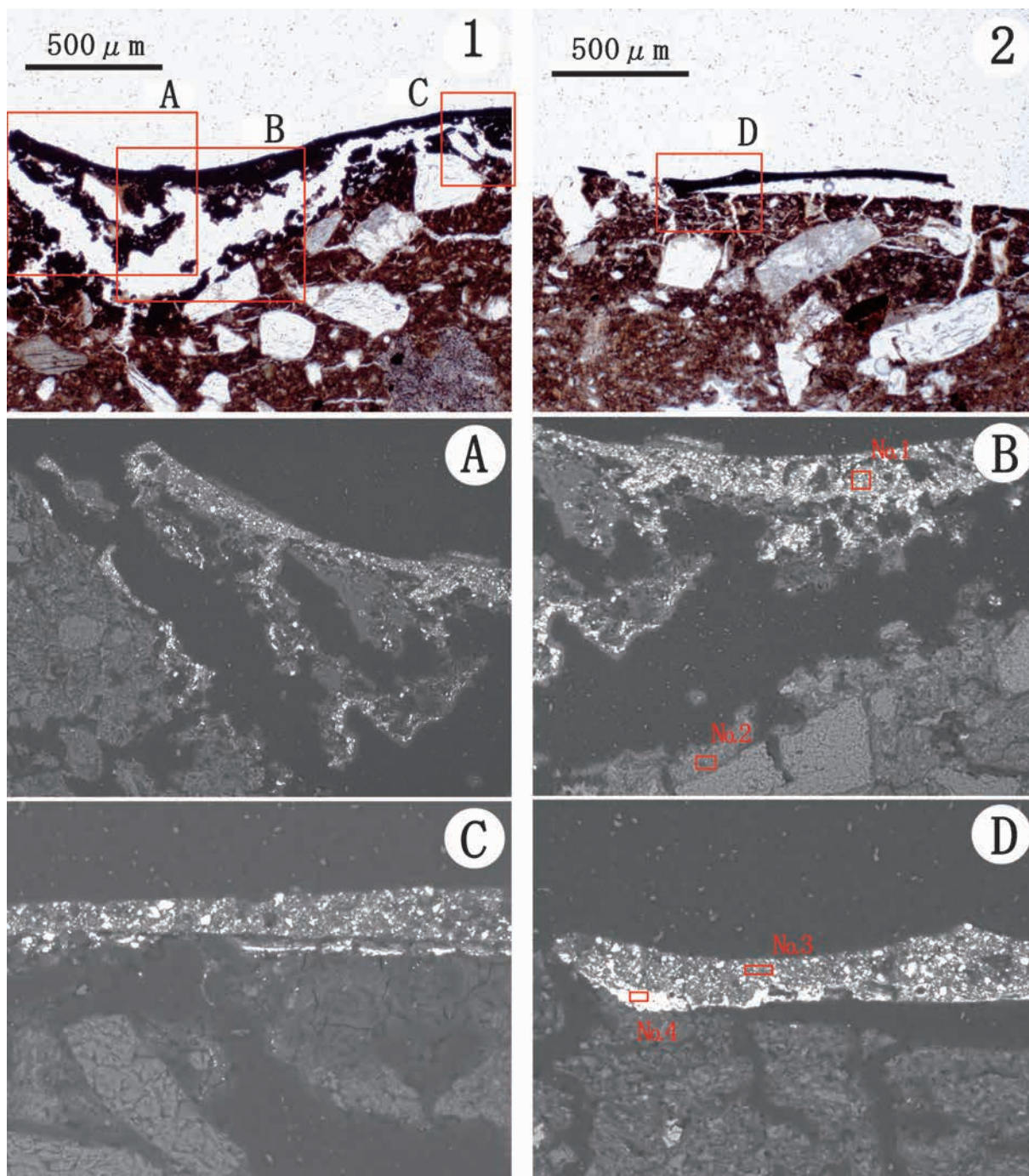
対象試料の外面と内面



[元素記号]

Al: アルミニウム、Si: ケイ素、S: イオウ、K: カリウム、Ca: カルシウム、Ti: チタン、Fe: 鉄、Hg: 水銀

土器表面の元素マッピング分析



1. 外面塗膜の顕微鏡写真
2. 内面塗膜の顕微鏡写真
  - A. 外面塗膜の反射電子像
  - B. 外面塗膜の反射電子像 (数字は点分析位置)
  - C. 外面塗膜の反射電子像
  - D. 外面塗膜の反射電子像 (数字は点分析位置)

図 378 塗膜薄片の顕微鏡写真と反射電子像 (点分析位置)

## 第6節 讃良郡条里遺跡出土炭化物の<sup>14</sup>C年代測定

### 概要

大阪府讃良郡条里遺跡出土土器付着物および出土種子・木材の加速器を用いた年代測定を行ったので、その結果を報告する。試料は大阪府文化財センター寝屋川分室で小林・春成・藤尾が種実・炭化材・土器付着物を採取した。試料の前処理は、年代測定研究グループが行い、測定は加速器分析研究所および東京大学、株式会社パレオ・ラボによるものである。測定結果は計測値（補正）とともに実年代の確率を示す較正年代値を示した。また、その根拠となった較正曲線を示した。

今回の年代測定の目的は、河内最古の遠賀川式土器を出土した讃良郡条里遺跡の年代を調べることであるが、遠賀川系土器そのものの付着物は量が少なく測定できなかった。しかし、種実と土器付着物の測定結果を得ることができ、年代研究に重要な結果を得ることができた。

### 1. 測定試料

測定した資料は、表25に示した。このうち、OSF362は土器に塗られていた漆から漆膜を微量剥ぎ取った。C7は水漬けで保存されていた、3-286土坑内に打ち込まれた矢板状の材の、もとは樹皮がついていたと思われる最外部の木質部から採取した。ただし水漬けの段階で多少のカビが付着していた（AAA処理で除去）。C8はイネ胚乳、C9はヒョウタン種子で、いずれも小瓶にホルマリン漬けされていたが、ホルマリンは揮発及び水洗浄で除去した。

### 2. 炭化物の処理

試料については、註1に記した手順で試料処理を行った。作業は、国立歴史民俗博物館の年代測定資料実験室において坂本・尾寄らが行った。なお、種子類については、自動処理器を用いた。炭素含有率については、OSF362の漆膜の炭素含有率が20%台で漆としては炭素量が少ないが赤色顔料などの混和により炭素の比率としては相対的に少なくなっているためと考えられ、後述の安定同位体比でも-29‰と漆として考えて矛盾がない $\delta^{13}\text{C}$ 値であり、炭素含有率としても測定を保留する基準としている10%よりは高く、年代測定自体には支障はないと判断した。他の試料はおおよそ50%を越え、良好な炭素含有率である。

表25 讃良郡条里遺跡測定試料一覧

試料番号	時期	種類	採取部位	時期・型式	出土区	掲載番号
OSF-356	弥生前期	浅鉢・付着物	頸部外側	長原式	3-268溝 土器群1	図258-7
OSF-362	弥生前期	漆塗鉢・漆膜	口縁外	浮線文系	6区 第8a-2層	図310-5
OSF-C7	弥生前期	木材	最外縁部	河内I-1	3-286土坑 板材	—
OSF-C8	弥生前期	種子	イネ 胚乳	河内I-1	6-152土坑最下部炭化物層	—
OSF-C9	弥生前期	種子	ヒョウタン	河内I-1	3-286土坑	—

表26 測定試料の炭素量・炭素含有量

試料番号	採取量	処理量	回収量	回収/処理	燃焼量	CO <sub>2</sub> 量	炭素含有率
OSF-356	11.65mg	11.65mg	35.85mg	31.0%	4.75mg	2.76mg	56.3%
OSF-362	7.6mg	7.6mg	4.47mg	58.8%	2.47mg	0.49mg	20.0%
OSF-C7	16.24mg	16.24mg	4.21mg	25.9%	2.01mg	1.01mg	50.2%
OSF-C8	8.15mg	8.15mg	4.77mg	58.5%	1.66mg	0.97mg	58.7%
OSF-C9	14.68mg	14.68mg	9.43mg	64.2%	2.00mg	1.01mg	50.4%

註 量はmg、CO<sub>2</sub>量は燃焼して得られた二酸化炭素の炭素相当量、炭素含有率はCO<sub>2</sub>/燃焼量

### 3. 測定結果と暦年較正

AMSによる<sup>14</sup>C測定は、同時に調製した標準試料とともに、C7-9は加速器分析研究所（機関番号IAAA）に委託、その他は東京大学大学院工学研究系タンデム加速器施設（機関番号MTC）で行った（ただし、OSF356,362については、再確認を行う目的で、同一試料を尾寄が調整した上で（株）パレオ・ラボ（機関番号PLD）に測定を委託した。結果的には後述するように、おおよそ矛盾ない結果が得られている）。測定結果は、註2に示す方法で、同位体効果を補正した<sup>14</sup>C年代、較正年代を算出した。木材・種

表27 測定結果と暦年較正年代

試料番号	測定機関番号	$\delta^{13}\text{C}\text{‰}$	<sup>14</sup> C BP (補正值)	暦年較正cal BC	(%)は確率密度
OSF-356	MTC-09148	-26.2	2385±45	750-685	12.2%
				665-645	3.3%
				590-575	1.1%
				565-385	78.8%
OSF-356ad	PLD-10227	(-27.7)	2490±25	770-515	95.4%
OSF-362	MTC-09149	-29.0	2460±35	755-685	25.3%
				670-475	55.4%
				470-410	14.7%
				OSF-362ad	PLD-10228
				675-505	59.9%
				490-485	0.6%
				460-450	1.4%
				440-415	2.9%
OSF-C7	IAAA-71152	(-27.1±0.2)	2630±30	835-770	95.4%
OSF-C8	IAAA-71153	(-26.3±0.3)	2540±30	795-735	39.2%
				690-660	17.9%
				650-545	38.3%
OSF-C9	IAAA-71154	(-26.0±0.3)	2510±30	790-700	26.1%
				695-535	69.2%

実試料の $\delta^{13}\text{C}$ 値は、加速器による同位体効果補正のための測定で、試料自体の正確な値とは言えないため、表27には参考値として（）で記しておく。土器付着物については、AAA処理済みの残余の試料を昭光通商に委託し、安定同位体質量分析計で $\delta^{13}\text{C}$ 値を測定し、その値を表27に記す。

なお、炭素量不足のため年代測定は不能であったOSF353（6-122土坑，図293）の長原系土器胴部外面付着物についても安定同位体質量分析計で測定し、-24.5‰の結果を得た。ただし、OSF353については、土器付着物としては極めて炭素含有率が低く、顕微鏡観察でもミネラルが多く含まれていることが確認できたので、年代測定は保留した試料である。安定同位体比についても、なにに由来するかは不明瞭であり、土器付着物よりも土中のフミン酸や土器胎土に含まれる成分の値である可能性もある。

### 4. 測定結果の解釈と暦年較正年代の解釈

較正年代では、長原式系の浅鉢土器付着物OSF356は、前8～前6世紀ころ、漆のOSF362は前8～前5世紀ころ、木材のC7はやや古く前9～前8世紀、イネのC8は前8～前6世紀、ヒョウタンのC9は前8～前6世紀の中に含まれる年代の一時点である可能性が高い。このうち、3-286土坑内に打ち込まれた木材C7は他に比べやや古い年代値を示すため、流木・古材の利用などの可能性もある。他の年代値が、おおよそ同じ河内I-1期に属するものであるならば、これらの較正年代が各資料で含む、前6世紀の中の一時点である可能性が高い。上記のように古い可能性があるC7を除けば、較正年代では565-545cal BCの年代は、全てに含まれるので、本遺跡の遠賀川系土器及び長原式土器などの帰属年代は、前6世紀中葉頃の所産である可能性を考えたい。少なくとも、長原式土器の測定値から、遠賀川系土器と共伴する年代にあった可能性が高いと捉えたい。

本稿の測定成果は、平成19年度科学研究費補助金（学術創成研究）「弥生農耕の起源と東アジア炭素年代測定による高精度編年体系の構築」（研究代表西本豊弘、課題番号16GS0118）の成果の一部を用いている。

暦年較正については今村峯雄、坂本稔の方法に従う。本稿は、註について坂本稔の記載をもとに小林謙一が執筆した。



註1：下記の方法で処理した。

(1) 前処理：酸・アルカリ・酸による化学洗浄（AAA 処理）。

AAA 処理として自動処理器（Sakamoto et al. 2002）を用い、80℃、各 1 時間で、希塩酸溶液（1N-HCl 2 回）、アルカリ溶液（1N - NaOH 5 回）、酸処理（240 分以上 2 回）、純水洗浄（5 回）を行った。

(2) 二酸化炭素化と精製：酸化銅により試料を燃焼（二酸化炭素化）、真空ラインを用いて不純物を除去。

(3) グラファイト化：鉄触媒のもとで水素還元し、二酸化炭素をグラファイト炭素に転換。アルミ製カソードに充填。

(4) AMS<sup>14</sup>C 測定と暦年較正計算方法

年代データの <sup>14</sup>C BP という表示は、西暦 1950 年を基点にして計算した <sup>14</sup>C 年代（モデル年代）であることを示す。<sup>14</sup>C 年代を算出する際の半減期は、5,568 年を用いて計算することになっている。誤差は測定における統計誤差（1 標準偏差、68% 信頼限界）である。

AMS では、グラファイト炭素試料の <sup>14</sup>C / <sup>12</sup>C 比を加速器により測定する。正確な年代を得るには、試料の同位体効果を測定し補正する必要がある。同時に加速器で測定した <sup>13</sup>C / <sup>12</sup>C 比により、<sup>14</sup>C / <sup>12</sup>C 比に対する同位体効果を調べ補正する。<sup>13</sup>C / <sup>12</sup>C 比は、標準体（古生物 belemnite 化石の炭酸カルシウムの <sup>13</sup>C / <sup>12</sup>C 比）に対する千分率偏差  $\delta^{13}\text{C}$ （パーミル，‰）で示され、この値を -25‰ に規格化して得られる <sup>14</sup>C / <sup>12</sup>C 比によって補正する。補正した <sup>14</sup>C / <sup>12</sup>C 比から、<sup>14</sup>C 年代値（モデル年代）が得られる。

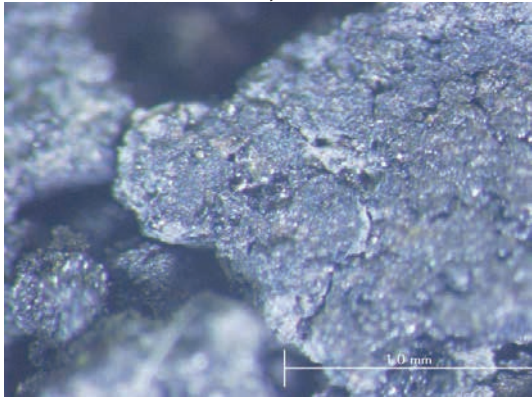
註2 測定値について、以下の方法で較正年代を算出した。

測定値を較正曲線 IntCal04（<sup>14</sup>C 年代を暦年代に修正するためのデータベース、2004 年版）（Reimer et al 2004）と比較することによって暦年代（実年代）を推定できる。両者に統計誤差があるため、統計数理的に扱う方がより正確に年代を表現できる。すなわち、測定値と較正曲線データベースとの一致の度合いを確率で示すことにより、暦年代の推定値確率分布として表す。暦年較正プログラムは、国立歴史民俗博物館で作成したプログラム RHCAL（OxCal Program に準じた方法）を用いている。統計誤差は 2 標準偏差に相当する、95% 信頼限界で計算した。年代は、較正された西暦 cal BC で示す。○内は推定確率である。

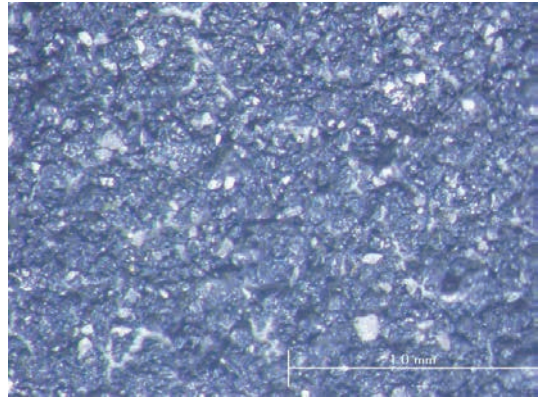
引用・参考文献

Reimer, Paula J, et al 2004 IntCal04 Terrestrial Radiocarbon Age Calibration, 0-26 cal kyr BP Radiocarbon 46(3), p1029-1058

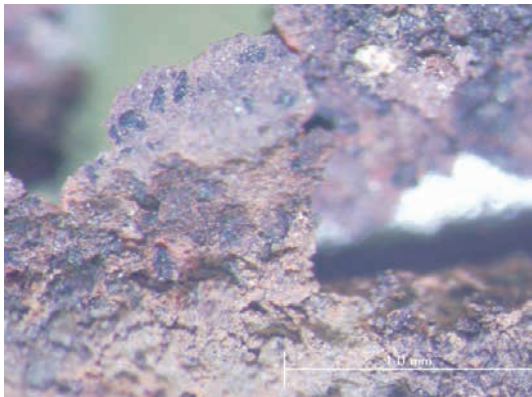
M. Sakamoto et al. 2002 An Automated AAA preparation system for AMS radiocarbon dating. Nuclear Instruments and Methods in Physics Research B p223-224: p298-301



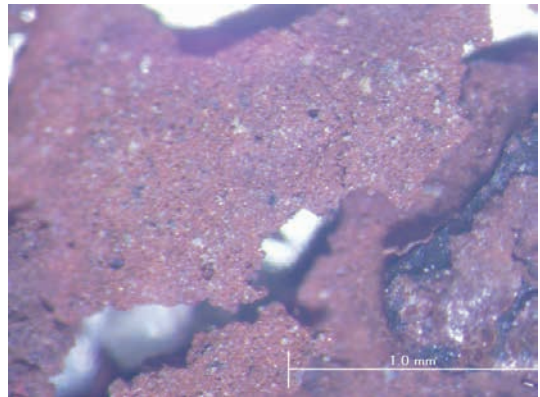
OSF-356 土器付着物 前処理前 約32倍



前処理後 約32倍



OSF-362 土器付着漆 前処理前 約32倍



前処理後 約32倍



OSF-C7 前処理前 約8倍



前処理後 約8倍

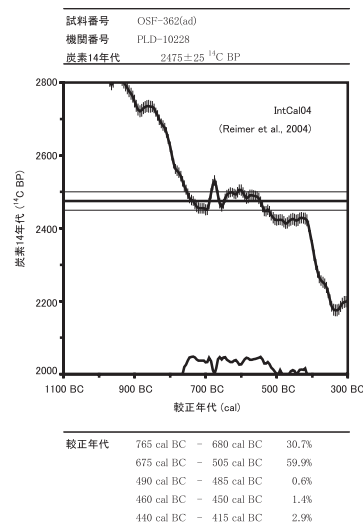
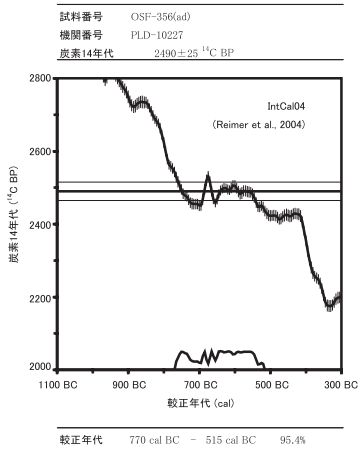
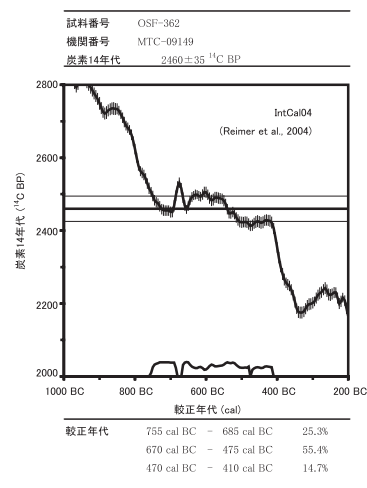
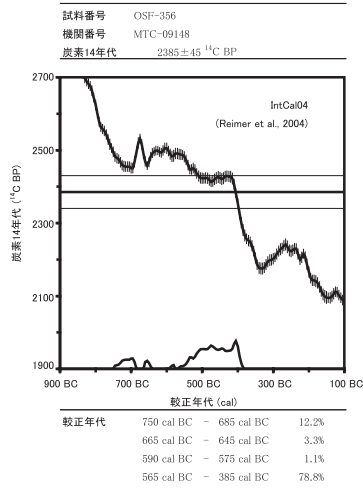


OSF-C8 前処理後 約8倍



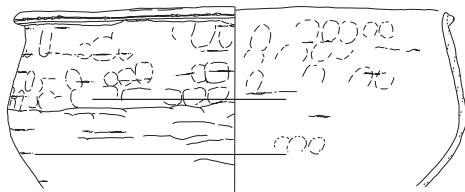
OSF-C9 前処理後 約8倍

試料写真



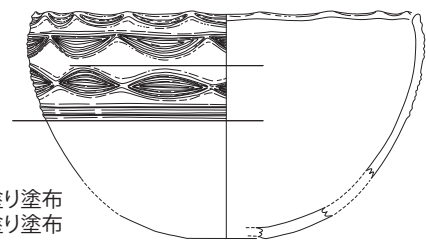
再測定

再測定



OSF356 図258-7

3-268溝  
突帯文土器 浅鉢



OSF362 図310-5

6区 第8a-2層  
浮線文土器 浅鉢  
外面 黑色化処理後朱塗り塗布  
内面 下地処理せず朱塗り塗布

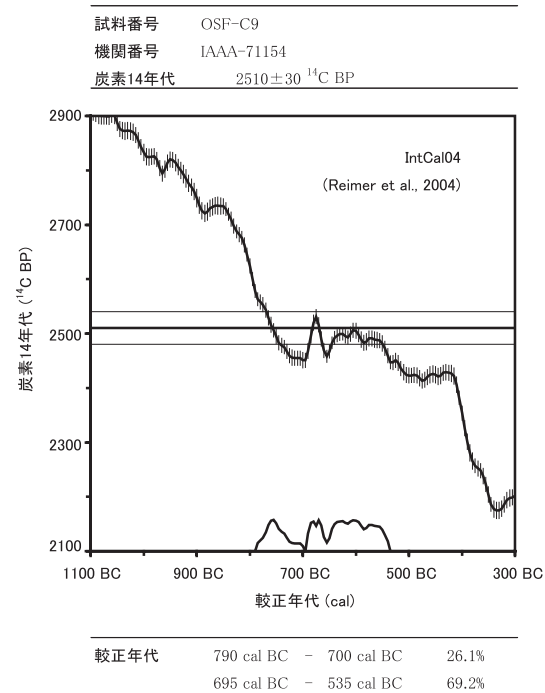
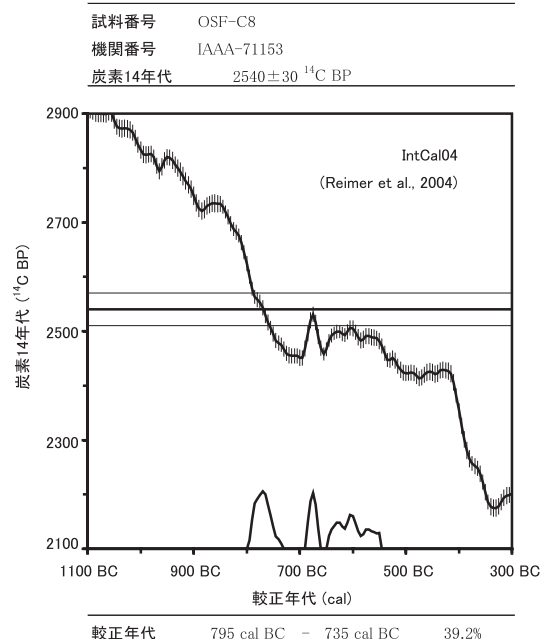
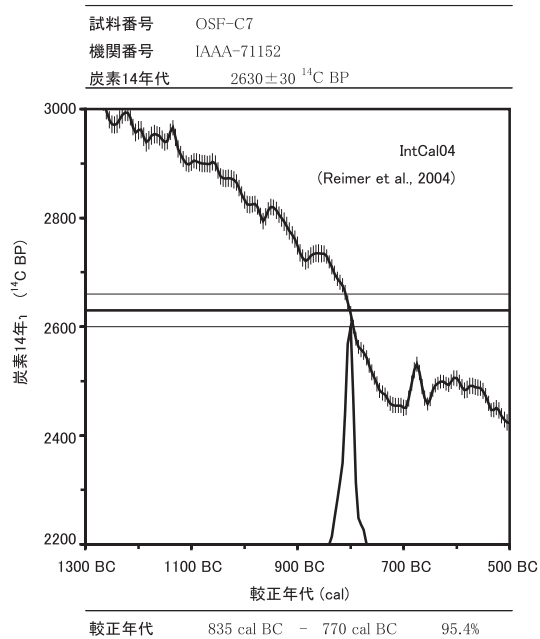


OSF356 頸部外側煤付着状態



OSF362 口縁部外側漆付着状態

図 379 遺物実測図および較正年代確率分布



OSF-C7 木材最外部採取



OSF-C9 ヒョウタン種子

図 380 測定木材・種子と較正年代確率分布

## 第7節 3-286 土坑ほか出土試料の放射性炭素年代測定

### はじめに

第8b面東側遺構群で検出された3-286土坑、6-143土坑から出土した遺物3点、断割り断面の第9a'-1層から採取された炭化材1点について、加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行った。

### 1. 試料と方法

測定試料の情報、調整データは表28のとおりである。試料は調整後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクトAMS：NEC製1.5SDH）を用いて測定した。得られた<sup>14</sup>C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、<sup>14</sup>C年代、暦年代を算出した。

表28 測定試料および処理

試料番号	測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理	測定
1	PLD-4389	遺構：3-286土坑	試料の種類：木製品（図282-12） 状態：wet カビ：無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 （塩酸1.2N, 水酸化ナトリウム1N, 塩酸1.2N）	PaleoLabo : NEC製コンパクト AMS・1.5SDH
2	PLD-4390	遺構：第7章第1節 19地点 試料No.40 層位：第9a'-1層（最上部）	試料の種類：植物遺体（草本） 状態：wet カビ：無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 （塩酸1.2N, 水酸化ナトリウム1N, 塩酸1.2N）	PaleoLabo : NEC製コンパクト AMS・1.5SDH
3	PLD-4391	遺構：3-286土坑	試料の種類：炭化材（枝状） 最外年輪部 状態：wet カビ：無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 （塩酸1.2N, 水酸化ナトリウム1N, 塩酸1.2N）	PaleoLabo : NEC製コンパクト AMS・1.5SDH
4	PLD-4592	遺構：6-143土坑（最下部）	試料の種類：炭化種子（イネ胚乳） 状態：wet カビ：無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 （塩酸1.2N, 水酸化ナトリウム1N, 塩酸1.2N）	PaleoLabo : NEC製コンパクト AMS・1.5SDH

### 2. 結果

表29に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（ $\delta^{13}\text{C}$ ）、同位体分別効果の補正を行った<sup>14</sup>C年代、<sup>14</sup>C年代を暦年代に較正した年代範囲、暦年較正に用いた年代値を示す。暦年較正に用いた年代値は、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

<sup>14</sup>C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。<sup>14</sup>C年代（yrBP）の算出には、<sup>14</sup>Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した<sup>14</sup>C年代誤差（ $\pm 1\sigma$ ）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の<sup>14</sup>C年代がその<sup>14</sup>C年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示すものである。なお、暦年較正の詳細は以下の通りである。

#### ・暦年較正

暦年較正とは、大気中の<sup>14</sup>C濃度が一定で半減期が5568年として算出された<sup>14</sup>C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の<sup>14</sup>C濃度の変動、及び半減期の違い（<sup>14</sup>Cの半減期5730 $\pm$ 40年）を較正することで、より実際の年代値に近いものを算出することである。

<sup>14</sup>C年代の暦年較正にはOxCal3.10（較正曲線データ：INTCAL04）を使用した。なお、 $1\sigma$ 暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された<sup>14</sup>C年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に $2\sigma$ 暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、そ

の範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は  $^{14}\text{C}$  年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。それぞれの暦年代範囲のうち、その確率が最も高い年代範囲については、表中に下線で示してある。

表29 放射性炭素年代測定および暦年較正結果

試料番号	測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	$^{14}\text{C}$ 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$ )	$^{14}\text{C}$ 年代を暦年代に較正した年代範囲		暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$ )
				1 $\sigma$ 暦年代範囲	2 $\sigma$ 暦年代範囲	
1	PLD-4389	-29.90 $\pm$ 0.17	2440 $\pm$ 25	730BC(16.1%)690BC 660BC(2.6%)650BC <u>550BC(27.3%)480BC</u> 470BC(22.2%)410BC	760BC(22.9%)680BC 670BC(7.5%)630BC <u>600BC(65.1%)400BC</u>	2441 $\pm$ 27
2	PLD-4390	-28.19 $\pm$ 0.15	4085 $\pm$ 30	2840BC(11.4%)2810BC <u>2670BC(56.8%)2570BC</u>	2860BC(17.8%)2800BC 2760BC(5.4%)2720BC <u>2700BC(66.6%)2560BC</u> 2530BC(5.6%)2490BC	4085 $\pm$ 30
3	PLD-4391	-25.83 $\pm$ 0.14	2450 $\pm$ 25	740BC(21.4%)680BC 670BC(5.9%)640BC <u>550BC(25.3%)480BC</u> 470BC(15.6%)410BC	760BC(25.5%)680BC 670BC(11.0%)610BC <u>600BC(58.9%)400BC</u>	2449 $\pm$ 27
4	PLD-4592	-25.80 $\pm$ 0.13	2450 $\pm$ 25	740BC(21.4%)680BC 670BC(5.9%)640BC <u>550BC(25.3%)480BC</u> 470BC(15.6%)410BC	760BC(25.5%)680BC 670BC(11.0%)610BC <u>600BC(58.9%)400BC</u>	2449 $\pm$ 27

### 3. 考察

試料について、同位体分別効果の補正及び暦年較正を行った。得られた暦年代範囲のうち、その確率の最も高い年代範囲に着目すると、それぞれより確かな年代値の範囲が示された。

試料1は、1 $\sigma$  暦年代範囲において Cal BC 550-480年 (27.3%)、2 $\sigma$  暦年代範囲において Cal BC 600-400年 (65.1%) である。刳物であるために木材を伐採した年代を示す最外年輪部は失われていたが、最も外側の年輪を測定した。試料3も同様の年代であることから、測定試料としては問題ないと考えられる。ただし、2400年問題に相当する較正曲線部であるために年代幅の広い年代値となった。

試料2は、1 $\sigma$  暦年代範囲において Cal BC 2670-2570年 (56.8%)、2 $\sigma$  暦年代範囲において Cal BC 2700-2560年 (66.6%) である。年代範囲は、縄文時代中期の年代である。

試料4は、1 $\sigma$  暦年代範囲において Cal BC 550-480年 (25.3%)、2 $\sigma$  暦年代範囲において Cal BC 600-400年 (58.9%) である。年代範囲は、試料1や試料3と同様となり、3-286土坑、6-143土坑がともに、弥生時代前期前半に形成された遺構であることを示す。

#### 引用・参考文献

Bronk Ramsey C. (1995) Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy: The OxCal Program, Radiocarbon, 37(2), p425-430

Bronk Ramsey C. (2001) Development of the Radiocarbon Program OxCal, Radiocarbon, 43(2A), p355-363

中村俊夫 2000 「放射性炭素年代測定法の基礎」『日本先史時代の $^{14}\text{C}$ 年代』p3-20

Reimer PJ, MGL Baillie, E Bard, A Bayliss, JW Beck, C Bertrand, PG Blackwell, CE Buck, G Burr, KB Cutler, PE Damon, RL Edwards,

RG Fairbanks, M Friedrich, TP Guilderson, KA Hughen, B Kromer, FG McCormac, S Manning, C Bronk Ramsey,

RW Reimer, S Remmele, JR Southon, M Stuiver, S Talamo, FW Taylor, J van der Plicht, and CE Weyhenmeyer.

(2004) Radiocarbon 46, 1029-1058.

## 第 8 節 2-133、2-134 土坑出土試料の放射性炭素年代測定

### はじめに

第 8b 面西側遺構群で検出された 2-133、2-134 土坑の埋土からは、炭化材が多く出土した。これについて、加速器質量分析法（AMS 法）による放射性炭素年代測定を実施した。

#### 1. 試料

試料は、2 区の西側で検出した 2-133 土坑と 2-134 土坑から出土した炭化材 2 点である。周辺では弥生時代前期末～中期にかけての遺構・遺物が確認され、第 8b 面西側遺構群として調査を行っている。

#### 2. 分析方法

炭化材試料は、前処理、AAA 処理後、試料の酸化、CO<sub>2</sub> 精製、還元によりグラファイトを生成し、グラファイトを充填させたカソードをホイールに装填し、炭素同位体比を測定し、炭素同位体比と  $\delta^{13}\text{C}$  値より、年代値を算出する。放射性炭素の半減期は LIBBY の半減期 5,568 年を使用する。また、測定年代は 1950 年を基点とした年代（BP）であり、誤差は標準偏差（One Sigma;68%）に相当する年代である。なお、暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.02（Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer）を用いる。

#### 3. 結果

測定結果および暦年較正年代値を表 28 に示す。測定の結果、同位体分別による補正を行った年代値で、2-133 土坑が 2,670 ± 40 yrs BP、2-134 土坑が 2,630 ± 60 yrs BP を示した。暦年較正值（2  $\sigma$ ）は、2-133 土坑が 2,852-2,743calBP、2-134 土坑が 2,861-2,505calBP であった。

今回の年代値と近似する考古遺跡における測定結果は、下記するように縄文時代晩期～弥生時代、あるいは弥生時代前期の分析事例において確認される（暦年較正值は、特に限りがない場合、2  $\sigma$  に相当する年代値を示している）。

縄文時代晩期～弥生時代前期：同位体補正を行っていない土器を包含する土壌試料では、兵庫県伊丹市口酒井遺跡の弥生時代前期（A 地点壺堀り No.7,V 字型溝状遺構）で 2570 ± 40 yrs BP、縄文時代晩期の舟橋式～長原式（B 地点壺堀り No.16, 第 14 層）で 2530 ± 20 yrs BP、滋賀里 IV 式～舟橋式で 2690 ± 35 yrs BP（C 地点第 2 トレンチ 5 区, 第 15 層）、2790 ± 30 yrs BP（D 地点壺堀り No.6 南拡区, 第 17 層）の年代値が得られている（山田・小橋川 1991）。国立歴史民俗博物館による土器付着炭化物の <sup>14</sup>C 年代測定では、東大阪市宮ノ下遺跡の長原式で、2550 ± 40、2510 ± 40 yrs BP（cal BC800 表 30 放射性炭素年代測定および暦年較正結果

試料名	測定年代 (BP)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	補正年代 (BP)	暦年較正年代 (cal)				Code No.
				1 $\sigma$	2 $\sigma$	相対比		
2-133土坑 (炭化材)	2,650 ± 40	-24.02 ± 0.85	2,670 ± 40 (2,667 ± 40)	1 $\sigma$	cal BC 890 - cal BC 880	cal BP 2,840 - 2,830	0.096	IAAA-41880
				2 $\sigma$	cal BC 844 - cal BC 798	cal BP 2,794 - 2,748	0.904	
2-134土坑 (炭化材)	2,620 ± 60	-24.59 ± 0.76	2,630 ± 60 (2,627 ± 55)	1 $\sigma$	cal BC 902 - cal BC 793	cal BP 2,852 - 2,743	1.000	
				1 $\sigma$	cal BC 890 - cal BC 880	cal BP 2,840 - 2,830	0.054	
					cal BC 844 - cal BC 766	cal BP 2,794 - 2,716	0.941	
				2 $\sigma$	cal BC 677 - cal BC 675	cal BP 2,627 - 2,625	0.005	
					cal BC 911 - cal BC 747	cal BP 2,861 - 2,697	0.875	
					cal BC 688 - cal BC 665	cal BP 2,638 - 2,615	0.045	
cal BC 644 - cal BC 588	cal BP 2,594 - 2,538	0.060						
cal BC 581 - cal BC 555	cal BP 2,531 - 2,505	0.020						

1) 年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用。

2) BP年代値は、1950年を基点として何年前であることを示す。

3) 測定年代。補正年代に付記した誤差は、測定誤差  $\sigma$ （測定値の68%が入る範囲）を年代値に換算した値。

4) 暦年較正計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.02（Copyright 1986-2002 M Stuiver and PJ Reimer）を使用

5) 暦年較正計算には補正年代の括弧内の丸める前の値を使用している。

～410年)、突帯文土器と遠賀川式土器が供伴(原田・若松・曾我編1998)するとされる東大阪市水走遺跡の長原式で、2540±40、2520±40 yrs BP (cal BC800～410年)、弥生時代前期I期古段階で2540±40 yrs BP (cal BC850～520年)、弥生時代前期I期中～新段階で2450±40 yrs BP (cal BC760～400年)、大阪府東大阪市鬼塚遺跡の縄文時代晩期初頭の土器から2940±40 yrs BP (cal BC1280～1000年)の<sup>14</sup>C年代値が得られている(西本編2006)。

弥生時代前期の測定結果では、大阪府堺市の小阪遺跡において長原式土器から弥生時代前期第I様式の土器を含む層準から採取された試料の<sup>14</sup>C年代値が2300～2600年前頃に集中するとされる(今村2001)。大阪府東大阪市・八尾市の池島・福万寺遺跡では、弥生時代前期中頃(I様式)の水田跡(第14-2面)の遺構検出面下層で縄文時代晩期(長原式)を伴う堆積物中より検出された木片から2520±40yrsBPの年代値が得られている(地球科学研究所・岸本2002)。これら弥生時代前期の土器に伴う年代試料の暦年較正年代値は、cal BC800～400年前後となっている。国立歴史民俗博物館による土器付着炭化物の<sup>14</sup>C年代測定では、奈良県田原本町唐子鍵遺跡において、弥生時代前期(I様式)で2460±40、2470±30yrsBP (cal BC760～400年前後)、交野市私部南遺跡の弥生時代前期(I様式)で2395±25～2700±30yrsBP (cal BC395～705年～cal BC1130～535年)の年代値が報告されている(西本編2006)。大阪府東大阪市瓜生堂遺跡では、弥生時代前期(I様式)では2440±40 yrs BP (cal BC760～560年)の年代値が測定されている(小林ほか2004)。

以上のように、周辺での年代測定事例からは、今回の測定値が縄文時代晩期の年代値に近似することがわかる。しかしながら、試料採取を行った土坑は、弥生時代前期末に堆積したと見られる第8b-1層の上部から掘削されており、測定結果とは矛盾することになる。これについては、今回の測定試料が土坑内に残存していた炭化材の小片であったため、古い年輪部分を測定した可能性や、古材を燃焼材として利用したことによって発生した年代差と考えられる。そのため土坑の形成年代について、正しく測定できたとはいえず、その形成は測定年代値以降に下ると考えるのが妥当であろう。

#### 引用・参考文献

- 地球科学研究所・岸本広樹2002「放射性炭素年代測定」『池島・福万寺遺跡 発掘調査概要X XVIII -98-1 調査区(1998年度)の調査概要-』p108-111 (財)大阪府文化財調査研究センター
- 原田修・若松博恵・曾我恭子1998『水走・鬼虎川遺跡発掘調査報告-阪神高速道路東大阪線水走ランプ建設に伴う調査-』東大阪市教育委員会・(財)東大阪市文化財協会
- 今村峯雄2001「縄文～弥生時代移行期の年代を考える-問題と展望-」『第四紀研究』40 p509-516
- 小林謙一・春成秀爾・今村峯雄・坂本稔・陳建立・松崎浩之・秋山浩三・川瀬貴子2004「大阪府瓜生堂遺跡出土弥生～古墳時代 出土土器の<sup>14</sup>C年代測定」『瓜生堂遺跡1 近畿日本鉄道奈良線連続立体交差事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-考察・分析・写真図版編-』p715-726 (財)大阪府文化財センター
- 西本豊弘編2006『新弥生時代のはじまり 第1巻 弥生時代の新年代』雄山閣
- 山田治・小橋川明1991「口酒井遺跡第(12・15次調査)の液体シンチレーション<sup>14</sup>C年代測定」『口酒井遺跡-自然遺物編-』p75-79 六甲山麓遺跡調査会



## 第8章 総括

以上まで述べてきたように、讃良郡条里遺跡 03-4 調査地の調査では、縄文時代晩期から近世に至る多様な遺構・遺物を検出することができた。扇状地扇端にほど近い沖積地に立地する当調査地は、水位の上昇や河川氾濫の影響を直接的に受けており、当遺跡内の調査の中で最多となる 10 面以上の遺構面を確認した。これらの遺構面は、破堤堆積物などの砂礫に覆われて累重しており、調査によって各時期における利用状況を知ること、周辺地域の歴史環境の変遷過程を実態的に理解することができる。

### 1. 縄文時代中期～晩期（第 9a' 層～第 8b-2 層）

第 9a' 層からは汽水生種の珪藻が確認されており（第 7 章第 1 節）、炭素年代の示す縄文時代中期段階では（第 7 章第 7 節）、当調査地周辺が汽水の影響を強く受ける氾濫原の環境にあったことを示す。北東の扇状地上に位置する調査地（03-1、03-2 調査地）では、遺構や遺物の出土が確認されるものの、当調査地においては積極的な人間活動の痕跡は確認されない。上層の遺構や包含層から、この時期の土器が出土することがあるが、いずれも細片で磨耗が著しく、河川氾濫時などに上流から運搬されてきた遺物が二次堆積したものと考えることができよう。

縄文時代後晩期になると、水没・離水を繰り返しながらシルト層が堆積する淡水化した湿地域が広がる。部分的な下層確認調査では、湿地の中で小流路が網状に形成・埋没を繰り返す状況が確認されるが、調査地東側では、扇状地の発達に伴って比較的大規模な砂礫供給が進む。そのため、西に下る傾斜地形が形成され、調査地東側ほど離水して土壌が発達する。第 8b-3 層に対応する層準では、層相の著しい側方変化が確認され、その境界付近が一時期の水陸分岐線となると理解された（図 324）。周辺ではピットや土器の散布などが確認される。出土する土器は、突帯文土器（長原式）でもやや古い様相を持つもので（図 325-4・5）、この頃を当調査地における人間活動の端緒と捉えることができる（ただし、第 8b 面 5-1013 土坑出土の土器（図 322-1）は縄文時代晩期中頃の篠原式に類似する）。当調査地より 1 km 北方でも T.P.1.0 m を切る低位において、靱痕が付着した滋賀里Ⅲ b もしくはⅣ式と考えられる深鉢の出土があり（大阪府教育委員会 1991）、縄文時代晩期における稲作の存在を示唆するが、当調査地における珪酸体分析の結果では、イネ属珪酸体は弥生土器を包含する第 8a-2 層で初出し、突帯文土器のみが出土する第 8b-2 層以下では確認されない。縄文晩期土器の出土は、扇状地扇端部における人間活動を示すものではあるものの、その実態は未だ不明とせざるを得ない。

また、この後に続く弥生時代前期の開発前、もしくは開発過程において大きな地震の発生が想定される。第 8b 面において検出された地震関連遺構は、地割れと土坑状変形である。地割れは数条が平行しながら北東方向に屈曲して延びるもので、深さは 2 m 以上に達する。当面以外でも地震痕跡は確認され、第 7b 層（図 9 の 197 層など）が、上層の第 7a 層（古墳～平安時代）に火焰状に巻き上がる様子（変形ゾーン）や、第 2a 層上面で検出された小穴群（第 7 章第 2 節）など、各時代における地震の発生とその営力を伝えるとともに、低湿地において地震動が形成する特徴的な痕跡の類例を提示してくれる。

### 2. 弥生時代前期（第 8b 面）

縄文時代晩期を通じた東方扇状地上からの砂礫供給によって西方に下る斜面地形が形成され、相対的高位となった調査地東側に集落が立地・成立する。集落を構成する遺構から出土する弥生土器が近畿地方では稀に見る古相を示すことから、この集落を周辺地域における最古段階の弥生集落と位置付けるこ

とができる。また、これらの弥生土器に見られる様相が、瀬戸内海沿岸部の弥生前期遺跡において最古段階とされるものと多くの共通性を持つことは、遠賀川式（系）土器とも呼称される弥生前期土器の伝播が、早い段階で河内湖（潟）沿岸地域にまで達していたことを示す（ただし、国立歴史民俗博物館による炭素年代測定の成果によれば、弥生文化の伝播は瀬戸内海沿岸部でも 200～300 年ほどの年代差を持って進行したことが想定されている（小林謙ほか 2008））。巨視的に見れば、当遺跡は大阪湾・河内湖を含んだ瀬戸内海沿岸地域の最東端に位置することになり、北部九州から、東方におよぶ弥生文化の伝播・成立過程を考える上で大きな意義を持つ。

検出された集落は規模や建物構造の点で縄文的な様相を見せ、成立期における弥生集落の実態が窺われる。調査では平地式住居と考えられる建物跡のほか、30 点以上の土器が一括出土した 6-124 土坑や、壁面が被熱し赤変する 6-143 土坑、ヒョウタン種子や木製品が出土した 3-286 土坑、最古の井戸の可能性のある 3-279 井戸など、多種多様な遺構が確認され、集落の営みを示す好資料となった。

弥生前期土器は図化できたものだけで 450 点以上を数える。そのうち遺構から出土した約 250 点については、資料群の中で大きな時期差を見出せない。比較的短期間で廃絶した集落における、同時期性の高い資料群と捉えることができよう。また、建物 22 付近の包含層から出土した浮線文土器（図 310-3～5）や、産地同定分析で確認された讃岐地方産サヌカイト、胎土分析で確認された搬入土器など、広域にわたる交流関係を示唆するような遺物も含まれる。さらに、焼成失敗品の出土により集落内での土器生産が想定され、接合部剥離資料の検討によって初現期の弥生土器の成形技法に関わる重要な知見を得ることができた。

また、6-122 土坑の土器棺（図 294）や、3-267・268 溝での突帯文土器の出土により、弥生・縄文両土器の共時性に注目された。残念ながら両者の共伴関係については明らかにし得なかったが、出土状況や分布から両者の埋没に時間差があった可能性を想定した。その上で、当遺跡における縄文時代晩期から弥生時代前期を考えてみると、図 381 のような遺構変遷が考えられよう。stage1 の流路形成と埋没は縄文時代晩期を通して見られたもので、6-123、3-267・268 両溝の形成はその最終段階にあったものとする。stage2 で突帯文土器の土器棺など、遺構形成と遺物の埋没がなされるが、stage3 との時間的連続性は不明である（ただし、第 7 章第 6・7 節で行った年代測定分析では、stage2 の突帯文土器と stage3 の炭化米や木製品の実年代は近似している）。弥生土器の初現は stage3 の集落成立を契機としたものであり、3-267・268 溝などへの弥生土器廃棄も stage3 以降で考えられる。

なお、当然のことではあるが、3-267・268 溝への突帯文土器と弥生土器の埋没に先後関係があったとしても、それはあくまで当遺構で現象するものである。当遺跡の集落が周辺地域において、最古段階に成立した弥生集落と捉えられる以上、集落の周辺には依然として突帯文土器を使用する在来の集団が存在している。それらの集団と集落の弥生集団の間の交流関係と、それによる土器の交換・搬入については、別問題として考える

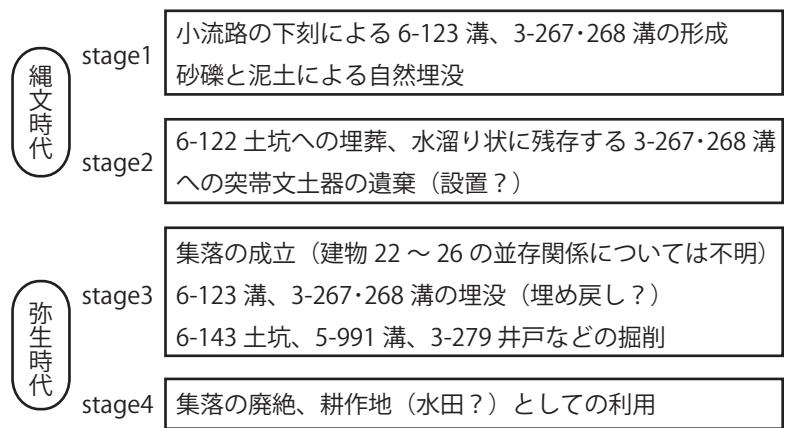


図 381 縄文時代晩期～弥生時代前期における遺構変遷

必要があるが、溝以外の、集落を構成する遺構からの出土遺物はほとんどが弥生土器で、突帯文土器については小片がわずかに含まれるのみである。少なくとも出土遺物からは、両集団の緊密な関係性を読み取することはできない。

検出された建物にはプランの重複が見られず、構成する遺構の切り合いもほとんど見られない。ただし、stage1で形成される3-267・268溝と6-123溝については、集落存続期間中の埋没（埋め戻し？）が考えられ、埋没後の上面から3-286土坑や3-279井戸などが掘削されている。集落の成立から廃絶までをstage3としたが、その期間中でも3-267・268溝埋没前と後の2段階が存在していることがわかる。また、6-123溝の埋没面上から土器焼成坑の可能性が考えられる6-143、6-152土坑が掘削されている状況からは、集落空間内での機能更新が想定できよう。

集落内で土器焼成坑と考えられる土坑が見られ、焼成失敗品、接合部剥離資料などの土器製作失敗品が出土する状況からは、自家消費的な弥生土器生産が想定できる。さらに、6-143、6-152土坑から出土する炭化米や、土器表面の靱圧痕、イネ属珪酸体の産出層位からは、集落西側の低位部を利用した水田の存在も窺われるが、耕作による上層からの攪拌や耕作土の更新が行われており、微高地1直下の1-300畦畔を除いて、水田畦畔は確認されていない。

遺構から出土した土器に大きな時期幅を見出しにくい一方で、包含層出土資料にはやや新しい様相を持つものが含まれる。集落の存続期間は比較的短く、廃絶後は水田などの生産域に転化（stage4）したのであろう。初期の弥生集落については、近接地への細かな集落移動が想定されているところであり（若林2002）、集落西側の標高1mに満たない低湿地を水田域としていた当遺跡の弥生集団が、相対的水位の上昇などによって排水不良となった水田（第8a面水田においても、調査地西側においては低湿な環境が想定された）を放棄し、新しい可耕地を求めて集落を移動させたことも考えられよう。

以上のように、弥生時代前期前半の遺構面（第8b面東側遺構群）の調査では、まとまった数の突帯文土器・弥生前期土器・石器などの出土によって、縄文から弥生への移行期における各種遺物を資料群として検討できたほか、集落内の多様な遺構から成立期の弥生集落の様相と動態を実態的に確認することができた。これらの実年代としては、炭素年代測定の結果から紀元前6世紀頃の年代が考えられている（第7章第6・7節）。当遺跡で確認された資料群が、近畿地方での弥生文化の成立を検討する上で大きな意義を持つことは疑いない。本書での整理をもって十分な分析・検討が行えたわけではないが、今後の発展的な研究を期待したい。

### 3. 弥生時代前期後半～中期（第8b面～第8a面）

弥生時代前期後半に起こった河川氾濫によって、調査地西側に供給された第8b-1層により微高地1が形成される。この微高地上にはピットや土坑などの遺構が見られ、活発な人間活動が想定される。出土する遺物には、弥生時代前期後半から中期後半にかけてのものがあり、古墳時代初頭まで残存したと考えられる微高地1上が複数時期にわたって利用されていたことを示す。

微高地1南側では遺構が集中しており集落を構成する（第5章第1項において、第8b面西側遺構群として報告）。建物周囲で出土する土器から、存続時期として弥生時代前期末から中期前半頃を考慮することができるが、その中心は調査地外の南方に存在する可能性が高い。遺物の出土が調査地南側に集中していることも（図231）、集落が南方へ拡大することを示唆している。微高地1上で検出された建物18は掘立柱建物で、桁行6間を数えながらも梁行に棟持柱が確認されない（図217）。建物北側と西側では建物プランに沿って直線的に延びる溝が確認され、南側（1-84落ち込み）からは、弥生時代中

期前半と考えられる土器が多く出土した（図 219）。

第 8a 面では微高地 1 の東西で水田が検出されている。これらの水田の埋没時期については、出土遺物が少く確定的ではないが、西側水田に関しては中期後半～後期まで下る可能性がある。開発開始時期についても不明だが、微高地 1 形成以後、大きな地形変化のない状態で第 8a 面の水田が確認されていることと、弥生時代前期においても周辺での水田開発が想定できることから、微高地 1 が形成された弥生時代前期後半からそれほど期間を空けずに、開発が開始された可能性が考えられる。微高地 1 上に成立する集落が、周囲の水田開発に関わっていた可能性は高く、水田（第 8a 面）と微高地 1 上の集落（第 8b 面）は一体的な歴史景観として捉えることができると思われる。ただし、微高地 1 東裾の建物 20・21 は、第 8a 面水田直下で検出されており（図 230）、集落廃絶後に水田が拡大された（微高地 1 を削り込んで造成した）ことを示唆することから、廃絶後も継続的な水田経営が行われたことが知れる。

つまり、開発状況を段階的に述べれば、「第 8b-1 層供給後にできた高まり（微高地 1）上を居住域とし、その西側と 4-128 溝の東側をおそらくは水田域とした前期後半～中期前半段階」と、「微高地 1 の東端を整形して可耕地面積を拡大し、微高地 1 以外を水田とした後続段階」があるということで整理されよう。後者の時期については明確でないが、微高地 1 北側では 4-138 土坑など IV 様式の遺物を出土するものがある。調査地外の微高地 1 北方に当該期の集落を想定すれば、微高地 1 の東西の水田も継続的に利用されていたとも考えられよう。

第 8a 面の東側水田に関しては、畦畔の形状や主軸、水田間の比高差などから 8 つのブロックを想定し、導水径路などを検討した（図 208）。埋没後の地盤沈下や攪乱などの影響により確実ではないものの、地形を巧みに利用した導水径路の設定からは、各ブロックが連関して機能するシステムチックな水田様態が想定された。取水源となる河川や水路は調査では確認されず、調査地外の東方や南方に存在すると思われるが、検出面積だけでも約 1 万㎡におよぶ東側水田で、田越し灌漑を行っている状況からは、比較的低温な水田環境が前提にあることが想定される（ただし、各水田の共時性については不明）。

#### 4. 弥生時代後期～古墳時代初頭（第 7b 面）

第 8a 面上には調査地全域において、シルト～粘土の第 7b 層が堆積しており、大きな環境変化が想定された。珪藻や花粉分析の結果からは、この時期に調査地全域が水没して湿地や沼沢地の様相を示していた可能性が指摘され、想定を裏付けることとなった。また、局所的に氾濫堆積物と見られる厚い砂礫の供給があり、堆積後の遺構形成と分布に大きな影響を与えている。第 7b 層内や直上からは、弥生時代後期後半から古墳時代初頭を主体とする遺物が多く出土するが、検出される遺構は小流路や溝のみで積極的な活動痕跡は見られない。一方で、当調査地北東 600 m の 03-1 調査地では、同時期の集落が検出されている（大文セ 2008a）。標高 6 m を超える高燥な扇状地扇中央部に比べ、標高 1～2 m 程度の当調査地付近は、不安定な環境下で大きく異なった土地利用が行われていたのであろう。残りのいい土器の多くが小流路付近から出土し（図 162）、中には入れ子になるような特殊な出土状況（図 167）を示すものもあることから、調査地周辺が祭祀の場として機能していた可能性も考えられよう。

#### 5. 古墳時代前期～中期（第 7b 面）

この時期の遺構は多くはないものの、調査地西側で大規模な溝（図 137）が、東側で土坑群（図 149）が確認されている。自然流路と考えられる 1-62 溝を埋め戻した後に掘削されている 1-59・60 溝は、地形を無視した形で南北 80 m 以上にわたって直線的に掘削されている。溝底にほとんど標高差がなく、埋土に砂礫などの堆積が見られないことから堀や壕のようにも思えるが、南北両端は調査地外

に延びておりその先の状況は不明。溝の帰属時期については、埋め戻された 1-62 溝内からの出土遺物に合わせ、1-59・60 溝内からの布留式後半に比定される土師器と少量の初期須恵器の出土から、4 世紀末から 5 世紀初頭までの年代幅で考えたい。また、倉庫の扉材などの建築部材の他、家具の一部と見られる木製品も出土しており、周辺に集落が存在することが想定される。また、1-59 溝からは獣骨が出土し、数頭分のウマの骨（ほとんどが歯）と判明した。古墳時代の周辺は「河内の馬飼」集団による牧として利用されており、寝屋川・四条畷市域など北河内の遺跡では、ウマの骨や馬具などの出土が多く見られる。ただし、これらの出土例は 5 世紀中頃以降のものがほとんどで、当調査地で出土した獣骨は遺存体として古いだけでなく、牧の初現に関わる重要な発見であると考えられる。全国的にみても 5 世紀中頃以前の出土例は少なく（松井 1990）、ウマの本格的な普及以前の資料と見ることができよう。

また、溝に付随する杭列について樹種同定を行った。建材や木器類と異なり、杭材には周辺で容易に獲得できる木材の使用が考えられることから、樹種を同定することで遺構周辺の植生環境が確認できる。結果的に、弥生時代以降継続する森林バイオマス利用による植生環境と変遷を復原することができた。また杭列の打設位置と用材の変化から、杭列の先後関係まで踏み込んだ具体的な検討が可能となった。

## 6. 古墳時代中期～飛鳥時代（第 7b 面）

第 7b 層の堆積過程において、局所的に砂礫が厚く堆積し相対的高地を形成する（図 81）。特に調査地中央部（5 区）に顕著であり、こうしてできた高燥地に集落が成立する。第 7b 面で検出された集落は、出土遺物や、建物構造、主軸方向の相違から、5 世紀後半から 7 世紀前半にかけて断続的に営まれた集落と考えられる（同時に奈良時代の集落も確認されているが、次項で述べる）。当調査地の南方 500 m に位置する部屋北遺跡では、TK208 段階以降に本格化する大規模な集落が確認されている（大阪府教育委員会 2005）。讃良郡条里遺跡においても当調査地以西の低地部の調査（03-4～03-6 調査）において、5 世紀後半以降の集落が微高地上に点在する状況が見られ、拠点的な集落と周辺の分村として評価することができよう。当調査地では、部屋北遺跡や 03-5・03-6 調査地で見られるような韓式系土器や渡来系遺物の出土は少ないが、原石の出土から滑石製品の生産が想定されている。部屋北遺跡と讃良郡条里遺跡の古墳時代集落を一体的なエリアで捉え直し、居住集団と集落機能、生産様態などの差異を抽出することは、古墳時代の集落構造と組織化を考える上で重要な知見をもたらす可能性がある。

第 7b 面の遺構のうち、飛鳥時代（7 世紀前半）の建物や溝などは、前代までと異なって真北からやや西側に振る軸方向を共通して持っており（図 382 左）、規格的な土地区画の存在が示唆される。しかしながら、北東 300 m に位置する 03-2 調査地で検出された飛鳥時代（7 世紀中頃～後半？）の建物は、同時期の建物間で近似した軸方向を持つことが見出されるものの、当調査地で見られたような、真北に近い軸方向は持っていない（図 382 右）。飛鳥時代においては、集落もしくは集団単位で土地区画の規格性が意識されているものの、広域にわたる統一的な区画整備は行われていないことが示唆される。

また、5-491 井戸の井戸枠と敷板、当て木には準構造船の船底部と舷側板が転用されていた。これらの転用材については、第 6 章第 1 節において船体構造と転用過程の復元的検討を行った。結果として、船形埴輪に見られるような船首および船尾側の仕切り板の存在を想定するとともに、当井戸への船材の転用が船体の船首もしくは船尾側 1/3 を対象としたものであり、材の分割に一定の基準尺が存在した可能性を指摘した。準構造船の部材については、近年の沖積低地の調査により資料数が増加しているものの、多くの場合は井戸枠などに転用されている。これらの船材について、船体構造の復原だけでなく、転用部位とその木取り、用材方法を検討することは、資源としての廃材利用と、転用対象物（この場合

は井戸枠)の設計、構造を考える上でも重要な視点といえよう。

## 7. 奈良時代(第7b面)

古墳～飛鳥時代の集落位置よりやや西方に集落が成立する。建物は方位軸に沿った主軸を持ち、集落の南側は東西に直線的な溝(5-503溝)によって限られる。さらに南方の坪境交点では溝が確認され、この時期における条里地割の導入を示唆する(第7a層(古墳時代～平安時代)下層で検出される遺構については帰属時期の確定が難しい)。先の03-2調査地の建物においても、飛鳥時代までは広域にわたって共通する軸方向は見出せなかった。ところが奈良時代になると、当調査地同様に建物軸が方位に沿う状況が見られ(図382)、この時期における広域的な地割の整備が始まった可能性を示す。具体的には条里地割の実体的施工ということになるのか。

そうした条里地割の施工を前提として見ると、当調査地で確認された集落が三十一ノ坪北半に位置していることがわかる。三十一ノ坪の南半部には基盤層である第7b層の供給が少なく、相対的低位となるため地形変換点に5-503溝を掘削して坪内を区画して、坪北半の高位部を集落として利用したのであろう。坪南半の低位部については、直上の第7a面で見られたように水田として利用された可能性が高い。さらに高位となる二十九・三十ノ坪の利用状況については不明であるが、第7a-1層下面溝の帰属時期が明確でなく、奈良時代まで遡る可能性を完全に否定できないことから、畠地として利用している可能性をひとまず挙げておきたい。いずれにしても、集落は条里地割に規制された形態と立地を持ち、周辺では坪境など地割に基づいた開発が行われている。これらの成果は、当遺跡における条里開発の開始と、その初現の様相を考える上で極めて重要な意味を持つものといえよう。

## 8. 平安時代(第7a面)

前代までの集落は廃絶し、調査地全域が耕地化される。耕地面の地形形成には、第7b層の供給量が大きく影響しており、調査地の中央部から西側の低位部を水田、東側の高位部を畠地として利用している状況が看取できる。両者を分ける坪境には畦畔が設置され(ただし坪境位置は上面のものやや場所を違える)、盛土内部から須恵器壺(図71-3)が出土している。また、三十一ノ坪内には、5-503溝による坪内区画を踏襲する4-38溝が確認される。坪境は確認されるものの、三十二ノ坪内の水田は部分的とはいえ小区画水田の様相を呈し(図75)、上面で確認される規格的な坪内地割は見られない。ただし、平坦な地形部分では坪境に合わせたような直線的な畦畔が設置されている。包含層からの黒色土器の出土を評価すれば、水田の廃絶時期は平安時代中頃から後半頃と考えられるが、開発開始時期については、第7a層が古墳時代から継続して形成される古土壌であるため不明とせざるを得ない。ただし、当調査地には、古墳時代中頃以降大規模な氾濫堆積物は供給されておらず、坪境畦畔からの出土遺物や、区画溝の踏襲なども考え合わせると、安定的な環境下において、同様の水田開発が奈良時代まで遡る可

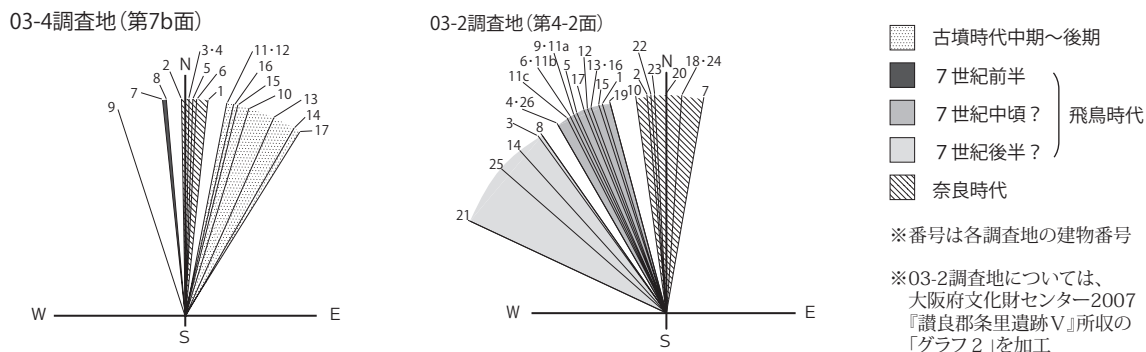


図382 古墳時代～飛鳥時代における建物軸

能性は高いと考える。

### 9. 平安時代後半～鎌倉時代（第6b面）

古墳時代初頭頃と同様に、平安時代後半頃にも調査地付近が水没し、沼沢地になった可能性が水生植物花粉の増加などから想定されており、細粒の第6b層はその際に堆積した泥土であると考えられる。それは第7a面での開発が廃絶して以降、周辺の開発が一定期間途絶していたことを示すといえよう。

この地の再開発に乗り出した集団は、泥土の堆積によって平坦化の進んだ三十二ノ坪内の水田開発において、規格的な坪内地割の導入を行っているようである（相対的高位の二十九・三十ノ坪については畠地として利用）。坪境溝内と1区に集中する拳大の礫は、地割設置の際の目印として水田内に持ち込まれた〈置き石〉と評価でき、残存率の高い瓦器碗の出土分布からは、長地型地割の導入が想定できる（図66）。第7a面と第6b面で検出・想定される水田遺構の比較からは、条里地割の施工にあたって〈坪境の設置〉と〈規格的な坪内地割の導入〉に、段階的な時間差が存在していたことが理解できる。

#### ・坪境の設置工程と変遷過程

三十・三十一ノ坪境、三十一・三十二ノ坪境では、坪境施設が浅い溝から耕地段差（畦）に変化した状況が考えられる（図64、73、383）。同様の変化が、条里地割の導入が行われた第7b面から第7a面にかけての坪境交点でも見られることから、次のことが考えられる。

坪境に掘削される浅い溝は、踏襲すべき地割がない（埋没して見えない）状況で地割の設定（再設定）を行う際に、1. 下層の地割を確認する、2. 原野や湿地に坪境を明示する、3. 坪境畦畔の盛土を得る、のいずれか、もしくは複数の目的をもって掘削されるものであり、それ自体が耕作地における坪境施設として機能するものではなく、あくまで予備的もしくは副次的に掘削されるものである。第6面段階の開発では、溝の直上に新たな畦畔が位置していることから、1、もしくは2の可能性が高いといえよう。以上の想定は、条里地割設定に伴った坪境設置の実体的な施工方法を明らかにする可能性を持っているが、平面および断面を利用した耕地状況の立体的な復原が必要であり、当調査地でも条件のよい場所以外で検討できなかった。類例の増加を待って再検討したい。

また、坪境の初現から通時的な再設置、踏襲において、坪境位置が変遷することが確認される。図383は、図72のD地点で記録した三十一・三十二ノ坪境断面図である。ここでは、第7b面の溝は確認されないが、第7a面での坪境畦畔設置以降、第6b面でやや南に移動し、第5面でさらに南へ移動。その後第3面まで踏襲され、長池の掘削に伴って第1面もしくは第2面で、やや北方に移動しているという変遷状況が看取できる。特に大きな変化を見せるのは、第7～5面までの時期である。ここでは、坪境畦畔の初現（第7a面）→開発の途絶（第6b層の堆積）→再開発・長地型地割の導入（第6面段階）→調査地全域を水田化（第5面段階）という耕地状況の変化があったことが想定される。坪境位置の移動は、耕作地の再開発や再整備などの画期に伴って行われたと理解したい。

### 10. 鎌倉時代～室町時代？（第5面）

第5面では下層の第6面との間に大きな地形的差異が存在しないにも関わらず、耕作面の大幅な更新が行われており、耕地の利用状況が大きく異

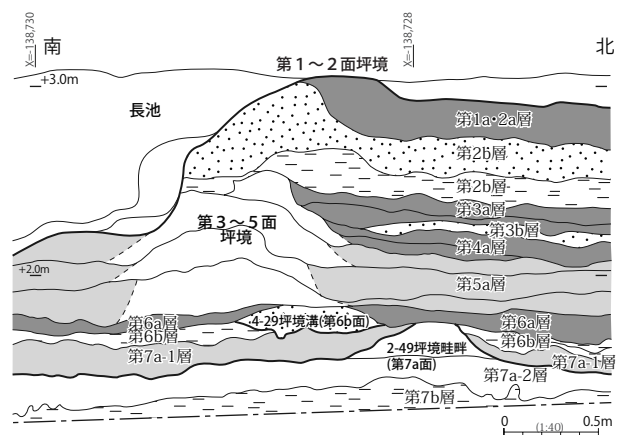
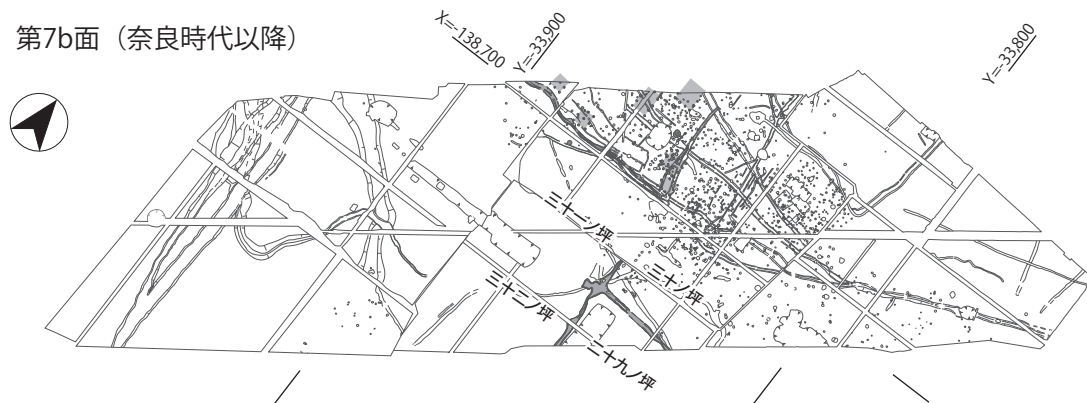
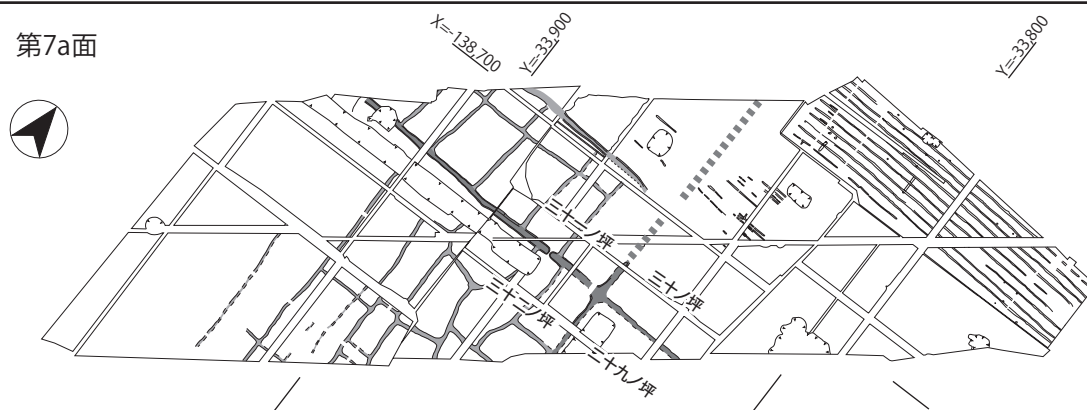


図383 三十一・三十二ノ坪境断面図

第7b面（奈良時代以降）



第7a面



第6b面

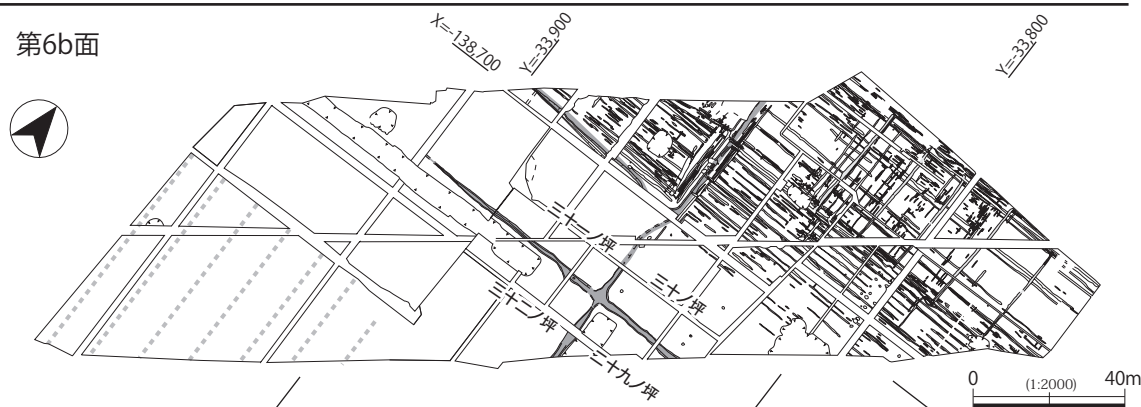


図 384 条里遺構変遷図 1

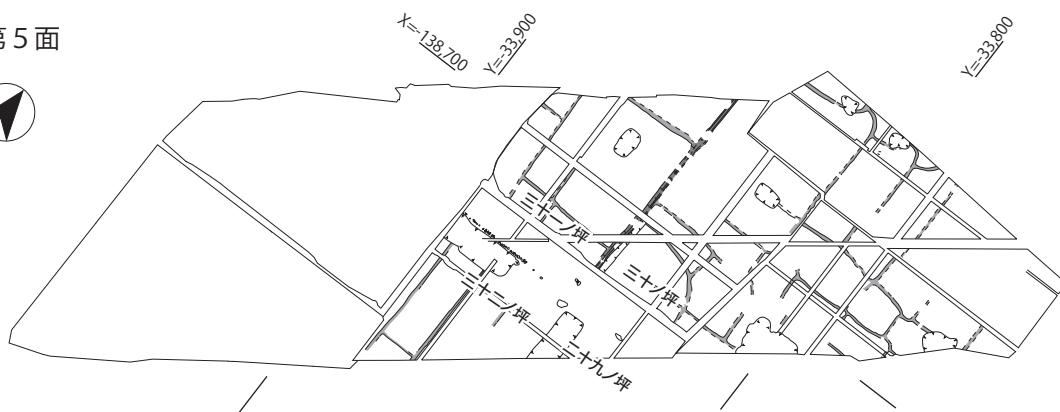
なる。地形に応じて高位部を畠地、低位部を水田利用している第7面～第6面段階の開発（図384）に対し、第5面では調査地全域が水田化され、耕地段差Bや4-38溝のような三十一ノ坪内に置かれた東西の耕地区画も失われる（図385）。また、前代まで畠地として利用されたと考えられる調査地北東側では、直線的な条里地割の中で異質な屈曲を持つ畦畔が検出された。この屈曲畦畔は三十一ノ坪内のみ確認され、他の坪では見られない（ただし、他の坪の遺構面の残存状況が悪いため検出できていない可能性も考えられる）。調査では地形や導水径路設定上の意義など、屈曲畦畔の採用にかかる積極的な理由を見出すことはできなかった。条里水田における類例の増加を待ちたい。

### 11. 室町時代～安土桃山時代（第3～4面）

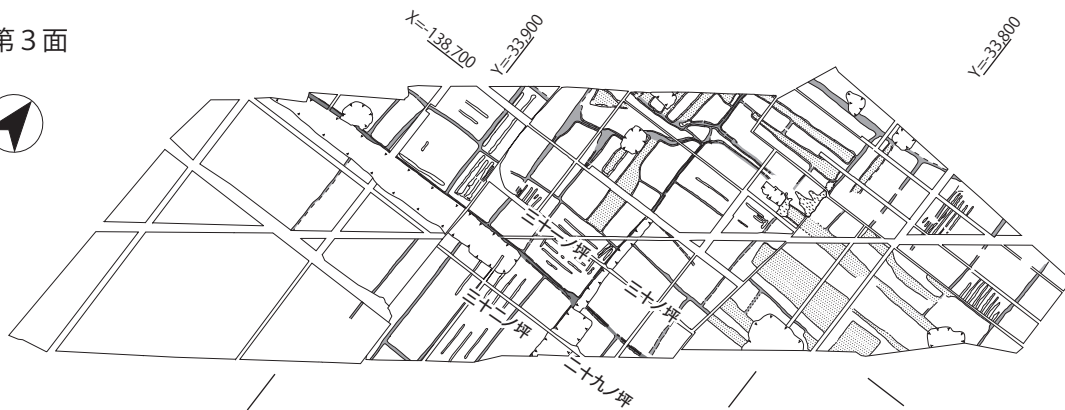
第4b層として調査地東方および北東方から砂礫が供給され、島畠が初現する。三十・三十一ノ坪境には畦畔を利用した導水径路が設定され、西方への導水を行う（図48）。この位置で坪境に開けられた水口については、第2面では攪乱されて確認できなかったものの、第1面では確認され、第4b層の供



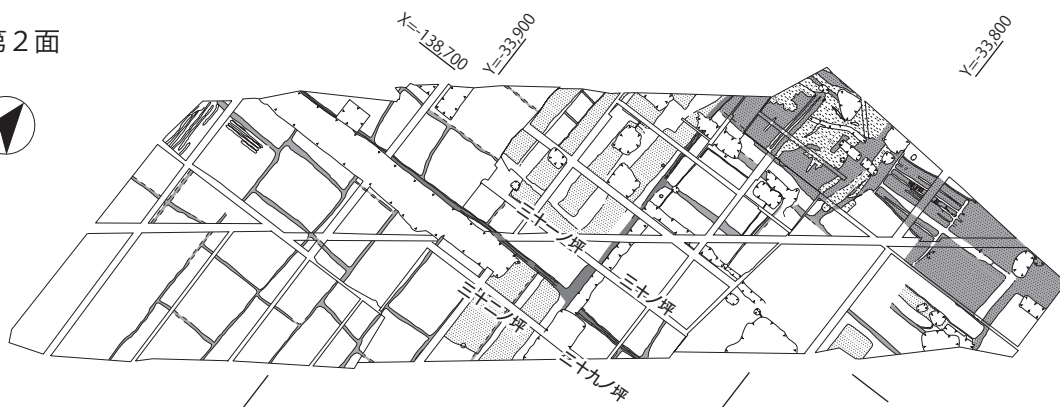
第5面



第3面



第2面



第1面

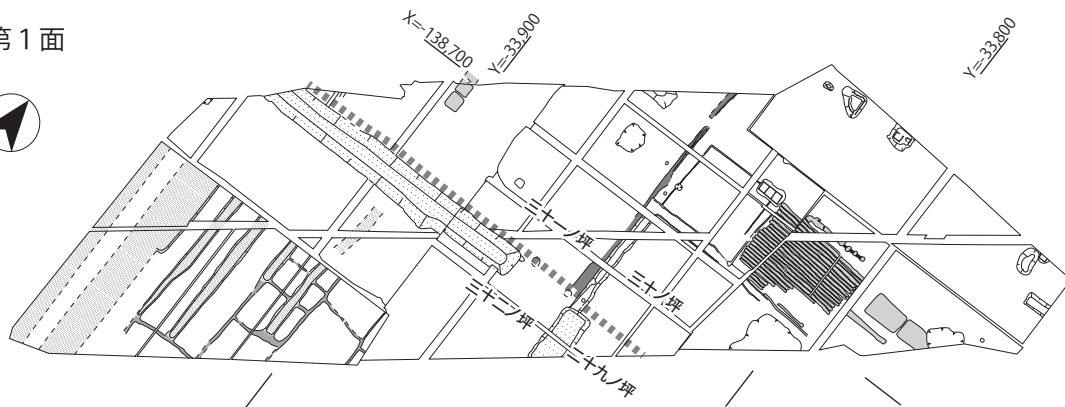


図 385 条里遺構変遷図 2

給以後、第1面段階まで長期にわたって利用されていた可能性が高い。三十二ノ坪では、11m間隔の南北畦畔が確認され、瓦器碗の位置から想定復原したように、第6面段階での開発以来、長地型地割が踏襲されていることを示唆する。また、第2b面に被覆されて良好に遺存した第3a面水田上では、平行する溝状くぼみが検出された。畝地の畝間溝であるとすれば、二毛作が行われている可能性もあるが、被災時期の検討が十分にできなかったため、明確にし得ない。

## 12. 安土桃山時代～江戸時代（第2面）

基盤層である第2b層は、調査地に北接する讃良川から供給されていると考えられ、おそらく破堤位置にほど近い調査地北東の6区において、0.7mを超える砂礫の堆積が見られた。相対的高位となった6区の讃良川沿いでは規格的な排水路が検出され、畝地として利用されていると考えられる（図39）。また、低位部の三十二ノ坪については、第2b層の供給は薄く島畠も見られない。前代に引き続いて水田として利用されている状況が確認されるが、畦畔間隔は11mの等間隔を示さず、第6面での再開発以降、踏襲されてきた長地型地割が崩壊している様相が看取できる。砂礫の供給による起伏の形成などの地形要件に左右されず、下面の踏襲が可能であった三十二ノ坪において、坪内地割の再編成が行われている背景については、地形的要因以外の理由を考える必要がある。

本書で度々引用してきた池島・福万寺遺跡では、東大阪市側における調査で、当調査地の第2面および第3面と同時期と考えられる遺構面を検出している（大文セ2007b：第2面（第2-1～2-4面）・第3面（第3-1～3-3面））。そして、ここでも同様に近世において、坪内地割を含めた土地利用状況が大きく変化することが確認されている。そうした変化に最も大きな影響を与えたと考えられているのが、元禄十六（1703）年に行われた大和川の付替え工事であろう。本来、河内平野を北西流していた大和川については、直接的な氾濫原である平野中央部のみならず、平野北部においても排水不良や氾濫の原因となっていたようで、貞享四（1687）年に各郡の百姓から出された付替えを求める訴状には、河内や若江のみならず、讃良や茨田郡の百姓の名も見られ（安村2005）、当遺跡周辺地域においても、大和川の影響があったことがわかる。第2面に見える坪内地割の再編成は、大和川付替え後の水利システムの再編成や村落の組織化に起因するものであった可能性を指摘しておきたい。

## 13. 近世～近代（第1面）

当面における詳細な調査は実施しなかったものの、下面の調査過程において溜め池や井戸についての記録を行っている。基盤層となる第1b層は6区北側で破堤した讃良川を供給源とする。おそらくは中世以降に進展した讃良川の天井川化によって、扇状地扇端部にほど近い当調査地付近の堤防は、耕地に比して最も高くなり、河川沿いの耕地への導水が困難になったと考えられる。当面で急増する溜め池や井戸などは、用水不足に対応するためのものであったろう。また、第1b層の大規模な供給は、前代までほとんど砂礫が供給されなかった三十二ノ坪におよび、当坪に初めて島畠が形成される。

また、第1a層の除去面で見られた土坑群は、氾濫堆積物（第1b層）の供給後に、下層の土壌（第2a層）を掘り上げて上面の耕作土とするための災害復旧土坑と考えられる。池島・福万寺遺跡でも同様の土坑群が検出されており、生駒山西麓の河内平野縁辺部の遺跡において、共通した耕地復旧作業が行われていることが知れる。災害復旧作業として、当時の河内平野で一般的に行われていたのであろう。上下水道の整備に伴う導水管の設置や用水路、耕地の区画整備など、現代において見られる景観の背景には、縄文時代晩期以降、2000年以上にわたって継続されてきた開発行為がある。第1面で見られた遺構群は、これらの歴史と現代景観を有機的に関連付けるための重要な資料を与えてくれる。

引用・参考文献〈第1～8章〉（ただし、第7章分については各節の文末に記載）

- 秋山浩三 1992 「弥生前期土器 —遠賀川式土器の地域色と吉備—」『吉備の考古学的研究』上 山陽新聞社
- 秋山浩三 2007 『弥生大形農耕集落の研究』青木書店
- 網伸也 2007 「上私部遺跡出土の須恵器の系譜と展開」『上私部遺跡Ⅱ』（財）大阪府文化財センター
- 新山雅広 2007 「有池遺跡 03-2 から出土した大型植物化石」『有池遺跡Ⅰ』（財）大阪府文化財センター
- 井上和人 ほか 2003 『平城京左京二条二坊十四坪発掘調査報告 旧石器時代編〔法華寺南遺跡〕』奈良文化財研究所
- 市川創・島崎久恵 2005 「畿内における集落出土滑石製品」『古墳時代の滑石製品』埋蔵文化財研究会
- 宇野隆夫 1986 「井戸」『弥生文化の研究』第7巻 雄山閣
- 宇野慎敏 1991 『寺内遺跡第3～7地点（北九州市埋蔵文化財調査報告書106）』北九州市教育委員会
- 梅崎恵司 2000 「東北部九州における弥生時代前期土器の変遷」『突帯文と遠賀川』土器持寄会論文集刊行会
- 江浦洋 1992 「水田面に残る足跡と農耕具痕 —池島・福万寺遺跡における若干の事例—」  
『大阪文化財研究』20周年記念増刊号（財）大阪文化財センター
- 江浦洋 1995 「陶邑周辺部における須恵器生産点描」『日置荘遺跡』大阪府教育委員会・（財）大阪文化財センター
- 江浦洋・長原亘 1995 「近世水田面にみる災害復旧 —池島・福万寺遺跡における近世水災害と水田復旧—」  
『大阪文化財研究』第8号（財）大阪文化財センター
- 汪宁生 2003 「云南泰族制陶的民族考古学研究」『考古学報』2003年2期 考古雑誌社
- 大字高宮財産管理委員会 1999 『ふるさと高宮いまむかし —統資料史編—』
- 大岡由記子 1998 「滑石製玉作りに関する基礎的作業」『守山市文化財調査報告書第66冊』守山市教育委員会
- 大阪府教育委員会 1991 『讃良郡条里遺跡発掘調査概要Ⅱ』
- 大阪府教育委員会 2004 『部屋北遺跡発掘調査概要Ⅰ』
- 大阪府教育委員会 2005 『部屋北遺跡発掘調査概要Ⅱ』
- 大阪府教育委員会 2006 『部屋北遺跡発掘調査概要Ⅳ —自然科学編—』
- 大手前大学史学研究所編 2007 『土器研究の新視点』考古学リーダー9
- 岡田賢 2006 「古墳時代中・後期の遺構と遺物」『部屋北遺跡発掘調査概要Ⅴ』大阪府教育委員会
- 岡本茂史 2008 「周溝を有する建物」『研究調査報告』第六集 財団法人大阪府文化財センター
- 岡本淳一郎 1997 「“周溝をもつ建物”について」『埋蔵文化財調査概要』平成8年度  
財団法人富山県文化振興財団・埋蔵文化財調査事務所
- 岡本淳一郎 2006 「周溝を持つ建物の分類と系譜」『下老子笹川遺跡発掘調査報告』第Ⅴ分冊  
財団法人富山県文化振興財団・埋蔵文化財調査事務所
- 岡山県教育委員会 2001 『津島遺跡3 —北池・南池地点の発掘調査—』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告160
- 及川良彦 1998 「関東地方の低地遺跡の再検討 —弥生時代から古墳時代前半の“周溝を有する建物跡”を中心に—」  
『青山考古』第15号 青山考古学会
- 可児通宏 2005 『縄文土器の技法』同成社
- 金田章裕 1985 『条里と村落の歴史地理学研究』大明堂
- 窯跡研究会 1997 『古代の土師器生産と焼成遺構』
- 川上洋一 1999 「大和の井戸とその周辺」『みずほ』第30号 大和弥生文化の会
- 川崎地質（株）1998 「柵に使用された材の樹種同定」『大阪市平野区長原遺跡東部地区発掘調査報告Ⅰ』（財）大阪市文化財協会
- 木立雅朗 2003 「「刷毛目」調整と工具の基礎的研究1」『立命館大学考古学論集Ⅲ』立命館大学考古学論集刊行会
- 絹川一徳・富樫孝志 1992 「C. 石製品」『津島岡大遺跡3』岡山大学埋蔵文化財調査室
- 木下正史 1976 「古代炊飯具の系譜」『古代・中世の社会と民俗文化』和歌森太郎先生還暦記念論文集編集委員会
- 木全敬三 1987 「条里地割の計測と解析」『奈良県史4』名著出版
- 高知県教育委員会・（財）高知県文化財団埋蔵文化財センター 1986 『田村遺跡群 第2分冊』

- 高知県教育委員会・(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 2004『田村遺跡群Ⅱ 第二分冊』
- 神戸市教育委員会・(財)神戸市スポーツ教育公社 1993『大開遺跡発掘調査報告書』
- 後藤信義 2007「上の山遺跡検出の独立棟持柱をもつ大型掘立柱建物」『上の山遺跡Ⅱ』(財)大阪府文化財センター
- 小林青樹編 1999『縄文・弥生移行期の東日本系土器』考古学資料集9 国立歴史民俗博物館
- 小林謙一・春成秀爾・坂本稔・秋山浩三 2008「河内地域における弥生前期の炭素 14 年代測定研究」  
『国立歴史民俗博物館研究報告』第 139 集
- 小林正史 2006「北陸の弥生深鍋の作り分けと使い分け」『古代文化』第 58 巻第 3 号
- 小林正史・徳澤啓一・長友朋子・北野博司 2007「稲作農耕民の伝統的土器作りにおける技術と生産様式の結びつき」  
『北陸学院短期大学紀要』第 39 号
- 小林正史 2007「スス・コゲからみた炊飯用鍋とオカズ用鍋の識別 ―カリング土器の使用痕分析―」  
『国立歴史民俗博物館研究報告』第 137 集 国立歴史民俗博物館
- 小林正史 2008「縄文深鍋のスス・コゲからみた調理方法」『新潟考古』第 19 号 新潟県考古学会
- 近藤広 2006「近江における弥生前期から中期前半の建物」『弥生集落の成立と展開』第 55 回埋蔵文化財研究集会発表要旨集  
(財)大阪文化財センター 1987『久宝寺南(その2)』  
(財)大阪府文化財調査研究センター 1996『巨摩・若江北遺跡発掘調査報告 ―第5次―』  
(財)大阪府文化財調査研究センター 1997『田井中遺跡(1～3次)・志紀遺跡(防1次)』  
(財)大阪府文化財センター 2000『溝咋遺跡(その1・その2)』  
(財)大阪府文化財センター 2001a『池島・福万寺遺跡発掘調査概要XⅩⅥ ―IFJ97-2 調査地の概要―』  
(財)大阪府文化財センター 2001b『池島・福万寺遺跡発掘調査概要XⅩⅦ ―IFJ97-3 調査地の概要―』  
(財)大阪府文化財センター 2002a『讃良郡条里遺跡、小路遺跡、打上遺跡、茄子作遺跡、藤阪大龜谷遺跡、長尾窯跡群ほか』  
(財)大阪府文化財センター 2002b『摂河泉発掘資料精選Ⅱ』  
(財)大阪府文化財センター 2002c『池島・福万寺遺跡2』  
(財)大阪府文化財センター 2004a『小路遺跡(その2)』  
(財)大阪府文化財センター 2004b『小路遺跡(その3)』(財)大阪府文化財センター 2006b『讃良郡条里遺跡Ⅳ』  
(財)大阪府文化財センター 2006『太秦遺跡・太秦古墳群Ⅱ』  
(財)大阪府文化財センター 2007a『讃良郡条里遺跡Ⅴ』  
(財)大阪府文化財センター 2007b『池島・福万寺遺跡3』  
(財)大阪府文化財センター 2007c『山賀遺跡 ―寝屋川水系改良工事(一級河川寝屋川 新家調整池)に伴う発掘調査報告書―』  
(財)大阪府文化財センター 2008a『讃良郡条里遺跡Ⅵ』  
(財)大阪府文化財センター 2008b『池島・福万寺遺跡5』  
(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所 1995『上反方遺跡』  
(財)東大阪市文化財協会 1987『鬼虎川の木質遺物 ―第7次発掘調査報告書 第4冊―』
- 佐原真 1967「山城における弥生文化の成立」『史林』50 巻 5 号
- 佐原真・鈴木公雄 1974「ヨーロッパ先史時代の土器作り」『考古学研究』第 20 巻第 4 号
- 佐原真 1979「弥生土器の技術」『世界陶磁全集1 日本原始』小学館
- 佐原真 1986「弥生土器の製作技術」『弥生文化の研究』第 3 巻 弥生土器Ⅰ 雄山閣
- 酒井仁夫・伊崎俊秋 1981『今川遺跡(福岡県宗像郡津屋崎町所在遺跡の発掘調査報告書)』福岡県教育委員会
- 滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会 2008『弘前遺跡Ⅰ ほ場整備関係(水質保全対策)遺跡発掘調査報告 35-1』
- 四條畷市 1972『四條畷市史』
- 篠原祐一 1995「白玉研究私論」『研究紀要』第 3 号(財)栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 篠原祐一 1996「剣形模造品の製作技術」『研究紀要』第 4 号(財)栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 篠原祐一 2005「滑石の生産と使用をつなぐ視点」『古墳時代の滑石製品』埋蔵文化財研究会
- 菅榮太郎 2007「弥生時代の集落景観と集団関係」『考古学に学ぶⅢ』同志社大学考古学シリーズⅨ

- 相山林繼 1971 「石製模造品」『神坂峠』阿智村教育委員会
- 関川尚功 1986 「古墳時代における畿内の玉生産」『末永先生米寿記念献呈論文集』
- 総社市教育委員会 2006 『総社市埋蔵文化財調査年報』 15
- 副島邦弘 1993 『辻垣ヲサマル遺跡（椎田道路関係埋蔵文化財調査報告1）』福岡県教育委員会
- 高橋学 2003 『平野の環境考古学』古今書院
- 竹広文明 2003 『サヌカイトと先史社会』溪水社
- 田崎博之 1994 「夜白式土器から板付式土器へ」『牟田祐二君追悼論集』牟田祐二君追悼論集刊行会
- 田崎博之 2005 「土器焼成失敗品からみた焼成方法と生産体制」『土器研究の新視点』
- 大手前大学史学研究所オープン・リサーチ・シンポジウム発表資料 土器の技術・調理研究会
- 田崎博之 2007a 「土器焼成失敗品からみた焼成方法と生産体制」『土器研究の新視点』考古学リーダー9
- 大手前大学史学研究所編
- 田崎博之 2007b 「上の山遺跡出土の焼成失敗品について — 弥生時代中期前葉（弥生Ⅱ～Ⅲ期）の土器の生産様態—」
- 『上の山遺跡Ⅱ』（財）大阪府文化財センター
- 田中清美 1988 「弥生時代前・中期における穿孔・打ち欠きのみられる土器について」『考古学論集』2 考古学を学ぶ会
- 田畑直彦 1997 「畿内古・中段階の再検討」『立命館大学考古学論集』立命館大学考古学論集刊行会
- 智頭町教育委員会 2006 『智頭枕田遺跡Ⅰ』
- 塚田良道 1990 「弥生時代における二上山サヌカイトの獲得と石器生産」『古代学研究』122
- 辻本裕也・高橋敦 2005 「長原遺跡（NG02-8・03-6次）出土木製品の樹種同定」『長原遺跡発掘調査報告書Ⅱ』
- （財）大阪市文化財協会
- 手島美香・秋山浩三 2004 「弥生時代における打製石器製作技術の変容 — 瓜生堂遺跡の弥生前・中期剥片剥離の比較検討をケース・スタディーとして—」『瓜生堂遺跡Ⅰ』（財）大阪府文化財センター
- 帝塚山考古学研究所 1984 『縄文から弥生へ』シンポジウム資料
- 出原恵三 2005 「弥生文化の成立と高知平野」高知市史研究第3号
- 同志社大学歴史資料館 2006 『岩倉忠在地遺跡』同志社大学歴史資料館調査研究報告 第6集
- 土器持寄会論文集刊行会 2000 『突帯文と遠賀川』
- 徳島大学埋蔵文化財調査室編 1998 『庄・蔵本遺跡Ⅰ — 徳島大学蔵本キャンパスにおける発掘調査—』
- 中尾智行 2005 「北河内の条里遺跡 — 讃良郡条里遺跡の調査成果から—」『条里制・古代都市研究』第21号
- 中尾智行・山根航 2007 「近畿最古の弥生土器」『大阪文化財研究』第31号（財）大阪府文化財センター
- 中尾智行 2008 「初現期の弥生土器における接合部剥離資料 — 粘土紐積み上げによる土器成形技法の復原—」
- 『大阪文化財研究』第33号（財）大阪府文化財センター
- 中尾智行 2009 「近畿における初現期の弥生土器と集落」『みずほ』第41号 大和弥生文化の会
- 中静透 2004 『日本の森林 / 多様性の生物学シリーズ① 森のスケッチ』東海大学出版会
- 中園聡・松本直子・向井妙・別所秀高 2008 「大阪府山賀遺跡出土土器および関連資料の胎土分析」
- 『大阪文化財研究』第33号（財）大阪府文化財センター
- 中原計・秋山浩三 2004 「樹種からみた集落環境と弥生木器生産—瓜生堂 99・01 調査区における木製品・自然僕の同定結果から—」
- 『瓜生堂遺跡Ⅰ — 考察・分析・写真図版編—』（財）大阪府文化財センター
- 長原亘 1995 「水田における水災害の対応痕跡について」『大阪文化財研究』第9号（財）大阪文化財調査研究センター
- 中村豊 2000 「阿波地域における弥生時代前期の土器編年」『突帯文と遠賀川』土器持寄会論文集刊行会
- 西岡達哉ほか 1990 『一の谷遺跡（四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第7冊）』
- 香川県教育委員会・（財）香川県埋蔵文化財調査センター
- 農山漁村文化協会 1977 『日本農書全集』第十五巻
- 信里芳紀 2000a 「讃岐地域の初期遠賀川式土器」『突帯文と遠賀川』土器持寄会論文集刊行会
- 信里芳紀 2000b 「北四国における弥生文化の成立」『弥生文化の成立』第47回埋蔵文化財研究集会発表要旨集

- 乗松真也・森下英治・信里芳紀 2000 「讃岐地方における弥生土器の基準資料Ⅲ —前期後半～中期前葉の土器を中心に—」  
『財団法人香川県埋蔵文化財調査センター研究紀要』Ⅷ
- 濱田延充 2002 「近畿地方の弥生文化成立についての覚書」『環瀬戸内海の考古学 —平井勝氏追悼論文集—』上巻  
古代吉備研究会
- 原田大六 1979 「滑石製品」『宗像沖ノ島』宗像大社復興期成会
- バリノ・サーヴェイ(株)1996a 「西ノ辻遺跡第32次調査出土木製品の樹種同定」  
『西ノ辻遺跡第32次発掘調査報告』東大阪市文化財協会
- バリノ・サーヴェイ(株)1996b 「鬼虎川遺跡第33次調査出土木製品の樹種同定」  
『鬼虎川遺跡第33次発掘調査報告』東大阪市文化財協会
- 東大阪市遺跡保護調査会 1979 『鬼塚遺跡Ⅱ・若江遺跡発掘調査報告』東大阪市埋蔵文化財包蔵地調査概報 19
- 久田正弘 2007 「弥生住居の想定復元」『石川県埋蔵文化財情報』第18号 (財)石川県埋蔵文化財センター
- 兵庫県教育委員会 1984 『玉津田中遺跡調査概報Ⅰ』
- 兵庫県教育委員会 2007 『大中遺跡Ⅲ』兵庫県文化財調査報告 第319冊
- 平尾和久 2005 「滑石石材の流通と模造品生産—工房跡から復元される石材の流通—」『古墳時代の滑石製品』埋蔵文化財研究会
- 廣瀬時習 2002 「池島・福万寺遺跡の「滑石製品」—出土滑石製品とその「生産」について—」池島・福万寺遺跡2  
(財)大阪府文化財センター
- 廣瀬時習・福田由里子 2005 「近畿地方における滑石製品の生産と原石流通 —池島・福万寺遺跡の滑石生産から—」  
『古墳時代の滑石製品』埋蔵文化財研究会
- 深澤芳樹 1985 「土器のかたち—畿内第Ⅰ様式古・中段階について—」『財団法人東大阪市文化財協会 紀要Ⅰ』  
(財)東大阪市文化財協会
- 深澤芳樹 1989 「木葉紋と流水紋」『考古学研究』第36巻第3号 考古学研究会
- 深澤芳樹 1991 「弥生土器の基部成形技法」『唐古 —藤田三郎さん・中岡紅さん結婚記念—』田原本唐古整理室OB会
- 深澤芳樹 2000 「刻目段甕のゆくえ —前期弥生土器における広域編年の試み—」『突帯文と遠賀川』土器持寄会論文集刊行会
- 福岡市教育委員会 1992 『那珂5 —第10・12・14・16・17・21次調査報告—』
- 藤田三郎 1988 「弥生時代の井戸 —奈良・大阪の井戸を中心に—」『考古学と技術』同志社大学考古学シリーズⅣ
- 船築紀子 2007 「山賀遺跡 252 大溝下層・1397 溝出土石器について」『山賀遺跡』(財)大阪府文化財センター  
埋蔵文化財研究会・第57回埋蔵文化財研究集会実行委員会・九州国立博物館 2008  
『井戸再考』第57回埋蔵文化財研究集会発表要旨集
- 前原市教育委員会 2007 『潤地頭給遺跡Ⅱ(東風小学校建設に伴う文化財調査報告書 前原市文化財調査報告書第96集)』
- 松井章 1997 「考古学から見た動物利用」『部落解放なら』第8号 奈良県部落解放研究所
- 松井章 1990 「家畜と牧 —馬の生産—」『古墳時代の研究 生産と流通Ⅰ』雄山閣
- 松田順一郎 1999 「楔形両極石核の分割に関する実験 —縄文時代晩期サヌカイト製打製石鏃製作技術の復元にに向けて—」  
『光陰如矢』「光陰如矢」刊行会
- 松田順一郎・井上智博 2005 「風倒木痕とは似て非なる古地震痕跡—大阪府讃良郡条里遺跡の例—」  
『日本文化財科学会第22回大会研究発表要旨集』日本文化財科学会
- 松本建速 2008 「化学成分から考える縄文～平安時代の土器に用いられた粘土層」  
『日本考古学協会第74回総会 研究発表要旨』日本考古学協会
- 松本洋明 2000 「弥生前期土器の製作技法—平等坊岩室遺跡の資料を素材として—」『突帯文と遠賀川』土器持寄会論文集刊行会
- 豆谷和之 1991 「前期弥生土器考」『唐古 —藤田三郎さん・中岡紅さん結婚記念—』田原本唐古整理室OB会
- 豆谷和之 1995 「山口県弥生土器集成Ⅰ —山口市小路遺跡出土の前期弥生土器—」
- 豆谷和之 1996 「前期弥生土器出現」『古代』第99号 早稲田大学出版会
- 豆谷和之 2000 「遠賀川式土器の成立」『弥生文化の成立』第47回埋蔵文化財研究集会発表要旨集
- 三好孝一 1992 「西日本出土の浮線紋土器」『小阪遺跡 自然科学・考察編』大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター

- 三好孝一 1996 「河内瀧における遠賀川系土器の始源 —若江北遺跡第5次調査の成果から—」  
『巨摩・若江北遺跡発掘調査報告 —第5次—』(財)大阪府文化財調査研究センター
- 水本邦彦 2003 『日本史リブレット 52 草山の語る近世』山川出版社
- 望月精司 1997 「土師器焼成坑の分類」『古代の土師器生産と焼成遺構』窯跡研究会
- 森岡秀人 1993 「初期稲作志向モデル論序説」『考古学論叢』関西大学文学部考古学研究室
- 森下英治・信里芳紀 1998 「讃岐地方における弥生土器の基準資料 I —下川津遺跡出土前期弥生土器を中心に—」  
『財団法人香川県埋蔵文化財調査センター研究紀要』VI
- 森本晋 1991 「ごみの捨て方 —石器製作と廃棄—」『考古学研究』38—3
- 安村俊史 2005 「大和川付替え運動の転換期 —貞享4年の中家文書より—」『柏原市立歴史資料館館報』17 柏原市教育委員会
- 家根祥多 1994 「篠原式の提唱 —神戸市篠原中町遺跡出土土器の検討—」  
『縄文晩期前葉—中葉の広域編年 文部省科学研究費(総合A)研究成果報告書』北海道大学文学部
- 矢野健一 2006 「関西地方の縄文後晩期住居」『弥生集落の成立と展開』第55回埋蔵文化財研究集会発表要旨集
- 家根祥多 1984 「縄文土器から弥生土器へ」『縄文から弥生へ』帝塚山考古学研究所シンポジウム資料
- 山口誠治 1987 「久宝寺北遺跡出土木製品の樹種鑑定について」『久宝寺北(その1~3)』大阪府教育委員会
- 山口誠治 2003 「新上小阪遺跡出土植物遺体について」『新上小阪遺跡』(財)大阪府文化財センター
- 山中二男 1979 『日本森林植生』筑地書館
- 熊海堂(訳:豊田裕章) 1996 「華南沿海対外陶磁技術の交流と福建省漳州窯発見の意義」『関西近世考古学研究』4
- 湯本整 2007 「花屋敷遺跡における導水および貯水施設について」『大阪文化財研究』第32号 (財)大阪府文化財センター
- 横山浩一 1982 「佐賀県横枕における大甕の成形技術—現存する叩き技法の調査—」『九州文化史研究所紀要』第27号
- 横田洋三 2007 「丸木舟から準構造船へ」『丸木舟の時代』(財)滋賀県文化財保護協会
- 米田克彦 2008 「古墳時代玉生産の変革と終焉」『考古学ジャーナル』567 ニューサイエンス社
- 米田敏幸 1990 「中河内川の『布留系』土器群について」『考古学論集』第3集 歴史堂書房
- 六甲山麓遺跡調査会 1996 『熊内遺跡 第2次調査』
- 若林邦彦 1994 「弥生土器廃棄行為に関する覚書 —亀井遺跡 SK3060 出土土器の分析を中心に—」『考古学と信仰』  
同志社考古学シリーズVI 同志社大学考古学研究室
- 若林邦彦 2002 「河内湖周辺における初期弥生集落の変遷モデル」『環瀬戸内海の考古学 —平井勝氏追悼論文集—』上巻  
古代吉備研究会
- 渡辺正巳 2003 「長原遺跡(NG00-6)出土木質遺物の樹種鑑定」『長原遺跡東部地区発掘調査報告 VI』(財)大阪市文化財協会

# 報告書抄録

ふりがな	さらぐんじょうりいせき はち							
書名	讃良郡条里遺跡 VII							
副書名	一般国道1号バイパス（大阪北道路）・第二京阪道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	（財）大阪府文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第187集							
編著者名	中尾智行・山根航ほか							
編集機関	財団法人 大阪府文化財センター							
所在地	〒590-0105 大阪府堺市南区竹城台3丁21番4号 TEL072(299)8791							
発行年月日	2009年1月30日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
さらぐんじょうり 讃良郡条里 いせき 遺跡	ねやがわし しんけ 寝屋川市 新家 ちさき ほか 地先 他	27215	36	34° 44′ 43″	135° 37′ 58″	2003年 4月1日～ 2006年 3月31日	16,011㎡	国道1号バイパス （大阪北道路）・ 第二京阪道路建設
所収遺跡名	種別	時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
讃良郡条里 遺跡	その他	縄文 時代	流路、溝、ピット、土坑	縄文土器、石製品		中期～後期の土器片の出土 晩期の遺構・遺物		
	集落	弥生 時代	平地建物、竪穴建物、 掘立柱建物、井戸、溝、 土坑	弥生土器、石製品、木製品		前期前半と前期末～中期の集落		
	生産	弥生 時代	水田畦畔、耕作溝	弥生土器、石製品		中期～後期の小区画水田を広範 囲に検出		
	集落	古墳～ 奈良時 代	竪穴建物、掘立柱建物、 井戸、溝、土坑、ピット	土師器、須恵器、石製品、木製品、 獣骨		直線的な溝の掘削、5世紀初頭と 見られるウマの骨の出土、断続的 に営まれる集落の時期的変遷、集 落内での滑石製品生産、条里開発 の初現		
	生産	平安 時代	水田畦畔、耕作溝	土師器、須恵器		坪境畦畔の設置 坪内には小区画畦畔		
	生産	中世～ 近世	水田畦畔、耕作溝、島畠、 井戸、土坑	土師器、須恵器、瓦器、磁器、 石製品、木製品、鉄製品		条里型地割にもとづく耕作地		
要約	<p>当調査地では、縄文時代晩期から近世に至る遺構面が、氾濫堆積物などに被覆されて累重して遺存していたことにより、周辺の歴史環境の変遷を実態的に解明することができた。弥生時代前期の集落からは、近畿地方で最も古い様相を持つ弥生土器が出土し、溝から大量に出土した縄文晩期土器（突帯文土器）と合わせ、両土器文化の移行期の遺跡を実態的に確認することができる。弥生時代中期の水田では、いくつかの水田ブロックを組み合わせた水田整備と導水状況を見出すことができ、地形を活かした計画的な開発のあり方が看取できる。古墳時代から奈良時代にかけての集落の動態からは、土地利用状況と条里地割の初現が見られる。平安時代以降は調査地全域が耕作地となり、坪境畦畔の設置も確認される。古墳時代以降の環境勾配によって、畠地と水田は明瞭に区分されている。中世以降になると全域が水田化するとともに坪内地割も整備され、一部に長地型地割が導入されるが、氾濫堆積物の供給に対応して島畠の設置や溜め池、井戸などの遺構も見られる。近世の水田面では長地型地割が崩壊しており、現代地表面の水田開発に継続していく。</p>							



(財) 大阪府文化財センター調査報告書 第187集

## 讃良郡条里遺跡Ⅷ

一般国道1号バイパス(大阪北道路)・第二京阪道路建設に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書

発行年月日 / 2009年1月30日

編集・発行 / 財団法人 大阪府文化財センター

大阪府堺市南区竹城台3丁21番4号

印刷・製本 / 株式会社 中島弘文堂印刷所

大阪府大阪市東成区深江南2丁目6番8号

(財)大阪府文化財センター調査報告書 第187集

讚良郡条里遺跡  
Ⅷ

寝屋川市

# 讚良郡条里遺跡 Ⅷ

図  
版  
編

一般国道1号バイパス(大阪北道路)・第二京阪道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

図 版 編

二〇〇九年一月

財団法人  
大阪府文化財センター

2009年1月

財団法人 大阪府文化財センター

(財)大阪府文化財センター調査報告書 第187集

寝屋川市

# 讃良郡条里遺跡 VIII

一般国道1号バイパス(大阪北道路)・第二京阪道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

図版編

財団法人 大阪府文化財センター



# 写真図版目次

## カラー図版 1

1. 調査地遠景（南西から）
2. 調査地遠景（北西から）
3. 第3a面 2区（北から）
4. 第7a面 2区（北西から）
5. 第7a面 5区（西から）
6. 第7a層下面 6区（西から）

## カラー図版 2

1. 第7b面 5区（西から）
2. 第7b面 3-179土坑（南西から）

## カラー図版 3

1. 第7b面 1-59・60溝（南半）（南から）
2. 第7b面 1-59・60溝（北半）（南西から）
3. 第7b面 1-59溝獣骨出土状況（南から）

## カラー図版 4

1. 第8a面 4区（南東から）
2. 第8b面 建物18・19（南東から）

## カラー図版 5

1. 第8b面 建物22（南東から）
2. 第8a層出土 浮線文土器

## カラー図版 6

- 1・2. 第8b面 6-143土坑（北東から）：  
6-143、6-152土坑出土炭化米
3. 6-143土坑 灰層出土イネ属珪酸体
- 4・5. 6-143土坑最下部 灰・炭化物層
- 6・7. 6-122土坑深鉢内 漆塗膜

## カラー図版 7

1. 第7b面 5-491井戸出土遺物
2. 第7b面 1-59、1-60溝出土遺物
3. 第7b面 溝（弥生時代後期後半～古墳時代初頭）  
周辺出土遺物

## カラー図版 8

1. 第7b面 滑石製品
2. 第8b面 東側遺構群6-124土坑ほか出土弥生土器
3. 第8b面 東側遺構群3-267・268溝出土  
突帯文土器および弥生土器

図版 1 第1面～第2面遠景

図版 2 第2面～第3a面遠景

図版 3 第3a面～第5a面遠景

図版 4 第6b面～第7a面遠景

図版 5 第7b面遠景

図版 6 第7b面～第8a面遠景

図版 7 第8a面遠景

図版 8 第8b面遠景

図版 9 第8b面～第8b-2面遠景

図版 10 第7b面および第8b面 航空写真

図版 11～15 第1面近景

図版 15～17 第2面近景

図版 17～19 第3面近景

図版 19～20 第5面近景

図版 20～22 第6b面近景

図版 22～23 第7a面近景

図版 24～42 第7b面近景

図版 43～45 第8a面近景

図版 45～59 第8b面近景

図版 59～61 第8b-2面以下近景

図版 62～63 第1面～第5面関連出土遺物

図版 64 第1面～第3面関連出土土器

図版 65 第3面～第5面関連出土鉄器

図版 66 第2面～第6b面関連出土遺物

図版 67～68 第6b面関連出土土器

図版 68～70 第7a面関連出土土器

図版 70～104 第7b面関連出土土器

図版 105～106 第7b面～第8a面関連出土遺物

図版 107～133 第8b面関連出土土器

図版 134 第8b面～第8b-2層以下関連出土土器

図版 135～138 焼成失敗品

図版 139～140 接合部剥離資料

図版 141～146 第7b面関連出土石器

図版 147～150 滑石製品

図版 151～155 第8b面関連出土石器

図版 156～161 第7b面関連出土木器

図版 162 第7b面～第8b面関連出土木器

図版 163 第8b面関連出土木器

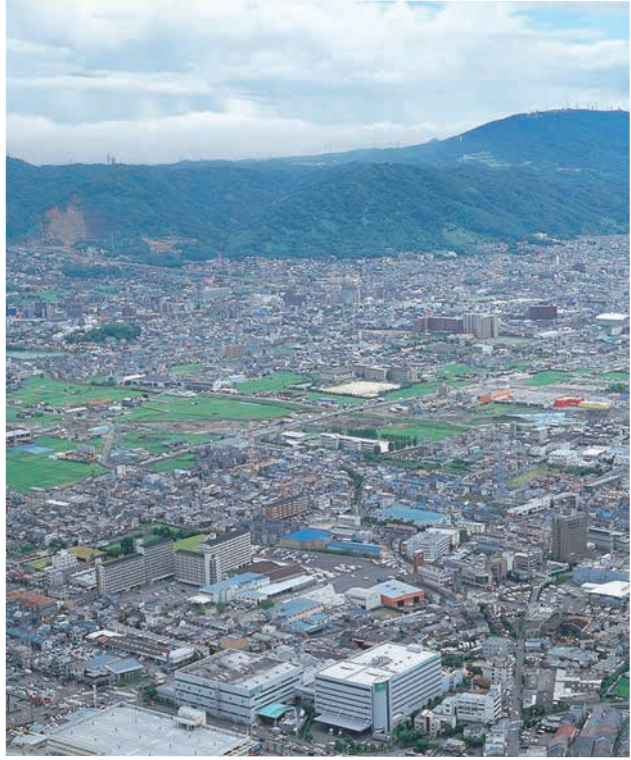
図版 164 第7b面 1-59溝出土獣骨



# カラー図版 1



1. 調査地遠景 (南西から)



2. 調査地遠景 (北西から)



3. 第3a面 2区 (北から)



4. 第7a面 2区 (北西から)



5. 第7a面 5区 (西から)



6. 第7a層下面 6区 (西から)

カラー図版2



1. 第7b面 5区 (西から)



2. 第7b面 3-179土坑 (南西から)



### カラー図版3



1. 第7b面 1-59-60溝(南半) (南から)



2. 第7b面 1-59-60溝(北半) (南西から)



3. 第7b面 1-59溝獣骨出土状況(南から)

## カラー図版4



1. 第8a面 4区 (南東から)



2. 第8b面 建物18・19 (南東から)

カラー図版5



1. 第8b面 建物22 (南東から)

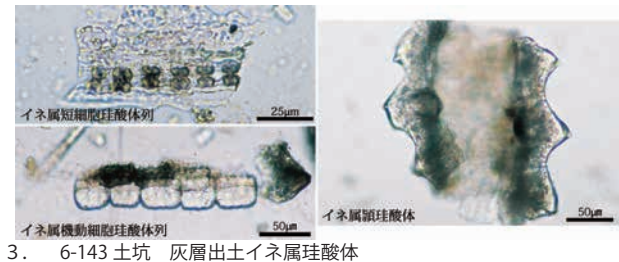


2. 第8a層出土 浮線文土器

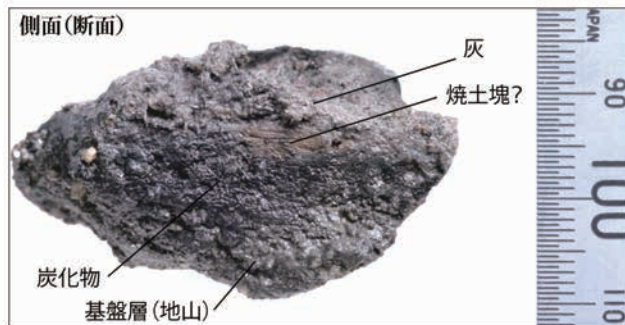
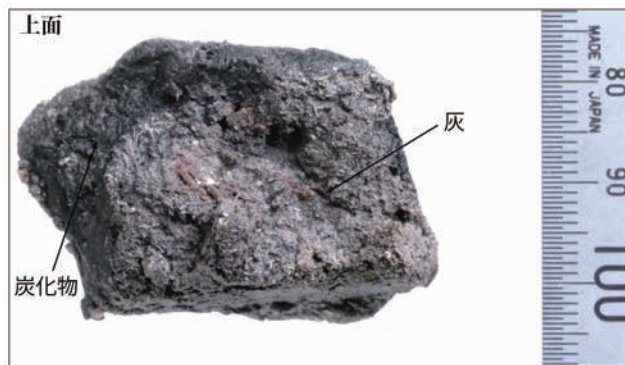
カラー図版6



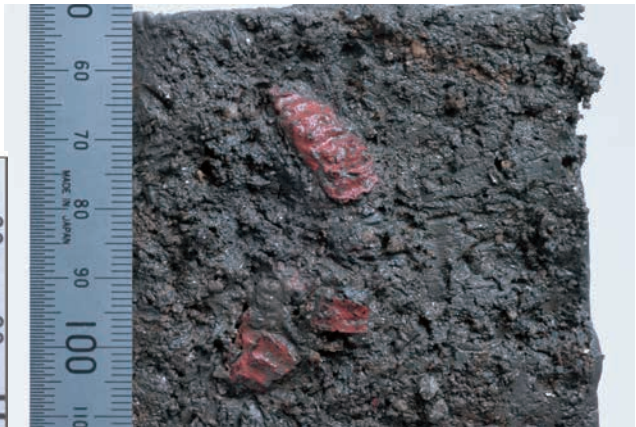
1・2. 第8b面 6-143土坑(北東から): 6-143、6-152土坑出土炭化米



3. 6-143土坑 灰層出土イネ属珪酸体



4・5. 6-143土坑最下部 灰・炭化物層



6・7. 6-122土坑深鉢内 漆塗膜

## カラー図版7



1. 第7b面 5-491 井戸出土遺物



2. 第7b面 1-59、1-60 溝出土遺物



3. 第7b面 溝（弥生時代後期後半～古墳時代初頭）周辺出土遺物

## カラー図版 8



1. 第7b面 滑石製品



2. 第8b面 東側遺構群 6-124 土坑ほか出土弥生土器



3. 第8b面 東側遺構群 3-267・268 溝出土突帯文土器および弥生土器

図版1 第1面～第2面遠景



1. 1区 第1面 島畠 (北西から)



2. 3区 第1b面 土坑群2 (南西から)



3. 4区 第2面 長池と水田 (北東から)

図版2 第2面～第3a面遠景



1. 5区 第2面 島島 (南西から)



2. 6区 第2面 島地 (東から)



3. 5区 第3a面 坪境畦畔と島島、導水径路 (北から)



図版3 第3a面～第5a面遠景



1. 5区 第3a面 水田と島島、導水径路（東から）

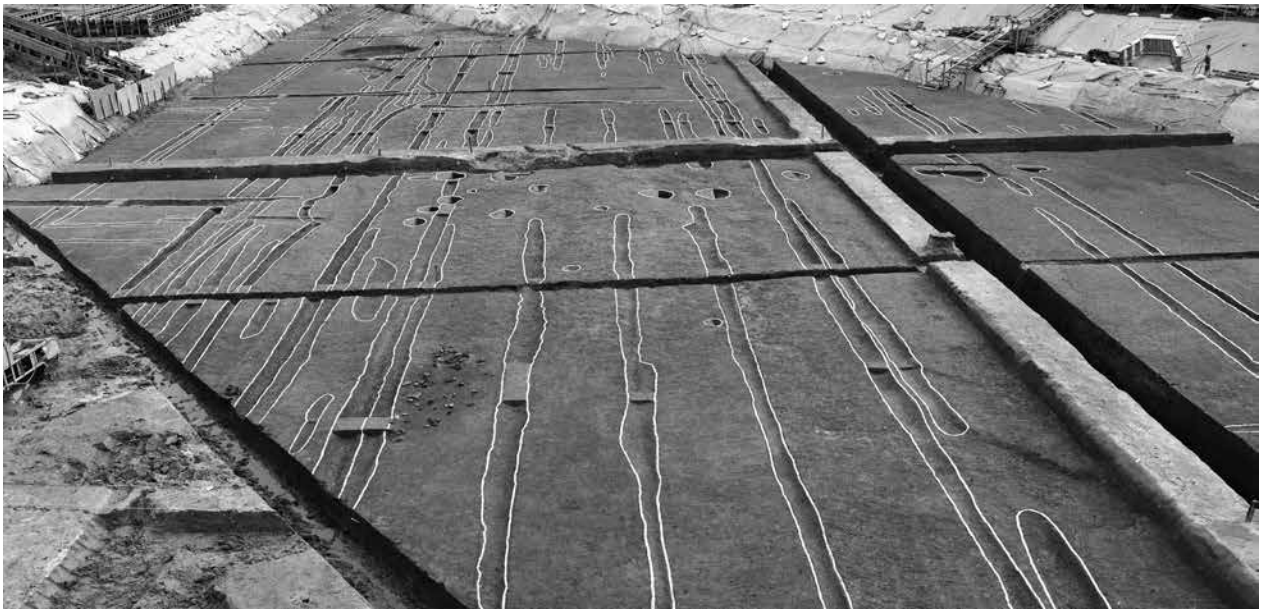


2. 5区 第5a面 坪境畦畔（南から）



3. 3区 第5a面 水田畦畔（南東から）

図版4 第6b面～第7a面遠景



1. 3区 第6b面 溝群（西から）



2. 2区 第6b面 坪境交点（北東から）



3. 1区 第7a面 水田畦畔（北西から）

図版5 第7b面遠景



1. 2区 第7b面 坪境交点 (北西から)



2. 3区 第7b面 3-164、5-342 溝と古墳時代前期土坑群 (北から)

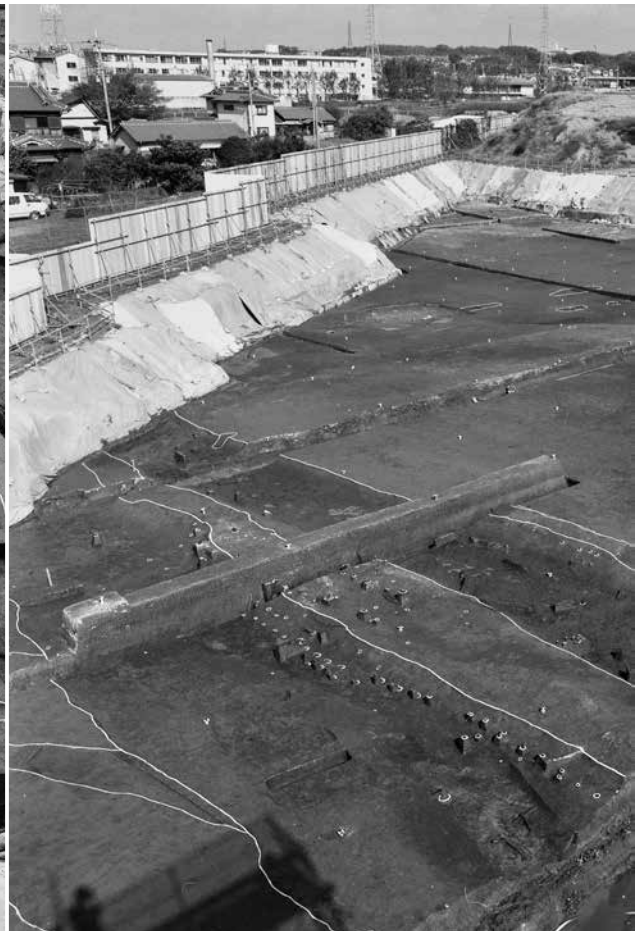


3. 4区 第7b面 微高地1および1-62 溝 (南東から)

図版6 第7b面～第8a面遠景



1. 1区 第7b面 1-59、1-60 溝 (北から)



2. 4区 第7b面 1-59、1-60 溝 (南西から)



3. 2区 第8a面 水田 (北東から)

図版7 第8a面遠景



1. 4区 第8a面 水田 (北東から)

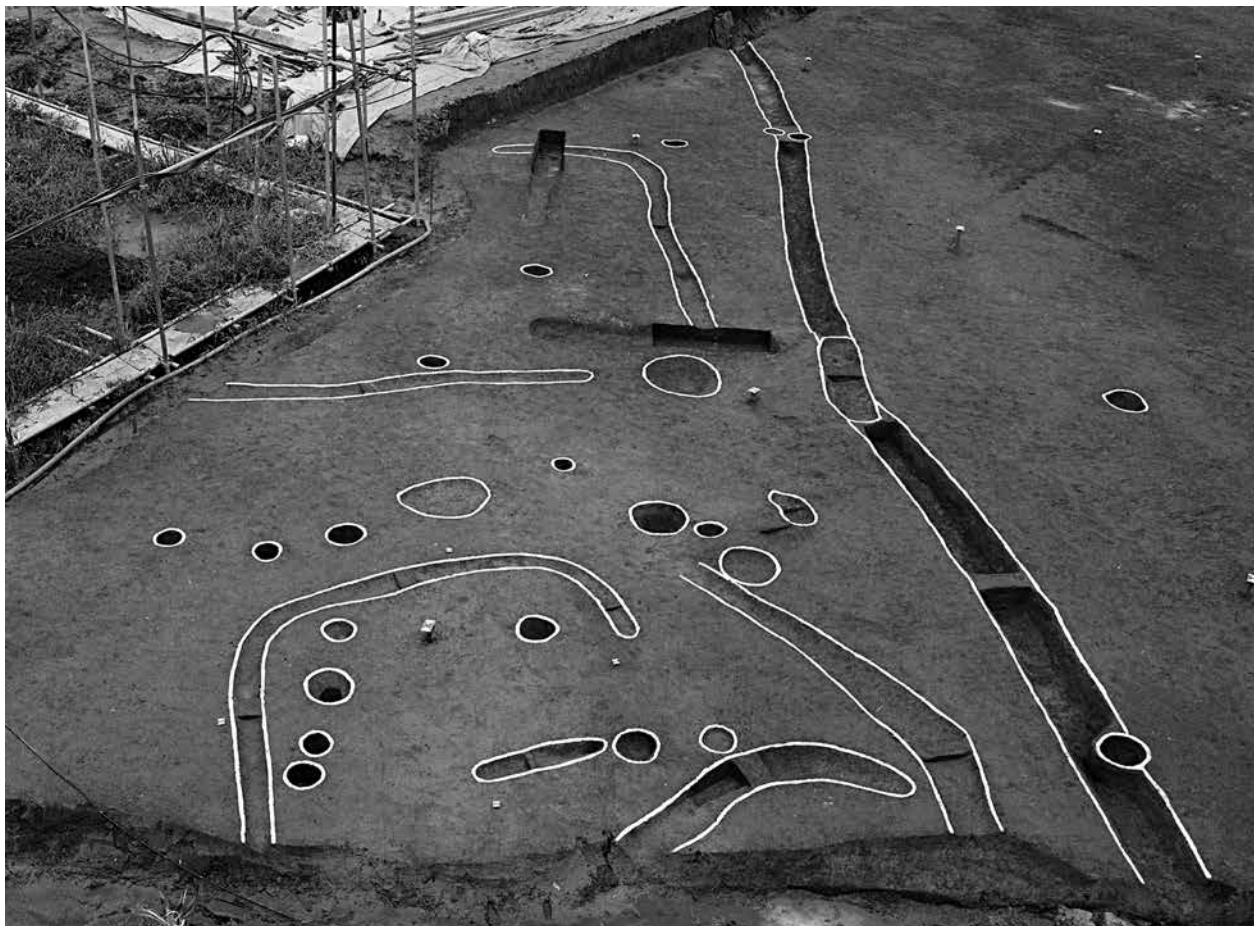


2. 5区 第8a面 水田 (南西から)



3. 1区 第8a面水田 (手前)・第8b面西側遺構群 (奥) (南西から)

図版8 第8b面遠景



1. 2区 第8b面西側遺構群 建物20・21 4-128溝 (南東から)



2. 4区 第8b面西側遺構群 (南東から)



3. 3区 第8b面東側遺構群 3-267・268溝 (西から)

図版9 第8b面～第8b-2面遠景



1. 5区 第8b面中央遺構群(手前)・東側遺構群(奥)(西から)



2. 1区 第8a-2面 1-300 畦畔(南西から)



3. 2区 第8b-2面 地割れ(南から)

図版 10 第7b面および第8b面 航空写真



1. 第7b面 航空写真（5区を中心に）



2. 第8b面東側遺構群 航空写真（3・6区を中心に）



# 図版 11 第 1 面近景



1. 1-1 ~ 1-5 畦畔 (南東から)



2. 5-17 坪境畦畔・5-1 溝断面：路線中央断割り (南東から)



3. 5-17 坪境畦畔水口付近 (北から)



4. 2-1 溜め池 (南東から)



5. 5-1 溝 (南から)



6. 5-2 溝 (西から)

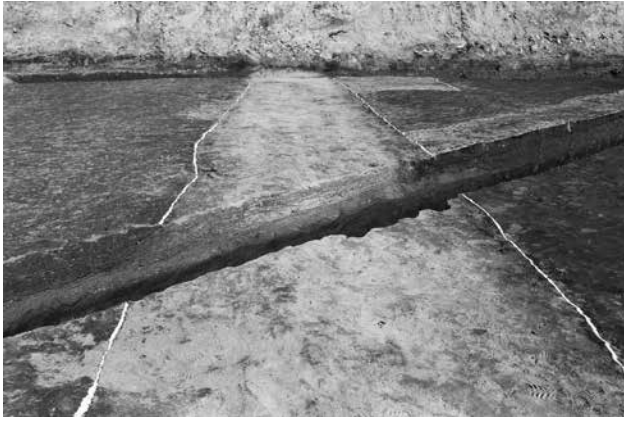


7. 5-2 溝断面：Y=-33,830 ライン (西から)

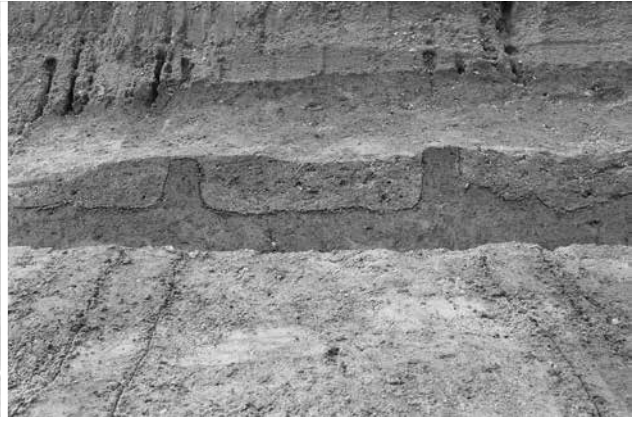


8. 1-13、1-15 畦畔 (南東から)

## 図版 12 第 1 面近景



1. 1-21 島嶼検出状況 (南から)



2. 土坑群 2 (東から)



3. 土坑群 2 (東から)



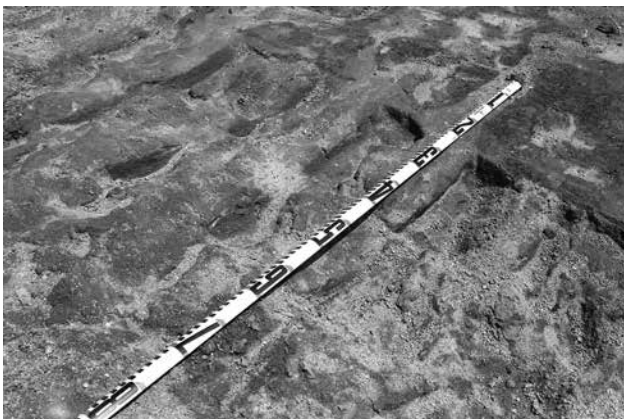
4. 土坑群 2 (東から)



5. 土坑群 2 (東から)



6. 土坑群 1 4-14、4-15 土坑 (南から)



7. 土坑群 1 4-15 土坑 (南から)



8. 2-3 土坑 (東から)

図版 13 第1面近景



1. 2-6 土坑 (南から)



2. 3-288 井戸 (南から)



3. 3-289 井戸 (東から)



4. 5-6 溜め井 (北西から)



5. 5-6 溜め井完掘状況 (南西から)



6. 5-6 溜め井断面 (東から)



7. 5-6 溜め井 釣瓶 (北東から)



8. 5-6 溜め井 (東から)

図版 14 第1面近景



1. 5-6 溜め井 墨書木材



2. 5-6 溜め井 墨書木材



3. 5-6 溜め井 墨書木材



4. 6-1 土坑断面 (南から)



5. 6-2 土坑断面 (南から)



6. 6-3 土坑断面 (南東から)



7. 6-4 井戸 (西から)



8. 6-4-2 井戸 (南西から)

# 図版 15 第1面～第2面近景



1. 第1面 6-120 井戸 (南東から)



2. 第1面 6-120 井戸 側板除去後 (南東から)



3. 第2面 2-11 畦畔畦畔と長池 (西から)



4. 第2面 2-10 畦畔畦畔 (東から)



5. 第2面 2-5 樋管 (東から)



6. 第2面 5-22 暗渠 (西から)



7. 第2面 1-28、1-29 畦畔 (南西から)



8. 第2面 5-23 溝 (南から)

## 図版 16 第2面近景



1. 第1b層による侵食（南から）



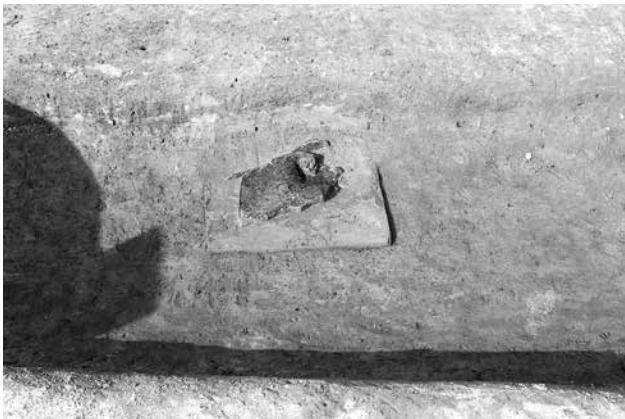
2. 畠地上の区画溝（北から）



3. 6-181 溝断面：Y=-33,790 ライン（西から）



4. 畠地上の区画溝断面：Y=-33,790 ライン（西から）



5. 6-181 溝 箕出土状況（南から）



6. 6-181 溝 箕出土状況（北から）



7. 足跡列（北から）



8. 足跡列（北から）

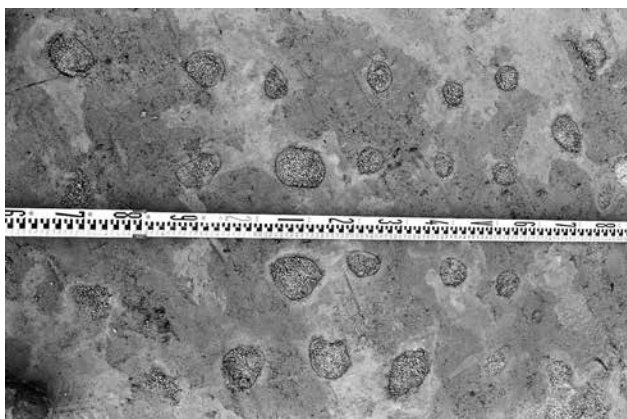
図版 17 第2面～第3面近景



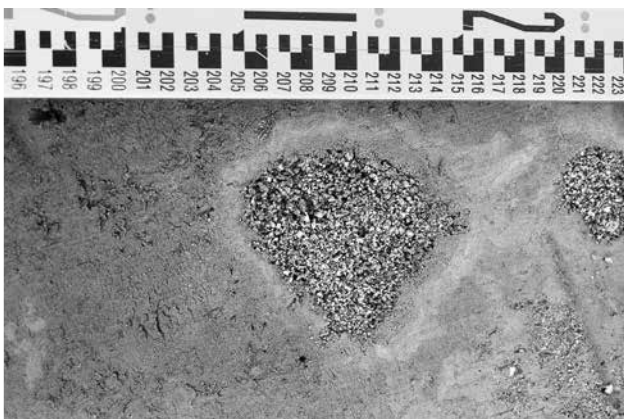
1. 第2面 小穴群 (北から)



2. 第2面 小穴群 (南から)



3. 第2面 小穴群 (南から)



4. 第2面 小穴群 (南から)



5. 第3面 坪境および条里畦畔 (北東から)



6. 第3面 坪境および島島 (南から)



7. 第3面 2-20 畦畔、2-22 坪境畦畔 (東から)



8. 2-23 坪境畦畔 浸食痕 (西から)

図版 18 第3面近景



1. 第3面 2-23 坪境畦畔 (南東から)



2. 2-24 坪境畦畔水口 (北から)



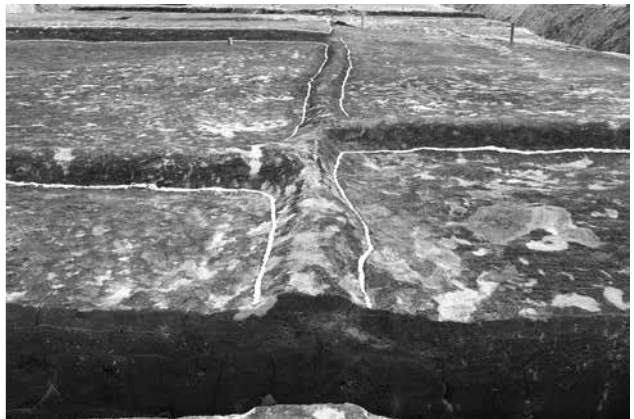
3. 5-34 畦畔 (東から)



4. 6区 畦畔埋没状況 (南から)



5. 5-26、5-27、5-28 畦畔検出作業 (北西から)



6. 5-26、5-27、5-28 畦畔 (西から)



7. 5-31、5-32 島畠 (南から)



8. 5-38 島畠 (南から)



# 図版 19 第3面～第5面近景



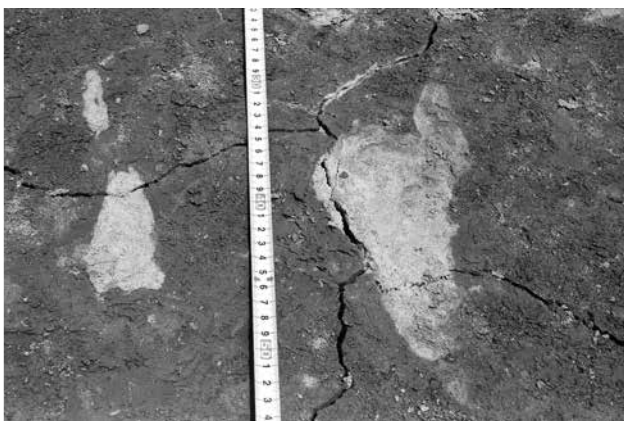
1. 第3面 5-38 島島断面：X=-138,700 ライン（南から）



2. 第3面 5-43 島島（北から）



3. 第3面 溝状くぼみ（南西から）



4. 第3面 足跡（西から）



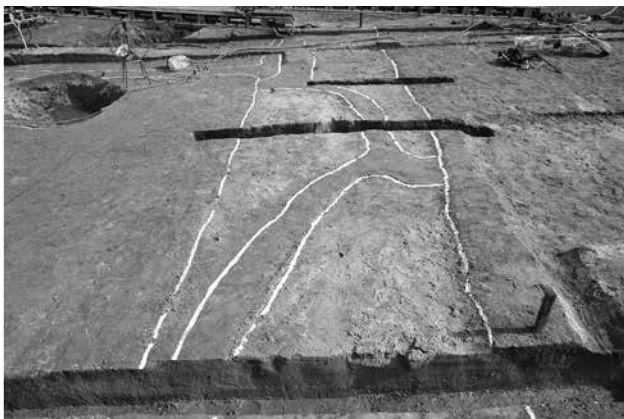
5. 第5面 5-66 坪境畦畔（南から）



6. 第5面 ピット列2（東から）



7. 第5面 5-71 畦畔（南から）



8. 第5面 3-254 畦畔検出状況（西から）

## 図版 20 第5面～第6b面近景



1. 第5面 3-257 畦畔 (西から)



2. 第5面 3-254 畦畔 (北東から)



3. 第5面 6-7、6-8 畦畔 (東から)



4. 第5面 6-10、6-11 畦畔 (北西から)



5. 第5面 足跡 (ウシ) (東から)



6. 第5面 足跡検出状況 (北から)



7. 第5面 足跡完掘状況 (西から)



8. 第6b面 耕地段差 A (南東から)

図版 21 第 6b 面近景



1. 坪境交点 (北から)



2. 2-42 坪境溝 (南から)



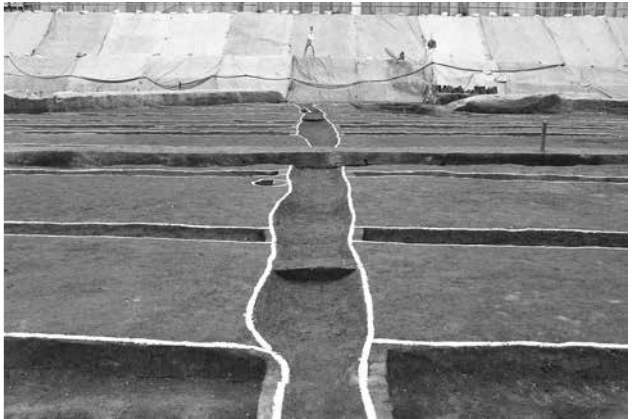
3. 4-29 坪境溝 (西から)



4. 耕地段差 A・B 交点付近 (南から)



5. 小溝群検出状況 (西から)



6. 小溝群 (南から)



7. 小溝群 (東から)



8. 3-48 溝 (右)、3-49 溝 (左) (西から)

図版 22 第 6b 面～第 7a 面近景



1. 第 6b 面 溝群内足跡 (南西から)



2. 第 6b 面 6-51 溝底面足跡と工具痕 (南から)



3. 第 6b 面 瓦器 (図 67-5) 出土状況 (南から)



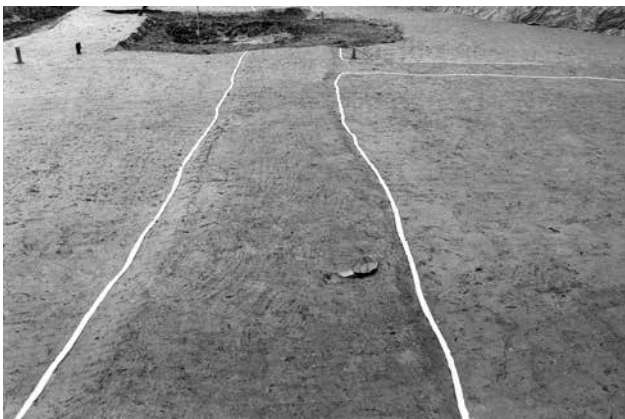
4. 第 6b 面 瓦器 (図 67-6) 出土状況 (南東から)



5. 第 7a 面 坪境交点 (北東から)



6. 第 7a 面 水田畦畔 (北東から)

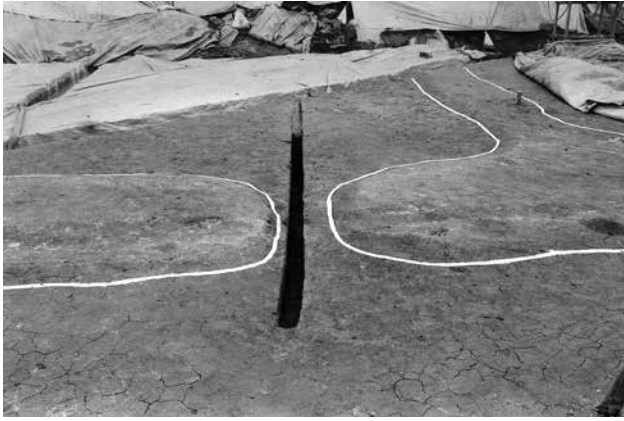


7. 第 7a 面 2-49 坪境畦畔 土器 (図 71-3) 出土状況 (東から)



8. 第 7a 面 2-49 坪境畦畔 土器 (図 71-3) 出土状況 (東から)

図版 23 第7a面近景



1. 2-49 坪境畦畔水口 (南から)



2. 4-42 畦畔 (南から)



3. 4区北半 畦畔検出状況 (東から)



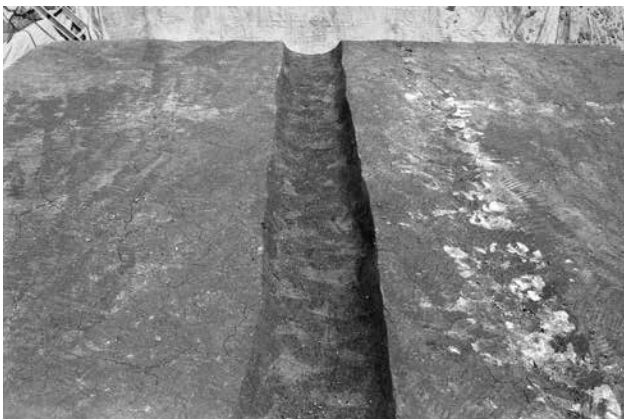
4. 小溝群 (西から)



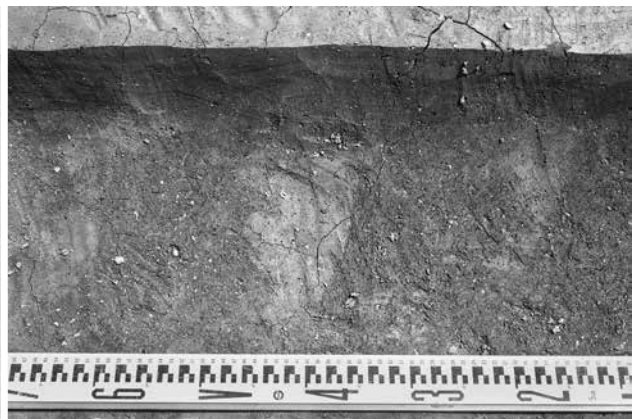
5. 6-102 溝 (西から)



6. 左: 6-48 溝 (第6a層下面)・右: 6-102 溝 (第7a層下面) 断面



7. 6-101 溝 (西から)



8. 6-101 溝底面の工具痕 (南から)

図版 24 第 7b 面近景



1. 2-106 坪境溝 (南から)



2. 2-106 坪境溝断面 (南から)



3. 5-503 溝 (南東から)



4. 建物 1 (南から)



5. 建物 2 (西から)

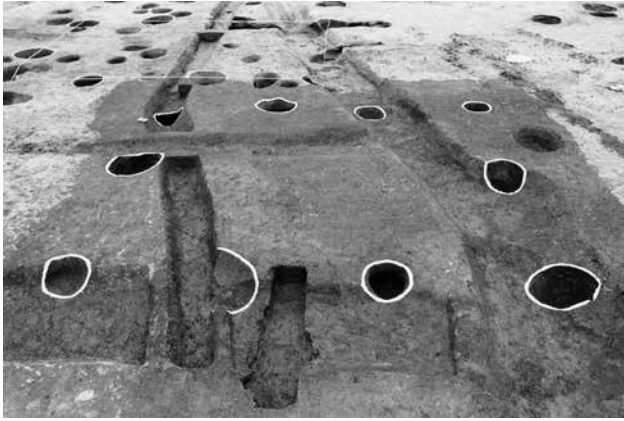


6. 建物 3 (南から)

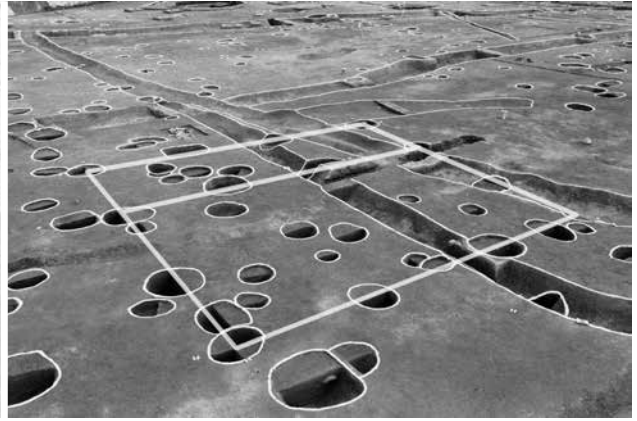


7. 建物 4 (東から)

図版 25 第 7b 面近景



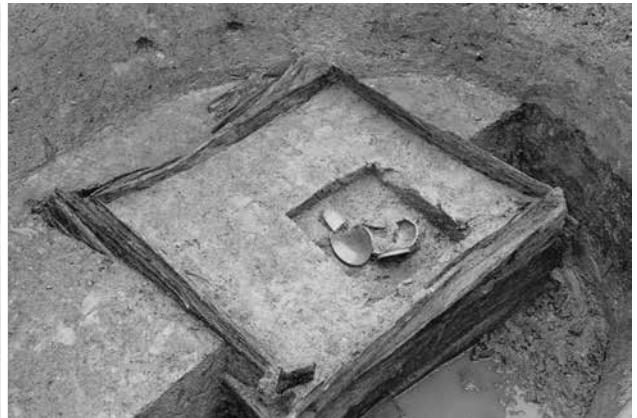
1. 建物 5 (南から)



2. 建物 6 (南西から)



3. 5-536 井戸上部断面 (北西から)



4. 5-536 井戸 (北西から)



5. 5-536 井戸下部断面 (西から)



6. 5-536 井戸 (西から)



7. 3-163 土坑 (南から)



8. 5-847 土坑 土器 (図 93-3) 出土状況 (南西から)

図版 26 第 7b 面近景



1. 建物 7 (北から)



2. 建物 7 5-635 ピット (西から)



3. 建物 8 (東から)



4. 建物 8 5-648 ピット (南から)



5. 5-491 井戸 (南から)



6. 5-491 井戸上部 (南から)



7. 5-491 井戸上部断面 (北西から)



8. 5-491 井戸掘方断面 (南から)



図版 27 第 7b 面近景



1. 5-491 井戸 南側井戸枠下部 (東から)



2. 5-491 井戸 東側井戸枠穿孔部 (東から)



3. 5-491 井戸 枠内下部断面 (南東から)



4. 5-491 井戸 土器出土状況 (東から)



5. 5-491 井戸 土器出土状況 (南東から)



6. 5-491 井戸 敷板 (北東から)



7. 5-491 井戸 最下部断面 (南東から)



8. 5-491 井戸 完掘状況 (南東から)

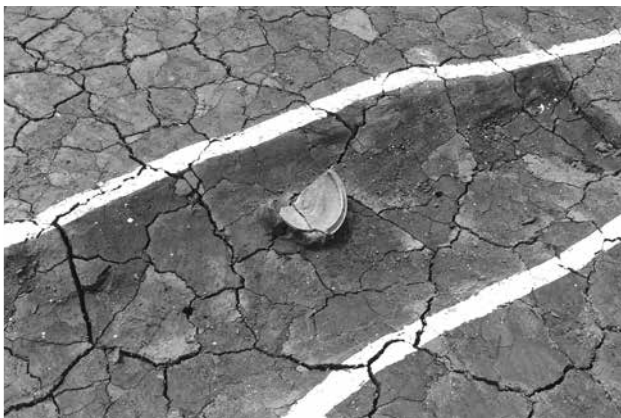
図版 28 第 7b 面近景



1. 6-106 溝 (左)・6-107 溝 (右) (南から)



2. 6-106 溝 (左)・6-107 溝 (右) 断面 (南から)



3. 6-107 溝 土器 (図 103-5) 出土状況 (南東から)



4. 5-479、5-480 溝 (北から)



5. 5-954 ピット (西から)

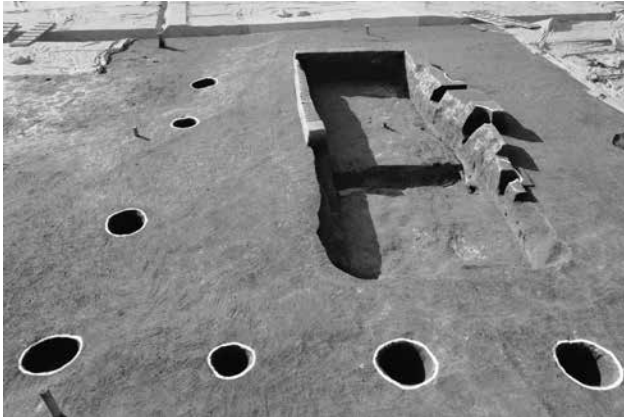


6. 建物 9 (南東から)



7. 建物 10 (西から)

図版 29 第 7b 面近景



1. 建物 11 (東から)



2. 建物 12 (西から)



3. 建物 13 (北東から)



4. 建物 13 5-425 ピット (南から)



5. 建物 13 5-905 ピット (南西から)



6. 建物 13 5-910 ピット (南から)

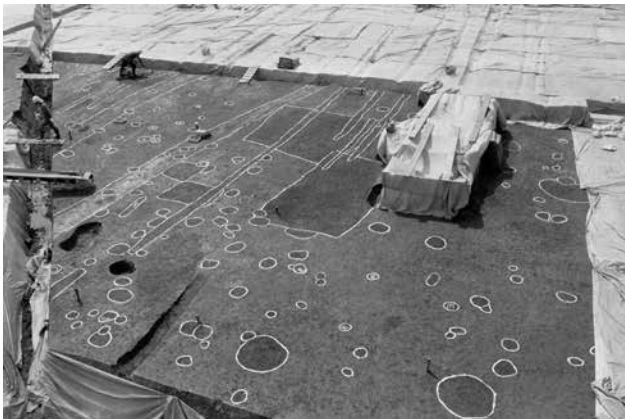


7. 建物 14 (南西から)



8. 建物 14 5-858 ピット (南から)

図版 30 第 7b 面近景



1. 建物 15・16 検出状況 (東から)



2. 建物 15 (南から)



3. 建物 15 5-556 ピット (南西から)



4. 建物 16 (東から)



5. 建物 16 Bライン断面北半 (西から)



6. 建物 17 (西から)

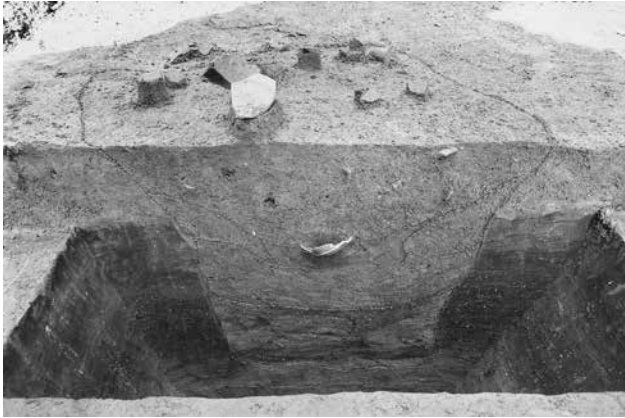


7. 建物 17 Aライン断面西半 (南西から)

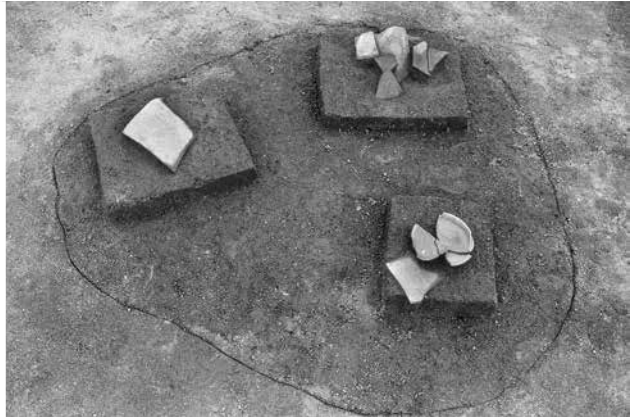


8. 建物 17 Aライン断面東半 (南西から)

図版 31 第 7b 面近景



1. 3-187 井戸断面 (南から)



2. 5-351 井戸検出状況 (北から)



3. 5-416 井戸 (南から)



4. 5-416 井戸上部断面 (南から)



5. 5-416 井戸 木製品出土状況 (南西から)



6. 5-416 井戸下部断面 (南西から)



7. 5-474 水溜め (南から)



8. 5-475 井戸 (南西から)

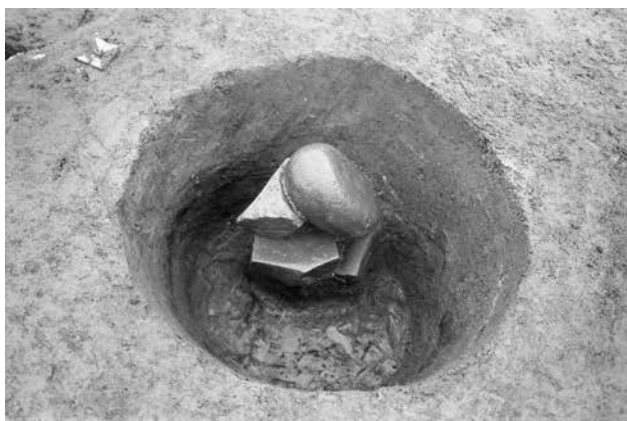
図版 32 第 7b 面近景



1. 1-57 溝 (北西から)



2. 1-57 溝断面 (西から)



3. 5-510 ピット (北西から)



4. 5-555 ピット (南から)



5. 5-734 ピット (南から)



6. 5-769 ピット (南から)



7. 5-843 ピット検出状況 (南から)



8. 1-59-60 溝 Aライン断面 (南東から)

# 図版 33 第 7b 面近景



1. 1-60 溝 Aライン断面 (南西から)



2. 1-59 溝 Bライン断面 (北から)



3. 1-60 溝 Bライン断面 (北から)



4. 1-59 溝 Cライン断面 (南から)



5. 1-59-60 溝 Cライン断面 (南から)



6. 1-60 溝 Cライン断面 (南から)



7. 1-59-60 溝 Dライン断面 (南から)



8. 大杭A (左)・B (右) (南から)

図版 34 第 7b 面近景



1. 大杭 C (上右)・D (上左)・E (下右)・F (下左) (南から)



2. 1-60 溝 杭列 1 (北西から)



3. 1-60 溝 杭列 1 断割り状況 (北西から)



4. 1-60 溝 杭列 2 (北から)



5. 1-60 溝 杭列 2 断割り状況 (西から)



6. 1-59 溝 杭列 7 北側断割り状況 (北西から)



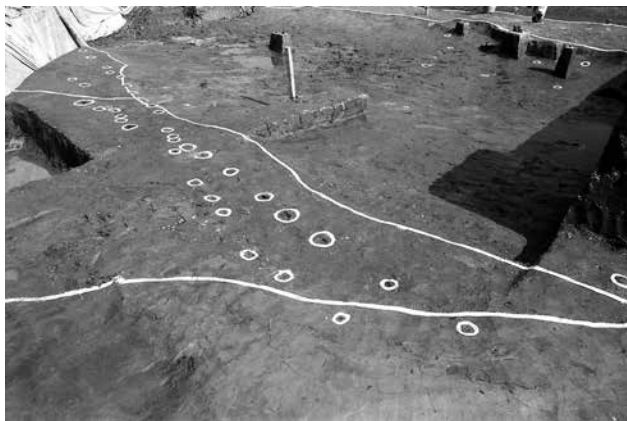
7. 1-59 溝 杭列 7 南側 (南から)



8. 1-59 溝 杭列 7 南側断割り状況 (南東から)



図版 35 第 7b 面近景



1. 1-59 溝 杭列 8 (右)・10 (左) (南西から)



2. 1-59 溝 杭列 8 断割り状況 (東から)



3. 1-59 溝 獣骨出土状況 (北西から)



4. 1-59 溝 炭化物集中部 (西から)



5. 1-60 溝 土器 (図 141-2) 出土状況 (東から)



6. 1-60 溝 土器 (図 141-1) 出土状況 (南東から)



7. 1-60 溝 土器 (図 143-29) 出土状況 (南西から)



8. 1-60 溝 土器 (図 144-34) 出土状況 (東から)

図版 36 第 7b 面近景



1. 1-60 溝 図 144-38 出土状況 (東から)



2. 1-62 溝 (北西から)



3. 1-62 溝 (南東から)



4. 1-62 溝 Aライン断面 (北東から)



5. 1-62 溝 Bライン断面 (南西から)



6. 1-62 溝 土器 (図 147-2) 出土状況 (東から)



7. 3-165 土坑 (北から)



8. 3-169 土坑 (南から)

図版 37 第 7b 面近景



1. 3-177 土坑検出状況 (南から)



2. 3-177 土坑 土器出土状況 (南から)



3. 3-177 土坑 (東から)



4. 3-179 土坑 土器出土状況 (南から)



5. 3-179 土坑 (南東から)



6. 3-188 土坑 (西から)



7. 3-193 土坑 (南から)



8. 3-193 土坑 (南から)

図版 38 第 7b 面近景



1. 3-203 土坑検出状況 (北東から)



2. 3区 土器集中部 (東から)



3. 4-87ピット (南から)



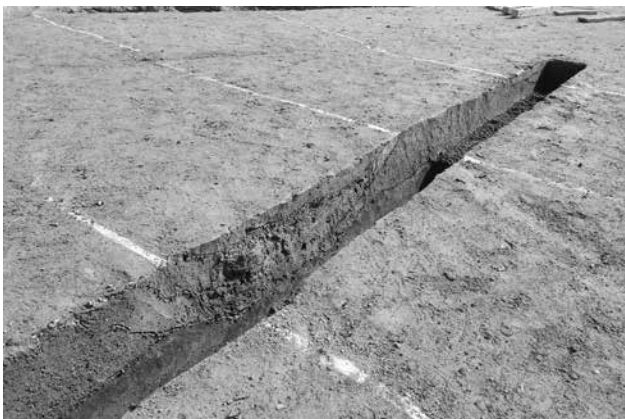
4. 5-958ピット (北から)



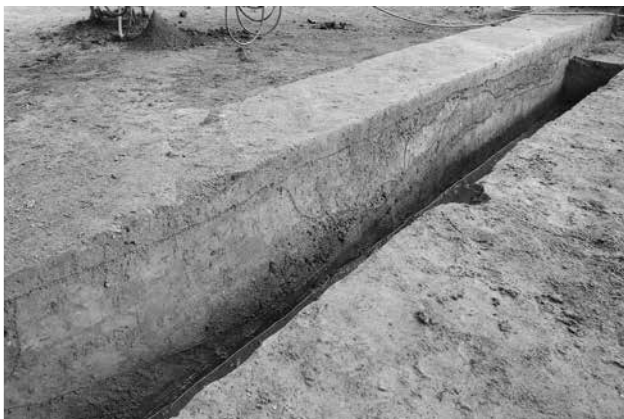
5. 3-164 溝東側 (西から)



6. 3-164 溝西側 (西から)



7. 3-164 溝断面：Aライン (西から)



8. 3-164 溝断面：Bライン (西から)

# 図版 39 第 7b 面近景



1. 5-342 溝東側 (西から)



2. 5-342 溝 Eライン断面 (北西から)



3. 5-330 溝 (北西から)



4. 5-330 溝 Cライン断面 (北西から)



5. 5-473 溝 (南から)



6. 6-99 溝 (北西から)



7. 5-521 溝 Dライン断面 (西から)



8. 5-614 溝 (西から)

図版 40 第 7b 面近景



1. 5-342 溝周辺 土器出土状況 (南東から)



2. 土器 (図 168-10) 出土状況 (南から)



3. 5-342 溝周辺 土器出土状況 (南東から)



4. 土器 (図 171-56) (左)・(図 169-28) (右) 出土状況 (南東から)



5. 5-521 溝周辺 土器出土状況 (西から)



6. 土器 (図 169-30) (上)・(図 170-46) (下) 出土状況 (北西から)

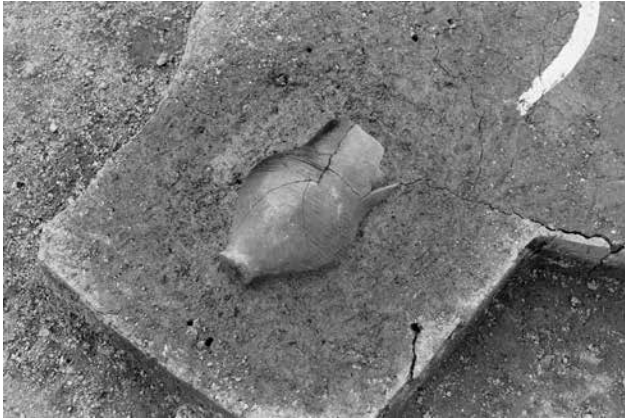


7. 土器 (図 173-82) 出土状況 (北から)



8. 土器 (図 173-81) 出土状況 (北西から)

図版 41 第 7b 面近景



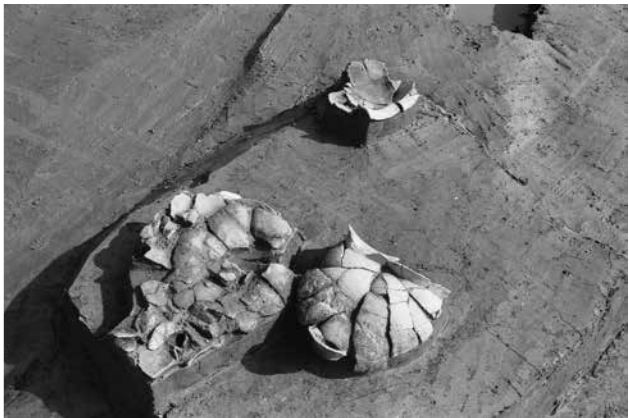
1. 土器 (図 168-7) 出土状況 (南から)



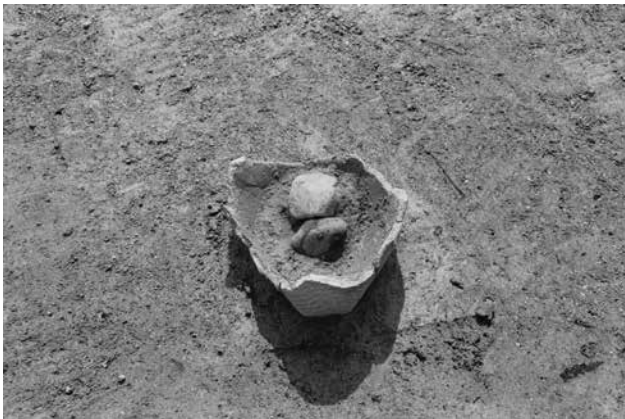
2. 土器 (図 173-87) 出土状況 (北東から)



3. 土器 (図 168-5) 出土状況 (西から)



4. 土器 (図 171-48・57、172-67) 出土状況 (北から)



5. 土器 (図 169-31) 出土状況 (西から)



6. 土器 (図 167-1) (外)・(図 167-2) (内) 出土状況 (北から)



7. 土器 (図 167-1) (外)・(図 167-2) (内) 出土状況 (西から)



8. 5-884 土坑 (南東から)

図版 42 第 7b 面近景



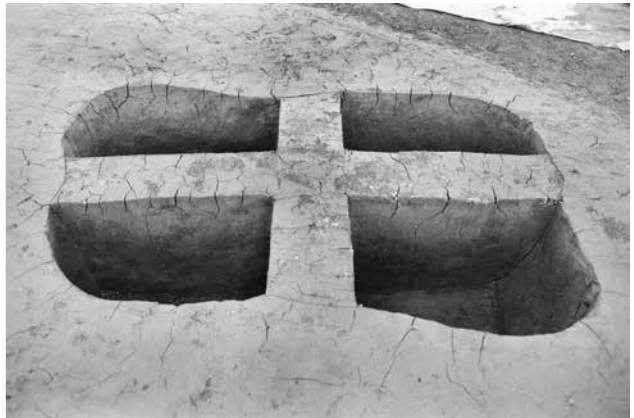
1. 5-389 ピット (南から)



2. 5-833 ピット (南から)



3. ピット列3 5-796 ピット (北から)



4. 4-54 土坑 (西から)



5. 4-54 土坑断面 (西から)



6. 4-73 土坑 (西から)



7. 4-98 土坑 (南から)



8. 6区 イノシシによるラッセル痕? (南西から)



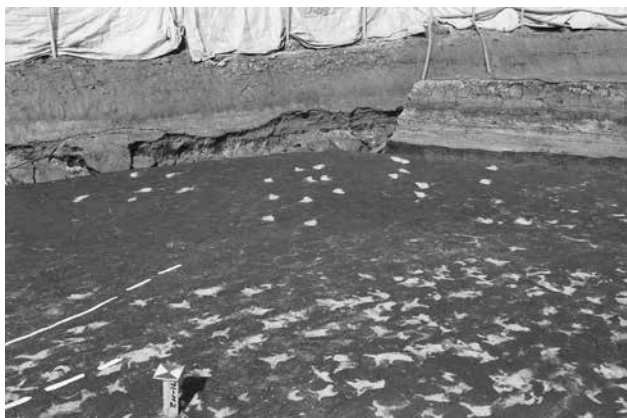
図版 43 第 8a 面近景



1. 1-295、1-296 畦畔 (南東から)



2. 足跡 (シカ) (南西から)



3. 1-297 畦畔付近足跡 (シカ・ヒト) (南東から)



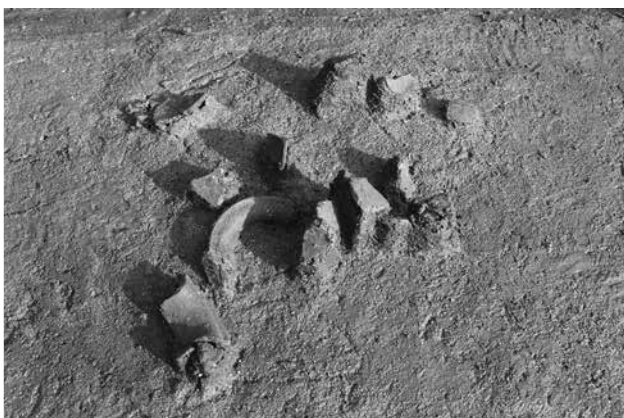
5. 第 7b-5 層 土器 (図 205-9) 出土状況 (東から)



4. 第 7b-5 層 土器 (図 205-9) 出土状況 (北から)



6. 第 7b-5 層 土器 (図 205-8・11) 出土状況 (南西から)



7. 第 7b-5 層 土器 (図 205-8・11) 出土状況 (南から)

図版 44 第 8a 面近景



1. 微高地 1 鞍部断面 : Y=-33,910 ライン (南東から)



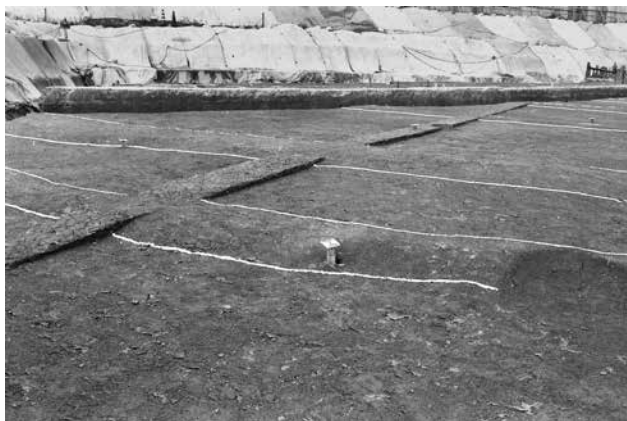
2. 微高地 1 東裾部 水田 (北東から)



3. 水田 (南東から)



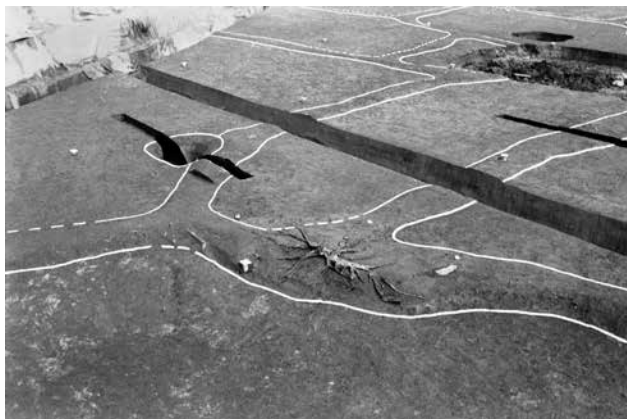
4. 水田水口? (南西から)



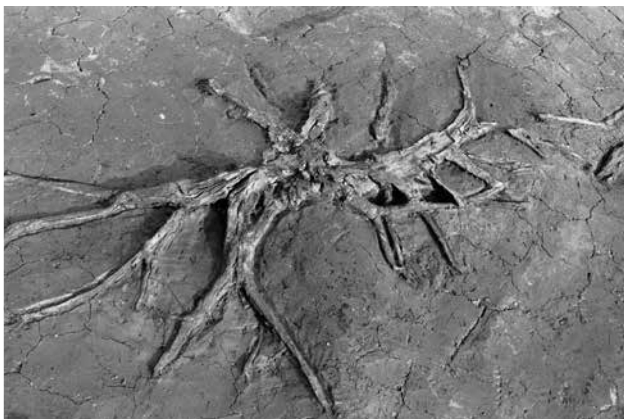
5. 水田 (南から)



6. 水田 (西から)



7. 水田・木株 (南西から)



8. 木株 (ヤナギ) (北西から)

# 図版 45 第 8a 面～第 8b 面近景



1. 第 8a 面 水田面段差 (ヤナギの生える畦) : X=-138,700 ライン (南から)



2. 第 8a 面 5-868 土坑 (北東から)



3. 第 8a 層中 暗渠 (西から)



4. 第 8a 層中 暗渠 (北から)



5. 第 8b 面 西側遺構群 建物 18・19 (東から)



6. 第 8b 面 西側遺構群 建物 18・19 (南から)



7. 第 8b 面 西側遺構群 建物 18 (東から)

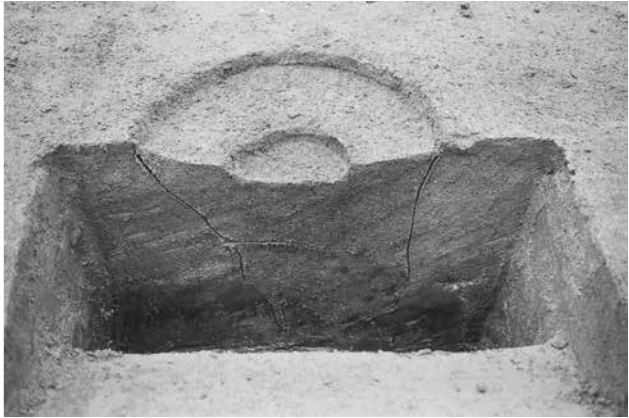


8. 第 8b 面 西側遺構群 建物 18 1-198 ピット (北から)

図版 46 第 8b 面近景



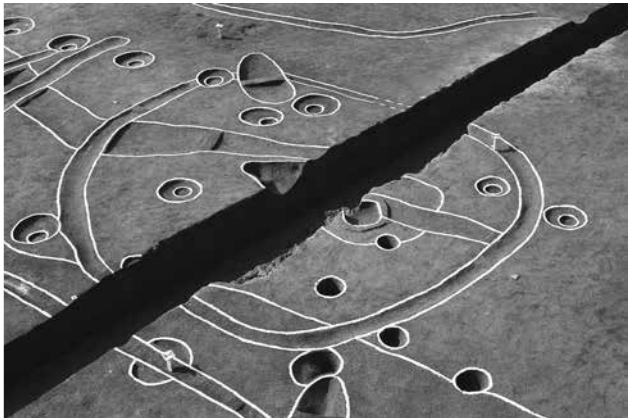
1. 西側遺構群 建物 18 1-202 ビット (北から)



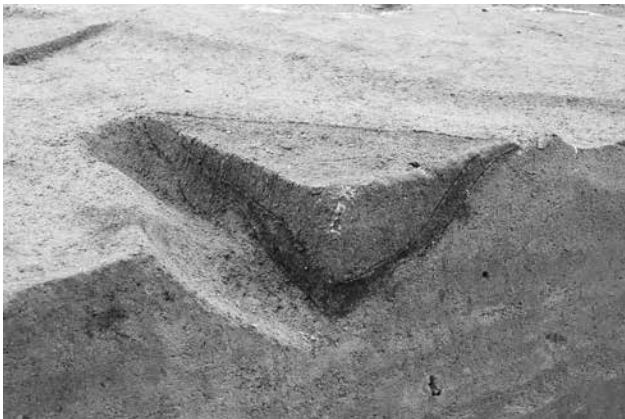
2. 西側遺構群 建物 18 1-206 ビット (南から)



3. 西側遺構群 建物 18 1-207 ビット (南から)



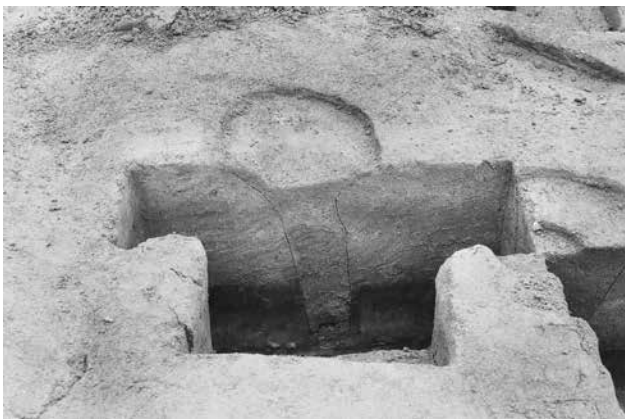
4. 西側遺構群 建物 19 (南東から)



5. 西側遺構群 建物 19 中央 1-196 土坑 (南東から)



6. 西側遺構群 建物 19 1-183 ビット (南から)



7. 西側遺構群 建物 19 1-211 ビット (東から)



8. 西側遺構群 土器 (図 219-10・13) 出土状況 (北西から)

図版 47 第 8b 面近景



1. 西側遺構群 土器 (図 219-10) 出土状況 (北から)



2. 西側遺構群 土器 (図 219-13) 出土状況 (北から)



3. 西側遺構群 遺構集中部 (南東から)



4. 西側遺構群 1-85 溝 (西から)



5. 西側遺構群 1-85 溝 土器 (図 226-5) 出土状況 (北東から)



6. 西側遺構群 4-125 溝 (南東から)



7. 西側遺構群 1-232 土坑 (南から)



8. 西側遺構群 1-232 土坑 (北東から)

図版 48 第 8b 面近景



1. 西側遺構群 1-247、1-248、1-250 土坑周辺 (北から)



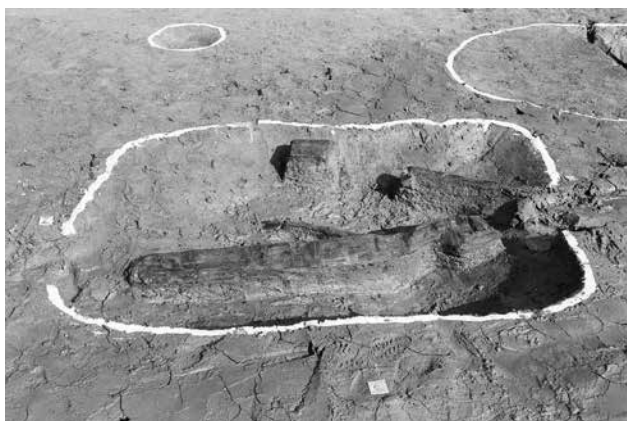
2. 西側遺構群 1-247 土坑 (南から)



3. 西側遺構群 1-247 土坑 (北東から)



4. 西側遺構群 1-250 土坑 (東から)



5. 西側遺構群 1-250 土坑 (西から)



6. 西側遺構群 4-138 土坑 (南から)

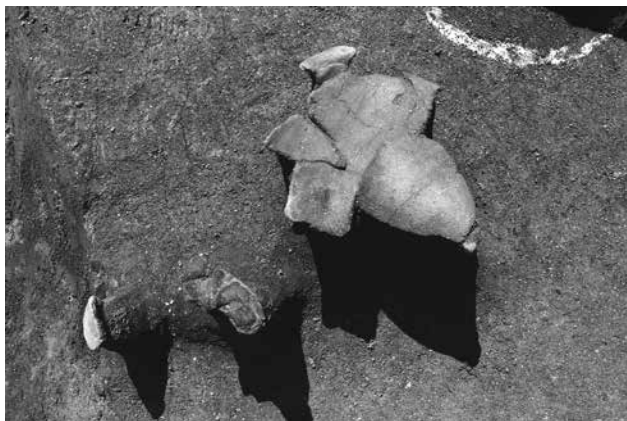


7. 西側遺構群 4-138 土坑 (南から)



8. 西側遺構群 土器 (図 236-13) 出土状況 (北から)

# 図版 49 第 8b 面近景



1. 西側遺構群 土器 (図 236-11) 出土状況 (北から)



2. 西側遺構群 4-128 溝 (南東から)



3. 西側遺構群 土器 (図 237-2) 出土状況 (北から)



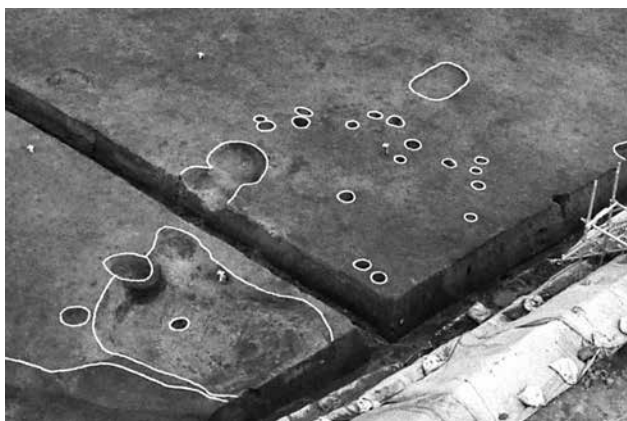
4. 西側遺構群 微高地 1 形成層 (第 8b-1 層) 出土弥生前期壺 (図 238-3) (北から)



5. 東側遺構群 建物 22 (南から)



6. 東側遺構群 建物 23 (南西から)

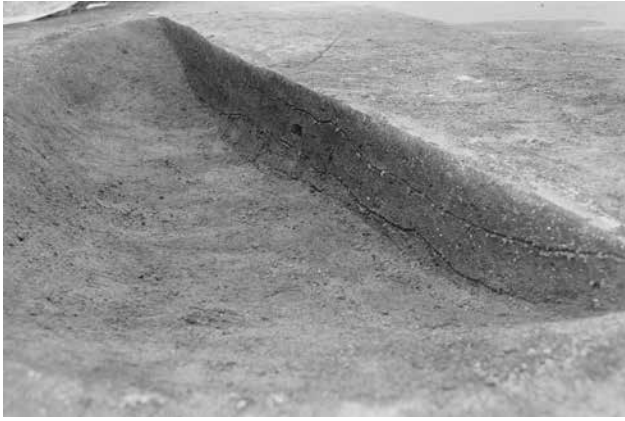


7. 東側遺構群 建物 24 (北西から)



8. 東側遺構群 建物 25 (南西から)

図版 50 第 8b 面近景



1. 東側遺構群 6-119 土坑断面 (南東から)



2. 東側遺構群 6-126 土坑 (西から)



3. 東側遺構群 6-125 土坑 (南から)



4. 東側遺構群 5-973 土坑 (東から)



5. 東側遺構群 5-979 土坑 (東から)



6. 東側遺構群 6-124 土坑検出状況 (北東から)



7. 東側遺構群 6-124 土坑完掘状況 (北東から)



8. 東側遺構群 6-124 土坑 (南東から)



# 図版 51 第 8b 面近景



1. 東側遺構群 3-267・268 溝 (東から)



2. 東側遺構群 3-268 溝 (南から)



3. 東側遺構群 3-268 溝 土器群 1 (東から)



4. 東側遺構群 3-268 溝 土器群 1 (南西から)



5. 東側遺構群 3-268 溝 土器群 1 (東から)



6. 東側遺構群 3-268 溝 土器群 2 (西から)



7. 東側遺構群 3-268 溝 土器群 2 (南東から)



8. 東側遺構群 3-268 溝 土器群 2 (西から)

図版 52 第 8b 面近景



1. 東側遺構群 3-268 溝 土器群 2 (南西から)



2. 東側遺構群 3-268 溝 土器群 2 (東から)



3. 東側遺構群 3-268 溝 土器群 2 (東から)



4. 東側遺構群 3-268 溝 土器群 2 下部 (南西から)



5. 東側遺構群 3-268 溝 土器群 2 下部 (北から)



6. 東側遺構群 3-268 溝 土器群 2 下部 (北西から)

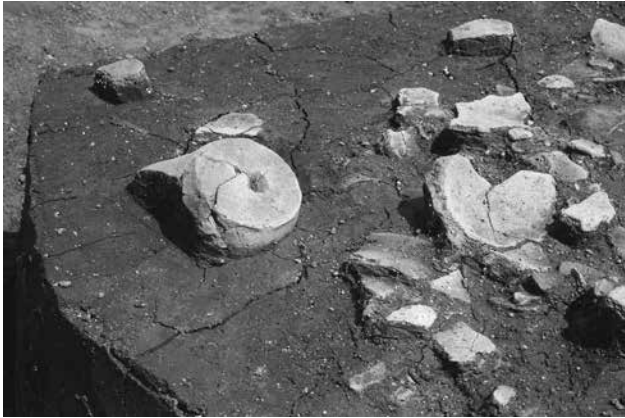


7. 東側遺構群 3-267・268 溝 土器群 3・4 (西から)



8. 東側遺構群 3-267・268 溝 土器群 3・4 (南西から)

図版 53 第 8b 面近景



1. 東側遺構群 3-267・268 溝 土器群 3 (南から)



2. 東側遺構群 3-267・268 溝 土器群 3 (東から)



3. 東側遺構群 3-268 溝 土器群 2・5 (北東から)



4. 東側遺構群 3-268 溝 土器群 5 (南西から)



5. 東側遺構群 3-267 溝 土器群 8 (北東から)



6. 東側遺構群 3-267 溝 土器群 8 (南西から)

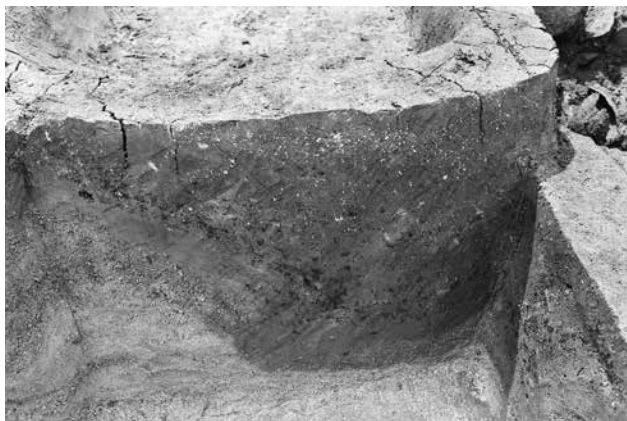


7. 東側遺構群 3-267 溝 土器 7 (図 264-16) (南東から)



8. 東側遺構群 3-279 井戸断面 (東から)

図版 54 第 8b 面近景



1. 東側遺構群 3-286 土坑断面 (北から)



2. 東側遺構群 3-286 土坑断面 (東から)



3. 東側遺構群 3-286 土坑 (西から)



4. 東側遺構群 3-286 土坑 (東から)



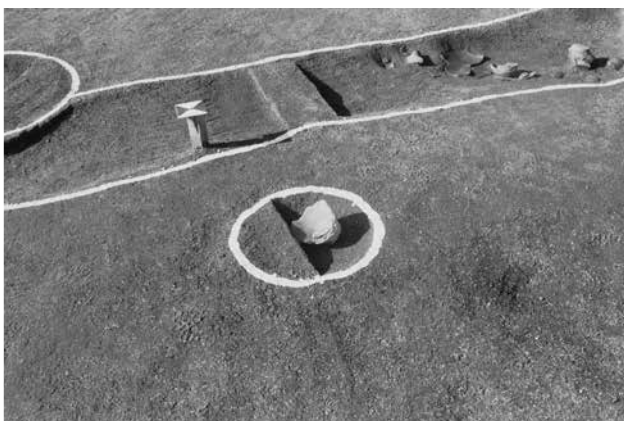
5. 東側遺構群 5-991 溝 (南東から)



6. 東側遺構群 5-991 溝、3-267・268 溝 (東から)



7. 東側遺構群 5-991、5-980 溝 (東から)



8. 東側遺構群 5-991 溝、5-1016 ビット (東から)

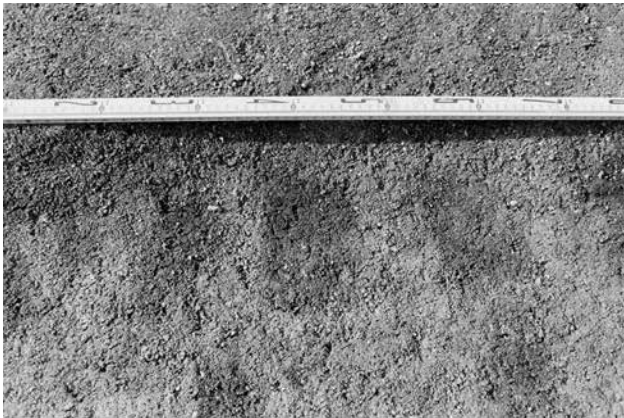
図版 55 第 8b 面近景



1. 東側遺構群 5-991 溝 土器 (図 284-9) 出土状況 (東から)



2. 東側遺構群 5-991 溝 底面の工具痕 (北西から)



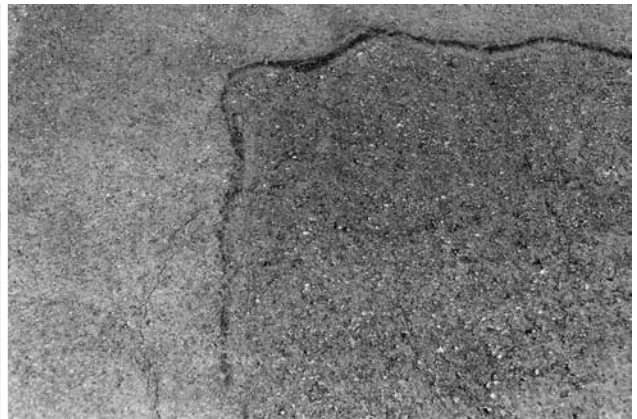
3. 東側遺構群 5-991 溝 底面の工具痕 (東から)



4. 東側遺構群 6-143 土坑検出状況 (南から)



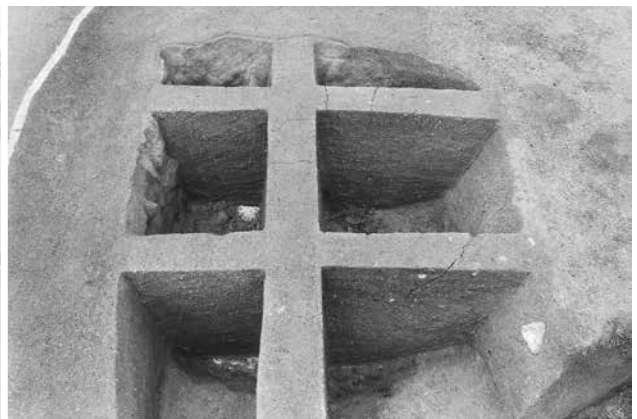
5. 東側遺構群 6-143 土坑断面 (東から)



6. 東側遺構群 6-143 土坑南西隅被熱状況 (東から)



7. 東側遺構群 6-143 土坑 (南から)



8. 東側遺構群 6-143 土坑 (東から)

図版 56 第 8b 面近景



1. 東側遺構群 6-143 土坑 (北から)



2. 東側遺構群 6-143 土坑 (北西から)



3. 東側遺構群 6-143 土坑 (東から)



4. 東側遺構群 6-143 土坑 (北から)



5. 東側遺構群 6-143 土坑 (南から)



6. 東側遺構群 6-143 土坑 (北から)

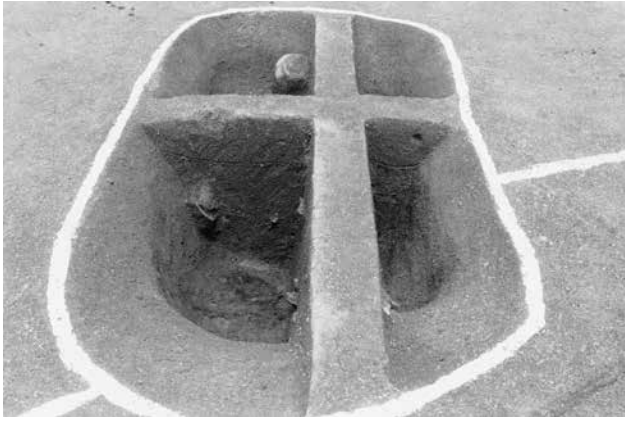


7. 東側遺構群 6-143 土坑 (北から)



8. 東側遺構群 6-152 土坑 (北西から)

図版 57 第 8b 面近景



1. 東側遺構群 6-152 土坑 (東から)



2. 東側遺構群 6-152 土坑 (南西から)



3. 東側遺構群 6-152 土坑最下部断面 (東から)



4. 東側遺構群 6-157 土坑 (南から)



5. 東側遺構群 6-157 土坑 (北から)



6. 東側遺構群 6-122 土坑 (東から)



7. 東側遺構群 6-122 土坑 (南から)

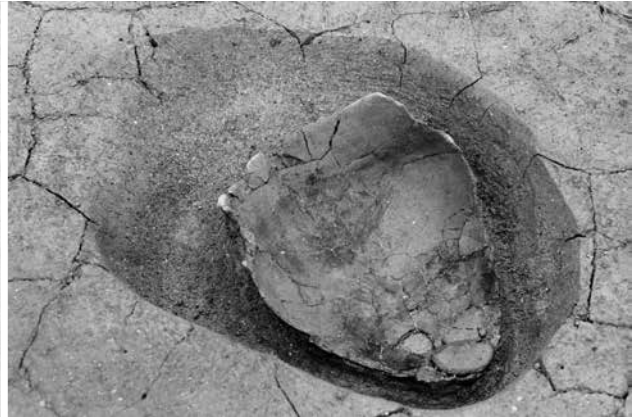


8. 東側遺構群 6-122 土坑 (南から)

図版 58 第 8b 面近景



1. 東側遺構群 6-122 土坑 (南東から)



2. 東側遺構群 6-122 土坑 (南東から)



3. 東側遺構群 6-122 土坑 (北東から)



4. 東側遺構群 6区 (6-123 溝内) 土器群 F (南から)



5. 東側遺構群 6区 土器群 C・D (東から)



6. 東側遺構群 6区 土器群 I (東から)



7. 東側遺構群 6区 土器 m (図 305-15) (西から)



8. 中央遺構群 4-105 土坑 (南西から)



図版 59 第 8b 面～第 8b-2 面以下近景



1. 第 8b 面 中央遺構群 4-106 土坑 (南東から)



2. 第 8b 面 中央遺構群 4-118 土坑 (南西から)



3. 第 8b 面 中央遺構群 5-997 土坑 (南西から)



4. 第 8b 面 中央遺構群 5-998 土坑 (南西から)



5. 第 8b 面 中央遺構群 5-1009 土坑 (南から)



6. 第 8b 面 中央遺構群 5-1011 土坑 (南東から)

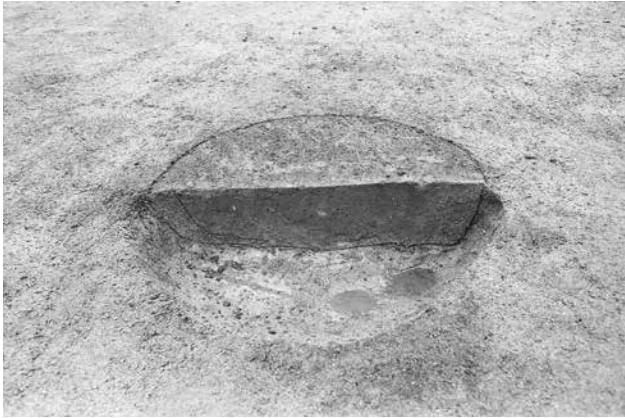


7. 第 8b 面 中央遺構群 5-1013 土坑 (南から)



8. 第 8b-3 面 2-150～2-152 ビット検出状況 (南から)

図版 60 第 8b-2 面以下近景



1. 第 8b-3 面 2-151 ピット (南から)



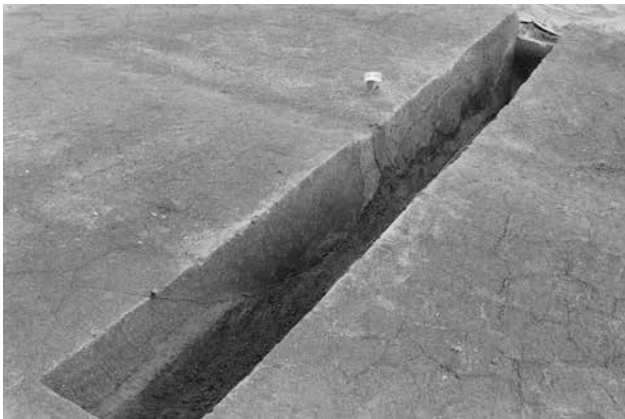
2. 第 8b-3 面 土器 (図 325-4) 出土状況 (南西から)



3. 第 8b-3 面 土器 (図 325-4) 出土状況 (南から)



4. 第 8b-6 面 放棄流路 (西から)



5. 第 8b-3 面 土坑状変形 2 断面 (西から)



6. 第 8b-3 面 土坑状変形 2 断面 (南から)

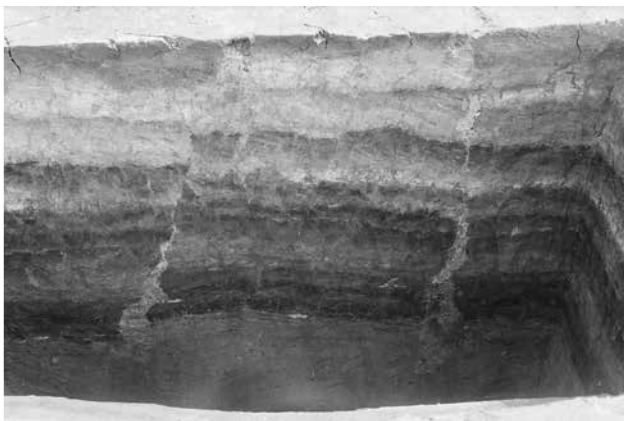


7. 第 8b-3 面 土坑状変形 1 断面 (南西から)

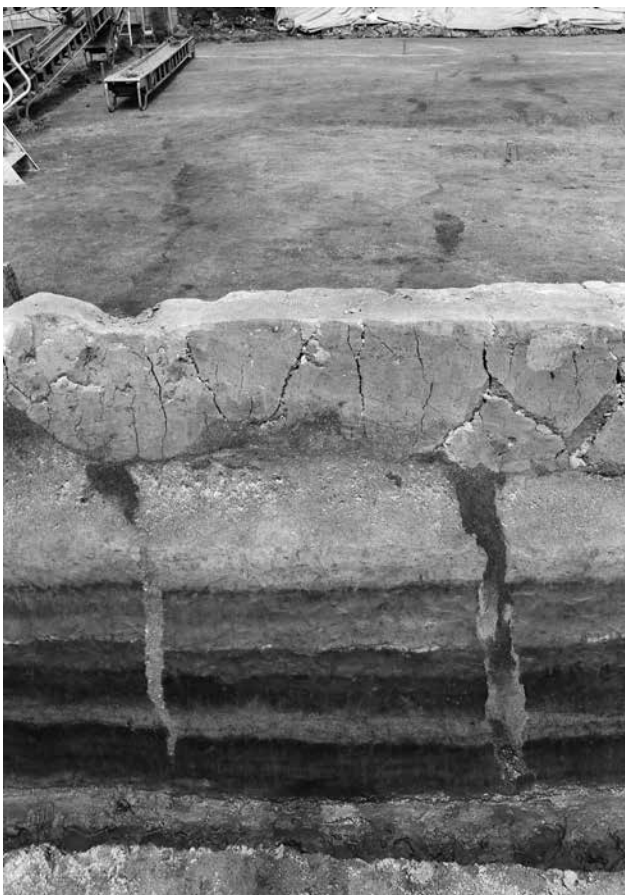
図版 61 第 8b-2 面以下近景



1. 第 8b-3 面 地割れ (北西から)



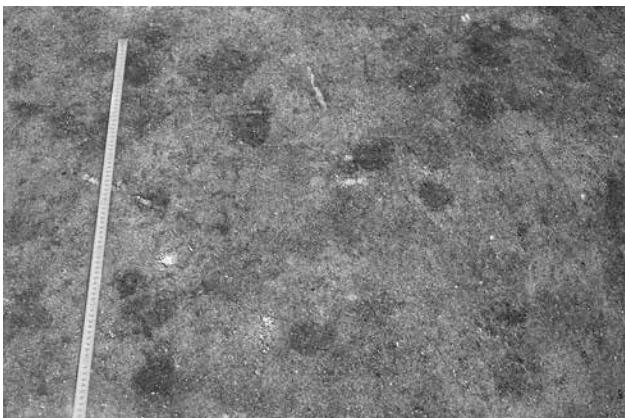
2. 第 8b-3 面 地割れ断面 (北から)



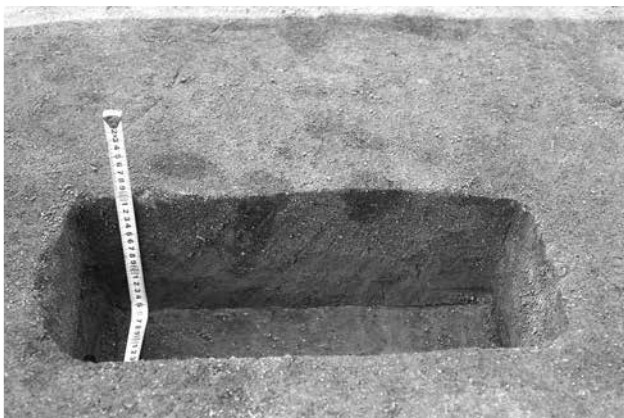
3. 第 8b-3 面 地割れ断面 : X=-138,740 ライン (南から)



4. 第 8b-3 面 地割れ断面 : X=-138,740 ライン (南から)



5. 第 8b-7-1 層下面 巣穴? (南から)



6. 第 8b-7-1 層下面 巣穴? 断面 (南から)

図版 62 第 1 面～第 5 面関連出土遺物 (長池、土坑、包含層)



長池出土遺物 (図 26)



井戸・土坑出土遺物 (図 28)

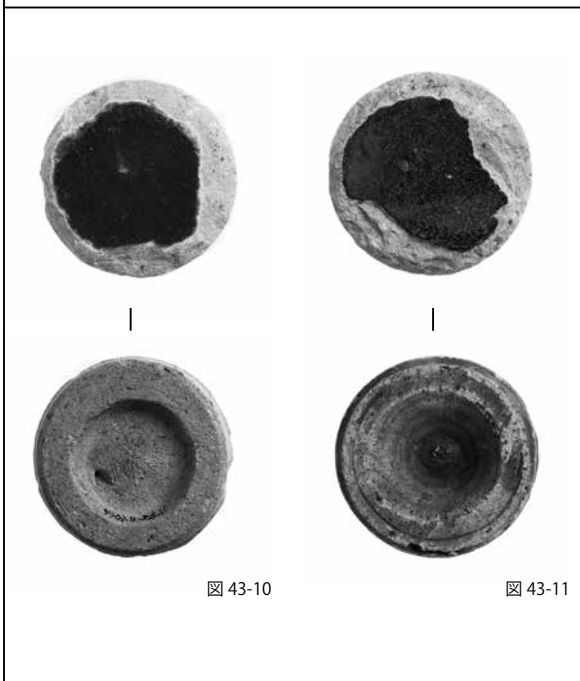


図 43-10

図 43-11

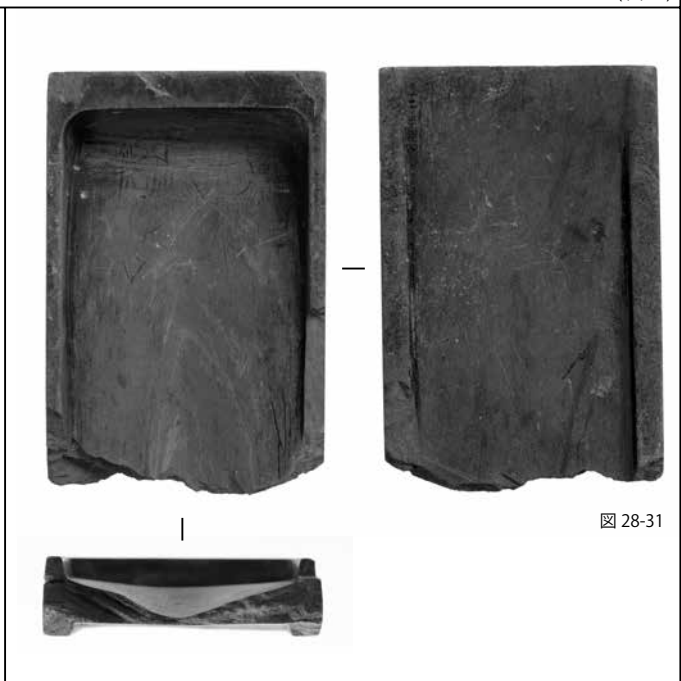


図 28-31

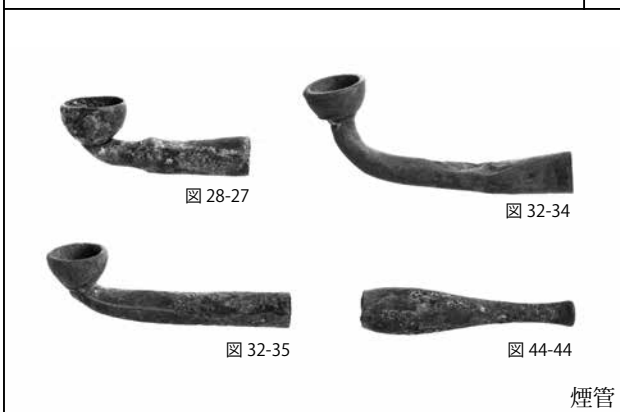


図 28-27

図 32-34

図 32-35

図 44-44

煙管

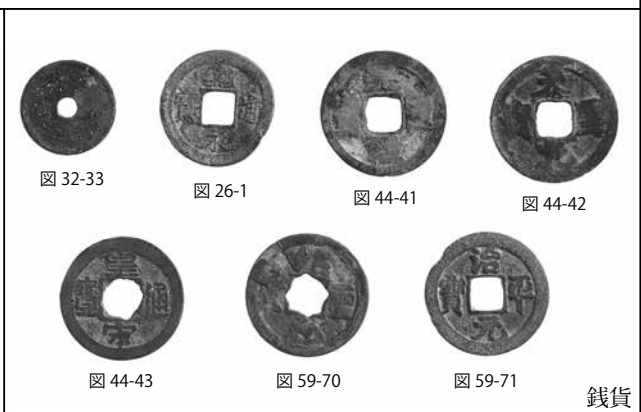


図 32-33

図 26-1

図 44-41

図 44-42

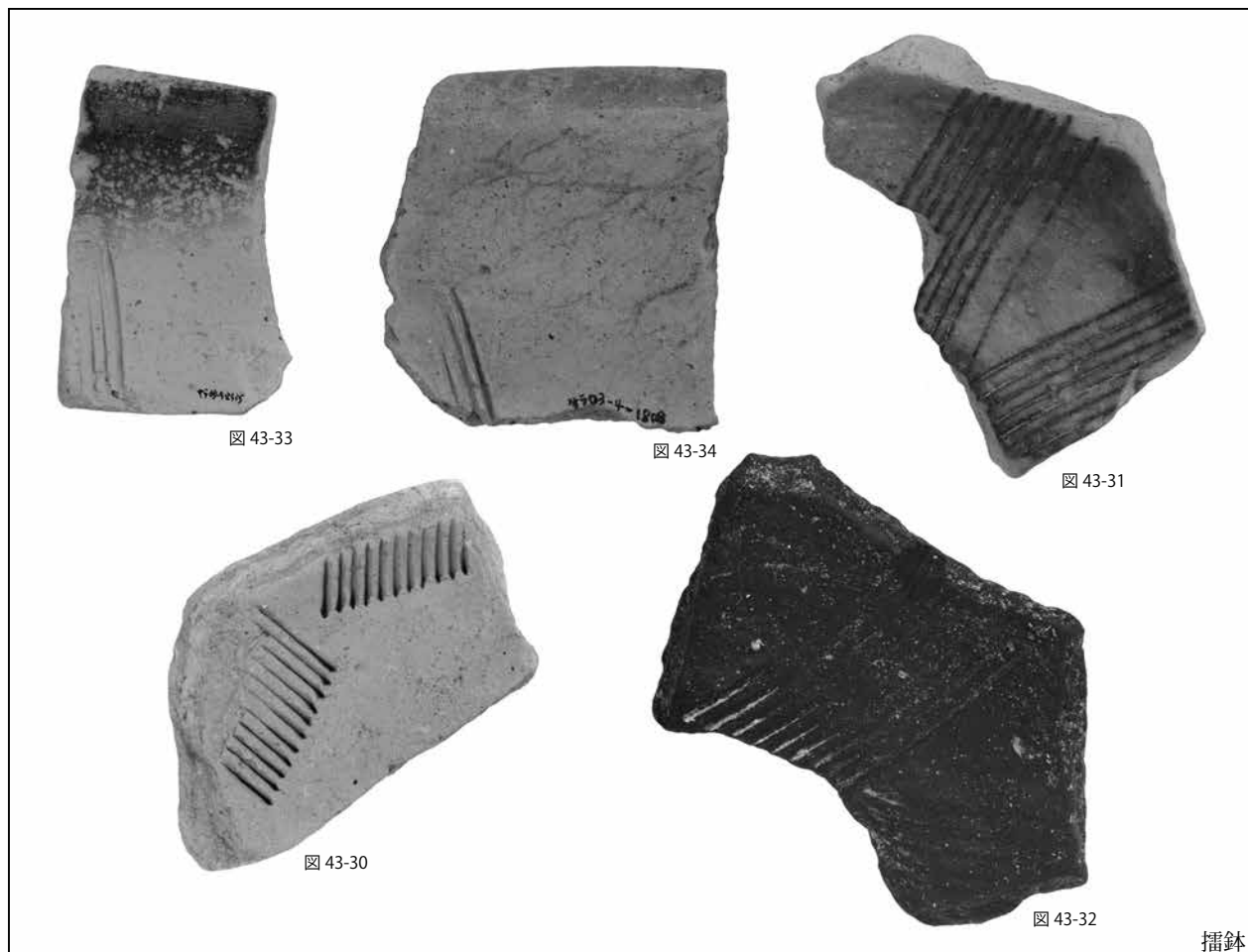
図 44-43

図 59-70

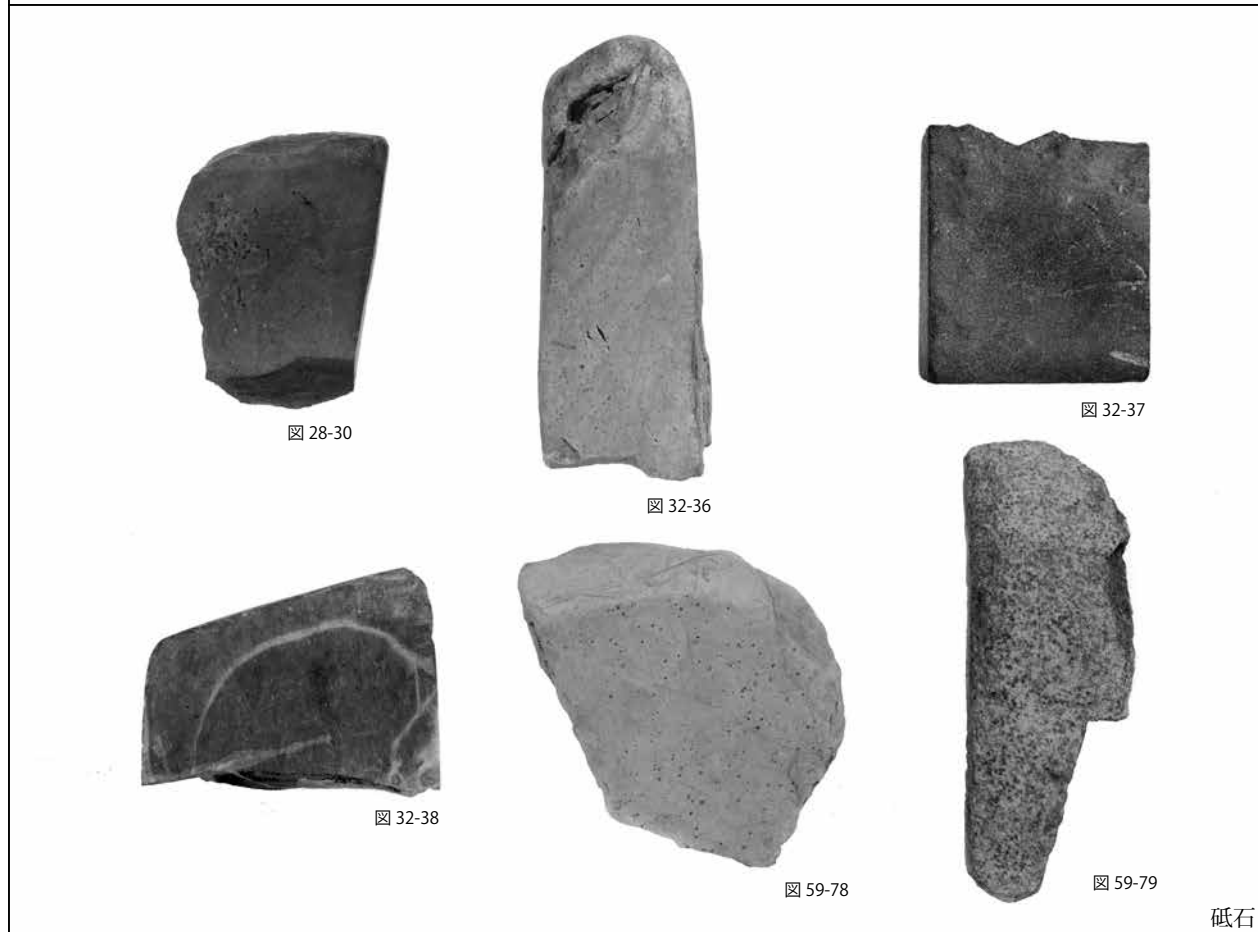
図 59-71

錢貨

図版 63 第 1 面～第 5 面関連出土遺物 (土坑、包含層)



插鉢

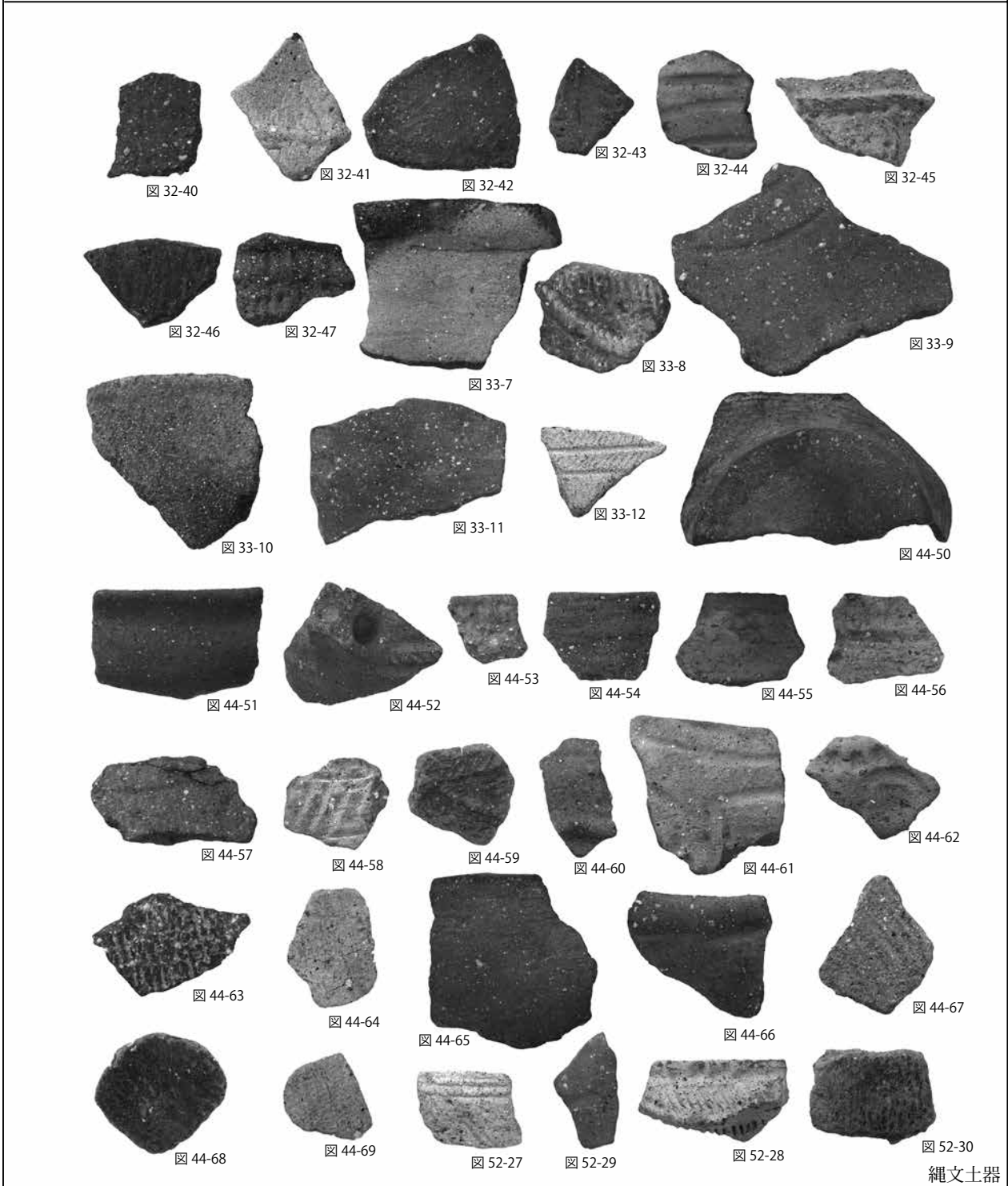


砥石

図版 64 第1面～第3面関連出土土器(包含層)

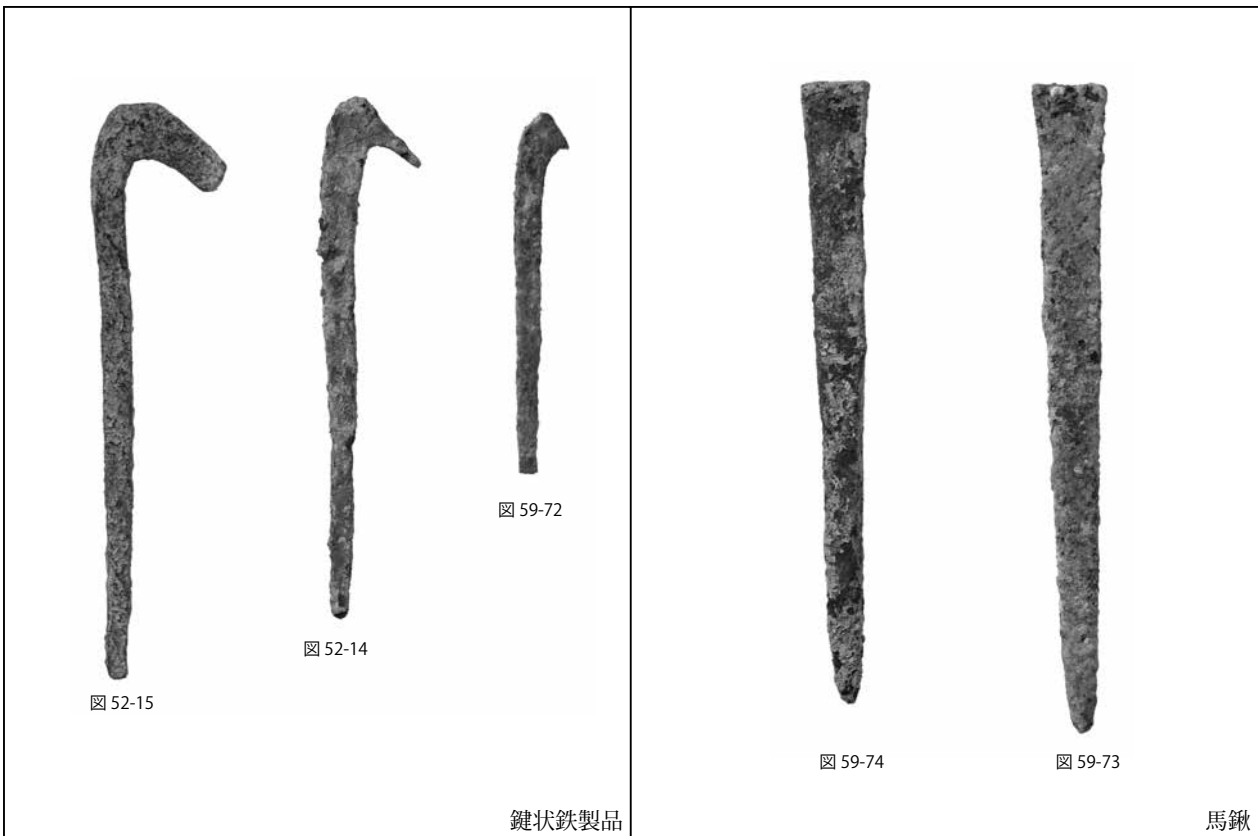


埴輪

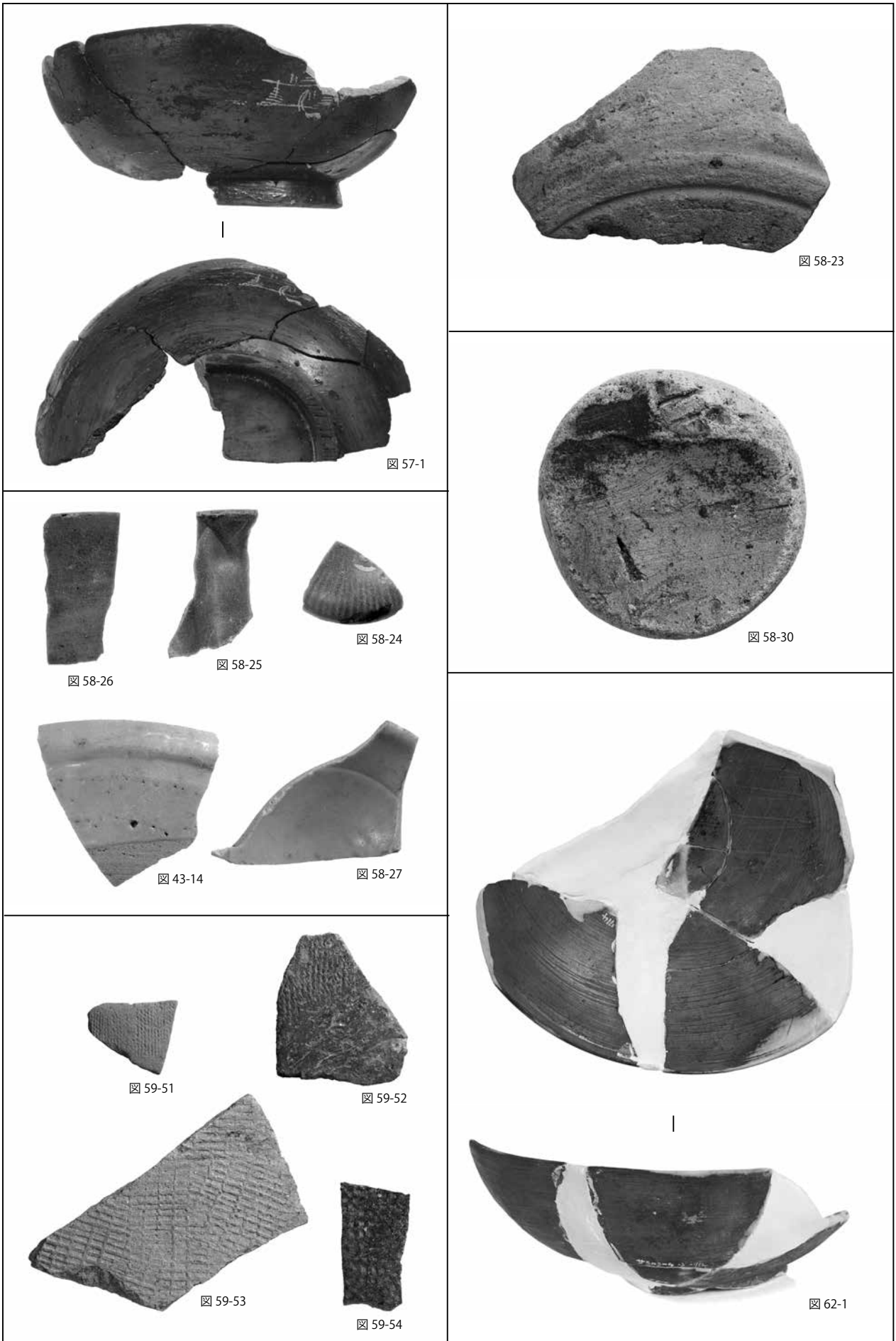


縄文土器

図版 65 第 3 面～第 5 面関連出土鉄器 (包含層)



図版 66 第 2 面～第 6b 面関連出土遺物 (包含層、坪境溝)





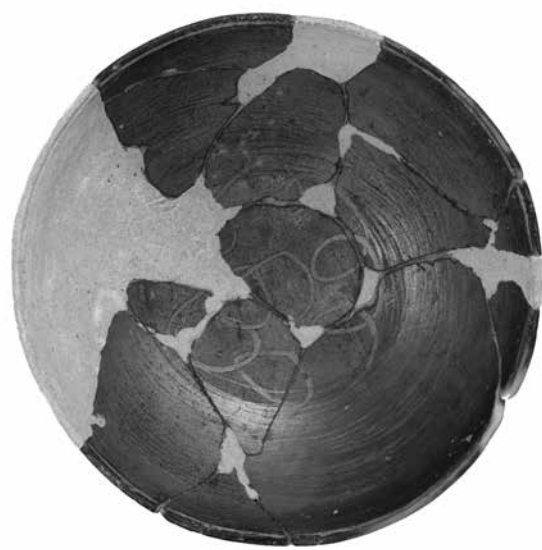
图版 67 第 6 b 面関連出土土器 (1 区出土瓦器碗)



|



图 67-1



|



图 67-6



图 67-5



图 67-7



図版 68 第 6b 面～第 7a 面関連出土土器 (包含層、2-49 坪境畦畔)

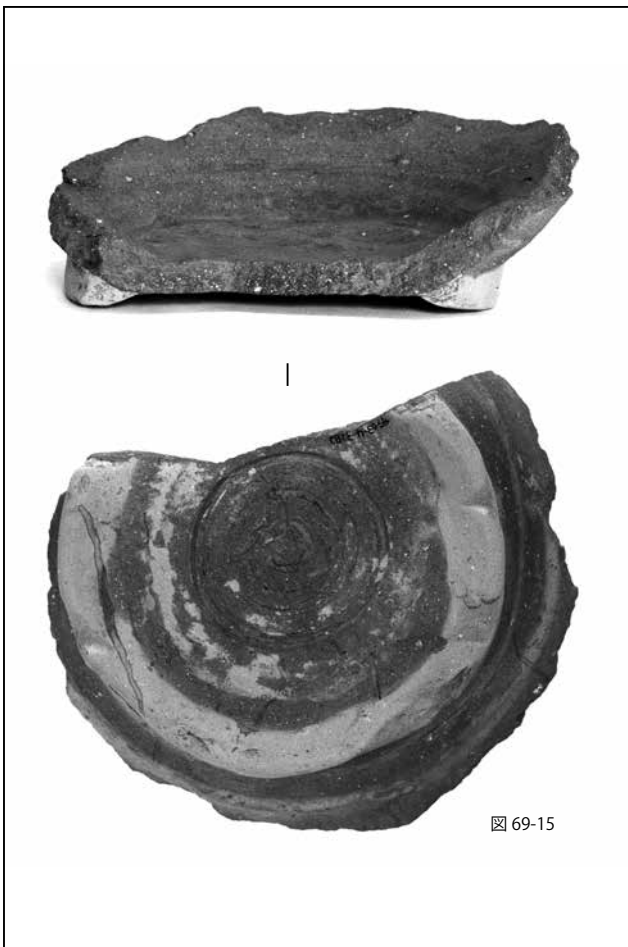


図 69-15

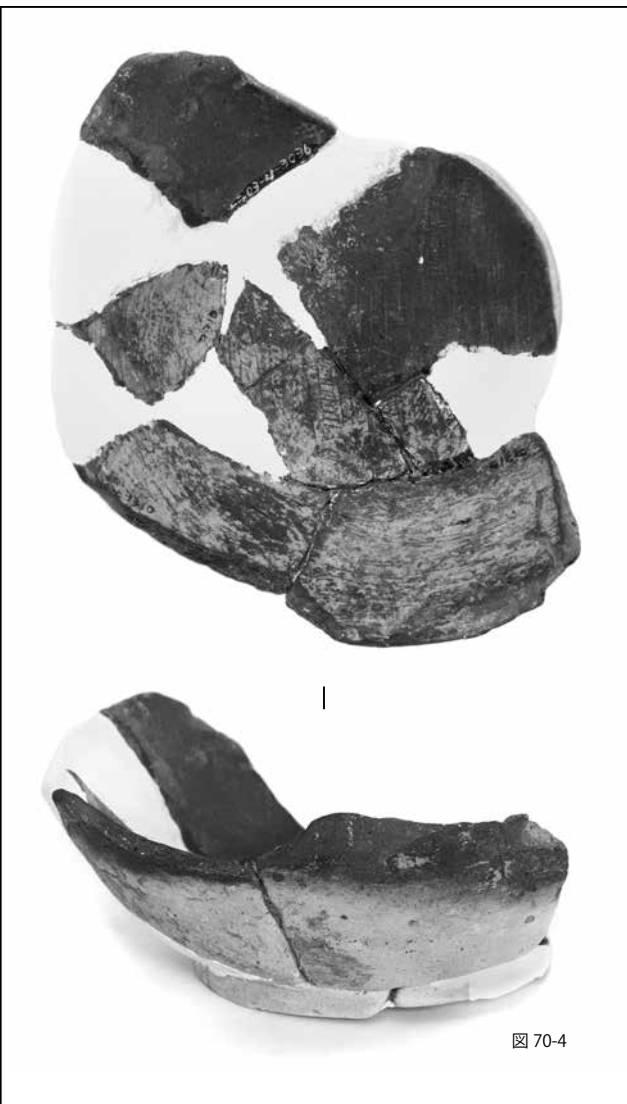


図 70-4

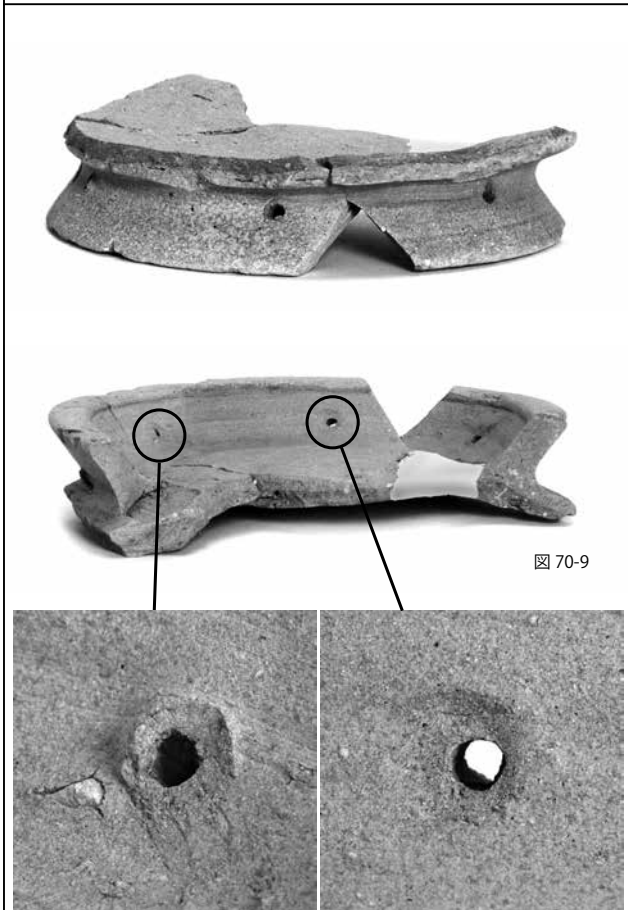


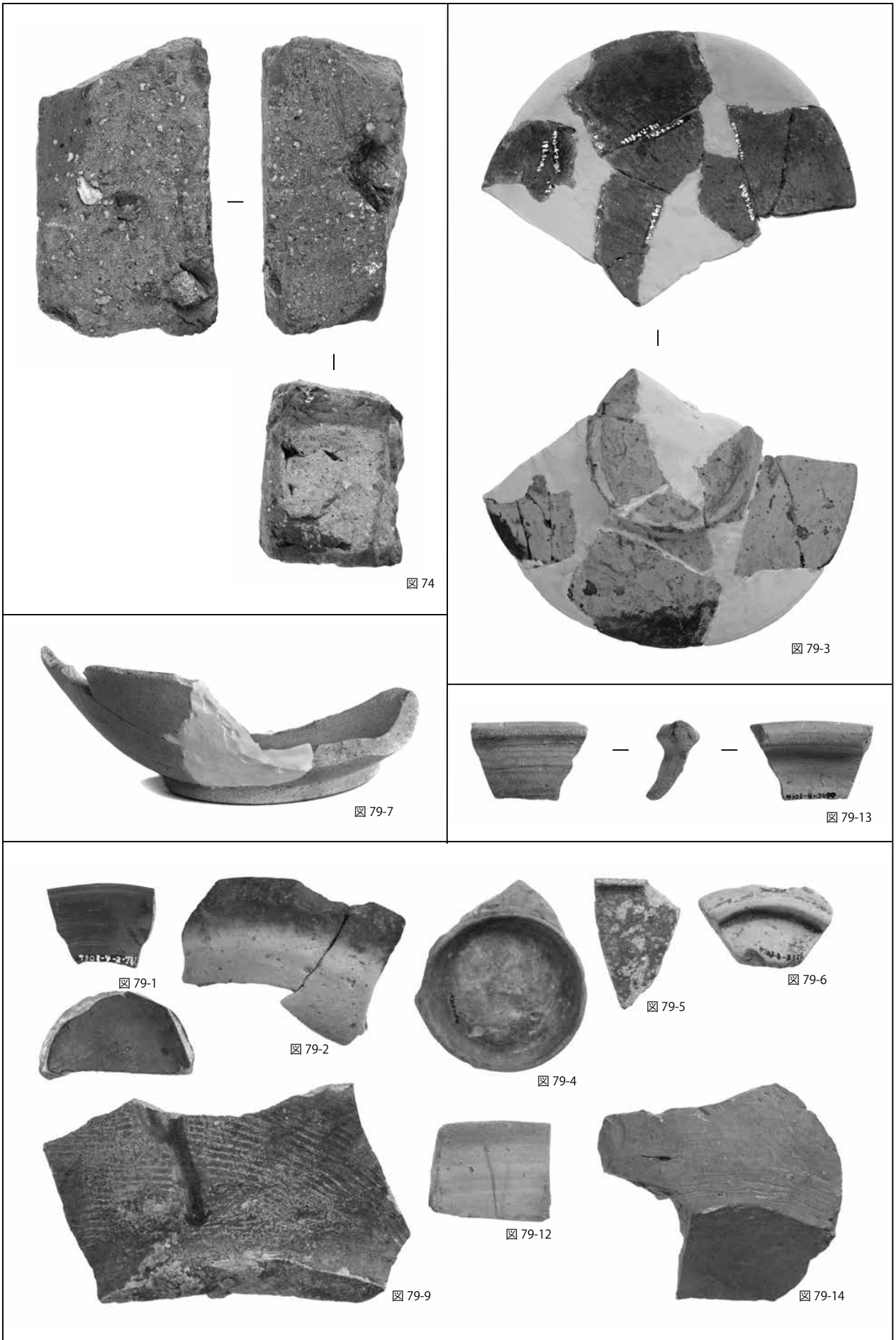
図 70-9

高台内面の工具痕跡

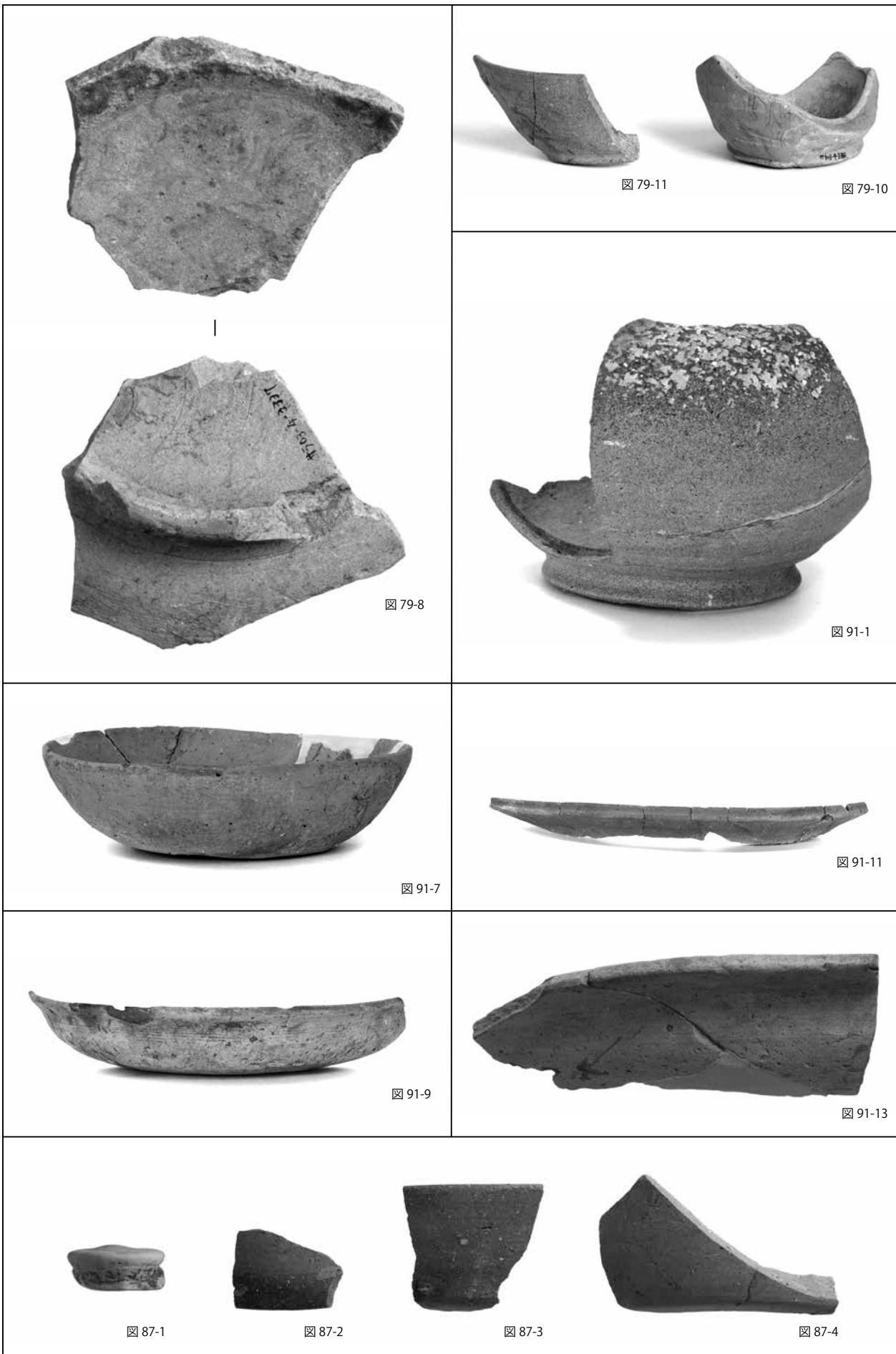


図 71-3

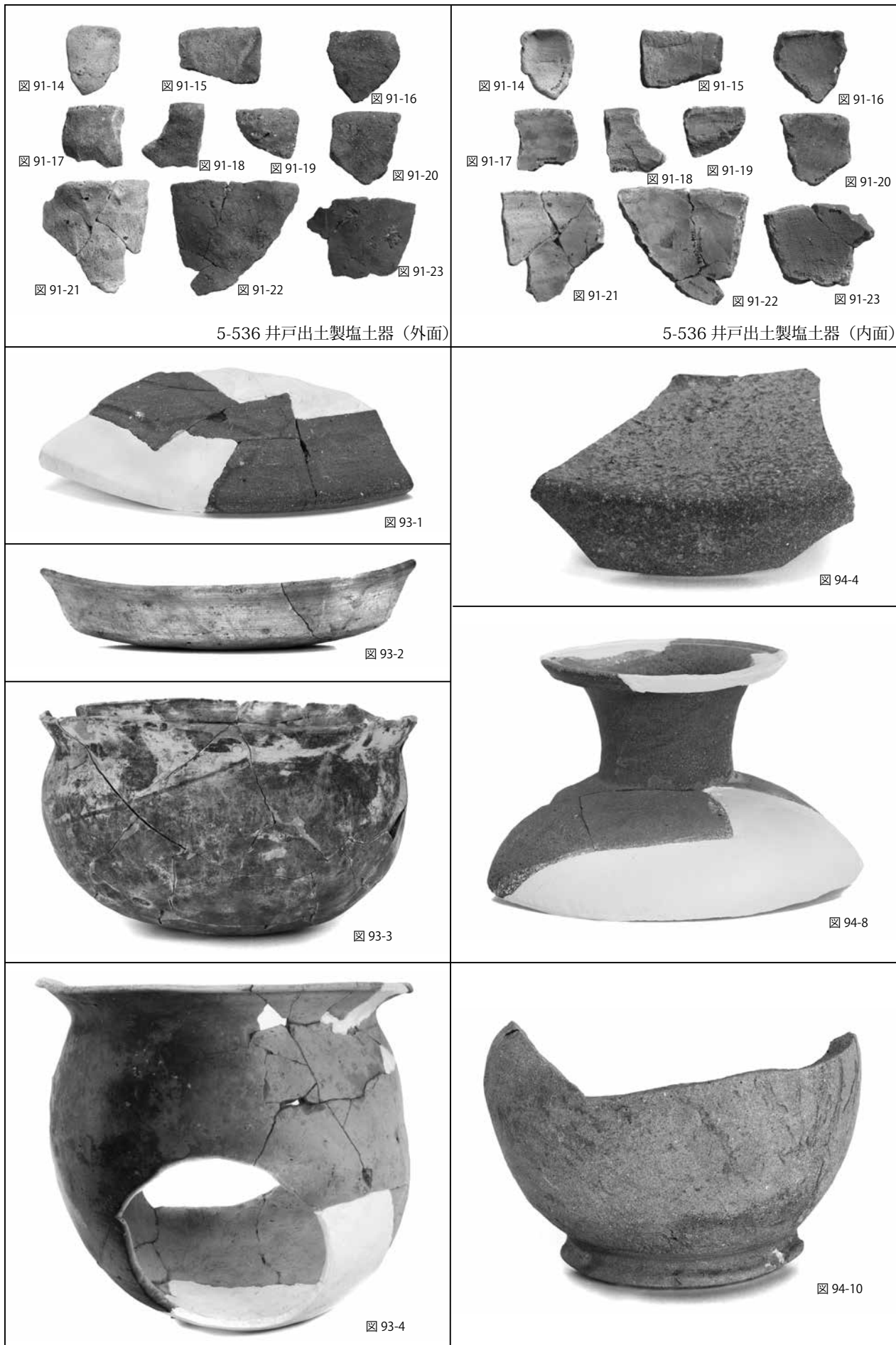
图版 69 第 7a 面関連出土土器 (2-53 畦畔、包含層)



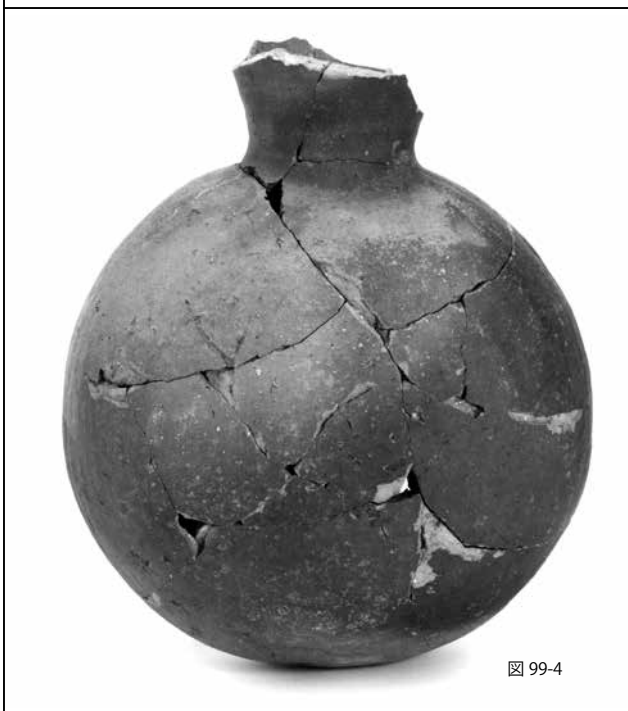
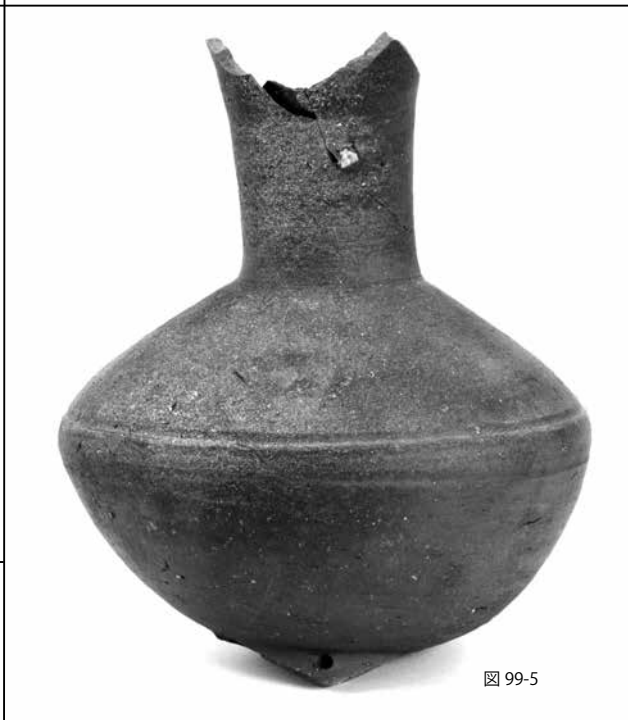
図版 70 第 7a 面～第 7b 面関連出土土器 (包含層、5-536 井戸、坪境溝)



図版 71 第 7b 面関連出土土器 (2-63、3-163 土坑、5-536 井戸、5-847 土坑、包含層)



図版 72 第 7b 面関連出土土器 (包含層、5-419 井戸)



図版 73 第 7b 面関連出土土器 (5-419 井戸、5-954 ピット、6-107 溝)



図 99-7



図 99-8



図 99-9



図 99-10



図 99-11



図 103-5



図 103-11

図版 74 第 7b 面関連出土土器 (5-386 ピット、5-480 溝、5-954 ピット、6-107 溝、包含層)

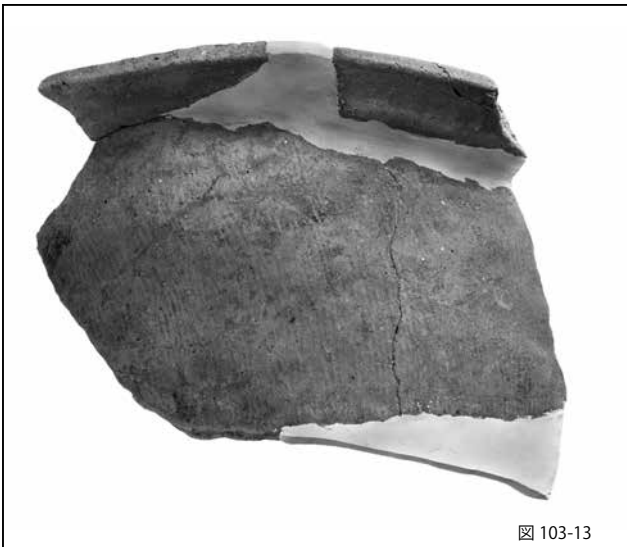


図 103-13



図 103-15



図 103-19

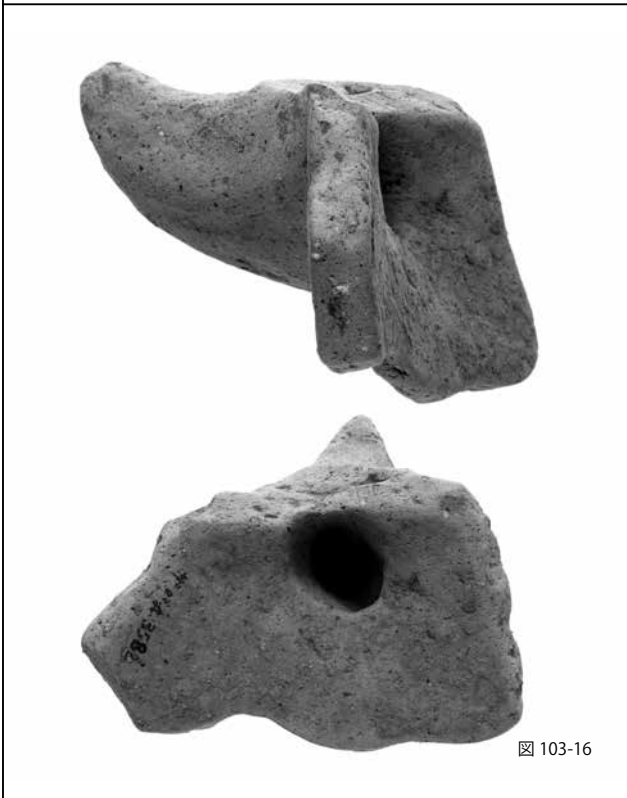


図 103-16



図 104-25



図 104-30



図版 75 第 7b 面関連出土土器 (包含層、建物 15 < 5-556 ピットおよび埋土>、建物 17)



図 104-31



図 104-36

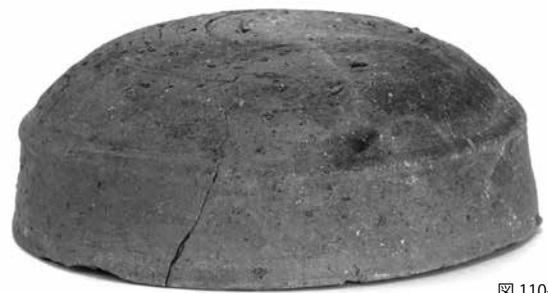


図 110-6



図 104-37



図 110-8



図 110-10



図 112-6

図版 76 第 7b 面関連出土土器 (建物 17)



図 112-16



図 112-28



図 112-31



図 112-34



図 112-32

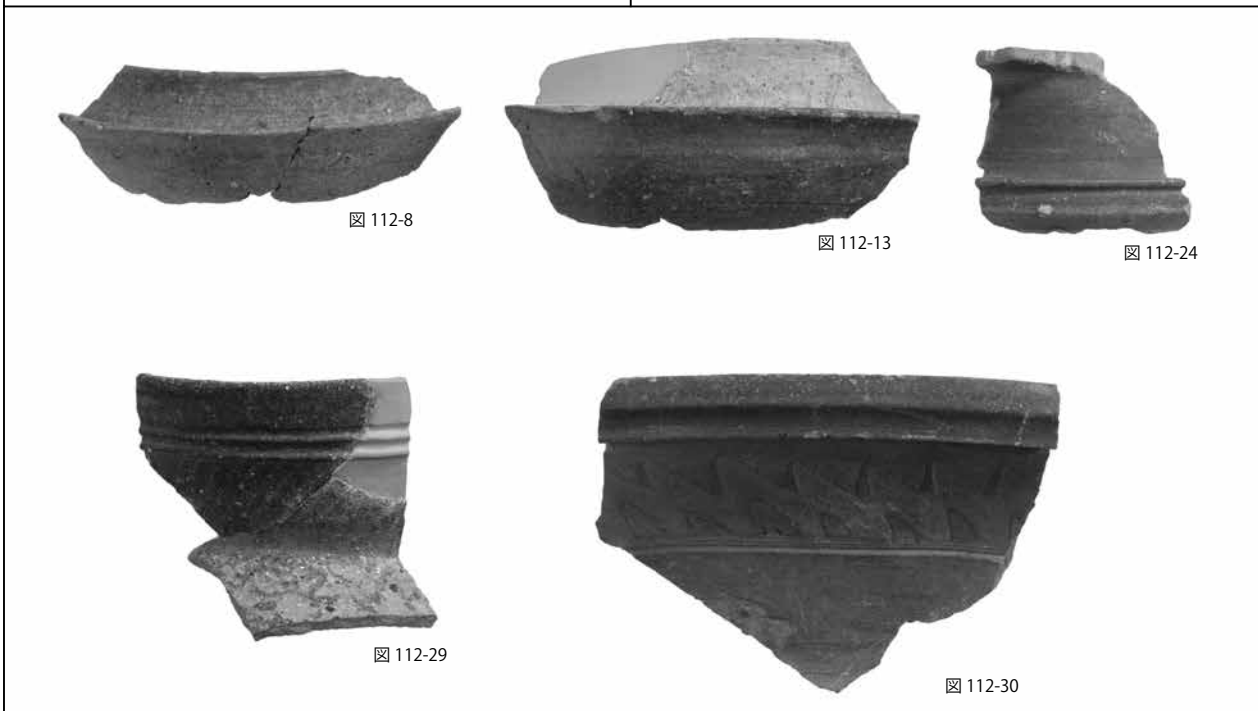


図 112-8

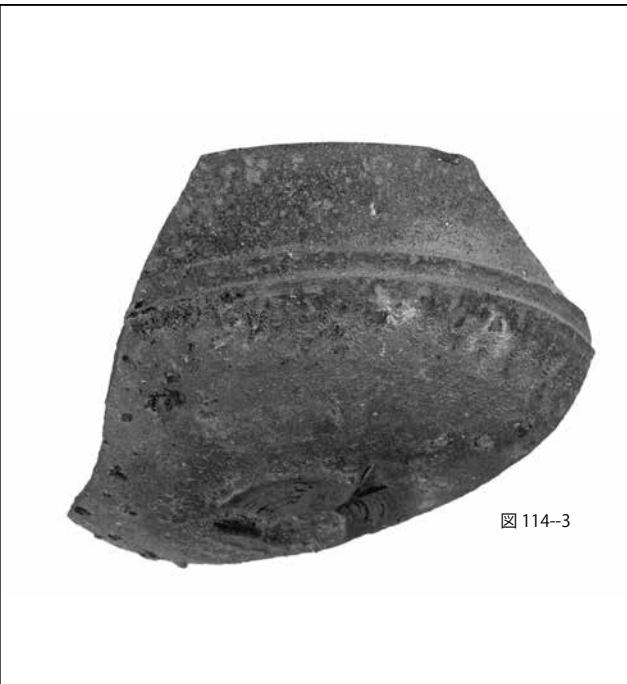
図 112-13

図 112-24

図 112-29

図 112-30

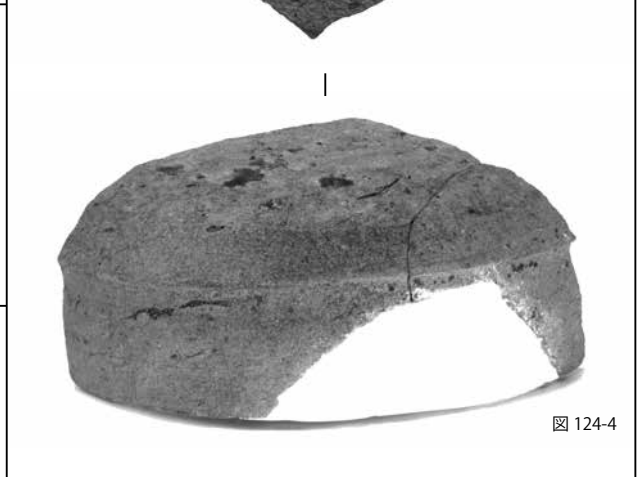
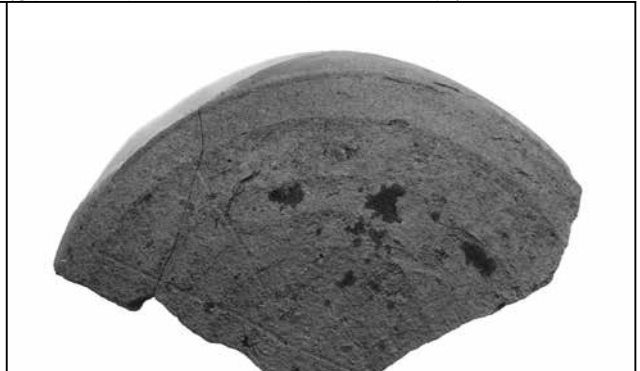
図版 77 第 7b 面関連出土土器 (3-187、5-351 井戸)



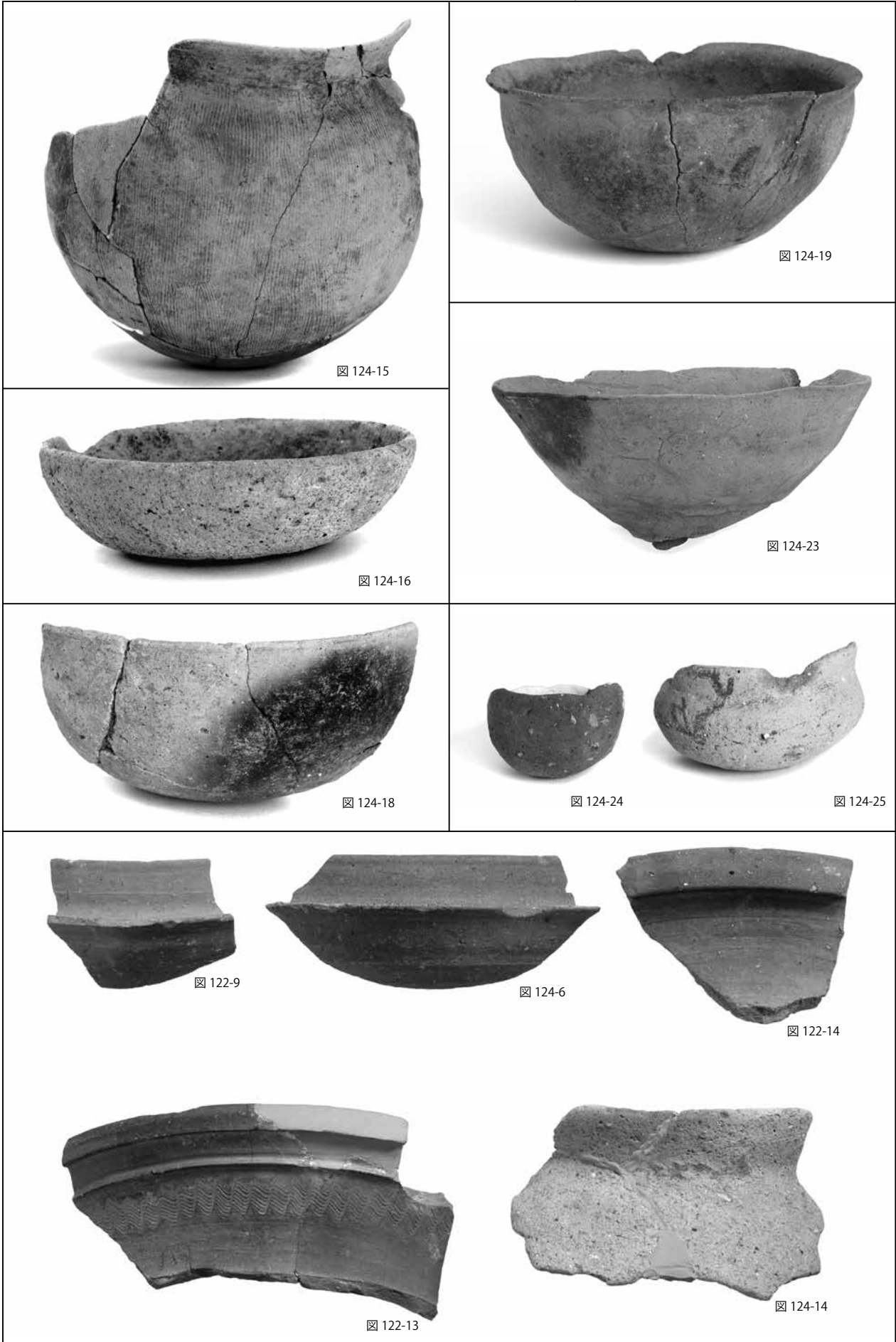
図版 78 第 7b 面関連出土土器 (5-416 井戸、5-474 水溜め)



図版 79 第 7b 面関連出土土器 (1-57、2-90 溝、3-174 土坑、5-429 ピット、5-567 土坑  
5-625 溝、5-769、5-882 ピット、5-950 土坑)



図版 80 第 7b 面関連出土土器 (3-140 土坑、5-555 ピット、5-567、5-575 土坑、5-625 溝  
5-743、5-843 ピット)



图版 81 第 7b 面関連出土土器 (包含層)



图 127-2

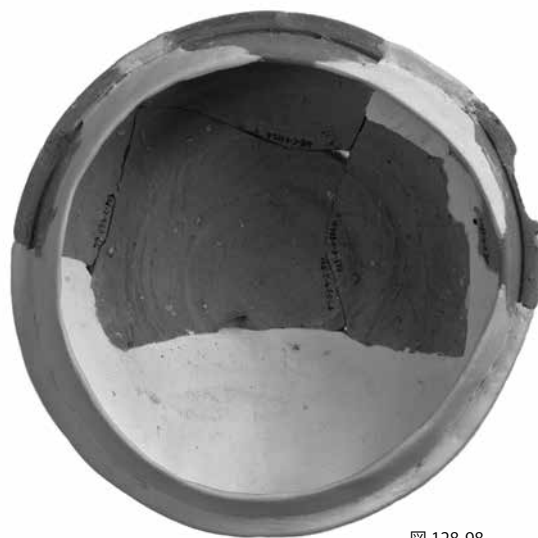


图 128-98

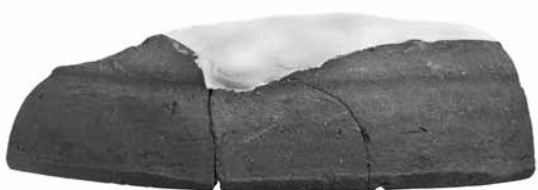


图 127-4



图 129-103



图 127-11



图 129-116



图 129-143

图版 82 第 7b 面関連出土土器 (包含層)



图 129-144



图 130-163



图 129-147



图 130-172



图 129-148

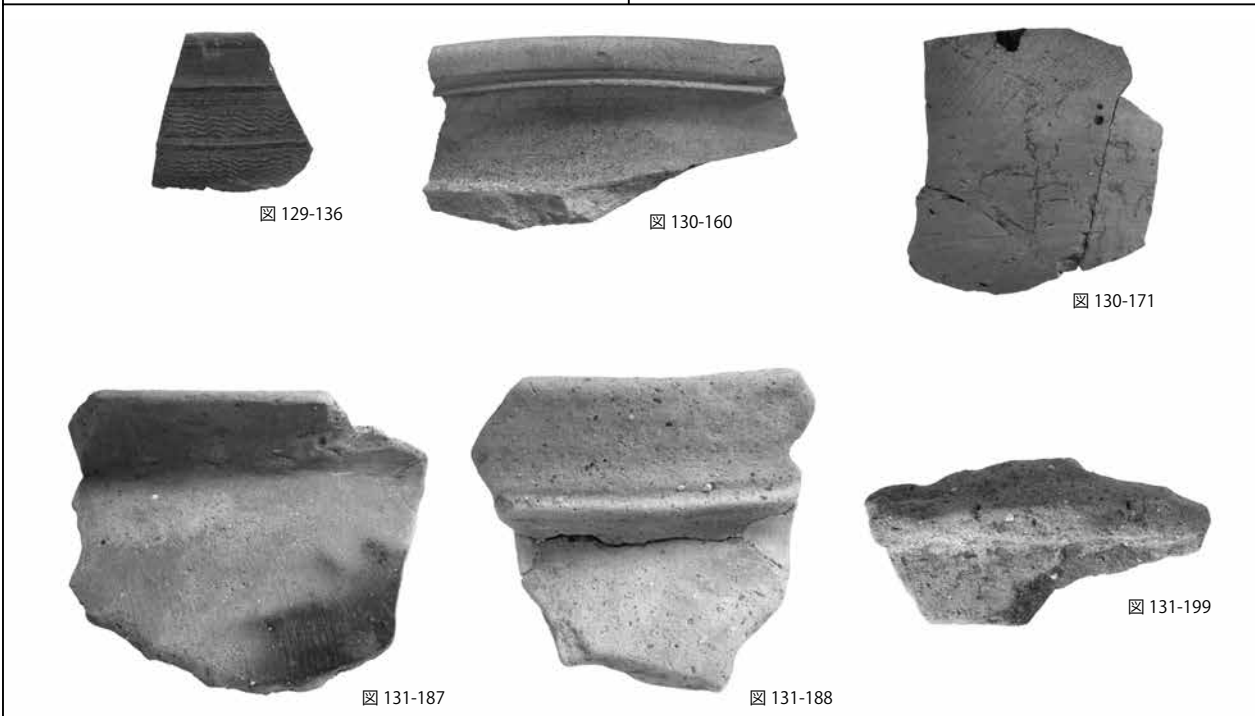


图 129-136

图 130-160

图 130-171

图 131-187

图 131-188

图 131-199



図版 83 第 7b 面関連出土土器 (包含層)



図 130-173



図 131-177



図 131-193



図 131-197

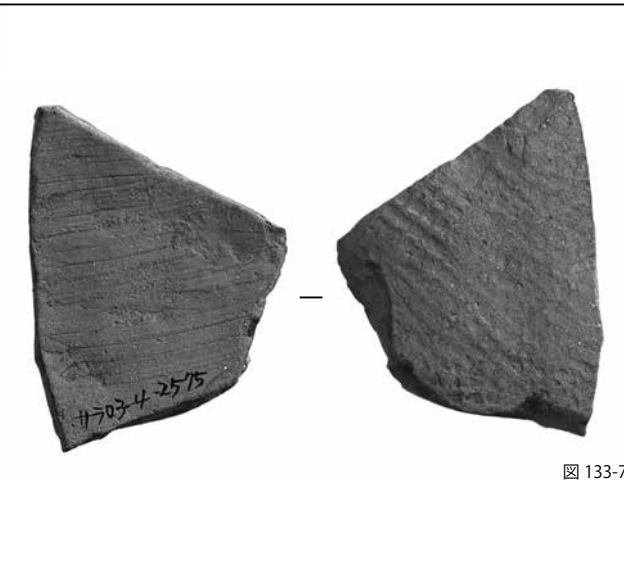


図 133-7

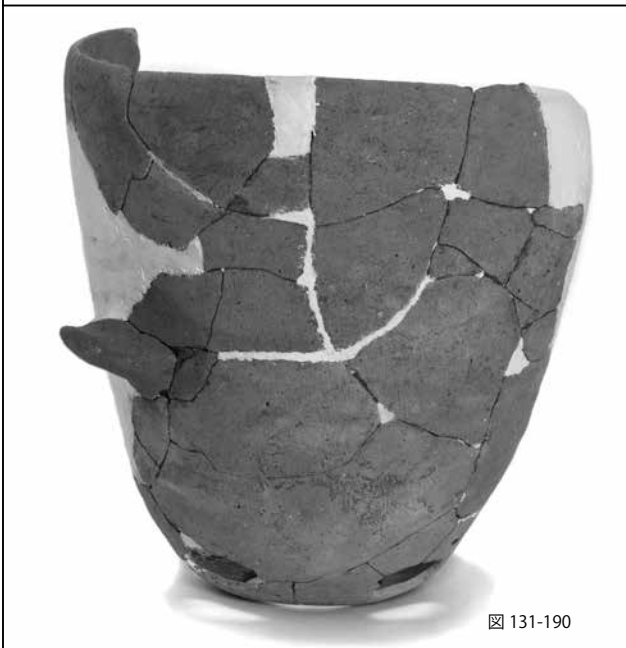


図 131-190

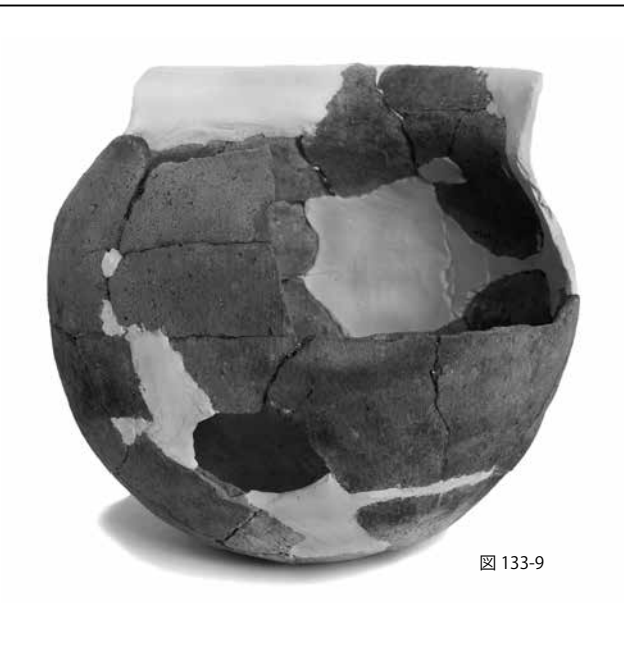
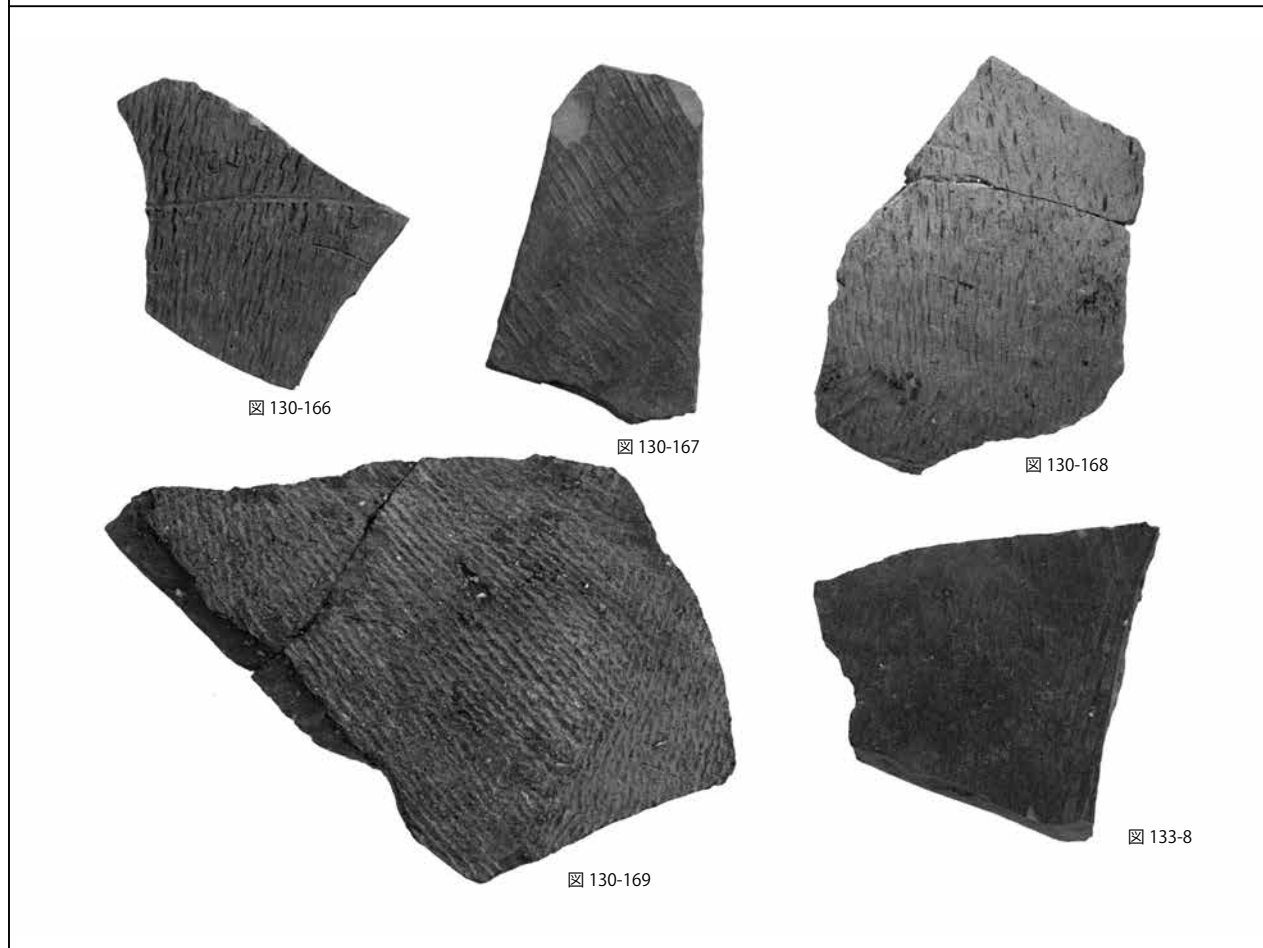
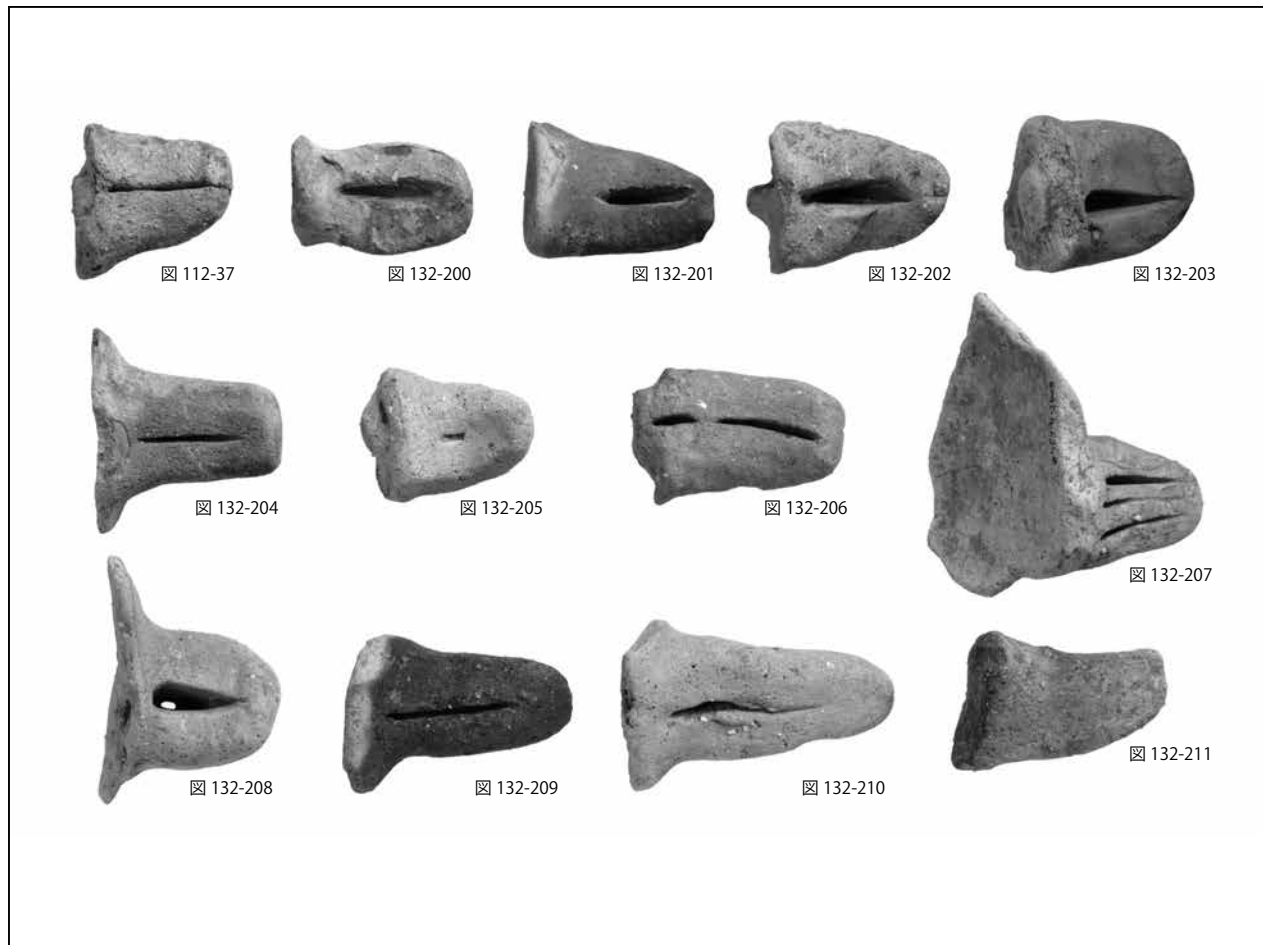


図 133-9

图版 84 第 7b 面関連出土土器 (包含層)



図版 85 第 7b 面関連出土土器 (1-59・60 溝)



図 141-1



図 141-2



図 141-6



図 141-3

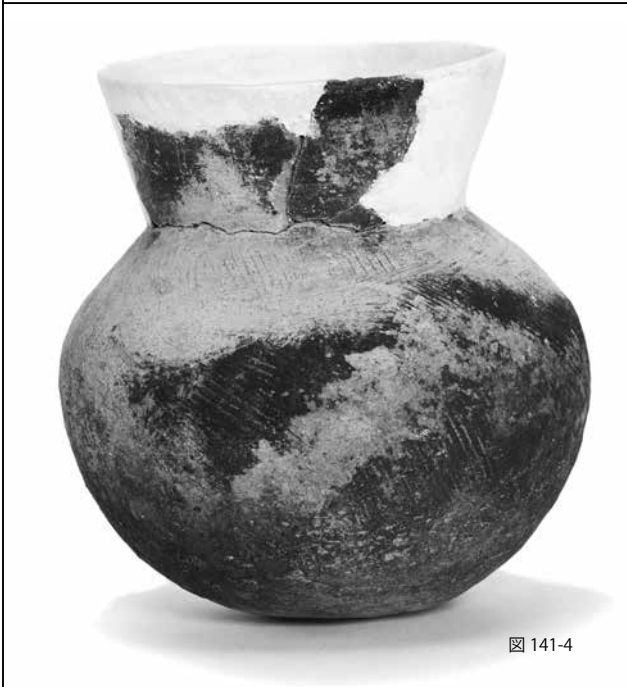


図 141-4



図 141-9

図版 86 第 7b 面関連出土土器 (1-59・60 溝)



図 141-12



図 141-15



図 141-13



図 141-18



図 141-14



図 141-21

図版 87 第 7b 面関連出土土器 (1-59・60、1-62 溝)



図 141-23

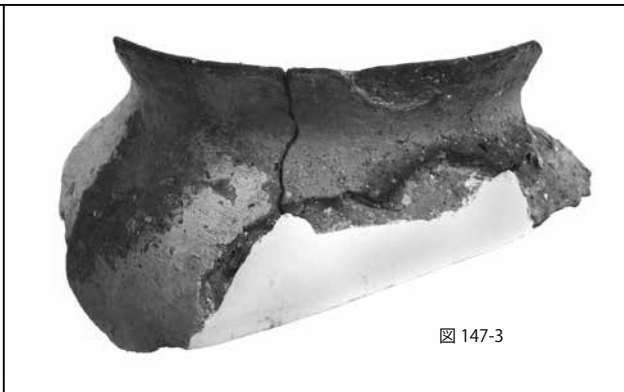


図 147-3

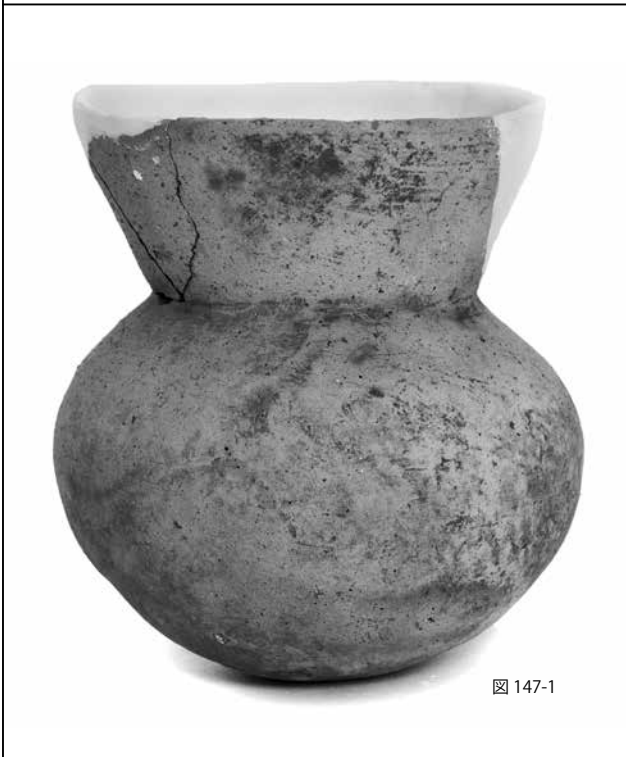


図 147-1



図 147-9



図 147-11

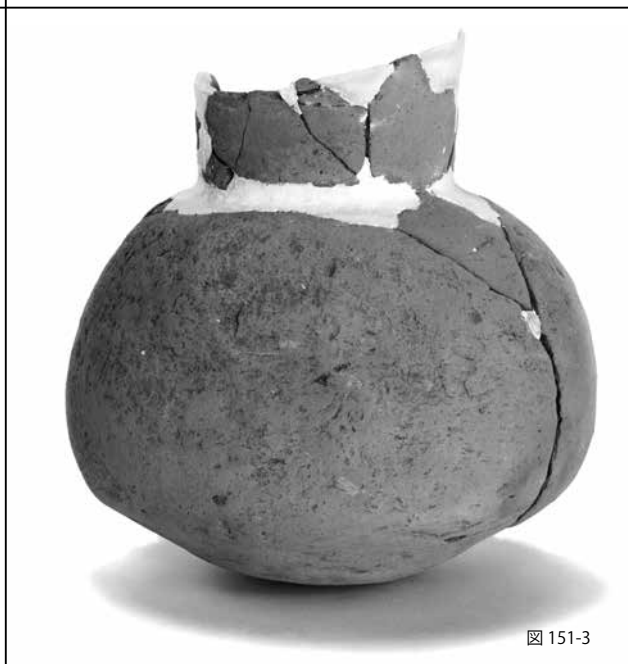
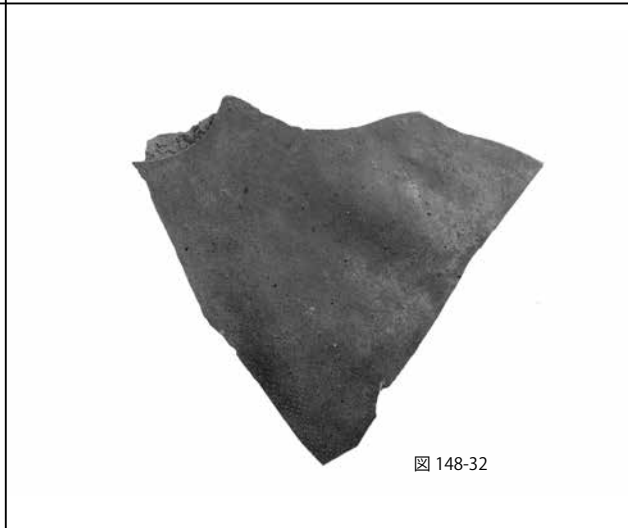
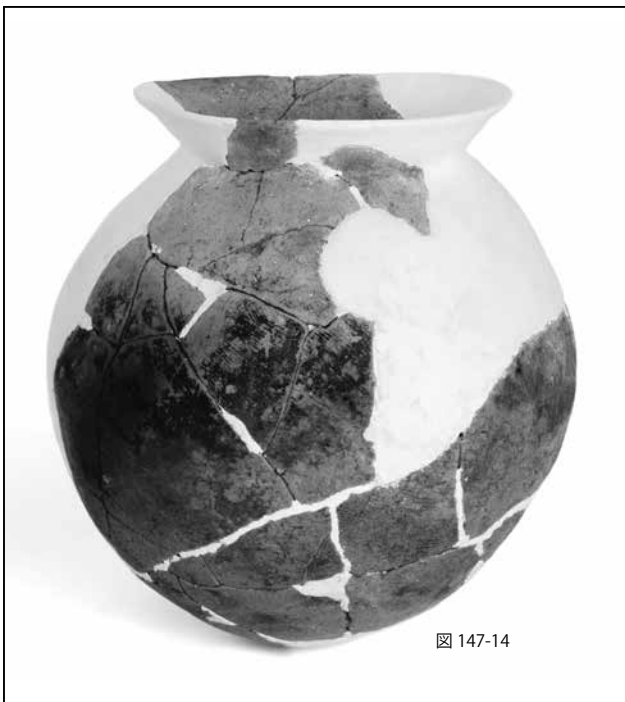


図 147-2

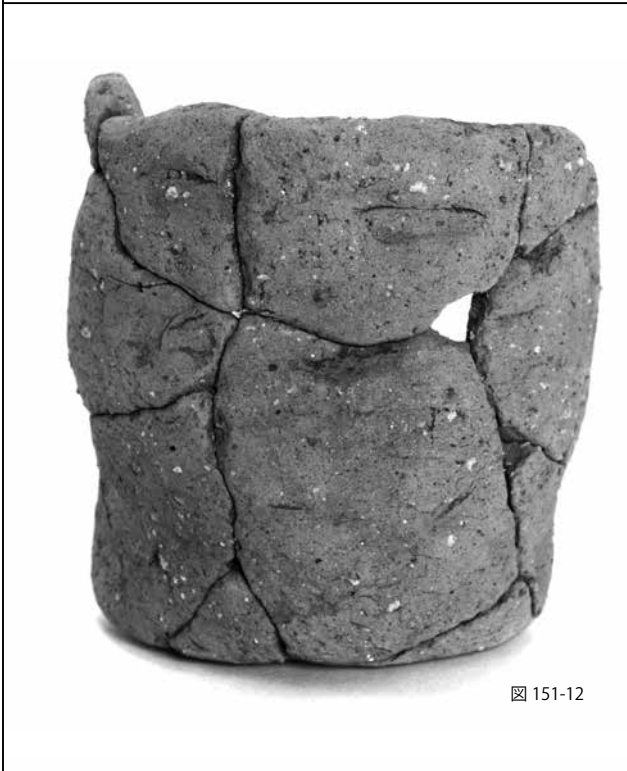


図 147-13

図版 88 第 7b 面関連出土土器 (1-62 溝、3-165、3-177 土坑)



图版 89 第 7b 面関連出土土器 (3-165、3-117 土坑)



図版 90 第 7b 面関連出土土器 (3-179、3-188 土坑)



図 153-1

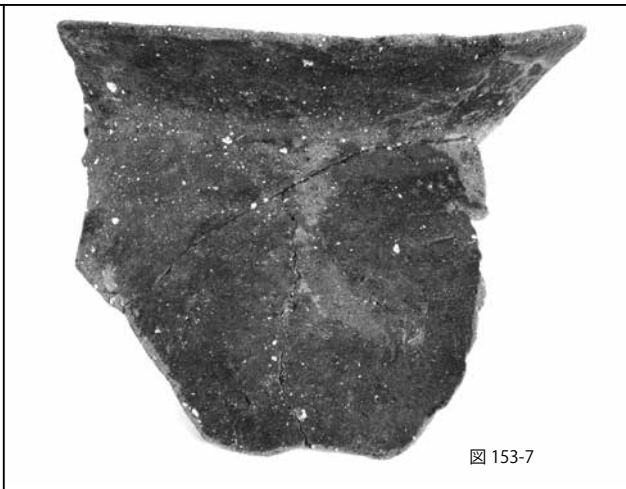


図 153-7

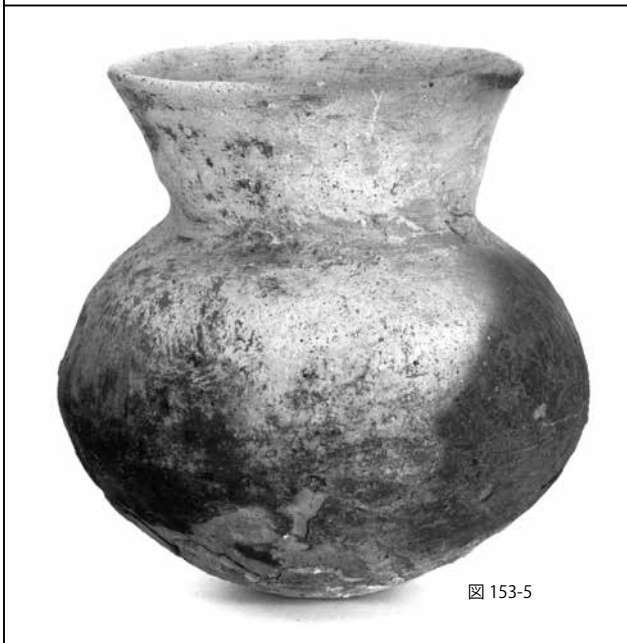


図 153-5

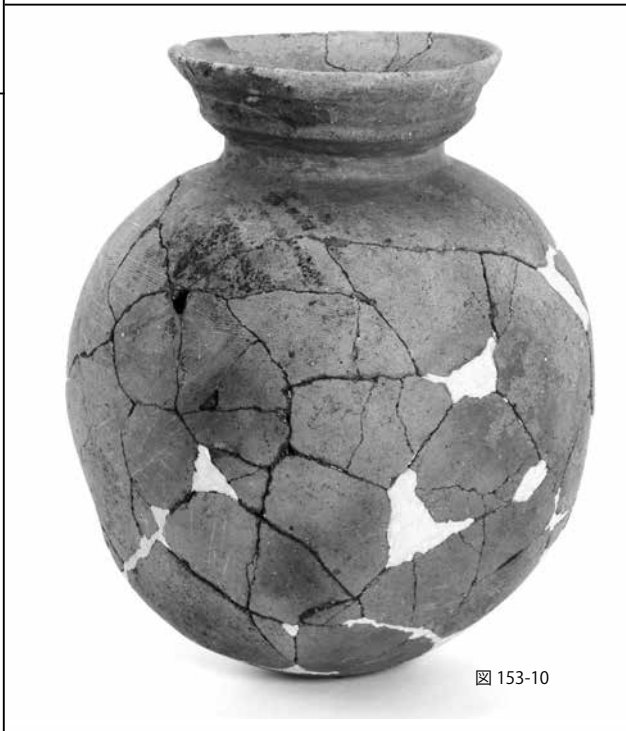


図 153-10



図 153-9

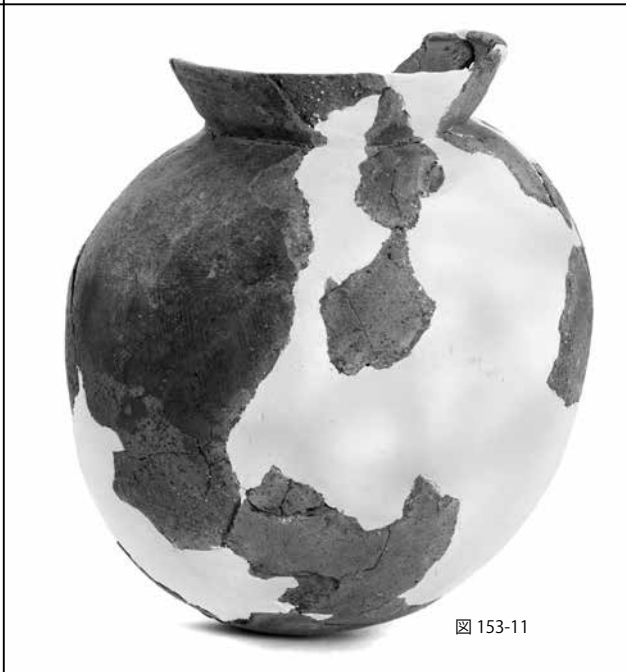


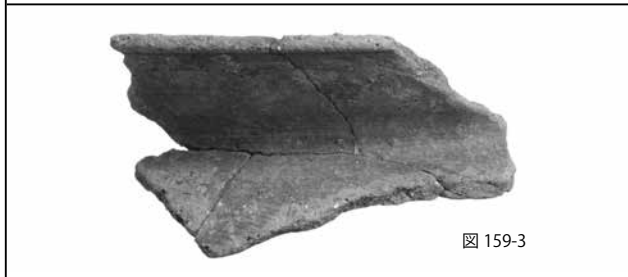
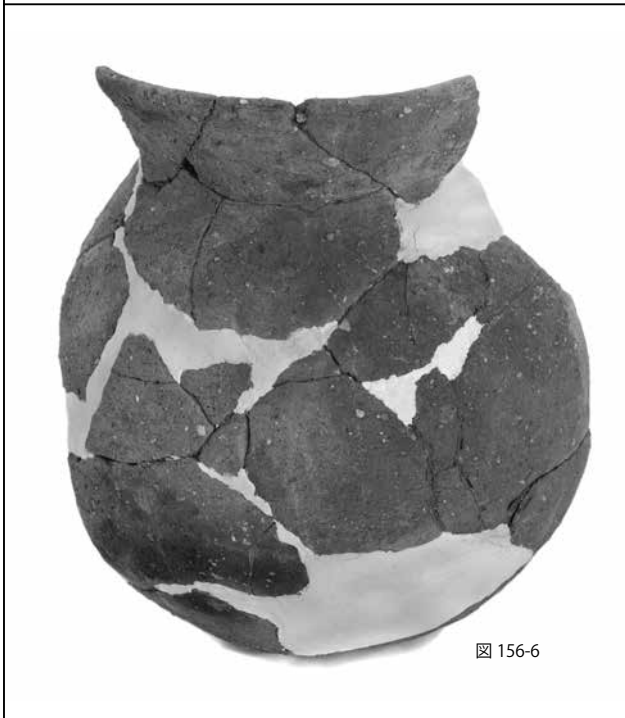
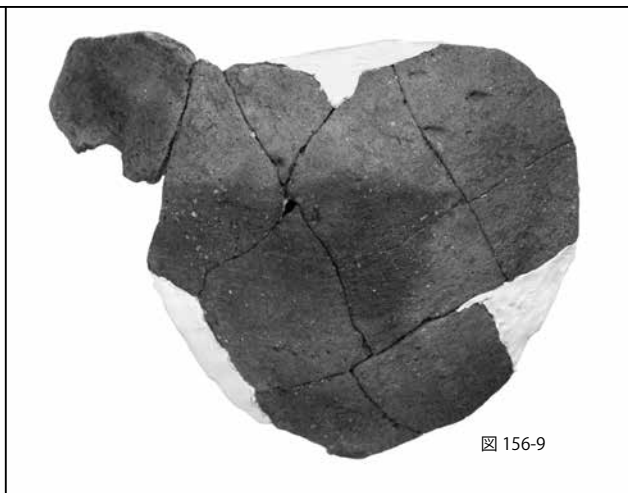
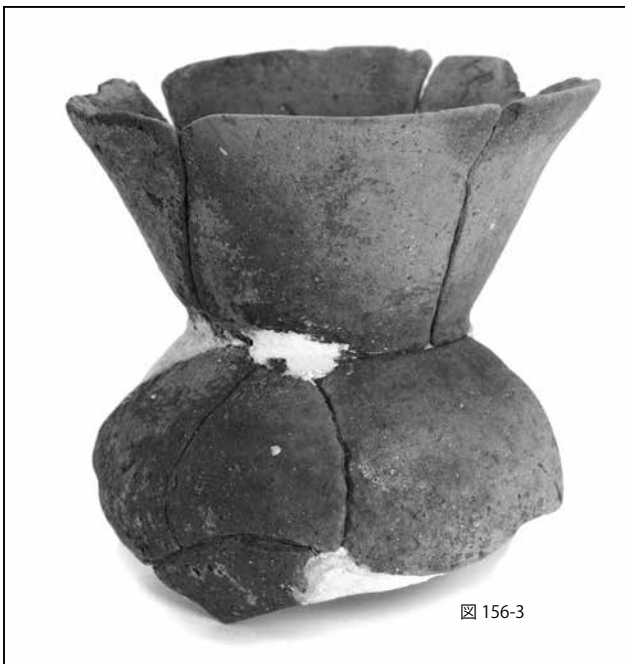
図 153-11



図版 91 第 7b 面関連出土土器 (3-193、3-203、5-390、5-579 土坑、3 区土器集中部)



図版 92 第 7b 面関連出土土器 (3区土器集中部、4-87、5-511 ピット)



図版 93 第 7b 面関連出土土器 (5-511、5-958 ピット、包含層)



図 159-4



図 160-18



図 159-5



図 160-20



図 160-21

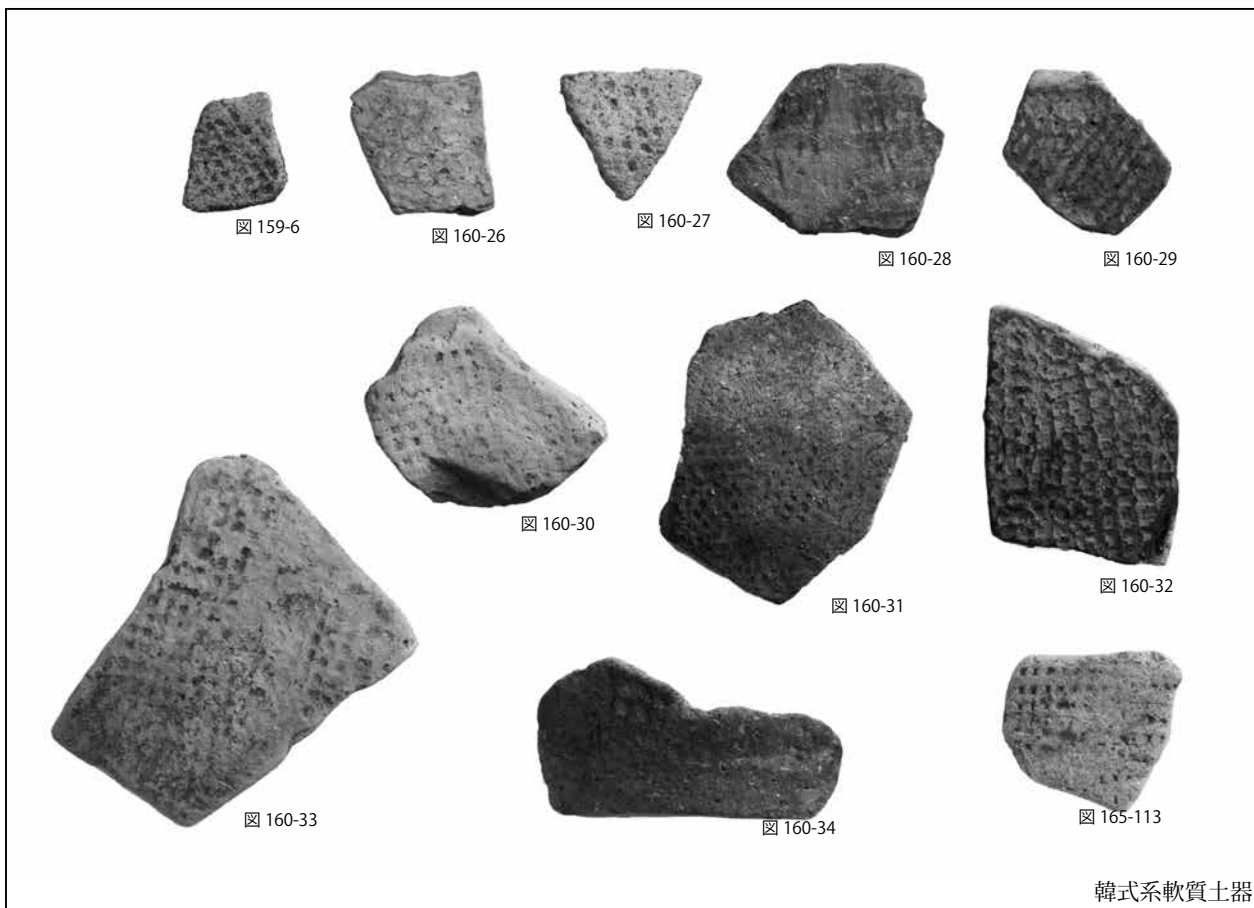


図 160-15



図 160-24

図版 94 第 7b 面関連出土土器 (3-164、5-342 溝、5-652 ピット、包含層)



図版 95 第 7b 面関連出土土器 (3-164、5-342、5-521 溝)

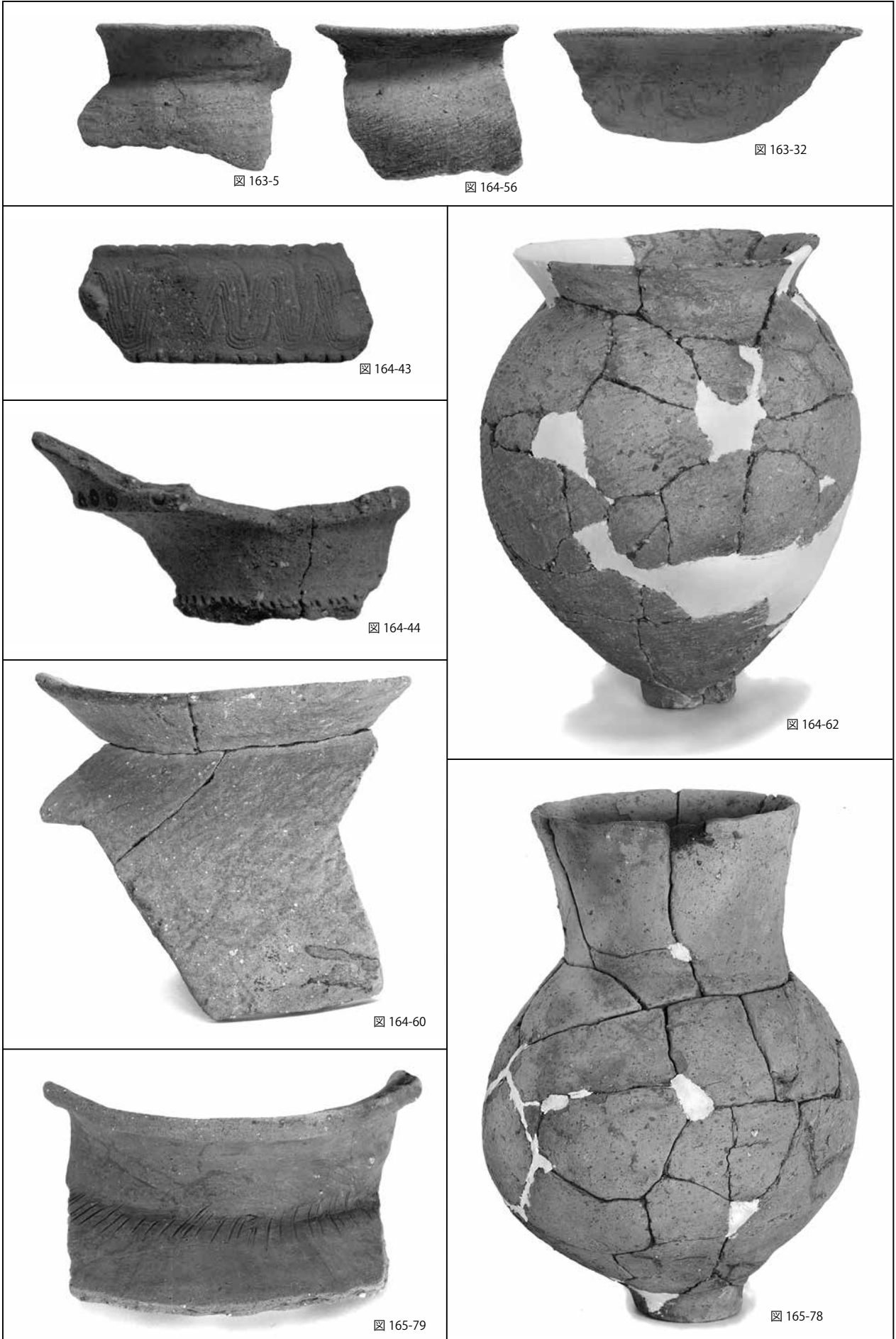


図 163-5



図 164-56

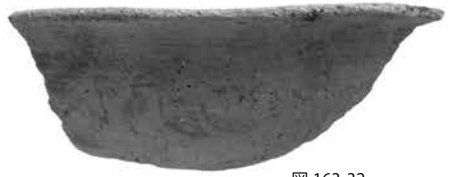


図 163-32



図 164-43



図 164-62



図 164-44



図 164-60



図 165-78



図 165-79

図版 96 第 7b 面関連出土土器 (3-164、5-330、5-342、5-521、6-99 溝)



図版 97 第 7b 面関連出土土器 (5-614 溝、溝周辺)

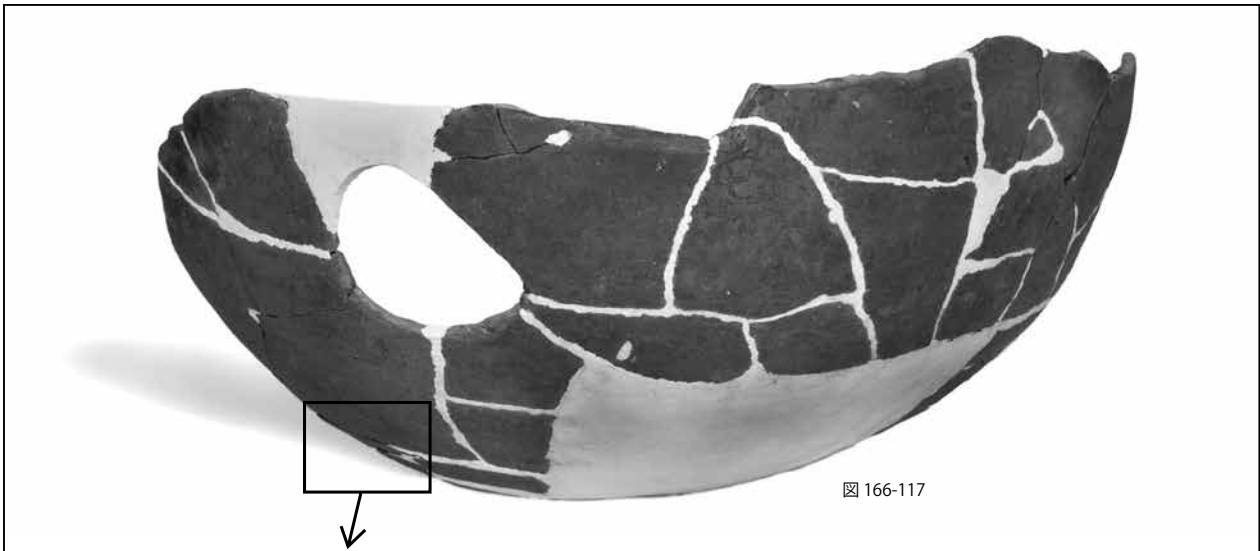


図 166-117

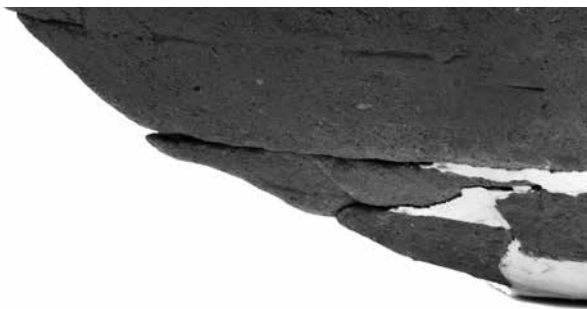


図 168-6



- 図 167-1
- 図 171-56
- 図 171-54
- 図 172-67
- 図 168-7
- 図 168-10
- 図 173-84
- 図 173-87
- 図 169-21
- 図 170-41
- 図 170-45
- 図 173-81
- 図 181-77
- 図 167-2
- 図 184-59
- 図 181-78
- 図 184-58
- 図 173-82

図版 98 第 7b 面関連出土土器 (溝周辺、包含層)



図 173-88



図 175-4



図 175-1



図 175-17



図 175-2



図 178-17



図 175-9



図 178-18

ミニチュア土器



図版 99 第 7b 面関連出土土器 (包含層、5-380、5-486、5-736、5-833、5-883 ピット)



図 175-20



図 178-2



図 178-5



図 178-7

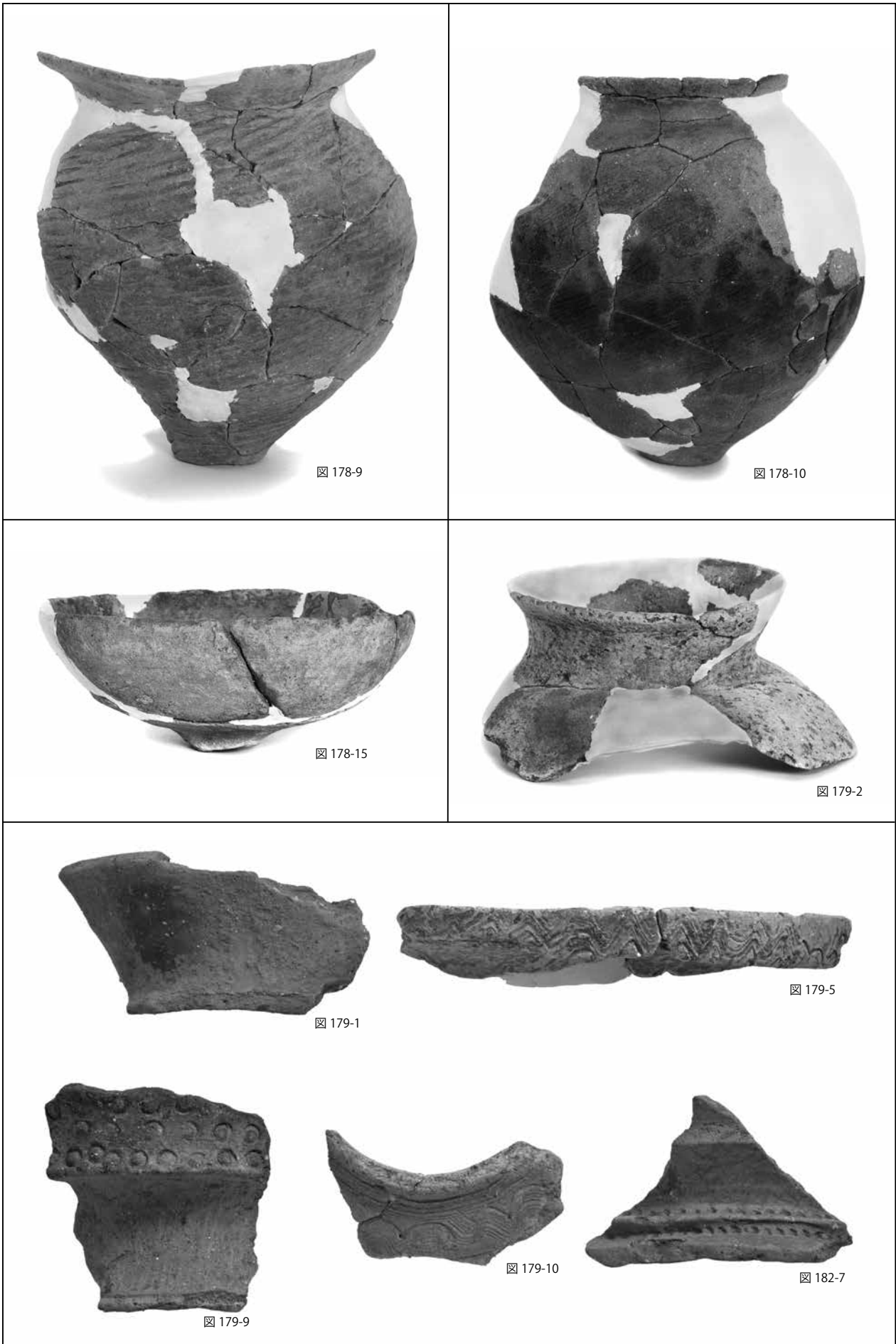


図 178-6



図 178-8

図版 100 第 7b 面関連出土土器 (5-571、5-733 ピット、5-888 土坑、包含層)



图版 101 第 7b 面関連出土土器 (包含層)



图 181-104



图 181-79



图 182-4



图 181-71



图 181-103



图 182-5

図版 102 第 7b 面関連出土土器 (包含層、ピット列4、ピット列6)

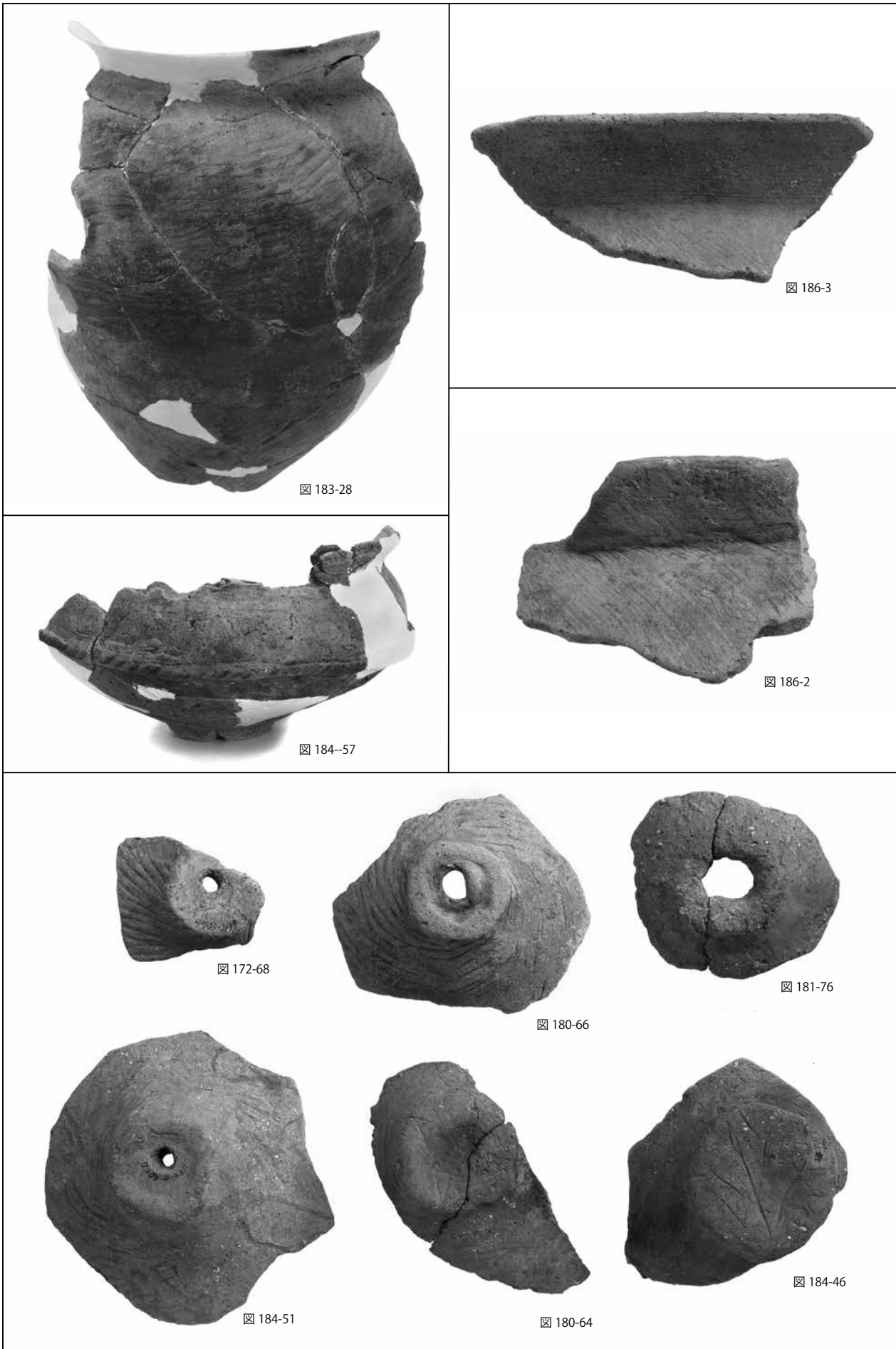


図 183-28

図 186-3

図 184-57

図 186-2

図 172-68

図 180-66

図 181-76

図 184-51

図 180-64

図 184-46

图版 103 第 7b 面関連出土土器 (包含層)



I



图 189-6



图 189-5



图 189-10

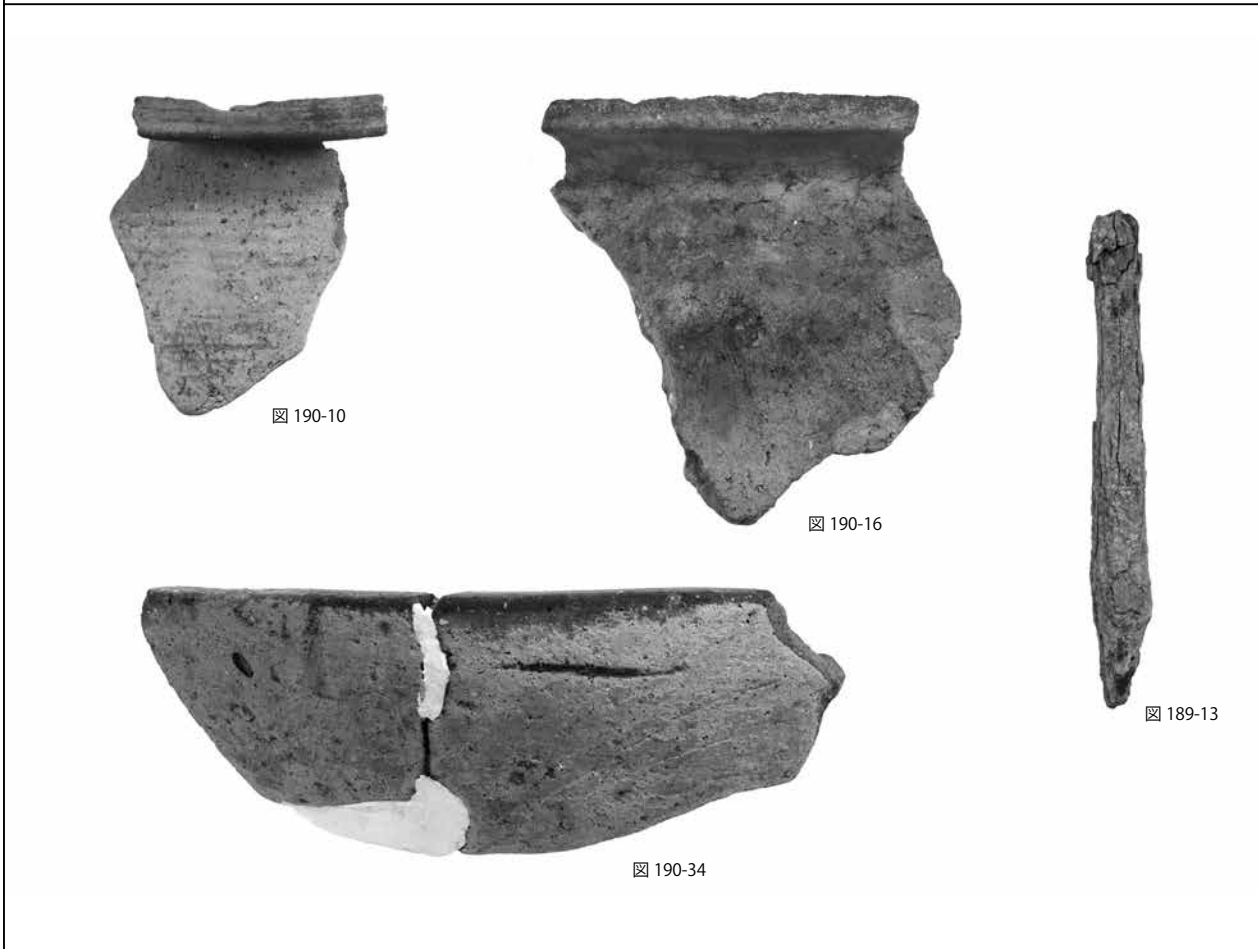
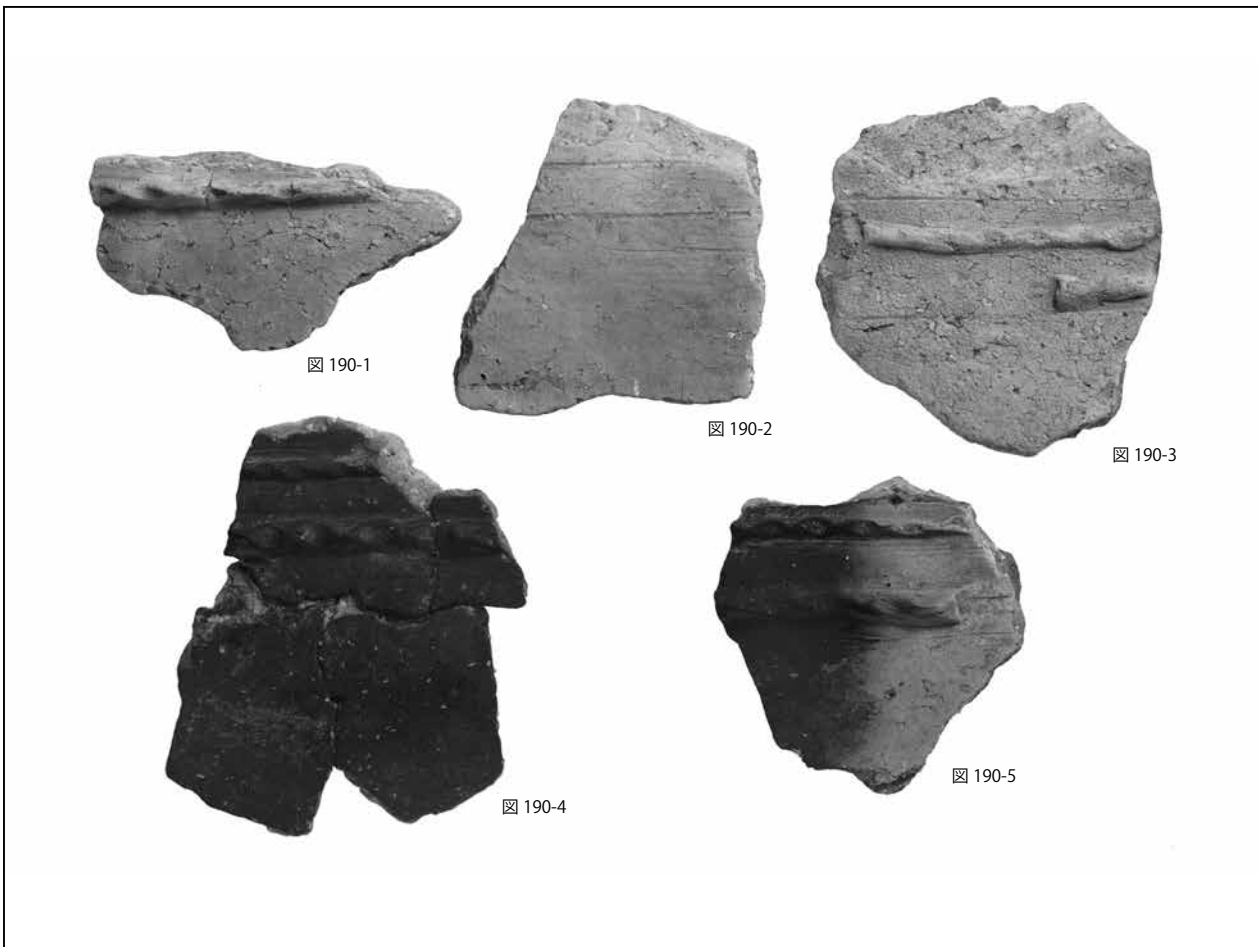


图 189-11

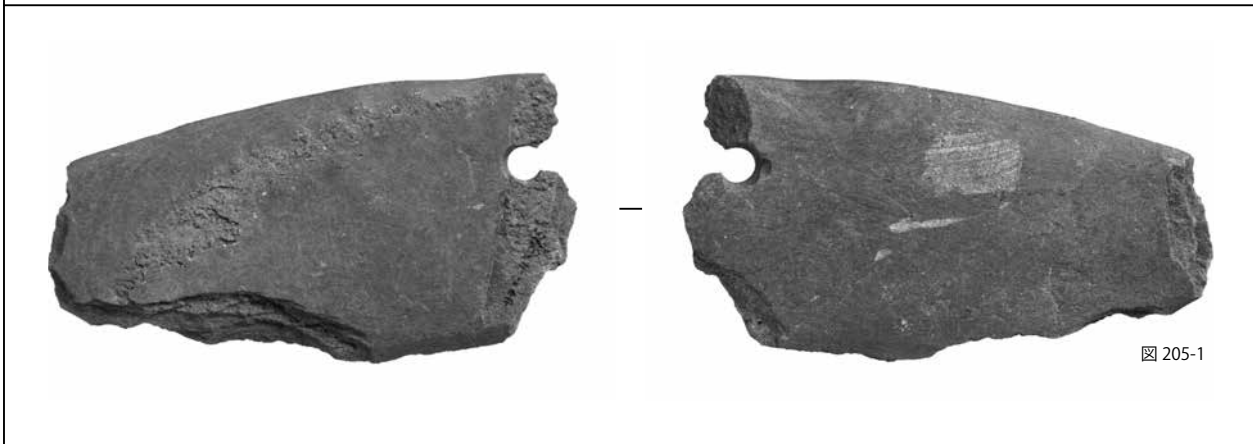
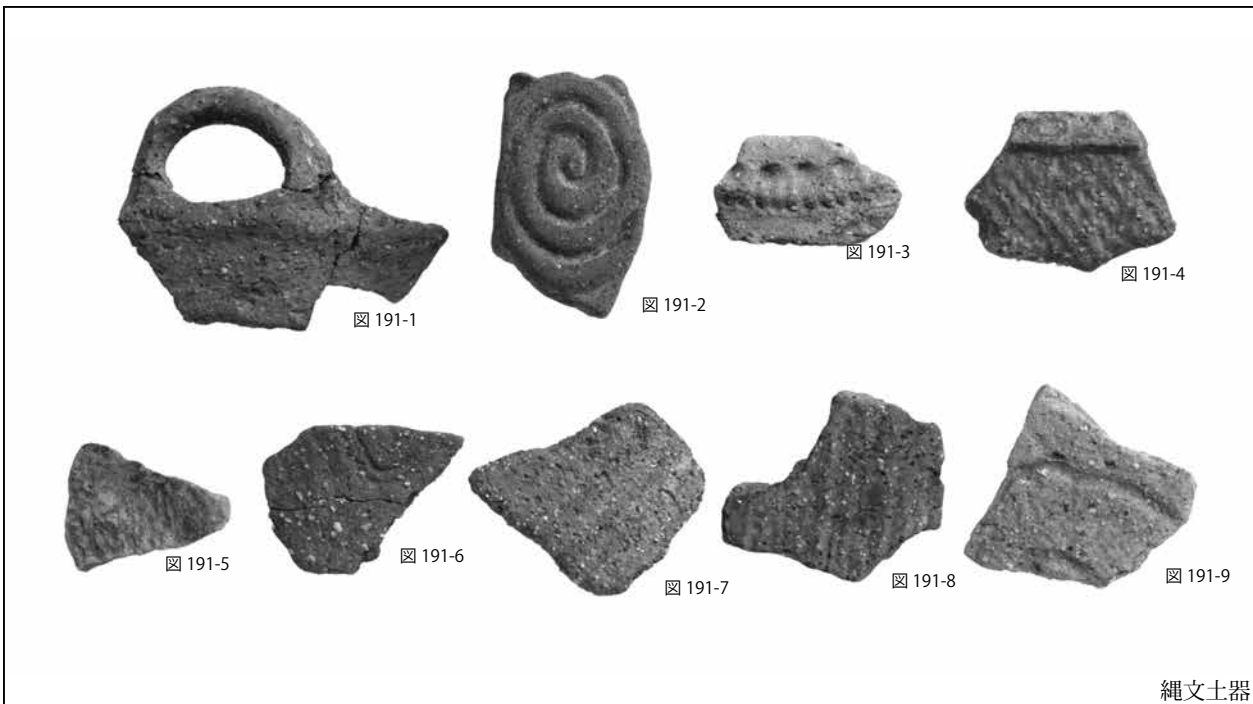


图 190-14

图版 104 第 7b 面関連出土遺物 (包含層)



図版 105 第 7b 面～第 8a 面関連出土遺物 (3-164、3-208、5-342、5-521 溝、包含層)



图版 106 第 7b 面~第 8a 面関連出土土器 (包含層、1-295 畦畔)



图 205-5

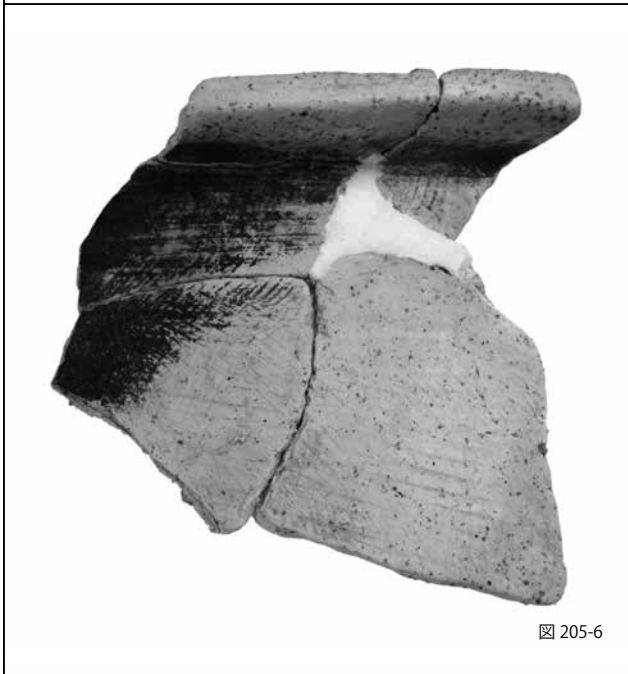


图 205-6



图 205-9



图 205-8



图 205-10

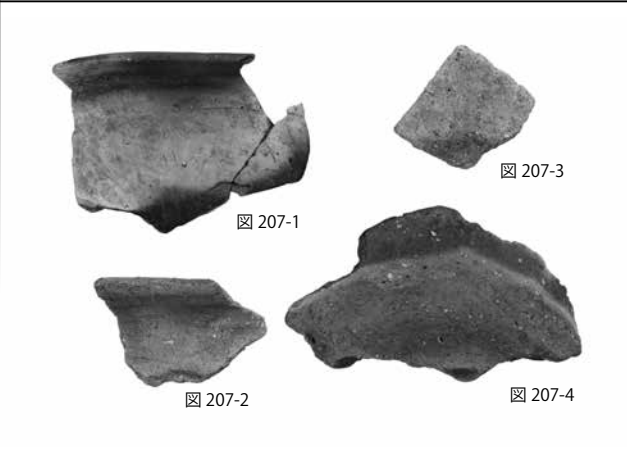


图 207-1

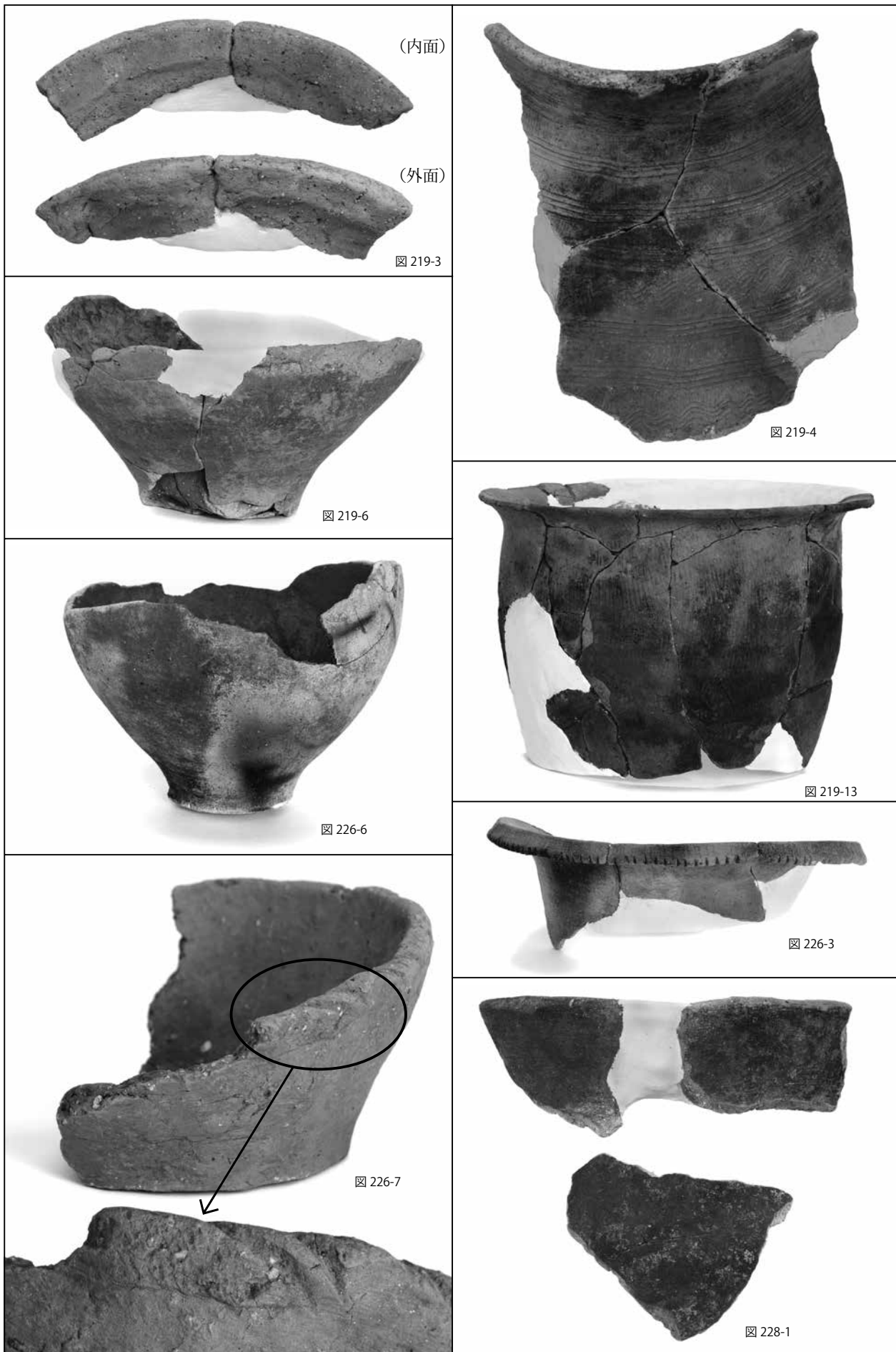
图 207-2

图 207-3

图 207-4



図版 107 第 8b 面関連出土土器 (1-84 落ち込み、微高地 1 上部遺構、2-133 土坑)



図版 108 第 8b 面関連出土土器 (微高地 1 上部遺構、包含層)

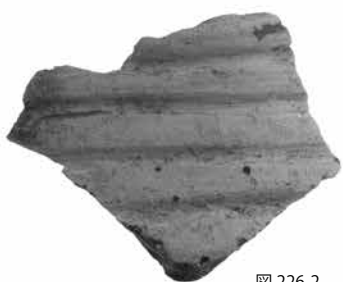


図 226-2



図 226-1



図 226-4



図 226-5



図 226-9



図 232-6



図 232-1



図 232-14



図 232-4

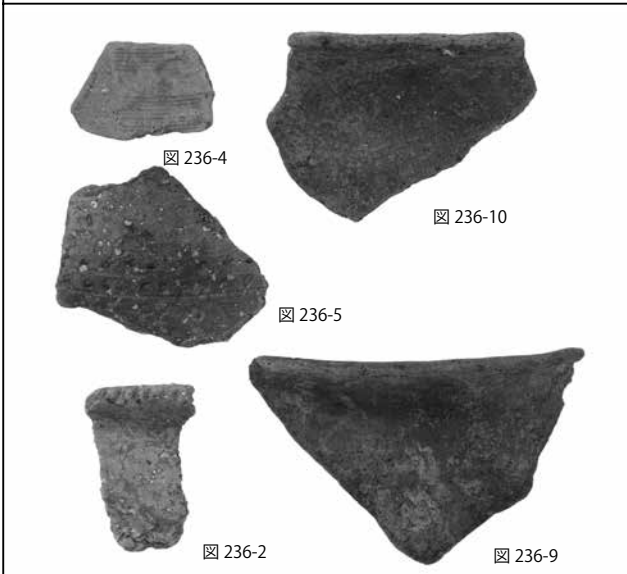
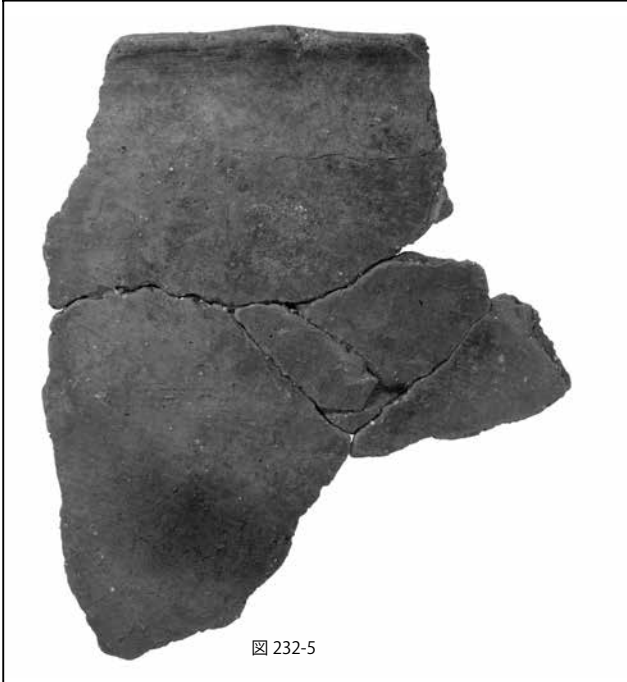
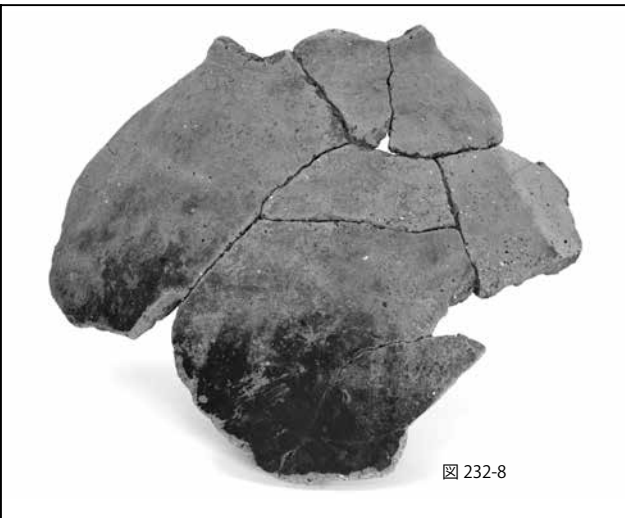


図 232-16



図 232-17

図版 109 第 8b 面関連出土土器 (包含層)



図版 110 第 8b 面関連出土土器 (包含層)

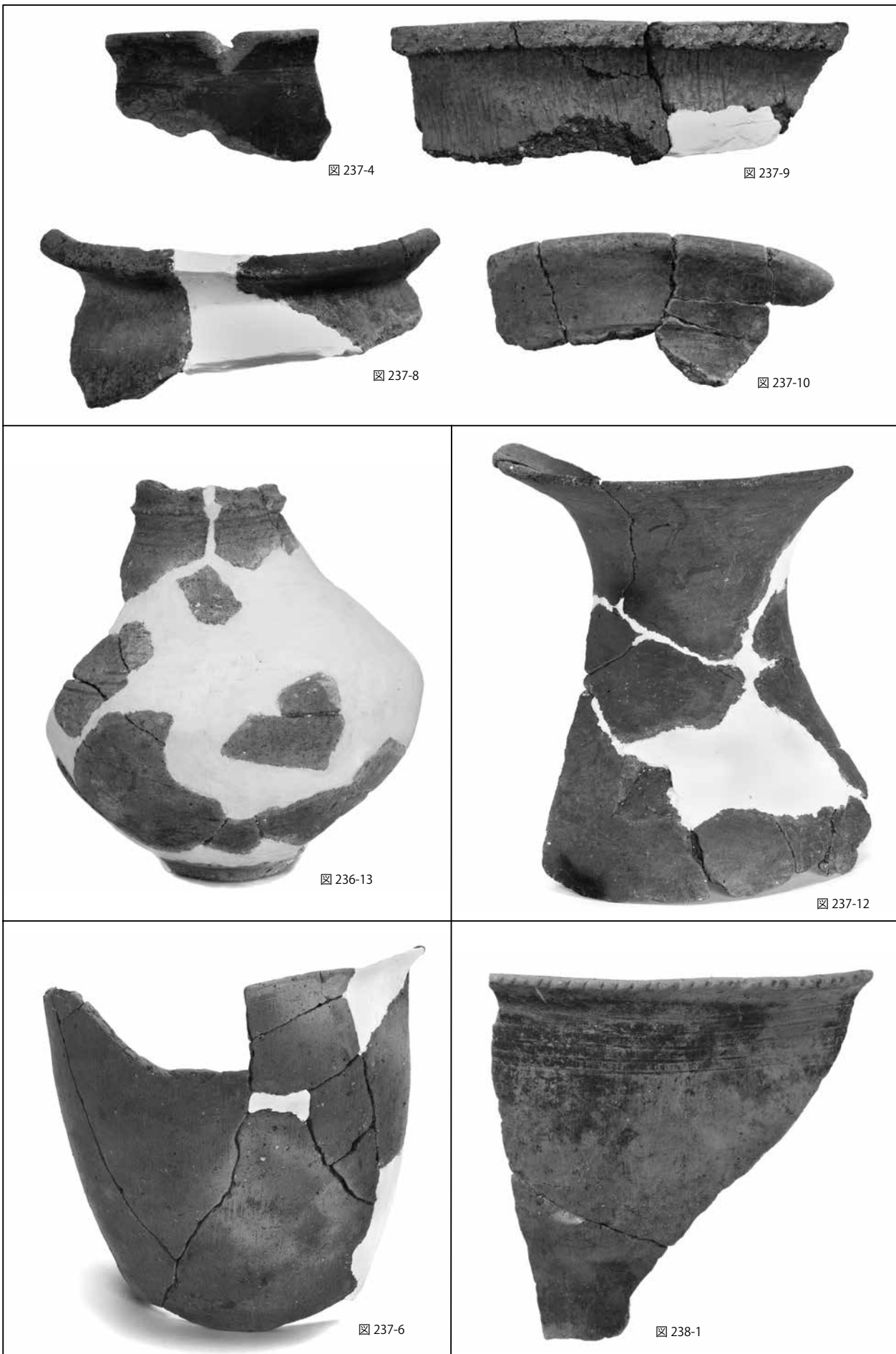


図 237-4

図 237-9

図 237-8

図 237-10

図 236-13

図 237-12

図 237-6

図 238-1

图版 111 第 8b 面関連出土土器 (包含層、建物 22 周辺遺構)

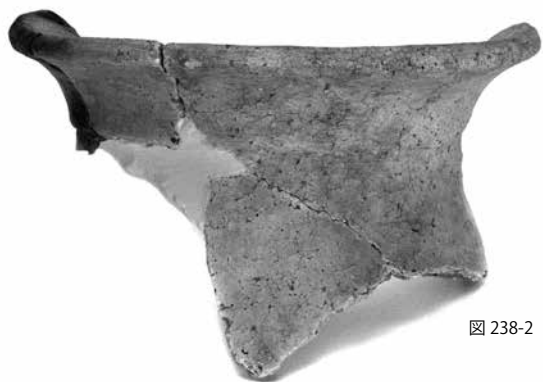


图 238-2



图 244-1



图 238-3



图 244-2



图 238-4

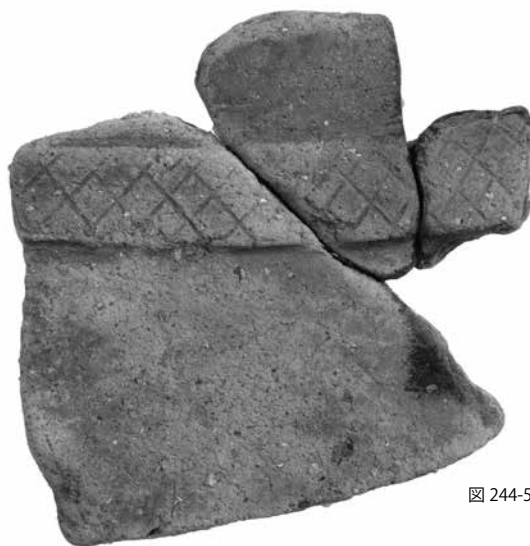


图 244-5



图 239-1

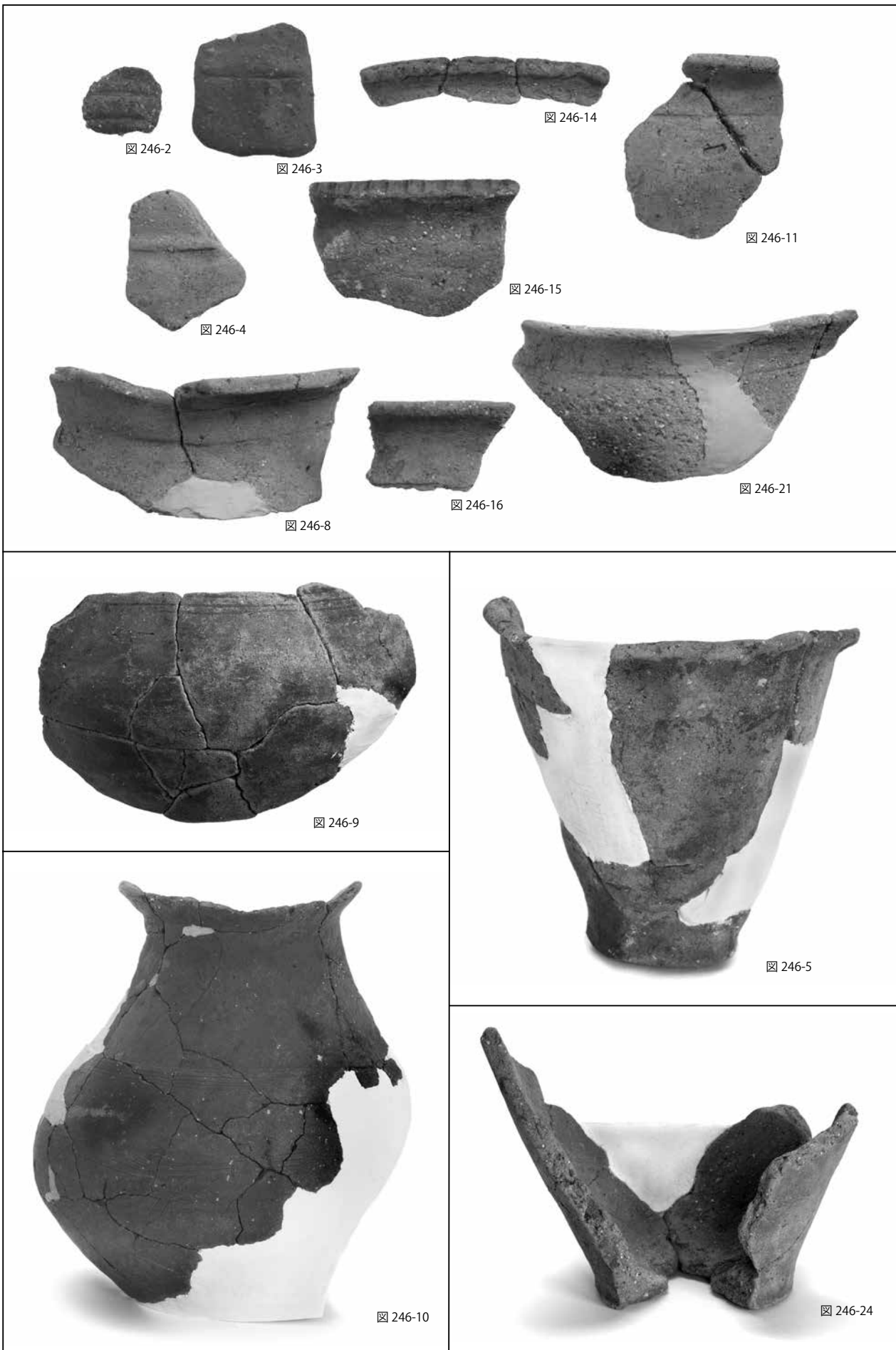


图 239-2

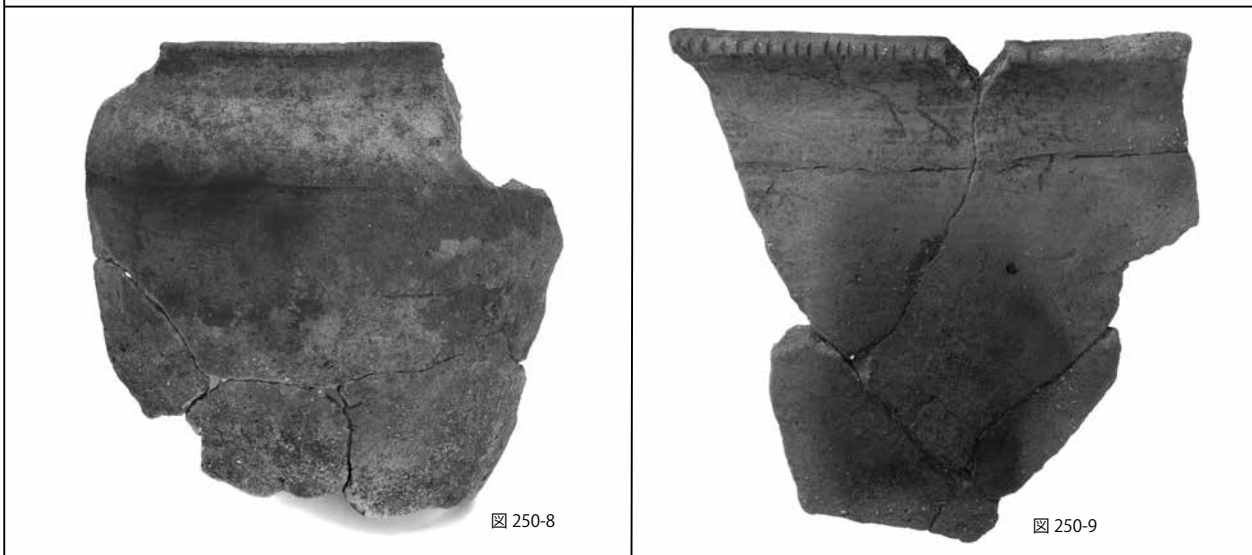
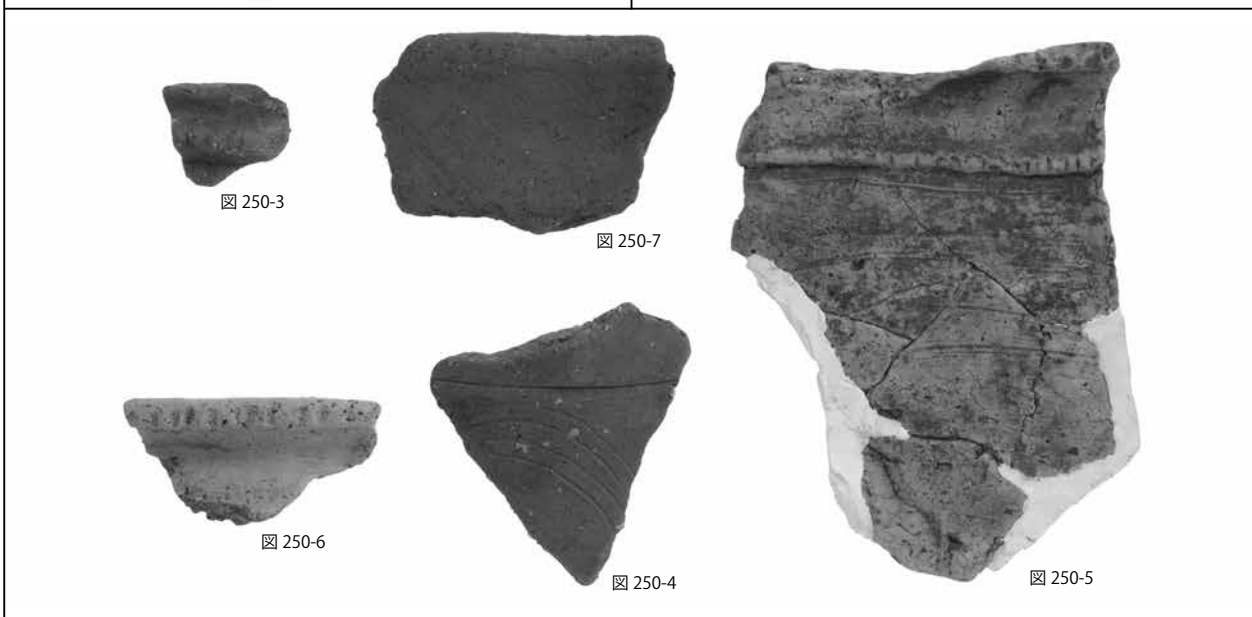


图 244-6

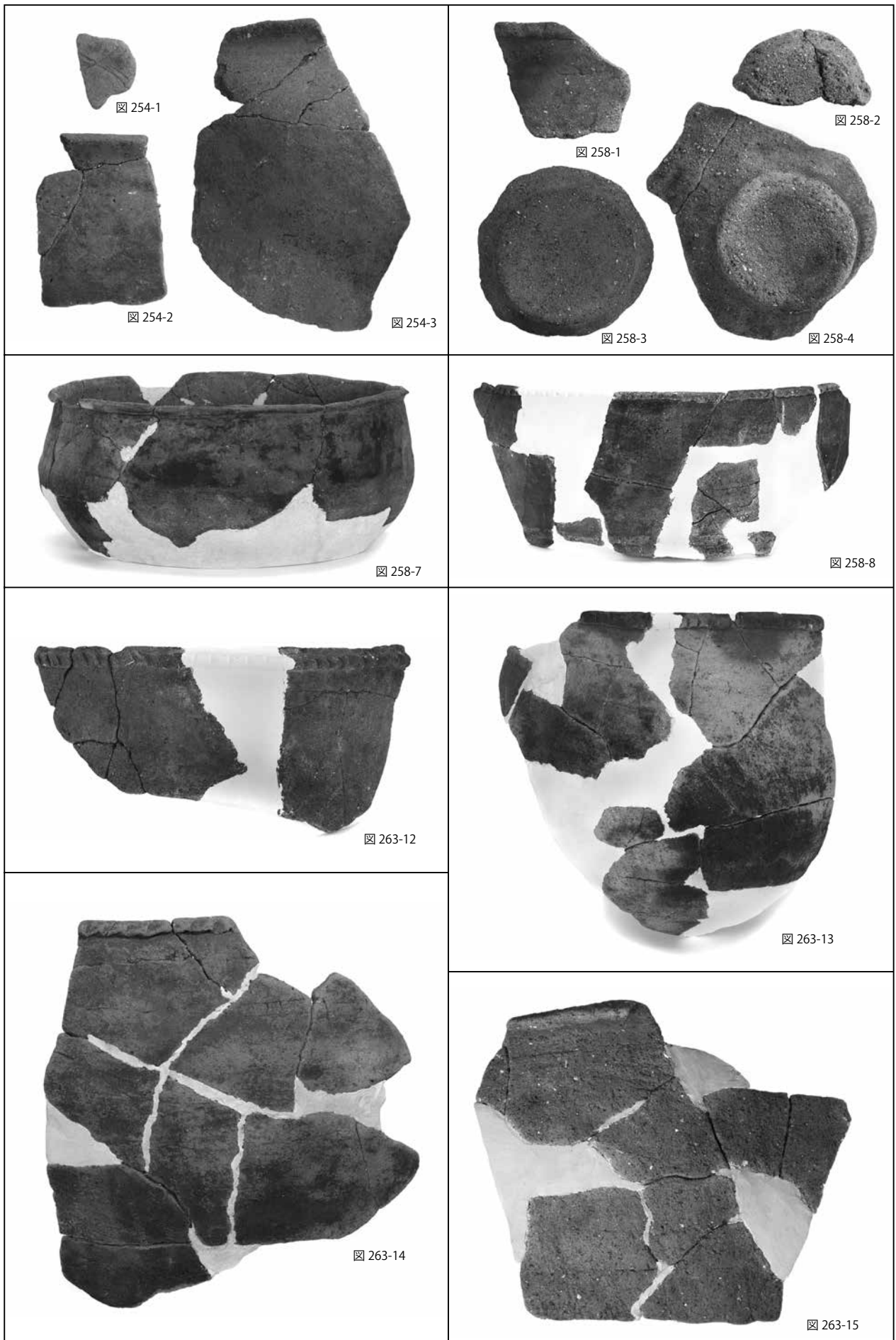
図版 112 第 8b 面関連出土土器 (6-124 土坑)



図版 113 第 8b 面関連出土土器 (6-124 土坑、建物 23 周辺遺構)

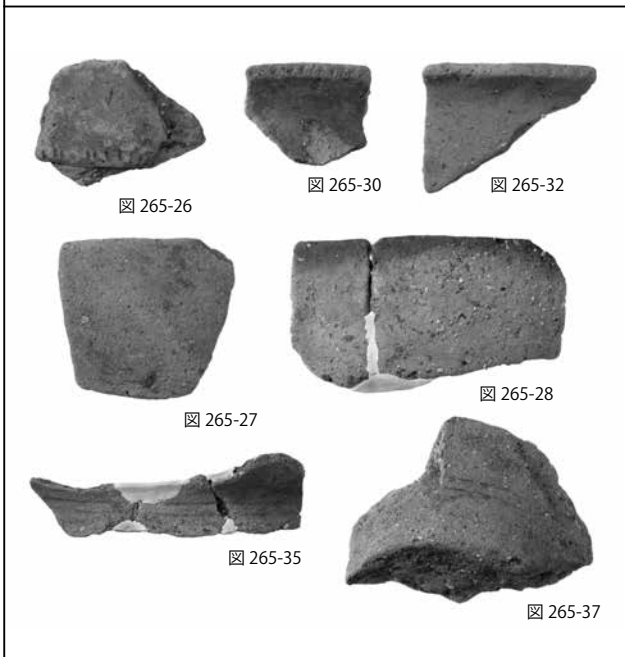
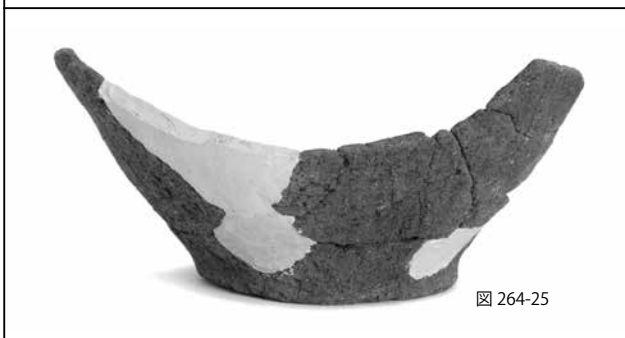
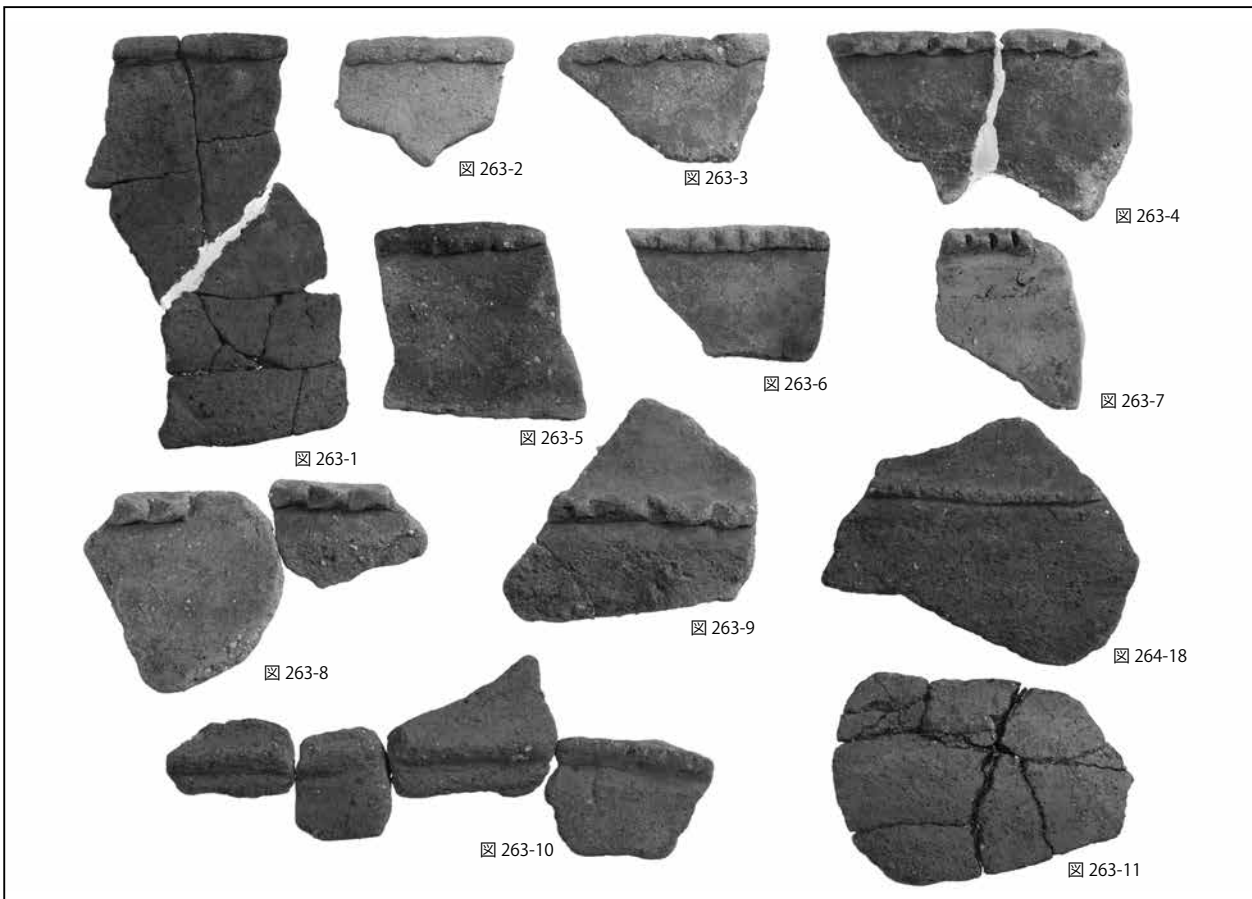


図版 114 第 8b 面関連出土土器 (建物 26 周辺遺構、3-267・268 溝土器群 1・2)

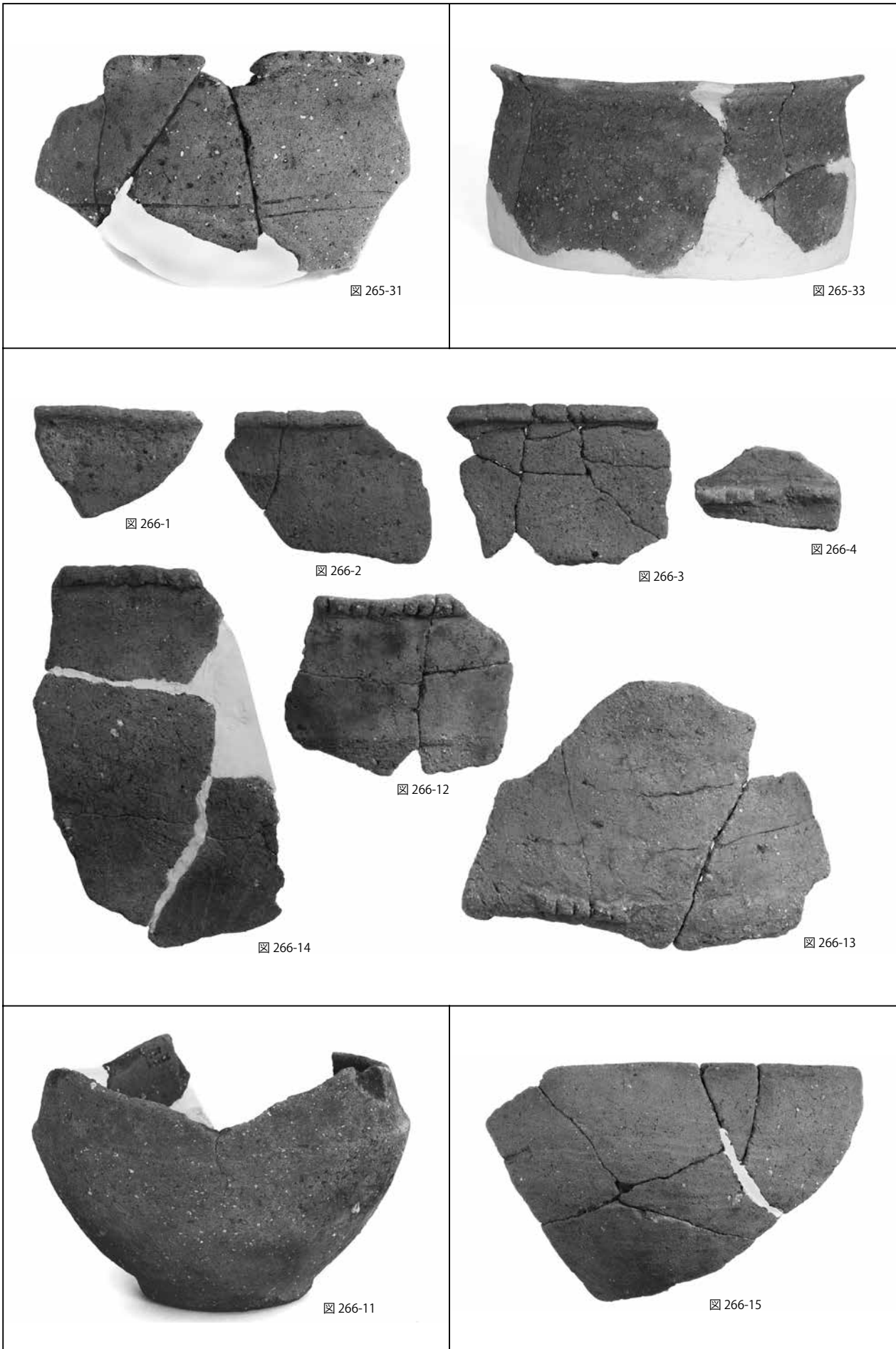




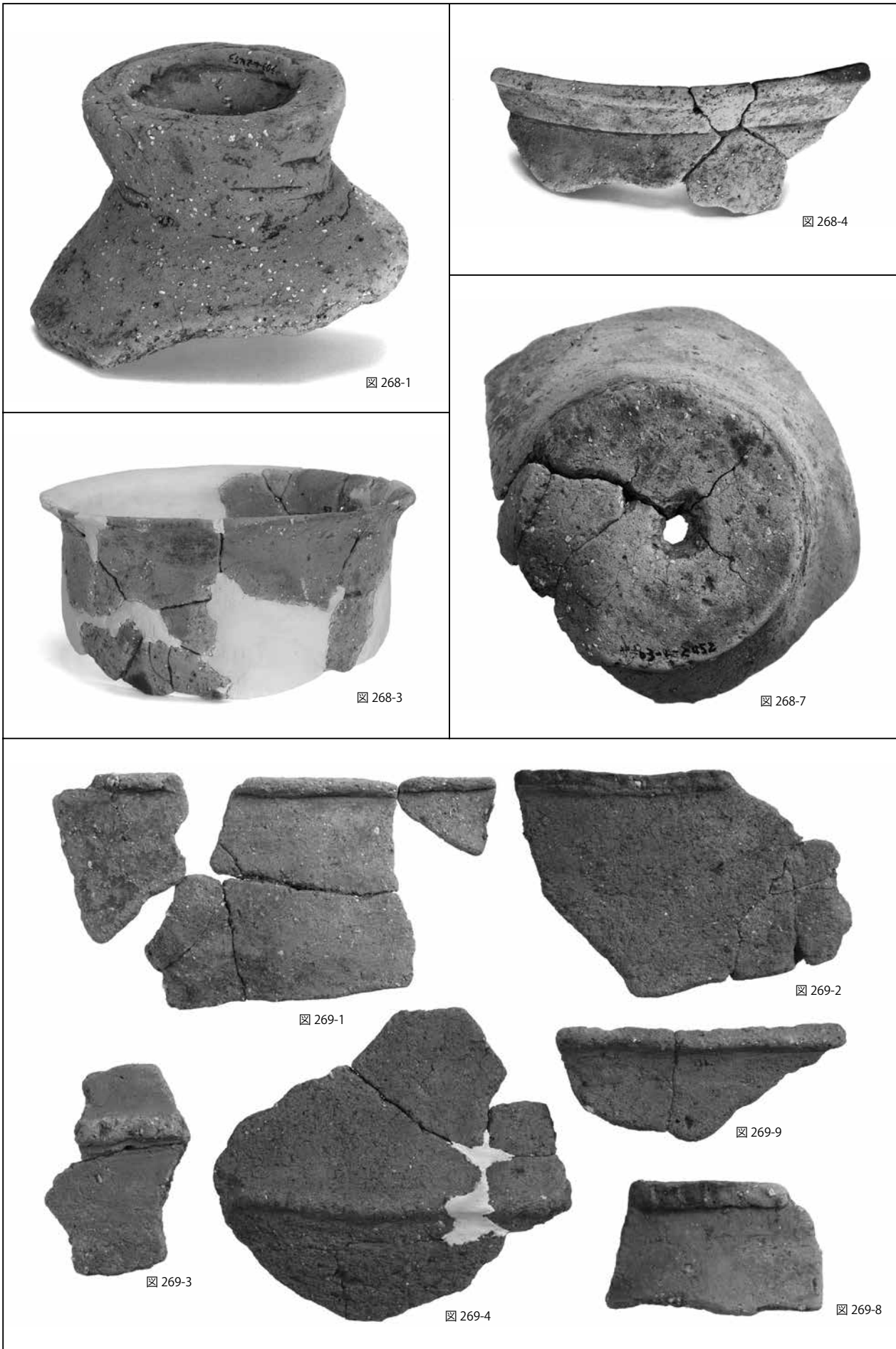
図版 115 第 8b 面関連出土土器 (3-267・268 溝土器群 2)

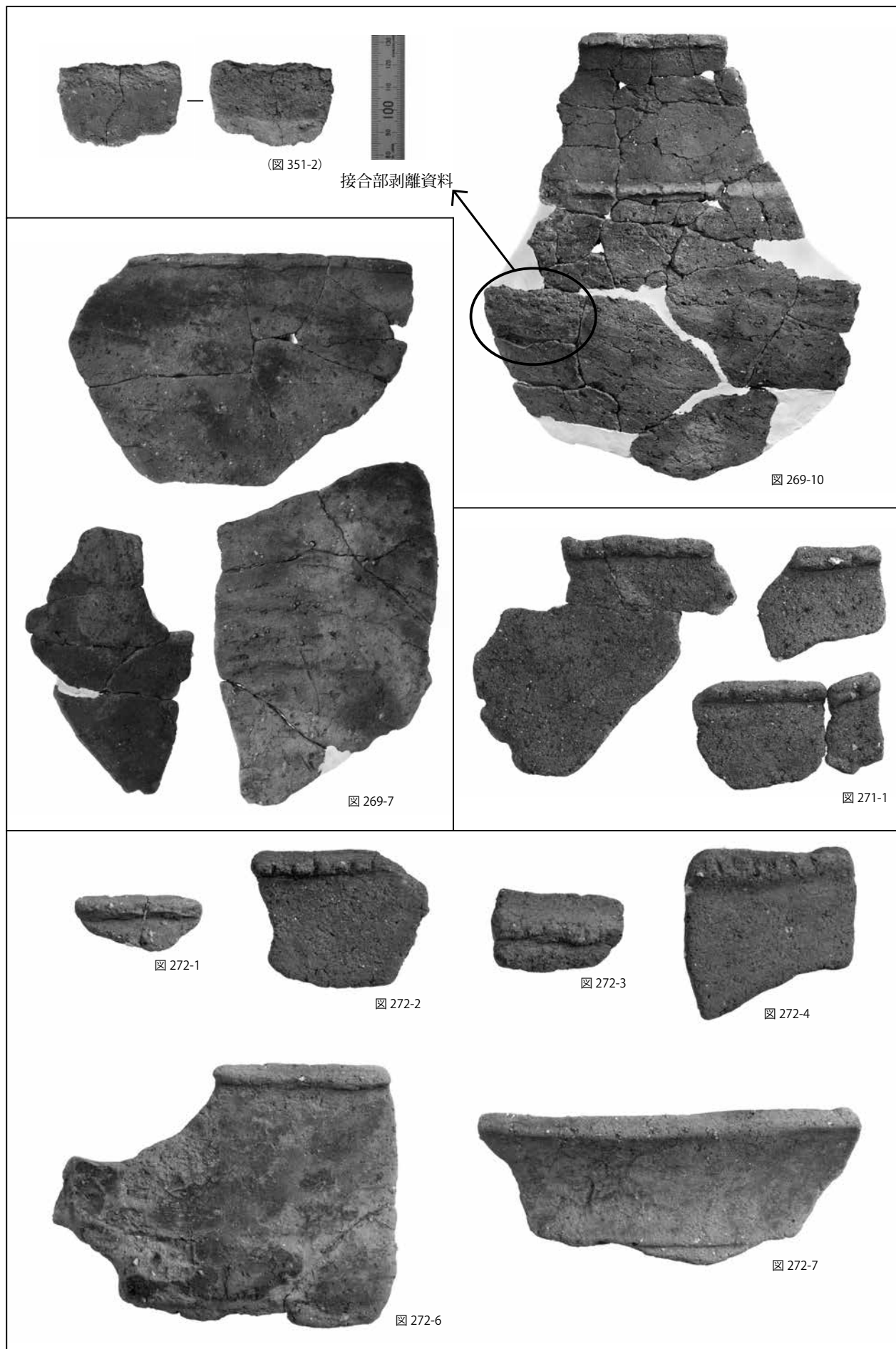


図版 116 第 8b 面関連出土土器 (3-267・268 溝土器群 2)

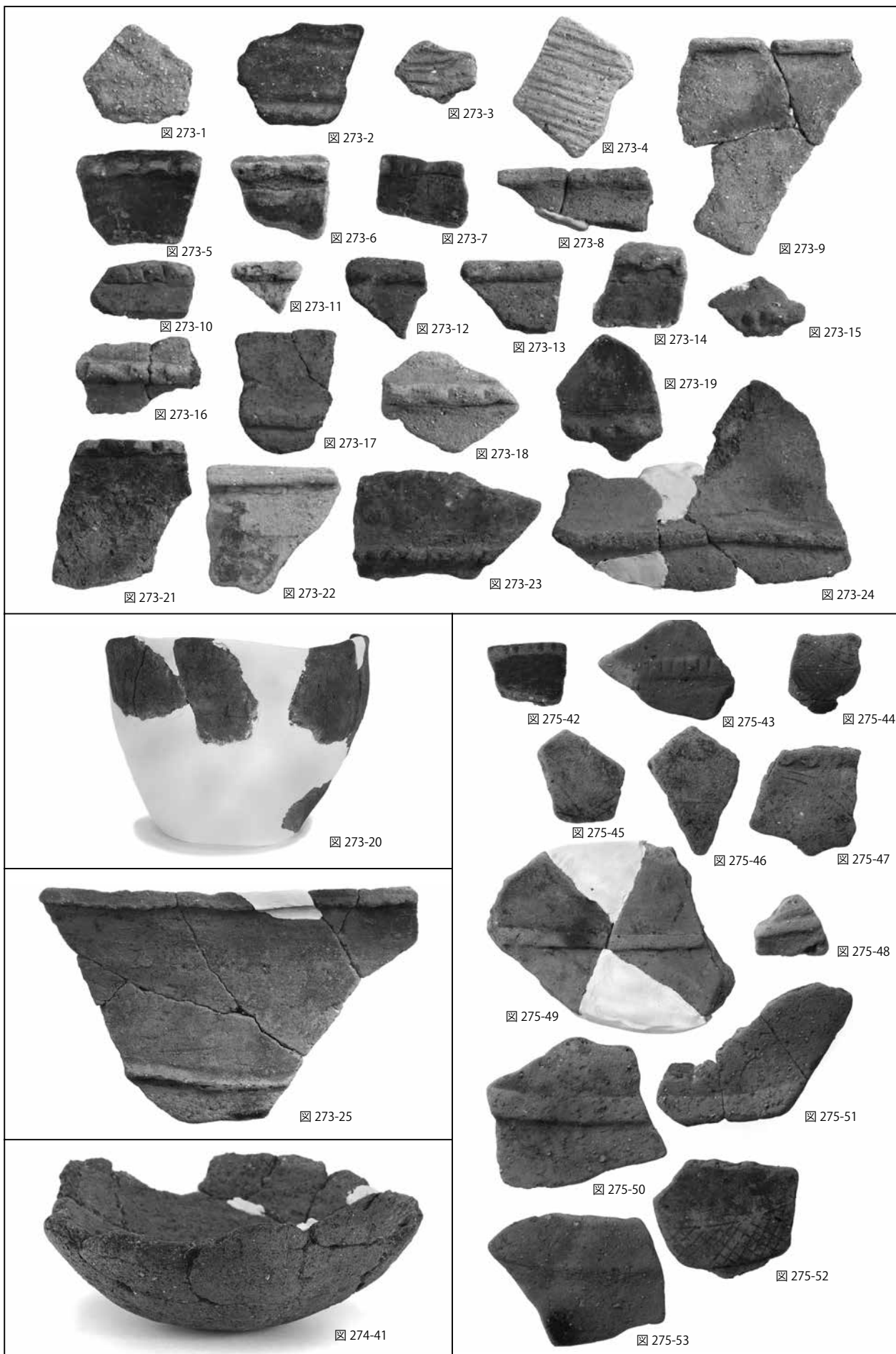


図版 117 第 8b 面関連出土土器 (3-267・268 溝土器群 3～5)

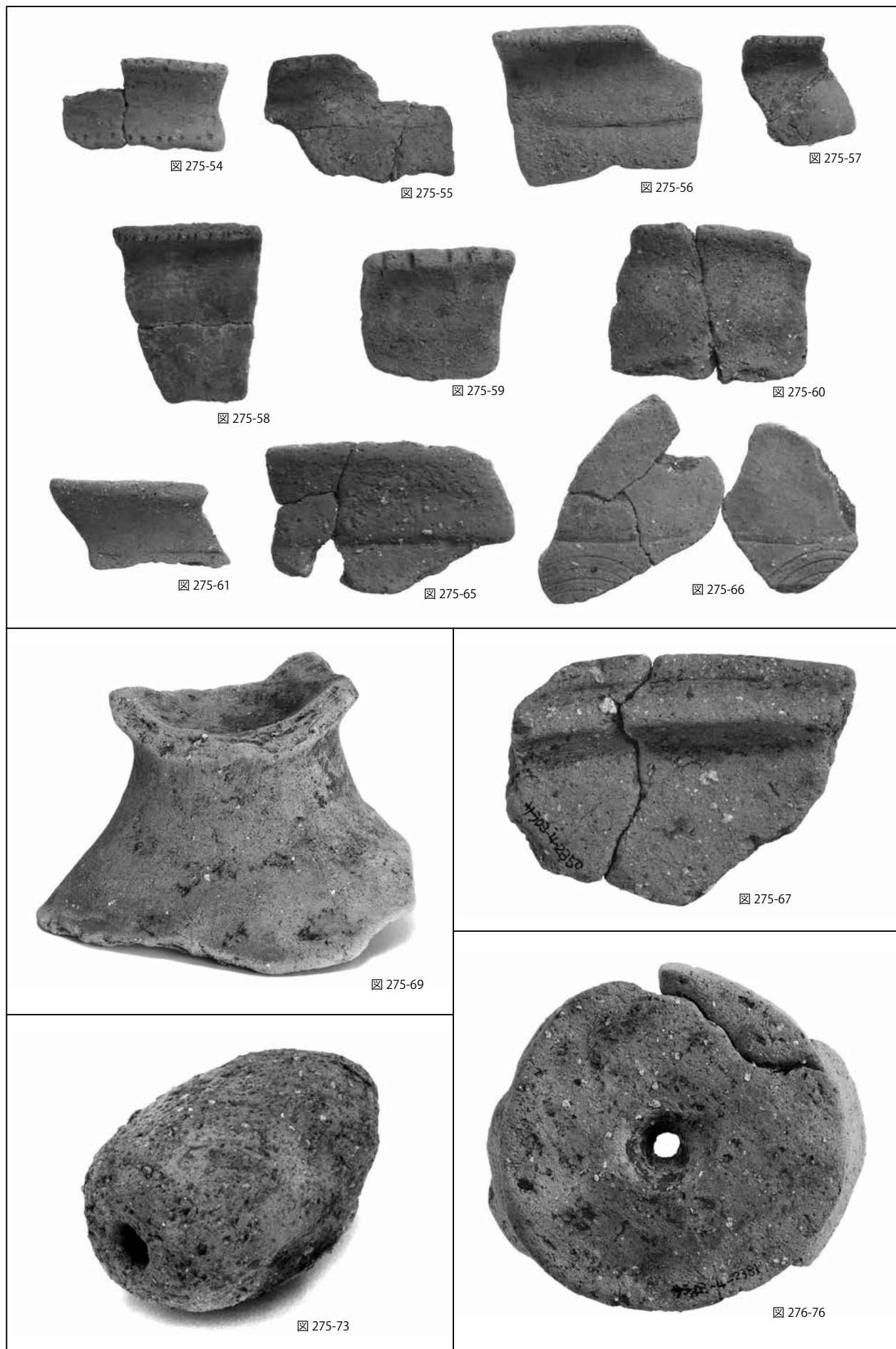




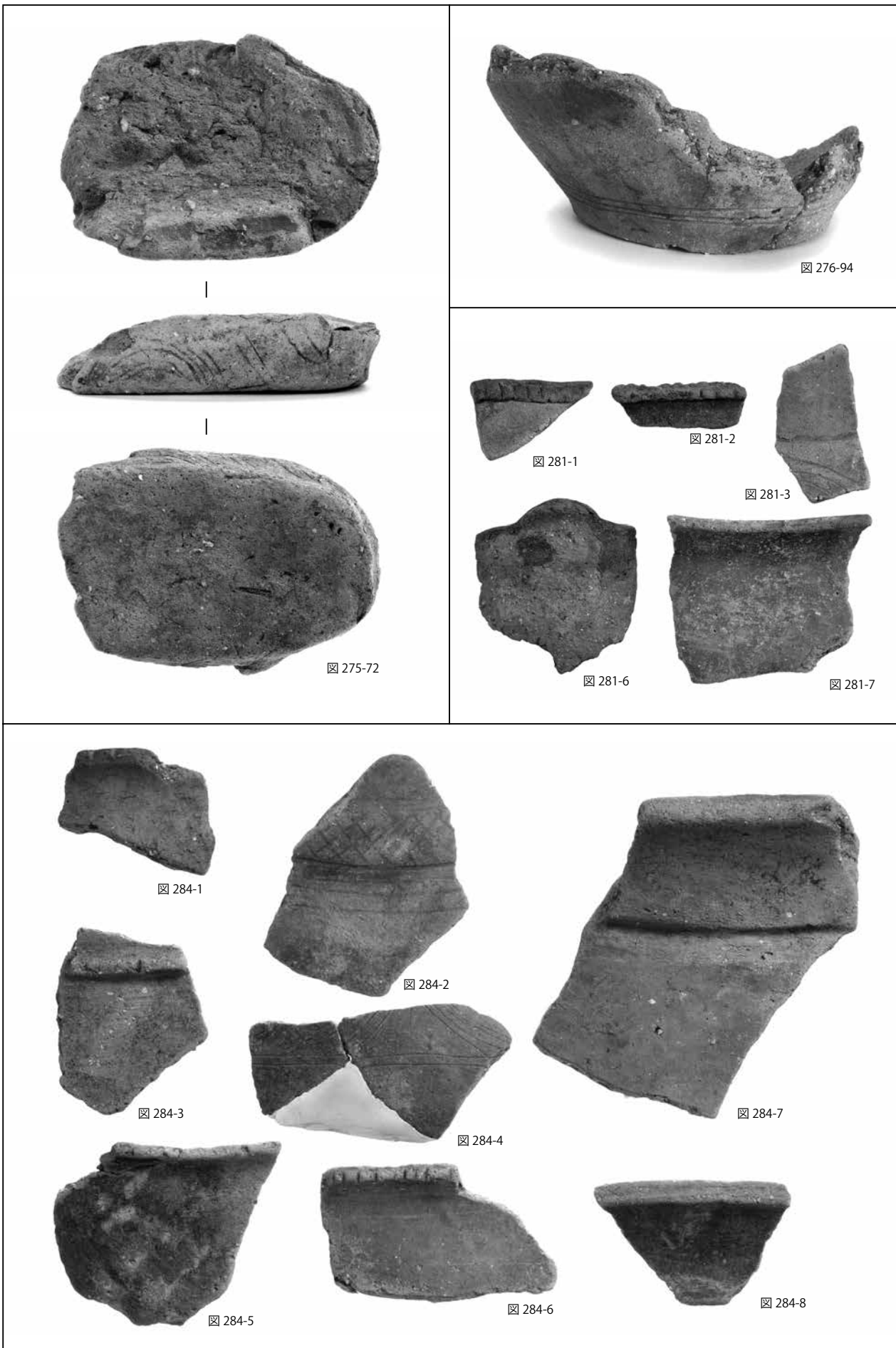
図版 119 第 8b 面関連出土土器 (3-267・268 溝)



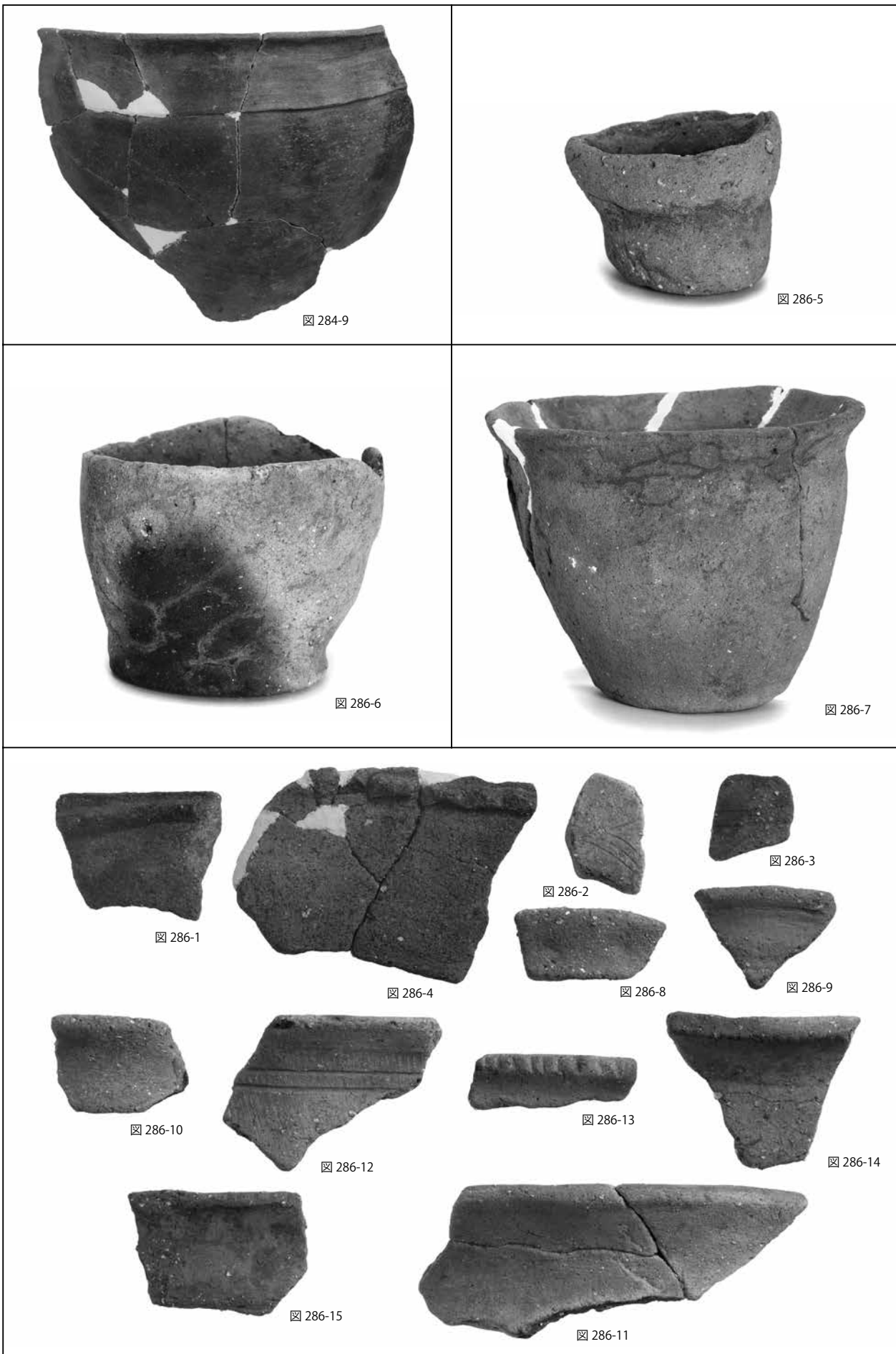
図版 120 第 8b 面関連出土土器 (3-267・268 溝)



図版 121 第 8b 面関連出土土器 (3-267・268 溝、3-286 土坑、5-991 溝)

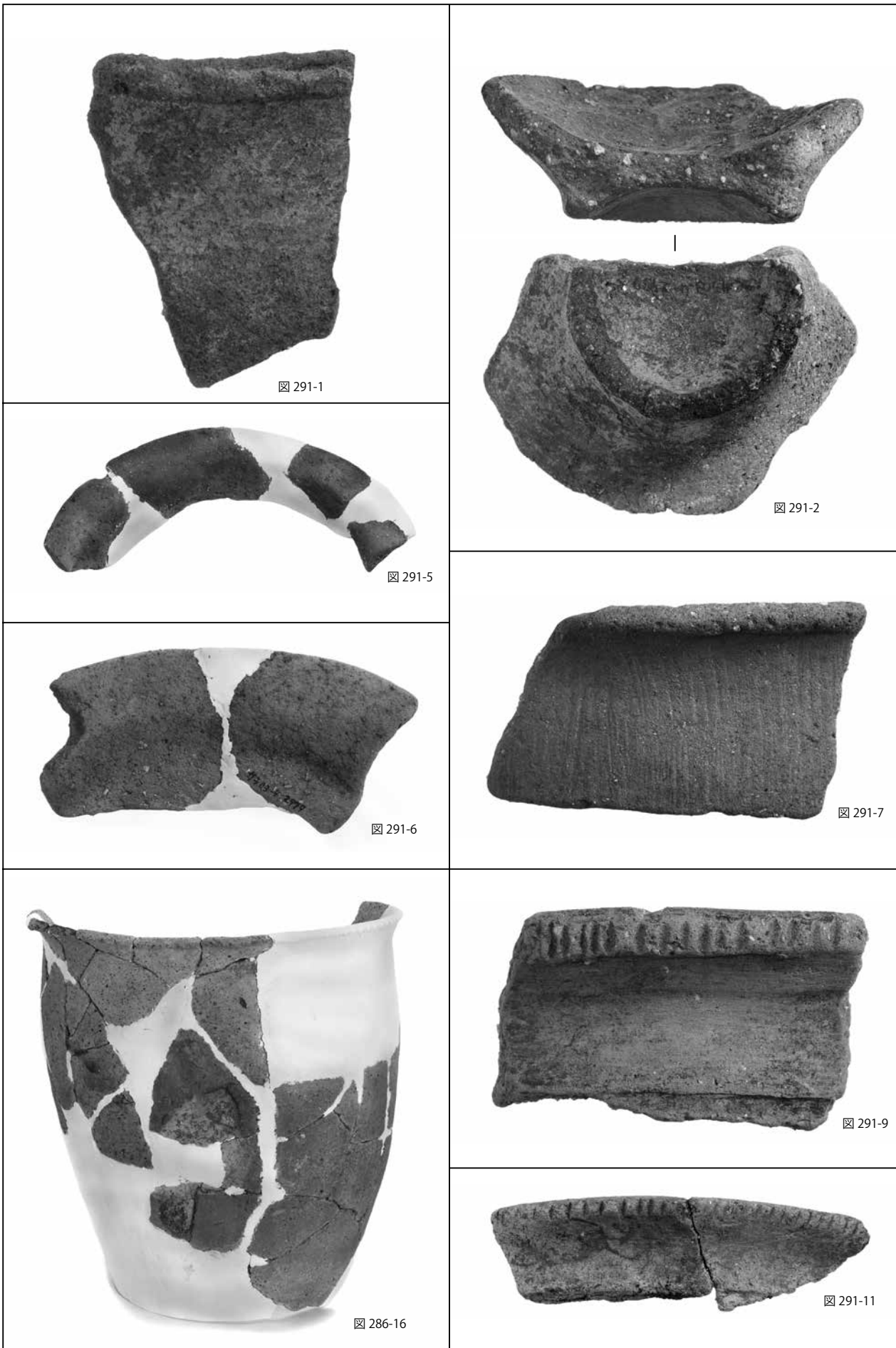


図版 122 第 8b 面関連出土土器 (5-991 溝、6-123 溝)

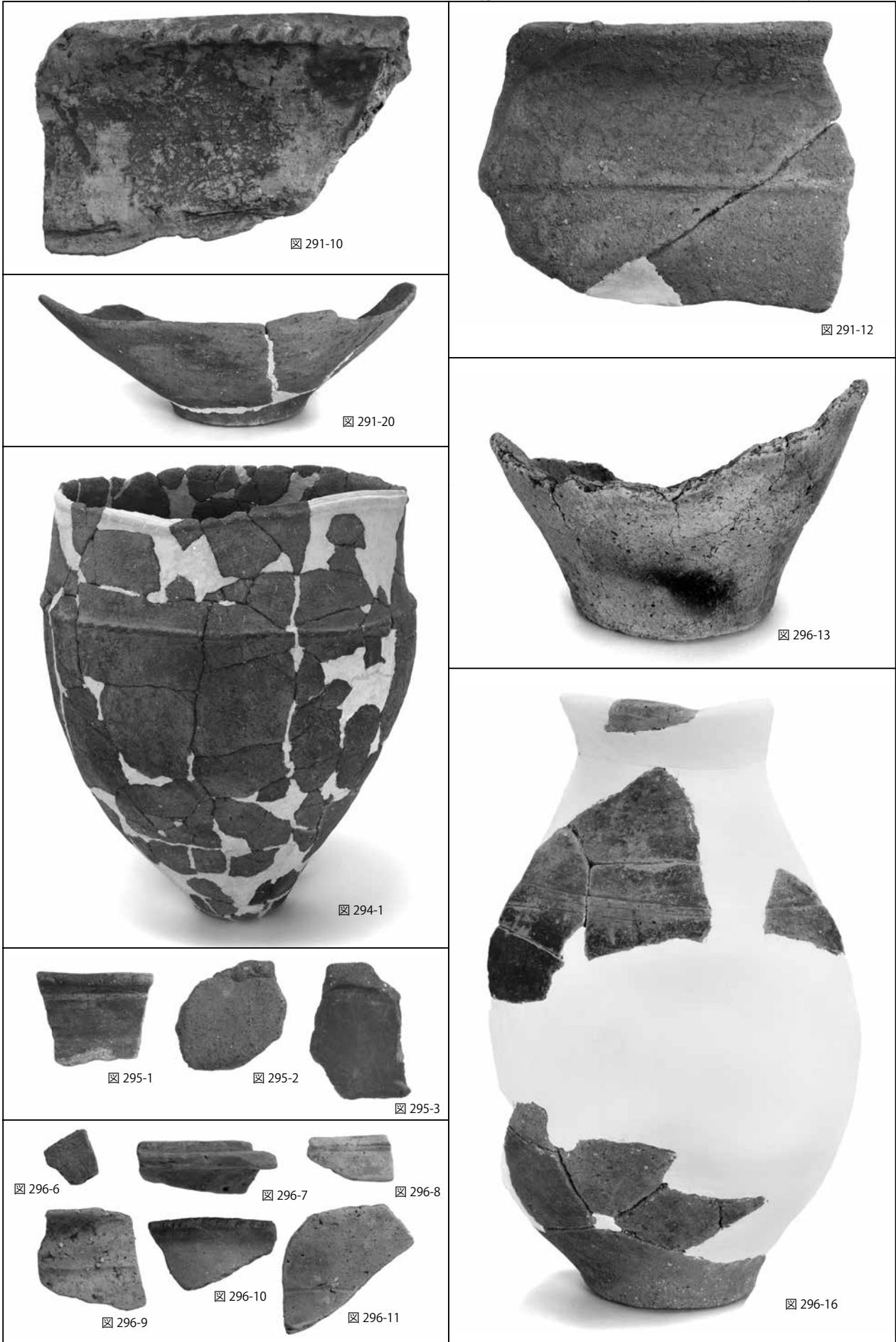




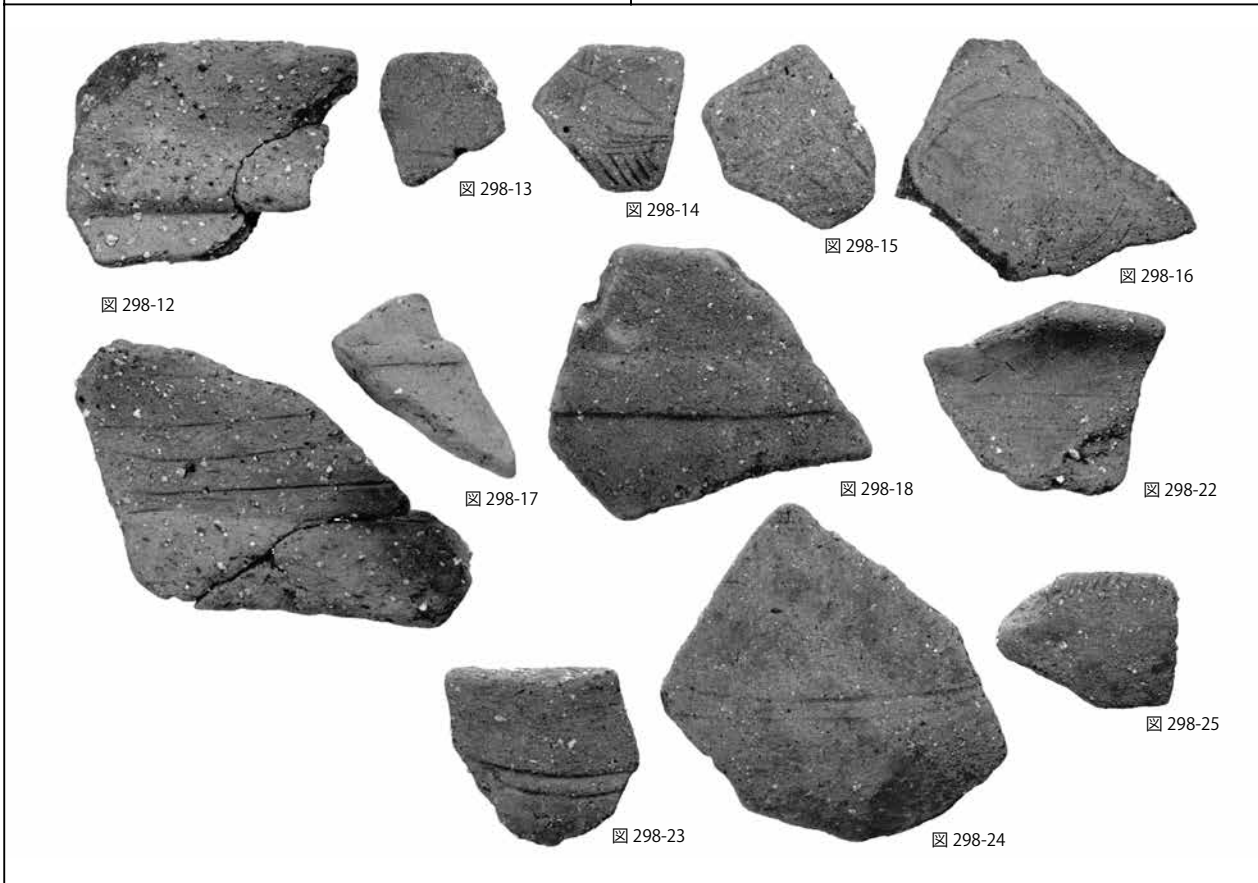
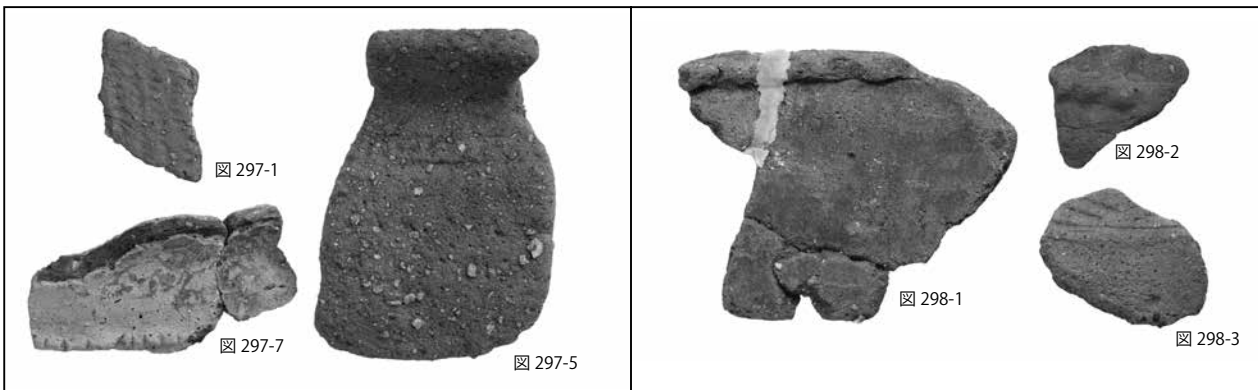
図版 123 第 8b 面関連出土土器 (6-123 溝、6-143、6-152、6-157 土坑)



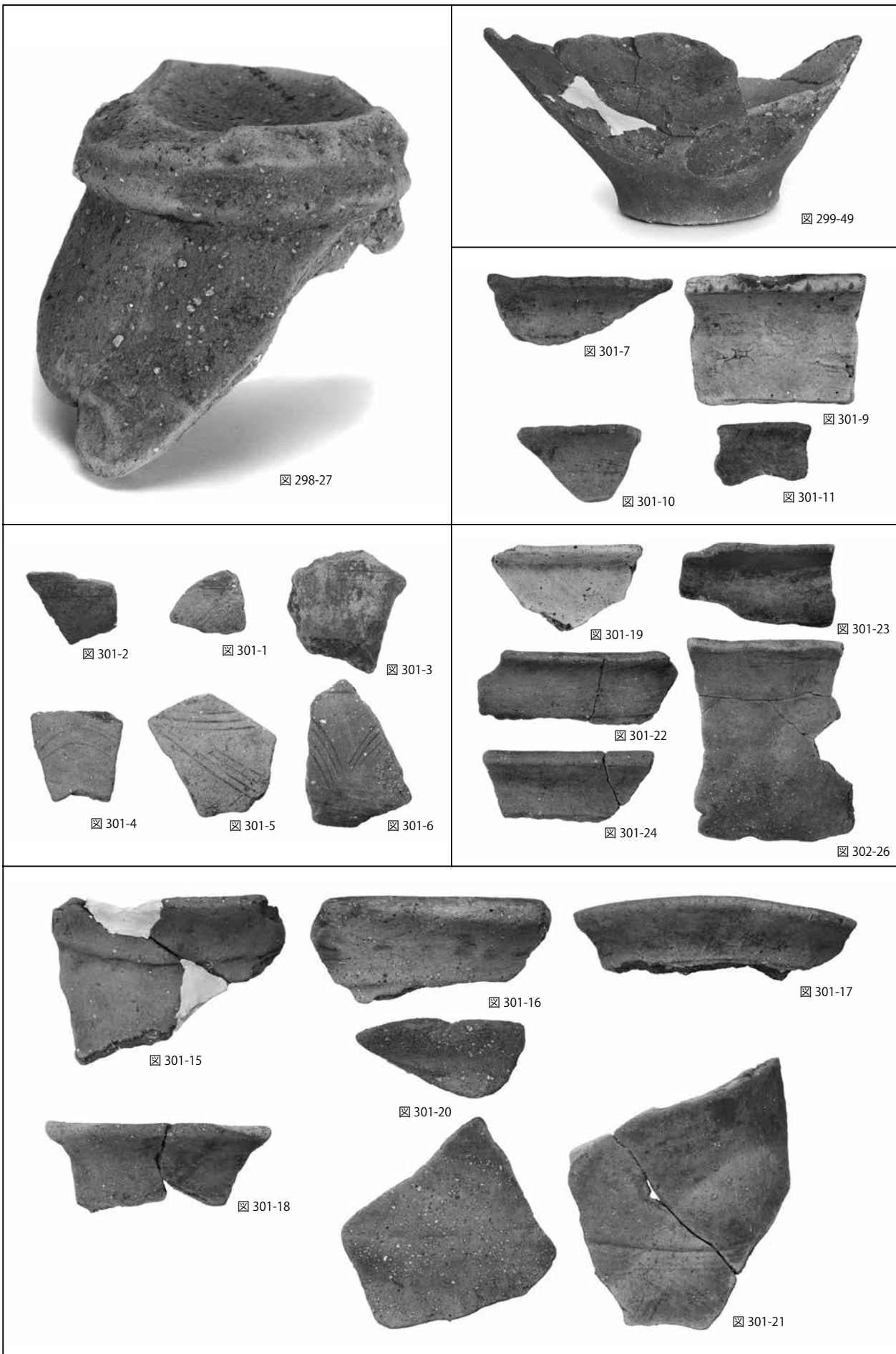
図版 124 第 8b 面関連出土土器 (3-270、3-278、3-282、5-984、5-990、5-1003 土坑  
5-1005 溝、5-1016 ピット、6-122、6-157 土坑)



図版 125 第 8b 面関連出土土器 (6-125、6-178、6-179 土坑、包含層)



図版 126 第 8b 面関連出土土器 (包含層)



図版 127 第 8b 面関連出土土器 (包含層)



図 301-8

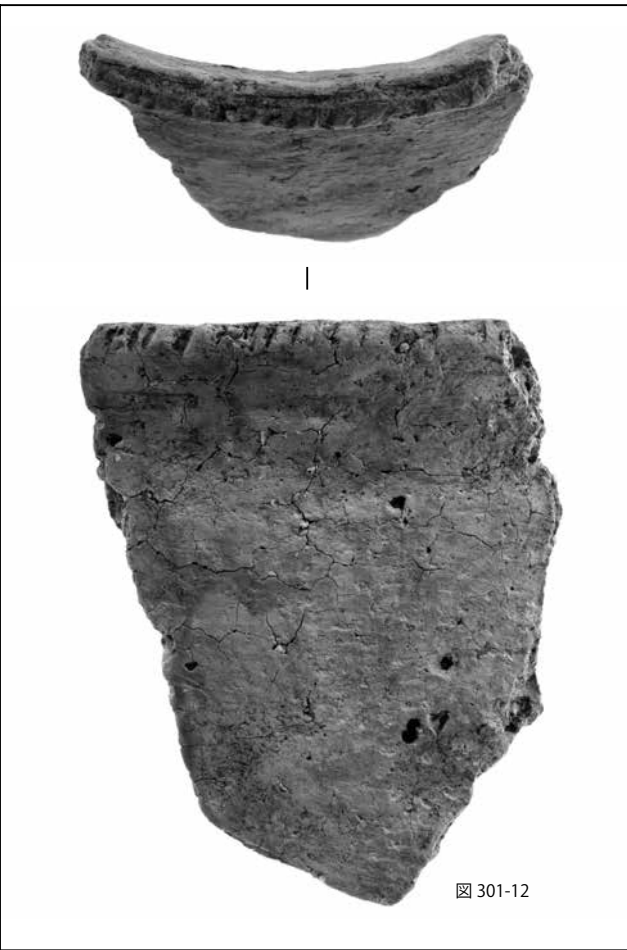


図 301-12



図 301-13



図 301-14



図 302-34

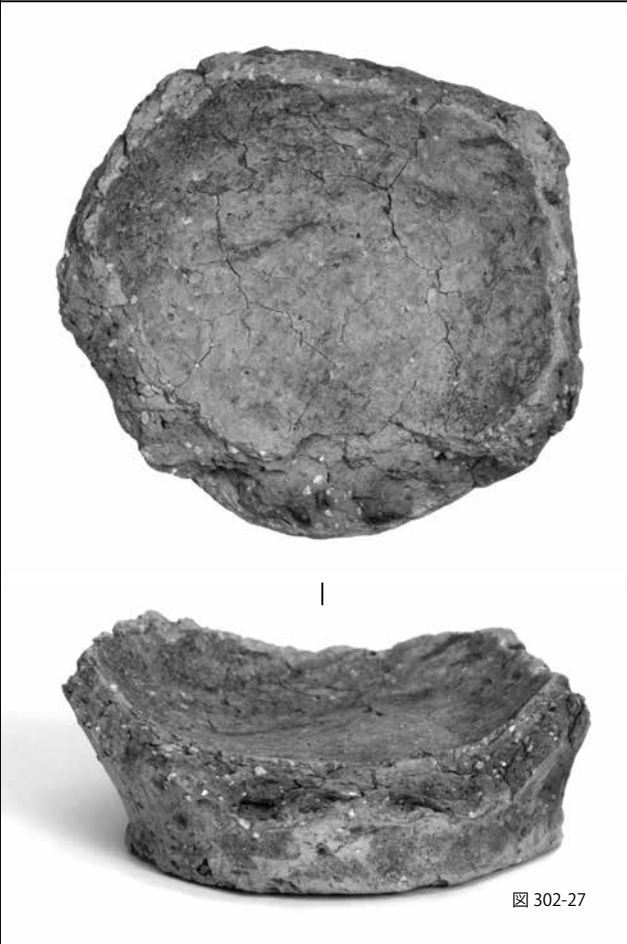
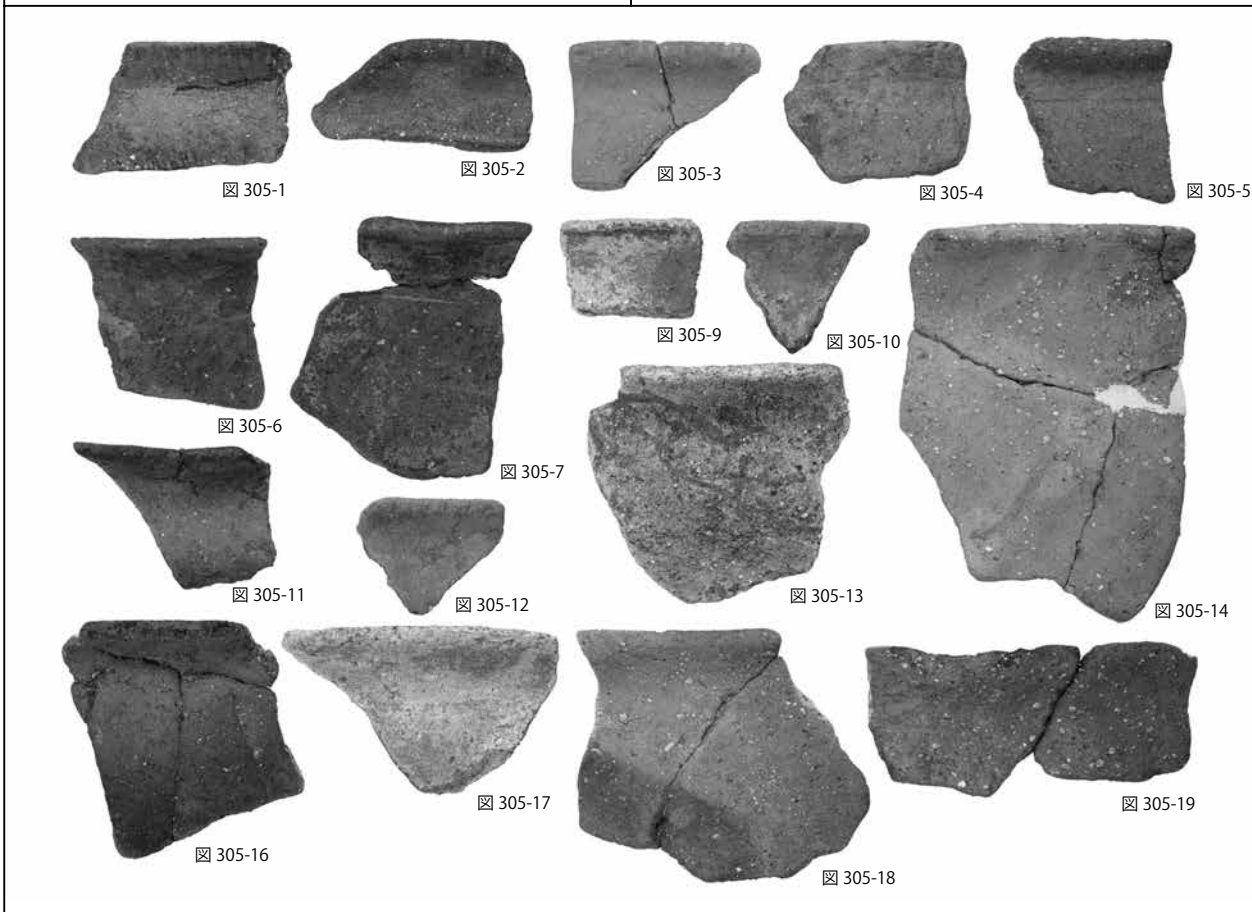
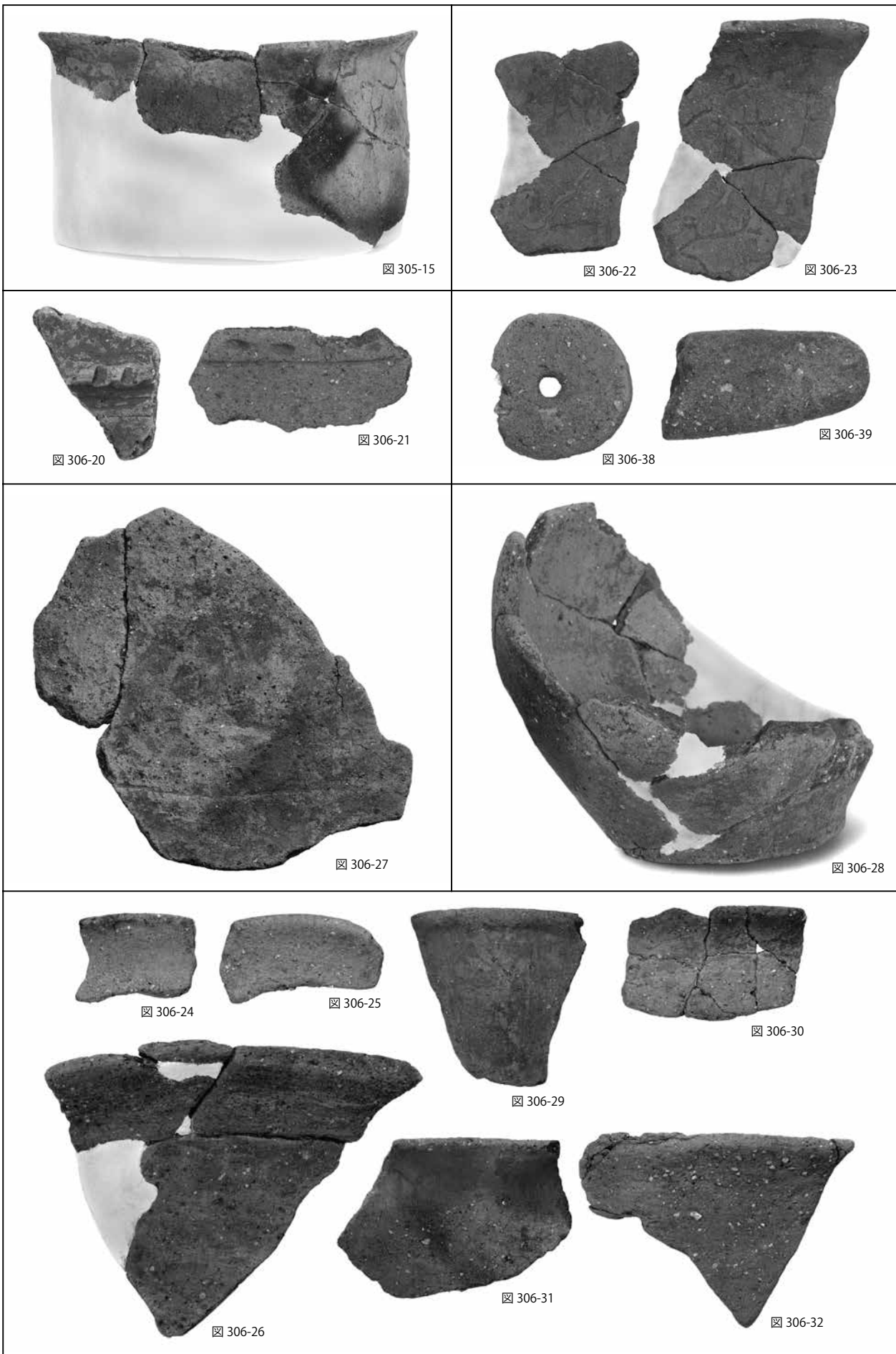


図 302-27

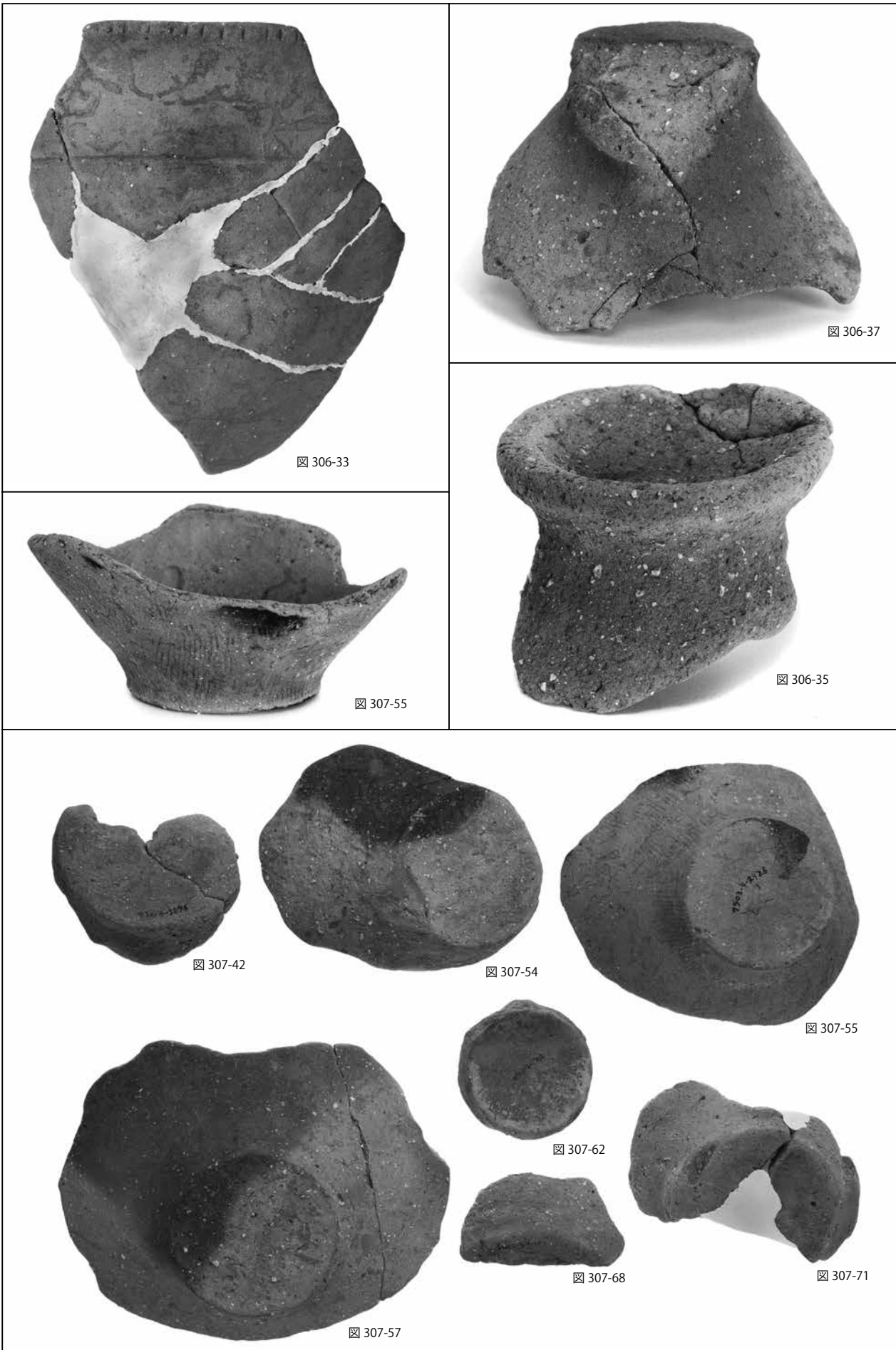
図版 128 第 8b 面関連出土土器 (包含層)



图版 129 第 8b 面関連出土土器 (包含層)

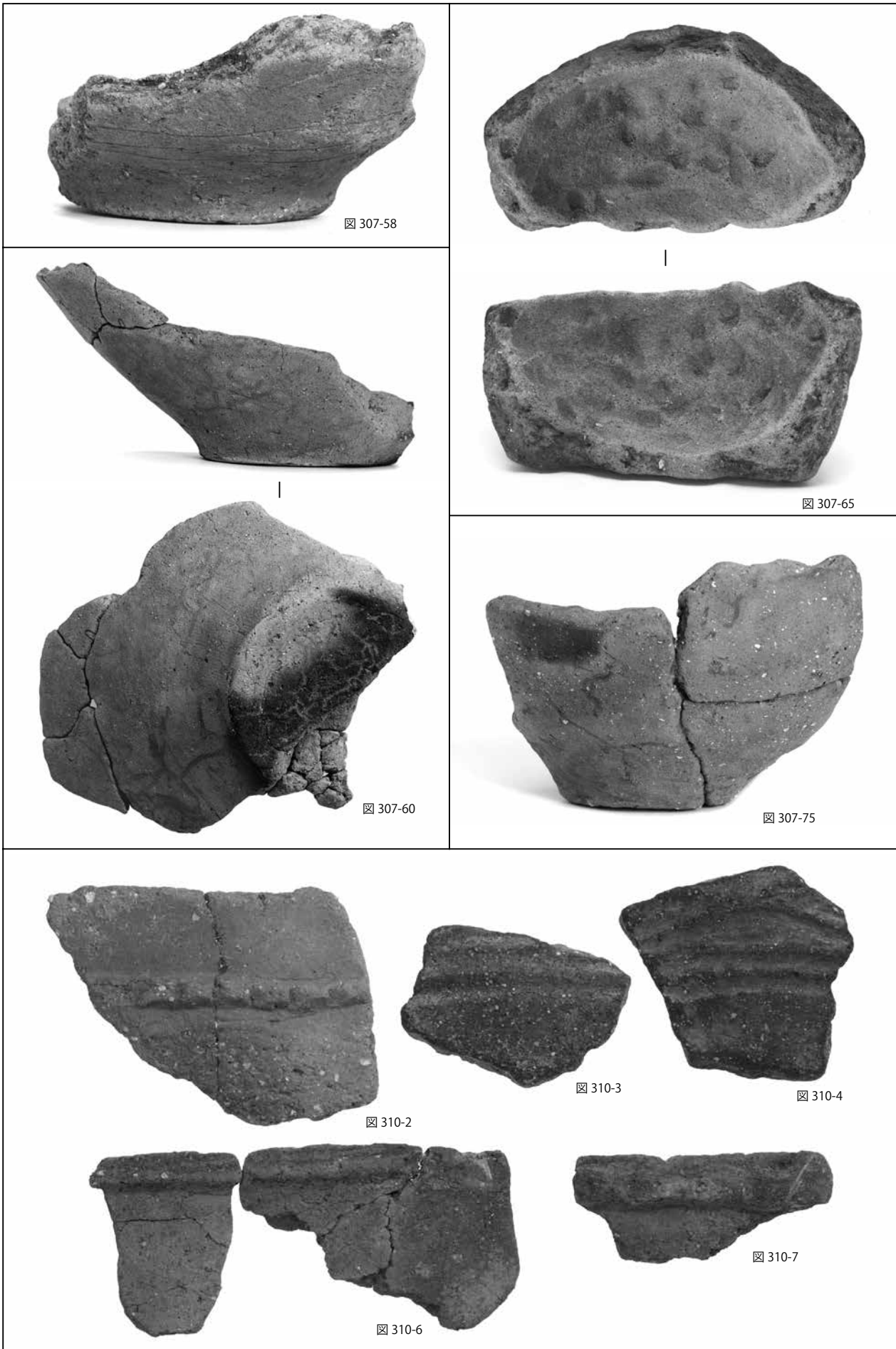


图版 130 第 8b 面関連出土土器 (包含層)

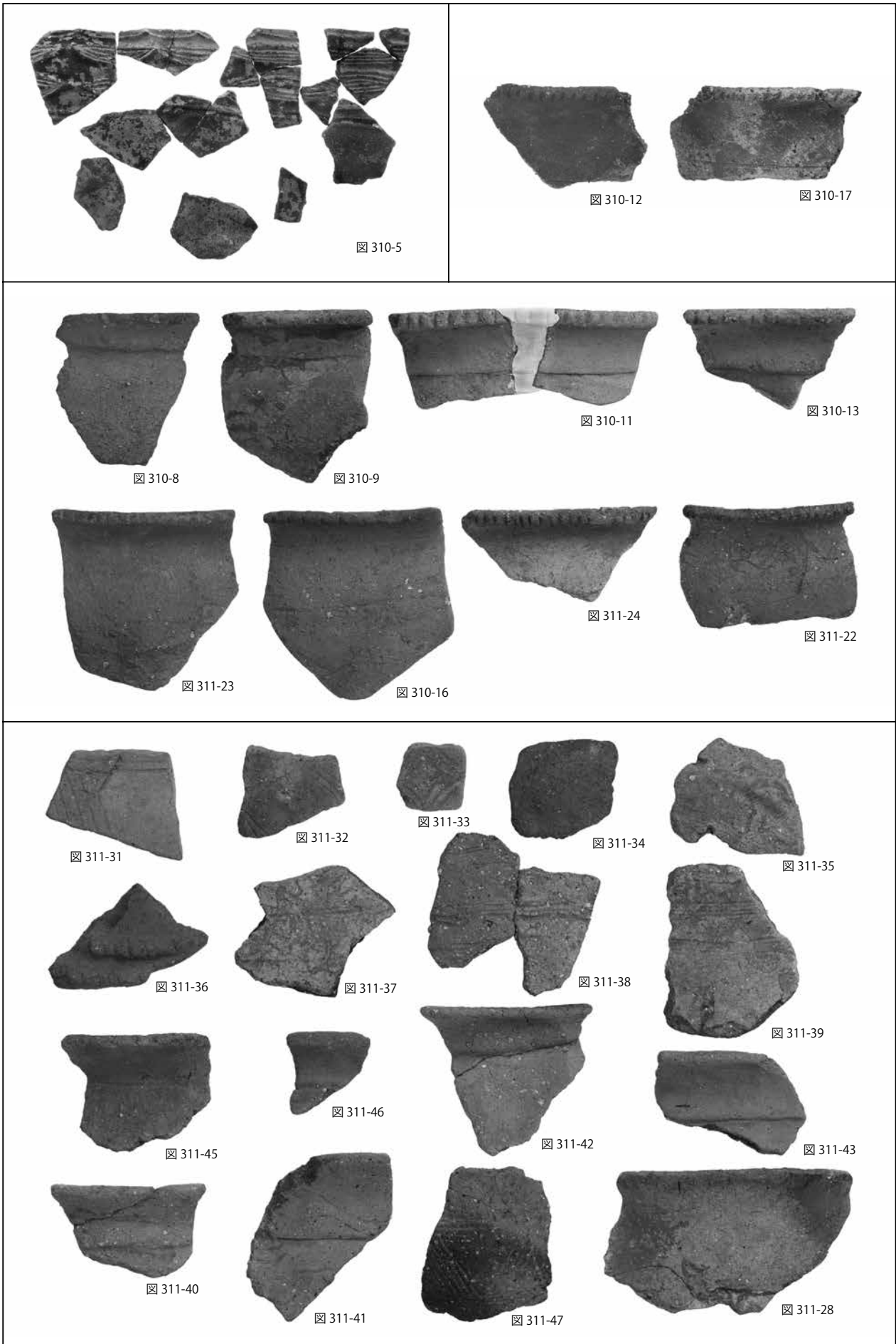




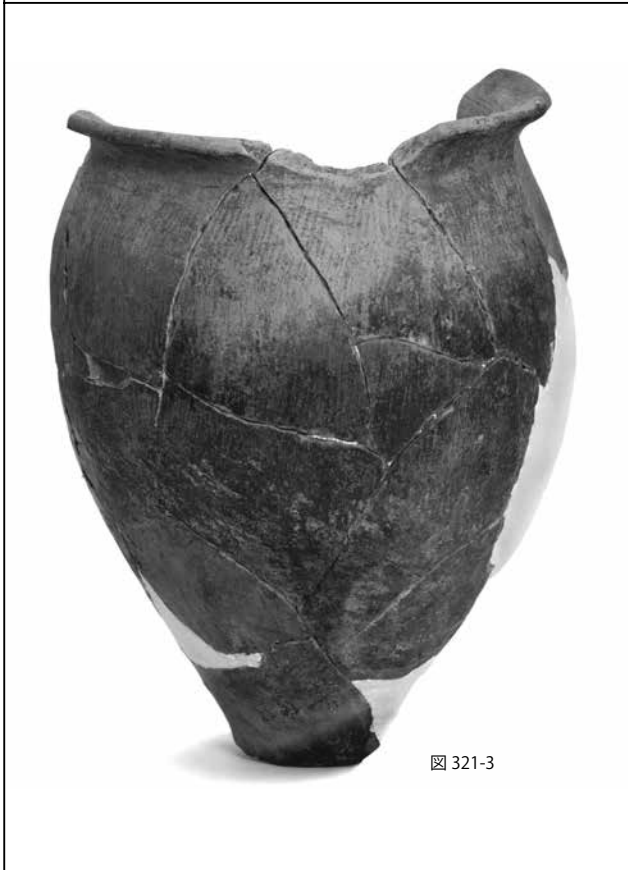
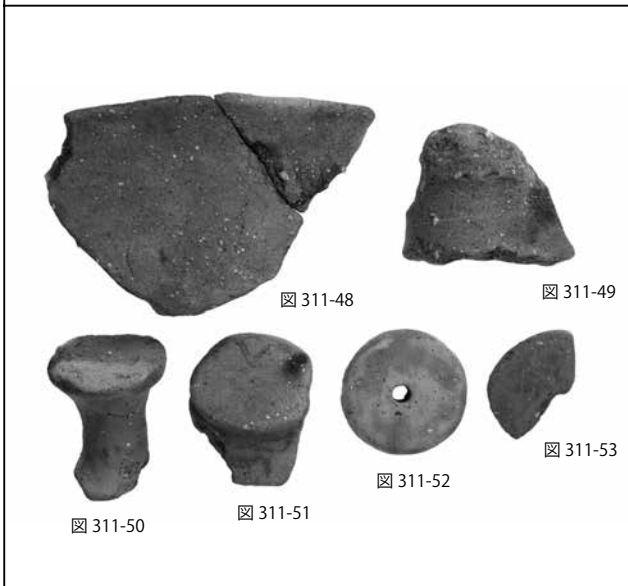
図版 131 第 8b 面関連出土土器 (包含層)



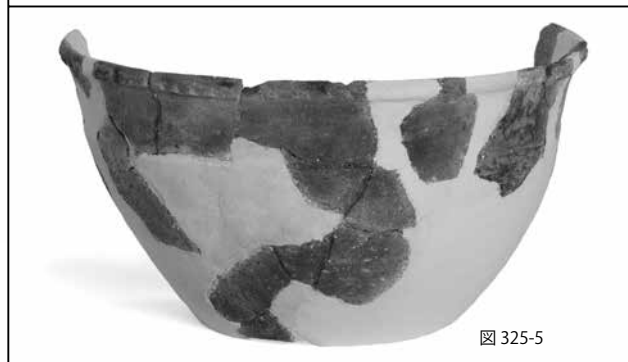
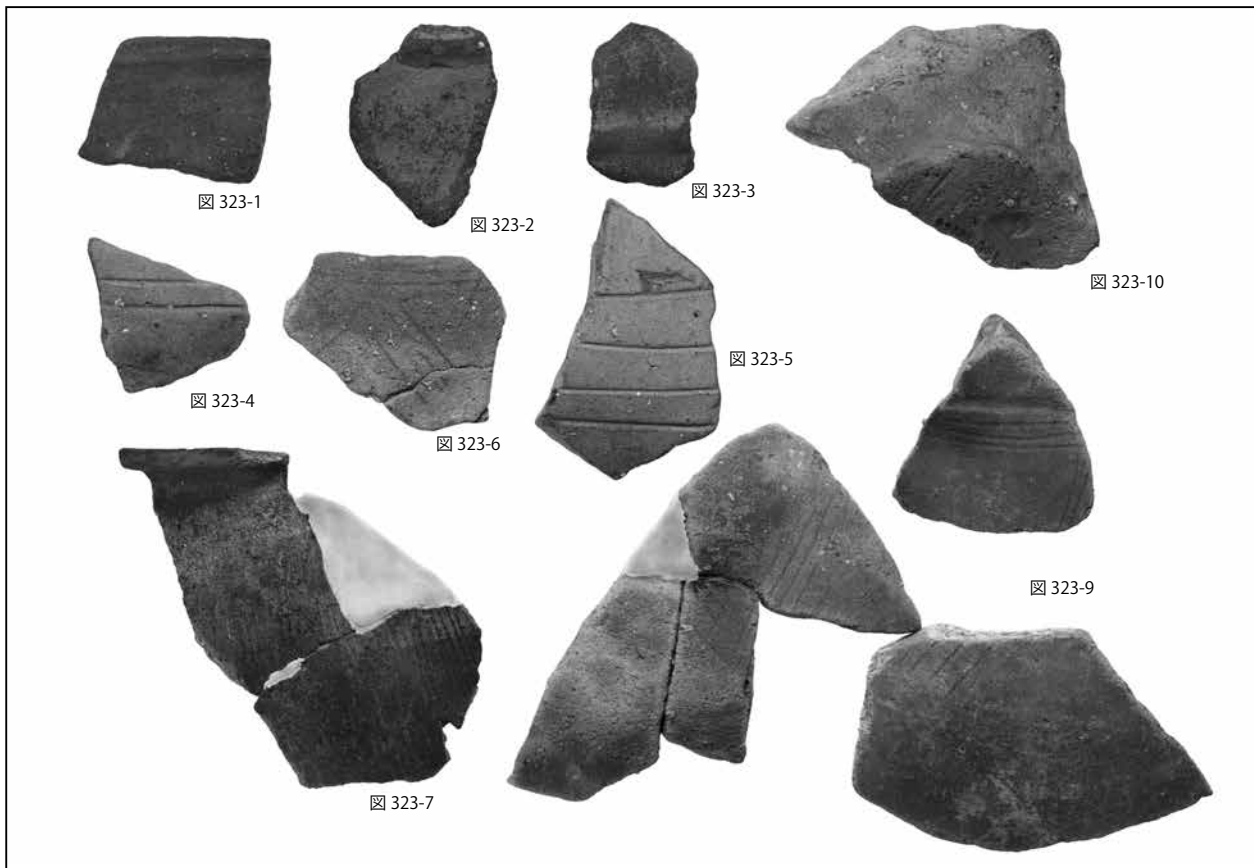
图版 132 第 8b 面関連出土土器 (包含層)



图版 133 第 8b 面関連出土土器 (包含層、4-108、5-1013 土坑)



図版 134 第 8b 面～第 8b-2 層以下関連出土土器 (包含層)



図版 135 焼成失敗品 (焼成破裂痕土器)

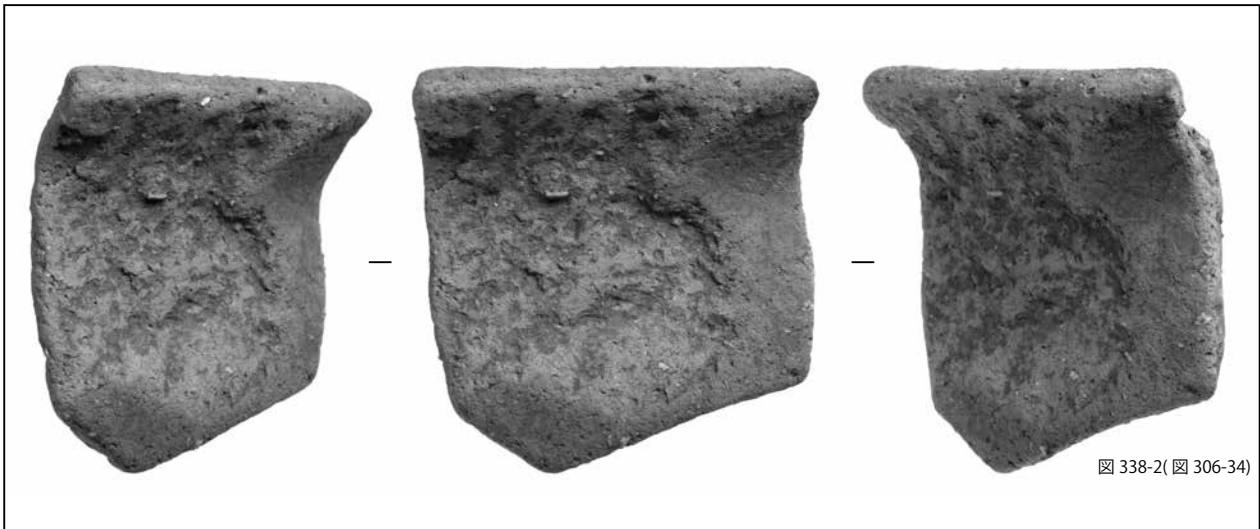


図 338-2( 図 306-34)

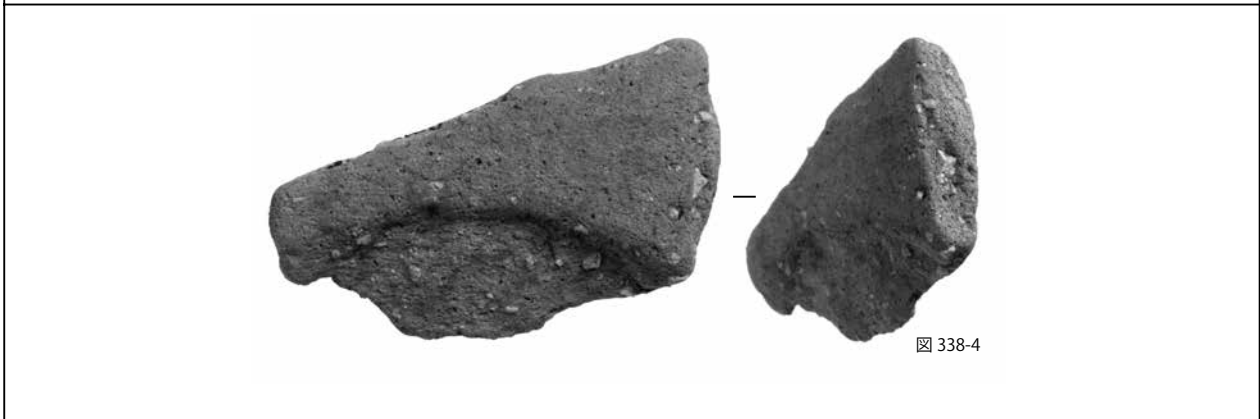


図 338-4

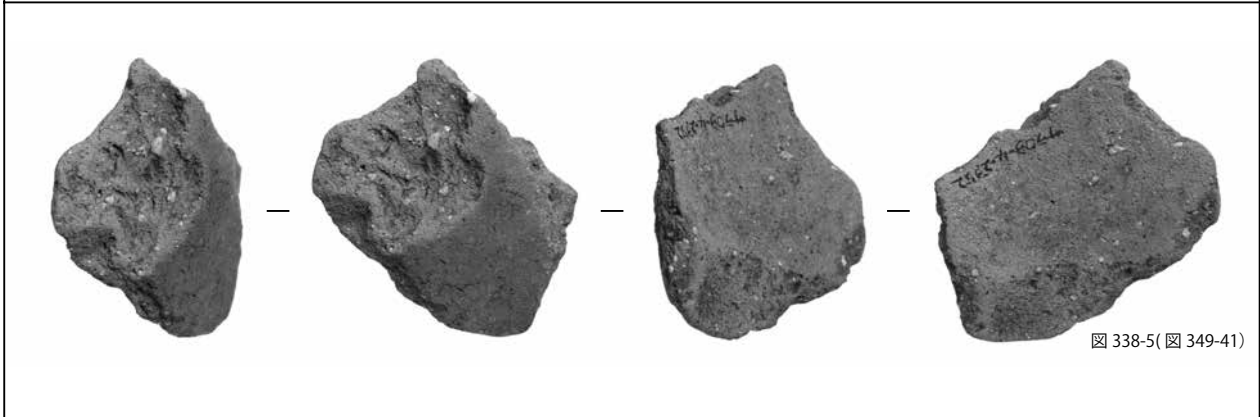


図 338-5( 図 349-41)

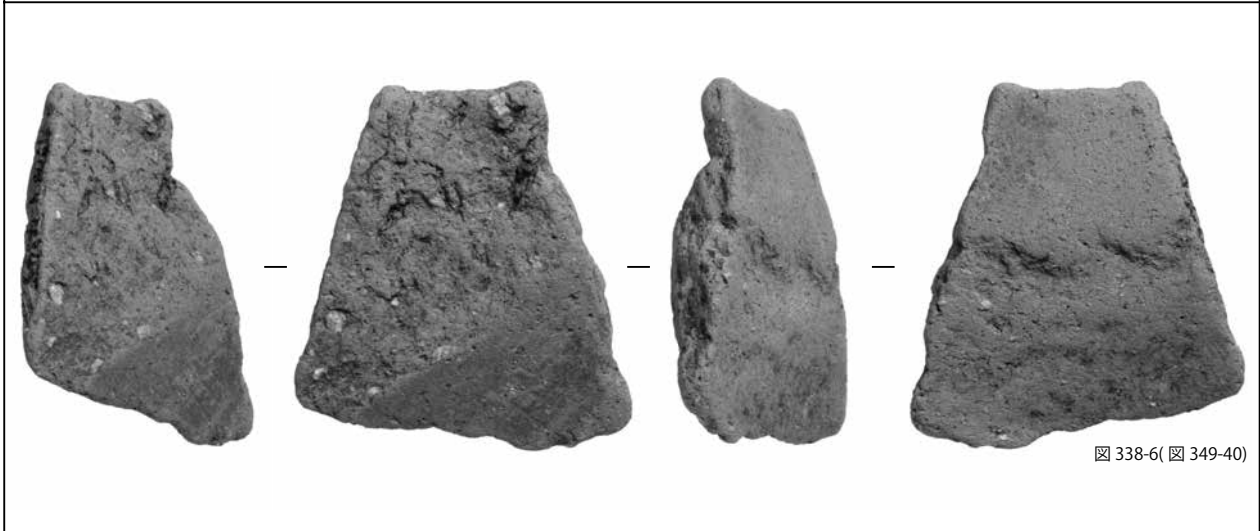
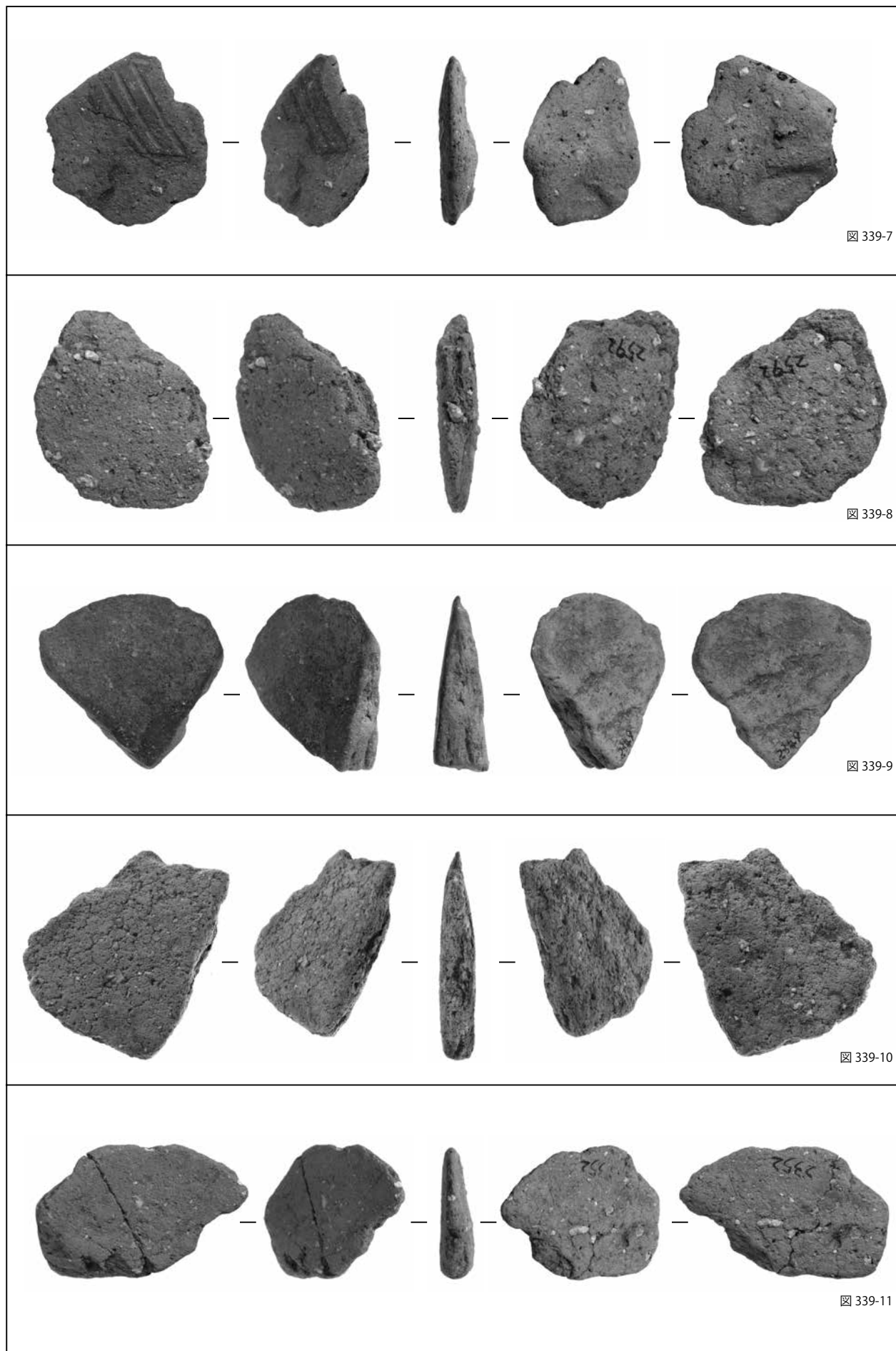


図 338-6( 図 349-40)

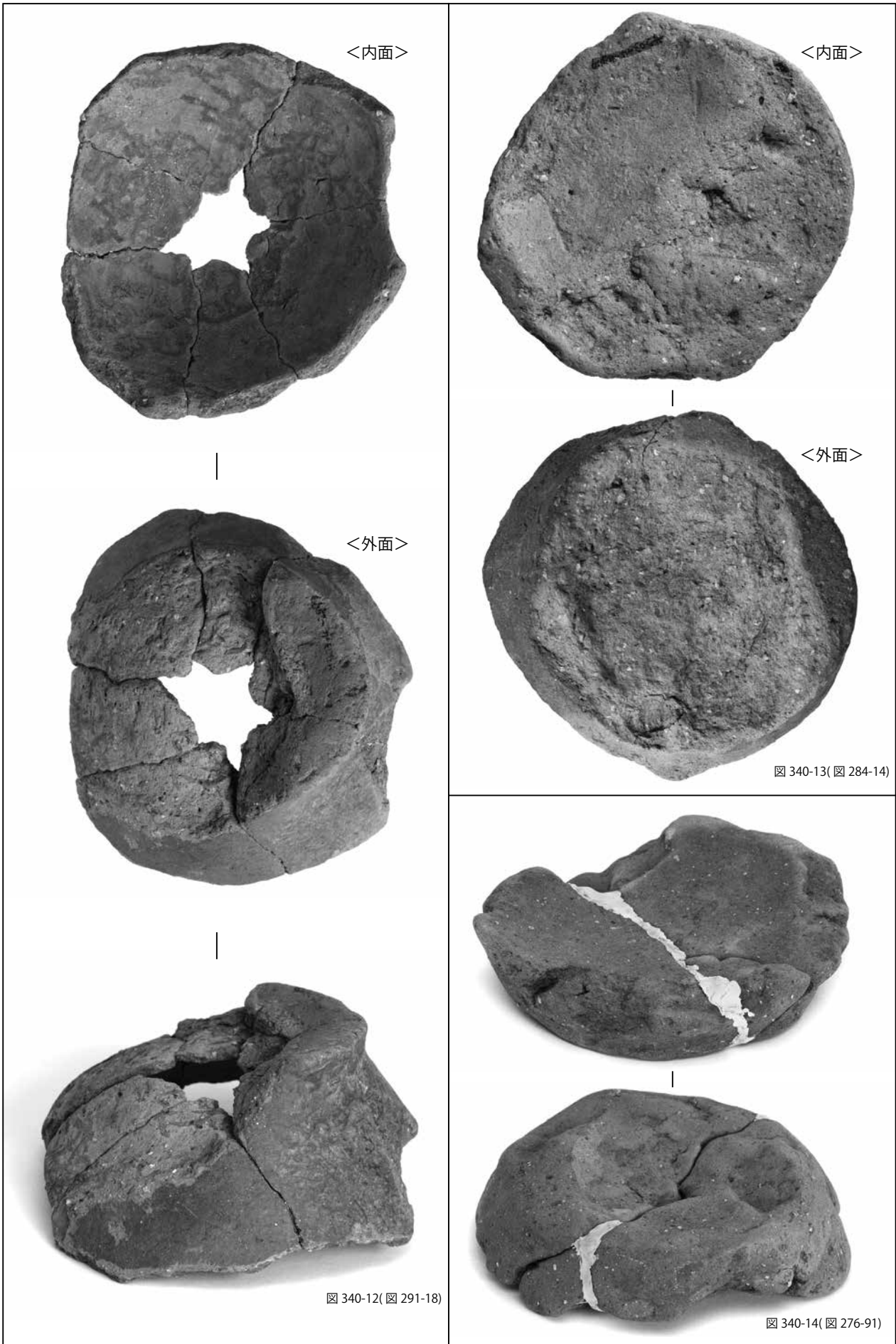
※図 338-2・4 (外面)、 5・6 (左：外面、右：内面)

图版 136 烧成失败品 (烧成破裂土器片)



※ (左:外面、右:内面)

图版 137 烧成失败品 (烧成不完全品)



图版 138 烧成失败品 (烧成不完全品、烧成时破损)



图 340-15(图 350-54)

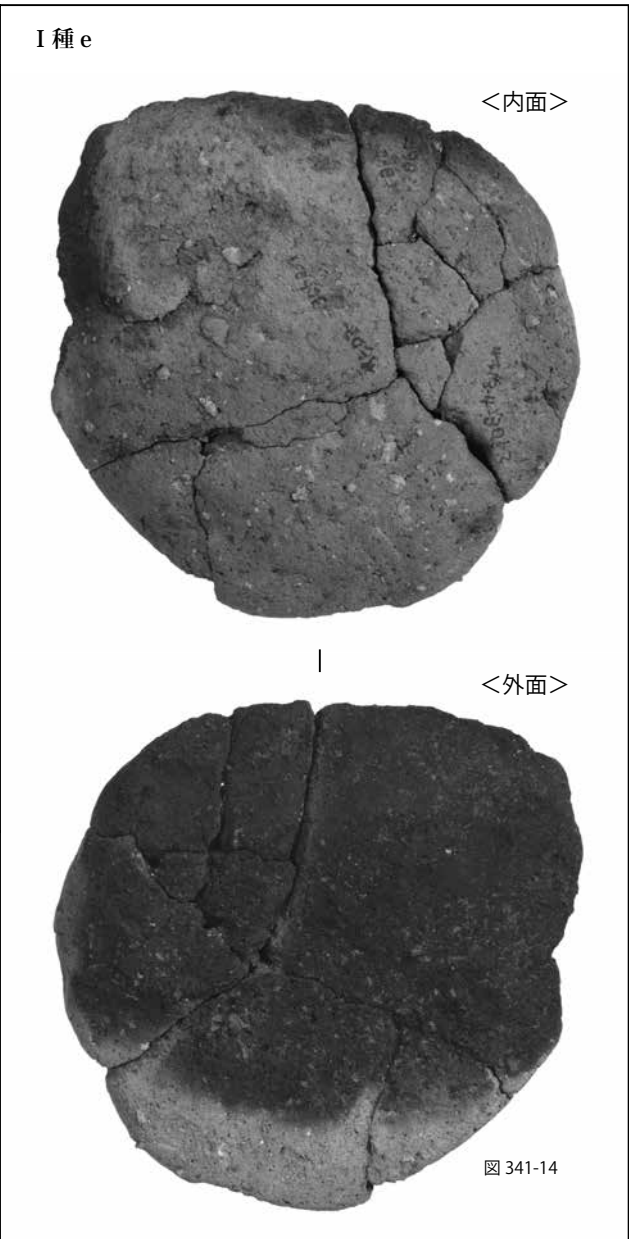


图 341-14

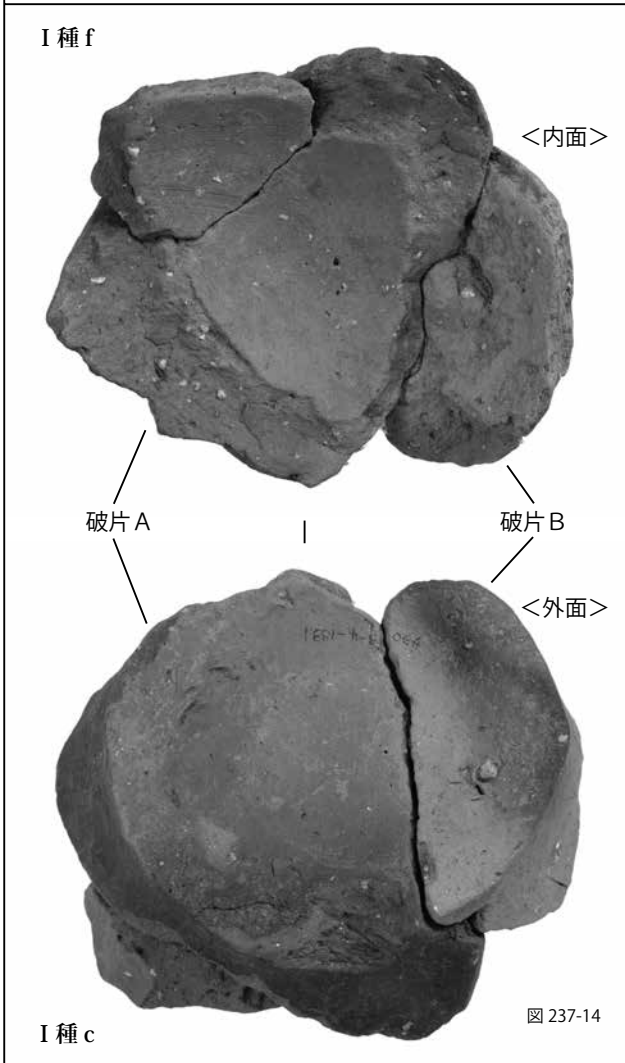


图 237-14

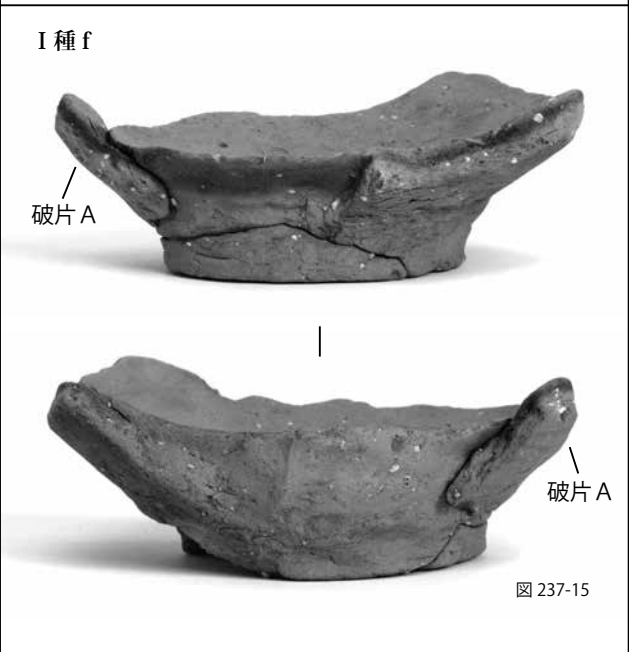


图 237-15



図版 139 接合部剥離資料

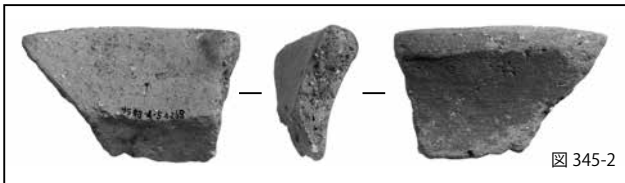


図 345-2



図 345-3

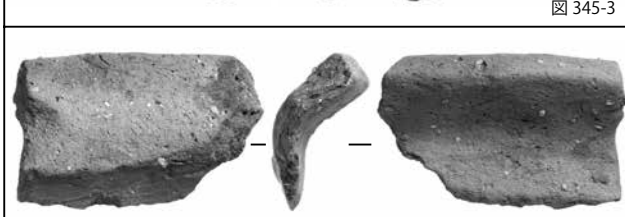


図 345-4

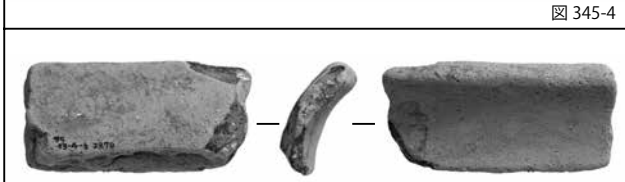


図 345-5

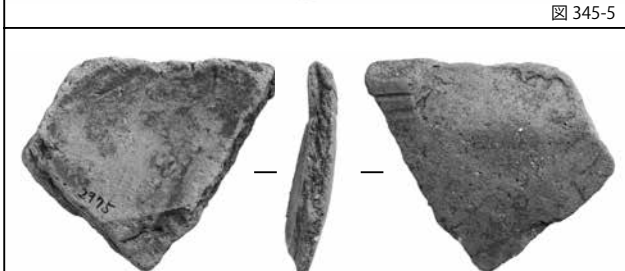


図 347-6

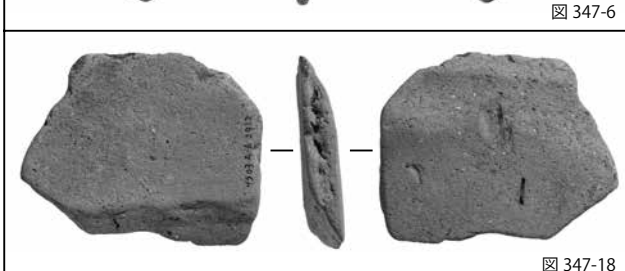


図 347-18



図 347-20

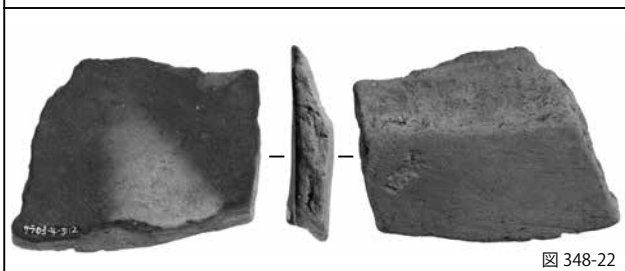


図 348-22

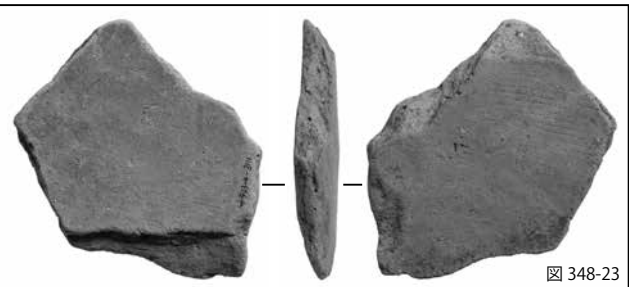


図 348-23

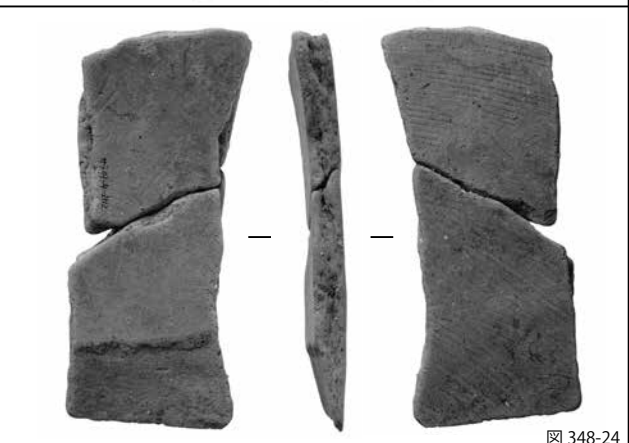


図 348-24



図 348-25

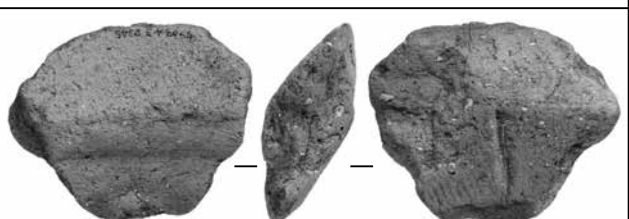


図 348-26



図 348-27

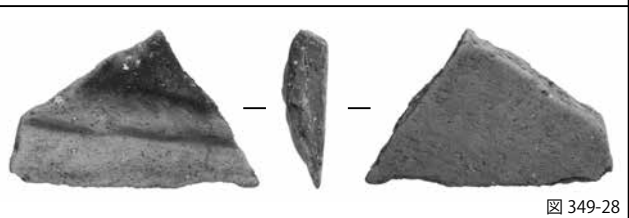


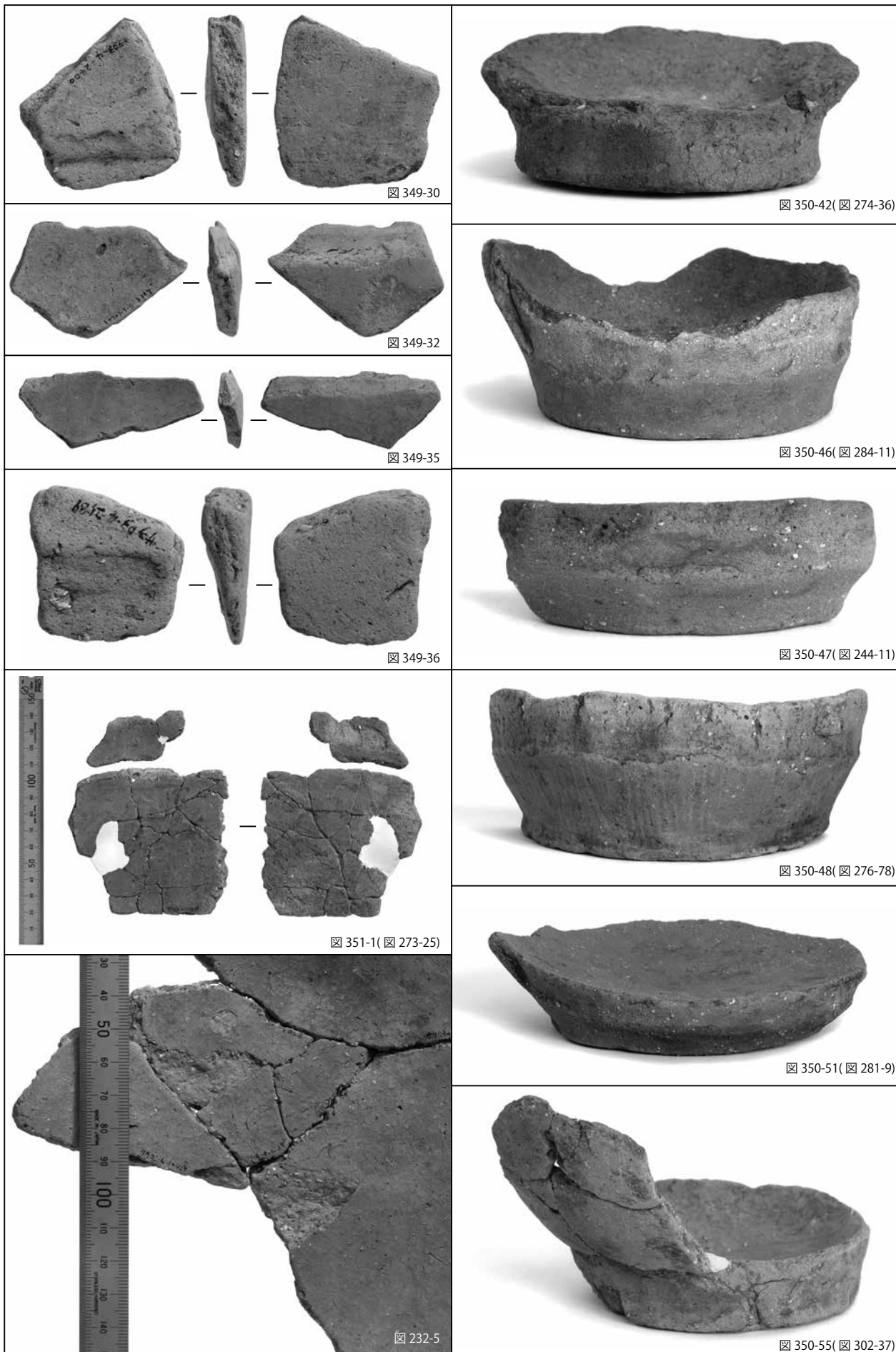
図 349-28



図 349-29

※ (左：内面、右：外面)

図版 140 接合部剥離資料



※図 349-30・32・35・36、351-1 (左：内面、右：外面)

図版 141 第 7b 面関連出土石器 (建物 17、1-59・60 溝、3-164 溝、3-203 土坑  
5-712 ヒット、5-847 土坑)



図 142-28



図 163-39



図 93-5



図 103-20



図 112-38



図 142-27

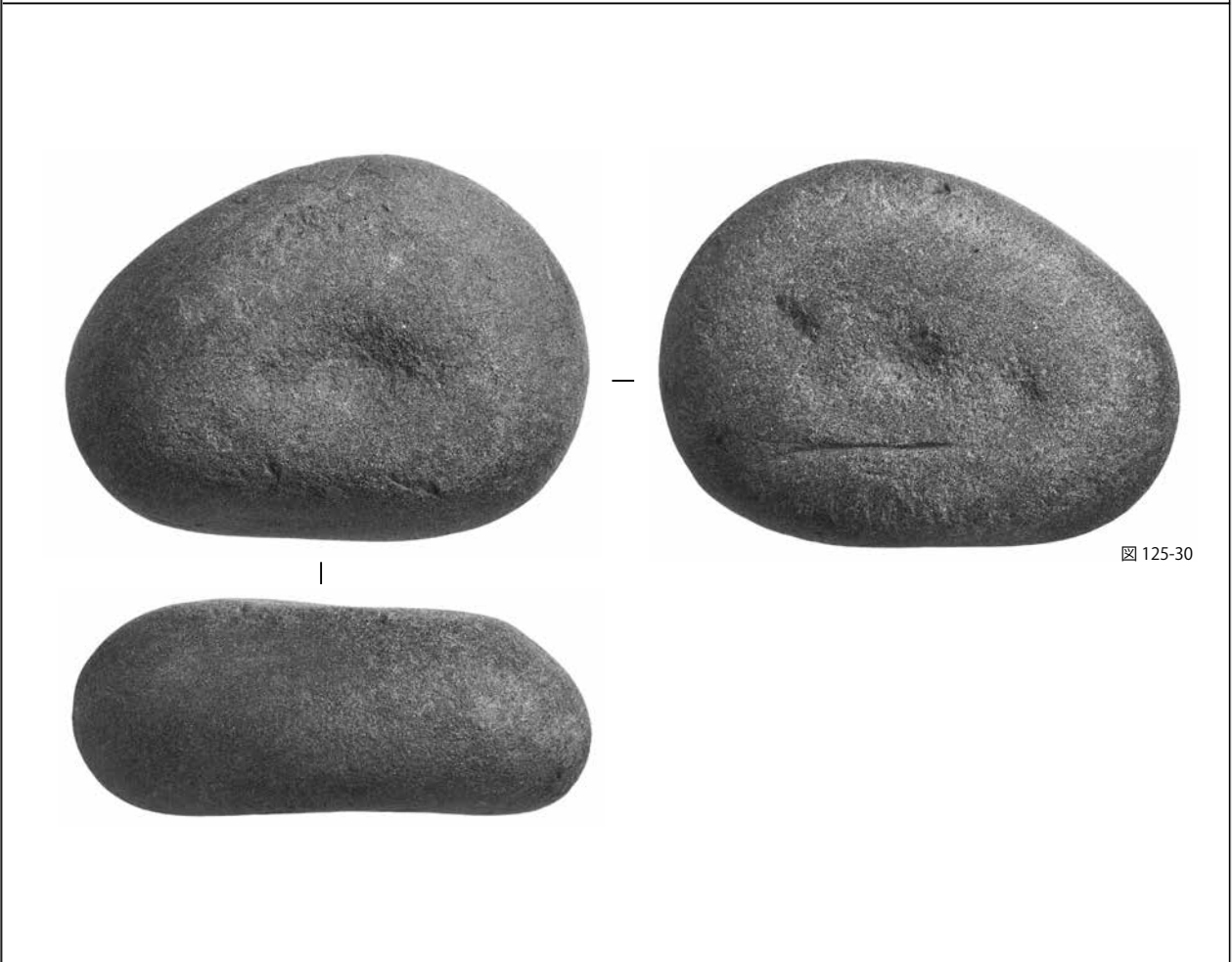


図 155-17

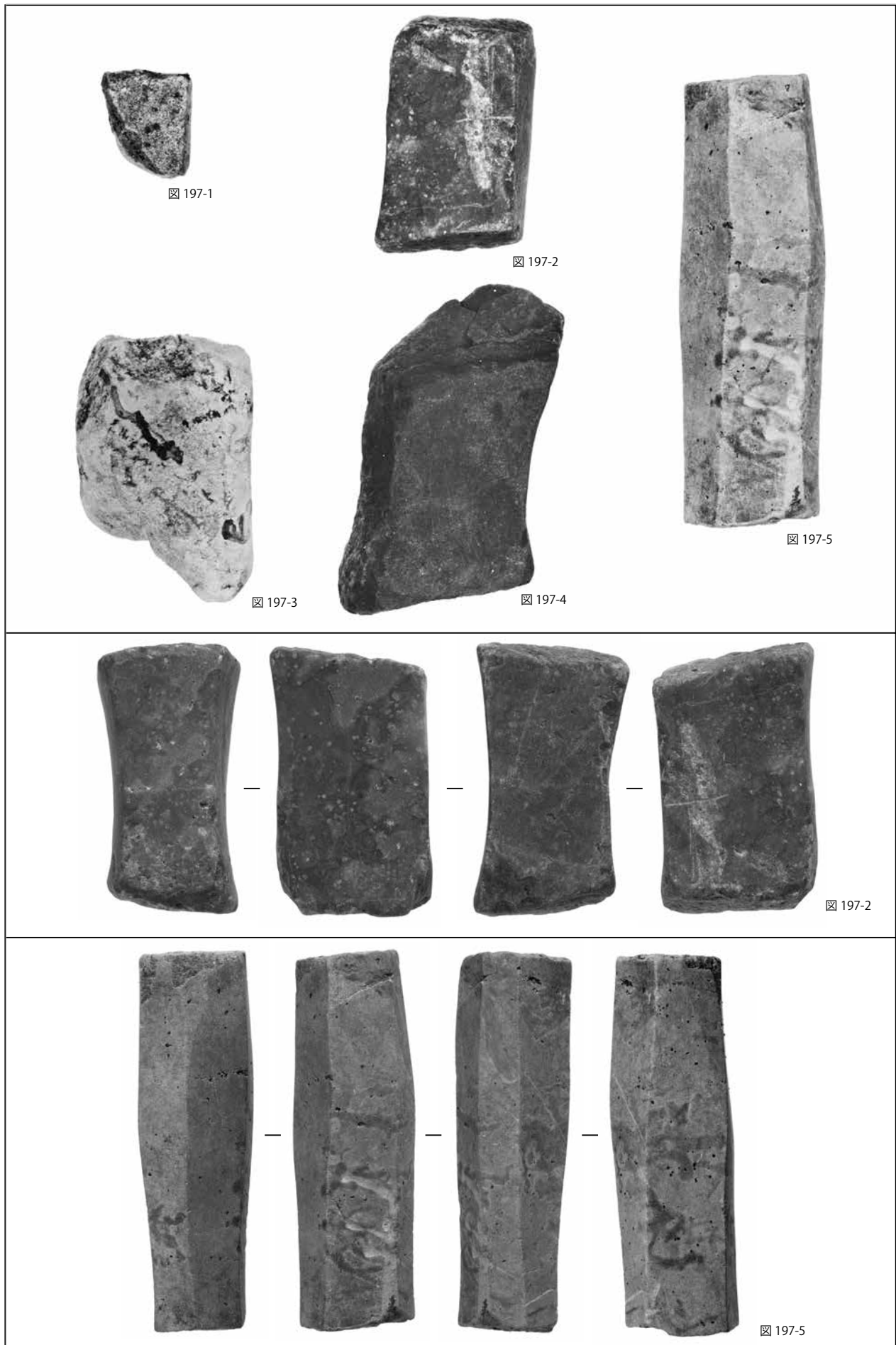


図 125-29

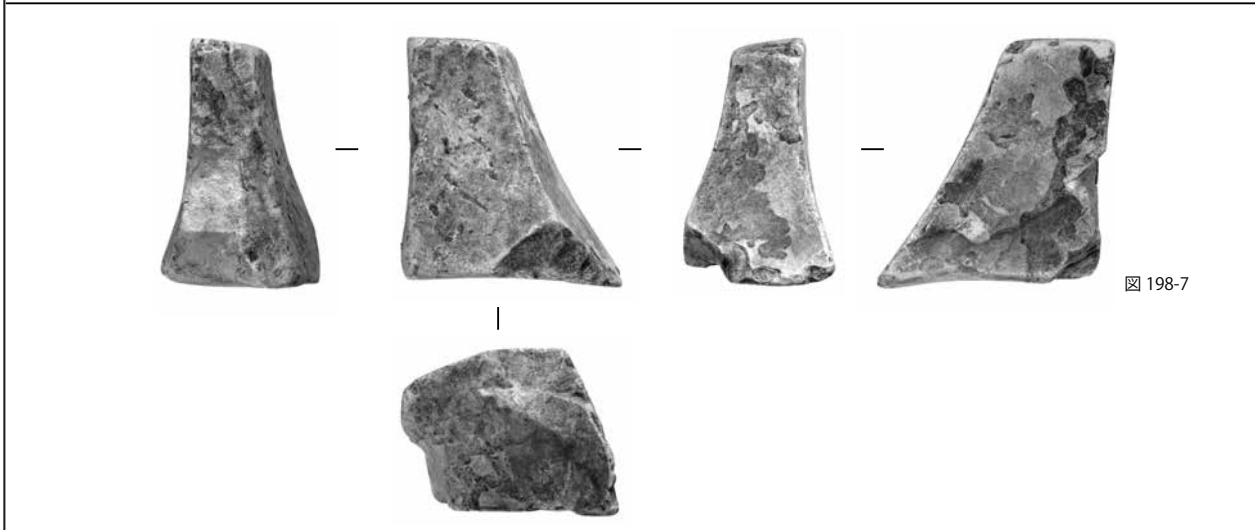
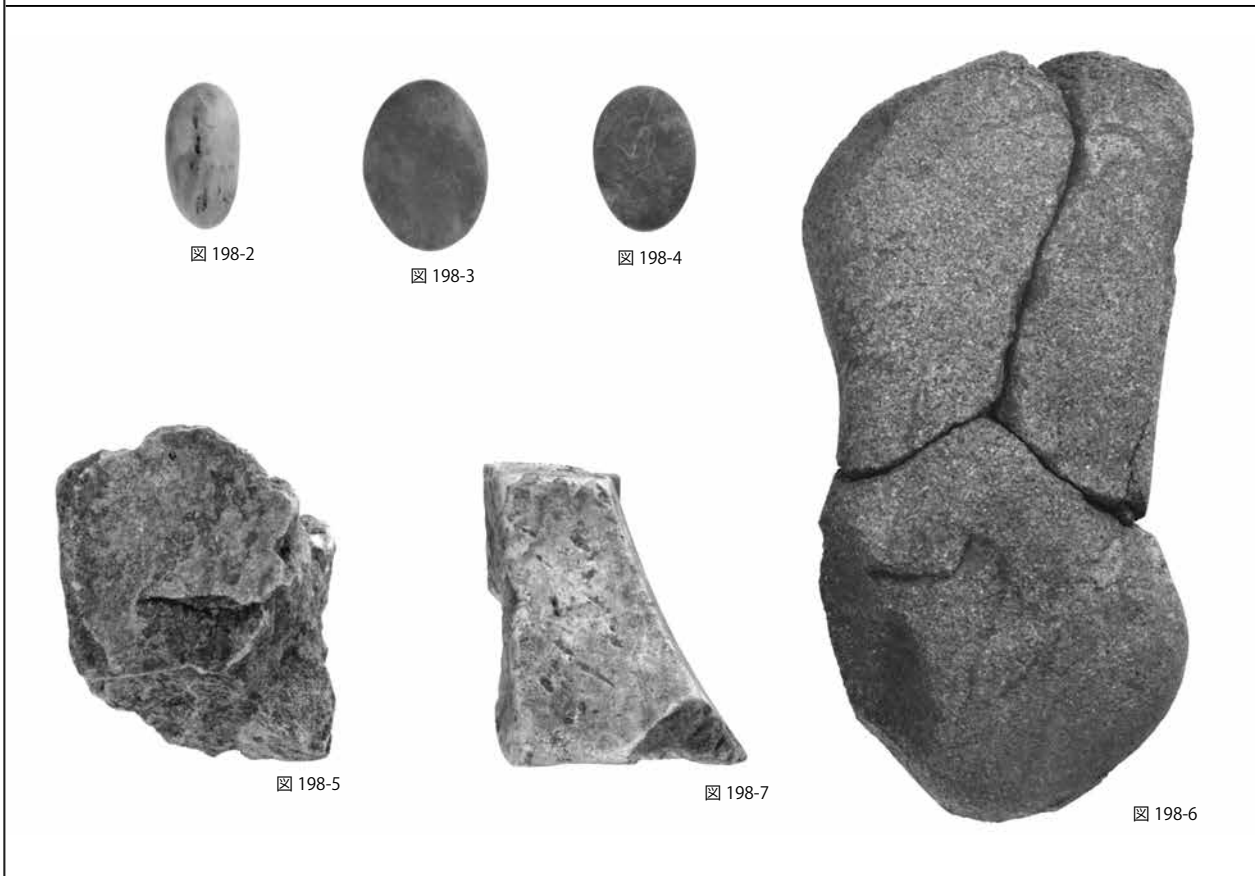
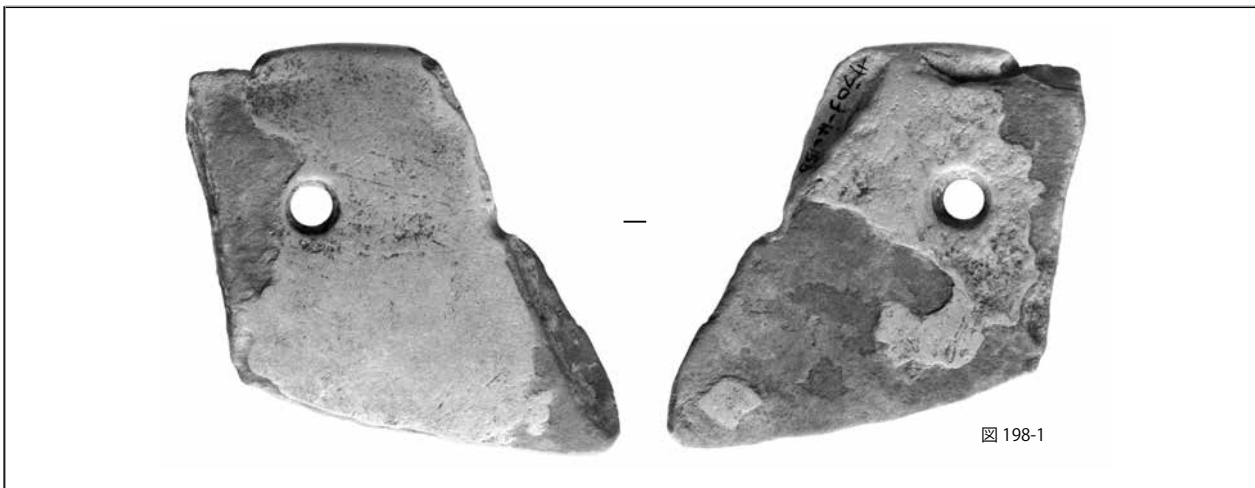
図版 142 第 7b 面関連出土石器 (5-510 ピット)



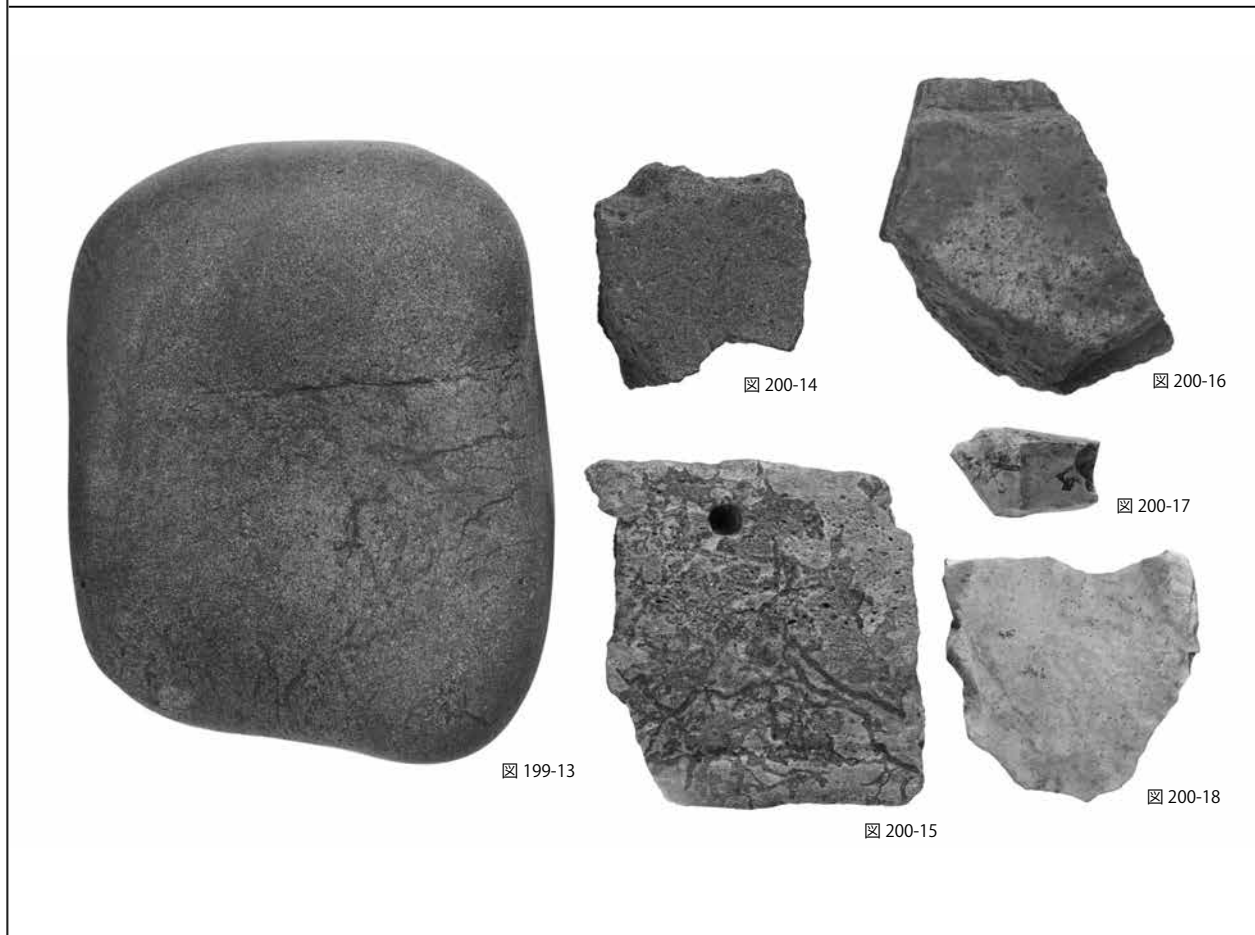
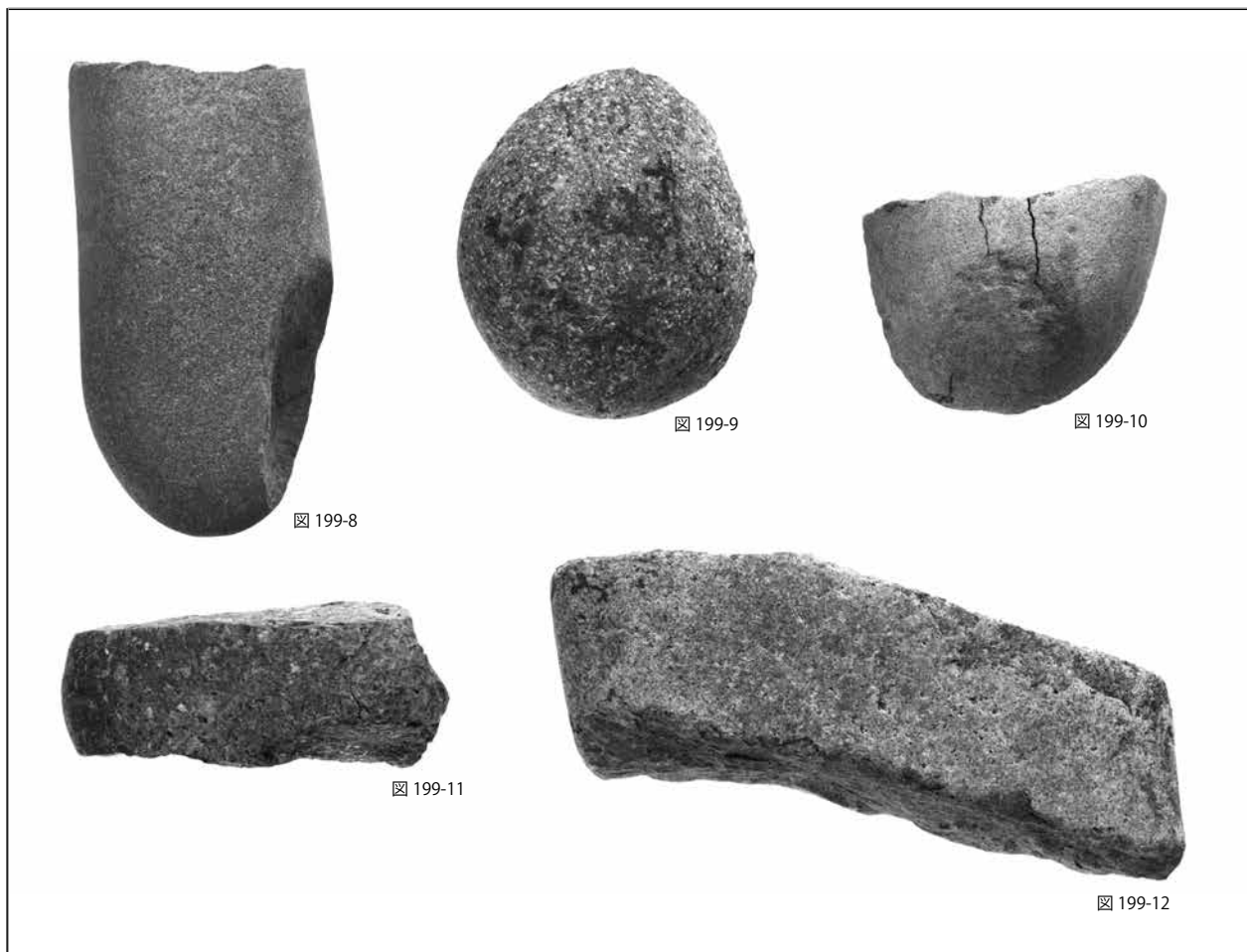
図版 143 第 7b 面関連出土石器 (3-161 土坑、4-63、5-597 ピット、5-657 土坑、5-678 ピット)



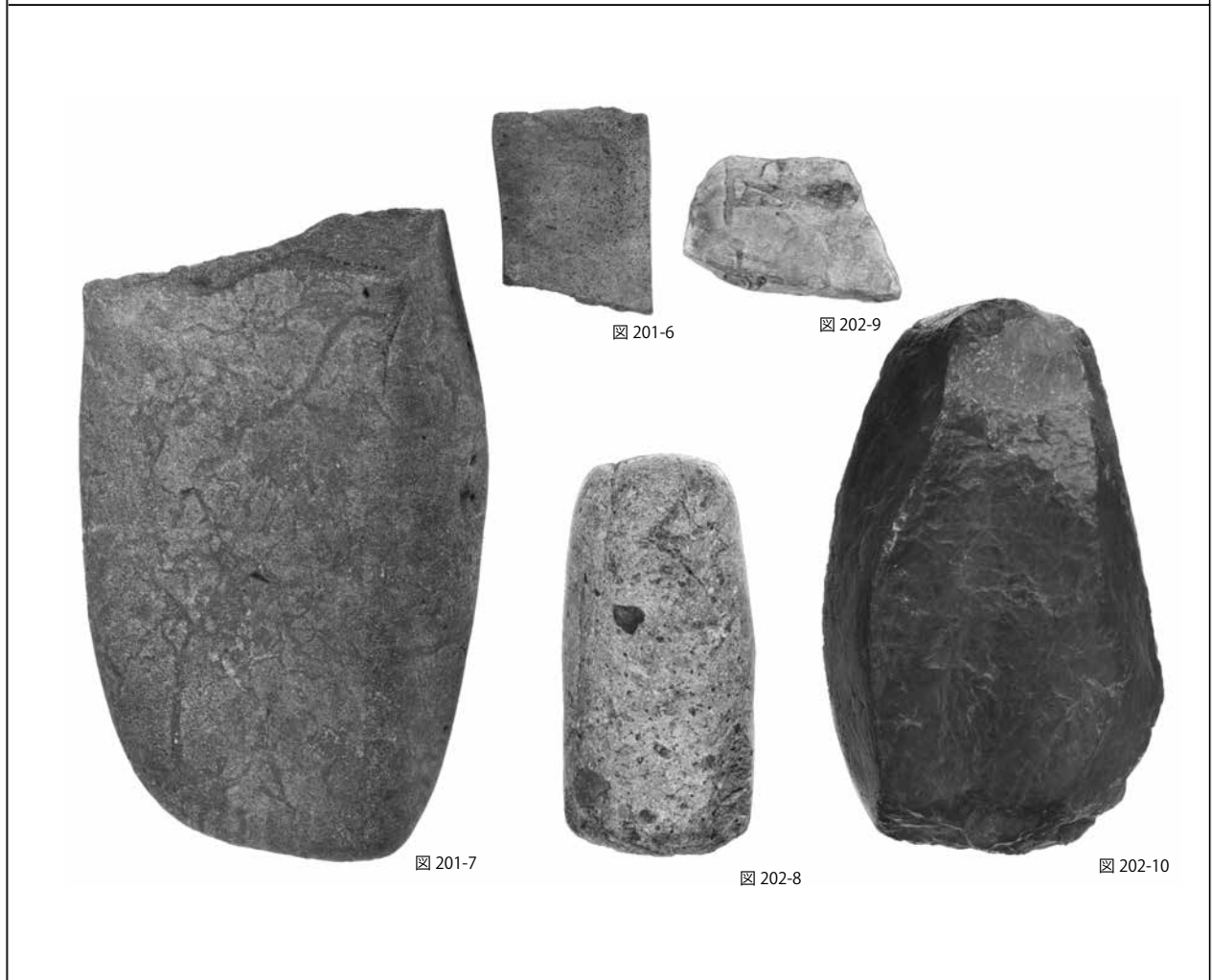
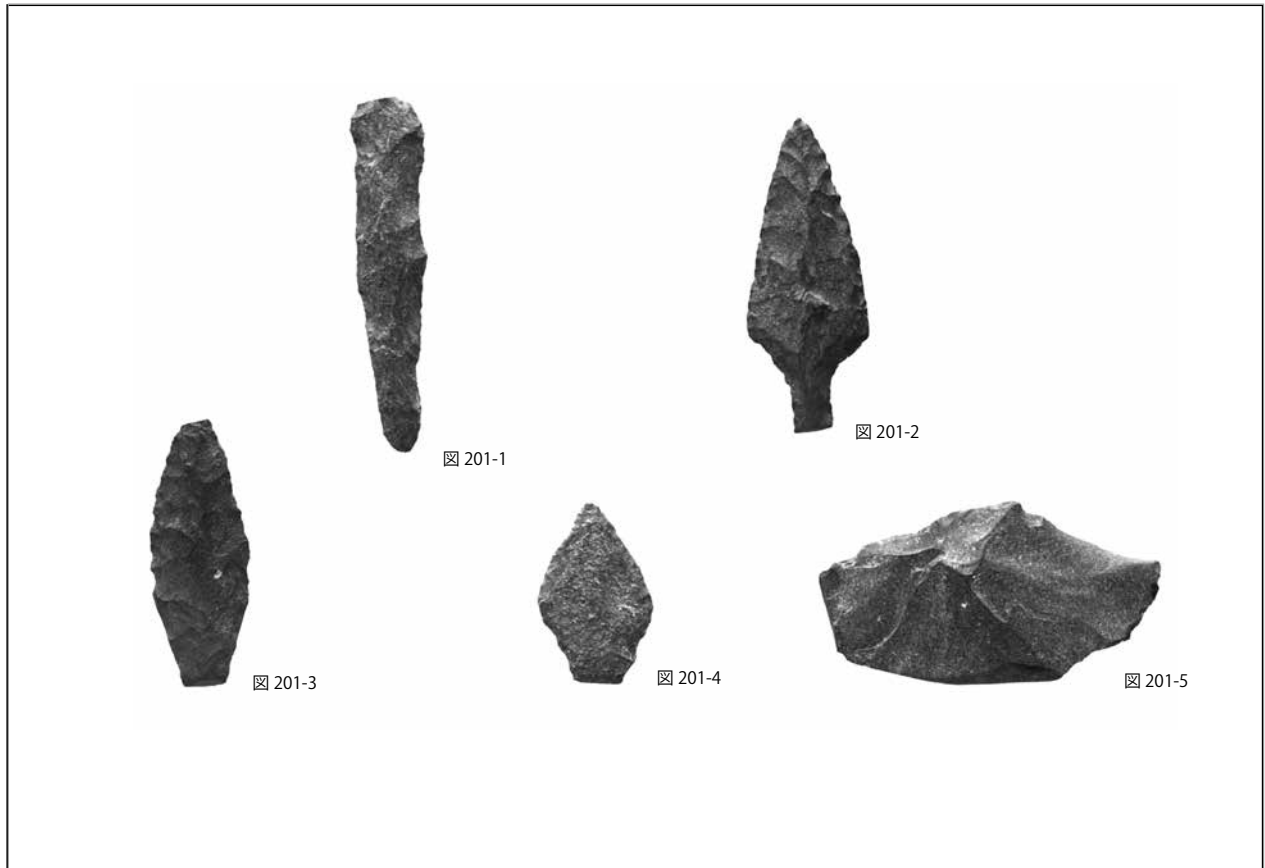
图版 144 第 7b 面関連出土石器 (包含層)



图版 145 第 7b 面関連出土石器 (包含層)

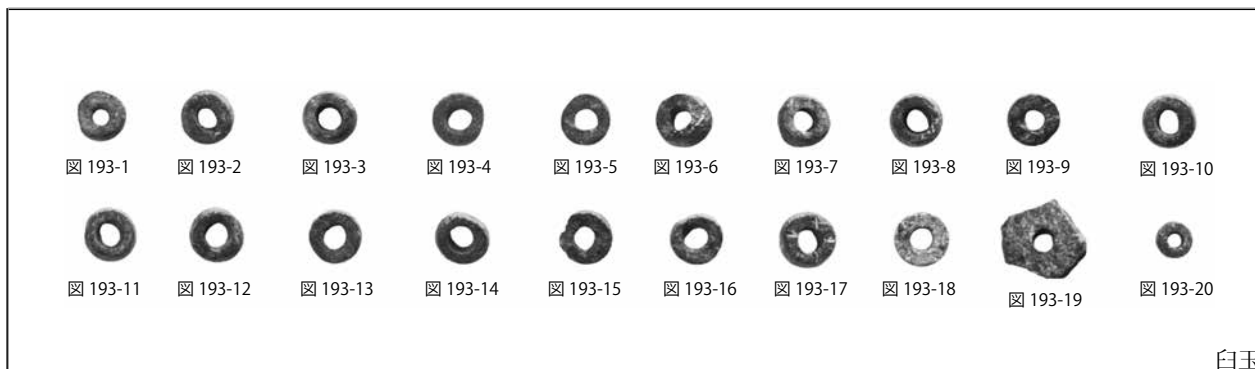


图版 146 第 7b 面関連出土石器 (包含層)

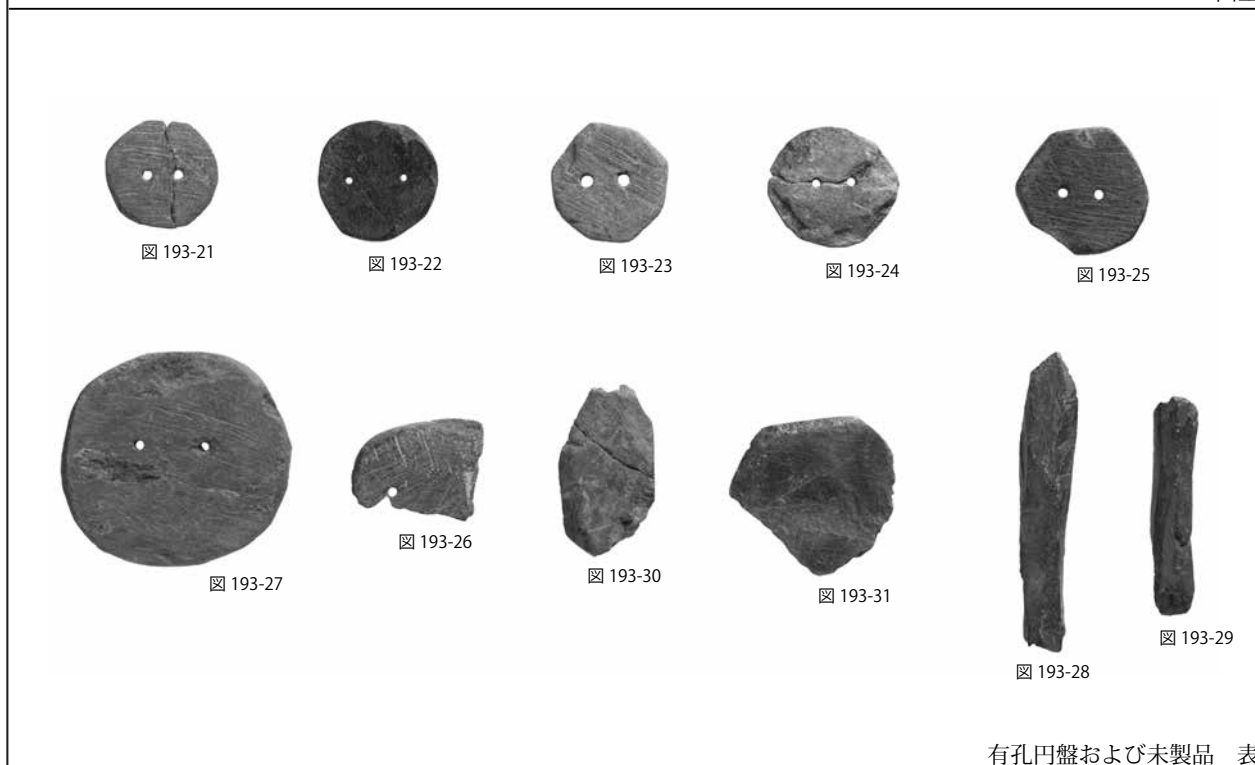




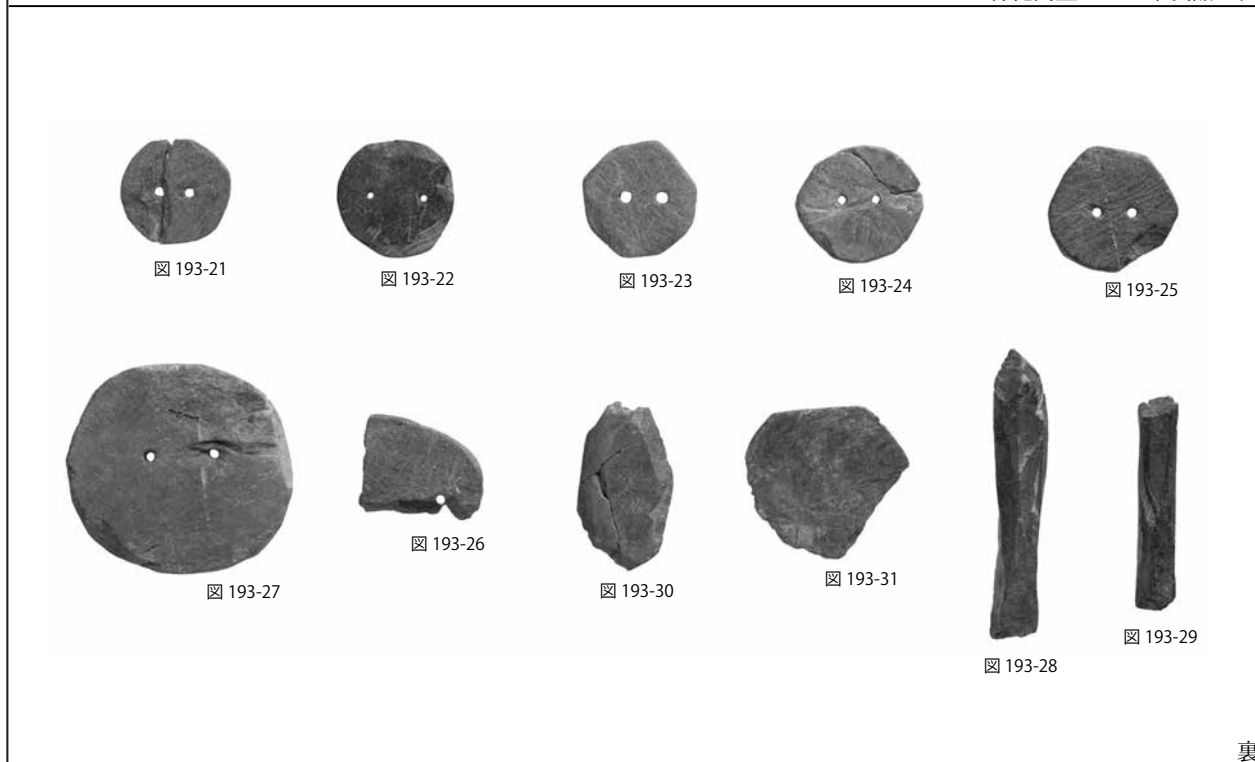
図版 147 滑石製品



白玉

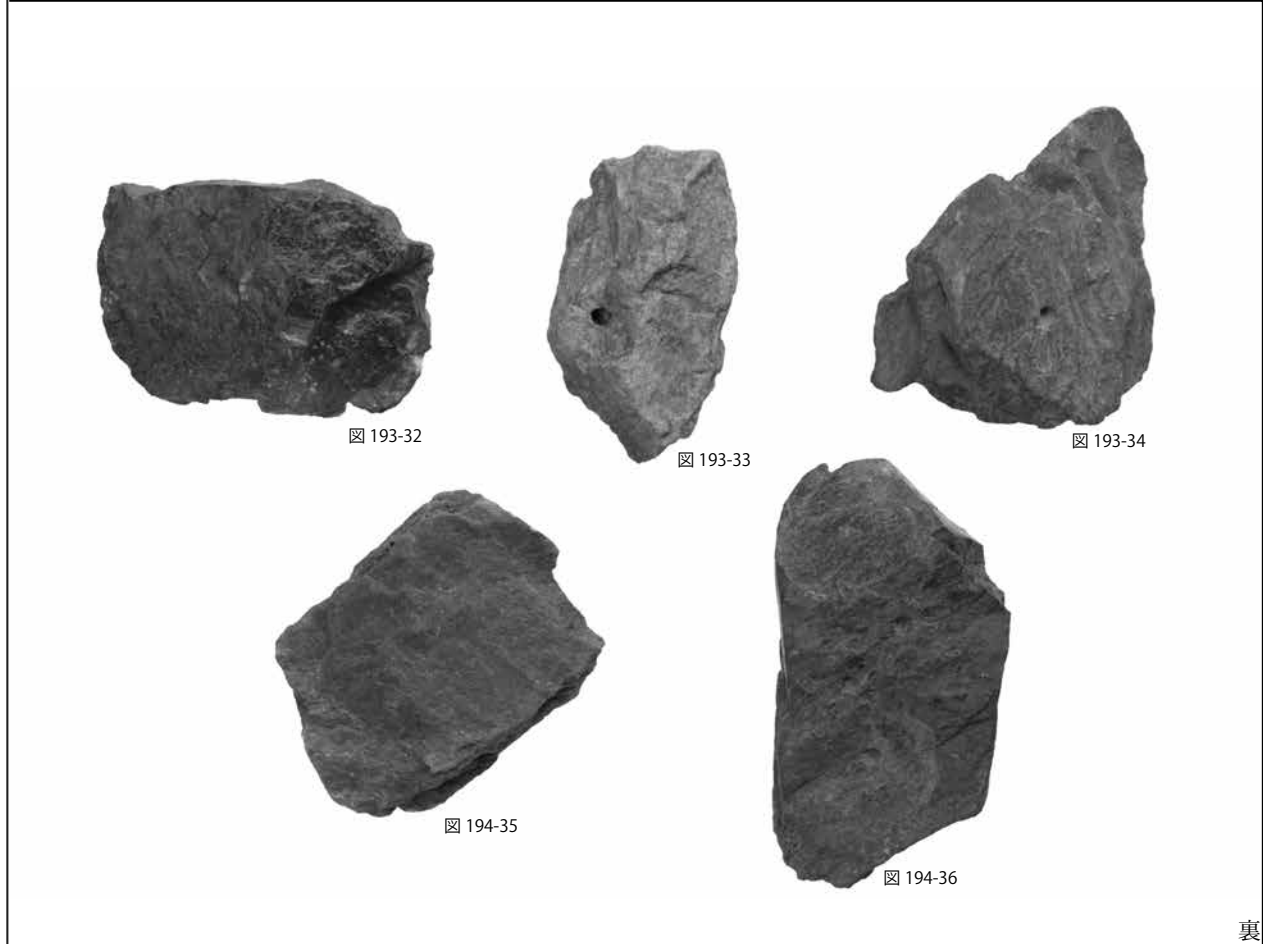
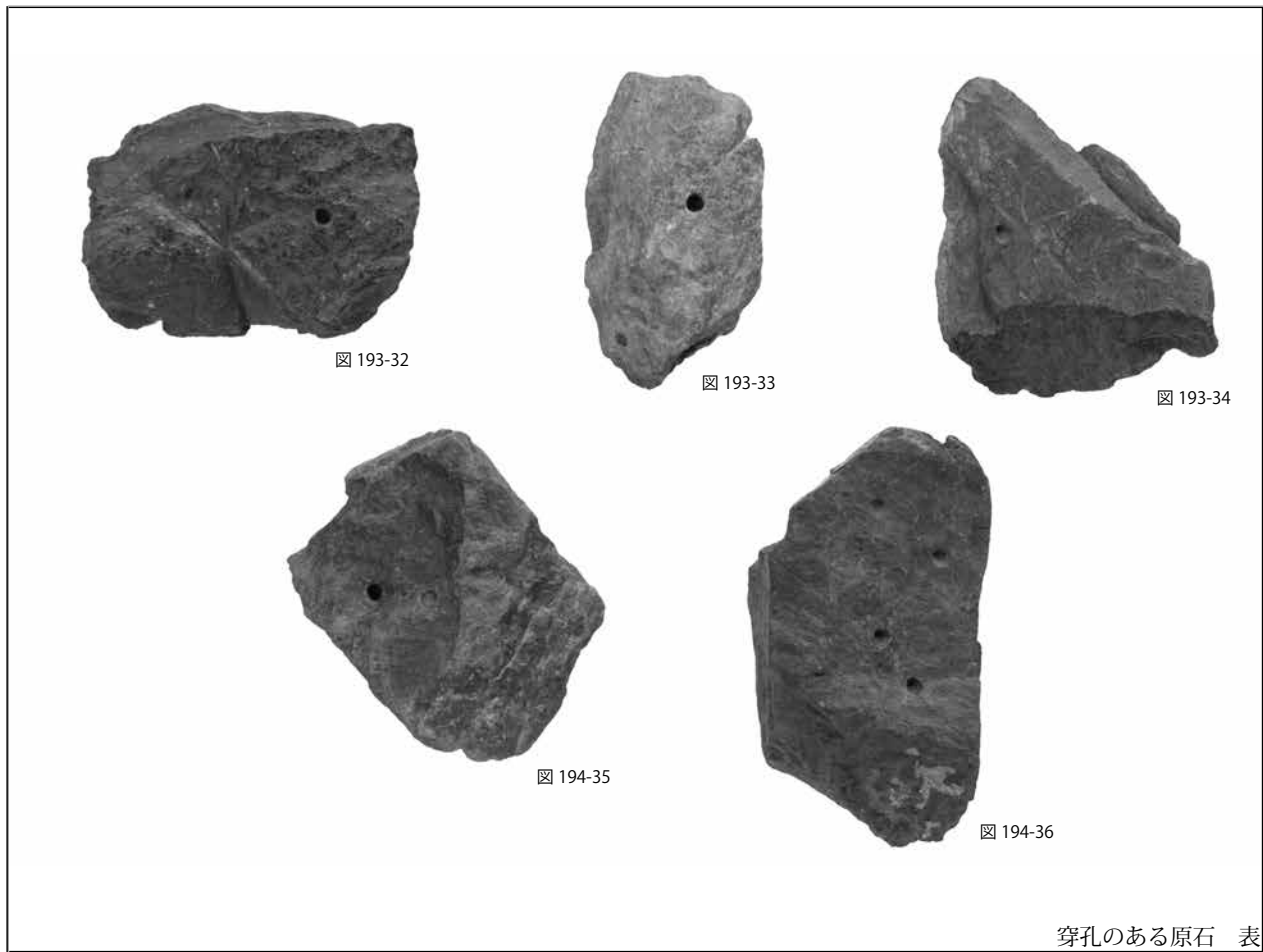


有孔円盤および未製品 表

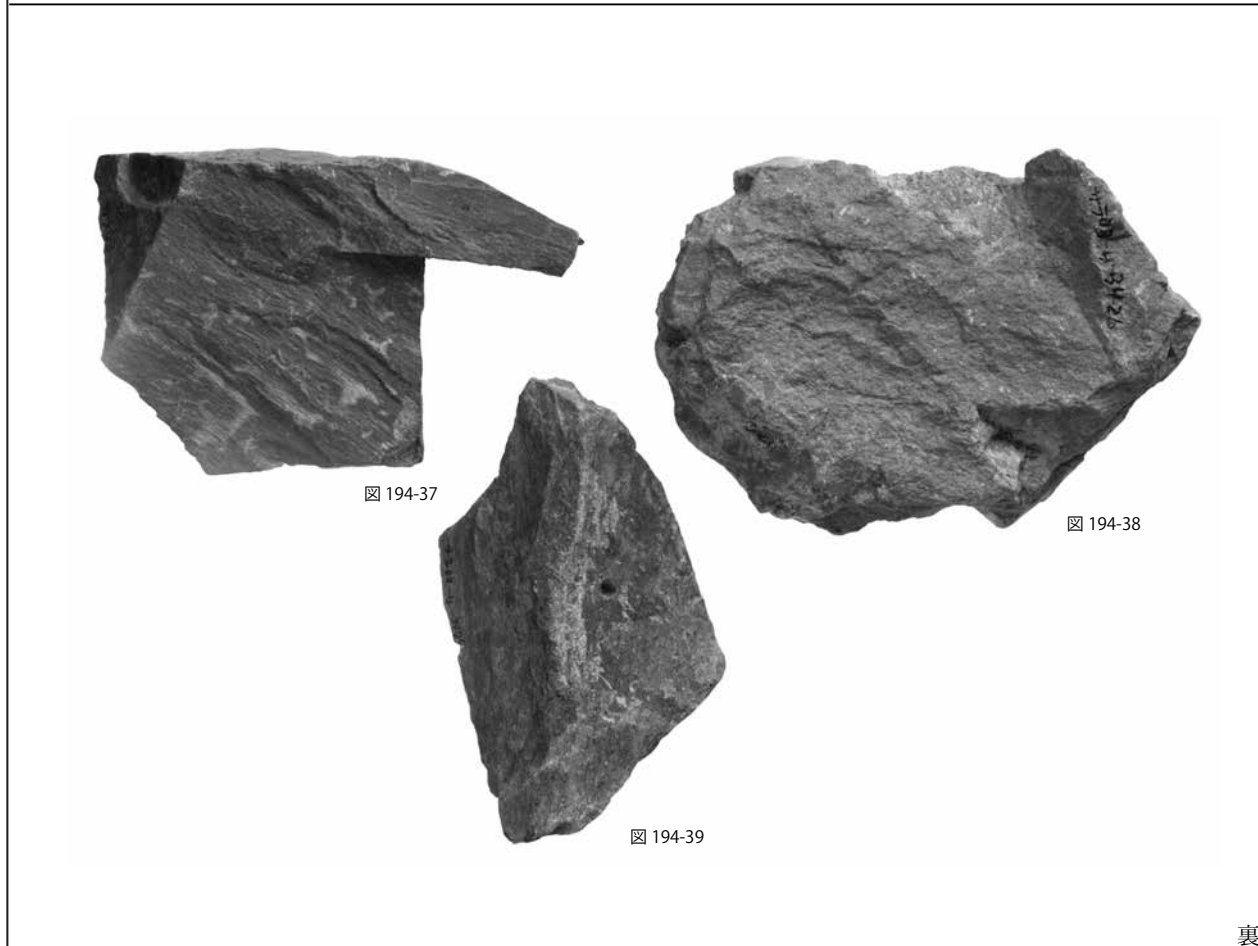
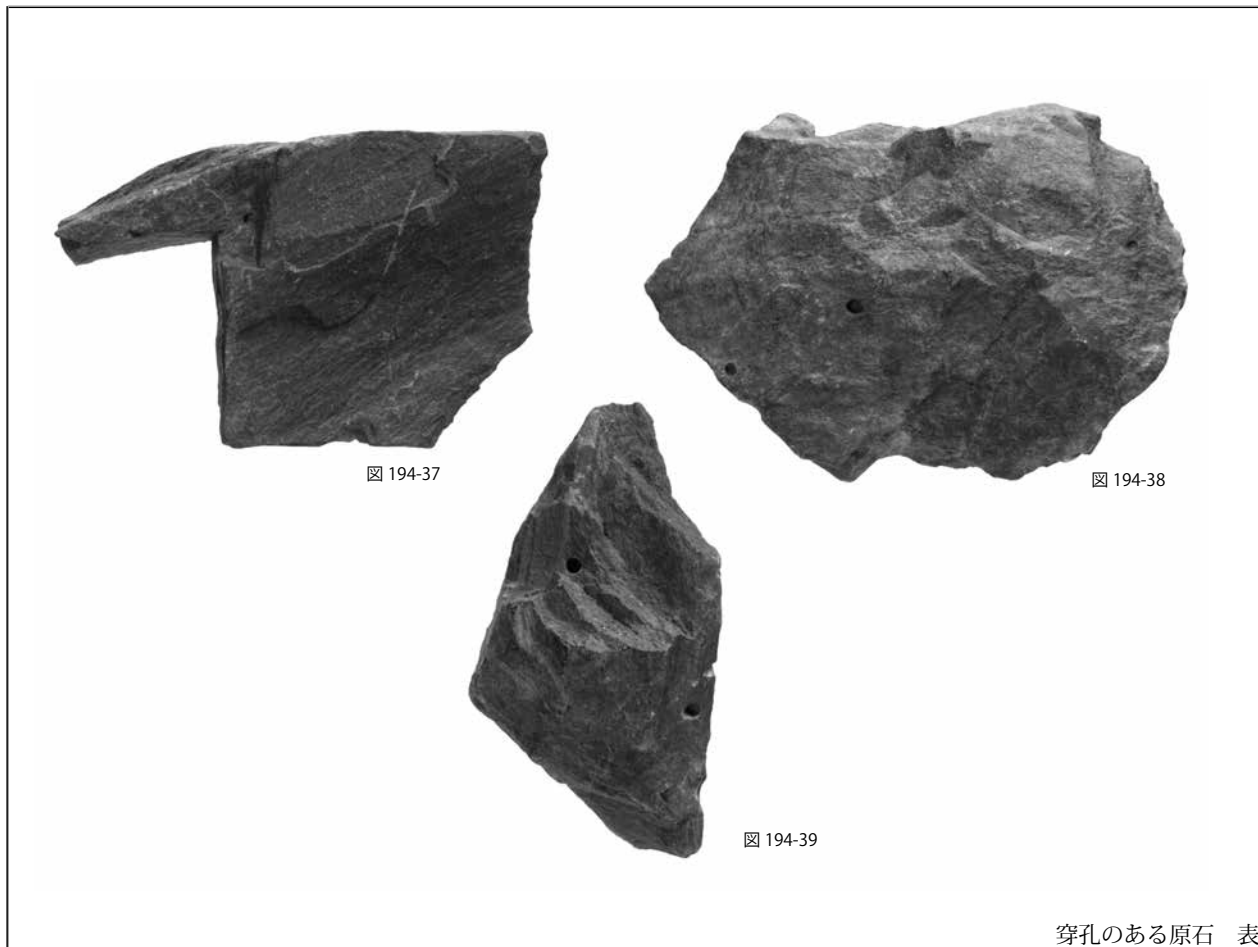


裏

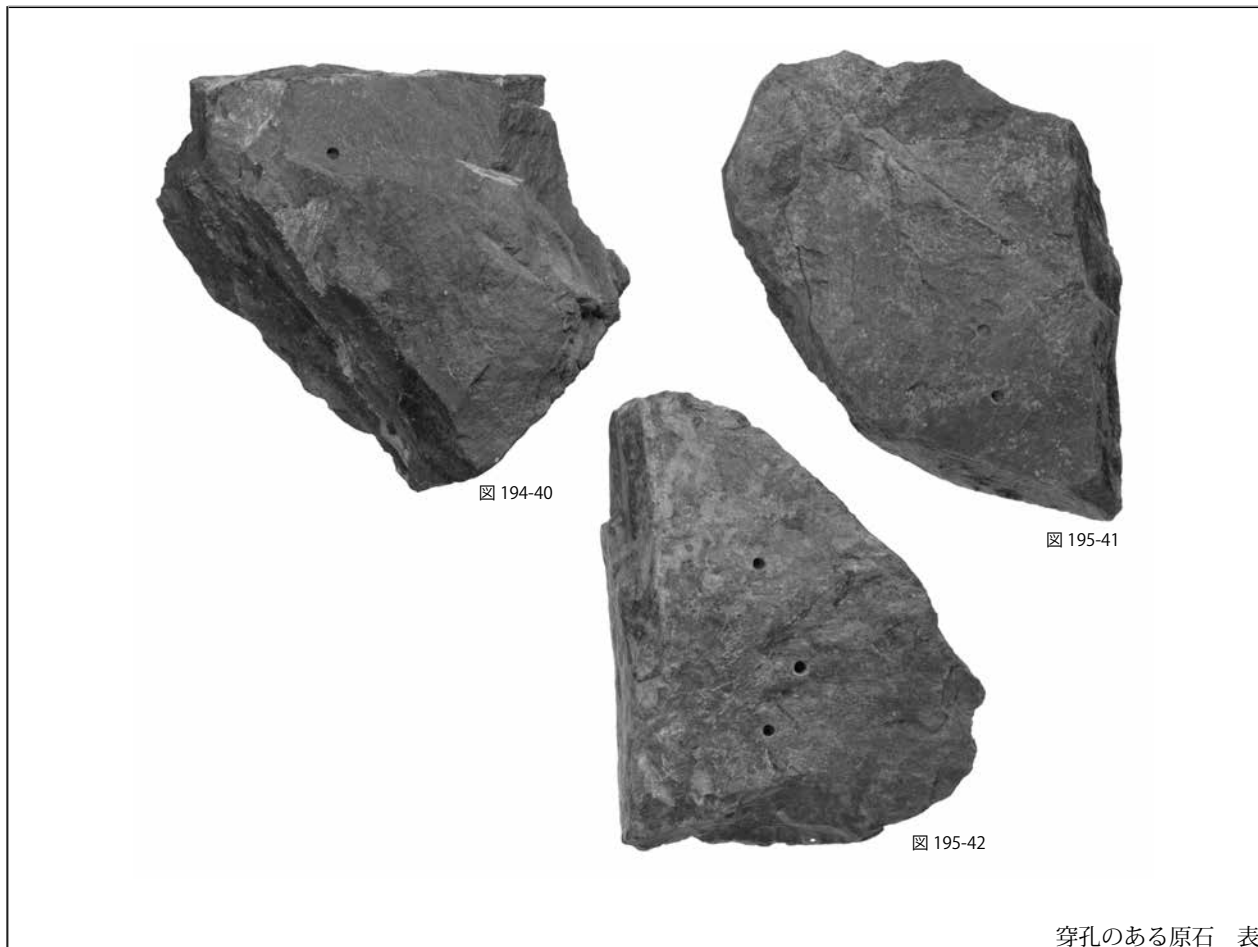
図版 148 滑石製品



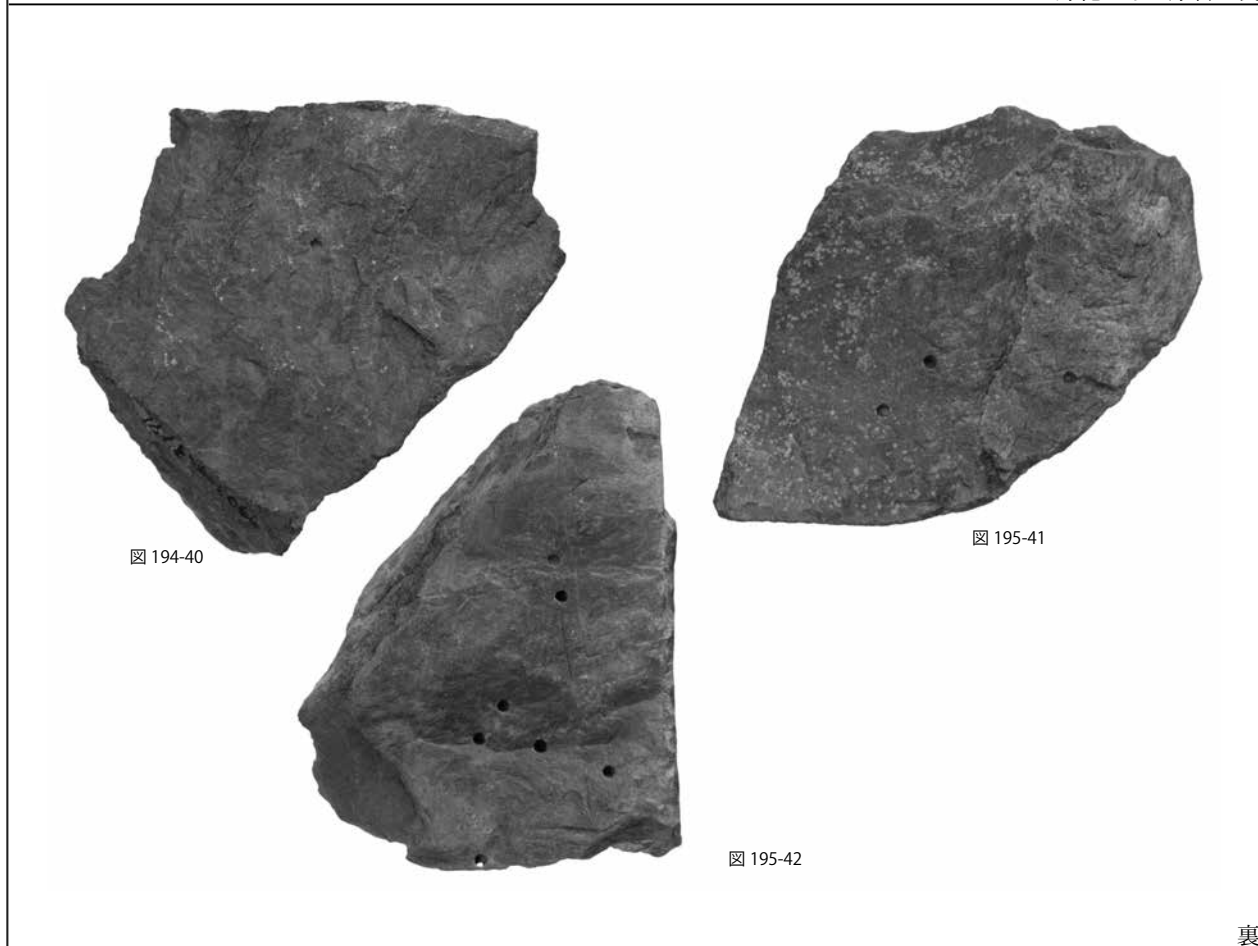
図版 149 滑石製品



図版 150 滑石製品

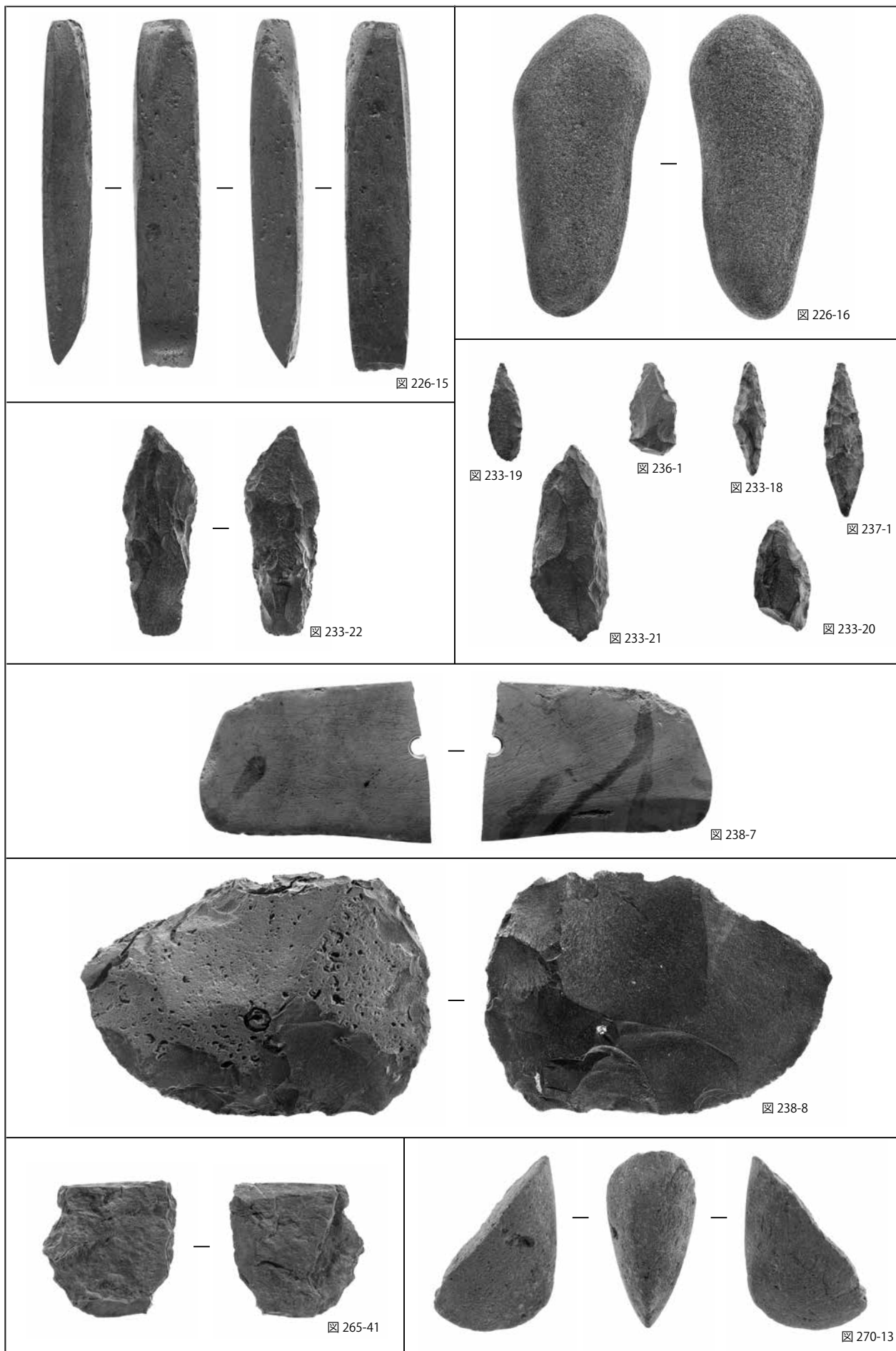


穿孔のある原石 表

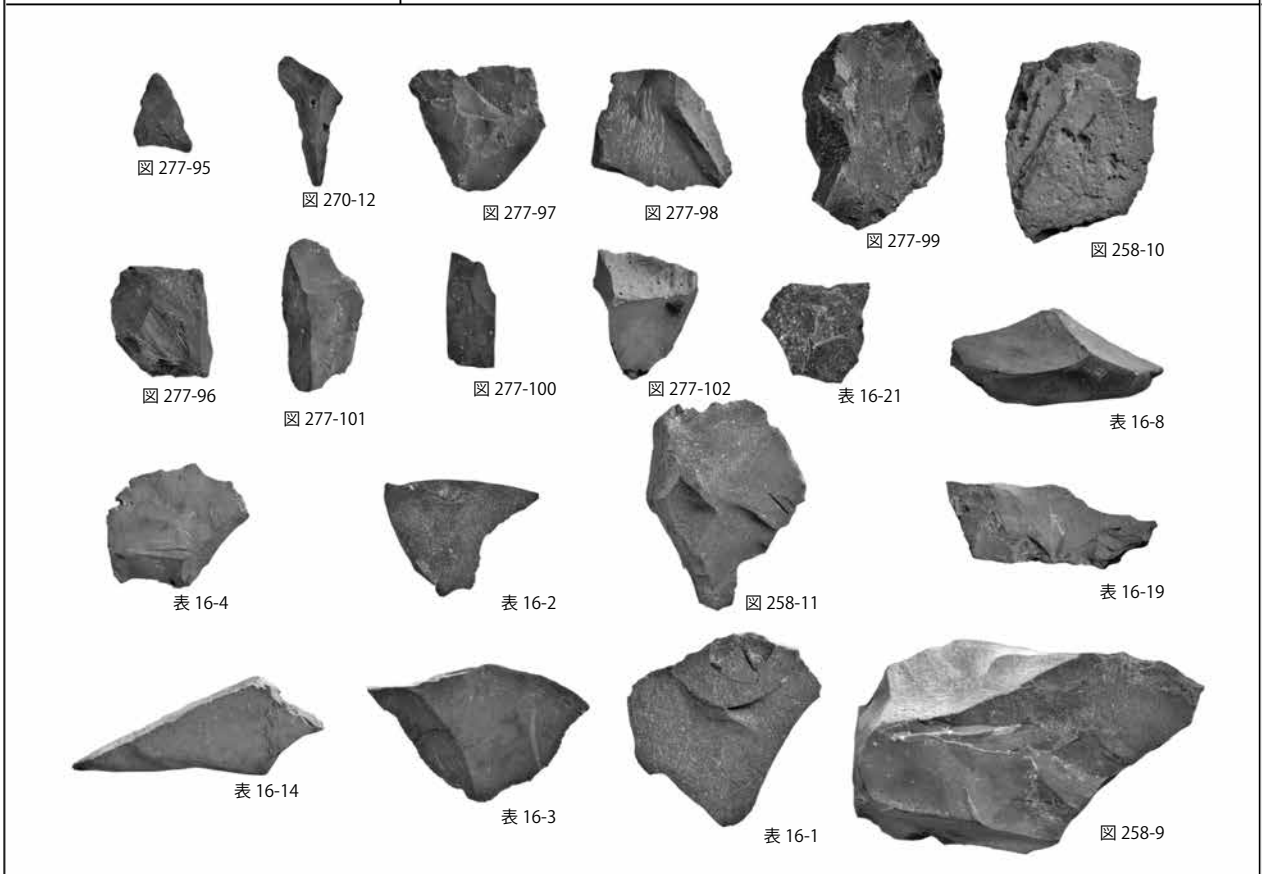
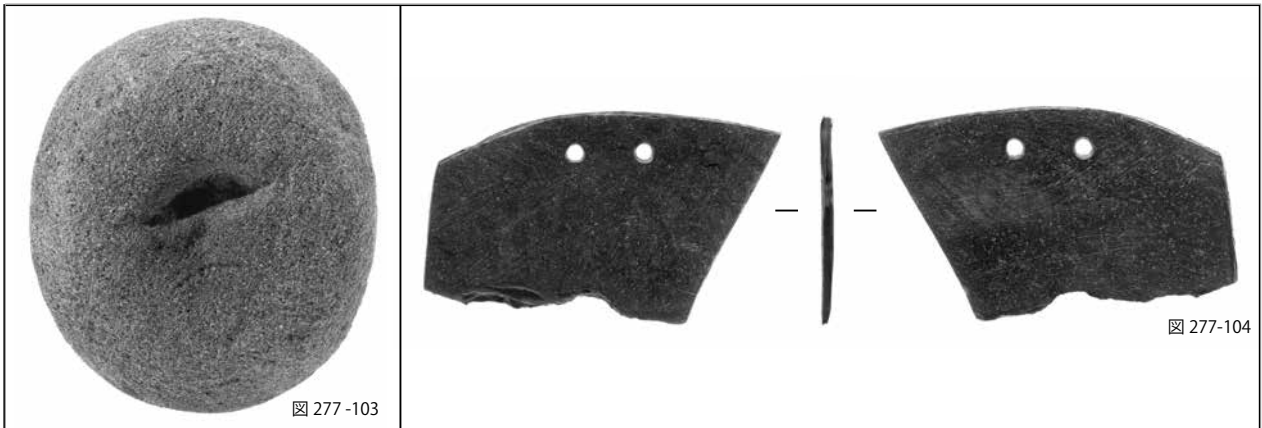


裏

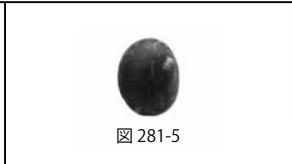
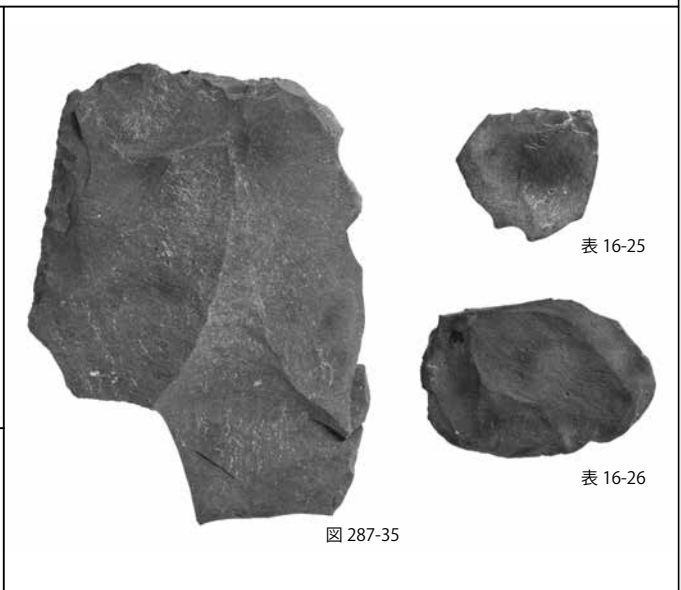
図版 151 第 8b 面関連出土石器 (微高地 1 上部遺構、3-267・268 溝、包含層)



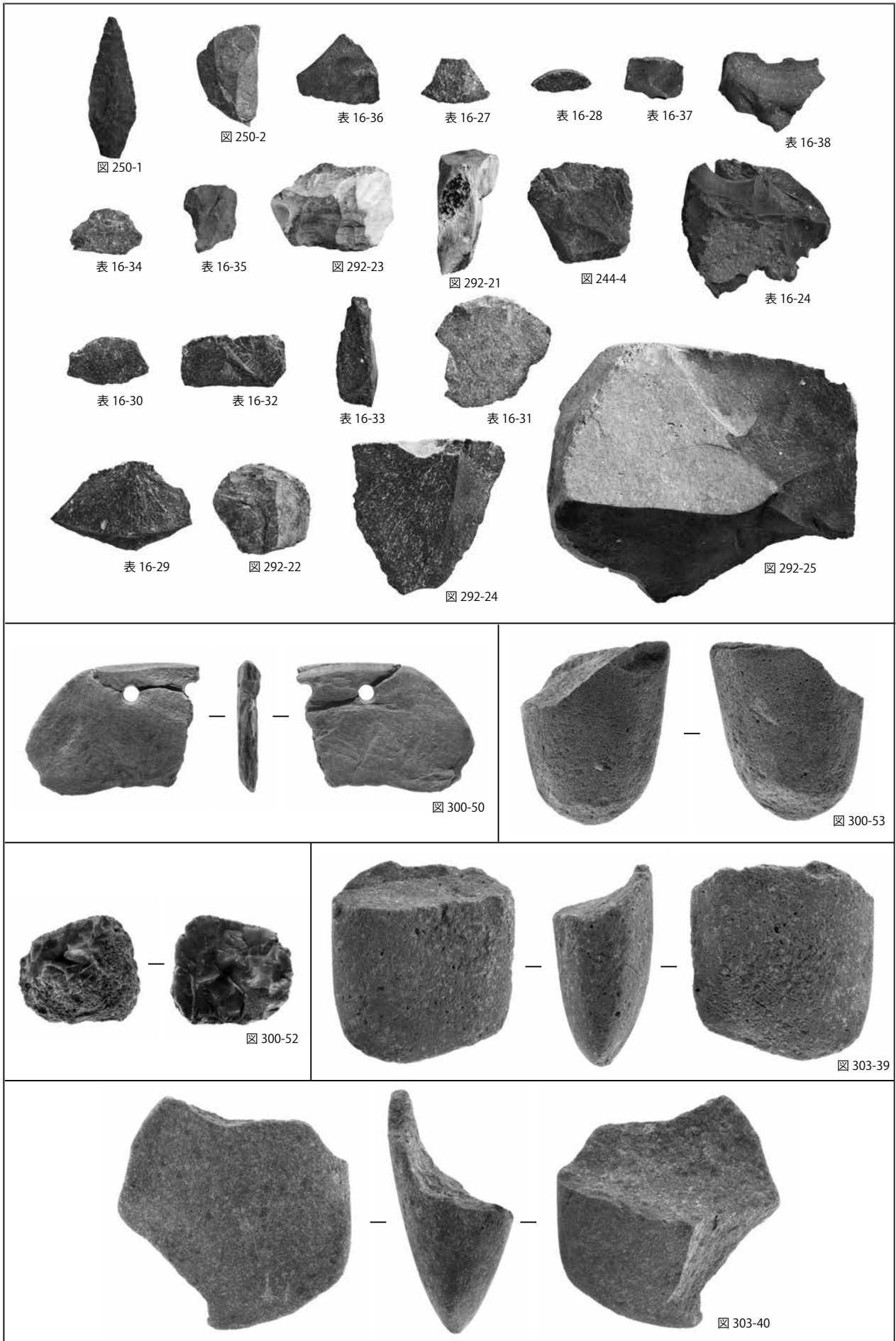
図版 152 第 8b 面関連出土石器 (3-267・268 溝、3-286 土坑、6-123 溝)



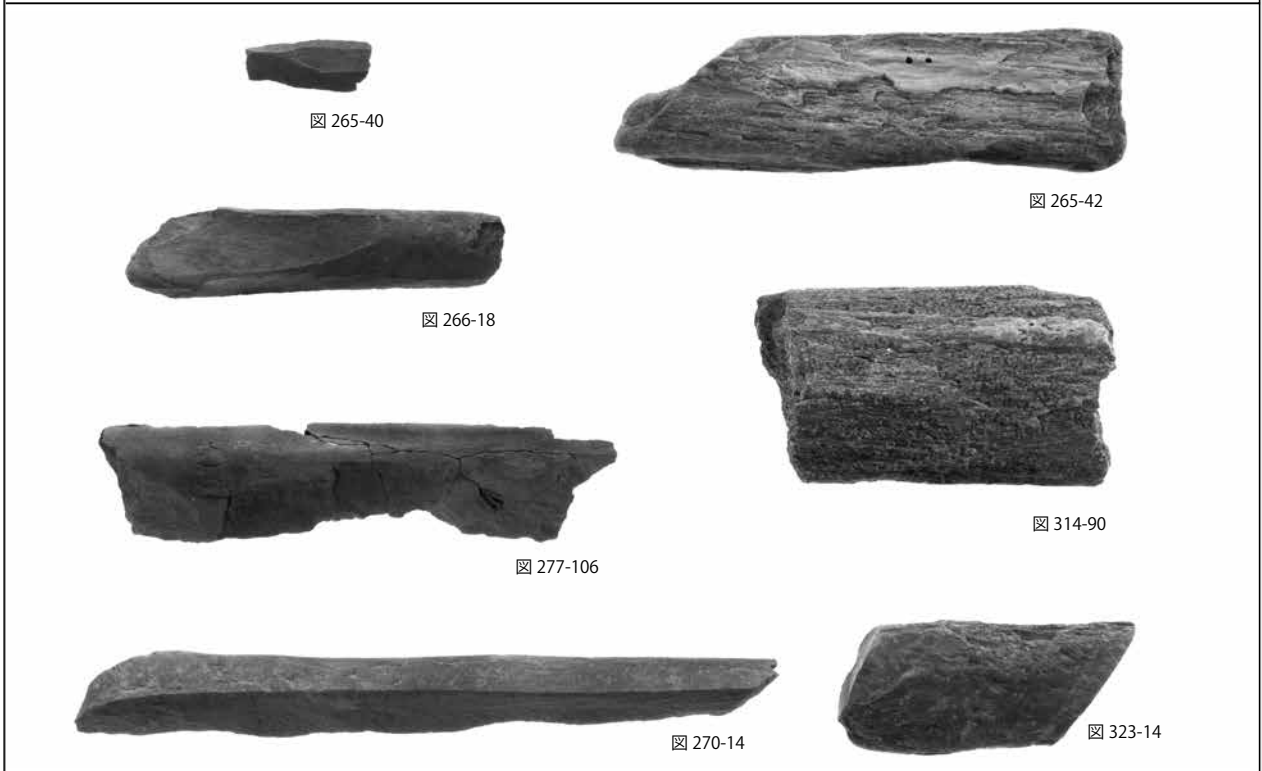
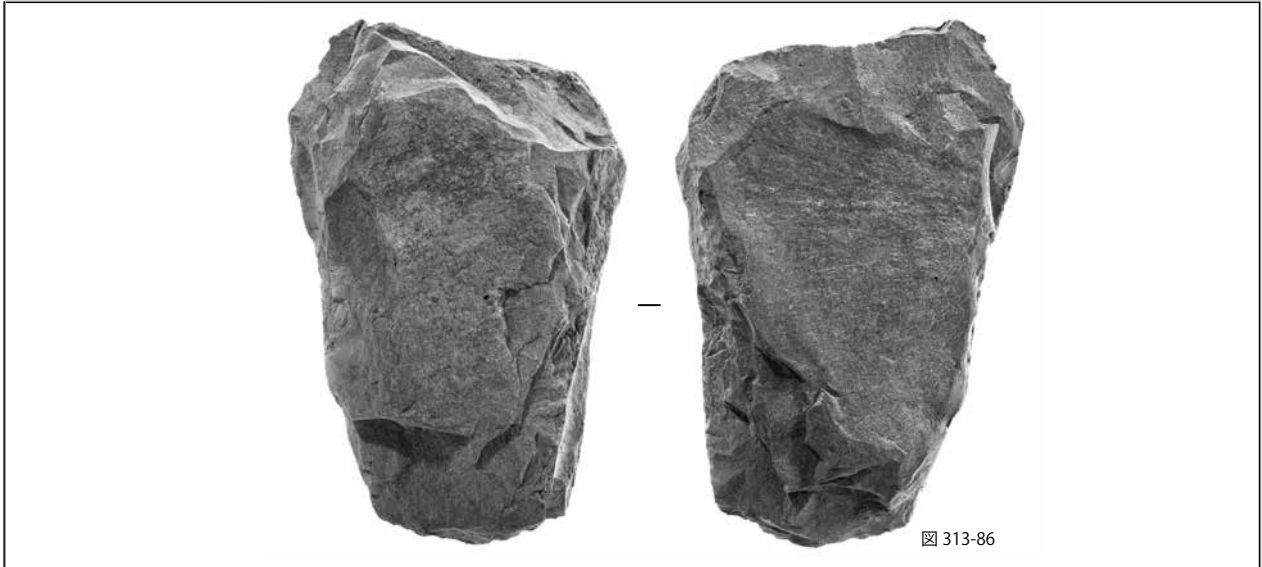
3-267・268 溝出土不明石器



图版 153 第 8b 面関連出土石器 (包含層)

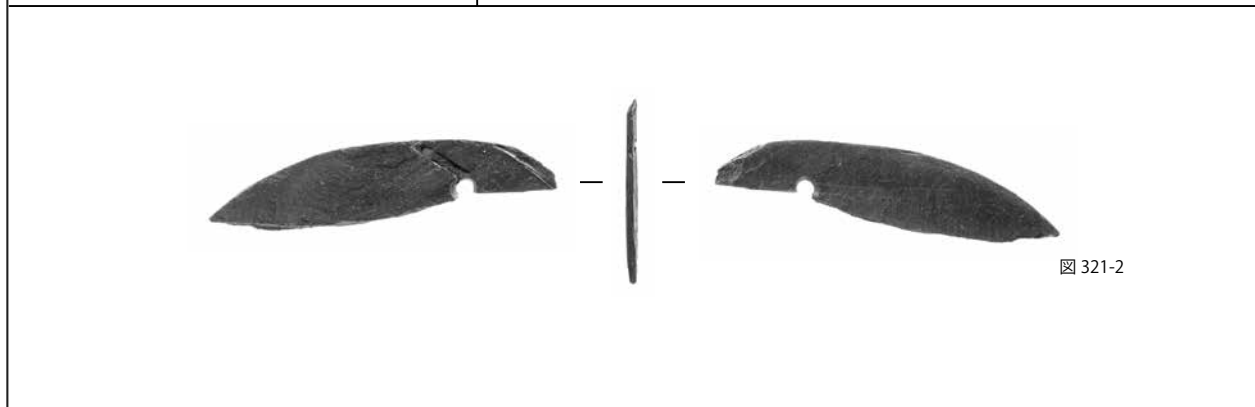
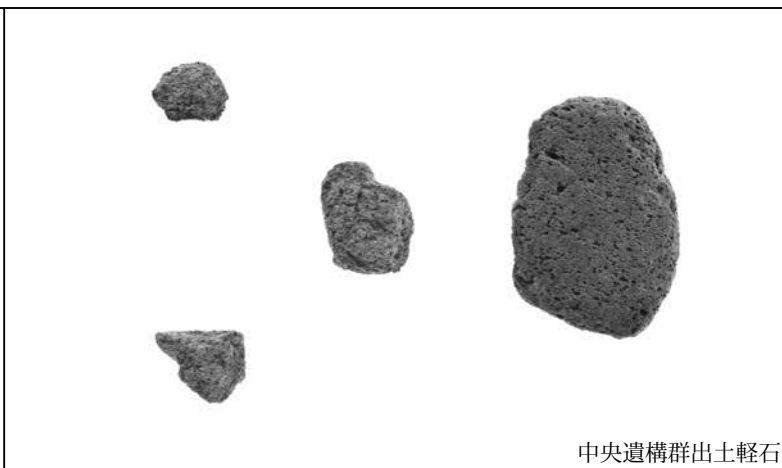
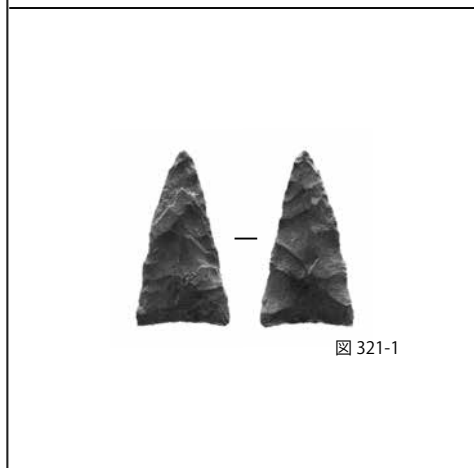
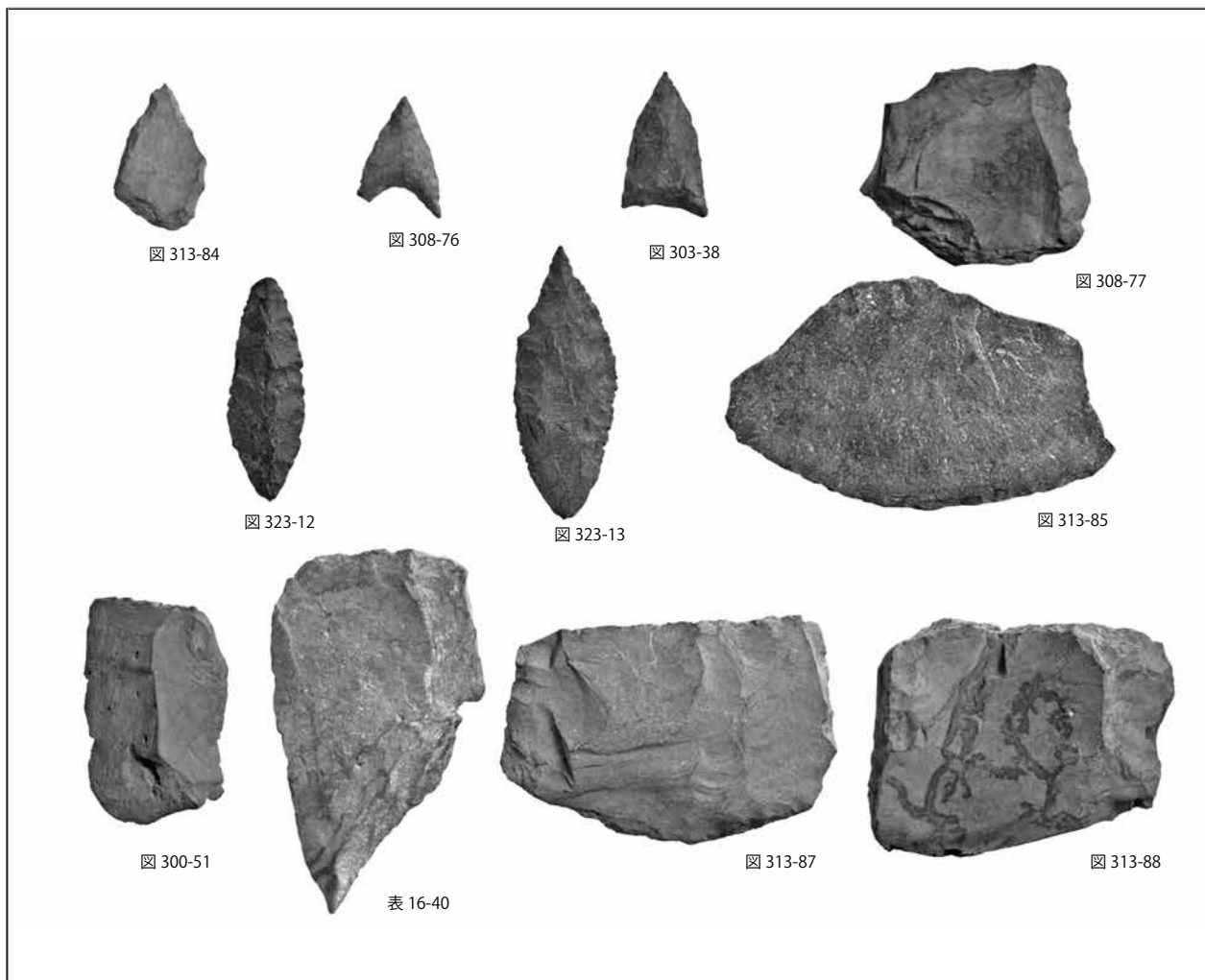


図版 154 第 8b 面関連出土石器 (3-267・268 溝、包含層)

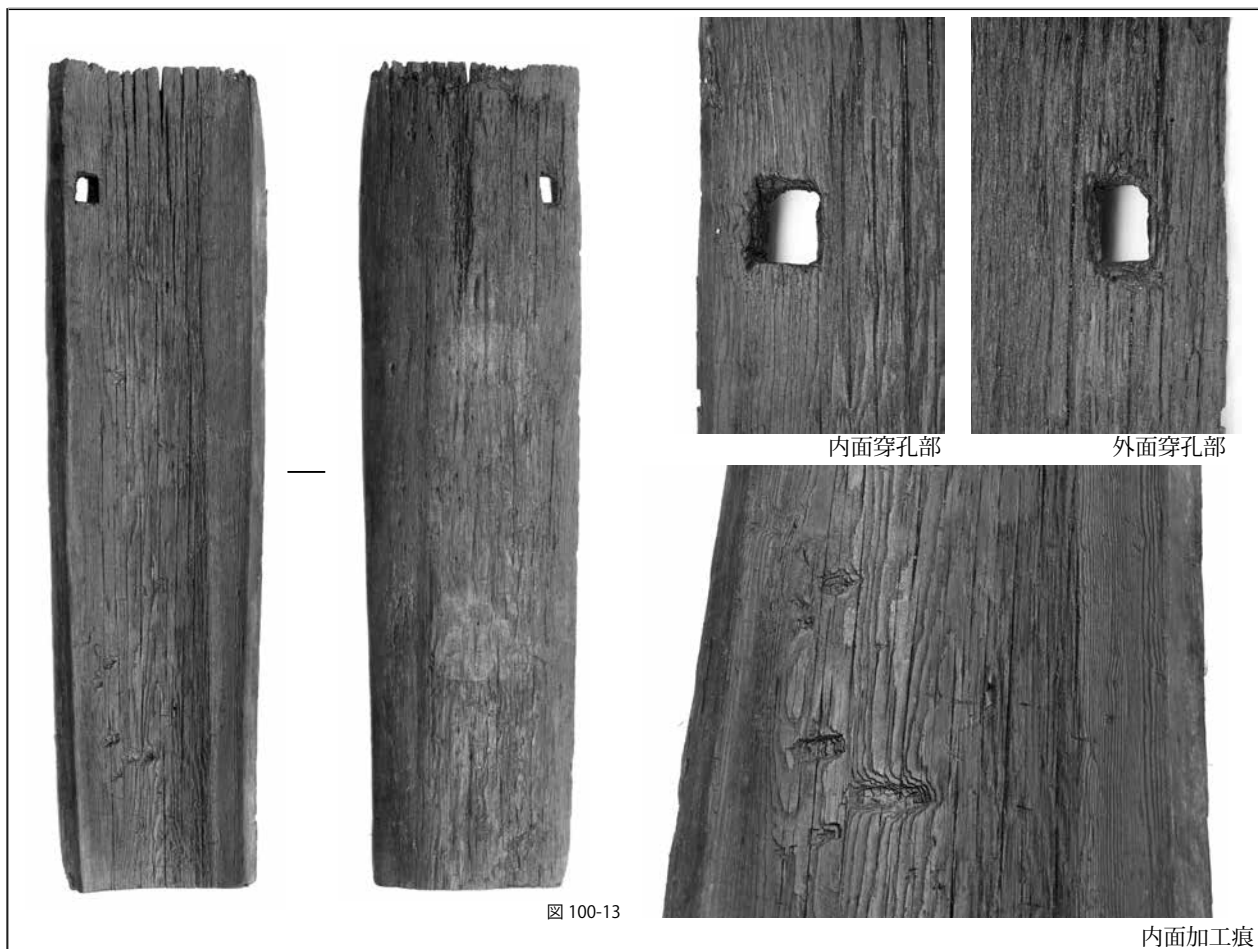




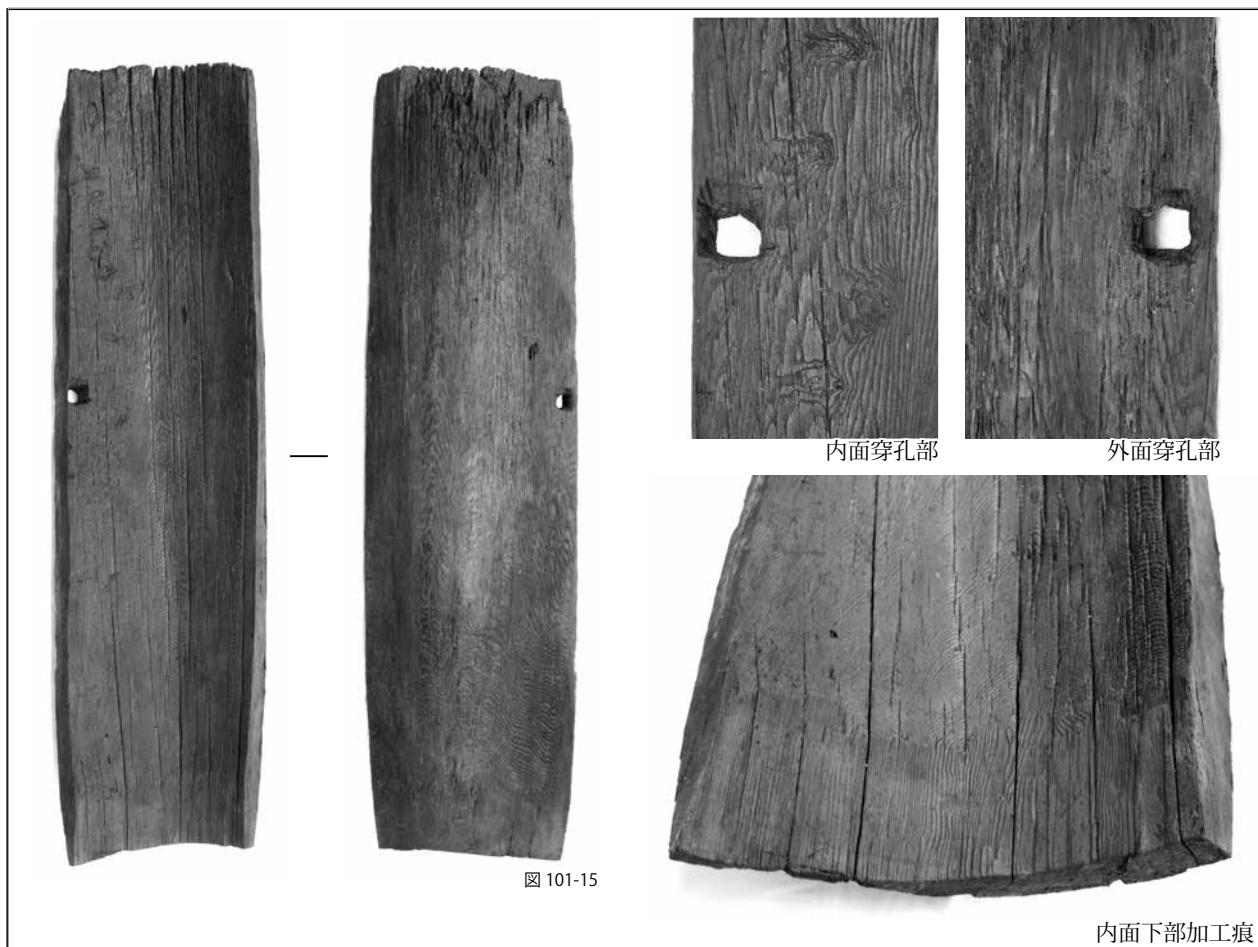
图版 155 第 8b 面関連出土石器 (2-112、5-1015 溝、包含層)



図版 156 第 7b 面関連出土木器 (5-491 井戸)



図版 157 第 7b 面関連出土木器 (5-491 井戸)



図版 158 第 7b 面関連出土木器 (5-491 井戸)



図 102-17



図 102-18



図 102-21

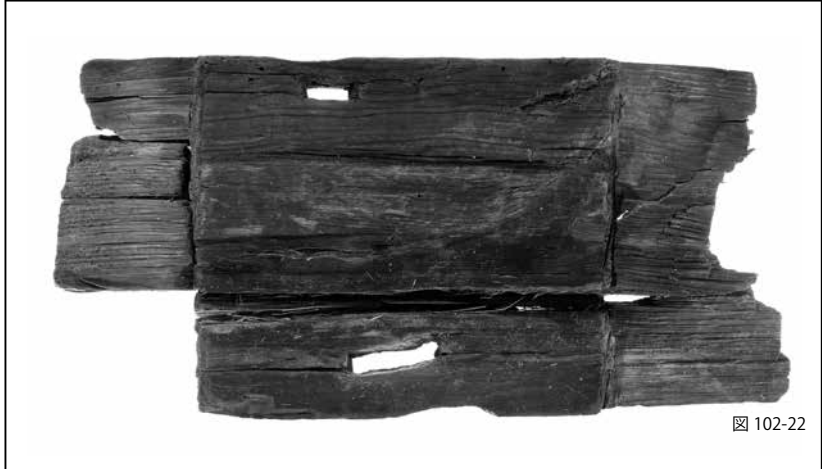


図 102-22



図 102-19



図 102-20

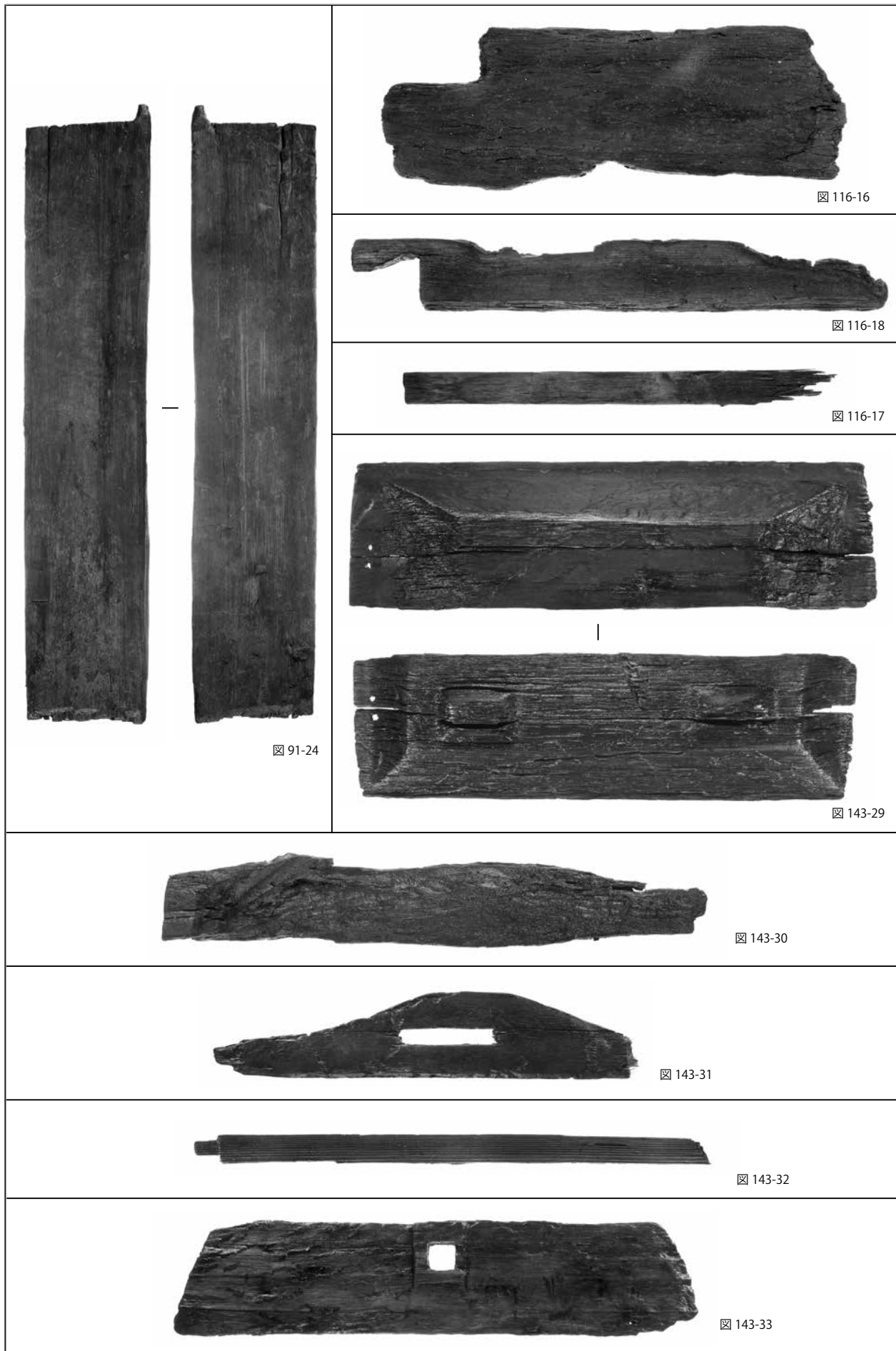


図 102-23

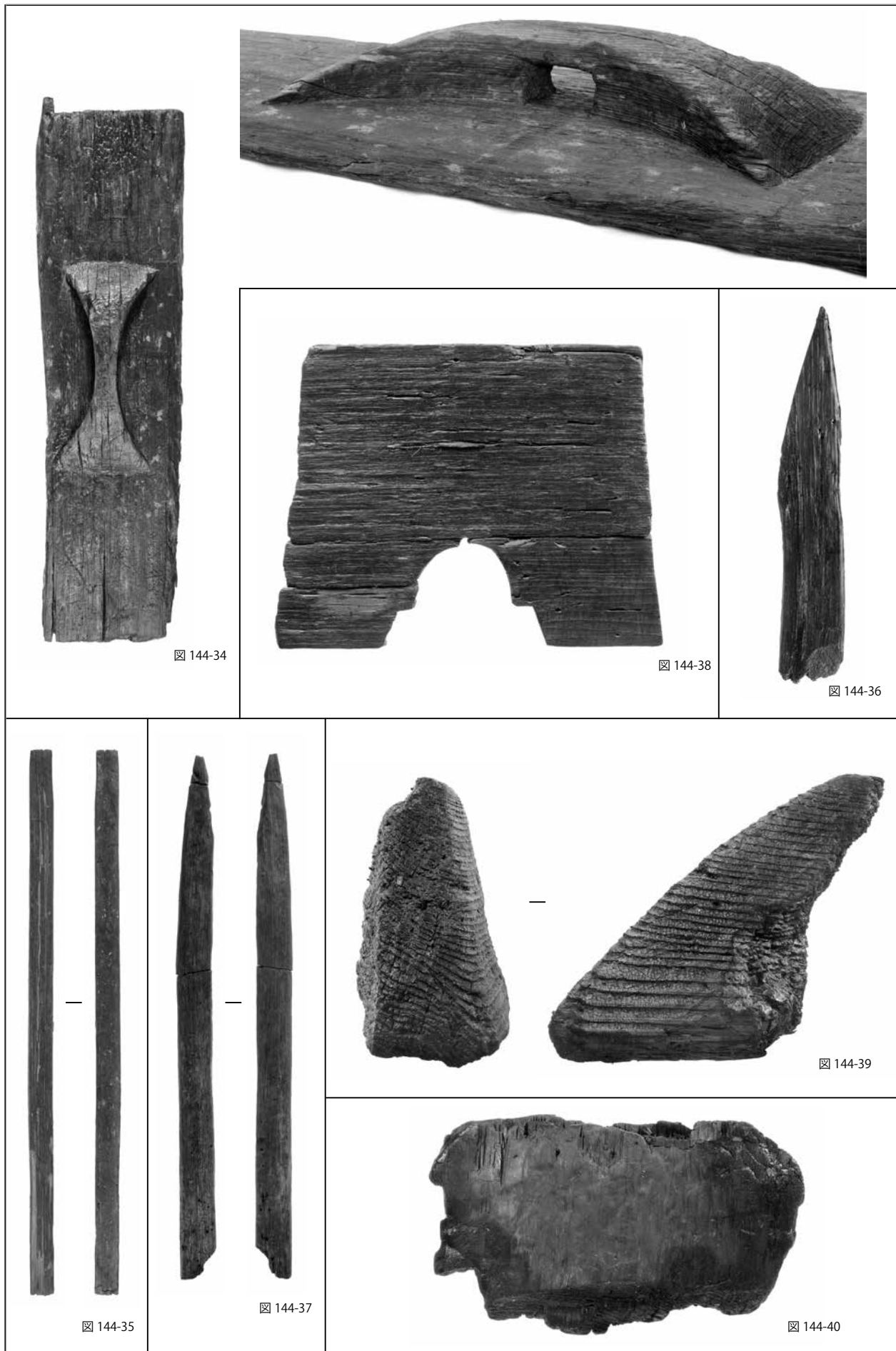


図 102-24

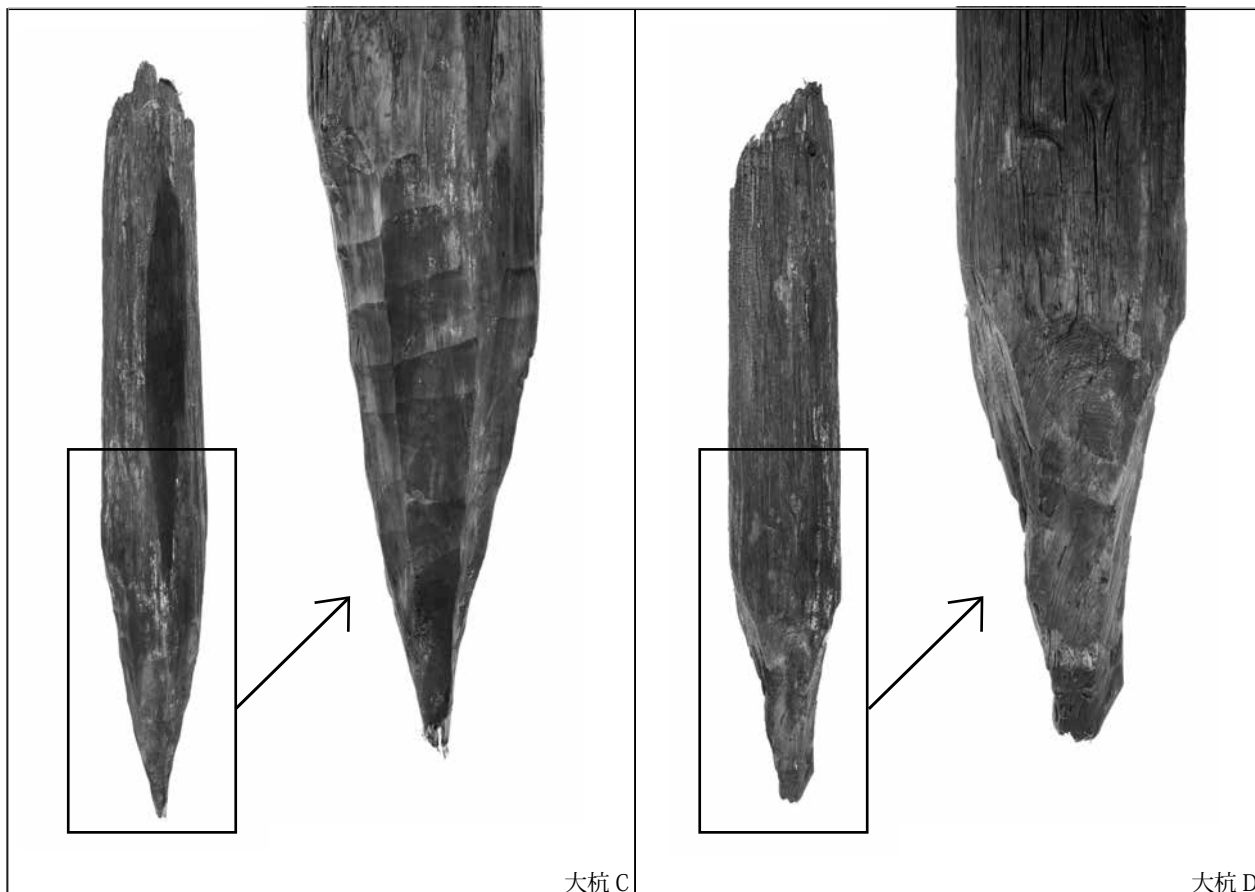
図版 159 第 7b 面関連出土木器 (5-416、5-536 井戸、1-59・60 溝)



図版 160 第 7b 面関連出土木器 (1-59・60 溝)



図版 161 第 7b 面関連出土木器 (1-59・60 溝 杭材)



大杭 C

大杭 D

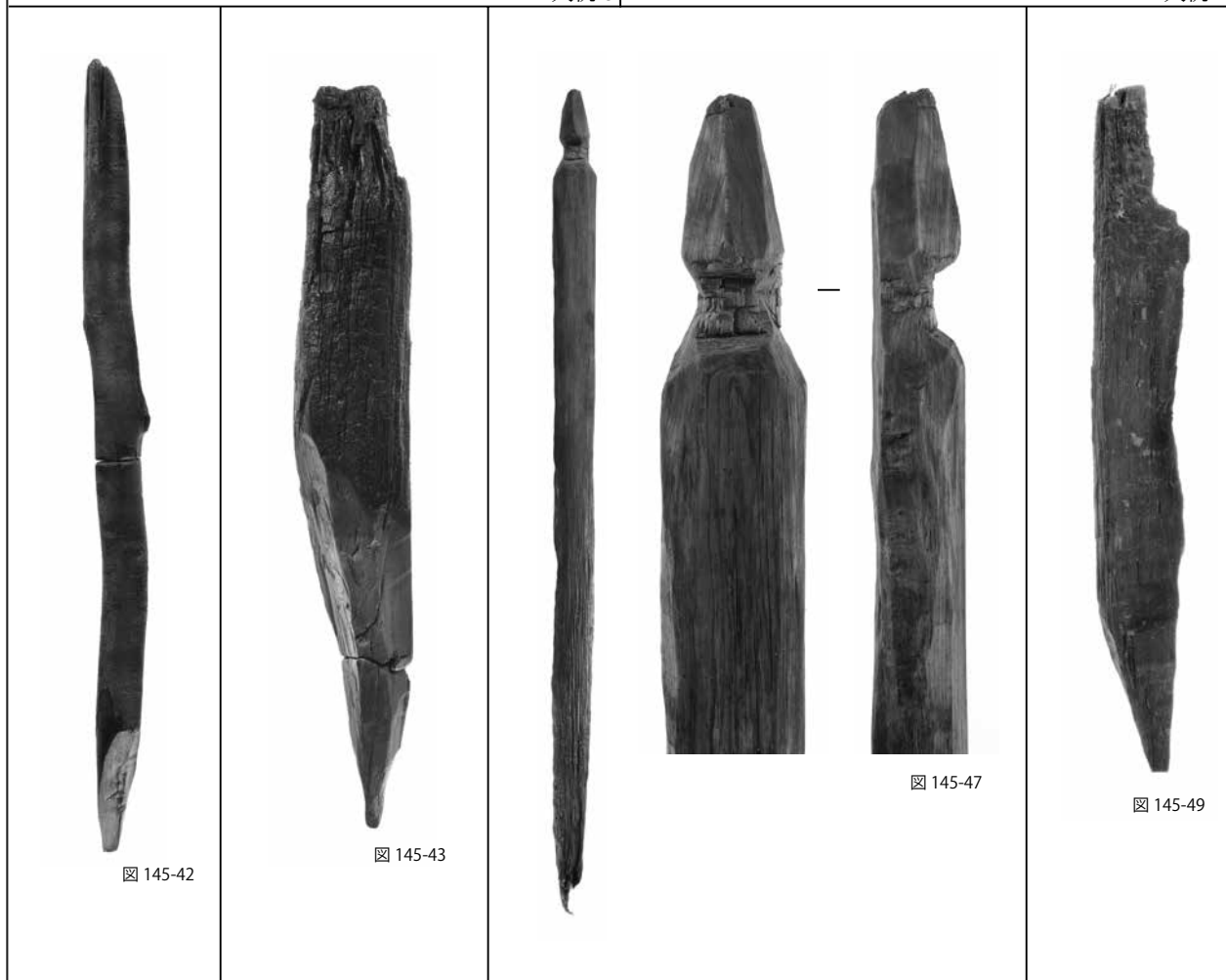


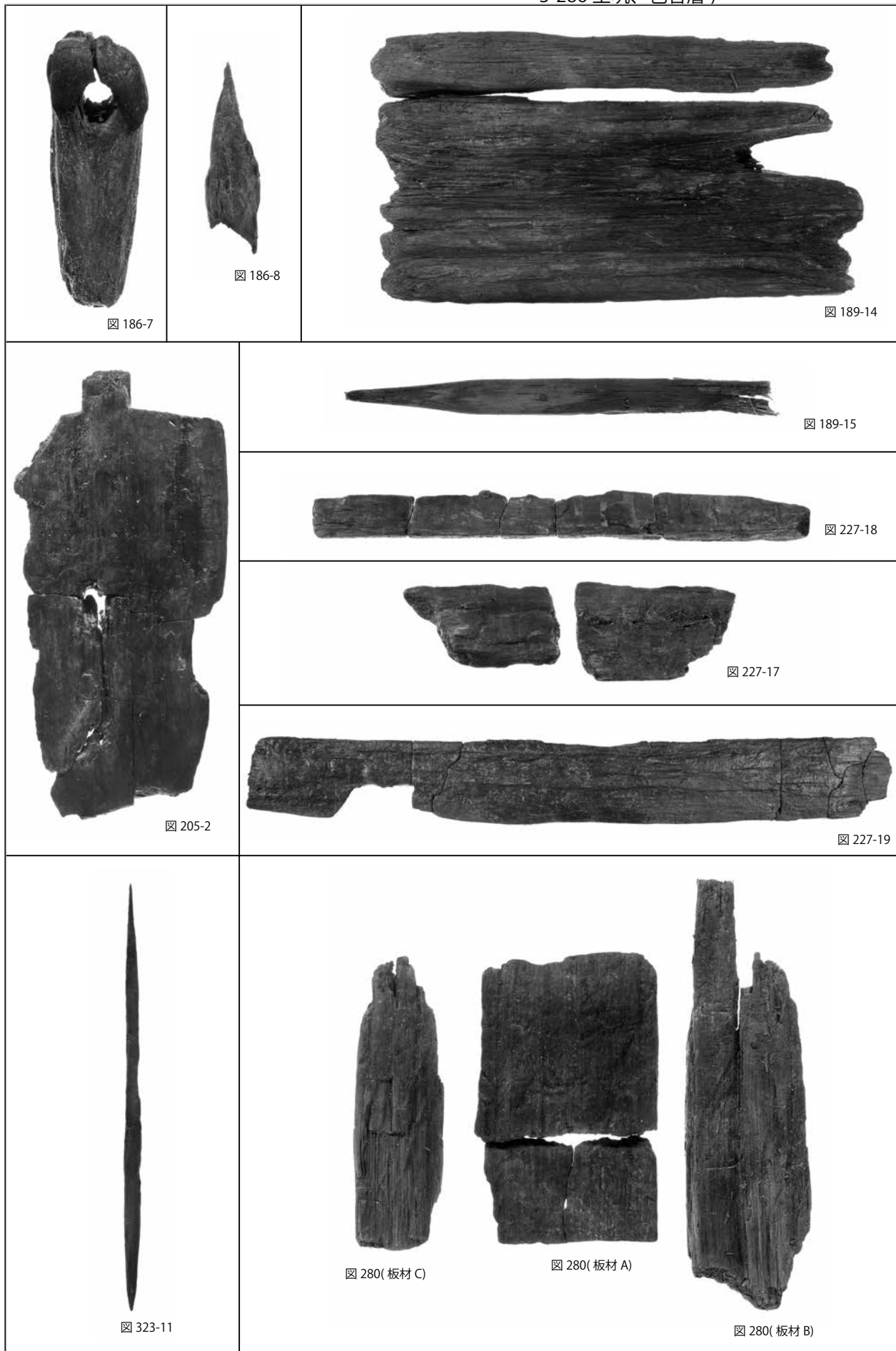
図 145-42

図 145-43

図 145-47

図 145-49

図版 162 第 7b 面～第 8b 面関連出土木器 (5-583、5-934ピット、微高地 1 上部遺構 3-286 土坑、包含層)

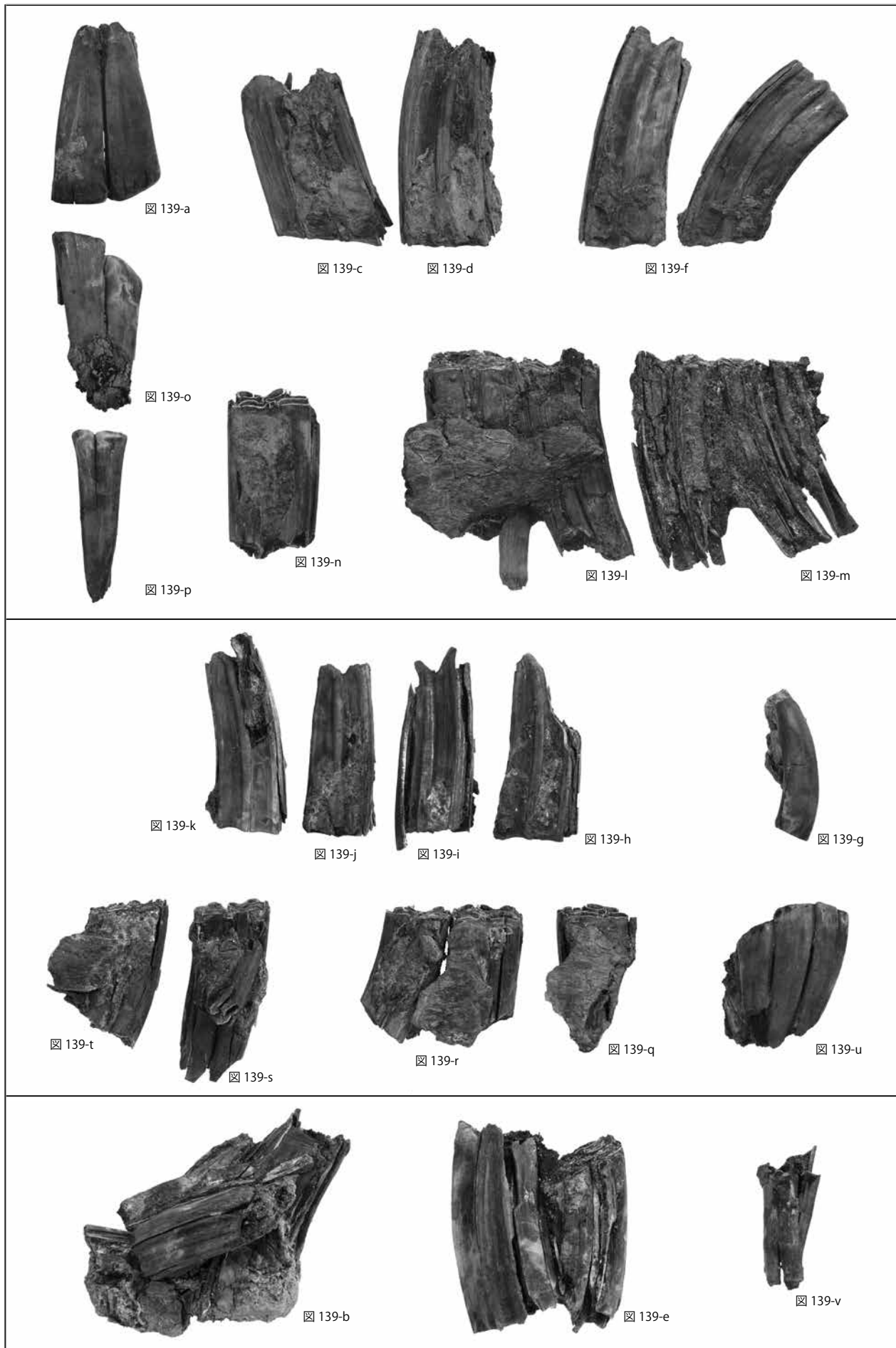




图版 163 第 8b 面関連出土木器 (3-286 土坑)



图版 164 第 7b 面 1-59 溝出土獸骨



# 報告書抄録

ふりがな	さらぐんじょうりいせき はち							
書名	讃良郡条里遺跡 VII							
副書名	一般国道1号バイパス（大阪北道路）・第二京阪道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	（財）大阪府文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第187集							
編著者名	中尾智行・山根航ほか							
編集機関	財団法人 大阪府文化財センター							
所在地	〒590-0105 大阪府堺市南区竹城台3丁21番4号 TEL072(299)8791							
発行年月日	2009年1月30日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
さらぐんじょうり 讃良郡条里 いせき 遺跡	ねやがわし しんけ 寝屋川市 新家 ちさき ほか 地先 他	27215	36	34° 44′ 43″	135° 37′ 58″	2003年 4月1日～ 2006年 3月31日	16,011㎡	国道1号バイパス （大阪北道路）・ 第二京阪道路建設
所収遺跡名	種別	時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
讃良郡条里 遺跡	その他	縄文 時代	流路、溝、ピット、土坑	縄文土器、石製品		中期～後期の土器片の出土 晩期の遺構・遺物		
	集落	弥生 時代	平地建物、竪穴建物、 掘立柱建物、井戸、溝、 土坑	弥生土器、石製品、木製品		前期前半と前期末～中期の集落		
	生産	弥生 時代	水田畦畔、耕作溝	弥生土器、石製品		中期～後期の小区画水田を広範 囲に検出		
	集落	古墳～ 奈良時 代	竪穴建物、掘立柱建物、 井戸、溝、土坑、ピット	土師器、須恵器、石製品、木製品、 獣骨		直線的な溝の掘削、5世紀初頭と 見られるウマの骨の出土、断続的 に営まれる集落の時期的変遷、集 落内での滑石製品生産、条里開発 の初現		
	生産	平安 時代	水田畦畔、耕作溝	土師器、須恵器		坪境畦畔の設置 坪内には小区画畦畔		
	生産	中世～ 近世	水田畦畔、耕作溝、島畠、 井戸、土坑	土師器、須恵器、瓦器、磁器、 石製品、木製品、鉄製品		条里型地割にもとづく耕作地		
要約	<p>当調査地では、縄文時代晩期から近世に至る遺構面が、氾濫堆積物などに被覆されて累重して遺存していたことにより、周辺の歴史環境の変遷を実態的に解明することができた。弥生時代前期の集落からは、近畿地方で最も古い様相を持つ弥生土器が出土し、溝から大量に出土した縄文晩期土器（突帯文土器）と合わせ、両土器文化の移行期の遺跡を実態的に確認することができる。弥生時代中期の水田では、いくつかの水田ブロックを組み合わせた水田整備と導水状況を見出すことができ、地形を活かした計画的な開発のあり方が看取できる。古墳時代から奈良時代にかけての集落の動態からは、土地利用状況と条里地割の初現が見られる。平安時代以降は調査地全域が耕作地となり、坪境畦畔の設置も確認される。古墳時代以降の環境勾配によって、畠地と水田は明瞭に区分されている。中世以降になると全域が水田化するとともに坪内地割も整備され、一部に長地型地割が導入されるが、氾濫堆積物の供給に対応して島畠の設置や溜め池、井戸などの遺構も見られる。近世の水田面では長地型地割が崩壊しており、現代地表面の水田開発に継続していく。</p>							

(財) 大阪府文化財センター調査報告書 第187集

## 讃良郡条里遺跡Ⅷ

一般国道1号バイパス(大阪北道路)・第二京阪道路建設に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書

発行年月日 / 2009年1月30日

編集・発行 / 財団法人 大阪府文化財センター

大阪府堺市南区竹城台3丁21番4号

印刷・製本 / 株式会社 中島弘文堂印刷所

大阪府大阪市東成区深江南2丁目6番8号